貞操観念が逆転した世界で、元女子校に転校した俺は性欲モンスター女子達とエッチしまくり！～学内いつでもどこでもシ放題！～

小鳥遊綾瀬（現：龍　　岳）

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
貞操観念が逆転した世界で、元女子校に転校した俺は性欲モンスター女子達とエッチしまくり！～学内いつでもどこでもシ放題！～

【Ｎコード】
Ｎ４９２１ＪＲ

【作者名】
小鳥遊綾瀬（現：龍　岳）

【あらすじ】
幼馴染みの瑠李（るい）と学校から帰宅しようと、学校の階段を降りようとしていた時、後ろから誰かに押され二人して転げ落ちてしまう。そしてそのまま俺達は命を落としてしまう。はずだった。
俺はなぜか無傷で目を覚ました。あれは夢だったのかもしれない。そう思った俺はいつも通りの毎日を過ごそうとした。だが、世界がいつも通りではなかった。
家にいる姉と妹と義妹が、胸を丸出しにしてパンイチで過ごしてい

る。幼馴染みの瑠李はブラジャーをせず超が付くほどのミニスカ。乳首はスケスケで目のやり場に困る。
外に出ると、女子達は全員露出が高い服でほとんど裸同然の服装で出歩いている。
さらに困惑するのは、そんな男にとってはパラダイスな状況に、周りの男子達は全員が嫌悪感丸出し。電車は男性専用車両があったり、男が胸を隠すサラシがあったりと、俺が知ってる世界ではなかった。
ここはまさか、貞操観念が逆転してますか！？
転校した高校は元女子校だが、男子は俺一人。うまくやって行けるか不安だったが、女子高生達は俺を見るなり狂喜乱舞して、俺を求めてくる！教室で、廊下で、トイレで、図書室で、屋上で、プールで、更衣室で、職員室で、あちらこちらで女子達と濃密なエッチしまくり！
姉と妹と義妹の三人は、家でも求めてきて……！
毎話必ずエッチシーンあり！女子の年齢は最高で３０代前半まで。全員が若い女！巨乳で巨尻の女子だけしかいない世界。男を蔑む女は誰一人としていない！（義妹だけが唯一ツンデレです）心もアソコも癒やされる作品です！
※不慣れなので拙い文章になると思いますが、温かい目で読んでいただけると幸いです！（残酷な描写ありは、女子達が泣き叫ぶので念の為入れています）。
→首絞めやビンタ、スパンキングなどの描写が入ります……！
投稿当初より、書きたいことが増えてきたので、色んな描写が増えると思います！　それでも、変わらず愛してくださるととても嬉しいです……！

第1話　転校初日の、初フェラ♡（前書き）

改稿（改行メイン）をさせていただきました！
少しでも読みやすくなっておりましたら幸いです！

これから少しずつ改稿（改行メイン）を行っていきたいと思っておりますので、よろしければチェックをしていただけますと幸いです！

プロローグ

男子のみんななら、一回は思った事があるだろう。

学校の教室で、廊下で、トイレで、学校の至る所で女子とエッチな事が出来たらどんなに最高だろうと。

目の間に座ってる女子のスカートを捲って、パンツ見たいなぁとか。ブラが透けてる女子のおっぱいを見たいなぁとか。

水着の女子とセックスしたいなぁとか。清楚なあの子にフェラされたいなぁとか。

男なら一度は妄想した事があるはずだ。

俺だってある。というか、そういう妄想ばっかりしている。健全な男子ならそれが当然だ。俺は他の男子よりちょっと性欲が強いだけだ。

そんな俺の妄想が全部叶う日が来る。

この物語は、そんな俺の妄想がどんどん叶いまくる物語。沢山の女子と、学校の至る所でエッチしまくるぜ！

第1話　転校初日の、初フェラ♡

「あれ？　　俺、無事じゃん」

目を覚ました俺の第一声はそれだった。

ベッドの上で目を覚ました俺こと白下（はくした）　零（れい）。

なぜ俺がそんな事を言ったのかと言うと。

あれは俺が家に帰ろうと、幼馴染みの瑠李（るい）と共に学校の階段を降りようとしていた時の事。

二人でいつも通り他愛ない会話をしていたら急に――、

『うわぁ！？』『キャッ！？』

後ろから誰かに押され、俺達は階段を転げ落ちてしまった。しかも、俺は頭を強く打ってしまい、大量に出血した。

死ぬと直感で分かった俺は、目の前で俺と同じく階段から落ち、横たわる瑠李に手を伸ばし――、

『あの巨乳……揉みたかった……』

と、最低な最期の言葉を遺し意識を失った。

そして俺は死んだ、はずだったのだ。

「あれは、俺の夢だったのか？」

もしかしたら変な夢を見ていただけなのかもしれない。

にしてはリアルだったが、もう気にしてもしょうがないので、俺は――、

「朝飯を食おう」

お腹が空いたので、リビングへと向かう事にした。

♡　♡　♡

「……」

リビングに降りてきた俺は、絶句していた。

その理由は――、

「なんだその格好はぁぁぁ！？」

「あ、お兄ちゃん。おはよう」

目の前にいるのは妹の燐。

俺の一個下で、今年から高校に通い始めた。ま、そんなのはどうでもよくて。

今、俺の目の前にいる燐は、パンイチと言うとんでもない格好だったからだ。

ボンキュッボンなその美しい肉体を、惜しみなく出している。

ブラをつけていないので、綺麗な薄いピンクの乳首が見えている。

「もう一度言う。なんなんだ、その格好は！？」

「え？　　あ、ごめんね。男子はこういう格好嫌いだよね。家だからいいやって思ってついしちゃった。お兄ちゃんがいたのにね。本当ごめん。これ飲んだらすぐ服着るから許して？」

あれ？　なんかおかしい。

「ちょ、ちょっと待て。お前、怒んないのか？」

「怒る？　私が？　何に？」

「いや、何にって。俺に裸見られた事をだよ。このド変態むっつりスケベ野郎って」

「いやいや。私が怒られる事はあっても、私がお兄ちゃんに怒る事はないよ。むしろ私がド変態むっつりスケベ痴女って怒られるかと思ったもん」

え？　え？？　え？？？　どういう事なんだ？

「それに、私、お兄ちゃんがむっつりスケベでド変態だったら、ものすごく嬉しいな♡」

舌なめずりしながら妖艶な目で見てくる燐。なんだコイツ……こんなエロい顔できたのか……！

ってそうじゃない！　これは一体どういうことなんだ？　俺の事を嫌っていた燐が、俺に対して怒らないなんて……。

「あ、零ちゃん。おはよう。お腹すいたよね。待っててねすぐ準備するから」

この声は姉ちゃんだ！　姉ちゃんなら――、

「って、あんたもか！！！」

「うわっ！　ビックリした～。急に大声出しちゃ駄目だよ～」

俺の姉ちゃん、華は全裸でエプロン……つまり裸エプロンなる男の夢である姿で俺の前に登場した。
胸はなんとか隠れているが（巨乳なので横乳が半端ない）巨尻は丸見え。
さらに、しゃがむ時にM字開脚のような格好でしゃがむから、大事な部分が丸見えになってしまう。

「一体どうしたんだ、あんたらはぁ！」

と、俺が一人で騒いでいると――、

「兄さん、うるさい」
「あ、桃」

俺のもう一人の妹、桃が現れた。桃は俺と同い年で親の再婚でできた義妹。
両親はどちらとも海外で働いているので、この家には俺達兄妹四人しか住んでいない。

「よかった。お前は普通なんだな」
「は？　なんの事？　私は先に行くから」
「あら？　早くない？」
「朝練があるの」
「「いってらっしゃ～い」」

桃は家を出て行ってしまった。二人のおかしな格好については触れずに。
ちなみに、俺が桃に普通なんだなと言った理由は、桃が普通に制服を着ていたからだ。

ん？　だが、あの桃にしてみたらスカートが短かった気が……？
と、俺が考えていると――、

ピンポーン♪

インターホンが鳴った。

「あ、るいるいじゃない？　は～い。今出ま～す」
「あ、ちょ待て！　その格好じゃ――」

俺が言い切る前に燐は、パンイチのまま玄関の扉を開けてしまった。絶対瑠李に怒られるぞ……。
と思っていたんだが――、

「それでね、なんかお兄ちゃんの様子がおかしいの」
「え～、そうなの～？　あ、おはよう、零君」

なんか普通に入って来てるんですけど……？

「おはよう、る～ちゃん」
「おはようございます。華さん」

裸エプロンの姉ちゃんに対しても無反応、だと！？

「お、おい、瑠李。お前、この状況で何か言う事はないか？」
「え？　……朝ご飯はなんだろう？」
「ちげぇわ！」

誰が今日の朝飯の献立を聞けって言ったよ！

「そうじゃなくて、その……この二人の格好だよ！」
「あ～」
やっと分かってくれたか。
「零君は男の子だから、こういう格好は嫌いだよね。二人には後で私から言っておくね？」
はい？　何を仰っているのでしょうかね？　この人は。
「いや、俺はこの格好むしろ大好きだけど！　そうじゃなくて――」
俺がそう言った瞬間、三人の目の色が変わった。
「零君、こういう格好好きなの？」
「え？　あ、あぁ」
「そうなんだ……」
ん？　俺なんかまずいこと言ったか？　まぁ、今はそれより、もう一つ！
「そんなことより、瑠李！　お前ブラはどうしたんだ！　乳首が透けてるぞ！」
「え？　ブラ？　何それ。なんか新しい物の名前？」
「は？　いや、下着だろ？　胸につける」
「え？　胸につける下着はサラシでしょ？　しかも私達女は着けないよ？　あれは男の子専用の下着だから」
もうお手上げです。何がなんだか全く分かりません。

「？　零君大丈夫？　今日から学校一緒だから、私が付き添ってあげるね」

俺は、朝飯を食い、瑠李と一緒に学校へと行った。

しかし、そこは元女子校で、男子が俺一人しかいないとは思わなかった。

♡　♡　♡

「はい。じゃあ今日は転校生を紹介する。自己紹介よろしく」

「は、はい……。えっと、白下　零です。よ、よろしくお願いします」

俺が自己紹介すると、教室にいる十九人の女子達が拍手をする。

「じゃあ、白下の席は窓際の一番後ろだな」

「はい……」

このクラスの女子、全員スカート短いし乳首が透けてる……しかも、パンツはほとんど見えてるし。スカートの意味ねぇじゃん。

「よし。これでＨＲは終わりだ。次の授業の準備をしとけよ～」

俺は一刻も早くトイレに行きたかった。それはなぜか。フル勃起中だからだ。

朝から姉と妹の裸を見て、幼馴染みの乳首透けを見て、ここに来て多くの女子達のパンツやら乳首やらを見たら、そりゃもう！　勃つでしょ！　勃たないほうがおかしいわ！　俺はトイレに向

かおうと立ち上がった。しかし、それがいけなかった。

「どこに行くの？　　お話しましょうよ」

と、隣の席に座る眼鏡を掛けた、いかにも真面目そうな女子に腕を掴まれてしまった。

マズい。今立ち止まると勃起がバレてしまう。この学校の制服のズボン、ピッタリだから形が浮き出てしまう！

「そうだよ～。ねぇねぇお話しよう」

「君の事、もっと知りたいよ～」

と、前の席に座っている金髪のいかにもギャルな女子と、その隣に座っているこれまた茶髪でいかにもギャルな女子二人が、俺の両サイドに来て、腕をロック。拘束されてしまった。

うわ。この腕に当たる感触……これはおっぱい……。

いけねぇ！　　これじゃ勃起が！

『あ……』

その場にいた女子達の声が重なった。

俺の勃起がバレてしまった。ヤバい。殺される。

「いや、これはその、違うんだ……これは！」

「私達で勃起してくれるなんて！　　君は神様ですか！」

「え？」

え？　この人は何を言ってるんだろう。と、俺が考えようとした瞬間――、

「うお！？」

眼鏡女子が俺の股間を触って来た。

「な、な、な、な、何を！？」

「こんなに勃起していると言う事は、いいってことですよね？」

「な、何が！？」

「苦しいですよね。今、出してあげますからね」

「ちょ、ちょっと待って！？」

俺の抵抗や虚しく。眼鏡女子は、俺のズボンとパンツを一気に脱ぎ去り、俺の勃起した肉棒を解放させてしまった。

「うわぁ……すごい……」

やべぇ……見られてるよ……めっちゃ恥ずかしい！？

「おちんちんって、こんななんですね……♡　すごく逞しい♡

あぁ、この臭い、たまりません♡　もう、もう我慢できません。

いただきます♡　んむっ♡」

「くっ……！？」

眼鏡女子は何を血迷ったか、俺の肉棒を咥え込んでしまった。

その表情は恍惚としており、とても幸せそうだった。

まるで、欲しかったおもちゃをようやく買ってもらえた子供のように。

「ほれが、ほひんひんのはじ……はまりまへん♡」

眼鏡女子は、俺の肉棒を口の中で舐め転がし始める。カリ首、裏スジ、亀頭。俺の敏感な所を探すかのようにくまなく舐めてくる。

「くっ……うっ」

「れいれい、可愛い声で鳴くねぇ」

「乳首も弱かったりして？」

そう言うと、右側に立っている金髪女子が、俺のワイシャツのボタンを外し、肌を露わにする。

「え！？　マジ！　君ノーサラなの！？」

ノーブラじゃなくてノーサラって言うんだ……。

「へぇ……エッチだねぇ♡　れろぉ♡　そんなエッチな子には、こうしちゃう♡」

うお！？　なんだこれ！？　唾液が付いた指で乳首弄られるのこんなに気持ちいいのか！？

チンコと乳首のダブルなんて、童貞の俺には刺激が強すぎる！

「んっ……れろぉ♡　んちゅむちゅ……ジュルルル♡　エロォ♡　んむっ♡」

この眼鏡女子、フェラうますぎだろぉ！

「ま、待って！　このままじゃ、俺、マズい！」

「な～にがマズいの？　マズい事なんて、何もないんだよ？

イキそうなら、我慢なんてしないで、ビュッビュッって、いっぱい出していいんだよ～♡　委員長のお口の中に、口マンコにた～くさん中出ししていいんだよ～♡」

左側に立っている茶髪女子が、俺の耳元で優しく妖艶に囁く。

その囁きはとてつもなくエロく、俺の肉棒はさらに震え、さらに大きくさせた。

そして、本気で限界を迎えた。

「駄目だ！　出るっ！」

ドピュュュュュ！　ビュルルルルルル！

「んっ！　んくんくんく……」

俺の射精を、眼鏡女子は驚きながらも受け止め、さらには飲み干してしまった。

「はぁはぁ……」

射精後の疲労感で座り込みそうになった所を、二人の女子に支えてもらう。なんか、超情けないわ。

「んく……♡　はぁ……♡　とても美味しかったです♡大事な精液ありがとうございます♡　気持ちよくなれましたか？」

「う、うん……」

「それはよかったです！　これから、ムラムラして、射精したくなったら、いつでも私達に言ってくださいね♡　いつでもどこでも、抜いて差し上げますから♡」

「そ、それって……」

「れいれいは、この学校の女子達と、いつでもどこでも好きな時に好きなだけ、エッチ出来るって事♡　うちらは絶対拒否しないし、むしろ、逆にうちらから襲っちゃうかもしれない♡」

金髪女子が言う。

「れーくんは、それでも、いい？」

茶髪女子がおっぱいを押し当てながら訊いてくる。

「答えはもう、明確ですね♡」

俺のチンコは、俺が答える前に返事をしていた。

俺は、天国に来てしまったのだろうか？

『これからよろしくお願いします！　零様！』

十九人の女子達が、スカートを捲りながら俺に言って来た。

俺の妄想が、現実になっちゃった！

第1話　転校初日の、初フェラ♡（後書き）

エピローグ

転校初日の日にして、出会って数分の女子にフェラされ、乳首を弄られ、イカされ、ごっくんされた俺。

一日の中、エッチなイベントが朝のフェラだけで終わるはずがなく――。

「ねぇねぇ、どう？　気持ちいい？」
「う、うん……めっちゃ気持ちいいよ……」
「じゃあ、委員長のフェラとどっちが気持ちいい？」
「そ、そんなの……」
「あはは、ごめん！　意地悪な質問しちゃった。今は気持ちよくなる事だけに集中して。んむ♡」

俺は今、金髪女子にフェラされていた。
しかも教室で。
目の前の席に座る金髪女子は、一時間目の授業が終わるやいなや、俺の机をどかし、フェラを開始した。

「あんまり時間がないから、最初からトップギアで行くね？　ジュルルルルルルルル♡」
「んくっ！」

金髪女子のフェラはいわゆるバキュームフェラ。
俺は仮性包茎なので亀頭への刺激が弱い。それを見抜いた金髪女

子は、バキュームしながら、亀頭を舐めてくる。

「お、俺、早漏だから、すぐに……」

「いいお。いっはいらひへ♡　わらひのおふひに、ほいはーへん、らひへ♡　ジュロロロロロロロ♡」

「あ、駄目だ！　イク！」

ドピュッ！　ビュルルルルル！

「んんっ！　ん……んくんく……♡」

あぁ……何も気にしない射精って、こんなに気持ちいいんだなぁ……。ってか、この子も当たり前のように精液飲んでる。

「んく。ぷはぁ♡　んふふ♡　ごちそうさま♡　ちょ～美味しかったよ♡　あと、早漏って事、気にしなくていいよ。うちら早漏男子大好きだから。すぐにイッちゃって射精しちゃう子見ると、ゾクゾクしちゃうの♡　それに、短い間隔でいっぱい出してくれるんでしょ？　うちらからしたら、神様過ぎる」

「あ、ありがとう。あ、もうこんな時間か。行ってる暇はないか」

「ん？　どうしたの？」

「い、いや……その……と、トイレに行きたくて……」

射精後って、結構尿意が迫ってくるのよ。

「あぁ。そういう事。だったらトイレに行く必要ないよ」

「え？」

「うちのお口に、出しちゃって♡」

「え！？　い、いや！　それはさすがに！　おしっこだよ！？」

「うん。全然大丈夫だよ～。それにほら、早くしないと先生来ちゃうよ？」
「うっ……」
本当は気が引けるけど、正直尿意も限界だし、時間もないし……。
「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて……」
「うん！　どーぞ♡　あ～ん♡」
口を開けて待つ金髪女子。
「んっ」
プシャァァァァァァァァ。
「んく♡　んく♡　んく♡」
俺の尿を美味しそうに飲み干して行く金髪女子。
やべぇ。この女やべぇ（いい意味で）。
「ふぅ」
「ごくん♡　はぁ。スッキリした？」
「う。うん。ありがとう」
「いいえ～。こっちこそごちそうさまでした♡　じゃあ、キレイにしちゃうね♡」
「へ？　うおっ！」
金髪女子は、俺の肉棒を口に含み、舐め始めた。俗に言うお掃除フェラだ。
やべぇ、これってこんなに幸せなんだ……。

「んっ♡　キレイになった」
「ありがとう」
「えへへ♪」

可愛いな……。

と、まぁ、転校初日は代わる代わる女子達にフェラされ続けた。
俺はこの日を、フェラ祭りの日と名付けた。

明日はどんな事をされるんだろう。

話数が多いので、改稿（改行メイン）を行う頻度はかなり遅くなってしまうと思います……。
ですが、必ず全話改稿（改行メイン）をさせていただきますので、気長にお待ちいただけますと幸いです……！

第2話　学校生活2日目の、初パイズリ♡（前書き）

プロローグ

『んっ♡　はぁ……♡　ねぇ、気持ちいい？』
『う、うん……めっちゃ気持ちいいよ……』
『良かった♡　我慢せずにいっぱい出してね？　あなたのこゆ～いザーメン、沢山欲しい♡』
『も、もう、無理！　出るっ！』
『出して♡』
『あ、あぁああ！！』

ドピュッ！　ビュルルルルル！

『あはぁ♡　いっぱい出た～♡　んふふ♡　嬉しい♡　私のおっぱいでこんなに気持ちよくなってくれて♡』

最高に気持ちよかった……。でも、これ、嫌なパターンなんだよな……。

俺は目を覚ました。そう。夢オチだったのだ……。
それはもう、すぐに気がついてた。だって相手の女子の顔にモヤがかかってたらすぐに気づくでしょ！

まぁでも、パイズリの夢を見るなんて、俺はされるのを望んでるんだなぁ。まぁ、それはともかく。

「夢精なんて、精通して以来だぞ」

パンツの中は精液で、ぐっちょりと汚れていた。
小学五年生くらいの時、精通し、初めて精液が出た。
精通した後は何気に大変だった。
夢でちょっとエッチなのを見たら勝手に射精しちゃうし、今までは女子を見ても可愛いなだけだったのが、エッチな目で見るようになって、オナニーする事が多くなったり。
女子には分からない悩みが、男子には多いのだ。
「ってか、これどうしよう……」
我が家の洗濯係は妹の燐だ。だがこれを奴にバレる訳にはいかない。昔、燐にバレた時、汚物を見るような目で見られたからな。
「よし。この時間なら誰も起きてないだろう。手洗いしよう」
幸い、現時刻は朝の四時。誰も起きてはいない。
俺は洗面所へと向かう。足音などの物音で皆を起こさないように。
洗面所に到着。
「う〜わ……こりゃまた派手に出したなぁ……昨日あんなに出したってのに」
と、俺がパンツを洗おうとすると――、
「ほんとだねぇ。派手に出したね」

「っ！？　　り、燐！？」

後ろから声がして、慌てて振り返るとそこには、ピッチピチのトレーニングウェアに身を包んだ燐が立っていた。

「な、なんでここに燐が！？　　朝早いぞ！？」

「私、陸上部だから。いつもこのくらいの時間に外へ走り込みに行ってるんだよ」

「そ、そうだったのか……」

知らなかった……。

「それよりお兄ちゃん。夢精しちゃったの？」

「っ！？　　こ、これはその……なんと言うか……」

「別に隠さなくたっていいじゃん。生理現状なんだし。恥ずかしがる事じゃないでしょ？」

「お、お前がそれを言うか！？　　小学生の頃に俺が夢精したら汚物を見るような目を向けたお前が！？」

「うっ……そ、それは悪かったと思ってる……なんであんな目でお兄ちゃんの事見ちゃったんだろうって……今なら夢精がどんなに素敵な事か分かるのに……」

夢精が素敵？　　何言ってんだ、こいつは？

「本当にごめん！　　最近お兄ちゃんが私を避けてるのって、やっぱりその一件のせいだよね……？　　許してもらえるとは思ってないけど、私の気持ちは分かってほしい！」

「いや、まぁ……別にそこまでは怒ってないけど……」

「本当！　　えへへ♪　　よかった～……じゃあお兄ちゃん。お詫びに、そのパンツ私に洗わせて？」

「はぁ！？　い、いやそれはちょっと違うんじゃないか！？」
「え……やっぱり、怒ってるんだ……」

いやいやいや！　なんで精液まみれのパンツ洗わせないだけでそんな涙目になんの！？　そんなに俺の精液まみれのパンツ洗いたいんか！？

「お、怒ってないってば……はぁ。分かったよ。あ、洗ってくれ。それでこの話は終わりだ」
「……！！　ありがとうお兄ちゃん！　私、一生懸命洗うね！　お兄ちゃんの夢精パンツ！」
「夢精パンツ言うな！　恥ずかしいから！　頼むから何も言わず黙って洗ってくれ……そして姉ちゃんと桃には言わないでくれ……」
「別に内緒にするような事じゃないと思うけど……あ、じゃあさ、内緒にしとく変わりに私のお願い一個聞いてよ」
「わぁったよ。なんでも聞いてやる」
「本当！　じゃあ、今度デートして！」

こうして、俺は実の妹に精液まみれのパンツ洗われながらデートの約束をさせられたのです。
夢精しないように気をつけよう……。

第2話　学校生活2日目の、初パイズリ♡

転校して二日目の登校日。
今は幼馴染みの瑠李（るい）と一緒に登校していた。

「昨日どうだった？　クラスには馴染めそう？」
「あ、いや、その……」

ここでバカ正直に、昨日女子にフェラされちゃったなんて言ったら、冷たい目で見られて殺されるんだろうな……。
瑠李、そういう話とか苦手だったから……。

と、俺が瑠李にどう話そうか考えていると――、

「れいれ～い！」
「うおっ！？」

突然、後ろから抱きつかれた。この背中に感じる柔らかい感触、そして俺をれいれいと呼ぶのは――、

「痛いな！　突然抱きつくな！」
「えへへ♪　ごめんごめん♪　れいれいを見つけて嬉しくなっちゃって、つい♪」

可愛らしく舌をペロッと出す、巨乳女子。こいつは昨日、俺のおしっこを飲んだド変態金髪女子！

「あれ？　赤城（あかぎ）さんじゃん。んん？　もしかして、二人……デ

キてる？」

んな！？

「で、できて――」

ねぇよ！　と俺が言う前に――、

「まだお付き合いはしてないよ。いつかできたらいいなとは思ってるけど。零君奥手だから」

と、瑠李が言った。

あれ？　今いつかできたらいいなって言った……？　つまり瑠李は、俺と付き合いたいって事？

へ……？

「え～？　れいれいが奥手～？　昨日あんなに勃起させて、あんなにいっぱい精液出したのに～？」

「ばっかお前！　何言ってんだ！？」

「あり？　なんかマズかった？」

瑠李が急に黙り込んでしまった。これはあれだ。俺をどう殺すか考えていらっしゃるんだ。短い人生だったな……。

「ねぇ、零君」

「は、はひ！？」

恐怖のあまり、声が裏返ってしまった。しかも噛んだ！

「勃起して、いっぱい射精したって、本当？」

ここはもう、正直に言おう。嘘をついて死ぬより、正直に言って死んだ方が後味がいい。

「あ、あぁ。本当だ……。ごめん……黙ってて……その、気持ち悪いとか、思われたくなくて……」

「零君……」

こっちに近づいてくる……殺し方、決まったのか……さようなら、みんな……。

「零君！」

ん？　あれ？　なんで瑠李は俺にハグしてんの？　なんで俺、瑠李に抱きつかれてんの？　ホワッツ？

てゆ～か、瑠李のおっぱい、服越しでもやらけ～。

「私は凄く嬉しいよ！　零君が女子に興奮して勃起してくれるなんて！　しかも射精までさせてくれるなんて！　昨日言ってた、エッチな格好が好きなのって嘘じゃなかったんだね！　私、凄く嬉しい！！」

俺、勃起して射精しただけで幼馴染みに喜ばれたんだけど……どうなってんの？

しかも、エッチな格好が好きなのが嬉しいって、ヤバくない？

本当だったらキモいって引かれるとこなんに。

「私、ずっと零君が好きだった！　ずっとずっと、零君とエッチな事がシたいと思ってたの！　でも、男の子は普通、エッチな事が嫌いだから、絶対に叶わないって諦めてて……でも！　今日、

零君がエッチな事が好きって分かって、私の夢、叶うかもって思った！」

早口でまくしたてる瑠李。こんな瑠李は見た事ねぇな。ってか、動く度にノーブラおっぱいがプルンプルン揺れて、そっちにしか目が行かん。

「だからね零君！　後で私とエッチしよう！！」

「え、ええ！？」

「あらまぁ、大胆♡」

金髪女子、見てねぇで助けろや！

瑠李はまだ俺と話していたかったようだが、学校に遅刻するわけにはいかないので、とりあえず話は放課後と言う事になった。

でも瑠李とエッチか……想像するだけで興奮してくる！　あの巨乳と巨尻を好き勝手出来るなんて最高じゃねぇか！

しかも、瑠李にフェラとかパイズリとかされたら……俺、無限に射精（だせ）る自信ある！

そんなこんなで、俺と瑠李はクラスが別なので教室前で別れ、金髪女子と一緒に教室に入ろうと、したんだが……。

「なぜ俺は女子トイレに連れ込まれてんだ？」

「え？　なぜって、そんなの決まってるじゃん♪　エッチの話してたらムラムラしちゃって、我慢できなくなったから、れいれいのおちんちんを虐めようかなぁって♪」

「俺のチンコはお前の玩具じゃないんだが……」

俺は金髪女子にトイレの個室に連れ込まれ、便座に座らされ、下半身を丸出しにさせられていた。

「そんな事言いながら、おちんちんはこんなに勃起してるじゃ～ん♪　これってもうしてもいいって事だよね？」

「う、うん……」

「そんなに緊張しないで？　うちが沢山気持ちよくしてあげるから♡　じゃあさっそく……」

お、おお……！！

金髪女子は、制服のシャツのボタンを外していきおっぱいを露わにする。

金髪女子のおっぱいは、おわん型のおっぱいで、安心感のある形をしている。

だが、その先にある突起、乳首は、まるで私を見てと言ってるかのごとくピンッと勃起しており、安心感の中に威圧感がある。

少し濃い色をした乳首は、乳輪の淡いピンクの中で存在感を放っており、それがさらにエロさを醸し出している。

「まさか……」

「うん♪　パイズリしてあげようかなって♪」

「ま、マジか！？」

「うお！？　ビックリした～。え？　そんなに嬉しい？」

「う、うん……その……正直、めっちゃ嬉しい、です……」

「なんで敬語？　まぁ、嬉しいなら良かった！　じゃあ早速していくよ～」

お、おお！！

「や、柔らけぇ……！」

おっぱいってこんなに柔らかいんだね……。もう挟まれてるだけで幸せだ……。

「んふふ♡　幸せそうな顔してる♡　そんな顔見せられたらうち、もう抑えらんないよ♡」

「うお！？」

い、いきなり動き出した！　うわ、これヤベェ……自分の手でシコるのと全然違う……！

両側から柔らかいのに挟まれて、柔らかいのに圧迫感があってそれを左右上下に動かされると、言葉を失うくらいの快感がチンコから全身に伝ってくる……！

これは、本当にヤバい！

「あはぁ♡　さきっちょからぷくぅってヌルヌルしたの出てきた～♡　れいれいは我慢汁多いんだね？」

「うっ……ぐ……」

何か訊かれてるけど、気持ち良すぎて答える余裕がない……！

「うふふ♡　可愛い♡　もっともっと気持ちよくなってね？　ん～……えろぉ♡」

うわっ！　こいつ、唾液垂らして来やがった！

ただでさえヤバいってのに、こんな事されたら……！

「れいれい、我慢はしなくていいからね？　イキたい時はいつでもイッてね？　うち、れいれいのザーメンだ～いすきだから♡」

そうは言っても流石に早すぎるのは、男として……。

「ん～……えい！　イッちゃえ！　イッちゃえ！　イッちゃえぇぇぇぇ！！」

うおおお！？　こいついきなり激しく……！？

ヤバい……これは、本気で――、

「ヤバい！？　出るっ！？」

「んっ！？」

ドピュピュュュュュュュュュュュュ！！

「あは♡　すごいすごい！　めっちゃ出てる！　噴水みた～い！」

俺の射精は今までで一番長く、量が凄まじかった。

射精がやっと落ち着くと――、

「うわぁ……おっぱいだけじゃなくて、顔も髪もあちこちぐっちょりだ……」

金髪女子のあちこちは俺の精液で汚れていた。

……。ヤバい。調子に乗りすぎたかもしれん。

「わ、悪い……！　そ、その……」

「んふ♡　謝んないでへーきだよ。うち、れいれいのザーメンでベタベタになれたの嬉しいから♪　それに、これは他のみんなに自慢できちゃうわ～♪　れいれいの神ザーメン、浴びれたんだ～

って♡」

こいつ、本当に変態なんだな。

「じゃ、教室行こっか？」

「え！？　そ、そのままの状態でか！？」

金髪女子は、軽く指で精液を拭って舐めただけで、大して拭いてもいない。髪に付いた精液はしっかりと流さないと大変になると思うんだけど……。

「大丈夫大丈夫。このままで行った方が証拠になるじゃん？　それに、茶髪の子いるでしょ？　あの子、精液の後処理ちょ～得意だから♪　だかられいれいは何も気にしないで。れいれいはただ――」

金髪女子は、俺の耳元に近づき――、

「いっぱい特濃ザーメン出してくれれば、いいんだよ♡」

「っ！？」

小悪魔のようにそう囁いた。

「えへへ♪　じゃ、行こ♡」

金髪女子は俺の手を取り、教室へと向かった。

この後、嫉妬した女子達からのエンドレスパイズリが待っているとは、思わなかった。

もう、今日の分の精子は売り切れです……。

（改稿（改行メイン）後のおまけ♡）

「一人だけズルい！　私もする！」

そう言って茶髪女子が、俺の前に跪き、おっぱいでチンコを挟んできた。

「ちょぉっ！？　そ、そんないきなり！？」

「れー君、私のおっぱいちっちゃいけど、許してね……」

そう言いながら茶髪女子は、両手でおっぱいを前に寄せ、チンコを圧迫してくる。

「ち、小さくは無いと思うんだけど……ってか、これヤバ……！」

「んもんもんも……べぇ……♡」

茶髪女子が亀頭に唾液を垂らしてきた。

それにより、茶髪女子もおっぱいを動かしやすくなる。

「んしょ……んしょ……んしょ……♡」

「ま、待って……！　そ、それマジでヤバいから……！」

茶髪女子の汗ばんだ肌が、チンコに密着してきてそれだけで気持ちいいのに唾液のせいでヌルヌルになってるから気持ちよさが半端じゃない……！

茶髪女子が動く度に、ヌチャヌチャとエロい音が聞こえてきて、さらに俺の興奮が煽られる。

「れー君、出したくなったらいつでも出して♡」

「そうだよ～れいれい。れいれいは我慢なんてする必要ないんだからさ。い～っっっっっぱい、濃いザーメンぶちまけちゃって♡♡♡」
「くっ……！　そんな事言われたら、もう……！　出る！！」

ドピュピュュュ

第2話　学校生活2日目の、初パイズリ♡（後書き）

エピローグ

俺は夢を見ていた。

『おう、セックスしようぜ』
『はい。喜んで』
『なぁ、舐めてれよ』
『はい、仰せのままに』
『なぁ、オナニーしろ』
『はい。させていただきます』

俺は、沢山の女子達に命令口調で指示を出している。
しかも、それに対して女子達は嫌がるどころか、喜んで受け入れている。
しかも格好は、犬が付ける首輪を着け、全裸で学校のあちらこちらにいる。
なんだ？　　これ……。夢、にしてはあまりにリアルなんだよな……。
もしかして、予知夢ってやつか？
だとしたら俺は、こんなに偉そうな男になるのか？
まぁ、悪い気はしないけど……。
と、そんな風に思っていると、前から――、

『零君、私のオマンコ沢山イジメてください♡』
『れいれい、うちのお口、乱暴に扱って♡』
『れー君、私のお尻、沢山味わってください♡』

『零様～～～

しみいただけますと幸いです……！

今後、おまけを書かせていただく事も多々あると思いますので、ぜひともチェックしていただけますと幸いです！

第3話　幼馴染みからの、初フェラ&相互オナニー♡（前書き）

プロローグ

男子なら、一度は思った事があるんじゃないだろうか。

女子のオナニーを見てみたいと！

男子のオナニーは、自分達がするからなんの特別感もない。だがしかし、女子のオナニーは何にも変えられない特別感がある！

どういう風におっぱいを揉むのか？　どういう風に乳首を弄るのか？　そもそもオナニーの時におっぱいを触るのか？

そして、どういう風にオマンコを弄るのか？　クリトリスをどのように弄るのか？　指の本数は？　激しさは？　感じるポイントは？

などなど、女子のオナニーへの興味、疑問は尽きない。

だが、実際、女子のオナニーを目の当たりにすると、そんな疑問なんて些細な事だと思う。というか考えられなくなる。

なぜ俺がそんな風に言えるのかと言うと……。

「ん……♡　んはぁ……♡」

今現在、目の前でオナニーが繰り広げられているからだ。

「ん……♡　零君、もっといっぱい、見て～♡」

しかもその女子が、俺の幼馴染みである瑠李（るい）という、信じられない光景が、目の前に広がっていた。

第3話　幼馴染みからの、初フェラ&相互オナニー♡

教室の女子達から嫉妬のエンドレスパイズリを受けた為、流石に体力も精子もすっからかんになってしまったので、放課後に瑠李と約束していたお話は翌日に回してもらった。

そして、翌日。

朝起きた俺は、部屋からリビングへと向かう。

……うん。やっぱりか。

キッチンには裸エプロンの姉ちゃんと、パンイチで椅子に座っている妹の燐。その向かいに座る唯一普通な義妹の桃。

でもなぁ……真面目な桃にしては制服のスカート短い気がするんだよな……。

など、俺がそんな事を考えていると――、

「何ボーっと突っ立ってんの？　もうすぐ朝ご飯できるからさっさと座ったら？　私はもう出るから」

「お、おぅ……」

桃にそう言われてしまった。昔から桃には嫌われてるからな……。と、桃は部活の朝練があるらしく、いち早く登校してしまった。

「あ、お兄ちゃんおはよう！」

「お、おはよう……」

「ん？　どうしたの？」

いや、どうしたのって……あなたのその大きなおっぱいが気になって仕方がないんですよ！

実の妹に興奮するとかマジでハズいしキモいけど、これはしょうがないんだ！　目の前で巨乳がプルンプルン揺れてたらどうしても気になっちゃうって！！

燐のおっぱいは、半球形でまん丸な形をしていてそれでいて大きいから、どうしても目が行ってしまう。

にしても、まん丸なおっぱいって、いいな……。
「お兄ちゃん？　座んないの？」
おっと、いかんいかん。
「座るぞ、うん……」
目が覚めてからは、こうして緊張しながら朝飯を食っていた。目の前には兄妹と言えど裸の女子が座っているのだ。しかも二人も。緊張するなと言う方が無理があるだろ。
なんとか朝の試練？　を乗り越えた俺は学校へと向かう。
いつもなら瑠李が迎えに来てくれるんだけど、水泳部の朝練があるらしく、今日は先に学校に行っている。
ってか、桃も燐も部活やってるけど、あの学校の部活動何があるか全く知らんな。
「後で聞いてみるか」
学校に到着した俺。教室に向かう為廊下を歩いていると――、
「れいれ～い！」
「ん？　どうした？」
目の前から金髪女子が、大きなおっぱいを揺らしながら走ってくる。
いい眺めやぁ……。
「これ、落とし物見つけたんだけど、これって赤城（あかぎ）さんのかな？」
「ん～？　あ～そうだな。このハンカチはあいつのだ」
「じゃあ、れいれい届けてもらってもいい？　今多分更衣室にいると思うから」
なんで俺が、と思ったが話もしたいし丁度いいか。
「分かった。行ってくるよ。更衣室ってどこ？」
「三階のプールの近くにあるよ」
「了解」
そうして俺は三階の更衣室に向かった。これが俺と瑠李の関係を大きく変える事になるとは知らずに。

♡　♡　♡

「ここ、だよな……？」
三階にやって来た俺。プールの近くにあると言うのでプールの近くに来たのだが――、
「女子の競泳水着がかかってるのはなぜ？」
プールの外にある渡り廊下的な場所にある、ポール？　みたいなのが並んでいて、そこに競泳水着が沢山かけられているのだ。
なんでかけられてるだけなのに、エロいんだ？
「いかんいかん。見入ってる場合じゃない」
俺は足を進め、更衣室へとやって来た。
中にいるであろう瑠李に声をかけようと、ノックしようとした時――、
「ん……♡　はぁ……♡」
なんか艶やかな声が聞こえてくるんですけど！？
息を殺して、耳を澄ませると――、
「ん……♡　んん！　んはぁ♡　だ、ダメ……ダメだよそんなに弄ったらぁ……♡　零くぅ～ん♡　クリイキしちゃうぅ～♡」
瑠李のヤツ、オナニーしてねぇか！？
や、ヤベェ……勃起してきた……。こんなのするなって言う方が無理だろ……！
俺は更衣室の扉に耳をつけ、瑠李のオナニーに夢中になってしまった。
「零君、零君、零君♡　もっと！　もっと激しくしてぇ～～！　私のクリ、おかしくなるくらい弄りまくってぇ～～！　あぁ～～♡　イクぅぅぅぅ♡♡♡♡」
瑠李は、嬌声を上げた。
「うぅ……」
情けない……俺も出してしまった……。
瑠李のこんな声、聞いた事ないから、興奮しすぎた……。

と、俺は射精の疲労感で扉にもたれかかってしまった。しかし、それがいけなかった。
「え……？　うぉわ！？」
更衣室の扉は完全に閉まってた訳ではなかったようで、俺がもたれかかってしまった事により、扉は開いてしまった。
「ぐふっ！？」
「キャッ！？　え……れ、零君……？」
「あ、えっと……」
瑠李はイッたばっかりだからか、顔が赤く火照っていた。おっぱい丸出しでパンツのクロッチ部分をずらしクリトリスを弄っていたようで、左手はパンツをずらした位置で止まっている。
そんな瑠李は、いきなり俺が倒れてきた事に驚いているようで、俺の顔を見ながら固まっている。
そりゃそうだよな。突然男が更衣室に倒れてきたんだ。それも、オナニーでイッた直後に。盗み聞きされてたと思うだろう。まぁ、実際そうなんだが。
「す、すまん！？　お、落ちてたハンカチを届けに来たんだが、声をかけようとしたんだが……！」
あぁ！　テンパり過ぎて言葉がおかしくなってきた！
「と、とにかくすまん！？　すぐ出て行くから！」
「ま、待って！」
俺が更衣室から出ていこうと立ち上がり、外に出ようとすると、瑠李が俺の手首を掴んできた。
この手でさっきまでクリトリスを弄ってたんだよな……。
「る、瑠李……？」
「い、行かないで……」
「で、でも……俺……」
「私のオナニー、聞いてたんだよね……？」
「う、うん……ごめん……」
「謝らないで。怒ってないから……。そ、それより、興奮、した…

…？」
「え……！？」
こいつ、いきなり何を……！？
「私のオナニー聞いて、興奮してくれた……？　おちんちん、大きくしてくれた？」
る、瑠李の口からおちんちんなんて言葉が出てくるなんて……！
「ねぇ……」
「し、したよ……めっちゃ興奮した……っていうか興奮過ぎて痛いくらいに勃起して、情けない事に射精しちまったよ……」
俺は正直に吐露した。めっちゃ恥ずい！
「そっか……ふふ。嬉しい……♡」
「う、嬉しい……？」
「うん、凄く嬉しい！　ねぇ零君。こっち来て」
「る、瑠李……？」
瑠李は長椅子に座り、俺を手招きする。
「ここ、座って？」
俺に隣に座るよう促してくる。そして、椅子をまたぎ、俺の方を向く。
その格好はヤバい。クロッチの部分が丸見えに……！ってか、パンツめちゃくちゃ濡れてる……！
「零君、こっち向いて」
「あ、あぁ……」
俺は言われた通り椅子をまたぎ、瑠李と向き合う。
「私のオナニー、見てください♡」
「る、瑠李……！」
「ん……♡」
瑠李は迷わずクロッチをずらし、クリトリスを弄り始めた。瑠李のヤツ、大胆過ぎんだろ……！
ってか瑠李、毛生えてないんだな……エロ……！
「ん……♡　はぁ……♡　んん♡　んあ♡　き、気持ちいい♡　零

君に見られてるだけでいつもより、気持ちいい♡」
「い、いつも……？」
「うん……♡　私、毎日オナニーしてるんだよ……？　零君の事考えながら……♡　零君にクリちゃん弄られたり、オマンコ触られたり、おちんちんズボズボ突かれるの想像しながら、毎日毎日オナニーしてるのぉ♡」
マジか！？　あの真面目な瑠李が、毎日俺を想ってま、ま、ま、毎日オナニー狂いだと！？
そ、そんなの最高じゃねぇか！！！
ってか、瑠李がクリ弄る度にクチュクチュと鳴ってエロ過ぎる……！！！
っ……！　股間が痛ぇ……！　出来ればパンツの中から出したい……！
「んん♡　あん♡　あぁん♡　ねぇ？　聞こえる？　私のオマンコ、グチョグチョで、エッチな音鳴ってるの……♡」
「あ、あぁ……聞こえてるよ……」
俺の視線は、瑠李のマンコに釘付けだった。
「んん♡　いっぱい見て、いっぱい聞いて……♡　んはぁ♡　はぁ……零君、ごめんね……」
「え……？　なんで急に謝って……？」
「私ばっかり気持ちよくなっちゃって……。零君もシて♡」
「し、シてって……」
「零君もオナニー、シよう♡」
「そ、それは……」
「ね？　お願い……一緒にオナニーして、気持ちよくなろう？」
く……こんな風に言われたら、もう我慢できない！
「分かった」
俺はズボンとパンツを脱ぎ、イキリ立った精液まみれの肉棒を出した。
「うわぁ♡　これが零君の勃起チンポ……♡　エッチ過ぎる……♡」

「じゃあ、するからな……」
「うん♡　いっぱいシコシコして、一緒に気持ちよくなろう♡」
俺は肉棒を扱き始めた。さっき出した残り汁と我慢汁が潤滑油となり、扱くのに引っかかりも何もなかった。
今までしてきたどのオナニーよりも気持ち良すぎる。
「うっ……ふっ……」
「ん♡　はぁ♡　ふふ♡　零君の喘ぎ声、可愛い♡
もっと聞きたい♡」
「る、瑠李……俺……！」
「ん～♡　もうイキそう？　零君は早漏さんなんだ～♡　可愛い♡
いいよ♡　イッちゃって♡　私ももうイキそうだから♡　一緒にイこう♡」
「る、瑠李！！」
「出して♡　出して♡　出して～♡　零君の零君の大好きな零君の大好きな精液！　沢山出して～♡」
「イッく！！」
ドプゥ！　ドププゥゥゥゥゥ！！！
「イッくぅぅぅ♡♡　精液かけられてイッくぅぅぅ♡♡♡♡」
俺の射精を下半身に浴び、嬌声を上げイク瑠李。俺の精液は、液体と言うより、ゼリーと言った方がいいかもしれない。
そんなゼリー状の精液が、瑠李の丸出しの下半身にかかっており、パンツやお腹まで汚している。
背徳感と征服感の両方が一気に襲ってくる……。
ヤバい……また勃っちまう……！
「はぁ、はぁ……♡　すっごく気持ちよかった……♡　零君も気持ちよくなってくれたんだね……良かった、嬉しい♡　今、お礼するね」
「え？　お礼？」
「ん……ちゅぶ……♡」
「うお！？　る、瑠李！？」

「ちゅぷ！　ぷちゅ♡　ちゅるる！！　ジュルルル！」
瑠李のヤツ、いきなりフェラして来やがった……！　出したばっかりで敏感なのに、亀頭を中心的に舐めてくる……！　二回出してるから普段より敏感になってて気持ち良すぎる！！！
「ぶちゅぅぅぅ！！！　ジュルルルルルルルルルルルルルル！！！」
「る、瑠李、待て！　待て待て待て待て！　待ってくれぇ！」
俺の声が聞こえてないのか、瑠李はフェラを止めない。それどころか激しさが増していく。
しかも瑠李のヤツ――、
「金玉まで弄るのか！？」
左手で俺の金玉を優しく揉んでくる。強すぎず、弱すぎず男が気持ちよくなる力加減で金玉を揉んできやがる。
こいつ、なんでこんなに男の体に詳しいんだよ……！うっ……！
亀頭だけじゃなく、裏スジ、カリ、鈴口まで満遍なく舐めてきやがる……！
「ジュポッ！　ジュポッ！　ジュポッジュポッジュポッ！！！」
フェラしながら右手で竿を扱いてくる……！　頭を上下に激しく動かしながら竿を激しく扱く。金玉への刺激も忘れない。
完全に俺をイカせようとしてやがる……！
ていうか、もう我慢が……！
「ダメだぁ！　出るぅぅ！！」
「んぶぅ！？　んん♡　んふ♡　んくんく……♡」
俺は三発目となる精液を吐き出した。その射精はこれまでのどの射精よりも長く、多く、濃く、凄まじいものだった。
それを瑠李は、嫌がるどころか幸せそうに口の中で受け止め、ドロっとして喉にへばりついて飲みにくいはずの精液を嚥下していく。
「んく♡　んく♡　んく♡　チュッポン♡　んふふ♡　ごちそうさま♡　零君の精液、すっごく濃いね♡　飲むのが結構大変だった♪」
「む、無理に、飲まなくても、良かったのに……」

「そんなの嫌に決まってるじゃん」
「え……？」
「大好きな人の大切な精液を飲まないなんて、絶対にありえない。零君が外に出したりしない限り零君の精液は全部飲むの！　分かった？」
「お、おぅ……」
なんか力説されてしまった……。というか、三回も射精したから、疲労感が。
「三回も射精したから、疲れちゃったよね。ここで寝ちゃっていいよ」
「いや、ダメだろ。この後授業なんだし」
「ん～……サボっちゃおうか♪」
「おいおい」
あの真面目な瑠李が、サボろうなんて言うなんてな……。この世界はやっぱりなんか違うんだな……。
「ね？　零君、サボっちゃおうよ」
「はぁ……分かった。俺も疲れと快感で足が動かないから」
「ふふ♡　じゃあ鍵閉めてくるね。誰か来て怒られても嫌だから」
「あぁ」
瑠李が更衣室の扉の鍵を閉める。
「じゃあ、はい♪」
「膝、枕？」
「うん！　零君にいつかしてあげたかったんだ！」
「……その夢叶えてやりたいんだが、さすがに精液がかかった足に頭を乗せるのは……」
「ん～……そっか……じゃあ……」
瑠李は俺の頭を自らの右肩に乗せて――、
「ここでお休み♪」
「分かった。お休み……」
これはこれでヤバいんですけどねぇ～～！

目の前に大きなおっぱいがあるんだから！！

でも、疲労感が勝ったようで、俺はそのまま目を閉じ、意識を手放した。

第3話　幼馴染みからの、初フェラ&相互オナニー♡（後書き）

エピローグ

ふふ♪　零君、気持ちよさそうに眠ってる♪

大好きな幼馴染みの零君が、おちんちん丸出しのまま私の肩に頭を乗せて眠っている。

可愛らしい寝息を立てて、熟睡している。

「可愛い♡」

零君の寝顔は何よりも可愛い。癒し効果がある。

「寝顔は可愛いけど、こっちはカッコいいんだよね♡」

私は、零君の寝顔から下半身――今は小さくなって縮んでいるおちんちんに視線を向けた。

「子供の頃に見たおちんちんもよかったけど、今のおちんちんも最高に好きだなぁ」

私は幼稚園の頃から零君の事が好きだった。

お風呂に一緒入る時は、バレないように零君のおちんちんばっかり見ていた。

零君と一緒に寝る時は、バレないように零君のおちんちんを触った事もあった。

「でも、想いを伝えるのは怖くて、その先には進めなかった……」

私は今の関係が壊れるのが怖くて、好きだと伝えられなかった。

零君も　〝他の男子と同じように、エッチな事が嫌い〟　だと思っていたから。

でも、零君はエッチな事が大好きだって言った。

エッチな格好をする女の子が好きだと言った。

それを聞いた私の想いはもう、止まらなかった。

零君に対して、自分でも信じられないくらい積極的になって、ついに今日、零君にフェラチオしてしまった。

「零君のおちんちん、美味しかったなぁ……♡　精液も濃くてドロドロで、最高だったぁ〜〜♡」
零君のおちんちんの事を思い出すと、勝手に子宮が疼いてくる。オマンコも勝手にグチョグチョになってしまう。
「零君、寝顔とフニャフニャおちんちん、勝手にオカズに使うの怒らないでね。ん……♡」
私はまた、オナニーを始めた。
でも決して声は出さないように。私の喘ぎ声で気持ちよさそうに眠る零君を起こしちゃうのは悪いから。
「大好きだよ、零君♡」
後でいっぱい、犯しちゃうからね♡

第４話　幼馴染みからの、愛情たっぷりパイズリ♡（前書き）

プロローグ

なんで男は大きなおっぱいが好きなのだろう……。

その疑問の答えを、俺は独自の考えだが持っている。それは――大きいおっぱいはエロいからだ！！！

小さくてもおっぱいはおっぱいだ。だが、俺達男はおっぱいに夢を抱いている。

その夢とはエロさ、柔らかさ、揉み心地の良さ、谷間、そして何よりパイズリだ。

男なら誰しもが、自分のチンコを大きなおっぱいで挟んでもらいたいと言う夢がある。欲望がある。

こんな事を言ったら女性に怒られるかもしれないが、小さいおっぱいでは何もできない。感度が良くて乳首がエロかったならまだいいかもしれないが……。

いや、やっぱりおっぱいは大きいに限る！！

それに、最近気がついたが、俺が目を覚ましてから見かける女子は全員、巨乳で巨尻だ。

もう、目のやり場に困るほど。

学校に着くまでの間に、何回勃起したかもう分からない。しかも俺は我慢汁が出やすい体質らしく、勃起するとすぐにパンツの中がヌルヌルになってしまう。

まぁ、最近は教室に着くやいなや、金髪女子や茶髪女子達に問答無用でフェラされたり手コキされたりするから、スッキリはするんだけど。

それに、もう一つ気がついたのは、俺にエッチな事をしてくる女子達は一切偉そうな事を言ったり、命令したり、傲慢ぶったりしないこと。しかも、俺がイキそうになったら、我慢させるどころかす

ぐに出させてくれる。
俺のイメージだと、女子はメチャクチャイクのに男子はイッちゃいけなくて、常に我慢させられてるイメージがある。寸止めは体に悪いのよ？　特に男子には。まぁ、気持ちいいんだけどね。
その点、学校の女子達は、自分の事はそっちのけで俺をイカせる事に全力を注いでいる。
おかげで、暴発、連発は当たり前になったんだけど。それこそ、暴発しても女子達は嬉しそうに俺の精液を受け止めてくれる。
それが嬉しいのなんのって！　出会ってまだ数日の女子達が、俺の精液を恍惚とした表情で受け止めてくれるんだよ？　嬉しくないわけないよね！
話がそれたけど、とにかく男は、女にエロを求めている。おっぱいが大きくお尻が大きい。露出が多くて下着が透けてたり見えてたり。
俺はもう宣言する！
エッチな女こそが、価値があると！！！

第4話　幼馴染みからの、愛情たっぷりパイズリ♡

「ん……ふぅ……」
ん……？　なんだ……？　なんか耳元で艶（なま）めかしい声が聞こえるんだが……。
「ん、んぅ……♡　零くぅ～ん♡」
やっぱりか。瑠李がオナニーしてんだな。さっきあんなにイッたのにまだできるのか。まぁ、俺も人の事言えないんだけど（過去最高射精数は、一回のオナニーで八回です！）。
さて。どうしたもんか。これはこのまま起きていいのか。それとも、瑠李がイクまで寝たフリを続けた方がいいのか。俺としてはオナニーをもう一度見たいと言う気持ちもあるが、せっかく盛り上がってる所を邪魔したくもない。う～ん……。
と、俺が一人で悩んでいると――、
「零君、起きた？」
なんてこった。すでに気づかれとった。
「おちんちん、大きくなってる」
息子よ……お前は正直だな。
俺は素直に起きている事を告げようと、瞼をゆっくり開けようとした所で、止めた。
「あれ？　起きてない……のかな？　起きてなくてもおちんちんって大きくなるんだ……不思議……。でも物凄く可愛い♡　お、起きてないなら、ちょっとくらいイタズラしちゃっても大丈夫だよね……？」
こんな事を言い出すんですもん。目を開けられる訳ないですよね～。
俺はそのまま狸寝入りを続ける。
「おちんちん、ビクビクってしてる……エッチな夢でも見てるのか

な？」
あなたの事を考えてるんです。
「えい」
うおっ！？　いきなり握ってきた！
「うわぁ……改めてちゃんと握ると、おちんちんってこんなに熱かったんだ……男の子ってこんなになってもズボンの中に隠しておかなきゃいけないんだよね……痛くないのかな……？　女はいつでもどこでも下半身以外なら出せるから楽だけど、男の子は大変だよなぁ……」
ん～？　なんか瑠李が言ってる事、よく分かんないな……。普通逆じゃないか？　男が下半身以外ならどこでも出せて、女が隠しておかなきゃいけないんじゃないのか……？
やっぱり、この世界は何かが違うみたいだな。今度時間があるとき調べてみよう。
「待っててね、零君。今私が気持ちよくさせてあげるから」
そう言って瑠李は、手コキを始めた。激しすぎず、ゆっくり過ぎず、丁度いいあんばいで。
こ、これは……気持ち良すぎる……！
「零君のおちんちん、本当に可愛い♡　普段は皮を被ってて可愛いのに、大きくなってこうしてシコシコすると、簡単に皮が剥けて、真っ赤な亀頭が出て来て逞しくなる♡　ふふ♡　零君のおちんちん、ずっと見てたい、触ってたい、お口に入れてたい、オマンコの中に挿れたいなぁ……」
る、瑠李……そんな事言われたら、俺……！
「あ、おちんちんの先っぽからエッチなのが出てきた～♡　んふふ♡　ヌルヌル～♡　零君のおちんちん、クチュクチュ言って、エッチだ～♡」
くっ……！　瑠李の手コキ、気持ち良すぎる……！
ってか、俺の我慢汁めちゃくちゃ手に付いてるのに全然気にせずシコってるな……！　なんか、それだけなのにめっちゃ嬉しい！

「シコシコ〜♡　シ〜コシコ♡　んふふ♡　零君のおちんちん、シ〜コシコ♡　えへへ♡」
　こいつ、めちゃくちゃ楽しんでるな……！　でも、もう俺も我慢が……！
「る、瑠李……」
「っ！？　れ、零君……！？　起きてたの！？」
　俺のチンコを握ったまま固まる瑠李。なんか、めちちゃくちゃ、可愛いんだけど！
「あ、あぁ。なんかすまん」
「ううん！　謝るのは私の方だよ！　勝手におちんちん触っちゃってごめんね！　勝手にシコシコしちゃってごめんなさい！　我慢できなくて……！」
「そんなに謝んないでくれ。別に怒ってないから。それに、俺のチンコなんかでよければいつでも触ってくれていいし」
「本当！！」
「お、おう……」
　なんか、すげぇ嬉しそう。
「れ、零君のおちんちんを、いつでも、どこでも触りたい放題、シコシコし放題……！　デへへ〜♡」
　いや、放題とは言ってないんだが……まぁ、いいか。瑠李にサれるのめちゃくちゃ嬉しいからな。
「なぁ、瑠李。俺さ」
「うん」
「シてほしい事が、あるんだけど……」
「うん！　なんでも言って！　私、零君がシてほしい事、なんでもシてあげるよ！」
　そう言われると、男としてはかなり嬉しい。俺が瑠李にしてほしい事。それはもちろん――、
「ぱ、パイズリ、してほしいんだ……」
　自分から言うのは、結構恥ずかしいな……。

「パイズリね！　もちろんいいよ！　ていうか、私もやってあげたかったから！」
「あ、ありがとう……」
瑠李は無邪気な笑みを浮かべると、俺を長椅子の上に横にさせ、足の間に入ってくる。そして俺の腰を持ち上げ、自分の腰へと回す。そして、大きなそのおっぱいで――、
「んしょ♡」
「お、おぉ……」
俺の我慢汁でヌルヌルのチンコを挟んだ。
「私のおっぱいの中に、零君のおちんちんがいるなんて夢みたい！　凄く嬉しい！　零君、これからおっぱいでシコシコするから、いっぱい気持ち良くなってね！　シてほしい事があったら、遠慮なくなんでも言ってね！」
「わ、分かった」
「じゃあ、始めるね。よいしょ♡」
くっ……！　瑠李のパイズリ、めっちゃ気持ちいい！金髪女子のパイズリとはまた違った気持ちよさだ……！
「零君のおちんちん、気持ちいいって言ってるね♡　先っぽから、エッチな汁がい～っぱい出てきてるよ♡　いっぱい感じて、い～っぱい気持ち良くなってね♡」
そう言って瑠李は、パイズリの速度を上げた。
「ん……れろぉ♡」
うお！　唾液が……！
「これで滑りがよくなったから、もっと気持ち良くなれるかな？」
「あ、あぁ……最高だよ、瑠李……！」
「ふふ♡　よかった～♡　ん……！　ん……！」
くっ……瑠李の唾液のおかげで滑りがよくなり、快感が倍増した。これは、正直ヤバい……！　さっきまで手コキされてたのもあって、もう出そうになってる……！
でも、この気持ちよさをもっと味わっていたい、から我慢だ……！

そんな俺の様子に気がついたのか――、
「零君？　もしかしてイキそう？　イキそうなら、我慢しちゃダメだよ？　イキそうになったら何も考えずに、おちんちんの先から濃ゆ～い精液、たっくさん出さなきゃ」
「で、でも……！」
「もし、私のパイズリが気に入ってくれたんなら、イッてもすぐにやってあげるから♡　だから、気にせずイッて♡　私のおっぱいに零君の精液、どっぷり中出しして♡」
「そんな事言われたら、俺、もう……！」
「イッて♡　いっぱいドピュドピュして～♡」
「うっ！　出る！！」
ドピュ！　ビュリュリュュュュュュュュ！！
「あは♡　すご～い♡　零君の精液、噴水みたいにドピュドピュ出てる～♡　まだ、まだいっぱい出して～♡」
「る、瑠李……！　出してる最中に動かすと……！　くっ……！」
瑠李は、射精最中のチンコに追い打ちをかけてくる。左右からおっぱいを密着させ、射精中のチンコを圧迫させる。そして、それを激しく扱く。すると、チンコからはとめどなく精液が溢れ出てしまう。
「くっ……！　うっ……！　なんだ、これ……！　今までの連続射精とは訳が違う……！」
今までの連続射精は、射精しきった後に出していた。だが、今は出している最中に刺激され、射精中に追い打ち射精をさせられているのだ。こんな体験初めてだ。
「えへへ♡　零君、射精止まらないね♡　嬉しい♡　もっと、もっといっぱい出して～♡」
ま、まだ扱くのか！？　射精、まだ全然止まってないんだが！？
一度目の射精が終わる前に二度目の射精を。二度目の射精が終わる前に三度目の射精を。
こ、こんなの、ヤバすぎる！！！

「あ、あ、あああぁ！！！」
「零君のエッチな声♡　もっと聞かせてぇ♡♡♡」
俺はこの後、もう二回、追い打ち射精をさせられた。
気持ち良すぎて、意識が飛びそうになった。

第４話　幼馴染みからの、愛情たっぷりパイズリ♡（後書き）

エピローグ
零様はどこにいらっしゃるのでしょうか？
私は、授業に出ていなかった零様を探すため、学校中を歩き回っていた。
私は、零様がこの学校に転校して来て、最初にオチンポを味わった女。
なのに、最近別の女達のせいで、中々味わえていない。
「あの味……堪らなかった……♡」
零様のオチンポを、味を、臭いを、精液を思い出すと子宮が疼き、オマンコが濡れる。
最近は濡れすぎるので、換えのパンツを持ってくるほど。まぁ、零様の前だったらノーパンでもいいんだけど。
零様は、ノーパン女子の事、どう思うんだろう……？
喜んでくれるのかな……？
あ、これ駄目だ。どこかでオナニーしないと、探すどころじゃなくなる。
と、私が近くのトイレに向かおうとした時――、
「ん？　あれは、赤城さんと、零様？」
プールの近くにある更衣室から、零様と他クラスの赤城さんが出てきた。
しかも、鞄を持ってどこかに向かっている。それは下駄箱がある方で――、
「お二人で、一体どこに……？」
女の勘レーダーが働いた私は、教室にいる副委員長に早退すると連絡を入れ、二人の後を追った。
赤城さんの髪に付いていたのは、間違いなく零様の精液だった。

だとすると、これは見過ごせない！

第5話　幼馴染みからの、逆レイプ♡（前書き）

プロローグ

委員長からメッセージが届いた。

『零様が女とどこかにイクから追跡してくる。早退します』と。

「行くがイクになっちゃってんじゃん。どんだけピンク頭なんだよ」

まぁ、かくいう私もエロい事しか考えてないんだけど。

零様。あの方がこの学校に転校してきてくれて本当に良かった。

私なんかは教室の端で一人でいる、いわゆる陰キャなので、零様とセックスなんて恐れ多いけど、でも、それでも毎日零様のオチンポ様を拝めるのが嬉しい。

零様と女子達のセックスを見ながらのオナニーが気持ち良すぎて、最近では私の日課になってしまった。

時折、零様が私の方を見て（自意識過剰）くれるのでその瞬間に、すぐにイッてしまう。

それが最高に気持ちがいい。

さて、そんな事はどうでもよくて――、

「先生になんて説明しようかな……」

そこが問題だった。

第5話　幼馴染みからの、逆レイプ♡

瑠李（るい）に、射精中の追い打ち射精と言う、未知の体験をさせられた俺は今、瑠李と共に学校を後にしていた。

「んふふ♡」

隣では、俺の腕に抱きつき、大きなおっぱいを大胆に押し付けてくる瑠李が、ご機嫌に鼻歌を歌っている。

俺達が今向かっているのは、瑠李の家。

この時間なら、家には誰もいないらしい。

瑠李の家は五人家族で、両親、姉、妹の四人と暮らしている。

瑠李の妹には昔、「大きくなったら、零にぃと結婚する～！」って言われた事があったっけ。懐かしいな。

「お父さんとお母さんはお仕事で、お姉ちゃんと妹は学校だから、気にせずゆっくりしてね」

隣を歩く瑠李が、可愛らしい笑顔でそう言ってくる。

そう。俺は今から瑠李の家に行くのだ。

瑠李の家なんて何年ぶりだろう……？

瑠李が成長（エッチな意味で）してから行ってなかったもんな。

「着いたよ」

「懐かしいな」

瑠李の家に到着。二人して中に入る。

中に入るやいなや――、

「ちょ、ちょ！？　何してんの！？」

「え？　玄関でフェラしようかなって」

「当然でしょ？　みたいな顔で答えないでもらってもいいですか！？」

「だって、夢だったの！　大好きな零君のおちんちんを、玄関入ってすぐの所でフェラしてあげるのが！」

「いくら平日の昼間だからとは言え、すぐ外には人が通るんだぞ！？」
「だからいいんじゃん♡　声が聞かれちゃうかもって思うと、興奮するでしょ♡」
「お前、変態だったんだな」
「うん……変態な子は、やっぱり嫌い……？」
「嫌い……なわけないだろ。むしろ最高だ！」
「よかった♡　嬉しい♡　ってことで、フェラしてもいい？」
「あ、あぁ。少し恥ずかしいけど」
「大丈夫。恥ずかしさなんてすぐに忘れちゃうくらい気持ち良くさせてあげるから♡」
そう言って瑠李は、俺のズボンとパンツを手早く脱がし、フェラを始めた。
「んちゅ♡　れろぉ♡　んむぅ♡　じゅぷ♡　じゅぷ♡　レロレロ……♡　んむぅ♡」
最初は咥えずに、亀頭やカリ、竿を丁寧に舐めるだけ。それだけでイッてしまいそうなくらい気持ちいい。
「じゃあ、いたらきま～ふ♡」
「くっ……！」
「ジュポッ♡　ジュルル♡　グポッ♡　グポッ♡　ジュポッ♡　ジュルルルルルルルルル♡」
咥えたのと同時に、もう待てないと言わんばかりに激しく責め立ててくる。
頭を前後に激しく振って、卑猥な音を出しながらチンコを刺激してくる。
さっき更衣室でしたフェラより、激しい……！
もしかして、さっきは手加減してたのか……？
「ジュポッ♡　ジュポッ♡　ジュポッ♡　ジュモッ♡　ジュロロロロロロロロロロ♡」
くっ……！　これはヤベェ……！　気持ち良すぎる！　出るのが

我慢できん！！
「っくあ！？」
「んぶっ！？　んん！　んん……♡」
俺の暴発に、目を見開いて驚いた瑠李だったが、すぐに口を窄め、俺の射精を受け止め始めた。そして、大量の精液をそのまま嚥下していく。
「くっ……うっ……ごめん、瑠李、もうちょっと……」
射精は長く、まだ出続けている。
口の中に精液が溜まり始め、口の端からこぼれ落ちている。それを、瑠李はもったいないと言わんばかりに手で拭い、さらには床にこぼさないよう、口の端に手のお皿を作り受け止めている。
「んぶっ！　ん……んくんく♡」
精液の量が多すぎたのか、一瞬むせこんだ瑠李だが、精液は全て飲み干すと固く決意しているかのごとく、嚥下し続けていく。
「っ！　くっ……はぁはぁ……」
やっと射精が落ち着いた。
「んくんく……ジュポン♡　んっく♡」
口に残った最後の精液を飲み干した瑠李。ってか本当にごっくんって音鳴るんだな。
「はぁ……♡　ごちそうさまでした♡　零君の精液、すごく美味しかった♡　濃さも量も凄くて、最高だったよ～♡　でもごめんね……結構こぼしちゃった……」
「いや、いいよそんなの！　俺こそごめん！　暴発しちゃって……しかもとんでもない量を……」
「ん～ん。私凄く嬉しかったよ？　暴発しちゃうくらい気持ちよくなってくれたんだ～って。それに、これだけの量を出しちゃうって事は、それだけ沢山感じてくれたって事でしょ？　むしろ私からしたらご褒美だよ！」
「そう言ってくれると、なんと言うか、その、助かる……正直情けないと思ったから……」

「情けなくなんてないよ！　零君は気持ちよくなって出してくれた！　それのどこが情けないの！　それを言うならちゃんと零君の精液を全部飲めなかった私の方が情けないよ！」
「いやいやそれこそ、そんな事ないだろ！」
精液を飲んでくれるだけで嬉しいのに、それを出した分全部飲めなかったから情けないなんて、そんな事ある訳ない。
「ふふ♡　困り顔の零君も可愛い♡」
「なっ！？」
「さ、お部屋行こう？」
「お、おう……」
なんか、うまく操られてる気がする……。でも、意外と悪くはないな。

♡　♡　♡

瑠李の部屋へとやって来た俺は、絶句していた。
「あ、あはは……えっと、その……これはなんと言いますか……」
なんと、瑠李の部屋の壁には、俺の写真が貼られていた。しかも、一枚とかではなく、部屋の壁全体に。
「こ、これ、何枚あるんだ……？」
「ちゃんと数えた事はないんだけど、壁に貼ってあるのだけでざっと一万枚、くらい……？」
「いっ――」
一万枚！？　す、スゲェな。そこまでよく集めたな……というかこの写真、どうやって手に入れたんだ！？
トイレ中の写真とか、風呂に入ってる写真とかあるんですけど！？　しかも、朝勃ちしてる写真もあるし……恥ずかしすぎるだろ！
「流石に引く……よね」
「い、いや……ビックリしただけで、引きはしないな」
「ほ、本当！」

「あぁ。好きな奴の写真を集めたいってのは分からんでもないからな。それが俺とか、嬉しすぎるだろ」
「よ、よかった～……！　ここで引かれてセックスできなくなっちゃったらどうしようと思っちゃった……」
……へ？
「今なんつった？」
「え？　セックスできなくなっちゃったらどうしようって」
「俺達、今からセックスすんの！？」
「う、うん、そうだけど……え！？　そのつもりでここに来てくれたんじゃないの！？」
「いや、淡い期待は抱いてだけども！？」
まさか、本当にできるとは思ってもみないじゃないですか！
「え……零君、私とセックスしてくれる、よね……？」
「そ、そんなの当たり前だろ！　逆に俺からお願いしたいくらいです！」
「ふふ♡　よかった～♡　じゃあ、早速シよ？」
「あ、あぁ！」
と、元気よく返事をしたんだが。
「なんだ、この状況は？」
俺は今、手錠をかけられ、それをベッドに繋がれ拘束されている。しかも、足も縄で縛られ、股を開いた状態でベッドの柵に縄で繋がれている。
これは、セックスする体勢ではない気が……？
「あの、瑠李さん。これはどのような……？」
「ん～？　零君、セックスしてくれるって言ったけど、男の子だからね。いざって時に逃げられても困るから念の為に、ね♪」
いや、ウインクじゃねぇよ。
男の子だからって言うまたよく分からない事を言ったのはもう置いといて。ここまでしなくても逃げないだろ。
「ま、そういう事だから零君。大人しく私に、沢山犯されてね♡♡」

「あ、はい」
この人、目がイッてる。
瑠李は制服を脱ぎ、全裸になる。
瑠李の全裸、ヤバいな。エロ過ぎる。
「じゃあ、早速、挿れちゃうからね♡」
瑠李は俺の股間の上へ跨ぎ、マンコの筋に亀頭を擦りつけ始める。
「ん……♡　これだけでも気持ちいい♡　もう期待しすぎちゃって、オマンコ濡れ濡れ♡　もうシちゃうよ？　シちゃうからね♡　零君をレイプだ～♡♡♡　ん～～～～♡♡♡♡」
「くっ……うお……！」
瑠李はゆっくり、ではなく、ドスンと腰を勢いよく下ろし、俺のチンコをマンコへと挿れた。
膣（なか）に入った瞬間、今まで感じたことのない感触と快感が襲って来て、一瞬、思考が停止した。
な、なんだ、これ……！？　これがオマンコ……！？
すんなり俺のチンコ迎え入れたのに、キツキツで、ギュウギュウ締まってくる……！　しかもめちゃくちゃ濡れてるから、そのヌルヌルがチンコ全体に絡みついてきて、マジで気持ちいい！
オナホなんかと全然比べ物にならない！　こんなの本物の方がいいに決まってる！（決してオナホを馬鹿にしたわけではない）。
ヒダヒダもよく分かるし、それにこの亀頭に当たる感触、これってもしかして――、
「んん～～～～♡♡♡　零君のおちんちん挿入ってきた～～～～♡♡♡　一気に奥まで来て、子宮口に亀頭当たってる～～～～♡♡♡」
やっぱりこれ、子宮口か！
「ってか、瑠李……お前初めてなんだよな？　い、痛くないのか……？」
「痛いよ……？　痛いけど、そんなのより、零君と繋がれた喜びの方が大きくて、痛みなんて全然気にならないのぉ♡　痛いはずなのに、腰動かしたくて、もっともっと零君のおちんちん味わいたくて

しょうがないのぉ♡♡♡」
こいつ、正真正銘のド変態だ！
「零君、私もう我慢できない！　動いちゃうねぇ！！」
「うおっ！？」
瑠李が急に腰を動かし始めた。ゆっくりと腰を回したり……なんて生優しいものじゃない。
腰を上下に動かす激しいピストンを、あの真面目で大人しい瑠李がシている。
瑠李が動く度に、大きなおっぱいがブルンブルンと上下に揺れる。それがエロくて俺は興奮してしまう。
「んはぁ♡♡　おちんちん膣（なか）でビクッってなったよぉ♡♡　気持ちいい？　気持ちいい？　興奮する？　興奮する？　私の体で興奮して、オマンコの膣（なか）でいっぱい気持ち良くなってぇぇ♡♡♡♡♡」
うおぉぉぉおおお！！　ヤバイヤバイ！　これは気持ち良すぎるッッ！！
手コキやパイズリ、フェラなんかとは違う別格の気持ちよさだ……！
ウネウネと蠢き、ヒダヒダに刺激され、膣がねっとりと絡みつく。これは、名器だ！
まるで、俺のチンコを気持ち良くさせる為に生み出されたかのような！
これは長くは保たない……！　というか、もうすでにイキそうだ！！
「る、瑠李！　どいてくれ！　もう出ちまいそうだ！」
「あん♡　あぁあ♡　あはん♡　あああぁあ！！」
こいつ、聞こえてない……！　くっ……まずい……このままじゃ本当に出ちまう……！
一刻も早く瑠李を退かさないと！
「瑠李！！！　どいてくれ！」
「イヤぁ！　イヤぁ！！　どかない！　どかない！　絶対どかない

い！！」
「わがまま言うな！　このままじゃ出ちまうんだって！　マンコの中に出ちまうんだって！」
「いいのぉ！　中に、中に出して～～～！！」
「バカ！　そんな事――」
「中出し以外、許さないのぉぉぉ♡♡♡♡♡」
「くっ……もう、駄目だ！　出るっ！？」
ビュルッ！　ビュルルルルルルルルルル！！！
「んん～～～～～～♡♡♡　中に！　中に出てる～！　零君の特濃ザーメンが、私の中にぃ～～！！　イク！　イク！　零君からの中出しで、イックぅううう♡♡♡♡♡♡♡」
俺は、瑠李の膣（なか）に大量に射精した。瑠李もイッたのか、膣（なか）がギュッと痛いくらいに締め付けてくる。
そして、締め付けと同時にビクビクと痙攣している。
「あ、あ、あはぁ……♡　はぁはぁはぁ……」
瑠李は、そのまま後ろに倒れ込んでしまった。その際、マンコからチンコが抜け、マンコの中から大量の精液が逆流してきた。その精液には若干血が混じっており、初めてであったと言う事がしっかりと確認できた。
「はぁはぁ……しあわへ～……♡」
瑠李は感じすぎて立てないのか、倒れ込んだまま息を切らし、動かない。
「る、瑠李、大丈夫、か……？　無理そうだったら足の拘束だけでも外してもらいたいんだけど……」
そんな俺の声を聞いた瑠李は――、
「だ、ダメェ……まだ拘束は解いてあげないの……」
ゆっくりと起き上がりながら、そんな事を口にした。なんでだ！？
「まだまだ、零君を犯すのぉ～……今日は、みんなが帰ってくるまで、ず～っと犯し続けるんだから……」
怖い怖い怖い！　目が怖すぎるって！

「もっともっと、精液中出ししてね？　今は中出し以外、しちゃ駄目だから」
「う、うす……」
妊娠の可能性とか、考えてないのかな、この子は？
まぁ、でも。中出しめっちゃ気持ちよかったからなぁ。本人がいいって言ってるから、もういっか。
「じゃあ、二回戦目、イクよ～～～♡♡♡♡♡」
瑠李は俺のチンコを迷いなくマンコに入れ、腰をまた激しく動かし始めた。
現時刻は午前１１：３０。瑠李の姉と妹が帰ってくる午後１６：００までの四時間半の間、俺は瑠李に逆レイプされ続けた。
その全てが中出しで、瑠李のマンコは俺の精液でグチョグチョになった。

第5話　幼馴染みからの、逆レイプ♡（後書き）

エピローグ

まさか、まさか、先を越されるなんて！？

学校から出ていく零様と赤城（あかぎ）さんを追って来たら、まさか赤城さんの家でセックスを始めるなんて！？

零様の童貞さんは私が頂きたかったのに……！

でも、赤城さんのおかげで私も吹っ切れました。

そうですよ。待ってるんじゃなくて、襲っちゃえばいいんですよ。

人気のない教室などに連れ込んで、レイプ……。

「考えただけで、興奮しちゃいますね……♡」

私は、自分の熱気で曇ってしまった眼鏡のレンズを拭きながら、どうやって零様を襲おうか、計画を立て始めました。

第5．5話　ハロウィン特別編！　ハッピーハロウィ～ン！　仮装した女子達からの、エッチなイタズラ♥（前書き）

プロローグ

俺はハロウィンが嫌いだった。

小学生の頃、ハロウィンイベントがあり、全員仮装しなければならないと言う、迷惑極まりないルールを設けられ、したくもない仮装を無理矢理させられたり。

中学生の時、女子が主催の学校でのハロウィンパーティーがあった。それはクラスの生徒全員強制参加で、仮装をしなければならなかった。しかも、指定された仮装を。俺はナース服を着させられ、女子から笑い者にされた。

そんな苦い経験があるから俺は、ハロウィンが大ッ嫌いだった。

今日、この時までは。

『ハッピーハロウィン！　精液くれなきゃ、イタズラしちゃうぞ♡』

クラスの女子、だけでなく、他クラスの女子までもが俺の元に集まり、エッチな仮装をして声を揃え俺にそんな事を言ってくる。

しかも、欲しいのはお菓子ではなく、俺の精液ときた。こんなの――、

「最高すぎんだろ～～～～！！！」

第5．5話　ハロウィン特別編！　ハッピーハロウィ～ン！　仮装した女子達からの、エッチなイタズラ♥

１０月３１日。今日はハロウィンだ。
俺が通うこの高校でも、そういったイベント時には特別な催しがあるようで、今日は授業はなく、ハロウィンパーティーをただ楽しむ一日らしい。
俺はいつもどおり登校した。
瑠李（るい）は、色々と準備があるらしく、先に登校していた。
俺が学校の門をくぐり、下駄箱に行くと――、
「あ、れいれい！」
「おう、おは、よう……」
俺の言葉は、金髪女子の格好を見て途切れてしまった。
なぜか。それは――、
「その格好……ナース、か？」
「うん♪　そうだよ～♪　どう？　似合う？」
「あ、あぁ……」
金髪女子の格好は、仮装でありがちなナース服。
ただ、普通と違うのは、超がつくほどのミニスカでちょっと動くだけでパンツが見えてしまう。隠せてないよって言いたくなるほど、パンツが見えてしまっている。
そして、一番目を引くのはおっぱい！
おっぱいが大きい為、前がとてもキツいのか、ファスナーを結構下まで下げていて、谷間どころかおへそが少し見えるくらいまで下げている。
さらに、ナース服が白なので、金髪女子の濃い色の乳首は完璧に透けており、服を着ているのに存在感を放っている。
こんなの朝から見せられたら……。
「あ、れいれい、興奮した？　勃起しちゃってるね♪」

「こ、これはしょうがないだろ！　朝からそんなエロい格好見せてくるから！」
「責てないよ～むしろ、私で興奮してくれて、ちょ～嬉しい♡」
金髪女子は、そう言いながら俺に近づいてきて、俺のズボンとパンツをあっという間に脱がしてしまう。
「ちょ、ちょっと！？　な、何してんの！？」
「え？　苦しそうだったから、お外に出してあげたの♡」
「だ、出してあげたのってお前、ここ下駄箱だぞ！？　他の人も通るんだぞ！？」
「れいれい、いい？　この学校で何より大切なのはれいれいのおちんちんなんだよ。れいれいのおちんちんが大きくなってたら、それを窮屈なパンツの中から出してあげて、その上で気持ち良くさせる。それがこの学校で一番大切な、大事な事なの」
「そ、そうなのか……？」
「うん♪　だから、れいれいはおちんちん勃起しちゃったら、何も気にしないで出していいんだよ。それで、近くにいる女子に気持ち良くしてって言って気持ち良くしてもらうの」
「そ、そんな王様みたいな事……」
「王様！　れいれいはこの学校の王様なんだよ！　だから、何も気にしなくていいの。れいれいはただ、自分の性欲とおちんちんに素直に従えばいいんだよ♪」
サラッと言ってはいるが、それってつまり、俺が望んだらいつでもどこでも女子にシてもらえるって事だよな……？
本当だったら嬉しいけど、そんな事が実際ありえるのか……？
なんて俺が疑っているのを察したのか金髪女子は――、
「ほら、ここを通る生徒のみんな、うちの事羨ましい～って目で見てるよ。れいれいのおちんちん、独り占めしてるから」
そう言われて俺は、金髪女子の背後に視線を向ける。するとそこには、他クラスの女子、そして他学年の女子達が嫉妬と羨望の眼差しをこちらに向けながら通り過ぎていた。

こ、これは、もしかして……マジ、なのか……？
マジで俺は、いつでもどこでも好きな時に女子とエッチな事をしてもいいのか？
ちょっと怖いけど、ものは試しだ。一回確かめてみよう。
「な、なぁ……」
「ん？　なぁ～に？」
「あ、あそこで上履きに履き替えようとしている、ショートカットの子、こっちに呼べないか？　あの子にもフェラをしてもらいたい……」
「もっちろん！　大丈夫だよ♪　ちょっと待っててね」
そう言って金髪女子は、俺が指名した女子に近付いていき、声をかける。
すると、声をかけられた女子は、一瞬で顔を真っ赤にさせて俺の方を見る。そして、金髪女子と一緒にこちらへと向かってくる。その顔は真っ赤になっているが、とても嬉しそうな感じだった。
「連れてきたよ～。この子でいいんだよね？」
「あ、あぁ……」
「い、一年の――――です……よろしくお願いします！」
ん？　名前聞き逃しちまった。この子のおっぱいがデカくてそこにしか意識が向かってなかった。
この子は爆乳ショートちゃんにしよう。
「よ、よろしく……ごめんね、急に呼び出しちゃって……」
「い、いえ！　呼んでくださってとても嬉しかったです！　零様のおちんちんを気持ち良くさせていただける権利を与えてくださって、本当にありがとうございます！」
お礼言われちゃったよ。
「じゃあ、れいれい。何かシてほしい事ある？」
「そうだな……ダブルフェラ、お願いできるか？」
言った途端にもの凄く恥ずかしくなった！　こんなお願い本当に聞いてくれんのかな……？

「もち！　じゃあ、そこの傘立てに腰かけちゃって。あ、お尻痛かったり、冷たくなっちゃったりしたら大変だから下にこれ敷いて」
そう言って手渡して来たのは、ピンクの可愛らしいハンドタオル。
え、これお尻の下に敷いていいの？
「汚れちゃうぞ？」
「全然大丈夫だよ～♪　むしろ汚して♪」
なんか踏み込んじゃいけない領域って感じがするから、ここは大人しく敷かせてもらおう。
傘立てにタオルを敷いた俺は、そこにお尻を乗っけて腰を前に突き出す。イキリ立ったチンコが、女子二人の前に晒し出される。
なんかメッチャ恥ずかしいんだけど！？　二人の後ろを通る女子達の視線が、俺のチンコに集中してるから！
「じゃあ始めていくね？　いくよ」
「は、はい！」
そして二人は、俺の前に跪き、顔を股間にイキリ立ったチンコに近づけていく。
そして――、
「「れろぉ♡」」
「うっ……！」
舌を伸ばし、竿を舐め始めた。
「「レロレロ♡　ちゅ♡　ちゅ♡　ちゅる♡」」
爆乳ショートちゃんが竿を舐めるのに集中し始めると、それを邪魔しないように金髪女子が亀頭やカリ、裏スジなどを舐めていく。
二人のコンビネーションに、腰が震えてしまう。
ってか、爆乳ショートちゃん、めっちゃフェラ上手いな！！
金髪女子も亀頭の舐め方が相変わらず上手くて、もう我慢汁ドバドバです……！
「ん……♡　れろぉ♡　んん……ど…とうですか……零様……気持ち良くなれてますか……？」
爆乳ショートちゃんが、竿を舐めながら、上目遣いで訊いてくる。

なんだこれ！　めっちゃエロい！！
「あ、あぁ。気持ちいいよ。でも一ついい？」
「は、はい！　なんでしょう……？」
俺に怒られると思っているのか、爆乳ショートちゃんの顔は引きつっている。
「咥えてもらってもいい？」
「あ、は、はい！　もちろんです！」
爆乳ショートちゃんは、嬉しそうに俺のチンコを握り――、
「そ、それでは、いただきます♡」
俺のチンコを咥えこんだ。
「うお……気持ちいい……！」
「んふふ♡　いっふぁい、ひもひよふなっへくらはいれ♡」
爆乳ショートちゃんは、俺の反応が嬉しかったのかチンコを咥えたまま微笑み、そう言った。
咥えたまま喋られるとヤバいんですけど！
そんな俺に嫉妬したのか、金髪女子が――、
「れいれい、私もいること、忘れないでね？」
と言って、俺と爆乳ショートちゃんの間、つまり股下に潜り込んだ。そして何をするのかと思ったら――、
「ぢゅ～～～～～♡」
「うおっ！？」
こ、こいつ、下から玉を吸い始めやがった！？
しかも、玉だけじゃなく、玉の下にある敏感な所まで舐めてきやがる！！
「男の子は、ここも気持ちいいって、ネットに書いてあったんだ～♪　れいれいも気持ちいいみたいだね♡」
そら、男なら例外なく誰だって気持ちいいだろ。
「ジュプッ♡　ジュポッ♡　ジュポッ♡　ジュル♡」
「ぢゅ～～～～♡　ぢゅるるる♡　レロレロ♡」
下駄箱で、二人の女子にフェラと金玉を舐められると言う、異様

な光景が繰り広げられる。
通る女子達はいつの間にか立ち止まり、その様子を眺めている。
しかも、オナニーしながらだ。
そんな姿を見せられながら責められると、気持ち良すぎて――、
「出るぅっ！！」
「んんぶっ！？」
ドビュッ！　ドビュビュビュビュゥゥゥ！！！
暴発してしまった。爆乳ショートちゃんの口の中に大量に射精してしまう。
口からこぼれ落ちる精液が、下にいる金髪女子の顔にかかる。
ぼたぼたと、俺の吐き出した朝一番の特濃精液が女子の口の中を経由して、女子の顔を汚していく。
なんだ、この背徳感は……！
ていうか、射精止まんねえ……！
「ご、ごめん……！　もうちょっと……」
と、爆乳ショートちゃんの頭を抱えたのがイケなかった。
「んぼっ！？　んぶっ！　んぶぼっ！！」
「ぐっ……うお……！？」
爆乳ショートちゃんの頭を抱えた事により、腰をさらに密着させる事になってしまった。
つまり、口の中に入っているチンコが、さらに奥に入ってしまったのだ。
これは、イラマ……！
突然の事で驚いたはずの爆乳ショートちゃんは、あろうことか、射精中なのにも関わらず、頭を前後に激しく振り始めた。
しかも、喉の奥まで。
「ぐっ……射精が次から次へと……！」
この前、瑠李にされたみたいに射精中の追い打ち射精をさせられている状態。射精が終わる前に、次の射精をしてしまう。
「んんぼぉ……！　んぼぉ！　ぐぽぉ♡♡」

口の中は唾液やら胃液やら精液やらでいっぱいになり、爆乳ショートちゃんが頭を動かす度にとんでもなく卑猥な音が鳴り響く。
口の端からは泡が溢れ出ており、全ての液体が混ざり合ってできた卑猥泡（ひわいほう）と俺は名付けた。
って、そんなふざけてる場合じゃねぇんだ……。
「ちょ、ちょっと待って……！　一旦離して……」
俺がそう言うと、爆乳ショートちゃんは我に返ったのか慌てて口を離してくれる。だな、追い打ち射精をされていたので、射精はなおも続行中な為、口から出された瞬間、凄まじい量の精液が爆乳ショートちゃんを襲った。
「ん！？　ん～～～～♡♡♡♡♡」
爆乳ショートちゃんは、精液を浴びて全身を震わせる。もしかしたらイッてしまったのかもしれない。
下に潜り込んでいた金髪女子は、顔中精液まみれと言う、とてつもなくエロい状態で、ゆっくりと立ち上がった。そして、嬉しそうにこう言った。
「はあ～♡　れいれいの濃厚な精液パック♡　最高すぎる～♡　ず～っとこのままにしてたい♡」
ずっとそのままは流石に止めておいた方がいいと思いますよ。
そして、爆乳ショートちゃんは――、
「んくっ♡　ごめんらはい……零様の精液、全部ちゃんと飲めませんでした……」
「そ、そんなの気にしなくていいよ！　むしろ俺こそごめん……めちゃくちゃ出しちゃった……顔も服も汚しちゃって……」
「零様は謝らなくていいんです！　零様は「俺の精液を全部飲み干せないとはどういう事だ、この雌豚がぁ！！」と罵ってくれればいいんです。というか罵ってください……♡」
この子、マゾか。
キーンコーンカーンコーン。
「教室行って、パーティーの仕上げしないと！」

金髪女子が、目元の精液だけ拭い言う。
「じゃ、じゃあ、私はこれで……」
「うん。ありがとうね。凄く気持ちよかった。できればまたシて欲しいな」
「っ♡　よ、喜んで！　いつでも仰ってください！　私のお口とオマンコはいつでも準備万端ですので！」
「ありがとう」
「では！」
爆乳ショートちゃんは、爆乳を揺らしながら去って行った。
俺達も自分達の教室へと向かう。教室に着いた途端に、皆からの嫉妬フェラが始まるとは思ってもみなかったが……。

♡　♡　♡

「れーくん、どう？　似合う？」
「零様、どうでしょうか？」
教室で、茶髪女子、眼鏡女子を筆頭に女子達が自身の仮装を見せてくる。
茶髪女子の仮装は「お化け」。だが、普通のお化けの仮装ではない。パンツ丸見えのショート丈の純白ワンピースで、乳首は完全に透けている。
興奮させようとしてるのが丸わかりだ。
眼鏡女子の仮装は「サキュバス」。真っ黒のハイレグで、おっぱいは隠さずオープン。下半身を隠すはずのハイレグのクロッチ部分は穴が空いており、マンコが丸見えだ。ん？　丸見え？　おい、パンツはどうした！？
その他にも、「婦警さん」「ナース」「水着（仮装なのか？）」「メイド」「暗殺者？」などなどがある。
だが、俺が一番見たい仮装がない！　と思っていると教室のドアが開き――、

「零君！　お待たせ！」
と、「チャイナドレス」に身を包んだ瑠李が現れた。待ってました～～～！！！
そう。何を隠そう俺は、チャイナドレスが大好きなのだ！　ガッツリ開いた胸元。そこから見える谷間。そして、足を見せる為に入っているスリット（これが両側にあるとなおよい）。
こんなエッチな衣装は中々にない。だから俺は大好きなんだ！
「どうかな……？　似合ってる……？」
モジモジしながら訊いてくる瑠李。そんなのもちろん――、
「めちゃくちゃ似合ってるに決まってんじゃん！！」
「っ～～～！　ありがとう～～♡」
「胸元が開いてるから、瑠李の谷間が強調されて最高だし！　瑠李のキレイでエッチな脚がスリットから覗いてて最高だし！　しかもミニ丈で両側にスリットがあるから、サイドからパンツが見えてるのも超最高だ！！」
やべ……俺、なんか熱弁してしまったけど、これって結構キモいよな……流石に引かれたよな……。
と、俺が一人で焦っていると――、
『わあああああああああああああああ！！！』
「っ！？」
教室中が、割れんばかりの拍手と歓声に包まれた。
いや、なぜ？
「やっぱ、れいれいは最高だね～♡」
「れーくんは、私達女の絶対的な味方だね♡」
「零様は、私達の、神様です……♡」
「委員長、それは全面的に同意です♡」
「零君♡　男の子なのにエッチなんて、最高すぎるよ～♡　もう――」
『だ～いすき♡♡♡♡♡』
瑠李を筆頭に、教室中の女子達が俺に向かってハグをしてくる。

しかし、ちゃんと俺にハグできたのは瑠李、金髪女子、茶髪女子、眼鏡女子の四人。
瑠李は前から。眼鏡女子は背中から。金髪女子は左側から。茶髪女子は右側から。
あぁ……おっぱいに囲まれるって、幸せだなぁ……。
「零君」「れいれい」「れーくん」「零様」
『エッチ、しよう♡』
耳元でそう囁かれたら、もう抵抗できません……。
はなからするつもりはないけど！
この後、俺は瑠李、金髪女子、茶髪女子、眼鏡女子達に金玉が空っぽになるまで搾り取られた。
ちなみに、セックスはしていない、手コキ、フェラ、パイズリ、素股、尻コキ、複数フェラなどでこってり搾り取られた。
ハロウィン、最高だ！！！

第5．5話　ハロウィン特別編！　ハッピーハロウィ～ン！　仮装した女子達からの、エッチなイタズラ♥（後書き）

エピローグ

「今度はクリスマスかな～」

「だね～。れいれいもうちらの格好気に入ってくれてたから、クリスマスには、とびっきりエッチなサンタコスで迫ろうよ」

「それ、賛成です。零様を骨抜きにしてやりましょう」

「委員長はノーパンでミニスカを穿いたらどうでしょうか」

「副委員長……あなたたまにはいい事言いますね」

「たまに、ですか……」

更衣室で。仮装から制服に着替える女子達が、１２月のクリスマスの事を話している。もちろん、零絡みだ。

ちなみに、瑠李達は教室で着替えようとしたのだが、零に更衣室で着替えてこいと怒られてしまったため、こうして更衣室で着替えている。

「じゃあ、クリスマスはれいれいとエッチするパーティーで決定でいい？」

金髪女子が言う。

『異議なし！！！』

金髪女子の提案は、満場一致で可決された。

１２月２５日に一体、何が起こると言うのだろうか……。

第6話　眼鏡女子から、遠慮無しの連続射精&男潮吹♡（前書き）

プロローグ

「ちゅ……♡　ぷちゅ～……♡」

「うっ……！」

俺は今、空き教室で眼鏡女子にフェラをされている。

最初から激しくて、すぐにイッてしまいそうになる。というか、もうすでに二回イッている。

それでも眼鏡女子は、フェラを止めない。射精した精液はチンコを咥えたまま全て飲み干し、そのまま次のフェラへと移っていく。

「んちゅ……ぷっ♡　れぇろぉ……♡　ぅんむ♡」

なぜ、俺が眼鏡女子にフェラされる事になったのかと言うと、あれは、瑠李（るい）とセックスした翌日の朝。つまりは、今日の朝にまで遡る。

第６話　眼鏡女子から、遠慮無しの連続射精&男潮吹♡

「おはよう！」
「お、おぅ……おはよう……」
朝７時３０分。瑠李が家へとやって来た。
インターホンを鳴らし、妹の燐が中へ招き入れる。これはもはや毎日の恒例となっていた。
だが、今日はいつもとは違う。
俺と瑠李は昨日、セックスをしたんだ。
瑠李からの逆レイプと言う形で、セックスをした俺はあの後、瑠李に家まで送り届けられた。
瑠李は俺を家まで送り届けると、去り際にキスをしてきた。そして――、
『私のファーストキス、零君にあげれて良かった♡』
なんて可愛い事を言って、そのまま去って行った。
俺はその後の記憶がない。飯を食ったのか、風呂に入ったのか（瑠李の家で入っているから清潔さは問題ない）、どうやって部屋に戻ったのか。
瑠李とのセックスが凄すぎて、放心状態だった。
と言うか、現実味がなさすぎて、本当に俺は瑠李とセックスしたのかと、ずっと思っている。
それは、今日朝起きた時も思った。
そして、瑠李が今、普段通りに家に来て変わらぬ様子で挨拶をしてくる。……やっぱり夢だったのか？
「零君、そろそろ行こう？」
「あ、あぁ……」
俺達は、家を出た。
「ふんふんふ～ん♪」

ご機嫌な様子で、鼻歌を歌いながら隣を歩く瑠李。なんでこんなに上機嫌なんだ？　き、昨日セックスしてたら、処女を失ってるんだ。そしたら、少なからず痛みは尾を引いてるはず……なのにそんな素振りが全くない！　やっぱりあれって、俺の夢だったの！？

「ん？　どうしたの？　零君♡」

「うお！？」

俺が瑠李を見ながらそんな事を考えていると、そんな俺に気が付いた瑠李が、可愛らしい声を出しながら俺の右腕に抱きついてきた。

うほぉ！　ノーブラのおっぱいがダイレクトに！　最高すぎる～！

「なんか、元気ない？」

「い、いや……そんな事ないぞ？」

「う～ん……そう？　なんかどこか元気無い気がするんだけど……昨日、無理させすぎちゃったかな？」

「き、昨日……？」

「うん。更衣室で口やおっぱいにいっぱい出してもらった後、私のお部屋でオマンコにい～っぱい中出ししてもらっちゃったでしょ？

射精には体力を沢山使うんでしょ？　だから私、あの後反省したの。無理させちゃって、ごめんね……」

やっぱり昨日のあれは、夢じゃなかったんだ！

ってか、なんだこの可愛い生き物は！　精液をぶちまけて瑠李の体を汚してしまった俺に、強制的とは言え、瑠李の中に大量に射精してしまった俺を！　心配してくれるなんて！　しかも、謝ってくれるなんて！

なんだ？　この子は女神なんか？　天使なんか？

「そ、そんな謝る事じゃない。お、俺は瑠李が相手だったら、いくらでも射精（だせ）る自信がある！」

「本当？　めちゃくちゃ嬉しいけど、あんまり無理はしないでね？

そんな事言われちゃうと私、また暴走しちゃうから♡♡」

「お、おう……」

瑠李は、妖艶な笑みを浮かべながら舌なめずりをして言う。

可愛いんだけど、その中に怖さがある気がするのは、俺の気のせい、か……？
「ねぇ、零君……」
「ん、ん？　どうした？」
「またおちんちん、もらってもいい、かな？」
「そ、それは、もちろん！　いつでも！」
「ふふ♡　やった～！　ありがとう！　じゃあ、また後で、おちんちん、お口に頂戴♡」
「あ、あぁ！」
俺、もう積極的に行こうかな？
そうこうしてる内に、俺達は学校に到着した。
「それじゃ、また後でね～♪」
「あぁ」
そして俺は、瑠李と別れ、教室に向かおうとした。すると突然――、
「うおっ！？」
誰かに空き教室に連れ込まれてしまった。
ガララ、ダン！
扉が閉まる音。一体、なんだ？
「え、え！？　委員長！？」
「おはようございます、零様」
俺の目の前にいたのは、眼鏡をかけた、最初に俺にフェラをしてきた委員長だった。
「お、おはよう……いや、じゃなくて！　なんで俺は委員長に空き教室に連れ込まれたの？」
「零様をメチャクチャにするためです」
「……」
この方は今、なんておっしゃいましたか？
「零様？　どうなされました？」
「いや、どうかしたのは委員長でしょ！　い、今なんてった！？」

「零様をメチャクチャにすると」
聞き間違いじゃなかった〜〜！？
「め、メチャクチャにするとは、具体的には……？」
「フェラしてパイズリしてイラマしてフェラしてフェラして、ハメて、精液をこれでもかってくらいに出させます。あ、すみません。出していただきます」
「いや、言い方の問題じゃない！　フェラが三回あったけど！？」
「私、零様にフェラするのが大好きなんです♡」
「さ、さいですか……」
この子、結構ド変態だよな……ていうか、この学校の女子って全員変態な気が……
「あ、零様。これを」
「ん？　これは？」
「これからいっぱい汗をかくんで、その前に水分を取っておいてください」
「いっぱい汗をかく事されるの確定なんだ。まぁ、いいや。じゃ、いただきます」
「はい♡」
ん？　なんか不敵な笑みを浮かべた気がするけど、ま、いっか。なんか妙な味するな……。
「まぁ、全部飲んでしまったんですね♡」
ん？　なんだ？　眼鏡女子が不気味な笑みを浮かべてんな……。ってかなんか暑い……。
「ふふ♡　もう我慢できません♡」
「うお……！？」
眼鏡女子は俺を繋げた机の上に寝かせ、ズボンとパンツを脱がした。そして、なぜかもうすでに勃起しているチンコを見て恍惚とした表情を浮かべた。
「あはぁ♡　零様のおちんちん♡　堪らない……♡　もう食べちゃいます♡」

「うお！？」
いきなり咥えてきた！
「ジュプッ！　ジュポッ！　ジュルルルル！！！」
「ぐっ……！　は、激し……！」
「ジュポッ！　ジュロォ！　ジュロロロロロ！！」
眼鏡女子は、俺のチンコを激しく吸い上げる。俺は仮性包茎なので亀頭への刺激があまり強くない。よって、亀頭を中心的に吸われると、本当にヤバすぎる！
「ま、待って……！　あ、あれ……？」
なんだ？　力が入らない……ってかもう――、
「イグッ！？」
「んぶっ！？　んぶぶ！　んぐぅ……♡　んんぅ♡」
俺は射精した。その射精を眼鏡女子は受け止め、そのまま飲み干していく。
「はぁはぁ……うっ！？　ちょ、ちょっと待って！？　俺、今イッたばかりだから、ぁあああ！？」
「んぼぉ！　んじゅぽ！　ジュロロロロロ！！！」
これはヤバい！？　イッたばっかりなのに吸われるとヤバい！？
イッた直後の亀頭は敏感になってるから、そんな事されたら、ヤバい！？
「ま、待って、待って！？　ヤバいヤバい！？　またイグぅ！？」
ドビュビュビュビュゥゥゥ！！！
「んんっ！？　んぶぅ！　んくんく……」
二度目の射精。それも飲んでいく眼鏡女子。
「はぁはぁ……」
これで終わり、かと思いきや――、
「んちゅ～～♡」
ま、まだするのか！？　また吸ってくる！？
「も、もう無理だって！　もう止めてくれ！？」
「ジュゥゥゥゥゥゥ！！　ジュルルルル！！！」

全然聞いてくれない……それに、俺ももう二回も出してんのに全くもって萎えないのはなぜ！？
「ん～？　んふふ♡」
眼鏡女子が俺の方を上目遣いで見つめてくる。その表情は、チンコを咥えているのでよく分からないが、微笑んでいるように見えた。
「ま、まさか……」
さっき飲んだ飲み物。あれに何か入ってたんじゃ……！？
「んふふ♡　ジュルルルルルルルル！」
うぉ！？　さらに激しく……！？
「ジュポォ！　ジュポポッ！　ジュロロロロロロ！」
「ぐっ……ま、また、出るっ！？」
ビュル！　ビュルルルルルルルルルルルル！！！
「んぼっ！？　んぶぅ……♡」
三発目も飲み干していく眼鏡女子。も、もう無理だ……！
「な、なぁ、もう、無理だ……っ！？　き、亀頭だけ責めるなあ～！？　駄目だぁ！？」
「ぢゅるるるるるるるる！！！！」
な、なんだ！？　なんかヤバい！？　射精とはなんか違うのが、違うのが来る！？
「やめろ！　やめろ！　出る！　なんか出る！　なんか出ちまうぅぅ！？」
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！
「んんっ！？　んくんくんく……♡」
俺が出した、精液じゃない、おしっこみたいなものを眼鏡女子は飲んでいく。
「ぐっ……飲みながら亀頭を舐めるのは、駄目だぁ……」
眼鏡女子は、飲みながら亀頭をずっと刺激してくる。その為、出しているものの勢いが全く収まらない。
「ん～♡　んくんく♡」
「はぁはぁ……」

やっと落ち着いてきた。
「チュッポン！　ん～♡　ごっくん♡　はぁ……♡　零様、沢山出して頂いてありがとうございます♡　とてもとても美味しかったです♡　しかも最後はお潮まで出してくれるなんて、私感動です♡」
「し、潮……？」
最後に俺が出したのって、潮だったの……？
よくＡＶとかには男が潮を吹くのもあったけど、まさか自分が体験する事になるなんて……。結論から言うと、めっっっっちゃ気持ちよかった！！！
「まさか、零様のお潮を飲めるなんて、思ってもなかったので、私、ものすっごく幸せです！　あ、そろそろ、授業が始まってしまうので、行きましょう」
「あ、あぁ……」
眼鏡女子は、そのまま教室を出て行ってしまった。
俺はチンコ丸出しのまま、机の上で横たわっていた。動けないのよ。連続で射精して、潮まで出すと、腰と足が震えて、立てないし、体が言う事聞かないのよ。
「瑠李にされた追い打ち射精とはまた違う感じだったな」
女子に代わる代わる射精させられた事はあっても、口に含まれたままの連続射精は今までなかった。
だから、それがめっちゃ気持ちいいんだと、今日初めて知った。
「この後の授業、どうっすかなぁ……」
結局俺は、授業をサボる事にした。

第6話　眼鏡女子から、遠慮無しの連続射精&男潮吹♡（後書き）

エピローグ

一時間目の授業をサボった為、クラスの女子達が俺を探しに来てくれた。

俺を見つけた女子達は本当に心配していた。

俺の状態を見て、何があったのかすぐさま察したらしく、副委員長が眼鏡女子をめちゃくちゃ叱っていた。授業前になんて負担をかけているんだ、と。

俺は、女子達に支えられ、保健室に向かった。

ベッドに横になると、疲労からかすぐに眠ってしまった。

どのくらい寝ていたのか。俺が目を覚ますと、隣には瑠李が椅子に座っていた。

「あ、零君。大丈夫？」

「あ、あぁ……ごめんな」

「ううん。あの子、反省してたよ。やりすぎちゃったって」

「そっか。なんか悪い事しちゃったな」

「零君が気にする事は何もないよ。女子達は零君に負担をかけないようにしなきゃいけないのに、それを破ったあの子が悪いんだから」

「そ、そっか……」

「うん。華さんが迎えに来てくれるから、もうちょっと待っててね」

「姉ちゃんが……バイトもあるのに、迷惑かけちまったな」

「華さんは喜んでたよ？　零ちゃんを迎えに行ける～って」

「ったく、あの人は」

「今日はお家でゆっくりして」

「あぁ。ありがとうな。ごめんな。朝の約束守れなくて」

「ううん。気にしないで。私はいつでもどこでも、零君のおちんちんを堪能していいって許可、直接もらってるから、全然大丈夫♪」

「そうか」
「うん。じゃあ、華さん来るまで、もうちょっと寝てて」
「あぁ。ありがとう」
「うん」
そうして俺は、姉ちゃんが来るまでの間、再び眠りについた。

第7話　実妹との、お風呂エッチ♡（前書き）

プロローグ

眼鏡女子に三回の射精、そして、初めての潮吹きをさせられ、動けなくなってしまった俺は学校を早退した。

「じゃあ、姉さんバイト行くけど、なんかあったらすぐに連絡してね？」

「うん。ありがとう。姉ちゃん」

姉ちゃんに自室まで連れてきてもらい、俺はベッドに横になった。姉ちゃんはバイトがあるのですぐに家を後にした。

「着替えなきゃな……」

俺は制服からパジャマへと着替え、そのまま眠りについた。ってか、俺どんだけ寝るの！？

そして、何時間くらい寝たのだろう。目を覚ました俺は――。

「風呂入るか」

汗を流すため、風呂へと向かった。

第7話　実妹との、お風呂エッチ♡

風呂に入った俺。今は頭を洗い終え、体を洗ってる最中だった。
そんな時、事件は起こった。
ガチャ。
ん？　ガチャ？
「お兄ちゃ～ん」
「り、燐！？　なんで！？」
突如、素っ裸の燐が入って来たのだ。
「なんで？　そんなの決まってるじゃ～ん。普段この時間にいないお兄ちゃんがいて、しかもお風呂に入ってる。そしたら一緒に入りたいって思うでしょ♪」
「いやいや、思わんわ！」
な～にさもそれが常識みたいな感じで言ってくれちゃってんの！
しかも、体を全く隠そうとしないのはなぜ！？
「え～なんで～？　私はそう思うのに」
「ってか、少しは体を隠せよ……」
こっちが恥ずかしくて目を逸らしちゃうわ。
「え？　なんで？」
「なんでって……俺に裸見られて嫌じゃないのかよ」
「嫌な訳ないじゃん！　むしろお兄ちゃんに裸見てもらえるとか幸せ過ぎて死ねるもん！」
いや、死ぬなよ！
「それに、私の体なんて常に見てるでしょ？　興奮も何もしないでしょ」
こいつ……一旦分からせてやらなきゃ駄目だな。
自分がどんなにエロい体なのかを。
「興奮しない？　そんな訳ないだろぉ！　その証拠にほら！」

俺は立ち上がり、実の妹の裸で興奮した恥ずかしすぎる勃起チンコを見せつけた。
「え……これ、私の体で……？」
「あ、あぁ、そうだ！　お前の裸を見てこんなになったんだ！」
も、もうここまできたら堂々としてやる！　引くなり軽蔑するなりしやがれ！
「嘘……本当に……？」
「あぁ。だからそう言ってるだろ」
「ヤバ……！　嬉しすぎるんですけど！！」
へ……？　嬉しい？　今、嬉しいって言いましたか？
「私の裸でお兄ちゃんが勃起してくれるなんて、夢みたい！　あれ？　これ、夢じゃないよね！？　現実だよね！？」
「残念ながら、現実だ」
「っ～～～！！！　良かった～！！！　お兄ちゃんが私の裸で勃起してくれたよ～～～！！！」
目の前で本当に嬉しそうに飛び跳ねはしゃぐ燐。大きなおっぱいが揺れに揺れて……エロい！
ってそうじゃねぇ！　なんでこの実妹は、俺に勃起されて喜んでんだ！？
「お兄ちゃん！　私のどんな所で勃起してくれたの？」
「お、おま……そんな恥ずかしい事言わせんのか？」
「うん！　だってちゃんと聞いとかないと今後に活かせないでしょ」
今後、活かす予定がある事にお兄ちゃんはビックリだよ。
「り、燐の、おっぱいに……」
「おっぱい！　お兄ちゃんは私のおっぱいが好きなんだ！」
「……」
「そっか～♪　るいるいが言ってた事は本当だったんだ～♪」
「る、瑠李（るい）が、何か言ってたのか……？」
まさか、この前のセックスの事を……。
「うん！　お兄ちゃんはセックスする時におっぱいばっかり見て触

ってくるって！」
言ってた～～～～～～～！？
「パイズリされると凄く喜ぶって言ってて。でもお兄ちゃんはエッチな事に全く興味がないイメージだったから、全然想像つかなくて。でも、今やっと分かった。お兄ちゃんはおっぱいが大好きなんだってこと！」
瑠李のやつ……明日会ったら問い詰めてやる……！
「ね、ねぇお兄ちゃん……」
「な、なんだ……？」
どうしたんだ？　急にしおらしくなって。
「わ、私、大好きなお兄ちゃんの勃起見せられたらもう我慢できないよ……！　お兄ちゃん、セックス、しよう？」
「な、な、なに言ってんだ！？　俺とお前は血が繋がった兄妹なんだぞ！？」
「血の繋がりなんて関係ないよ……！　血が繋がっていようが私達は男と女。おちんちんとオマンコが付いてる。だったら、血の繋がりとか、家族とか、そんなの気にせず、好きな人とはエッチしてもいいと思う！」
なんか、凄い極論を言ってる気がするが、すんなり腑に落ちるのはなぜだ？
俺も燐と同じ考えだからか！？
「ねえ……お兄ちゃん……セックスしよう、セックスさせて……私のオマンコもう、お兄ちゃんの勃起チンポ見てグチョグチョなの……♡」
「うわぁ……」
燐は、壁に手をつき、足を上げてマンコを拡げて見せてくる。
そこは燐が言う通り、すでに愛液でグチョグチョに濡れており、溢れ出た愛液がふとももを伝って床に滴り落ちていく。
そんなん見せられたら――、
「あ、お兄ちゃんのおちんちん、ビクッってした♡」

そらしますって。
「おちんちんからエッチなお汁いっぱい出てきてるよ？　お兄ちゃんももう我慢できないでしょ？　ねぇ、私とセックスしよ？　お願い♡」
「わ、分かった……でも、姉ちゃんと桃には内緒な」
「うん！　勝手に先を越したなんてバレたら私、二人に怒られちゃうからね」
何を言ってるのかよく分からなかったが、俺は実妹とセックスする事にした。実際、罪悪感が半端じゃないが、もうここまできたら俺ももう我慢できない！
いざ！　近親相姦！
「もう準備万端だから、何も気にせずそのおちんちん、私のオマンコの中にぶっ刺して♡」
「本当にこのままいいのか？」
「うん♡　お兄ちゃんとセックスできるなら、最初は絶対に立ちバックがいいって思ってたから♡」
「分かった。じゃ、じゃあ、入れるぞ」
「うん♡　来て♡」
俺は初めて、自分の意思でオマンコの中にチンコを挿入した。
「んっ！　んんぅぅぅぅぅ！！　来た！　来たぁ♡　お兄ちゃんの太っいオチンポぉ♡」
「くっ……」
瑠李の膣（なか）も締め付けが凄くて気持ちよかったが、燐のマンコは締め付けが尋常じゃない！
よくエロ漫画とかで、背が小さい女の子のマンコは締め付けが凄いって書いてあるけど、本当かもしれない……！
瑠李は俺より少し低いくらい。だが、燐は俺の胸の下辺りに頭が来るくらい背が低い（背へ行くはずの栄養が全て胸に行ったのではないかと思う）。
燐の膣（なか）は、もうこれでもかって言うほど俺のチンコを締め付けて

くる。
「燐、痛くないか……？　血が出てるぞ……」
燐も瑠李同様、処女だったようで膣から血が出ている。
「だ、大丈夫……！　ちょっと痛いけどそれよりも、お兄ちゃんと繋がれたって言う嬉しさの方が大きくて、痛みなんて忘れちゃいそう♡」
瑠李も同じような事を言ってた。凄いな、女子は。
「ね、ねぇ……」
「ん？」
「動いて、ほしい」
「え……？　いや、大丈夫なのか？　いくらなんでも動いたら痛いだろ？　今日はここまでに――」
「やだ！！！」
「っ！？」
燐の声が浴室に響き渡る。ここまで大きい声は初めて聞いたな……。
「私、お兄ちゃんとずっとエッチしたかった……！　その夢がやっと叶ったの……！　だから、これで終わりだなんて言わないで……！　このままいっぱい動いて、いっぱい突いて私を愛して……！　私を犯して……！」
涙を浮かべながら、俺への想いを吐露する燐。
大事な妹にこんな顔させちゃいけないよな。
「分かったよ、燐。お前を愛してやる。でも、少しでも辛かったり、キツかったりしたらすぐに言うんだぞ？」
「う、うん！」
「あと、俺ももう我慢ができない。一度始めたら、加減できないからな」
「う、うん！！　お兄ちゃんのしたいようにして♡」
「じゃあ、行くぞ！　ふん！」
「んひぃぃ！！来たぁ♡　お兄ちゃんのオチンポがズンッて奥に来

たぁ♡」
俺は腰を燐のお尻に打ち付けた。痛みを労らない無遠慮の突きだ。
さっき、辛かったりしたら言えと言ったが、多分無理だ。言われてももう止まれない。
俺は、マンコを突きたくてしょうがない！
「んっ！　んっ！！　んっ！！！」
「あっ！　あっ！！　あぁあんっっ！！！」
俺が突く度に燐は喘ぎ、膣（なか）を締め付けてくる。感じているのだろう。愛液の量が絶え間なく増え続ける。
「あっ、あっ、あぁぁぁんっ♡　んふっ！　んはぁ♡　んはぁぁん！！　あぁぁぁ！！！」
燐の喘ぎ声がもっと聞きたくて、俺は夢中になって腰を振る。
初めて自分から女子に挿れ、腰を動かし犯している俺は、秘かに何か、目覚め始めていた。
「ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　んんっ！　んはぁ♡　いい！　いいのぉ！！　お兄ちゃんのオチンポ、すっごく気持ちいい♡♡♡　もっと、もっと突いてほしいの♡　私のオマンコ、壊れるくらい、お兄ちゃんのオチンポの形覚えるくらい、突きまくってほしいのぉ！！」
ならば、お望み通りに！
「んほぉ！！　いきなり激しくなったぁ♡♡♡　んはぁ！　んぁぁぁ！！　オマンコ、壊れりゅ！　壊れちゃうぅぅぅ！！！」
俺はイキそうになるのを必死に耐えながら、腰を思い切り振る。
突く度に、パチュンパチュンと卑猥な音がして、それが俺の興奮をさらに増強させる。
「んぁぁぁぁ！！　も、もうらめぇ！！　わらひイッひゃうぅ！！！　イッひゃうのぉ！！　お兄ちゃんの！　大好きなお兄ちゃんのオチンポでイッひゃうのぉぉぉぉぉぉ！！！♡♡♡」
「んっ！　んんっ！！」
「イッきゅうううう！！！　あぁぁぁぁぁぁぁぁ

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
燐はイッたのか、膣(なか)がぎゅう〜〜〜っと締め付けてくる。体をビクッビクッと震わせ、壁に付いていた手が滑り落ちそうになる。
俺は慌てて、燐を後ろから抱きしめる形で支える。
「ご、ごめんにゃひゃい、おにいひゃん……わらひ、かっへにイッへひまいまひた……」
「いいんだよ。気にしないで。俺で気持ち良くなってくれて凄く嬉しいよ」
「ほのへがお、はんほくへふぅ〜……♡　れ、れも！　おにいひゃんはまらイッへまへん！　らはら、わらひのオマンコれ、ひもひよふ、なっへほひいれふ♡」
「わ、分かった。俺ももうちょっとでイケそうだからちょっとマンコ、使わせてもらうよ！」
「はひぃ！！」
俺は未だ震える絶頂マンコを、勢いよく突く。
「はひぃ！　あひゃぁ！！　ぁぁぁぁぁ！　ああんんっっ♡♡♡」
俺が突く度に、燐はあられもない嬌声を上げまくる。まぁ、無理もない。イッたばかりのマンコを突かれてるんだ。こんな声も出る。
イッたばかりの所を刺激される気持ちよさは、俺が何より理解している。
だからこそ、加減はしない！
「んっ！　ふっ！　んんぅ！！」
「ああぁぁっ！！！」
「ごめん！　もう少しでイケるから！」
「ああぁぁっ！　あぁぁぁんっっ！！　あぁぁぁぁぁああああ！！！」
悲鳴に近い嬌声を上げる燐。その目には涙が浮かんでいる。
「燐、俺もうイキそうだ！」
「は、はひぃ！　わ、わらひも、まは、イキそうですぅ〜〜！！
一緒に、一緒に行きましょうううう！！　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「うっ……あ、出る！！！」
俺は慌ててマンコから引き抜き、燐のお尻に精液をぶっかけていく。この征服感、堪んねぇ……！
「んんっ～～～

「いやいや、中に出す危険性を分かってる！？」
「分かってます！　私、お兄ちゃんの子供ならいくらでも孕めます！」
「おいおい……」
「もう～お尻に出してくれるのも嬉しいですけど、今度は中にいっぱい出してくださいね♡」
「わ、分かったよ」
「じゃあ、体洗いましょう」
「あぁ」
そうして俺達は、体を洗い始めた。

第7話　実妹との、お風呂エッチ♡（後書き）

エピローグ

風呂で実妹とセックスし、互いの体を洗い流した後、俺達は姉ちゃんの作った晩御飯を食べていた。

「ん～～！　やっぱりお姉ちゃんのご飯は美味しいわ！　ね、お兄ちゃんもそう思いますよね？」

「あぁ。そうだな」

「んふふ♪　だってお姉ちゃん！　良かったね！　お兄ちゃん、ご飯おかわりしますか？　私がよそってきますよ」

「あ、あぁ。ありがとう……」

「「……？」」

どうやら、違和感を覚えているのは俺だけではないようだ。俺の目の前に座る姉ちゃんとその隣に座る桃が、燐の事を見つめながら目を点にしている。

「はい！　お待たせしました、お兄ちゃん♪」

俺達が燐に抱いている違和感の正体。それは、燐が俺に対して〝だけ〟　敬語だと言う事。

家族だし、兄妹なんだから普通なら敬語は使わない。と言うか、燐もさっきまではタメ口だった。

それがなぜ急に変わったのか……心当たりは……。

はっ！？　まさか！　さっきのセックス！？

「ん？　えへへ♪」

俺の隣では幸せそうにご飯を食べる燐が。

俺が燐を見ていると、それに気が付いた燐がこちらを向き可愛らしく笑いかけてくる。

可愛い……！　俺はさっき、こんな可愛い子を犯してたんだな……すげぇ罪悪感……でも、その罪悪感がなんか、心地いい……！

しかも、燐が俺に敬語を使ってくれるなんて最高じゃねぇか！
できればこのままでいてほしいなぁ……。
ちょ、桃。俺をそんなに睨むな。俺は何も……ナニにしかしてないから……！

第8話　実妹の、無制限ごっくん&飲潮♡（前書き）

プロローグ
燐とお風呂でセックスした翌日。
俺は学校を休んだ。
その理由は、謎の体調不良。
まぁ、眼鏡女子に飲まされた謎のモノが原因なのは間違いなさそうなんだけど。
「本当に一人で大丈夫？」
「大丈夫だって。もう子供じゃないんだから」
「じゃあ、何かあったらすぐに連絡してね？」
「分かった。行ってらっしゃい」
「行ってきます」
姉ちゃんが、過保護過ぎるくらい俺を心配してくる。だが、俺だってもう幼稚園児じゃ小学校低学年じゃない。ただの体調不良なら、一人でも別に平気だ。
桃は相変わらず素っ気ない感じで、「風邪だったら伝染るから、近づかないで」と言われ距離を置かれてしまった。流石にちょっと傷つく。
瑠李（るい）は今日は部活の朝練があったので家には来なかった。だから休むとメッセージを送ったら電話がかかってきて――、
『うわ～ん！！　朝練サボって会いに行けばよがっだ～！？　うぅ……無理しないでお大事にね』
と、電話越しに泣かれてしまった。
俺、大事にされてるんだなぁ。
「なんか眠くなってきた……寝るか」
そうして俺は深い眠りに就いた。

第8話　実妹の、無制限ごっくん&飲潮♡

「ん……んん……」
俺は目を覚ました。随分と寝ちまったみたいだな。
モゾ。モゾモゾ。
ん？　なんだ？　この股間に感じる心地いい快感は……？
俺は布団を剥ぐ。するとそこにいたのは――、
「り、燐！？」
「あ、お兄ちゃん♡　おはようございます♡」
「おはよう……じゃなくて、お前何やってんだよ！？　学校は！？」
「学校はサボりました。当たり前じゃないですか～。大好きなお兄ちゃんが体調を崩して、家で寝込んでるんですよ？　しかもお一人で。そんなの心配になるに決まってます！　だから、私が側にいようと思いまして♪　あ、お姉ちゃんには連絡済みなので安心してくだしい♪」
「そ、その気持ちはありがたいし、もうサボっちまったのはしょうがないからいい。でも、なんでお前は俺のチンコを舐めてんだ！？」
そう。燐は、俺のチンコを美味しそうに舐めていたのだ。こうして話している間はずっと手コキをしてきている。
「なんでって、それは、お兄ちゃんの様子を見に来たら、お兄ちゃんのおちんちんが大きくなっていたので、これは妹である私がしっかりと鎮めて差し上げなければと思い、僭越ながらフェラをさせていただいておりました！」
左手で敬礼をしながら言う燐。右手は手コキを止めない。
「そうか……それはありがとう……」
「お兄ちゃんに、お礼を言われてしまいました！　嬉しすぎて、オマンコが濡れてしまいますぅ～♡」
昨日も思ったけど、燐の口からおちんちんとか、オマンコとか、

卑猥な言葉が飛び出して来るなんて、本当に驚きなんだよな……。
俺が知ってる燐は、そういう下ネタが大ッ嫌いだったから。
「ん？　お兄ちゃん、どうかなさいましたか？」
俺が燐をボーっと眺めていたのに気がついたらしく、燐は心配そうに尋ねてきた。
「い、いや、なんでもないよ。それより、このままじゃツラいからさ……」
「はい！　もちろん最後まで責任を持ってさせていただきます！」
そう言って燐は、俺の股の間にもぐり込み、フェラを再開した。
「んちゅぅ♡　れるぅ……♡　ぷちゅ～……♡」
「くっ……！」
燐は、亀頭の先、つまり尿道を中心的に吸っている。まるで、我慢汁を吸い出すかように。
「んちゅぅぅぅぅ♡　んふふ♡　お兄ちゃんの我慢汁、とぉ～～～～っても美味しいです♡　私、お兄ちゃんの我慢汁、大好きです♡」
あ、本当に吸い出してたんだ。
「はもっ♡　ジュポォ♡　ジュポッ♡」
燐は、我慢汁を沢山吸った後、チンコを口いっぱいに頬張り、頭を上下に動かし始めた。
その動きは、だんだんと激しさを増していき、俺に射精を促してきた。
「グポッ♡　ジュポッ♡　ジュロロロロロロ♡」
「くっ……！　り、燐、俺、もう……！」
「いいれふよ♡　はまんひないれ、いっふぁいらひてくらはい♡わらひのおふひのなはに♡♡」
「ぐっ……！　うお……！」
燐のフェラのスピードがまた上がった。確実に精液を搾り取るために。
「グポッ♡　グポッ♡　グポッ♡　グポッグポッ♡　ジュロロロロ

ロロ♡」
「くっ……イグッ！」
ビュルッ！　ビュルルルルルルル！！！
「んぶっ！？　んむ……♡　んふぅ……♡」
俺の射精に驚いた燐だったが、それも一瞬の事で、燐はすぐに幸せそうな顔になり、俺の射精を受け止めていく。射精(たさ)れた精液をどんどんと飲み込んでいく燐。
その表情は、本当に嬉しそうで幸せそうだった。
「はぁはぁ……」
射精が落ち着くと、口から俺のチンコを取り出した燐が――、
「んぅ……はぁ……♡　お兄ちゃんの精液、とっても美味しかったですぅ～♡　こんな美味しい精液、もうこれから毎日飲みた～い♡」
ま、毎日か……。
「あ、ありがとうな燐。おかげで落ち着いたよ」
「ん？　何を仰っているのですか、お兄ちゃん」
「え？」
「お兄ちゃんのおちんちんはまだ、大きいままじゃないですか♡　ここからが、本番ですよ♡」
「マジですか……」
燐の目がマジだった。まぁ、体調不良と言えど、熱とかダルさはないから全然大丈夫なんだけど。
けど、この後まさか、エンドレスフェラと、潮吹きが待っているだなんて思ってもみなかった……。

♡　♡　♡

「ジュル♡　ジュロ♡　ジュロロロロロロ♡」
「くっ……イッたばかりの亀頭は敏感過ぎる……！」
「ジュルルルルルルル♡　ジュモモモモモモモ♡」
燐は、俺の声など気に留めず、激しく責め立ててくる。尿道から

は我慢汁とさっき出した分の残り液がとめどなく溢れ出る。それを燐は、嫌な顔一つせず、美味しそうに、嬉しそうに飲んでいく。
「ジュポッ♡　ジュロロロロロ♡　ジュポォ♡　ジュポォ♡　ジュポォ♡」
「ぐっ……燐、俺、また……！」
「ジュポッ♡　ジュポッ♡　ジュロロロロロロ♡」
「うっ……出る！！」
ドビュッ！　ドピュピュゥゥゥゥゥゥゥ！！！
「ん～～♡　んくんくんく……♡」
俺の二発目の精液を飲み干していく燐。
これで終わるかと思いきや――、
「ジュロロロロロ♡♡♡♡♡」
「ぐっ……まだ……！？」
燐は二発目出して超敏感になっているチンコを、今まで以上に激しく吸い出した。
「ぐっ……り、燐、も、もういいんじゃないか……うおっ！？」
「ジュボォォ！　ジュボォォ！　ジュロォォォォ！」
燐は、俺の言葉など聞かないと言わんばかりにバキュームしてくる。
舌では亀頭を舐め、口全体では竿を刺激し、射精へと導いていく。
「くっ……こんなの、我慢できるわけ、ない……！　い、イグッ！？」
ドピュン！　ドビュビュビュビュゥゥゥゥ！！！
「んん！？　んん～～！　んん……♡」
俺の三発目の精液は、液体状ではなくほとんどゼリー状に近いと思う。尿道から出た感じがそんなだった。意外と男って尿道から出た感じで分かるのよ。
「ん……っく！　ん……っく♡」
ゼリー状で飲みづらいのか、燐は喉を何回も鳴らしている。
「はぁはぁ……」

流石に、もうこれで終わりだろう……そう思っていたんだが――、
「ぢゅるるるるるるるるるる！！！」
「ぁぁあああ！？」
あろうことか燐は、亀頭を舌先で激しく刺激した。
この感じ、眼鏡女子の時と一緒だ！
このままだと、潮を吹いてしまう……！
「り、燐！　も、もう止めてくれぇ！！」
「ぢゅ～～～～～～～～！！！　ぢゅるるるる！！！」
「あ、あ、あ、あ、あああああああああ！？」
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁ！
「んん！？　んん！　ん……♡　んふっ♡」
潮を吹き出している最中も、燐は亀頭を刺激してくる。もう、潮が止まらないよ……。
「ん……♡　んん♡　んふぅ……♡」
燐は幸せそうに俺の潮を飲み干していく。
そして、二回の射精と潮吹きを終え、燐はようゆく俺のチンコを離してくれた。
「チュッポン♡　はぁ……♡　まさか、お兄ちゃんのお潮まで飲めるだなんて、私、幸せ過ぎてどうにかなっちゃいそうです～～♡　お兄ちゃん、ごちそうさまでした♡♡」
「あ、あぁ……」
俺がぐったりしている様子を見た燐は――、
「す、すみません！？　私、お兄ちゃんが具合悪いのに、調子に乗って何回も！？　本当にごめんなさい！？」
「い、いや、大丈夫だ。気にするな……俺も気持ち良かったからな……」
「お兄ちゃん、優しすぎます……♡　じゃあ、お詫びを兼ねて、お昼ご飯を作りますね♪　もうお昼ですし！」
「あ、あぁ。頼む」
「はい！　お任せください！」

そう言って燐は、キッチンへと向かって行った。
まさか二日連続で潮吹きさせられるとは……。気持ちいいんだけど、結構疲れるんだよな……。
俺は、燐が料理を持ってくるまでの間、再び眠りについてしまった。

第8話　実妹の、無制限ごっくん&飲潮♡（後書き）

エピローグ

彼女は目撃してしまった。

義理の妹と義理の兄の、禁断の営みを。

『り、燐！』

『ジュポッ！　ジュロォォォォ！』

（あれが、兄さんのオチンポ……凄く大きい……）

零の部屋の扉の前に立つ、制服姿の女子。

（兄さん、気持ちよさそう……フェラが好きなのかな……？　私もしてあげたい……）

その女子は、右手を股間に持っていく。そして、クロッチ部分を指で引っ掻いていく。

興奮しきっているのか、女子が自らのクロッチ部分を触る度、クチュクチュと言う、卑猥な音が鳴っている。しかし、その音は燐のフェラの音でかき消されている。

（はぁ……♡　兄さん♡　兄さん♡　兄さん♡　普段素っ気ない態度取っちゃってごめんなさい！　兄さんの顔見て、声聞くと、オマンコ濡れちゃうの……だからいつも我慢してるの……だって私達兄妹だから……。でも、燐ちゃんがエッチしてるんだったらいいよね？　私と兄さんは血の繋がらない義理の兄妹。だったら、エッチしてもイイよね！）

女子は、動かす指を早め、零と燐の営みを食い入るように見る。

（もう、もう私も我慢できないよ！　兄さん♡　私をめちゃくちゃにして♡　グチャグチャに犯して♡　物のように乱暴に扱って♡　私を兄さんのストレスと性欲のはけ口にしてぇ♡　いっぱい虐めてぇ♡）

女子――桃は、零を秘かに想うド変態ドM女だった。

第9話　実姉からの、甘やかし搾精♡（前書き）

プロローグ

男なら、誰しもが一度は思った事があるんじゃないかな。

優しいお姉さんに、甘えながらメチャクチャに射精させられたいと。

手が汚れるのも厭わずに、射精中のチンコを愛情たっぷりに扱かれたいと。

俺は今、その夢が叶っている。

「零ちゃん♡　我慢なんてしないで、お姉ちゃんのおっぱいちゅ～ちゅ～しながら、いっぱいビュッビュッしちゃってね♡」

俺は今、実姉――華に自室のベッドの上で横たわり、おっぱいを赤ちゃんのように吸いながら、チンコを扱かれている。

「んふふ♡　零ちゃん、とぉ～～～～っても可愛い♡」

まさか姉ちゃんに、こんな事してもらえる日がくるなんて！

事の発端は、妹に嫉妬した姉ちゃんが暴走し始めた事だった……。

第9話　実姉からの、甘やかし搾精♡

体調不良で学校を休んだ翌日からは、なんの問題もなく過ごせるようになった。

学校に行くと、みんなからめっちゃ心配されて、瑠李（るい）に至っては泣きついてきた。

今日まではとりあえず経過観察中なので、誰もエッチに誘ってこないし、エッチな事をしてきたりもなかった。

うん。気持ちはありがたいんだけど、これまで散々シてきてるから、物足りなくなってくるんだよな……。

て言うか、すっごく溜まるんですよ！！

もう性欲がめちゃくちゃ溜まって溜まって……！

「はぁ……抜くか」

一人で部屋にいる俺。みんなはまだ起きてるだろうけど、勝手に部屋に入って来たりはしないから、抜く事は可能だ。

「よし。オカズは何にするか……」

俺は鍵付きキャビネットの鍵を開け、その中にあるＡＶコレクションの中から今日のオカズを模索し始めた。

俺はＡＶはＤＶＤ派ですが何か？

確かに、ネットで見る方が手軽だし、いつでも見れるし、家族に見つかるリスクもない。

だが、ＤＶＤにはＤＶＤでしか味わえない良さがある！

俺が好きなのはパッケージだ。スマホやパソコンでキーワードを検索してオカズを探すのもいいが、パッケージを見て、自分が興奮するオカズを探すのも、これまたいい！　パッケージには裏があり、そこには内容が少し映ってるから、自分が好きなシーンがあるかどうかも確認できる！

だから俺はＤＶＤを集めるのが大好きなのだ！

まぁ、それはさておき。
「これにしよう」
目が覚めた時、俺が一番に確認したのはこのＡＶコレクション。
何も変わっておらず安心した。
学校に通うようになってから茶髪女子に「ＡＶは女の癒し。男と男が交わる……♡」と言われ、気になって調べてみたら、そこには俺が知ってるＡＶはなかった。
ほとんど女が出てこない。出てきても男を犯す系のモノばっかり。それもいいんだけど……。
「やっぱり、男が女を犯さなきゃ」
俺はＡＶをブルーレイデッキに入れ、ヘッドフォンを装着。再生。オナニーを開始した。
なんか、久々に自分のチンコ触ったな……。
なんか、デカくなった？
と、俺がＡＶを見ながら夢中でチンコを扱いていると恐れていた事が起こった。
（そろそろ……）
イキそうだと思い、ティッシュを取ろうと左横を向いた時――、
「……」
「……っ！？」
俺は心臓が止まるかと思った。
だって、左横にはベッド下で俺のことをジーッと見つめる姉ちゃんがいたから。
い、いつから！？　って言うかオナニー見られた！？
俺は慌ててヘッドフォンを外した。
「ね、姉ちゃん！？　なんでここに！？」
「ちょっと聞きたい事があって～、ノックしたんだけど返事がなくて、でも電気は点いてるから起きてるかなぁって思ってお部屋入ったらその、零ちゃんが……」
「こ、これは違うんだ！　いや、なにも違わないんだけど！　その、

最近シてなかったからムラムラして！　って俺は何言ってんだ！？」
俺は慌てるあまり、変な事を口走ってしまった。
しまった！？　姉ちゃんは俺が学校で女子達とエッチしまくってるって知らないんだった！？
俺が一人で慌てふためいていると――、
「ふふ♪　そんな慌てなくても大丈夫よぉ？　そんな零ちゃんも可愛いんだけどねぇ♪　ごめんねぇ、お姉ちゃん、オナニーの邪魔しちゃって……」
ね、姉ちゃんの口からオナニーなんて言葉が出てくるなんて……！？
「お手々激しくなってたから、お精子出そうだったんだよねぇ……？　そんな時に邪魔しちゃって、ごめんなさい……邪魔しちゃった代わりに、お詫び、するね♪」
「お、お詫び……？」
「うん♪　私が、零ちゃんのイク寸前のおちんちんシコシコして、真っ白なお精子、たくさ～んピュッピュさせてあげる♪」
「え……え！？」
俺の耳がバグったか！？
なんか姉ちゃんの口から、卑猥な言葉ばっかり聞こえるんだけど！？　しかも、姉ちゃんが俺をイカせるだと！？
「ほ、本気……？」
「もちろん♪　こんな事、冗談で言ったりしないよぉ。ね？　いいでしょぉ？　お姉ちゃんにお詫び、させて？」
「で、でも……」
俺が渋っていると、姉ちゃんはいきなり――、
「まさか、燐ちゃんはいいのに、私は駄目って言わないよね？」
と、低く冷淡な声で言ってきた。その表情は笑っているが、目には感情が宿っていない。
こ、怖っ！？　ってか、俺と燐がエッチしてるってなんで知ってるんだ！？

「燐ちゃんの零ちゃんに対する態度がおかしかったから、問い詰め――ううん！　聞いたの。そしたら、零ちゃんとエッチしたって。お風呂で。生で。お尻にかけてもらったって」
い、今、問い詰めたって言いかけなかったか？　燐のヤツ、後で話聞いてやんないとな。
「確かに、燐とシました……すみません……」
「あ、待って！　謝る必要なんてないの！　エッチする事は全然問題ないの。ただ、抜け駆けはズルいって事。燐ちゃんがいいなら、私だって、零ちゃんとエッチしてもいいよね？」
「う、うん。もちろん」
「良かった～！　じゃあ、そこに横になって。お姉ちゃんが邪魔しちゃった責任を取って、沢山ピュッピュさせてあげるから。このＡＶは一回切るね？」
うわぁ！？　停止すんの忘れてたぁ！？　姉ちゃんがＡＶを停止させてんの、なんかいいな……。
「よいしょ。ここに頭乗せて？」
「あ、あぁ」
俺は姉ちゃんの膝の上に頭を乗せる。膝枕だ。
「んしょ……」
お、おぉ……！　姉ちゃんのおっぱい！！
釣鐘型のおっぱいで、巨乳……最高だ！！！
「ね、姉ちゃん？　なんで胸出してんの……？」
「ん～？　零ちゃんにおっぱいあげようと思って。零ちゃん、お姉ちゃんのおっぱいちゅ～ちゅ～吸いながら、沢山気持ち良くなって？」
「す、吸うって……吸っていいの？」
「うん！　まだ母乳は出ないけど、お姉ちゃんのおっぱい、乳首を好きなだけ、零ちゃんの好きなように吸って。舐めたり噛んだりしていいから」
「姉ちゃん……俺、もう……」

「我慢できないよね。おちんちん、さっきからずっとビクビクしてるもんね。いいよ。お姉ちゃんのおっぱい、舐めて♡　お姉ちゃんも零ちゃんのおちんちん、いっぱいシコシコするから♡」
「ね、姉ちゃん！　ぶちゅぅ！」
「んっ♡　んふふ♡　零ちゃん、赤ちゃんみたいで可愛い♡　おちんちん、シコシコするね？」
　くっ……！　姉ちゃんの扱き、めちゃくちゃ気持ちいい！！
「ふふ♡　零ちゃん、お顔がくしゃってなってるね♡　お姉ちゃんのシコシコ、気持ちいいんだね♡」
「ちゅ！　レロレロ！」
　俺は姉ちゃんの乳首を吸ったり舐めたりしながら、コクコクと頷く。
「んっ♡　んん♡　ふふ♡　良かった～♡　お姉ちゃん、おちんちんシコシコ慣れてないからちゃんと気持ち良くさせてあげられてるか、心配だったんだ。でも、零ちゃんが気持ちいいって言ってくれたから良かった♡　それに、おちんちんの先っぽから、零ちゃんが気持ち良くなってる証拠のエッチなお汁がいっぱい出てきるから、お姉ちゃん嬉しい♡」
　姉ちゃんは、溢れ出てくる我慢汁を亀頭やカリ首に塗りたくっていく。
　手が汚れるの気にならないのかな？
　クチュクチュ。クチャクチャ。
　姉ちゃんがチンコを扱く度、我慢汁が全体に広がってエロい音が鳴る。
「んっ♡　ふふ♡　零ちゃんのおちんちん、クチュクチュってエッチな音してるね♡　もっとエッチな音、聞かせて♡」
「うっ……！」
　姉ちゃんの扱く速度が速くなり、竿を握る強さが増した。
　さっきイク寸前だったし、ここ最近射精（だし）てなかったから、もうヤバい……！

「姉ちゃん、俺……！」
「出ちゃいそう？　いいよ、射精（だし）て♡　お姉ちゃんのお手々に零ちゃんの白くて濃いエッチなお精子、いっぱいピュッピュしてぇ♡」
「あぁあ！　出るっ！？」
ビュルッ！　ビュルルルルルルルル！！！
「キャッ♡　出たぁ♡　いっぱい出てるねぇ♡」
姉ちゃんは、手が汚れるにも関わらず、精液を一滴も残さず射精させようと手コキを続ける。
ピュッ！　ビュビュッ！！
「偉いねぇ、零ちゃん♡　ちゃ～んとお精子全部出せたねぇ♡　ほら見て♡　お姉ちゃんのお手々、零ちゃんのエッチなお精子でグチョグチョになっちゃった♡」
「ご、ごめん……」
姉ちゃんの手は、俺の精液まみれになっていた。
指と指の間にもべっとりと付着しており、俺は流石に申し訳無さを感じて謝ったんだが――、
「零ちゃんは謝らなくていいのよぉ♡　お姉ちゃん、とぉ～～っても嬉しいの♡　大好きな零ちゃんのお精子がお手々いっぱいになってるのが♡　ん～れろぉ♡」
姉ちゃんは、手に付着した精液を、嬉しそうに、美味しそうに舐め始めた。
しかも、隅々まで。少しも残さないと言わんばかりに。
「ちゅぱ♡　ん～～♡　零ちゃんのお精子、濃くて美味しい♡　毎日飲みたいくらい♡　ね、零ちゃん。毎日お精子、お姉ちゃんにちょうだい♡」
そんな可愛い目で見られたら――、
「う、うん……いいよ」
「やた♡」
断れるはずないよね。
「ねぇ零ちゃん」

「ん？」
「おちんちん、出したばっかりなのにまだ大きいね。もっともっと出したい？」
「いや、それは、その……」
「恥ずかしがらないで、我慢しないで、自分の気持ちに素直になって」
素直に、か……。
「うん。もっと出したい。姉ちゃんにいっぱいかけたい」
「ふふ♡　よく言えました♡　じゃあ、もっともっとおちんちんから、こぉ～いお精子、いっぱい出させてあげるね♡」
そう言って姉ちゃんは、俺のチンコを握り、再び扱き始めた。俺は姉ちゃんのおっぱいを吸うのを再開する。姉ちゃんのおっぱい、マジで最高過ぎる！！！

第9話　実姉からの、甘やかし搾精♡（後書き）

エピローグ
（また先越された……！！！）
零の部屋の中を覗く一人の少女。
（私だって、兄さんとエッチしたいのにぃ！！！）
義妹の桃だ。
（燐ちゃんに加えて、姉さんまで……油断してた……）
桃は、悔しそうな顔を浮かべている。だが、その顔は紅潮している。
（んっ……♡　あぁ……♡　兄さんのオチンポ見ながら、ローターでオナニーなんて……♡　バレたらどうなっちゃうんだろう……♡
兄さんにお仕置きされたい♡　罵られながらオマンコ激しく弄られて、イッてもイッても許してくれない無限イキさせられたいぃ♡）
桃はクリトリスに、ローターを付けていた。
（待ってて……待っててね、兄さん♡　その時が来たらいっぱいエッチしよう♡　私をいっぱい犯してね♡）
桃は、二人の営みを見ながらイキまくるのだった。

第１０話　実姉からの、甘々？な逆レイプ♡（前書き）

プロローグ

この頃俺は毎日考えている。

瑠李（るい）や金髪女子、茶髪女子に眼鏡女子。さらには後輩の爆乳ショートちゃんまでもが俺を求めてくる。

俺は、本能のままに行動してしまってもいいのだろうか……？

正直、理性を保ってるのが最近は馬鹿らしく思えてきている。

俺をあんなに沢山の女子達が求めてきてくれてるのに、世間体やら常識やらを考えて、素直に応えてあげられないのがマジで嫌になってきた。

「もういっその事、何も考えずに一回女子の事犯してみようかな……」

それで抵抗も何もされずに、受け入れてくれたらもう本能のままに生きよう。抵抗されたら理性を働かせればいいんだ。

「うん……」

俺は考えをまとめ、明日の燐とのデートに遅れない為に、早めに眠りに就いた。

第１０話　実姉からの、甘々？な逆レイプ♡

姉ちゃんのおっぱいを吸いながら、扱かれ始めて俺はすでに三回イッていた。

その度に姉ちゃんは、全部出し切るまで扱いてくれる。姉ちゃんの手は毎回俺の精液でベチョベチョになっている。

それを姉ちゃんは、嬉しそうに見つめ、美味しそうに舐め取る。それがエロくてまた勃起。それを見た姉ちゃんがまた扱いてくれる。その繰り返し。

でも、姉ちゃんのおっぱいはずっと吸っててもぜんぜん飽きない！と言うかもっと吸ってたい！

「ふふ♡　零ちゃん、もう四回も出してるのにおちんちん、まだ大きいね♡　お姉ちゃんのおっぱい、そんなに気に入ってくれたの？」

「ちゅ！　ちゅ～！」

俺は、乳首を吸いながらコクコクと頷き返事を返す。

「んふふ♡　お姉ちゃん嬉しい♡　大好きな零ちゃんが、お姉ちゃんのおっぱい気に入ってくれて、おちんちん大きくしてくれるの♡」

姉ちゃんは、そこで一旦言葉を途切れさせる。

不思議に思った俺は、乳首を甘噛みした状態で姉ちゃんの顔を見上げる。

「ごめんね、零ちゃん」

な、なんだ……？　なんで急に謝るんだ……？

「お姉ちゃん、我慢しようと思ってたんだけど、やっぱり無理みたい……」

な、何を言ってるんだ……？

「零ちゃんのおちんちん、お姉ちゃんの変態オマンコの中に挿れて

ぇ♡」
「んっ！？」
俺は姉ちゃんの膝の上から落とされた。幸いフカフカの枕の上に落とされたので痛みはなかった。
ってか姉ちゃん！？　急に全裸になって俺の上に跨り始めた！？
姉ちゃんの全裸、エロいな……。
じゃなくて！
「ね、姉ちゃん！？」
「ごめんね、零ちゃん♡　お姉ちゃんもう我慢できないみたい♡
零ちゃんのおちんちん、オマンコに挿れちゃうね♡　んっ……♡」
亀頭が姉ちゃんのマンスジに擦られて、めちゃくちゃ気持ちいい……！　しかも姉ちゃん、めっちゃ濡れてる……！
おっぱい吸われて感じでくれてたのかな？
「セックス♡　セックス♡　大事で大好きな弟と生セックスぅ♡
もう、もう我慢できない！　零ちゃんをレイプぅ♡　犯しちゃうぅ♡　んあぁぁぁ♡」
「ぅお……！」
姉ちゃんが一気に腰を下ろしてきた。それにより俺のチンコは姉ちゃんのマンコの中に姿を消した。
「んぅぅぅ♡♡　零ちゃんのおちんちん、太くて硬くてしゅごいのぉぉ♡♡　オマンコ、気持ちいいって震えてるぅ♡　ディルドよりいいのぉ♡♡」
でぃ、ディルド！？　姉ちゃんの口からそんな言葉が出てくるなんて！
「ごめんね、零ちゃん♡　本当は零ちゃんに処女あげたかったんだけど、零ちゃんとセックスする妄想しながらディルドでオナニーしてたら、処女膜破っちゃったの……♡　でも、あれは零ちゃんのおちんちんだと思ってシてたから、お姉ちゃんの処女は、零ちゃんに捧げたんだよぉ♡」
ディルドで処女膜を破るって……どんだけ激しくオナニーしてた

んだよ……！
まぁでも、そのオナニーのオカズが俺ってのがすごく嬉しいな。
瑠李も俺の事を考えながらオナニーしてくれてたみたいだし。
「あ～！　零ちゃん今、他の女の子の事考えてるでしょ！」
「っえ！？　な、なんで！？」
「女の子はそう言う事、分かるんだからね～♡　特に大好きな人が相手だと♡　でもいいの♡　零ちゃんはみんなを愛してあげるべきだから。でもね。今だけはお姉ちゃんの事だけ考えてて？」
「姉ちゃん……くぅお！？」
若干しおらしくなった姉ちゃんを見て、心にグッと来ていた俺は、姉ちゃんに謝ろうとした。だが、次の瞬間、姉ちゃんが腰を回転させ中をこねくり回してきた。
「んふふ♡　お姉ちゃんの事しか考えられなくなるくらい、いっっっぱい！　犯してあげる♡♡　零ちゃんのおちんちんはぁ……お姉ちゃんのモノだからぁ♡♡」
ヤバい……姉ちゃんの目がイッてる……！？
「それじゃあ……イッくよぉぉぉ！！！」
「ぐぉ……！？」
姉ちゃんが腰を上下に激しく動かし始める。パンパンと言う音が部屋中に響き渡る。
よく、ＡＶとかで激ピスとか言うのがあるが、今されてるのがまさにそれだ。
相手の事などお構いなしの、犯す行為。
姉ちゃんが一心不乱に腰を動かす姿は、エロくて、妖艶で、可愛くて、俺は興奮しすぎてすぐに限界を迎えてしまった。
ビュルルルルル！！
「んあっ♡　零ちゃんのお精子が中でドピュドピュって出てるぅ～♡　イッちゃったの？　イッちゃったの♡　んふふ～♡　零ちゃん可愛い～♡♡　もっと！　もっとお姉ちゃんの中でお精子出して～♡　お姉ちゃんを孕ませてぇぇぇ♡♡♡」

姉ちゃんは、暴発や許可のない中出しを怒るどころか、嬉しそうにもっと出してとせがんで来た。
射精したばかりのチンコは敏感になっており、そんな敏感チンコを姉ちゃんのキツキツなマンコに締め付けられ、亀頭を子宮口で刺激されると、気持ち良すぎてすぐに次の射精の波が来てしまう。
「ね、姉ちゃん……！」
「んっ♡　んっ♡　んっ♡　零ちゃん、我慢は駄目だよぉ♡　イキそうになったら遠慮なく、お姉ちゃんのオマンコの中に、いっっっっぱい、お精子出して♡　一滴も残さず、お姉ちゃんが子宮でごっくんしてあげるからぁ♡」
「ぐっ……また、出るっ！！」
ドビュルッ！　ビュル！　ビュルルルルル！！！
「んあああああああ♡♡♡　また来たぁ！　零ちゃんのプリプリお精子、中に来たぁ♡♡　子宮が悦んでるぅ♡♡　お姉ちゃん、零ちゃんに中出しされて、子宮悦んじゃって、イキュゥゥゥゥ！！！！」
ぷしゃぁぁぁぁ！
「んっ……！」
「ごめんねぇ♡　お姉ちゃん、イキ過ぎてお潮出ちゃったぁぁ♡♡　零ちゃんにお潮ぶっかけて、マーキングしちゃったぁ♡」
姉ちゃん、エロ過ぎるだろ……！
「はぁはぁ……♡」
姉ちゃんは、派手にイッたから疲れたのか、腰の動きを止め、息を切らしている。
「ご、ごめんね……すぐに動くから……」
「大丈夫だよ。俺もやっと射精が落ち着いてきたから」
射精中に動かれていた為、射精が止まる事がなかった。が、姉ちゃんが動きを止めてくれたおかげで、やっと射精を終える事ができた。
「でも……お姉ちゃん、零ちゃんともっともっとエッチしたい……」

「俺だって同じ気持ちだよ。姉ちゃんともっともっとセックスしたい。でも、無理は禁物だ。休み休みしよう？　夜は長いんだし」
「零ちゃん……♡　うん♪　零ちゃんがそう言うならそうする♡　じゃあ、ちょっと休憩したら、また零ちゃんの事犯しちゃうね♡」
「うん」
結論から言うと、姉ちゃんの休憩はあってないようなものだった。
三十秒くらい腰を止め、息を整えた後、すぐに腰を動かし始める。その繰り返し。その為、俺はイキそうになるが中々イケないと言う、姉ちゃんの無意識の寸止めにあっていた。
いや、寸止めではないかもしれない。寸止めは本当にイク直前で止める事を言う。が、この場合は、イキそうかも……みたいな所で止まるので、本当に苦しいわけではない。
そんなのが続いた、何十回目か。
「ね、姉ちゃん！」
「イこ？　一緒にイこう！　お姉ちゃんとい一緒にイキまくろう♡♡　零ちゃんのお精子、沢山中に出してぇぇぇぇぇぇ！！！」
「ぐっ……出る！」
ドビュゥ！！　ドビュウウウウウウウウウ！！
「んっあ♡　中に出されてイッグゥゥゥゥゥゥゥ！！！！　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
俺は、七回目の射精にも関わらず、これまでの射精の中で一番濃い精液を射精した。
おそらく、液体ではなく、ゼリー状だと思う。
尿道から出た感じがそんな感じだった。男子諸君は分かってくれると思うが、ゼリー状の射精って結構、痛い、とまではいかなくても、中々の衝撃みたいのが尿道に走る。その為、自分でどんな射精をしたのかがなんとなく分かる。
「んんっ♡　あぁ……♡」
姉ちゃんは、腰を持ち上げ膣（なか）から俺のチンコを引き抜いた。
すると、中に出した三発分の精液がドロォっと逆流してくる。

その光景がめちゃくちゃエロい！！
まるで――、
「んふふ♡　なんか、お姉ちゃんが射精したみたいだねぇ～♡」
俺が言おうと思っていた事を先に言われてしまった。
パチュ♡　コポォ♡
「あぁん♡　オマンコからエッチな音が鳴っちゃってるぅ♡　ごめんね、エッチなお姉ちゃんで……♡」
姉ちゃんのマンコからは、卑猥な水音が鳴っている。いっけん、おならっぽく聞こえるが、それはマンコから鳴っているもので、おそらく中から溢れ出ている精液が、お腹に力を入れた途端にさらに溢れ出て、空気に触れた事で音が鳴っているのだろう。
ＡＶとかでよく聴くけど、実際目の前で聴くと、興奮度が半端じゃない。
「エッチな姉ちゃんでよかったよ」
「んふふ♡　嬉しい♡」
俺と姉ちゃんは、ベッドの上で並んで横になった。

♡　♡　♡

「ねぇ、零ちゃん」
「ん？」
姉ちゃんがいきなりベッドの上で正座をして俺の方を見てくるので、俺も慌てて座り、姉ちゃんと向き合う。
「私、零ちゃんが好きです。私と付き合ってください」
「え……？」
俺は理解が追いつかなかった。今、告白された？
「お姉ちゃんとしてじゃなく、彼女として、零ちゃんの隣にいたい」
「え、えっと……」
「ごめんね。急にこんな事言われても困っちゃうよね。でも、これは嘘偽りのない私の気持ち。零ちゃんは血の繋がった弟だけど、一

人の異性として、性の対象として、好きです」
姉ちゃんは、俺の手を取って優しく握ってくる。そして、そのまま話を続けた。
「でもね、私は零ちゃんを独り占めするつもりはないの」
「え……？」
「零ちゃんは、燐ちゃんやる～ちゃん。それに、学校の女の子達とも沢山エッチして、幸せにならなきゃいけない。でもね、その中の少しでいいの。その中に私も入れてほしいんだ」
幸せにならなきゃいけないってのがちょっと気になるけど、それより。
「俺も、姉ちゃんの事好きだよ。姉としてもそうだけど、一人の異性として、性の対象として好き。姉ちゃんと毎日でもセックスがしたい」
こんなにハッキリと自分の気持ちを言ったのは、初めてかもしれないな。
「っ～～～～♡　嬉しい♡　じゃあ私の事、彼女にしれくれる？」
「もちろん」
「やった～！」
まるで子供のように喜ぶ姉ちゃん。
「じゃあさ、一つお願いしてもいいかな？」
「何？」
「二人っきりの時だけでいいから、名前で呼んでほしいな。呼び捨てで」
「もちろん。……華」
「っ～～～～

俺が名前を呼ぶと、姉ちゃん……じゃなかった。華は腰をくねらせ、一人妄想の世界に入って行ってしまった。その様子がエロいので、俺は黙って見ている事にした。

第１０話　実姉からの、甘々？な逆レイプ♡（後書き）

エピローグ

（はぁはぁ……♡）

零の部屋の前では、桃が壁に寄りかかりながらへたり込み、息を静かに切らしていた。

（ね、姉さん、絶倫すぎ……私、十回以上もイッちゃった……兄さんのイキ顔、可愛かった……♡　近くで見たいなぁ……）

桃の太ももの間には、ローターが落ちている。そのローターは、グチョグチョに濡れていた。

（燐ちゃんに、姉さん……それに、瑠李さんも兄さんとエッチしてるっぽい……学校の女子達だってしれっと兄さんと……！）

桃は、ローターを手に持ち――、

（私だって、兄さんとエッチしたいんだから！！）

自室へと戻って行く桃。桃が座っていた場所はぐっしょりと濡れており、水色の可愛いパンツが落ちていた。

第１１話　実妹との、エッチな初デート♡（前書き）

プロローグ
（よし）
今日はお兄ちゃんとの、初デートだ。
今日の事で頭がいっぱいでこの一週間は何も考えられなかった。
ううん。それは嘘だ。
（お兄ちゃんがどんなパンツが好きかとか、どんなプレイをしたいのかとか、どんな体位が好きかとか考えてた）
まぁ、授業中もそんな事考えてたから、オマンコがすぐに濡れちゃって、パンツが大変な事になったんだけど……。
（似合ってる……かな？）
お化粧は男子がするもの。オシャレだって男子がするもので、女子は全然しない。そもそも服の数が男子と女子で全然違うから。
でも、今日ばかりは私もオシャレをしたい。
大好きなお兄ちゃんと、初めてのデートだから。
（スカートは超ミニ丈。肩出しで谷間は深め。白服で乳首透けオッケー）
お兄ちゃんは、普通の男子と違う。エッチな格好をする女子が大好きらしい。
それは私にとっては幸運でしかなかった。
私が持ってる服は基本的にエッチなヤツしかない。
パンツが見えるスカートに、乳首が普通に透けるトップス。そんな服しか持っていない。
だから、お兄ちゃんがエッチな格好が好きと言ってくれて、本当に嬉しかった。
（お化粧は……控えめかな。私自身、化粧品の匂いとかが得意じゃないから）

男子の普通の常識と、お兄ちゃんの常識が何もかも違うのであれば、お化粧に対する常識も、一般男子と違うと願いたい。
（これで、化粧をしない女は嫌いって言われたらどうしよう……）
少し怖いけど、もう行くしかない。
昨日、お姉ちゃんがお兄ちゃんを襲った。お兄ちゃんの部屋は隣だから、声ですぐに分かった。
お姉ちゃんの喘ぎ声が聞こえてきて、ビックリしたけど、予想はしていた。お姉ちゃんにお兄ちゃんとの関係を問いただされた時から、これはレイプするなと、分かっていた。
それに対して文句を言うつもりはない。だって、私が先に抜け駆けしたんだから。
でも、お姉ちゃんはしれっと、お兄ちゃんに告白をしていた（壁にコップを当てて中の会話を盗み聞いた）。
そして、その告白をお兄ちゃんは受け入れ、二人は付き合う事になった。
それは許せない……！　私だってまだ告白まではしていないのに、先に告って付き合うだなんて……！
そんなの絶対に許せない……！
だから私は、今日のデートでお兄ちゃんに告白をする。付き合ってくださいと。
お兄ちゃんは沢山の女子と付き合うべき。でも、その中に私も入れてほしい。
私を、お兄ちゃんが愛する女の一人にしてほしい。
その為には、告白。でもその前に――、
（エッチな事でお兄ちゃんを、メロメロにする！）
その為の〝モノ〟も用意した。パンツだって最上級にエロいやつだ（オマンコの部分に穴が開いており、いつでも挿入できるようになっている。アナルも丸見え）。
お兄ちゃんを絶対に、落としてみせる！！
「あ、もうこんな時間！　デートの待ち合わせで男子を持たせるの

は絶対にしちゃいけない事だから、早く行かなきゃ！」
私は、約束の待ち合わせ時間より一時間早く、待ち合わせ場所に向かった。一時間前に到着したのに、そこには――――。

第11話　実妹との、エッチな初デート♡

「お兄ちゃん……？」
待ち合わせ場所にはなんと、お兄ちゃんがいた。
「ん？　おう、燐。おはよう。早いな。まだ約束の一時間も前だぞ？」
それは私のセリフですよ。
「お、お兄ちゃんこそ早くないですか？　デートで男子を持たせるのはタブーなので、私は早く来たんですけど……」
「そっか……それがここの常識なのか……」
「お兄ちゃん……？」
お兄ちゃんは私の言葉を聞くと、何やら神妙な顔でブツブツとつぶやき始める。どうしたんだろう？　私が聞くとお兄ちゃんは慌てて――、
「あ～いや、なんでもない。燐がそう思ってるだろうなと、思って先手を打ったんだ」
と、答えた。え……お兄ちゃんっていつからここにいたの……？
「ち、ちなみに……お兄ちゃんはどのぐらい前からここに……？」
「そんなに早くないぞ？　ざっと三時間前だ」
「さ、三時間！？」
嘘でしょ！？　三時間前って、今が午前十時だから朝七時からここにいるって事！？
いくらなんでも早すぎますよ……。
「長い時間、待たせてしまってごめんなさい！」
私は謝罪した。大好きなお兄ちゃんを持たせるなんてしちゃいけない事なのに……！
「いやいや、謝らなくていいって！　俺が勝手に早く来て、待ってただけなんだから！　そもそも早く来すぎた俺が悪いんだから」

お兄ちゃんはそう言って、私の肩を掴み、優しく上体を起こしてくれる。
あぁ……優しいな……。大好きだなぁ……。
あ、今チラッと谷間見た。そんなチラッとじゃなくてガン見していいんですよ？
私の身体は、お兄ちゃんのモノなんですから。
「ありがとうございます。でも、お兄ちゃんが悪いなんて事は、絶対にないですから、そこだけは訂正させてください！」
「お、おう……分かった」
それだけは言っておかないとね。
それにしてもお兄ちゃんの格好……カッコよすぎる！
暑くなってきたから半袖半ズボンで、上は白のシンプルなTシャツで、下は黒の半ズボン。
肩掛けのショルダーバッグで、眼鏡を掛けて……って眼鏡！？
「お、お兄ちゃん……？　その眼鏡は……？」
「あ～これか？　実は俺伊達眼鏡とか大好きでさ、めちゃくちゃ集めてるんだよね」
「そ、そうだったんですね」
知らなかった～……眼鏡姿のお兄ちゃん……破壊力がヤバ過ぎる……！
心臓がさっきからバクバク激しく鳴ってて、今にも口から飛び出してしまいそう。
あ、乳首が透けてる……。ん？
「お、お兄ちゃん……？　サラシは？」
「ん？　俺そんなの持ってないぞ？」
な、な、なんですってぇぇぇぇ！？
お兄ちゃんが、サラシを持っていない！？　そんないい事――うう！　そんな駄目な事あるんですか！？
まだるいるいや、学校の女子達にお兄ちゃんの乳首を見られるのはいいけど、外にいるケダモノ達にお兄ちゃんの乳首を見られるの

はイヤですね！！
「お兄ちゃん、まずはサラシを買いに行きましょう」
「え……？」
ごめんなさいお兄ちゃん。お兄ちゃんの常識ではサラシは必要ないのもしれませんが、お兄ちゃんの事を守る為です。少しだけ我慢して下さい。
そうして私達はデートの最初に、お兄ちゃんのサラシを買う為、デパートへと向かった。
戸惑ってるお兄ちゃんの顔は、最高に可愛かった！

♡　♡　♡

デパートへとやって来た私とお兄ちゃん。
今、サラシ売り場の前にいるんだけど、やっぱり女がここに入るのはハードルが高いよ……！？
店内は当然男性ばっかだし、店員さんも男性。べつに女が絶対に入っちゃいけないって訳じゃないけど、それでも入りにくい……でも、お兄ちゃんはサラシの選び方なんて分かんないだろうし……う～ん……。
と、私が一人で考えていると――、
「燐？　どうしたんだ？　中、入らないのか？」
と言って、私の手を引いて店内に入って行く。
お兄ちゃんと手繋いじゃった♡　ってそうじゃない！　店内に入っちゃったよ！？
ほらぁ……男性客の人達私を訝しんでるよ……。
「いらっしゃいませ～……」
ほらぁ……店員さんも「なんだお前。女が来る所じゃねぇぞ」って顔でこっち見てるよぉ……。
「燐、あと頼んだ」
「へっ！？」

「俺、よく分かんねぇからさ、燐が選んでくれ」
そ、そんな大役を任せてくれるんですか！？　これは私好みのエッチぃサラシを巻かせるチャ～ンス！　ってだからそうじゃな～い！！
「え、えっと……ね？　ここに女がいちゃいけないって言うか、居心地が悪いって言うか……その……」
「いちゃ駄目？　なんで」
「いや、だって、ここって男性専用下着売り場だから……」
「でもさ、えっとこの世界だと……女子の下着売り場には男は普通に来るんだよな？」
「う、うん。奥さんのとか、彼女さんのとか、娘さんのとか、普通に来ますね」
「買っても別に紙袋に入れてもらえたりとかも？」
「ないですね。たまにちょっと恥ずかしい時もあるんですけど」
「だとしたらおかしいでしょ」
「え……？」
お兄ちゃんの言葉に、私だけじゃなく、店員さんやお客さん達までもが耳を傾けている。
「だって、男は普通に女性下着売り場に来るのに、女性が男の下着売り場に来ちゃいけないって、おかしいだろ。男の下着売り場に女性が来て嫌な気持ちになったり、恥ずかしい思いをしたりしてるんだったら、すくなからず、女性も同じ思いを抱いてるはずだ。男が下着売り場に来ることに抵抗感がある人だって０じゃない」
お兄ちゃんが言う事に、周りの人達は確かにと、新発見でもしたかのように興味深そうに頷いている。
「だとしたら、男は下着売り場に女性に来てほしくないんだったら、自分達も女性下着売り場には行っちゃ駄目だ。それをせず、自分達だけが嫌な顔をするのは違うと、俺は思うぞ」
と、お兄ちゃんが話し終えると――、
パチパチパチパチパチ！

「な、なんだ！？」
店中に拍手が巻き起こった。
「みんな、お兄ちゃんの言ったことに納得がいったみたいです。確かにその通りだなって」
「そ、そうなのか……？」
あ、戸惑ってるお兄ちゃん、超可愛い♡
と、店員さんが私達に近づいてきて――、
「お兄さんの言うとおりですね。僕達が間違ってました。お姉さん、さっきはすみません。変な目で見てしまって……！」
「あ、い、いえ！　そんな気にしないでください……！」
「変な目でって、燐をいやらしい目で見るな！　兄として、許しませんよ！」
と、お兄ちゃんが勘違いで店員さんに怒る。
ふふ。お兄ちゃん、可愛いなぁ。
「お兄ちゃん、変な目って、そう言う意味じゃないですよ」
「え……？　違うの……？」
「はい。ふふ♪」
この後私は、お兄ちゃんのサラシを十本選び購入した。お代は、お詫びとして無料になった。ラッキー♪
「どうですか？　付け心地は？」
「う～ん……なんかムズムズすると言うか、違和感がすごいと言うか……」
お兄ちゃんが乳首の辺りを擦る。ハッ♡　その仕草エッチ過ぎる……♡
「そのうち慣れますよ。ま、私達の前や、学校ではつけなくても大丈夫なので、そんなに気にしないでください♪」
「あぁ……」
「それじゃお兄ちゃん、デート、行きましょう♪」
「そうだな」
そうして私とお兄ちゃんは、電車に乗り込み本来の目的地である

遊園地へと向かった。

♡　♡　♡

電車は思ったより空いていたが、座れるほどではなかった為、私もお兄ちゃんは立っている事に。

ぐぬぬ……周りの女達の視線がお兄ちゃんに……！！

まぁ、そうなるのも無理はない。大体の男性は男性専用車両に乗るからね。私だって、男性がこっちの車両に乗ってきたら、見ちゃうもん。

でも、お兄ちゃんは渡さない。お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだから！

……。でも、ちょっとだけサービスしちゃおうかな。

むにゅん♡

「っ！？　り、燐！？」

「シー。静かにしててください♪」

私はお兄ちゃんのお尻を後ろから揉み始める。お兄ちゃんのお尻、柔らかいのにその中に張りがあって、最高♡　ずっと揉んでたい……♡

「お兄ちゃん、声出しちゃ駄目ですよ？」

「ちょっ！？」

お兄ちゃんが慌てるのも無理はない。だって私は、お兄ちゃんのおちんちんをズボンの上から触っているから。

すでに勃起し始めているおちんちんは、ズボンに形が浮き出てしまっている。

そんなお兄ちゃんの勃起ちんちんを、周りの女達は食い入るように見ている。

ふふ。ほらどうだ痴女共。これが見たかったんだろ？　これが大好きなんだろ？

「ちょ、ちょっと燐……いくらなんでもここでは……」

焦って困ってる様子のお兄ちゃんもいい！　はぁはぁ……♡　興奮する……♡　今日のパンツ穴が開いてるから愛液、垂れてきちゃうんだよな……♡

「ごめんなさい……でも、私、我慢できなくなって来ちゃって……お兄ちゃん。お兄ちゃんのおちんちん、舐めてもいいですか？」

「こ、ここでか！？　周りに人がいるんだぞ！？」

「はい……でももう我慢できないんです……♡　周りの人達なら通報したりとか絶対にしないんで、安心してください」

「そ、それは別の意味で安心なんだけど……はぁ。分かった。いいよ。舐めて」

「っ♡　本当ですか？」

「あぁ」

「っ～～～～！　ありがとうございます！　では、早速――」

お兄ちゃんからありがた～い許可をもらえたので、私はお兄ちゃんの前で跪き、ズボンとパンツを脱がす。そして、勃起したおちんちんを一気にお口に含んだ。

「んっ♡」

「くっぅお！？」

ん～～～～～～♡♡♡　お兄ちゃんのおちんちん、最高すぎる～～♡♡♡　やっぱりこの味大好きだなぁ♡　我慢汁、最高過ぎる♡　この少ししょっぱい我慢汁が大好きで、いつも舐めたいと思うくらい。

「ジュポッ♡　ジュポッ♡　ジュルル♡　ジュロロロロロロ♡」

私はフェラをどんどん激しくしていく。その度に我慢汁が溢れ出てくる。これが、堪らない！！♡♡

「ぐっ……うぉ……！　り、燐……！」

お兄ちゃんが私の頭を押さえつけながら、感じてくれてる。こんな幸せな事ってない。

自分の大好きな人が、自分のフェラでこんなにも感じてくれるなんて、嬉しすぎる！

「ジュボォ♡　ジュロォォォ♡　ジュロロロロロ！！！」
「くっ……！　り、燐！　俺、もう！」
いいよ、出して♡　お兄ちゃんが早漏なのは知ってるから、激しく責めちゃった♡　私のお口に、お兄ちゃん専用の口マンコにいっぱい特濃ザーメン出してぇ♡
「ジュロロロロロ♡♡♡」
「くあ……！　出るっ！」
ビュル！　ビュルルルルル！！！
「んぶっ♡　んん……♡　ん……♡」
お兄ちゃんのザーメン来たぁ♡　はぁ～～♡　美味しい♡　もう、この味この濃さ、最高過ぎる♡　癖になっちゃいそうだよぉ♡
「はぁはぁ……」
「んくんく……♡　ぷはぁ♡　お兄ちゃん、精液ごちそうさまでした♡　こんな所なのに出してくれて、ありがとうございます！」
「あ、あぁ……」
「今、キレイにしますね♡　んちゅ♡」
「うっ……！」
私今、お兄ちゃんにお掃除フェラしてるんだぁ……♡
ずっとしたかった夢が叶うって、ヤバ過ぎる♡
『次は――♪　――♪』
電車内で次の停車駅のアナウンスが流れる。
「ぷはぁ♡　お兄ちゃん、次だね？」
「あ、あぁ。次で降りるぞ」
「うん♪　游ぶ前に疲れさせちゃってごめんなさい……でも、遊園地でも、いっぱい楽しもうね♪」
「あぁ」
こうして私達は、遊園地で夜まで目一杯、楽しんだのでした♪

第11話　実妹との、エッチな初デート♡（後書き）

エピローグ
今日は燐ちゃんが、兄さんとデートに行っている。
「はぁ……ズルい……私だって兄さんと……」
私が自室のベッドの上で、うつ伏せになり顔を枕に埋めていると――、
コンコン。「桃ちゃん？」
と、ノックの音と、姉さんの声が聞こえてきた。
「は～い」
と、私が返事すると、姉さんが中に入ってきた。
とうしたんだろう？　姉さんが私の部屋に来ることなんて滅多にないのに。
「急にごめんねぇ。桃ちゃんに言っておかなきゃいけないことがあって」
「な、なに……？」
「お姉ちゃんね……零ちゃんと付き合う事になったの」
「……」
「も、桃ちゃん……？」
はっ！？　今トリップしてた……。
「急に言われても驚くよね。でもね、これは燐ちゃんと桃ちゃんにちゃんと伝えておかなきゃいけない事だから」
「な、なんで私に……？　燐ちゃんは分かるけど……」
声が震えないように、なんとか絞り出す。震えてないよね……？
「だって、桃ちゃんも、零ちゃんの事好きだよね？」
「なっ……！？」
なんでバレて……！？　じゃなくて！
「そ、そんな訳――！？」

「隠さないで。もう正直になろう？」
「うっ……」
「桃ちゃんも零ちゃんの事、好きなんだよね？」
「……べ、別に、私は……」
「あっそ。桃ちゃんがそうやって燻ってる間に、私と燐ちゃんは零ちゃんとどんどん関係を深めていくから。桃ちゃんが入る余地なんてないくらいに」
そう言って姉さんは、部屋を出て行く、前に――、
「正直にならない女の子は、嫌われるよ」
と言い残して、部屋を出て行った。
「ぐっ……！」
私は枕を叩きつけた。
分かってるよ！！　分かってるんだよ！！
私だって兄さんの事が好きで、大好きで！　デートだってしたいし、エッチだってしたい！！
でも！
「いざ目の前にすると、素直になれないんだよぉ……」
私は、どうすればいいんだろう……。
兄さん……教えて……。

第１２話　実妹からの嫉妬、媚薬セックス♡（前書き）

プロローグ

ドビュルルルルルルルル！！！

「んふ♡　んくんく……♡　ぶはぁ♡　ふふ♡　お兄ちゃん、十回目の射精なのにすごい量ですね♡　それにまだこんなに硬い♡　もっともっと出してください♡　お兄ちゃん専用の性処理女に、たっくさんザーメン出してください♡♡」

俺は今、ラブホで実妹の燐とエッチをしている。

燐も言っていたが、俺は今のフェライキで十回目の射精となる。

だが、どう考えてもおかしい！

もう十回も出してるのに、量は減らないし、萎えるどころか出した瞬間から性欲が高まって勃起する。

精液の量と濃さは出す度に濃く、そして多くなっている気がする……。

これは、あれだ……。燐に飲まされたあれが原因だ。そうとしか考えられん……。

話は、一時間程前に遡る。

第１２話　実妹からの嫉妬、媚薬セックス♡

俺と燐は、遊園地でめちゃくちゃ楽しんだ。
ジェットコースターに乗ったり、お化け屋敷、メリーゴーランド、コーヒーカップ、観覧車など、遊園地の乗り物をほとんど乗ったんじゃないかってくらい乗りまくった。
そして、時間は夜の六時。そろそろ帰ろうかと俺が言うと――、
「お兄ちゃん、今日はお家には帰りません」
と、燐が言い出した。
え？　帰らないってどう言う……？
「今日はラブホテルで、朝までエッチをします」
「お、おう！？」
驚きすぎて変な声出ちゃったよ。つかこいつ、公衆の面前でなんつう事言ってんだ。
「それじゃあお兄ちゃん、行きましょう♪」
とまぁ、こうやって燐にラブホまで連れてこられたのはいいんだが……。
「お兄ちゃん、これどうぞ♪」
「ん？　これは？」
「栄養ドリンクです！　私が部活をやる前に必ず飲んでる物なんですよ♪　運動する前に飲むと結構いいんです！」
「まぁ、エッチも運動の一種か」
これだ。これがイケなかったんだと思う。
「ふふ♡」
不敵な笑みを浮かべてる燐を俺は、見逃してしまっていた。
「それじゃあお兄ちゃん、早速エッチしましょう♡」
「あ、あぁ……」
なんかめっちゃムラムラしてきた……。勃起も痛いくらいにして

る……。なんだこれ……？
「わぁ♡　お兄ちゃん、もうギンギンですね♡」
「いや、なんか勝手にこうなって……」
「私、嬉しいです♡　じゃあ、全裸になってください♡」
「あぁ」
俺は服を全部脱ぐ。燐も服を脱ぎ下着姿になる（ブラは無いのでパンツだけ）。
「ふふ♡　お兄ちゃんのおちんちん、我慢できないって先っぽからエッチなお汁が出てきちゃってますね♡」
「くっ……」
燐は、ギンギンに勃起したチンコを優しく、それでいてしっかりと握ってきた。そして、先走り汁を亀頭全体に塗り広げながら扱いていく。
「どうですか？　お兄ちゃん。気持ちいいですか？」
「あ、あぁ……めっちゃ気持ちいい……！」
「良かったです♡　シコシコする度に先っぽからお汁が溢れ出て、クチュクチュってエッチな音が鳴ってますよぉ♡」
クチュクチュ♡　クチュクチュ♡
「くっ……亀頭ばっかり……！」
燐は、カリ首や亀頭を中心的に責めてくる。仮性包茎で亀頭への刺激が弱い上、早漏な俺は、その激しすぎる刺激に耐えられる訳がなく――、
「り、燐！　俺――！」
「キャッ！？」
ビュルルルルルルルルルル！！
イクと言う前に、射精してしまった。いわゆる暴発と言うやつだ。
「んふふ♡　お兄ちゃん、沢山出てますねぇ♡」
暴発し、手や顔を精液で汚してしまったにも関わらず、燐は手コキを止めず全部出そうと扱いてくる。さらには嬉しそうに射精中のチンコに頬ずりしてくる。

「いっぱい出ましたねぇ♡　で～も、まだ大きく硬いままですね♡」
「燐、俺まだ……」
「もちろん♡　一回じゃ終わらないですよ♡　次は私のオマンコの中にた～～～～っくさん、出してくださいね♡」
そう言って燐は、俺の腰の上に跨いで――って！
「り、燐！？　なんだその下着は！？」
燐のパンティーはマンコとアナルが丸見えの超エロエロなパンティーだった！（パンティー呼びが実は好き）。
「んふふ♡　お兄ちゃんに喜んでもらおうと思って、穿いてきたんですよ♡」
「ま、まさか今日一日、その下着で……！？」
「はい♡　買い物の時も遊園地の時もこのパンツでしたよ♡　メリーゴーランドの時は取っ手の部分でちょっとだけオナっちゃいました♡」
「っ……！」
「あ♡　お兄ちゃんのおちんちん今、ビクッてしましまね♡　私のオナニー姿想像しちゃいました？　見たいならいつでも見せてあげますから、いつでも言ってくださいね♡」
「あ、あぁ……」
燐のオナニー……考えただけでヤバ過ぎる……！
と、俺が妄想していると――、
「もう我慢できないので、おちんちん挿れちゃいますね♡」
燐は、俺のチンコを一気にマンコに挿入した。
「っ……！　燐のマンコ……！」
「ん～～～～～～♡　お兄ちゃんのオチンポ来たぁ♡
最高♡　お兄ちゃんはどうですかぁ？　私のオマンコ、気持ちいいですかぁ？」
「あ、あぁ！　めっちゃ気持ちいいよ！」
「よかったてすぅ♡　でも、もっと気持ち良くさせますからねぇ♡」
「ぐっ……」

燐はいきなり激しく腰を動かし始めた。
上下に動かしたり、グラインドさせたり。
「り、燐！　そんなに激しいと俺すぐにイッちまう！」
「いいんですよぉ！　イッてくださいぃ♡　我慢なんてしないで、私のオマンコの中にいっっっぱい中出ししてくださぃぃ♡♡♡」
「で、でも！」
「お姉ちゃんには中出しして、私にはできないんですかぁ！　そんなの、んっ♡　ゆる、あっ♡　しま、んん♡　せん、からぁ！　あぁぁん♡」
「くっ……！　駄目だぁ！　もう出るぅ！」
「んあああああ！　出してぇ♡　私のお兄ちゃん専用精液ポットオマンコに、たっぷりザーメン注いでぇ♡♡♡」
「出る！！！」
ドプゥ！　ドププププゥゥゥゥゥ！！！
「んぁぁぁぁぁぁ♡♡♡　出てるぅ♡　私の中でお兄ちゃんのオチンポミルクが爆発してるぅ♡♡♡　お兄ちゃんの子種が私の子宮に注がれてるぅ♡♡♡　あああああああ！！！　イグぅぅぅぅ！！！」
ぷしゃぁぁぁぁぁ♡
「中出しマンイキで、お潮吹いちゃったぁ……♡」
燐もド派手にイッてくれたようで、体をビクビクと痙攣させながら潮を吹いた。その潮が全部俺の顔にかかったが、とても幸せな気持ちになった。
「はぁはぁ……♡」
「り、燐……大丈夫か……？」
前に倒れ、俺の胸の上で息を切らす燐。おっぱいが当たってて最高だが、ド派手にイッた燐がちょっと心配なので気持ちを切り替えて尋ねたのだが――、
「だ、大丈夫、です……♡　それよりお兄ちゃん……またおちんちん大きいままです……♡　もっともっとエッチしましょう♡」

「で、でもお前、大丈夫なのかよ？」
「私なら大丈夫ですぅ。気にしないでくださいぃ♡　それに言ったでしょ？　今日は朝までエッチしまくるって♡」
「あ、あぁ……」
「お兄ちゃんの精液、たっくさん私のオマンコに注いでくださいね♡」
そうして、燐とのエンドレスセックスが始まった。

♡　♡　♡

一回目の射精は手コキで。二回目から九回目の射精は燐のマンコの中で。そして十回目の射精は燐の口の中で。
「な、なぁ燐……いくらなんでもここまで射精して、全然萎えないってのはおかしくないか……？　それに、濃さも量も、一回目より濃いし増えてるし……」
「ふふ♡　バレちゃいましたか♡　お兄ちゃんに飲んでもらった栄養ドリンクあったじゃないですか」
「あぁ」
「あれ、実は栄養ドリンクなんかじゃないんです」
「なっ！？」
「あれは、超強力な媚薬と、超強力な精力剤を混ぜて作った私オリジナルの、エロエロドリンクなんです♡」
「そう、だっのか……」
だから、アレを飲んだ途端にムラムラして勃起したのか……しかも媚薬だから俺はほとんど力が入らなくなって、燐に犯されっぱなしだったからな。
「ごめんなさい、お兄ちゃん……勝手にそんな変なもの飲ませてしまって……」
「いや、気にするな。燐は俺とエッチしたいから作ったんだろ？だったら嬉しい限りだ！」

「お兄ちゃん……♡　そう言ってもらえるととても嬉しいです♡」
「ちなみに、この効果ってすぐ切れるのか？」
「いえ！　一ヶ月間は性欲が高まって、ムラムラして、勃起が収まらないと思います！　どんなに射精しても萎える事はありません！」
「前言撤回！　ちったぁ反省しろぉ！！」
「キャ～～～！」
俺は燐を押し倒し、覆い被さった。そして、そのまま――、
「こうなったら、俺をムラムラさせた責任、取ってもらうからな？」
「はいぃ♡　取りますぅ♡　責任とってお兄ちゃんに犯されますぅ♡」
「行くぞ！　おらぁ！」
「んひぃ♡　来たぁ！　お兄ちゃんの怒りチンポぉ♡」
俺は、燐に挿入し、性欲のままに犯しまくる。
燐の体の事なんて一切考えない、性欲任せの、力任せのピストン。マンコを壊す勢いで膣（なか）を突きまくる。
「んんぅ！　んふぅ！！　ふひぃ！！！」
燐は、枕に顔を埋めて快感に溺れている。いや、もしかしたら痛いのかもしれない。いくら愛液で溢れ、精液が潤滑油になっているとしても、ここまで力任せに突きまくると痛みが生じるのかもしれない。目には涙も浮かんでいる。
だがそんなの知るか！！！　俺は燐のせいで一ヶ月も勃起したまま生活しなくちゃならないんだ！　性欲も衰えないなんて、ヤバすぎる！
だから燐には、俺の性欲の――、
「はけ口になってもらうぞ！！！」
「んぶぅおおおおおおおお！！！」
俺はこの後、朝が来て家に帰るまでの間、燐を犯しまくった。ちなみに全部中出しだ。
全部で３０発。途中から燐は意識を手放しており、「くっ……うっ……」と、うめきをあげるだけのオナホと化していた。

それでも俺は容赦なく犯し続けた。燐が意識を取り戻した頃には朝になっており、マンコからは信じられない程の精液が溢れ出てきた。

これは、あれだ。妊娠確定かもな……。

♡　♡　♡

「すぅ～すう～……」

私の隣でお兄ちゃんが眠っている。あれだけ沢山エッチしたから、疲れちゃったんだろう。

「ふふ♡　可愛い♡」

私はお兄ちゃんの理性を崩す事に成功した。そのおかげでずっとされたかった「犯され」をしてもらえた。

私は気持ち良すぎて途中で気を失ってしまった。でも、その間もお兄ちゃんは私を犯してくれていたようで、意識を取り戻した時にお兄ちゃんの気持ちよさそうな顔が映った。

私が目を覚ましてから五発中出しして、お兄ちゃんは力尽きた。

お兄ちゃんが言うには私の中に３０発出したらしい。って事は私が意識を失う前に五回中出しされて、目を覚まして五回出されてるから、私が気を失ってる間に、２０回中出ししてくれた事になる。

その前に八回中出ししてもらってるから、合計で３８発中出ししてもらった事になる。

「ふへへ～♡」

思わずだらしない笑みがこぼれる。

だってしょうがないじゃん。大好きな人にこれだけ沢山中出ししてもらえたんだから。

だらしない笑みだってこぼれちゃうよ。

「まだ出てる♡」

私のオマンコからは、お兄ちゃんの精液がまだ逆流している。お兄ちゃんの逆流精液がベッドのシーツを汚している。

なんか、凄い幸せだなぁ……♡
「お兄ちゃんの子供、孕むといいなぁ……」
そう思ってるのは私だけじゃないはず。
るいるいだって、お兄ちゃんの学校の女子達だって、お姉ちゃんだって。それに――、
「桃姉も、そう思ってるはずなんだけどな……」
桃姉も、お兄ちゃんとセックスしたいはず。それでも素直になれないから未だに大好きなお兄ちゃんと、エッチできないできる。
「この間のお兄ちゃんとお姉ちゃんのエッチ。覗き見しながらオナニーしてたの、私知ってるんだからね」
お兄ちゃんの部屋に乱入してやろうと思って、扉を開けたら、桃姉がお兄ちゃんの部屋を覗きながらオナってた。まぁ、それはいいとして、パンツを忘れてっちゃ駄目だよ。
お兄ちゃんにバレるようにしても良かったけど――、
「それだと、意味がないんだよね」
桃姉、お兄ちゃんを一ヶ月ムラムラさせる事には成功したから、後は桃姉次第だよ。
「頑張れ。桃姉」
私は桃姉にエールを送りつつ、隣のお兄ちゃんの腕に抱きつき眠りに就いた。

第１２話　実妹からの嫉妬、媚薬セックス♡（後書き）

エピローグ

（兄さんが、帰ってこない……）

朝になっても二人は帰ってこない。

エッチしてくるだろうとは思っていた。でも、まさか朝になってまで帰ってこないとは思っていなかった。

（燐ちゃん、兄さんとどんなエッチしてるんだろう……）

うぅ……濡れてきた……。

最近、兄さんの事を考えるとすぐに濡れてしまう。その度にオナニーをしないとムラムラが収まらない。

ううん。オナニーをしてもスッキリしない。

やっぱりもう、我慢できないんだ……。

「兄さんと、エッチがしたい……！」

私は、鍵付きキャビネットを開け、そう呟いた。

（これを兄さんに……）

わたしは兄さんの事を考えながら、ベッドの上でオナニーを始めた。

二人が帰ってきたのは、夜七時を過ぎた頃だった。

第１３話　義妹の本性、超ドＭの変態奉仕♡（前書き）

プロローグ
兄さんと燐ちゃんが帰ってきた。
とても仲良さそうに。でも、私が気になったのはそこじゃない。
（兄さん、勃起してる……？）
そう。兄さんのズボンの股間部分が異様にもっこりしている。
それでも二人は何も気にする様子もなく普通に夕食を取っている。
姉さんも、絶対に気づいてるはずなのに何も言わない。
え……？　何……？　ってか、あんなの見せられたらオマンコ濡れちゃう……♡
ヤバい……♡　パンツ染みて来ちゃった……♡
もう、我慢できないかも……。
姉さんも燐ちゃんもシてるんだから、もういいよね？
私も、兄さんと……エッチしても、いいよね？
あ、兄さんがお風呂に向かった。
よし。もう、我慢は止めよう。

第１３話　義妹の本性、超ドＭの変態奉仕♡

燐のせいで衰える事がなくなってしまった性欲を思う存分、燐にぶつけていたら帰りが遅くなってしまった。
結局、燐には数え切れない程中出しをしてしまった。だと言うのに――、
「なぜムラムラする……！」
ずっと勃起も収まらないし、あいつが飲ませたヤツ効果強すぎだろ！
帰宅する道中、俺の勃起を沢山の女性達が物欲しそうに見てきたが、燐が俺にぴったりくっつく事で牽制してくれた。
襲われても良かったんだけどな……。
「取りあえず、抜くか」
俺は今、風呂にいる。なので裸だ。
オナニーをしやすい格好なので、我慢ができない俺は、早速オナニーを開始した。
燐にあんなに出したのにまだ出し足りないって、本当にヤベェぞ……。
少し扱いただけですぐに我慢汁が溢れてくるし、感度もいつもの倍になってやがる。
これは、すぐにイッちまいそうだ……。
と、俺がそろそろイきそうだなと思っていたその時――、
ガチャ。
ん？　なんで風呂のドアが開いたんだ？　燐か？　責任を感じて抜きに来てくれたのか。
そう思って俺は、ドアの方を向いたのだが……。
「燐、俺もう少しでイケそうなん、だ、よ、ね……？」
俺は言葉を失った。だって、そこにいたのは実妹の燐、ではなく

――、
「兄さん、オナニーの邪魔しちゃってごめんなさい……しかも、イケそうなタイミングに……」
「あ、いや……」
義妹の桃が、一糸まとわぬ姿、つまり全裸で立っていた。いや、なんで！？
がっつり裸見ちゃったよ！　こ、殺される！？
「も、桃！？　なんで入って来て！？　つーか服！　服を着ろ！」
「ここはお風呂だよ？　服を着て入るのは変だよ」
「いやそうだけども！　そうじゃなくて！　なんで普通に入ってきてんだって事を言いたいんだよ！　俺が入ってるって知らなかったのか！？」
「ううん。知ってたよ」
「じゃあ、なんで！？」
「い、一緒に入りたかった、から……」
「え……？」
桃が、俺と一緒に風呂に入りたい……？　俺は夢でも見てんのか……？
あの桃が、俺の事が大嫌いな桃が一緒に風呂？　あ、ありえないだろ……。
「ど、どうした……？　どっか具合でも悪いのか……？」
「そ、そう言われてもしょうがないよね……これまで散々冷たい態度を取ってきたから……でも、私、本当は兄さんの事、大好きなの。子供の頃からずっと。出会った時からずっと！」
「桃……」
桃が赤裸々に気持ちを伝えてくる。目には涙まで浮かんでいる。
全然気づけなかった……。自分が情けなさ過ぎる……！
「桃、今までお前の気持ちに気づけなくてごめん！」
俺は頭を下げた。と、桃は慌てて――、
「あ、頭をあげて！　兄さんは何も悪くないの！　悪いのは私なの

！　大好きなのに、素直になれなくて、つい冷たい態度を取っちゃった、私が……」
「いや！　そんな態度をされても、しっかりとお前に向き合っていれば気づけたはずなんだ。お前としっかり向き合ってなかった俺が、悪かった！」
「兄さん……ありがとう……！　私、兄さんが大好き！　もう、我慢しない。いい、かな……？」
「もちろんだ！」
「ありがとう……！　……キス、してもいい？」
「あぁ」
「兄さん……♡　んちゅ……♡」
桃がキスをしてくる。最初は軽いモノだったが、次第に――、
「んちゅ♡　ちゅむ♡　ちゅる……♡　じゅる♡　んんっ♡　れろぉ♡」
激しく、深いものになっていく。舌を絡ませ、俺の唾液を飲んでいく。
こんなの、気持ちよすぎるだろ！
「んっ……♡　兄さんのおちんちん、今ビクッてした」
「す、すまん……！」
「ううん♡　嬉しい♡　私がオナニーの邪魔しちゃったから辛いよね。それにイク寸前に入って来ちゃったから……」
「そ、それは、その……」
「兄さん、私のせいで我慢させちゃったので、責任を取らせてください。兄さんのオチンポにご奉仕してもいいですか……？」
「い、いいのか……？」
それは願ったり叶ったりだが、いいのか……？　あの桃に、ご奉仕してもらうなんて……！
「うん♡　私、兄さんのオチンポにご奉仕したい♡」
「じゃ、じゃあ、頼む」
「はい♡」

座ってる俺の股の前に、桃が座り込む。
桃の顔が、チンコの前にあるなんて……！
「兄さんのオチンポ、凄い勃起してる……♡　先からは我慢汁が溢れてる……♡　もう我慢できない！　はむっ♡」
「うっ……！」
桃が俺のチンコを咥えてる……！　ヤバい……！
「ん～～♡　ヂュルルルルルル！！！」
ってか、さっきイきそうだったから、もう！
「桃ぉ！　あぁぁああ！？」
ドビュルルルルルルルルル！！！
「んぶっ！？　んん……♡」
暴発してしまった……。桃は嬉しそうに飲んでくれてるが……こんなに早く出しちゃうなんてな……。
「んっぽん♡　いっぱい、出ましたね♡」
「す、すまん……暴発してしまった……」
「気にしないでください♡　我慢させてしまっていましたし、すぐに出てしまうくらい気持ち良くなってくれて嬉しいので♡　それより……兄さんのオチンポ、いっぱい出したのにまだ大きいままですね♡」
「すまない……燐に飲まされたモノのせいでしばらくは勃起も性欲もムラムラも収まらないらしくて……」
「それなら、私を兄さんの性欲のはけ口にしてください♡」
「も、桃を……！？　い、いいのか……？」
「はい♡　大好きな兄さんの為なら私は、なんでも出来ます♡　兄さんの性欲処理係にさせてくれませんか……？」
可愛くて巨乳な桃が、こんな事を言っていたらそりゃ！
「もちろんだ！　こっちから頼みたいくらいだ！」
「嬉しい♡　じゃあ兄さん、私のお口を犯してください♡」
「そ、それって……」
「はい♡　イラマしてください♡　私はドMなので、なんの遠慮も

いりません♡　私のお口をオマンコだと思ってズボズボ激しく突いてください♡　兄様♡」
「分かった。行くぞ？」
「はい♡」
「んっ！」
「ぶぼぉ゛！　ぶぼぉ゛！　ぶぶぼぉ゛ぉ゛！」
くっ……！　なんだこれ……！　イラマってこんなに気持ちいいのか……！
喉奥を突く度に、舌が鈴口、裏スジ、竿に触れて、亀頭が喉ちんこに当たってめっちゃ気持ちいい！
唾液と胃液が混ざってヌルヌルが増えてきて、とにかく気持ちいい！！
「じゅぼぉ゛！　じゅぼぉ゛！　じゅぼぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛！！」
「桃！　桃！　桃！」
「じゅぼぉ゛！　ぶぼぉ゛！　ぶぼぉ゛ぼぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛！！！」
「くっ……！　そろそろ出るぞ！　喉奥に中出ししてやるから、一滴残らず全部飲み干せよ！」
「ぶぼぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛！！！」
「出る！！」
ドビュルルルルルルルルルル！！　ビュル！　ビュルルルルルルルルルル！！！　ビュゥゥゥ！！！
「んぶぼぉ゛！？　んぶぅ゛！　んんっ゛！」
俺は桃の喉奥に、これでもかと言うくらいの、大量の精液を射精していく。
「んびゅぅ！？」
入り切らなかった精液が、逆流して桃の口の端から溢れ出てしまう。
「こぼすなぁ！　全部飲めぇ！」
「んぶぅ゛！　んぅ！」
桃は言うことを聞こうと、精液を飲んでいくが、次から次へと俺

が射精(だし)ていく為、飲みきれない。
やっと射精が落ち着き、俺はゆっくりとチンコを口から引き抜いていく。
どろぉん♡　ネバ～♡
引き抜いた途端、桃の口からは大量の精液がこぼれ落ちる。そして、唾液と胃液と精液が混じった粘り気たっぷりの糸がチンコと口の間に発生する。
エロ過ぎるだろ……！
「ゲホッ！　ゲホッゲホッ！　兄様、こめんなさい……精液、全部飲めませんでした……」
「そ、そんなの気にするな。飲んでくれただけで嬉しいからな」
「に、兄様！　それじゃ駄目です！」
「え？」
「兄様は私の主なんです。だから、主の言うことを聞けない悪い性処理係には、キツ～いお仕置きをしなきゃいけないんです！」
「キツ～いお仕置き……？　例えば？」
「ビンタとか、首絞め、おっぱいスパンキング、お尻スパンキング、とかですかね？」
「いやいや！　どれもマニアックでハード過ぎるだろ！？　頼むからソフトなヤツにしてくれ！」
「じゃ、じゃあ、私のオマンコを、兄様のデカチンで犯しまくってください♡　そして、お尻をパンパン叩きながら罵ってくださいぃ♡」
スパンキングはしてほしいのね……。まぁ、いいや。桃でＳＭを練習するのもいいかもな。
「分かった。じゃあ、ケツ叩きながら犯してやる。立って壁に手ついて、ケツをこっちに向けろ」
「はいぃ♡」
桃は素直に従い、立ち上がり壁に手をつき、俺の方へとケツを向ける。

マンコもアナルも丸見えだ。
「主の命令を聞けないクソ性処理係には、お仕置きが必要なようだから、キツイお仕置きをしてやる！」
「お、お願いしますぅ♡」
「行くぞ！」
「はいぃ！！！」
俺は濡れ濡れド変態ドＭマンコに、チンコをぶっ刺した。

次話へと続く。

第１３話　義妹の本性、超ドＭの変態奉仕♡（後書き）

エピローグ

「桃姉、やっと素直になったみたいだね」

「えぇ。そうね。二人であの子を挑発したのが良かったみたいね」

洗面所で、二人の声を盗み聞きながら会話する、華と燐。

「お姉ちゃんから、桃姉を挑発しようって聞いた時はびっくりしたけどね」

「だって、私達の誰よりも零ちゃんの事が大好きなのに、いつまで経っても素直にならないし行動に移さないから、いい加減腹ただしくなっちゃったんだもの」

「そうだね。見てて私もイライラしてたよ。ツンデレなのかもしれないけど、にしてはデレの部分が一回もなかったからね。お兄ちゃんが可哀想だったもん」

「まぁ、傷ついたら、お姉ちゃんが癒してあげるからいいんだけど。この体でね♡」

「むっ。私だって癒せるよ？　お兄ちゃん、私のオマンコ気持ちいいって言ってたから」

「そんなの、お姉ちゃんも言われました～」

「お姉ちゃんのオマンコより気持ちいいってさ」

「ほんとに零ちゃんが言ったの？　本人の口から聞くまではお姉ちゃんは信じません。仮に本当だったとしても、またお姉ちゃんのオマンコで骨抜きにしてあげるだけだからいいけど」

「お姉ちゃんにも桃姉にも絶対に負けないから！」

「望むところよ。零ちゃんと一番長い時間を過ごして来たのはお姉ちゃんだから」

「時間の長さとか関係ないし！」

「零ちゃんにミルクあげたのだって、おしめ替えたのだって、全部

お姉ちゃんだも～ん」
「く～～～！　そんなの、これからで挽回するし！　更新するし！」
「お姉ちゃんが負ける訳ないでしょ～」
「ムカつく！！」
と、二人は喧嘩を、ずっと続けていた。
零と桃が上がってくる寸前まで。

第１４話　義妹からの懇願。お仕置きプレイ♡（前書き）

プロローグ

『零君、初めまして』

『初めまして……』

『ほら桃。お兄ちゃんよ』

『……』

人見知りの私は、初対面の人（兄さん）に対して無言で睨む事しか出来なかった。

それは決して睨んでるわけではないのだが、緊張を我慢してると、自然と睨みつけてしまうらしい。

今まで、この感じのせいでみんなに嫌われてきた。小学一年生だった私には、中々にキツイものがあった。

なので、どうせこの人にも嫌われるんだろうと思っていた。のだが――、

『桃ちゃんって言うんだ。可愛くていい名前だね！　俺は零。初めてで緊張するかもしれないけど、これからよろしくな！』

と、兄さんは嫌うどころか、私を受け入れてくれた。しかも、名前が可愛いと褒めてくれた。今まで家族以外には言われたことなかったのに。

それがとても嬉しくて――、

『も、桃、です……よろしく……お願いします……！』

私は緊張しながら、兄さんの手を取り握手を返した。

思えばここからなのだろう。私が兄さんに恋心を抱いたのは。

兄さんが学校から帰って来たら、まず私が最初にしていたのは兄さんの汗の臭いを嗅ぐこと。

そして、兄さんが洗濯に出したズボンをこっそり回収して臭いを嗅ぐ。さらに、体育がある日は体操服をこっそり回収し、臭いを嗅

いでいた。水着なんてものはもっとだ。直接兄さんのオチンポに密着するのだ。嗅がない手はない。
パンツも何回もこっそり回収して、臭いを嗅ぎまくっていた。
私は、小学一年生にしてすでにオナニーをシていた。
小学校高学年になると、兄さんに対して冷たく当たるようになってしまった。
本当は大好きなのに、素直に気持ちを伝える事ができなくなってしまった。
それにより、兄さんは私に対してよそよそしくなってしまった。
自業自得だと分かっている。
それでもやっぱり、大好きな兄さんに冷たくされ、とても悲しかった。燐ちゃんと姉さんとは変わらず話すのに、私と目が合うと、とても気まずそうに目を逸らす兄さん。
私のせいだと、分かっているのに、兄さんに対する態度はどんどんと冷たさを増していった。
その裏では、兄さんの事を想いながらオナニーをシまくっていた。いつか兄さんとエッチできないかなんて、叶いもしない、ありえもしない事を考えながら。
でもそんなある日、兄さんは変わった。
性に対しての好奇心があったのだ。
男の子は決まってエッチな事が嫌いで、忌避感を抱いている。それは兄さんですら例外ではなかった。
なのに、突然兄さんはエッチな事に興味を示し始めたのだ。
こんな、こんな嬉しい事はない。
瑠李ちゃん、燐ちゃん、姉さんと、次々にエッチしていった時はびっくりした。エッチしてくれるんだって。
だったら、私もって……。
そして今、私の長年の夢が現実に叶っている。
「兄様ぁ♡　もっと、もっと私のド変態ドＭマンコ犯してぇ♡♡」
「あぁ！　思う存分犯してやるよ！」

「あああああああ！！　嬉しいいいい！！！！」
幸せだ～♡♡♡

第１４話　義妹からの懇願。お仕置きプレイ♡

「んっ♡　あぁぁぁぁぁぁぁ♡」
「くっ……」
桃のマンコ、ヤバすぎる……！
瑠李（るい）や燐、姉ちゃんとも違うそのマンコの膣（なか）は気持ちよすぎて、油断をするとすぐに出ちまいそうになる。
だと言うのにこの義妹は、チンコを刺激するようなことばっかり言ってくる。
「兄様、兄様♡　兄様のオチンポ、私の子宮を突いてますぅ♡　兄様の子種、私の赤ちゃんのお部屋に注いでくださいぃ♡♡♡」
こんな事言われたら、我慢なんてできる訳ないだろ！
「っ！　出る！」
ドピュルルルルルルル！！！
「んっおぉ♡♡　出てるぅ♡♡　兄様の子種が、私の赤ちゃんのお部屋にドピュドピュ出てるぅ♡　んあああ！　中出しされて私もイッちゃうぅぅぅ！！」
桃もイッたらしく、膣（なか）を痛いくらいに締め付けてくる。射精（だし）たばっかりのチンコには刺激が強すぎる……！
「はぁはぁ……も、桃……激しくし過ぎじゃなかったか？　大丈夫か？」
「は、はい……♡　むしろもっと激しくして欲しいです……♡」
「も、もっとか？」
「はいぃ……♡　今まで大好きな兄様に対して取ってきた無礼な態度への罰として、お仕置きをしてくださいぃ♡」
「お、お仕置き？　そんなの必要ないだろ……」
「お、お願いですぅ！？　ダメな義妹（いもうと）にキツーいお仕置きをしてくださいぃ！！　お願いします！　お願いしますぅ！！」

こ、ここまで懇願されちゃうと、断れくなってくるな……。しょうがない。こんなに素直になってくれたんだ。望みに応えるか。
俺はチンコをマンコから引き抜く。
「んっ♡」
引き抜いた瞬間、桃のマンコから精液が逆流シてきて、風呂の床にボトリと落下した。
「うっわ、エッロ。じゃあ、桃。お前の望み通りにお仕置きするけど、何されても後で文句言うなよ？」
「は、はいぃ♡　もちろんですぅ♡　私は兄様の性奴隷なので、何をされても文句は言いません♡」
「そうか」
お前、俺の性奴隷だったんだ……。知らんかった。
「じゃあ、仕置だ」
「っ！」
俺が急に低い声を出すと、桃は背中をビクッとさせた。きっとマゾの血が騒いだんだろう。
俺は、立ったままの桃のマンコに手を伸ばし、遠慮などせずに中指と薬指の二本を挿入した。
「んんっ♡　はれ？　お、オチンポは……」
桃は悲しそうに尋ねてくる。
「そう簡単に俺のチンコを挿れてもらえると思うなよ？　お仕置きはな、チンコじゃなくてもできるんだ。それに、今のお前にはお預けって言う仕置の方が一番効くだろ！」
俺は無遠慮の激しい手マンを開始する。
「んあああああ！！　嫌！　嫌ぁ！？　兄様のオチンポ！　オチンポが欲しいの！？　兄様の、んぉ　ぉ　ぉ　！！」
「性奴隷のくせに生意気な口利いてんじゃねぇよ！　仕置される立場の人間が、主に命令してんじゃねぇ！」
「んあああああ！！！　あああああああ！！　ダメ！　ダメ！　手マンでイッちゃうぅぅ！！」

おっと。
「は、はえ……？」
俺は桃がイクギリギリのところで指を引き抜く。寸止めと言うヤツだ。
「な、なんで……？」
「なぜ簡単にイケると思ったんだ？　これは仕置だぞ？　すぐにイカせたんじゃ何も面白くない」
そう言って俺は、桃のビンビンに勃起したクリトリスを激しくこすり始める。
「んはあああああああ！！！　ダメダメ！！　イきそうだった時にクリはダメェ！？　あ、あ、イク！　イク！　イッちゃうぅぅぅぅぅ！！　はぁ……」
俺はまたもやイク寸前で、手を離した。
「んっ、はっ、はぁ……はぁ……」
桃は息を切らし、壁についた手に体重をかけながら、何かに耐えていた。
なんかちょっと滾ってきたな。俺って結構Ｓなのか？
「ふん。まだまだ行くぞ？」
俺は、膣とクリのダブル刺激で桃を責め立てる。
「んほおおおおおおおおおおおお！！！　両方はダメ！　両方は本当にイッちゃうからぁ！？　あああああああああ！！！！！」
よっと。
「んん～～～！？　んん……ん～～～……」
鼻息あっら。よっ。
「ああああああああああ！！！　も、もう無理ぃぃぃぃ！！！　イク！　イクのぉぉ！！！」
ダメダメ。
「はひゃ……ふぅ～ふぅ～……」
せい。
「ああああああああああああああああああああ！！！　イク！　イク

う！！」
感覚がどんどん短くなってきたな。でもダメ。
「うううう……ふぅうぅ……」
足がガクガクして来てる。まるで生まれたての子鹿だ。
「まだまだ行くぞ～」
「ま、待って――んひゃあああああああ！！！　ダメダメダメ！？　これ以上は本当に我慢できないぃ！！　イクの！　イクの、イッちゃうのぉぉ！！」
「だからダメだってば！」
「んはぁ……！？」
マンコから愛液と本気汁がめちゃくちゃ出てきてる。足を伝って床に落ちてるよ。
「桃、もうイキたいか？」
「っ！　はい！　イキたい！　イキたいです！」
俺がそう尋ねると桃は、嬉しそうに顔を輝かせ、そう答えた。まだ誰もイカせてやるなんて言ってないんだけどな。
「そっかそっか。じゃあ、湯船につかろう」
「へ……？」
「俺達は風呂に入りに来てるんだ。湯につからんでどうする？」
「な、なんで……」
戸惑う桃を俺は無理矢理引っ張り、二人一緒に湯船に入った。
俺の上に桃を乗せて。もちろん、ただつかるだけじゃあない。
「んあっ！？」
俺は桃のマンコを激しく弄り始める。
湯船の中なので、手を動かす度にバシャバシャとお湯が暴れる。
しかし、そんなのは気にせずに俺は、桃のマンコをただひたすらに激しく責めていく。
「んあああああああああああああ！！！！！　もう本当にダメぇ！！！　イグぅうううう！！」
「だ～め」

「んひゃうぅうううう！？」
俺は手マンを止めるのと同時に、左手で乳首をつまむ。ってか、膣の締まりヤベェ事になってんな。
「ち、乳首、だめぇ……い、今全部敏感になってるからぁ……」
「そう？　じゃあ、乳首だけでイケるんじゃない？」
「んひゃうううううう！？」
俺は乳首を激しく弄る。つまんだり、擦ったり、転がしたり。様々な弄り方をしていく。すると、膣がどんどんと締まり始めていく。
本当にイキそうなのか？
「膣がすげぇ締まってんぞ？　イキそうなのか？」
「うん……！　うん！　私、乳首でイキそうになってるのぉ！！
初めてぇ！　こんなの初めてなのぉ！！」
「ま、ダメだけどな」
俺は乳首から手を離した。
「ま、待って……！」
桃は寂しそうに、そして悲しそうに俺の手を見つめている。そしてその手を掴んでくる。
「どうした？　手を繋ぎたいのか？」
「そ、そうじゃなくて……いや、兄様とは手を繋ぎたいけど、今はそうじゃなくて……」
「んふふ。イキたい？」
俺は耳元でそう囁く。
「っ～～♡　い、イキたいですぅ♡」
「じゃあ、俺がカウントするから、０になったらイッていいよ」
「ほ、本当ですか♡」
「あぁ」
「ありがとうございますぅ♡」
「じゃあ、カウント、行くぞ？　１０、９、８，７」
「んあああああああああああ！！！」
激しく手マンをシながらカウントをしていく。

「ろ～く、ご～お、よ～ん、さ～ん」
「あああああああ！！！　んんぅぅぅ！」
「に～い、い～～～～～～～～……」
「ち」と言わないまま、手マンを続ける。イかせるわけないだろ。
「あっ、あっ、あああああああああああああああ！！　も、もう無理ぃ！！！」
「まだカウントは0になってないぞ？　勝手にイッたらダメだろ？」
「も、もう、無理でしゅうううううううう！！！」
「はい、だ～め」
「んほおおおおおおおお！？」
手を止め、指を引き抜く。
「あ、あ、あ、あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
桃は全身をビクビク震わせながら、どこかを見つめている。
「ちとやりすぎたか？」
「に、兄様……お、お願いします……わ、私をイカせてくださいぃ……お願いしますぅ……」
やべ、泣かせちゃった。
「分かった。じゃあ、俺の部屋に行こう。そこで気を失うまでイカせまくってやる」
「は、はいぃ♡」
俺は桃を抱き上げ、外に出る。するとそこには――、
「んっ♡　はっ♡」「あっ♡　んはぁ♡」
「何してんの？」
全裸でオナニーをする姉と実妹（いもうと）がいた。
「だって、お兄ちゃんと桃姉のエッチがエロすぎるので……」
「ついつい、我慢できなくなっちゃって……」
「はぁ……ったく。まぁ、ちょうどいいや」
「「抱いてくれるの（るんですか）！」」
「いや、抱かねぇよ！？　桃を運ぶのを手伝ってもらおうと思ったんだ！　体濡れてるから拭いてほしいし！」

「あ、な～んだ。てっきり全員まとめて犯してくれるのかと……」
「それは今度してやるよ」
「「っ！」」
「言ったね！　零ちゃん、今言ったね！　言質取ったからね！」
「約束ですからね！　ちゃんと私達全員愛してくださいね、お兄ちゃん！」
「分かった！　分かったから、桃を運んでくれぇ！」
こうして、桃は姉ちゃんと燐により俺の部屋に運ばれ、俺はその後を追って部屋へと戻った。

次話へと続く。

第１４話　義妹からの懇願。お仕置きプレイ♡（後書き）

エピローグ

「はぁ……」

私、赤城瑠李は悩んでいた。

何に悩んでいるのかと言うと――、

「零君と今度はどんなプレイをしようかな……」

零君とのエッチについて悩んでいた。

フェラもパイズリも中出しセックスももうした。毎回同じだと相手を飽きさせてしまう。だから、マンネリ化を防ぐ為に色々シなければ。

「相互オナニーももうしたし……う～ん……」

私は一つ、思いついた。

「外でセックスとかいいかも！」

いわゆる野外プレイと言うヤツ。

「よ～し！　そうと決まればバレないポイント、探しにいっくぞ～！！」

私はウキウキした気持ちで、零君との野外プレイする場所を探しに行った。

第15話　義妹念願のセックス♡　朝までノンストップ中出し♡

「はぁはぁ……♡」
「辛い思いさせちゃって、ごめんな。もう我慢しなくていいからな」
「も、もう、イッていいんですか……？」
「あぁ」
「嬉しい……♡　じゃあ兄様のオチンポで、私をイカせてください♡」
「もちろんだ！　行くぞ！」
俺は桃にチンコをぶっ刺した。
「んぼぉ〜〜〜

「おかしくなれ！　おかしくなっちまえ！！」
「あああああああ！！　もう、勝手にイッちゃうぅぅぅぅ！！！」
ぷしゃぁぁぁぁぁ！　ジョロロロロロ！
「いいぞ！　もっと、もっとだ！　もっとイキ狂え！」
桃は潮吹きをした後、お漏らしをした。
それでも俺は、膣（なか）を突くのを止めない。
「んぉ〜〜〜

様の子種、私の子宮にかけられてるぅ♡　な、中出しで、また、イッくぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」
桃がまたイッた時、腰をまた思い切りビクンと浮かせたので、チンコが抜けてしまった。
射精中だった為、抜かれた事により――、
「んあああああああああああああ♡♡♡　兄様の子種、全身にかけられてるぅぅぅぅぅぅ！！！」
チンコから吐き出され続ける精液は、桃の体を汚した。顔、胸、お腹、足、全てに俺の精液がかかり、とてもエロい光景になっている。男の支配欲をくすぐる光景だ。
「も、桃……お前エロすぎんだろ……俺、もう歯止め利かねぇからな。朝までお前に、中出し決め込んでやるからな！」
「は、はいぃ♡♡♡　に、兄様の子種で私の子宮、パンパンにしてくださいぃ！！！♡♡♡♡♡」
「よし！　行くぞ！」
「んあああああああああああああああ！！！」
俺は再び、桃の膣（なか）に入って行った。

♡　♡　♡

夜２１：００。
「んあああああああああああ！！！　あっ♡　あっ♡　あっ♡　あああああああああああああ！！！」
「また出るぞ！」
「はいぃぃぃぃぃ！！」
「出る！」
「んほおおおおおおおおおおおおお！！！」
これが１０発目の中出し。
夜２３：００
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……♡♡♡」

「出る！」
「んんんんんんんんんんんん！！！」
これが２７発目の中出し。
深夜２：００。
「……っ♡　……っ♡」
「出る！」
これが５９発目の中出し。
朝６：００。
「ひゅ～……♡　……ひゅ～♡」
「最後だ！」
最後に出したこれが７９発目の中出し。
「はぁはぁ……」
俺は桃の隣に力なく横になる。
桃はもはや気を失っており、半目の状態になっていた。それでも突く度に声を漏らすので、無意識に感じていたのだろう。
にしても、人生で一番出したわ～。
もうトータルで何回出したか分からんわ。誰か教えて欲しい。
ちとやりすぎた感じはあるが、それでもこの幸福感は、最高すぎた。そして――、
「も、もう、無理だ……」
俺はそのまま眠りに就いた。

♡　♡　♡

私が目を覚ますと、隣で兄さんが眠っていた。
途中から私は気を失ってしまったらしい。悔しい。
最後までしっかりと兄さんを感じたかった。
でも――、
「お腹が重い……いっぱい出してくれたんだ……♡」
お腹がぽっこりしていて、結構重い。それだけで、兄さんが私の

子宮に子種を沢山出してくれた事が分かる。これほど幸せな事はない。
「はぁ……♡　夢がどんどん叶っちゃった……♡」
私は兄さんとエッチがしたかった。そして、兄さんに中出ししてもらいたかった。朝まで止まらないノンストップの中出しセックスをしたかった。
その夢が全部叶った。
「他にもしたい事があるから、これからどんどん叶えて行こう♡」
兄さんに手コキ、フェラ、イラマ、パイズリ、素股、尻コキ、アナルセックス、他にも色々。そして、最終的には――、
「妊娠、だよね♡」
兄さんの子供を身ごもれるなんて、本当に夢のまた夢だと思っていた。でも、こうして中出しをいっぱいしてもらった今、それは夢ではなく、現実になる。
「兄さんの子供、絶対可愛いんだろうな……女の子だったら兄さんを取り合いになるかも……」
そうなっても絶対に負ける気はしない。
「兄さん、これからよろしくお願いします♡」
私は兄さんの頬にそっとキスをして、また眠りに就いた。

♡　♡　♡

「まさか朝まで止まらないとはね」
「お姉ちゃんも予想外だったわ。でも、それだけ愛し合えたって事ね」
「これは本格的に負けてられないね」
「えぇ。お姉ちゃんもこれまで以上に零ちゃんにアピールして行くからね。エッチな意味で♡」
「私だって、お兄ちゃんにいっぱい迫るもん！　それでいっぱいエッチするんだもん！」

リビングで、全裸のまま会話をする華と燐。
今後、華と燐、桃の三人から家で永久的に迫られる事になると言う事を、零はまだ知らなかった。
「「覚悟しててね、お兄「零」ちゃん♡」」
二人は妖艶な笑みを浮かべ、零と桃の朝食を準備し始めた。

第15話　義妹念願のセックス♡　朝までノンストップ中出し♡（後書き）

目を覚ました俺。最初に思ったのは――。

「めちゃくちゃ出したな……」

ってのに、まだ勃起してるとか、燐の奴、なんつうもん飲ませてくれてんだよ……。

隣を見ると、巨大な胸を上下させながら、気持ちよさそうに眠る桃がいる。

俺は実姉、実妹、義妹と関係を持ってしまった。

瑠李とも関係を持って、学校ではセックスはしていないものの、フェラなどのエッチな関係になっている。

俺は、これまで流れに身を任せてここまできた。でも、俺もやっぱり男だ。

女子とのエッチは好きだ。もっとしたい。もっと女子を犯したい。そんな願望はある。

でも、本能に従っていいのだろうか？

本能に従って、思いのままに女子達にエッチな事をしても、本当にいいのだろうか。これまでの事から、ここが俺の知っている世界ではないと言うのは予想が出来ている。

だとしても、元の常識を持つ俺からすると、手を出していいと言われても中々一歩を踏み出すことができない。だって、怖いじゃんか。

これがいつドッキリとか、イタズラとか言われて、警察に突き出されるか分からない。

俺が調子に乗った瞬間にお縄にするつもりかもしれない。

「俺は、どうしたらいいんだ……」

「兄さんは、積極的になっていいと思いますよ」

「桃……」

俺の言葉に答えたのは、桃だった。いつの間にか起きていたらしい。
「積極的、か……例えば？」
「そうですね……この家の中だと、私達を見てムラムラしたら、すぐに挿れちゃうとか。あと、学校とかだと、歩いている女子に後ろから抱きついておっぱいを揉みしだく、とかですかね」
「そ、それは確かに夢だけど、本当にやって大丈夫なのか……？
桃や姉ちゃん、燐は受け入れてくれるだろうけど、学校の女子達が受け入れてくれるかどうか……それにそんな所先生に見つかったらヤバいだろ……」
「先生達は何も言わないと思いますよ？　兄さんが通う高校は、性欲が優先される学校なので。特に兄さんが転校してからは」
い、言われてみれば確かに。初めて金髪女子にフェラされた時、あの時はすでに先生が教室に来ていた。
にも関わらず、何も言わずに見ているだけで、俺が放尿するところもただ見ていた。
そして、全てが終わると、何事もなかったかのように先生は授業を開始した。
「本当に、俺は欲望のままになってもいいのか？」
「うん。いいと思います。むしろ、私達は全員、兄さんが素直になってくれたら、嬉しいです♡」
「そっか……」
「はい♡」
桃は俺の腕に抱きついて、再び眠りに就いた。
「積極的に……ね。もし本当に許されるんだとしたら、やってみる価値はあるよな」
俺は一つ、決意を固めた。

登場人物紹介その１♡

「白下（はくした）　零」（１６）
この作品の主人公で、貞操観念が逆転した世界に転生した。
元の世界の倫理観や常識に囚われ、女子に手を出すことに対して迷いや葛藤があったが、幼馴染みや実姉、実妹、義妹とのセックスを経て、自分の欲望に忠実になる。学校の至る所で、女子と性欲のままにエッチをしまくるようになる。
家では、実姉、実妹、義妹の三人と毎日エッチをしまくる。
後に、究極の選択をする事になる。

「赤城（あかぎ）　瑠李（るい）」（１６）
零の幼馴染み。
Ｇカップの巨乳で、お尻も大きい。
おっぱいは円錐型でトップがツンと前を向いている。乳首と乳輪の色はピンクで、濃さの差はあまりない。
零の事が大好きで、常に零とのプレイについて考えている。フェラをするのが大好き。
【校内全裸制度】を発案した。

「白下　桃」（１６）
零の義妹。
Ｇカップの巨乳で、お尻も大きい。
おっぱいは半球形で、乳首が少し濃い目の色をしており、乳輪は薄いピンク色。
自分の気持ちに素直になれず、零に対して冷たい態度を取っていたが、華と燐に煽られ、素直になる。
ドＭで、零にイジメられるのが大好き。首輪を常時装着するように

なる。
玩具責めをされるのが大好き。イラマやスパンキングをされると、すぐにイッてしまう。
普段は零と「兄さん」と呼ぶが、二人っきりになると「兄様」と呼ぶ。
零ともっとエッチがしたくて、華と燐と共に、零と瑠李が通う学校に転校してくる。

「白下　燐」（１５）
零の実妹。
Ｇカップの巨乳で、お尻も大きい。
おっぱいは半球形で、乳首は薄いピンクで小さめ。乳輪の色が少し濃い目。
零に対して敬語で接するようになる。
華に先を越され、自分も告白しようと決めたが、エッチが気持ちよすぎてすっかり忘れてしまっている。
零にバックで突かれるのが大好きで、これからのセックスのほとんどがバックセックスになる。犯されるのが嬉しく、興奮する。
家のお風呂で零とエッチする事が多い。

「白下　華」（１８）
零の実姉。
Ｈカップの巨乳で、お尻もそれはそれは大きい。
おっぱいは釣鐘型で、陥没乳首、色は乳輪、乳首共に薄いピンク。
「姉」として零に接する時の一人称は「お姉ちゃん」で、「彼女」として接する時は「私」になる。
「零ちゃん」と呼ぶ。
甘やかすのが大好きで、おっぱいを吸わせながらの手コキや、フェラ、パイズリなどを零にする事の方が多い。
実は超敏感体質で、おっぱいを強く揉まれたり、乳首を触られたり

するだけでイッてしまう。
リビングやキッチンでのエッチが多い。

「金髪女子」（１６）
零のクラスメイト。
「れいれい」と呼び、一人称は「うち」。
Ｇカップの巨乳で、お尻も大きい。
おっぱいはおわん型で、少し濃い目の乳首をしており、淡いピンク色の乳輪をしている。
一見、Ｓに見えて実はドＭ。零から迫られると、乙女の顔になり、イキまくる。零のおしっこを飲みたがる。
学校のトイレでエッチする事が多い。

「茶髪女子」（１６）
零のクラスメイト。金髪女子の親友。
「れー君」と呼ぶ。
Ｆカップの巨乳で、お尻も大きい。
おっぱいはおわん型で、乳首と乳輪の色はどちらも濃い目。
手コキをするのが大好きで、零に手コキをする率が一番高い。更衣室での隠れながらのエッチが大好き。
アナルを舐めてあげるのが大好き。前立腺を責めるのが好き。
一番弱いのは乳首で、零に開発されてしまう。
他の子に比べておっぱいが小さいことを悩んでいる。

「眼鏡女子」（１６）
零のクラスメイト。学級委員長。
「零様」と呼ぶ。↑女子達の共通の呼び方。
Ｈカップの巨乳で、お尻も大きい。
おっぱいは円錐型で、乳首も乳輪も濃い。
零を犯すのが大好き。だが、犯されるのも大好き。

零の精液をペットボトルに入れ、それをドリンクとして飲むほど、精液が大好き。
副委員長と共に、教室で零とエッチする。
汗が出やすい体質。すぐに制服がびちょびちょになり、乳首が透ける。

「副委員長」（１６）
零のクラスメイト。学級副委員長。
Ｇカップの巨乳で、お尻も大きい。
おっぱいはしずく型で、バストが斜めに生えている。乳首と乳輪は、真っピンク。
遠目に零の事を見ながらオナニーをするのが好き。
零にオナニーを見せる率が一番高い。
零に乱暴にされるのが大好き。ドＭ。
廊下でのエッチが大好き。

「爆乳ショートちゃん」（１５）
零の後輩。図書委員。
Ｊカップの爆乳で、お尻も大きい。
おっぱいは円錐型で、乳輪も乳首もきれいなピンク色をしている。
零の精液を全身に浴びるのが大好き。フェラ、イラマなどが大好き。
スパンキングされるのが大好きで、零にいつもお願いする。
口の中に指を入れられながらバックで犯されるのが何よりも好きで、それをされるとイキまくってしまう。
図書室で声を出しちゃいけない状況で、セックスするのにハマってしまっている。
爆乳を生かしたパイズリを鍛えている。

第１６話　女子トイレで名前も知らぬ女子達と……♡♡（前書き）

プロローグ
義妹の桃と、朝までセックスをしてから数日後。
今日は学校の日だ。
「おはよう」
「おはようございます！　お兄ちゃん♪」
「零ちゃん、おはよう♪」
「兄さん、おはよう」
いつもと変わらない朝。でも、前とは違う所もある。例えば――、
「兄さん、ごめんなさい。今日、部活の朝練があって、一緒に朝ごはんが食べれないの……」
と、桃が俺に話しかけてきてくれて、朝ごはんを一緒に食べたかったと言ってくれたり。
「お兄ちゃん、おちんちん舐めてもいいですか？」
と、実妹の燐がそんな事を聞いてきたり。
「零ちゃん、おっぱい揉む？」
と、姉ちゃんがエプロンを谷間に埋め、おっぱいを露わにし、両手で持ち上げながら聞いてきたり。
俺の家での生活は、エッチな日々となっていた。
それに対し俺は――、
「桃、気にするな。朝ごはんは時間がある時に一緒に食べよう。燐、舐めていいぞ。でも、舐めたら責任もってイカせてくれな。姉ちゃん、ありがたく揉ませてもらうよ」
と、積極的に行動するようにしていた。
元々最近、積極的に行動するか否かを迷っていた。そんな時に姉ちゃん、燐、桃とセックスをして、桃に積極的になればいいと言われ、決心がついた。

せっかくエッチな事ができるんだ。楽しまなきゃ損だ。俺はこれから、本能のままに行動をする。
「うん、ありがとう。じゃあ兄さん、行ってきます」
「あぁ、行ってらっしゃい」
「ちゃんとイカせますから、舐めていいですか？」
「あぁ。いいぞ」
「ありがとうございます♪」
「じゃあ、いっぱい揉んでぇ♡」
「あぁ」
「んふぅ♡」
と、まぁ、朝から燐と姉ちゃんに二発ずつ抜かれて、俺の一日はスタートした。

第１６話　女子トイレで名前も知らぬ女子達と……♡♡

幼馴染みの瑠李（るい）は、水泳部の朝錬があるため、一緒には登校していない。
学校の校門をくぐると、スカートが短く、パンツが丸見えの女子達が歩いている。
こうして改めて見ると、エロいな。
下駄箱で靴から上履きに履き替える。そんな時、後輩の女子達が履き替える所を見てしまった。
パンツが丸見えなので、お尻も強調され、おっぱいもブラをしていないので、重力のまま揺れる。
……朝、二人に抜いてもらったのにムラムラしてきた。
今までの俺だったら、我慢をしていただろう。
だが、俺は本能のままに生きると決めた！　もう迷わないぞ！
「ねぇ」
俺は、ムラムラした対象の後輩女子三人に声をかける。
「「「れ、零様……！？」」」
三人は、俺に声をかけられたのがよっぽど嬉しかったのか、飛び跳ねて喜んでいる。おっぱいがぶるんぶるん揺れて、エロい！
「ちょっといいかな？」
「「「は、はい！」」」
三人を連れて、トイレへと向う。狭い個室の中で、俺は便座に腰掛け、三人を見上げる。
「れ、零様……？　私達へのご用向きは……？」
「あぁ……ここで俺とエッチしよう」
「「「っ！」」」
俺がそう言うと、三人は目を見開き、互いに見つめ合う。
「嫌、か……？」

「「「い、いえ！」」」
「そんな事ありません！」「ただ、びっくりしてしまって！」「零様に誘って頂けるなんて、思ってもみなかったので！」
「そうか。じゃあ、さっそくなんだけど、おっぱい出してくれるかな？」
「「「は、はい！」」」
三人は、恥ずかしがるどころか、そそくさと制服のシャツのボタンを外していき、高校一年生にしては大きい、巨乳をさらけ出した。
「おぉ……めちゃくちゃいい光景だ……」
巨乳女子三人が、俺の為に胸を露出して、俺に見せびらかしている。
もう、興奮し過ぎて股間が痛い……！
「君と君、こっちに来て」
両サイドにいた女子二人を、俺の両脇に来させる。にしても、言う事素直に聞くんだ。
「君は、跪いて、俺に奉仕して」
「い、いいんですか！？」
「あぁ。頼む。もう興奮し過ぎてて痛い」
「か、畏まりました！」
そう言うと真ん中にいた女子は、跪き、俺のズボンとパンツを脱がせチンコを露出させた。
フル勃起していた俺のチンコは、拘束を解かれると、ビンッと女子の目の前で起立した。
「こ、これが零様のおちんちん……♡　おっきい……♡」
「「……♡」」
チンコを目の前にして三人の女子は、恍惚とした表情を浮かべ、はぁはぁと息を切らしていた。
「も、もう、舐めてもいいですか……♡」
「あぁ。頼む」
「はい！　んちゅ♡　ぐぽっ♡」

いきなり咥えるとか、エロすぎだろ……！
「「あ、あの……私達は……」」
おっと、忘れちゃいけねぇ。
「二人はおっぱいで俺の顔を圧迫してくれ。そして、俺が二人を……」
「「んっ♡」」
俺は二人のマンコを、パンツ越しに刺激する。
「もう濡れてる……興奮してた？」
「「は、はいぃ♡」」
俺がクロッチの部分を弄る度に、クチュクチュと卑猥な音が鳴る。
「ジュポッ♡　ジュポッ♡　グポォ♡」
二人のエッチな音だけでなく、フェラをする音もなり、卑猥さが増していた。その音はトイレの中に響き渡っているので、誰か来たら速攻でバレる。
「どんどん濡れてきたな」
二人のパンツが、どんどんびしょびしょになっていく。もうパンツのクロッチ部分は、染みどころの騒ぎではない。濡れすぎて透け、マンコがはっきりと見えてしまっている。
「指、入るな」
「「んひゃぁ♡」」
俺は、クロッチの部分の隙間をねって指を侵入させる。そして、マンコの膣（なか）に挿（い）れる。中指と薬指の二本をいとも簡単に咥え込むマンコ。
エロすぎだろ。
「簡単に入ったな」
手を激しく動かす。
「「んあああああああ！！」」
嬌声を上げながら感じまくる二人。
うっ……これやばいな……。喘ぎ声を聞きながらフェラされてると、すぐにイッちまう……。

「ジュポッ♡　グポッ♡　ジュプッ♡　ジュポッ♡」
「くっ……もう、出そうだ！」
「らひれくらはい……♡」
「出る！」
ドビュルルルルルルルルルル！
「んんっ！？　ん～♡　んくんく……♡」
フェラをしている女子は、俺の出した精液を、嬉しそうに飲み干していく。
そして――、
「「私達も、イキますぅ♡」」
二人の女子もイッた。
「んぷ……♡　ごちそうさまでした♡　零様の精液が飲めるなんて、幸せです♪　でも、まだ大きいままですね」
「あぁ。だから、壁に手ついて、お尻をこっち向けて」
「は、はい♡」
フェラをしていた女子は、俺の言う通り、扉の方を向き、手をつき、巨尻をこっちに向けてくる。
「いい尻だな」
「んはん♡　あ、ありがとうございます……♡」
俺は立ち上がり、お尻を掴む。そして、パンツのクロッチ部分をずらし――、
「行くぞ」
「は、はいぃ♡　んひゃあああああああああ♡」
マンコの膣（なか）へとぶち込んだ。
「くっ……処女だから、キツイな……痛くないか？」
「だ、大丈夫ですぅ！　ぜ、全然痛くなくて、それよりも、すごく気持ちいいですぅ♡」
「何が気持ちいい？」
「れ、零様のお、おちんちんぅ♡♡　おちんちんが気持ちいいですぅ♡♡♡　オマンコ突かれるの、凄く気持ちいいですぅ♡♡♡」

俺が膣を突く度に、ギュと締め付け、愛液を溢れさせ、喘ぎ声を上げながら感じまくる女子。
膣を締め付けてくるから、チンコを出し入れすると強制的に気持ち良くさせられて、我慢が出来なくなってくる……！
「ごめん！　もう出そう！」
「は、はいぃ♡　出して、出してくださいぃ♡♡　わ、私の、私のオマンコの膣にぃ♡♡」
「出る！」
ビュルルルルル！！！
「んひゃあああああああ♡♡♡　で、出てる！　私のオマンコの膣に、零様の濃厚な精液がぁ♡　あぁ……幸せ過ぎて、中出しでイグぅぅぅ！！」
女子は、中出しをされてイッた。
「はぁはぁ……」
「はぁはぁ……♡」
俺はチンコを引き抜いた。すると、中から精液が逆流してきて、床にボタっと落下した。
「あ……もったいない……♡」
女子は、床に落ち続ける逆流精液を見つめながら、寂しそうに呟いた。
と、その時、トイレのドアが開く音が。そして、隣の個室に人が入ってきた。
「だ、誰か来ましたね……」
ぷしゃぁぁぁぁぁ。
隣で放尿が始まる。
「零様、おちんちんが……♡」
「あ……」
燐に飲まされた飲み物のせいもあるが、女子のおしっこの音をこんな間近で聞ける事は滅多にないので、非現実感と、ちょっとの背徳感で、俺はまた痛いくらいに勃起してしまった。

「れ、零様……わ、私、もう我慢が……」
「わ、私も……」
俺がさっき手マンでイカせた二人が、パンツを脱いで、膝を擦り合わせながら言ってきた。
スカートをたくし上げているので大事な所が丸見えだ。三人とも毛が生えてないんだな。パイパンは大好きだ！
「じゃあ、次は君だな」
「は、はい♡」
おしっこ中の女子がいる方の壁に手をつかせ、お尻をこっちに向けさせる。そして――、
「行くぞ？」
「は、はい♡　ん～～～～～～♡」
マンコに突き入れた。
女子は、隣の個室の女子に声が聞こえないように口を押さえながら喘ぐ。
だが、それでは駄目だ。この場面でバレないのはありえない。
「んんっ♡　そ、そんなに激しくしたら、こ、声が、声が出ちゃいますぅ……♡」
「いいよ。我慢しないで出して」
「そ、そんな事したら、ば、バレちゃ――んああ♡」
声を出させる為に激しく突いたら、思惑通り喘いでくれた。
すると、隣の個室から何かが落下する音が聞こえてきた。おそらく隣でエッチな事が行われてると知り、動揺してしまったのだろう。
思い切って声をかけてみるか。
「ねぇ、隣にいる君！」
「「「っ！？」」」
三人の女子達は、まさか俺が声をかけるとは思ってなかったのか、驚きの表情を浮かべている。
「こっちに来て一緒にシない？　エッチな事に、俺のチンコに興味があれば、だけど」

返事がない。やっぱりいきなりは駄目だったか？
と、俺が考えていると――、
コンコン。扉がノックされた。
「開けてあげて」
扉側にいた女子に開けてあげるよう言うと、女子は扉を開けた。
すると、そこには顔を真っ赤にしてスカートを脱ぎ、下半身丸出しにした女子が立っていた。
興奮しているのか、足には愛液が垂れている。
「スカート脱いじゃってるけど、我慢できない感じ？」
「は、はい……♡　元々おしっこした後、オナニーをしようと思っていて……」
「あぁ、なるほど……ごめんね、邪魔しちゃって」
「い、いえ……」
「この子イカせたら、君に挿(い)れてあげるからね」
「は、はい♡」
「れ、零様！？　わ、私は……！？」
「君は後で。最後になっちゃう分、一番激しく犯してあげるから」
「は、はい♡♡」
俺はこの後、四人の女子に中出ししまくった。
全員に三発ずつ、中出しをした。
本当に、本能のままに動いても大丈夫なんだな。
俺はもう、止まれないかもしれない。

次話へと続く。

第17話　廊下で金髪女子を後ろから……♡♡

トイレで四人の女子達を犯した俺は、四人と別れ、自分の教室に向かっていた。
階段を上り、廊下に出ると、目の前に同じクラスの金髪女子が歩いていた。
大きなお尻……水色のパンツ……しかもTバック……。
あ～駄目だ。燐のせいで本当にムラムラが収まらん！俺は自分でも驚くくらいすぐに行動に移していた。
「キャッ！？　あ、れいれい。おはよう」
「おはよう……」
「ん？　どうしたの？　……あ、おちんちん、大きくなってるね♡」
俺は後ろから抱きついた。股間をお尻にわざと密着させて。
「あぁ。だから、ここで犯していいか？」
「もちろんいいよ……ってえぇ！？　れ、れいれいがそんな事言うなんて……どうしたの？　なんか変な物でも食べた？」
あながち間違ってない。
「別に。ただ、自分の性欲を抑え込んでるのがバカらしくなってな」
「ふふ♪　そっか♪　そうだよ～れいれいは、自分の性欲に素直になっていいんだから♪」
「あぁ。だから、今ここでお前を犯すな」
「え……？　いや、ここは流石にまずいって言うか――ああぁぁんっ♡♡」
俺は問答無用で、金髪女子のマンコにぶち込んだ。
Tバックだから、すぐに挿(い)れられた。すでにびしょびしょに濡れており、簡単に膣(なか)へと侵入できた。
「れ、れいれい無理矢理すぎ……♡」

「でも、嫌じゃないだろ？　何もしてないのにこんなに濡れてるし」
「そ、そんなの嫌じゃないに、んっ♡　決まってるじゃ～ん♡　あっ♡　れいれいに抱きつかれて濡れない女なんてこの世にいないよぉ♡」
嬉しい事を言ってくれるぜ。だったらその気持ちにお応えして！
「んひゃあああ♡♡♡　お、オチンポが奥来たぁ♡　し、子宮口まで届いてるぅ♡♡」
更に深く、奥まで突くと、金髪女子はだらしなくヨダレを垂らしながら喘ぐ。
周りには生徒達がいっぱいいるのに。先生もいるけど、やっぱり何にも言わないんだな。
生徒が犯されてるのに。
「んっ♡　んっ♡　あぁぁぁん♡　あああああ♡♡　れ、れいれいのオチンポ、気持ちよすぎるぅ！　なんで今まで挿(い)れずに過ごせてたんだろう……！　こんなの味わっちゃったら、もうこのオチンポ無しじゃ生きて行けないよぉ！！！」
突く度に愛液が溢れ、バチュパチュと卑猥な音が鳴る。肌と肌がぶつかるパンパンと言う音も合わさり、興奮度を更に上げてくれる。
「膣(なか)が締まってきた……イきそうなのか？」
「う、うん……♡♡　い、イッちゃいそうなの……♡　れいれいのオチンポでイッちゃうのぉ♡♡♡」
「いいよ、イッて」
「んはぁあああああ！！！　イグ！　イグ！　イッぐぅぅぅぅぅぅぅ！！！」
ぷしゃぁぁぁぁぁ！！
金髪女子は、イクのと同時に潮吹きをした。
その量は凄まじく、あっという間に廊下に水たまりを作ってしまった。
「んほぉ〝！　れ、れいれい、待って……！　今、今イッてるからあ〝！」

金髪女子に止めてと言われるが、止めるわけがない。絶頂してるマンコが一番気持ちいいのだ。
「んほぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛！！！　イキマン抉られて、またイグぅ！」
またイッたらしい。だが止めない。腰を更に打ち付ける。
「んぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛！　だ、ダメぇ！！　お、オマンコ、オマンコ壊れちゃうぅ！！　あああ！！！」
「ぐっ……もう、出そうだ……」
「出して！　出して！　私のオマンコの膣（なか）にいっぱい出してぇぇぇぇ♡♡♡　子宮をれいれいのザーメンでいっぱいにしてぇ♡♡♡」
「ぐっ……出る！」
ドピュ！　ドビュ！　ドビュルルルルル！！！
「んあああああああああ！！！　れいれいに中出しされてるぅ♡♡♡　中出しされて、またイグぅぅぅぅぅぅぅ！！！」
嬌声を上げた後、体をビクビクと震わせる金髪女子。
俺はゆっくりとチンコを引き抜く。すると、中から精液が逆流してくる。
「はっ……はっ……はぁ……」
その場にへたり込む金髪女子。どうやらイキ過ぎた為、足腰が立たなくなってしまったらしい。
「んふ……♡　美味しい……♡」
まぁ、マンコから溢れてくる精液を舐めれる余裕があるなら大丈夫だな。
とは言え。俺のムラムラはまだ落ち着かない。
燐に飲まされたモノのせいで、ムラムラは落ち着かないにしても、ある程度射精（だせ）ば、なんとか落ち着く。だが、今はもっと射精（だし）たい。
だから俺は、教室に入り、この学校に転校してきて初めて俺のチンコを舐めた女子の元へと、向うことにした。

次話へと続く。

第１８話　眼鏡女子を教室でみんなの目の前で……♡♡

廊下で金髪女子を犯し終えた俺は、チンコ丸出しのまま教室へと入った。

廊下であんだけ金髪女子が嬌声を上げた為、教室中の女子達は全員興奮しきっていた。

大体の、いや、全員がオナニーをしていた。

俺はそんな中で、迷わず真っ直ぐ、このクラスの学級委員長を務める眼鏡女子の元へと向かった。

「れ、零様……♡」

目の前に立つと、蕩けきった表情で俺を見つめてくる。もう我慢できん！

「キャッ！　んあああああああ！！！」

俺は眼鏡女子を立たせ、後ろを向かせ挿入。バックで犯し始める。

クラスのみんなが見てる中でのセックスだ。なんだこの興奮……！

「んはぁぁぁぁんっ♡♡♡　れ、零様のおちんちん、気持ちよすぎますぅ♡♡♡　ずっと、ずっと欲しかったんですぅ♡♡♡　このおちんちんが、あああああああ！！！」

眼鏡女子の両腕を掴み、後手にして、激しく犯す。よくＡＶのレイプモノとかでやる犯し方だ。

これってこんなに気持ちいいんだ！

「す、凄い……セックスって、こんなふうなんだ……♡」

「委員長、気持ちよさそう……♡」

クラスメイト達は、眼鏡女子が犯される光景を見て、更に興奮してしまったようで、先ほどよりも激しくオマンコを弄り始めた。

「ほら、委員長の犯されてる姿を見てみんな、オナニーを始めたよ」

「んひゅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

俺が眼鏡女子の耳元でそう囁くと、その言葉で興奮してしまった

のか、イッてしまった。
「イッちゃったの？」
「は、はひぃ……♡」
「駄目じゃん。俺の許可なしにイッちゃ」
「ご、ごめんなさいぃ……♡　でも、イクの我慢できなくて……♡」
「全く……だらしないマンコだなぁ……だったら、もうイケないってくらいイカせてやるよ！」
腰を激しく、強く、速く打ち付ける。
「んひゃあああああああ！！！　らめぇぇぇ！！　お、オマンコ、オマンコ壊れりゅぅぅ！！　イキ過ぎてオマンコ壊れりゅうう！　死んじゃうぅ……♡」
眼鏡女子は、数え切れないくらい短い間隔でイキまくる。男だったら早漏って言われる。
「まだまだぁ！」
「あひゃあああああああああ！！！　も、もう無理ぃ！！　おかしくなる！　おかしくなるぅ！！」
「いいぞ！　おかしくなりやがれ！」
「あああああああああ

しされてるぅ！！！　子宮に零様の子種、入ってきてるぅぅぅぅぅ！！！　まだイグぅぅぅ！！！」

眼鏡女子は、最後の絶頂を迎えた。体を反らせ、ビクビクと体を震わせた後、そのまま前に倒れ込んでしまった。慌てて周りの生徒が支えてくれたので怪我はしなくて済んだ。

が、眼鏡女子が倒れた事によりチンコが抜けてしまった。すると、眼鏡女子のマンコから信じられないくらいの量の精液が逆流してきた。

「はぁはぁ……流石に疲れたな……」

俺は自分の席へと向かい、腰掛けた。

流石に疲れてきた。まだムラムラは収まらないが、体力との相談でもあるので、とりあえず一旦終了だ。

金髪女子も入ってきて、俺の前の席に座る。

マンコからはまだ、俺の精液が逆流してきていた。

「は～い、じゃあＨＲ始めるよ～。誰か委員長を席に座らせてくれ」

担任教師がそう言うと、金髪女子の隣の席に座っている茶髪女子が、眼鏡女子を抱きかかえ、俺の隣の席へと座らせた。

「おぉ～ありがとうな。じゃ、始めるぞ～」

と、先ほどまでセックスが繰り広げられていた教室とは思えないほど、普通に始まった。

本当に俺は、本能のままに動いていいんだ……！

今日で分かった。いや、分からされた。俺は、ここで女子達を犯しまくっていいんだと。

だったらもう遠慮はいらねぇ！

前に見た夢に、近づく時だ！

第１８話　眼鏡女子を教室でみんなの目の前で……♡♡（後書き）

エピローグ
俺は職員室に呼ばれていた。
「せんせ～い。来ましたよ～……あれ？」
職員室に入ると、担任がいなかった。
「人を呼び出しておいていないとか、ありえないだろ」
俺が踵を返して、帰ろうとすると、ちょうど担任が入ってきた。
ポヨン。
「おっとすまない。怪我はないか？」
えぇ。貴女のその豊満なおっぱいのおかげでね。
この人おっぱいデケェんだよな……何カップあるんだろうか……Hは軽く超えてるよな……。
「それで、話って？」
「あぁ。今日の朝についてだ」
っ！　やっぱり怒られるか……？
「二人だけって言うのは、少々可哀想ではないか？」
「え？」
へ？　どういう事？
「君とセックスをしたいと思っている子はたくさんいる。それなのに二人だけしか犯さないと言うのは可哀想だ。無理はしなくていいが、できるだけ多くの子達を犯してやってはくれないか？」
教師が生徒に言う言葉じゃねえ……。
「分かりました。頑張ります」
「ありがとう」
「ところで先生？」
「なんだ？」
「椅子、ぐちょぐちょですよ？」

「つ！？　こ、これは違うんだ……！？」
担任の座っている椅子は、愛液でぐちょぐちょになってしまっていた、
おそらく興奮していたのだろう。ここに来るのが遅れたのは、俺に興奮してるのがバレないよう、トイレで愛液を拭いてきたんたろう。
だが、無駄だ。
「先生、ついてきてください」
「え……？　どこに行くんだ？」
「トイレです」
「トイレ？　なぜだ……？」
「先生に、お仕置きする為です」
「っ……♡♡♡」
先生の目が、期待と興奮の目になったのを、俺は見過ごさなかった。

次話へ！

募集するキャラ一覧（前書き）

活動報告の方でも、記載させて頂いたのですが、この作品のＰＶ数がありがたいことに１０万を突破しました！
なので、それを記念して、この度、読者の皆様に各キャラの名前を募集したいと思います！

「自分で考えろよ」「人に任すな」「楽するな」
と、思われる方々も多くいらっしゃると思います……全くもってその通りでございます……。
ですが、実はこの作品を投稿した当初から、皆様と作っていける作品になればいいなと思っておりました！
なので、名前のないキャラ達は、読者の皆様に名前をつけていただきたいなぁと思っております！

なので皆様、どうかご協力のほど、よろしくお願い致します！！！

記入の仕方は
例）「金髪女子・〇〇〇〇」
と言う風にお願い致します。
一人だけでなく、何人も沢山のキャラに名前をつけて送ってくださって大丈夫ですので、どうかよろしくお願い致します！

募集期間は
「２０２４年１２／１～２０２５年１／３１」
までとさせて頂ければと思っております。

自分の名前が選ばれなかった……と思うことがあると思いますが、

皆様から頂いた、大切で貴重なお名前は、別のキャラにて使用させて頂ければと思っておりますので、ご安心ください！

下記の本文にて、募集するキャラを一覧にまとめましたので、そちらを見て、送ってくださいませ。

それでは、どうかよろしくお願い致します！

募集するキャラ一覧

・金髪女子

・茶髪女子

・眼鏡女子

・副委員長

・爆乳ショートちゃん

・担任教師

この6名のキャラの名前を皆様に付けて頂ければと思います！

どうぞ、よろしくお願い致します！

皆様と作り上げていく作品にできたら幸いです！

今後、新キャラがどんどん登場する予定ですので、皆様から頂いたお名前の中で、合いそうなお名前があれば、そちらに付けさせて頂くことがあると思います。

なんでこのキャラに！？　と思うかもしれませんが、どうかご了承ください……！

第19話　エロすぎる担任教師を、トイレで強制的に……♡♡（前書き）

プロローグ

「う、うぅ……」

「もじもじしてても駄目ですよ、先生。俺が今、先生にどうして欲しいか、分かってますよね？」

「……わ、分からない、です……」

「先生なのに、そんな事も分からないんですか……まぁいいですよ。はっきり言ってあげます。服を全部脱いで、全裸になってください」

「こ、ここで……！？」

「はい。ここで、です。普段みんなが使ってるトイレの個室で、恥ずかしいマン汁垂らしながら、全裸になってください」

「うぅ……」

「早く」

「は、はい……」

先生は、恥ずかしがりながらも服を脱いでいく。

パンツを脱ぐ時は、クロッチの部分がぐっちょり濡れていて、糸が引きまくっていた。エロすぎだろ。

全裸になった先生。しかし、胸は隠さずとも下は恥ずかしそうに隠す。

先生は他の女子と違って恥じらいがあるんだな。

でも――、

「先生、これはお仕置きなんですよ？　隠してちゃ駄目じゃないですか」

「う、うぅ……そ、そんな事言われても、は、恥ずかしい……」

「いいから。早くしてください」

「は、はい……」

先生は手をどけ、気をつけの姿勢に。

おぉ……！　パイパンか……！　大人の女性がパイパンだと、なんでこんなにエロく感じるんだ……！
「先生、毛、生えてないんですね？」
「い、言わないで……子供の頃から生えなくて、大人になったら生えるかなと思ってたんだけど、いつまで経っても生えなかったの……いい大人なのに無毛だなんて、幻滅したでしょ……」
「いいえ。むしろ興奮します」
「え……？」
「俺、パイパンの先生、好きですよ。エロくて」
「ほ、本当……？　こんな私でも、興奮してくれる……？」
「はい。ほら、興奮しすぎて俺、こんなになってます」
「あ……♡」
俺は、ズボン越しでも分かるくらいに勃起した股間を見せつける。
すると先生は、嬉しそうな表情を浮かべ、愛液をさらに分泌させた。
「今から俺の言う事をちゃんと聞けたら、先生を犯してあげますよ」
「ほ、本当……？」
「はい」
「な、何をすれば……？」
「そうですね……まずは、オナニーをしてください」
「っ……！？」
さて、お仕置きの時間だ。

第19話　エロすぎる担任教師を、トイレで強制的に……♡♡

「お、オナニー！？　こ、ここで！？」
「そうです。どうしたんですか？　まさか今さら嫌だとは言わせませんよ？　それに、先生に拒否権や選択権はないんです。これは、先生へのお仕置き、なんですから」
俺は先生に近づく。
「ほら、早くオナってください」
先生を強制的に便座に座らせる。
女教師を見下ろすって、なんか、いいな。
「ほら。早くそのグチャグチャなド変態マンコを弄ってくださいよ」
「わ、分かりました……んっ……♡」
おぉ……！　先生が本当に触り始めた！
しかもクリトリスを弄り始めたって事は、普段からオナニーの最初はクリからって事だよな。エロい！
「先生って、おっぱい大きいですよね。何カップあるんですか？」
「んっ……♡　あ、Ｉカップ、んっ♡　あります……♡」
Ｉ！　マジかよ！　巨乳じゃなくて、爆乳に分類されるカップじゃんか！
うはぁ～！　最高～！　挟まれてぇ！
「んっ……♡　はっ……♡　はぁ……♡」
「先生、エロい声が出ちゃってますね」
「んっ……♡　い、言わないで……が、我慢できなくて、出ちゃうの……♡　んふぅ……♡」
「別に我慢なんてしなくていいですよ。先生のドエロい声、もっと聞かせてください」
「んんぅ……♡　あぁぁ……♡」
クリを弄るスピードが速くなってきた。それに、左手も使って、

マンコの膣(なか)に指入れてる。
これはイキそうか？　だとしたら――、
「おっと」
「っ！？」
「駄目ですよ先生。まだイッちゃ」
「な、なんで……！？」
俺は先生の両手を掴み上げ、オナニーを強制的に中断させる。先生は悲しそうな表情を浮かべている。
クリトリスはイキそうになっていた為か、大きく膨らんでいる。マンコはよく見えないが、おそらくヒクヒクしてるに違いないだろう。
「俺は、『オナニーをしてください』と言っただけで『イッてください』とは言ってないですよ？　俺の言う事をちゃんと聞いたら犯してあげると言いましたよね？　このまま勝手にイッたら、命令違反でお預けだなぁ。それでもいいんですか？」
「……です」
「聞こえないです」
「い、嫌です……君に、犯されたいです……」
「君？」
「れ、零様、零様におかしくなるくらい犯されたいですっ！」
「じゃあ、勝手にイッては駄目ですよ？」
「は、はい……」
「じゃあ、オナニー再開です」
「はい」
先生は再びオナニーを始める。
「んっ……♡　はっ♡　あっ♡　んんぅ♡」
「かなり激しいですけど、イッちゃ駄目なんですからね？」
「は、はいぃ♡」
と言いつつも、クリとマンコ弄る指はどんどん激しくなっていくのはなぜ？

この人本当に分かってんのかな？
……なんか、俺の中に眠ってるドＳの部分が覚醒しそうなんだけど。
「あ、駄目！　イッちゃいそう！」
「……」
「あぁぁぁ！　イグぅぅぅ！」
ぷしゃぁぁぁ♡
「はぁはぁ……」
あ～あ、イッちゃったよ。こりゃキツ～いお仕置きが必要だな。
「先生？　俺、イッちゃ駄目って言いましたよね？　なのになんで勝手にイッてるんですか？　しかも潮まで吹いて。俺の制服ビチョビチョなんですけど」
「ご、ごめんなさい……！？　ど、どうしても我慢できなくて……！？」
目元に涙を浮かべて、本当に申し訳なさそうに謝る先生。大人の女性が敬語で謝ってくるのって、なんかよく分からないけど、エロいな。
「許してあげたいけど、命令違反だからなぁ。どうしようかなぁ」
「っ！？　ど、どうか許してください！？　わ、私、なんでもしますからぁ！？」
「なんでも？」
「は、はい！」
「じゃあ、キツ～いお仕置きするけど、いい？」
「っ！　は、はい……♡　主の命令もちゃんと聞けないような雌豚に、キツイお仕置き、してください……♡」
なんか目が輝いてるような気がするけど、まぁいいか。もう俺も限界だし。
「じゃあ、今からイラマしますからね」
「は、はい――んぶぼぉ゛！？」
俺は先生の返事を待たずに、口の中へとチンコをぶち込んだ。い

きなり喉奥まで届くくらいに一気に。
「んぶぅ〝……♡」
うわ……ほんと、これヤバい……喉奥、メチャクチャ気持ちいい！　桃にした時も思ったけど、視覚的にもメッチャエロいし、音もエロい。しかも口を突くから、まるでマンコを突いてるみたいで、メチャクチャ興奮するんだよな！
もう癖になってきた！
「んぶぅ〝！　ぐぶぅ〝！　ぐぼぉ〝！　じゅぼぉ〝！」
俺は、先生の頭を両手で押さえつけて固定し、腰を振りまくる。
先生の口の端からは、唾液と胃液がこぼれ落ちている。口の中の唾液と胃液が増えたことで、滑りがよくなり、更に気持ちよさが倍になる。
「んぶぅ〝！　ぐぶぅ〝！　ぐぼぉ〝！　ぶぶぉ〝！」
あ〜これヤバいわ〜。気持ちよすぎてすぐ出ちゃうわ〜。ま、これはお仕置きだから、遠慮はいらないよな。
「先生、そろそろ出そうなんで、もっと激しくしますね！」
「んぶぼぉ〝！？　んぶぅ〝！　ぐぶぅ〝！」
俺は、腰を動かすのと同時に先生の頭も前後に揺らす。それにより、チンコがさらに喉奥にまで届き、亀頭と竿が刺激される。
「先生、出る！　全部飲めぇ！」
ドビュ！　ドビュルルルルルルルルル！！！！
「んぶぅ〝！？　ごぶぅ〝……！　ごぎゅぅぅぅ……」
「くっ……」
俺は、先生の喉奥に大量に射精する。精液は直接喉奥に送られ、強制的に精飲させる。
強制的に飲まされているので、普段の自分で飲む時の音ではなく、無理矢理嚥下している、苦しそうな音が鳴っている。
なんだこれ……ドチャクソエロい！
「ぐぎゅぅぅぅ……ごぎゅぅぅぅ……」
先生は、大量に入ってくる精液を、嬉しそうに飲み干していく。

苦しいだろうに、顔は愉悦に歪み、もっと飲みたいと言わんばかりにチンコに吸い付いてくる。
「ぐぎゅうぅぅぅぅ♡」
「はぁはぁ……めっちゃ出た……」
「ちゅぱ♡　ぐふぐふ……！　ぎゅうぅぅぅぅ……」
チンコを口の中から引き抜くと、先生が軽くむせる。が、それも一瞬の事で、先生は口の中にある残った精液を飲み込んでいく。その際、ゲップのような音が、喉から鳴った。
「み、見へくらはい……へんふのへまひや♡」
先生は口を開けながら、全部の飲めたと報告してくる。
「全部飲むのは当たり前ですよ。何を自慢気に言ってるんですか？」
「す、すみません……」
「それじゃあ、続き……と言いたい所なんですが、この後、俺ちょっと用事があるので、今日はもう帰ります」
「え……！？」
「ふっ。そんな顔しないでください。お仕置きは、まだまだ続きますから。連絡先教えてください。お仕置きの内容をメッセで送るので」
「は、はい♡」
俺達は連絡先を交換した。ちなみに、先生は俺を『ご主人様』と登録し、俺は『爆乳奴隷』と登録した。
それを見た先生は、「ど、奴隷……♡　うふふ♡」と嬉しそうに笑みをこぼしていた。
「それじゃあ先生。また明日」
「は、はい！」
「あ、そうだ先生」
「はい？」
「今日はもう、オナニー禁止ですからね」
「え！？　な、なんでですか！？」
「お仕置きはまだ続いてるんですよ？　俺の命令、聞けますよね？」

「は、はい……」
「よし。それじゃあ、さようなら」
「さ、さようなら……」
俺は、トイレを出て学校を後にした。

ちなみにこれは余談だが、後日、金髪女子から先生にイラマした三階の女子トイレが、女子達の間でイラマの聖地として話題になったと聞かされた。
あの女子トイレで、俺にイラマして欲しい女子達が大勢いるんだそうだ。
これは今後が楽しみだな！

第１９話　エロすぎる担任教師を、トイレで強制的に……♡♡（後書き）

次回予告！

「ねぇ、れいれい」
「ん？」
「ハロウィンの日にさ、フェラさせてあげたおっぱいの大きい女の子、覚えてる？」
「あぁ。覚えてるよ。ってか、あの爆乳は忘れない」
「あの子とはもうエッチしないの？」
「いや、本当はしたいんだけど、最近姿見ないんだよな」
「そっか～。もしかしたら、恥ずかしいのかもね。奥手ってやつ？　だかられいれいから話しかけてあげたら、飛び跳ねて喜ぶよ、きっと」
「そう？」
「うん！　ってか、女で奥手って一番駄目なやつなんだけどね。男が奥手なのは可愛いし当たり前なんだけど、女が奥手は一番駄目。そんなんじゃ男に呆れられるよ」
「そうなんだ……」
「れいれいも、奥手女子って嫌でしょ？」
「いや。俺は奥手でもそうじゃなくてもどっちでも平気だぞ？　むしろ奥手の方が、エッチの時に可愛い反応するから良かったりするな」
「えぇ～！　そうなの！？　れいれい守備範囲広すぎでしょ～♪」
「そ、そうか？」
「うん！　もう、れいれいって本当に女子の願望や妄想、欲望が詰まった男子だね♡」
「恐縮です」

「なんで改まるん♪　じゃあれいれい、あの子の事、犯しまくっちゃってね♡」
「すげぇセリフだな……まぁいいや。おぅ！　任せとけ！」
「あ、明日こそ、先輩に話しかけるぞ……！　お、おちんちん、また舐めたい……♡　精液、飲ませてほしいなぁ……♡」

次回
『図書室で、爆乳ショートちゃんを……♡♡』
お楽しみに！

第２０話　図書室で、爆乳ショートちゃんを……♡♡（前書き）

プロローグ

「んっ……♡　あっ……♡　はっ……♡」

水色を基調とした、可愛らしい部屋のベッドの上で、一人の少女がオナニーをしていた。

「んんっ……せ、先輩……♡」

その少女は、Ｊカップのおっぱいを持つ、爆乳ショートちゃんだった。

「はぁん……♡　先輩……♡　もっと、オマンコ、弄ってください♡♡」

右手の中指と薬指を、マンコの膣（なか）に入れ、激しく動かす爆乳ショートちゃん。その度に、ピチャクチャと、いやらしい水音が鳴り響く。

「あぁぁあ♡　駄目ぇ♡　イッちゃうぅぅ♡」

爆乳ショートちゃんが、あと少しでイケそうと言う所で――、

ピリリリリリリリリリリリリリ！

「っえ！？　もうそんな時間！？　学校に行かなきゃ！　遅れちゃう！」

爆乳ショートちゃんは結局、イク事ができないまま、学校へ登校した。

第２０話　図書室で、爆乳ショートちゃんを……♡♡

「うぅ……」
「お、あれは爆乳ショートちゃん。お～い……って、なんか怒ってる……？」
俺は、爆乳ショートちゃんに話しかけようとしたが、なんか表情が険しかったので、また後でにする事にした。

♡　♡　♡

今は授業中。
「はぁはぁ……」
早く授業終わってくれないかな……朝、イケなくてムラムラが収まらない……。
早くトイレに言ってオナニーをしたい……！
キーンコーンカーンコーン。
終わった！
私はトイレに駆け込んだ、けど。
「ひ、人が多くて、オナニーができない……」
流石に、人がいっぱいいる中でのオナニーは恥ずかしくてできない。
私は結構声が出ちゃうから、人がいない所でじゃないと、エッチな事ができない。
先輩に呼ばれてフェラさせてもらえた時、あの時も声が出そうだった。多分出ていたとは思う。
「駄目だ……濡れて来ちゃった……」
愛液がどんどんと溢れてきちゃう……パンツに染みができてきて、もう大変な事になってしまっている。

「うぅ……」
結局、オナニーができないまま、放課後になってしまった。
よし。このままお家に直行しよう！と、思っていたのに……。
「あれ？　今日図書委員の仕事じゃなかったっけ？」
「そ、そうだった！」
お、オナニーの事で頭がいっぱいで、大切なお仕事をサボってしまう所だった！
図書室で、騒いだりする人がいないかチェックしたり、貸し出しの受付をしたり、お仕事をしている私。受付のところに座っているけど、手はオマンコを触ってしまっている。
「んっ……」
この位置なら、台もあって下半身は見えないし、人もあまり来ないから、少しずつならオマンコを触れる。
オマンコ、パンツ越しなのにグチョグチョなのが丸わかりだぁ……こんなの、先輩に見せれないよぉ……恥ずかしすぎる……。
私が、こっそりオナニーをしていたら――、
「あの」
声をかけられた。
「んひゅ♡　あ、は、はい！」
いけないいけない！　オナニーに夢中になってちゃ駄目！　今はお仕事中なんだから！　と思って顔を上げると、そこにいたのは――、
「せ、先輩……！？」
「おう。久しぶり」
「あ、あ、え、えと……お、お久しぶりです！」
ど、どどどどどどどうしよう！？　だ、大好きな先輩が今、目の前に！　しかも、オナニーのオカズにしてた直後だったから、顔が直視できない……！
「な、何か借りられますか？」
「あ～うん」

「何を？」
「そうだな……君を」
「え……？」
「君を借りたい」
せ、先輩が、私を……？　そ、そんな夢みたいな事、あっていいの？　これは夢なの？
「ちょっとこっち来て」
「あ、はい……！」
私は先輩に手を引かれ、あまり人が来ない本棚のところに連れて行かれた。
「ここでならいいか」
「あ、あの……先輩……？」
「いきなり呼び出してごめんな。しかも委員会の仕事中に」
「い、いえ……」
先輩のシュン顔、可愛い♡
「俺、君とエッチしたくて」
「……」
い、今、なんて、言いました……？
「駄目、かな……？」
「はっ！？　だ、駄目じゃないです！　そ、その、今のはちょっと驚いたと言うか、その……わ、私なんかでいいんですか……？　先輩のクラスには可愛い子がいっぱいいるのに……」
「君がいいんだ。その大きなおっぱいと、君のフェラテク、それが忘れられなくて」
あぁ……嬉しい……！　これが夢でもなんでも、もういい……今この瞬間の幸せは変わらないから……！
ディルドでフェラの練習しといてよかった……！　先輩に褒められた……！
この大きすぎるおっぱいも、ずっと嫌だった。男子達に気味悪がられるから。でも、先輩は、このおっぱいを気に入ってくれてる。

初めてこのおっぱいで良かったって思えた。
「あ、ありがとうございます……！　わ、私も、先輩とエッチしたいです……！　先輩のお、おちんちん、もう一度舐めさせてほしいって、ずっと思ってて……精液も、飲ませてほしいなって……」
い、言っちゃった……！　ひ、引かれないかな……？
「そうやって言ってくれてすごく嬉しいよ！　俺のチンコでよければいくらでも舐めてくれ！　精液だって、好きなだけ飲んでいいぞ！」
「ほ、本当ですか！」
「あぁ！」
う、嬉しい……！　嬉しすぎる……！　もう、我慢しなくて、いい、よね……？
だ、大胆になっても、いいよね……？
「せ、先輩……！」
「ん？」
言うぞ……言うぞ……！
「お、おちんちん、舐めていいですか……！」
言えた……！
「あぁ！　もちろんだ！」
やったぁ……！！！
「じゃあ、舐めさせていただきますね……♡」
「あぁ」
私はしゃがみ込み、先輩のズボンを脱がせる。中からはボクサーパンツが出てきた。先輩はボクサーパンツ派なんだ。
男子の下着には種類が沢山ある。ボクサーパンツやトランクス、ブリーフなど。サラシもあるけど、先輩は着けてるのかな？
「先輩、大きくなってます……♡」
「君のおっぱい見てたら、自然とね」
「あ、ありがとうございます……♡　う、嬉しいです……♡」
そんな事言われたら、オマンコキュンってなっちゃうよぉ……♡

先輩のおちんちんは、パンツの上からでも分かるくらい勃起してる。形が浮き上がってて、とってもエッチ♡
「んちゅ♡」
私は我慢できなくてつい、パンツの上からおちんちんにキスをしてしまった。してから気づいた。先輩のパンツを私の唾液で汚してしまった事を。
「す、すみません、先輩……！？　わ、私勝手にパンツにキスして、汚してしまって……！？」
「そんな事、気にしなくていいよ。パンツ越しにキスされるのエロくて興奮するし、パンツはどうせ俺の我慢汁で汚れてるから。むしろ、俺こそごめんな。我慢汁とおしっこで汚れたパンツにキスさせて」
「そ、そんな！　謝らないでください！　わ、私、我慢汁も、おしっこも大好きなので、全然平気です！」
「なら、良かった♪」
うぅ～……先輩は優しすぎるよぉ……！　私を許してくれたばかりか、逆に私を気遣って謝ってくれるなんて……！　なんでそんなに優しいのぉ……！
もう……大好き過ぎる……♡
「じゃ、じゃあ、このまま、パンツの上から舐めてみてもいいですか……？」
「あぁ。君がしたい事、していいよ」
「あ、ありがとうございます……！　んむ……♡」
私は、パンツの上から、おちんちんを舐め始めた。
パンツはあっという間に私の唾液で濡れていき、染みを作っていく。なんか、私を染み込ませてるみたいで、興奮しちゃう……♡
しかも、唾液で濡れたから、透けて来て、おちんちんがちょっと見えてきちゃってる……！
すごく、エッチ……♡
「んちゅ……♡　れろぉ……♡」

「くっ……」
先輩が感じてくれてる……♡　嬉しい♡
我慢汁の味と、おしっこの臭い、それと、先輩の汗の匂い……♡
堪らないよぉ♡
「ちょ、や、ヤバい……！」
あ、先輩、イキそうなのかな……？　早漏男子って超最高って友達が言ってたけど、本当だ♡
すぐにイキそうになってるのって、すごくいい♡
「あ、駄目だ！　イクっ！」
「あんむ♡　んんっ♡」
ドビュルルルルルルルル！！！
私は、先輩がイク寸前にパンツをずらし、おちんちんを外に出す。そして、そのまま亀頭を口に咥え、射精をお口の中で受け止めた。
もの凄い量の精液が、私のお口の中に吐き出されていく。こ、これ、凄く幸せ……♡
「ごくごく……♡」
この前は、金髪先輩と分け合ったけど、今はこの精液を独り占めできる……♡
今だけは、この精液は私だけのモノ♡　全部私が飲むんだ♡
「んくんく……♡　ぷはぁ……♡」
「ごめん。めっちゃ出た」
「いえ♡　むしろこんなにいっぱい出してくれて、ありがとうございます♡　私、とても幸せでした♡」
「そうか。ごめん、俺、もう我慢できないや。お尻、こっち向けてくれるか？」
「は、はい……！」
私は立ち上がり、スカートを捲って先輩にお尻を突き出す。
「可愛いパンツだね」
「あ、ありがとうございます……♡」
下着褒められるの凄く嬉しいぃ！　今日は安物の下着にしなくて

良かったぁ……！
「めっちゃ濡れてる」
っ！　忘れてた！　私、パンツグチョグチョなんだった……！？
「こんなの見せられたらもう本当に我慢できない。もういきなり挿(い)れるよ？」
「は、はい……♡」
引かれなかった……！　良かった……！
「んっ……」
あ、パンツずらされてオマンコにおちんちんが当たってる……！
私、ついに先輩とセックスしちゃうんだぁ……！
「行くよ！」
「んんっ！」
は、挿(は)いって来たぁ……！　初めては痛いって聞いてたけど、全然痛くない！
それどころから、凄く気持ちいい！　こ、こんなの――、
「こ、声が出ちゃう……！」
「駄目だよ？　ここは図書室なんだから、声は我慢しないと」
「んっ♡　んっ♡　んんぅ♡」
せ、先輩……声を我慢してって言う割に、腰の動きが激しすぎる……！
て、手で口を押さえてないと、大声で喘いじゃいそう……！
「よいしょ」
「んへぇ！？」
せ、先輩！？　い、今、手を取られたら、私声が出ちゃう……！
先輩が私の両手を後手にして、激しく突いてくる。
「んんっ♡　はっ♡　あっ♡　んはぁん♡」
「声、漏れちゃってるよ？」
「が、我慢、できないれすぅ……♡」
「ほら、指舐めて」
「んんっ♡」

せ、先輩の指が口の中にぃ……♡
な、何これ……口の中に指入れられながら、バックで突かれてるって、こんなの私が夢見てた先輩からの犯されだぁ……♡
夢がどんどん叶っていく……♡
「へ、へんはい……ほ、ほえは、ほえはへはいはふ……」
「我慢しなきゃ駄目だよ？　ここは図書室なんだから」
先輩は、私の口を強制的に開かせながらそう言ってくる。こんなの我慢できないよぉ……♡
先輩って、結構ドSなのかな……？　だとしたら、すごく嬉しい♡
「はっ……♡　んんっ♡　あああ♡　らめれふ！　いっはいまふぅ♡」
「いいよ。イッて」
「んはあああああああああああ♡」
私はイッてしまった。声はなんとか抑えたつもりだけど、大丈夫かな……？
「はぁはぁ……んひゅ！？」
せ、先輩がまた腰を動かしてきた……イッたばっかりだから、駄目……！
「せ、先輩、待って……」
「待たないよ。俺がまだイッてないから」
「んひゅぅ♡　んはぁぁぁぁんっ♡」
せ、先輩の腰振り、よ、容赦ない……！　イッたばっかりのオマンコ、気持ちよすぎる……！
朝からイキたくてイキたくて我慢してたから、余計に気持ちよさが増してる……！
「せ、先輩……私、また、イッちゃいそうです……！」
「いいよイッて！　俺ももう、イキそうだから！」
「い、一緒に、一緒にイキたいですぅ♡」
先輩と一緒！　先輩と同時イキ♡
「行くぞ！」

「はいぃ♡　私もイキますぅ♡　ああんんあああ♡」
「くっ！」
ビュル！　ドビュルルルルルルルル！！！
「んあああああああああああ♡　中出しされて、またイッちゃうぅぅ♡」
中出し、幸せ過ぎる……♡
「「はぁはぁ……」」
あ……おちんちん抜かれちゃった……ずっと挿れてたい……。
「すごい……いっぱい……♡」
私のオマンコの膣から、先輩の精液がいっぱい溢れてきてる……♡
嬉しい♡
「んふ♡　美味しい♡」
先輩の精液って、なんでこんなに美味しいんだろう？
「ん？　先輩？」
どうしたんだろう。先輩がモジモジしてる。
「ごめん、ちょっとトイレ行ってくる」
トイレ……駄目！
「せ、先輩！」
「んっ！」
私は先輩の手を掴む。おしっこするなら、トイレじゃなくて――、
「おしっこなら、私のお口にしてください！」
「い、いいのか……！？」
「はい……！　私は、先輩の性処理係で、便器です！　お好きなように使ってください！」
「じゃ、じゃあ……」
「んっ♡」
先輩のおちんちんを咥える。すると――、
「くっ……」
「んっ……♡」
ぷしゃあああああ！

先輩のおしっこが、お口に入ってくるぅ♡
精液と違って、ドロっとしてないから、スムーズに喉奥に入ってくる♡
「ごくごくごく……♡」
このおしっこ、ずっと飲んでられる……♡
「くっ……もうちょっと……」
いいんですよ……ずっと出してても……♡
「ごくごくごく……♡」
「うぅ……はぁ……スッキリしたぁ」
終わっちゃった……ちょっと寂しい。
「ぷはぁ♡　ごちそうさまでした、先輩♡」
「あ、あぁ。ありがとうな」
「いえ♡　あの、連絡先、交換してくれませんか？」
「あぁ、いいよ」
「先輩がおしっこしたくなったり、射精したくなったりしたら、いつでも呼んでください。いつでもどこでも駆けつけますから……！」
「わ、分かった。今度はパイズリを頼んでもいいか？」
「あ、はい！　パイズリはまだ練習中なので、先輩にしてもいいかなって思えるレベルになったら、させて頂きますね！」
「おう。楽しみにしてるぜ」
「はい♡」
この後、先輩は帰って行った。
受付に戻ると、他の生徒達はみんな帰っていて、置き手紙があった。
『一人だけズルいぞ』と。
「これは、私の親友の字だな……」
バレちゃったか。今度先輩に頼んでみようかな。
♡　♡　♡

「ただいまぁ～」
家に帰ってきた私。
自分の部屋のベッドの上で横になりながら、スマホを眺める。そこには『大好きな先輩♡』と書かれている。
「先輩の連絡先、ゲットしちゃったぁ～！」
ベッドの上で転がる私。こんなの嬉しすぎてどうにかなっちゃうよぉ！
「そうだ！　パイズリと、フェラ、イラマと飲尿の練習しなくちゃ！」
先輩に喜んでもらう為に、しっかりと練習して、上手くなって、先輩に褒めてもらうんだ……！
私は、固定型のディルド、射精機能があるディルド、普通のディルドを用意して、練習を始めた。
先輩、待っててくださいね！　絶対に喜ばせますから♡

第２０話　図書室で、爆乳ショートちゃんを……♡♡（後書き）

次回予告！

『零様ぁぁぁぁぁぁ♡♡♡』

沢山のスクール水着女子達が、零を誘惑する！

「ねぇ、零君」

「ん？　どうした、瑠李（るい）」

「明日さ、放課後、水泳部に来ない？」

「え？　いいのか？　部外者が行っても」

「う、うん。実はね、部員のみんなが零君と会いたいって言ってて……」

「それって……」

「うん。多分、零君のおちんちんが目当てなんだと思う。もし、嫌なら無理はしなくていいんだけど……」

「いや。行くよ。俺は、俺を求めてくれる女子と向き合うって決めたから」

「本当！　ありがとう！　零君大好き♡　じゃあ、明日、みんなを犯しまくっちゃってね♡」

「おう！　任せとけ！」

「零君と、プールでエッチ……♡　うへへ～♡　想像しただけで、オマンコ濡れてきちゃう……♡」

次回

『水泳部見学で、水泳部女子達を犯しまくり♡♡』

お楽しみに！

第21話　水泳部見学で、水泳部女子達を犯しまくり♡♡（前書き）

プロローグ
「はぁはぁ……！」
「お、来た」
「お、おはようございます……！　すみません、遅くなってしまって……！」
「ううん。全然。まだ約束の時間前だし」
私は今、先輩に朝から呼び出してもらっていた。
朝、スマホにメッセージが届いてて、そこには『朝イチのおしっこ、飲んで欲しいんだけど、今から公園に来れたりする？』と書かれていた。
私はそれを読んだ時、飛び跳ねたくなるくらい嬉しかった！
だって先輩が、私を便器として使ってくれる！　私におしっこを飲ませてくれる！　しかも、朝から会ってくれる！
こんな最高な事はない！　私は慌てて制服に着替えた。パンツはエッチなやつ。いつエッチするか分からないから、準備はしっかりとしておかないとね！
そして、待ち合わせ場所の公園に行くと、先輩がモジモジしながら立っていた。
あぁ……随分待たせてしまった……！？　これじゃ、性処理係として、便器として失格だ……！
「ご、ごめん……早速で悪いんだけど、俺もう、我慢できなくて……！」
「は、はい！　すみません、お待たせしてしまって……！　ど、どうぞ……あ～……」
私はしゃがみ込み、お口を大きく開ける。
先輩はズボンのチャックを開けて、中からおちんちんを取り出す。

え……これって勃起してるのかな……？　噂で聞く、朝勃ちってやつ……？
「で、出るよ……！」
「は、はひ……♡」
今は先輩のおしっこを飲むことに集中しなきゃ！
ジョロロロロロ……！
「んっ！　んっ……♡　んくんく……♡」
先輩のおしっこ、お口の中に来たぁ……♡　こんな至近距離で先輩のおしっこする姿が見れるなんて……♡
確か、立ちションって言うんだよね……？　先輩の立ちション姿、最高過ぎる……♡
「んっ！」
「ご、ごめん……！　コントロールが難しいのと、跳ねちゃって、顔におしっこが……」
そんな、気にしないでいいんですよ、先輩……♡
私の顔は、先輩の精液とおしっこで汚してもらう為にあるんです……♡　どんどん沢山汚してください……♡
あぁ……♡　この顔にかかる温かい感じ……幸せぇ……♡
「んくんくんく……♡♡」
「ふぅ……スッキリ……」
「ごっくん……♡　綺麗にしますね♡　んちゅ……♡　ぢゅるるるるる♡」
「ありがとう」
「はい！」
私は、先輩のおちんちんを舐め、おしっこを終えたおちんちんを綺麗にした。残りおしっこ、美味しい♡
けど、あぁ……終わっちゃった……昨日よりは長かったけど、やっぱり終わっちゃうと寂しいな……もっともっと先輩のおしっこ、飲んでいたい……。
「ゲェェェ！　っ！？」

や、やだ！？　私、先輩の前でゲップしちゃった……！？　は、恥ずかしすぎる……！？
しかも、結構大きいゲップを……！？　流石にこれは引かれるよね……？
「ご、ごめんなさい、先輩……！　ゲップしちゃって……！」
「そんな謝んなくていいよ。ゲップなんて誰だって出るんだから。それに、俺のおしっこ飲んだ後にゲップしてもらえるの、超、嬉しい！　これからはゲップももっと聞かせて？」
「は、はい……！」
先輩、本当に優しすぎる……！　ゲップまで許してもらえるなんて……私、もう先輩無しじゃ生きていけないかも……！
「ゲップだけじゃなくて、おならとかも全然していいからね」
「え、えぇ！？　お、おなら、ですか……！？」
「うん……やっぱり、嫌だよね……」
せ、先輩が落ち込んじゃった……！？
「い、いえ！　嫌ではないです！　むしろ嬉しいと言うか……！
その、そこまで許してもらえるんだって、驚いただけでして……！」
「そ、そっか～……！　良かった～！」
先輩のこの笑顔、無くさせたくないなぁ……。私にできる事ならなんでもしよう！　先輩の為なら私、なんでもできる！
ぷぅ～。
「ん？」
「せ、先輩のおしっこ飲んだら、お、おならも出てしまいました……」
「ふふ♪　ありがと！　おならも可愛いとか、反則だよ！」
反則なのは先輩の方ですよぉ！　その笑顔とその優しさ、先輩は存在自体が反則ですぅ……！
「それじゃ、また後で学校でな」
「え……あ、はい！　また学校で！」
先輩は帰って行ってしまう。

「エッチは、なしか……」
なんか、本当におしっこするためだけに呼ばれたのが、凄く嬉しい……♡
「先輩、私を便器として認めてくれたのかな……♡　だとしたら、嬉しいな……♡」
私はルンルンとした気分で、家へと戻った。

第２１話　水泳部見学で、水泳部女子達を犯しまくり♡♡

俺は今、プールにやって来ていた。
放課後の部活の時間だけあって、あちらこちらから声が聞こえてくる。
「瑠李はどこにいるんだ……？」
プールがある付近に来たのはいいが、まだ道を覚えれてないから、どこに行けばいいのかが全く分からない。
プール付近の更衣室で、俺と瑠李は初めてエッチな事をしたんだよな……。
「ヤベ……思い出したら勃ってきちった……女子どこかにいねぇかな？」
燐に飲まされたヤツ、本当に強力すぎるだろ……。と、俺がそんな事を思っていると――、
「あれ？　零様？」
「ん……？」
後ろから声をかけられ、振り向くと、そこにはスクール水着を身にまとった、ドエロい女子が三人いた。
スクール水着なのに、おっぱいを隠していない。下半身だけを隠している水着で、その水着は普通、男子が着用するものでは？　と言う水着を着ていた。
おっぱい柔らかそう～。揉みてぇ～！
「本当に来てくださったんですね♡」
「ありがとうございます♡」
「零様、おちんちんが凄いことになってます……♡」
「あぁ。三人共、俺のチンコ舐めてくれ」
「「「はい……♡」」」
三人は俺の側にやって来て、俺の前に跪く。そして、俺のズボン

とパンツを脱がせて、勃起チンコを取り出す。
「「「うわぁ……♡」」」
「見てないで、さっさとしてくれ」
「「「は、はい！　すみません……！」」」
俺がそう言うと、三人はチンコを舐め始めた。
うわ……これやべぇ……！　ハロウィンの時に金髪女子と爆乳ショートちゃんからダブルフェラしてもらった事あるけど、トリプルはそれ以上だ……！
「「「ピチャ……♡　チュプ……♡　れろぉ……♡」」」
視覚的にも、聴覚的にもエロすぎて、興奮がヤバい！
「な、なぁ……誰か一人、アナル舐めてくんない？」
「「「はい！　私が舐めます！！！」」」
全員の手が上がるとは思わんかった。
「じゃ、じゃあ、君」
「っ～～～♡　ありがとうございます！」
指名されなかった残りの二人は、超～残念そうな顔をしてる。じゃあ、もう一人は――、
「君は、俺の乳首を舐めて」
「っ！　は、はい♡」
二人は移動を開始する。一人は俺の後ろに回ってお尻を左右に開き、アナルを舐め始める。
もう一人は、立ち上がって俺の隣に立ち、服を脱がせて乳首を舐めてくる。
「わ、私はこっちを、頑張ります……♡」
残された女子は、チンコを舐めるのを再開した。
「んちゅ……♡　ちゅむ……♡　ぢゅるる♡　ジュボ！　ジュボ！」
「うぉ……」
いきなり咥えてきやがった……！
「ぢゅうううううう♡♡♡」
アナル、メッチャ吸われてる……！　そんなに俺のアナルが好き

なのか……？
「レロレロレロレロ……♡　ぢゅぅぅ♡」
乳首責めも結構気持ちいいな……。ＡＶとかでよく見てたけど、実際されるとメッチャ気持ちいいのがよく分かる。
「いいぞ……もっと激しく」
「「「はい！」」」
三人は、俺の言う事を聞き、フェラ、乳首責め、アナル舐めを激しくしていく。
あ～ヤバい。これは気持ちよすぎるわ……。
「ごめん、もう、イきそう……！」
「いいですよ……♡　沢山出してください♡」
「二人共、前に来い……！　全員に顔射してやる……！」
「「「は、はい……♡」」」
アナルと乳首を舐めていた二人が、再び俺の前で跪く。そして――、
「出る！　受け止めろぉ！！」
「「「んん～～～～～～～～♡♡♡」」」
ドビュ！　ドビュルルルルルルル！！！
俺は、フェラをしてくれている女子の口からチンコを引き抜き、イク寸前のチンコを激しく扱く。そして、三人の顔に満遍なく俺の精液がかかるように、射精していく。
「「「はぁ～～～～～～～♡♡♡」」」
俺の精液を顔面で受け止めている三人の表情は、至極そのもの。幸せそうな表情で精液を顔面で受け止めている。
さらには――、
「「「漏れちゃぅぅぅぅぅ♡♡♡」」」
ぷしゅ！！！
三人の女子が一斉に失禁した。しかし、水着を着ているため、外へと出すことができず、水着の中で留まってしまった。その為、音も俺の好きなぷしゃあああと言う音ではなく、ぷしゅと言うま

るで炭酸ジュースを開けた時のような音が鳴った。
それはそれでエロいんだけど。
「ふぅ……」
射精を終えた俺。三人の顔を見ると、俺の精液でベットリになっていた。まるでパックでもしてるかのよう。
「幸せ～♡」
「精液パックだぁ～♡」
「もうずっとこのままでいたいなぁ～♡」
それはやめろ。洗い流せバカ。
「「「お掃除、しますね♡」」」
三人が、お掃除フェラを始めようとした時――、
「あ～、いた！」
「「「っ！」」」
「お、瑠李」
瑠李が声をかけてきた。
うん。水着姿の瑠李、めっちゃエロい！
他の女子達と同じで、おっぱいは全く隠しておらず、下半身だけを隠している。しかも、ハイレグだから、際どくて最高過ぎる！
「あんた達、準備サボって何してんの！」
「「「ご、ごめんなさい！　今行きます！」」」
そう言って三人の女子は、お掃除フェラをする事なく、去って行ってしまった。
おいおい……どうしてくれんだよ……こうなったら、瑠李に責任取ってもらうしかないな。
「全く、あの子達は……目を離すとすぐにサボろうとするんだから……ん？　零君？　どうしたの？」
「しゃがめ」
「え？」
「いいからしゃがめ」
「う、うん……はい。しゃがんだよ――んぶっ！？」

俺はしゃがんだ瑠李の口に、思い切りチンコをぶっ込んだ。
「んぶっ！？　ぐぶっ！　ぐぼっ！　じゅぼっ！」
俺は、瑠李の頭を押さえつけながら腰を無遠慮に振っていく。イラマにハマっちまったからな……瑠李にもシてほしいって思ってたんだ。
「んぼぉ！　ぐぼぉ！」
お掃除フェラと思ってたけど、もうこのままもう一発出す！
「出すぞ、瑠李！」
「んぶっ！　ぐぶっ！」
「出る！」
ビュルルルルルルルルル！！！
「んぶっ！？　ぐぶぶぶ……！　ごくごくごく……♡」
喉奥に無理矢理精液を流し込まれてる瑠李は、嬉しそうな表情を浮かべながら飲み込んでいく。
「ふぅ……」
「ジュッポン♡」
俺がチンコを引き抜くと、メッチャエロい音が鳴った。
「んく……♡　ごほごほ……！」
「瑠李……」
「ご、ごめんね……ちゃんと全部飲めなくて……お詫びにお掃除するから、許して……怒らないで……」
「あぁ……怒らないから、早くしてくれ……」
「う、うん♡　んむぅ……♡」
瑠李はお掃除フェラをしだした。瑠李の泣きそうな顔、堪らねぇ……！　俺、最近、怖いくらいにＳっ気が強くなってねぇか？
「んちゅうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡」
「くぅお……！」
めっちゃ吸われる……残り液を全て吸い出される……！
「チュッ♡　ごくん♡　ごちそうさまでした、零君♡　ちゃんとできてた、かな……？」

「あぁ。最高だった。ありがとうな、瑠李」
俺は瑠李の頭を撫でてやる。すると――、
「えへへ～♡」
めっちゃ可愛いなこいつ！
「さて、水泳部行くか」
「あ、うん！　こっちだよ」
俺は、瑠李に手を引かれながら、プールへと向かった。

♡　♡　♡

「おぉ～……」
俺は感嘆の声を漏らしてしまった。
だって、目の前には、おっぱい丸出しの女子達が、下半身だけ隠して歩き回ってるんだぜ？
こんなの、堪んねぇだろ！
「零君、もう我慢できないって感じだね？」
「あぁ……もうヤバいな……！」
「ふふ♡　積極的な零君も素敵♡　零君。ここにいる女子達全員、零君の好きなようにしていいんだよ♡　好きに、犯して♡」
耳元でそう囁かれた。はい。もう理性の糸、切れました～。
俺はすぐに行動を開始し、一番近くにいた女子に後ろから抱きつく。
「キャッ！　あ、れ、零様……！」
「まずは、君だ」
「え……？　んひゅぅ♡」
俺は水着をずらし、チンコをマンコの膣（なか）に挿（い）れた。
この女子のマンコはすでにグチョグチョになっていて、なんの抵抗もなくすんなりと挿入する事ができた。
「んはぁ♡　あぁぁ！　ああぁあんっっ♡♡」
俺は最初からフルスロットルで腰を振りまくる。

その度にパチュパチュと卑猥な音が鳴る。それがさらに俺の興奮を際立たせてくれる。
「んんっ……！　んひゃ！　あぁぁぁぁ！　あはぁぁあんっつ♡♡♡」
「くっ……もう出る！　全部受け止めろぉ！」
「ひゃ、ひゃいいぃぃ～～～～♡♡♡」
ドビュル！　ビュルルルルルルルルル！！！
「んひゃあああああ！！！　中出しされてイクゥゥゥ！！！」
俺は何も考えずに、女子に中出しを決め込む。もう最近は考えるのも面倒くさくて、許可なしに中出ししている。それが最高なんだ。
「はぁはぁ……あ、もったいない……♡」
中出しされた女子は、プールサイドにへたり込みながらも、自身のマンコの膣（なか）から溢れ出てくる精液を、嬉しそうに舐めている。
本当にエロすぎるだろ……！
「次だ」
俺は次の女子に狙いを定め、犯し始める。
「んひゃあああ♡♡♡　れ、零様のオチンポ来たぁ♡♡♡」
俺はこの後、プールにいる女子十三人を犯しまくった。全員中出しで、一人三発だ。
「零君、すごい……♡　わ、私も、零君に激しく犯されたい……♡♡」
瑠李は俺達のセックスを見て興奮したのか、オナニーをしながらこっちを見ていた。
後でお前も存分に可愛がってやるからな。
女子達の嬌声は、校舎内にまで響き渡ったらしい。副委員長が後で教えてくれた。

第21話　水泳部見学で、水泳部女子達を犯しまくり♡♡（後書き）

次回予告！

「れ、零君……わ、私、もう我慢できないよ……♡」
「そうみたいだな。マンコがヤバいくらいに濡れてるもんな」
「ね、ねぇ……お願い……私に零君のぶっといおちんちん、頂戴……？」
「頂戴？」
「く、ください……！　私のド変態オマンコに、零君のぶっといおちんちん、挿（い）れてくださぁいぃ♡♡」
「よく言えたな。いいだろう。じゃあ、プールの中でやろうか」
「ぷ、プールの中で……？」
「あぁ。その方が興奮すんたろ？　ほら、早くしろ。してやんねぇぞ？」
「は、はい！」
「零君に、お水の中でめちゃくちゃにされちゃうんだ……♡　最高過ぎる……♡」

次回
『プールの中で、幼馴染みと……♡♡』
お楽しみに！

第22話　プールの中で、幼馴染みと……♡♡

「はぁはぁ……♡　れ、零君……♡」
「どうだ？　気持ちいいか？」
「う、うん……んっ……♡」
俺は今、プールの中で瑠李（るい）のマンコを弄っている。
中指と薬指の二本で激しく手マンしてやってる。
ちなみに、他の女子達はプールサイドで力なく横たわっている。
俺に犯されて足腰が立たないらしい。
よって今、プールの中には俺と瑠李だけしかいない。
プールの中で全裸って、めちゃくちゃ興奮する。男子なら分かってくれると思うが、プールの中でチンコを出すって、結構興奮するんだよな。
俺は全裸のままプールに入り、目の前のどエロい幼馴染みのマンコを弄りまくっている。
「水は冬だから温水だけど、それ以上にマンコの膣（なか）が温かいぞ。熱いくらいだ」
「んっ……♡　あ、はぁ……♡　んんっ♡」
「もっと激しくするぞ？」
「んへっ！？　あぁぁぁぁぁんっ♡♡♡」
俺は、水がバシャバシャと跳ねるくらいに手マンを激しくする。
膣（なか）はこれでもかと言うくらいにキツくなり、俺の指を締め付けてくる。
「あっあっあっ……♡」
アザラシか、お前は。
「だ、駄目……！　イッちゃいそう……！」
「勝手にイクなよ？　俺がいいって言ってからだ」
「て、手を止めてぇ……！　本当にイッちゃうぅ……！」

「駄目だ。俺はまだいいって言ってない」
「だ、だめぇぇぇ！！　イッちゃうぅぅ……！？　んっくっ！！！」
瑠李は、体を思い切りビクつかせてイッた。
「あ～あ。イッちゃった。俺、いいって言ってないのに。しかも、プールの中で潮吹きまでしちゃって」
「れ、零君が止めてくれなかいから……」
「なんだ？　俺のせいか？　俺が悪いのか？」
「あ、いや、そ、そうじゃなくて、その……！」
俺の声がワントーン低くなったのを敏感に感じ取った瑠李は、慌てて否定しようとするがもう遅い。
俺に歯向かった罰だ。
「今日は挿入なしな」
「え……！？　な、なんで……」
「俺に歯向かった罰だ」
「そ、そんな……」
あ～このシュンとした表情、堪んねぇ……！
本当は窒息しちゃうかもで、危ないから止めたほうがいいって分かってるが、もう我慢できん！
「瑠李、鼻つまんで潜れ」
「え？」
「いいから早く」
「は、はい！」
瑠李は俺に言われた通り、息を大きく吸って鼻をつまみ、水中に潜る。それを確認した俺は――、
「ぶぶぶぅ！？」
息をする事ができない瑠李の口の中に、容赦なくチンコをぶち込んだ。
「おぉ～！　これ、めっちゃ気持ちいい！」
「ぐぶぶぅ……！？　ぶぶぶぅぅ……！？」
流石に苦しいのか、瑠李がもがく。だが、俺はもう止まれない。

Sの血が、騒ぐ！
「んぶぶぼぉ！？　ぐぶぶぉ！？」
「あ～腰止まんねぇ！」
「んぶぶぶぅ！？」
瑠李が、俺のふとももをパシパシと叩いてくる。そろそろ息が限界か？
「んぶぁ！？　はぁ……！？　ごほごほ……！？」
俺はチンコを引き抜く。すると瑠李は慌てて上がってくる。過呼吸のような息を吸った後、むせる瑠李。
なんでだ……？　普通なら可哀想とか、ごめんなとかそういう感情が出てこなきゃいけないのに、今の俺は、エロいとしか思えない。もっともっと虐めたいと思ってしまう……！
「瑠李……もう一回潜れ」
「え……で、でももう苦しくて……」
「いいから潜れ！」
「っ！？　は、はい……！」
俺の圧に押され、瑠李は再び潜った。先程よりも息を多く吸って。
「よし！　うら！」
「んぶぶぼぉぉ！？」
俺は再び口にぶち込んだ。あ～これ、水圧とかもあってより気持ちいいのかもな。
「んぶぶぶぅ！？　ぐんぶぶぶぅ！？　ぶぎゅぶぅ！？」
俺は腰を振りまくる。もう苦しがってもイクまで止めない。
「ぐぶぶぶぶぶぅぅ！？　んぎゅぶぶぶぶぶぅ！？」
「あ～イク。出る！」
「んぶぅ！？」
ビュルルルルルルルルル！！！
水中で、息を止めてる為、上手く飲み込めないのだろう。ゴキュゴキュといやらしい音を鳴らしている。
全部出し終えたタイミングで、瑠李は勝手にチンコを口から出し、

上がってきた。
「ぐふっ！？　ぐふっぐふっ！？　ぐきゅっ！？」
瑠李は、口から精液を吐き出してしまった。それだけでなく、鼻からも精液が出てきている。
「ご、ごめんなさい……！？　わ、私、零君の精液を……！？」
「そうだな……俺は悲しいよ……精液を吐き出されるなんて……」
「ご、ごめんなさい！？　な、なんでもするから許して！？」
「許して？」
「ゆ、許してくださいぃ……！？」
瑠李は泣き出してしまった。鼻と口から俺の精液を吐き出しながら。
「そうだな～……じゃあ、しばらくエッチおあずけな」
「え！？」
「俺のチンコをシコるのも、舐めるのも、見るのも禁止な」
「そ、そんな……」
「そのくらいの事をしたんだよ、お前は」
「は、はい……反省します……」
「うん。じゃあ、俺、帰るな」
「う、うん……」
俺はプールから上がり、オナニーをしている女子達を横目に、着替えて帰宅した。

この日から、瑠李と会っても、エッチな事は一切しなくなった。瑠李は我慢できなさそうな感じだったが、俺が制止するので、いつも悲しそうな表情を浮かべている。
俺が瑠李とまたエッチするのは、しばらく先の事になる。

第２２話　プールの中で、幼馴染みと……♡♡（後書き）

次回予告！

「れー君。私の着替え覗いて、楽しい？」
「あぁ。お前の体、じっくり見た事なかったからな」
「嬉しい♡　れー君、私とエッチしよ♡」
「あぁ」

「れーくぅん♡　ち、乳首ばっかり駄目だよぉ♡」
「乳首が弱いんだな。だったら開発してやるよ」
「ら、らめぇ♡」

「ロッカーに隠れながらするの、なんかいいね♡」
「あぁ。俺もしてみたかった事の一つだったけど、最高だ」
「これから、れー君がしたい事、なんでもしていいから、いつでも言ってね♡」
「あぁ」

次回
『更衣室で、茶髪女子と隠れながら……♡♡』
お楽しみに！

第２３話　更衣室で、茶髪女子と隠れながら……♡♡（前書き）

プロローグ
「せ、先輩……♡」
「もういいか？　我慢が限界だ……」
「はい♡　出してください……♡」
「うっ……！」
ぷしゃあああああああ！
「んっ♡」
私は今、先輩のおしっこを飲ませてもらっている。今日もまた、先輩からおしっこを飲んで欲しいと呼んで頂けた。
公園にまた集合かと思ったら、私の家の住所を教えてほしいって言われた。
もちろん、喜んですぐに教えた。すると、先輩は私の家の前まで来ると言ってくださった。
なので私は急いで支度をした。先輩からおっぱいが見たいとリクエストがあったので、私は制服のスカートを穿き、上は裸と言う、変態チックな格好で外に出た。
玄関の前で先輩を待つ。その時間はまるで放置プレイをされてるようでものすごく興奮した。
自宅の玄関前で、上半身裸で、スカートの下は何も穿いていない。まだ早朝だからいいものの、誰かに見られたら何を言われるか分からない。もしかしたら通報されるかもしれない。そんなドキドキも、私には興奮するいいモノだった。
先輩が来てくださった。すでに尿意が限界なのか、足を震わせながら、おちんちんを大きくさせていた。
そして、今、飲ませて頂いている。
「んくんく……♡」

やっぱり先輩のおしっこはとっても美味しい♡
跳ねたおしっこが顔にかかるのも最高で、この臭い、味、温かさ、全部最高♡
私がおしっこを飲む時におちんちんを咥えないのは、顔におしっこをかけてほしいと思っているから。先輩も私の気持ちに気づいているのか、わざとおちんちんをずらして顔におしっこをかけてくれたりする。
それが幸せ過ぎて、私は軽イキしてしまう♡
「んくんく……♡」
「ふぅ……」
おしっこが終わってしまった……いつもこの瞬間がとても悲しい……朝も昼も夜もずっと、先輩のおしっこを飲んでいたい。私の飲料は先輩のおしっこでいい。ううん。おしっこがいい。
「んく……♡　ぷはぁ……♡　ご馳走様でした、先輩♡　スッキリしましたか？」
「あぁ。ありがとな」
「いえ♡　ゲェェェェ」
「お、ゲップした」
「すみません……普段、あまりゲップはしないんですけど、先輩のおしっこを飲むと必ず……」
「ずっと口開けてるから、空気が入ってるんだろう。気にするな。君のゲップは可愛い」
「っ～～～♡　あ、ありがとうございます！」
本当に先輩は優しいな～♡　あ～先輩と結婚したい♡　一生先輩の性処理係、便器でいたい……♡
「なぁ」
「っ！　は、はい？」
返事が遅れっちゃった！？　先輩に対してなんて失礼な事を！？
「俺ん家に住まないか？」
「え……？　えぇぇぇぇぇ！？」

い、今なんて言いました……！？　俺ん家に住まないかって言いましたよね！？
そ、それって、ど、同棲って事ですよね！？
「俺のおしっこ、ずっと君に飲んでもらいたいんだ」
う、嬉しい……！
「は、はい！　その……ご迷惑でなければ、せ、先輩と一緒に暮らしたいです！　先輩のおしっこ、ずっと飲みたいです！」
「そうか。良かった。姉ちゃん達には言っておくから、君はご家族に言っといて。互いにオッケーが出たら、一緒に住もう。な、俺の性奴隷便器ちゃん」
「っ！　は、はいぃ♡」
性奴隷便器……なんていい響きなの……♡
もう、一生この人に従いたい……♡
「それじゃな」
「はい♡」
先輩は、帰って行った。
よし！　お母さんを説得しなきゃね！
先輩の、おしっこを飲むために！

第２３話　更衣室で、茶髪女子と隠れながら……♡♡

毎朝、爆乳ショートちゃんにおしっこを飲ませるのが、楽しみになりつつある俺。

一緒に住もうなんて言ってしまった。姉ちゃん達は大歓迎と言ってくれた。後は爆乳ショートちゃんがどうなるか、だな。

「一緒に住めたらなぁ～、毎日飲んでもらえるのに」

「何を飲んでもらうの？」

「うお！　ビックリした～」

「ごめんごめん」

後ろから声をかけて来たのは、金髪女子。その隣には茶髪女子もいる。

金髪女子はいかにもギャルで、陽キャな感じはするんだけど、茶髪女子って見た目はギャルだけど、なんか中身は陰キャな気がしてならんのだ。

陰キャな俺の、陰キャセンサーが反応しておる。ま、今は別の所が反応してるんだけど。

「あ、そだ！　ねね、れいれいのおしっこ、飲ませてよ！」

「なんだ、突然」

「だって～れいれいが転校してきたあの日から一度も飲んでないんだも～ん！　うち、れいれいのおしっこ大好きなんだから～！」

「そうか……じゃあ、飲んでくれるか？」

「もち♪　あ、あんたも飲む？」

「私はいい。それより、私先に行くから」

「りょ」

茶髪女子は去っていってしまった。

「なんかあんのか？」

「あ～この後うちら、体育の補習があるんだ～。それで更衣室に向

かってる最中だったんだけど、そこでれいれいを発見したってわけ」
「なるほどな。だからあんなにテンションが低いのか」
「うん。普段はもうちょっとテンション高いし、れいれいの事大好きだから、会うだけで普段の二倍はテンがぶち上がるんだけど、今日はタイミングがね……ごめんね？　あの子に変わって謝るわ」
「別に謝る必要はない。むしろ生理とかで機嫌が悪いのかと思ってたから安心したわ」
「え！？　れいれい、生理にまで気遣ってくれんの！？　マジ神なんだけど！　でもあれだよ？　れいれいはほんと、なんにも気にしなくていいし、気遣わなくていいんだからね？　生理とか、女のうちらの勝手なあれなんだから。れいれいは気にせず、うちらの体、好き勝手に使って？」
「いやいや、そういう訳にはいかん。確かに、お前らとのセックスは最高だ。そして、虐めるのも楽しい。だが、体調が悪い時に虐める趣味はない。俺だって体調が悪い時にそういう事をされたらめっちゃ嫌だからな。体調が悪い時は互いに支えるべきだ。だからお前も、生理とか、風邪とかで体調が悪い時は言えよ？」
「か、神過ぎる……！　うち泣けて来たんだけど……！　マジゴ！　れいれい！」
こいつさっきから変な略語使うな。テンションを「テン」って言ったり、マジゴッドを「マジゴ」って言ったり。そもそもマジゴッドも訳わかんねぇけどな。
「なぁ」
「ん～？」
「体調不良とかで機嫌が悪いんじゃないんだったら、虐めてもいいんだよな？」
「もっちろん♪　あれ？　もしかしてあの子とシたくなっちゃった？」
「あぁ。めっちゃシたい」
「ふふ♪　そっか♪　じゃあ、体育の先生にはうちから言っとくね

！　れいれいはあの子を、めちゃくちゃにしてあげてください♪
あの子、結構ド変態だから、れいれい、きっと喜ぶよ♪」
「そうか。じゃあ、楽しませてもらおうかな」
俺は金髪女子と別れ、茶髪女子の元へと向かった。つーか、先生に言っとくって言ってたけど、なんて説明すんだ？　ってか、それで補習サボれんのか？
まぁ、いいか。

♡　♡　♡

更衣室へとやって来た俺。
ここは、プールの側にある更衣室とはまた別の更衣室。体育とかで着替える時に使う更衣室らしい。
引き戸になっているので、そっとドアを開けて、中を覗いてみる。すると――、
「んっ……♡　はぁ……♡　はぁ……んっ♡　ったく、体育の補習とか、ダル過ぎ……んっ♡　れー君とエッチしたい……♡　んっ♡　さっきれー君に対して嫌な態度取っちゃったな……んっ♡　れー君、怒ってる、よね……」
体操服を着ず、パンツを脱ぎ、全裸でクリオナをする茶髪女子がいた。
どうやら、イライラをオナニーで発散しているようだ。しかも、俺に対して申し訳なさを抱きながら。
こんなの、我慢できねぇ！
「別に怒ってないぞ」
「っ！？　れ、れー君！？」
俺はドアを開け、中に入った。ドアは自動で勝手に閉まるらしく、手を離したら自動でゆっくり閉まって行った。
「み、見てた……？」
「あぁ。悪いな、覗いちゃって」

「そ、それはいいんだけど……その……お、怒ってないって、ほ、本当……？」
子犬みたいな表情を浮かべ、悲しそうに上目遣いで見つめてくる茶髪女子。……これは反則だ！
「あぁ。怒ってない。むしろ心配してた」
「し、心配……？」
「あぁ。生理とか、体調が悪いんじゃないかって」
「あ……なるほど……」
「でも、そうじゃないって知って、安心した。体育なんて、サボっちまおうぜ」
「（安心、してくれたんだ……♡）で、でも、補習は受けないと、後々面倒だし……」
「その補習は、俺とのエッチより大事なのか？」
俺は茶髪女子を壁に追い詰め、壁ドンをして顎クイをする。そして至近距離で問い詰める。
「そ、それは……れー君とのエッチの方が大切、だけど……」
「だけど？」
「せ、先生が、怖いから……」
「ふ～ん。じゃあ、先生より俺が怖くなればいいって事だ」
「え……？　んむっ！？」
俺は茶髪女子の口の中に人差し指と中指をねじ込んだ。
「指を噛んだりするなよ？　丁寧にしゃぶるんだ」
「んっんんっ！」
コクコクと頷く茶髪女子。その間にも俺は、指で口の中を荒らしていく。
「んぐっ……んんっ……」
サれるがまま、茶髪女子は口から唾液を垂らし、指で口を犯され続けていく。
「これだな」
「んあっ！？」

俺は茶髪女子の舌を思い切り引っ張る。さすがに痛かったのか声を上げた。でも、その声も可愛く、さらに虐めたくなってしまう。
「この舌があるせいで、俺に楯突く言葉を言えるんだよな？」
「んっ！？」
「そんな舌、いらないよな」
「っ！？」
「切っちまうか」
「んっ！？　んーん！？　んーん！？」
俺が何を言ってるのか瞬時に理解した茶髪女子は、目元に涙を浮かべて首を横に振る。
本当にそんな事はしないけど、体育の先生より俺は怖いと、こいつに刷り込まなければいけない。
「俺に逆らうなんて、していいことじゃない。でもお前は逆らった。俺より体育の先生を優先した。それを言わせたのはこの舌だ。だったら、そんなふざけた舌は目障りだ」
「んー！？　んんー！？」
俺は舌を引っ張る指の力を強めていく。まるで引っこ抜こうとしてるかのように。
「んんーー！？　んんーー！？」
「なんだ？　なんか言いたいのか？」
「んっ！　ん！」
頷く茶髪女子。俺は一旦舌を解放してやる。
「はふはふ……！　ご、ごめんなさい……！？　体育よりれー君、あなた様を優先します……！　なんでもしますから、どうか、舌を切ったりするのだけは許してください……！？」
土下座をする茶髪女子。全裸土下座ってエロいな。
俺はしゃがみ込み、茶髪女子に顎クイをする。
「んぶっ！？」
そして、再び口に指を入れ、舌を引っ張る。
「本当に俺を優先するのか？　本当に反省しているのか？　この場

だけの言い逃れなんじゃないのか？」
「んーん！？　ふんなほほとはりはへん！？」
必死に否定してくる。ふふ。可愛いなこいつ。
「だったら証明してみせろ」
「んひゅ！？」
俺は茶髪女子の右乳首を抓（つま）む。かなり強く抓んだので、相当な痛みが走ると思う……んだが、なんだこの蕩けきった表情は。まさか、こいつもドMなのか……？　しかも、乳首で感じるなんて、相当なド変態だぞ……！
金髪女子が言っていた事は本当だったか。乳首開発……楽しそうじゃねぇか！
「ほら、お前の体で俺の方が大事だって証明してみせろ！」
俺は乳首をさらに強く抓む。
「んひゅぅぅぅ！？♡♡　ひゃぁあぁぁぁ♡♡♡」
痛いやら気持ちいいやらで感情がおかしくなったのか、変な喘ぎをする茶髪女子。顔も乱れきっている。
と、その時、女子達の声が外から聞こえてきた。
「他の補習者達か？」
別に隠れる必要はないが、隠れながらスルと言うプレイを一度してみたかったので、茶髪女子と共にロッカーの中へと隠れる。
「ふぅ……ふぅ……」
俺の指から解放された舌を口の中に戻し、唾液を馴染ませている茶髪女子。
「れ、れー君は、隠れながらスルのが好き……？」
「まぁな。一度やってみたかったんだ。お前は嫌か？」
「ううん。結構ドキドキして、好き……♡」
「そうか。じゃあ、さっきの続きだ。舌を切られたくなかったら、お前の体で証明してみせろ。乳首で感じるクソマゾが」
「は、はひぃ……♡　しょ、証明しますぅ……♡」
俺は両乳首を強く抓む。相当力を入れたので、本来は泣き叫ぶよ

うな痛みが走るはずなんだが――、
「んひょぉぉ……♡　痛い、気持ちいい……♡」
コイツは相当なド変態だ……。痛みを喜んでやがる。そういや、担任の先生も似たような感じだったっけ。
あ、いけね。俺先生に連絡するの忘れてるよ。……まぁ、いっか。放置プレイって事で。あの先生なら勝手に解釈するだろう。
今はコイツを躾けなければ。
「ほら、乳首でもっと感じろ」
「んひゅぅ……♡　ち、乳首感じりゅぅ……♡　ピリピリが気持ちいいのぉ♡　指離された後のジンジンも、最高ぉ♡」
こいつは本当にいいな。乳首開発ってやってみたかったんだ。
「乳首でイケたら、舌を切らないでやるよ」
「ほ、本当……？」
「あぁ。だから、乳首で頑張ってイケ」
「はいぃ♡　れー君に許してもらうために、乳首でイキますぅ♡」
俺は、乳首を抓む力をさらに強める。乳首と乳輪はすでに真っ赤になっており、俺がどれだけ力を込めているかが丸わかりになっている。
「んほぉぉ♡　ち、乳首取れちゃうぅ♡」
「あんまり声出すと、外にいる女子達にバレるぞ？」
「そ、それはダメェ……♡　今はれー君を独り占めするのぉ♡」
こいつ、可愛い事言ってくれるじゃねぇか。
「俺を独占したいなら、さっさとイケ。じゃないと、外に出るぞ」
「だ、ダメェ……！　も、もうちょっとでイケそうだから、待ってぇ……！」
マジか！　本当に乳首でイクのか！
確かに、愛液と本気汁が溢れて、太もも、ふくらはぎ、足にまで伝ってるからな。相当感じてるんだな。
じゃあ、トドメと行きますか。
「ち、乳首ぃ……んむっ！？」

俺は茶髪女子にキスをする。いきなり舌を入れるディープキスだ。
「んむっ！　えるぅ……♡　れるぅ……♡　れろぉ……♡　んんっ♡　んん！　んん～～～～～～～～！！！」
舌を絡ませ合いながら、乳首を強く弄ってやると、茶髪女子は全身を激しくビクつかせながら声にならない嬌声を上げた。キスをしているので、幸いにも外には聞こえていない。……多分。
「ぷはっ。イッたのか？」
「は、はひぃ……♡　イキまひた……♡　わ、私、乳首でイキまひた……♡」
狭いロッカーの中なので、座る事ができず、壁にもたれかかりながら足をガクガク震わせる茶髪女子。
その光景がまたとてもエロい。さらに、マンコから愛液と本気汁、さらにはおしっこか潮か分からないが、エッチな汁が大量に出ており、床を濡らしていた。
「偉かったな。これでお前が俺の方が大事だと言う証明ができた。だから舌を切ったりはしない」
「ほ、本当、れすか……？」
「あぁ。だが、もし次また同じような事があったら、その時は……」
「そ、その時は……？」
「一切の情けはかけない」
「っ！？　も、もう二度とこのような事はしません……！？　すみませんでした……！」
俺の鋭い目に怯んだ茶髪女子は、涙を浮かべながら謝罪してきた。
「あぁ。分かってくれたならそれでいい。それより、勃起がキツイ。抜いてくれ」
「は、はい……♡　お任せください……♡」
茶髪女子は、俺の勃起チンコを取り出し、手コキを始める。
すでに我慢汁がドバドバ溢れ、濡れまくっていたチンコを、丁寧に、なおかつ射精させる為に激しく扱いてくる。
「お前、手コキ上手いな」

「ほ、本当ですか……？　う、嬉しいです……♡　実はれー君に手コキをしてあげたくて、ずっと練習してたんです……♡」
ずっと思ってたんだが、燐を始めとしてなんで俺とエッチな事をした奴は大体が俺に対して敬語になるんだ？
こいつらが敬語になるから、俺のＳっ気がどんどん増してっちまうんだ。うん。そうだ。きっとそうに違いない。
「うっ……！　本当に上手いな……！」
竿を扱いていたと思ったら亀頭を弄ったり、裏筋、鈴口、尿道、カリ首、俺の感じるポイントを次々と責め立ててくる。こいつ、手コキの天才なんじゃ……？
「も、もう出そうだ……」
「我慢しないで、いっぱい出して♡　れー君のザーメン、身体中に浴びたい♡」
「あぁ……くっ……！　出る！」
ビュル！　ビュルルルルルルルルル！！！
「んひゃぁ♡　はぁ～～～♡　凄い……♡　いっぱい出てる……♡　れー君のザーメンが、私の体にいっぱいかかって……♡　れー君に染められてイクぅ♡」
こ、こいつ……精液ぶっかけられてイッたのか？
どんだけ変態なんだよ。
「くっ……ふぅ……」
「す、スッキリ、した……？」
「あぁ。最高だ。外の連中いなくなったみたいだな。そろそろ行くか」
「ううん。嫌だ。もうちょっとこのままがいい……」
そう言って、茶髪女子は俺に抱きついてきた。
他の女子に比べたら小さく見えるが、それでも巨乳と言えるおっぱいを俺の胸に押しあてながら。
「おい……こんな事されたら、また勃ってきちまう」
「いいよ。そうなったらいっぱい抜くから……♡」

「全く。お前は案外甘えん坊さんなんだな」
「あの子には、言わないでね……」
あの子……金髪女子の事か。
「分かったよ」
「ありがとう……（大好き……♡）」
最後に何か言ったような気がしたが、小声過ぎてよく聞き取れなかった。
まぁ、たまにはこんな時間も悪くないか。
俺は茶髪女子を抱きしめながら、今後どんなプレイをするか、考え始めた。

第２３話　更衣室で、茶髪女子と隠れながら……♡♡（後書き）

次回予告！

「まさか、こんな所でオナってる変態がいるとはな」
「っ！？　れ、零様！？　どうしてここに！？」
「委員長に聞いてな。この時間なら、屋上で生徒達の動向を確認していたり、部活動の監視をしてるんじゃないかって。でもまさか、オナってるとは思ってもみなかったぜ」
「こ、これは違うんです……！？　その……ムラムラが我慢できなくて……い、いつもは、こんなこと……」
「いいじゃねぇか」
「え……？」
「別にどこでオナろうと。ムラムラしたらオナる。それが正しい事だ。でもな、隠れてってのが関心しない。俺がいるんだぞ？　ムラムラしたなら、せめて俺の前でオナるか、俺とセックスしようぜ」
「よ、よろしいんですか……？　れ、零様の前でオナニーをしても……？　それに、私なんかが零様とセックスさせて頂いても……？」
「当たり前だ。むしろ俺の前以外でオナってほしくない。それに、俺は女子全員とセックスしたいと思ってる。もちろん、お前ともな。それと、私なんかがなんて悲しい事言うな。お前は可愛くて、エロくて、チンコにガツンと来る、最高の女だ」
「っ～～～♡　う、嬉しいです……♡　わ、私、もう零様の前以外でオナニーしません……！　零様の前でだけオナニーをします……！」
「それでいい。じゃあ、相互オナニーと行こうぜ。そしてそれが終わったら……分かるな？」
「はいぃ……♡　私の体は、零様だけのモノです……♡」

次回

『屋上で、副委員長と……♡♡』

お楽しみに！

新たに募集させてください！（前書き）

金髪女子、茶髪女子、眼鏡女子、副委員長、爆乳ショートちゃん、担任教師に続き、新たに六名のキャラの名前を募集させてください！

ストーリー上、まだ出てこないキャラが多いのですが、皆様にお名前を送って頂けたら、執筆時のイメージがさらに湧きやすいと思ったので、募集をさせて頂きたいです！

新たに募集させてください！

募集するキャラ一覧

・義母（２９）
桃の実母で、零、華、燐の義母。
Ｇカップの巨乳で巨尻。
おっぱいはしずく型で、乳首と乳輪は少し濃い目の色をしている。
元々斜めに生えているおっぱいだが、年齢の影響でさらに垂れてるんじゃないかと最近気になっている。
零の事が大好きで、海外での仕事を夫に任せ、１人だけ帰国してきた。
夫（零達の実父）と結婚した本当の目的は、零とエッチをする為。
零の願望をなんでも叶えてくれる。
ＡＶのような事を妹と一緒にする。ハメ撮りや露出、野外、痴漢プレイなど。
零と二人っきりだと、甘えん坊になり、猫みたいに語尾に「にゃ～」と付けたりする。
ドＭである。

・理事長（２９）
零達が通う学校の理事長。義母の双子の妹。
Ｇカップの巨乳で巨尻。
おっぱいは半球形で、乳首は少し濃く、乳輪は薄いピンク色をしている。
零の事が大好きで、零の為なら理事長としての権力を使ってなんでもする。
超が付くほどのドＭで、零にイジメられるのが大好き。スパンキン

グや拘束、ビンタ、アナルセックスなどなど……。
姉と一緒に、零の願望をなんでも叶えてくれる。

・爆乳ミディアムヘア（15）
爆乳ショートちゃんの親友。
Ｉカップの爆乳で巨尻。
おっぱいは円錐形で乳首乳輪共に薄めのピンク色。
爆乳ショートちゃんに嫉妬をし、トイレで零を待ち伏せ、逆レイプを仕掛ける。
零の精液奴隷となり、精液を飲ませてもらうのが一番の幸せ。
爆乳ショートちゃんと一緒に零に迫る時は、いつも競ってしまう。
パイズリがとてつもなく上手い。
もちろんドＭで、喉奥を突かれ、喉奥で射精されるのが大好き。無理矢理犯されるのが大好き。

・爆乳お嬢様（15）
零に会いに、日本に戻ってきた帰国子女。
Ｋカップの爆乳で巨尻。
おっぱいは円錐形で、乳首乳輪共に濃い色をしている。
両親は共に日本人だが、勉強をする為、留学していた（海外の女性のエロテクを学ぶ為の留学）。
傲慢で高飛車な性格をしており、零以外の人を全員見下す。
その態度が零に嫌われ、初対面でいきなりビンタをされる。元々がマゾなので、それだけで濡らしてしまう。
零に調教され、完全な性奴隷ペットとなる。
爆乳ショートちゃんに逆らえないようにされてしまう。
登場するキャラの中で、零が常にキツく、厳しく接するキャラ。
零に暴力を振るわれたくて、わざと悪い事をしたりする。
身も心も零に支配されていく。

・生徒会長（１７）
零達が通う学校の生徒会長。３年生。
Ｇカップの巨乳で巨尻。
おっぱいは釣鐘型で、乳首乳輪共に薄いピンク色。
副会長と共に、零を１週間拉致し、媚薬と精力剤を飲ませ、ノンストップでセックスしまくる。
フェラが大の得意で、口で大量の精液を受け止める。
顔射されるのが大好き。
公共の場での、羞恥プレイなどが大好き。
もちろんドＭ。
先に卒業してしまうので、零を養えるよう、大学には進学せず、就職する。
零の卒業祝いに、一軒家（数百人が住めるような豪邸）をプレゼントする。
勝手に第１正妻と言い張る。

・副会長（１８）
零達が通う学校の生徒会副会長。３年生。
Ｈカップの巨乳で巨尻。
おっぱいは釣鐘型で、乳首はピンク色で乳輪は濃い目の色をしている。
１週間の拉致セックスに最初は乗り気ではなかったが、零のチンコを味わってからは豹変して、零を犯しまくるようになる。
登場するキャラの中で一番Ｓっ気があり、零に犯されるのも好きだが、犯すのも大好き。
零を連続射精させたり、潮吹きさせたり、手足を縛って逆レイプしたりするのが大好き。
言葉使いは丁寧で、絶対に零に対して上から目線になったりしない。
零の事が大好きなので、零のしたいことして欲しい事を全てやりたいと思っている。

生徒会長に対してはかなり厳しい。口調も荒っぽくなり、常にお尻をパシンと叩く。

以上の六名のお名前を募集させてください！
まだ本編では一度も登場した事のないキャラ達ですが、どんな風に登場するのか楽しみになさっていてください！

ビンタなどの暴力描写が今後、少しずつ増えていくと思います。苦手だよと言う方は、ご注意をお願い致します……！
暴力描写と言っても、ビンタやスパンキングだけで、蹴ったり、殴ったりはしないのでご安心ください。
首絞めプレイがよくありますが、あれは皆様、どうですか？　もし、「首絞めプレイも見たいよ～！」と思われましたら、お名前を送る時にでも、一言添えて頂けますと幸いです！

募集期間は変わらず、　１２／１～１／３１までとなっております。発表は２／１４です！

記入方法も変わらずで
「義母・〇〇〇〇」
と言う風に記入して、お送りくださいませ！

それでは、作者の身勝手な企画ですが、最後までお付き合い、お願い致します！
沢山のお名前、お待ちしております！

新たに募集させてください！（後書き）

活動報告は今回無しにさせて頂きます……。
伝えたい事は全て、上記の本文に記載させて頂いたので。
1人何個までと言う決まりはありませんので、沢山、送ってください！
それでは、よろしくお願い致します……！

第２４話　屋上で、副委員長と……♡♡（前書き）

プロローグ
今日は休日。
ピンポーン♪
インターホンが鳴ったので、俺は玄関へ向かい扉を開ける。するとそこに立っていたのは――、
「よう」
「ど、どうもです……先輩……！」
大きめなカバンを持った爆乳ショートちゃんだった。
「入って」
「は、はい……！」
なんで、爆乳ショートちゃんが家にやって来たのかと言うと、その訳は――、
「いらっしゃ～い！　ようこそ、白下家へ～！」
「よ、よろしくお願いします……！」
そう。爆乳ショートちゃんは今日から、家に住むことになったのだ。
説得しといてと言ったのが昨日の朝。その翌日には引っ越してくるなんて、行動力ありすぎだろ。
「なんて言って説得したんだ？」
「あ、えと……これと言って説得と言う説得はしてなくてですね……ママ――母に、大切なご主人様がいて、その人から一緒に住まないかって言われてるんだけど、一緒に住んでもいい？　って聞いたら『そんなの当然よ！　すぐに行きなさい！　その人に飽きられないように、見限られないように、努力を惜しまない事。そして、その人に何があっても全力で尽くす事。いいわね？』と言われ、大賛成で見送られました」

「中々ファンキーなお母さんだ」
「あと、ママって呼んでるの隠さなくてもいいよ～？　私もママって呼んでるし♪」
「あ、ありがとうございます……燐さん……」
「燐でいいよ～♪　私達同い年でしょ？　お兄ちゃんの性処理係同士、仲良くしよう♪」
「は、はい！」
爆乳ショートちゃんが俺に目配せしてくる。そう、実は爆乳ショートちゃんが俺の便器である事は、桃以外には伝えていない。なんで桃には教えたのか。それは桃も俺の便器だからだ。
最近、俺のおしっこが飲みたいと言ってきたりしているので、冗談半分で「じゃあ俺の便器になれ。そうしたら飲ませてやる」と言ったら、喜んでなると即答してきた。
なので、桃には爆乳ショートちゃんも俺の便器であると伝えている。
他の二人に教えないのには特段理由はない。ただ、こうした秘密の関係って、スリルがあって結構好きなんだ。
ちなみに、今ここに桃と姉ちゃんはいない。爆乳ショートちゃんの歓迎会をする為の買い出しに行っている。
「よし、じゃあ姉ちゃん達が帰ってくる前に、俺達も色々準備するか」
「「はい！」」
俺達は、姉ちゃん達が帰ってくる前に、食器やら何やらの準備を開始した。

♡　♡　♡

爆乳ショートちゃんの歓迎会を終えた、その日の夜。
俺は今、トイレにいた。そして、目の前には爆乳ショートちゃんと桃が跪いている。

「先輩のお家のトイレで先輩のおしっこが飲めるなんて、夢みたいです……♡」
「兄さん、おしっこください……♡」
「あぁ。今から出すからな、しっかり飲めよ」
「「はい……♡」」
俺は、口を開けて待っている二人に向かって、放尿を開始した。
ぷしゃあああああ！
「「んっ……♡　んくんく……♡」」
二人の口に平等に入れるには、チンコを動かし、おしっこを移動させる必要がある。だが、そうするとどうしても移動の際に、おしっこが二人の体や顔にかかってしまう。
が、それすらも二人は喜んでおり、幸せそうな顔をしている。
「「んくんく……♡」」
「ふぅ……」
出し終えた俺は、二人を見る。おしっこで濡れた女子……エロすぎる！
「兄さんのおしっこ、美味しい……♡」
「先輩のおしっこはやっぱり最高です……♡　ずっと飲んでいたいです……♡」
「そうか？　嬉しい事を言ってくれるな。ほら、綺麗にして」
「「は、はい……♡」」
二人は、俺のチンコにお掃除フェラを開始した。

♡　♡　♡

「あれ……？　先輩は……？」
「兄さんなら学校。学級委員の仕事の手伝いを頼まれたみたい」
「そう、なんですか……」
そっか……先輩いないんだ……せっかく先輩と過ごす初めての休日だから一緒にいたかったんだけどな……。

それにしても、先輩に手伝いを頼むなんて、信じられない。先輩を働かせるなんて最低だよ。
「兄さんに仕事を頼むなんて許せない……兄さんは神様。神様に労働をさせてはいけない」
「そ、そうですよね……！」
よかった……！　同じ事思ってる人がいた……！
「いつ頃帰ってくるんですか？」
「夕方には帰ってくるって言ってた。だから、今日は兄さんの好きな料理を沢山作ってあげようと思ってる」
「いいですね！」
「教えようか？」
「いいんですか……？」
「兄さんの胃袋、掴みたくない？」
「掴みたいです！」
「じゃあ教える」
「お願いします！　師匠！」
私は、桃さんを師匠と呼ぶことになった。
あぁ～……早く先輩のおしっこ飲みたい……精液飲みたい……浴びたい……中出しされたい……。先輩にむちゃくちゃにされた～い！

第２４話　屋上で、副委員長と……♡♡

今日は休日だが、俺は学校に来ていた。
なぜか。それは、眼鏡女子と副委員長に、学級委員の仕事を手伝って欲しいと言われたからだ。
「休日の学校で、女子と……いいシチュじゃねぇか」
俺の頭の中は、学級委員の仕事って何するんだろう……ではなく、眼鏡女子と副委員長の二人とどんなプレイをするかと言う考えしかなかった。
「よう」
「あ！　零様！　おはようございます！」
「おはようございます、零様。本日は来ていただいて、誠にありがとうございます。本来であれば零様を働かせるような事はしたくなかったのですが……」
教室に入ると、二人がすでに作業をしていた。何かの資料をまとめているようだった。
しかも、それが段ボール五箱分くらいある。大体俺が何をすればいいのか分かってきた。
「いや、気にしないでくれ。俺に手伝える事ならなんでもするぞ。それに、休日の学校なんて、滅多に来られるものじゃないから、新鮮で楽しいぞ」
「（なんてお優しい……！）ありがとうございます。零様の寛大な御心をお借りして、やって欲しい事がございまして」
「なんだ？　ここで脱げばいいのか？」
「そ、それは見たい……♡　ううん！　そうではなくてですね、この段ボールを三階の図書室に運んで頂きたいんです」
「なんだ、そんな事か。お安い御用だ。……あと、副委員長ってそんな喋り方だったか？」

「はにゃ！？」
「だ～から言ったわよ、私。大好きな零様の前だからって変にキャラ作るの止めなさいって。今さら畏まったって、私達の素を零様は知ってるんだから、無駄なのよ」
「うぅ……少しでも自分を良く見せたかったのに……」
「良く見せる必用はない。副委員長は元々素敵な女だ。おっぱいも大きく、そしてエロく、最高の女だ。だから安心していい」
「れ、零様……♡」
なんか柄にもない事を言ってしまった気がするが、喜んでそうだから、いっか。
「そんで、この五つの段ボールを図書室に運べばいいんだよな？」
「はい。お願いします！」
「了解。よいしょ。うぉ！？　結構重いな……これは女子にはキツイものがあるな。これは全部俺が運ぶからな」
「い、いいんですか……？　重いものは本来女子が持たなければいけないのに……」
そうか。この世界の常識だとそうなるのか。
「あぁ。こんな重いもん、女子に持たせられないよ。こういうのは男が持つもんだ。それに、腰をやっちゃったら、将来、妊娠出産の時に困るからな」
「「っ！」」
妊娠出産と言ったら二人の顔が真っ赤になった。あ、もしかして俺との間に子供ができる事を想像したんかな？　可愛い奴らめ。
「俺の子供、孕めなくなったり、産んだりできなくなってもいいのか？」
「「イヤです！」」
おぉう。即答か。結構嬉しいな。
「だったら、この荷物は俺に任せろ」
「「はい！　ありがとうございます！」」
俺は段ボールを、図書室に運び始めた。

♡　♡　♡

「これで……最後……っと。ふぅ～」
中々に重かったぜ。これはマジで女子には運ばせられない。重すぎる。紙が入ってるって言ってたけど、紙ってまとまるとこんなに重いんだな。知らんかった。
俺は教室に戻る。あれ？
「終わったけど……副委員長は？」
「ありがとうございます、零様。あの子でしたら別の仕事に行きました。屋上にいると思います」
「そっか。俺は他に何をすればいい？」
「とりあえず一段落ついてきたので、休憩なさってください。また後で重たいのをお願いするかもしれないので」
「分かった。なんかあったら呼べよ？」
「はい」
俺は、教室を出た。さて、どうするか。副委員長のとこにでも行ってみるか。
俺は、屋上へと向かった。

♡　♡　♡

「おいおいマジか」
屋上にやって来た俺は、とんでもない瞬間に出くわしてしまった。
屋上で副委員長がオナニーをしていた。
壁によりかかりながら立ったまま、マンコを弄っている。パンツは完全に脱いでおり、下半身が丸出しだ。
正直、今日は真剣に仕事をするだけで、エロい事はないと思ってた。
だが、不意打ちでこんなの見せられたら、耐えらんねぇ！

「おいおい、一人でお楽しみかよ」
俺は扉を開け、立ちオナ中の副委員長に声をかける。一人だけ楽しむなんて、絶対に許さない。
「れ、零様！？」
驚いた副委員長は、体勢を崩し、その場に尻餅をついてしまう。膝を曲げているが、足を思い切り開いているので、マンコが丸見えになってしまっている。
もう、我慢できん！
「キャッ！」
俺は副委員長を寝かせ、その上に覆いかぶさる。そして――、
「んひゃあああああああ♡」
チンコを取り出し、マンコの膣にぶち込んだ。
「マジか。すんなり挿入ったぞ……！」
「こ、これが、零様のオチンポぉ……♡　き、気持ちよすぎるぅ……♡」
そうか。副委員長に挿れるのは初めてか。だとしたら、処女のはずだよな、こいつ。なのに全く痛がらないのはなぜだ？
「痛くないのか？」
「は、はいぃ♡　痛みは全くありません……♡　むしろ気持ちよすぎて、イッちゃってますぅ♡♡♡」
マジかよ。初めてで挿れただけでイクとか、変態すぎんだろ。
「それじゃ、遠慮はいらねぇよな！　おら！」
「あああああああああんっっっっ♡♡♡　お、オマンコ思い切り突かれて、感じちゃうぅ♡♡♡　い、一番奥、指じゃ届かない所に届いてるぅ♡♡♡　し、子宮にオチンポ、当たってるのぉ♡♡♡」
こいつ、めっちゃいい声で喘ぐじゃねぇか……！　もっと早く犯しときゃよかった。
「おらぁ！　おらぁ！」
「んひゃあ！　んひゅぅ！　あはぁ！　あぁぁん！　んあああああああ！！　突かれる度に、何回もイッちゃうのぉ！！！」

こいつは俺がマンコを突くごとに一回イク。イキ過ぎだろってくらいに、何回もイッている。
「おいおい、一人だけイキまくってんじゃねぇよ！　俺もちゃんとイカせろ！」
「は、はひぃ……！　すみませんぅ……！　んひゃああ！　れ、零様のオチンポ気持ちよすぎて、勝手に、んはぁ！　イッちゃうんですぅ♡♡♡」
「俺の精液、欲しくねぇのか！」
「ほ、欲しいですぅ……！　れ、零様の特濃ザーメン、オマンコの膣(なか)に、赤ちゃんのお部屋に欲しいですぅ♡♡♡」
「だったら、お望み通りに中出ししてやるからな！　しっかりと子宮で俺の精液、飲み干せよ！」
「は、はいぃ♡♡♡　零様のザーメン、子宮でごっくんしますぅ♡♡　あああああああああああああ！！！」
「出る！」
ドピュン！　ドピュピュピュピュピュウウウウウ！！！
「んはあああああああああ！！！　お、オチンポ膣(なか)でビクンビクン跳ねて、気持ちい所に当たるのぉ♡♡♡　中出しされてイってるオマンコ、刺激されて、またイグゥぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
副委員長は腰を浮かせ、大絶頂した。その際、マンコからチンコが抜けてしまった。
すると、マンコの膣(なか)から、精液がドロォっと逆流してきた。
やっぱり、中出しって気持ちいいな。
「はぁはぁ……」
こりゃ、しばらくはダメだな。息を切らし、半眼の状態で、力なく横たわっている。
「まぁ、初セックスだし無理もないか」
俺は副委員長を抱きかかえ、校舎内に入れ、上着をかけ、その場を去る。
勃起チンコは出したまま俺は、眼鏡女子がいる教室へと向かった。

何をするかは言わなくても分かるだろう。もちろんセックスだ。
教室に入るやいなや、眼鏡女子を後ろからバックで犯してやった。驚いていた眼鏡女子だったが、すぐに受け入れ、犯される事に悦びを覚え、俺にされるがまま犯されまくった。
ちなみに、五発中出ししてやった。

♡　♡　♡

眼鏡女子を犯しまくり、なんとか落ち着いた俺は、今回の仕事について聞いてみる事にした。
「ちなみに、お前らがまとめてた書類ってなんだったんだ？」
「はぁはぁ……あ、そう言えば伝えていませんでしたね。えっと……これです」
紙を渡される。何枚かの紙がホチキスで留められている。
「何々……『修学旅行旅のしおり。零様とイク、エッチなハーレム旅行』……なんだこれ？」
「そこに書いてある通りです。修学旅行のしおりです」
「いや、それは分かってるが、後半のこの言葉はなんなんだ？」
「私達は零様と、いつでもどこでも常にエッチをしたいと思っているんです！　だから、修学旅行中も、沢山エッチさせて頂きたいと思って、このしおりを作らせて頂きました！」
「そ、そうか……それは、楽しみだ……」
俺だってお前達といつでもどこでも常にエッチをしてたいさ。でもそうか。修学旅行……。ん？
「そもそも、修学旅行っていつなんだ？」
「来年です。進級して三年生になってから行きます。六月くらいですかね」
「なるほどな。えっと何々……行き先は……ってなんだこれ？修学旅行の行き先が、奈良とか大阪とかそういう県またぎじゃなくて、温泉巡りってどういう事だ？」

「この学校の伝統らしいんです。温泉巡りをするのが。ですが私達は幸せ者ですよ」
「ん？　なんでだ？」
「だって。女子だけのつまらない温泉巡りじゃなくて、零様と言う、ご主人様が一緒にいる温泉巡りなんですから♡　もう今から楽しみと興奮で、よだれと愛液が……♡」
「おいおい……」
眼鏡女子は、口許を拭う仕草をする。まぁ、でも、楽しみなのは俺も同じだな。
女子達と温泉巡りか～。色々楽しめそうだ！

まさか、進級する前に、先輩達とエッチしたり、燐達が転校して来たりするとは思ってもみなかったが。
まぁ、これはまだ、先のお話だが。

第２４話　屋上で、副委員長と……♡♡（後書き）

次回予告！

「零ちゃん♡」「お兄ちゃん♡」「兄さん♡」
「三人共、エロくて最高だな！」

「お兄ちゃんとのエッチデート、最高です♡」
「零ちゃん、歩き疲れたり、おちんちんスッキリさせたかったりしたらいつでも言ってね？　私が癒やしてあげるから♡」
「兄さん、いつでもおしっこしたかったら言って♡　私、兄さんのおしっこ、いつでもどこでも、人前でも飲めるから♡」

「観覧車でフェラ、興奮する……♡」
→燐。
「メリーゴーランドで繋がりながら一緒に乗るの、幸せぇ♡」
→華。
「鏡の部屋で、兄様のおしっこを飲めるなんて……♡　最高すぎて、死んじゃう……♡」
→桃。

「三人共、このデートの間、俺に沢山ご奉仕しろ！」
「「「は～い♡」」」

次回
『デート中のエッチなご奉仕♡♡」
お楽しみに！

『デート中のエッチなご奉仕♡♡』の次回予告で、新キャラが登場します！

第25話　デート中のエッチなご奉仕♡♡（前書き）

プロローグ

「ふんふふ～ん♪」

私は今、全裸で部屋にある姿見の前に立っている。

「お兄ちゃんが喜びそうなパンツって、どんなかな？」

私は、エッチなパンツをベッドの上にたくさん広げ、自分にあてがっては、違うなと何回も変えていた。

「これは初めてのデートの時に付けて行ったから、今回は別のがいいよね……しかも今回はお姉ちゃんと桃姉も一緒だから、私で興奮してもらえるようにしないといけない……」

どんなパンツなら、お兄ちゃんはおちんちんを勃起させてくれるんだろう……。

「ま、私の作った特性エッチジュースが効いてるから、ムラムラと勃起が収まらないって、言ってるから大丈夫だとは思うけど……」

私は一つのパンツを手に取った。

「これは、かなりエッチなやつだ……」

私は、自分が持っているパンツの中で、一番エッチなやつを穿いていく事にした。

「お兄ちゃん、いっぱい興奮してね♡」

♡　♡　♡

「はぁ～どうしようかな……」

私は今、全裸で部屋にある姿見の前に立っていた。

「おパンツはこれでいいとして、後はお洋服よね……あまりファッションに興味がないから、お洋服持ってないのよね……そもそも、ファッションは男の子がするものだし……」

私は、自分が持ってるお洋服を全部ベッドの上に出している。でも、そのどれもが普通。エッチでもない。
「こんなんじゃ、零ちゃんに喜んでもらえない……多分、燐ちゃん達はエッチな格好をしてくるはず……そうなったら、零ちゃんが私で興奮してくれなくなっちゃう」
それだけは絶対にダメ。零ちゃんと正式に付き合っているのは私だけなんだから。
私で興奮してくれないなんて、絶対にあってはならない。
「あ、そうだわ！　この服の、ここをこうして、で、ここをこう……」
私は一つのニットを手に取り、細工をし始めた。
「うん！　完璧！　下はおパンツが見えるくらいの短いスカートでいいかな？　……うん。きっと二人がスカートでくるはず。だったら、私はあえてズボンにして、おパンツのラインを際立たせて、零ちゃんを誘惑しよう！」
よし！　決まった！
「零ちゃん、待っててね！　私がいっぱい、射精させてあげるから♡」

♡　♡　♡

「う～ん……」
私は今、全裸で部屋にある姿見の前に立っていた。
「二人は絶対エッチな格好をして、兄さんを誘惑するはず……それに負けない格好……」
ベッドの上には、洋服とパンツが散乱している。
「どうすれば兄さんは喜んでくれるのかな……？」
兄さんは、エッチな女の子が大好きらしい。だから、エッチな格好をしたいんだけど、二人と被るのも嫌だ。
「そうだ！　これを仕込んで、スカートをこうして……うん！　こ

れなら被らないはず！」
よし、これで行こう！
「兄様、性奴隷便器である私を、たくさん使ってくださいね♡」
こうして、三人は、零とのデートの準備を、前日に整えたのだった。

第２５話　デート中のエッチなご奉仕♡♡

「ふわぁ～……」
今日はデートの日。
「流石に早く起きすぎたか？」
姉ちゃん、燐、桃の三人とデートをする事になり、家から出発するのは朝の９：００なんだが、俺は楽しみだったのか、６：００に目が覚めてしまった。
「流石に誰も起きてないか」
この時間では流石に、姉ちゃん達はまだ寝てる。
俺は、顔を洗ったりするために下に降りた。
「あ、先輩。おはようございます」
「おはよう。どうした？　早いな。今日は休日だぞ？」
「実は、お腹が空いてしまいまして……勝手に目が覚めてしまったんです……」
「なるほど」
可愛い理由だな。
「でも、最近ちょっと太ってきてしまっているので、あまり食べすぎないように節制しなきゃいけないんです……」
「太った？」
爆乳ショートちゃんの全身を舐め回すように見る。が、太ったような感じはしない。そもそも、この子はおっぱいがデカい割に、ウエストが細すぎる。
おっぱいにお腹潰されないか？　ってくらいに。俺からしたら、もうちょっとお腹に脂肪があってもいいと思うんだが……。
「太ってる感じはしないけどな。それに、俺はもうちょっとふくよかな方が好きだぞ？」
「そ、そう、ですか……？」

「あぁ。お腹がちょっとつまめて、セックスの時にお腹も弄れるくらいの方が、俺は好きだな」
「そ、そうなんですね……」
「ま、だからと言って太れとは言わない。今のままの君も俺は好きだからな」
「っ！」
「本人が気にしてるなら、横槍は入れないよ。でも、一つだけ言わせてくれ」
「は、はい……」
「あんまり細すぎると、心配になるから、節制しすぎず、ちゃんと食べてくれ」
「は、はい……！　ありがとうございます……！」
「なんなら、俺の精液を食べてもいいんだぞ？　精液はタンパク質が含まれてるからな。な～んてな。そんな事は流石に――」
「いいんですか！？」
「え！？」
「先輩の精液、食べさせて頂いてもいいんですか！？」
「え、あ、お、おう……君が嫌じゃなければな」
「嫌な訳ないじゃないですか！　大好きな先輩の精液ですよ！　いつだって飲みたいし、食べたいとずっと思ってます！」
「お、おう……」
思った以上にド変態だったんだっけ、そう言えば。
「ほ、本当にいいのか？　無理してないか？」
食ザーなんて、アニメやＡＶの中でしか見たことないからな。実際やりたい人がいるなんて思わなかったからな。この子も無理してるだけの可能性がある。
「無理なんてしてません……！　先輩は本当に優しいですね……！
私の事を考えてくれて、心配までしてくれる……そんなとこが大好きです……♡　でも、お願いです……！　先輩の精液、食べさせてください……！　お願いします……！」

涙を浮かべながら懇願してきた……どんだけ俺の精液食べたいんだよ……！
「分かった。分かったから泣くな。俺はセックスの時以外に女を泣かせる趣味はない」
「先輩……」
「今日からお前が満足するまで、好きなだけ俺の精液食っていいから」
「ほ、本当ですか！」
「あぁ」
「あ、ありがとうございます……！　とっても嬉しいです……！
で、では、飲み物として先輩のおしっこを……」
「あぁ。好きにしろ」
「っ！　やた♡」
小さくガッツポーズ……可愛すぎんだろっ！
「じゃあ、早速食うか？」
「い、いいんですか……？　この後、お三方とデートなのに……」
「あぁ。問題ない。燐のせいで無限に射精できそうだからな」
「わ、分かりました！　ありがとうございます！　では、頂きますね♡」
「あぁ」
爆乳ショートちゃんは、俺の前に跪き、ズボンとパンツを脱がしていく。
「うわ♡　もう大きい♡」
すでにギンギンになったチンコに、爆乳ショートちゃんは嬉しそうに頬ずりをして、臭いを嗅いだりした後、一気に咥え込んだ。
「んむぅ♡　れるぅ♡　れりゅぅ♡　ぢゅるぅ♡」
美味しそうに、愛おしそうに俺のチンコを舐める爆乳ショートちゃん。
やっぱり、エッチって最高だよな。
「ぢゅるるるるるる♡　ジュポッ♡　ぐぽっ♡　ジュポッ♡

ぐぽっ♡」
「くっ……」
吸ったり、舐めたりしていただけの責めが、突然頭を前後に振る責めに変化した。
「ジュポッ♡　ぐぽっ♡　ジュゾッ♡　ジュポッ♡　ジュボボボボボボボボ♡　ジュポッ♡」
「うっ……」
なんか、上手くなってないか……？　もう、保たない……！
「で、出るぅ！」
「んぶぅ！？」
ビュル！　ビュルルルルルルルルルルル！！！
「んぶぅ……♡　んく……♡」
爆乳ショートちゃんは、俺の射精を嬉しそうに受け止めている。しかし、いつもと違うのは、すぐに精液を飲み込まない事。
口の中で溜めている。しかし――、
「ま、まだ出る……！」
「んぶぅ……！　ぐぶぅ……！」
俺の射精はまだまだ続き、口の中で精液が溢れ、口の端から精液がこぼれてしまっている。こぼれた精液は、爆乳ショートちゃんの胸、足を汚していく。
爆乳ショートちゃんのむちっとした足に俺の精液が……やばい、興奮してまた！
「出る！」
「んぶぅぅ！？」
追い打ちをかけるように放たれた精液に、爆乳ショートちゃんは目を見開いて驚いた。ここまで出るとは思ってもみなかったのだろう。正直、俺も驚いている。
「は、はぁ……」
ようやく射精が止まった俺は、ゆっくりチンコを爆乳ショートちゃんの口から引き抜いた。

「んぶぅ……♡　んふぅ……♡　んふふ♡」
爆乳ショートちゃんは、口の中に溜まった精液を、嬉しそうに吟味していく。
「んふぅ……♡　んむんむ……♡　んちゅ……♡」
精液を噛んだり、うがいをするみたいに口の中でグチュグチュしたり、幸せそうに味わっている。
食ザーって、こんなにエロいのか！　毎日でもしてもらいたい！
「んっく♡　はぁ……♡　先輩の精液、とぉぉぉっても美味しいですぅ♡　毎日食べたい……♡」
「俺も、毎日食べてほしい。毎日、食ってくれるか？」
「も、もちろんです……！　毎日先輩の精液が食べれるなんて、幸せですぅ♡　あ、もったいない……♡」
おぉ……！　体にかかった精液も全部口に入れて……！
「本当、美味しい♡」
「な、なぁ……」
「おしっこ、ですか？」
「あぁ。飲んで、くれるか？」
「もちろんです♡　私は先輩の便器です♡　いつでもどこでも、先輩がおしっこしたい時にお使いください♡　それに、私にとって先輩のおしっこは神聖なものであり、飲み物なんです♡　だから、先輩は何も気にせず、私におしっこ出してください♡」
なんていい事を言ってくれるんだ……！
「先輩は、無理矢理お口におしっこ出しても大丈夫ですからね♡」
「じゃあ、飲め！」
「んぶぅ！？　んんぅ……♡」
ぷしゃあああああああ！
「んっ♡　んくんくんく……♡」
おしっこ飲まれるって、本当に最高だな……！
「んくんくんく……♡」
「ふぅ……」

「ぷはぁ……♡　先輩、ご馳走様でした♡」
「お粗末様でした」
「精液とおしっこを一緒に摂取すると、結構お腹いっぱいになるんですね♡」
「そうか。それじゃ、毎日続けてれば、納得のいく体型になるかもな」
「はい♡」
さてと、三人とのデートの準備でもしますか。

♡　♡　♡

「お兄ちゃ～ん！　お待たせしました～！」
出発時間の十分前、三人が着替えを済ませ一階に降りてきた。
「おう……って三人とも凄い格好だな！」
俺は、三人の格好を見て驚いた。
姉ちゃんの格好は、肩が出たニットで、ボディラインが強調されている。さらに、ズボンもピッタリで、下着のラインがはっきりと見えている。姉ちゃんのデカいお尻が強調されててめちゃくちゃエロい！
そして、何より俺が驚いたのが、姉ちゃんのおっぱいだ。乳首の部分が切り取られていて、陥没乳首が丸出しになっていた。
「えへへ♡　零ちゃんの為に頑張っちゃった♡」
次に燐の格好だ。
燐は、胸を強調させるニットを着ていて、谷間がめちゃくちゃ目立っている。さらに、スカートはめちゃくちゃ短く、パンツが丸見えになっている。しかも、そのパンツはスケスケで、大事な部分が丸見えになっていた。さらに、クロッチの部分が空洞になっているので、いつでも挿入する事ができる。
「お兄ちゃんに喜んでもらいたくて、張り切っちゃいました♡」
最後に桃の格好だ。

桃は、一見普通の格好。ボディラインが強調されるニットで、超が付くほどのミニスカ。パンツが丸見えになっているのが普通ではない。が、俺が驚いたのはそこではない。

クロッチの部分から伸びている一本の線だ。ニーハイソックスに固定されているピンクのモノ。それが何か俺はすぐに理解した。

ろ、ローター！　マジかよ……！

「これ、いつでも起動させて♡　兄さんに遊んでほしい♡」

桃にリモコンを渡される。試しに起動させてみると――、

「んんっ♡」

「「桃ちゃん（姉）！？」」

「に、兄さんにオマンコ、支配されてる……♡」

「その手があったか……！」

「桃ちゃん、天才ね……♡」

「皆さん、お気をつけて」

爆乳ショートちゃんがお見送りにきてくれた。

「ごめんな、留守番任せちゃって」

「いえ。皆さんで楽しんできてください」

爆乳ショートちゃんがデートに参加しないのは、このデートが前々から決まっていたからだった。遊園地の無料チケットが四枚しかなく、四人しか行けないのだ。

「本当にごめんね……！　この埋め合わせは今度必ずするから……！」

燐が謝罪する。

「はい。お願いします」

「それじゃ、行くか」

「うん！」「は～い！」「はい！」

こうして俺達は、デートに出発した。

♡　♡　♡

デート先の遊園地に到着した俺達。
にしても――、
「本当、女しかいねぇな……」
どこを見渡しても女しかいない。男の姿が全く見当たらない。
「もう、零ちゃんったら、今日は他の女の子の事は考えないで。私達がいるんだから」
「そうですよ、お兄ちゃん！」
「兄さん、今日は私達だけを見て」
「あぁ、悪い」
俺達は入園した。

しばらく、四人で遊び歩いた後、じゃんけんで誰が先に俺と二人っきりで回るかを決めた三人。
最初は燐だった。
「えへへ～♡　お兄ちゃんとデート、二回目ですね♡　最高に楽しいです～♡」
「それは良かったよ。にしても、真横から見る谷間は最高だな」
「本当ですか？　お兄ちゃん、興奮してくれますか？」
「あぁ。興奮しまくりだ。今すぐにでもその谷間に俺にチンコをねじ込みたいくらいだ」
「あは♡　嬉しい♡　ねね、あの観覧車に乗りましょう？」
「あぁ。乗ろうか」
俺の頭の中には、どんな事をしてくれるんだろうと言う期待が渦巻いていた。

観覧車に乗った俺達。すると早速――、
「んふふ♡　お兄ちゃんのおちんちん、おっきい……♡」
ズボンとパンツを脱がされ、勃起チンコを出されてしまった。
「誰のせいでこうなってると思ってんだよ」
「えへへ～♡　私で～す♡」

「お前にアレ飲まされてからすでに一ヶ月経つけど、全く落ち着かないのはなぜだ？」
「あ～……一ヶ月くらいって言うのは嘘なんです」
「何！？」
「本当は、一年くらい？」
「おまっ……！？」
一年くらいって、来年の１１月まで俺はずっとこの状態って事かよ！？　まぁ、すぐにセックスできるからそれはそれでいいんだけどさ……。
「ごめんなさい、お兄ちゃん……お詫びに、しっかりとご奉仕しますから、許してください……」
「あぁ。しっかりご奉仕できたら、許してやる」
「あ、ありがとうございます！　お兄ちゃんに満足して、許してもらえるよう、頑張ります！」
そう言って燐は、服を下にずらし、おっぱいを露わにした。
「もしかして……」
「はい♡　さっきお兄ちゃんが言ってたこと、叶えさせて頂きます♡　んしょ……」
「おぉ……！」
燐の谷間に俺のチンコがすっぽり包まれた。亀頭が谷間から少し出ているだけで、完全に隠れてしまっている。
「お前、胸でかくなったか？」
「あ、気づきました？　前はGカップだったんですけど、毎日おっぱいオナニーを続けていたら、バストサイズがアップして、なんとHカップになったんです！　なので、お兄ちゃんをこれまで以上に気持ち良くさせられると思います！」
「あぁ。頼むぞ」
「はい♡　では、始めますね♡」
「あぁ」
「ん～……♡　えろぉ……♡」

「おぉ～」
燐は唾液を亀頭に垂らしてくる。その光景がとんでもなくエロい。
「んっ♡　ふっ♡　んっ♡」
燐はおっぱいを寄せ、手を使って上下に動かし始める。唾液を垂らした事により滑りがよくなっている。
「どうですか、お兄ちゃん……♡　気持ちいいですか？」
「あぁ……めちゃくちゃ気持ちいいよ……！　少し汗ばんだ肌がチンコに張り付く感じとか、鈴口とカリ首が谷間に擦られて気持ちよさが絶えない感じとか、もう全部が最高だ！」
「んふふ♡　良かったです♡　あと、こんな事もできるんですよ♡
ん～ちゅ♡」
「うお！」
ぱ、パイズリフェラか！　パイズリとフェラはこれまでされてきたが、両方同時は初めてだ！
ずっとされてみたかった事だったが、これってこんなに気持ちいいのか！
柔らかくて張りがあって、ふわふわなおっぱいに包まれ、竿を扱かれながら、亀頭は暖かくてヌルヌルの口で刺激される。
こんなの、気持ちよすぎて――、
「出るっ！」
「んんっ！？」
ドビュルルルルルルルルルルルル！！！
「んぷあぁ♡　す、すごぉい♡　お兄ちゃんのザーメン、噴水みたいに飛び出してるぅ♡」
燐は、俺が射精しているのを嬉しそうに見ている。おっぱいを動かす手は止めずに。だから射精もまだ続いている。
「あぁ……♡　ザーメン、顔にビシャビシャかけられて、最高ぉ～♡」
射精した精液は、上に上がって、落ちる際に燐の顔とおっぱいにかかる。

燐は嫌がるどころか嬉しそうにそれを受け止めている。目を開いているので、目の中に入っていないか少し心配になるが、俺は今、射精で頭がいっぱいだった。
「はぁはぁ……」
やっと射精が落ち着いた俺。燐は恍惚とした表情で、顔と全身に付いた精液を舐めている。
「んふふ♡　お兄ちゃんの精液、すっごく美味しい♡　あ、もったいない♡」
燐は、俺のチンコから出てくる残り汁を、吸い始めた。
「んっく……！」
「んふふ♡　おにいふぁんのほえ、ほっへもはわひいれふ♡」
「く、咥えながら喋るなぁ……！」
「ぢゅるるるるるるる♡」
この後俺は、もう一回射精してしまった。

♡　♡　♡

次は姉ちゃんの番。
「えへへ♡　零ちゃ～ん♡」
「乳首開きニットなんて、よく思いついたな。それ売ってるのか？」
「ううん。昨日、ハサミで自分で切ったの」
「え！？　そんな事していいのか！？」
「うん。零ちゃんのためだも～ん♡」
「そ、そうか……じゃあ、今度、新しい服買ってやるよ」
「ほ、本当……！　ど、どうしよう、私嬉しすぎてオマンコ濡れちゃう……♡」
「もう濡れてんだろ」
「うん……♡　だから早くエッチしよ♡」
「あぁ。何に乗る？」
「う～ん……っと、あれ！」

「メリーゴーランドか」
俺達はメリーゴーランドに乗った。一つの馬に二人で。しかも、俺の上に姉ちゃんが跨った状態で。
この状態でも誰も何も言わないって、どうなってんだよ。
「それじゃ、挿(い)れちゃうね♡　んっ、んんぅ♡」
姉ちゃんは、腰を下ろし、チンコをすっぽりマンコで咥えこんでしまった。
「公衆の面前でセックスなんて、姉ちゃん変態だな」
「だ、だってぇ♡　が、我慢できなかったんだもん♡　零ちゃんだって我慢できないでしょう……♡」
「あぁ。まぁな！」
「んひゅう♡　下からおちんちんグンッって来たぁ♡　オマンコの奥までおちんちん届いてるのぉ♡」
『メリーゴーランド、スタート致します♪　しっかりと手すりに掴まって、お楽しみください♪』
「ほら、動くってよ。ちゃんと掴まって」
「う、うん……♡」
姉ちゃんが手すりを掴む。なんか、拘束して犯してるみたいでめちゃくちゃ興奮する。
「ひゃ♡　おちんちん、膣(なか)でビクンってした♡　な、何に興奮したの……？　私に教えてぇ♡」
「姉ちゃんが手すり掴んだの見て、なんか拘束して、レイプしてるみたいだなぁって思ってさ」
「こ、拘束レイプぅ♡　い、いいのぉ♡　私、零ちゃんに拘束レイプされたいぃ♡」
「じゃあ、今度してみるか？」
「うん！　うん！　してぇ♡　私に拘束レイプしてぇ♡」
「ふっ。子供がこっち見てるぞ？　あのお姉ちゃん、何言ってるんだろう？　って顔でな」
「あっ、あっ、あっ♡　み、見てぇ♡　お姉ちゃんのはしたない所

たくさん見てぇ♡」
メリーゴーランドの動きと、俺の突き上げに、姉ちゃんはメチャクチャ感じまくった。その結果――、
「んひゅぅ♡　で、出ちゃうぅ♡」
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡
「おぉ～」
公衆の面前で潮吹きをしてしまった。そんな光景を見せられたら――、
「出る！」
ブビュビュビュゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！
「んほぉおおお！　で、出てるぅ♡　な、膣(なか)で零ちゃんの子種がいっぱい出てるぅぅぅ♡　な、中出しされて、また、イグゥぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
俺はこの後、メリーゴーランドが止まるまで、何回も中出しした。
その数、三回。

♡　♡　♡

そして、最後は桃。
俺達は今、鏡の部屋にいた。
「んっ……♡　んんっ……♡」
「ほら、早く行くぞ」
「は、はいぃ……♡」
俺はローターを操り、桃のマンコを刺激しながら進んでいた。感じている桃は上手く歩けない。だが、そこで優しくする俺ではない。
「ほら、さっさと来いよ！」
「ご、ごめんなさいぃ……！」
俺は桃の手を引っ張り、強制的に走らせる。
「んんっ♡　んあああ♡」
そうすると、強制的に感じてしまう桃。ある程度進んだ所で――、

「はぁはぁ……」
へたり込んでしまった。
やれやれ、この性奴隷は世話がかかる。
「桃」
「は、はい……」
「ここで俺のおしっこを飲め」
「く、くださるのですか……？　こんな駄目駄目な私に……？」
「あぁ。特別だぞ？」
「あ、ありがたき幸せです……♡」
俺はチンコを出す。
「ちゃんと飲めよ？」
「は、はい……♡　あんむ♡」
桃は俺のチンコを咥える。流石にこの場所を汚すわけにはいかないからな。
「出すぞ」
「ふ、ふぁい……♡」
「んっ！」
「んんっ！？」
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
「んんっ……♡　んきゅ……♡　んくんくんく……♡」
桃が俺のおしっこを美味しそうに飲んでいく。
「人が集まってきたぞ？　ローターで感じながらおしっこを飲む、ド変態なお前、今他人に見られてるぞ？」
「んんっ……♡」
目元に涙を浮かべ、おしっこを飲んでいく桃。
桃は恥ずかしい思いをすると、感じるマゾだ。まぁ基本俺が出会った女子は全員Mなんだけど。
「ふぅ……」
「ごくん……♡　ちゅぽん♡　ご馳走様でした、兄様♡　す、スッキリしましたか？」

「あぁ。でも、お前はまだみたいだな」
「い、いえ……わ、私は……」
「隠さなくていい。お前も出そうなんだろ？」
「そ、それは……」
「いいから言え！」
「んひゃう！？　あっ、あああ……♡」
俺はローターの強さを弱から強にした。
「どうなんだ？」
「は、はいぃ……♡　お、おしっこ漏れそうになってますぅ……♡」
「ふっ。よく言えたな。じゃあ、お前もここで出せ」
「っ！？　で、でも、ここを汚しちゃうのは……」
俺は視線をずらし、人々の中にこの遊園地の制服を着た人と目を合わせる。
その人はここの従業員で、しかもこの鏡の部屋の担当みたいだ。その人が右手でオッケーサインを作る。
「大丈夫だ。ここで漏らせ」
「で、でも……」
「いいから漏らすんだよ、この雌豚がぁ！」
「ひゃ、ひゃいぃぃぃ♡」
俺は桃を無理矢理立ち上がらせ、パンツを脱がす。ローターのブゥゥゥゥと言う音が、鏡の部屋に響き渡る。
「さっさと漏らしやがれ」
「ひゃ、ひゃぁぁ♡　そ、そこだめれすぅ……♡」
「誰に命令してんだ？　あぁ！」
「ご、ごめんなしゃぁぁぁい……！？」
俺は桃のクリを激しく愛撫する。皮を剥き、親指を除く全指の腹でクリを激しく擦っていく。さらに、ローターの強さも強から最強にした（どこまであるんだ、この強さは？）。
「んひゃあああああああ♡　だ、ダメぇぇぇ♡　クリとオマンコの同時は、イッちゃうぅ♡　漏れちゃうぅ♡」

「だから、漏らしていいんだよ、さっさと漏らせ雌豚ぁ！」
「は、はひぃぃぃ♡♡♡　も、もう、ダメ……♡　イッキュぅぅぅぅ！！！　お、おしっこ漏れちゃうぅぅぅぅ！！！　あああああああああああ！！！」
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡
「おお～」
桃は腰をビクンビクンとビクつかせながら、派手にイッた。さらに、黄金色の液体を鏡張りの部屋に放出していく。
あっという間に床に水たまりを作ってしまった。
見ている人達からはなぜか拍手が巻き起こった。さっきの従業員の人を見ると、顔を真っ赤にしながら俺に拍手を送ってくれていた。
ここの遊園地、最高かもな。
「は、はぁ……♡」
腰が砕け、床に横たわる桃。全身をビクビクとさせている。なんか、打ち上げられた魚みたい。
この後、桃が落ち着きを取り戻すまで、俺と従業員のお姉さんで、桃のおしっこを掃除した。
マジでありがとうございました。今度機会があれば犯させてください。

♡　♡　♡

遊園地デートを終え、家に帰ってきた俺達。
そんな俺達を迎え入れてくれたのは――、
「めっちゃ美味そうだな！」
爆乳ショートちゃんが作ってくれた、豪華なご馳走達だった。
「皆さんに喜んでもらいたくて張り切ったら、作り過ぎちゃいました♪」
「最高だ……！　お前はいい嫁になれるな！」
「っ♡　う、嬉しいですぅ♡　わ、私、立派なお嫁さんになれるよ

う、頑張ります♡」
「あぁ！」
俺達は、爆乳ショートちゃんが作ってくれたご馳走を食べながら、一日を総括して行った。
こりゃ、完全に胃袋掴まれたかもな。

第２５話　デート中のエッチなご奉仕♡♡（後書き）

次回予告！

「あぁぁぁぁん！　零ちゃん！　気持ちいい！」
「お兄ちゃん、もっとクリ虐めてくださいぃ♡」
「兄さん、私のお口の中、もっと虐めて♡」
「先輩のクンニ、最高すぎますぅ♡」
俺達が、家でいつも通りエッチをしていた時、事件は起こった。

「零ちゃん、元気にしてるかしら？　会うのが楽しみだわぁ～。どんな成長をしてるのか。んふふ♡」
一人の女性が空港に降り立った。
「待っててね、零ちゃん。お義母さん、今帰るからね♡」

次回
『義母と禁断の……♡♡』
お楽しみに！

第２５．５話　メリークリスマス♪　超絶エッチな性なる日♥♥
（前書き）

プロローグ

『メリークリスマ～ス！！！』

パン！　パパパン！　パン！

「メリークリスマス。エッチなサンタさん達」

『私達が、クリスマスプレゼントだよ♡　たくさん、召し上がれ♡』

俺の目の前には、超エッチなサンタコスをした瑠李（るい）、桃、燐、姉ちゃん、爆乳ショートちゃん、金髪女子、茶髪女子、眼鏡女子、副委員長、担任教師がいた。

ここは、俺の家。今日はクリスマスだ。みんなで、性なるクリスマスパーティーを、行う事になった。

第２５．５話　メリークリスマス♪　超絶エッチな性なる日♥♥

なぜ俺の家でクリスマスパーティーをやる事になったのか、それは、瑠李が言い出したからだ。
冬休み中なので学校はないのだが、瑠李が個人的に連絡を取り、クリスマスパーティーを開催する事になった。
まぁ、まだそれは分かる。だが、なぜ俺の家で？　俺はそう思った。
その理由を瑠李はこう言った。
『エッチなサンタさんの格好をした私達と、エッチしたくない？零君の好きなように私達淫乱サンタを虐めていいんだよ？』
そう言われたら、許可を出すしかない。
今は姉ちゃんも燐も桃も外出している。どうやらサンタコスを買いに行ってるようだ。
と、そんな時、スマホに着信が。
「はい？」
俺が電話に出ると――、
「おぉ～！　久しぶりだな！　元気にしてたか？」
俺と瑠李のもう一人の幼馴染みからだった。そいつは海外に住んでいて、簡単には会えない。だが、たま～にこうして連絡をしてくる。
「ん？　こっち？　今からクリスマスパーティーだよ。瑠李がめっちゃ張り切っちゃってさ。……だろ？　あいつ、そう言うとこ昔っから変わんねぇんだよな。アハハハ！」
そいつとの久々の会話はメチャクチャ楽しかった。
一時間くらい話してたんだと思う。あっという間にみんなが帰ってきた。そこで俺は会話を終わらせ、通信を切った。
「ささ、上がって上がってぇ～」

『お邪魔しま～す！』
姉ちゃん達に案内されながら、金髪女子、茶髪女子、眼鏡女子、副委員長、担任教師が部屋に入ってくる。ちなみに、担任教師には俺から連絡した。
「あ、れいれい！　メリクリ～！　お邪魔するね！」
「順番が逆な気がするがまぁいいか。あぁ。今日はゆっくりしていってくれ」
「れー君、メリークリスマス♡」
「おお。メリークリスマスって、近いな」
茶髪女子は俺の座ってるソファの右側に座ってきた。かなり詰めて。
「あ～！　抜け駆けは禁止ですよ！　私も零様の隣に座りたいんですから！」
そう言って、眼鏡女子が左側に座ってきた。
おっぱいに挟まれるのって、やっぱり最高！
「ほら、みんな、ふざけてないで、先に準備を済ませないと」
「よぉ」
「っ！　ど、どもです……♡」
副委員長は、俺に犯されてから目を合わせると恥ずかしそうにする。その様子がめちゃくちゃ可愛くて、ついからかってしまいたくなる。
「おい……目を逸らすなよ……悲しいじゃねぇか……」
「す、すみません……！　そ、そんなつもりじゃなくて……！」
「白下君？　あんまりからかうんじゃありません」
「先生。誰が誰にものを言ってるの？」
「も、申し訳ありません、零様……！　一応教師と言う肩書きがあるので……」
「今日はそんなのなし！　ここにいる全員、俺の女なんだから。な！」
『はい！』

全員の返事が揃った。最高だな。

♡　♡　♡

「んしょ……」「ん……」「っしょ……」

今、リビングでは、女子達が服を脱いでいる。買ってきたサンタコスに着替えるためだ。

前の俺なら別室で着替えろとか言ってただろうけど、今は違う。

女子が着替えてる姿を見れるなんて最高！　ここで着替えろって言ったら、嬉しそうにみんな、着替え始めた。

「ん？　なんで全員パンツ脱いでんだ？」

俺が聞くと、金髪女子が代表して答えた。

「サンタコス用のエッチなパンツを穿くためだよ～♡　れいれいの為のパンツなんだからね～♡」

「なるほどな……それは楽しみだ」

全員がパンツを脱ぎ、全裸になる。

そして、何やら超スケスケで、Tバックのパンツを全員が穿く。

そして、裸の上に胸元が大胆に開いた服や、短すぎるスカートなどを着ていった。

「じゃ～ん♪　エッチなサンタさん、完成～♡　どう？　どう？」

全員の着替えが終わった。

爆乳ショートちゃんと副委員長、担任教師は恥ずかしそうにしているが、他は堂々と立っている。

「最高だ……！　こんなエッチなサンタさんがいるなんて……！俺は幸せもんだよ！」

「んふふ♡　れいれい喜んでもらえてよかった♡　ね、みんな！」

『うん！』

「じゃあ早速、性なる夜の、エッチなクリスマス乱交パーティー、開始ぃ♡」

『おぉ～～～！！！』

こうして、俺達のエッチなクリスマスパーティーが始まった。

♡　♡　♡

「「んちゅ……♡　んむぅ……♡」」

金髪女子と眼鏡女子が、俺のチンコを舐めている。ダブルフェラだ。

「ぢゅるぅ♡　ちゅる♡　ぢゅるるる♡」

茶髪女子が、俺のアナルを舐めている。

「「チロチロチロチロ……♡　ぢゅるるるる♡」」

燐と担任教師が、俺の乳首を舐めてくる。

「あんむ♡　ちゅむ……♡　ぢゅる……♡」

姉ちゃんがディープキスをしてくる。

「んっ……♡　はっ……♡　あっ……♡」

「んんっ……♡　んふぅ……♡　んはぁ……♡」

爆乳ショートちゃんと桃が、俺の手マンで感じている。

「「は、は、はぁ……♡　んんっ……♡　あぁ……♡」」

副委員長と瑠李は、俺の見える所でオナニーをしている。副委員長は俺にオナニーを見られるのが大好きなんだそうだ。

「んふふ……♡　零様のオチンポ、本当に美味しいですぅ♡」

「れいれいの我慢汁、本当大好きぃ♡」

フェラの速度がどんどんと上がっていく。二人の連携もとんどんと上手くなっていって、すぐにイッてしまいそうになる。

「零様の乳首も最高です……♡」

「お兄ちゃん、乳首もエッチだなんて……♡」

二人が乳首をどんどんと責め立ててくる。男でもこんなに乳首って感じるんだな。

「ちゅぱ！　れー君のアナルも最高……♡　ずっと舐めてたいくらい……♡」

茶髪女子がそう言ってくる。表情は見えないが、おそらくは恍惚

とした表情を浮かべているのだろう。
「零ちゃん……♡　キス、気持ちいい？」
「あぁ。最高だよ、姉ちゃん」
「良かった……♡　もっとするね♡　んむぅ……♡」
姉ちゃんがさっきよりも深いキスをしてくる。
「んっ……♡　んはぁ……♡　せ、先輩……♡」
「に、兄さん……♡　気持ちよすぎる……♡」
爆乳ショートちゃんと桃が愛液と本気汁を溢れさせながら、感じまくる。
「「あっ……♡　はっ……♡　んはぁ……♡」」
正直、姉ちゃんのキスのせいでよくは見えてないが、瑠李と副委員長はオナニーでめちゃくちゃ感じている。
ってか、もう本当に出そう……！
「んっ♡　れいれいのオチンポ、ビクってした♡　イきそう？」
「イッて♡　イッて♡　私達にいっぱい出してください♡」
「わ、私もイきそうです……先輩……♡」
「に、兄さん……♡　も……ダメ……♡」
「私もイッちゃうよぉ、零君♡」
「零様ぁ……♡　い、イッちゃいますぅ♡」
（れー君のアナル、ギュッギュッって締まってきた……♡　男の子ってイきそうになるとこんなになるんだ……可愛い♡）
（零ちゃん、イッて♡　イッて♡　私のお口の中を零ちゃんの喘ぎ声で犯して♡）
「「「「んひゃあああああ！！　イッくぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」」」」
「んん～～～～！」
ドビュルルルルルルルル！！！
「「キャッ！　あぁ～……♡♡♡」」
（アナルギュッギュッしてる……♡　可愛い♡）
（零ちゃんの喘ぎ、堪んない……♡　私のお口の中、零ちゃんの喘

ぎでいっぱいにされちゃった……♡）
この乱交は、朝まで続いた。

♡　♡　♡

「ん……？」
目を覚ますと、みんなが裸のままリビングで眠っていた。
先輩は……ふふ♡　寝顔、すっごく可愛い♡
「ふがっ」
先輩ってイビキかくんだ……それも素敵♡
「どうしよう……もう一回寝るにしても、目が冴えちゃった……」
私が悩んでいると――、
「まさか、同居してるなんて思わなかったわ」
「っ！　せ、先生……！」
先輩達の担任の先生が声をかけてきた。ちなみに、一年だと先生は数学の担当だった。
「な、なんでそれを知って……？」
「私は教師だぞ？　生徒の個人情報を管理している。君の引っ越しを知らない訳ないだろう？　理事長から話が来た時はビックリしたぞ？　驚き過ぎて子宮が降りてくるかと思った」
「どんな例えですか、それ……」
「あはは、すまない。……それで？　どういった経緯で一緒に住むことになったんだ？」
「それは……」
私はありのままに説明した。先輩の性処理係で、先輩の便器である事。何もかも全てを。
「そうか……なるほどな。君は零様に大事にされてるんだな」
「先生も大事にされてますよね？」
「私の場合は、アレだ……放置プレイが多い……連絡先を交換して一発目の連絡が今日だぞ？　初めて交換したのはもう少し前だと言

うのに……」
むっ。先輩に対して文句？　だとしたらいくら先生でも許せない。
「先輩に文句ですか？」
「あ、いや、違っ！　文句なんかじゃない。報告をしただけなんだ……！　だからそう怒らんでくれ……」
「ならいいです。いくら先生でも、先輩への文句は許しませんからね」
「あ、あぁ。分かってる。それに私も零様に対して文句なんてあるわけない。この放置プレイだって、私は凄く興奮しているんだ。それを分かって零様は行っているんだろう」
前に先輩に聞いたことあるけど、ただ単に忘れてるだけだって言ってた。それは黙っておこう。
「先輩は、本当に凄いですよね」
「そうだな……ここまで性に積極的な男性は他にいないぞ」
「それもそうなんですけど、私達の事をとっても大切にしてくれて、愛してくれてる」
「そうだな……Sの部分と優しい部分のギャップで、ますます惚れてしまうんだよな……」
「はい……」
「誰が、零様のハートを射止めるんだろうな」
「それは……今は考えたくないですね」
「だな。……零様の事だから意外と、全員、俺の嫁だ！　とか言いそうだけどな」
「確かに……！　ありそうですね。でも、先輩がそれを望んだら、私は……」
「あぁ。私は……」
「「それを受け入れる」」
爆乳ショートちゃんと担任教師はこの後、他愛ない話をして、時間を潰した。

その話の内容は全て、零に関してだった。

第２５．５話　メリークリスマス♪　超絶エッチな性なる日♥♥（後書き）

エピローグ

海外のとある学校で。

「はぁ～……れっくん、声格好良くなってたな……♡」

サファイア色とエメラルド色の髪をした、ショートカットの少女が、外にあるテラス席のテーブルに突っ伏しながら、スマホを眺めていた。

そこには、子供頃の零が映っていた。

「でも、なんか雰囲気が変わってた気が……？　もしかして、あの学校に転校できたのかな……？　って事はヤリまくりって事だよね？　う～ん……私が仕組んだ事とは言え、なんかモヤモヤするなぁ……みんなズルい……」

少女は周りに誰もいないことを確認し――、

「また、女神様にお願いしてみようかな……？」

少女はそう独り言ちた。

この少女がこの先、零達と関わるのはもう少し先になるだろう。

第２６話　義母との禁断の……♡♡（前書き）

プロローグ

「「「「「ああああああんっっっっ♡♡♡」」」」」

俺と爆乳ショートちゃん、桃、燐、姉ちゃんの四人は今、家のリビングでヤりまくっていた。

代わる代わるマンコに挿(い)れていっては中出しをし、フェラ、イラマ、パイズリ、手コキ、様々なプレイをしている。

全員が全裸で、汗をかき、最高潮に盛り上がっていた。

そんな時、事件が起こった。

「ただいま〜」

「「っ！？」」

俺と爆乳ショートちゃんだけ、肩をビクッと震わせ行動を止めてしまった。

ちょうど爆乳ショートちゃんの膣(なか)に挿(い)れているので、二人して繋がったまま動きを止めてしまっている。

俺達が固まっていると、とある人物がリビングに入ってきた。

「みんな〜！　ただいま〜♪」

その人物とは――、

「か、義母(かあ)さん！？」

第２６話　義母との禁断の……♡♡

「か、義母(かあ)さん！？」
「え！？　お母様！？」
「んふふ～♪　みんな、ただいま♪」
リビングに入ってきたのは、父親の再婚でできた義母だった。
桃の実の母親。俺達は義理の子供だ。
「ど、どうしてここに……ってか、仕事はどうしたんだよ！？」
そう。この義母は、海外で俺の父親と共に働いている。何をしているのかは詳しく聞いた事はないが、なにやら大変な仕事をしているらしい。
それなのに、なぜこの人はここにいるのだろうか？
「仕事はパパに押し付け――ううん！　任せて来たのよ～♪」
今、押し付けてって言いかけなかったか？　と言うかほぼ言ってたし！
「それにしても、ごめんね？　お楽しみ中に帰ってきちゃって」
「ん？　あぁぁ！？」
俺達今、全裸だった！？　しかも爆乳ショートちゃんとは今現在繋がったままだ！？
「ち、違うんだ、これは！？　っていうかなんで桃達はそんな落ち着いたんだよ！？　姉弟でエッチしてんの見られてるんだぞ！？」
「あれ？　燐ちゃん、もしかして零ちゃんに言ってないの？」
姉ちゃんが不思議そうな顔を浮かべた後、燐に尋ねた。
「あっ！　そう言えばすっかり忘れてた……！　ごめんなさい、お兄ちゃん……！　実はね、私達の関係、全部ママに伝えてあるの」
「な、なんだとぉぉぉぉぉ！？」

♡　♡　♡

燐達から説明を受けた。
どうやら、俺が性に積極的になった時点ですでに、義母さんには報告をしていたらしい。
さらには、三人と関係を持った時、すぐに報告をしたんだそう。
それを受けて義母さんは、跳びはねて喜んだらしい。なんでやねん。
つまり、俺達の関係は全て義母さんに筒抜けと言う事……って、まさか！？
「（桃ちゃんを便器にしてる事も、もちろん知ってるよ♡）」
「っ！？」
やっぱりか！　義母さんが俺の耳元でそう囁いてくる。
耳元で言ったって事は、姉ちゃんと燐に内緒にしてるのを知ってるって事だ。と言うことはつまり、報告したのは桃か。
「そして、君が噂の爆乳ちゃんか～」
「あ、そ、その……すみません……初めましてがこんな格好で……」
「何言ってるの。女が一番輝く格好でしょう？　全然気にしないで。にしても本当に大きいわね～。（零ちゃんの性奴隷便器ちゃん♡）」
「っ！？」
義母さんは、俺と繋がったままの爆乳ショートちゃんのデカいおっぱいを眺めた後、耳元で何かを囁いた。何を言ったのかは分からないが、爆乳ショートちゃんの表情を見る限り、驚くような事を言われたのは確かだろう。
「つまり、零ちゃんは、何も気にせずこの子達を犯しまくっていいって事よ。お義母さんがいても、今まで通りにしてちょうだい♪」
「わ、分かった……そう言う事なら……ふんっ！」
「ふひゃぁ！？」
俺はいきなり下から、爆乳ショートちゃんのマンコを突き上げた。正直、挿れっぱで動かないと言うのは生殺しでキツイ。
義母さんの許可が下りた今、遠慮する必用はない。
「ま、待って、ください、先輩……！？　お、お母様が、い、今、

目の前に……！？」
「あぁ。その義母さんから許可が出たんだ。なんの遠慮もいらねぇだろ？　俺はお前を犯す。それだけだ。それとも、俺に逆らうのか？」
「い、いえ！　決してそんな事はしません……！　せ、先輩に犯されるの、とても嬉しいです！」
「そうか。だったら黙って俺に犯されろ！　（性奴隷便器野郎）」
「は、はひぃぃぃ♡」
俺が耳元で小さく囁くと、爆乳ショートちゃんは全身を震わせながら感じ始めた。
「ねぇ、零ちゃんっていつもこんな感じ？」
「うん。兄さんは最高のドS神様。いつも虐めてくれる♡」
「そう。（私好みの男になってくれたのね、零ちゃん……♡　私の事も虐めてくれないかしら……♡）」
「おらぁ！　イケ！　雌豚ぁ！」
「イキますぅ！　イキますぅ！　オマンコ犯されて、イッちゃいますぅぅぅぅ♡♡♡」
「俺の精液、どこに出してほしい？」
「膣（なか）にぃ！　膣（なか）に出して欲しいですぅぅぅぅ♡♡♡」
「だったら、たっぷり出してやる！　ありがたく受け取れぇ！」
ドビュルルルルルルルルル！！！
「んぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　先輩の精液、子宮にバシャバシャかかってるぅぅ♡♡♡　幸せ過ぎて、また、イグぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
俺の中出しで、爆乳ショートちゃんは絶頂した。
そのまま力なく俺にもたれかかってくる。おっぱいが俺の胸に……。最高だな。
「みんな、着替えてきて。今から食事に行くわよ」
「やった～！　外食だぁ～！　ママ！　私お寿司がいい！」
「はいはい。本当、燐ちゃんはお寿司が好きね」

「大好き！」
こうして俺達は、帰ってきた義母さんと外食することになった。
もちろん、爆乳ショートちゃんも一緒だ。

♡　♡　♡

外食を終え、夜になった。
爆乳ショートちゃんと義母さんは、すぐに仲良くなり、義母さんは爆乳ショートちゃんを「私の娘～♪」と言って愛でている。
現在は各自、部屋にいて、すでに眠っている（爆乳ショートちゃんは桃の部屋で寝ている）。
俺も朝からの乱交で疲れてたので、眠っていたのだが……。
なんだ……？　この股間に感じる心地よさと気持ちよさは……？
俺は目を開け、布団を剥ぐ。すると――、
「んむぅちゅぅ……♡　あらぁ？　起きちゃった？」
「か、義母さん！？　な、何してんの！？」
「何って、夜這いフェラよ♡」
そう。心地よさと気持ちよさの正体は、義母さんによるフェラだった。
「燐ちゃんのせいで、零ちゃんのオチンポ、ずっと勃起状態なんでしょう？」
「う、うん……」
燐に聞いたのか。
「だったら、少しでも楽になるようにいっぱい射精しなきゃ♪　零ちゃん、目の下くまができてるの自分で気づいてる？　多分しっかり寝れてないんでしょ」
ひ、久しぶりに会ったのにもう見抜かれてる……。確かにここ最近、俺は熟睡できていない。
エロい事を考えていないのに勃起してしまうからだ。それを今日の数時間の一瞬で気づくなんて、義理と言えどやっぱり母親なんだ

なぁ……。
ちなみに、俺達の実母は他界している。交通事故だったらしい。
三人の子供を男手一つで育てて、疲労も心労も溜まりに溜まっていた父さんを救ってくれたのが義母さんだった。
「何も気にしないで、零ちゃんはいっぱい気持ち良くなって、いっぱい射精すればいいのよ♡　私みたいなオバサンにされるのは嫌だと思うけど……」
「そんなことない！」
「え……」
「俺、義母さんをオバサンだなんて思った事、一度もない！　むしろ、大人で、色気があって、セクシーで、可愛くて、上品で、最高の女性だなって思ってる！」
「れ、零ちゃん……♡」
義母さんは、目元に涙を浮かべてしまった。
「お、俺なんか変な事言った！？」
「ううん……違うの……嬉しくて……！　零ちゃんにそう言ってもらえるのが、すごく嬉しくて……！　私ね、ずっと零ちゃんの事が好きだったの。それは、親と子としてではなくて、一人の男として」
「義母さん……」
「だからね、零ちゃん。お義母さんと、エッチ、してください。お義母さんを、零ちゃんの性奴隷にしてください……♡」
「もちろん。むしろ俺の方からお願いしたいくらいだよ」
「零ちゃん……♡」
「義母さん、ほら、咥えて」
「はい……♡　はんむ……♡」
「っ……！」
義母さんが俺の勃起チンコを咥えてくれる。
口の中で、舌が亀頭を捉え、上下左右に激しく責め立ててくる。
「ぢろぉ！　ぢろぉ♡　ぢゅろぉぉぉぉぉ♡♡」
さらに、我慢汁を吸い出そうとしてるかのごとく、舌で亀頭を刺

激しながらチンコを吸い上げてくる。
唾液と我慢汁の音が組み合わさり、卑猥なフェラ音が部屋に鳴り響く。
「か、義母さん、俺、もう……！」
「いいろ……♡　はまんひないれ、いっふぁいらひへ♡♡」
「くっ……うぁ！　出るっ！」
ドビュッ！　ドビュルルルルルル！！！
「はんっ！？　んんっ……♡　ぢゅうぅぅぅ♡♡♡」
義母さんは、俺の射精を嬉しそうに口で受け止め、吐き出される精液をどんどん飲んでいく。
さらに、射精中の亀頭を舌で刺激してくるので、射精が止まらない。舌の裏側にも俺の精液が溜まってるんだと思うと興奮が収まらない。
「くっ……」
やっと射精が落ち着いた。
「ヂュポン♡　んふふ♡　零ちゃんの精液、とっても美味しいわね♡　これをあの子達は毎日飲んでるのね……なんかズルいわ！　ねぇ零ちゃん、これからお義母さんにも精液、いっぱいちょうだい？」
「う、うん。それはもちろん」
「やった～！　ありがとう！　零ちゃ～ん！」
義母さんは俺に抱きついてきた。
ふにょん♡
義母さんの大きく柔らかい巨乳が、俺の胸板に形を変えながら密着してくる。
あ～やらけぇ……。最高過ぎる……。
「あ、零ちゃん、今オチンポがビクッてした」
「こ、これは……」
流石に恥ずかしいな……義理とは言え母親のおっぱいに興奮してビクつかせたなんて。
「お義母さんのおっぱいに興奮してくれたの？」

「う、うん……」
「んふふ♡　嬉しい♡　ねぇ、零ちゃん」
「何……？」
「お義母さんのおっぱい、揉んでくれる？」
「い、いいの……？」
「もちろん♡　私だけ零ちゃんのオチンポ触らせてもらうのは不公平でしょ？　それに、私のおっぱい、零ちゃんに触られたいって、メチャクチャに揉みしだかれたいって言ってるの……♡」
義母さんは服を脱ぎ始めた。他の女子と同様にブラは着けていない。
なので、薄手のカーディガンを脱ぐと、すぐに巨乳がこぼれ落ちた。
少し濃い目の乳首と乳輪がエロく、乳首は少々大きめ。
「ほら……♡　乳首、零ちゃんに触ってって勃起してねだってるの……♡　だから、ね♡」
「お、俺、もう我慢できない！」
「キャッ！」
俺は義母さんのおっぱいを、いきなり鷲掴みにした。さすがにがっつきすぎたか？　怒られるか？
「んふふ♡　いいよ♡　零ちゃんの好きなようにお義母さんのおっぱい揉んで♡」
お、怒られなかった……！　それどころか嬉しそうに俺の好きなように揉んでほしいと言ってきた……！
こんなの、我慢できるはずがない！
「義母さん！」
「んんっ♡」
俺は、義母さんのおっぱいを揉みしだく。
めちゃくちゃ柔らかい！　指がどこまでも沈んでいってしまう！
力を入れる度に形を変えるのに、手を離すと勝手に元の形に戻る。
エロすぎる！

さらに、乳首もビンビンで、手のひらに当たってくる感触が堪らない！
「んひぃ♡」
俺が乳首を抓むと、義母さんは悲鳴に似た喘ぎを漏らした。
「義母さんってもしかして、乳首弱い？」
「う、うん……実は、そうなの……でも、自分で触る時はここまで感じないのよ……大好きな零ちゃんに触られてるから、感度もいつもの倍になってるのかも♡」
なんて嬉しいことを言ってくれるんだ、この人は！
「だったら、ぢゅるるるるるるる！」
「んはぁぁぁぁんっっっ♡♡♡」
俺は乳首に思い切り吸い付いた。片方の乳首は抓んだままだ。
「れ、零ちゃん……！　そ、それ気持ちよすぎるぅ♡」
「ぢゅるるるるるるる！」
「今、妊娠してないからおっぱい出ないよぉ♡」
俺は乳首から口を離し、おっぱいを寄せる。
「れ、零ちゃん……？」
「はんむ！　ぢゅるるるるるる！！！」
「んひゃぁぁぁぁぁぁ♡♡♡　乳首同時吸いはらめぇぇぇ♡♡♡」
俺は、寄せたおっぱいの頂点、乳首を両方同時に口に含み、それを思い切り吸った。
義母さんはそれがよっぽど気持ちよかったのか――、
「乳首でイッちゃうぅぅぅ♡♡♡」
乳首でイッてしまった。
乳首でイクなんて、茶髪女子以来だな。やっぱり乳首イキはいいな。今度爆乳ショートちゃんの乳首も開発してやろうかな？
「はぁはぁ……ごめんね……勝手にイッちゃって……」
「ううん。そんなの気にしないで。それより、その……」
「零ちゃんのオチンポ、パンパン……♡　ごめんね、我慢させちゃ

って……お義母さんのオマンコに、挿(い)れて……♡」
「い、いい、の……？」
「もちろん♡　でも、一つだけ謝らないといけないの……」
「あ、謝らないといけない事……？」
「うん……私のオマンコね、未使用じゃないの……すでに使われちゃってるの……零ちゃん以外の精子が子宮に入って、孕んで、子供を産んでるの……ごめんね……零ちゃんに初めてをあげられなくて……」
「何言ってんだよ！」
「え……？」
「義母さんには感謝しかないよ！　義母さんが桃を産んでくれたから俺と桃は出会えた、桃を俺の性奴隷便器にできた！　義母さんが謝る事なんて、何一つとしてないんだよ！」
「れ、零ちゃん……！」
「確かに、俺以外の男のがとか考えると、モヤモヤしてムカムカするけど、でも、それはこれからどんどん上書きしていけばいい！と言うか、する！　義母さんが嫌がっても上書きしまくる！」
「嫌がる訳、ないじゃない……！　ものすごく嬉しい！　私、零ちゃんのオチンポで、零ちゃんの精子で上書きされたい……！　海外のパパとは二度とエッチな事しないわ！」
　それはちょっと可哀想だけど。まぁ、いっか。
「それじゃあ、義母さん。挿(い)れるよ？」
「うん……♡　来て……♡」
「一度挿(い)れたら、もう止まれないし、優しくできないよ？」
「うん……♡　私の体、私のオマンコは零ちゃんだけのモノだから、好きなようにして♡　零ちゃんがしたいように、犯したいように犯して♡」
「分かった……！」
　俺は義母さんのマンコの膣(なか)に、チンコをぶっ込んだ。
「んひゃあああああああああああ♡♡♡　零ちゃんのオチンポ、

挿入って来たぁ♡♡♡」
「くっ……！？」
ドビュビュ！！
「んへっ……？」
マジか……！？　俺……！？
「ご、ごめん、義母さん……！？　俺、暴発しちまった……！？」
情けなさ過ぎる……！　今まで何回もしてきてるのに、ここに来て暴発とか……！　どんだけ興奮してんだよ……！　流石にこれにはガッカリされたよな……。
「零ちゃん」
「ん……？」
義母さんが、両手で俺の頬を支え、目を合わせてくる。
「か、義母さん……？」
「なんで謝るの？」
「だ、だって、挿れた瞬間に出しちゃったから……」
「なんで出して、零ちゃんが謝るの？」
「な、なんでって……挿れた瞬間に出すなんて、情けなさ過ぎる……義母さんにも申し訳ないし……」
なんで俺、こんなに弱音をどんどん言えてるんだろう……？　義母さんだからかな……？
「零ちゃんが謝る事なんて、何一つないよ？　暴発しちゃうくらい、私に興奮してくれたって事でしょ？　暴発しちゃうくらい、私のオマンコが気持ちよかったって事でしょ？　私は、それが凄く嬉しいよ♡」
「義母さん……」
「それに、零ちゃんは射精したい時に射精していいんだよ？　我慢なんてしないで、暴発だろうと連射だろうと、零ちゃんは、好きな時に好きなだけ精液出していいの。相手の女の事なんて、一切気にしなくていいのよ。零ちゃんは、零ちゃんが気持ち良くなる事だけ考えて、射精すればいいの。分かった？」

「う、うん……」
それって、俺に得がありすぎなんだよな……。
「分かった。でも、できるだけ、義母さんの事も気持ち良くさせられるよう、頑張るよ！」
「んふふ♡　零ちゃんって本当に優しいね♡　そういう所も、昔から大好きだよ♡　じゃあ、一緒に気持ち良くなろう♡」
「うん！」
俺は、挿(い)れたままのチンコをゆっくり引き、完全に抜き切る前に、突き挿(い)れた。
「んひゃぁぁん♡♡♡　零ちゃんのオチンポ、また奥に来たぁ♡♡♡　二回射精してるとは思えない硬さと太さなのぉ♡♡♡」
俺は腰を動かし続ける。
「んひゅん♡　んひゃん♡　んにゃぁん♡　あぁぁん♡♡♡」
「くっ……これ、駄目だ、また……！　うっ……！」
ドビュルルルルル！！
「んはぁぁぁんっっっ♡♡♡　中出し来たぁ♡♡♡　子宮にビシャビシャかかってるのぉ♡♡♡」
「くっ……まだまだぁ！」
「あああああんっっ！　零ちゃん、まだ射精(だし)てるのに、動くのぉ？」
「うん！　俺だけ気持ちよくなる訳にはいかないからな！」
「んひゅぅぅ♡♡♡　零ちゃんのその優しさだけで、お義母さん、イッちゃうよぉぉぉ♡♡♡」
その言葉通り、義母さんはイッたようで、膣(なか)がビクビク震え、チンコを思い切り締めてくる。それをされると――、
「また出る！」
ビュルルルルルル！！
「んひゃあああ！　また中出し来たぁ♡♡♡　中出しでまたイグぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
俺はこの後、義母さんの膣(なか)に、5発出した。

♡　♡　♡

「はぁはぁ……」
「どう？　零ちゃん。お義母さんのシコシコ、気持ちいい？」
「うん……！　めっちゃ気持ちいいよ……！」
「良かった♡♡♡」
私は、零ちゃんのオチンポをシコシコしていた。
９発出したとは思えないほどに、イキリ勃ったオチンポ。熱さや硬さ、太さが全く衰えない。
全く。燐ちゃんはなんて素晴らしいモノを飲ませたんだ。今度ご褒美に好きな物を買ってあげよう。
「はぁはぁ……」
んふふ♡　零ちゃんの感じてる顔、可愛い♡
零ちゃんは自分が気持ち良くなる事だけ考えていいのに、私の事も考えてくれた。自分だけ気持ちよくなるのは嫌だと、私の事を気持ち良くしてくれた。
なんていい子なの♡　この子の願いはなんでも叶えてあげたい♡
どんなにエッチなお願いでも、私は必ず叶えてみせる！　大好きな零ちゃんの為に！
「はぁはぁ……か、義母さん、俺、もう……！」
「いいよ♡　いっぱい出して♡」
私は、手コキのスピードを上げる。オチンポはイキそうな時、激しく速くしないと、気持ち良くイケないと、勉強した。
「あ、あぁぁぁ！　出る！」
ドビュ！　ドビュルルルルルル！！
「んっ！　んん～♡」
あ～♡　零ちゃんの精液私にいっぱいかかってるぅ♡　射精の勢い、凄すぎる♡　１０発目の勢いじゃないよ……♡
顔やおっぱい、足、髪の毛、全身に精液が付着する。こんな幸せな事があっていいのかな？

「か、義母さん、俺、まだ……！」
「いいんだよ♡　我慢しないで、いっぱい、全部出してぇ♡」
私はさらに手コキのスピードを上げる。射精中なので、精液があちらこちらに飛び散っているが、そんな事はどうでもいい。今は零ちゃんを気持ち良くさせる事が最優先だ♡
「あぁぁぁぁ！　出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルルル！！！
「んはぁ～♡♡♡♡♡」
零ちゃんの精液が、全部私に……♡♡♡　幸せ……♡♡　ずっと夢だった事が、今、叶ってる……♡♡♡
「はぁはぁ……」
零ちゃんの射精が落ち着いた。もっと浴びたかったけど、これ以上は零ちゃんに負担をかけちゃうから、我慢我慢。
「んふふ♡　沢山出してくれてありがとう♡　気持ちよかった？」
「うん……！　めちゃくちゃ気持ちよかった……！　それより、ごめんな……こんなに汚しちゃって……髪の毛にまでかかっちゃって……これ落とすの大変だよな……」
ほら。こんな時にまで気を遣ってくれる。優しすぎるんだよ、零ちゃん♡
「大丈夫だよ♡　零ちゃんの精液、全身で浴びる事ができてすっっっっごく幸せだったから♡　それに、髪の毛についた精液は、確かに簡単には落ちないけど、それは私、ううん。私達女にとっては幸せな事なんだよ？　零ちゃんの『印』が刻まれたみたいで♡　だから気にしないで♡」
「わ、分かった……ありがとう」
「うん♡」
零ちゃんはこの後、幸せそうに眠りに就いた。寝顔もとっても可愛かった。その寝顔を見ながらオナニーをしてしまったのは、内緒だ。
零ちゃん、これからは私が何があっても零ちゃんを守るし、気持

ち良くするし、エッチなお願いなんでも叶えさせてあげるからね♡

第２６話　義母との禁断の……♡♡（後書き）

次回予告！

「家族旅行　ｉｎ　熱海～！」

零、桃、燐、華、義母、爆乳ショートちゃんの六人で家族旅行！
しかし、その家族旅行は！

「んはぁぁぁぁん♡　零ちゃん、大好きぃ♡」
→華。
「お兄ちゃん♡　大好きですぅ♡」
→燐。
「兄様、おしっこ、いっぱいかけてください♡」
→桃。
「零ちゃん♡　いっぱい突いていいんだよぉ♡」
→義母。

そして……。

「せ、先輩……」
「今夜は、寝かさないぞ」
「は、はい……♡」
零と爆乳ショートちゃん。二人っきりでデートに♡
そして、ラブホで濃密な……♡

次回
『淫らな家族旅行♡♡』

お楽しみに！

『淫らな家族旅行♡♡』は、爆乳ショートちゃんのメイン回となっております！

第27話　淫らな家族旅行♡♡（前書き）

プロローグ
「お～い、準備できたか～？」
「は、はい！　できました！　すみません、お待たせしてしまって……！」
「いや。大丈夫。まだ時間はあるからゆっくりでいい」
せ、先輩は本当に寛大だ……でも、私はそんな寛大な先輩をお待たせしてしまった……！
自分で自分を戒めないと……！
「ちょっと待ってて～」
先輩が外にいるお母様からの問いかけに、返事をする。どうしたんだろう？　何か忘れ物かな？
「なぁ」
「はい」
「出発前に、俺のおしっこ飲んでくれ」
「っ！　い、いいんですか！？」
「あぁ。さっきから君に飲ませたくてずっと我慢してたんだ」
「あ、ありがとうございます……！　それと、我慢させてしまってすみません……！　ここでいいですか……？」
「いや。万が一、燐や姉ちゃんが入ってきたらまずい。トイレに行こう」
「は、はい！」
私、トイレで先輩のおしっこ飲むの大好き♡　まるで本当に先輩専用の便器になったみたいでもの凄く興奮する……♡

トイレにやって来た私と先輩。
「ごめん、まず服脱いでくれる？」

「え……？　は、はい。でもどうして……？」
「多分俺、おしっこ君の全身にかけちゃうと思うから。そうすると、服濡れちゃうでしょ？　みんなにバレる可能性は少しでも低くしないと」
「あ、なるほど！」
さすが先輩！　気遣いが凄い！
私はそそくさと全裸になっていく。……先輩家のトイレで全裸って、めちゃくちゃ興奮する……♡
私は急いで先輩の前に跪く。そして、口を大きく開ける。
「じゃあ、出すぞ」
「はい……♡」
「くっ……」
ぷしゃあああああああああ！
「んっ♡　んん……♡」
あぁ～……♡　先輩のおしっこ最高……♡
朝イチだから、おしっこの色が濃い黄色だ……♡　私が一番大好きなおしっこ……♡
この色の時の味は、とても濃厚で美味しい♡　そして、温度もとっても高くて、お湯とおんなじくらいの温度。だから私は、お風呂に入る度に先輩のおしっこの事を思い出してしまう……♡　そして、その度にオナニーをしてしまう。これが最近の私の誰にも言えない秘密だ。
「あぁ……」
先輩が腰を左右上下動かし始めた。
最近先輩は、私の全身におしっこをかけるのにハマっているみたいで、おしっこ中によくおちんちんを動かしては私におしっこをかけてきてくれる。
それが幸せだのなんのって♡♡♡
大好きな先輩の、大好きなおしっこを、口だけじゃなくて全身で味わえるんだから、最高以外の言葉が見つからない！

最近では、先輩が私を便器として使う事に抵抗感を示さなくなったので、前より便器として使われる事が増えた。嬉しすぎて死んじゃいますよ、先輩♡♡♡

「ふぅ……」

この瞬間、このおしっこが終わってしまう瞬間だけ、いつもきてほしくないって思ってる。だってずっと先輩のおしっこを浴びていたいから……！

「ごくん……♡　先輩、スッキリできましたか？」

「あぁ。それより、いつもより多くかけすぎたかも。ごめんな」

「いえ。お気になさらないでください♡　私は幸せなので♡　トイレを少し拭いてから行くので、先輩は先に行ってもらってもいいですか？」

「あぁ、それはいいが……任せちゃっていいのか？　俺が汚したのに……」

「もちろんです！　私は先輩の便器であり、性処理係であり、奴隷です！　先輩の為に色々とさせて頂くのが、なによりの生きがいなんです♡　なので、先輩は何も気にせず、私に命令してください♡」

「分かった。じゃあ、ここ掃除しとけ、肉便器奴隷野郎」

「っ～～～～～～～♡♡♡　は、はいぃ♡♡♡」

私、今日死ぬのかな？　朝からこんな幸せな事言ってもらえるなんて、夢見たい……♡♡♡

おトイレのお掃除を終え、服を着た私が外に出ると、車に乗って待っているみんなが見えた。

「ご、ごめんなさい……！　お待たせしてしまって！」

「全然大丈夫だよ～ん。ん？　なんか、おしっこの臭いしない？」

「っ！？」

全身についてる先輩のおしっこの臭い、バレた？　私と師匠（桃さんの事）はこの臭い大好きなんだけど……。

「でも、この臭い私好きだから、ま、いっか♪」

燐さんもこの臭い好きなんだ……便器の素質あるかも……♡
「それにしても、運転って誰がするんですか？　お母様は助手席に座ってるし……」
「私よ」
「え！？　り、理事長！？」
なんで理事長がここに！？

第27話　淫らな家族旅行♡♡

「え！？　理事長！？」
「よぉ」
いや、よぉ、じゃないですよ！
「なんでここにいるんですか！？」
「あれ？　俺言ってなかったっけか？」
「え……？」
「理事長は義母さんの双子の妹なんだよ」
「え！？」
え！？　って言う事は、先輩の叔母様！？
「確かに、そっくり……」
「そりゃ双子だからな。安心してくれ。私は旅行そのものには付き合わん。行き帰りの送迎担当だ」
「あ、いや、理事長が参加されるのかどうかの心配はしてないんですけど……と言うか、ありがとうございます……」
どうしよう……先輩の身近な人達全員エッチで、可愛くて、魅力的な人達ばっかり……。私なんか絶対劣ってるよ……。ううん。おっぱいは誰よりも大きいからそこは勝ってるけど。
でも、このままだと私、先輩に飽きられちゃうかも……飽きられてそのままポイって捨てられちゃうかも……それだけは絶対に嫌だ……！
先輩に飽きられないよう、捨てられないよう、もっともっと頑張らなきゃ……！！
「そろそろ出発するか」
「しゅっぱ～つ♪」
こうして私達は、「白下家」の家族旅行に向かった。私、混ぜてもらってよかったのかな……？

♡　♡　♡

今、俺達は車で移動をしている。
義母さん、燐、桃、爆乳ショートちゃんは朝が早かったのかぐっすり眠ってしまっている。
「ふふ」
「零ちゃん？　どうしたの？」
一番後ろに乗っている姉ちゃんが、声をかけてきた。
ちなみに、席順は、助手席が義母さん。真ん中の後部座席の左側が爆乳ショートちゃん。真ん中が俺。右側が燐。そして、一番後ろの席に姉ちゃんと桃が乗っている。
俺は左隣で眠っている爆乳ショートちゃんの寝顔を見て、つい微笑んでしまった。それに気が付かれてしまったのは正直恥ずかしい。
「いや。寝顔、可愛いなって思って」
「ふふ。ね～。赤ちゃんみたいな寝顔。ほっぺたツンツンしたくなっちゃう」
そう言って姉ちゃんは手を伸ばし、爆乳ショートちゃんの頬を突いた。
「ん……」
爆乳ショートちゃんは吐息を漏らしただけで、目を覚ましたりはしなかった。
「本当、赤ちゃんみたい……♡　可愛すぎて、母性がくすぐられる……♡」
「姉ちゃんは寝なくて大丈夫なの？」
「うん。私は大丈夫。むしろ、この時間を利用して少しでも課題を進めないとね。大学の推薦をもらってるとは言え、油断できないから」
「真面目だな～。あんま無理すんなよ？」
「うん♡　ありがとっ♡」

「そう言えば、華はいつから零の前で『私』って言うようになったんだ？　ずっと『お姉ちゃん』だっただろ？」
うっ……痛い所をついてくる……。なんて答えるんだ、姉ちゃんは……？
「ついこの間から。私と零ちゃん、付き合い始めたから♡」
ぶっ！？　しょ、正直に答えた！？　いくらなんでも正直に答えすぎじゃない！？
「そうか～。やっと付き合えたのか。よかったな、華」
「うん♡　今とぉぉぉぉぉぉぉっても幸せなんだ♡」
「零ほどの男は貴重だからな、絶対に手放すなよ？　零を幸せにするのが、女のお前の務めだ」
「うん！　任せて！」
なんか、会話についていけん……。
「お、俺も寝るわ」
「「お休み～」」
寝て、一旦忘れよう……。

♥　♥　♥

どうしよう、どうしよう！　ちょっと意識が覚醒してきたから、一旦目を開けようかなって思ってたら、先輩が私の寝顔可愛いって言ってくれたんですけど！
う、嬉しいし、お礼を言いたいんだけど、は、恥ずかしすぎて目開けれない……！
は、華さん、今つつくのはやめてください……！　寝たふりが先輩にバレちゃいますから……！
そして、私は聞いてはいけない……ううん。聞きたくない事を聞いてしまった。
「ついこの間から。私と零ちゃん、付き合い始めたから♡」
え……。華さん、先輩の、彼女……。そんな……。

確かに、先輩に彼女がいても全然おかしくないし、問題もない。でも、まさか、彼女がこんな身近にいるなんて、しかも華さんだなんて……。

私、本当に勝ち目あるのかな……。駄目だ……涙が出てきそう……。

寝よう。寝て、一旦忘れよう。

♡　♡　♡

「じゃあな。帰りは明後日だったか？」

「えぇ。大晦日はやっぱりあそこに行かないとね」

「白下家恒例の、な」

「そそ」

義母さんと義叔母（おば）さんが話していると、爆乳ショートちゃんが声をかけてきた。

「大晦日に何かあるんですか？」

「ん？　あぁ～。毎年大晦日には蕎麦を食べに行っててな。そこに行くのが毎年の恒例だから、今年も必ず行こうって話だ」

「なるほど」

「今年は君も一緒だな」

「わ、私もご一緒していいんですか……？」

「そんなの当然だろ？　君はもう、家族なんだから。。それに（性奴隷便器は常に主と行動を共にしなきゃ、だろ？）」

「っ♡　は、はい♡」

俺は爆乳ショートちゃんの耳元で囁く。と、爆乳ショートちゃんは顔を真っ赤にして、嬉しそうに返事をしてくれた。

「（もしかしたら、君の蕎麦のツユは、俺の精液かおしっこかもしれないけど）」

「そ、それはありがたき幸せですぅ……♡」

マジか。それで喜んでくれるのか。本当にやってやろうかな？

「じゃあな～」
「おばっち、ありがとう～！」
「ありがとうございます」
「また明後日」
「ありがとね～」
「サンキュー」
「あ、ありがとうございました！」
俺達が、各自、義叔母さんにお礼を伝えると、義叔母さんは車で颯爽と去って行った。
「さて。旅館に入りましょう」
義母さんが先導して、俺達は今日明日泊まる旅館に足を踏み入れた。

♥　♥　♥

先輩に、先輩に家族って言われた……♪　すっごく嬉しい！
それに、お蕎麦のツユが先輩の精液かおしっこかもしれないなんて……最高過ぎる……♡
本当にやってくれたり、するのかな……？　先輩！　私はいつでも大丈夫ですからね！　先輩の精液とおしっこ、大好きですから！
私達は旅館の受付に向かった。
うわぁ～綺麗な旅館……。私、こんな所に泊まった事ないよ。
「予約していた白下です」
「ようこそお越しくださいました。お待ちしておりました」
ど、どうしよう～～！　私、本当に白下家の一員になってる～～！
わ、私、先輩と結婚でもしたのかな……！　でも、この場合だと私が先輩の家に嫁入りしたって事だよね？　あ～それもいいかも～♡
本来は結婚したら、女性の方の苗字になるから、私が先輩の苗字になるには『嫁入り』する必要がある。
先輩に嫁入り……うへ、うへへ……♡

「お～い。行くぞ～」
「……」
「ん？　どうした？　大丈夫か？」
「っ！？　せ、先輩！？」
びっくりした～！　急に先輩の顔が目の前に！
あ～先輩、格好いいな～♡　付き合いたいな～、結婚したいな～、めちゃくちゃにされたいな～♡
「行くぞって声かけたけど、反応がなかったから、心配になったぞ？」
「え！？　す、すみません……！？　わ、私ボーっとしちゃってて！？」
私はなんて事を……！　先輩に心配かけて、あまつさえ先輩の呼びかけを無視してしまうなんて……！
こんなの、先輩の性奴隷便器失格だ……！
「あ、あの……本当にごめんなさい……！　私、先輩の事無視しちゃって……！　お、お仕置きしてください……そして、許してください……！」
「う～ん、別に怒ってもないんだけど……」
「わ、私が自分を許せないんです……！」
「う～ん……分かった。じゃあ、部屋に着くまでの道中、マンコの膣（なか）に指入れてかき回すよ。勝手にイッちゃいけないって、お仕置きでいい？」
「は、はい！　それでお願いします……！」
幸い、私は超が付くほどのミニスカート。先輩の指を迎え入れやすい！
「それじゃ、行くよ？」
「は、はい……！　んっ……♡」
せ、先輩が後ろに回ってピッタリくっついてきてくれた……♡
それだけでも嬉しいのに、パンツのクロッチ部分をずらして、オマンコの膣（なか）に指が、二本挿（はい）入ってきたぁ……♡

な、なんかこれ、痴漢されてるみたいで興奮しちゃう……♡
「ほら、歩いて」
「は、はいぃ……♡」
せ、先輩の指が、膣(なか)で激しく動いてくる……♡　私をイカせようとしてる手つきだ……でも、勝手にイッちゃいけないから、我慢しなきゃ……！
「んっ♡」
「（こらこら、声我慢しないと駄目だろ？）」
そ、そんな事言われても、は、激しくて声、勝手に出ちゃう……！
それに、歩いてるから、歩く度に先輩の指が奥に刺さってもっと感じちゃう……！
「ほっ」
「んへ♡」
せ、先輩の親指が、お、お尻の穴にぃ！？
「せ、先輩、そ、そこは……」
「なんだ？　これはお仕置きだろ？　だったらお前が文句を言う筋合いはないぞ？」
「は、はい……」
先輩のドSモード来たぁ……♡　このモードの先輩は、私を辱めてくれるから、堪らない……♡
「んひゅぅ……♡」
「すげぇな……（親指がどんどん挿(はい)入っていくぞ？）」
い、言わないでぇ……♡　先輩の親指が、私のアナルにどんどん侵入してくる……♡
お尻の穴って、こんなに気持ちいいんだ……♡　癖になっちゃうかも……♡
「んっ……♡　んふ……♡　ふぅ……♡」
「（もう少しで部屋だ。それまで我慢しろよ）」
「は、はいぃ……♡」
正直、何回もイキそうになってる。でも、絶妙なタイミングで先

輩が刺激を止めるから、全然イケない。
どうしよう……おしっこしたくなってきちゃった……。
「ほら、部屋に着いたぞ」
あ……先輩の指が、オマンコから、アナルから離れて行っちゃう……寂しい……もっと、もっと虐めてください……。
「ごめん、遅くなった」
先輩が部屋の中に入る。駄目だ、もう我慢ができない！
「ごめんなさい！　ちょっとお手洗いに！」
私はトイレに駆け込んだ。
パンツを下ろして、便座に腰掛ける。
ぷしゅ♡　ジョロロロロロロロロロロロロロロ♡
「ふぅ……」
なんとか間に合った～……危うくお部屋で漏らしちゃう所だった。
「大丈夫？」
「っ！？　せ、先輩！？」
「なんか慌ててたから、心配になっちゃって。でも、おしっこ我慢してただけだったんだね。良かったよ」
「ご、ごめんなさい……！　余計な心配かけちゃって……！」
ジョロロロロロロロロロロロロロロ♡
ど、どうしよう！？　このおしっこの音、先輩に聞かれてる！？
は、恥ずかしい……！
「なぁ、鍵、開けてくれないか？」
「え、へっ！？」
「君がおしっこしてる所、見たい」
「い、いやでも、そ、それは……」
流石に恥ずかしすぎる……！
「いいから開けろ」
「っ！」
ドSモード♡
「は、はい……♡」

私は鍵を開けた。すると、先輩が扉を開けて、中に入ってくる。
後手で鍵をかける先輩。そういう気遣いが本当に好き♡
ジョロロロロロロロロロロロロロロ♡
「へぇ～女子ってこうやっておしっこ出るんだ」
「は、はい……」
あ～……♡　先輩がしゃがみ込んで、私のおしっこが出る様子を観察してるぅ～♡
し、幸せ感と恥ずかしさが混じって死んじゃう♡
「おっと。勢いが凄いな」
きゃあああああああああああああ！？　せ、先輩の神聖なるお顔に私ごときのおしっこがぁ！？
「ご、ごめんなさい、先輩！？　か、顔に……！？」
「ん？　いや気にしなくていい。むしろ嬉しいくらいだ。お前のおしっこを浴びれるなんてな」
せ、先輩ぃ……♡　そんな事言われたら、嬉しすぎておしっこさらに出ちゃいますよぉ……♡
ぷしゅぅ！　ジョロロロロロロロロロロロロロロ♡
「おお！　なんかさらに勢いが増したぞ！　なんだなんだ？　どうしたんだ？」
あ～……♡　先輩が嬉しそうに興奮してる……♡　子供みたいな一面が……また可愛い……♡
「う、嬉ションです……」
「嬉ション……！　お前は本当に最高の奴隷だな！」
「あ、ありがとうございます……！」
最高の褒め言葉です……！！！

♡　♡　♡

部屋に着いた後、俺達は早速セックスをしていた。
「れ、零ちゃ～ん♡　も、もっと突いてぇ♡」

「か、義母さんの膣(なか)キツすぎ……！　こんなのもう出ちまうよ……！」
「いいよぉ♡　我慢しないで、いっぱい出してぇ♡　中出ししてぇ♡」
「出るっ！」
「んひゃあああああああああああああ♡♡♡」
「お母さん、私、妹がほしいな」
「そ、そうね……♡　私も子供がもう二人くらいほしいわ♡」
桃と義母さんがそんな会話を全裸でしている。この光景エロいな。
「お兄ちゃん♡」
「おぉ！」
燐が後ろから抱きついてきて、チンコを握ってくる。ちなみに、義母さんのマンコからはとっくに引き抜いてある。
「桃姉とママの裸見て、ボーっとしてましたけど、どうしたんですか？」
チンコを扱きながら尋ねてくる。
「いや。実の親子が全裸で、子作りの話ししてるのがエロいなって思ってな」
「んふふ～♡　確かにそうですね♡　でもお兄ちゃん。子供が欲しいのはあの二人だけじゃないですからね？　私も、お兄ちゃんとの子供、たっくさん欲しいんですよ♡　だから、私の赤ちゃんのお部屋に、お兄ちゃんの赤ちゃんの素、いっぱい注いでください♡」
「あぁ。任せとけ。お前を孕ませてやるからな」
「嬉しいですぅ♡」
「零ちゃん、私も忘れないでね？」
姉ちゃんが横から抱きついてきて、亀頭を擦ってくる。
「大丈夫だよ。忘れてないよ」
「んふふ♡　なら良かった♡」
「ちょっとお姉ちゃん！　なんで亀頭弄ってるの！　今おちんちんは私のなんだけど！」

「燐ちゃんは何を言ってるのかしらぁ？　零ちゃんのおちんちんはみんなのモノでしょう？　それに、あなたは竿を握ってシコシコしてるんだからいいでしょう？　亀頭くらい弄らせなさいよ！」
「お兄ちゃんが一番感じるのが亀頭でしょ！　そこを独り占めとか、ズルいんですけど！」
「あんただって、竿を独り占めしてるでしょう！」
な、なんか喧嘩が始まっちゃったよ？　どうっすっかこれ……。
桃と義母さんは談笑を続けてるし、爆乳ショートちゃんは旅館の人達が来ないように見張ってくれてるし……。
こうなったら……！
「ふん！」
パチンッッッ！！！
「「んひゅぅぅ！？」」
俺は、二人のお尻を思いっきり引っ叩いた。
「れ、零ちゃん……？」「お、お兄ちゃん……？」
二人は相当痛かったのか、目元に涙を浮かべて、俺を見てくる。
まぁ、痛いだろうな。スゲェ音鳴ったし、俺も手がヒリヒリしてるし。
「それ以上喧嘩するようなら、当分は二人とセックスしないぞ」
「「え！？」」
「そ、それはやだぁ！？　ご、ごめんなさい……！？　も、もう喧嘩しませんから、それだけは許してくださいぃ……！？　私、お兄ちゃんのおちんちんがないと生きてけないんですぅ……！？」
「わ、私も無理ぃ！？　れ、零ちゃんのおちんちんがないなんて、考えただけで死んじゃうのぉ！？　も、もう喧嘩しないし、なんでもするから、それだけは許してください！？」
こ、ここまで効果が絶大だとは。もしかして、瑠李（るい）も俺のチンコがないと駄目なのか？
だとしたら、結構辛いだろうな。今度、解禁してやるか。
「俺のチンコが欲しいなら、もう俺の前で絶対に喧嘩するな。俺は、

大好きな人達の喧嘩を見たくない」
「れ、零ちゃん……」「お兄ちゃん……」
「「大好き～～♡♡♡」」
二人は俺に抱きついてきた。
「ごめんね？　ごめんね？　零ちゃんの嫌がる事しちゃって……！
もうこれからはしないから、許して……？　今日は零ちゃんの好きなように、私の体、使っていいから♡」
「お兄ちゃん、ごめんなさい……！　お兄ちゃんの嫌がる事をしちゃって……！　もう絶対、お兄ちゃんの嫌がる事はしません！　だから、私をお兄ちゃんのおちんちんでメチャクチャにしてください……♡」
「あぁ。分かってくれたならそれでいい。お望み通り、メチャクチャにしてやるからな！」
「「はい♡」」
俺はこの後、姉ちゃんに5発の中出しと、潮吹きを１０連発させた。そして、燐には中出しを同じく5発と、失禁を5回させた。
二人が尿道から噴射させる姿は、めちゃくちゃエロくて、最高だった！
ちなみに、桃が途中から参加してきて、密かに俺のおしっこを飲んでいたのは、二人には内緒だ。桃も俺にマンコを弄られて、５回失禁して、６回潮吹きをしていた。
俺の家族、全員エロすぎだろ！

セックスが終わった後、燐がこんな事を言いだした。
「ねぇ、お兄ちゃん」
「ん？」
「あの子とデートしたらどうでしょうか？」
「え……？　あの子って、爆乳ショートちゃんか？」
「はい。この前、私達だけお兄ちゃんとデートして、あの子はしてませんから。それに、あの子、ずっと気を遣ってると思うんです。

だから、その緊張を解すのも含めて、デートをしてあげたらどうでしょう」
「そうだな。なんだかんだあの子には世話になってるからな」
下半身関係で。
「あの子は料理の才能がある。ちょっと教えたら、すぐに覚えた。すでに師匠超え」
あのデート日の夕飯、めっちゃ美味かったからな。よし！
「じゃあ、デートしてくるよ。悪いけど、夕飯とか……」
「分かってるよ。二人で外で楽しんでらっしゃい。今日は帰ってこなくて大丈夫だから。明日の夕方にはみんなで行きたい所があるから、それまでには帰ってきてね」
「分かった。ありがとう、義母さん」
「お礼なんていいのよ。あの子は私の娘みたいなもんなんだから。息子と娘の幸せを願うのが、母親ってもんでしょ？　ほら、これ」
義母さんは財布から、五万円出してきた。
「色々と入り用になるでしょ？　持っていきなさい。このお金は返さなくていいからね。零ちゃんのオチンポで返してもらうから♡」
「そんなの、お安い御用だよ。ありがとう。行ってきます！」
「「「「行ってらっしゃ～い！」」」」
俺は服を着て、爆乳ショートちゃんの元へと向かった。

♥　♥　♥

「いた。お～い」
「あ、先輩。どうしました？　終わった感じですか？」
「うん。それでさ、俺とデートしてほしい」
「……？」
あれ？　今のって私の聞き間違い？　耳おかしくなった？
「俺と、デートしてほしいんだけど、駄目、か……？」
はっ！？　先輩にこんな顔させちゃ駄目！

「だ、駄目なんかじゃないです！　た、ただ、その、私なんかが先輩とデートしていいのかなって、思っちゃって……」
「いいに決まってる！　と言うか、してくれないと困る！」
「あ、ありがとうございます……！　とっても嬉しいです……！」
「すぐに行こうと思うんだけど、準備とか大丈夫？」
「あ、はい。貴重品とかは全部持っているので、いつでも行けます」
「そっか。よかった。じゃあ、行こう」
「はい……♡」
ただ一つ困った事があるとすれば、それは、嬉しすぎてパンツが濡れちゃったって事……！（おしっこじゃなくて、愛液が溢れちゃった）。
私は、先輩と念願のデートに向かった。

先輩とのデートは想像以上に緊張して、想像以上に楽しい！
「え、え～っと……あ、天気が良くて旅行日和ですね～……」
「無理して話そうとしなくていいぞ？」
「はい……」
うぅ……世のカップルはどうやって会話をもたせてるんだろう……緊張して話せないよ……。
あ……。
「ん？　どうした？」
「あ、いえ！　なんでもないです！」
「ん？　髪留め？　ヘアピンってやつか。ほしいのか？」
「い、いえ！　こういうのは男子が着ける物なので！　ただちょっとデザインがサメさんで可愛いなぁって思っただけなので、全然気にしないでください！　さ、行きましょう！」
「お、おう……」
なんて恥ずかしい所を……！　すみません、先輩……！

♡　♡　♡

爆乳ショートちゃんとのデートはものすっごく楽しい。最初は無理して会話を続けさせようとしていた爆乳ショートちゃんだったけど、俺が下ネタを振ると楽しそうに話してくれて、無理のない表情になった。

やっぱり、自然な笑顔が一番いいよ。それにしても、ほんと、女子と下ネタで盛り上がれるのって最高だな。

ん？

「おっと。危ねぇ。んだよ、あいつ」

複数の男子グループのうちの一人が、爆乳ショートちゃんの横を無理矢理すり抜けようとした。だいぶ酔っ払っているのか、足元がおぼつかなかった。

俺は爆乳ショートちゃんを抱き寄せる事で、なんとか衝突は回避した。

グループの人達は、申し訳なさそうにこっちに向かって頭を下げてくる。俺がちょっと苛立った顔で手を『大丈夫』みたいな感じで上げると、男達は最後に一礼して去っていった。酔っている男を連れて。

「大丈夫か？　怪我とかしてない？」

俺は爆乳ショートちゃんの事が心配で仕方なかった。

「だ、大丈夫です……あ、ありがとうございます……。そ、その……あの……」

ん？　どうしたんだ？　もじもじして。あ、俺今めっちゃおっぱい鷲掴みにしちまってる。

「ごめん！　おっぱい勝手に……」

「い、いえ……！　それはいいんです……！　先輩ならいつでもどこでも触り放題なので……そ、そうじゃなくて、その……先輩に抱きしめられるのが初めてだったので……」

あ、そっか。それで緊張して……可愛い。

「ごめんな。勝手に」

「い、いえ……嬉しいです……♡」
「俺も、ずっと抱きしめたかったから、嬉しいよ」
俺は頭を撫でてやる。
「せ、先輩は、ズルいです……！」
「うお！　え……？」
爆乳ショートちゃんは、耳を真っ赤にして、俺の胸に顔を埋めてしまった。

♥　♥　♥

せ、先輩に抱きしめられてしまった……！
な、何この急な幸せ展開！　し、しかも先輩、私の為に怒ってる……♡　嬉しい……♡
「ごめん！　おっぱい勝手に……」
それは全然気にしないでください……！　私のおっぱいは、先輩だけのものですから♡　私の体は先輩専用の肉体なので、お好きな時に触っていいんです♡
私は、素直に自分の気持ちを吐露する。
「ごめんな。勝手に」
謝らなくていいんですよ……♡
「い、いえ……嬉しいです……♡」
「俺も、ずっと抱きしめたかったから、嬉しいよ」
先輩はそう言った後、頭を撫でてくる。
「せ、先輩は、ズルいです……！」
「うお！　え……？」
私は恥ずかしさと嬉しさのあまり、先輩の胸に顔を埋めてしまった。だって、今、先輩の顔を直視できない……！　絶対だらしない顔してるから……！
しばらく抱き合った後、私達は移動を開始した。

「はぁ……結構冷えますね……」
「そうだな。もう年末だから、真冬だしな。ちょっと手、貸して」
「え……？」
先輩？　ひゃわっ！？
「はぁ～……」
「せ、先輩……！？」
先輩が私の両手を包みこんで、息を吹きかけてくれた。なに、この幸せが詰まった時間は！
「多少は暖まったか？」
暖まりまくりです！
「片手だけになっちゃうけど、よいしょ」
「っ！」
せ、先輩が私の左手を握って、自分の着てるコートのポケットに入れてくれた！
せ、先輩……優しすぎるし、格好良すますよ……！
「嫌か？」
そんな訳、ないじゃないですか！
「いえ……とっても嬉しいです……♡」
「そっか。よかった」
ありがとうございます……♡　先輩♡

♡　♡　♡

夜が近づいて来たので、俺達は夕飯を食べた。そして今は特に目的地もなく、ブラブラと歩いている。
「そういえば先輩。うちの学校が４学年制になるって聞きました？」
「いや、聞いてない。４学年制って事は、今いる先輩達はもう一年あるって事？」
「はい。理事長……先輩の叔母様が決めたそうです」
なんも聞いてねぇ……。つか、待てよ。４学年制になるって事は、

後輩が沢山増えるって事だろ？　って事は……。
「先輩？」
「はっ！？」
俺は最低だ。デート中に他の女子の事を考えちまうなんて……。
「先輩？　どうしたんですか？」
「い、いや……なんでもない……」
「嘘です。何かあるんですよね？」
「うっ……その……後輩がいっぱいできたら、、セックスももっとできるなぁって……ごめん！　デート中にこんな事考えて……！」
「先輩は本当に優しいですね♡　そんな事、気にしなくていいんですよ。先輩は沢山の女の子とエッチしていいんですから」
「でも……」
「どうしても先輩が、気になるっていうなら……あそこで私を、目一杯、可愛がってください……♡」
爆乳ショートちゃんが指を指した場所。そこは――、
「ラブホ……いいのか？」
「はい……♡」
「分かった。今日はお前だけを可愛がってやる。今夜は、寝かさないからな」
「はい……♡」
そうして俺達は、ラブホへと向かった。

♥　♥　♥

私と先輩は今、ラブホテルにいる。
大好きな先輩とラブホテル……♡　興奮しちゃう……♡
エレベーターに乗り、目的の階のボタンを押し、扉が閉まると――、
「キャッ！」
先輩がいきなり、壁ドンしてきた。しかも、私の両手を持ち上げ

て、壁に押し付けながら。
「せ、先輩……？」
どうしたんだろう……？　我慢できなくてここでしたいとか……？　私は全然いいですよ……♡
「ごめん、急に」
「いえ……でも、どうしたんですか……？　お部屋まで我慢できないですか……？」
「あぁ……でも、ここでするのはさすがにまずいから、キスだけさせてくれ……」
「はい……♡」
キス！　先輩とキス！
「んむぅ……♡　んちゅぅ……♡　れるぅ……♡　ぷちゅぅ……♡　ちゅぷぅ……♡」
先輩、いきなり激しい……♡　舌を最初から絡ませてくる……♡　先輩の唾液、美味しい……♡
「んちゅぅ♡　れるぅ♡　れろぉ♡　んむぅ♡　ぢゅぷぅぅ♡」
これ、駄目……♡　私も我慢できなくなっちゃう……♡
「へんはい……♡」
「んちゅ……どうした？」
「挿(い)れてください……♡」
「で、でも……」
「大丈夫です……♡　人はそんなに通らないと思いますし、仮に通っても、私達の営みを、見せつけてやりましょう♡」
「分かった。じゃあ、挿(い)れるぞ？」
「はい♡」
私はエレベーターの扉側に手を突き、お尻を先輩に向かって突き上げる。
「んっ！」
「んん～～～♡」
来たぁ～～♡♡♡　先輩のおちんちん♡♡♡

もうパンパンになってるおちんちん、気持ちよすぎるぅ……♡
挿れられただけで――、
「イッちゃうぅ♡♡」
い、イッちゃった……先輩より先に、勝手にイッちゃた……。
「ご、ごめんなさい、先輩……私、先輩より勝手に……」
「気にするな。感じてくれて、嬉しいよ。それより、もう着くけど、このままでいいのか？」
「はい……♡　挿れたまま行きましょう……♡」
「分かった」
エレベーターは目的の階に到着。扉が開き、私達は移動を始める。
「んっ……♡　んっ……♡」
歩く度に、先輩のおちんちんがズンズンって奥に来て、すっごく気持ちいい♡
そんな時、後ろから声が。
「見てみて、あのカップル。セックスしながら移動してる！」
「凄いな。よく彼氏は受け入れたな」
「私達もおんなじことって……」
「絶対にしない」
「ですよね～……」
ふふん！　私の大好きな先輩は、一般男子とは違ってエッチに積極的なんだい！　羨ましいでしょ……！
「はぁはぁ……」
なんとか部屋に到着した私達。先輩が鍵を開けてくれて、中に入る。と、玄関のドアが閉まりきった瞬間――、
「んひゃあああああああああああああ♡♡♡」
先輩が激しく腰を打ち付けてきた。多分、動かしたいのを我慢してくれてたんだと思う。
先輩、我慢させちゃってごめんなさい……！
「ごめん……腰、止まんない！」
「大丈夫です……！　いっぱい！　いっぱい突いてくださいぃ♡

私のオマンコ、壊れちゃうくらい、いっぱい突きまくってください♡♡♡」
「おらぁ！」
「んひゃあああああああああああああああああ！！！」
ここは玄関。もしかしたら外に声が聞こえてしまうかもしれない。でもいい。先輩に愛されてる私の歓喜の声を聞かせて、沢山羨ましがらせてやる……！
「くっ……もう、出そうだ……！」
「出して♡　出して♡　私の膣（なか）にいっぱい出してください♡　先輩の精液、私の子宮にいっぱい注いでくださぃぃ♡♡♡」
「くっ……出るっ！」
ドビュビュビュビュゥゥゥッゥゥゥ！！！！！
「んあああああああああああああああああ！！！　で、出てるぅ……！　精液の精液がいっぱい私の膣（なか）で出てるぅぅ♡　な、中出しされて、イグぅぅぅぅぅ！！！　あああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」
私は玄関で、先輩に中出しされて、潮を撒き散らしながらイッてしまった。

第２７話　淫らな家族旅行♡♡（後書き）

次話に続く！

第２８話　爆乳ショートちゃんとの、アツアツな夜♡♡

玄関で中出しセックスをした俺達は、玄関で服を全部脱いだ後、キスをしながら部屋の中へと移動する。

「んちゅ……♡　むちゅぅ……♡」

爆乳ショートちゃんのキスが上手すぎて、頭が蕩けちまいそうだ。もう、この子を犯しまくる事しか考えられない！

「んむっ！」

俺は爆乳ショートちゃんをキッチンに向かわせ、シンクに手をつかせる。

「せ、先輩……？」

潤んだ瞳で、俺を見てくる爆乳ショートちゃん。あぁ～メチャクチャに、メチャクチャにしたい！

「んはぁんっ♡」

俺はしゃがみ込み、爆乳ショートちゃんのマンコの膣（なか）に、右手の中指と薬指を挿（い）れ、激しく動かし始める。最近鍛えてるエロテクの一つ、手マンだ！

「んひゃぁ♡　あああああああ！　だめ、それ、気持ちよすぎるぅ……♡♡」

「駄目じゃないだろ？　もっと感じろ。イキまくれ！」

俺はもっと激しくする。

「んひゃあああああああああああああ！！　あっ、あっ、イク！　イク！　イッちゃうのぉぉぉぉ！　お、お潮出ちゃうのぉぉぉ！！！」

「イケ！　そして思い切り出せ！」

「あああああああああああああ

シンクの下、戸棚部分を爆乳ショートちゃんの潮が汚していく。
「はぁはぁ……」
「気持ちよかったか？」
「は、はい……♡　最高でした……♡」
「でも、まだだぞ？」
「へ……？　んひゃう♡　せ、先輩、そんなとこ舐めたら、汚いですよぉ……！？」
「汚くなんてないさ。お前のマンコ、最高だぜ！」
「んひゃぁんぅ♡♡♡」
俺は爆乳ショートちゃんのマンコを激しく舐めたてる。マン筋、膣、クリ、そしてアナル。爆乳ショートちゃんが感じる所を次々と舐めていく。
「んひゃあああああああんっっ！　せ、先輩、わ、私、また……！」
「ひけ！」
「あああああああああああ！！！　イクぅぅ！　んっはっ！！」
爆乳ショートちゃんは全身をビクンと震わせ、イッた。
「はぁはぁ……すみません……先輩の顔、私のエッチなお汁で汚しちゃって……」
「構わない。お前のエロ汁で汚されるのは本望だ」
「う、嬉しい……♡　先輩、次は私にさせてください……♡」
「あぁ。頼む」

♥　♥　♥

「先輩、次は私にさせてください……♡」
「あぁ。頼む」
先輩にいっぱい気持ち良くしてもらっちゃった♡　お返し、頑張らないと！
「先輩、腰を私のお尻に密着してもらってもいいですか？」

「あぁ。こうか？」
「はい……♡」
先輩のおちんちんガッチガチ♡　さっき出したばっかりとは思えないくらい、熱くて硬い♡
「んっ♡　はっ……♡　ふっ……♡」
「うお……こ、これは……」
「し、尻コキってやつですぅ……♡　先輩に喜んでもらいたくて、ずっと練習してたんです……♡　どうですか？　ちゃんと気持ち良くなれてますか……？」
「あぁ！　最高に気持ちいい！　マン汁、我慢汁、精液が潤滑油になって、滑りもいいし、視覚的にもめちゃくちゃエロくて興奮する！」
「よ、よかったですぅ♡　だ、出したくなったらいつでも遠慮なく、私のお尻にビュッビュしてくださいねぇ♡」
先輩が、私の尻コキを気に入ってくれた……♡　すっごく嬉しい……♡
これはずっとお家で練習してた。そして、先輩の家に引っ越した後も、師匠に見てもらいながら練習してた。その成果を今、発揮する時！
「ご、ごめん、お、俺、もう……」
「はいぃ♡　出して♡　出してくださいぃ♡」
「くっ！　出る！」
ビュル！　ビュルルルルルルル！！
「ひゃっ♡　出てるぅ♡　先輩のおちんちん、お尻の間でビクビクして、精液、お尻と背中にバシャバシャかかってますぅ♡」
私の尻コキで、イカせられた！　やったぁ～！
「はぁはぁ……」
「先輩、次はこっちで、シコシコしてもいいですか？」
私はシンクの上に座る。
「あ、足コキか……！　頼む！　してくれ！」

「は〜い♡」
足コキの許可を得れた♡　よかった♡　先輩のおちんちんを、両方の足で挟んで……♡　んふふ♡　足に先輩のおちんちんの熱さが伝わってくる♡
「お、おぉ〜……！」
先輩も喜んでくれてるみたい……♡　正直、足コキって他のやつより疲れるけど、先輩に喜んでもらうためなら、全然苦にならない♡　むしろ、この疲労感も気持ちいい♡
「んしょ♡　よいしょ♡」
「足コキって最高だな……！　マンコが丸見えだ」
「っ！」
そうだった！　この体勢って思いっきりオマンコ見えちゃうんだった！
まぁ、でも全然問題ない。むしろ、もっと見てほしい♡　先輩には私の全てを知ってほしい♡
「くっ……また……」
「出してください♡　先輩♡」
「出る！」
ビュルルルルルルル！！
「はぁ〜……♡　凄い♡　先輩の精液、噴水みたいに跳ね上がってます♡　幸せな光景ですぅ♡」
先輩の精液は、高く跳ね上がって、床とシンク、そして私の足にかかる。足に精液が……最高♡
「はぁはぁ……」
「せ、先輩、次もしていいですか？」
「あ、あぁ。何をしてくれるんだ？」
「ずっとお待たせしてしまっていましたが、やっと自身を持って披露できるまでになった、パイズリを」
「おぉぉ！　マジか！」
凄く喜んでくれてる。そんなに待たせてしまっていたんだ……ご

めんなさい……！
「じゃあ、していいですか？」
「あぁ！　頼む！」
「はい♡　んしょ……」
先輩のおちんちん、私の谷間に全部隠れちゃった♡　あ、でも、亀頭だけがお顔を出してる♡　先輩のおちんちんって、太くて長くて、最高おちんちんなんだよね♡　仮性包茎なのが可愛い♡
「んしょ……♡　んしょ……♡　ど、どうでしょうか……？　ちゃんとできてますか……？」
「あぁ……！　今まで感じた事がないくらい、めちゃくちゃ気持ちいいよ！　やっぱり君のおっぱいは最高だ！」
「よ、よかったです♡」
う、嬉しいぃぃ！！！　先輩にパイズリを褒められただけでなく、おっぱいが最高だって言われちゃった！　私、おっぱい大きくてよかった……！
「ん……♡　れろぉ……♡」
「おぉ……！」
私は唾液を亀頭に垂らし、谷間でそれをおちんちん全体に塗り拡げていく。
こうした方が、滑りもよくなって、感度もあがるはず。
「くっ……！」
先輩、感じてくれてる……♡　感じてる顔、すっごく可愛い♡
「ご、ごめん、また……！」
「いいですよ♡　我慢なんてしないで、いつでも好きな時にいっぱい出してください♡」
私は、おっぱいの圧迫を強めた。そして、シコシコも速くする。
「くっ……出る！」
ビュビュビュゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！
「んぷぅ！」
先輩の精液が、私の顎に当たる。慌てて下を向いたら顔にかかっ

た♡
パイ射に顔射……♡　幸せぇ……♡
「はぁはぁ……次は、俺の番だ」
「はい……♡」

♡　♡　♡

俺は、爆乳ショートちゃんを奥の部屋に連れていき、椅子に座らせる。膝立ち状態だ。
そして、鞄からとある物を取り出す。
「そ、それは……」
「バイブだ。知ってるだろ？」
「は、はい……♡」
「これでお前のマンコ、虐めてやるから、イキまくれよ」
「は、はいぃ……♡」
俺はバイブ（クリも刺激できるような形）を起動させ、焦らしなどせず、いきなりマンコの膣（なか）に挿入した。
「んひゃあああああああ！！」
いきなりぶっ込んだから、刺激が強かったのか、爆乳ショートちゃんは、嬌声を上げた。
すでに感じきっているので、振動の強さ「弱」でもこんなに感じてるんだろうな。
Sの血が騒ぎ出してきた。
「んっ♡　あああああ♡」
俺はバイブを、激しく抜き挿れしながら、強さをいきなり「中」にした。
「んひゅ！？　ひゃあああああああああ♡♡♡　ら、らめぇぇぇ♡♡♡　か、感じ過ぎちゃぅぅぅ！！　あああああああああ！！」
ぷしゃあああああああああ！
「おぉ……。勝手に潮が……やっぱりすげぇな玩具は」

俺は依然、抜き挿れを激しくしながら、またしてもいきなり強さを「強」にした。
「ひゃあああああああ

「んぶぶぉ！？」
せ、先輩のおちんちんが一気に喉奥まで来たぁ……♡　イラマチオってこんななんだ……♡
「ぶもぉ〝♡　ぐぼぉ〝♡　じゅぼぉ〝♡」
せ、先輩が腰を激しく動かしてお口を犯してる♡　結構苦しいけど、の、喉奥感じちゃうぅ……♡
「くっ……のどちんこに当たる感触が、堪らない……！」
先輩が喜んでくれてる……♡　嬉しい……♡　もっと、もっと突いてくださいぃ♡
「ぐぼぉ〝♡　じゅぼぉ〝♡　ぶぶもぉ〝♡　ぐぶぶぅ〝♡」
胃液が上がってくるのが分かる……先輩、もっとヌルヌルにして、気持ち良くしますね♡
「くっ……！　もう、出る！」
ビュルルルルルルル！！！
「んぶぅ〝！？　んん〜〜〜〜♡♡♡」
先輩の精液が喉奥に直接来たぁ♡
ドロッドロの濃い精液が、喉奥に絡みついてくる♡　最高すぎる……♡♡
「ま、まだ……！」
「んぶぶぅ〝♡」
いいんですよ……♡　出したいだけ出してください♡　全部飲ませて頂きますから……♡
「ごくん……♡　ぷはぁ♡」
「はぁはぁ……結構遠慮なくしたけど、大丈夫だったか？」
「はい♡　とぉぉぉぉぉっても気持ち良くて幸せでした♡」
「そうか。よかった」
「このままフェラしてもいいですか？」
「あぁ。頼む」
「はい♡　んちゅぅ……♡」
イラマチオされた後にフェラができるなんて、幸せすぎる……♡

「れるぅ♡　ぢゅるぅ……♡　れりゅぅ……♡　ぢゅるるるるるるるる♡」
「くっ……」
先輩が、私のフェラで感じてくれてる♡　嬉しい！　もっと頑張らないと！
吸う度に、さっき出した精液の残りと我慢汁がどんどん溢れてくる♡
お口の中が、先輩でいっぱいになって、幸せぇ♡
「じゅぼぉ♡　ぐぽぉ♡　ぶぽぉ♡　ぐぽぉ♡」
私は頭を前後に激しく振る。先輩♡　先輩♡　もう一回精液飲ませてください♡
「くっ……も、もう……」
「らひへくらはい……♡」
出して♡　出して♡
「出る！」
ドビュルルルルルルルル！！！
「んぶぅ！　んぶぅ……♡　んくんく……♡」
先輩の精液、来たぁ……♡　本当、美味しい……♡
「ご、ごめん、おしっこ出そう……」
「ほのままらひへくらはい♡」
「くっ……！」
ぷしゃあああああああああああああ！！！
「んんっ！　んくんく……♡」
精液がまだ口の中に残ってるのに、おしっこが来たぁ♡♡♡
精液とおしっこの同時飲み、最高ぉ……♡♡♡
「はぁはぁ……」
射精とおしっこが終わってしまった。もっと飲みたかった……。
「先輩……ベッド行きましょう？」
「あぁ」
私達はベッドへと向かった。

私の膝の上に、先輩が頭を乗せて寝転がる。
「先輩、おっぱい吸ってください♡」
「あぁ。んちゅ」
「んん〜〜〜〜♡♡♡」
先輩に乳首吸われてるぅぅ♡　夢だった事が、叶ってるぅ♡
「先輩、失礼しますね♡」
私は、先輩のおちんちんを握り、そのままシコシコを始める。
「んふふ♡　先輩のおちんちん、あんなにいっぱい出したのに、まだまだ硬いままです♡」
先輩のおちんちんは、ずっと硬いまま♡　凄すぎる♡
「んちゅ……れろ……」
先輩が私の乳首を一生懸命吸ってくれてる……♡　なんか、赤ちゃんみたいで可愛い♡
ごめんなさい、先輩……今だけは、お母さん気分を味あわせてください……♡
「うっ……」
「先輩、出したくなったらいつでも出していいですからね♡」
私はシコシコを速める。シコシコ〜〜〜♡♡♡
「うっ……！」
ビュルルルルルルル！！！
「あん♡　いっぱい出てるぅ♡」
先輩の精液……♡　堪らない……♡
「ぷはぁ。そろそろ……」
「はい……♡　挿(い)れてください……♡　私の事、いっぱいメチャクチャにしてください♡」
「あぁ。任せろ！」
私はこの後、先輩に沢山犯してもらった。中出し回数は２０。
とっても気持ち良くて、幸せだった♡　でも、足腰はガクガクで動けなくなっちゃったけど……♡

❤❤❤

「「はぁはぁ……」」

私と先輩は、ベッドの上で並んで横になっている。二人とも息を切らしている。

もの凄く濃密なエッチをして、私達は力尽きた。私からしたら、とぉぉぉぉぉっても幸せだったけど、先輩はどうなんだろう？

「先輩、気持ちよかったですか……？」

「あぁ。もちろんだ！　こんなに興奮して、こんなに色々したのは今回が初めてだな」

「よかった……♡」

嬉しい♡　先輩の初めてをもらえた……♡

「あ、そうだ」

「ん？　先輩？」

先輩はベッドを降りて、玄関の方へと向かった。

「ほい」

「あ、ありがとうございます」

私の着替えと荷物を持ってきてくれた。

「えっと……」

先輩は自分の鞄を漁っている。どうしたんだろう？

「あったあった」

先輩はベッドに戻り、私の隣に座った。

「はい、これ」

「え……？」

手渡されたのは小さな紙袋。なんだろう、これ……？

「開けても、いいですか？」

「もちろん」

私が紙袋を開けると、中に入っていたのは――、

「こ、これ……！」

「気になってたみたいだからさ。欲しいのかと思って買っといた」
中に入っていたのは、私が昼間気になっていたサメさんのヘアピンだった。
「お、お金……」
「そんなの気にしなくていいんだよ。これは俺からのプレゼントだ。今日の記念としてもらってくれると嬉しいんだが……迷惑だったか……？」
「そ、そんな事ありません……！　とっても、とっても嬉しいです……！」
大好きな先輩から、サプライズなプレゼント……嬉しくない訳ない！　こんなの、こんなの、もっと好きになっちゃうよぉ……！
「先輩！」
「うぉ！？」
私は先輩に勢いよく抱きついた。
「先輩……」
「ん？」
もう、言っちゃおう。もう、自分の気持が抑えられない……。もう、我慢できない……！
「好きです」
「え……？」
「私、先輩が好きです……大好きです……！」
「う、うん……」
「私を、便器として、性処理係として、奴隷としてだけでなく、先輩の彼女として、先輩の……先輩のお側にいさせて下さい……！」
私は先輩の胸に顔を埋める。多分、今泣いちゃってるから……。
すると、先輩は、私の肩を掴んで、引き剥がしてくる。先輩……？
「俺を見ろ」
「先輩……」
先輩と目が合う。やっぱり、泣いちゃってる、私……。
「俺も、君が好きだ。もっと早く俺の方から言うべきだったんだ。

先に言わせてごめんな」
「先輩……」
「俺と、付き合ってくれ」
「っ……！　は、はい……！　はい……！」
先輩は私を抱きしめてくれた。私は、これでもかってくらい泣いてしまった。だって、ずっと念願だった想いが、実を結んだんだもん。しょうがないじゃん……。

やっと落ち着いた私は、先輩へのお返しが何もないことに気がついた。
「ご、ごめんなさい……！　わ、私、何も……！」
「別に気にしなくていい。俺が勝手にやったことだし」
「で、でも……」
う～ん……それじゃ駄目だ……何かお返しをしなくては……。そうだ！
「ちゅっ❤」
「ん……？」
「私からのお返しです♡」
「こんな事されると、俺また我慢できなくなるぞ？」
「いいですよ♡　時間はまだまだありますから、先輩の気の済むまで、私を犯してください♡　私の体、使いまくってください♡」
「いいのか？」
「はい……♡」
だって、私は、先輩の便器で、先輩の性処理係で、先輩の奴隷で、先輩の、彼女だから！
「行くぞ？」
「はい……♡　来てください……♡」
この後、私は、先輩に朝まで犯されまくった。
本当に一睡もしていない。でも、それは凄く幸せな夜ふかしだった♡

先輩は１５発、中出しをしてくれた。先輩のおしっこは５回飲ませてもらえた♡

もう、幸せすぎぅぅぅ♡♡♡

第２８話　爆乳ショートちゃんとの、アツアツな夜♡♡（後書き）

次回予告！

「れ、零君……」

ついに瑠李（るい）の我慢が、限界を迎える！

「私、もう、無理なの……！」

瑠李が零に申し出る事とは？

「零君、私を、メチャクチャにしてぇ♡♡♡」

次回

『我慢の限界を迎えた瑠李が……♡♡』の前に２話、特別編を挟みます♪

『我慢の限界を迎えた瑠李が……♡♡』

お楽しみに！

大晦日特別編！　大晦日前にお風呂で煩悩祭り♡♡（前書き）

プロローグ

爆乳ショートちゃんと、濃密なエッチをした俺は、ベッドで眠る爆乳ショートちゃんを眺めた後、ベッドを降り、スマホを持って洗面所へ。

「もしもし、義母さん？　そっちに戻るの夕方ギリギリになるかも。一睡もせずにシてたから、正直眠くて」

『大丈夫よ。ゆっくりで。約束の時間は単なる目安だから、ちょっとくらい遅れても大丈夫。だから気にしないで、ゆっくりしてきなさい』

「ありがとう」

俺は義母さんへの連絡を終え、ベッドに戻った。そして、爆乳ショートちゃんの隣に横になり、そのまま目を閉じた。

大晦日特別編！　大晦日前にお風呂で煩悩祭り♡♡

一応、午後１５時に目覚ましをセットしたが、その前に起きる事ができた。

今、俺は風呂に入っている。爆乳ショートちゃんを起こす前に、清潔にしておかないと「先輩臭いです。嫌いです」なんて言われた言われたら、心が折れる。

俺達は恋人同士になった。それは嬉しい。でも、そうなると今までの便器や奴隷などの扱いを続けていいのかとも、思ってしまう。

俺がシャワーを浴びていたら――、

「ぎゅ♡」

「おっ。起きたんだ」

「えへへ～♡　はい♡　おはようございます、先輩♡」

うん。可愛いな。

「どうしたんですか？　なんか深刻そうな顔をしてましたけど……？」

「いや……その……俺達って一応付き合い始めただろう？　だとすると、今までの便器や奴隷のような扱いは止めた方がいいんじゃないかって思って――」

「嫌ですッッッ！！！」

「っ！？」

こ、この子、こんな声も出るんだ……ビックリした……。

「なんで……なんでそんな寂しい事……悲しい事を言うんですか……私、先輩の性奴隷便器として、価値がなくなってしまいましたか……？　私は、役立たずですか……？」

な、泣き出してしまった……！？　な、泣かせるつもりはなかったんだが……。

「ち、違う……！　そうじゃない……！　君は性奴隷便器として優

秀だし、できればこれからも俺の性奴隷便器のままでいてほしいって思ってる！」
「じゃあ、なぜ……」
「だって、彼女に対して、そんな事させるなんて、おかしいだろ……？」
「おかしくなんて……おかしくなんてないんです……！　私は！　先輩の彼女である前に、先輩専用の性奴隷便器なんです！　その性奴隷便器が彼女になった、ただそれだけなんです……！　だから、お願いですから、今まで通り、性奴隷便器でいさせてください……！　お願いします……！」
俺、何やってんだろう……。そうじゃん。この子は、そもそもが俺の性奴隷便器だったじゃないか。それが、彼女になった途端に解消だなんて、俺は馬鹿過ぎる。
舞い上がってたんだな……この子と付き合えた事で、前の俺の理性が勝手にブレーキをかけてしまった。
俺はもう、昔の俺じゃないんだ。理性なんて持たない、本能のまま生きる、変態だ、俺は！
「ごめんな。俺が間違ってた。君は俺の彼女で、性奴隷便器だ。一生な」
「っ！　は、はい……！　私は一生、先輩の専用性奴隷便器です……！」
俺は爆乳ショートちゃんを優しく抱きしめる。
「先輩……？」
「ごめん……」
精一杯の謝罪の気持ちを、このハグに乗せる。
「ふふ……♡」
爆乳ショートちゃんも、嬉しそうにハグを返してくれた。もうちょっと、このままで……。

♡　♡　♡

俺と爆乳ショートちゃんは、旅館には戻らず、とある温泉施設にやって来ていた。
「うわぁ～広いですね～」
爆乳ショートちゃんが建物の中に入ると、感嘆の声を漏らす。
「ここは一応、義母さんが経営してる店なんだ」
「え！？　そうなんですか！？」
「あぁ」
義母さんは、お嬢様だったようで、気に入った店などがあるとすぐさま買い取り、自分の物にしてしまうらしい。この温泉施設も、混浴ができる事を知ると、すぐに買い取ってしまった。
「他にお客さんがいらっしゃらないですね」
「今日は、オーナー権限で貸し切りなんだよ」
「す、すごいです……！　貸し切りなんて、私、初めてです……！」
ふんす！　鼻息荒く興奮している爆乳ショートちゃん。その様子が可愛くてつい――、
「んむ！？　んちゅ……♡」
キスをしてしまった。
「ぷはぁ……♡　せ、先輩……？」
「ごめんな、急にキスしちゃって」
「い、いえ……♡　私は嬉しいので大丈夫です……♡」
「我慢ができなくなって、つい」
「んふふ♡　いつでもしてください♡　私の唇、舌、口内、唾液は全部、先輩だけのモノですから♡」
「ありがとう。義母さん達は脱衣所にいるだろうから、行こうか」
「はい♡」
俺達は脱衣所へと向かった。混浴の方にいなかったので、女湯の方に行ってみると、服を脱ぎ始めている義母さん達がいた。
「あ、きたきた」
「きたきたじゃないよ。なんでこっちにいんの？」

「え～？　そんなの決まってるじゃない。みんなで女湯に入ろうと思って」
「いくら貸し切りだからって、それは駄目だろ」
「いいの～。ここのオーナーは私なんだから、私に決定権があるのよ。だから、今日は、みんなで女湯に入りましょう～♪」
「全く……」
俺は改めてみんなを見る。
ブラがないので、上の服を脱ぐとすぐにおっぱいが出現する。
義母さん、桃、燐、姉ちゃんのおっぱい……やっぱり最高だな……！
「なぁ」
「はい？」
「服、脱がせてもいいか？」
「うへっ！？　あ、は、はい……どうぞ……♡」
俺は、爆乳ショートちゃんの服を脱がしていく。
まずはブラウスに手をかけ、脱がす。すると、爆乳がブルンッ！と激しく揺れながら落ちてきた。
マッジで最高！！
「あ、あの、先輩……？　私のおっぱい、なんか変ですか……？」
「ん？　ううん。変じゃないよ。ただ、エロいな～って思って見てたんだ」
「そ、そうなんですね……嬉しい……♡」
「じゃあ、下も……」
俺は、爆乳ショートちゃんのスカートに手をかけ、そのまま下に下ろす。
「んっ……♡」
足を上げてくれたので、脱がせやすかった。そして、パンツも……。
「クリ、勃ってるな」
「は、恥ずかしいです……♡」

パンツを脱がすと、クロッチ部分から糸が引き、さらに、クリトリスもすでにパンパンに勃起していた。
「あ～いいなぁ～！　私もお兄ちゃんに脱がせてもらいたかったぁ～！」
「はいはい、、燐ちゃん、ワガママ言わないの～。お姉ちゃんと行きますよ～」
「ぶ～～～～！」
燐は姉ちゃんに連れられ、浴室へと入っていった。
「ぐっ！」
桃はよく分からんが、サムズアップのポーズを取ったあと、浴室へ。
「なるべく早めにね～」
そう言って義母さんも浴室へ。
もしかしてこれ、俺達が付き合いだしたってバレてる？
「じゃ、じゃあ、先輩、先輩のお洋服は私が脱がさせて頂いてもいいですか？」
「あぁ。頼む」

♥　♥　♥

「では、失礼します……」
私は、先輩の前に跪き、先輩の服を脱がしていく。
「上は先に脱がんでいいんか？」
「あっ！？　忘れてました……！？」
おちんちんの事で頭がいっぱいで、上の事すっかり忘れてた！？
「大丈夫、大丈夫。上は自分で脱ぐよ」
「すみません……」
「下を脱がして？」
「はい……！」
よし……！　挽回しないと！　先輩のズボンを……。うわぁ……

♡　先輩のおちんちん、ボクサーパンツに形がくっきり浮き出てる……♡

もうパンパンに大きくなってて、おちんちん、金玉さんの形が……♡

「すぅ〜〜〜〜〜♡」

「うぉ！？」

はぁ〜〜〜〜〜〜♡　この臭い、堪らない……♡　先輩のおしっこと精液と汗が混じった臭い……♡　ずっと嗅いでたい……♡　私ってこんなに匂いフェチだったっけ……？

「お、お〜い……臭い嗅いでくれるのはすんげぇ嬉しいんだけど、みんな待たせてるから……」

「あっ！？　ご、ごめんなさい……！　つ、つい……」

「いいよ。俺の臭いでよかったら、いつでも嗅がせてあげるから」

「ほ、本当ですか！」

「あぁ。まぁ、嗅いだ後はシてもらうけどな」

「もちろんです！　うふふ♡　じゃあ、おパンツも脱がしますね♡」

「あぁ」

んしょ……♡　わぁ〜……♡　凄い、おちんちんがビョンって跳ねてる……♡　今すぐしゃぶりつきたい……♡

「さ、行くぞ」

「は、はい……！」

ダメダメ！　ちょっとは自制しないと！

♡　♡　♡

浴室に入ると、すでに桃、燐、姉ちゃん、義母さんが体を洗う所で待っていた。

「ごめん、待たせて」

「大丈夫よ。ほら、ここに座って」

「あぁ」

義母さんに手招きされて、風呂椅子に座る。
「じゃあ、桃ちゃんと燐ちゃんは前ね。華ちゃんは後ろで、私達は両サイドから挟む感じで」
義母さんの采配で、桃と燐が俺の股間前に、姉ちゃんが背後に、義母さんが右隣に、爆乳ショートちゃんが左隣に来た。
「まずはみんな、ボディソープを体につけてね～」
そう言うと、全員がボディソープを全身に塗りたくっていく。
「ほらぁ～見てぇ～零ちゃん♡　ボディソープで体ヌルヌルになっちゃったぁ～♡」
後ろの姉ちゃんがそう言って、自分の体を見せてくる。
うっわエッロ！！！　なんで女子の体って、ヌルヌルになっただけでエロさが増すんだろうか？
おっぱいもお腹もマンコもテカテカのヌルヌルで、もうマジでエロい！　その言葉以外見つからん！　男子諸君、許してくれ！
「あ、お兄ちゃんのおちんちん、ビクンって跳ねました～♡　興奮してくれてるんですね♡」
「兄さんのチンビク……見れて、嬉しい……♡」
「零ちゃんのチンポ、我慢できないって感じね。それじゃあみんな、行くわよ」
『はい！』
義母さんの掛け声で、みんなが行動を開始した。
「んしょ……んしょ……♡」
爆乳ショートちゃんが俺の左腕を、自身の爆乳に挟み、体を擦り付けてくる。
こ、これは、ヤバい……！　フワフワもちもちで弾力があって、おっぱい好きには堪らん……！
「んっ……♡　んっ……♡」
義母さんもおんなじようにしてくる。あ～これ本当にヤバい……！　両腕がおっぱいに包まれるってスゲェ……！　こんな至福があっていいのか……！

しかも、おっぱいは両腕だけじゃなくて――、
「んっ……♡　んっ……♡」
背中に姉ちゃんはおっぱいを付けて、上下に擦ってくる。左右と後ろがおっぱいに包まれるとかマジヤバいわ！
姉ちゃんのおっぱい、乳首が勃ってるのが分かる。爆乳ショートちゃんも義母さんも乳首めっちゃ勃ってて最高過ぎる！
「お兄ちゃんのおちんちん凄い……♡　まだ触ってないのに勝手にピクピクして、先っぽからエッチな汁がとぷぅ～っていっぱい出てきてる♡」
「兄さん、エッチで本当に神……♡」
そう言った後、二人はボディソープでヌルヌルの手でチンコを握ってきた。
そしてそのまま扱いてくる。正直、ヤバい！！！
興奮し過ぎなのもあるけど、ヌルヌルの手で激しく扱かれると、それだけですぐにイッちまいそうになる……！
『んっ……♡　ふぅ……♡』
全方向から艶めかしい声が聞こえてくると、もう本当に我慢できん！
「あああああ！」
ビュルルルルルルルル！！
「キャッ！」
暴発だったので、精液が思いっきり桃と燐にぶっかかった。
「はぁはぁ……」
「すご～い、零ちゃん♡　いっぱい出たね～♡」
「お、お兄ちゃんの精液、浴びるのこんなに幸せなんですね……♡」
「兄さんの精液、神……！」
「桃ちゃん、もっと語彙力つけましょうか……」
「先輩の射精……エッチで興奮しちゃう……♡」
俺の暴発を誰も責めたりしてこない。それどころか射精に関してそれぞれが感想を述べてくる。

「零ちゃん、まだ、できる？」
「あぁ。もちろんだ」
「うふふ♡　よかった♡　じゃあ、誰から挿れる？」
「っ！」
全員が、湯船の周りについている石に手をつき、四つん這いになる。
そして、ケツを突き上げ、フリフリと振りながら誘ってくる。
こ、これは、よくエロコンテンツである、乱交の時の女子達がする行為……！　実際目の当たりにすると、こんなにエロいのか！
あ～なんで俺のチンコは五本ないんだ！　五本あれば全員一気に犯せるのに！
「じゃあ、まずは姉ちゃんから」
「やった♡」
姉ちゃんのマンコから溢れ出る愛液と、本気汁が、真っ先に目に入ったので、俺は姉ちゃんの後ろに回る。
「行くぞ？」
「うん……♡　来て……♡」
「ふん！」
「んひゃあああああ！　来たぁぁぁ♡♡♡　零ちゃんのおちんちん挿入って来たぁ♡♡♡」
くっ……！　姉ちゃんの膣メチャクチャキツイ……！　チンコを離さないって言ってるかのように、チンコをメッチャ締め付けてくる……！
「あああああ！　あああああん！　はあああああん！」
突く度に、姉ちゃんが嬌声を上げまくる。バチュバチュと言うエッロい音も鳴っている。しかも、ここは風呂だから、音が反響して、興奮度がマジでヤバい！
「すごい……お姉ちゃん、あんなに声出してる……♡」
「姉さん、気持ちよさそう……羨ましい……♡」
「華ちゃん、幸せそうね～♡」

「は、華さん……輝いてます……♡」
「姉ちゃん、みんな見てるぞ？」
「あああああああああああああんっっっっっ♡♡」
聞いてないな。ま、姉ちゃんは見られるのが大好きだからいいか。
「あああああ！　あああああ！　んはぁぁんっっ！　お、オマンコおかしくなっちゃうぅぅ！　イッちゃうのぉぉぉ！！！！！」
「いいよ、イケ！」
「んはあああああああああんっ！！　イックぅぅぅ！！！！」
「くっ……！」
ドビュルルルルルルルル！！
「んひゃあああああ！！　な、膣でおちんちんがブルブルして、あちゅいの出てるのぉぉ♡♡♡　中出しされてイックぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
姉ちゃんは、一回イッた後、俺の暴発中出しでまたイッた。
「うぉ……」
チンコを引き抜く時、膣のビラビラがカリ首をなぞり、刺激してきた。それにより、俺は姉ちゃんのお尻に精液を出してしまった。またまた暴発だ。
「はぁはぁ……」
姉ちゃんはぐったりとしてしまった。
「ねぇねぇ、お兄ちゃん、次は私に挿れてくれませんか……？」
燐が俺の目の前まで来て、ケツを向けて自分でマンコを開いてくる。こんなの見せられたら我慢できん！
「ふん！」
「あひゃあああああ！！　お兄ちゃんの大好きおちんちん、来たぁ♡♡♡」
燐の膣もきっつい……！
「お、お兄ちゃん……」
「ん？」
「お、犯すみたいにメチャクチャにしてくれませんか……？」

「あぁ。分かった。遠慮はしねぇからな！」
「あああああああああああああああ！！！！　おちんちん、ガンガン突かれてぅぅぅぅ！！！　オマンコえぐられちゃうぅぅ♡♡♡」
こ、これ、いいな……！　性犯罪を犯してるみたいで背徳感が堪んねぇ……！
「んひゃあああんんっっ！！　ひゃあああああん！　ひゃあああああ！！！」
「くっ……これはもう、無理だ……！」
ビュルルルルルルル！！！
「ひゃあああああああああああああ！！！　な、中出しされてるぅぅぅ！！！！　し、子宮にバシャバシャかかってるのぉぉぉ♡♡♡　イッちゃう、イッちゃう、イッちゃうぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
ぷしゃあああああああ♡
「燐ちゃん、潮吹いちゃってるわぁ♡　それだけ気持ちいいのねぇ♡」
「燐ちゃん、いいなぁ……♡」
「燐さん、気持ちよさそう……♡」
別に一人ひとりのご感想はいらんのだが。
「はぁはぁ……」
燐もぐったりしてしまった。チンコを抜くと、すぐさま次の人が握ってきた。
「か、義母さん……」
「次は、私、よね？」
「そうだな」
俺は義母さんにバックで挿れる。
「んひゃあああああ！！！　零ちゃんのオチンポ、気持ちいいいいいい！！！」
膣に挿れただけなのに、義母さんのマンコはビクビク痙攣して、イッた事が分かる。

「な～に勝手にイってるの、義母さん。駄目じゃん、俺より先にイッたら」
「ご、ごめんねぇぇぇぇぇ♡♡♡　零ちゃんのオチンポが気持ちよすぎて、勝手にイッちゃったのぉぉぉぉぉ♡♡♡」
「全く、困ったマンコだ。躾が必要だな！」
「あひゃあああああああああああああああ！！！　ち、チンポぉ！　子宮の入り口まで届いてるのぉ♡♡　桃ちゃんを産んだお部屋にいぃ♡♡♡」
「だったら、その部屋に俺の子種注いでやるよ！」
「あああああああああ！！！　注いでぇぇ♡♡♡　零ちゃんの子種、溺れるくらい注いでぇぇぇ♡♡♡」
「くっ……出る！」
ビュルルルルルルルルル！！！
「んぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛♡♡♡♡　出てるのぉ゛ぉ゛♡♡　零ちゃんの子種、子宮に……♡　イキュぅぅぅ♡♡♡」
「お母さん……エッチ……♡」
「ご、ごくり……♡」
俺は義母さんの膣にたっぷり注いでやった。義母さんもぐったりとしてしまった。
「兄さん、次は私に……♡　奴隷マンコにお仕置き、お願いします……♡」
桃が、床に上半身を完全に付け、ケツを持ち上げ、マンコを自分で開いている。マンコからは愛液と本気汁がドバドバ溢れ出ている。
「桃……そんな格好して、俺を興奮させた罪は重いぞ？」
「は、はいぃ……♡　ば、罰受けますぅ……♡」
「メチャクチャにしてやる」
俺はチンコを、桃の膣にぶっ込んだ。
「んひゃあああああ！！！　兄様のオチンポ様、ぎだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡」
うぉ……こいつの膣すげぇな……なんだよこれ……他の三人と締

付けと濡れ方が全然違う……！
誰よりもキツくて、グチョグチョだ……！
「桃！　お前、興奮し過ぎだろ！　マンコグチョグチョじゃねぇか！」
「は、はいぃぃ♡♡♡　兄様のセックス見てたら、興奮して、オマンコおバカになっちゃったんですぅ♡　ごめんなさいぃぃ♡」
「この馬鹿マンコは、俺がしっかり躾けてやる！」
「ひゃわあああああああああああああ！！！　お、お願いしますぅぅ♡♡♡　中出しで子宮とオマンコお仕置きしてくださいぃぃぃぃぃ♡♡♡」
乱れまくる桃を見て、爆乳ショートちゃんが、顔を真っ赤にしながら――、
「し、師匠って、あんなに喋るんだ……普段口数少ないから、結構意外、だなぁ……。それだけ、先輩のおちんちんが凄いんだ……♡」
そう。桃は普段はあんまり喋んないだけど、俺とセックスする時だけ、すんげぇ流暢に喋るんだよな。こいつは奴隷としての素質があるんだな。
「おらぁ！　一人で感じまくってねぇでもっと締め付けて、俺もイカせろ！」
「は、はぃ　ぃ　ぃ　ぃ　ぃ　ぃ　♡♡♡♡♡♡」
俺は腰をメチャクチャに振りまくる。正直、精液はちょっと漏れている。男子なら共感してくれると思うが、オナニー中に我慢しすぎると精液がちょろっと出てきて、なんか変な感じになる。それが今、我慢はしてないのに起こっている。
おそらく、三人にすでに射精しているので、感覚が鈍って勝手に出ているのかもしれない。
「おら！　しっかり射精させろぉ！」
「んぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　！！！」
俺は、自分が射精したいが為に、腰を振りまくる。桃のマンコや体のことなど考えていない。

「ぐぉぉぉ

「性奴隷便器は黙って犯されてればいいんだよ。それに、俺のこれを見ても、おんなじ心配ができるか？」
「え……？　あ……♡」
爆乳ショートちゃんは、俺のイキリ勃ったチンコを見て、目にハートを作った。
「な？」
「はい……♡　性奴隷便器の分際で余計なお世話でした……♡　先輩……いえ、ご主人様♡　馬鹿な性奴隷便器に、キツ～いお仕置きをお願いします……♡」
爆乳ショートちゃんは、シャワーの方に向かい、壁に手をついて、ケツをこっちに向けてくる。そして、ケツをフリフリと揺らしている。
「あぁ。泣き叫んでも、止めねぇからな」
「は、はい……♡」
「ケツ揺らして、イケねぇ性奴隷便器だな！」
バチィィィィィンッッッッ！！！
「きゃうぅぅぅんっっ♡♡♡」
俺は爆乳ショートちゃんのケツを、思い切り引っ叩いた。
ぷしゃあああああああ♡♡
「おいおい、ケツ叩かれて漏らすとか、どんだけだよ」
「ご、ごめんなしゃいぃぃ……♡♡　き、気持ちよすぎて我慢が――んぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ！！！」
喋ってる途中の爆乳ショートちゃんの膣（なか）に、俺は挿（い）れた。
いきなり来るとは思ってなかったのか、爆乳ショートちゃんは今まで聞いた事がない、下品な声で鳴いた。
爆乳ショートちゃんのこんな下品な声、初めて聞いたけど、結構いいな。もっと、もっと聞きてぇ！
「んひゃあああああああ！！！」
「違ぇ！　そうじゃねぇ！　もっと濁点で鳴きやがれっ！」
俺は何を言ってるんだろうか？

「おらぁぁぁぁぁぁ！」
「んぎゃぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ！！！」
出た出た！　もっともっとだぁ！！
俺は腰をめちゃくちゃ打ち付ける。
「あ　あ　あ　

ンコはチュポンと抜けてしまった。
「これは壮観だな」
辺りを見回すと、マンコから俺の精液を逆流させながら、全裸で横たわる女達が五人。堪らない。
「さて、つかるか」
俺は、五人を放ったまま一人だけ湯船につかった。

♡　♡　♡

風呂を後にした俺達は、義叔母さんの運転する車に乗っていた。
「ん？　先輩、何聴いてるんですか？」
俺がイヤホンをして曲を聴いてたら、爆乳ショートちゃんが尋ねてきた。
「これか？　俺の好きなアイドル『ＲＩＵ』って人が歌う『ファンファーレ』って曲なんだ。この歌が一番好きでさぁ～！　ＲＩＵは『乳ちち』って言うアイドルグループに所属してるんだけど、ソロでも活動してて、んで、この『ファンファーレ』って曲はソロの楽曲なんだ。あと、最近はグラビアにも進出してて、そのでかい胸がファンの心を掴んでて――あ、ご、ごめん……」
「いえ♪　先輩がこんなにテンション高く喋ってるの初めて見たので、嬉しくなっちゃいました♪　それに、自分の好きな事を語る時に早口になっちゃったりするのは私も同じなので、大丈夫ですよ♪」
「ありがとうな！」
「っ！」
俺は爆乳ショートちゃんを抱きしめた。幸い、他の人達は全員寝てる（義叔母さんを除いて）から、なんの問題もない。
「せ、先輩……？」
「そんな事言ってもらえたの初めてだからさ、嬉しくて、つい！　大好きだぞ！」
「っ～～～～～♡♡♡　わ、私も大好きです～～♡♡　お、オマン

コ濡れちゃいましたよ……♡」
「本当にエロいな」
「ごめんなさい……♡」
「そこも大好きだ」
「えへへ～～♡」
「聴いてみるか？」
「いいんですか？」
「あぁ。一緒に聴こう」
「ありがとうございます♡」

♡　♡　♡

俺達は、毎年恒例の年越し蕎麦を食べ終え、家に帰ってきていた。
そして、今は深夜。もう年は明けている。だが、どうしてもやりたい事があり、俺と爆乳ショートちゃん、そして桃はリビングにいた。
「本当にいいんだな？」
「はい……♡」「お願い、します……♡」
「分かった。んっ……」
俺は、二人のお椀におしっこを入れる。飛び跳ねてしまい、床に飛び散る俺のおしっこを――、
「もったいない……♡」
と言って、桃が床に這いつくばり、床に飛び散ったおしっこを舐め取っていく。
おいおい、そこまでするのか！？
「あ、師匠ずるい……！」
そう言って、爆乳ショートちゃんまでもが床に這いつくばった。
なんか、本当に奴隷に口で掃除させてるみたいで……そそるじゃねぇか！
「ふぅ……次は精液か」

「「ふぁい……♡」」
俺はそのままオナニーを始めた。こんなエロい光景見せられたら勃起しないわけないよな！
「あ……♡　先輩のオナニー、素敵……♡」
「兄様のオナニー見れるなんて、幸せ……♡」
「ふぅ……出る！」
ドビュ！　ブピュ！　ブピュピュピュ！
俺は、おしっこが入った二つのお椀に、精液を入れていく。
「ほら、できたぞ」
「「わぁ～～～～♡」」
そう。これで何をするのかと言うと……。
「それでは……」
「はい……」
「「頂きます♡」」
二人は、俺のおしっこ精液入りのツユに、蕎麦を入れ、食べ始めた。
うん……光景はエロいけど、結構きしょいな。
「「ん～～～～～～～～♡♡♡　美味しい～～～～♡♡」」
本当か？　こいつら味覚狂ってんじゃねぇのか？
「兄様のおしっこと精液、美味しすぎる♡　麺いらないかも」
「ですね！　この先輩ツユだけで行きたいです！」
それはもはや蕎麦の意味ねぇじゃねぇか。
二人はそのまま、蕎麦を食べ、さらにはツユを全部飲み干した。
「「ぷはぁ～～～～♡　ご馳走様でした♡♡」」
「満足したか？」
「はい♡」
「超満足♡　でもまさか二人だけでこんないい事約束してたなんて思わなかった……」
「いや、冗談で言っただけだったんだけどな」
「え！？　冗談だったんですか！？　私はとっても嬉しかったのに

……」
「だからこうしてやってやっただろう？　みんなには内緒だからな」
「はい♡　ありがとうございました♡　無理なお願いを聞いてくれて♡」
「兄様、本当にありがとう♡　今度、兄様のお願い、いっぱい聞く♡」
「あぁ。ほら、歯磨いてもう寝るぞ。初詣に行くんだからな」
「「は～い♡」」
そうして俺達の、大晦日は終了した。

２０２４年１０月２７日からノクターン様で活動を開始しました、小鳥遊綾瀬です。この作品は僕の初めてのエロ作品です。
その作品が、ここまで皆様に読んで頂けるとは思ってもみませんでした。
僕の妄想を詰め込んだだけの作品なので、当初は趣味で書こうと、不定期で更新しようと考えていました。
ですが、皆様に沢山読んで頂けのたので、こうしてノクターン様での活動が主になり、沢山更新をさせて頂いております。
読んでくださっている読者の皆様、本当にありがとうございます！！！
感謝しかありません！
明日から２０２５年になります。２０２５年も沢山、更新させて頂きたいと思っておりますので、これからも、どうか、小鳥遊綾瀬をよろしくお願い致します！！！
活動報告で、２０２５年の抱負や目標を書かせて頂きたいと思っておりますので、チェックして頂けると幸いです！

大晦日特別編！　大晦日前にお風呂で煩悩祭り♡♡（後書き）

エピローグ

「はぁ～……」

赤と白のロングヘアの少女が、可愛らしい衣装に身を包んだまま、机に突っ伏していた。その手にはスマホが握られており、そこには一人の少年が立ちションしている姿が映っている。

「れっくんの立ちション、隠し撮り……♡　ああ～生で見たいなぁ～……♡」

少女は、少年の股間部分をそっとなぞり書き――、

「ここ、私の口で……」

「RIU（リュ）～？　そろそろ出番だよ～」

「は～い！　今行きま～す！」

少女はスマホをカバンにしまい――、

「行ってくるね、大好きなれっくん♡」

と言い残し、どこかに行ってしまった。

新年特別編！　明けまして、エッチしよう♡♡（前書き）

プロローグ

ん……？　なんだ……？

『……！』

瑠李（るい）が階段上に向かって何か叫んでる？

瑠李の隣で横たわってるの、俺か……？　階段上にいるのは……

駄目だ。白い靄（もや）がかかって誰か分かんねぇ。

って言うか、なんなんだ、これ……？

夢……にしては妙にリアルだが……。まさか、前みたいに予知夢的なもの、なのか……？

だとしたら……。

俺は色々考えたかったが、意識が覚醒してしまったので、その考えも、この夢の事も忘れてしまった。

新年特別編！　明けまして、エッチしよう♡♡

「ん……？　んん……？」
俺は、目を覚ました。と、なんか股間辺りから妙に気持ちいい感じがしてきた。
俺は布団を剥ぐ。すると――、
「義母さん……寝込みにくるのが好きだな……」
「んちゅぅ♡　んふふ♡　零ちゃん、おはよう♡」
「おはよう」
義母さんが、フェラをしていた。口の周りを唾液と我慢汁でヌルヌルにした状態で、挨拶をしてくる。マジでエロい。
「全く。何やってんだよ」
「ごめんねぇ？　零ちゃんを起こしに来たら、オチンポ、凄い事になってて、それを見たら私、我慢できなくなっちゃって♡　ついついフェラしちゃった♡　こう言うの、朝勃ちフェラって言うんだよね？　嫌いだったりする……？」
「いんや。嫌いな訳ないだろ。むしろ好きだ。男にとって朝勃ちは恥ずかしい事の一つだから、それを見て喜んでくれて、その上フェラしてくれるなんて、幸せ以外のなにものでもないよ」
「良かった～♡　零ちゃんに嫌がられたらどうしようって思ってたの。零ちゃんに嫌われたら私、生きていけないから」
「そんな大袈裟な」
「大袈裟じゃないよ。本当。私は命よりも零ちゃんが大切なの。そんな零ちゃんに嫌われたら、私……」
な、なんか結構本気っぽいな。
「分かった分かった。分かったから落ち着いてくれ。俺は義母さんを嫌ったりしないし、引いたりもしない。だから安心してくれ。俺は義母さんが大好きだから」

「っ～～～

「いいお♡　らひへ♡　はまんひないれ、わらひのおふひにいっっっっっっふぁい、らひへ♡♡♡　ぢゅぞぉ〝ぉ〝ぉ〝ぉ〝ぉ〝ぉ〝ぉ〝ぉ〝♡♡♡」
「ぐお……！」
義母さんが思い切り吸い付いてきた。さらに、頭を上下に激しく動かしてくる。
吸いと扱きのダブルパンチ。ヤバい！
「で、出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！！
「んっ！？　んぶっ！　んくっ！　んん……♡　んぷぅ……♡　んくんく……♡」
義母さんは、俺の精液を嬉しそうな顔で嚥下していく。精液を全て出させようと、飲みながら、竿を手で扱いてくる。そのせいで射精が全然止まらない。
「くっ！」
「んぶっ！？」
最後の射精をする時に、気持ちよすぎて腰がグンッ！　と浮いてしまった。
義母さんの口の中にチンコは入っているので、腰を浮かせてしまった際、チンコは義母さんの喉奥まで達してしまった。
それには流石に驚いたのか、義母さんもむせている。
「じゅぽんっ！　ごほごほ……！　ぐっ……！　がはがは……！」
「か、義母さん、大丈夫！？」
チンコを抜くと、義母さんが思い切りむせる。口と鼻から俺の精液を出しながら、何度もむせてしまう。これには流石に申し訳なさを覚えてしまう。
「だ、大丈夫よ……それより、ごめんね……」
「え？」
「せっかくの、零ちゃんの大事な精液、全部飲み干せなくて……」
「そ、そんなの気にしなくて大丈夫だよ。むしろ俺こそごめん。あ

そこで腰が浮くとは俺も思ってなくて……」
「零ちゃんは謝らくていいのよ。腰が浮いちゃうって事はそれだけ気持ち良くなってくれたって事だから。悪いのは私。零ちゃんの喉奥レイプに、耐えられなかった、私が悪いの。こんなに精液こぼしちゃって……みんなが知ったら私、怒られちゃうわ……」
「そ、そんな事……」
ない、と言いかけて止めた。義母さん含めて女子達は、俺に対しての忠誠心や奉仕欲が凄まじい。
精液一滴ですら、こぼさず飲み干すのが常識だと思っている。そんな女子達の常識だと、この状況は絶対にあってはならない事なんだ。
だから、義母さんもこんな悲しい表情を浮かべて、本当に申し訳なさそうにしている。
俺は、女子達の主だ。だったら、女子達の常識を受け入れ、主らしく振る舞うのが正解ではなかろうか？
「義母さん、俺は一回下に行くけど、俺が戻ってくるまでの間に、このこぼれた精液、全部綺麗にしといてよ。もちろん、舌、でね」
「っ♡　は、はい……♡　零ちゃん、いえ、ご主人様♡　私、精一杯お口で綺麗にさせて頂きますにゃん♡」
にゃ、にゃん？
「お前は猫か？」
「ご、ごめんなさい……こういうの、お嫌い、ですか……？」
その潤んだ瞳で、見上げてくるのは反則だろう。
「嫌いじゃない。二人っきりの時は語尾に『にゃん』をつけろ」
「はい、ですにゃん♡」
「じゃあ、俺は下に行ってくる」
「はいにゃん♡　あ、桃ちゃん達の格好見て、沢山興奮しちゃってくださいにゃんね♡」
「ん？」
俺は義母さんが何を言ってるのか分からなかったが、取りあえず

一階に降りる事にした。
チンコ丸出しのまま。

♡　♡　♡

「あ、お兄ちゃん、おはようございます！　そして」
『新年明けまして、おめでとうございます！　今年もよろしくお願いします！』
「お、おう……あけおめことよろ……」
正直、俺は挨拶どころじゃなかった。桃達の格好が気になってしょうがなかった。
「そ、その格好……」
「どう、でしょうか、先輩……この振り袖、似合ってますか……？」
「振り袖って本来、男の子が着る物だから、正直着てもいいのか迷ったんだけど、零ちゃんに喜んでもらえるかなって思って着てみたの♡」
お、男が着るのは袴では？　あ、この世界だと違うのか。
「兄さん、興奮してくれてる♡」
「え？」
「あ、本当だ〜！　お兄ちゃんのおちんちん、すっごく大きくなってるぅ〜♡」
あ！　俺、丸出しだった！　やべぇ……振り袖女子に興奮するなんて今まで一回もなかったんだけどな……なんでこいつらが振り袖着てると、こんなにエロいんだ……？
「今すぐここでご奉仕させてほしいんだけど、ごめんなさいお兄ちゃん……時間がなくて、すぐに出発しなくちゃいけないんです……」
あ、もうそんな時間か。
「大丈夫だよ。すでにさっき義母さんに抜いてもらってるから」
『っ！』
なんか目の色が変わったんですけど……。

「ママ、私達が着替えてる隙に……！」
「お母さん、後でお仕置き……！」
「お母さん……どんな罰を与えましょうか……？」
「（お母様だけズルいです……私だって先輩の朝勃ちおちんちん、舐めたかったです……！）」
なんか、全員が全員、義母さんに向けて恨み節を言ってるんですけど……。義母さん。どんまい。
「ちょっと待っててくれ。すぐに着替えてくるから」
「お兄ちゃんは急がなくて大丈夫ですよ～♡　ゆっくり着替えてください♡　私達女は、準備を早く済ませなくちゃいけないので、前もって着替えただけなので」
「あぁ」
俺は部屋に戻った。義母さんは、精液を舐め取りながらオナニーをしていた。
その為、全部の精液を舐め取れてなかった。
よし。後で桃達と一緒にお仕置きしよう。

♡　♡　♡

着替えを済ませた俺は、桃達と一緒に神社に向かっていた。
メンバーは俺、姉ちゃん、燐、桃、爆乳ショートちゃんだ。
義母さんは義叔母さんと予定があるらしく、そっちに向かった。
神社が見えてくると――、
「お～～～～～～い！」
「お」
神社の前に振り袖姿の、金髪女子、茶髪女子、眼鏡女子、副委員長、先生がいた。
「あれ？　瑠李はいないのか？」
「るいるいにも一応連絡はしたんですけど、『会うのは今じゃない』と断られまして。何かお二人の間であったと思ったので、無理には

誘いませんでした」
「そうか。ありがとうな」
「んっ♡　えへへ～♡」
俺は燐の頭を撫でてやる。燐は幸せそうに破顔させる。だが、周りの女子達の目は恐ろしい物になっていた。羨望と嫉妬かな？
「れいれい！　せ～の」
『新年明けまして、おめでとうございます！　今年もよろしくお願いします！』
「あぁ。あけおめのことよろだ」
俺、ちゃんと新年の挨拶してねぇな。ごめんなさい、神様。
『いいよ♪』
「ん？」
「お兄ちゃん？　どうしました？」
「いや。なんか今、声聞こえなかったか？」
「声？　賑わっているので、その声ではないでしょうか？」
「あ、あぁ……そう、だな……」
「ごめんなさい……！　お兄ちゃんのお役に立てず……！」
「いや気にするな。それよりみんな、よく似合ってるな。桃達も」
「本当！　良かった～♡　パパに無理言って貸してもらった甲斐があった～♡」
「れー君に褒められた……♡　ふふ♡　超、嬉しい♡」
「零様が、私に『似合ってる』と……♡　これは、結婚まで秒読み！」
「委員長にだけ言ったわけじゃないですからね？　ここにいるみんなに言ったんです。ふふ♡　零様のお褒めのお言葉、心とオマンコに染みますぅ♡」
「零様に褒めて頂けた……♡　こんなド変態教師さえも褒めてくださるなんて……♡」
みんながそれぞれ喜んでいる。褒めてよかった。ま、素直な思いを言っただけなんだけどな。

「さ、お参り行こうぜ」
『はい！』
すげぇ。返事、息ぴったりだ。

♥　♥　♥

【お参り・金髪女子の場合】
（今年は、れいれいのおしっこがたっくさん飲めますように……！
れいれいの奴隷と便器になれますように……！）

【お参り・茶髪女子の場合】
（れー君に、たっくさん虐めてもらえますように……！　乳首とクリを執拗に虐めてもらえますように……！　れー君のアナルを沢山舐められますように……！）

【お参り・眼鏡女子の場合】
（零様のお嫁さん！　零様のお嫁さん！　零様の専属精液奴隷になれますように……！　そして何より、零様のお嫁さん！　零様のお嫁さん！　零様の……）

【お参り・副委員長の場合】
（零様と相互オナニーが沢山できますように……！　零様のオナニーを独り占めできますように……！　零様にたっくさん、虐めてもらえますように……！　隣の人の願いはどうせ『お嫁さん』でしょうから、そっちは無視して構わないです）

【お参り・担任教師の場合】
（零様にもっと構ってもらえますように……！　放置プレイだけじゃなくて、もっともっと私の体を使ってもらえますように……！
資金はあるので、いつ子供ができても大丈夫ですし、零様を養う事

だって可能なので、どうか……！）

【お参り・華の場合】
（零ちゃんと、もっと濃密な関係になれますように。お外で零ちゃんともっともっとエッチできますように。零ちゃんにとって必要な存在になれますように……！）

【お参り・燐の場合】
（お兄ちゃんのお嫁さん！　お兄ちゃんのお嫁さん！　お兄ちゃんのお嫁さんになれますように！　あと、お兄ちゃんの性処理奴隷として、たっくさん使ってもらえますように！　お兄ちゃんが、私のおっぱいを気に入ってくれますように！　大好き！　お兄ちゃん！）

【お参り・桃の場合】
（兄様の性奴隷便器として、もっともっと使ってもらえますように……もっともっと虐めてもらえますように……スパンキングや拘束などをしてもらえますように……！）

【お参り・爆乳ショートちゃんの場合】
（私のお願いは、たった一つです。先輩が、幸せで楽しく毎日を過ごせますように……！　先輩の幸せが、私の幸せなので……！）
（本当はエッチなお願いしたかったけど、それは私の努力の問題だから……！　もっと頑張らないと！）

♡　♡　♡

【お参り・零の場合】
（みんなが、健康で楽しく過ごせますように……できれば、もっと沢山エッチがしたいです……）

お参りを終えた俺達は、甘酒を購入。人がいない縁側で飲むことに。
『いただきま～す』
さて、俺も頂くか。
「だっ！？」
飲もうとしたら、後ろから誰かにぶつかられ、紙コップを落としてしまった。
「ちょ、もったいない！　って燐？　どうした？」
「んへへ～♡　おにいは～ん♡　ひっく♡」
ぶつかって来たのは燐だった。しかも俺の腰に抱きついてきている。
「って、おいおい、これどういう事だ？」
縁側を見ると、みんな顔を赤くして、焦点が合っていない。
「こ、これ甘酒だよな？　飲んでも酔わないはずなんだけど……」
と、遠くから声が聞こえてきた。
「ちょっと！　これアルコール入ってるじゃん！　子供も飲むものなんだよ！？　何してんの！？」
「ご、ごめんなさい……！？　間違えたみたいで……！？」
と。遠くから、夫婦の会話が聞こえてきた。どうやら奥さんが間違えてアルコールを入れてしまったらしく、旦那さんが激怒していた。
どうやら、この世界では奥さんが尻に敷かれてるらしい。
「って事は、みんな酔っ払っちまったて事か！？」
『ひっく……♡』
どうすんだよ、これ……。と、俺は戸惑っていると――、
「あ～♡　れいれいら～♡　んふふ～♡」
金髪女子が抱きついてきた。
「れろぉ♡」
頬を舐めてくる。
「んふ～♡　れいれいの味、おいひ～♡」

「おにいひゃん、わらひ、あふいれふ～」
そう言って燐は、振り袖の胸元をはだけさせる。
た、谷間が！　さらには――、
『あちゅいの～♡』
と言って、縁側の女子達が、振り袖をどんどんはだけさせていく。
「これは……新年一発目のハーレム展開！」
俺はもう、本能のままに行動すると決めた。だから、ここで我慢したりなんて、絶対にしない！
まずは……！

♡　♡　♡

俺は、神社の近くにある森林の中に来ていた。眼鏡女子と一緒に。
「れいはま～？　どこにいくれふか～？」
「ここらでいいか。しゃがめ」
「はい～♡　んぶごぉ　！？」
俺は、しゃがみ込んだ眼鏡女子の口に、いきなりチンコをぶっ込んだ。
「ぐんぶぅ　！　ぐぶぶぶぅ　！　ぐもぉ　！　ぶもぉ　！」
俺は、眼鏡女子の口をマンコかの如く、犯していく。喉奥まで達していて、のどちんこが亀頭に当たってるのが分かる。
苦しそうな表情を浮かべているが、決して止めない。
「んぶぅ　！　んぶぅ　！　ぐぶぅ　！　じゅぶぅ　！　ぐぶぅ　！」
こいつ……イラマされながらオナってやがる。つーかパンツ穿いてねぇんだけど！
オナってる余裕があるって事か……だったら！
「んぶぅぅぅぅ　！？　んぶぅ　！？　ぐぷぅ　！？」
俺は、眼鏡女子の頭を力強く掴み、俺の腰の動きに合わせて、動かす。

すると、さっきよりも深く、チンコが入っていく。
これには流石に驚いたのか、眼鏡女子はオナニーを中断し、俺の腰に手を回した。
「んびゅぶっ〝！？　ぐびゅっ〝！？　じゅびゅっ〝！？　ぐびょっ〝！？　ぐびょっ〝！？」
「くっ……出る！」
ドビュ！　ビュルルルルルルル！
「んぶぅ〝！？　んぶぅ〝ぅ〝ぅ〝ぅ〝……！　ごきゅごきゅ……♡」
喉奥射精……めっちゃ気持ちいい……！
「ギュポンッ♡　んくんくんく……♡」
眼鏡女子は、俺の精液をこぼさないように、両手で口を押さえている。
「ほら」
「んっ！？」
俺はあえてその手をどかす。すると、口から大量の精液がこぼれ出てしまった。
「あ〜あ。こぼしちゃったよ。俺は悲しいな……」
「ご、ご、ごめんらひゃいいぃ……！？」
大号泣で謝罪してくる眼鏡女子。ちょっと乱暴だけど。
「おい。俺の精液は全部飲み干せや。今回は許してやるけど、次したら、許さねぇからな？」
顎を掴み、乱暴に持ち上げる。そして、睨みつけながら暴言を吐く。
「は、はいぃ……！」
さてさて、お次は……。

♡　♡　♡

「んきゃっ！」

俺は、副委員長をさっきみんなで集まっていた縁側の近くにある木に、背中をくっつけさせる。
「りぇ、りぇいしゃまぁ～♡　らにふるんれふか～♡」
「決まってんだろ？　お前を犯すんだよ」
「ここれ～？　お外れふよ～♡」
「だからいいだんろ？」
俺は振り袖を捲る。こいつもパンツ穿いてない……。愛液が太ももまで垂れてやがる……！
「ふん！」
我慢ができなくなった俺は、副委員長の左足（向き合っているので、俺から見たら右側の足）を持ち上げ、膝裏を支える。そして、そのままマンコの膣（なか）にチンコをぶっ込んだ。
「んひゃあああああああああ♡♡♡♡♡　りぇいしゃまのおひんほ、ひたぁぁぁぁぁ♡♡♡」
こいつ、めっちゃ酒が回ってないか？　呂律がめちゃくちゃじゃねぇか。
「んひゅひゅ～♡　りぇいしゃまのぉ～♡　おひんほ～♡　らいふひれふ～～～～～♡♡♡」
副委員長は、俺に抱きついてきて、そのままキスをしてくる。
「んちゅぅ……♡　れるぅ……♡　んむぅ♡　ぢゅる♡　れろぉ♡」
副委員長のキスはめちゃくちゃ激しい。俺の舌を咥えたり舐めたりして、俺の唾液を吸っては飲んでいく。
「んふぅ……♡　んふぅ……♡　んきゅぅぅぅ♡」
キスをした状態で突いているので、副委員長は鼻息荒く喘ぎ声を漏らす。
その喘ぎが俺の顔、口に広がってくる感じがして、堪らない！
「んっ♡　んっ♡　んっ♡　んぱぁ！　はっ♡　あっ♡　あぁぁぁぁぁん♡　はぁぁぁんっっ♡♡♡」
気持ち良くなったのか、口を離し、大きく喘ぐ副委員長。
「りゃ、りゃめりぇふぅぅ♡　わらひ、いっひゃいまふぅぅぅ♡♡

♡」
「いいぞ。イケ！　俺もイキそうだ。中に出してやるから、中出しされてイケ！」
「ひゃ、、ひゃいいいぃ♡♡♡」
「くっ……出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルル！！
「んひゃあああああああああああああああああ！！！　にゃ、にゃからひしゃれへ、わらひ、イッひゃうぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
俺は副委員長にたっぷり中出ししてやった。運がよければ、孕んだだろうな。まぁ、まだ孕まずにいてほしいが。
「はぁはぁ……」
チンコを引き抜くと、副委員長は、マンコから精液を逆流させながら、力なくその場に座り込んでしまった。
さ～て、お次は……。

♡　♡　♡

「んむぅ……♡　ちゅりゅぅ……♡」
俺は、女子トイレの個室で茶髪女子とキスをしていた。
「んちゅ♡　ぢゅむぅ♡　れるぅ♡　んっ♡」
俺は振り袖をはだけさせ、股間に手を伸ばす。こいつもノーパンか。
マンコに触れると、そこはすでに大洪水だった。
「スゲェ事になってんぞ？」
「は、恥ずかしい……♡　でも～れー君に触ってほしかったから、嬉しい♡」
こいつ、可愛いな。
「ほら、俺のも触ってくれよ」
「うん……♡　うわぁ……♡　れー君のおちんちん硬ぁい♡　大っきい♡　精液こぼれてる……誰かとしたの……？　んむぅ！？」

俺は無理矢理キスをした。
「ぷはぁ……♡　れ、れー君……？」
「お前ごときが、そんな事を気にするな。もう、シてやんねぇぞ？」
「っ！？　ご、ごめんなしゃい……！？　わ、私、なんでもしましゅから、許してくらしゃい……！？　はれ？　なんは、うまふひゃへれなふなっへひは……？」
酒が回ってきたんだな。呂律が回らない女子って、なんでこんなに可愛いんだろうな！
「んんっ……♡」
「ほら、触り合うぞ」
「ひゃ、ひゃいいぃ♡♡♡」
俺達は、マンコとチンコを互いに刺激し合う。
「んっ……♡　はっ……♡　あぁあん♡　んふぅ……♡　んっ♡　んはぁ……♡」
俺が、クリを弄ったり、膣（なか）を弄ったり売る度に、可愛らしい声を漏らす茶髪女子。それが楽しくてついつい、もっと弄りたくなってしまう。
「んひゅぅ……♡　んひゃああ♡　あああああ♡　んむぅ♡」
声が大きすぎるのは若干問題だ。ここはトイレだからな。
俺はキスをして茶髪女子の喘ぎを抑える。
「んふぅ……♡　んむぅ……♡　れるぅ……♡　んっ♡　んふぁぁぁぁ♡」
くっ……こいつ、酔ってるくせに手コキは的確なんだよな……もう出そうだ……。
「んむぅぅぅぅぅ！！」
茶髪女子もイキそうか。だったら！
「んんっっ！？　んふぅ～！」
俺はマンコの刺激を強めた。すると、茶髪女子もチンコを扱くスピードを速めた。
そして――、

「んひゅうううううううううう♡♡♡」
ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！！
俺と茶髪女子は同時にイッた。
俺の精液は、茶髪女子の腰辺りにかかり、そのままクリ、太もも、ふくらはぎ、足と伝って行った。
「はぁはぁ……」
茶髪女子は、便座に力なく座り込んでしまった。
「ごめん……」
ビュル！　ビュルル！
俺は、射精しきれてなかったので、座り込んでいる茶髪女子に向けて射精した。
振り袖にかかってしまった。これは流石に怒られるかな……？
「後で弁償する」
さて、お次は……。

♡　♡　♡

「零ちゃ～ん……零ちゃ～ん……零ちゃ～ん……！！」
「はいはい。ここにいるよ～」
「あ♡　零ちゃ～ん♡　んふふ♡　ぎゅ～～～♡」
俺達が集まっていた縁側の中、姉ちゃんが俺を探し回っていたので、すぐさま近寄った。すると、嬉しそうに抱きついてきた。
振り袖がはだけて、おっぱいがほとんど出てるのマジでエロい！
「ん～♡　零ちゃん、おちんちんおっきね～♡　おねえしゃんが、ぱいぱいしてあねるね～♡」
姉ちゃんも呂律がおかしくなってる。でも、なんかめっちゃ可愛い。
「……おちんちん、らひて！」
「はい、どうぞ」
「んへへ～♡　らいふひな～おちんちん♡」

姉ちゃんは、俺のズボンが脱がせられなかったらしく、まるで駄々をこねる子供のようにプンス！　と頬を膨らませて、俺に出せと言ってきた。普段なら、俺に対してなんだその口の利き方は？　と言うが、今日のはめちゃくちゃ可愛かったので、全然ありだ。

しかも、チンコを出してやると、姉ちゃんは嬉しそうに頬ずりをしてきた。

「零ちゃんのおちんちん～、おねえしゃんのぱいぱいで、パンパンしてあねるね～♡」

そう言って姉ちゃんは、おっぱいの谷間に俺のチンコを挟んだ。

俺は立っている状態で、姉ちゃんが膝立ちの状態だ。

「いっぱい、ひもひよふ、なてね～♡」

なんで姉ちゃん、カタコトみたいに喋るんだ……？　酔い方って、本当に人それぞれなんだな。

「んっ……れろぉ……♡」

姉ちゃんが唾液をチンコに垂らしてくる。

「しゅべり、よくにゃりました♡」

敬礼をする姉ちゃん。マジで可愛すぎだろ！

「ぱいぱいで～パンパン～♡　パンパン～♡」

姉ちゃんがおっぱいを上下に揺らして、チンコを扱いてくる。おっぱいが大きく、谷間が深いので、パンパンと、まるでマンコに挿ぃれてるかのような錯覚に陥る。

「姉ちゃんのおっぱい、マンコみたいだな」

「んふぅ～♡　オマンコ？　おっぱいマンコ～♡　おっぱいマンコ♡　おっぱいマンコ♡　パンパ～ン♡」

くっ……激しくなってきた。

「んぢゅるぅ♡」

しかも、パイズリしながら亀頭を舐めてきた。パイズリフェラだ……。

ここにきてこれをされると、マジでヤバい！

「姉ちゃん、俺……！」

「らひへ～♡　おちんちんから～♡　お精子ぃ～♡　ビュルビュル～って～♡　らひちゃえ～～～♡」
「くっ……！　出る！」
ビュルルルルルルルルルルルルルルルル！！！
「んひゃわぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡　零ちゃんのおしぇいしいっふぁ～い♡　うれちい～～～♡♡♡」
俺の精液は、全部姉ちゃんの顔をおっぱいにかかった。
「んちゅ……♡おねえしゃん、ひあわへ～♡」
姉ちゃんは力尽きたのか、そのまま横になって、眠りに就いてしまった。
ゆっくり寝てて。さてさて、お次は……。

♡　♡　♡

「おにいちゃ～ん……！　うわぁぁぁぁん！」
「燐、どうした？　兄ちゃんはここにいるぞ？」
「おにいちゃ～ん！　あああああああんっ！」
神社の真裏にいた燐は、何故か泣き叫んでいた。まるで迷子の子供のように。
俺が近くに行き、声をかけると、泣き叫びながら抱きついてきた。
「どうしたんだ？」
「お兄ちゃんの、おちんちんが欲しいのぉぉ♡♡」
それで泣いてたのか。
「いいぞ。で？　どうして欲しい？」
「う、後ろから、犯してほしいの♡」
「分かった。じゃあ、立って、こっちにケツ向けろ」
「は～い♡」
燐は比較的マシなほうで、呂律もしっかりしてて、しっかりと動けている。
燐は、近くにあった木に寄りかかり、振り袖を捲ってケツをこっ

ちに突き出してくる。
こいつもノーパン……もしかして全員、ノーパンなのか？　まぁいいや。
「行くぞ？」
「来てぇ……！」
「泣くな泣くな。今挿(い)れてやるから」
こいつ、もしかして一番やっかいなタイプか？
俺はマンコにぶち込んだ。
「んひゃあああああああああああああああ！！！　おちんちん、来たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
相変わらず締め付けがすごい。
「そら！」
「んひゃあああああ！　んおぉぉぉ！　ああああああ！　んあああああ！　はあああああああ！」
マンコをこれでもかってくらいに乱暴に犯しまくる。燐はこういうのが好きだからな。
「あああああんっっ！　おおおおおおおお！　んひゃあああああ！」
にしても声、デケェな！　こいつやっぱり一番酔うと面倒くさいやつだ！
「んひゃああ！　ああああああイク！　イッちゃうのぉぉぉぉ！！！」
「俺も、出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！！
「ああああああああああああああああああ！！！　中出しされながら、イクぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」
ぷしゅあああああああああああ♡♡♡
おぉ～。潮吹き。
「はぁはぁ……」
燐はそのままその場にへたり込み、寝息を立ててしまった。

マンコから精液が逆流してんのがマジでエロい。
ま、後で迎えに来るわ。さてさて、お次は……。

♡　♡　♡

ペチペチ。ペチペチ。ペチペチ。
「んんっ……♡　れ、零様ぁ……♡　私切ないですぅ……♡」
「奴隷が勝手に口を開くな」
「は、はいぃ……♡」
俺は我慢汁と残り精液でヌルヌルの勃起チンコを、先生の頬に打ち付けていた。ベニスビンタだ。
両方の頬を満遍なくビンタしていく。
「ふっ。両方の頬が俺の液でヌルヌルになってテカテカになってんな。嫌じゃねぇのか？」
「……」
「おい、聞いてんだ、答えろ」
「は、はいぃ♡」
俺は先生の正座してる太ももを踏みつけ、答えるように言う。
「い、嫌なんかじゃないですぅ♡　れ、零様の全ての液体は、私にとってご褒美なんですぅ♡　も、もっと汚してくださいぃ♡」
「ふっ。それでこそ、俺の奴隷だ。便器になる素質もあるかもな」
「べ、便器……？」
「あぁ。俺のおしっこを飲んだりするんだ。誰かは言えないが、すでに二人いるぞ？　どうする？」
「な、なりたいですっ！！」
「本当か？」
「はいっ！」
「なら、今後は俺の性奴隷便器になりやがれ」
「はいぃぃぃ♡」
「じゃあ、立て」

「は、はい……♡　あっ……」
先生は、足が痺れていたのか横に倒れてしまった。
「おいおい」
「ご、ごめんなさい……！？」
先生はなんとか立ち上がろうとするが、俺が足を押さえていたのもあって、痺れがすごいのか全然立てない。
だったら――、
「よいしょ」
俺は四つん這いになってる先生の振り袖を捲り上げる。お～ノーパン。マンコとアナルが丸見えだ。
「れ、零様……？　んほぉぉぉぉぉ！！！」
俺は、先生にチンコをぶち込んだ。
「んひゃあああああ！　んきゅぅぅぅ！！」
俺は足が痺れて動けない先生を無遠慮に犯していく。まるで、レイプしてるみたいで、めちゃくちゃ興奮する。
「んぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　ぉ　！！！」
さて、犯すのはこの辺にして……。
「こっち向け」
「あひゃんっ！？」
俺は、足が痛くて動けない先生を、乱暴に起き上がらせる。足が痛いので先生は、引きつった顔をしている。
そんな先生に、俺は遠慮なく――、
「んぶぶぶぅっ！？」
先生の口にチンコをぶち込んだ。
「んぶっ！　ぐぷっ！　じゅぽっ！　じゅぼぼぉ！」
イラマってマジで最高だ。
「ぐぼぼぉ！　じゅぼぼぉ！　じゅぶぶぅぅ！　ぎゅぶぼぉぉ！！」
あ～イキそう。
「んぶぶぅ！？」
俺は先生の口からチンコを引き抜く。そして――、

「出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！！！
「んっ！？　んんっ……♡♡♡」
俺は先生の顔に射精した。顔射だ。先生の顔いっぱいに俺の精液が吐き出されていく。
精液でドロドロになっていく先生の顔。
「ふぅ……洗ってもいいけど、俺がここからいなくなってからな」
「は、はいぃ……♡」
先生は目を閉じたまま、嬉しそうに返事をした。口を開けた瞬間に精液が口に入った。
さてさて、最後は……。

♡　♡　♡

「えへへ～♡　しぇんぱ～い♡」
「にいしゃま～♡♡」
「れいれい～♡」
三人の女子が、俺に抱きついてくる。
「おうおう。待たせたな。そら、お前らに褒美をやる」
「「「ご褒美……？」」」
小首を傾げる仕草、可愛すぎるだろ。
「あぁ。俺のおしっこ飲みたくないか？」
「「「飲みたいれす！！！」」」
おう。即答。
「じゃあ、そこに跪け」
「「「ひゃい……♡」」」
三人の振り袖はだけ女子が、俺の股間の前に跪く。
そして、口を開く。
ずっとセックスしてて、尿意が溜まってる。多分めちゃくちゃ出ると思う。

「出すぞ？」
「「「ひゃい……♡」」」
「うっ……」
ぷしゃあああああああああ！！！
「「「んっ……♡」」」
俺のおしっこを嬉しそうに、美味しそうに飲んでいく三人。しかも、こぼれたおしっこは振り袖にかかりどんどん汚していく。
あれ？　そう言えば……。
「その振り袖、借りたって言ってなかったか？」
「ば、ばびぼぼうぶべぶ……♡　ぎびびばいでぶばざび……♡」
おしっこを飲んでいるため、上手く喋れない金髪女子は、まるでうがいするかのごとく、がらがらさせながら答えてくる。
「そうか。じゃあ、遠慮なく」
俺は金髪女子におしっこをぶっかけてやる。振り袖をビチャビチャにしてやる。
「しぇんぱ～い！　ズルいです～！」
「にいしゃま～！　わらひにも～～！」
「んん～～～♡♡　ひあわへ～～～♡♡♡」
桃と爆乳ショートちゃんは嫉妬で金髪女子に近づいて自分でかかりにくる。そして、金髪女子は、俺のおしっこを浴びながら幸せそうな顔をしている。
まるで、シャワーを浴びてるかのよう。
「ほら、もっと出るぞ！　浴びたいやつは前に来い！」
「「「は～～～い♡♡♡」」」
三人の女子が、俺のおしっこを巡って前に来る。
全員の顔に俺のおしっこがビシャビシャかかる。
あ～最高～！

♡　♡　♡

全員とエロい事をした後、縁側に全員が集合していた。
『……』
全員が、俯いていた。どうしたんだ？
「みんな？　どうしたんだ？」
「で、できれば、酔っ払っていた事を忘れてもらいたいです……」
副委員長が皆を代表して言ってくる。
「嫌に決まってるじゃん。みんな可愛かったんだから。忘れる訳ねぇだろ？　ほら、いつまでもそうしてないで、帰るぞ」
『っ！　は、はい♡』
女子達が全員、俺についてくる。
俺達の新年は、最高のスタートだ！

ちなみに、後で金髪女子に聞いた話だが、俺のおしっこでビチョビチョになった振り袖は、父親には返さず、自分のモノにしたらしい。
父親には、汚してしまったから、新しいのを買うと言ったらしい。
金髪女子からすると、あの振り袖は宝物になったんだそうだ。

新年特別編！　明けまして、エッチしよう♡♡（後書き）

エピローグ

「んっ……♡　はっ……♡　れ、れっくん……♡」

サファイアとエメラルドの髪色をした少女が、部屋のベッドでオナニーをしている。

「んんっ！　イクっ！　はぁはぁ……」

少女は天井を見上げる。そこにあったのは――、

「いつか必ず、れっくんは私だけのモノに……♡」

零の巨大な写真が貼ってあった。さらに、部屋には無数の零の写真が、張りまくってあった。

「んふふ♡」

この少女は一体、何者なのだろうか？

第２９話　我慢の限界を迎えた瑠李が……♡♡（前書き）

プロローグ

「はぁはぁ……」

私は今、部屋にある姿見の前に立っている。

「こ、これを使って、れ、零君に……」

私の手には、首輪が。

「はぁ……はぁ……」

私はその首輪を、自分の首にはめた。

「はぁ……はぁ……！　す、すごい……これが、私……？　服、邪魔……」

私は着ていた服を全部脱ぐ。全裸になった私は、再び姿見を見る。

「はぁ……はぁ……♡　こ、これ、興奮しちゃう……♡」

もう、オマンコがびちょびちょ……♡

「れ、零君、興奮してくれるかな……♡」

私は、零君との初詣に行かなかった。ううん。行けなかった。だって……。

「私は、零君に許してもらわなきゃいけないから……♡」

第２９話　我慢の限界を迎えた瑠李が……♡♡

「ふわぁ～……」
俺が登校中に、大あくびをしていると――、
「れいれい、眠そうだね？」
金髪女子が、ひょこっと顔を出してきた。その地草がめちゃくちゃ可愛かった。あと、おっぱいがぷるんって揺れてるのがめちゃくちゃエロい。
「あぁ。昨日、好きなアニメの一気見しちゃってさ。寝不足なんだよな～。その後にオナったから、余計眠い」
「あはは♪　れいれい可愛い～♡　それに、オナニーなんてしないで、お家にいる性奴隷達を使っちゃえばよかったのに」
「まぁ、時間が遅かったからな」
「私だったら～、何時でも大丈夫だよ～？　寝てる所を、襲ってくれてもいいし♡」
そう言いながら金髪女子は、自分の体をいやらしく触っていく。おっぱいを軽く揉み、持ち上げた後、スカートを捲ってパンツを露わにする。そして、パンツの上からマンスジを撫でていく。
「まぁ、それも考えたんだけどさ。流石にな」
「本当、れいれいは優しいね♡　そゆとこ、だ～い好き♡」
金髪女子は腕に抱きついてくる。谷間に俺の腕が挟まれる。最高だ。
「あんがと。お？」
「ん？」
俺と金髪女子が下駄箱に行くと、俺の上履きの上に、手紙が置いてあった。
今どき古典的なやり方だなと思ったけど、俺は結構手紙が好きだったりする。

手紙だと、送る相手の事を考えて書くから、その時間、自分の事を考えてくれてるんだと思ってすごく嬉しくなる。
さてさて、誰から……。
「誰から？」
この字体は……。
「瑠李（るい）か」
「どうしたんだろね、こんな手紙でなんて」
「さぁな。ま、取りあえずプールに行ってみるわ。悪ぃけど……」
「先生への説明なら任せといて。れいれいは、早く行ってあげて」
「サンキュー。今度お礼に俺のチンコ独り占めさせてやるからな」
「本当！　やった～！　ザーメンとおしっこ、いっぱいちょうだいね♡」
「あぁ」
俺はプールへと向かった。

♡　♡　♡

来たのはいいものの、更衣室にもいないし、プールサイドにもいない……どこにいるんだ？　瑠李の奴……。
プールサイドで少し歩いていると――、
「れ、零君……！」
「お、瑠李。どこにいたんだよお前。人を呼び出しておいて」
「ご、ごめんなさい……本当に来てくれるのか不安で、隠れて見てたの……」
「ったく。お前に呼ばれて来ない訳ねぇだろ？」
「え……？　ほ、本当……？」
「あぁ。俺もちょうどお前に話があったし」
「れ、零君の話聞く前に、先に私がしてもいい？」
「あぁ。呼び出した用件を早く知りたい。手紙には、プールに来てください、としか書いてなかったからな」

「あ、あのね……わ、私、この前、零君の精液ちゃんと全部飲めなくて、お、怒らせっちゃたじゃない……？」
「あぁ、そうだな」
実際はそんな怒ってないんだけど。
「だ、だからね、私……どうやったら零君に許してもらえるのか、どうやったら零君に怒られないか、ずっと考えてたの……！」
なんか、ごめん。ここまで悩ませるとは思ってなかった。
「それでね。答えが見つかったの」
「答え……？」
「うん……。私が、どんな状況でも零君の精液、しっかり飲めればいいんだって。どんなに苦しくても、死んでも飲み干せばいいんだって」
「い、いや、死んだら駄目だろ……」
「ううん。いいの。私は、零君が命だから。零君さえいれば、他に何もいらないの。ママに言ったら、零君を怒らせた大馬鹿者って言われて、ビンタされて、数日間ご飯食べさせてもらえなかったんだ」
おいおい……おばさん、それはやり過ぎだって……。ていうか、俺達がそういう事してるって、報告しとんのかい！
「だからね。私は零君以外、何もいらないの。ママに怒られた時、零君に対する想いが足りなかったなって気付かされた。だから、私、決めたの」
「な、何を……？」
「わ、私……」
瑠李が制服を脱いで行く。なぜ急に全裸とも思った。それに、全裸にマフラーって。エロすぎだろ。
瑠李は、最後のマフラーも取る。と、その首にあったのは――、
「く、首輪……？」
犬とかが首に着ける首輪だった。前の部分にリードが付けられるような部分もある。
「る、瑠李、お前……」

「私を、零君のペットにしてくださいっ……！」
俺は耳を疑った。姉ちゃんに告白された時や、桃や爆乳ショートちゃんに性奴隷便器になりたいと言われた時以上に、俺はフリーズしてしまった。
ぺ、ペットって言ったか？　る、瑠李が、俺のペットに……？
俺は、想像をしてしまった。
外で全裸でリードに繋がれて四つん這いで歩く瑠李。
外で全裸でリードに繋がれて四つん這いでおしっこをする瑠李。
家で四つん這いのままご飯を食べる瑠李。
躾けと称してケツや体を叩かれる瑠李。
やべ……勃ってきた……。
「あ、零君……」
瑠李は、俺の勃起に気づいたらしい。
「本当に、俺のペットになりたいのか？」
「う、うん！」
「『うん』？」
「あ……！　は、はい……！」
「ペットなら、飼い主の言う事は絶対で、何も逆らえず、どんな事をされても受け入れるしかないんだぞ？　それでもいいのか？」
「は、はい……！　私、零君……主様に何されても嬉しいので……！　たっくさん躾(いじめて)ほしいです……！」
「そうか……」
これは……奴隷ともまた違う、新たな楽しみが増えそうだ……！
「だったら、こっちに来い」
「はい……！」
「おい！　なに二足歩行で来てんだ？　ペットなら基本は四足歩行だろうがぁ！」
「ご、ごめんなさい……！？」
瑠李は、慌てて四つん這いになり、そのまま俺のところまで向かってくる。

でっかい胸が、動く度に上下左右に揺れて、でかいケツもフリフリと揺れる。あぁ～エロい……！

俺の所に到着した瑠李。

「遅いんだよ、もっと早くこい、この雌豚がぁ！」

パチィィィィィィィィンッッッ！！！

「んきゅうううううううううう！？」

俺は、瑠李のケツを思い切り引っ叩いた。

たった一回叩いただけなのに、瑠李のケツは真っ赤になっていた。

「い、いだい……」

「あぁ？　なんか言ったか？　ペットは人間の言葉を喋れねぇはずだ。『ワン』か『ブヒ』のどっちかで喋れ。お前は雌豚だから『ブヒ』だな。ほら、鳴け！　鳴け！　鳴け！」

俺は、自分でも引くくらい、瑠李のケツを叩きまくる。大事な幼馴染みにこんな事をしちゃいけないのは分かってる。だが、止まらない、いや、止まれない。俺の中の「何か」が弾け飛んだようだ。

「んん～～～～！！！　ぶ……ブヒいいいぃ♡♡」

「いいぞ！　もっとだ！　もっと鳴けぇ！」

パチィィィンッッ！　パチィィィンッッ！　パチィィィンッッ！

パチィィィンッッ！

「ぶ、ブヒぃぃ！？　ブヒぃ！　ブヒいいいいいいいい！！！」

瑠李は、女の子が出しちゃいけない声を出しながら俺の躾（スパンキング）を受けていく。

「おい、そのままでいろよ」

「ぶ、ブヒ……？」

俺は、叩くのを一旦止め、四つん這い（土下座の姿勢）になっている瑠李の背後に回る。そして――、

「よいしょ！」

「んひゅあああああああああああ！！！」

マンコを突き出しているので、チンコがめちゃくちゃ挿（い）れやすかった。

「ほら！　なに人様の言葉で鳴いてんだ！　豚は豚らしく、ブヒィだろぉ！」
「ぶ、ブヒぃぃぃぃぃぃぃ！！！」
俺はケツを叩きながら、、腰を打ち付けていく。
今思い出したけど、首輪を桃がネットで買ったとかなんとか言ってたな。これ、桃が見たら嫉妬すんだろうな……。
まぁ、嫉妬は最大のスパイスだからな。
「ブヒぃぃぃぃぃぃ！　ブヒュ……！　ブヒぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」
俺の躾（スパンキング）と腰の打ち付けに、感じまくってる瑠李は、全身をビクビクと震わせている。
「絶対に俺より先にイクなよ？」
「え、え……？」
「ペットの分際で、飼い主より先にイクなんてふざけた事、許す訳ねぇだろ？」
「そ、そんな……」
「ブヒって鳴けって何回言ったら分かるこの無能がぁ！」
「ぶ、ブヒぃぃぃぃぃぃ！？」
俺は今までで一番強くケツを叩いた。すると――、
ぷしゅぅぅぅぅぅ……♡
「あん？　テメェ、イキやがったな？」
「ぶ、ブヒぃぃ！？」
必死に首を振って否定する瑠李。
「誤魔化そうったってそうはいかねぇよ。潮吹いて、締まりがキツくなってんだから、イッたに決まってんだろ？　なぁ、正直に言え。イッたよな？　なぁ、なぁ、なぁ！」
俺は、ズン！　ズン！　ズン！　と、三回強く腰を打ち付ける。
その度に膣（なか）が震え収縮し、締め付けが強くなる。
「ぶ、ブヒィ！」
「なに言ってるか分かんねぇよ！」

俺は超理不尽な理由で、ケツを叩き続け、腰を打ち付け続ける。
「んブヒいいいいいいいいいいいいいい！！！」
「くっ……もう出すぞ！」
俺はチンコを引き抜き、瑠李を仰向けにさせる。そして、瑠李の口の中に強制的にチンコをねじ込む。
「んぶぶぅ〜〜〜

「れ、零くぅ～ん……！」
瑠李は泣き叫びながら俺を抱きしめてくる。
「俺の話はな、もうお前を許してやろうと思って。だから、これからは俺の幼馴染みとして、そして、ペットしてよろしくな。乱暴しちゃうと思うけど、俺を嫌いにならないでくれ」
「あ、ありがとうぉぉぉぉ……！　き、嫌いになんてならないよぉぉぉぉ……！　もっと乱暴にして大丈夫だから、これからずっとお側に置いてくださいぃぃぃ……！」
「あぁ。もちろんだ」
「うわぁぁぁぁぁぁん……！」
この後、瑠李は俺ん家に住む事になった。もちろん、ペットとして。
桃がめちゃくちゃ嫉妬してたのは、言わずもがなだ。

第２９話　我慢の限界を迎えた瑠李が……♡♡（後書き）

次回予告！

「はぁはぁ……！　せ、先輩……！」
「お、おう……！？」

女子トイレで待ち伏せされる零。

「あの子がいいんだから、私だっていいですよね……？」
「あ、あぁ……」

ドＳになった零に、久しぶりの……？

「私、もう、抑えられないです……！」

逆レイプ！

次回
『爆乳ミディアムヘアちゃんから……♡♡』
お楽しみに！

第30話　爆乳ミディアムヘアちゃんから……♡♡（前書き）

プロローグ
ピピピ

「おっは～れいれい！　これ、ご飯ね～」
「ありがとう」
「うん！」
瑠李はペットとして、白下家に受け入れられた。
姉ちゃん、燐、桃、義母さん、爆乳ショートちゃんは、瑠李に対して、今までの接し方ではなく、ペットとして接するようになった。
燐が出した朝ごはんは、ペット用の容器に、ご飯とおかずが入っている。
それを燐は、床に置く。瑠李はそれをさも当然かのように、四つん這いになり、手を使わずに食べていく。
「みんなの適応能力が凄すぎる……」
「零ちゃん？　どうしたの？　朝ごはんできたよ？」
「あ、あぁ……」
姉ちゃんが裸エプロンで俺に声をかけてくる。俺は席に着く。
俺の隣には燐。そして、中間に義母さんと爆乳ショートちゃん。
そして、向かいに姉ちゃんと桃。床には瑠李。
こう見ると、本当に瑠李がペットになったようだ。
朝食を終えた俺達。
「じゃあ、義母さん、行ってきます」
『行ってきます』
「は～い。行ってらっしゃい」
俺達は学校へ向かった。
姉ちゃん、燐、桃とは別れ、俺と瑠李、爆乳ショートちゃんの三人で歩く。
のはいいんだが――、
「なんでお前、服着ないの？」
「え？　だってペットって基本服着ないでしょ？」
そう。瑠李は外でも首輪で全裸なのだ。
「いやいや、パンツとスカートくらい穿けよ！　外で下半身出した

ら流石にマズくないか！？」
「それなら大丈夫だよ？　ほら。オマンコに絆創膏が貼ってあるから」
「おいおい……」
こいつ、マジか……。しかも、周りも何も言わないのはなぜだ……？　流石に公然わいせつ罪にならんのか？
『そういう常識は、この世界にはないよ？』
「っ！？　だ、誰だ！？」
「「っ！？」」
「せ、先輩……？」
「零君……？　ど、どうしたの……？」
「い、いや……」
また、あの声……。一体、なんなんだ……？
「だ、大丈夫……？　具合でも、悪い……？」
「今日は、学校お休みしますか……？」
「いや。大丈夫だ。行こう」
「「はい……」」
あまり、気にしないようにしよう。

第３０話　爆乳ミディアムヘアちゃんから……♡♡

流石に瑠李の首輪全裸登校は、みんなに驚かれた。のだが、全員が羨ましいと言い、全員がすぐさま全裸になった。
それを見た瑠李は「理事長に校内全裸制度を提案してくる！」と言って、義叔母さんの所に向かった。
爆乳ショートちゃんは、それに付き合わされている。
「さて、取りあえずトイレトイレ」
と、俺はトイレに向かった。
個室に入ろうとしたら、閉まってたはずの個室のドアが突然開き、そこから手が伸びて引きずり込まれた。
「ちょ、うわぁ！？　痛てて……なんだ……？」
「すみません、先輩。乱暴してしまって」
「え……？　き、君は……？」
俺が顔を上げると、そこにいたのは、ミディアムヘアの子だった。そして、爆乳！　爆乳ショートちゃんと同じか？　いやそれよりちょっとばかし小さいのか？　いいや！　だとしても爆乳には変わらない！
「ど、どうしたの？」
「わ、私とも、してください……」
「え……？」
今、なんと言いました……？
「わ、私ともエッチしてくださいっ！！！」
「おぉ！？」
便座の上に座っていた俺の上に、パンツを脱いで跨いでくる爆乳ミディアムヘアちゃん。
「あの子がいいなら、私もいいですよね……！」
「あ、あの子……？」

あ。もしかしてこの子、爆乳ショートちゃんの友達か？
なんかよくわからんが、そんな気がする。おんなじ爆乳だらか？
「い、一挿《い》れます……！」
「ちょ、ちょっと！　いきなりは駄目でしょ！　濡らしたりしないと！」
「大丈夫です！　もうすでにビチョビチョです！　んっ！　んん～～～～！！！」
「くお……！」
ミディアムちゃんの膣（なか）、きっつ……！
今までの誰よりもキツイんじゃないか……！？
「んきゅうううううう……！？」
「どこがビチョビチョだよ……ほとんど濡れてないじゃないか……なんでこんな無理した？」
「だって、ずっと……ずっとシたかったから……先輩と……先輩とシたかった……！　あの子が、ずっと羨ましかったから……！」
そうか。ずっと抱えてたんだな……。
「だったら、言ってくれよ」
「え……？」
「俺は、いつでも待ってる。いつでもできる。だから、こんな無理しないで、言ってくれ」
俺はミディアムちゃんの頭を優しく撫でてやる。
「せ、先輩……！」
「まずは、痛くならないよう、濡らさないとな」
「え……？　ひゃん♡」
俺はミディアムちゃんの爆乳を露出させ、爆乳を揉みしだく。乳首もすぐに勃起して、それを弄りまくってやる。
「んひゅ♡　ひゃん♡　やああん♡」
この子、喘ぎ声可愛いな！
「んひゅうぅん♡　やあああ♡　あああああん♡　あ、あああああ♡」

そろそろいいかな？
「んっ！」
「んんっ♡」
俺は腰を突き上げた。できるだけ優しく。
「しぇ、しぇんぱい……♡　も、もっと、もっとちゅいてください……♡」
「だが……」
「も、もう大丈夫ですからぁ……♡　お、お願いしますぅ……♡
お、オマンコが切ないのぉ♡」
「分かった」
「んきゅうううううううううう♡♡♡」
俺は、下からマンコを激しく突き上げる。
「あああああああああああああ♡♡♡　ぎ、ぎもぢいい♡♡♡
せ、先輩のおちんちん、ぎもぢいい♡♡♡」
この子の膣（なか）、めちゃくちゃ気持ちいい……！　これ、マジでヤバイかも……も、もう保たない……！
「出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルル！！
「んひゃわあああああああああああああ！！！　出てるぅうううううううううう！！！　オマンコの中で、ビュクビュク出てるのぉぉ！！！　あああああああああああ！　イクぅぅうううううう♡♡♡」
俺の中出しで、ミディアムちゃんはイッた。締まりがマジでヤバい……！　出したばっかなのに、また出そうになる……！
「ごめん、もう一回！」
「んひゅあ！？　んあああああああああああああああああ！！！！」
俺はイってる最中のマンコを、思い切り突き上げる。
「あああああああああああああああ！！！　んきゃあああああああああああ！！！！」

ミディアムちゃんは、悲鳴に似た喘ぎ声を上げる。
その声が、女子トイレに響き渡る。
「あああああああああ！！！　せ、先輩ぃ！　きもちいい、きもちいい、気持ちいいのぉぉぉ♡♡♡」
「あぁ！　俺も気持ちいいぞ！　また出そうだ！」
「出して♡　出して♡　出してぇぇぇぇ♡♡♡　私の子宮を先輩の精液で犯してぇぇぇぇ♡♡♡♡♡♡」
「ぐっ！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！！
「んきゃあああああああああああ！！！　な、中出しされてるのぉぉ！！！　ああああああ！！！　イギュうううううううううう♡♡♡」
俺はミディアムちゃんに2発目の中出しをする。ミディアムちゃんもド派手にイッたらしい。
「「はぁはぁ……」」
俺達は繋がったまま、息を切らす。抱き合い、互いの息が肩にかかる。
「せ、先輩、ありがとう、ございました……♡　ま、またシて、もらえますか……？」
「当たり前だ。いつだってな」
「嬉しいです……♡　んちゅ♡」
俺とミディアムちゃんはキスをした。

♡　♡　♡

俺とミディアムちゃんが、トイレから出ると――、
「あああああああああああああ！？」
「「っ！？」」
「な、なんで……！？」
俺達の目の前に、爆乳ショートちゃんが現れた。あ、瑠李からは

解放されたのね。
「なんでって、先輩に抱いてもらえたのよ」
「あっ……あっ……あっ……」
爆乳ショートちゃんが、口をパクパクとさせている。
「ふふん！　いつまでもあんただけの特権と思わないでね？　私達一年にも、先輩としたいって思ってる子はいっぱいいるんだから」
「べ、別に特権だなんて思ってないもん！　ただ、タイミングが合わなくてみんなに紹介できなかっただけだし！」
「ふん！　どうだか。どうせ、大好きな先輩を独り占めしようとしたんじゃないの？」
「ち、ちちちちちちちちちち違うしっ！　だからタイミングが悪かったんだってば！　それに、お家には他の人もいるから独り占めなんてできてない――！？」
「お、お、お家……？　あ、あんた、先輩の家に……！？」
「そ、それは……」
「どこまで抜け駆けすれば気が済むんじゃい！　あ～もう！　これからは親友じゃない、ライバルだっ！！！」
「っ！　いいよ！　今から私達はライバルね！」
「「ふんっ！」」
な、なんか喧嘩が始まっちゃったんだけど……。
っていうか、爆乳ショートちゃんのタメ口って新鮮だな。
「それじゃあ～、行きましょうか、先輩♡」
「だ、駄目！　先輩は私と行くの！」
爆乳ショートちゃんとミディアムちゃんが両側から抱きついてくる。
「「あんたはあっち行って！！」」
俺、喧嘩されるの、あんまり得意じゃないんだけど……。

♡　♡　♡

学校が終わり、帰宅した俺達。今は夜で、俺はトイレにいた。
「ご、ごめんなさい、先輩……昼間はお恥ずかしい所を……」
「いや、まぁ、うん……別にいいんだが、あんまり喧嘩はしないでもらえると助かるかな？」
「は、はい……ど、努力します……！」
「うん。じゃあ、その話はこのくらいにして、飲んでもらえる？」
「は、はい……！　もちろんです！」
「んっ！」
ぷしゃあああああああああ！！
「んんっ♡　ごくごく……♡」
口を大きく開けて待つ爆乳ショートちゃんに、俺はおしっこをする。
口に入るおしっこを飲み干していく爆乳ショートちゃん。俺はそんな彼女の体におしっこをかける。
「んふ♡　ごくごく……♡」
おしっこをかけられると凄く喜ぶ。ミディアムちゃんはどんな性癖を持っているんだろうか？　今後が楽しみだ。
「ふぅ……」
「ごく……♡　ご馳走様でした♡　先輩♡」
「あぁ。ごめん、もう眠いから、寝るわ」
「はい♡　お休みなさい♡」
「お休み～」
俺はトイレを出て自室に向かった。
部屋に着くまでの、短い距離で――、
『もっと、便器は増やしてもいいと思うけどな～』
「っ！？」
ま、またこの声……。
「誰かいるのか……？」
……返事はない。
「空耳、なのか……？」

俺が、この声の正体を知ることになるのは、もう少し先の事となる。

まさかこの声の正体が、俺の人生を左右する事になるとは、この時の俺は全く想像していなかった。

第３０話　爆乳ミディアムヘアちゃんから……♡♡（後書き）

次回予告！

「うわぁ！？」

「君はこれから一週間、私のモノよ♡」

何者かに拉致される零！

「私達二人で、零さんの事、たっぷり気持ち良くしてさしあげますからね♡」

「えぇ」

二人の巨乳少女達の、逆レイプ！

「あ、あなた達は……？」

「私は生徒会長をしています♡」

「私は副会長を」

零が通う学校の先輩で、生徒会長と副会長の二人に、零は犯されまくる！

ついに『第三章』がスタート！　新キャラも続々登場！

次回

『生徒会長に拉致られて……♡♡♡』

お楽しみに！

第３１話　生徒会長に拉致られて……♡♡♡（前書き）

プロローグ
「た、大変ですっ！！」
「ん～？　どったの？」
爆乳ショートちゃんが、零のクラスに入ってくる。
「せ、先輩が！」
「れいれいがどうしたの？」
零の話題が出た瞬間、目つきを変えた女子達。
「せ、先輩が、誘拐されました！？」
『っ！？』
この後一週間、零は姿を現さなかった。

第３１話　生徒会長に拉致られて……♡♡♡

「ん……んん……」
あ～なんか頭重てぇ……。
「ん……？　ここは……？」
俺は重たい瞼をなんとか開いた。
「ってか、なんで俺パンツ一丁で椅子に縛り付けられてんの！？」
俺は、パンツ一丁で椅子に手足を縛られた状態だった。
「な、なんなんだ……？」
一体、何が起こってんだ……？　今日は瑠李は朝錬があって、爆乳ショートちゃんも委員会の仕事があるからって言うんで、一人で登校しようとしたんだ。
家を出て、しばらく歩いたのは覚えてる。だがその先からは……。
「駄目だ、分かんない……。もしかして俺、誘拐されたのか……？」
前に、みんなに言われた事がある。俺は性に積極的だから、飢えてる女子達に狙われやすいって。
「だとしたら、ヤバいじゃんか……！　俺、これからどうなるんだ……！？」
「目が覚めたのですね」
「っ！？」
だだっ広い倉庫のような空間に、可憐な女の声が響く。そして、カツカツと足音が近づいてくる。
「あ、あんたは……？」
「私は、あなたが通う学校で生徒会長をしている者です。以後、お見知り置きを」
俺の前に現れたのは、金髪のロングヘアで、黒タイツを穿いた巨乳女だった。
会長……って事は先輩か……。

「自己紹介どうも。で？　なんでこんな事を？」
「手荒な真似をしてしまい、大変申し訳ございません。ですが、怒らないでください。私はただ、零さん、あなたとセックスがしたかっただけなんです♡」
　ミディアムちゃんと言い、この会長と言い、なんで同級生以外はこんな回りくどいやり方すんのかな！
　言ってくれればいつだってするのに！
「零さんの下着姿、とっても素敵です♡　もう、オマンコが興奮でびしょびしょになってしまってます♡」
「さいですか。シたいんだったらさっさとしてくれ。そして早く家に帰してくれ」
「？　何を仰ってるんですか？　零さん」
「え……？」
「今日から一週間、零さんはここで私達とずっとセックスしまくるんですよ？」
「……は？」
　こ、この人は何を言ってるんだ……？　一週間？　それに今、私「達」って言わなかったか？
「ま、まだ他に人がいんのか？」
「えぇ。まぁいると言っても一人ですが。あの子は今、準備があるのでここにはいません。恐らくこちらに向かって来ている頃だとは思います」
「マジか……」
「そ・れ・に♡」
「んっ！？」
　俺は会長にいきなりキスをされた。
「ぢゅる♡　んふふ♡　零さんの唇、美味しいです♡　このまま始めるのはもったいないじゃないですか」
「も、もったいない……？」
「はい♡　なので、一週間たっぷり楽しめるように、零さんにはこ

れを飲んで頂きます♡」
会長が取り出したのは、媚薬と精力剤。
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　お、俺は今、燐……妹が作ったエロドリンクのせいで一年間勃起とムラムラが収まらないんだ！　だからそれを飲まずとも一週間のセックスはできる！」
「そうですか。ですが、他の女が飲ませたモノでスるというのは、なんか嫌なので、こちらを飲んで頂きます♡」
「い、いやいやいやいや！」
待て待て待て待て！　これ以上媚薬とか飲んだら、俺の性欲とチンコがおかしくなっちまう！
「さぁ、お口を開けて♡」
「ん～！」
俺は口を閉ざす。が――、
「ん……ぱっ！？」
後ろから突然鼻をつままれて、息ができなくなったので口を開けてしまった。その隙に会長はすかさず――、
「は～い。た～んと飲んでくださいね～♡」
「んんっ！？」
媚薬と精力剤を同時に口の中に入れてきた。吐き出そうと思ったが、鼻をつまんできた誰かが、無理矢理口を閉じさせてきて、吐き出す事を許してくれない。
「飲んで♡　飲んで♡　飲んで♡」
会長は目の前で、可愛らしく手をパチパチと叩いている。
と――、
「んっ！？」
ごくん。俺は飲んでしまった。後ろから急に乳首をつままれたからだ。
誰がいるんだと思い、後ろを振り返ると、そこにいたのは青髪のポニーテール女だった。目元はキリッとしていて、イケメン女子と呼ばれてもおかしくない風貌だった。

そして巨乳！　イケメン女子が巨乳ってエロいな……。ってか、さっきの媚薬と精力剤が……！

「くっ……！」

「あはぁ～♡　お薬が効いてきたみたいですねぇ♡　おパンツの中でおちんちんがビクンビクン跳ねてますよぉ♡　うふふ～♡　おパンツにおちんちんの形がくっきり浮かび上がって、零さん、エッチですぅ♡」

「くっ……」

会長の言う通り、パンツの中でチンコが痛いくらいに勃ってる……！

正直、今すぐパンツを脱ぎたい……！

「うお！？　んむ！？」

「ぢゅる♡　れる♡　ぢゅむ♡」

あ、青髪巨乳の奴、急にディープキスして来やがった！？

頭を上げられたからビックリしたけど、それ以上にこのキスにビックリしてる！

「あらあら。なんだかんだ言ってた割には、乗り気じゃない。零さんにそんな情熱的なキスをするだなんて」

「ぷはっ。別に。割り切っただけです。ここまで来たらもう後戻りはできない。だったら、楽しまなきゃ損でしょ」

「そうね」

「はい、これ。頼まれてたもの」

「ありがとう」

な、なんだ、あのアタッシュケースは……？

「それでは零さん♡　一週間、楽しみましょうね♡」

お、俺、どうなっちまうんだ……？

♡　♡　♡

午前１０：３０。

「すぅ～～～はぁ～～～～～♡　この臭い、堪らない♡」
会長は、俺の前に女の子座りをしてパンツ越しにチンコの臭いを嗅いでいる。
ちなみに、今、俺は喋れない状況だ。なぜなら――、
「ぢゅる♡　ぢゅむ♡　れる♡　れるぅ♡」
青髪巨乳がずっとキスをしてくるからだ。
青髪巨乳の格好は、会長とほぼ一緒。違うのは黒タイツを穿いていないと言うところだけだ。
「はぁ♡　はぁ♡　も、もう我慢できません♡」
会長は俺のパンツを脱がす……のではなく、ハサミで切った。切った！？
「後で必ず弁償させて頂きますから、ご安心ください♡　それより、はぁ～～～～～♡　これがおちんちんなんですね♡　本物は初めて見ましたけど、こんなに素敵だなんて～♡　こんなの、我慢できません！」
「んっ！」
会長はいきなり咥えてきた。
「んむふぅ～～～～♡♡♡　ほのにほひ、ほのあひ、はまりまへんぅうぅぅぅ♡♡♡」
く、咥えながら喋るなぁ……！
「んふふ～♡　ぢゅる♡　れる♡　ぢゅる♡　ぢゅるるるるるるるるるる♡♡♡」
「んっ！」
いい加減青髪巨乳、キスを止めてくんねぇかな！　何も喋れねぇじゃねぇか！
あと、何気にずっと乳首弄るのも止めろ！
「ぢゅるるるるるるるるるるるるるるるる♡♡♡　じゅぞぉぉぉ

この人、本当に初めてか……！？
「ぢゅるるるるるるるるるるるるるる♡♡♡　れるれるれるれるれるれるれるれるれるれる♡♡♡」
も、もう駄目だ！　出る！
「んっ！」
ビュル！　ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！！
「んっ！？　んぶぅ！？　んくんく……♡」
俺の精液を会長は、飲んでいく。正直顔は見えない。だって、ずっと顔を上に向けさせられ、キスをされてるから。
「ごくごくごく……♡　ぷはぁ♡　こ、これが精液……零さんのザーメン……♡　とっても美味しかったです♡　もっと！　もっと飲ませてください！　ぢゅるるるるるるるるるるるるるる♡♡♡」
出したばっかりなのに、また咥えて吸ってきた……！
動けないからなんにもできない……！

午後１２：００。
「はぁはぁ……」
まさか、あの後ずっとフェラで抜かれ続けるとは思わなかった。
「んふふ♡　零さん、もうすでに１０回出してるのに、おちんちんは全然元気ですね♡」
あんたのせいだろ！
「会長、お次は私に」
「えぇ。私はこちらを」
「え……？」
会長が横になり、椅子の下に顔を入れた。何をしてるんだ……？
「うっ！？」
あ、アナルを舐められてる！？　この椅子まさか、ケツの部分が開いてんのか！？
「今から、もっと良くしますからね」

な、なんか、青髪巨乳の目が怖いんですけど（性的に）。
「くっ……！」
青髪巨乳が、チンコを扱いてきた。
こいつ、精液と我慢汁でベトベトのチンコを鷲掴みにして扱いてっけど、なんも気にならんのか？
ていうか、アナル舐めが気持ちよすぎる！
「あれだけ出してるんです。いけますかね？」
「な、何を……？」
青髪巨乳は、激しく扱いてくる。アナル舐めと相まって気持ちよすぎる……！
駄目だ！
「出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルル！！！
「すごい……勢いも、量も衰えない……♡」
「はぁはぁ……」
会長がアナル舐めを止め、立ち上がる。が、青髪巨乳はチンコを扱く手を止めない。それどころか――、
「うあああ！？」
こいつ、イってる最中の亀頭を手のひらで擦ってきやがった！？
「こうすれば、出るはず」
「ちょ、や、止めろ……！」
「すみません。それは……できません♡」
こいつ……！　あああああああ！
「あああああああああああああああ！！！！！」
びゅしゃあああああああああああああ！！！！　ぷしゃあああああああ！！！
俺は、思い切り潮を吹いてしまった。
は、恥ずかしいくらいに、潮を撒き散らしてしまっている。
「もっと♡　もっと出してください♡」
こ、こいつ、手を全然止めねぇ！

潮を出してるのに亀頭を擦るから、潮があちらこちらに飛び散っている。
しかも、俺の潮は青髪巨乳にめちゃくちゃかかっている。
「すご〜い♡　これが零さんの潮吹きなんですね♡　素敵ぃ♡♡♡」
しかも、会長は俺の潮吹きを見て喜んでるし。
「はぁはぁ……」
「終わってしまった……寂しいですね……」
「服脱いだら？　風引くわよ？」
「そうね」
そう言って青髪巨乳は、俺のチンコから手を離し、ビチョビチョに濡れた手を拭きもせず、服（学校の制服）を脱ぎ始めた。
「んふふ♡　零さん、着替えを見てまたビクンビクンさせてますね♡」
「こ、これは……」
「恥ずかしがらなくていいんですよ♡　私達は嬉しいですから♡ふふ♡　恥ずかしがる零さん、可愛い♡」
今、どのくらい時間が経ってるんだ……？

♡　♡　♡

二日目。午前９：００。
「ぢゅむ♡　ぢゅる♡」
「ん……んん……」
俺は目を覚ました。もちろん、椅子の上で。
俺はあの後、会長と青髪巨乳にめちゃくちゃ抜かれた。
手コキ、フェラ、足コキ、パイズリ、様々な方法で射精させられた。
だが、二人ともセックスはしてこなかった。ま、一週間あるから焦らずって事なのかもしれないな。
んで。俺は目を覚ましたんだが、またまた会長にフェラをされて

いる。
おそらく、今は二日目の朝だ。
「ぢゅる♡　あ、おはようございます、零さん♡　朝勃ちおちんちん、頂いてます♡」
「会長、今って何時なんですか？」
「ん？　今は二日目の朝九時ですよ♡」
「そっすか」
「お家が恋しいかもですが、我慢してくださいね？　あ、射精は我慢しなくていいですからね♡」
「あ～はい……」
俺は、生きたまま帰れるんだろうか……？
植物人間にならんだろうな……？

♡　♡　♡

最終日。午前８：００。
今日はどうやら最終日らしい。
朝から二人が全裸になっている。ついにか……。
もう、この一週間で何回射精させられたか分かったもんじゃない。
「零さん、今日は最終日なので、念願のセックスをさせて頂きます」
「あぁ……」
「ふふ♡　ついにこれを使う時が来ましたわ♡」
会長は、アタッシュケースを持ってくる。
あれ、一体何が入ってんだ？　全然使わなかったけど。
「ふふ♡　よいしょ」
な、なんか液体が入った容器が出てきたんですけど！？　それ何！？
「これを……よいしょ！」
「どぅわぁ！？」
冷たくはないけど、液体をいきなりぶっかけるな馬鹿！

「ん……？」
「んふふ♡　効果出てきましたか～♡」
会長が俺の乳首に軽く触れる。
「くっ！」
な、なんだこれ！？　乳首触られただけなのに、まるで亀頭をこすられたみたいな気持ちよさが……！？
「んふふ♡」
「な、なんだ、これ……」
「それは、ローションに媚薬を混ぜた、媚薬ーションです」
「「……」」
「冗談です。媚薬入りローションです」
この感じで冗談言うのかよ。
「もちろん、私達も……」
「えぇ」
二人も同じローションを浴びる。ヌルヌルテカテカの女子……エロすぎる……！
「くっ……！」
勃起しただけで気持ちいいってなんだよ……！
「それでは零さん♡　ぶっ飛ぶセックス、しましょう♡」
こ、これはしゃれにならんかもしれんな……。

♡　♡　♡

午前１０：００。
「んきゃあああああああああああああああ！！！！　あっ、あっ、あ〝！！！」
会長が下品な嬌声を上げ、感じまくる。
あれからセックスを開始したのだが、俺より二人の方が感じまく

っている。
そりゃそうだろ。女子の方が性感帯が多いんだから。
青髪巨乳は、この結果を予想してなかったのか、口からよだれを垂れ流しながら、ブツブツと何かを呟いている。ちなみに、床に横たわっている。
「あ゛っ！　あ゛っ！　あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛！　じ、じだがら　づぎあ゛　げな゛　いでぇ゛ぇ゛ぇ゛ぇ゛！！！」
「それは聞けねぇ頼みだな！　今まで散々されたんだ！　こっからは仕返しさせてもらうぜ！」
俺は下から思い切り、会長のマンコを突き上げる。
「んきゃあああああああああああああ！！！！！　ダメダメダメぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！　おかしく、おかしくなっちゃうううううう！！！！」
「なっちまえこの、犯罪ド変態クソッタレ女ぁ！」
「あああああああああああああ

俺は、思い切り腰を突き上げる。
「んきゃあああああああああああああ！！！　イグ！　イグ！　イグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」
「俺も、出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
「んひゃあああああああああああ！！！　にゃかだひで、イグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」
会長はぐったりとする。
俺も、結構、げん、かい……。
俺達は意識を失った。

♡　♡　♡

「ん……？　ここは……？」
「先輩！？」「お兄ちゃん！？」「零ちゃん！」
「兄さん！？」「零ちゃん！？」「零君！？」
「みんな……ここって……」
「せ、先輩のお部屋ですよ……！」
俺の部屋……。
「どうして……？」
「ママがおばっちを問い詰めて、場所を聞き出したの」
「なんで、義叔母さんが……？」
「あの子ったら、生徒会長と副会長の企てに協力してたのよ」
なるほど……だから、学校から何もなかった訳か。
「この子が、学校のみんなに言って、全員で探しまくってたのよ。私は、妹を説教してたけど」
「そう、だったのか……みんな、迷惑かけてごめんな……」
「何言ってるんですか……！！」
爆乳ショートちゃんが泣きながら叫んだ。それに対してみんなが

驚いている。
「先輩が……先輩が謝る事なんて何一つないんです……！　せ、先輩は……先輩はぁ……！　うぅ……！」
爆乳ショートちゃんは泣き崩れてしまった。
桃が駆け寄り、背中をさする。
「この子、一番探し回ってたの。毎日毎日、一睡もせずに、ほとんどご飯も食べずに」
「そう、だったのか……んっ……！」
俺はベッドの上で体を起こす。だが、ずっと拘束されてたのもあり、媚薬のせいもありで、体がうまく動かせない。義母さん達が起きるのを手伝ってくれる。
そして、なんとかベッドから降りる。
「ごめんはもう言わない。頑張ってくれて、ありがとうな」
俺は爆乳ショートちゃんを優しく抱きしめる。
「しぇ、しぇんぱぁ～～～～～い……！！！」
爆乳ショートちゃんは泣きじゃくる。
後ろから、桃達の泣き声が聞こえてくる。
心配かけちまったな。
「そういや、あの二人は？」
「あの二人なら、謹慎処分にさせたよ。いくら零とやりたいと言えど、これはやりすぎだ」
義母さんが俺の事を「零」と呼ぶ時は、本当にキレてる時だ。
昔、一度だけ叱られた事がある。あんときの義母さんはめっちゃ怖かった。
「媚薬を混ぜたローションをぶっかけるなんて、常識外れにも程がある。零をテクノブレイクさせて殺すつもりか……！」
「落ち着いて……」
桃と燐が義母さんをなだめる。
「じゃあ、学校に帰ってくるまではお預けか」
『？』

「先輩？」「お兄ちゃん……？」
「あいつらへの、復讐は」
「ふふ。兄さんらしい♡」
「これでこそ零ちゃんね♡」
「全く、あなたって子は……それでこそ私のご主人様よ♡」
「流石です！　お兄ちゃん♡」
「零君、格好いい……♡」
「先輩……かっこよすぎる……♡♡♡」
さ～て、あの二人、どう料理してくれようか……！

俺とあの二人が再会するのは、もう少し先の事となる。

第３１話　生徒会長に拉致られて……♡♡♡（後書き）

次回予告！

「どうです～？　先輩？　この子より、私のパイズリの方が気持ちいいですよね～？」
「何言ってるの！　私の方がおっぱい大っきいんだから、私の方が気持ちいいに決まってるじゃん！」
「はん！　気持ちよさはデカさじゃないの、テクニックなの～！　つーかでかいって言っても、ワンサイズしか変わんないでしょうが！」
「ワンサイズ違ったらそれは大きな差だもん！　先輩は大っきいおっぱいが大好きなんだから！」
（だから喧嘩しないでくれってば……）

次回
『爆乳ショートちゃんとミディアムちゃんの取り合いセックス♡♡♡』
お楽しみに！

第32話　爆乳ショートちゃんとミディアムちゃんの取り合いセックス♡♡♡（前書き）

プロローグ

「はぁはぁ……」

会長達に拉致されてから、一週間が経った。

「はぁはぁ……ふぅ～」

俺は朝早くから、ランニングに行っていた。今は丁度、一時間のランニングを終え、家の前に戻ってきたところだ。

「よいしょ。ただいまっと。まぁ、誰も起きてないだろうけど……って、あれ？」

俺が家に入り、リビングに行くと、そこにはキッチンで料理をしている爆乳ショートちゃんがいた。

「あ、先輩。お帰りなさい」

「ただいま……え……起きるの早くない？」

「はい。先輩が早起きしてるって知ったら、いてもたってもいられなくて。朝一番なら、先輩を独り占めできるかなって♡」

可愛い事言ってくれるじゃねぇか！

「この時間は君に尽くすよ」

「っ！　そ、そんな嬉しい事言ってもらえるなんて……！　幸せすぎます……♡」

こんなんで喜んでくれるなら、いつだって言うぞ？

「さて、俺はシャワー浴びてくるよ。汗かいたからな」

「あ、ちょっと待ってください」

「ん？」

「せ、先輩……私に洗わせてもらっていいですか……？」

「ん？　あぁ、もちろん。洗ってくれるなんて幸せだ。じゃあ、風呂行こう」

「いえ」

「ん？」
「お風呂ではなく、私が、お口で、です……」
おおぅ……。それはまた、そそるな。
「いいのか？　本当に俺の体、汗とかで汚れてるぞ？」
「はい……！　先輩のお体の汚れ、私に舐め落とさせてください……♡」
「じゃ、じゃあ頼む」
「はい……♡」
爆乳ショートちゃんは、俺の服を脱がせていく。その度に――、
「ちゅ♡　ちゅる♡　ちゅむ♡　ちゅる♡　ちゅ♡」
服を脱がす度に俺の体にキスをしてくる。汗を吸い取るかのように。
そして、ズボンを脱がせた後、爆乳ショートちゃんはパンツの上から、チンコの臭いを嗅いできた。
「すぅ～～～～～～はぁ～～～～♡　やっぱりこの臭い、堪りません♡♡」
「よかったよ。喜んでもらえて」
「おちんちんの形がはっきり浮かび上がるの、大好きです♡　玉玉さんも、こんなにずっしり……♡　すぅ～～～はぁ～～～～～♡♡」
この子、どんどん変態になっていってねぇか？　ま、そこがいいんだけど。
「そろそろちゃんと洗わせていただきますね♡」
「あぁ。頼む」
爆乳ショートちゃんは俺のパンツを脱がせる。そして、立ち上がり、俺の体をくまなく舐めていく。
「れぇろぉぉぉぉぉ♡　ちゅ♡　ぢゅるるるる♡」
これが、風俗とかである全身リップか。結構気持ちいいな。しかも、洗ってもらってると思うと、気持ちよさが倍増だ。
丹念に、丁寧に、隅々まで舐めてくれる爆乳ショートちゃん。脇や、足、股関節、本当にくまなく全部舐めてくれる。

まぁ、当然、こんな風にされたら勃ちますよね。
「ちゅぱ♡　まず全身は終わりました♡」
「ありがとう」
「お次は、ここ♡　おちんちんを綺麗にさせて頂きますね♡」
「あぁ、頼む」
いよいよ大本命だ。

第32話　爆乳ショートちゃんとミディアムちゃんの取り合いセックス♡♡♡

「ぢゅる……♡　れるぅ……♡　れろぉ……♡」
「くっ……」
爆乳ショートちゃんが、勃起したチンコにキスをしていく。そして、竿を丹念に舐め始めた。
舌を出し、竿だけを舐めていく。
「れるぅ……♡　ぢゅむ……♡　はんむ♡」
爆乳ショートちゃんは、竿を一通り舐めた後、亀頭を咥えた。
「んふふ～♡　あへほ、おひっほのあひはひまふ♡　ほっへもほいひいれふ♡♡♡」
爆乳ショートちゃんは、亀頭を咥えながら喋る。そして、吸い、舐め、頭を前後に動かす。
俺が感じるやり方をこの子は、もう全て熟知している。
「じゅぼっ！　ぢゅる！　じゅるるるるるる！　じゅぼぼぼぼぼぼ！！　じゅぞぞぞぞぞ♡」
「くっ……」
ほ、本当、気持ちいい……！　この子、日に日にテクニックが上達してんだよな……。
「じゅぞぞぞぞぞ！　ぷはぁ♡　んふふ♡　綺麗になりましたよ♡」
「あぁ、ありがとう」
俺のチンコは、爆乳ショートちゃんの唾液でヌルヌルのテカテカになっていた。
「先輩……」
「ん？」
どうしたんだ？　そんな上目遣いで……お目々うるうるさせて……！　可愛いな！

「これから毎日、先輩のおちんちん、私が綺麗にしてもいいですか……？」
「そ、それって……」
「はい……お風呂に入っておちんちんを洗うのではなく、私のお口に入れて、綺麗にしてほしいんです……私のお口は、先輩専用の、おちんちん洗浄機です♡　なっても、いいですか……？　先輩専用のおちんちん洗浄機に……」
「もちろんだ！　むしろなってくれ！」
「っ～～～♡♡♡　ありがとうございます♡　では、これから私は、先輩の性奴隷便器で、先輩専用のおちんちん洗浄機です♡」
「あぁ！それじゃあ、このまま精液とおしっこを出させてくれるか？　奴隷便器として」
「はい♡　もちろんでございます♡」
そう言って爆乳ショートちゃんは、亀頭にキスをした後、そのまま唇をくっつけたまま、舌を出してそのまま舐め始めた。
うっわエッロ！　なんだよその舐め方！
「れりゅぅぅぅ♡　じゅぽっ♡」
しかもそのまま口に含んだ。この子、本当エロい！
「んふふ～♡　じゅぽ♡　ジュボッ♡　じゅぼぼ♡」
頭を一心不乱に動かしてる……。
「そんなに俺のチンコが好きか？」
「ふぁい……♡　らいふひれふ～～～♡♡♡」
そんな恍惚とした表情でそんな事言われたら……。
「ごめん！　出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！
「んぶっ！？　んぶぅ……♡　んくんく……♡」
俺の暴発を、爆乳ショートちゃんは嬉しそうに受け止め、吐き出される精液を幸せそうに飲んでいく。
ビュル！　ビュビュ！　ビュルルルルルル！！！
「んぶぅ……！　んくごくごく……♡」

俺の射精は全然終わらない。俺は爆乳ショートちゃんの頭を掴み、快感に腰と足を震わせる。
「はぁはぁ……」
やっと射精が止まった。そういえばここ一週間、射精してなかったからな。
「ごくごくごく……♡　ぷぱぁ♡」
チンコを口から出す爆乳ショートちゃん。その際、口とチンコの間に真っ白な糸が張った。
それがものすごくエロかった。
「ごめん。出しすぎた」
「いえ……♡　私は幸せでした♡　一週間ぶりの射精を、受け止められて♡」
「そっか。じゃあ、次は」
「はい♡　おしっこをください♡　私の大好きな飲み物なので……♡」
「まず座っていいか？　久々の射精で足が……」
「あっ！？　も、申し訳ありません！？　奴隷のくせに、ご主人様の状況に配慮ができず！？」
「いや。そこまで気にしなくていい」
「こ、こちらに……！」
爆乳ショートちゃんは、椅子を引いて、俺に座るように促してくれる。
「ありがとう」
「本当は私の上に座って頂きたいのですが、それだとおしっこが飲めないので……」
「大丈夫だ。椅子なら俺の部屋にいる」
「部屋に……？　あぁ～瑠李さん？」
「あぁ」
「お部屋では、瑠李さんとは、その……」
「まぁ、シまくる事もあるが、大体は俺の足を支える台になったり、

枕になったり、それこそ椅子になったりだな」
「そう、なんですね……（羨ましい……！）」
「ん？」
「あっ！　いえ！　なんでもないです……！」
「そうか。そろそろ、いいか？」
「あっ！　はい！　ろうぞ……♡」
爆乳ショートちゃんが床に女の子座りをして、口を大きく開ける。
「くっ……」
ぷしゃあああああああああ！
「んっ！　んくんくんく……♡」
爆乳ショートちゃんは俺のおしっこを飲んでいく。
「ごくごくごく……♡」
「ふぅ……」
「ごくん♡　ご馳走様でした、先輩♡　今、おちんちん綺麗にしますね♡」
「あぁ。頼む」
「はい♡　ちゅむ♡」
ちなみにこの後、掃除だけで済まず、5回の射精に、3回の放尿をした。
その全てを、爆乳ショートちゃんは喜々として飲み干していった。

♥　♥　♥

朝から先輩の精液と、おしっこを沢山飲ませてもらえた♡
「えへへ～♡」
「朝からご機嫌。兄さんの役に立てた？」
「はい！　朝から沢山ご馳走になっちゃいました♡」
「それは良かった。ちゃんと言った？　洗浄機になりたいって」
「はい！　そうしたらむしろなってくれ！　って言ってもらえました！」

「そう。良かった。私が教えた舐め方した？」
「はい！　とっても喜んでくれました！」
「良かった。そう言えば、さっきずっとスマホ鳴ってた」
「え？　あ、本当だ……げっ……」
「どうしたの？　げっって何？」
「あ～いえ。なんでもありません。ちょっと失礼します」
私は部屋を出て、おトイレに向う。
「……もしもし？」
『あ、もしもし？』
「どうしたの？」
『ねぇ、先輩とエッチしたい』
「……」
『ねぇ、聞いてる～？　先輩と、エッチしたい！』
「聞こえてるよ！　聞こえた上で無視してるの！」
『なんで！』
「当たり前でしょう！　そんな事いきなり言われたらビックリするに決まってるでしょう！　それになんでそれを私に言うのよ！」
『だって、私先輩の連絡先知らないもの！　それに、最近学校来てないし……だからあんたに連絡するしかないでしょう！』
うぐぐ……。
「じゃあ、先輩には聞いといてあげる。多分――」
『あ、聞いとくふりとかは無しだから。この通話のまま、先輩のとこ行って』
ぐぬぬぬぬぬ……！
「わ、分かった！」
しょうがないな……。
私は先輩の部屋へと向う。
「先輩……ちょっといいですか……？」
「ん～？　どうした～？　入っていいぞ～」
「失礼します」

私が部屋に入ると、先輩はベッドに横になっていた。エッチな本を手にして。
「ごめんなさい、突然……」
「うんにゃ。大丈夫だ」
『ねぇ、なんかエッチな音が聞こえるんだけど、なんかしてるの！？』
「え～言わなきゃだめ？」
『当然でしょ！　教えなさい！』
「はぁ～……もう……今、先輩が自分のお部屋でエッチな本を読んでるの」
『まぁ、素敵♡』
「そんな先輩に、ペットの瑠李さんがフェラをさせてもらってるの」
『ペ、ペット！？』
「何驚いてるの？　先輩には奴隷も便器もペットもいるんだよ」
『う、羨ましいぃぃ！！！！　まさか、あんた……』
「私は、性奴隷として毎日ご奉仕してるよ」
本当は便器で洗浄機だけど♪
『ず、ずるい……！』
「どうした？　なんか揉めてんのか……？」
「あっ！　ご、ごめんなさい！　お部屋に入ったのに用件も言わず……！」
「いや、大丈夫だ。それで、どうした……？」
『ほら、早く言って』
もう……しょうがないな……！
「あの～先輩……」
「うん」
「私の友達が、先輩とエッチをしたいと、言っていまして……」
「友達……？　あ～あの子か！　おういいよ」
「本当、ですか……？」
「あぁ」

「ありがとうございます。だって、聞こえてた？」
『もっちろん！　さっすが先輩よ～！　これからしたいんだけど、どこに行けばいいか聞いて』
「ったく……先輩、どこに行けばいいかって……」
「そうだな～……義母さんが経営してるラブホでいいか？」
『いいですっ！』
「い、いいそうです……（声でかい……）」
「じゃあ、そこで。住所送っといてくれ」
「はい」
「瑠李、どけ」
「んっ……もっと舐めてたかった……」
「帰ってきたら舐めさせてやる」
「うん♡」
先輩は優しいなぁ～♡
「そういう事だから」
『あんがとう～！　じゃね！』
「全く……」
私はスマホをしまう。
「君も来るか？」
「え……いいんですか……？」
「あぁ。多いほうが楽しいしな。あ、くれぐれも喧嘩は控えめにな」
「はい！」
先輩！　先輩は私が守ります！

♡　♡　♡

俺は喧嘩をしないように言ったはずなんだが……。
「なんであんたがいんのよ！」
「先輩に誘ってもらったから！　それに、あなた一人だと何しでかすか分かんないし！」

「はぁ！　何それ！　自分がちょっと多く先輩とエッチしてるからって、いい気にならないでくれる！」
「いい気なんてなってないし！　本当の事言ってるだけだし！」
ラブホに来て、ミディアムちゃんから部屋番を聞いて、俺達はそこに入った。
そしたらいきなりこの有り様だ。
二人で部屋に入り、ミディアムちゃんと顔を合わせる。そこまでは良かった。
俺と会えたのが凄く嬉しかったのか、ミディアムちゃんは満面の笑みを俺に見せてくれた。でも、その笑顔は俺の背後からひょっこり現れた爆乳ショートちゃんの存在により、一瞬で消え失せてしまった。
で、数分、この状態ってわけだ。
「もう〜！　せっかく先輩と二人っきりで楽しめると思って、楽しみにしてたのに！」
「ごめんなさいね！　楽しみを壊しちゃって！　でも二人っきりだとなにするか分かんないから不安だし！」
「なんでよ！　私がなんか先輩にヒドイことするように見える訳！？」
「別に見えないけど、この間の一件があるから――！？」
爆乳ショートちゃんは言ってしまったと言う顔をする。
俺が会長達に拉致された事は、秘密になっている。別に俺は言ってもいいんだけど、それを公表すると、それを真似する人が現れかねないからと言う、義母さんと義叔母さんの判断だった。
「この間の一件？　何よそれ」
「あ、いや、その……」
「別にこの子になら言ってもいいんじゃないか？　君の親友なんだろ？」
「は、はい……」
「え……？　何……？」

ミディアムちゃんは、少し怯えた表情を浮かべた。

♡　♡　♡

「そ、そんな事が……」

ミディアムちゃんは爆乳ショートちゃんから、話を聞いた。

その話を聞いたミディアムちゃんは、怒りと恐怖が入り混じった表情を浮かべている。

「いくら先輩で、いくら生徒会長でも、それは絶対に許せない！ていうか、信じらんない！　大好きな先輩を拉致して、先輩に辛い思いさせて、自分達が気持ちよくなろうなんて、女の風上にもおけない！」

こういう風に言ってもらえるのって、結構嬉しいな。

「でしょ！　信じられないでしょ！　私、初めて人に殺意を覚えたよ……！」

「一緒にヤリに行く……？」

「行っちゃおうか……？」

いけない方向に向かってるな。

「ちょいちょい落ち着き」

「「ふへ……？」」

俺はベッドの上で見つめ合う二人の頭を、優しく掴む。

「俺の為に怒ってくれるのはめちゃくちゃ嬉しいけど、俺のせいで二人が犯罪者になっちゃうのは嫌だな」

「「先輩……」」

「だから、あの二人に怒る気持ちを、俺を気持ちよくさせるって言う気持ちに切り替えて、俺とエッチしてくんねぇかな？」

「「先輩……！」」

「うお！」

二人が抱きついてくる。

「どうした？」

「ずるいです～先輩……！　それは、それは反則ですよぉぉ……！」
「そうですよ～……！　ずっと我慢してた思いが、爆発しちゃうじゃないですか……！」
俺の胸に、顔をスリスリしてくる二人。なんだ、この可愛い生き物達は。
「我慢なんてしなくていいんだぞ？　ほら」
「「あ……♡」」
二人に、ズボン越しでも分かるくらいに勃起したチンコを見せる。すると、二人の目にハートマークが浮かび、俺の頬にキスをしてくる。
「れろ……♡　こんなたくましいの見せられたら、もうオマンコグチュグチュですよ……♡」
「先輩……♡　（性奴隷便器洗浄機が、気持ちよくさせて頂きますね♡）」
「二人とも、頼んでいいか？」
「「もちろんです♡」」

♡　♡　♡

二人は嬉々として、俺のズボンとパンツを脱がせて、勃起チンコを出してくれたんだが……。
「ちょっと！　一人で亀頭占領しないでよ！」
「いいでしょ！　あなたは竿と玉玉を弄ってるんだから！」
「それはあんたが亀頭を占領するからでしょ！」
二人は、俺の股の間に入り、横になってフェラをしている状態だ。だが、さっきからどっちが亀頭を舐めるか、どっちが咥えるかで喧嘩をしている。さらには――、
「あんたのおっぱいより私のおっぱいの方が、先輩は感じるんです～！」
「わ、私のおっぱいの方が大きいし！　大きい方が先輩は喜ぶし！」

など、どちらのおっぱいの方が俺が感じるのかと言う喧嘩をしている。
「邪魔！」
「あなたが邪魔！」
あ～～～もう！
「うるさい！！！」
「「っ！？」」
俺の怒鳴りに、二人はビクッとしてフリーズしてしまう。
「さっきからずっとごちゃごちゃごちゃごちゃごちゃと……！　俺は喧嘩をするなって言ったよな？　なぁ！」
俺は爆乳ショートちゃんを見る。
「っ！？　は、はい……」
「声が小さい！」
「は、はい……！　い、言われました……！」
「じゃあなんで喧嘩してんだ？　なぁ？　俺は喧嘩するやつが大っっっ嫌いなんだ！　このまま喧嘩を続けるなら、お前らとは二度とエッチしねぇぞ！！！」
「「っ！？」」
俺の宣言に、二人は涙をブワっと目元に浮かべて、泣き出してしまう。
「ご、ごめんなさいぃぃ……！？　も、もう、喧嘩しませんから、ゆ、許してくださいぃぃ……！？」
ミディアムちゃんが、泣きながらそう言ってくる。爆乳ショートちゃんは、俺が怒ったらどうなるか分かっているのか、ただ座って泣きじゃくっている。
「許さない。二人とも、俺がいいと言うまでエッチは無しだ」
「そ、そんなぁ……！？」
「いいな？」
俺は二人を睨む。
「ね、ねぇ！　あんたからもなんか言ってよぉ！　このままじゃ先

輩とエッチできなくなるんだよ！？」
　ミディアムちゃんが、爆乳ショートちゃんに助けを求める。
「む、無理だよ……。先輩を怒らせたら、もう、終わり……。私達は先輩がいいって言うまで、エッチしてもらえない……」
「そ、そんな……！？」
　ミディアムちゃんは、絶望の表情を浮かべた。でも、俺は怒っている。絶対に情にほだされて許したりはしない。
「君、俺ん家に来い」
「え……？　してくれるんですか……？」
「違う。お前ら二人を躾けてやる」
「「っ……！？」」
　俺の低い声に、二人は怯んでいた。

♡　♡　♡

　家に帰って来た俺達。
　俺は部屋に二人を連れ込む。
「あ、お帰り～れいく、ん……？」
　部屋に入った俺の表情が、よほど険しかったのか、瑠李は、ベッドから降りて、シュンとしながらこっちを見てくる。
「入れ」
「「は、はい……」」
　俺が入室を促すと、項垂れた二人が入ってくる。
「ぶひゅ！」
　瑠李は何かを察したのか、ベッドの下に隠れる。自分も怒られると思ったのか？
「二人とも、全裸になって窓際に立て」
「「は、はい……」」
　二人は俺の言う通り、全裸になる。そして、窓際に立つ。
「瑠李、二人の手首をロープで拘束して、窓のサッシに吊るせ」

「は、はい！」
瑠李はベッドの中から慌てて出てくる。そして、ロープを出し、二人の両手首を縛り、窓のサッシに吊るしていく。
二人は、両手を上に上げられた状態で、座りたくても座れない。動きたくても動けない状態になった。
「よし。それでいい」
俺は二人に近づき――、
パチィィィィィィィィンンッッッ！
「「んんっ……！！」」
俺は二人の爆乳を引っ叩いた。
「そこでしばらくの間、そうだな……取りあえず一週間は反省してろ」
「い、一週間……！？」
「口答えか……桃！」
「呼びましたか？」
来んの早っ！
「口を塞げる玩具とかってなんかないか？」
「ある。ちょっと待ってて」
「あぁ」
桃は一旦自室に戻り、手に何かを持って戻ってきた。
「これ」
「これは、猿轡か。これはいいな」
俺は二人に猿轡をしていく。その際、爆乳ショートちゃんの耳元で――、
「（ごめんな。こんな事して。でも、これはお前が悪いんだ。俺の性奴隷便器洗浄機のくせに、俺の言いつけを守れないから。しっかり反省しろよ？　……俺の大切な彼女）」
「んふあああああああああああああああ！？」
爆乳ショートちゃんは、大号泣してしまった。
「さて、二人共。飯に行こう」

「「は、はい」」
俺は心を鬼にして、二人を躾ける事にした。

♥♥♥

やってしまった、やってしまった……！？
せ、先輩を怒らせてしまった……！
喧嘩をするなと言われてたのに、先輩の言いつけを破って喧嘩をしてしまった……！
たかが性奴隷便器洗浄機の分際で、先輩の命に逆らってしまった……！
隣では私の親友が、納得のいってない表情を浮かべている。でも、この罰で思い知るはず。先輩を怒らせたらどうなるか、逆らったらどうなるのかを。
瑠李さんは先輩を怒らせて、本当にエッチしてもらえなかった。茶髪先輩だって、先輩を怒らせてしまって、本当に舌を抜かれるんじゃないかって思って、凄く怖かったって言ってた。
私達は、先輩を怒らせてはいけないはずなのに、怒らせてしまった。
私達性奴隷は、「怒らせる」と言う「罪」を犯した。だから、しっかりと罪を償わなければいけない。
猿轡を口にはめられる時、先輩が耳元で囁いてくれた。
「（しっかり反省しろよ？　……俺の大切な彼女）」
私は思わず大号泣してしまった。
こういう所だ。こういう所がずるいんだ……。
だから、どんどん、好きになっていく。
部屋を出て行ってしまう、先輩達。電気も消され、本当に室内には二人だけ。まるで存在が消されたかのよう。
先輩……私、しっかりと反省します……！　しっかりと反省して、償います！

先輩の性奴隷便器洗浄機として、お側に置いてもらいたいから！

第32話　爆乳ショートちゃんとミディアムちゃんの取り合いセックス♡♡♡（後書き）

次回予告！

本来、セックスをするはずだった爆乳ショートちゃんとミディアムちゃんは、零の怒りを買い、零の部屋で拘束される事に！
食事と水分は与えられるが、トイレやお風呂は認められない。トイレは零の部屋で漏らす。それが零の命令だった。
二人の反省期間はいつまでなのか！

そんな中、零は図書室で勉強をしている黒髪ロングの女子とお近づきに……？

次回
『清楚系後輩の子と、二人っきりで……♡♡♡』
お楽しみに！

第３３話　清楚系後輩の子と、二人っきりで……♡♡♡（前書き）

プロローグ

「ふわぁ～……」

俺は目を覚ました。ベッドの上で体を起こすと、目の前に、手首を吊るされ、猿轡をした全裸の爆乳ショートちゃんとミディアムちゃんがいた。

「二人とも、おはよう」

「お、おふぁほう、ほはいはふ……」

爆乳ショートちゃんは挨拶を返してくれる。だが、ミディアムちゃんは挨拶をしない。ただ息を切らしているだけ。

「おい。挨拶しろ」

俺がそう言うと、爆乳ショートちゃんがミディアムちゃんの足を蹴る。

「お、おふぁほう、ほはいはふ……」

ミディアムちゃんは、かろうじて声を絞り出し、挨拶をする。

なんか、この光景、ヤバいな。俺がヒドイやつになったみたい。

「瑠李。この二人に朝飯与えろ」

「ひゃ～い……」

瑠李は寝起きの状態で返事をする。

俺は制服に着替える。そして――、

「それじゃあ二人共、行ってきます」

「「いっふぇらっふぁい……」」

「うん」

俺と瑠李は、一階に降りた。

♥　♥　♥

はぁはぁ……。
先輩が起きた。挨拶をしてくれる。もちろん返事をした。でも、隣の子が返事をしない事に怒っている。
もう！　なんで挨拶しないの！　ん！
私は、隣の子の足を蹴る。すると返事をした。
この子は自分が反省する立場だと、罪を償わなきゃいけない立場だと分かってない。
この子は多分、なんでこんな事になってるのかが分かってないんだと思う。
私のせいでもあるけど、この子もこの子で反省しなければならない。
あ、先輩が着替え始めた……♡　先輩ってそう言う風に着替えるんですね……♡
ズボンを穿く前に、パンツの中でおちんちんと玉玉さんを直してから穿くんですね……♡
あぁ……形が浮き出て……♡
はっ！？　ダメダメ！　今は反省しなきゃいけないんだから！
「それじゃあ二人共、行ってきます」
「「いっふぇらっふぁい……」」
気をつけてください……先輩♡

第３３話　清楚系後輩の子と、二人っきりで……♡♡♡

「さぁ～てと、どうしますかね」
放課後。瑠李は部活があるので一緒にはいない。と言うか、みんな大体が部活をしてるから、今は俺一人だ。
「久々に本でも読みますかね～」
俺は図書室に来ていた。
図書室に来ると、爆乳ショートちゃんと初めてした事を思い出す。
今頃二人、どうしてんのかなぁ～。まぁ、義母さんに食事と水分は与えてって言ってあるから大丈夫だと思うけど。
「ん？」
とある端っこの席。そこに一人で本を読む女子がいた。
綺麗な黒髪ロングで、制服も着崩したりしていないいわゆる清楚系と言われる女子だ。
こんな子、いたんだ……。
「あの」
「っ！？」
見てたの、バレた！？
「わ、私に何かご用、でしょうか……？」
「あ～いや、その……」
どうする？　このまま素直に君とエッチしたい！　って言ってみるか？　でもな～こんな世界でも、清楚系女子はエッチが嫌いかもしんないからな～……。
「私と、したい……ですか……？」
「へっ！？　あ、いや、その……」
「私で良かったら、その……し、シて、もらえ、ない、です、か……？」
「い、いいの……？」

「はい……その、私、実は……」
「ん？」
清楚系女子は、椅子を少し引き、俺の方を向く。そして、この学校で初めて見るロングスカートを、足を開く事で捲っていく。
その下には、白のパンツがあった。それだけならいいが、なんと、そのパンツの中には――、
「ろ、ローター……」
「はい……」
この子、清楚系に見えて実はめちゃくちゃド淫乱だ！　マンコにローター仕込んで、図書室で本読んでるなんて、やばすぎるだろ！
「ここで、いいの？」
「いえ……ここだと、その……声が出ちゃって恥ずかしいので……私のお家で……」
うん！　可愛い！！！
「いきなりお邪魔しちゃって、大丈夫？」
「はい……親はどっちも海外にいて、一人暮らしなので……」
「そっか。じゃあ、お邪魔しようかな」
「はい……♡」
そうして俺達は、学校を後にした。

♡　♡　♡

今俺は、清楚系女子と一緒に下校していた。
「大丈夫？　ローター挿れたままだと歩きにくくない？」
「ご心配ありがとうございます……でも大丈夫、です……毎日やってたら、慣れちゃいました……♡」
「毎日……すごいね」
この子、予想以上に変態だ！
「着きました。ここ、です……」
「おぉ～」

一軒家で、中々に豪華な家だった。海外で働いてるって事は、何気にお嬢様なのかな？
「お邪魔しま～す」
玄関をくぐり、中に入った途端――、
「んむ！？」
「ぢゅる……♡」
清楚系女子がいきなりキスをしてきた。
「ぷはぁ……♡　すみません、いきなり……」
「い、いや、大丈夫。ビックリしたけど……」
「ごめん、なさい……私、本当はエッチなんです……だから、先輩を見かけた時からずっと我慢してて……」
あ、この子後輩だったんだ。
「でも、お家入ったらもう、我慢ができなくなってしまって……」
「うん。大丈夫。正直、俺ももう我慢の限界だから」
「あ……♡　嬉しいです……♡」
俺は、清楚系女子の手を取り、股間に導く。俺の勃起した股間に触れた清楚系女子は、嬉しそうに笑みを浮かべた。
「ここで、する？」
「それも素敵、なんですけど、その……初めては、お風呂で、したくて……」
「ふ、風呂……？　部屋とかじゃなくて……？」
まさかの提案で、かなりビックリしている。
「はい……♡　その……シャワーを浴びながらお互いに体を弄（まさぐ）り合って、ボディソープを塗りたくってヌルヌルになって、そのままイかせ合うのが夢だったんです……♡」
「そ、そうか……」
この子……めちゃくちゃド変態だな……！　こう言う清楚系が変態って本当にそそるんだよな……！
「だ、駄目です、かね……？」
「そんな訳ないだろ。そんな変態プレイをしてくれるなんて、君は

最高だ！　さぁ風呂に行こう！」
「は、はい！」
俺達は風呂へ向かった。

♡　♡　♡

俺達は今、洗面所で服を脱いでいる。
こ、この子……着痩せするタイプか……！
お、おっぱいが……おっぱいが……おっぱいが……デカい！！！
女子のカップ数なんて全然詳しくねぇけど、多分H以上はあんじゃねぇかな……！
円錐型のおっぱいで、乳首が濃い色をしてて、乳輪が薄いピンクをしている。その薄さが乳首の色の濃さを際立たせて、エロさを醸し出している！
「ん？　先輩？」
「あ、悪ぃ……おっぱいがエロくて、ついつい見入っちまってた……」
さすがに怒られるかな……？
「はぁ～～♡　嬉しい、です～♡　先輩が私のおっぱいを見て、くれる、なんて……♡　幸せすぎます♡」
「お、怒らないのか……？」
「怒る、だなんて、とんでもない！　わ、私の体は先輩に見てもらう為にあるんです……♡　なので、沢山見て、沢山触ってください……♡」
可愛いなぁ～！　もう！
「じゃ、じゃあ、お尻も見せてくれ！」
「もちろんです……♡」
清楚系女子は、スカートを脱ぎ、パンツを脱いでいく。と、ローターのコードがマンコから伸びているのが見える。マッジでエロい！
「せ、先輩……♡　どうですか……♡」

「おぉ……！」
清楚系女子は全裸の格好で、後ろを向き、巨尻をこっちに突きつけてくる。
「お尻もデカいとか、エロすぎだろ、君……！」
俺はついつい、巨尻を両手で鷲掴みにしてしまった。
「んっ……♡」
「ごめん、勝手に……！」
「いえ……♡　気にせず、お好きなだけ触って揉みしだいてください……♡」
「だったら、遠慮なく……！」
「んんっ……♡」
俺は清楚系女子の巨尻を、開いたり閉じたり、上下左右に動かしたりして、その感触を楽しむ。
その度に、清楚系女子は吐息を漏らす。
「なぁ、これ抜いていいか？」
「は、はい……♡　先輩に抜いてもらえるなんて、幸せです……♡」
「じゃあ抜くぞ」
「はい……♡　んっ……♡」
俺は、ローターを抜く。すると――、
「んきゅぅ！？　んんぅぅぅ～～～♡♡♡」
清楚系女子はイったようで、潮を吹いた。
「はぁはぁ……♡」
足をガクガクさせる清楚系女子。
「だ、大丈夫か……？」
「は、はひ……♡　人に……先輩にローター抜かれるのってこんなに気持ちいいんですね……♡　ローターを抜いただけでイったの、初めてです……♡」
え、エロい……！
「じゃあ、風呂入ろう」
「はい……♡　先輩のおちんちん、もうパンパン……♡」

俺達は、風呂に浴室に入った。

♡　♡　♡

「んちゅ……♡　むちゅ……♡　れるぅ……♡」

俺達はシャワーを浴びながらキスをしていた。

「じゅる……♡　えるぅ……♡」

清楚系女子は、俺の舌に離さないと言わんばかりに吸い付き、唾液を奪っていく。

俺の唾液は、清楚系女子の口の中に入り、清楚系女子はそれを飲み込んでいく。

「んんっ♡　んむぅ……♡」

俺は清楚系女子のマンコを触り始める。すると、清楚系女子も俺の勃起チンコを触ってくる。

「んんっ……♡　んむぅ♡　んふぅ……♡」

キスをしながらなの為、くぐもった喘ぎ声を漏らす清楚系女子。それがまたエロくて、俺のチンコはさらに膨張してしまう。

「ふぅ……♡　んむぅ……♡」

清楚系女子は、俺の手マンに感じているのか、鼻息を荒くし始めた。

そして――、

「んんっ！　んむぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

清楚系女子は、全身をビクビクさせる。膣（なか）も締まりがよくなり、痛いくらいに俺の指を圧迫してくる。

「ぶはぁ……はぁはぁ……」

「イッた？」

「は、はい……す、すみません……ひ、一人で勝手にイッて、しまって……」

「そんなの気にしなくていいよ。気持ちよくなってくれて嬉しいから」

「先輩はとても優しいんですね……♡　せ、先輩……」
「ん？」
「体、洗わせて頂いても、い、いいですか……？」
「あぁ。もちろん。頼むよ」
「は、はい……♡」
俺は立ったまま、清楚系女子に体（主にチンコ）を洗われる事になった。
清楚系女子はしゃがみ込み、手にボディソープをたっぷり付け、それを俺のチンコに塗ってくる。
クチュクチュ……♡　クチャクチャ……♡
清楚系女子が、俺のチンコを扱いたりする度に、卑猥な音が鳴る。ボディソープの泡立つ音なのだが、人にされてるとエロく感じる。
「せ、先輩のお、おちんちん、あ、泡だらけになって、す、すっごくエッチ……♡」
君の方がエッチですよ。
「んふふ♡　せ、先輩のおちんちんを、し、シコシコしてる……♡　ゆ、夢みたい……♡」
清楚系女子は、手コキがよっぽど楽しいのか、嬉しそうに扱いていく。
亀頭を責めたり、裏スジを撫でてきたり、カリ首を扱いたり、鈴口をなぞったり。
色々な責め方をしてくるから、正直、限界が近づいてきてしまっている……！
その上、ボディソープでヌルヌルだから、余計に我慢ができない！
「ご、ごめん……！　俺、もう――！」
ドピュルルルルルルルルルルルル！！！
「んきゃ！？」
出ると言う前に、大量の精液を発射してしまった。暴発だ。
精液は勢いよく噴射され、清楚系女子の顔面にヒット。鼻先や頬、口許を汚した。

「ご、ごめん……！　顔に……！」
「いえ……♡　う、嬉しい、です♡　せ、先輩のせ、精液……お顔でう、受け止める事ができて、し、幸せです……♡」
ビュル！　ビュッビュッ！
「うっ……！」
清楚系女子が、可愛い事を言いながらも手コキを止めないので、俺は残りの精液を小刻みに射精してしまった。その全てが清楚系女子の顔にかかった。
「はぁ～……♡　し、幸せですぅ……♡」
「そんなに喜んでもらえるなんてな」
「い、嫌、でしたか……？」
「嫌な訳ないだろ？　めちゃくちゃ嬉しいよ」
俺は清楚系女子の頭を撫でてやる。
「っ～～～～～～♡　あ、頭撫では反則ですよ……♡　私、軽くイッっちゃいました……♡」
マジで！？　俺、頭撫でただけなんだけど！？　この子、本当にヤバいな！
「じゃ、じゃあ、流しますね♡」
「あぁ」
清楚系女子は、シャワーを出し、俺のチンコの泡を流していく。俺のチンコにシャワーを当てる前に、自分の手で温度を確認してくれる所、結構嬉しいな。こういう気遣いができる子ってポイント高いんだよな。
「せ、先輩、あ、熱かったり、冷たかったり、しませんか……？」
「あぁ。大丈夫だ。ありがとうな」
「えへへ～♡」
清楚系女子は、チンコを丁寧に洗い流してくれる。そして、洗い流し終わった後――、
「あんむ♡」
「おっ！」

清楚系女子が、シャワーを壁にかけた後、手も使わずにチンコを咥えてきた。
「んむぅ♡　えるぅ♡　れるぅ……♡」
手を使わずに、ずっと舐め続けてくる。
口の中で、亀頭を舌で刺激してきて、ここからじゃよく見えないが、頭を前後に動かす時に、舌が口から出て、ドエロい感じになってると思う。
裏スジに舌がめちゃくちゃ当たってるのが分かる。
「えるぅ♡　れるぅ♡　ジュブッ♡　ジュボッ♡」
「くっ……」
この子、手コキもそうだったけど、フェラもめっちゃ上手いな！
さっきイッたばっかりなのに、またイッちまいそうだ！
「ご、ごめん！　また出る！」
ドビュルルルルルルルルルルル！！！
「んぶっ！？　んんっ……♡　んくんく……♡」
清楚系女子は、驚きながらも俺の射精を口で受け止めてくれる。
そしてそのまま嬉しそうに、そして美味しそうに、吐き出され続ける精液を飲み込んでいく。
「んくんく……♡　ちゅぽん♡　先輩の精液、とっても美味しいです……♡　せ、精液って、こ、こんなにも美味しいんですね……♡
ずっと、飲んでいたいです♡」
それみんな言うね。
「ねぇ」
「はい？」
「お風呂でおしっこしたら、やっぱりまずいよね？」
「お、おしっこしたいですか……？」
「う、うん……ごめん……」
「あ、謝らないで、くだ、さい……！　お、おしっこ、してください……でも、だ、出す、のは……わ、私のお口のな、中に、お願い、します……♡」

「い、いいのか？」
「は、はい……♡　せ、先輩の、おしっこ、飲ませて、ほしい、です……♡」
「分かった。じゃあ、咥えてくれ」
「はい……♡　はむ♡」
清楚系女子が俺のチンコを咥える。
「出すぞ」
「ふぁい♡」
「くっ……！」
ぷしゃあああああああああああああ！！！
「んんっ……！　んくんくんく……♡」
俺のおしっこを飲んでいく清楚系女子。やっぱりおしっこ飲んでもらえるのってすげぇ嬉しいよな。ん？
ぷしゃあああああああああああ♡
「おぉ！」
清楚系女子は、俺のおしっこを飲みながら放尿を開始した。M字開脚でしゃがんでる清楚系女子。その尿道からおしっこが出てくる。
「エロいな」
「んくんくんく……♡」
この子……おしっこ飲みながら亀頭を舐めてくる……！　ヤバすぎる……！
ぷしゅ♡　ぷしゃあああああああああ♡
清楚系女子はさらにおしっこを漏らす。そのおしっこが俺の足にかかっているが、それはとても心地良い感じがした。
俺も、爆乳ショートちゃん達のおしっこ飲んだりしてやろうかな？
「ごくん♡　先輩、ご、ご馳走様、でした♡　あと、お、おしっこ漏らして、ご、ごめんなさい……先輩に、かけちゃって……」
「いんや。気にするな。君のおかげで新たな性癖に目覚める事ができた。だから、謝る必要はない。それと、俺は女のお漏らしが大好きだ！　だからこれかも我慢せず、どんどん漏らせ！」

「は、はい……♡」

♡　♡　♡

「はぁ～……」

俺は、湯船に浸かっていた。

「せ、先輩、は、入ってもいいですか……？」

「ん？　当たり前だろ？　ここは君の家の風呂だ。入っていいに決まってんだろ？　ほら、ここおいで」

「は、はい……♡」

清楚系女子は、俺の前に入ってくる。丁度股間の辺りに座ってくる。

「ふふ。君って、いい匂いだな」

「えっ！？　ほ、本当、ですか……！？」

「あぁ。ずっと嗅いでたいくらいだ」

「っ！？　じゃ、じゃあ……今日はずっと、か、嗅いでいてください……♡」

「ずっと？　泊まっていっていいのか？」

「も、もちろん、です……♡」

「じゃあ、泊まる～」

「（せ、先輩が、こ、子供みたいに……♡　か、可愛い……♡）」

この後俺は、清楚系女子の家に泊まった。

だが、セックスはしなかった。清楚系女子がフェラにハマったからだった。

あ……爆乳ショートちゃんとミディアムちゃん忘れてた。……

……ま、いっか。

第３３話　清楚系後輩の子と、二人っきりで……♡♡♡（後書き）

次回予告！

『先輩！　よろしくお願いします！』

零が、一年生の教室に！

「お前ら、全員マンコ開け！」

『はい！』

後輩女子達が、全裸でマンコを開き、零のチンコを求める！

「一年生、制覇してやる！」

次回

『一年生達と、代わる代わるヤリまくり♡♡♡』

お楽しみに！

第３４話　一年生達と、代わる代わるヤリまくり♡♡♡（前書き）

プロローグ

俺は、久しぶりに夢を見ていた。

その夢は、とある広い家――豪邸で、姉ちゃん、燐、桃、義母さん、義叔母さん、爆乳ショートちゃん、瑠李……俺が今まで関わってきた女子達が全裸で過ごしている。さらには、見たこともない女子達もいて、俺の言う事は何でも聞いて、なんでもする。

俺は悟った。これは未来の出来事だって。

今までにもこんな事があった。そして、その全てが未来に起こる事だった。

だから、この夢も未来の出来事なのだろう。

だとしたら、この未来は楽しみだ。

と、思ったところで俺の意識は覚醒した。

「んん……？　おはよう」

「んちゅる……♡　あ、おはよう、ご、ございます、せ、先輩……♡」

「朝フェラしてくれてんの？」

「は、はい……♡　め、目が覚めたら、せ、先輩のおちんちんが、大きくな、なってて。そ、それを見たら、が、我慢ができなくなって……ご、ごめんなさい、勝手に……」

「いや。いいんだ。好きな時に好きなだけしゃぶってくれ」

「っ♡　あ、ありがとう、ございます……♡」

俺はこの後、清楚系女子に２発抜かれた。

♡　♡　♡

「ふんふふ～ん♪」

浴室では清楚系女子がシャワーを浴びている。俺は、洗面所で全裸のまま電話をかけていた。
『もしもし、お兄ちゃん？』
「おう、燐。おはよう」
『おはようございます！　朝からお電話なんて、珍しいですね。何かありましたか？』
「あ～いや。特段これといって何もないんだが……」
『お兄ちゃん？』
「その～……二人はどうだ？」
『二人……？　あぁ～あのおバカ達ね』
おバカて。
『ママが定期的にご飯と飲み物もあげてるから大丈夫ですよ～。拘束はもちろん外さないですけど、ちゃんと眠れてるみたいですし、全然心配いらないですよ？　るいるいも監視してくれてますし』
「そ、そうか……そ、それならいいんだ」
『ふふ♡　お兄ちゃんは本当に優しいですよね♡　性奴隷へ罰を与えてるのに、体を心配してくれるなんて♡　そういう所が大好きです♡』
「お、おう。ありがとう。瑠李に代わってもらっていいか？」
『るいるいですか？　ちょっと待ってくださいね～』
電話越しに燐が、水を流し、ドアを開ける音が聞こえる。
燐のやつ、トイレ中だったのか。ヤベ、勃ってきた。
『るいるい、お兄ちゃんから』
『え！　零君から！　もしもし』
「おう、朝から元気だな」
『うん！　あなたのペットは今日も元気です！　どうしたの？　電話なんて珍しいけど……』
「あぁ。まぁ、ちょっと奴隷の状態の確認をな」
『あぁ～なるほど。二人はね……』
「あ、それはもういいんだ」

『え？』
「それは燐に聞いたから。今はお前に用があってな」
『わ、私に！』
「あぁ。……ちょっと頼みがあってな」
『ん？』
俺は瑠李に、とある頼み事をした。

第３４話　一年生達と、代わる代わるヤリまくり♡♡♡

「それでは先輩、また後で」
「あぁ。また後で」
清楚系女子は、ペコリとお辞儀をして一年の教室へと向かって行った。
「さてと……うぉ！？」
急に後ろから抱きつかれた。
「ってお前か」
「おっはよう！　れいれい！　勃ってる？」
「おはよう。あぁ。妹のせいで常にな」
「じゃあ、私達でスッキリする？」
金髪女子が俺の背中に抱きついた後、すぐに降りてくれる。そして、当たり前のように俺の右腕に抱きついてくると、左腕に茶髪女子が抱きついてきた。
この二人っていつも一緒にいるよな。本当に仲がいいんだな。……ちょっと妬けるな。
「ん？　どったのれいれい。私、なんか怒らせるような事しちゃった……？　だ、だとしたらごめんね……！？　私、れいれいに嫌われたら生きていけない……」
「あ、いや、別に怒ってないから大丈夫だ。ちょっと二人が仲いいのが妬けるなって思っただけだから」
やばいやばい。嫉妬が顔に出過ぎていたみたいだ。
「そう、なの……？　よかった～……！てっきりれいれいを怒らせる重罪を犯しちゃたかと思ったよ～……」
「悪ぃ悪ぃ。君は、一度俺を怒らせたけどな？」
「っ！？　は、はい……あの時の自分を呪いたいです……」
茶髪女子がシュンとなる。

「ん……♡」
俺は、茶髪女子のパンツの中に手を突っ込み、マンコを弄る。
「呪う必要はない。あの時の事があったから、俺とお前はより親密になれた。だろ？」
「は、はい……♡　んん……♡」
「あ～！　ずるい～！」
「じゃあ二人共、トイレに来い。俺のおしっこを飲ませてやる」
「やった～！」「れー君のおしっこ……えへへ……♡」
俺達はトイレに移動する。
「よし、跪け」
「「はい♡」」
二人は、狭い個室の中で俺の前に跪く。俺はチンコを出す。すると、二人は待ってましたと言わんばかりに、口を大きく開く。
「じゃあ出すからな。しっかり飲めよ」
「「ふぁい……♡」」
「んっ」
ぷしゃあああああああああ！
「「んっ……！　んくんく……♡」」
二人が俺のおしっこを飲んでいく。移動させる度に二人の顔におしっこがかかっていく。
そういや、茶髪女子が俺のおしっこ飲むのって初めてか？
「「んくんく……」」
「ふぅ～すっきりした～」
「「ごくん。ご馳走様でした♡」」
「あぁ」
「ねね、どうだった？」
「れー君のおしっこ、とっても美味しかった……♡　なんで今まで飲んでなかったんだろう……水筒に入れて持ち歩きたい……♡」
「それな！　れいれいのおしっこ美味しすぎんだよね！　ずっと飲んでたいもん！」

なんか、嬉しい事言ってくれてんな。
ピコン。
「あ、悪ぃ。このあとちょっとやる事あってさ。ここで」
「あ、うん。今日はおしっこありがとうね♡　また飲ませてね♡」
「わ、私にも……」
「あぁ。いつでも飲ませてやるよ。じゃな」
「「ばいば〜い」」
俺は女子トイレから出る。
「瑠李」
「あ、零君！」
トイレから出ると、全裸に首輪と言う俺の大切なペットがいた。
「頼まれてた事、準備できたよ」
「サンキュー。じゃあ瑠李、一緒にきてくれ」
「うん！」
俺達二人は、一年生の教室へと向かった。

♡　♡　♡

「みんな、おはよう」
『おはようございます！』
俺と瑠李が一年生（清楚系女子がいるクラス）の教室に入り、挨拶をすると、全員が立ち上がり、挨拶を返してくれる。
「突然なんだけど、今から君達を犯して行きたいと思う」
『っ♡』
俺がそう言うと、一年生達の目が輝き出した。
「全員平等に犯してあげるけど、その前に、今から配るものを飲んでほしい」
俺が瑠李に目配せすると、瑠李は紙コップにピンク色の液体を注ぎ、皆に手渡していく。
「みんな行き届いたかな？」

『はい！』
「じゃあ、全員、飲め」
『ごくごく……』
俺の合図で全員が、ピンク色の液体を飲み干す。と、その効果はすぐに現れ始めた。
『っ！』
女子達の頬が赤くなり、足が震え始める。目もトロンとし始め、全員がエロい表情を浮かべる。
「今みんなに飲んでもらったのは、強力な媚薬だ。一滴口に含むだけでも性欲が爆発し、セックスのことしか考えられなくなる。それをみんなには紙コップ一杯分飲んでもらった。つまり、今君達は、強制的に発情させられ、エロいことしか考えられなくなった」
『っ♡』
「じゃあ、今からシていくから。まずは一番前の席の君からだ」
「は、はい……♡」
ボブヘアが可愛い女子を教卓の所に呼ぶ。
上手く歩けないボブちゃんを、瑠李がサポートする。全裸女子が発情女子をサポートって、エロすぎだろ。
「よ、よろしくお願いしま――きゅぅぅんっ♡」
俺はお辞儀をしようとしたボブちゃんのおっぱいを、鷲掴みにする。すると、それだけでボブちゃんはイッてしまったらしい。
「君、おっぱいでかいね。何カップあんの？」
「じ、Gです……♡」
「おぉ～」
「私もGだからねっ！」
瑠李が謎の対抗心を燃やしてアピールしてくる。ジャンプしておっぱい揺らすの止めぇ。
「お前がデカいのは分かってる。俺が一番最初に好きになったおっぱいだからな」
「っ♡　えへへ～♡」

こいつは本当にチョロいというかなんと言うか……。
さて。
「じゃあ、おっぱい見せて」
「は、はい……♡」
ボブちゃんはYシャツのボタンを外していく。そして、おっぱいを出してくれる。もう我慢できません。
「んひゃあああああ♡」
俺は、綺麗なピンク色をした乳首に、思い切り吸い付いた。
「ちゅ〜ちゅ〜」
「んひゃぁぁんっ♡　あああああんっ♡」
あ〜乳首ってやっぱり最高だな。茶髪女子の乳首を弄ってから俺の中で、乳首開発の癖が目覚めつつある。
俺は乳首から口を離し、ビンビンに勃った乳首を指先で弾いてやる。
「んきゃぁぁぁぁんっ♡♡♡」
強めに弾いた為、痛くなかったかなとか心配したが、そんな心配は無用だったようだ。
ボブちゃんは乳首を弾かれ、イッてしまった。
「はぁはぁ……」
「ほら、休んでる暇はないぞ。しゃぶれ」
「んぶぉ゛　ぶぉ゛　！？」
俺は、乳首イキをして、ヘタリ込むボブちゃんの口の中に、思い切りチンコをぶっ込んだ。
「瑠李」
「は〜い♡」
「ぐぶぶぅ゛　！？」
俺が声をかけると、俺の意図を察した瑠李が、ボブちゃんの頭を後ろから思い切り押さえつける。
それにより、ボブちゃんは強制的にチンコを喉奥まで挿れる事となった。

「んごぉ　！　んごぉ　！　ぶごぉ　！」
しかも、俺が腰を動かすので、喉奥を何度も突かれる。瑠李に頭を押さえつけられている為、自分の意思で動かす事ができない。
「うぐっ　！　ぐぶっ　！」
その為、何回もえずいている。口の両端からは唾液と胃液、俺の我慢汁が混ざったモノが溢れている。
「す、すごい……♡」「あれが、零様のおちんちん……♡」「あれでサれたら、すぐにイッちゃいそう……♡」
など、教室にいる女子達は俺達のプレイに釘付けになっていた。
「君達。ただ見ているだけじゃ駄目だよ。オナニーをして、準備を整えときなさい。あ、もちろん、イッちゃ駄目だからね？　イッたら俺とのセックスは無しだ」
『は、はい！』
クラスの女子達は、俺の指示に従い、オナニーを始めた。
「瑠李、アレを」
「はい」
瑠李は、小瓶を紙包から取り出し、オナニー中の女子達にかけていく。
制服が汚れるが、そんな事はどうでもいい。
「な、何、これ！」「い、いつもより気持ちいい！」「か、感じ過ぎちゃう！」
女子達は、自分たちにかけられた液体に驚きの声をあげる。
「それは媚薬入りのローションだ。媚薬を飲んだ後に媚薬を塗られると、ヤバい事になる」
俺が体験済みだからな。ま、今回使用したのは会長達よりも効果が低いモノだから、俺みたいに大変な事になることはない。
「あっあっあっ！　あああああ！　駄目ぇ！　これ、勝手にイッちゃうぅ！」
「お、オマンコが勝手に開いて、勝手にイク体勢に入っちゃうぅ！」
女子達は、全員が揃いも揃って派手にイキまくる。全員、潮を吹

いたり失禁したり。もう大惨事だ。
「こらこらお前ら、勝手にイッたら駄目だって言ったろ？」
『ご、ごめんなしゃいいいい！？』
でも分かる。媚薬と媚薬の相乗効果ってヤバいんだよな。
「ったく。そんな君達にはお仕置きをしなきゃな。みんな！」
『は～い！』
俺が廊下に声をかけると、金髪女子、茶髪女子、眼鏡女子、副委員長、先生が入ってきた。
さらには、俺のクラスの女子達もいる。
「そいつらにお仕置き、頼むわ」
「まっかせて～れいれい！」
「れー君の頼み……必ず遂行する！」
「零様が私達を頼ってくださるなんて！　こんな光栄な事ありません♡」
「全身全霊で、この役割を果たさせて頂きます！」
「久しぶりに呼んでもらえたと思ったら、お仕置き係……もう、零様は意地悪です……この思いを、この子達にぶつけるわ」
「瑠李もたのんだぞ～」
「は～い！　零君のペット瑠李！　頑張ります♡」
「君達もな」
『は～い！』
そうして、俺の女達が、一年の女子達にお仕置きを開始した。
一年生達は、気を失うまでイカされまくった。ちなみに、清楚系女子は、瑠李からお仕置きを受けていた。
瑠李は清楚系女子に嫉妬をしていたようで、他の女子よりも執拗に責め立て、清楚系女子は白目を剥いてイキ果てていた。

♡　♡　♡

「んぼぼぉ〝〝お〝〝！　ぎゅぼぉ〝〝ぼぉ〝〝おぉ〝〝！」

俺にイラマをサれ続けるボブちゃん。目は蕩けきっており、この子は俺のイラマ女と化した。
「出るよ。全部飲んで！」
「ぶぼぉ゛！　ぐぼぉ゛！　ぐぼぉ゛ぉ゛！！」
イキそうなので、俺はボブちゃんの頭を力強く押さえつけながら腰を激しく動かす。
あ～これは本当に無理だ！
「出る！」
ドビュ！　ドビュル！　ドビュルルルルルルルルルルルル！！！
「んぶぶぼぉ゛！？　んぶぅ゛……！　んぎゅっ゛……♡」
俺は、ボブちゃんの喉奥のさらに深いところで射精をした。
精液は、直接喉の下に送られ、ボブちゃんの意思関係なく飲み込んでいく。
「ぐぎゅぅぅぅ……！　ぎゅぼっ゛！」
口の中で精液が溜まっていくので、逆流してくる音が鳴った。それでもボブちゃんは、俺の精液を頑張って飲み込もうとしてくれる。
この健気さ……俺、マジで感動だわ！
「ぐぎゅぅぅぅ……っぽん♡　ごほごほ……」
射精を終えた俺は、ボブちゃんの口からチンコを引き抜く。すると、チンコと口の間に白い糸が引いた。
さらに、引き抜く時にめちゃくちゃエロい音が鳴った。
「ご、ごめんなさい……こ、こぼしちゃいました……」
「そうだな。俺の精液をこぼすとはいけないな」
別に大丈夫なんだけど、ここは心を鬼にして！
「よし。ケツこっち向けろ」
「はい……♡」
ボブちゃんは立ち上がり、黒板に手を突きケツを突き出してくる。
「おっぱいだけじゃなく、ケツもデカいとか。最高だな」
「んんっ……♡」
俺はボブちゃんのケツを撫で回す。すると、可愛らしい声を漏ら

す。
「挿(い)れるぞ」
「は、はい……♡　んんっ♡　あああああ♡」
俺はチンコをマンコにぶち込む。
「君の膣(なか)めちゃくちゃキツイな……少し動くとすぐに出ちまいそうだ……」
「りゃ、りゃしれくりゃしゃい……♡　いちゅでもぉぉ♡」
「じゃあ、出すぞ！　んっ！」
ドビュルルルルルルルルルル！！！
「んきゃあああああああ♡♡♡　にゃ、にゃかだししゃれて、イッちゃうぅぅぅぅ！！！」
ボブちゃんは俺の中出しでイッたようだ。膣(なか)がめちゃくちゃ締まってくる……！
やべぇ！　これでまた……！
「出る！」
ドビュルルルルルルルルルル！！！！
「んひゃあああああ♡　子宮にビシャビシャかかってるぅぅ！！　先輩の、ザーメン最高ぉぉ♡♡」
「はぁはぁ……」
ボブちゃんは、へたり込んでしまった。チンコが抜ける時もめちゃくちゃ気持ちよくて、俺は精液をボブちゃんの頭に思い切りかけてしまった。
やべ。髪の毛にかかっちまった。……ま、いっか。
「ん？」
俺が後ろに気配を感じて後ろを振り向くと、そこには全裸になった女子達が並んでいた。足をガクガク震わせた状態で。
「え、えっと？」
「みんな、れいれいとしたいんだって。お仕置きしてるのに全然駄目」
「れー君ごめん……役に立てなかった……」

そういう事か。お仕置きをしてたけど、一年たちが俺としたすぎて、絶倫化したと。
まぁ、これはみんなのせいじゃないからな。だが。
「じゃあ、お前ら後で仕置な」
「「「「「「っ♡」」」」」」
俺の言葉に、瑠李、金髪女子、茶髪女子、眼鏡女子、副委員長、先生が目をハートにさせた。
その他の同級生達も、、目をハートにして全身を震わせている。
「じゃあ、お前らの仕置は後にするとして、まずはお前らだ」
『は、はい♡』
こうして俺は、整列した一年達を次々犯しまくって行った。

♡　♡　♡

「あああああ！　先輩ぃぃ♡♡♡」
巨乳双子の姉を。
「んきゃあああああ♡　しぇんぱいしゅぃぃぃぃ♡」
巨乳双子の妹を。
「せ、先輩……♡　き、気持ちよすぎますぅぅ♡」
自称陰キャ後輩を。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁ♡　先輩のチンポ、しゅごしゅぎぃぃぃぃ♡♡♡」
自称陽キャ後輩を。いや、これは自称じゃないか。見た目からして陽キャだから。
「ダメダメダメぇぇぇぇ！！　私、馬鹿なのに、もっと馬鹿になっちゃうぅぅ！　おちんちんの事しか考えられなくなっちゃいますぅぅぅ♡♡♡」
勉強ができないおバカ後輩を。
「にゃめぇぇぇぇぇぇぇ♡♡♡　みゃりゃ、イッひゃうぅぅぅぅ♡♡♡」

爆乳……天然ちゃん？　を。
「ひゃあああああ♡　ひゃあああああん♡　お、お尻、いっぱい虐めてくりゃしゃいいいいいいい♡」
巨尻ツインテールちゃんを。この子はお尻がでかいのでスパンキングしながら。
「せ、先輩のオチンチン、凄い……思ってたのと違ったぁぁぁぁぁぁ！！」
ツンデレ（ツンは弱め）ポニーテールちゃんを。
「ち、乳首つまみながら突くのらめぇぇぇぇぇ！！！　イキまくっちゃうぅぅぅ♡♡♡」
赤髪女子を。

結果から言います。めちゃくちゃ最高だったぜ！
犯しても犯しても次がいる。もう、幸せ過ぎて死んじまうんじゃねぇかと思った。
清楚系女子のクラスは制覇だ。他にも一年のクラスはあるからな。
「よし。このまま他のクラスも犯しまくりだぁ！！」

俺はこの後、四クラスある一年を全員犯しまくった。
はい。正直めっちゃ疲れました。

第３４話　一年生達と、代わる代わるヤリまくり♡♡♡（後書き）

次回予告！

「せ、先輩！？」

『今度は、私達のターンですよね？』

先輩達が零に迫ってくる！

「あの馬鹿達がしでかした事、本当にごめんね……でもその変わりに、私達が零君を、癒してあげるから♡」

「は、はい……！」

珍しくタジタジになる零！　先輩にしかない大人っぽさにメロメロに！？

次回

『上級生達は、変態度が桁違い♡♡♡』

お楽しみに！

白下家の日常　零のいない所で……♡♡♡

零が、清楚系女子の家でよろしくやってる時、白下家では。
「ねぇ～ママ～。お腹空いた～」
「全く……朝からあんたは……」
燐がソファに寝っ転がり、義母に対して食事を要求している。義母は洗濯カゴを持っている。
「私が苦手な家事してんだから、ちょっとは手伝いなさいよ」
「え～……家事とかだるい～……家事って男の子がやるんでしょ？女は外で働くんだから、いいでしょ～」
「あんた、それ零ちゃんの前でも言えんの？」
「っ！？」
「零ちゃん、そういう発言する子、嫌いだと思うな～」
「そ、それは……」
「あ～あ、燐ちゃんは零ちゃんに嫌われちゃうね～」
「うっ……うぅ……」
「あ……え、えっと……」
燐は涙を浮かべてしまった。
「ま、ママの意地悪！」
「あ、燐ちゃん！」
燐は階段を駆け上り、部屋に行ってしまった。
「ちょっと、やりすぎちゃったか……」
義母は反省していた。が――、
「零ちゃんのパンツ……ちょっと使っちゃお♡」
すぐに切り替え、部屋に行き、零のパンツでオナニーを開始してしまった。

♡　♡　♡

「うぅ～……！」
「燐ちゃん？」
「るいるい……」
燐の部屋に全裸で首輪の瑠李が入って来た。
「どうしたの……？」
「ま、ママに、意地悪されたのぉ～……！」
「お、おぉ……！？」
燐が瑠李に抱きつく。
「よしよし」
「うえ～ん……！」
瑠李は優しく燐を抱きしめ、頭を撫でてやる。

「落ち着いた？」
「うん……」
「確かに、家事は男子がして、女子が働くって言うけど、零君はそういうのこだわらない感じするもんね。でも、それを零君に言ったとしても、怒ったりはしないと思うよ？　だから、そんなに落ちこまないで」
「う、うん……お兄ちゃん、怒らない……？」
「うん。大丈夫だと思うよ？　零君が優しいの、燐ちゃんも知ってるでしょ？」
「うん……！　知ってる……！」
「怒らせると、すっごく怖いけどね？」
「ふふ。だね」
燐は元気を取り戻した。

♡　♡　♡

その日の夜。

「燐ちゃん？　ごめんね？　ママ言い過ぎちゃった……」
「ううん。私も馬鹿だった。ごめんね」
「うんうん。何があったかは分からないけど、仲直りしてくれてよかった」
夕飯を取る為、机を囲んでいるみんな。
燐と義母は仲直りをした。華はよく分かっていなかったが、二人の間に何かがあったのは察していた。よって仲直りしてくれた事が本当に嬉しそうだった。
桃は何も気にせずにご飯を食べていた。瑠李は、四つん這いになり、ペット用の入れ物で食事を食べていた。もちろん、手は使っていない。
本当のペットのように、過ごしていた。
「そう言えばお母さん、あの件、どうなったの？」
桃がそう尋ねる。
「今動いてるわ。妹の権限を使えるだけ使ってもらってるけど、もう少しだけ時間かかるかな。もうちょっと待っててね」
「そっか……早く、行きたい……」
「みんなで行きたいね～」
「うん！　お兄ちゃんの学校に！」
この女子達は、何を計画してると言うんだろうか？

白下家の日常　零のいない所で……♡♡♡（後書き）

エピローグ

「はぁ～サッパリ～」

とある家で。

「ぷはぁ～！　やっぱ風呂上がりのビールは美味いなぁ！」

零の担任教師が、自宅のリビングのソファで、パンツ一丁と言う格好で、ビールを飲んでいる。

「はぁ～……零様から連絡ないなぁ～……」

担任教師は、スマホを見てため息をつく。

「零様、今度はいつシてくれるんだろうか……」

担任教師は、ソファの上で横になる。

「はぁ～……放置プレイは好きだけど、ここまで放置されると、流石に寂しいな……ここが寂しい……」

担任教師は口に触れる。

「精液……飲みたいな……」

担任教師は、そのままオナニーを開始した。

第３５話　上級生達は、変態度が桁違い♡♡♡（前書き）

プロローグ
「皆さん。準備はよろしくて？」
『はい！』
「我々と同学年の生徒会長と副会長が起こした、馬鹿な事件。それのせいで我々三年生の信用は、地の底です。なので、我々が行動で、零様からの信用を得る必要があります」
『はい！』
「それでは、本日、作戦を決行です！」
『はい！』

♡　♡　♡

「瑠李～？　散歩行くぞ～」
「ぶひぃ～♡」
今日は、零君のペットになってから初めてのお散歩。
お口でリードを持って、階段を降りる。もちろん四つん這いで。
「ぶひぃ♡」
「よし。じゃあ行くか」
「ぶひゅ♡」
今の私の格好は、全裸で首輪にリードを繋がれていると言う、ものすごく変態な格好。
零君が玄関を開ける。ついに、このままお外に……♡
「うぅ～結構寒ぃな……瑠李、大丈夫か？」
ペットの心配をしてくれるなんて、本当に優しいなぁ……♡
「ぶひ♡　ぶ、ぶひぶひ♡」
「大丈夫か。なら良かった」

つ、通じた！　零君凄い……♡　これが愛の力……♡
正直、寒い。寒すぎて凍えてしまいそう。四つん這いで歩いているので、手も膝も冷たくて、結構キツイ。
でも、私は零君のペット。このくらい、零君に捨てられたり、放置されたりする辛さに比べたら、屁でもない！
「ほら、遅いぞ」
「ぶひゅ♡」
あ～♡　零君がリードを引っ張ってくれる♡　首がグンッと引っ張られて、ちょっと痛い。けど、それが気持ちいい♡
「ぶ、ぶひゅ……」
「ん？　どうした？」
お、おしっこしたくなってきちゃった……。
「ぶ、ぶひゅぅ……」
私は、足を擦り付け、おしっこアピールをする。
「あ～おしっこか。いいぞ。そこの電柱にしろ」
「ぶ、ぶひゅぅ……♡」
やった～♡　許可もらえた～♡
「ぶひゅ～……♡」
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡
あ～♡　お外でおしっこしちゃってるよ～♡　しかも、大好きな零君に見られながら～♡
「あ、人来た」
えっ！？　あ、本当だ……。女の子が二人、こっちに歩いてくる。
「「え！？」」
どうも～♡　零君のペットで～す♡
「す、凄い……！　これって、ペットプレイ……？」
「こんな事してくれる男子がいるなんて……！　羨ましい……！」
女の子達は、羨ましがりながら去っていく。
へへん！　零君は特別なんだ！　私の自慢の、飼い主さんなんだから！

「ほれ、行くぞ」
「ぶひゅぅ♡」
あ〜♡　このお散歩、ずっと続けばいいのに〜♡

第３５話　上級生達は、変態度が桁違い♡♡♡

「れー君、おはよう」
「おう、おはよう。あれ？　一人？」
朝、下駄箱で茶髪女子に声をかけられた。のはいいんだが、いつも一緒にいる金髪女子がいなかった。
「うん。あの子は陸上の大会が近いから、朝から猛練習中」
「あ～なるほどな。じゃあ、一緒に教室行くか」
「うん♪」
歩き出そうとすると、茶髪女子が左腕に抱きついてきた。おっぱい……至福や～。
「ねぇ、おしっこ、出ない？」
「ん？　出るけど、飲みたいか？」
「うん。れー君のおしっこ、飲みたいな♡」
「いいぞ。トイレに行こう」
俺達は個室に入った。茶髪女子が便器に腰掛け、口を大きく開く。
「よし、今出すからな」
「うん……♡」
「んっ……」
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！
「んっく……♡　んくんく……♡」
茶髪女子の口に入り切らないおしっこが、顔や髪、体を汚していく。
「んく♡　んく♡　んく……♡」
うがいの様な音も鳴らしながら、飲んでいく茶髪女子。
おしっこが終わる。
「ふぅ」
「ごくん♡　ご馳走様でした♡　れー君、今日、一緒に帰れる？」

「あぁ。大丈夫だぞ」
「良かった♪　じゃあ、今日、一緒に帰ろ♡」
上目遣いで小首を傾げる仕草……可愛すぎんだろ！
「あぁ」
俺達は教室へと向かう……はずだったのだが。
「あ、あの～……？」
俺達は今、三年生の教室にいた。
トイレから出た所を、先輩に声をかけられ、三年生の教室へと連れてこられた。
証人？　が欲しいからと茶髪女子も一緒に連れてこられた。
「急に来てもらって、ごめんなさい。まず、私達から零様に謝罪をさせていただきたいのです」
と、銀髪ロングの先輩が言ってくる。
「謝罪……？」
「はい。私達と同学年の生徒会長と副会長が起こした事案、についてです」
「あ～」
「ん……？」
事情を知らない、茶髪女子は首を傾げている。
「零様とエッチしたいが為に、拉致して、媚薬を無理矢理飲ませて、その上さらに媚薬ローションをかけて、強制的にスるなんて、人としてしていい事ではありません。この度は、誠に――」
『申し訳有りませんでした……！』
先輩達がいっせいに頭を下げる。
「拉致……？　媚薬……？　強制的……？」
茶髪女子の顔がどんどん変わっていく。これは……怒ってるのか……？
「頭を上げてください……！　別に俺は怒っていませんから。それに、あの状況を俺も楽しんでましたから」
「なんと寛大なお心……ありがとうございます……！」

「で、ですから頭を上げて……！」
俺は銀髪ロング先輩の肩を掴み、頭を上げさせる。
「それより、俺をここに呼んだのって謝罪だけが目的じゃないですよね？」
俺が尋ねると、先輩達は顔を赤らめた。
「はい……その……差し出がましいお願いなのですが……私達と、エッチして頂けないでしょうか……？」
『お願いします……！』
な～んだ。そんな事か！
「もちろん。いいですよ」
「そうですよね……やっぱり駄目……え？　い、今なんと……？」
「だから、いいですよ。しましょう、エッチ」
「よ、よろしいのですか！？　私達と、エッチ、してくださるのですか！？」
「はい。むしろ俺から頼みたいくらいですよ。先輩達みたいな美人でエロい人達とエッチさせてくださいって」
「び、美人……♡」「エロいって言ってもらえた……♡」
俺がそう言うと、先輩達はモジモジしながら照れ始めた。あ～可愛すぎるんですけど！
「う、嬉しすぎるお言葉です……！」
「ていうか、俺もう我慢出来ないんですよね」
「でしたらまずは、私のおっぱいをお使いください♡　私、おっぱいには少し自信があるんです♡」
そう言って銀髪ロング先輩は、俺の股間の前へ跪いた。そして、制服のボタンを外し、おっぱいを出した。
銀髪ロング先輩のおっぱいは、釣鐘型で、おそらくF以上はあるであろう大きさの巨乳だった。
そして、乳首は薄い桜色で、乳輪は薄くて大きい。
この人、めちゃくちゃエロいおっぱいしとるやん！
「では、脱がしますね♡　うわぁ～……♡」

銀髪ロング先輩は俺のズボンとパンツを脱がした。すると、すでに勃起していたチンコが、先輩の顔の目の前にビョンと飛び出す。
それを見た先輩は、蕩けきった顔をした。
「それでは、させて頂きますね……♡」
「おぉ〜……！」
先輩は、俺のチンコをおっぱいに挟んだ。
先輩のおっぱいはとっても柔らかくて、弾力があって、先輩が谷間におっぱいを寄せるとチンコが圧迫され、強い刺激が与えられる。
「んっ……♡　ふっ……♡　んんっ……♡」
先輩がおっぱいを上下に揺らす。その度にチンコは谷間と、両側のおっぱいに擦られ刺激を与えられる。
先輩の汗と俺の我慢汁で、滑りがよくなり、さらに気持ちよくなってくる。
「もっと、気持ちよくします♡　んん……れろぉ……♡」
先輩が唾液を垂らしてくる。
「あ、ズレちゃった……♡」
先輩が垂らした唾液は、チンコには当たらず、おっぱいに落ち、垂れて乳首にかかった。
それを先輩は指ですくい、亀頭に塗りたくってくる。
何それ、エッロ！！！
「んふふ♡　零様、気持ちいいですか？　おちんちん、さっきよりガチガチになってきましたよ♡」
「はい……！　めちゃくちゃ気持ちいいです……！」
「よかったです……♡　もっと気持ちよくなってください♡」
先輩は、唾液をさらに垂らし、チンコをヌルヌルにした。
そして、おっぱいをさらに寄せて、圧迫を強くしてチンコを扱いてくる。
「くぉ……！」
「れー君、気持ちよさそう……私のおっぱいももっと大きければ……」

隣で茶髪女子が呟く。君にもできるぞ？　パイズリは谷間さえあればできるからな！
先輩は、俺がイキそうなのが分かっているのか、チンコを扱く速度を上げてくる。
「あぁ！　駄目だ！　出る！」
ドビュ！　ドビュルルルルルルル！！！
「キャッ♡　はわぁぁぁ……♡　凄い……♡　これが、射精……♡　噴水みたいに飛び出してる……♡」
先輩は、自分の顔とおっぱい、髪、制服に俺の精液がかかるのも厭わず、俺の射精に見とれていた。
「凄い……あれが射精なんだ……♡」「めっちゃエッチ～♡」
周りの先輩達は、足を擦り合わせながらザワザワしていた。
「はぁはぁ……」
「見てください♡　零様の精液で、私のおっぱいベットリになりました～♡　幸せ～♡」
喜んでくれて何よりですよ。
と、俺が束の間の賢者タイムに入っていると――、
「あ、あの……次は私と……」
「あ、はい、もちろんです……」
俺は目を疑った。おっぱいも大きいのだが、それよりも何よりも、目を引くのはお尻！
この人のお尻はめちゃくちゃデカい！
デカすぎてスカートをたくし上げてしまっている。
この人は、爆尻先輩にしよう。
「零様……失礼します……♡」
爆尻先輩は、俺の前に立ち、チンコをお尻で扱いてきた。
尻コキってやつだ。パツンが竿を刺激して、めちゃくちゃ気持ちいい！
それに、爆尻先輩が腰を下げる度に、スカートが亀頭に擦れてヤバすぎる……！

「ど、どうですか……？　ちゃんとできてますか……？」
「は、はい……！　できてます！　めっちゃ気持ちいいですよ！　気持ちよすぎて出ちゃいそうです！」
「良かった……♡　いいんですよ♡　我慢しないでいつでも出してください♡　私のお尻にいっぱいぶっかけてください……♡」
「じゃ、じゃあ遠慮なく！」
「はい……♡」
爆尻先輩は、尻コキの速度を上げてくる。
これは本当に無理だ。イったばっかで敏感なのもあって、我慢できない！
「出るっ！」
ドビュルルルルルルル！！！
「んっ♡　熱いのがお尻に……♡　背中にもかかってきて、幸せ過ぎる……♡」
爆尻先輩のパンツとスカート、そして制服は、俺の精液でベッタベタになった。
「はぁはぁ……うぅ～」
「ん？　零様？」
「れー君は、射精した後、トイレに行きたくなるの」
茶髪女子が伝える。なんか、少しハズいな。
「そうでしたか！　でしたら」
銀髪ロング先輩が、後ろにいる人に目配せをした。すると、そのひとが前に出てくる。
「あたいの出番かい！」
な、なんか色々とがさつそうな人が出てきたな……。制服も乱れてるし……この人はがさつ先輩だな。
「零様がおしっこをしたいそうです」
「そうかい！　だったら……」
ん？　飲んでくれんのかな？
「零様、ちょ～っと座ってくれるかい？」

「あ、はい」
俺は椅子に座らされる。と――、
「よいしょっと……♡」
「んんっ！？」
がさつ先輩は、俺に跨ってきていきなりチンコをマンコに挿れた。
な、な、何してんの！？
「ほら零様、遠慮なんてしないで、おしっこ、あたいの膣にたっくさん出して♡」
ま、ま、ま、マジですかぁぁぁぁ！？
尿中出しなんて、憧れのプレイの一つなんだけど！
「ほら、また勃起しちゃう前に、ね♡」
「は、はい……！」
確かに。勃起したらおしっこは出ないからな。
俺は意を決して、おしっこを出した。
ぷしょおおおおおおおおお！
「んんっ……♡　来てる、来てるよぉぉ♡　零様のおしっこがマンコの膣に入ってきてるよぉ♡　子宮がおしっこでパンパンになってきたぁ……♡」
すげぇ……！　マンコの膣でおしっこするのってこんな感じなんだ……！
最高……もっとしてぇなぁ……。
俺はチラッと茶髪女子を見る。と――、
「にっ♡」
ニッコリと微笑み、スカートを捲りマンコを触った。そして、パンツ越しに穴に指を入れる。
ここに出して、と言う意味なんだろう。違っても俺はそう解釈した。
今度からはそこにも出してやるからな！
「ふぅ～」
「スッキリしたかい？」

「はい……！　最高でした！」
「そっか♡　よかった。じゃあこのまま、白いおしっこも出してくれるかい♡」
「うぉ……！」
そう言ってがさつ先輩は、腰を激しく動かし始めた。俺のチンコはすぐに勃起して、臨戦態勢に。
「おっ！　膣で勃起した！　膣で大きくなる瞬間を体験できるなんて、夢みたいた！　沢山気持ちよくなってな、零様！」
「も、もうすでに気持ちよくなってますぅ！　てかもう限界が……！」
「いいんだよ！　我慢しないで、あたいの膣に、たっくさん出して！　あたいの子宮を零様のおしっこと精液でいっぱいにしてぇ♡」
「うっ……！　出るっ！！」
ドビュゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！
「んあぁぁぁぁぁぁ！！！　せ、精液中出しされてるぅぅ♡♡♡　ヤバいこれ、ハマりそう♡♡♡　おしっこ子宮に精液注がれて、イッちゃうぅぅぅ♡♡♡」
がさつ先輩は、中出しされただけでイッてしまった。
「あ、あの……またおしっこしてもいいですか……？」
「もちろん……♡　好きな時に好きなだけ、あたいの膣におしっこして♡」
「ありがとうございます」
ぷしょおおおおお！！！
「んんんっ～～～♡♡♡　零様のおしっこがまた子宮に来たぁ～♡♡♡♡」
俺はお言葉に甘えて、がさつ先輩の膣におしっこを注いだ。
「はぁはぁ……」
「今日はここまでとしましょう」
「え？　でも、後ろの人達がまだ……」
「零様はお優しいですね♡　お気遣いありがとうございます。です

が大丈夫です。ここで無理をさせてはあの二人と同じ轍を踏む事となる。それだけは避けたいですから。それと、零様には、もう一つお願いがございまして」
「？　なんでしょうか？」
銀髪ロング先輩が、少し溜めた後に口を開く。
「明日からの私達の温泉旅行に、ついてきていただきたいのです」
「へ……？」

第３５話　上級生達は、変態度が桁違い♡♡♡（後書き）

次回予告！

「痒い所はありませんか～？」「泡立ちはどうですか～？」「気になる所はありませんか～？」

先輩達に体を洗われる零！

「零様……♡」

急接近！？　零と銀髪ロング先輩！

『おちんちん、くださ～い♡♡♡♡♡』

零のチンコを求め、先輩達は全裸で並ぶ！

次回

『先輩達との、エロエロな温泉旅行♡♡♡』

お楽しみに！

第３６話　先輩達との、エロエロな温泉旅行♡♡♡（前書き）

プロローグ
「今日は誘ってくれてありがとうございます。零様」
「あぁ。先生なら大人だから保護者としても便利だなと思ってな」
「私の事は、お好きに使ってください♡」
先輩達に、温泉旅行に誘われた。三人くらいまでなら同行者がいてもいいと言うので、俺は茶髪女子と先生を呼んだ。
「あと一人……」
金髪女子も瑠李も、部活の大会が近いから正直誘いずらい。
「あ、そうだ」
俺は電話をかける。と、すぐさま飛んできた。
「はぁはぁ……すみません、お待たせしてしまって……！」
「いや、そんなに待ってないよ」
俺が呼んだのは、副委員長だった。
この子とは、あまりしてないからな、この旅行中、隙あらば犯してやる。
まぁ、その前に先輩達に搾られるだろうけど。
「待ち合わせ場所は駅らしいから、時間ちょっと早いけど行こうか」
「「「はい！」」」
なんか、俺が引率の先生みたい。

駅に来たけど、先輩達はまだいないか。
「まだ来てないみたいですね」
「だな」
先生が辺りを見回して、確認する。
「れー君を持たせるなんて、先輩だとしても許せない……」
茶髪女子が隣で、ふつふつと憤りを抱いている。

「零様をお待たせするなんて、女として失格ですね」
「副委員長、話が分かる」
「当然ですよ。私は零様の事を一番に考えてる女ですから」
副委員長が自慢気に言う。
「そんなの当然。わざわざ自慢しないで」
「ぐぬぬ……」
茶髪女子にキツめにツッコまれると、副委員長は悔しそうな顔を浮かべた。なんか、可愛いな。
「零様、勃起していますね」
「「え！？」」
先生が俺の勃起に気がつくと、茶髪女子と副委員長が俺の股間を見る。
「本当だ……気づかなかった……一生の不覚……！」
「零様の女になりたいのに……こんなんじゃなれない……」
二人は、俺の勃起に気づけなかったのが相当悔しかったらしい。
「先生、ここで抜いてくれる？」
さすがにここは公共の場だ。仮にも教師がそんな事をしたりはしないだろうが、試しに聞いてみた。
「もちろんです♡　失礼致します……♡　んちゅ……♡」
先生は、迷うことなく即答し、俺の前に跪きズボンのチャックを開けて、チンコを取り出す。
そしてそのまま、手を使わずにチンコを口に含んできた。
先生にフェラしてもらうのって、いつぶりだ？
あれか、前にトイレでイラマしてもらった時以来か。
「ぢゅる……♡　れる……♡　ぢゅるるるるる♡♡」
先生、フェラ上手いな……。めっちゃ気持ちいい……！
「先生、ズルい！」
「なんで勝手にしてるんですか！」
二人が抗議の声を上げる。
「はいはい、怒らない。副委員長はこっち来て。君は先生と一緒に

舐めて」
「「はい……♡」」
二人は俺の言う事を聞き、副委員長は俺の横に来てキスを始める。
そして茶髪女子は、跪きフェラを始める。
公共の場で、ダブルフェラされながらキスするなんて、ヤバいな……！　めちゃくちゃ興奮する！
町中の人達は、こっちを羨ましそうに見るだけで何も言わないし騒がない。
すげぇな。
「んちゅ……♡　ちゅる……♡　れろぉ……♡　れるぅ……♡」
副委員長とのキス、めちゃくちゃ最高なんだが！
舌の絡ませ方がめちゃくちゃ上手い！　タイミングよく唾液を吸ってくれるから、唾液が変に溜まらなくていい！
そんで先生と茶髪女子のダブルフェラ、マジでヤバい！
なんだかんだ文句を言ってた茶髪女子も、先生と上手く連携して、先生が竿を舐め始めたら亀頭を舐めて、我慢汁を吸ってくる。
そして先生が亀頭を舐め始めたら竿や玉を舐めてくる。
「んぢゅる……♡　ぢゅる……♡」
「はんむ……♡　れるぅ……♡　ぢゅるるるるる♡♡」
「んっ……」
もうヤバいな……！
「んっ！」
ドビュルルルルルルル！
「キャッ！？」「んっ！？」
二人が竿を舐めてるタイミングで、射精をしてしまったので、二人の顔に俺の精液がかかる。
「んちゅる……♡　いいなぁ……」
副委員長が、顔面精液まみれの二人を見て羨ましがる。と――、
「お裾分け♡」
「んっ……♡」

茶髪女子が、顔にかかった精液を指ですくい、口に含む。そして、副委員長にキスをして口移しする。
「おお～エロいな」
その光景をもっと楽しんでいたかったが、そうもいかなかった。
「お待たせしました！」
先輩達がやって来た。

第３６話　先輩達との、エロエロな温泉旅行♡♡♡

「零様を待たせるとは、どういう事ですか？」
先生が、先輩達（十人）に詰め寄る。ちなみに、顔には俺の精液が付着したままだ。
『す、すみません……』
先輩達は、シュンとしてしまう。
「あなた達は、零様を勃起させたままお待たせしていたんですよ？
今回私達がいたからよかったものの」
『零様、申し訳ございません……！』
先輩達が俺に謝罪してくる。
「気にしないでください。それより、お掃除してください」
『は、はい！』
俺がそう言うと――、
「私が！」「ちょ、私がするから！」「何言ってんの！　私がするの！」「私よ！」
「あ～もうはい！　喧嘩しないでください！　あなたとあなた！
二人が綺麗にしてください！　そんで二人！　いつまでキスしてんだ！」
俺が先輩二人（茶髪ロング、銀髪ロング）に指示をして、汚れたチンコを掃除させる。
そして、さっきからずっとキスしまくってる副委員長と茶髪女子を注意すると、二人は申し訳なさそうに離れた。
俺がいるんだから、レズにはさせねぇぞ……！
「「ちゅぱ……♡」」
「うん。綺麗になった。ありがとうございます、先輩」
「「はい♡」」
二人が立ち上がる。と、銀髪ロング先輩が――、

「零様、私達に敬語は必要ありませんよ？」
「え？　いや、でも先輩ですから」
「そういう真面目な所、素敵です♡　お心遣い感謝します。ですが、我々は零様の性奴隷の身。奴隷に敬語は不要だと、思いませんか？」
「まぁ、確かに」
「ですので、我々に対しての敬語はなしで大丈夫です。もっと我々に上からでモノを言ってください♡」
「分かった。そうするわ。じゃあそろそろ行くぞ、変態共」
『はい♡』
俺がそう言うと、先輩達、茶髪女子、副委員長、先生が返事をした。
そして俺達は、電車に乗り込んだ。

♡　♡　♡

電車に乗った俺達。
……なんか、周りの視線が凄いな。
「俺、なんか変な格好だったりするか？　なんか周りの視線が気になるんだけど……」
隣に座る茶髪女子に尋ねる。
「ううん。全然変じゃない。れー君はいつでも格好いい♡　周りの女共はれー君に隙あらば痴漢しようとしてるだけ。でも、私達がいるからできない」
「零様の事は、我々が必ずお守りします」
目の前に立つ銀髪ロング先輩がそう言ってくる。
「なるほどな……ちょっといい？」
俺は座った状態のまま、ズボンとパンツを脱ぎチンコを取り出す。
そして、オナニーを始める。
オナニーなんていつぶりだろう？　姉ちゃんに見つかってセックスした日以来か？

「嘘……♡　れー君のオナニーが見れるなんて……♡　しかも、隣で……♡　幸せ過ぎる……♡」
「れ、零様の、お、オナニー……！」
俺がオナニーを始めると、隣にいる茶髪女子が鼻息を荒くし、乳首を弄り始める。俺が開発してやったからな。乳首が超敏感になってるんだろう。
さらには、立っている先輩達も立ちながらスカートの中に手を突っ込んでオナニーを開始した。
俺の右側に座る副委員長も、茶髪女子の隣に座る先生もオナニーを始める。
「（さぁ、どうなる？）」
俺は小声でそう呟いた。
俺が突然オナニーを始めた理由は、周りの女達がどういう反応を示すのか知りたかったからだ。
前に、燐とデートした時、電車の中でフェラをしてもらった事がある。その時の周りの反応は羨ましそうにオナニーを始める。だった。果たして今回はどうなる？
本当に公共の場での性行為が可能なら、今回も周りの女共はオナニーを始めるはずだ。
「始めた」
周りにいる女達は、俺のオナニーを見ながらマンコを弄り始めた。中にはパンツを完全に脱いでオナニーをする奴も。
なぜ俺がこんな確認をしたのかと言うと、今後、外でのセックスを増やしたいと思っているからだ。
「おい、舐めてくれ」
「うん♡　はんむ……♡」
俺は隣に座る茶髪女子に、舐めるよう指示をする。すると、茶髪女子は嬉しそうにチンコを咥えてくる。
「んっ……♡　ちゅる……♡　ぢゅる……♡　んんっ♡」
俺は茶髪女子の乳首を服の上から弄ってやる。すると、茶髪女子

は全身をビクビクさせながら感じまくる。
だが、絶対にチンコを離したり、刺激を止めたりはしない。
「くっ……もう出そうだ……！　お前ら全員イケ！」
『はい♡』
ビュルルルルルルルルル！
「んぶ！？　んんっ……♡　ん～……♡　ゴクゴクゴク……♡」
俺は茶髪女子の口の中に、大量に射精した。さっき一度出してるとは思えないくらいの量と濃さ。
しかし、茶髪女子はそんな俺の特濃精液を、嬉しそうに飲み込んでいく。
周りの女共もイッたらしく、立ってる者は足を震わせ、座ってる者は全身を震わせ、さらには潮を吹く者もいた。
「これならなんの問題もないな」
今度、痴漢プレイしてやろう。
俺達は、目的の駅に到着した。

♡　♡　♡

「あれ？　ここって」
目的の旅館に到着した俺達。旅行なのでもちろん泊まりだ。
泊まる旅館を見た茶髪女子が声をあげた。
「どうした？」
「ここ、私の家、です……」
「「え！？」」
俺と副委員長の声が揃う。
「やっぱりそうでしたか。お名前を見た時からそうかなと思っていたんです」
銀髪ロング先輩が言う。まさか、茶髪女子を同行させたのって……。
「この方がいた方が、話が早いですから」

微笑みながら言う銀髪ロング先輩。この人、策士だな。
「私の家は、旅館と銭湯を経営してて、ママがこの旅館を、パパが銭湯を経営してるの」
「へぇ～そうだったのか～」
「元々は一つだったんだけど、離婚して別々になっちゃったんだ……」
「ご、ごめん！？」
なんか重い話だったんですけど！？　俺、そう言う話をズカズカ聞く無神経男にはなりたくないんだが！？
「あ、謝らないで！　れー君は悪くないの。私が勝手に口走っただけだから。気にしないで、ね？」
「お、おう……」
両親の離婚かぁ～。義母さんはもう俺のモノだから離婚したようなもんか～。
父さんには悪いけど、義母さんは渡さない。
「それでは、中に入りましょう」
銀髪ロング先輩が先導し、俺達は旅館の中に入った。
『ようこそいらっしゃいました。旅館【　】へ』
ん？　なんか旅館の名前部分聞き取れなかった。多分茶髪女子の名字だよな？　なんで聞き取れなかったんだ？
『それはね、２／１４になるまで、名前を出すわけにはいかないからだよ』
「っ！？」
「れー君？　どうしたの？」
「い、いや……なんでもない……」
ちょくちょく聞こえるこの声、一体なんなんだ……？
「予約していた零様の奴隷族です」
「『零様の奴隷族』様でございますね。お待ちしておりました。最上級のお部屋をご用意させていただいております。ご案内致します。こちらへどうぞ」

俺達は、女将（茶髪女子の母）に部屋へ案内される。
……ってか、『零様の奴隷族』ってなんだよ！　それを普通に受け入れる旅館側もどうなってんだよ！　と言うか、女将さん、あなたの娘もその奴隷族に入ってるんですよ！？　いいんですか！
まぁ、女将さんも中々に美しい……。何歳なんだろう？
「ママは今、三十歳。れー君の守備範囲に入る？」
お、おおぉ！？　なんかすげぇ事聞いてきたな！
「ま、まぁそうだな。三十代前半、もしくは中盤くらいなら」
「じゃあ、ママにもチャンス、ある？」
「まぁ、あるっちゃあるが……いいのか？　自分の母親が同級生と、なんて」
「うん。むしろ、ママもれー君の性奴隷になればいいと思ってる」
「そ、そうか」
「と言うか、私の家族全員、なればいいなって思ってる」
「家族全員？」
「うん。私の双子の姉と一番下の妹」
「ふ、双子！？」
なんか衝撃の事実発覚なんですけど！
「うん。お姉ちゃんはパパの所にいるの。妹はここで一緒に暮らしてる。写真見る？」
「あぁ」
歩きながら茶髪女子がスマホを取り出す。そして、双子の姉の写真を見せてくれる。
「おぉ～双子だから当然だけど、本当に瓜二つだな。顔が一緒だ」
「うん。ちなみにおっぱいのサイズも全く一緒。Ｆカップ」
「マジか。そこまで一緒ってすげぇな」
って事は、この二人とセックスしたら……。やべ。想像したら勃ってきちまった。
「零様、着きました」
「おう」

俺達は、案内された部屋に入る。
「失礼致します」
女将さんが、茶髪女子に目配せした後、部屋を去っていく。
「さて、お部屋に付いている露天風呂に入りましょう」
「あぁ」
俺達は、全員で部屋の外にある、露天風呂に向かった。

♡　♡　♡

「零様～♡」「気持ちいいですか～♡」「痒い所とかありませんか～♡」
先輩達が、全身泡だらけにして俺の体を洗ってくれる。
茶髪女子、副委員長、先生は今回は先輩達に譲っているらしく、先に湯船につかっている。
「あぁ。大丈夫だ。気持ちいいぞ」
年上の先輩達にタメ口を利いて、従えさせてるなんて、最高だ～！
しかも、体を洗わせてるなんて。夢みたいだ。
もちろん、体を洗ってもらう。だけで終わる訳なく、俺は先輩達とセックスをしまくった。
十人全員に中出しを5発ずつ、ぶち込んでやった。
ちなみに、茶髪女子達三人にも中出しをしてやった。

♡　♡　♡

お風呂から上がって、夕飯の時。茶髪女子がこんな事を言いだした。
「れー君、おしっこ、ここに頂戴？」
浴衣姿の茶髪女子が、コップを両手に持って上目遣いで小首を傾げた。
「おう」

俺はチンコを取り出す。俺も浴衣姿なのですぐに取り出せる。ちなみに、ここにいる全員浴衣姿で、俺も含め誰もパンツを穿いていない。
ジョロロロロロロロロロロロ。
「他の人達も欲しいか？」
おしっこをコップに出しながら、みんなに尋ねる。すると――、
『欲しいですっ！！！』
「じゃあ、コップ持ってこい」
『はい！』
女子達が、俺のおしっこを求め、コップを持って並ぶ。
そして、全員のコップにおしっこを入れてやる。
「ふぅ」
「れー君、ありがとう。ごめんね？　我儘言っちゃって……」
「気にするな。君はもっと我儘になってもいいくらいだ。な」
俺は、茶髪女子の頭を撫でてやる。
「うん……♡」
茶髪女子は、顔を真っ赤にしながら嬉しそうにそれでいて恥ずかしそうに、俯いた。
「それじゃあ、食べようぜ」
『はい！』
「それじゃあ――」
『いただきます！』
俺達は食事を始めた。
「ん！　この炊き込みうんま！」
「それ、この旅館のイチオシなんだ♪」
茶髪女子が、嬉しそうに胸を張って言う。乳首勃ってんな。
「きゃん♡」
俺はついつい、茶髪女子のち首を抓んでしまった。
「乳首、勃ってんな」
「ごめんなさい……れー君のおしっこ見たら興奮しちゃって……」

「いや、気にするな。ずっと勃たせてくれてたら嬉しい。でも今は、食事に集中だ」
「うん。ゴクゴク……♡　ぷはぁ♡　やっぱりれー君のおしっこすっごく美味しい♡　ご飯と合うね♡」
「そ、そうか？　まぁ、お前が好きならいいよ」
他の女子達も、俺のおしっこを飲みながら食事をしている。
この女子達、すげぇな。

♡　♡　♡

夜。みんなが寝静まった頃。
「ふぅ～」
俺は、部屋の窓側にある椅子に座って、大きな窓から外を見ていた。
外は満月で、月明かりが部屋を薄く照らしてくれていた。
「零様、前の席、よろしいでしょか？」
「ん？　あぁ」
銀髪ロング先輩が、机を挟んだ向かい側にある椅子に腰をかける。
浴衣が短いので、座った時の股間部分がエロい。
「今日は、我々の我儘にお付き合い頂き、誠にありがとうございました」
先輩がお辞儀をする。巨乳の谷間。最高！
「元々は、会長と副会長のせいで失った我々三年の信頼回復だったのですが、途中からその目的を忘れ、零様とのエッチに夢中になってしまいました。申し訳ありません」
「別に謝る事じゃない。そもそも、俺は会長達が何をしようと、先輩達を嫌ったりしない。先輩達は先輩達だからな」
「零様……」
俺と先輩の視線が交わる。
「こっち来い」

「はい……♡」
先輩を俺の膝の上に座らせる。
「零様……♡　んちゅ……♡」
俺と先輩は、引き寄せ合うようにキスをする。
「んちゅぅ……♡　ちゅ♡　ちゅぱ♡　んちゅ♡」
「こっち向いて」
「はい……♡」
お互いに向かい合う。浴衣がめくれ、パイパンが丸見えになる。
「挿(い)れて」
「はい……♡　んっ……♡　んんっ♡」
先輩が、ぐしょ濡れマンコにチンコを挿(い)れる。
「先輩の膣(なか)、キツすぎる……！　めちゃっくちゃ気持ちいい……！」
「れ、零様のおちんちん、全部、気持ちいい所に当たって……♡
声、出ちゃう……♡」
「声は我慢しろ。みんなが起きちまう」
「そ、そう、言われても……♡」
「じゃあ、ずっとキスしてろ。それなら声も少しは抑えられるだろ？」
「い、いいんですか……？」
「あぁ。先輩とのキス、好きだからな」
「っ～～～

「んむぅ♡　んふぅ♡　んむぅ♡　んんっ♡　んむぁ♡」
俺はキスをしながら、下からマンコを突き上げる。
そこまで激しいピストンではないが、めちゃくちゃ気持ちいい！
「んむぅ♡　んふぅ～～♡　んむぅ♡　はんむぅ♡」
くっ……そろそろ出そうだ……！
俺はピストンを少し激しくする。
「んんっ♡　んむぅ♡　んふぅ♡　ん～～～♡」
くっ……！　出る！
ビュルッ！　ビュルルルルルルルルルル！！
「んんっぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡　んん～～～♡♡♡」
俺が中出ししたタイミングで、先輩もイッた。
イッた際の締め付けがすごすぎて、また！
ビュ～～～～～！　ビュルビュル！！！　びゅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！

「んん～～～～～～！！！　んむぅぅぅぅぅ♡♡♡」
お互いに口を離す。
「「はぁはぁ……」」
お互いに火照った顔。震える体。
「零、様……ご迷惑かもしれないのですが、一つ、伝えてもいいですか……？」
「あぁ……なんだ？」
「その……あの……好きです！　私を、性奴隷としてだけじゃなく、彼女にしてください……！」
可愛いな。繋がったままの男に告白する女子。萌えるぜ！
「もちろん。俺の彼女になってくれ。先輩」
「は、はい……！　ありがとうございます……！　んむ……♡」
俺達は「恋人」としてのキスを交わす。そして――、
「もう一回、いいですか……？」
「あぁ」
今度は「恋人」としての、セックスを始めた。

♥
♥
♥

（まさか先輩に先を越されるなんて……！）
茶髪女子が、布団の中で、悔しそうな顔を浮かべている。
（私だって、れー君の事大好きで、付き合いたい……でも、告白したら迷惑かなって思ってた……なのに、先輩は抜け駆けした……！）
茶髪女子は苛立ちながらも――、
（もし、許されるなら、私もれー君に告白してみようかな……）
と、思う茶髪女子だった。

第３６話　先輩達との、エロエロな温泉旅行♡♡♡（後書き）

次回予告！

体育館に集まる全校生徒。ステージ上には！

「白下　華です。零ちゃんのお姉ちゃんです♪」
「白下　燐です。お兄ちゃんの妹で～す♪」
「白下　桃。兄さんの義妹です」

なんと！　三人が転校してきた！

「赤城（あかぎ）の提案と、この三人の提案により、新しく校則を作った。それは――」

新たな「校則」とは一体！！！

次回

『三人が転校してきた！？　ますます楽しくなる毎日♡♡♡』

お楽しみに！

第37話　三人が転校してきた！？　ますます楽しくなる毎日♡♡♡（前書き）

プロローグ
「ただいま～」
俺は家に帰ってきた。
「あ、お帰り～零ちゃん。ん？　その子は？」
「俺の性奴隷兼彼女」
「あらそう♡　連れてきたってことは、一緒に住むのかな？」
「そうできたらな～って。駄目か？」
「ううん。駄目な訳ないよ～。零ちゃんがしたいことは全部していいんだよ～♡」
「ありがとう義母さん。大好きだよ」
「キャ～♡　嬉しすぎてオマンコ濡れちゃうよ♡」
「後で弄ってあげる」
「ありがと♡　じゃあその子には、色々と教えないとね♡」
「うん。頼むよ」
俺は玄関をくぐり、リビングに行く。
「それじゃ、入って」
「は、はい……！」
義母さんに言われ、銀髪ロング先輩が家に入った。

♡　♡　♡

俺が部屋に向かおうとすると、銀髪ロング先輩が付いてきた。
別に隠す必要もないので、入室を許可した。すると――、
「っ！？」
俺の部屋に入った銀髪ロング先輩は、窓側に吊るされた爆乳ショートちゃんと、ミディアムヘアちゃんを見て、驚愕する。

「あれ？　先輩？」
「あ、あなた……」
ベッドの下から、首輪をした全裸の瑠李が出てきた。その口許にはご飯粒が付いていた。
「お前、ま～たご飯粒つけてんのか」
「んっ……♡　ありがとう♡」
「人間語喋っていいんだっけ？」
「ぶ、ぶひぃぃ♡　ぶ、ぶぶひ♡」
俺が、瑠李の巨乳を叩くと、瑠李は鳴いた。そうそう。ペットはこうじゃなきゃな。
「あ、赤城さん……？」
「ぶ、ぶひゅひゅ。ぶひぶひ～」
「な、何を言ってるの……？」
「私は零君のペットなんです。みたいな事言ってるんだよ」
「ペ、ペット……」
銀髪ロング先輩が戸惑っている。
「先輩、俺はこういう人間です。女を奴隷にするし、こうしてペットにもする。悪いことをした女にああやって罰を与えたりもする。こんな俺でも、本当にいいか？　本当に付き合いたいか？」
俺の言葉に、俯く先輩。やっぱり、ハードルが高かったか？
「それでも私は、零様が好きです！　どんな事をしていても、どんな事をされても、私は零様の事が大好きです！　私をお側に置いてください！」
やっぱり、こうやって言ってもらえると嬉しいよな。
「もちろんだ。ようこそ、零の支配下へ」
「はい♡」
俺が手招きすると、先輩はベッドの上に乗ってきた。
「ぶぶぶっ！」
「あぁ。許可する」
「ありがとう。先輩、よく言いました！　あなたは零君の奴隷にな

る資格がある！　これから、沢山零君にご奉仕しましょうね！」
「えぇ！　ありががとう！」
ふふ。いいな。さて。
「っ！　れ、零様……？」
俺は先輩の制服のＹシャツのボタンを外していく。
「れっときとした俺の性奴隷になった記念のセックス、しないと」
「は、はい♡」
俺はこのあと、先輩と瑠李と３Ｐをした。

第37話　三人が転校してきた！？　ますます楽しくなる毎日♡♡

「あれ？　姉ちゃん達、学校行かないのか？」
「ちょっと色々あってね。私達は後で出るわ。零ちゃんは先に行って」
「おう、分かった。じゃあ、行ってきま～す」
「「「行ってらっしゃ～い」」」
三人は、すぐに自室に戻り、制服に着替え始めた。零が通う学校の制服に。

♡　♡　♡

「おはよう～」
「あ、おはようございます、零様！」
「うん。ねぇ、おっぱい見せて？」
「は、はい！」
俺は、校門で会った一年生の女子にそんなお願いをした。すると、その女子は、なんのためらいもなくボタンを外し、おっぱいを丸出しにする。
「うん。いいね。ありがと。じゃ」
「は、はい！」
俺は触るでも、揉むでも、舐めるでもなく、ただおっぱいを見て下駄箱に向かう。
「お。うっす～おはよう～」
「あ、れいれい！　おはよう～！　おしっこ飲ませて！」
「あぁ。いいぞ。跪け」
「は～い♡」
下駄箱で、金髪女子と会う。おしっこが飲みたいと言うので、そ

の場で跪かせた。そして俺はチンコを取り出し――、
「ふっ……」
ぶしゃぁぁぁぁぁぁ！
「んっ……♡　ゴクゴク……♡」
金髪女子に、おしっこを出した。
俺のおしっこは、金髪女子の顔、髪、制服を汚していく。
「なんか、いつもよりスカート短くない？」
「ががぼぼ……」
「わり、飲んでる時に聞くんじゃなかったな。先に飲め」
小さく頷く金髪女子。
周りの女子達は羨望の眼差しを向けながら、校内へと入っていく。
今度飲ませてやるからな。
「ふぅ……」
「ごくん♡　ご馳走様でした♡　ありがとね♡」
「このくらいお安い御用だ。それより、大丈夫か？　ビチョビチョだし、臭いとか」
「うん♡　だいじょ～ぶ♡　れいれいのおしっこで濡れてたり、おしっこの臭いしてると、みんなに羨ましがられるから、マウント取れて幸せなんだ♡」
「そ、そっか」
「うん。あ、で、さっきの質問の答えだけど、れいれいにもっと喜んでもらいたくて、スカート超短くしたの♡　だから、ほら♡」
「おぉ～！」
スカートが短すぎて、紫色のＴバックが丸見えになっている。これはエロすぎる！
「本当、この学校の女子達は最高だな！」
「えへへ～♡　れいれいに言われるとちょ～幸せになる～♡　教室いこ？」
「あぁ。そういや、陸上どうなんだ？」
「うん！　結構いい感じだよ！　このままの調子でいけば、優勝で

きるかも！」
「そっか。応援してるからな」
「ありがとう～～♡　れいれいの応援があれば百人力だよ～♡」
俺達は、教室へと向かった。

♡　♡　♡

教室に入ると、眼鏡女子が隣から声をかけてきた。
「おはようございます、零様」
「あぁ。おはよう。マンコ見せて」
「はい♡」
俺がそう言うと、眼鏡女子はパンツを脱ぎ捨て、スカートを捲り、足を大胆に開きマンコを見せてくる。
俺は欲望のままに生きると誓ったが、どこかまだ遠慮があったと思う。
だから、もう我慢なんてせずに生きようと決めた。
それが、今の俺のこの行動だ。女子の体を見たい時に見せてもらう。
これがもう、最高すぎてヤバい！
「うん。ありがとう」
「いえ♡　いつでも言ってください♡」
俺が机の上にスマホと筆箱を置くと――、
「れー君、私は？」
俺の右斜め前に座る茶髪女子が、頬を膨らませながら言ってきた。
「じゃあ口開けて。俺の唾液飲ませてあげる」
「うん♡　あ～……♡」
茶髪女子は嬉しそうに口を大きく開ける。
そして、その口の中に、俺は唾液を垂らしてやる。
「しっかり味わえよ」
「うん♡　グチュグチュ……♡　ごくん♡　れー君の唾液、美味し

い♡♡♡」
満面の笑みを浮かべる茶髪女子。この笑顔は反則だよな。
「はい、静かに～」
先生が入ってきた。うん。今日もいいおっぱいだ。
「今日は、一日授業をなしにする」
え？　授業なし？　それは嬉しいけど、なぜに？
「何かあるんですか？」
眼鏡女子が手を挙げて尋ねる。
「あぁ。この後、大事な転校生を紹介しなきゃいけないのと、新たに校則を発足させるらしく、それの発表があるんだ」
なるほどね～。新しい校則か～。どんな校則なんだろうな～。楽しみだ。
それにしても大事な転校生って、一体誰なんだろうな？
「それでは、体育館に移動してくれ」
『は～い』
俺達は体育館へと向かった。

♡　♡　♡

体育館に全校生徒が集まる。
お～本当に女子しかおらん。絶景だな～。
「隣、いい？」
「あぁ」
俺の右隣に金髪女子が。
「ここは私」
左隣には茶髪女子が座った。なんかこれがいつもの定位置って感じがするな。
ステージ上に、理事長。つまり俺の義叔母さんがマイク前に立つ。
『え～今日は、君達に大事な転校生を紹介する。くれぐれも粗相のないように頼むぞ。では来てくれ』

義叔母さんがそう言うと、舞台袖から三人の女子が姿を現す。
「え！？」
俺は思わず声を上げてしまった。
体育館なので声は響き、みんなの視線を集めてしまった。
「な、なんで……！？」
「やっほ～零ちゃん♪」
「お兄ちゃ～ん！」
「兄さん、格好いい♡」
ステージ上に姿を現したのは、姉ちゃん、燐、桃の三人だった。
大事な転校生って、この三人の事！？　俺何も聞いてないんだけど！？
『では、自己紹介を頼む』
『はい。私は白下　華です。この学校唯一にして無二の男子、零ちゃんのお姉ちゃんです♪　これからよろしくお願いします♪』
『私は白下　燐！　超絶格好いいお兄ちゃんの妹で～す♪　もう知ってるとは思うけど、お兄ちゃんの素晴らしさをこれから沢山伝えて行きたいと思います♪　これからよろしく～♪』
『白下　桃です。この世の何とも比べられないくらい素晴らしい兄さんの義妹です。兄さんはご飯を食べるのが好きだから、料理を作りたい人は言ってください。いつでも教えます。よろしく』
と、三人が自己紹介をする。
ってか、三人とも俺を持ち上げすぎ！　聞いてて照れるわ！
『と、言うわけで、零のご家族が転校してきてくれた。零の事なら誰よりも詳しいだろう。これから交流を深めていく中で、より零の事を知っていくように。いいな？』
義叔母さんが全校生徒に向けてそう言うと――、
『はい！』
全校生徒が返事した。
「なんか、ハズい……」
俺は小さくなるしかなかった。

『さぁ、続いては新たな校則の発表だ。これに関しては私ではなく、別の生徒に発表してもらう。赤城』
義叔母さんがそう言うと、舞台袖から瑠李が登場した。
全裸に首輪と言う、ド変態な格好で。
『え～皆さん、おはようございます』
『おはようございます！』
『二年の赤城瑠李です。今回、私は様々な校則を理事長に提案しました。これまで以上に零君と親密になる為です。そしたら、理事長は快諾してくださり、新たな校則が五つ、生まれました』
い、五つも！？　一体どんな校則が……。
『まず一つ目。今私の格好を見て、皆さんはどう思われますか？』
瑠李が尋ねると、あちらこちらから「羨ましい！」と言う声が上がる。
『そうですよね。これは、私が零君のペットとなった事で得ることができた格好で権利です。ですが、それを独り占めするのはよくないと私は思っています。そこで！　この校則が生まれました！『全校生徒は全裸首輪で生活する事！』です！』
『おぉ～！』
いや、おぉ～なん！？　とんでもない事を言ってますよ！？
『首輪は我々女が、零君の奴隷、性処理係、オナホ、ペットである事を示す重要な物です！　拒む事は許されません！　嫌な方はいますか？』
全員が首を横に振る。おいおいすげぇな……。
『全裸首輪と言いましたが、零君は女子の下着が大好きです！』
ちょ！？　何俺の性癖暴露してくれちゃってんの！？　あいつ、家帰ったら仕置きだからな！
『なので！　鞄の中には常に、下着を常備しておく事！　零君が望んだらそれを穿いたり被ったり、零君の望みに対応できるようにしておいてください！』
『はい！』

恥ずかしすぎんだけど！
『そして二つ目。二つ目の校則は『全校生徒は交代制で便器になる事！』です！』
『おぉ～！！』
おいおい……言葉の意味分かってんのか……？
『一週間ごとに交代とし、任命された者は、一日をトイレで過ごします。零君がトイレに来た時、おしっこを口や体で受け止め、口や手、おっぱいやオマンコなどでおちんちんを綺麗にする。それが、この校則のルールです！　一人だけではなく、一クラスの中から数名が選ばれ、一週間を便器として過ごします。その間の授業などへの参加は不要です。授業に参加せずとも成績には影響はないので、安心して便器になってください！』
『はい！』
『三つ目。三つ目の校則は『全校生徒はティッシュやタオルの代わりになる事！』です！』
『おぉ～！』
だからそのおぉ～は、なんなん！
『この校則は、零君の汗や精液などを、ティッシュやタオルの代わりに拭うのを目的としています！　なので、体育の後やセックスの後、零君の汗を手や顔、舌などで拭ってください！　できれば舌でしてください！　もちろん、精液は必ず！　必ず！！！　舌で拭い、手や顔に塗り、味わってください！！　零君の精液はとっっっ

嬉しそうな悲鳴に変わった。悲鳴と言うより、歓声？　に近いか。
『常にオマンコを濡らしておくと言うことは、常に発情していないといけません！　なので、クリや乳首に常にローターを装着してもらいます！　操作するリモコンは零君に持ってもらい、いつでも強さを変えられるようにします。なので、皆さんはいつ強さが変わるかドキドキしながら生活してください！』
『はい！』
俺がリモコン弄ったら、周りの女子達が喘ぐんだろ……。考えただけで興奮してきた……！
『そして！　五つ目、最後の校則は『全校生徒はどんなプレイでも受け入れる事！』です！』
『はい！』
お？　返事になった？
『この校則は、わざわざ校則にする必要もない事なのですが、皆さんがより、零君を満足させられるようにあえて決めさせて頂きました！　この校則では、零君が望んだプレイはなんでも受け入れてもらいます！』
マジで！　なんでもいいの！
『手コキやフェラ、パイズリ、イラマなどはもちろん、スパンキングやビンタ、首絞め、拘束、緊縛、寸止めプレイ、などなど……。零君がしたい事、全てを受け入れてください！　いいですか？　私達女に、拒否権や決定権、発言権や人権はありません！　私達は零君の【モノ】です！　零君に逆らった時点で人生が終了すると思ってください！』
『はい！！！！』
『現在、零君の怒りを買った二人の女が、零君の家で監禁され、反省をしています。零君は怒ると本当に怖いです。零君に嫌われたくなかったら、怒らせないよう、行動してください！　いいですね！』
『はい！！！！！！』
おいおい、マジかよ。それって、俺がこの学校の女を支配してい

いって事じゃねぇか……！

『それでは皆さん！　この新たな五つの校則をしっかりと覚え、これからの学校生活を楽しんでください！』

『はい！』

話を終えた瑠李が、ステージを降りて席に着く。

『これで、大事な話は終了だ。後は各自、教室に戻るなりなんなり好きに過ごすといい。今日は授業はないからな』

そう言って、義叔母さんはステージから降りて、どこかに行ってしまった。

この後、どうすんだろう？

「なぁ、この後って――っ！」

金髪女子に聞こうと思い、右を向いた瞬間、キスをされた。

「んちゅ……♡　むちゅ……♡」

「っ！？」

さらに、後ろ（左隣）から茶髪女子が俺に抱きつき、乳首を弄ってきた。

ど、どうしたんだ！？　急に！

「ごめんね、れー君……我慢ができなくなっちゃって……♡」

周りを見ると、顔を紅くさせて、息を乱す女子達が、俺の方を蕩けた目で見つめてきていた。

「ぷはぁ……♡　れいれい……♡　シたい……♡」

「分かった。シたい奴！　全員集まれぇ！！！」

『は～い♡♡♡♡♡』

俺はこの後、一年、二年、三年、姉ちゃん達、全員とセックスシまくることになった。

超絶乱交だ。

超絶乱交は、機会があればしっかりと書きたいと思っております。

もし、超絶乱交を見たいと思って頂けましたら、ご感想などで教えていただけますと幸いです♪

第37話　三人が転校してきた！？　ますます楽しくなる毎日♡♡♡（後書き）

次回予告！

「んちゅ……♡　気持ちいい？」
「あぁ……最高だ……！」
「良かった……♡」

授業中にも関わらず、金髪女子にフェラされる零！
さらに！

「んぁぁぁぁ！　零様ぁぁ！！」

授業中に女子を好き放題犯しまくる零！

新たな校則のおかげで、今まで以上に好き放題できる零は、目に付く女子を、次々犯しまくる！

「こんなの、最高過ぎるだろ！」

次回
『授業中の、愛情たっぷりご奉仕♡♡♡』
お楽しみに！

第３８話　授業中の、愛情たっぷりご奉仕♡♡♡（前書き）

プロローグ
「う～ん……」
朝というのはなぜこんなにも、起きたくないのか。
目覚ましがうるさい……。
「瑠李……」
いつもなら、俺が名前を呼ぶとアラームを止めてくれるのだが、今日はうごかない。
まぁ昨日、勝手に俺の性癖を暴露した罰として、２０回連続潮吹き&失禁絶頂を味わわせてやったから、動けないんだろうけど。
「う～ん……」
俺が諦めてアラームを止めようとした時、急にアラームが止まった。
「ん……？」
俺が気になって目を開けると、隣に――、
「おはようございます。零様♡」
銀髪ロング先輩がいた。
「おはよう……ふわぁ～……」
「いつもこんなにお早いお目覚めなんですか？」
「あぁ……前はランニングするのにな。今はランニングじゃなく、瑠李の散歩で起きてるけど」
「その赤城さんはまだ、夢の中のようですが……」
「ったく……主より遅く起きるとかどうなってんだよ……瑠李！」
「ぶひゅひゃ！？」
俺が名前を叫ぶと、瑠李は飛び起きた。
「いつまで寝てんだ！　俺より先に起きて散歩の準備しろ！」
「ぶ、ぶひゅ！」

俺が怒鳴ると瑠李は、慌ててリードを持ってくる。
「今日は先輩も一緒に行こうか」
「え……！？」
「あ、もちろん、先輩は人間としてね」
「は、はい」
俺と先輩、そして瑠李は散歩に向かった。
外ても四つん這いで歩く瑠李に、先輩は驚きを隠せないようだった。

第３８話　授業中の、愛情たっぷりご奉仕♡♡♡

「おはよ、う！」
「んんぅぅ！　お、おはよう、ございます、零様♡」
俺は下駄箱で、一年生の女子を後ろからいきなり犯した。
「君、おいで」
「は、はい！」
俺はこっちを羨ましそうに見ている一年女子を呼び、隣に立たせる。
「もうグチョグチョだな」
「は、はい……♡　校則は今日からですが、興奮で……♡」
俺は隣に立った女子のマンコを弄る。
今日から新たな校則が始まり、全校生徒は全裸だった。首輪は学校が支給してくれるので、まだ着けてない。
だが、校内を大勢の女子が全裸で歩いている光景は、めちゃくちゃ堪らない！
姉ちゃん達は、義叔母さんが話があると言って、理事長室に連れて行っているので、今ここにはいない。
「んっ！　んんっ！　んんあああ！」
「んふ……♡　ふっ……♡　あっ……♡　あぁぁ！」
俺はバックで女子を犯しながら、右隣に立つ女子に手マンをする。
どちらも一切の容赦をしない激しいもの。
「れ、零様ぁぁ！　い、イッちゃいそうですぅぅ！」
「わ、私もぉぉ！」
「いいぞ。イケ」
俺がさらに、腰の動きと手マンを激しくすると、二人は嬌声を上げながらイッた。
「「あああああああああああ♡♡♡♡」」

二人の尿道からは、大量に潮が噴射された。
「「はぁはぁ……」」
「ちょっと君！　こっち来てくれ！」
「は、はい！」
俺はチンコを引き抜き、別の後輩女子を呼びつける。
「跪いて、口開いて」
「は、はい！　あ～……んぐぶぉ　！」
俺は後輩女子の口に、思い切りチンコをぶち込んだ。
いきなり喉奥に届くくらい勢いがついてしまったが、後輩女子は嬉しそうな顔をしている。
「俺まだイケてないのに、あの子がイッちゃったからさ～。悪いけど、イラマオナホになって」
「ぶぁ、ぶぁい……♡」
俺に口内を犯されながら、後輩女子は可愛く返事をする。
「ぎゅぼっ！　ぐぼっ！　じゅぼっ！」
俺はなんの遠慮もせず、後輩女子の口を犯していく。
「あ、れいれい！　おっは～」
「おう。おはよう」
「おはよう、れー君♡」
「おはよう」
金髪女子と茶髪女子が、後ろから声をかけてきた。そして、茶髪女子は俺の後ろでしゃがむと――、
「れろ……♡」
「おっ……！」
半分まで下げていたズボンとパンツを、全部降ろしてアナルを舐めてきた。
「この子、れいれいに任せっきりでダメダメだね～。イラマは、こうやるんだよ♪」
「ぐぐぼぉ　ぉ　ぉ　！？」
金髪女子が、後輩女子の頭を押さえ、思い切りチンコの方へ押し

出した。
　それにより、俺のチンコはさらに深く後輩女子の口の中へ入っていく。
「こ、これは気持ちいいな……！」
「でしょ～♡　ほら、れいれいを気持ちよくさせる為に、もっと頭動かしなさい！」
「ぶぁ、ぶぁ、い……♡」
　金髪女子は、後輩女子の頭をガンガン動かす。
　後輩女子は、自分のペースで動けないのでかなり苦しそうにしている。
「れいれい、チュ～して～♡」
「あいよ～」
「んっ……♡」
　金髪女子は、後輩女子の頭を押さえつけながらキスをせがんでくる。
　俺は後輩女子にイラマ（強制）をされながら、金髪女子とキスをする。
「んちゅ……♡　ちゅる……♡　ぢゅる……♡」
　俺の舌と唾液を吸っていく金髪女子。
　口からこぼれ落ちる俺と金髪女子の唾液が、下にいる後輩女子にかかっていく。
「ぢゅる……♡　ぢゅるるるるるる♡　れー君のアナル、キュッってなってきてる♡　イきそ？」
「ちゅっぱ♡　れいれい、我慢しないでこの子の口マンコにたっくさん中出ししていいからね♡」
「あぁ。出すぞ！」
　ビュルルルルルルルルル！！！
「んぶっ！？　ぐぶぅ……！？」
「れー君のアナル、キュッキュッして、可愛い♡」
「吐き出しちゃ駄目！　全部飲むの！　れいれいの精液が飲めるな

んて、女としてとっても幸福な事なんだからね！」
「ぶぁ、ぶぁい……！　ゴクゴク……♡」
後輩女子は、ドロっとした濃厚精液をなんとか飲み込んでいく。
喉奥に直接射精したので、喉にへばりついて飲み込みにくいとは思う。だが飲めぇ！
「んっく……♡　んっく……♡」
「あ、れいれい、今綺麗にするね♡」
「あぁ。頼む」
金髪女子が、俺のチンコにお掃除フェラをしようとすると――、
「はんむ……♡」
「あーーーー！？」
「んふふ～♡」
茶髪女子が後ろから前に移動して、横取りをした。
「ちょっとーー！　何横取りしてんのよぉー！？」
「れー君のおちんちんは、早くしゃぶってほしいって言ってた。待たせるのは駄目。遅いあんたが悪い」
「んもぉー！　確かに待たせちゃったのは私が悪いけど！　ほら、そっち詰めて！　私も舐めるから！」
「む。しょうがないな」
茶髪女子は右側に詰め、金髪女子がフェラしやすいようにした。
「「んちゅ♡　ちゅむ……♡　ぢゅる♡」」
なんかこの二人、お掃除と言いながら、イカせにきてねぇか？
「君達、教室行っていいよ」
「「「は、はい……！　ありがとうございました！」」」
三人の後輩女子は、大きなおっぱいをプルンプルンと揺らしながら、教室へと向かって行った。
エロいな。全裸の校則、最高だ！
「零様～？　あ、いた」
「ん？　先生？　どうした？」
先生がやってきた。俺を探してるみたいだけど、どうしたんだ？

「お楽しみ中にすみません。そろそろ朝のＨＲが始まる時間でして……」
「お。もうそんな時間か。悪ぃ悪ぃ。ほら二人共、教室行くぞ」
「「んちゅ……♡　は～い」」
二人は可愛らしく、頬を小さく膨らませながら返事をした。
俺達は階段を上り始める。
「先生、びしょ濡れじゃん。見てたでしょ」
「す、すみません……呼びに来たらしていて……」
「別に謝らなくていい。後で……」
「っ……♡」
俺が耳元で、ある事を囁くと、先生は顔を真っ赤にした。
ちなみに、先生も全裸だ。

♡　♡　♡

教室に移動した俺達。
先生は教壇に立ち、女子達は椅子に座って先生を見ている。
俺はと言うと――、
「んっ……♡　今日は、ぁ♡　こ、このクラスに、ぃ♡　新しく加わる、んっ♡　生徒を紹介、あぁ♡　します、んぅ♡」
後ろから先生を犯していた。
「そ、それじゃあ、んあ♡　は、入ってぇ♡」
先生がそう言うと、教室の前の扉が開き、生徒が入ってきた。
「桃か」
入ってきた生徒は、義妹の桃だった。
「白下　桃です。よろしく。兄さんの素晴らしさ、沢山伝える。後、兄さんにたっくさんご奉仕するから、みんなも負けないようにね」
な、なんか上から目線じゃね？
『はい！』
なんで返事しちゃうの？　金髪女子達も素直に返事してるし。

と言うか、みんな桃に対して尊敬の眼差しを向けてるのは……なぜ？
「兄さん、これからよろしく♡」
「あぁ。よろしく、なっ！」
「んひゅぅぅ♡」
俺は先生の膣を、思い切り突く。
「先生、一人で感じてちゃ駄目。ちゃんと膣を締めて、兄さんのオチンポ様を気持ちよくするの」
「ひゃ、ひゃい……♡」
「うお……！」
急に膣が締まってきた……！
「出る！」
ドビュルルルルルルル！！
「んひゃぁぁぁぁぁぁ♡♡♡　零様の精液、中に出てるぅぅぅ♡♡♡」
「先生、中出しと共にイクと兄さんは喜ぶ」
「ひゃ、ひゃい♡　イックぅぅぅぅ♡♡♡」
うおっ！　マジかよ！　イこうとして簡単にイケんのかよ！
「ってか、また出る！」
ビュル！　ビュルルルルルルル！！
「んほぉぉぉぉぉ！！！　連続中出し、しゃいこぉぉぉぉ♡♡♡」
先生は、力なく教卓に突っ伏してしまう。
「おぉ～結構出たな～」
マンコからチンコが抜ける。すると、先生の膣から大量の逆流精液が溢れてきた。
その精液は、床にボタボタと落ち、あっという間に精液の水溜りを作った。
「兄さんの精液、もったいない……！」
「ちょ！？　桃！？」
桃が這いつくばり、床に溜まった精液を舐め取り始めた。

『わぁ！！！』
それを見て、クラスの女子達が目をキラキラさせた。
「いい？　兄さんの精液はとっても貴重。出してもらえるだけでありがたい事。出してもらえるのが当然とか当たり前とか思わないで。出していただけたら、どんな場所に落ちようと、垂れようと舐め取る事。一滴残らず。分かった？」
桃は、床の精液を舐め取りながら女子達に言う。
『はい！！！』
「あ、あの～」
一番前の席の女子が手を挙げる。この子は……紫髪女子としよう。
「どうした？」
俺が聞くと――、
「先生のオマンコの膣（なか）にある精液を、吸い出したりしても、いいんでしょうか……？」
お、おう？　とんでもない事を言い出したな。
「いい。兄さんは女同士の行為を見るのも好き」
だぁかぁらぁ～！　なんで俺の性癖を勝手にバラすかなぁ！
「は、はい！　では！」
紫髪女子は、前に来て、教卓に突っ伏してる先生のマンコを吸い始めた。
「ぢゅうううううう♡♡♡」
「んぁぁぁぁんっ♡♡♡」
女子生徒にマンコ吸われて感じてる先生……エロいな！
「兄さんのオチンポ様、ビンビン……♡　素敵♡」
「じゅ、授業を始めるから、もう吸わないでぇ♡」
授業開始の鐘が鳴るまで、マンコを吸われ続ける先生だった。

♡　♡　♡

「んっ♡　んっ♡　あぁぁん♡」

今は授業中。
俺の席には俺ともう一人座っていた。
「零様ぁぁ♡♡♡」
副委員長だ。
俺のチンコをマンコですっぽり咥え込んだ副委員長。俺は下からズンズンと突く。
その度に、副委員長は可愛らしく喘ぐ。
「なぁ」
「は、はい……？」
「おしっこ、見せてくれよ」
「へっ！？」
「俺、女がおしっこするのを見るのが好きなんだよ」
「うぅ〜〜……恥ずかしいです……」
「俺の頼み、聞けない？」
「っ……いえ……聞け、ます……」
「じゃあ、見せて」
「は、はい……♡」
副委員長は、俺の言う通りにおしっこを出し始めた。
ぷしゃぁぁぁぁぁぁあ♡♡♡
前の席の金髪女子のお尻にかかっているが、金髪女子は何も気にしていない。
「いっぱい出てるね。溜めてたの？」
「は、はいぃ……♡　さっきからずっと我慢してたんですぅぅ♡」
「そっか。いっぱい出していいぞ。俺も中に精液出すから」
「は、はいぃ……んっっ♡♡♡」
俺は放尿中の副委員長を、下から思い切り突き上げる。
「んっ♡　きゅっ♡　ひゃん♡」
パシャパシャ♡　バシャバシャ♡
突く度に、おしっこが吹き出し、飛び散る。
金髪女子の背中やお尻をめちゃくちゃ濡らすが、金髪女子は前を

向き勉強している。
この日常感の中でスるの、そそるんだよなぁ。
「出すよ！」
「ひゃ、ひゃい……♡」
「出る！」
ビューーーーーー！　ビュルルルル！！！
「んんあああああああ♡♡♡　おしっこ出しながらの中出し、気持ちよすぎるぅぅぅ！！！　おしっこ出しながら、イッちゃぅぅぅぅぅ♡♡♡」
副委員長は、おしっこを派手に撒き散らしながらイった。
「ねえ、おしっこしていい？」
「ふえ……？」
イった余韻に浸ってる副委員長に、そう尋ねるが頭が回ってないのか返事がなかった。
なので勝手にすることにした。
「出すね」
「んへ……？　きゅうぅぅぅぅ♡♡♡」
ぷじょぉぉぉぉぉぉ！
「れ、零様のおしっこ、オマンコの膣（なか）に出されてるぅぅ♡♡♡　子宮が精液とおしっこで満たされて、幸せぇぇ♡♡♡」
副委員長のお腹が、どんどん膨らんでいく。俺のおしっこが溜まっているんだ。
その光景が最高にエロくて、もっと出したくなる。
「まだ出すからな」
「はいぃ♡♡♡」
俺はしばらく、副委員長のマンコの膣（なか）に放尿し続けた。

第３８話　授業中の、愛情たっぷりご奉仕♡♡♡（後書き）

次回予告！

「皆さん、零様から差し入れを頂きました！」
『わぁ～～！！！』
「零様の出したておしっこです。味わって頂くように！」
『はい！』

会議室で会議を行う生徒達。その生徒達の手には零のおしっこが入った紙コップが！

「それでは！」
『いただきま～す！』

そのおしっこを、嬉しそうに、そして美味しそうに飲んでいく女子達。

「会長、副会長、復帰していいぞ」
「「ありがとうございます！」」

零に許され、学校へ復帰する会長と副会長。
零におしっこと精液をぶっかけられる、ただの便器と化す！

次回
『会議中の女子達に、おしっこの差し入れ♡♡♡　&会長と副会長に便器としての仕事を♡♡♡』
お楽しみに！

初の二本立てになっております！
喜んで、そして楽しんで頂けたら幸いです！

第３９話　会議中の女子達に、おしっこの差し入れ♡♡♡　&会長と副会長に便器としての仕事を♡♡♡（前書き）

プロローグ

「ん……？」

朝、目が覚めると――、

「んちゅ……♡　ちゅぱっ……♡　ぢゅる……♡」

銀髪ロング先輩がフェラをしていた。

「先輩、おはよう」

「っ！　ちゅ……お、おはようございます……！　ごめんなさい……勝手にしゃぶってしまって……」

「いや、気にしなくていい。舐められるの大好きだからな」

「よ、良かった……」

「それより先輩、生殺しはキツイ。イカせてくれ」

「あ、すみません……！　今、すっきりさせますね♡　はんむ……♡」

銀髪ロング先輩は、俺のチンコを口いっぱいに頬張る。

先輩は口が小さいので、咥えるとすぐに頬に俺のチンコの形が浮き出る。

それでも、先輩は嬉しそうに頭を動かし、チンコを刺激してくる。

途中、えずいたりするが、絶対に止めたりしない。

健気でいい女だ。俺はそう思った。

「じゅぼっ♡　ぐほっ♡　ぎゅぼっ♡」

「もうそろそろ出そうだ……」

「ぶぁい……♡　いつれもらひへくらはい……♡」

口の中で出すのも大好きだが……たまには――、

「くっ！」

「ぎゅぼっ！？　んっ……♡」

ビュルルルルルルルルルルルルルル！

「ふぅ〜……」
俺は、イク寸前に口からチンコを引き抜き、手コキをして先輩の顔に射精した。
朝一番の特濃精液が、先輩の顔を汚していく。
目に飛んだみたいで、先輩は目を開けられずにいる。鼻と目のくぼみの所に精液が溜まってて、すげぇエロい。
「ごめん。もうちょっと出る」
「はい……♡　いくらでも♡」
ビュル！　ビュッ！　ビュッ！　ビューーー！
「んっ……♡　んんっ……♡」
俺は断続的に残りの精液を射出した。
先輩の顔は、あっという間に精液まみれになった。
「零様の精液パック……♡　幸せです……♡」
垂れてくる精液を、舌で舐め取りながら幸せそうな表情を浮かべる先輩。
「じゃあ、しばらくそのままでいろ」
「はい♡　お許しいただけるなら♡」
先輩は、学校に行くまでの間、ずっと顔に精液を付けたまま過ごしていた。

第３９話　会議中の女子達に、おしっこの差し入れ♡♡♡　&会長と副会長に便器としての仕事を♡♡♡

【会議中の女子達に、おしっこの差し入れ♡♡♡】

「今日は、全裸首輪についての会議を行います」
三年生の生徒達が、会議室に集まっている。
「この間、新たに決まった校則の『全裸首輪』ですが、首輪をどうするのかがまだ正式に決まっておりません。学校から支給されるのは決まっているのですが、サイズや色、好みなど、課題があり、先生方も悩んでいるようです」
会議のリーダーなのだろう。ポニーテールの女子が代表して喋っている。
「そこで、我々の今回話し合う議題は、首輪の全てを統一するか否か、です。この時点で異論がある方はいらっしゃいますか？」
全員が首を横に振る。
「異論はないようなので、進めます。まず最初に、サイズ問題です。人によって首回りのサイズは違います。なので、バラバラに用意するか、サイズが合わなくても装着するか。どちらにするかを決めたいと思います。ご意見がある方は挙手を」
ポニテ女子が目配せすると、一人の女子が手を挙げた。
「どうぞ」
指された女子は、椅子から立ち上がる。
「首輪のサイズは測った方が良いかと思います。キツキツなら、我々の苦しむ顔を零様に喜んで頂けるかと思いますが、緩かったりすると、零様にご満足頂けないと思うので」
ハーフツインの女子がそう言うと、他の生徒達も同意見だと頷き出す。
それを受けて、ポニテ女子は――、

「そうですね……では測るとしましょう。そうしたら、誰が測る係になるかですが――」
「俺がやってもいいか？」
『っ！？』
女子達が、声のした扉の方を一斉に見る。
するとそこには、零がいた。
「れ、零様！？」
女子達は慌てて立ち上がる。そして、姿勢を正し、気をつけのポーズを取った。
「そんな賢まんなくていいよ。楽にして」
『は、はい……』
零に言われたらそうせざるを得ない。本当は、零の前ではビシッとしていたい女子達だが、力を抜き、姿勢を普通に戻す。
「そ、それで、零様……？　何用でここに……？」
「あぁ。ちょっと学校に用があって来たら、先生がここで会議をしてるって教えてくれてね。しかも首輪に関してって聞いたから、それなら俺も参加したいなぁって思って。迷惑だったか？」
「い、いえ！　迷惑だなんてそんな滅相もございません！　むしろこんな会議に足を運んでくださり光栄でございます……！」
「そうか。なら良かった。それでさっきの話なんだけど、首の測定、俺がやってもいいか？」
「も、もちろんでございます！　零様直々に測ってくださるなんて、我々にとっては幸せでしかありませんから……！」
「そうか。良かった」
零が扉に寄りかかると――、
「はっ！？　す、すみません……！　零様を立たせたままなんて……！　こ、こちらにどうぞ！　あ、椅子はこれでよろしいでしょうか？　もしアレでしたら、我々の誰かが椅子になりますが」
「じゃあ……ハーフツインの君。椅子になってくれる？」
「は、はい！　あ、ありがたき幸せ！」

ハーフツイン女子は、四つん這いになった。
「じゃあ失礼するよ」
「は、はい……！」
零は、ハーフツイン女子の背中に座る。全体重をハーフツイン女子にかける。
「くっ……」
「重かったか？」
「い、いえ……！　そんな事ありません……！　ただ、零様の体重を支えられる日がくるなんて、夢にも思わなかったので、感動してしまって……！」
「そ。ならいいや」
零はさらに深く座る。本当にハーフツイン女子を椅子にするかのように。
「そうだ。頑張ってるみんなに差し入れをするよ」
「さ、差し入れですか？」
「うん。人数分の紙コップってある？　あ、ちなみに俺とこの子のはいらないから」
「は、はい！」
零に言われ、ポニテ女子はそそくさと人数分（零とハーフツインを除いた五名）の紙コップを用意した。
「用意できました！」
「ありがとう。それじゃ……」
零はズボンとパンツを、座った状態のまま脱いだ。そうすると、椅子になっているハーフツイン女子にかなりの負荷がかかるが、ハーフツイン女子は嬉しそうにしていた。
『わぁ……♡』
零のチンコを見て、恍惚とした表情を浮かべる女子達。
「ふっ……」
零は、五つの紙コップにおしっこを入れていく。
『零様の、おしっこ……♡』

「ここに……」
零は、おしっこ後にオナニーをし、精液を紙コップの中に入れていく。
「ほい。精液入りおしっこの差し入れだ」
零は、紙コップを机の上に置いた。それを見た女子達は――、
「こ、こんな贅沢、よろしいのですか……！」
「あぁ。味わって飲めよ？」
『はい！』
女子達は紙コップを手に取り、飲み始める。
『ゴクゴク……♡』
飲み終えると――、
『お、美味しすぎるぅぅぅぅ♡♡♡』
全員が、口を揃えて言った。
「良かった。あ、君にもあるからね。ほら、咥えて」
零は、立ち上がり、四つん這いになっているハーフツイン女子の目の前に膝立ちする。
そして、チンコをハーフツイン女子の口元に持っていく。
「はんむ……♡」
ハーフツイン女子は、なんの躊躇いもなく零のチンコを咥える。
「じゃあ、出すよ？」
「んんっ……♡」
零は、ハーフツイン女子の口の中で放尿する。
先程出したばっかりとは思えない程、大量に出ている。
「ゴクゴク……♡」
零のおしっこを、美味しそうに飲んでいくハーフツイン女子。
「じゃあ次は、精液だ！」
「んぶつ！？」
零は、ハーフツイン女子のツインテールを掴み、イラマを開始する。
「んぼぉ！　ぐんぼぉ！　じゅぼぉ！」

零は、髪をまるで取っ手のように扱い、激しく腰を打ち付けていく。
その度に、ハーフツイン女子の口から唾液と飲みきれなかったおしっこが、ポタポタと床に垂れていく。
「くっ……出すぞ！　うっ！」
ドビュルルルルルルルルル！！！
「んぶぅぼぉ！　んっ……♡　んくんく……♡」
喉奥に勢いよく放出された精液を、ハーフツイン女子は嬉しそうに嚥下していく。
「ちゃんと飲み干せよ？」
コクコクと頷くハーフツイン女子。
喉を鳴らしながら、零のおしっこと精液を一滴残らず飲み干したハーフツイン女子。
「ぷはぁ……♡　ご馳走様でした……♡」
「よく飲めました。それじゃあ、会議を続けよう」
『はい！』
ハーフツイン女子は椅子になったまま、会議は再開した。

【会長と副会長に便器としての仕事を♡♡♡】

「あ、いたいた。義叔母さ～ん」
「あ、零」
俺は今、学校の四階にあるトイレに来ていた。
理事長室が四階にあるので、義叔母さんからここに呼び出された。
言い方が悪いか。来てほしいと頼まれたので、俺はやって来ていた。
「ごめんな。急に呼んじゃって」
「ううん。全然気にしないで。それで？　どうしたの？」

俺が聞くと、義叔母さんは個室のドアを開けた。すると、その中にいたのは――、
「え……！？」
全裸に首輪、猿轡をさせられ、ロープで後ろ手に縛られた会長と副会長の二人がいた。
しかも、マンコにはバイブが挿入（はい）っており、ウィンウィンと機械音が鳴り響いていた。
二人は立っている為、足をガクガクと震わせている。
「こ、これどうしたの？」
「そろそろこの二人を復帰させる話が出てな。だが、私達だけで勝手に決める訳にはいかない。襲われた零本人に、どうするか決めてもらわないとと思ってな」
「なるほど……それで？　なんで二人はこんなにも震えてるの？」
「利尿作用のある薬を飲ませて、一時間以上我慢させてるからな。そこにバイブで追い打ちをかけてる。二人には零の許可が下りるまで、漏らすなと言ってあるんだ」
「そ、そうなんだ……」
だから、引きつった顔して震えてるのね。
まぁ、その光景がめっちゃエロいから堪らないんだけど。
「じゃあ、二人共、あともう少し我慢してて」
「「っ！？」」
二人は、まだ我慢しなきゃいけないのかと、絶望の表情を浮かべた。
「なぁ、このバイブって強さどんくらい？」
「今はまだ『弱』だね」
「そっか。じゃあ……」
俺は、二人に近づきしゃがむ。二人のマンコにぶっ刺さっているバイブの強さを『中』にした。
「「っっ～～～～～～～～！？」」
強さを変えた瞬間、二人は全身をビクンと震わせ、さらに足を先

程よりも激しくガクガクさせた。
尿道からは少しだけおしっこが漏れているような気もしている。
さらに、愛液がドバドバ溢れてて、太ももを伝い、ふくらはぎに大量に垂れている。
「ねぇ、義叔母さん。この二人の事、自由にしていいの？」
「もちろん。この学校の女は全員零のモノだ。煮るなり焼くなり好きにしていいんだ」
「ありがとう。じゃあ、二人共、お互いにクリを弄りあえ」
「「っ！？」」
二人が首を横に振る。
そうだよな。そんな事したら、イッちゃっておしっこ出ちゃうよな。
でもだ～め。二人は俺のモノなんだから。
「早く」
「「っ……」」
二人は俺の睨みに怯み、向かい合い、おそるおそる互いのクリを弄り合い始める。
「「ふぅ～♡　うぅ～♡」」
お互いにクリを弄り合いながら、喘ぎ声を漏らしていく。マンコからはバイブの振動音がこれでもかって言うほど音がなっている。
「「うぅ～♡　うぅ～♡」」
「イきそうになってる？」
「「うぅ～！　うぅ～！」」
激しく頷く二人。
「でもまだ駄目。俺がいいって言うまでイッちゃダメだし、おしっこも出しちゃ駄目。分かった？」
「「んんぅ～！」」
涙を流しながら、首を横に振る二人。む。なんだ？　俺に逆らうのか？
「女の分際で、俺に逆らうのか？」

「「んんぅ～～～！」」
必死に首を振って否定する二人。そうだよな。俺に逆らわないよな。
「じゃあ、クリ弄り終了～」
「「……？」」
二人はポカンとした表情で、こっちを見た。
「今から二人は、俺専用の便器になってもらいます。学校の校則で一週間ごとに便器になるっていうのがあるけど、二人はそんなの関係なく、常に俺の便器ね。拒む事は許されないから」
「「うっ！　うっ！」」
二人は、嬉しそうに頷く。
「じゃあ、跪け」
「「ぶぁい……♡」」
俺がそう言うと、二人は素直に跪いた。
「今からおしっこ出すから、顔面と口で受け止めろよ？」
「「ぶぁ～い♡♡♡」」
俺はチンコを出し、放尿を始める。
「「ぶぁ……♡♡♡」」
俺のおしっこは、二人の顔に直撃。バシャバシャとかかっている。
猿轡で強制的に開かれている口には、猿轡の穴からおしっこが侵入し、口の中に入っていく。
「あぁ～マジ最高」
「零のおしっこはいいモノだな。今度、私にも飲ませてくれないか？」
「うん。もちろん」
義叔母さんからそんな事言ってくれるなんて、嬉しすぎてチンコが。
「お、勃った」
勃起してしまった。んで、勃起するとどうなるかと言うと――、
「おしっこができない」

「じゃあ、二人を使うといい」
「もちろん。そのつもりだ」
勃起するとおしっこは出せない。だから、俺は二人を使って射精する事にした。
「二人で手コキして」
「「ぶぁい……♡」」
俺は二人の拘束を解く。そして二人は、おしっこで濡れたまま、俺のチンコを手コキしてくる。
俺から見て左側を会長が。俺から見て右側を副会長がそれぞれ手を加え手コキしてくる。
「おぉ〜。これは中々……」
二人からの手コキは凄まじく気持ちよかった。
ダブルフェラもいいけど、このダブル手コキも良すぎる！
「もう、出る！」
ドビュルルルルルルルルル！！！
「「んぶっ……♡」」
俺は大量に射精した。
俺の精液は、おしっこまみれの二人の顔にかかっていく。
ドロッドロの濃い精液が、二人の顔を汚していく。会長は、目を開けていたので目の中に入ってしまった。
しかし、そんな事も一切気にせず、会長は射精を受け止めていく。
副会長は、顔に射精を受けて幸せなのか、恍惚とした表情を浮かべている。ちなみに目は閉じている。
すると――、
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡
「あ、漏らした」
二人がおしっこを漏らした。
「「うぅ〜……」」
泣き出した二人。おそらく、我慢の限界が勝手に迎え、お漏らししてしまったのだろう。

女子のお漏らしって、なんでこんなにもエロいのだろうか？
「あ～はいはい、泣かないの。ここまで我慢できて偉いね～」
俺は二人の頭を撫でてやる。俺はドSだが、優しい心も持っているんだ！
「もう我慢しなくていいから、全部出しちゃいな」
俺は二人の猿轡を外してやる。
「「ふぁ、ふぁい……♡」」
二人は、カラカラになった口で、なんとか返事をした。そしてーー、
「「っ～～～

第３９話　会議中の女子達に、おしっこの差し入れ♡♡♡　&会長と副会長に便器としての仕事を♡♡♡（後書き）

次回予告！

「「はぁはぁ……」」
「ほら、さっさと歩いて」
「「はい……♡」」

全裸で外を歩く、爆乳ショートちゃんと爆乳ミディアムヘアちゃん。
それを先導する零。

「うん。ここら辺でいいか」
「「……？」」

公園にやって来た三人。一体何をすると言うのか……？

「反省はここでのセックスを持って、終了とする！」
「「っ！！」」

ついに、二人の反省期間が終了！
朝早い中だが、いつ人が来るかも分からない状況下での野外セックスで、二人が覚醒！？

次回
『反省終了後の、野外セックス♡♡♡』
お楽しみに！

第４０話　反省終了後の、野外セックス♡♡♡（前書き）

プロローグ
「会長、ここなんてどう？」
「そうね……もっと広い方がいいかしら？」
会長と副会長が、不動産屋で物件を見ていた。
「将来、零様にご提供するための家を、今から見ておかないと」
「そうね。零様に喜んでもらえるような家を選ばなければ」
二人は、零に許され、学校へ復帰した。
復帰した後は、零の専属便器になり、零のおしっこを常に飲んだり浴びたりしている。
零の気分で、使われない日もあるが、そう言う時はアナルを舐めたりして、零にご奉仕をしている。
「別の不動産屋も見てみましょう」
「そうね」
二人はこの後、五件ほど、不動産屋を見て回った。

♥　♥　♥

私は赤城　瑠李。零君のペットだ。
ずっと好きだった人の側にいられると言うのは、とても幸せだ♡
朝起きたら零君がいて、寝顔を見れて、朝勃ちチンポ見れて、寝起きのちょっと不機嫌な零君を見れて、一緒に顔洗って、お散歩行って。
私は幸せ過ぎて、最近ちょっとだけ怖くなってる。
これは夢なんじゃないか。現実ではないんじゃないかって。
もし、万が一夢なんだったら、一生覚めないでいて欲しい。
「んっ……」

目覚ましが鳴ってる。零君より先に起きて、零君の目覚めをいいものにしなきゃ！

嫌なことは忘れて、今日も零君にたっくさんご奉仕するぞ♡

第４０話　反省終了後の、野外セックス♡♡♡

俺の部屋には、全裸で猿轡をさせられ、手首を拘束され、吊るされた二人の女子がいる。
俺の怒りを買い、反省中なのだ。
それもそろそろいいかなと思っている。
というか、そろそろ俺がこの二人とシたくなってきた。
「瑠李。あいつらの拘束解いてくれ」
「は～い」
俺が指示すると、瑠李が二人の拘束を解いていく。
拘束を解かれた二人は、床にへたり込む。
猿轡は外し、水分補給したり、食事をしたりしているが、あの日から一度も拘束を解いた事がないので、数日ぶりに座ることができたのだ。
二人の足は、ガクガク震えている。
「よいしょ」
俺は、二人の前にしゃがみ込み、二人の猿轡を外してやる。
「しぇ、しぇんぴゃい……？」
「うぅ～……」
二人の呂律は回ってない。
「二人共、一緒に来て」
「「ひゃい……」」
俺は、二人を連れて外に出た。

♡　♡　♡

まだ朝早い時間帯なので、人はそんなにいない。だが、完璧にいないわけではない。なので、人に見られる可能性はある。

なぜ、俺がそんな事を言ったのか。それは、爆乳ショートちゃんと爆乳ミディアムヘアちゃんの二人は、全裸だからだ。
首輪はしていないが、爆乳を丸出しにしてるのがめちゃくちゃエロい。
ちなみに、瑠李もいる。瑠李は、リードに繋がれて俺に散歩されている。
「着いたぞ〜」
俺達がやって来たのは、家から少し離れた所にある公園。
いつも子供達が楽しく遊んでいる所だ。そんな所で、三人の女子が全裸でいる。
その光景が堪らない！
「ここで今からセックスをする」
「「っ！」」
俺の言葉に、二人は目を見開く。瑠李は嬉しそうにケツを振っている。
「このセックスを持って、君達二人の反省は終了だ」
「い、いいんですか……？」
爆乳ショートちゃんが聞いてくる。
「あぁ。もちろん。タイミングはずっと考えてたんだ。それとも、許されるのが嫌か？」
「「っ！？」」
慌てて首を横に振る二人。爆乳が揺れるのがめっちゃエロい。
「じゃあ、順番にセックスしていくぞ」
「「はいっ！」」
許される事が嬉しいのか、二人はめちゃくちゃ元気に返事した。
「まずは君だ」
俺は爆乳ショートちゃんの肩を掴む。
「あ……」
「そこのベンチで四つん這いになれ」
「は、はい……！」

爆乳ショートちゃんは、ベンチの上で四つん這いになり、俺の方にケツを向ける。
そして、自分でマンコを拡げてくる。言わなくても俺が望んでる事ができるのは、流石だな。
「行くぞ」
「は、はい――んんぅぅ！！！」
俺は、爆乳ショートちゃんの返事を聞く前に、チンコをぶち込んだ。
「どうだ？　久しぶりのチンコは」
「しゃ、しゃいこうですぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡」
爆乳ショートちゃんは、よっぽど嬉しかったのか、大号泣した。
すでにマンコはグチョグチョになっており、膣（なか）は痛いくらいに締め付けてくる。
「どうしてほしい？」
俺はあえて動かず、尋ねた。最後まで意地悪をして申し訳ないが、この子の口から聞きたい。
「せ、先輩のぶっといおちんちんで、私の反省ド淫乱おバカマンコをたっくさん犯してくださいぃ♡♡♡　壊れるくらい、乱暴に、乱雑に犯して、たっくさん中出ししてくださいぃぃぃ♡♡♡♡♡」
「りょう、かい！」
「んおおおおおおおおおおおお！！！」
俺は、思い切り腰を打ちつけ、膣（なか）を犯した。
爆乳ショートちゃんの卑猥な声、久しぶりで、チンコがめちゃくちゃ震えてる。やべぇな……これ、俺がすぐにイッちまいそうだ……。
「んおおおおおお！　あああああ！　ぎ、ぎもぢいいいいいい！！！　おがじぐなるぅぅぅぅぅぅぅぅ

ど。
「おら！　もっと感じろぉ！」
「あああああああああああああああああああああ！！！　イグ！　イグ！　イッぢゃうううううううう！！！！！」
「くっ……！」
イッたのか、膣がめちゃくちゃ締まってきてる……！
最初の段階でもキツかったのに、こんなに締め付けられたら――！
「出る！」
ドビュルルルルルルルルルルルル！！！
「んあああああああああああああああ！！！　中、中！　中出しきだぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　中出しでまだイグぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」
ぷしゃあああああああ♡♡♡♡　ジョロロロロ♡♡♡♡
爆乳ショートちゃんは、潮吹きと失禁をした。
潮を吹いた後に、おしっこを大量に漏らす。
「わはぁ♡　すご～い♡　この子、おしっこと潮両方出してるぅ～♡」
瑠李が、爆乳ショートちゃんの真横で四つん這いになっている。
そして、爆乳ショートちゃんが大量に漏らす様子を、嬉しそうに見つめている。
「よいしょ」
ゴポ……♡　ゴポポ……♡
「おぉ～」
チンコを引き抜くと、爆乳ショートちゃんの膣から、大量に精液が逆流してくる。
その際、めちゃくちゃ卑猥な音がなった。
「瑠李、舐めてやれ」
「え！　いいの！」
「あぁ。許可する」
「やた！　ぢゅるるるるるるるる♡」

「んあああああああ♡」
俺は舐めろと言ったのに、瑠李は爆乳ショートちゃんのマンコに思い切り吸い付き、膣(なか)の精液を吸い出していく。
イッたばかりの爆乳ショートちゃんは、さらなる刺激に、全身を震わせている。
さて。
「次は君だ」
「は、はい……！」
俺が、待ちぼうけをくらっているミディアムちゃんに声をかけると、肩をビクッとさせ返事した。
「元はと言えば、君のせいで、二人共反省せざるを得なくなったんだからね？」
「は、はい……」
俺が少し責めるように言うと、ミディアムちゃんはシュンとして俯いた。
「だから、君には最後にお仕置きをする」
「え……」
『お仕置き』と言う言葉を聞いて、ビクッとするミディアムちゃん。
なんか、最初に会った時よりだいぶ大人しくなったな。
俺はうるさい女が嫌いだからな。元気っ娘とうるさいのはまた別物だからな。
「こっちに来い」
「は、はい……」
俺はミディアムちゃんを連れ、男子トイレに向かう。
「めちゃくちゃ綺麗……」
公園の男子トイレ、目を覚ましてから初めて入ったけど、めちゃくちゃ綺麗なんですけど！
この綺麗さは、俺の中では女子トイレなんですけど！　やっぱり、この世界は俺が知ってるのと違うんだな。
「ちょっと待ってな」

「はい」
俺はミディアムちゃんを待たせ、小便器に放尿する。
「あ……♡」
ミディアムちゃんは、俺のおしっこする姿を見れたことが嬉しいのか、可愛らしい微笑みを浮かべた。
「よし、こっち来い」
「は、はい……！」
俺は、小便器のセンサーが反応する前に、ミディアムちゃんを間に立たせ、離れた。
「俺のおしっこが流れないようにしろよ？」
「はい……！」
これで俺が何をしようとしてるのかと言うと――、
「よし、小便器の中に顔を突っ込め」
「え、え……！？」
「なんだ？　逆らうのか？　最後にお仕置きすると言ったろ？　俺のおしっこがかかった小便器に顔を突っ込んで、舐める。それが最後のお仕置きだ」
「っ……！」
ミディアムちゃんは、戸惑った顔をした。
「ほら、早くしろ。じゃないと、君だけ反省期間延長だよ？　それでもいいの？」
「い、嫌です……」
「じゃあ、早くして」
「は、はい……」
ミディアムちゃんは、小便器の中に顔を突っ込んだ。
ケツをこっちに突き出す格好になるので、めちゃくちゃエロい。
「ほら、ちゃんと舐めろよ？　水ごときに俺のおしっこを綺麗にさせるな」
「は、はい……れろ……♡」
ミディアムちゃんは、小便器を舐めていく。

「下の所に俺のおしっこが溜まってるから、しっかりと綺麗にしろよ？」
「ふぁ、ふぁい……♡」
俺の指示通りに舐めていくミディアムちゃん。
動く度に、Ｉカップの爆乳が揺れ、さらに大きなケツがフリフリと揺れる。
それを見て、俺はもう我慢ができなくなった。
「ふん！」
「んひゃあああああああああああ！？」
俺は、小便器を舐めるミディアムちゃんのケツを掴み、思い切りチンコをぶち込む。
急な事で驚いたミディアムちゃんは、とんでもない嬌声を上げた。
「れ、零様……」
「なんだ？　舐めるの止めていいと俺は言ってないぞ？」
「は、はい――んんぅ♡♡♡」
ミディアムちゃんも、久しぶりの快感にめちゃくちゃになっていく。
マンコもめちゃくちゃキツくて、逆レイプされた時よりもキツイと思う。
と言うか、あの時はトイレで待ち伏せされて逆レイプされたけど、今回は俺がレイプしてる。
この子とは、レイプし合う関係になれそうだな。
「んお！　あっ！　んほ！　んおおお！」
ミディアムちゃんも、爆乳ショートちゃんと同じく、出しちゃいけない声を出しながら感じまくる。
俺が突く度に、バッチュン、バッチュンと言うとんでもなくエロい音が鳴る。
「あああああああ！　んおおおおおおおおお！！！　ぢゅる♡らあああああああああああああああ！！！！」
小便器を舐めながら、感じまくるミディアムちゃん。

膣(なか)の締め付けがヤバい……イきそうなんだな。
「おら！」
「んごおおおおおおおおお！！！　イッグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！」
ぶしゃあああああああああああああ♡♡♡
ミディアムちゃんは、まるでおしっこするかのように潮を吹いた。
これは潮の勢いじゃないだろ、と思うほどの勢いで潮を吹いていく。あっという間に、床に水たまりを作った。
「すんげぇ出すな。でも、俺がまだ出してないから、な！」
「んあああああああああああああ

ミディアムちゃんはまた潮を吹いた。
この子の潮吹きは、失禁みたいで見ていて飽きない。と言うか、もっと見せてほしい。
「んあ……♡」
ゴポ……♡　ゴボボボボボボ……♡
俺がチンコを引き抜くと、爆乳ショートちゃんの問よりも卑猥な音を鳴らしながら、精液が逆流してきた。
ボタボタとミディアムちゃんが作った潮の水たまりに落下していく。
「はぁはぁ……」
力尽きたのか、ミディアムちゃんは、その場にへたり込んでしまう。
「よしよし。よく頑張りました。これで反省は終了だ」
「あ、ありがとう、ございます……」
俺はミディアムちゃんの頭を撫でてやる。
「これからは、生意気な口利いたり、喧嘩したりしちゃ駄目だからね？」
「は、はい……！　も、もうしません……！　零様の……ご主人様の言う事、ちゃんと聞きます……！」
「うん。じゃあ、帰ろう」
「はい……♡」
俺は、ミディアムちゃんをお姫様抱っこし、外に出た。
外に出ると、まだ瑠李が爆乳ショートちゃんのマンコを吸っていた。
「はぁ～」
俺はこの後、瑠李にチンコを掃除させ、家に戻った。
銀髪ロング先輩は、桃達と親交を深めていた。

♥♥♥

「はぁ～……♡」
私と親友は、一緒にお風呂に入っていた。
「ご主人様に許してもらえて良かった」
すっかり威勢がなくなった、私の親友。それもそうだ。先輩の怖さを知ったら、あんな態度は取れない。
「だから言ったでしょ？　先輩を怒らせたら駄目だよって」
「うん……ごめんね……あんたまで怒られちゃって」
「ううん。大丈夫。私もムキになって対抗しちゃって私も悪かったから。でも、先輩に許してもらえて本当に良かったよ」
私達は、先輩に許してもらえた。
ずっと吊るされて、お口を開きっぱなしにされて、お部屋でおしっこをしたり……。
お仕置きがすごすぎて、私はちょっと癖になっちゃったりしてしまった。
「私さ」
「うん」
親友がシャワーを止めて、顔を赤くしながら――、
「ご主人様からお仕置き、ハマっちゃったかも……」
「え……」
同じ事思ってたからビックリした。
「でも、わざと悪い事したりとかはしないよ。ただ、時々乱暴に、お仕置きしてほしいなぁなんて……」
「わ、私も思ってた。時々、先輩にお願いしてみよう？　多分、許してもらえるから」
「うん……♡」
私達はこの後、久しぶりのお風呂を堪能しすぎて、のぼせてしまった。
そこでまた、先輩に怒られる事になった。

第４０話　反省終了後の、野外セックス♡♡♡（後書き）

次回予告！

「零♡　零♡　零ぃぃぃぃ♡」

ついに！　義叔母とエッチする事に！
大きなおっぱいに、大きなお尻！　零のためならなんでもしてくれる、最高の大人の女！
零の精液を、搾り取ってくる！

「零、大好きだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡」

次回
『まさか、義叔母さんとも……♡♡♡』
お楽しみに！

第４１話　まさか、義叔母さんとも……♡♡♡（前書き）

プロローグ
「義叔母さん？　大丈夫？」
俺は今、理事長室にやって来ていた。
「あぁ……ちょっとめまいがしてな……」
姉ちゃんから、義叔母さんの様子が変だと聞いて、俺は心配になりすっ飛んできたのだ。
「体調悪いんなら、帰った方がいいよ？」
「あぁ……」
俺は義叔母さんの背中を優しくさする。その度に、大きなおっぱいがプルンプルンと揺れる。
ヤバい……興奮してきちまった……。
「零……勃起してるな」
「あっ！　い、いや、これは、その……！」
ヤバい、どうしよう……！　なんか恥ずかしい！
「恥ずかしがるな。零の勃起はとても素晴らしいモノなんだからな。もうすぐ三十のおばさんだが、それでもよければ、お相手願えるか？」
「と、年は全然気にならないし、むしろお願いしたいくらいなんだけど、大丈夫なの？　体調悪いんじゃ……？」
「零の精液を飲めば元気出る」
「なんじゃそりゃ……」
「零の精液、私にくれないか……？」
上目遣いで見つめてくる。なんだ、これ！　可愛すぎんだろ！
「もちろん、いいよ。でも、無理はしないでね？」
「あぁ。分かった。じゃあ、早速……」
義叔母さんは、椅子から降りて、俺の前で女座りをした。

そして、ズボンとパンツを脱がしてきた。
「おぉ♡　零の勃起チンポ、間近で見ると凄いな♡　すんすん……臭いも最高だし、チロ♡　味も極上だ♡　今からいっぱいするから、我慢汁もチンカスも沢山生成してくれ♡　そして、精液を沢山私に注いでくれ♡」
「あぁ」
なんか、真面目な義叔母さんの口から卑猥な言葉聞くと、めちゃくちゃチンコに響くな。
「じゃあ、始めるな♡」
「うん」
そうして、俺と義叔母さんのエッチが始まった。

第４１話　まさか、義叔母さんとも……♡♡♡

「れろ……♡　んちゅ……♡　ちゅぅぅぅ♡」
義叔母さんは、いきなり咥えたりはせず、竿を丹念に舐め、裏スジ、鈴口、亀頭、尿道をゆっくり味わっていく。
左手でチンコを押さえたりする姿は、めちゃくちゃエロい。
右手で優しく睾丸を揉んでくるのも最高に気持ちいい！
「んっ♡　我慢汁ぷくぅ～って出てきたな♡」
「は、恥ずかしいな……」
「恥ずかしがる零、可愛い♡」
なんか、手玉にされてる感じするのに嫌な感じしないのはなぜ？
チュコ♡　チュコ♡　チュコ♡
「零は仮性包茎だから、シコシコすると我慢汁が溢れてエッチな音がいっぱい鳴るな♡」
「仮性包茎、嫌い？」
「そんな訳ないだろう！　元々仮性包茎は大好きだ！　しかも、それが零のチンポであるならなおさらだ！」
「あ、ありがとう……」
「ネットで読んだんだが、皮を使ってシコシコすると、カリ首にチンカスが溜まるんだよな？」
「う、うん。オナニーの後とか凄いよ。射精後の残り液も溢れてくるから」
「そうか……これからはそのチンカスと、残り液、私がお口で処理してもいいか？」
「いいけど……汚いよ？」
「零の体液に汚いモノなんてあるわけないだろ。汗も唾液もおしっこも我慢汁も精液もチンカスも、全部が聖なるモノだ♡」
う、嬉しい事言ってくれるなぁ～。それに、義叔母さん、めちゃ

くちゃ可愛い笑顔するな。
いつも真顔だから、知らなかったけど、乙女の顔の時、めちゃくちゃ可愛い。
「可愛い」
「なっ！？　い、いきなりなんだ！？」
「あ、ごめん。つい心の声が」
「わ、私が可愛い！？　なんかの間違いだろ！？　こんな無愛想な顔の女、可愛くもなんともない……この可愛げのなさのせいで、振られたんだから……」
「その彼氏さん馬鹿だね。こんなに笑顔が可愛いのに。ま、俺にとっては振ってもらえてよかったけど。こうして、エッチな事できて、義叔母さんの可愛い所を独り占めできるから」
「れ、零……お前はどれだけ惚れさせれば気が済むんだ……」
「え……？」
「零、私は零が好きだ。大好きだ。零に尽くしたい。だから、私を零の所有物にしてくれないか？」
「しょ、所有物……！？」
ここに来て初めて聞く言葉なんですけど！？
性奴隷、便器、ペット、洗浄機、性処理係はいるけど、所有物は初めてだな。
……ん？　待てよ？　どれも所有物と変わらなくないか？
ん？　どうなんだ……？
ま、いっか。
「私は今二十九だ。だが、処女だ」
「え！？」
思わず声を出して驚いてしまった。
だって、こんなエロいおっぱいとお尻をしてて、処女ってまじかよ！？
「男は性に消極的だからな。結婚してからじゃないとセックスはしないんだ。私は過去、二人程交際していた。だが、交際して二ヶ月

も経たずに振られるんだ」
「な、なんで……？」
「胸と尻がデカすぎると」
「はぁあ！？」
声を荒げてしまった。
「んだよそれ！　そんなクソ男がいんのかこの世界は！　巨乳も巨尻も、男にとっては最高なモンだろう！　特に義叔母さんは最高級だ！　それを手に入れといて自ら捨てるとか、この世界の男は馬鹿ばっかりだな！」
なんか頭に来てしまい、ついつい文句を言ってしまった。
「そんな風に言ってくれたのは、零が初めてだ。ありがとう。でも、私は振られてよかったと思ってる」
「え……？」
「だって、大好きな零に、処女を捧げられるんだからな♡」
「義叔母さん……」
なんだよ、この健気な人……。
「義叔母さん！」
「ひゃ、ひゃい！」
「俺のモノになってくれ！」
「い、いいのか……？」
「あぁ！　義叔母さんの事は誰にも渡さない！　俺だけのモノだ！　俺だけの、俺だけの女だ！」
「う、嬉しい……♡　私は零だけのモノだ♡　私の事、好きに使ってくれ♡　いや、使ってください♡　私の体は全て、主のモノです♡」
そう言って、義叔母さんは服を脱ぎだしていく。
あっという間にパンイチになった義叔母さんは、パンツを脱ごうと手をかけた。が、俺はそれを止めた。
「主？」
「パンツは穿いたまま、ご奉仕して」

「はい♡　仰せのままに♡」
義叔母さんは、紫色のドエロいTバックを穿いたまま、座るのではなく、M字に開脚した状態でしゃがみ、俺のチンコへの奉仕を再開した。
「剥きますね♡　わぁ……♡」
義叔母さんが、俺のチンコの皮を向く。
皮を剥くと、我慢汁が溢れ、白濁となってチンコにまとわりついていた。さらに、カリ首にはチンカスが生成されている。
「チンカス♡　チンカス♡」
俺のチンカスを見て、ご機嫌に鼻歌を歌う義叔母さん。めちゃカワなんだけど！
「な、舐めてもいいですか？　ふぅ～ふぅ～……！」
鼻息荒く聞いてくる義叔母さん。可愛いんだけど、ちょっとだけ意地悪したくなるな。
「駄目。そのまま手コキして」
「え……」
絶望しきった表情を浮かべる義叔母さん。そんなに俺のチンカス舐めたいの！
めちゃくちゃ嬉しいんですけど！
「うそうそ。いいよ、舐めて」
「はい！　はんむ♡　ぢゅるるる

る……！　しかも、バキュームしながら舌で亀頭を舐めてくるから、マジでヤバい！

「出る！」

ドビュルルルルルルルルルルルル！！！

「んぼ！？　んぐぅ！　ぐぅぅ……♡　ごくごく……♡」

暴発に近い形で、俺は射精してしまった。

いきなり口の中に出された精液を、義叔母さんは嬉しそうに、美味しそうに、幸せそうに飲み込んでいく。

射精中も舌で亀頭を刺激してくるので、射精の勢いが衰えない。

「お、義叔母さん……！　一回、止まってぇぇ……！」

「ぢゅろおおお

この後、義叔母さんは全然チンコを離してくれなかった。

♡　♡　♡

「そういえば零」
「ん？」
俺と義叔母さんは、外を歩いていた。これから義叔母さんの家に向かうのだ。
ちなみに、義叔母さんの呼び方が「零」になっているのは、俺がそうしてくれと頼んだからだ。
「さっき『この世界』って言ってたけど、あれはどういう意味なんだ？」
「あ～……」
つい口走っちゃったんだよなぁ～……覚えてたか～。
「他の人には言わないでくれる？」
「もちろん。零の秘密を勝手に口外したりしないよ」
「じゃあ、言うけど……俺ね、多分この世界とは別の世界から転生？　してきたんだと思う……。信じてもらえないかもしれないけど……」
「信じる」
「え……？」
「零の言う事なら、私はなんだって信じるよ。それに、私は零の事を疑ったりしない。大好きな人を疑うなんて、最低だ」
「ありがとう……。俺がいた世界では男が性に積極的で、女が性に消極的なんだ」
「……」
「どういう経緯で、ここにきたのかは分からないんだけど、階段から落ちて死んだ、と思った次の瞬間にはこの世界で目が覚めてたんだ」
「……」

義叔母さんは、黙って話を聞いてくれてる。
「そしたら、燐や姉ちゃん、桃や瑠李が裸同然で過ごしてたり、女子が性に積極的だったりしてて、最初は戸惑ってたんだけど、この世界は、俺が元いた世界じゃないんだなって思うようになったんだ」
「なるほど……っ」
「……？」
突然、義叔母さんが抱きしめてくれる。
「義叔母さん……？」
「話してくれてありがとう……。一人で抱え込んで、苦しかったよな……。今生きているとは言え、一度死んだと思う経験をするなんて、想像もできないほど、苦しいはず……。今まで気づけなくて、ごめん……これからは、私がいるから」
頭と背中を優しく撫でてくれる。俺、赤ちゃんじゃないんだけど……。
でも、なんか心地良い。
「これからは、零の苦しみ、悩み、葛藤を半分、私も背負うから」
「うん。ありがとう……」
俺達は互いに見つめ合い――、
「ちゅ……♡」
夕日が差す帰り道、キスをした。

♡　♡　♡

「お邪魔しま～す」
「ただいまでいいぞ？」
「本当？　じゃあ、ただいま」
俺達は家（義叔母宅）に到着した。
「こんなにチョコを買ったって事は、もしかして？」
「うん。明日ってバレンタインでしょ？　スマホとかで調べたら、男が女子にチョコをあげるって書いてあったからさ。手作りしてみ

んなに渡そうと思って」
「そ、それは、私には……？」
「え～？」
「え！？」
凄くショック受けてる。可愛いな。
「うそうそ。ちゃんとあるよ」
「っ～～～♡」
満開の笑顔。うん。ベリーキュート！
「でね、義叔母さんにちょっと手伝って欲しい事があって」
「ん？　私にできる事なら、なんでもするぞ」
「じゃあ……」

俺は、義叔母さんと一緒にチョコ作りを始めた。
ちなみに、俺は前の世界にいる時から、料理が好きで得意だった。

第４１話　まさか、義叔母さんとも……♡♡♡（後書き）

次回予告！

「できた！」

零特製のチョコが完成！

「よし、渡しに行こう！」

渡す女子は決まっているらしく、零は学校に向かう。

「今まで、ちゃんと名前で呼んでなかったからな。このチョコを渡す時を持って、一人ひとり、名前を呼ぼう！」

ついに！　零が女子の名前を呼ぶ！

次回

『ハッピーバレンタイン♡　零特製チョコを召し上がれ♡』

お楽しみに！

皆様から頂いたお名前を、作品内で発表致します！

ハッピーバレンタイン♡　零特製チョコを召し上がれ♡（前書き）

プロローグ
「できた！」
「おぉ～！」
リビングのテーブルの上には、個装されたチョコがズラッと並んでいる。
「でもまさか、零の頼み事が、チョコに精液入れるから常に手コキしててとは、思わなかったよ」
「えへへ。みんな俺の精液を嬉しそうに飲んでくれてるからさ。せっかくなら入れてみようかなって。駄目だった？」
「いんや。みんな絶対に喜ぶぞ。私だって凄く嬉しいからな」
「良かった～。義叔母さんのは、チンカスも入ってるからね」
「本当か！　それはすこく嬉しいな♡　チョコは一回寝てから渡す感じかな？」
「そうだね。流石に夜通し作ってたから眠たい……」
「では、一緒に寝よう♡」
「うん」
そうして、俺と義叔母さんは、一緒に風呂に入り、一緒に寝た。

ハッピーバレンタイン♡　零特製チョコを召し上がれ♡

「おはよう」
「おはよう、零」
朝になり、バレンタイン当日。
なんか、結構緊張してくるな。
学校に行く身支度を整えた俺達。後は出発するだけなのだが。
「待って」
「ん？　どうした？　なんか忘れ物か？」
いつまでも、〇〇女子や、義叔母さんなんかじゃ駄目だ。ちゃんと名前を呼ばないと。
「【新宮寺（しんぐうじ）　黒乃（くろの）】さん。俺のモノになってくれて、ありがとう。これからも、俺のモノとして、ずっと側にいてください」
俺はそう言って、義叔母さん――【新宮寺　黒乃】にチョコを渡した。
「な、名前を、呼んでくれた……♡　はい♡　もちろんです♡　私は一生、主のモノとして、お側にいさせていただきます♡」
黒乃は、チョコを嬉しそうに受け取り、俺に抱きついてきた。
「じゃあ、学校行こう。黒乃」
「はい♡」
俺と黒乃は、学校へと向かった。
♡　♡　♡
学校に着き、黒乃と別れた俺は、教室へと向かう。

「あ、零様。おはようございます♡」
「あぁ。おはよう」
こころなしか、クラスの女子達がソワソワしている気がした。
俺からのチョコを待っているのかもしれない。
だったら、まずは挨拶をしてきた眼鏡女子に。
「【冰川（ひかわ）　雫（しずく）】。俺とエッチしてくれてありがとう。雫とのセックスは、いつも気持ちよくて大好きだ。潮吹きさせられたのが、初めてだったから、潮吹きは雫との一番の思い出だ。これからも、俺と沢山エッチしてくれ」
俺は眼鏡女子――【冰川　雫】にチョコを手渡した。
「っ～～～～～♡♡♡」
俺が名前を言った瞬間、教室中がざわついた。
そして雫も、目元に涙を浮かべている。
「零様ぁ～～～！　お言葉だけでも至福なのに、チョコまでくださるなんて……！　ありがとうございますぅ……！　これからも私は、全身全霊で零様に尽くします！」
泣きながら満面の笑みを浮かべ、チョコを受け取る雫。喜んでもらえたなら良かった。
「じゃあ次に……」
俺は副委員長の席に向かう。そして、真ん前に立つ。
「【衣笠（きぬがさ）　奈央（なお）】。いつもオナニーを見せてくれてありがとう。奈央のオナニーはエロくて、大好きだ。これからも俺にオナニーを見せてくれ」
「零様……♡　もちろんです……！　いつでもどこでも、零様が望むのであれぱ、お見せ致します♡」

嬉しそうにチョコを受け取る副委員長――【衣笠　奈央】。

「じゃあ、次は……」

俺は、金髪女子に近づき――、

「【佐和（さわ）　紗夜（さよ）】。俺のおしっこを美味しいと言って飲んでくれてありがとう。初めて飲んでくれたのが紗夜だから、これかも俺の飲んでくれると嬉しいな」

「れいれい……！　そんなの当たり前だよぉ～！　いつでもどこでも何があっても、れいれいのおしっこ飲むからぁ！　と言うか、飲ませてぇ♡」

そう言って、金髪女子――【佐和　紗夜】は、満面の笑みでチョコを受け取った。

「あれ？」

周りを見ると、茶髪女子がいなかった。

「あ～、あの子なら、今日お姉さんが来るから、学校休むって言ってたよ」

「そっか。後で行ってみるか」

「うぃ～、おはよう～」

先生が入ってきた。よし、次は先生だ。

「ん？　どうしました？」

「【山田（やまだ）　真耶子（まやこ）】。俺の性奴隷になってくれてありがとう。いつも放ったらかしにしてごめんな。今度、セックスデートしよう」

「れ、零、様……！　こ、こちらこそありがとうございます……！　そのお心遣いとお言葉だけで、満足です……！」

目元に涙を浮かべながら、チョコを受け取る担任教師――【山田

真耶子】。

後は……三年の教室か。

「真耶子、ちょっと席外していいか？」

「もちろんです！　始業までまだ時間がありますので」

「ありがと。じゃあ、ちょっと行ってくる」

そう言って俺は、三年生の教室へと向かった。

♡　♡　♡

「お。いたいた。お～い！」

俺が廊下から声をかけると、前を歩いている二人、会長と副会長が振り返った。

「あ、零様！　どうなさったんですか？」

「何か用がおありでしたら、呼んでくださればお伺いいたしましたのに」

「ううん。俺の個人的な用だから。ううん！」

「「？」」

「まず、【星野（ほしの）　澪（みお）】。俺の専属便器になってくれてありがとう。まぁ、初めてのあれはビックリしたけど、今度は俺が襲うからな。これからもよろしく」

「れ、零様……！　こ、こちらこそ、です……！　ありがとうございます……！　いつでも襲ってください……♡　私の体は、いつでも待っておりますので♡」

生徒会長――【星野　澪】が、嬉し泣きしながらチョコを受け取った。

「そして、【香川（かがわ）　恋（れん）】。恋も俺の専属便器になってくれてありが

とう。恋の事も、襲うからな。これからも、便器としてよろしくな」
「は、はい……！　こちらこそ、感謝です……！　いつでもどこでも、襲ってください……♡」
副会長――【香川　恋】も、涙ながらにチョコを受け取ってくれた。
そうして、学校でのチョコ渡しを終えた俺は、紗夜と一緒に茶髪女子の家へと向かった。

♡　♡　♡

旅館が家の茶髪女子。そこに向かうと、茶髪女子の母親がちょうどお客さんをお見送りしているところだった。
「あら、紗夜ちゃん。あ、あなた様は零様！　ようこそいらっしゃいました！」
「あ、ども」
俺の事、覚えていてくれたのか。
「れいれいが、あの子に用があるんだって」
「そうでしたか！　こちらにどうぞ！　ご案内致します！」
茶髪女子の母親が、案内してくれる。
とある部屋に案内されると、俺は目を疑った。
「ん！？」
「あ、れー君♡」
「ぶ、分身、した！？」
茶髪女子が二人いる！？
「れいれい、人は分身しないよ～。双子だよ～」
「はっ！？」
そうだった！　この子は双子なんだった！
「え、えっと～じゃあ、そちらにいるのが？」

「うん。私の双子の姉だよ」
双子だから当然なんだけど、顔が瓜二つだな〜。髪型も髪色も全く一緒だ。
体型も全く一緒で、似てない所を探すのが大変だ。
「全く似てないでしょ」
「え？」
「ほら、ここ。左耳の所にほくろがある。でも、私はない」
小さな、差！
「それよりれー君。どうしたの？」
「あ、そうだった。ううん！」

「【前田（まえだ）　沙耶香（さやか）】。俺とセックスしてくれてありがとう。いつもアナル舐めてくれるのめっちゃ嬉しい。今度また、乳首開発しような」
「れ、れー君が……！　れー君が名前呼んでくれた……！　こちらこそありがとうだよぉぉ！　アナル舐めさせてくれてありがとう！
これからも舐めさせてぇ♡　乳首開発、嬉しい♡」

茶髪女子――【前田　沙耶香】が涙目になりながらチョコを受け取ってくれる。

「あ、家族の前でとんでもない事言っちゃったけど、大丈夫か？
「うん♡　なんの問題もないよ♡　みんなには私達の関係、全部言ってあるから♡」
「そ、そうなんだ……」
俺がちょっと戸惑っていると――、

「零様、初めまして。沙耶香の姉の【一之瀬（いちのせ）　玲奈（れいな）】と言います。父の方に付いて行ってるので苗字が違いますが、気になさらないでくださると、嬉しいです。これから、どうかお見知り置きを」

沙耶香の姉――【一之瀬　玲奈】さんが挨拶をしてくれる。
めちゃくちゃ礼儀正しいな！
「あ、今れー君、私と姉さんの態度を比べた」
「え！　い、いや気のせいだろ」
「え～……む～」
「そう拗ねるな。チョコ食ってみろ」
「うん。いただきます♡　あむ……ん！　このチョコ、中かられー君の精液が出てきたぁ♡」
「え！　本当！　私も！　あんむ……ん！　本当だ♡　れいれいの精液入りチョコとか、最高過ぎるんだけどぉ♡」
「俺の特別製だ！　精液とチョコをしっかりと味わってくれよ」
「「うん♡」」
二人は、嬉しそうに精液入りチョコを味わっていく。
「じゃあ、また明日、学校でな、沙耶香」
「はい♡」
「玲奈さんも、また」
「はい」
俺は、帰る事にした。紗夜は、このまま泊まるらしい。

♥　♥　♥

「また明日」
私、衣笠　奈央は、今、下校していた。
「～～～～～～♪」
今日の私は上機嫌だった。普段は滅多に歌わない鼻歌を歌いながら、家に帰ってきた。
「どす～ん♪」
私はベッドにダイブする。

「零様からチョコ貰っちゃった♡　人生初のバレンタインチョコ～♡　しかも、初が零様からなんて～♡」
箱に入ってる♪　これって、零様の手作りなのかな……？
だとしたら、めちゃくちゃ嬉しい♡
「うわ～すごい♡　お店みたい♡」
箱を開けると、中には一つ一つ袋に個包装されたチョコが入っていた。
「食べよう。いただきます♡　……んっ！　こ、これ、零様のせーし入りだぁ♡」
めちゃくちゃ美味しい～～～♡
「こんなの、何個でも食べれちゃうぅ♡」
私は、二個目に手を伸ばした時、スマホが震えた。
「ん？」
着信を見ると、いとこからだった。
ちょうど良かった。この事を報告したいと思ってたから。
「もしもし♪」
『おぉ～。ご機嫌だね～』
「分かる？」
『その声聴けば、誰だって分かるよ～。んで？　何があったの？』
「零様の話は前にしたでしょ？」
『うん』
「その零様がね、私の名前を呼んでくれて、その上バレンタインのチョコをくれたの！」
『おぉ～マジか！　やったじゃん！』
「うん！　しかも、精液入り！」
『なんだそれ！　羨まし過ぎるだろ！』
「えへへ～♪　いいでしょ～♪」
『今度、その零様に会わせろ！』
「え～どうしようかな～」
『おい！』

「分かった分かった。零様は女を愛してくれるから、今度会わせてあげる」
『約束だかんな！』
「はいはい」
そこで通信は終わった。あれ？　結局なんの用だったんだろう？
「零様とシたら、虜になるんだろうなぁ～栞」
スマホの画面にはいとこ――【小鳥遊（たかなし）　栞（しおり）】と表示されていた。

♡　♡　♡

「ただいま～」
『おかえり～』
家に帰って来た俺。
うん。全員いるな。
「みんな、集まってくれるか？」
俺が声をかけると、全員が居間に集まってくれる。
「ううん！　まず！」
「【新宮寺　巴（ともえ）】。俺の女になってくれてありがとう。これからも沢山エッチしてくれ。それと（にゃ～って言ってくれな）」
「っ～～～～～～♡　れ、零ちゃん♡　私こそありがとうねぇ～♡
これからいっぱい言うからねぇ～♡」
そう言って、義母――【新宮寺　巴】は嬉しそうにチョコを受け取ってくれる。
「次いで、【雨宮（あまみや）　リサ】。俺の彼女や性奴隷やなんやらになってくれてありがとうな。これからも、リサのご奉仕、期待してる。その爆乳も使ってくれると嬉しいな」

「せ、先輩ぃぃぃ♡♡♡　ありがとうございますぅぅ♡　これからも、先輩に喜んでもらえるように、頑張りますぅぅ♡♡♡　おっぱい使ってのご奉仕も、頑張ります♡♡♡」

爆乳ショートちゃん――【雨宮　リサ】が、爆乳を揺らしながらチョコを受け取ってくれる。

「さらに次いで！　【伊藤（いとう）　鈴音（すずね）】。俺の女になってくれてありがとうな。この前までひどい事してごめんな。これからはもっと沢山エッチしていこうな」

「ご、ご主人様ぁぁぁぁ♡♡♡　ありがとうございますぅぅぅぅ♡♡♡　全身全霊でご奉仕させて頂きますぅぅぅぅ♡♡♡」

爆乳ミディアムヘアちゃん――【伊藤鈴音】が、泣きながらチョコを受け取ってくれる。

「じゃあ、最後に。【水瀬（みなせ）　愛莉（あいり）】先輩。俺の彼女兼性奴隷になってくれてありがとう。これからも、沢山エッチして、思い出作っていこう」

「は、はい……！　ありがとうございます……！　これから、零様の彼女として、性奴隷として、誠心誠意、尽くして行きますので、宜しくお願い致します……！」

銀髪ロング先輩――【水瀬　愛莉】が、泣くのを我慢した様子で、チョコを受け取ってくれた。

もちろん、チョコは姉ちゃん、燐、桃、瑠李にも渡した。全員、泣きながら受け取ってくれた。

「ちなみに、そのチョコにはとあるモノが中に入ってます」

俺がそう言うと、全員目をキラキラさせて、チョコを一斉に食べ

始めた。
『んっ！』
チョコを噛んだようで、全員が幸せそうな表情を浮かべた。
「こ、これ！　お兄ちゃんの精液の味♡」
「兄さんの精液入りチョコ……♡」
「零ちゃんの精液、美味しい～♡」
「先輩の精液、チョコと一緒に食べれるなんて、幸せすぎますぅぅ♡」
「ご主人様のザーメン入りチョコ、しゃいこぉぉ♡」
「零様の精液、美味しすぎます♡」
「零ちゃんの精液、美味しすぎるわぁ～～～♡」
「零君の、エキス入り……堪らない……♡」
全員が全員、様々な反応を示す。まぁ、全員美味しいって反応なんだけど。
「喜んでもらえて良かったよ。もしまた、食べたかったらいつでも言ってな」
「これって、零ちゃんが作ったの？」
巴が聞いてきた。
「うん。俺、料理得意だから」
『えええええええええええええええええ！？』
そ、そんなに驚く事……？
瑠李と桃以外が、驚きの声を上げた。
『んふふ。これで　”初期段階は終了”　だね』
「ん？」
なんか変な声が聞こえた気がしたけど、まぁいいか。
俺達は、この後デリバリーで頼んだピザを夕飯にした。
♥♥♥

「ようやく、この時が来ましたわ」
長いピンク色の髪をなびかせながら、零の家の前に立つ女子。
「零様。あの日の約束を果たしに来ましたわ！」
制服を突き上げる爆乳を持つお嬢様口調の女子――――【醍醐（だいご）歩美（あゆみ）】。
この子は一体、零とどういう関係なのか。
「行きますわよ。天城」
「はい」
歩美に仕える使用人――【天城（あまぎ）　ユイ】。
歩美に負けず劣らずの爆乳で、灰色のショートカットで、前髪が左目にかかっており、右目のみ見えている。
「作戦決行よ！」

ハッピーバレンタイン♡　零特製チョコを召し上がれ♡（後書き）

ご参加くださった皆様！　誠にありがとうございます！！！

皆様から頂き、決定させていただいた素敵なお名前を改めて、発表させていただきます！

・佐和　紗夜　ｂｙ　★春人様★
（金髪女子）

・前田沙耶香　ｂｙ　★ｓａｋｉ様★
（茶髪女子）

・冰川　雫　ｂｙ　★春人様★
（眼鏡女子）

・衣笠　奈央　ｂｙ　★河内長門守様★
（副委員長）

・雨宮　リサ　ｂｙ　★Ａｓｔｅｒ様★
（爆乳ショートちゃん）

・山田真耶子　ｂｙ　★壹與様★
（担任教師）

・新宮寺　巴　ｂｙ　★壹與様★
（義母）

・新宮寺　黒乃　ｂｙ　★壹與様★
（理事長）

・伊藤　鈴音　ｂｙ　★春人様★
（爆乳ミディアムヘア）

・醍醐　歩美　ｂｙ　★河内長門守様★
（爆乳お嬢様）

・星野　澪　ｂｙ　★春人様★
（生徒会長）

・香川　恋　ｂｙ　★河内長門守様★
（副会長）

サプライズ♪

・一之瀬　玲奈　ｂｙ　★春人様★
（茶髪女子、双子の姉）

・天城　ユイ　ｂｙ　★春人様★
（爆乳お嬢様のお付き）

・小鳥遊　栞　ｂｙ　★Ａｓｔｅｒ様★
（副委員長のいとこ）

・水瀬　愛莉　ｂｙ　★　春人様　★
（銀髪ロング先輩）

皆様！　今回はご参加いただき、誠にありがとうございました！

！！！！

皆様からいただいたお名前が、どれも素敵で、かなり迷いました……！

迷いに迷って迷いまくって、決定させていただきました！

そして、いただいたお名前の中で、他のキャラのイメージに合うお名前があったので、サプライズとしてそちらにつけさせていただきました！

残念に思われてしまった方もいると思います……すみません……！

ですが、皆様からいただいたお名前は、大切に丁寧に扱わせていただきますので、お許しいただけますと幸いです！

今回、ご参加くださった皆様、誠にありがとうございました！

次がもしありましたら、またご参加くださると嬉しいです！

皆様がいるから、僕は頑張れます！

これからも皆様に喜んで頂けるよう、エッチで興奮する作品を書いていきますので、小鳥遊綾瀬の応援、何卒よろしくお願い致します！！！

第４２話　真耶子にスパンキングイラマ♡♡♡（前書き）

プロローグ
「んっ……」
俺は、ピチャピチャと言う、いやらしい音が気になり目を開ける。
目を開けるとすぐに視界に映ったのは、瑠李だった。
「あ、零君、おはよう♡」
「おはよう……」
そして、次にチンコに快感を覚えたので下を向くと、そこには――、
「零ちゃん、おはよう♡」
「お兄ちゃん、おはようございます♡」
フェラをする、燐と姉ちゃんがいた。
「これは、どういう状況？」
「たまには起こしに行こうかなって思って、お部屋に来たら、零ちゃんのおちんちんがパンパンになってたから、我慢できなくておしゃぶりしちゃったの♡」
「そこに私も加わって、一緒におしゃぶりしてたんです♡　勝手にごめんなさい……」
「ごめんね、零ちゃん……」
「いや、謝んなくていいよ。俺のチンコはいつでもどこでも好きな時に舐めてくれ」
「「っ～～～♡　ありがとう（ございます）！」」
「んで？　瑠李は？」
「私は、二人がフェラをしてるのを見て、我慢できなくなって、零君のお顔をペロペロしてたの♡」
「そうか。ペットらしくていいな」
「ありがとう♡　もっとペロペロしていい？」

「あぁ。好きなだけ舐めろ。そして、俺の口の中を犯せ」
「は～い♡　れるぅ♡」
瑠李は、俺の口を塞いでくる。そして、舌を口腔内にねじ込み、俺の口の中を犯していく。
「んちゅ……♡　れるぅ……♡　むちゅぅ……♡」
瑠李のキスは、日を増すごとに上手くなっており、俺は瑠李とのキスが一番好きだった。まぁ、本人には伝えてないが。
「「んちゅぅぅぅ……♡」」
「れるれるれる……♡」
「ぢゅぅぅぅぅぅ……♡」
燐と姉ちゃんも負けじと、チンコへの刺激を強めてくる。
見えていないのでよく分からないが、おそらくは燐が玉を吸い、姉ちゃんが亀頭を舐めているんだと思う。
二人のコンビネーションが凄まじく、俺はあっという間に限界を迎えた。
「んっ！」
ドビュルルルルルルル！
「んっ……！　んん……♡」
「お姉ちゃん、一人で飲んじゃわないでよ……！　私にもお兄ちゃんの精液頂戴……！」
「わらってるわよ……♡　ほら、ふひあへて……♡」
イッてもキスを止めてくれない瑠李のせいで、下で何が行われてるかよく分からなかった。
が、おそらく、姉ちゃんと燐がキスをして、口移しで俺の精液を送り合っているのだろう。
そう思うと、興奮してしまう。
「ほらみんな、朝ごはんできたよ」
巴（義母）が呼びに来る。
『は～い』
姉ちゃん、燐、瑠李が返事をする。そして、俺達はリビングへと

向かった。
俺は下半身丸出しのままだ。
♡　♡　♡
「んちゅ……♡　れぅる……♡　れろ……♡」
「ぢゅる……♡　んむ……♡」
朝食を取る為、リビングにやってきた俺達。
机を囲み座る俺達。
俺の左隣には燐。俺の向かいには桃。桃の隣には姉ちゃん。瑠李は、床で四つん這いになっている。
リサ（爆乳ショートちゃん）と鈴音（爆乳ミディアムヘアちゃん）は、真ん中の所に椅子を持ってきて座っている。
巴と愛莉先輩（銀髪ロング先輩）はと言うと、机の下に潜り、俺にダブルフェラをしていた。
「いい？　零ちゃんは、ここを舐められるのが好きだから、しっかり丁寧に舐めるのよ？」
「は、はい……！」
愛莉先輩は、巴に俺が喜ぶフェラをレクチャーされていた。
それをしっかりと聞き、実行する愛莉先輩。飲み込みが早く、愛莉先輩のフェラはあっという間に俺好みになっていった。
「ぢゅるるるるるるるるるるるるる♡　はぁ～♡　零ちゃんの我慢汁堪んないわぁ♡　本当美味しい♡」
「零様の体液って、全てが美味しいですよね♡」
「そうなのよ～♡　だから、常に零ちゃんを舐めていたくなっちゃうのよね～♡」
二人はそんな会話をしながら、激しくフェラをしていく。
「も、もう出そう……！」
「いいのよ♡　いつでも出して♡」
「我慢なんかしないで、いつでも好きな時に好きなだけ出してくだ

さい♡」
「出る！」
ドピュ！　ドピュピュゥゥゥゥゥゥゥ！！
「「んっ！　んん……♡」」
二人は、俺の射精を顔面で受けていく。
「綺麗にしますね♡」
二人は、お掃除フェラを始めた。

第４２話　真耶子にスパンキングイラマ♡♡♡

「（れ、零様……こ、これは流石に……）」
（なんだ？　真耶子。俺のしたいことに意見する気か？）
「（い、いえ……決してそういう訳では……）」
（なら、問題ないだろう）
「（で、ですが、ここで声を出さずにと言うのは……）」
（真耶子が頑張ればいいだけの話だ）
「（そ、そうですが……）」
俺は今、教師達が集まる会議室の机の下に隠れていた。
椅子に座る真耶子（担任教師）の足元に身を隠している。
なんでこんな事をしているのかと言うと、俺は今日、真耶子とエッチする為に呼び出した。
だが、あいにく会議があるとの事で、できるのは夜になると言われた。
だったら、会議中にすればいいだけの話だろうと俺は、他の教師達が集まる前に会議室に入り、真耶子の足元に隠れたのだった。
そして、ここで俺がやる事はただ一つ。
真耶子にエロい事をする！
「んっ……！」
俺は人差し指で、真耶子のマンコを触る。縦筋を優しく愛でるように撫でてやる。
ちなみに、今日の真耶子はパンツを穿いていない。俺がそう指示したからだ。
全裸の校則は生徒だけに当てはまるので、教師達は残念な事に服を着ている。
真耶子も、スーツを着ている。下はスカートなのでマンコを弄りやすい。

「んっ……んん……んふぅ……♡」
（おい、声漏れてるぞ。そんなんじゃ気づいてくださいって言ってるようなもんだぞ？）
「（だ、だってぇ……零様の指、気持ちいいから……）」
（こんなんで声漏らしてたら、この後の刺激に耐えられないぞ？）
「（ど、どんな事をする気なんですか……？）」
（それは、内緒だ）
「（そ、そんなぁ……）んんっ！」
俺は、優しく縦筋をなぞるだけだったのを、人差し指と中指の腹を使って素早く上下に動かし、激しく擦る動きに変えた。
ピチャピチャ♡
俺が指を動かす度、真耶子のマンコからいやらしい音が鳴る。
「んんぅ～……！　んふぅ……！」
真耶子の卑猥な音と、喘ぎ声がどんどん大きくなっていく。
「ん？　山田、どうした？」
会議を仕切っている先生が、様子のおかしい真耶子に声をかけてきた。
別にバラしてもいいんだろうけど、こういう隠れてやるプレイが結構好きなんだよな。
（なんでもないって誤魔化せ。バレないようにな）
「（は、はい……！）」
真耶子は顔を赤らめながら頷き――、
「な、なんでもありません……すみません」
「そうですか。それでは会議を続けます」
真耶子はなんとか誤魔化し、会議は続行し始めた。
「（れ、零様……こ、これ以上は……）」
（うるさい）
「（は、はい……）」
俺は、真耶子を黙らせ、マンコをこすり続ける。すると、クリがどんどんと大きくなってきた。

「んひゅん！　っ……！？」
マンコをこすりながら、勃起したクリを抓んでやる。
と、真耶子は嬌声を漏らした。真耶子はまずいと思ったのか、すぐに口を押さえる。
「や、山田？　ほ、本当にどうしたんだ？　体調が悪いのであれば言ってくれ。無理して参加する必要はないんだからな？」
「だ、大丈夫で、んん！　す、ぅ……♡」
俺は、真耶子が話している間にもマンコとクリへの刺激を止めない。
真耶子は、なんとか声を我慢しようとしてるが、可愛らしい喘ぎ声は我慢しきれず、漏れている。
おそらく、勘のいい人なら察しているはずだろう。
「ほ、本当に大丈夫なのか……？　顔が赤く、目も虚ろで、よだれも垂れているが……」
この教師は察しが悪いな。
そこまで状況が分かってるなら、大体分かる気がするんだが……？
（さてと、そろそろ本気出すか）
「（ほ、本気じゃなかったんですか……！？　んんぁ♡）」
俺は、クリへの刺激をしつつ、人差し指と中指を膣（なか）に入れ、上側を中心的に刺激する。
「（そ、そこ、駄目ぇぇ……！）」
俺は、Gスポットと呼ばれる場所をめちゃくちゃに刺激していく。
グチュグチュ♡　チュクチュク♡
「（だ、駄目……！　だ、駄目ですぅ……！　そ、そんなにされたら、出ちゃう……！　出ちゃいますからぁぁ♡）」
（いいぞ。出せ）
俺は、クリを力強く抓み、指を激しく責め立てる。
「んあああああ！」
ぶしゅ♡　ぶじょ♡　ぷしゃあああああああああ♡♡♡
真耶子は、大量の潮を吹いた。

「や、山田！？」
その場にいた、教師達が立ち上がる。
嬌声を上げたし、潮吹きの音とかも聞こえてるから、流石にバレたか。
「はぁはぁ……」
椅子の背もたれにぐったり寄っかかる真耶子。
「よいしょ……」
キャスター付きの椅子なので、簡単に押す事ができるので、俺は真耶子を椅子ごと押して、机の下から出た。
『れ、零様！？』
「どもです」
五人もいたんだ。
「ちょっと真耶子にイタズラしたくて」
「そ、そうでしたか……言ってくだされば、ご協力いたしましたのに……」
「こうして隠れてするのが、結構好きなんですよ。だから、つい。すんません」
「い、いえ……！　そういう事なら全然構わないので、頭をお上げください……！」
俺が頭を下げると、五人の先生達が慌てふためく。
「ありがとう」
俺が頭を上げると、先生達はホッとした表情を浮かべた。
「もっと真耶子としたいから、今日は帰ってもいい？」
「もちろんでございます！　山田！」
「は、はひ！」
先生に呼ばれ、真耶子は慌てて立ち上がる。スカートが捲れ上がり、下半身が丸見えになっている。
「しっかり零様のお相手を務め、満足してもらうように！」
「は、はい！」
そうして俺達は、真耶子の家へと向かった。

♡　♡　♡

「へぇ～。ここが真耶子ん家か～」
真耶子はマンションに住んでいた。
高層マンションとかではなく、普通のマンション。
六階建てのマンションで、真耶子はそこの五階に住んでいる。
「あ、あの……少しだけ待っていて頂くことって可能でしょうか……？」
「なんで？」
「な、中が散らかっているので、少し片付けたくて……」
「嫌だ。外寒いし。別に散らかっててもいい気にならん」
「そ、そうですか……では、どうぞ……」
俺は真耶子に玄関を開けてもらい、中に入る。
「おぉう……」
真耶子の室内は……うん。予想以上に散らかっていた。
玄関には靴が散乱しており、廊下には、出し損ねたのかごみ袋が四、五個置いてある。
中に進むと、居間があり、そこには透明なテーブル、ガラステーブルって言うのかな？　が置いてあり、大きめなソファも置いてある。
その周りには、ティッシュやバイブ、ローターなどの玩具、そして、ＡＶが散乱している。
ソファの上にはパンツや服が散乱している。
「す、すみません……」
真耶子は、恥ずかしそうに、申し訳なさそうに俯く。
別に気にする事ないのにな。
俺も一人暮らしだったら、こうなると思う。ＡＶやオナホを出しっぱで、誰に気を遣うでもなく、使用済みティッシュをそこら辺に捨てたりとか。

と言うか、大体の一人暮らしってこんな感じじゃね？
偏見過ぎるか。すんません。
「別にそんなに気にしなくていい。真耶子の日常を見れてむしろ嬉しいよ」
「れ、零様……♡」
「脱げ」
「はい♡」
真耶子は、すぐさまスーツを脱ぎ始める。
「脱げました♡」
「よし。ケツを俺の顔に向けろ」
「はい♡」
俺は全裸になり、ソファに仰向けで横になる。
そして、真耶子はケツを俺の顔の方に向けて覆いかぶさってくる。
俗に言うシックスナインの体勢だ。
「れ、零様のオチンポ様……♡　バッキバキになってますぅ♡♡♡」
「真耶子のパンツが散乱してるからな。こうなるだろ」
「わ、私のパンツで興奮してくれるんですか……♡」
「当たり前だろ？　そんなに驚く事か？」
「す、すみません……その、大体いつもノーパンとのご指示なので、私の下着にはご興味がないのかと……」
あぁ～なるほどな。
「俺は確かにノーパンが大好きだが、下着に興味がないわけじゃない。と言うか、むしろ好きだ。女子が穿いているのをずっと見ていたいと思うほどにな」
「そ、そうなんですね……♡　で、では、見たくなったらいつでも仰ってください♡　いつでもお見せ致しますので♡」
「あぁ。それより、しゃぶってくれるか？　そろそろ我慢ができない」
「あっ！　す、すみません……！　今、しゃぶらせていただきます……はんむ♡」

「どうだ？　美味いか？」
「ふぁ、ふぁい……♡　零ふぁまのおひんほはま、ろっれもおいふいいれふ♡」
「そうか。なら、俺も舐めてやる」
「ふぇ！？　はうぅぅぅぅ♡♡♡」
俺は、目の前にある真耶子のマンコを舐めてやる。
何気に俺、クンニって初めてじゃね？
「んっ……♡　んん……♡　あぁん……♡　れ、零様の舌が、マンコを這い回ってるぅぅぅ♡♡♡　気持ちよすぎるぅぅぅ♡♡♡」
真耶子はよっぽど気持ちいいのか、俺のチンコから口を離し、チンコに頬ずりしながら感じている。
さっきから吐息がチンコに当たって、むず痒いんだが。
「ぢゅるるるるるるる！」
「んあああああああああ♡♡♡」
マンコに思い切り吸い付くと、真耶子が嬌声を上げた。
「らめ！　らめ！　らめれすぅぅぅ！　イッちゃう！　イッちゃう！　イッちゃいますぅぅぅぅぅ！！！」
イケ！　イッちまえ！
「ぢゅるるるるるるる！！！！」
「んあああああああああああああああああああああああ♡♡♡♡♡」
ぷしゅ♡　ぷしゃ♡
「はぁはぁ……」
真耶子は潮を吹きながらイッた。
「おい、何休んでんだ。しゃぶれ」
「は、はい……！　すみません……！」
真耶子は再び俺のチンコを咥えてくる。
「ぢゅる♡　れるぅ……♡　ぢゅるるるる♡」
ん～気持ちいいんだけど、もっとほしいな。やっぱ、真耶子と言えば――、
「ふん！」

「んぶごぉ！？」
イラマだろ！
俺は、腰を思い切り持ち上げ、喉奥を突いた。
亀頭にのどちんこが当たるのが分かった。
「ぐぼぉ〝！　じゅぼぉ〝！　じゅぞぉ〝！　ぎゅぼぉ〝！」
俺は腰を突き上げる。その度に、真耶子の口から卑猥な音が鳴る。
マンコとアナルがヒクヒクして、こいつ、感じてんのか。
だったら――！
「んんーーーーーー♡♡♡」
俺は、目の前にあるデカいケツを、思い切り引っ叩く。
すると、マンコからダラダラと愛液を溢れさせながら嬌声を上げた。
でも、その嬌声は、俺のチンコが吸収した。
「んごぉ〝！　んぶぉ〝！　んがぁ〝！」
俺はケツを叩きながら腰を突き上げる。
「んごぉ〝！　んがぁ〝！　んらぁ〝！　んぼぉ〝お〝お〝お〝お〝♡♡♡♡♡」
くっ……！　そろそろイキそう……！
「出る！」
パチィィィィィィィィィィィンッッッ！！！
ビュルルルルルルルルルル！
「んぶぶ……ばぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡」
俺は、射精の瞬間にケツを今まで以上に強く引っ叩いた。
めちゃくちゃデカい音が鳴ったのと同時に、俺は射精した。
その射精を口の中で受け止めようとした真耶子だけど、気持ちよさが勝ち、チンコを離してしまった。
俺の精液は、真耶子の顔面に降り注ぐ。
「ちゃんと飲まないと駄目だろ」
「ず、ずびばぜん……」
真耶子は泣いていた。よっぽどケツへの衝撃が強かったのだろう。

「痛かったか？」
ちょっと心配になったので、念の為聞いてみる。
「痛いのは痛いのですが……その……い、痛みが気持ちよすぎて……」
心配して損した。
「今日はアナルでするぞ」
「え……」
「そこら辺に転がってる玩具で、開発はしてるんだろ？」
「そ、それは、そうなのですが……」
「ほら。四つん這いになれ」
「は、はい……」
真耶子は、ソファの上で四つん這いになる。
ケツを突き出すので、マンコはもちろん、アナルも丸見えだ。
「ほら。ここは期待でヒクヒクしてるぞ？　開いたり、閉じたり～」
「じ、実況しないでくださいぃ～……は、恥ずかしいですからぁ……」
恥ずかしがる大人……いい！
「もっと恥ずかしがれ。ほら、ヒクヒク～」
「うぅ～～～～」
お。マンコから愛液が溢れて……ソファに垂れた。
ソファとマンコに糸が引いてる。エッロ！！
「まずは挿(い)れる前に、馴染ませないとな」
「え……？　あひゅん♡」
俺は、マンコに指を挿(い)れ、膣(なか)をほじくりまわす。
「んんっ……♡」
「よし。じゃあ、こっちね～」
「んひゃんっっっ♡♡♡」
愛液がたっぷりついた人差し指と中指を、アナルにぶっこむ。
「お～簡単に二本挿(は)いった～」
「お〝〝〝

お゛！！！」
俺は、アナルの中を引っ掻き回す。
その度に、クチョクチョと言う音が鳴る。
「よいしょ。おぉ～」
「お゛っ゛……お゛っ゛……」
ケツを突き上げながら、ビクビクさせる真耶子。
アナルが閉じきらず、ヒクヒクしてる。
「あ～もう！　我慢できん！」
俺は、チンコをアナルにぶち込んだ。
「んがぁ゛ぁ゛ぁ゛

よ、ちょっと待ってえええええ！！！　い、今は、駄目えええええええええええええええ！！！」

俺は、逃げないように、真耶子の両手を後ろ手で持ち、高速で腰を打ち付ける。

「んがあああああああ！！！　うおおお

「これで精液溢れないな」
「ふ、蓋されちゃいましたぁ♡」
「嬉しそ。うぅ〜。ちょっとマンコ貸して」
「ん？　ど、どうぞ」
真耶子は、不思議そうな顔をしながら、再び四つん這いになり、マンコを拡げる。
「サンキューよいしょ」
「んっ……♡」
俺は、マンコの膣（なか）にチンコを挿（い）れた。
そして――、
「ふっ……」
ぷしゃあああああああああ！
「んあああああ♡♡♡　お、オマンコの膣（なか）にお、おしっこ出されてるぅぅぅ♡♡♡　し、子宮におしっこ溜まってるぅぅぅ♡♡♡」
真耶子のお腹は、俺のおしっこが溜まっているのがわかる程、大きくなっていく。
「ふぅ〜サンキュー。スッキリしたわ」
「よ、良かったです……♡」
「ねぇ、そこにしゃがんでみて」
「は、はい……？」
真耶子は俺に言われた通り、ガラステーブルの上でM字開脚をする。
俺は、アナルにぶっ刺したバイブを抜く。すると――、
「あ……」
「精液が溢れて来たね」
アナルから、俺の精液が逆流し、ガラステーブルの上にボタボタと落ちていく。
俺はその様子を下から覗き込む。
「なぁ、お腹押してみて」
「こ、こう、ですか……？　んん！？　こ、これ駄目ですぅ♡」

真耶子がお腹を押すと、マンコから俺のおしっこが逆流してくる。
「あああああああああああああああ♡♡♡　逆流おしっこ、止まらないいいいいぃ♡♡♡」
これは、ヤバいな……。
この後、逆流おしっこは全然止まらなかった。

♥　♥　♥

「すぅ～すぅ～……」
今、私のベッドの上では零様が眠っている。
ベッドはシングルなので、二人は寝れない。
なら、当然、ベッドを使うのは零様だ。
「ふふ♡　零様、可愛い♡」
零様の寝顔は、この世の何よりも可愛かった。
「写真勝手に撮ったら、怒られる、かな……？」
ううん。もし怒られたとしても、それはそれで嬉しい♡
いっぱいお仕置きしてもらいたい♡
「これ、待ち受けにしよう♡」
私は、零様の寝顔を写真に撮り、スマホのホーム画面にした。
「さっきのおしっこの中出し、すごかったな……それに、アナルセックスがあんなに気持ちいいなんて……ハマっちゃいそう……♡」
零様は、どんどん私の性癖を発掘してくれる。
これからも、零様に尽くしていく。もっともっとお金を稼いで、必ず零様と一緒に暮らすんだ！
「その日まで、捨てられないように、頑張ります！　それでは、お休みなさい。零様♡」
私は、床に敷いた布団に入り、眠りに就いた。

ちなみに、零様はご家族に連絡を取って泊まってくださった。幸せだぁ～～～♡♡♡

第４２話　真耶子にスパンキングイラマ♡♡♡（後書き）

次回予告！

「れいれい♡」「れー君♡」

紗夜と沙耶香の二人との、初デート！！！

『私達を、いっぱいイジメて♡』

エッチな格好で零を誘惑する二人！

そんな二人と、デート先のあちらこちらでヤリまくり！！！

次回

『紗夜と沙耶香の２人と……♡♡♡』

お楽しみに！

第４３話　紗夜と沙耶香の２人と……♡♡♡（前書き）

プロローグ
「ふんふ～ん♪」
明日は、明日は！
「れいれいとの、デート……♡」
待ちに待ったデートの日！
「れいれいとデートできる日が、来るなんて……♡」
私は部屋の姿見の前で、全裸で服を選んでいる。
「う～ん……このパンツがいいのかな……それともこっち……？
私が持ってるエッチなパンツって、この二つしかないんだよね～……」
私が明日穿いていくパンツに迷っていると――、
「紗夜～？　晩ご飯できたよ～……ってあら。明日の下着選び？」
「お母さん。うん……どっちにしようか迷ってて」
お母さんが入ってきた。
「どっちもエッチね～」
「うん……でも、もっとエッチなのがいいんだよね……」
「そう……じゃあ、今から買いに行く？」
「え！　い、いいの……？」
「もちろん。相手の方に満足してもらえる下着を穿いていかないなんて、女としてしちゃいけない事だからね。満足してもらえて、興奮してもらえる下着、買いに行こう」
「うん！　ありがとう、お母さん！」
「どういたしまして。デート中に襲ってもらえるような下着選びましょうね」
「うん！」
私は、晩ご飯を食べた後、お母さんと一緒にアダルト下着ショッ

プへと向かった。

♥　♥　♥

「ふふ♪」

「さや姉、一人で笑ってて怖い」

「うるさい。人の部屋に勝手に入るな」

「共同だから無理～。明日、なんかあんの～？」

私は、明日のれー君とのデートに向けて、準備をしていた。

「明日は特別な日なの。だから念入に準備しないと」

「特別な日～？　デート？」

「そ」

「さや姉ばっかりズルい……私も男性とエッチしたい！」

「も～この間からずっとそればっかり」

「だって～！　男性にエッチな事してもらうのなんて女の夢じゃん！」

それは分かる。

「多分、れー君ならあんたの相手もしてくれるだろうけど……まだその時じゃない！」

「む～……！　私もさや姉みたいな体なら……！」

「私よりエッチな体の子、いっぱいいる……！」

「っ……！　ご、ごめんなさい……」

私が睨むと、妹はシュンとする。

「はぁ。私のパンツ選び、手伝って？」

「う、うん！」

私は、妹にパンツを選んでもらったけど、いいやつがなくて、買いに行くことにした。

ママにお小遣いをもらって。

♥　♥　♥

「どれにしよう……」
「さや姉、これは？」
妹がパンツを見せてくる。
ほぼ紐で、オマンコもアナルも隠しきれないモノだった。
「うん、確かにれー君喜びそう。でも、もっとエッチなのがいいな～」
「これ以上にエッチって何……？」
私達がパンツを選んでいると――、
「あれ？　沙耶香？」
「ん？　お。紗夜ちゃん」
紗夜ちゃんがいた。その隣はお母さんかな？
「沙耶香も、明日用のパンツ？」
「うん。今持ってるのだと、全然エッチさが足りなくて」
「分かるわ～！　れいれいに興奮してもらうには、全然足りないんだよね～。明日、どっちのパンツにれいれいが一番興奮したか、勝負しない？」
「受けて立つ。お互いのパンツは、明日まで秘密」
「うっし！　じゃあ、明日ね！」
「うん」
紗夜ちゃんがお母さんと一緒に奥に行く。
「絶対に負けない！」
「こ、こんなに燃えてるさや姉、初めて見た……」
とびっきりエッチなパンツを穿いて、れー君を虜にするんだ！

♥　♥　♥

「沙耶香も私と同じ考えとは……」
これは負けられない……！
「れいれいのおちんちんを、バッキバキにするパンツ……おしっこ

を沢山飲ませてくれるパンツ……」
もっとれいれいの好み、聞いとけば良かった……！
「私のリサーチ不足だ～……」
「紗夜。女はリサーチを怠ったら、終わりよ」
「うぐっ……」
確かにそうだ……。私は何もかもを怠っていた。
初めて本気で好きになった人。なんでも知りたい、なんでもしてあげたい、なんでもされたい。
そう思ってる。なのに、私は気持ちよくしてくれたり、精液やおしっこを飲ませてもらえる事に喜び過ぎて、肝心の事を何もしてなかった。
「明日のデートでは、れいれいの事、もっと知ろう！」
明日のデートは、勝負の日だ！

第４３話　紗夜と沙耶香の２人と……♡♡♡

『おはよう！』
「お、おはよう……」
ど、どうしたんだ……？　なんかみんなリビングに集まってるけど……。
「先輩、今日デートですよね？」
「う、うん……」
なんかリサの目がキラキラしてる。
「零ちゃんに似合う最高に格好いい服、用意したよ」
巴が、服を持ってきてくれる。
「ほらほらお兄ちゃん、お着替えしてきてください♪」
「お、おぉ」
燐に押され、俺は部屋で服に着替える。
着替え終わって、リビングに戻る。
「着替えたけどさ～、こういうのってイケメンが着て似合うやつじゃね～？」
俺がそう言いながら、リビングに行くと――、
『キャーーーー！！！！』
「うぉ！？　な、何！？」
全員が声を上げた。一瞬悲鳴かと思ったけど、みんなの顔を見て、歓声だってすぐに分かった。
「れ、零ちゃん、格好良すぎる……♡　私、どうにかなっちゃいそう……」
フラフラしながら、椅子の背もたれに手を付く巴。
「零ちゃん……♡　私、生きてて良かった……！」
泣き出してしまう姉ちゃん。
「私、お兄ちゃんの妹になれて良かった……！　お兄ちゃんがお兄

ちゃんで良かった～……！」
大号泣する燐。
「兄さん、格好良すぎて、私、死んじゃう……♡」
倒れそうになる桃。死ぬなー！
「先輩、素敵すぎます……♡　私、先輩のモノになれて、本当に嬉しいです……！」
へたり込み、目元に涙を浮かべるリサ。
「ご主人様、格好良すぎですよ……♡　子宮がキュンキュンしてきちゃいます……♡　イジメてください……♡」
なんか、一人違う感想を述べる鈴音。
「零様、格好良すぎですよ……♡　これ以上惚れさせて、どうするんですか……♡」
顔を真っ赤にする愛莉先輩。
「……♡」
一人、言葉を失っている瑠李。
「そ、そんなにいいか？」
『良すぎる！』
みんなが口を揃えて言ってくれる。
うん。なんか素直に嬉しい。じゃあ、少しは自信を持ってもいいのかな？
「じゃあ、行ってくるわ」
『行ってらっしゃい！』
他の女子とのデートを、快く送り出してくれるなんて、最高過ぎるだろ。
俺は、紗夜と沙耶香の二人と待ち合わせしている駅へと向かった。

♡　♡　♡

待ち合わせ場所に行くと、すでに二人が待っていた。
「ごめん！　お待たせ！」

俺がそう声をかけながら、駆け寄ると、二人は顔を真っ赤にした。
「どうした？」
「れ、れいれいの格好が……！」
「破壊力、ヤバすぎ……」
この格好、好評すぎん？　どういう格好かは読者の皆様の想像にお任せするけど。
俺、服に詳しくないから上手く説明できないんだよね。
「そ、そんなにいい？」
「うん！　めっちゃ格好いい！　あ、もちろんいつも格好いいからね？」
「今日のれー君は、いつもの数倍格好いい……♡　いつものれー君でさえ格好良くて大変なのに、今日はもっと大変……」
「大変と言うのは……？」
「オマンコが濡れまくっちゃう……♡」
なるほど。それは俺にとっては嬉しい事なんだが。
「それを言うなら、二人だって最高だよ。めちゃくちゃ可愛いじゃん」
「そ、そう……？」「あんまり自信はないんだけど……」
二人の格好は、とっても可愛かった。
紗夜は、肩出しのトップスで、胸元が大胆に開いており、谷間が丸見えになっている。
スカートも超短くて、プリンとしたお尻が丸見えになっている。
沙耶香は、体にピッタリ張り付くタイプのワンピースを着ており、ボディラインがはっきり見えている。
この世界は、ブラジャーがないので、乳首が完全に目立っている。しかも、ワンピースの色が白なので沙耶香の濃い色の乳首と乳輪がめちゃくちゃ丸見えになっている。
そして、下半身にもピッタリ張り付いているので、パンツの色が丸わかりだ。赤だった。
「れいれい、こういう格好って、好き……？」

「あぁ。大好きだ。めっちゃ興奮する」
「よかった～……！」
「れ、れー君、わ、私は……？」
「沙耶香の格好も大好きだよ。ボディラインがはっきり見えるのは、エロくて最高だ」
「う、嬉しい……♡」
二人は、安心したような表情を浮かべている。
俺が、二人の格好を貶すとでも思ったのかな？
エロい女の子にそんな事、言うわけないのに。
「それじゃ、行こう！」
「デートに！」
「あぁ、そうだな」
俺達は、駅前で互いを褒め合うと言う、ちょっとしたイチャイチャをした後、電車に乗ってデート先へと向かった。
行き先は、姉ちゃん達とデートした遊園地だった。

♡　♡　♡

移動中は、大勢の女性達にチラチラ見られた。
やっぱり、男が積極的なのが珍しいらしく、みんな発情した顔で俺を見ていた。
でも、紗夜と沙耶香が俺を守ってくれたので、何もされずに済んだが。
「とうちゃ～く！」
俺達は、遊園地に到着した。
「れいれいはここで待ってて。私券買ってくるから～」
「あぁ。ありがとう」
「私はここで、れー君を守る。一人にしたら、絶対他のメスどもに襲われちゃいそうだから」
「あはは……沙耶香もありがとう」

「ん……♡」
右腕に抱きついてくる沙耶香。腕に感じるおっぱいの感触を味わいながら、俺は沙耶香の頭を撫でてやる。
頭を撫でられた沙耶香は、目を細め、腰をくねらせながら妖艶な吐息を漏らした。
「頭撫でただけなのに、エロい声出すなよ……」
「だって、れー君に触られる所全部気持ちいいんだもん……♡　頭撫でで、イッちゃうかも……♡」
「じゃあ、沙耶香はこれから、どこを触られてもイッちゃうド変態女に開発しないとな」
と、冗談半分で言ったら――、
「うん……！　して……♡　私を、れー君専用の開発女にしてぇ♡」
開発女ってなんだよ。初めて聞くわ。
「いいのか？　多分想像してるよりキツイと思うぞ？　俺の好きなように沙耶香を開発するから」
「大丈夫……♡　私はれー君のモノだから……♡　れー君の好みの女にして欲しい……♡　れー君に開発されるの、私にとっては幸せでしかないから……♡」
「そうか。じゃあ今度から開発していこうな」
「うん……♡」
先程より力を込めて抱きついてくる沙耶香。
腕におっぱいの感触と、乳首の感触が伝わってきて、マジでヤバい。
「あ……♡　れー君勃起してる……♡」
「ごめん。沙耶香のおっぱいに興奮しちゃって」
「謝らないで……。謝るのは、私……れー君の興奮に、勃起に気付けないなんて、れー君のモノとして失格……興奮してる事を、相手に言わせるなんて、絶対にしてはいけない……」
「失格って事はないだろ。現に俺が言う前に勃起に気づいたんだから」

「ううん。勃起する前に気づかなきゃ駄目なの……興奮してるのを感じ取って、勃起する前にご奉仕を始めるのが女としての役割。私はそれができなかった……」
シュンとしてしまう沙耶香。
「じゃあ、ちゃんとできなかった罰として、今ここでしてくれる？」
「っ！　も、もちろん……！　し、しっかりとご奉仕して、れー君に許してもらいたい！」
いや、まぁ、別に怒ったりしてる訳じゃないんだけどね。
「じゃあ、しっかりして？」
「うん……♡　失礼します……♡」
沙耶香は、俺の前でしゃがみ込み、ズボンとパンツを脱がしていく。
「わぁ……♡　おっきい……♡」
俺の勃起チンコを見た沙耶香は、嬉しそうに吐息を漏らした。
顔を真っ赤にして、ハァハァと発情しきった息を漏らしている。
「舐めて？」
と、俺が言うと――、
「はい……♡」
熱い吐息を漏らしながら返事をし、口を大きく開けてチンコを頬張った。
「ぢゅる……♡　んむ……♡　れる……♡」
俺のチンコを美味しそうに舐めていく沙耶香。
外でチンコを出して、フェラしてもらうなんて、正直まだ慣れない。
周りの人達（女しかいない）が、俺達の方を羨ましそうに眺めてくる。
「ぢゅる……♡　じゅぼ……♡」
沙耶香が、頭を前後に動かし本格的に責めてこようとした所で――、
「お～い！　お待たせ～……」

紗夜が戻ってきた。
紗夜は、俺達の姿を見ると、寂しそうな顔を浮かべてしまった。
「私、仲間はずれ……？」
「ち、違うぞ。これはだな……」
俺が弁明する前に、沙耶香がチンコを離し、説明した。
「れー君が興奮してるのに、私が気づけなかったの。だから、ご奉仕してお許しをもらおうとしているの」
「そ、そうだったんだ……ごめん！　れいれいの興奮に気づけなくて……！　女として失格だ……わ、私にもご奉仕させてもらってもいい？」
涙目になりながら、俺に尋ねてくる紗夜。券を持つ手は震えている。
「もちろんだ。頼む」
「う、うん……！」
紗夜は俺の前に跪く。沙耶香が少し横にずれて、紗夜に場所を与える。
「れいれいのおちんちん、こんなに勃起して……ごめんね……気づけなくて……」
「そんなに謝んなくていいって。ここで奉仕してくれれば」
「うん……！　全身全霊でご奉仕するからね！」
そう言って、紗夜は亀頭を口に含む。
「はんむ♡　れる……♡　える……♡」
「私は、こっち……♡」
沙耶香は、俺のお尻の方に移動し、アナルを舐めてくる。
「沙耶香は俺のアナルが好きなんだな」
「ぢゅる……♡　うん♡　大好き……♡　れー君のアナル、とっても美味しいから……♡　感じてると、ヒクヒクしてギュッギュするのが、可愛くて好き……♡」
なんか、そこまで言われると、流石に恥ずかしいけど……。
「ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡」

「ぢゅるるるるるるるるるるるるるる♡♡♡」
「くっ……！」
紗夜が激しくフェラしてきて、沙耶香が激しくアナルに吸い付いてくる。
このダブル攻撃に、俺は限界が近かった。というか、もう無理だった。
「ごめん！　出る！」
ドビュ！　ドビュルルルルルルルルルルル！！
「んぶっ！　んく……♡　ごくごく……♡」
（れー君のアナル、ギュッギュしてて、素敵……♡）
射精が終わった後、紗夜がゆっくりと口からチンコを離す。
「みへ……♡　れいれいのせーひ、いっふぁいらよ♡」
紗夜が口を開けて、口の中に溜まる精液を見せてくる。
「結構出たな。飲んでくれるよな？」
「もひろんらよ～♡　ごくごく……♡」
「あ～！　私の分は！」
「ざんね～ん♡　私が全部飲んじゃいました～♡」
「ぶ～～～！　紗夜ちゃん、ズルい！」
「アナルを舐めたんだからいいでしょ～！」
「それとこれとは、話が違うもん！」
ここまで感情的になってる沙耶香、珍しいな。
そんなに俺の精液が飲みたかったのか。
「じゃあ、沙耶香」
「ん……？」
おぉ～半べそ。可愛いけど。
「俺のおしっこ飲め」
「っ！　いいの！」
「あぁ」
「え～！？　わ、私は！？」
「紗夜は……今は我慢な」

「え～……」
紗夜は、すげぇショックを受けた顔をしてる。
まぁ、紗夜は俺のおしっこ飲むの大好きだからな。
「後で飲ませてやるから。な」
「うん……」
口許に付いた精液を、指ですくって舐めながら、拗ねた顔を浮かべる紗夜。めちゃくちゃ可愛い。
「ほら、沙耶香」
「うん♡」
大きく口を開ける沙耶香。
「うっ……」
ぷしゃあああああああああ！
「んっ♡　ごくごくごく……♡」
俺のおしっこを、嬉しそうに飲んでいく沙耶香。
目を開けてるから、目に入ってる気がするんだけど、そんな事気にしてないようで、もっともっとと言わんばかりに、俺のおしっこを飲んでいく。
飛び散るので、顔にかかったり、せっかくのおしゃれな服にかかるが、沙耶香はそれすらも喜んでいるように見えた。
「沙耶香、羨ましい……私もれいれいのおしっこ飲みたい、かけてもらいたい……」
紗夜がこっちを羨ましそうに見てきている。後でたっくさんあげるからな。
「ママ、見て～。あのお姉ちゃん、おしっこ飲んでる～」
「あれは女として最高に幸せな事なのよ。あなたも将来に向けて、色々と頑張るのよ」
と、俺達を見て、親子がそんな会話をする。
本当にこの世界、すげぇな。
「ふぅ……」
「ごくごく……♡　終わっちゃった……？」

「あぁ。すっきりした。ありがとうな」
「うん……♡　とっても美味しかった♡　ご馳走様でした♡」
「あぁ。ほら、そろそろ行くぞ。さ～よ。いつまで拗ねてんだ？　置いてくぞ」
「あ、待って～！　私も行くの～！」
俺達は、遊園地の中へと、やっとこさ入園した。

♡　♡　♡

「初っ端、これ乗るの……？」
「「うん！」」
二人が最初に乗りたいと言ったのは、ジェットコースターだった。
俺は絶叫系が苦手な訳じゃないが、得意と言うわけでもない。
「もしかして、れいれい苦手だった……？　無理そうだったら止めるけど……」
「いや、大丈夫。今日はデートなんだ。気を遣ったりせず、楽しもうぜ！」
「「っ～～～～♡」」
「ありがとう！　じゃあ、乗ろう！」
「お～！」
「お、お～……」
俺達は、ジェットコースターに乗り込んだ。

♡　♡　♡

「はぁはぁ……」
俺は情けない事に、ジェットコースターで絶叫しすぎて酸欠になってしまった。
「れ、れいれい、大丈夫……？　ごめんね……ここまで苦手だとは思わなかったから……」

「だ、大丈夫……俺の方こそごめん……気を遣うなって言っときながら、結局気を遣わせて……」
「ううん。それは気にしないで。気を遣わないのって大事だと思うけど、お互いを想い合うって大事だと私は思うから。……ごめん。なんか変な事言った……」
「いや。確かにその通りだな。紗夜、ありがとう」
「っ……！」
紗夜は顔を真っ赤にしてたけど、俺は酸素が足りなくて、それを気にしてる余裕はなかった。
沙耶香は、飲み物を買いに行ってくれている。
「ふぅ～……」
しばらく沈黙が続く。でも、この沈黙が全然苦じゃない。
それって結構凄いよな～……。なんて、俺がそう思っていると――、
「ちゅ……♡」
「んっ……？」
紗夜が、キスをしてきた。
すぐに終わるのかと思ったら、紗夜は舌を入れてきて、ずっとキスをしてくる。
ど、どうしたんだ……？
「ぢゅる……♡　れる……♡」
俺は椅子の上に横になっているので、椅子に座っている紗夜に、口を襲われている。
「ぷは……♡」
「さ、紗夜……？」
ようやく口を離してくれた紗夜。その顔は真っ赤になっている。
「ごめんね、急に」
「いや。大丈夫……。でも、どうしたんだ？　キスは嬉しいけど……」
「気持ちが溢れちゃって。我慢ができなくなっちゃったんだ」

「紗夜……？」
「れいれい。後で二人っきりになってもらってもいい？」
「う、うん。いいけど……」
「ありがとっ♡」
か、可愛い……。
「お待たせ。れー君、大丈夫？　顔真っ赤だけど」
「へっ！？　だ、大丈夫大丈夫！　なんでもないよ」
「ん？」
やべぇ……なんか久しぶりに動揺してるわ……。

♥　♥　♥

女子トイレにて。
「紗夜ちゃん、れー君になんか言ったの？」
個室でトイレしながら、隣の個室にいる紗夜に尋ねる沙耶香。
「ん～？　後で二人っきりになってって言った」
「なっ！？　そ、それって……！」
「うん。れいれいに告白しようと思ってる」
「そ、そっか……」
「沙耶香も、今日するつもりなんでしょ？」
「そ、それは……」
「これは勝負じゃない。れいれいなら私達を全員受け止めてくれるはず。だから、お互いに協力しよ？」
「紗夜ちゃん……うん。お互いに二人っきりになりたい時、連絡し合おう」
「オッケー。そろそろ行こうか。れいれいを待たせる訳にはいかないから」
「うん」
二人は、トイレを終え、零の元へと戻っていった。

♡　♡　♡

遊園地でめちゃくちゃ楽しんだ俺達。
二人はちょっと話があるらしく、今はどこかに行っている。
一人暇をしていると――、
「あ、あの……」
「ん？　あ、お姉さん」
声をかけられた。俺に声をかけてきた女性は、桃と鏡の部屋でエッチしてた時に、色々と協力してくれた人だった。
「お、お久しぶりです……」
「お久しぶりです！　その節は色々とありがとうございました！」
「い、いえ……。お役に立てて良かったです。今日は、別の女の子達ですね……」
「はい。こんな事言ってもいいのかわかんないんですけど、俺、好きな女の子がいっぱいいて。その子達と関係を持ちたいと思っているんです」
「そ、そうなんですね……（いいな……）」
「ん？　なんか言いました？」
「い、いえ……！　デートのお邪魔をしてしまい、すみません……！　わ、私はこれで……！」
この人、可愛いしおっぱい大きいし、お尻もエロくていいんだよな……。よし！
「あの！」
「ひゃ、ひゃい……！」
「連絡先、交換しませんか？」
「い、いいんですか……？」
「はい。もしよろしければ」
「よ、喜んで！」
俺はお姉さんと、連絡先を交換した。そして耳元で試しに言ってみた。

「（後で、エッチな写真送ってください）」
「っ！　は、はい……！　よ、喜んで送らせていただきます！　では！」
「はい」
お姉さんは、嬉しそうにスキップしながら仕事に戻っていった。
「どんな写真が来るんだろう。楽しみだな」
俺は、期待しながら、二人が戻ってくるのを待っていた。

♡　♡　♡

「ごめんね。お待たせ」
「お。今から二人っきり？」
「うん。いい？」
「もちろん」
戻ってきたら、紗夜が一人だった。
「じゃあ、一緒に来てほしい所があるんだけど、いい、かな？」
「うん」
俺は、紗夜についていった。
紗夜とやって来たのは、観覧車だった。
観覧車に乗り込んだ俺達。
「さ、紗夜……？」
「ん？」
観覧車って、普通は向かい合って座るんじゃ？
紗夜が座ってるの、俺の隣なんだけど。しかもぴったりくっついてきてるから、おっぱいが当たってる。
「あのね」
「うん」
紗夜が俺の肩に頭を乗せながら、口を開く。
「もう気づかれてるかもしれないし、今更って感じかもしれないんだけど、れいれいに伝えたい事があるんだ」

「うん」
紗夜が、上を向いて顔を見てくる。
「れいれい、私、れいれいが好きです。大好きです。もし私なんかでよかったら、彼女にしてください」
「っ」
なんだ……俺、めちゃくちゃドキドキしてる……。
リサ達の時と、少し違うドキドキだ……。
紗夜と沙耶香だけなんだよな。家族以外で「様」って呼ばないの。だからかな。俺の中で特別感が生まれてるの。
「紗夜」
「んっ……♡」
俺は紗夜にキスをする。
「れいれい……♡」
「俺も紗夜が好きだ。大好きだ。俺の、彼女になってくれ」
「っ～～～～～♡　い、いいの？」
「あぁ。俺の彼女として、これからもおしっこを沢山飲んでくれ」
「うん♡　いっぱい飲む～♡」
「紗夜、シていいか？」
観覧車の中だから、断られるか……。
「もちろん♡　れいれいがシたい時、いつでもシて♡」
「ありがとう。じゃあ、乗って」
「うん♡」
紗夜は、俺の上に跨ってくれる。
「あ、パンツエロいな」
「れいれいは、本当気づいてくれるよね♡　このパンツね、昨日買いに行ったんだ♡　オマンコもアナルも全部丸見えなの♡　両側に紐で結んでるけど、これ解かなくてもエッチできちゃうんだ♡」
「俺好みのパンツだ。興奮しすぎて勃起が収まらない」
「嬉しい～～♡　れいれいに興奮してもらえてよかった♡　もう我慢できないよぉ♡　もう、挿(い)れていい？」

「あぁ。もちろんだ。挿(い)れてくれ」
「うん♡　んんぅ……♡　あああああんっ♡」
紗夜は、俺のチンコを取り出し、マンコに挿(い)れていく。
紗夜の膣(なか)は、すでにぐちゃぐちゃで、めちゃくちゃ気持ちいい。
「あああああ♡　れいれいのおちんちん、本当に気持ちいい♡
もう、ずっとこれを味わってたいよぉ♡」
「俺も、ずっと紗夜とエッチしてたいぞ……！」
「嬉しい♡　嬉しい♡　嬉しいよぉ♡　れいれいのおちんちん、大好き♡　れいれいの事も、大好きぃ♡」
紗夜は、腰を激しく動かす。
めちゃくちゃ激しく動いているので、俺達のゴンドラはめちゃくちゃ揺れてると思う。
「あっ♡　あっ♡　駄目♡　も、もうイッちゃうぅぅ♡」
「イッていいぞ」
「ああああああああああ♡♡♡　イグぅぅぅぅ♡♡♡」
ぷしゅ♡　ぷしゃ♡
紗夜は潮を吹きながらイク。
「ごめんっ♡　ごめんねぇ♡　れいれいより先にイッちゃったぁ♡」
「気にするな……！　俺ももうすぐイきそうだ……！」
「イッて♡　イッて♡　私の膣(なか)でいっぱい出してぇぇぇぇぇぇ♡♡♡」
「くっ……！　出る！」
ドビュッ！　ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！
「あああああああああ♡♡♡　れいれいの精液、子宮にバシャバシャかかってるぅぅぅ♡♡♡　しゃいこぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡」
中出しして、俺達は息を激しく切らしている。
「はぁはぁ……今、綺麗にするね♡」
紗夜は、マンコからチンコを抜き、俺の前に跪き、お掃除フェラを始める。

「ぢゅる……♡　じゅぶぶぶ♡　ぢゅるるるるるるるるるるるる♡♡♡」
「う……！」
これ、お掃除フェラっていうより、イかせにきてないか……！
「さ、紗夜、も、もう……！」
「らひへ♡　らひへ～～～～♡♡♡」
「出るっ！」
ビュルルルルルルルルルルルルルル！！！！
「んぶぅ！　んぐんぶ……♡♡♡」
紗夜は、大量の精液を飲み干していく。
「ごくごくごく……♡　ぷはぁ♡　やっぱりれいれいの精液、超美味しい～♡　じゃあ、次、おしっこ頂戴♡　さっきもらえなかったから」
「ね、根に持ってるね」
「別に根には持ってないよ～。ただちょっと、なんでくれなかったのかな～って思ってるだけ」
「それを根に持ってるって言うんだけど」
「おしっこ、出る？」
「うん。出るよ。さっきから紗夜に飲ませたくて、ウズウズしてる」
「やた♡　じゃあ、私のお口にいっぱい出して♡」
紗夜は口を開ける。さすがに観覧車の中を汚すわけにはいかないので、紗夜の口の中にチンコを入れる。
「出すぞ？」
「らひへ♡」
「うっ……」
ぷじょおおおおおおおおおおお！
「んん～～～～～♡　んくんくんく……♡」
紗夜は、俺のおしっこを美味しそうに、幸せそうに飲み込んでいく。
「ごくごくごく……♡」

俺のおしっこの量が多く、口の端からチョロチョロとこぼれ落ちている。
こぼれ落ちたおしっこは、紗夜の足、手、服にかかっていく。
「ごくごくごく……♡」
放出の勢いが落ち着いていく。
「ごくごくごく……♡　ぷはぁ♡　あ～あ……終わっちゃった……もっと飲んでたいのに……」
「また飲ましてやるから」
「うん♡　すんごく美味しかった♡　ご馳走様でした♡」
「お粗末様でした」
「あ、もったいない♡」
紗夜は、手や足にかかったおしっこを舐め取っていく。
エロいな。
「ん～勃起してて、もう一回精液飲みたいけど、沙耶香の為にとっておくわ」
「沙耶香はどこにいるんだ？」
「あそこの、夜景が見える場所にいるよ」
「そうか」
「うん。行ってあげて」
「あぁ」
俺達は、観覧車が降りるまで、くっついていた。

♡　♡　♡

紗夜と一旦別れ、俺は沙耶香がいると言う夜景の見える場所にやって来た。
「沙耶香、沙耶香……」
人がそれなりに多い為、結構探すのが大変だ。
沙耶香は背が小さいので、人混みに紛れてしまうと中々見つからない。

と――、
むにゅん♡
「だ～れだ？」
「沙耶香だ」
「んふふ♡　正解。よく分かったね」
沙耶香が、背後から抱きついてきた。
「分かるさ。沙耶香のおっぱいの感触でな。俺はおっぱいの感触で、誰なのか判断できる自信がある」
これは嘘ではなく、本当だ。実際、今までエッチしてきた女子なら、全員分かると思う。
「私のおっぱい、小さいから分かりやすい……？」
向き合うと、沙耶香が自分の胸を触りながら、シュンとした表情を浮かべている。
「いや、そうじゃない。そもそも、沙耶香は自分のおっぱいを卑下するが、沙耶香のおっぱいも十分大きいぞ？」
「ほ、本当……？」
不安そうに見つめてくる沙耶香。
「あぁ。ちなみに沙耶香は何カップなんだ？」
「Fカップ……」
「いいか？　沙耶香。Fカップは巨乳に分類されるんだぞ？」
俺は、とある女子の顔を思い出す。
確かその女子は、自分のおっぱいがBから成長しないと、悲しんでいた。
「で、でも……紗夜ちゃんも、委員長もおっぱい大きいから……」
「他と比べると、確かに沙耶香は小さいかもしれない」
その言葉に、シュンとする沙耶香。
「でもな。俺は沙耶香のおっぱいが大好きなんだ」
「え……♡」
沙耶香の表情はコロコロ変わるから、話していて飽きない。
「この、大きすぎず小さすぎないちょうどいいサイズの、揉みやす

いおっぱい」
「んっ……♡」
「そして、その先にある、俺が開発してやった超敏感乳首」
「んあっ♡」
俺は、おっぱいを揉みしだいた後、服を押し上げるように主張している両乳首を強く抓む。
抓んだ瞬間、沙耶香はエロカワイイ声を上げた。
周りにいた人達にも、聞こえているだろう。まぁ、女子しかいないからいいけど。
「これ、他の人には言ったことないんだけどな？」
「ん……？　う、うん……♡」
「俺、沙耶香のこの濃い色の乳首と乳輪が、めちゃくちゃ大好きなんだよ」
乳輪を巻き込み、ねじりながら本音を言う。
今まで誰にも言わなかったのは、喧嘩になったら嫌だなって思ったから。
でも、一対一のこの状況でなら言ってもいいだろう。
俺は、沙耶香の濃い色した乳首と乳輪が大好きなんだ。
「んひゅん……♡　ほ、本当……？」
「あぁ。俺は、沙耶香の乳首が一番大好きだ」
「っ～～～～～～～～♡♡♡　う、嬉しい～～♡♡♡　れ、れー君の大好きな乳首、いっぱい弄ってぇ♡　いっぱいイジメてぇ♡♡♡」
「ここでイジメていいのか？　俺、我慢できなくなるぞ？」
「いい……って言いたいけど、れー君のおちんちん、知らない女に見られたくない。あっち行こう？」
「あぁ」
俺は、沙耶香に手を引かれ、公衆トイレに入った。多目的トイレなので、男女共に使用できる。
「そういや、沙耶香。その赤いパンツしっかり見せてくれないか？」
「うん♡　これ、れー君に喜んでもらいたくて、昨日買いに行った

んだ♡」
「昨日？　紗夜もそう言ってたな。　一緒に買いに行ったのか？」
「ううん。たまたまばったり会ったの。妹と一緒に買いに行ったら、お母さんと一緒にいて。お互いに勝負だって言ったの」
「勝負？」
「うん。どっちのパンツが、れー君をより興奮させられるかって」
「そっか。まぁでも。俺は二人のパンツ、どっちも好きだから、甲乙つけられないと思うな」
「んふふ♡　れー君ならそう言うと思ってたは　れー君は優しいから♡」
「あはは……お恥ずかしい」
「恥ずかしがることじゃないよ。じゃあ、れー君。私のエッチなパンツ、見て……♡」
そう言って沙耶香は、ワンピースを捲り始める。
俺はしゃがみ込み、下からそれを眺める。
ワンピースが捲られ、下から真っ赤の――、
「た、玉パン！？」
沙耶香が穿いていたのは、クリからマンコにかけて玉が連なったパンツだった。アナルの方は紐だけなので、丸見えだ。
「こ、これ……」
「えへへ～♡　どう？　興奮する？」
「あ、あぁ……玉パンなんて、リアルで初めて見た……」
「れー君の初めて、貰っちゃった……♡」
「こ、これ、痛くないのか……？　めちゃくちゃ食い込んでるけど……」
玉は、沙耶香のクリとマンコにこれでもかってくらいに食い込んでいた。
この状態で一日中歩き回ってたのか……。
「全然痛くないよ……♡　痛みより、気持ちよさが勝っちゃってる……♡　玉が歩く度にクリを刺激して、何度もイきそうになっちゃ

うの……♡」
「イキそうって事は、イかなかったのか？」
「うん……♡　だって、こんなのでイクなんてもったいないじゃん……♡　れー君に沢山イかされたかったから♡」
可愛い事言ってくれるな、もう！
「じゃあ、この玉を使って気持ち良くしてあげるよ」
「いいの……？」
「あぁ。その変わり、イキまくれよ？」
「うん……♡」
俺は、玉を押し付けながら上下に擦り付ける。
「んっ……♡　んんぅ……♡　あっ……♡」
よっぽど気持ちいいのか、沙耶香は喘ぎ声を上げる。
「れ、れー君……♡　わ、私、感じ過ぎちゃうよぉ……♡」
「いいぞ。感じまくれ。気持ちよくなって蕩けきった顔を見せてくれ」
「う、うん……♡　んんぅ……♡」
俺は、玉を先程よりも強く押し付け、擦り付ける。クリには特に刺激を与える。
「んん……♡　ぁあああ♡　んあああああ♡♡　も、もうらめぇ……♡　わ、私、イッちゃう……♡」
「イッていいぞ」
「ああああああああ♡　イッきゅうぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
ぷしゅ♡　ぷじょ♡
沙耶香はイッたようで、玉パンの中で潮を吹く。
潮は、玉に邪魔されて、跳ね返りマンコを濡らした。
「はぁはぁ……」
沙耶香は、立っていられなくなったようで、便座に座る。
「ご、ごめんね、れー君……れー君よりさきに気持ち良くなってイッちゃって……」
膝をガクガクさせながら、俺に謝ってくる沙耶香。

「謝らなくていいさ。気持ちよくなってる沙耶香を見れて、嬉しかったから」
「れー君……♡」
「沙耶香、俺もう我慢できない。犯してもいいか？」
「うん……♡　れー君の好きなように、れー君のが満足するまで好きなだけ私を犯して……♡　れー君のおちんちんで私のオマンコ壊して……♡」
沙耶香は、立ち上がり、玉パンを脱いで壁に手をつき、ケツを突き出してくる。
そして、俺が喜ぶ言葉を使って誘惑してくる。
「あぁ。俺のチンコがなければもうイけない体にしてやるからな」
「うん……♡　してぇ……♡」
俺は、沙耶香の腰を掴み、チンコを膣にぶち込んだ。
「んあああああああああ♡♡♡　来たぁぁ♡♡♡　れー君のしゃいこうオチンポぉぉぉぉ♡♡♡」
沙耶香の膣はグショグショで、締りが凄まじく、俺のチンコを気持ちよくさせようとしてくる。
「さ、沙耶香の膣、ヤバい……挿らただけで、イキそう……！」
「イッて♡　イッて♡　私のれー君専用オマンコに、たっくさんザーメン注いでぇ♡♡♡　勝手にイッた私に、お仕置き中出ししてぇぇぇ♡♡♡」
そんな事言われたら――、
「我慢できない！　出る！」
ドビュンッ！　ビュビューー！　ビュルルルルルルルルルル！！！
「あああああああああああ♡♡♡　来てる♡　来てる♡　来てるのぉぉ♡♡♡　れー君のだいしゅきザーメン、子宮にビシャビシャかかってるのぉぉぉ♡♡♡　中出しでイッちゃうううううううう♡♡♡♡♡」
沙耶香の膣が、痛いくらいに締め付けてくる。それによりまた―

―、
「ごめん……！　また、出るっ！」
ビュビューー！！　ビューーーーーー！！！！
「にゃかだしまたきたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡　幸せすぎるぅぅ……♡」
腰を動かしてないのに、俺は二発も出してしまった。
「はぁはぁ……」
「まだ挿れただけだからな？　本番はこれからだ」
「うへへぇ～……♡　私、本当におかしくなっちゃう……♡」
俺は、沙耶香のおっぱいを鷲掴みにして、めちゃくちゃに犯してやった。
三発の中出しをしてやった。

♡　♡　♡

便座に寄りかかる沙耶香。
大股で座っているので、マンコが丸見えだ。そのマンコからは、精液が大量に逆流してきている。
イキまくり過ぎたのか、沙耶香はよだれを垂らして、力なく背もたれに寄りかかっている。
「沙耶香、まだ終わってないぞ？」
「ふぇ……？」
俺がそう呼びかけると、沙耶香は蕩けきった顔で俺を見てくる。
「俺のおしっこ、飲むの忘れてないか？」
「っ♡　の、飲ませてくれるのぉ～♡？」
「あぁ」
「ありがとぉ♡」
沙耶香の前に立つと、沙耶香は寄りかかったまま口を開ける。
恐らく、力が入らず、体を持ち上げられないのだろう。
「このままかけていいのか？」

「うん……♡」
「服にめちゃくちゃかかるぞ？」
「いいのぉ♡　かけてぇ♡　れー君のおしっこ、私の全部にかけてぇ～♡」
「なら、お望みどおりに」
俺は、立ちションするように、沙耶香に放尿した。
ぷしゃあああああああああ！
「ん～～～～～～～♡♡♡♡♡」
沙耶香は、俺の放尿を嬉しそうに受け止めた。
口の中に入るおしっこを、美味しそうに飲んでいき、入り切らないおしっこを嬉しそうに全身で受け止めていく。
「ひあわへ～～～～♡♡♡」
この後、沙耶香が動けるようになるのに、結構な時間がかかった。
その為、紗夜との合流がかなり遅れてしまった。

♡　♡　♡

沙耶香とのエッチを終え、俺達は入園口に向かう。
そこには、紗夜が立っていた。
「紗夜！」
「あ、れいれい！」
俺達が駆け寄ると、紗夜が沙耶香の頭にげんこつを落とした。
「いだ～い……！」
「もう！　この後もエッチの予定があるのに、こんなに長くシてどうすんの！　れいれいに無理させちゃ駄目でしょ！」
「ごめんなさい……」
「全く。れいれい、大丈夫？」
「あぁ。まぁ、元はと言えば俺が我慢できなくなっちゃったから、長くなっちゃったんだけど」
「それはいいんだよ♡　れいれいは我慢しないで、いつでもどこで

も私達を犯していいんだから♡」
嬉しい事を言ってくれる。
「ちょっとごめんね」
「ん？」
紗夜が、沙耶香を連れて隅っこに行く。どうしたんだろう？
（あんた、告白したの？　私はしたよ？）
（あ……！　気持ち良くてすっかり忘れてた……！）
（全く……私はここにいるから、今から告白してきちゃいなさい）
（う、うん……！）
ん？　なんだ？　沙耶香だけ戻ってきたけど。
「あ、あのね、れー君」
「うん」
「今更かと思われるかもなんだけど、ずっと、ずっと言いたかった事があるんだ」
「うん」
「私……私ね……れー君が好き！　大好き！　こんな私でよければ、付き合ってください……！」
お辞儀をして手を差し出してきた。
これって、よくドラマやアニメとかで見るやつだ。まさか、される日が来るなんてな。
俺の答えはもう決まってる。
「俺も、沙耶香が好きだ。こんな俺でよければよろしく」
俺は、沙耶香の手を握る。そして、抱き寄せる。
「大好きだ」
「っ～～～～～～～～♡♡♡」
俺はそのまま沙耶香にキスをしてやる。
「紗夜！」
「っ！　ど、どうしたの……？」
俺に呼ばれ、気まずそうにやってくる紗夜。
俺は、そんな紗夜を引っ張り抱き寄せる。そして――、

「っ～～～

零と女子達の春休み　①（前書き）

これは、零と女子達の進級、そして入学の準備を描いたちょっとした番外編。
【第四章】に繋がる、零達の準備の様子を、お楽しみください♪
（もちろん、エッチシーンはあるのでご安心を♡♡）

零と女子達の春休み　①

【華・燐・桃】

「ふんふふ～ん♪」
「燐、随分とご機嫌だな」
「はい♪　だって、先輩になるんですよ～♪　ずっと後輩だった私が、先輩になって後輩ができる……！　考えただけで、勝手にニヤけちゃいますよぉ♪」
「ふふ。そっか」
俺と燐は、一緒に風呂に入っている。
「でも、よかったんですか？　髪の毛洗ってもらっちゃって……」
俺は今、燐の髪を洗っている。
「あぁ。たまにはこういうのもいいかなって思ってな」
「嬉しいです♡　大好きなお兄ちゃんに洗ってもらえるなんて、嬉しすぎてオマンコ濡れちゃいますよ♡」
「もう濡れてるだろ？」
「はい♡　お兄ちゃんと一緒にいるだけで濡れちゃうんで、常に濡れてます♡」
「俺は燐のせいで、チンコの勃起が収まらないんですけど～」
「そ、それはごめんなさい……！　お詫びにご奉仕させてください……！」
「それは後でな。まずは、髪を流して……」
俺は、シャワーを出して燐の髪のシャンプーを流していく。
「よし」
「ありがとうございます♡　それじゃあご奉仕を……んひゅん♡
お、お兄ちゃん……？」
俺は、後ろから燐の乳首を抓む。

「ご奉仕の前に～。俺に弄らせろ」
「は、は～い……♡」
俺は後ろから、燐のHカップのおっぱいを揉みしだきながら、乳首を弄っていく。
「んんぅ……♡　大好きなお兄ちゃんに、おっぱいもみもみされながら、乳首シコシコされてるぅ♡　しゃ、しゃいこう過ぎるぅ♡」
「燐は乳首が好きなのか？」
「は、はい……♡　最近好きになりましたぁ……♡」
「最近？　って事は、前はそうでもなかったのか？」
俺は、燐の乳首をグニグニ捻ったり、シコシコとしたりしながら、尋ねる。
「は、はい……♡　前までは、オナニーの時に少し触るくらいだったんですけど、お兄ちゃんとエッチしてから、乳首がものすごく感じるようになって、それからオナニーの時は乳首を必ず触るようになったんですぅ……♡　今じゃ、乳首とクリが同じくらいの感度になってますぅ♡」
クリと同じ感度って、ヤベェな。
「じゃあ、普段やってるオナニー、今見せてくれよ」
「お、オナニーを……？」
「あぁ。嫌か？」
「い、嫌じゃないです……！　す、少し恥ずかしいだけでして……」
「じゃあ、俺もオナるから、一緒にしよう」
「お、お兄ちゃんのオナニー……！　は、はい……♡　大好きなお兄ちゃんと相互オナニーしますぅ♡　私が淫乱乳首で感じてる所、いっぱい見ておちんちんシコシコしてくださいぃ♡」
そうして、燐は立ち上がり、俺の前に立つ。
俺は、椅子に座り、チンコを扱く。
「はぁ～～～～～～～♡♡♡　お兄ちゃんのシコシコ見ながら、チクニーなんて、最高すぎますぅぅ♡♡♡　お兄ちゃんのシコシコ見ながら、乳首シコシコ、堪んないぃぃぃ♡♡♡」

燐の乳首を弄る速度がどんどん上がっていく。
めちゃくちゃ感じているようで、足をガクガクさせている。
マンコからは、愛液がドバドバ溢れ出ている。
「そんなに乳首、気持ちいいのか？」
「はいぃ♡　とっても気持ちいいですぅぅ♡」
燐は、体をビクビクさせながら感じまくる。
「も、もうイッちゃいそうですぅ……♡」
「いいぞ。イケ。俺ももう出そうだ」
「は、はいぃぃ♡♡♡　お兄ちゃんに見られながら、乳首イキしますぅぅぅ♡♡♡」
俺と燐の弄る速度が、合わさる。
「あああああああああ♡♡♡　イッぐぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
ぷしゃあああああ♡♡♡
ドビュッ！　ドビュルルルルルルルルルル！！
俺と燐は、同時にイッた。
燐は潮を吹き、俺は大量に射精をする。
「はぁはぁ……どうでしたか、お兄ちゃん……私のチクニー……」
「あぁ。エロくて最高だった。これからはもっともっと乳首を開発してやるからな」
「はい……♡　お願いします……♡」
俺と燐はこの後、仲良く湯船につかった。

♥　♥　♥

「これと、これを～」
私は今、部屋で進級に向けた準備をしていた。
「でもまさか、高校三年生の私が、進学じゃなくて進級するなんてね～」
私は零ちゃんの通う学校に転校した。
その高校では、校則が色々と変更され、三年制ではなく、四年制

になった。
それを聞いた私はとっても嬉しかった。
元々、零ちゃんの通う学校に転校する話はあって、転校する事は決まってたんだけど、私は三年生だったから、転校はせずに卒業して、大学に行こうかなって思ってた（大学の推薦も決まってたから）。
でも、四年制になったって聞いて、私はすぐに大学推薦を辞退して、零ちゃんの学校に転校する事に決めた。
だって、短くても後一年は一緒に学生生活を送れるんだもん♡
大学なんて、つまらないところに行ってる場合じゃない。零ちゃんと、一秒でも長く一緒にいたい。
そうして、私達は零ちゃんの学校に転校した。
手続きとかは、黒乃義叔母さんがやってくれたから、何もすることなく、簡単に転校できた。
「全裸校則、最高よ♡」
私達が転校したその日、瑠李ちゃんが提案した新校則が発表された。
その校則の中で、全裸首輪校則がある。
それは、生徒は全員全裸で、首輪を着けて生活するというもの。
それを聞いた時、私は燐ちゃん、桃ちゃんの二人と飛び跳ねて喜んだ。だって――、
「いつでも、零ちゃんに私の裸を見てもらえるんだもの♡」
いつもお家で、裸エプロンをして、零ちゃんに見てもらってはいるけど、外や学校ではあまりない。
だから、とっても嬉しい♡
「首輪も進級に合わせて配布されるから、とっても楽しみ♡」
首のサイズを零ちゃんが測ってくれた。私達女は全員、全裸で零ちゃんに首のサイズを計測される。
零ちゃんが我慢できなくなったら、そのまま襲ってもらえる。
「あの計測、最高だったな～……♡」

思い出したら、ムラムラしてきちゃった……♡
「オナニーしよう」
私は、準備を一旦止め、ベッドに上がって、壁に寄りかかりオナニーを始めた。
「んっ……♡　ふぅ……♡　あっ……♡」
私は、クリを弄りながら、オマンコの膣(なか)に指を挿(い)れる。
膣(なか)とクリの同時刺激に、私はあっという間に絶頂してしまう。
「イックっ……！」
私は一度イッたけど、止まれなかった。
この後、私は五回以上、イキまくってしまった。

♡　♡　♡

「準備終わったか？」
「うん。終わった」
俺は今、桃と一緒に外出していた。
インドアな桃が、一緒に散歩に行こうと誘ってきたのだ。
珍しいなと思い、俺は承諾し、一緒に散歩に来ている。
「なぁ」
「ん？」
「ずっと気になってるんだが、アナルにバイブ挿(い)れてるか？」
「っ♡　やっぱり気づいてくれた……♡　さすが兄様♡」
いや、誰だって気づきますって。ミニスカでパンツが外に飛び出してたら。
「最近、兄様に構ってもらえないから、アナルを開発して、襲ってもらおうって思ったんです……」
「そうか」
寂しい思いさせて、ごめんな。
「あそこでスるか」
「うん……♡」

俺と桃は、公園に向かった。
多目的トイレに入る。
「脱げ」
「はい……♡」
桃は、服を脱いでいく。スカートを脱ぐと、水色のTバックに支えられたバイブが姿を現した。
「おぉ～すげぇな。アナルで感じてんだな。マンコビッチャビチャじゃん」
「うん……♡　アナル、気持ちいいの……♡」
桃のマンコは、今俺が言った通り、ビッチャビチャになっており、太ももに愛液がダラダラと垂れていた。
「じゃあ、パンツも脱げ」
「はい……♡」
桃は、Tバックも脱ぐ。
「バイブがグイングイン動いてんな。強さどんくらい？」
「ちゅ、中、です……♡」
「そっか。だったら、強に」
「んひゃあああ♡」
俺は、バイブの強さを「強」に変える。そして、バイブを上下左右に動かし、アナルを刺激してやる。
「あああああああああ♡♡♡　に、兄様にあ、アナル弄られてるぅぅ♡♡♡　さ、最高なのぉぉぉ♡♡♡」
アナルで感じる女子って、最高にエロいよな～。
「バイブで感じるなら、俺のチンコでもいいよな？」
「に、兄様の、オチンポ様……？」
「あぁ。こんなバイブに負けてられるかよ。桃のマンコもアナルも、俺のモンだ。俺のチンコで感じさせる」
「は、はいぃ♡♡♡　私の体全部、兄様のモノですぅぅぅ♡♡♡
兄様のオチンポ様以外で感じない体にしてくださいぃぃ♡♡♡」
「挿(い)れるぞ」

「はい♡♡♡　んおおおおおおおおおお♡♡♡」
俺は、桃のアナルからバイブを引き抜き、少々乱暴にチンコを挿入した。
桃のアナルは、真耶子のとは少し違い、まだキツキツだった。
真耶子の場合、ずっとアナルオナニーをしていたためか、めちゃくちゃ緩い訳ではないが、キツキツと言うわけでもなかった。
だが、桃のアナルは、最近アナルオナニーを始めたのが分かるほど、キツキツだった。
まだ、太いものを飲み込むには早いとさえ思うくらいのキツさ。
チンコを潰してしまうのではないかと、勘違いしてしまうくらい、締りが半端ない。
「桃のアナル、締まりがすげぇな……」
「に、兄様、わ、私のアナルで、気持ち良くなれてますか……？」
「あぁ。しっかり気持ちいいぞ……気持ちよすぎて、ちょっとでも動くと、すぐに出ちまいそうだ……！」
「う、嬉しいですぅぅ♡♡♡　え、遠慮なく、いつでも好きな時に好きなだけ、私のアナルに兄様のザーメン、注いでくださいぃ♡♡♡」
「分かった。じゃあ、遠慮なく！」
「んあああああ！！！」
ビュルルルルルルルルルル！！！
俺は、アナルを一突きしただけで射精してしまった。
それだけ、桃のアナルが気持ちいいのだ。名器ならぬ名門だな。
「まだまだイクぞ！」
「はいぃぃぃ♡♡♡」
俺はこの後、桃のアナルに十発、射精した。
桃はその倍くらい絶頂していた。

アナルセックスを終えた俺達は、帰路についていた。
「その首輪、ずっとしてるよな」

「はい♡　私が兄様の所有物だと証明する為のモノですから♡」
「桃はその首輪で、学校に通うのか？」
「兄様はどっちがいいですか？」
「う～ん……学校と家では分けてくれると嬉しいかもな」
「分かりました♡　では、叔母さんに言って、私も新しい首輪を用意してもらいます♡」
「あぁ。すまんな」
「いえ♡　兄様に尽くせるのは、私にとっては幸福ですから♡」
嬉しい事を言ってくれるな。
それと、ずっと思ってたが――、
「桃は、俺と二人っきりだとよく喋るよな。みんなの前でもそうすればいいのに」
「それは嫌です」
おおう……即答。
「私は、兄様の前でしか普通に喋らないと決めてるんです。他の人の前でなんて、嫌です」
「わ、分かった分かった。俺の前だけでいいから、怒るな」
「はい♡」
桃は何気に、怒らせちゃいけないかもな。
そうして、俺達は家に帰った。

零と女子達の春休み　①（後書き）

「ちょっとぉ！　この回、私だけ零ちゃんとエッチしてないんですけどぉ！　どういう事！」
「まぁまぁ、姉ちゃん。落ち着いて。今度、姉ちゃんとエッチする回を書くって、作者も言ってるから」
「えぇ～……？　本当……？　小鳥遊綾瀬！」
あ、はい。
「本当に今度、私と零ちゃんがエッチする回、書くんでしょうね！」
は、はい。必ず書かせていただきます。
「取った！　言質取ったからね！　書かなかったら……」
か、書かなかったら……？
「私、家出します！」
「小鳥遊綾瀬ぇ！　絶対に書けよ！」
は、はいぃ！

ちょっとした、おふざけでした。
一日、休んでしまい、大変申し訳ありませんでした。
今後は、休まずに、しっかりと金曜日投稿をいていきたいと思いますので、これからもよろしくお願い致します！

次話は、白下家に住む、三人のお話です♡

零と女子達の春休み　②

【リサ・鈴音・愛莉】

「よいしょ……よいしょ……」
私は今、おっぱいのマッサージをしている。
おっぱいが大きいから、谷間や下乳に汗が溜まったりして、かぶれちゃったりするから、しっかりとしたお手入れが必要なんだ。
「こんな感じかな」
おっぱいのお手入れを終えた私は、パンツを脱ぎ姿見の前でオマンコを拡げる。
「うん。先輩に興奮してもらえるくらい、濡れてると思う」
私は、来月から先輩になる。今まで後輩の立場で先輩に甘えていたけど、これからは先輩として、後輩に大好きな先輩のいい所を広めていく使命がある。
「それに、可愛くてエッチな子、沢山入ってくると思うから、負けてられない……！」
私なんかよりもエッチで、変態な女の子達が絶対に増える。
だから、私も今以上に努力して、先輩に飽きられないような、いつまでも興奮してもらえるような女にならなきゃいけない。
「だから、日々のエッチな努力は怠れない」
私は毎日のオナニーを欠かさない。
毎日オナニーをして、感度を高めている。
今日も、オナニーを始めようとしたんだけど……。
「ん……？　も、桃師匠！？」
ドアが少し開き、その隙間から、先輩の義妹で私の料理の師匠でもある桃さんが覗いていた。
「ごめんね。オナニーの邪魔しちゃって。私に気にせず続けて続け

て」
「い、いや、その……流石に恥ずかしいですよ……」
この部屋は、桃さんの部屋。そこに私は寝かせてもらっている。
「兄さんは、オナニーを見るのも好き。だから、人前でオナニーをするのにも慣れておかないと」
「な、なるほど……」
先輩の前でオナニー……。恥ずかしいけど、したい……♡
「じゃあ、オナニーしようか。私もするから」
「は、はい……！」
私は、桃さんと相互オナニーを始めた。

♡　♡　♡

「よし」
「何してんだ？」
「あ、ご主人様」
キッチンに行くと、鈴音が何かをしていた。
「と、特には何もしてませんよ……？　ちょっとお腹が空いてしまったので、ちょっと何か作ろうかと」
「ふ～ん。そっか」
明らかに何か隠してるが、別に厳しく追求する事ではないので、スルーする事にした。
「来月の準備とかは済んでるのか？」
「あ、はい。特に準備という準備はないので、すぐに終わりました」
「そうか。じゃあ」
「んっ♡」
俺は、後ろから鈴音のお尻を掴む。
「鈴音のお尻は、いい張りをしてるから、ずっと揉んでたくなるんだよな」
俺は、力を込めて尻を揉み込む。

張りがあってその上柔らかい鈴音の尻は、俺が揉む度にグニャグニャと形を変える。
しかし、力を弱めるとすぐに元に戻る。
中々にエロくてけしからんケツだ。
「あ、ありがとうございます……♡　わ、私なんかのお尻でよければ、ご主人様の気が済むまでいくらでもお揉みください♡」
最初に会った時と全然違うんだよな。
でも、それがいい。
俺に屈服した女って感じがして最高だ。
「じゃあ……今日は鈴音のお尻を堪能するか。ほら、アナルがしっかり見えるようにケツを突き出せ」
「は、はい……♡」
鈴音は、スカートとパンツを脱いで、キッチンのシンクに手をつき、ケツを突き出す。
ケツが開いて、アナルとマンコが丸見えになる。
マンコからは、愛液が溢れ出しており、床に垂れてしまいそうになっている。
「おいおい、ケツ揉まれたくらいで感じ過ぎだろ。愛液でビシャビシャじゃねぇか」
「す、すみません……！　ご主人様の力強い揉み方が気持ち良くて、感じてしまいました……♡」
「まぁいいや。このくらい濡れてれば……」
「んっ……♡」
俺は、鈴音のマンコに指を入れ、愛液を指に塗り込む。
「そして～この指を～。こっちに」
「んんっ♡♡」
俺は、マンコから人差し指と中指を引き抜き、それを一気にアナルにぶち込む。
アナル開発をしてないからか、めちゃくちゃキツいけど、俺は構わず中をほじくり回していく。

「んんっ……♡　あっ……♡　ああっ♡」
鈴音は、アナル責めが気持ちいいのか、喘ぎ声を漏らす。
ほじくっていると、腸液が出てくる。
「腸液が出てきて、だいぶ滑りがよくなってきたな」
「ん、んんっ……♡　ああ♡」
あ～もう我慢できん！
「ふん！」
「あああああああああ♡！♡！♡！」
俺は、勃起したチンコをアナルに一気にぶち込んだ。
「くっ……！　開発をしてないから、めちゃくちゃキツいな……！」
「す、すみま、せん……！」
「謝る事じゃない。キツいのはいいことだ」
「ほ、本当、ですか……？」
「あぁ。それを証拠に、俺は少しでも動くとイきそうだ」
「っ♡　う、嬉しいです……♡　い、いつでも出してください♡
私のケツ穴をご主人様のせーしで、いっぱいにしてください……♡
せーしで奥の奥まで犯してくださいぃ♡♡♡」
「分かった。これでもかってくらいに注いでやる！」
俺は腰を打ち付ける。
ビュルルルルルルルルルル！！！
「んらあああああああああ♡♡♡　子宮に注がれないといけないせーしが、私のケツ穴にいぃぃぃ♡♡♡」
俺は、アナルに大量に射精した。
鈴音のアナルの締まりが凄すぎて、俺はたったの一突きで射精してしまった。
「はぁはぁ……」
「休んでる暇はねぇぞ？　このまま抜かずに連発だ！」
「ひゃ、ひゃいぃぃぃ♡♡♡」
俺はこの後、鈴音のアナルに三発注いでやった。

♥♥♥

「買い忘れは……なし。オッケー」
私は今、買い出しを終え帰宅する所だった。
「あれ？　愛莉？」
「っ！？　れ、零様……！？　ど、どうしてここに……！？」
後ろから、声をかけられたので振り向くと、そこには零様がいた。
ま、マズイ……！　この買い出しの内容を知られるのは、駄目なのに……！
「こんなとこでなにしてんだ？　重そうな荷物持って」
「あ、いや、その……こ、これはちょっと色々ありまして……あの……」
ど、どうしよう……なんて言えばいいんだろう……。
当日まで内緒にしとかなきゃいけないのに……。
「家に帰るのか？」
「は、はい」
「じゃあ、荷物持つよ」
「あ、ありがとうございます……！　そ、その、この買い物がなんなのか、聞かないのですか……？」
「う～ん、まぁ、人には色々あるからな。人に知られたくないものだってある。俺はそういう所まで干渉しようとは思わない」
や、優しすぎる……！　なんでここまで優しいんですか……！
「あ、ありがとうございます……！　できるだけ零様には隠し事はしたくないのですが……」
「今日のパンツの色は？」
「黄色です」
「即答か」
「はい。普通なら、私は零様の質問にはなんでも答えられます」
「性感帯は？」
「乳輪とクリとオマンコです。乳輪を舐められたり、なぞられたり

するだけでイッちゃいます」
「乳輪は初めて聞いたな。じゃあ今度から責めてやるよ」
「ありがとうございます♡」
零様に責められたら、イキまくっちゃう……♡
「俺へのその想い、めっちゃ嬉しいよ。それじゃ、行こう」
「はい♡」
あ～……もう一生この方について行こう。
何があっても、私は、零様と共に生きる。
「愛莉、好きだぞ」
「っ～～～～～～♡♡♡　私もです♡」
耳元で突然囁かれたので、ビックリしたけど、すごく嬉しかった♡

（愛莉のメイン回は、今度しっかりと描かせていただきます！　それまで、楽しみに待っていてください♪）

零と女子達の春休み　②（後書き）

まだまだ、間章は続きます！

次話は、紗夜、沙耶香、真耶子の三人です♡

（その前に、ホワイトデー特別編をはさみます♡）

ホワイトデー特別編は現在、鋭意制作中！
できれば今日中に投稿したいのですが、もしかしたら深夜０：００を過ぎてしまうかもしれません……。
ですが、投稿は必ずいたしますので、楽しみに待っていてください♪

ホワイトデー特別編！　大好きな零に、エッチなお返しを♥

ピンポーン♪
「ん？」
朝早くから誰か来たみたいだな。
「あ、来た来た～♪」
燐が飛び跳ねて喜んでる。ん？　誰が来たんだ？
てか、パンツ一丁で飛び跳ねてるから、おっぱいがブルンブルン揺れて、エロすぎるんだが。
「今出るわね～」
巴が玄関に向かう。巴も嬉しそうだな。巴もパンツ一丁だから、おっぱいが揺れててエロい。
「なぁ、桃。誰が来たんだ？」
俺は、隣に立つ桃に尋ねる。ちなみに、桃もパンツ一丁で、首輪を着けている。
「もう少しで分かりますよ」
「ん～？」
焦らすな～。
さっきから姉ちゃんも、食器の準備やら何やらで忙しそうにしてる。
姉ちゃんは、裸エプロンだ。
瑠李、リサ、鈴音、愛莉もなんかワクワクしてる。
「どうぞ～いらっしゃ～い」
『お邪魔しま～す♡』
「うおっ！」
俺は驚いてしまった。
巴と一緒に入って来たのは――、
「黒乃、紗夜、沙耶香、真耶子、雫、奈央、澪、恋！？」

俺の女達が、家に集まってきた！
「ど、どうしたんだ、みんな」
「れいれい、今日がなんの日か、忘れてる？」
「今日……？」
今日ってなんかあったか……？
「零、今日はホワイトデーだぞ」
「あっ……」
黒乃が教えてくれる。
そういや、そうだった。今日はホワイトデーだった。
このメンツも、俺がチョコ渡したメンバーだ。
「零様からのチョコ、とっても美味しかったですよ♡」
「はい♡　零様のせーしがお口の中で広がって、最高でした♡」
澪と恋が、蕩けきった顔をしながら、感想を伝えてくれる。
「零様、驚いた顔をされてますね」
「可愛らしいです♡」
雫と奈央が、そんな事を言ってくる。そりゃ驚くさ。
いきなりこんなに、俺の女達が一同に介したら！
「あ、もしかして、愛莉がこの間買い出ししてたのって……」
「はい。この日の買い出しでした」
「そうだったのか。だから俺に言えなかった」
「はい」
「あ、もしかして、鈴音が隠したのって」
「っ！　は、はい……実は……」
「そうか。なるほどな～」
って事はあれか？　何かお返しを期待してもいいって感じか？
「あ、その顔、お返し期待してる～？」
「べ、別に……！」
紗夜に指摘され、俺は慌てて否定しようとした。が、それを真耶子と沙耶香が――、
「お返し、期待して♡」

「私達からのご奉仕のお返し、楽しみにしていてください♡」
と言ってきてくれた。
「お、おう……」
「あ、れいれい。決して煽ったとか、馬鹿にしたとかじゃないからね！？　ただちょっとれいれいが可愛かったから言ってみたかっただけだから……！？　だ、だから怒んないでぇ！？」
「お、怒ってない」
「ほ、本当……？」
「あぁ」
「よがっだぁ～！」
紗夜が膝立ちになり、俺にすがりついてくる。
俺に嫌われるかもしれないってなると、ほんとみんな慌てるよな。
まぁ、めちゃくちゃ嬉しいんだけど。
「それじゃあ皆さん。零ちゃんへのお返しパーティー始めましょうか」
『は～い！』
姉ちゃんの合図で、俺へのホワイトデーのお返しパーティーが始まった。
いや、ほんと何が始まるの？

♥　♥　♥

「お返しのお菓子も食べ終わった所で！　本日のメイン企画を始めましょう！」
『お～！』
「じゃあれいれい！」
「は、はい！」
れいれいの声、裏返ってる♡　可愛い♡
「そこに立ってください♡」
「は、はい」

れいれいは立ち上がってくれる。
「じゃあ、れいれい、服脱がすね♡」
「あぁ」
私達は、全員で協力して、れいれいの服を脱がしていく。
私がれいれいのパンツを脱がす担当になった。
やた♡
「れいれいのおちんちん、パンツの上からでも分かるくらいギンギンだね♡」
「そりゃあな、全裸の女子達がいれば、こうなる。それに燐のせいでもあるしな」
「ご、ごめんなさ〜い♡」
「じゃあ、脱がすね♡　チュ♡」
私は、れいれいのパンツを脱がす前に、パンツの上からおちんちんにキスをする。
そのキスで、おちんちんがビクッてしたのがめちゃくちゃ可愛かった♡
そして、私はパンツを脱がした。
ビュン！　って勢いよく飛び出してくるおちんちん♡
「はぁ〜♡♡♡　なんで、れいれいのおちんちんってこんなに最高なの〜♡」
「紗夜達を犯す為だからな」
『っ♡』
「れいれい、大好き〜〜〜♡♡♡」
私達は、れいれいへのご奉仕を開始した♡

♡　♡　♡

俺は今立っている。本当にただ立っているだけ。
全裸で立って、俺の周りに全裸女子達が集まっている。
『ちゅ……♡　ちゅる……♡　ちゅぷ……♡』

紗夜、燐、華の三人がフェラをしてくる。
巴と黒乃は俺の金玉を、優しく揉み込んでくる。
澪と恋は、俺の乳首を唾液たっぷりの指で弄ってくる。
沙耶香は、俺のアナルを独り占め。
愛莉、雫、奈央の三人はオナニーをして、俺を視覚的に興奮させてくれる。
リサと鈴音の二人は、俺の手の指を丹念に舐めてくれる。
リサが右手。鈴音が左手を。
桃と真耶子の二人は、俺の足の指を舐めてくれる。
桃が右足。真耶子が左足。
瑠李は、俺にキスをしてくれる。
と、まぁ、十六人の女達が、俺に向かってご奉仕してくれる。
こ、これは最高のお返しだ！
「どお？　きもひいい？」
紗夜が上目遣いで聞いてくる。その間も燐と華がチンコを舐め続ける。
ちなみに、俺が姉ちゃんを「華」と呼んでいるのは、今日だけは呼んでほしいと姉ちゃんに言われたからだ。
「あぁ。めちゃくちゃ気持ちいいよ」
俺がそう答えると、俺に奉仕している女達は、喜び奉仕を激しくする。
「っ！」
ドビュルルルルルルルルルルルル！！！
『っ♡』
俺は、瑠李とキスをしているため「イク」と言えなかった。
その為、紗夜が亀頭をチロッと舐めた瞬間にイッてしまった。
その為、俺の精液は紗夜の顔面にかかる。
「れいれいの精液～～～～♡♡♡　最高～♡♡♡」
「あ～！　紗夜っちずる～い！」
「紗夜さん、私にも～」

紗夜の顔にかかった大量の精液を、燐と華が羨ましそうに欲しがる。
「いいですよ～♡　えい♡」
その精液を、紗夜は指ですくい、二人の顔に塗っていく。
まるで、クリームを塗るかのように。
三人の顔に、俺の精液が広がっていく。
「ぷはぁ♡　三人とも、エッチだぁ～♡」
瑠李が、キスを止め、三人を見て羨ましそうに呟く。
「れー君のアナル、めちゃくちゃヒクヒクしてて可愛い♡」
「零様の乳首、ビンビンです♡」
「素敵です♡」
沙耶香がアナル舐めを継続し、澪、恋の二人は乳首を弄るのではなく、舐めるに変えた。
「順番よ」
「は～い」
巴がそう言うと、紗夜、燐、華の三人と入れ替わり、黒乃と共にチンコを舐め始める。
「んふふ♡　やっぱり零ちゃんのオチンポ、美味しい♡」
「あぁ。零のオチンポは、最高だ♡　ずっと舐めていられる♡」
ダブルフェラって、連携が大事だけど、この二人は双子だから、その連携が凄まじい。
「零君、気持ちよさそう♡　そのお顔、もっと見せて♡」
瑠李がキスを再開してくる。
「兄さんの足、美味しい……♡」
「零様は、どこを舐めても美味しいですね♡」
足を舐める二人が、そう言ってくる。
いや、別に俺、全身お菓子でできてる訳じゃないんだけど。
「先輩の手も、すっごく美味しいです♡」
「ご主人様、最高です♡」
手を舐める二人もそんな事を言ってくる。

そんなに俺の体、好きなの？　嬉しいけど！
俺は一旦、瑠李から口を離し――、
「愛莉、雫、奈央、こっち来い。もっと近くでオナニーを見せろ」
「「「はい♡」」」
俺がそう言うと、三人は俺のすぐ側まで来る。
「「「んっ……♡」」」
三人は、オナニーを開始する。
オマンコはグチョグチョで、弄る度にグチョグチョといやらしい音が鳴る。
愛莉と雫は膣（なか）に指を入れ、弄っている。奈央はクリを弄っている。
「れ～いちゃん♡」
「ん？」
巴が声をかけてくる。
「零ちゃんの、おせーし、ちょうらい♡」
「れ、零、私にもくれ♡」
「あぁ。じゃあ、沢山舐めろ」
「「はい♡」」
二人はフェラを激しくする。
「「ジュロロロロロロロロロロロロロロロ♡♡♡」」
「うっ……！　んっ！」
俺が二人のフェラで感じていると、ちょっと嫉妬した瑠李が、キスをしてくる。
「私もいるんだよ？」
「あぁ。分かってる、よっ！」
ドビュルルルルルルルルルルルル！！！
「「んんっ♡」」
俺は、瑠李の嫉妬キスを受けながら射精した。
「零ちゃんのおせーし来たぁ♡」
「零の精子♡」
二人は、俺の精液を顔面で受け止めていく。

二回目だと言うのに、射精量は衰えず、むしろさっきより増えていた。
どろっとした精液が、二人の顔と体を汚していく。
「ん～～～♡　この臭い、この味、この濃さ、やっぱり最高～～～♡」
巴と黒乃の二人は、精液を顔や全身に塗り拡げていく。
「ふぅ～ちょっと座っていいか？」
「私の背中にどうぞ！」
俺がそう言うと、鈴音が四つん這いになり、椅子になった。
「いいのか？」
「はい！　私の背中に、どうか！」
「分かった」
俺は、鈴音の背中に座る。鈴音は細いから、腰に座った途端に折れちゃうんじゃないかと思う。
「ん～～～～♡♡♡　ご主人様の重みが、全身に～～♡♡♡」
なんか、すげぇ嬉しそう。
「「次は、私達にください♡」」
オナニーをしていた、雫と奈央がおねだりをしてくる。
「もちろん」
「「ありがとうございます♡」」
巴と黒乃が場所をあけ、雫と奈央が俺のチンコを舐め始める。
「んちゅ……♡　やっぱり零様のオチンポ、最高ですぅ～♡」
「ぢゅうぅぅぅぅぅぅ♡♡♡　零様の我慢汁と精液が混じったおちんちん、最高～～～♡♡♡」
二人は俺のチンコを舐め、嬉しそうに味わう。
「沙耶香、おっぱい揉ませて」
「うん♡」
俺は、沙耶香を呼び、Fカップおっぱいを揉む。
「んっ……♡　んんぅ……♡」
沙耶香は、可愛らしい喘ぎ声を漏らす。

「そういや、紗夜達は……って、ずっと俺の精液を塗りたくってんのか」
俺の精液を浴びた紗夜、燐、華、巴、黒乃の五人はずっと顔や全身に精液を塗りたくっている。
そして、幸せそうな顔を浮かべている。
「二人とも、どこに出してほしい？」
「「顔にお願いします♡」」
「了解。じゃあ、出すぞ！」
「「はい♡」」
二人が同時に手コキをしてくる。その手コキが気持ちよすぎて――、
「出る！」
ドビュルルルルルルルルルル！！！！
「「んん～～～～～～♡♡♡」」
俺は、二人に顔射した。
二人の顔に、精液がビシャビシャかかっていく。
「まだ出る！」
ビューーー！！　ビュビューーー！！！！！
「「んん～～～～～～♡♡♡」」
俺は、ゼリー状の精液を二人の体にぶっかけた。
「ふぅ～」
「兄さん、一旦おしっこ出す？」
「あぁ。いいか？」
「もちろん♡　リサ」
「はい♡」
桃とリサの二人が、俺の前に跪く。
「出すぞ」
「「ふぁい♡」」
二人が口を開ける。そんな二人に俺は放尿する。
ぷしゃあああああああああ！

「「んっ……♡」」
二人は口でおしっこを受け止めていく。
ゴクゴクと飲んでいくが、量が多いので、口からこぼれ落ちて全身にかかっていく。
「二人とも、いいなぁ～」
そんな様子を、瑠李が羨ましそうに見つめている。
「今度、瑠李も飲むか？」
「うん♡」
「あ、あの……零様、今度私にも……」
愛莉が言ってくる。
「あぁ、いいぞ。愛莉にも飲ませてやる」
「ありがとうございます♡」
「ふぅ～」
俺は放尿を終えた。
「ご馳走様でした、兄さん♡」
「先輩のおしっこ、とっても美味しかったです♡」
「よかった」
「それじゃあ、兄さん♡」
「ん？」
「残った私達に、兄さんの精液、ぶっかけてください♡」
桃、真耶子、リサ、鈴音、沙耶香、瑠李の六人が俺の前に跪き、おねだりをした。

♡　♡　♡

結論から言おう。
俺はあの後、全員に大量に射精した。
一人ひとりに射精して、全身や顔に精液をぶっかけた。
その全員が『精液、最高～～～～♡♡♡』と喜び、全身精液まみれで、過ごしている。

精液の日（ホワイトデー）とは、まさにこの事か、と思った。
上手い事言わなくていいんだよ！
「そういや、愛莉が買い出しに行ってたのって、結局なんだったんだ？」
「あ～それは……」
俺が聞くと、精液まみれの愛莉は、二階に行き、荷物を持って降りてくる。
「この間買っていたのは～これです♡」
荷物から出したのは、多くのアダルトグッズだった。
「バイブに電マ、ローター、猿轡、ムチ、目隠し、すげぇあんな……」
「これを使って、たっくさん私達をイジメてください♡」
精液まみれの瑠李が、そう言ってくる。
「お兄ちゃんにイジメられるの想像しただけで、もうイッちゃいそうです～～♡」
精液まみれの燐が腰をくねらせ、言う。
「零ちゃんのSモード、堪らない……♡」
精液まみれの華が言う。
「れいれいにオマンコほじられて、イジメられるの、最高すぎでしょ♡」
精液まみれの紗夜が言う。
「アナルと乳首を開発、されちゃう……♡」
精液まみれの沙耶香が言う。
「零様からの、玩具イジメ……ぐふふ♡」
精液まみれの真耶子が、不敵に微笑む。
「兄様に……♡　ぐへ♡　ぐへへ♡」
精液まみれの桃が、真耶子よりも不敵に微笑む。
「零様にいじめられたくて、たっくさん買ってきたので、楽しんでくださいね♡」
精液まみれの愛莉が、満面の笑みで言う。

「「零様、私達を、壊してください♡」」
精液まみれの澪と恋が、声を揃えて言う。
「先輩にイジメてもらえるなんて、幸せすぎます～～♡」
「ご主人様の調教、最高です～～♡」
精液まみれのリサと鈴音が、嬉しそうに言う。
「零様にイジメてもらえるなんて、夢みたいです♡」
「私のオマンコ、たっくさん壊してください♡」
精液まみれの雫と奈央が言う。
「私の事もイジメてね♡」
「私もだぞ、零」
精液まみれの巴と黒乃が言う。
「みんなまとめて、この玩具でイジメまくってやる！　泣いても、嫌がっても止めないからな！　壊れるまでイジメてやる！」
『ありがとうございます～～～♡♡♡』
このホワイトデー、最高過ぎるだろ！

ホワイトデー特別編！　大好きな零に、エッチなお返しを♥（後書き）

玩具でイジメまくるお話は、いつか書けたらいいなと思っております！
もし、見たいと思ってくださったら、お伝えいただけますと幸いです！

今回のホワイトデー特別編はいかがだったでしょうか？
バレンタインの回は、お名前発表と言う、ものすごく大切な回でした。なので、今回のホワイトデーはそのキャラをサプライズとお嬢様を除いて、チョコをもらった全員、登場させました。
ちょっと無理くり感が出てしまったような感じもするのですが、楽しんでいただけましたら、幸いです！

次話からまた、間章に戻りますので、楽しみになさっていてください♪

零と女子達の春休み　③

【紗夜・沙耶香・真耶子】

（紗夜と沙耶香の二人は、ホワイトデー前のお話です）

「うへへ～……♡」
「紗夜、朝からおかしいわよ」
「えぇ～？　そう～？」
「えぇ。朝帰って来てから、ずっとニヤけてる」
「えへへ～♡　れいれいにたっくさん愛してもらっちゃったんだも～ん♡」
「あの下着、喜んでもらえたの？」
「うん♡　たっくさん興奮してもらえたよ～♡　昨日なんて、犯されまくって、寝かせてもらえなかったも～ん♡」
「あら。それは羨ましいわね。だから帰ってきた時、足がガクガクしてたのね」
「うん♡　あ、思い出したらムラムラしてきちゃった♡　部屋でオナニーしてくる！」
「お風呂でしなさい。あなた潮吹くでしょ。お部屋の掃除大変なんだからね」
「バレてたか……」
「当たり前でしょ。誰が部屋の掃除してると思ってるの」
「ごめんなさ～い。じゃあ、お風呂入ってくる～」
「あんまり無理しないようにね」
「は～い！」
この後私は、お風呂でのぼせるまでオナニーをして、お母さんに叱られた。

♥♥♥

「さや姉、これ何？」
「ん？　水筒だけど？」
「いや、それは分かってるよ。そうじゃなくて、なんでここに置いてあんの？」
「飲むため」
「それは分かってるわ……じゃあちょっともらっていい？」
「あ、駄目っ！」
私が止める前に、バカ妹は私の水筒の中身を飲んでしまった。
「んくんく……ん？　何、これ……」
「そ、それは……」
「めっちゃ美味いんだけど！」
「え……」
この子も、この味の良さが分かるんだ！
「ねぇ、さや姉！　これ何！」
「それはね、私の彼氏のおしっこよ」
「え！　おしっこってこんなに美味しいの！」
「うん。しかも、私の　”彼氏の！”　おしっこだから特段美味しいの」
「そっか～……その男性に会ってみたいな……」
あんまりこの子の自由奔放さに、れー君を巻き込みたくないんだけど……。まぁ、れー君なら受け入れてくれるかな。
「じゃあ、今度、会ってみる？」
「え！　いいの！」
「うん。れー君なら、あんたの事も受け入れてくれると思う」
「やった～～～～！！！　ママ～～！」
全く。
「れー君、あの子の事、壊していいからね」

♥♥♥

零様に、ホワイトデーのお返しをして数日後。
「んっ……んん……♡」
私は今、学校の職員室で、全裸になっている。
さらに、手首を縄で拘束され、カーテンレールに吊るされている。
吊るされているとは言っても、足は床に着いている。けど、自分の意思で座る事はできない。
そう。零様の許可なしには。
「んっ……♡　くっ……♡」
「足がめちゃくちゃガクガクして来たな。限界が近いか？」
「お、おしっこが漏れちゃいそうです……」
私は今、零様に調教をしてもらっている。
零様の完璧なる『性奴隷』になる為に、おしっこも、イクのも、全て管理していただく。
私の意思でおしっこしてはいけないし、イッてもいけない。そもそも、オナニーをしてはいけない。
どうして、私が零様に管理されるようになったのか。それは、ホワイトデーの翌日に遡る。

【3／15】。
「零様……！　お待たせしてしまい、大変申し訳ございません……！」
「一分の遅刻か。後でお仕置きだな。乳首噛みとスパンキング、どっちがいい？」
「っ♡　りょ、両方と言うのは駄目でしょうか……？」
「両方だと？」

「は、はい……」
やっぱり、駄目かな……。
「欲張りなド変態め。まぁいい。じゃあ後で両方してやる。乳首が取れるんじゃないかってくらいに噛んで、痛みが数日引かないくらいに叩きまくってやる」
「あ、ありがとうございます……！」
やっぱり、零様はお優しい♡
私は、昨日（3/14）の夜に、メールで零様からお呼び出しを受けていた。
その内容は『真耶子とエロい事したいから、明日の午前１０時、俺ん家の近くの公園に集合』と言うもの。
その集合時間に、私は遅れてしまった。
でも、お仕置きをしていただけるから、私的には嬉しくて堪らない♡
「それじゃ、ホテル行くぞ」
「はい♡」
ここまでストレートに言われると、子宮がキュンキュンして、疼きまくっちゃう♡
「ほら行くぞ」
「はい♡」
私達は、ラブホテルへと向かった。

♥　♥　♥

「どこにするか……」
零様は、ロビーでどの部屋にするかを悩んでいた。
こ、個人的には、ＳＭプレイができそうな部屋がいいけど、そんな事、言えない……。
「あのエックスの拘束台がある部屋、気になるな」
「っ♡」
私と同じ事考えてくれてる……♡

「わ、私もあの部屋がその……気になります……」
「そうなのか？　だったら早く言えよ。じゃあこの部屋にするか」
「は、はい！」
やった～～～～！　零様と憧れのＳＭプレイができる！
私達は部屋に移動した。
「お～すげぇ」
部屋の中に入ると、部屋の中央にエックスの拘束台が設置してあり、あちらこちらには拘束用の道具や、調教用の道具が沢山置いてある。
「ゴク……」
つい、生唾を飲み込んでしまった。
だって、これから零様にどんな事をしてもらえるのか楽しみだったから。
「よし、それじゃあ始めるか」
「は、はい！」
何してくださるのかな？
「パンツ一丁になって、立ったままオナれ」
「へ？」
「へ？　じゃねぇ。パンツ一丁で立ったままオナれ。同じ事二度も言わせんな」
「は、はい！」
れ、零様に対して無礼な態度取っちゃった……！？
こんなんじゃまた、放置プレイになっちゃう……！
私は、服を脱ぎ、パンツ一丁になる。パンツは紺色のＴバックだ。
「じゃ、じゃあします……」
「あぁ」
零様は、ベッドの上に座り、私を穴が開くんじゃないかってくらいに見つめてくる。
は、恥ずかしい……♡　でも、その恥ずかしさが興奮に繋がって……あ、乳首が勃ってきちゃう……♡

「まだ弄ってもいないのに乳首勃つとか、どんだけ興奮してんだよ。クリも勃ってるし、マンコも愛液が垂れてんじゃねぇか」
「す、すみません……♡」
零様の言う通り、私のクリはビンビンに勃起し、マンコからは愛液がこれでもかってくらいに溢れ出ていた。
愛液はふくらはぎにまで垂れている。
「んっ……♡」
私は、オナニーを始めた。

♥♥♥

「はぁはぁ……れ、零様……」
呼んでも返事はない。
今、私はエックスの拘束台に拘束されている。全裸で。
足も拘束されているが、ずっとガクガクと震えている。
かれこれ一時間以上、おしっこもしてなければ、オナニーで寸止めを十回以上させられ、イケずにいる。
体は、イキたくて、おしっこをしたくてずっと小刻みに震えている。
「れ、零様ぁ……」
再度呼びかけるが、返事はない。
私は目隠しをされているので、零様がどこにいて何をしてるのか、全く分からない。
「お、おしっこぉぉ……」
私は、尿意がすでに限界に達していた。
ちょっとでも油断をすると、ぴゅっと漏れてしまいそうだ。
「んひぃ!?!?!?!?」
突然、クリトリスを弾かれ、私は声を上げた。
更に――、
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!?!?!?!?」

乳首を噛まれ、それと同時に下腹部を思い切り押された。
私は、その瞬間に声にならない声を上げた。
乳首を噛まれただけでも大変なのに、下腹部を押されたら、膀胱に溜まってるおしっこが――、
「出ちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！？」
ぷしゃあああああああああああああ♡♡♡♡♡
私は、おしっこを漏らしてしまった。
零様の許可なしに。見えてないので分からないが、床に水たまりが一瞬にしてできているのか、おしっこがじょぼじょぼ～～～♡と鳴る音が部屋中に響き渡っている。
「ご、ごめんらさいぃぃぃぃ……！？　おしっこ、止まらないのぉぉぉぉぉぉ！？」
私のおしっこは、出しても出しても全然止まってくれない。それどころか、量も勢いも増している気がする。
これ、永遠止まらないのでは？　と錯覚するくらいに出続けている。
「（情けない）」
「っ～～～～～～～～♡♡♡」
み、耳元で囁かれたぁ～～～♡♡♡
ぷじょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡
またおしっこが溢れちゃったぁぁぁぁ♡♡♡
「れ、零様ぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡」
「（真耶子のおしっこプールができそうなくらい、床に溜まってるぞ？）」
「ご、ごめんらさいぃぃぃぃ♡♡♡」
私は、ただ謝りながらおしっこを漏らし続けるしかできなかった。

♥　♥　♥

「はぁはぁ……」

永遠とも思える程、長時間に渡るおしっこを終えた後、私は拘束を解かれ、ベッドの上で力なく横たわっていた。
「すんげぇ出たな」
「す、すみません……」
目隠しを取られた後、私は死にたくなった。
床には私のおしっこでできた水たまりがあり、零様が言った通り、プールができそうな程だった。
しかも、それを零様が後片付けしてくれて、申し訳なさすぎて本当に死にたくなった。
「あ、後片付けをさせてしまい、大変申し訳ありません……！」
私は、まだ震える体にむち打ち、なんとか正座をして零様に土下座する。
「気にすんな。これも、主の役割だ」
や、優しすぎる……！　でも、これからは自分で処理しよう。零様にさせるなんて、奴隷失格だからね。
「なぁ」
「は、はい」
後片付けを終えた零様が、隣に座ってくる。
「これからさ、真耶子のおしっことイクのを俺に管理させろ」
「か、管理、ですか？」
「あぁ。俺の許可なしにおしっこはしないこと。俺の許可なしにイカない事。どうだ？」
「そ、それは大変嬉しいのですが、その……家とかでも管理されるのでしょうか……？」
「あぁ。真耶子は自宅に帰っても自由におしっこしちゃいけないし、オナニーをしてイクのも禁止だ。俺からの連絡がないかぎり、おしっこもイクのも禁止だ」
か、管理されるのは夢だったけど、それは流石にキツいような……。
「いきなりとは言わん。徐々に慣らしていって、真耶子の体に、俺

の前か、俺の許可がないとおしっこしたりイッたりできないと覚えさせよう」
「わ、分かりました。零様に管理されるのは私の夢でしたので、喜んでお受けさせていただきます……！　それで、いつからに……？」
「そうだな……とりあえず今日からオナニーは禁止な。おしっこはまだ勝手にしてもいい」
「分かりました」
オナニー禁止か……オナ禁なんてした事ないから、どうなっちゃうのか分からないけど、零様の言う事を聞かないと！
「それじゃあ、決まりな」
「はい！」

と、言う事があり、私は零様の完璧な『性奴隷』になる為に『管理』をされている。
「あと一時間は我慢な」
「ひゃ、ひゃいいいい……！」
私は、すでに三時間、おしっこを我慢している。もちろん、イクのも。
それを後一時間我慢しなくてはならない。
が、頑張らなきゃ……！
「真耶子は最高の奴隷だな」
「あ、ありがとうございますぅぅぅ♡♡♡」

零と女子達の春休み　③（後書き）

真耶子の調教回、今度しっかり書かせていただくので、楽しみにしていてください！

まだまだ間章の春休みは続きますので、お楽しみに♪

次話は、雫、奈央、澪、恋の四人です♡

零と女子達の春休み　④

【雫・奈央・澪・恋】

「零様、ホワイトデーのお返し喜んでくれて、よかった～♡」
私は今、カフェで奈央と一緒にお茶をしている。
「ね。結構ドキドキしてたけど、喜んでもらえてよかった」
「まさか、あんなに精液を沢山かけてもらえるなんて思ってもなかったわよね」
「うん。零様が絶倫なのは知ってたけど、あそこまで沢山出してもらえるとは思ってなかった。だからこそ、幸せだった」
奈央とは、子供の頃からの幼馴染みで、ずっと一緒にいる。
だからこそ、零様に二人一緒に愛してもらえるのがすごく嬉しい。
まぁ、奈央は私にだけ厳しい一面があるから、そこがちょっと困る所なんだけど。
「それじゃ、そろそろ行こうか。私達も三年生になります。それに向けて色々と準備しないと」
「そうね。行きましょう」
私と奈央は、店を後にした。

♥　♥　♥

「これなんてどう？」
「私には似合わないと思うわ」
「そう？　雫にピッタリだと思うんだけど」
「それを言ったら、これなんて奈央に合うんじゃない？」
私達は今、女性下着専門店に来ている。
店舗数は男性下着専門店に比べれば少ないけど、全くないと言う

訳ではない。
専門店だけあって、レパートリーがかなり多い。
でも、普通のパンツはない。ここはエッチな下着を取り揃えた、アダルトランジェリー専門店だ。
「このパンツ、零様喜びそう♡」
「零が穿いたら、お尻が持ち上げられてめちゃくちゃエロそう」
「私、これにしようかな。奈央は？」
「う～ん……私はこれかな」
「あ～いいね。そのパンツを奈央が穿いたら、クリが目立ってエロそう」
「ね。じゃあ、他にも選んで買おうか」
「えぇ」
私達は、それぞれパンツを購入した。

♥　♥　♥

「あ、いた」
パンツを購入した後、私達は待ち合わせ場所へと向かった。そこには二人の人がいた。
「澪さん、恋さん」
「あ、零さん、奈央さん」
そこにいたのは、零様を拉致り犯した馬鹿な女達、澪と恋だった。
正直、私はこの二人が嫌いだ。
零様のご厚意で専属便器になったみたいだけど、私はあの一件を許していない。
「零、あなたも似たような事をしたんだから、人の事あまり責められないからね？」
「うぐっ……わ、分かってるわよ……」
そう。私は前に、零様に媚薬を飲ませ、三回無理矢理連続射精させ、更には潮吹きをさせて、大変な思いをさせてしまった事がある。

「でも、私の時よりも酷い事をしたでしょ、この二人は！」
「どっちもどっち。犯した罪は消えない。雫も、あなた方も」
「「「はい……」」」
「はぁ……。とりあえず、私の家に行きますよ。色々と準備があるんですから」
「「「はい」」」
私達は、奈央の家へと向かった。

さっきから言ってる準備とは、零様に飽きられないように、使ってもらえるように、マンコやおっぱい、アナルなどを色々と開発したりなどする事だ。
後輩が入ってくる。それはすなわち、零様の性奴隷が増えると言う事。
今の状況にあぐらをかいて、何もしないでいたら、絶対に飽きられる。そして捨てられる。
だから私達は、後輩に負けない為にエロく、興奮しえもらえるように準備を始めたのだった。

零と女子達の春休み　④（後書き）

「零様とのエッチシーンがないってどういう事！？」
「これは零に同意です。他の人はあるのに、なんで私達はないんですか！」
「私もです！」「私も！」
皆さんとのエッチは、また今後書かせていただきますので、どうか怒りをお鎮めください……！
「「「「本当でしょうね！？」」」」
は、はい……！　いずれ、必ず……！
「「「「ならば、許します！」」」」
ありがとうございます！

またまた、おふざけでした！
今回はエッチシーンがなく、すみません……！
次話はございますので、お許しください……！

次話は、巴と黒乃の二人です♡
（最後にはあの二人が……？）

零と女子達の春休み　⑤

【巴・黒乃】

「来たよ～」
「零、姉さん、いらっしゃい」
俺と巴は、黒乃の家にやって来ていた。
特別、何か用があった訳じゃないけど、俺も巴も黒乃と会いたかったし、沢山話をしたかったのでこうして訪れた。
ちなみに、泊まりだ。
「零の好きな飲み物やお菓子、沢山用意したから、楽しんでくれな♪」
「ありがとう、黒乃。大好きだよ」
「お、おぉう……♡　ありがとう……♡」
俺が不意にそんな事を言うと、黒乃は初恋をしたばかりの少女のように、顔を真っ赤にして照れた。
何それ。めちゃくちゃ可愛いんですけど！
「黒乃のこんな顔、初めて見た……」
巴は、黒乃のその照れた表情を見て、驚きの表情を浮かべていた。
俺は、黒乃とバレンタインデーの前日に関係を持った。そして、俺が転生者であると言うことを、唯一知ってる人になった。
俺の苦しみ、悩み、葛藤を半分背負ってくれると言ってくれた。
それがすごく嬉しかった。
あ、後、関係と言ったが、セックスはまだしていない。
でも、必ずしたいと思っている。だって、黒乃のマンコ、絶対気持ちいいと思うから！
「零ちゃん、エッチな事考えてる？」
「っ！」

巴にそう言われ、俺はドキッとしてしまった。
そ、そんなに顔に出てたかな……？
「零、勃起してるぞ♡」
「あ……」
顔じゃなくて、股間に出てたのね。
それじゃあしゃ～ないわ。
「よいしょ♡」
「と、巴！？」
巴は、玄関だと言うのに、俺のズボンとパンツを脱がせてきた。
自分の持っていたカバンを乱雑に放り捨て、俺のチンコを大事そうに握ってくる。
「うふふ♡　こんなに大きくなって、素敵……♡　ガッチガチに硬くて、もう我慢できないわ♡」
そう言いながら巴は、チンコをゆっくりと扱いてくる。
「零ちゃん、気持ちいい？」
「あぁ……気持ちいいよ」
「良かった♡　いっぱいシコシコするから、たっくさん気持ちよくなってね♡　我慢汁も精液もいっぱい出してねぇ♡」
巴は扱く速さをどんどん上げていく。
扱かれる度に、我慢汁が溢れ、それが皮の中に溜まっていくので扱く度にクチャクチャと音が鳴る。
「んふふ～♡　零ちゃんのクチュ音、堪らない……♡　ずっと聴いてたい……♡　それに、すぅ～～～～～♡　皮を剥いた時のこの我慢汁と精子とおしっこと汗の混じり合った臭い♡　堪らないわぁ～♡」
巴は、顔をチンコにこれでもかってくらいに近づけて、臭いを嗅いでくる。
というか、もうすでに亀頭が頬に当たってるんだけど、巴は全く気にしてないようだ。
それどころか、もっとくっつけて欲しいとねだるかのように、亀

頭に頬を擦り付けてくる。
「姉さん、一人だけずるい……」
と、隣で嫉妬してる黒乃。黒乃も一緒にと声をかけようとした瞬間――、
「ちゅ……♡」
黒乃がキスをしてきた。
「んっ……♡　ちゅ……♡　ちゅむ……♡　ぢゅる……♡」
俺の唇、舌、唾液を味わうように貪ってくる。
「んふふ♡　零ちゃん、黒乃のキスで興奮してるんだね♡　オチンポ様パンパンになってきてる♡」
「私なんかのキスで興奮してくれるのか……？　嬉しいな……♡　もっとキスするから、もっともっと興奮してくれ♡　んちゅ……♡」
黒乃は、先程よりも激しくキスをしてくる。
「負けないわ！　ぢゅる……♡　ぢゅるるるる♡♡♡」
黒乃に対抗するように、巴が手コキフェラをしてくる。
竿を激しく扱き、亀頭を口に含み、激しく吸いながら舌で亀頭を舐め回してくる。
これは、ヤバい……！
「んん～～！」
キスをしている為、「イキそう」と言うのが言えないので俺は、唸って巴に伝える。
それを聞いた巴は、一度口を離し――、
「ぷはぁ♡　いいんだよ？　我慢なんてしないで、私に零ちゃんの超濃厚なオチンポミルク、いっぱい出して♡」
巴は、激しく手コキしながら可愛らしく微笑みながら言ってくる。
巴の唾液が混じって、めちゃくちゃ気持ちいい……！
「ほら♡　い～～～～～～～っぱい出してぇ～♡」
「んんっ！」
巴は、左手で扱きながら右手の手のひらで亀頭を激しく擦ってきた。

俺の我慢汁と、巴の唾液が混じってヌルヌルなので、めちゃくちゃ気持ちいい……！
これは、駄目だ！　出る！
「んっ！」
ビュル！　ビュルルルルルル！！
「キャッ♡　あはぁ♡　いっぱい出てるぅ～♡♡♡　白くてドロドロの精液が、ビュルビュルって～～♡♡♡　最高～～～♡♡♡」
巴は、俺の射精を嬉しそうに受け止めていく。
顔や体にかかってるにも関わらず、巴はめちゃくちゃ幸せそうな表情を浮かべている。
せっかくの可愛らしい服も、俺の精液でベチョベチョになってしまっている。
しかも、射精しているのにずっと扱いてくるから、ずっと射精が続いている。
「もっと♡　もっと出してぇ～♡」
「姉さん、あんまり無理させちゃ駄目。この後も沢山もらうんだから」
「う～～……もっと欲しいのに～～」
「あ、後でまた沢山出してやるから。な？」
「うん♡　零ちゃんのオチンポミルク、顔にもお口にも、体にも、オマンコにも、いっぱい頂戴♡」
「零、疲れただろう？　部屋に行って少し休もう」
「うん」
俺達は、部屋に上がった。

♥　♥　♥

「あっ♡　あっ♡　あああ♡」
私は今、零ちゃんにオマンコを犯してもらっている。……あ、いただいている♡

黒乃は、私の事を正常位で犯している零ちゃんの乳首を、背後から弄っている。
それが気持ちいいのか、零ちゃんは蕩けた顔をしている。
む。私のオマンコでも気持ち良くなってもらわなきゃ――、
「んひゃん！？」
突然、零ちゃんがクリを掴んできた。
それだけじゃなく、オマンコを犯しながらクリを激しく擦ってくる。
「れ、零ちゃ～ん♡　それ、りゃめらよぉ～♡」
「え～……駄目なの……？」
れ、零ちゃんが子供みたいにシュンとした顔をしてる……！　そ、その顔可愛すぎ～～～♡
「だ、駄目じゃないよぉ～♡　れ、零ちゃんがシたい事、なんでもシて～～♡」
私にとって、零ちゃんは神様だ。
零ちゃんがいなきゃ、私は生きていけない。
桃と共に、零ちゃんに隷属したり、結婚したりしたい。
あ、ちなみに、海外にいる人にはすでに離婚してと言ってある。
ちょっと抵抗したけど、すぐに捨てた。
だって、私には零ちゃん以外の男なんて必要ないから♡
「じゃあ、いっぱいクリ弄りながら犯すから、いっぱい感じてね？」
「は、はいぃ～～～♡♡♡」
零ちゃん、どんどんエッチになっていって最高過ぎる～～～～♡♡♡

♥　♥　♥

「何かやりたい事、あったりするか？」
「ど、どうしたの突然……？」
「いや、私は零に何もできないなと思ってな。だから、零のシたい

ことをなんでも叶えてあげたいなと思ってな」
「私も～！」
姉さんが手を上げる。やっぱりね。双子だから同じ事思ってると思った。
「な、なんでもいいの……？」
「あぁ。なんでもいい。零のシたいこと、なんだって」
「じゃ、じゃあ……」
「うん」
私と姉さんは同じ顔をしてると思う。目をキラキラさせて、零を見ている。
「は、ハメ撮り、とか……」
「「は、ハメ撮り……？」」
あんまり聞いた事がない言葉で、私と姉さんは呆気に取られてしまった。
でも、それがいけなかった。
「や、やっぱりなんでもない……！　こ、こんな事、やっぱり駄目だよね……！　ちょっと調子乗った……！　ごめん……！」
零に謝らせてしまった……！？
「ま、待ってくれ零！　あ、謝らなくていいんだ……！　あんまり聞いた事がない言葉だったから、疑問に思っただけなんだ……！だから、駄目とかそういう事じゃない……！」
「ほ、本当……？」
「あぁ！　な、姉さん？」
「うん！　零ちゃんのシたいことに、駄目なんて言うわけないよ……！　それより、私達こそごめんね……！？　零ちゃんに謝らせちゃって……！？」
「本当にごめん……！」
私と姉さんは、全裸で土下座をする。
「そ、それこそ謝らなくていいよ……！」
そう言って、零は私達を起き上がらせてくれる。

あぁ……本当に零は優しいな。こういう所が、好きなんだ。
「それで、そのハメ撮り……？　って言うのはどういう事をするんだ？」
「うん。俺達のセックスを動画に撮るんだ」
「「っ！」」
な、なんだその、ものすごく興奮しそうなプレイは！
隣で姉さんもハーハーと興奮してるし！
「シても、いい？」
「「もちろん！」」
「良かった～……。この世界に来てから、ＡＶが見れなくてさ、困ってたんだよ。所持してたＡＶも飽きちゃったし」
「あ、そっかそっか。ハメ撮りはＡＶと同じか。なるほどな～。じゃあ、沢山ハメ撮りして、零のオカズを増やそう♡」
「うん！」
など、私と零が話していると――、
「ちょ、ちょっと待って……！」
「「ん？」」
姉さんが割って入ってきた。
どうしたんだ？
「れ、零ちゃんがこの世界に来た？　ど、どういう事……！？」
あ、そっか。この話は私しか知らなかったんだ。
「零……」
私は零を見る。
「うん。巴にならいいかな。巴、今から俺が言う事、信じてくれる……？」
「もちろん！　零ちゃんの言う事ならなんでも信じるよ！　というか、信じないとか絶対にない！」
「ありがとう。実はね俺、別の世界から来た転生者みたいなんだ」
「え……」
そうなるよね。私もそうだった。

「ここと は別の世界で一回死んで、目が覚めたらこの世界にいた。
俺が元々いた世界では、男が性に積極的で、女が性に消極的なんだ」
「そ、そんな……」
「だから最初、目が覚めたときは戸惑ったんだ。女子が裸同然で過ごしてて、性に積極的だったから。でも、みんなと一緒に過ごしていくうちに、慣れてきて、今ではこの世界が大好きなんだ」
「っ……！」
「と、巴……？」
姉さんが零に抱きつく。その目には涙が浮かんでいた。
「零ちゃん……！　零ちゃん……！」
零の事を力強く抱きしめ、頭を優しく撫でる。
姉さんは大号泣している。
「辛い思いさせて、ごめんね……！」
「なんで巴が、謝るのさ……」
「だって、だって……！　私は零ちゃんの、零のお母さんだから……！」
「ふふ……そっか。うん……。そうだね」
零は姉さんを剥がし、目と目を合わせる。
そして、一筋の涙を流しながら――、
「ありがとう。大好きだよ　〝母さん〟」
と、言ってキスをした。
なんか、私まで泣けてきた。

♡　♡　♡

やっちまったぁ～～～～！！！！
人前で泣くとか、何年ぶりだよ！
小学生低学年以来、人前で泣いた事なんてないぞ！
しかも、親族の前でなんて！
恥ずかしすぎるだろ……！

でも、母さんの優しさが、心に染みたんだよな……。
黒乃の時もそうだったけど、無条件で信じてもらえるって、嬉しいんだよな。
誰にも信じてもらえないって思ってたから、今まで誰にも話してこなかった。
でも、黒乃と巴は信じてくれた。そして、優しく受け入れてくれた。
それが嬉しくて嬉しくて。
「「すぅ～すぅ～……」」
俺の右側で巴が。左側で黒乃が眠っている。
「これから、沢山愛していくからな」
俺は二人の頬にキスをして、眠りに就いた。

零と女子達の春休み　⑤（後書き）

【歩美・ユイ】

「んんっ♡　あああ♡　イッグぅぅぅ♡♡♡」
ぷしゃあああああああ♡
ベッドの上で、マンコに極太のディルドを突っ込み、激しくオナニーをして潮を吹きながらイク少女。
Kカップの爆乳が、激しく呼吸をする度にプルンプルンと揺れている。
「はぁはぁ……天城、今ので何回目？」
「はい、お嬢様。今ので十八回目。過去最高記録でございます」
Mカップの爆乳を持つ少女が、ベッドの脇に姿勢正しく立ちながら、質問に答えた。
「そう……。零様に満足していただくには、何回イッても平気な体にならなくちゃいけない。あと十回はほしいわね。天城、入学式まであと何日？」
「来週の金曜日が入学式ですので、後七日です」
「そう。その七日間で頑張らなくちゃ。天城、準備よろしくね」
「かしこまりました」
この二人は、醍醐歩美と天城ユイ。
この春、零達が通う高校に入学する新入生だ。
「待っててくださいね、零様♡　私の虜にしてさしあげますから♡」

次話からついに新章突入！
このお嬢様、醍醐歩美が波乱を巻き起こす！？
新章からもっとエロエロになる「逆転世界・元女子校」をお楽しみに！

第４４話　反感を買った歩美への、ドＭ調教♡♡♡♡（前書き）

ついに『第四章』開幕！

これまで以上にエロくなるストーリーを、お楽しみください！

そして、満を持して登場！
爆乳お嬢様こと、醍醐歩美！
そしてそのお付きの、天城ユイ！

この二人が零とどう関わるのか、そして、どういったプレイをするのか、ご期待を胸にお読みくださいませ！

それでは、本編スタートです！

第４４話　反感を買った歩美への、ドＭ調教♡♡♡♡

「んちゅ……♡　ちゅる……♡　ちゅぱ……♡」
ん……？　なんだ……？　股間に違和感、と言うか、気持ちよさが。
誰かがフェラしてんのかな？
「ぢゅる……♡　ぢゅるるるるる♡」
ん？　この感じは……巴か？　でも、黒乃の舐め方っぽくもあるんだよな。
あれ？　俺って今、どこにいるんだっけ？
「ん……？」
「んちゅる……♡　零ちゃん、おはよう♡」
「零、おはよう♡　朝から零のチンポが味わえるなんて、幸せだな♡」
「そっか。俺、黒乃の家に泊まってたんだっけ」
「ん？　寝ぼけてるのか？　可愛いな♡」
「ねぇ、ずっと気になってたんだけど、零ちゃんに対して使っていい言葉使いじゃないよね？」
「そ、そうだな……すまない、いや、すみません」
「別に気にしなくてもいいんだけど……でも、それを言ったら巴だって俺の前での口調、おかしくないか？」
「あ……そ、そうでしたにゃん♡」
「にゃ、にゃん！？」
「そう。巴は俺の前だけでは語尾に『にゃん』をつける約束なんだよ」
「そ、そうだったんだ……」
「黒乃もつける？」
「っ！？　あ、主がして欲しいのならしてあげたいんだけど、そ、

それはちょっと恥ずかしい……」
黒乃の照れ顔、めちゃくちゃ可愛い。
「いいよ。大丈夫。気にしないで。黒乃は俺に対してしっかり奉仕してくれればいいよ」
「も、もちろんです♡　たっくさんご奉仕させていただきます♡　んちゅ♡」
黒乃は、チンコに愛おしそうにキスをしてくる。
「わ、私もキスするにゃん♡　んちゅる……♡」
黒乃に負けじと、巴もキスをしてくる。
俺から見て左側に黒乃がいて、右側に巴がいる。
両サイドから握られ、さらに両側から亀頭とカリを舐め回される。
こんなの、イクなと言う方が無理だよな。
「出る！」
ビュル！　ビュビュッ！　ビュルルルル！！
「「んひゃ♡」」
間近にあった二人の顔に、精液が噴射されていく。
噴水のように吹き上がった精液は、二人の綺麗で可愛い顔を汚していく。
「零ちゃんの、濃厚オチンポミルク～～～♡♡♡　最高～～～～♡♡♡」
「主の精液が顔中に……♡　精液パック、最高すぎるぃぃ♡♡♡」
精液を顔面で浴びる二人は、嬉しそうに受け止め、さらには、顔中に塗り拡げていく。
少し性欲が落ち着いた俺は、今日の事が気になった。
「今日は金曜だけど、学校だよね？」
「うん♡　今日は入学式で、零ちゃんは進級だよ～♡　三年生だね～♡」
巴が精液を顔だけでなく、体にも塗りたくりながら答えてくれる。
「三年生か……」
「ん？　零、どうした？」

黒乃が、顔中、体中に精液を塗りたくるのを止めて、心配そうに聞いてきた。
「いや、大した事じゃないんだけど。俺、前世で進級前に死んだからさ。なんか、変な感じだなって思って」
「「……」」
あ、やべ。空気壊したな。
「ご、ごめん。変な事言って――」
ぎゅ♡
「ふ、二人とも……？　どうしたの？」
二人が無言で抱きついてきた。
「零、大好きだ」
「零ちゃん、大好きよ」
「ど、どどどどどどどどどどうしたの！？」
急に告白されると、ビックリするんですけど！？
「零の事は、私が守る」
「零ちゃんの事は、私が必ず大事にする」
「「だから、安心して」」
「巴、黒乃……」
俺、この二人の前だと駄目かも。
子供みたいに甘えちゃいそうだ。
「ありがとう、二人とも。俺も二人が大好きだ。俺も、二人の事、守るからね」
「「うん♡」」
俺達は、キスを何度も繰り返した後、学校に行く準備を始めた。

♥　♥　♥

「ねぇ、黒乃。ハメ撮りってどういう感じなのかな？」
私は気になって、黒乃に聞いてみた。
「そうね。スマホやカメラでセックスを撮るんだろうから、カメラ

マン役がいて、その人の前でスるのかもね。あの感じだと零は他の人に言ってないから、私か姉さんがカメラマンになる感じかな」
「なるほどね～。考えただけでめちゃくちゃ興奮してくるわね。あ～、早くハメ撮りしたいわ～♡　零ちゃんとセックスしまくり……♡　ぐへ♡　ぐへへ～♡」
「姉さん、顔がヤバいことになってる」
「黒乃だって、ニヤけてるよ？」
「ニヤけない方が難しい。零とのセックスなんて、考えただけで興奮が収まらないから」
「うん♪　あ、ねぇ、この前電話で話した事なんだけど、どうなった？」
「姉さんの言う事には毎度毎度驚かされるけど、今回のは本当にビックリしたよ。あんな事、本来なら駄目なんだからね？」
「ごめんごめん。で？」
「はぁ～……なんとか通ったよ」
「本当！　ありがとう～♪」
「全く……」
これで、零ちゃんと一秒でも長く一緒にいられる♡

♡　♡　♡

準備を終えた俺達は、黒乃の車に乗って学校に向かった。
俺と少しでも長く一緒にいたいと、巴は家には帰らず同行してきた。
なんだよ、その理由。可愛すぎない？
「よし、到着」
学校に到着した。
教師達が利用する駐車場に車を停めた後、黒乃が声をかけてくる。
「零、先に行っててくれ」
「ん。分かった。じゃあ、行ってくるね、巴」

「うん♡　（また後で♡）」
「ん？」
「ん～ん。行ってらっしゃい♡」
なんか言ってた気もするけど、気にせずに俺は車を降りて下駄箱に向かった。
駐車場から、校門付近に出ると――、
「零様～～～～～～～♡」
「うお！」
後ろから雫が抱きついてきた。
「おはよう、雫。どうした、急に」
「すみません、突然……。零様のお姿を見たら、我慢できなくなってしまいまして……」
「別にいいよ。おっぱいを背中に押し付けてくれれば」
「っ♡　もちろんです♡　沢山押し付けさせていただきます♡」
「あぁ」
ていうか、やっぱり全裸校則は最高だな。
学校の敷地内とは言え、外でも全裸で過ごす女子。エロすぎて堪らない。
「れいれい、おは～♡」
「れー君、おはよう♡」
「零様、おはようございます♡　雫、少し離れなさい」
「先輩、おはようございます♡」
「ご主人様、おはようございます♡」
紗夜、沙耶香、奈央、リサ、鈴音の五人が挨拶をしてきてくれる。
もちろん、全員全裸だ。
「うん、絶景」
と、俺は思った事を口に出してしまっていたらしい。
俺の言葉を受けて――、
『～～～～～～～♡♡♡』
全員が、おしっこを漏らした。

「なぜに？」
「れいれいが突然嬉しいこと言うからだよ～♡」
「幸せ過ぎる……♡」
「零様、不意打ちは、駄目ですよ……♡」
「せ、先輩ぃ～～♡」
「う、嬉ションしちゃいました……♡」
犬かよ、お前ら。
「あ、零様、おはようございます♡」
「おはようございます♡」
「おう、おはよう」
澪と恋も挨拶をしてきてくれる。
こいつらが漏らしてても、全く気にせずに校舎に入っていくなんてやっぱりいい世界だな。
「零様、おはようございます♡　お会いできて幸せです♡」
愛莉が超丁寧に挨拶をしてくる。
お会いできて幸せですって、一昨日も会ったのに、一日会わないだけでそんなになんの？　すごいな。
「零君、おはよう♡　朝から大変だね～♡」
「おう、おはよう。まぁな。幸せな大変さってやつだ」
「やっぱり零君は最高のご主人様だね♡」
全裸で首輪をつけた瑠李が、声をかけてくる。
その隣には、姉ちゃん、燐、桃がいた。
「お兄ちゃ～～～ん！　会いたかったです～～！」
「お～よしよし。会えなかった分、後でたんとイジメてやるからな～」
「ありがとうございます～～～♡♡♡」
燐が半泣きになりながら、抱きついてきた。
可愛い妹め。頭を撫でてやると嬉しそうに顔を俺の胸に擦り付けてきた。
「零ちゃん、ネクタイズレてるよ♡」

「ありがとう」
姉ちゃんが、ネクタイを直してくれる。
姉ちゃんのおっぱい、やっぱいいな。
「私のおっぱい、好き？」
「あぁ。めちゃくちゃ好き」
「ありがとう♡」
「兄さん、おはようございます♡　今日もかっこよくて、素敵です♡」
「おはよう。桃も可愛いよ。その首輪も似合ってる」
「っ♡　ありがとうございます……♡」
さて、ここで話してもいいんだけど、そろそろ教室に向かうか。
「零様、おはようございます♡」
「おぉ、真耶子。おはよう」
「そろそろ入学式なので、申し訳ないのですが……」
「あぁ。ごめんな。ほらみんな、行くぞ」
『は～い♡』
俺達は移動を開始しようとした。
その時だった。後ろから声をかけられたのは。
「零様～～～！」
その声に、その場にいた全員が後ろを振り返る。
すると、そこにはレッドカーペットがいつの間にか敷かれていて、校門前にはよくアニメやドラマで見る真っ黒なリムジンが停まっていた。
そして、レッドカーペットの上に立つ、金髪の巻き髪ツインテール女子が立っていた。
服の上からでも分かる爆乳をブルンブルン揺らしながら、こちらに近づいてくる。
その後ろには、メイド服のようで少しスポーティーな服を着た、これまた爆乳のショートカット女子がいた。
灰色のショートカットで、左目が隠れている。中二病かな？

「君は？」
俺が尋ねると、そいつは俺の目の前で立ち止まり、自己紹介を始めた。
「零様、お初にお目にかかります！　私は醍醐歩美と申しますわ♡
貴方様に会う為に、海外留学から帰ってきましたの♡」
「は、はぁ……」
「それにしても、零様が可愛そうですわね」
「え？」
こいつは急に何を言い出してんだ？
「こんな貧相で華もない、エロさの欠片もない女どもに囲まれてるなんて、可哀想すぎますわ」
こいつ、何言ってんだ……？
「胸も小さく、お尻も小さい。こんなんじゃ、パイズリでも素股でも、オマンコでもアナルでも零様のオチンポ様を気持ち良く、満足させるなんてできっこありませんわ。こんな女どもに囲まれるだなんて、零様の価値が下がってしまいます」
「な、なんなの、この子……」
「なんで急に現れて、急に悪口を言われてるんでしょう……？」
瑠李とリサがが呟く。
いや、本当にそうなんだよ。なんなんだよこいつ。
いきなり現れて、俺の大事な女達の事を悪く言うなんてさ。
「しかも、顔もそこそこ。可愛くもなくエロくもないなんて、零様のお側にいる資格はありませんわ。私の方が、零様にふさわしい一番の女ですわぁ♡」
……あ～これ駄目かも。結構限界。
「れ、れー君の顔、怖くなってきてる……」
「あれ、ガチで怒ってるやつだ……」
「それに～――」
バチィンッッッッッ！！！

『っ！？』
「れ、零、様……？」
醍醐歩美だっけか？　は、左頬を押さえながら尻もちをついている。
俺は見下ろしながら――、
「テメェ、さっきから黙って聞いてりゃ、何好き勝手言ってくれてんだ、あぁ！　俺の女達が可愛くない？　エロくない？　ふざけんなよ！　ここにいる俺の女達は全員、そんじょそこらの女よりも可愛いし、エロいんだよ！　お前なんかより数倍な！」
俺は声を張り上げ、醍醐を叱責する。
「テメェみたいな女に会いに来られても、全ッ然嬉しくねぇんだよ！　傲慢な高飛車女がぁ！」
はぁはぁ……。俺、こんなに声を荒げたの人生で初めてなんだけど。
しかも女の子に。でも、この女は許せん……！
初めて、ここまでの怒りが湧いてきた。
「真耶子、俺、入学式パス」
「はい」
「おい」
「は、はい……！」
「ついてこい」
「え……」
「いいから来いっ！」
「は、はい……！？」
俺は醍醐の胸ぐらを掴み、乱暴引っ張り、学校を出た。

♥　♥　♥

「め、めちゃくちゃ怖かった……」

兄様が怒った所、初めて見たけど、ものすごく怖かった。
それこそ、チビッちゃうんじゃないかと思うくらいに。
「れー君、すごく怒ってた……」
「うん……れいれい、あんなに怒る事あるんだね……」
「私が怒らせちゃった時と、全然怖さが違った……ご主人様は、あの時はまだ優しかったんだ……」
「うん……私と鈴音の時は本気で怒ってる訳じゃなかったんだよ……」
「零様、あの子をどうするんだろう……」
「罰を与えるんじゃない？　零様の怒りを買ったんだから」
「あ、理事長に事情を話さなきゃ！　ほらみんな！　教室行くよ！　入学式始まるから」
『はい』
私達は、兄様の事を心配しながらも、教室に向かった。
兄様、手加減だけはしちゃ駄目ですからね。

第４４話　反感を買った歩美への、ドＭ調教♡♡♡♡（後書き）

零の怒りを買ってしまった歩美。
零は歩美をどこに連れて行くのか？　タイトルのドＭ調教とは？
気になる続きは次話へ！

次話は来週の金曜に投稿致します！

第４５話　歩美へ怒りのスパンキング調教♡♡♡♡

俺は醍醐の胸ぐらを掴み、強制的に引っ張りながら自宅に向かっていた。
だが、その後ろから灰色ショートの女子がついてくる。
「おい、お前はなんなんだ？」
「自己紹介が遅れてしまい、申し訳ございません。私は歩美お嬢様に仕える、使用人兼メイド兼執事の天城ユイと申します」
爆乳を揺らしながら、お辞儀をして挨拶をしてくる天城。
「そうか。だとするなら、このお嬢様は教育がなってねぇな。人の大事な女をいきなり馬鹿にするなんてよ」
「はい。ごもっともでございます。ですので、零様に躾けていただけたらと」
「俺の躾は厳しいぞ？」
「はい。存分に厳しくなさってください。それはもう、お嬢様が泣き叫ぶほどに」
「ちょ、ちょっと天城！？　勝手に何を言ってますの！？」
「おい、クソ女は黙ってろよ」
「ひっ……！？　は、はい……」
俺が醍醐を睨みつけると、醍醐は引きつった顔を浮かべて黙り込んだ。
「これから俺の家に向かう。そこでこの女を躾けるから、お前も手伝え」
「はい。仰せのままに」
そうして俺達は、家へと向かった。

♥　♥　♥

零様に胸ぐらを掴まれ、強制的に連行されている歩美お嬢様。
そして、口調が荒く、怒りに満ち溢れた零様。
素敵すぎます♡
もう興奮しすぎて、オマンコがビショビショです♡
私もいつか、零様に物のようにぞんざいに扱っていただきたい……♡
お嬢様に飽きたり、使い物にならない時に、性欲のはけ口や、椅子などの道具として使っていただきたい……♡
そのためにはまず、零様と共に歩美お嬢様を躾けなければ。

♡　♡　♡

家に着いた俺は、玄関を通り、リビングへ。
そして――、
「おい、天城。こいつの服を脱がせるのを手伝え」
「零様がよろしければ、服を引き裂いていただいて構いません」
「そうか？　なら遠慮なく！」
「キャーーー！？」
俺は、醍醐のブラウスを思い切り引きちぎる。
やはりブラをしていないので、爆乳がすぐに顔を出す。
円錐形のおっぱいで、乳首も乳輪も濃い色をしている。
「ほら、こっちも！　天城、押さえとけ！」
「はい」
俺は天城に指示をして、醍醐を拘束させる。そして、制服のスカートを引きちぎり、パンツを露わにさせる。
「へぇ～エロいパンツ穿いてんじゃん」
「れ、零様に見ていただきたくて……。あの、せめてパンツだけは普通に脱がせてはいただけませんか……？　そのパンツ、お気に入りでして……」
「そうなのか。だが、知らん！」

俺は醍醐の言葉など無視し、パンツを引きちぎる。
あっという間に、醍醐は全裸になった。
「うぅ……」
醍醐は目元に涙を浮かべている。
なんでだろう？　こいつが泣いてても全く可哀想とか申し訳ないとか思わない。
むしろ、もっとイジメたくなってくる。
「ほら、こっち来い！」
「キャッ！？」
俺は、醍醐の腕を思い切り引っ張り、庭に乱暴に放り投げる。
醍醐は、全裸のまま庭で横転する。
「れ、零様……わ、私の非はお詫び致しますので、どうか、どうかお怒りを鎮めてはいただけないでしょうか……！？　ら、乱暴はしないでくださいませんか……」
「そう言いつつお前、濡れてるぞ？　乱暴にされて、興奮してんだろ？」
「っ！？　そ、それは……」
醍醐は、土下座をして懇願してくるが、マンコがすでにグッチョグチョに濡れまくっており、興奮している事が丸わかりだった。
「今からお前には、厳しい躾をする。泣いても喚いても無駄だ。ここにお前を助けてくれる者は誰もいないからな。お前はただ、俺に蹂躙されるのを受け入れるしかない」
あれ？　なんか俺悪者っぽくなってね？
「（零様の悪者台詞、堪りません……♡　言葉だけでイッて、潮を吹いてしまいそうです……♡）」
後ろで天城がなんか言ってるけど、小さすぎてよく聞き取れんかった。
でも、俺は例え悪者になったとしても、この女を躾けなきゃ気が済まない。
この女だけは、絶対に許せない。例え、ここで人生が破滅しよう

とも、俺は止まらない。
『君の人生が破滅する事は絶対にないから、安心して躾けて大丈夫だよ～。暴力でもなんでも、好きなようにしちゃって～』
また、この謎の声だ。一体誰なんだろうな？
まぁ、でも。今の俺には救済の声だ。
遠慮がいらないなら、思いきりいかせてもらうぜ！
「れ、零様……お、お顔が怖いです……」
俺は、醍醐にジリジリとゆっくり近づいて行った。

♡　♡　♡

「ひっ！？　んっ！？　あっ！？　あああ！？」
俺は今、醍醐のケツを何度も何度も叩いている。
スパンキングと言うやつだ。
膝立ちにさせて、上半身は地面に突っ伏させて、手は後ろ手にして拘束して、突き出させた状態のケツに俺は連続で平手打ちをする。
すでに醍醐のケツは真っ赤になっており、おそらく明日はめちゃくちゃ腫れるであろう感じだ。
だが、今の俺にそんな事は関係ない。
と、俺がスパンキングを続けていると――、
「零ちゃん！」
「巴。どうした？」
巴が、慌てた様子で帰ってきた。
「はぁはぁ……帰ったって聞いたから、何かあったのかって心配になっちゃって……でも、零ちゃんに何かがあった訳じゃないのね？」
「うん。心配かけてごめんね」
「ううん。安心した。調教中にごめんね？　私ももう家にいるから、必要な物があったらなんでも言って」
「じゃあ、バイブとかローターとか電マとか、玩具貸してくんない？」

「うん、いいよ。まだ使ってない新品があったはずだから……取ってくるね」
「うん」
巴は部屋に向かった。
「おい、天城」
「はい」
「あの人は俺の大事な母親で、俺の女だ。くれぐれも失礼のないようにな。もし巴に逆らったり、何かしたりしたら――」
「あああああああああ！？！？！？」
俺は醍醐のケツを、左手でつねり、右手で叩く。
「お前もこうなる」
「はい。畏まりました」
天城は、従順だから、色々とやりがいがありそうだな。

♡　♡　♡

「あああああ！　あああああ！」
俺はもうすでに、百発以上はケツを叩いていると思う。
なんでずっとスパンキングをしているのかと言うと――、
「ほら。さっさとイカねぇとずっとこのままだぞ？」
スパンキングのみでイク体に調教してやろうと思って、ずっと叩きまくってる。
巴もその様子を楽しそうに見ていて、天城と好きなプレイについて話したりしている。
「む、無理ですぅぅ……！？　あああああ！　叩かれただけでイクなんて、あああああ！！　無理ですぅぅ……！？　あああああああ！！！」
「無理じゃねぇ、やるんだよ！！　オラァ！」
「あああああああああああああああ！！！！！！」
元々スパンキングは好きだったけど、こうして調教として叩くの、

マジで楽しい。
「マンコも乳首も触らずに、叩かれただけでイク、ド変態ドM女になるんだよ！　オラ！　オラ！　オラァ！」
「あああああああああああああ！！！！！　な、なんかくる……！？　くる、くる、きちゃうぅぅ！！！　イッグぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！」
ぷしゃあああああああああああ♡♡♡
「あああああああああああ……！　あっ……♡　あああ……♡」
醍醐は、どうやらイッたらしい。しかも、潮……これは尿か？
失禁しながらイクとか、どんだけだよ。
「おいおい。これはどういう事だ？　叩かれただけでイクなんてできないんじゃなかったのか？　イッただけじゃなく、失禁までしてんじゃねぇか。おい、どう説明すんだ？」
「こ、こりぇは……」
呂律が回ってない醍醐は、上半身を力なく地面に突っ伏しながら、言葉を紡ごうとしている。
「どういう事かって、きい！　てん！　だ！」
「あっ！　ああ！　あああんっ！♡！♡」
「悲鳴と喘ぎが混じってんぞ！　このド変態がぁ！」
「あああああああああああ♡♡♡♡♡」
ついに、悲鳴ではなく、喘ぎ声だけになった。
スパンキング調教は大成功かな？
「よし」
「お、終わり、でしゅか……？」
「何ホッとしたような表情を浮かべてんだ？　スパンキングの調教は終わりだが、調教自体はまだ始まったばっかりだ。どんどんやってくぞ」
「しょ、しょんにゃぁ～……」
ちょっと可愛いと思ってしまったが、この女に情や慈悲は無用。
徹底的に調教してやる！

第４５話　歩美へ怒りのスパンキング調教♡♡♡♡（後書き）

次回予告！

「んぶぅ！？　んぐぅ！　んぶぅ！！」

歩美の口をまるでマンコのように犯しまくる零。

「お前の口は、精液を飲む為にある精液吸引器だ！　ありがたく飲み干せ！」

性奴隷、性欲処理係、ペットなど、様々な主となってきた零。

そんな零に新たな『モノ』が！

「わりゃしは、零しゃま専用の『モノ』でしゅ～～～♡♡♡♡♡」

次回

『無遠慮イラマの連続大量射精で、喉奥調教♡♡♡♡』

お楽しみに！

第４６話　無遠慮イラマの連続大量射精で、喉奥調教♡♡♡♡

「はぁはぁ……」
「ほら、休んでる時間はないぞ？　次は喉奥の調教だ」
「の、喉奥、でしゅか……？」
「あぁ。お前の喉は俺の精液を飲む為にある。それを分からせてやる」
「れ、零様の精液……♡」
「嬉しそうにしている暇はないからな。普通にフェラをさせたりなんてしない、ぞっ！」
「んぶぅ！？」
俺は、いきなり醍醐の口にチンコをぶち込んだ。
「ぐぎゅぅぅぅ！？　ぎゅぼっ！？　ぎゃぼっ！？」
俺は、醍醐の頭を押さえながら腰を思い切り振り続ける。
「んぶっ！？　ぐぶぅ！？　ぐぐぶぅ！？」
あ～これヤバい。口を犯してる優越感がやばくて、もうイキそう。
ま、この女に遠慮なんて何もいらないから――、
「うっ！」
ビュル！　ビュルルルルルルルルルルルル！！！
「んんぶぅ！？　んんっ！？　ごくごく……！？」
俺は、醍醐の口の中で暴発した。いやさせた。
醍醐の喉奥に、ドロドロの濃い精液を叩きつけてやる。
「んんっ……」
飲み込めないのか、醍醐の口からは精液がこぼれ落ちる。
「あーーーーー！？」
それを見て、巴が声を上げる。
「零ちゃんの精液をこぼすとか、あなた、それでも女なの！？　零ちゃんの精液はね、こぼさず全部飲まなきゃいけないのよ！　出し

てもらえるのが、どれだけありがたくて貴重な事か！　聞いてんの！？」
「うっ……！？」
俺がチンコを口の中に突っ込んだままにしていると、巴が近づいてきて、醍醐の頬を平手打ちした。
ビンタをされた事で、醍醐の口からチンコが抜け、醍醐は体勢を崩した。
俺は射精が止まっていなかったので、口から抜けた事で巴の足に精液がかかった。
「んふ～♡　零ちゃんのぶっかけ～♡　最高～♡」
「巴……今日はこの女を調教しなきゃいけないんだ。怒ってくれるのは嬉しいけど、我慢してくれ」
「む～～」
「巴」
「ふ～……。は～い。分かりました。零ちゃんを怒らせたくないから言う事聞きます」
「うん」
巴は、渋々窓際に戻っていった。
全く。巴には困ったものだ。可愛いけど。
「ほら、何休んでんだ」
「ま、まっへくらはい……喉に、精液が……」
「だからなんだぁ！」
「んぶぶぅぅ！？」
俺は、醍醐の髪の毛を力強く引っ張り頭を上げさせ、口に思い切りチンコをぶち込んだ。
「んぶぉぼぉぉぉ！？　ぐぶぶぅぅ！？　ぐぼぼぉぉ！？」
ばちゅ！　ばぢゅ！　ばちゅ！　ぶぢゅ！
俺が腰を振る度に、ドエロい音が庭に鳴り響く。
あ～これやばい。また――！
「出る！」

ビュビュビューーーーーーー！！！　ドビュルルルルルルルル！！！
「んんんーーーー！？　ぎゅぶぶぶ！？」
先程よりも多く濃い精液を、大量に喉奥に叩きつける。
量も多く、濃度も濃い精液はかなり飲みづらいのか、醍醐は先程よりも多く精液をこぼしてしまう。
「おいおい、何こぼしてんだ！」
「んぶっ！？」
俺は、醍醐にビンタをする。それによりチンコが抜ける。
「ごほごほ……ぐふ……はぁはぁ……」
「なぁ、なんで全部飲み干さない？」
「りょ、量が多くて……濃くて……上手く、飲み込めなくて……」
「お前さ。いつまで人間のつもりでいるの？」
「え、え……？」
「お前に人権はない。お前はモノで奴隷で俺の精液吸引器だ。俺の精液を浴びて飲んでイジメられる、ただそれだけの存在だ」
「そ、それは……」
「そんな奴が、精液を全部飲まずにこぼすとか、ふざけんなよ。なぁ！」
「あっ！？」
俺は、醍醐に連続でビンタをする。
「ほらほらほら！」
「うっ！？　あっ！？　くっ！？」
醍醐の頬は真っ赤になっていく。
「さぁ、これ以上ビンタされたくなかったら、どうすればいい？」
「せ、精液を、こぼさず、全部、飲み、ましゅ……」
「あぁ。じゃあ、しろよ」
「は、はい……！　ぎゅぷぷ……！」
醍醐は自分から俺のチンコを咥えてくる。が、フェラはさせない。
今日は調教だからな！

「ふん！」
「ぎゅぶぅぅぅ！？」
俺は、醍醐の頭を掴み、思い切り動かす。
今度は腰ではなく、醍醐の顔の方を動かす。
これで逃げることはできない。
「ぎゅぶっ！？　じゅぶっ！？　じゅぼっ！？　じゅぶっ！？」
「出すぞ！　全部飲めよ、吸引器がぁ！」
「ぎゅぶっ！？」
ビュルルルルルルルルルルル！！！　ビュビュビューーーーーーーー！！！！！
「ぐぶぅ！？　ぎゅぎゅーーー……！？」
俺は、大量の精液を喉奥に叩きつける。

♥　♥　♥

さ、三回目の射精きた……！？
さ、さっきまでの精液よりも濃くて、量が多い……！
でも、これを飲み込まないと、また怒られる……また叩かれる……！
でも、叩かれるのも気持ちいいから、叩いてもらうために……。
「おい。ちゃんと飲み干せよ？」
「ぶぁ、ぶぁい……！」
そうだ。ちゃんと飲み干さないと……！
零様にお許しいただく為に！

♡　♡　♡

「ふぅ……」
「ごくごくごく……はぁはぁ……」
醍醐は、俺の精液を全部飲み込んだ。

「ようやく飲み干せたか」
「はぁはぁ……」
相当キツかったのか、醍醐は喋れずにいた。
「喉奥調教はこのくらいでいいか。……うぅ～。おい、こっち向け」
「ふぇ？　わぷっ！？」
ぷしゃあああああああああ！！！
俺は、醍醐の顔面に放尿する。
許可など得ない。許可なしの無遠慮尿ぶっかけ。最高すぎる。
「わぷっ……わっぷ……わっぷぷぷ……」
醍醐は、呼吸をしたいのか口を開ける。だが、口を開けるとおしっこが口の中に入ってきて上手く呼吸ができない。
「いいなぁ～……私も零ちゃんのおしっこ飲みたいな～」
「今度巴にも飲ませてやるよ」
「本当！」
「あぁ」
「やった～～～！」
ふふ。俺のおしっこが飲めるだけでそんなに喜んでくれるとか、嬉しすぎるだろ。
醍醐の顔、全身は、俺のおしっこで染められていく。
「ふぅ～。どうだった？　俺の味は」
「ごくん……とても、美味しかったです……♡」
「そうか。お前はこれからは便器でもある。だから俺のおしっこを飲むこと。いいな」
「はい……♡」
「さてと、じゃあ次は……」
「ま、まだあるんですか……？」
「当たり前だろう？　一日は、長いんだ」
俺は、次の調教を開始する事にした。

第４６話　無遠慮イラマの連続大量射精で、喉奥調教♡♡♡♡（後書き）

次回予告！

「あああああああああ！」
「勝手にイクなよ？」
「む、無理ですぅぅぅ！！！！」

何度も何度も寸止めする零。イキたくてもイケない歩美。

「ほら、後一時間我慢だ！」
「あああああああああああああああ！？」

歩美が壊れる！？

次回
『長時間寸止めで、絶頂管理調教♡♡♡♡』
お楽しみに！

第４７話　長時間寸止めで、絶頂管理調教♡♡♡♡（前書き）

【陳謝】

皆様、申し訳ございません……！
本文がかなり短くなってしまいました……！
もしかすると、過去一短いかもしれません……！
次の話ではもう少し長くしたいと思っております……！
消化不良的に感じてしまうかもしれませんが、お楽しみいただけますと、幸いです……！

※この続きを、明日または日曜日に投稿できたらなと思っております……！
（活動報告は無しにさせていただきます……！）

第４７話　長時間寸止めで、絶頂管理調教♡♡♡♡

「零ちゃん、次は何するの～？」
「次は、寸止め地獄調教をする」
「素敵でございます、零様」
「しゅ、しゅんどめ！？」
俺の言葉に、天城は微笑み、醍醐は呂律の回らない口で驚きの声を上げた。
「天城、手伝え」
「はい。拘束すればよいのですね」
「あぁ。手を頭の上に上げておいてくれ」
「畏まりました」
天城は、俺の言う通り、醍醐の両手を頭の上に上げ、押さえつける。
「ちょ、ちょっろ！　天城、はなひなひゃい！」
「お嬢様、それはできません。大人しく壊れてください」
「天城ぃ！　あんら、覚えてなひゃいよ！」
「うるせぇよ！」
「ぎゅっ！？」
俺は、ごちゃごちゃと叫ぶ醍醐の頬を叩く。
「今から寸止め調教だ。俺がいいって言うまで、絶対にイクなよ？」
「ひゃ、ひゃい……」
俺は、醍醐への調教を開始した。

♡　♡　♡

ぐちゅ♡　ぐちゅ♡　ぐちゅ♡　ぐちゅ♡　ぐちゅ♡
びちゃ♡　びちゃ♡　びちゃ♡　びちゃ♡　びちゃ♡

ばちゅ♡　ばちゅ♡　ばちゅ♡　ばちゅ♡　ばちゅ♡

「んっ！　んっ！　んんーーーーーー！」

俺は、醍醐のマンコを乱暴に激しく責め立てる。

醍醐のマンコはめちゃくちゃに濡れており、膣を弄る度に、愛液が溢れ出し、どエロい音が鳴る。

さらに、愛液と本気汁がまるでおしっこかのごとく外に飛び出してくる。

「あっ！　あっ！　だめだめだめ！　もう、イッちゃう……！」

膣がめちゃくちゃ締まってくる。イキそうなのが分かる。だが――、

「はい、だめ～」

「んんーーーーー！？　っ！　っ！　っ！」

俺がイクギリギリの所で指を抜くと、醍醐は足をガクガク震わせながら腰を浮かせた。

ちなみに、足は巴が強制的に開かせており、強制M字開脚をさせられている。

「はぁはぁ……」

「お嬢様、素敵です」

「零ちゃんに乱暴してもらえるなんて、ありがたいと思いなさいよ？」

「まだ始まったばかりだからな。まだまだいくぞ」

「ひゃ、ひゃい……！？」

♥　♥　♥

も、もうどのくらいの時間が経ったのだろう……。

「あああああ！？　も、もうイギゅ……！？」

「はいだめ～」

「んんーーーーーーーーーーーー！？」

私はもう数時間以上、寸止めをされている。

足も押さえられているので、閉じたくても閉じれなくて、快感を逃す事ができない。
マンコ、クリ、Gスポットを全て責めてくるので、イク感覚がどんどん短くなってくる。
「あと一時間我慢だ！」
「む、無理ですぅぅぅ！？」
「無理じゃねぇ！　我慢すんだよ！」
「あああああああああああああああああああ！？」
も、もう、無理……。私、壊れる……。

♡　♡　♡

「お？　口から泡吹いて白目剥いちゃった」
巴がそう実況する。
巴のそれを聞いて、俺は醍醐を見る。
と、本当に口から泡を吹いて、白目を剥いてしまっていた。
「や、やり過ぎたか……？」
「零様。お気になさらないでください。弱いお嬢様が悪いのです」
「そうだよ～。零ちゃんは優しくしてくれてるのにこのくらいで気を失うなんて、この子、情けないね～」
二人はそう言ってくれる。そう言ってもらえると助かるな。
「どうすっか……。気を失ってたら調教ができないもんな」
「このまま庭で拘束して、放置する？　それともリビングかどこかに拘束する？」
「う～ん……天城、どっちがいいと思う？」
「そうですね。お庭に放置でいいと思います。お嬢様様は勝手に気を失いました。なので、そのお仕置きも兼ねないといけないと思いますので」
「そっか。じゃあそうするか」
「はい」

天城と巴の二人が、庭にある木にロープで手を吊るし、常に立っているようにした。
「こうして見ると、かなりすごい光景だな……」
本当に平気なんだよな……？
『大丈夫だよ～。君がやる事はなんでも許されるからね～』
またこの声……。そっか。じゃあいいか。
「あいつが目を覚ますまで、俺はちょっと寝る。疲れた」
「うん。ゆっくり寝て♡　あれだったら私添い寝しようか？」
「そうだな。巴、一緒に寝よう」
「うん♡」
「天城、監視しとけ」
「はい。畏まりました」
俺は天城に言いつけ、巴と共に部屋に向かった。
そして、一緒にベッドで眠ることにした。

第４７話　長時間寸止めで、絶頂管理調教♡♡♡♡（後書き）

次回予告！

「れ、零、様……」
「お前は俺の『モノ』だ。いいな？」
「ひゃ、ひゃい……❤」
「よし。じゃあ、我慢させた分、イカせてやる」
「ほ、本当、れすか……？」
「あぁ。死ぬほど、な」

零の調教はラストスパートへ！
吊るした歩美を連続絶頂させ、体と心を支配する！

「ぶっ壊れろ！」

次回
『醍醐歩美、零に超絶服従で陥落♡♡♡♡』
お楽しみに！

第４８話　醍醐歩美、零の超絶服従で陥落♡♡♡♡（前書き）

前話の続きのお話となっております！
歩美への調教回、最後の回となっております！

零のものに堕ちて行く様、楽しんでいただけますと幸いです！
次話からまた、他の女子達とのエッチを書いていきたいと思いますので、楽しみに待っていてください♪

次話は来週の金曜日になってしまうと思います……！
すみません……！

（活動報告は無しにさせていただきます……！）

第４８話　醍醐歩美、零の超絶服従で陥落♡♡♡♡

「ふわぁ～……」
俺は、自室のベッドの上で目を覚ました。
「ん～……むにゃむにゃ……」
「ふふ」
隣では、全裸で眠る巴がいた。
なんで全裸かって？　そんなの決まってる。寝る前にセックスしたからだ。
巴とのセックスはとても気持ちいい。
中出しした後も離してくれないので、困ったものだ、ふふん。
コンコン。
「ん？　どうぞ」
「零様、お休みの所、申し訳ありません」
「いや、大丈夫だ。ただ、巴を起こしちゃ悪い。廊下に行こう」
「はい」
俺はベッドから降りる。
「っ♡」
天城は、俺のチンコを見て頬を赤らめた。
「どうした？」
「あ、い、いえ……零様のおちんちん様がお素敵で……♡　その素敵なおちんちん様で貫かれたいと――こほん！　なんでもありません。こちらへ」
「あぁ」
俺達は廊下に出る。
「んで？　どうした」
「はい。お嬢様がお目覚めになられましたので、ご報告をと」
「そうか。よし、じゃあ調教を再開しよう」

「はい」
俺は裸のまま、一階へと降り、庭へと向かった。
♡　♡　♡
「はぁはぁ……」
「お～。いい眺め。どうだ、気分は」
俺は室内から、庭の方に声をかける。
庭の木には、両手を吊るされた醍醐が全身を震わせていた。
「れ、零、しゃま……」
意識が覚醒しきってないのか、俺の訪ねに答えない醍醐。
「おい、お前――」
俺が答えろよ、と言おうとすると――、
「お嬢様ぁ！！！　零様がお聞きしているのです！！　さっさと答えなさぁぁぁいっっ！！！！！」
「「っ！？」」
俺の隣に立っている天城が、めちゃくちゃデカい声で叫んだ。
お前、そんなデカい声出せたんだ……。
「き、気分は……不思議なほど、いいです……」
「だ、そうです。零様」
「お、おう……じゃあ、調教も最終段階だ」
俺は、裸のまま庭に降りる。そして、醍醐に近づいて行く。
「お前は俺の『モノ』だ。俺に逆らったり、歯向かったり、偉そうな口を叩いたりはするな。そして、俺の女達にも、舐めた口を利くな。お前は『モノ』なんだから立場は一番下だ。天城よりも、な」
「あ、天城よりも……」
「この意味、分かるよな？」
「は、はい……」
「じゃあ、最後の調教、始めるぞ」
「は、はい……」

「天城、アレ持って来い」
「畏まりました」
俺の指示を受け、天城は箱を持ってくる。
「お待たせいたしました」
「あぁ。そら、行くぞ！」
「んひゃあああああああああ！！！」
俺は、箱の中からバイブを取り出し、マンコの膣（なか）にぶっ刺す。
一気に奥までぶっ刺したので、醍醐はとんでもない声を上げる。
「んんーーーーー！？　んー！　んー！」
口からよだれを垂れ流しながら、快感に耐えている。
「ふっ。（もう我慢しなくていいぞ？　イケ）」
「っ～～～

なので、ずっとロープがギシギシと鳴っている。
「ほら、何耐えてんだ？　もう我慢なんてしなくていいんだぞ？
イケよ。ほら、イケよ！」
「あああああああ

瑠李！　華、燐、桃！　巴、黒乃！　紗夜！　沙耶香！　雫！
奈央！　リサ！　真耶子！　鈴音！　愛莉！
ほんでなぜか澪と恋もいる！
天城ももちろんいる。
「零様、申し訳ございません。私達まで参加してしまって……」
澪が謝ってくる。恋も澪と共に頭を下げてくる。
「気にするな。二人も俺の大事な女だ。参加してくれて嬉しいよ」
「「っ♡♡♡」」
二人は顔を真っ赤にして、俯いた。
「でも、零君の調教はすごいね。完璧に堕ちてるね」
「ん？　あぁ、だろう？」
瑠李は、俺の下を見てそう言う。ちなみに、瑠李は全裸で首輪をしている。いつものペット状態だ。
「兄さんに逆らった罰。身を持ってもっと知っていった方がいい」
「お兄ちゃんに逆らうなんて、本来なら死刑なんだよね。生きてるだけありがたいと思わないとね」
「零ちゃんの優しさに、感謝ね～」
桃、燐、華の三人が、俺の下を見て怒りを混ぜながらそういう。
他の人達も、俺の下を見ながら怒りを露わにしている。
俺の下に何があるのか。それは――、
「どうだ？　俺の『椅子』になった気分は」
「さ、最高ですぅ♡」
そう、醍醐がそこにいたのだ。
醍醐は、俺の『モノ』。人権は与えない。
瑠李達だってペットだったりなんだったり人権がないような扱いをしているが、醍醐は本当に人権を与えない。
こいつは俺の椅子で、精液吸引器で、肉便器だ。
「おい、ケツこっち向けろ」
「はい♡」
俺は醍醐の上から降りて、命令する。

そして、醍醐は俺の方にケツを向ける。アナルを自分でおっぴろげながら高く突き上げる。
何をするのかと言うと――、
「よいしょ」
「んひゃあああああああああ♡♡♡」
俺はチンコをアナルにぶち込む。そしてそのまま――、
ぷしゃあああああああああああああ！
「んひゅうううううううううううううう♡♡♡」
アナルに放尿した。
「ふぅ～。天城」
「はい」
俺がチンコを抜くと、天城が間髪入れずにバイブをアナルに刺し、蓋をする。これで醍醐のアナルから俺の尿が溢れ出る事はない。
「お、お腹に零様のおしっこが溜まってます……♡　幸せですぅ……♡」
「ほら、綺麗にしろ」
「はい……♡」
俺は、醍醐にお掃除フェラをさせる。
そして綺麗に舐め取らせた後――、
「う～ん……澪、舐めろ」
「はい♡　ありがとうございます♡」
周りを見渡し、澪を指名する。そして、フェラをさせる。
それを見て、みんなは羨望の目を向けるが、すぐにパーティーに戻る。
「うん。こういう日常の中でしてもらうフェラ。最高だ」
俺はこの非日常感が大好きだ。
前世だったら絶対にできない。マジで幸せだ。
「恋、君も加われ」
「は、はい♡　よろしくお願いします！」
俺は恋も呼び、ダブルフェラをさせる。

大乱交パーティーはしなかったが、最高に楽しい時間になった。
醍醐は完璧に堕ちたが、いつ反逆するか分からない。だから、この家に住まわせて、徹底的に堕としていく。
ふっ、ふふ、ふふふふふふふふ！　ふはははははははははは！
俺、いつから悪役に目覚めたんだろうか？

♥　♥　♥

【天城　ユイの日記】
今日、私がお仕えするお嬢様が、零様に調教され完璧に堕とされました。
堕とされていく様は、とても刺激的で素敵なものでした。
スパンキング、寸止め、放置、地獄イキ、椅子化。アナル放尿バイブ栓。とても羨ましかったです。
私もいつか、零様に調教していただきたいです。
お嬢様よりも乱暴に、乱雑に、暴力的に調教していただきたいです。
私は、零様のお母様のお部屋にお世話になっています。お嬢様は零様の部屋で道具として側にいらっしゃいます。
しっかりとお勤めを果たすようにしてくださいね、お嬢様。

「さて、そろそろ寝ますかね。あまり遅いと、明日の朝に響きますからね」
それでは、お嬢様、零様、お休みなさい。

♥　♥　♥

私は醍醐　歩美。私は今、零様の足置きになっている。
「おい、動くなよ。漫画がズレんだろう」

「は、はい……！　すみません……！」
少し腰を動かしてしまった。
すると、零様の足が少し動いてしまい、お読みになっている漫画が少しズレてしまった。
それに対して叱責されてしまった。
「お前は俺の指示がない限り、一切動くな。分かったな」
「はい……！」
私はもう、零様無しじゃ生きていけないと思う。
零様の指示、命令、暴力がないと、もう何もできない。
私は完璧に零様に堕とされてしまった。
私は、身も心も全て零様に堕とされた。
私は、とんでもない事をしてしまった。
この身を持って、一生をかけて償っていかなきゃと思っている。
零様に全てを捧げ、零様に服従する。
「動くなつってんだよ！」
「ぐっ……！？　す、すみません……！」
腰に踵落としをされる。それが、とても心地良い♡
私はもう、零様の下僕です♡♡♡
これから、よろしくお願いします……♡

第４８話　醍醐歩美、零の超絶服従で陥落♡♡♡♡（後書き）

次回予告！

「零ちゃん、これ、結構恥ずかしいね……♡」
「主、興奮しますか？」
「あぁ。最高だ！」

ついに始まる、零と巴、黒乃のハメ撮り！
零専用のＡＶ制作が、今、始動する！

次回
『巨乳双子と、性癖爆発のハメ撮り♡♡♡♡』
お楽しみに！

第４９話　巨乳双子と、性癖爆発のハメ撮り♡♡♡♡（前書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！

少しでも楽しんでいただけますと幸いです！

（活動報告はなしにさせていただきます……！）

第４９話　巨乳双子と、性癖爆発のハメ撮り♡♡♡♡

「ふわぁ～……」
「あ、おはよう。零ちゃん」
朝、起きるには早い時間に一階に降りると、巴がいた。
「おはよう、巴。早いな」
「うん。ちょっと目が覚めちゃって。零ちゃんも早くない？　今日は学校お休みだから、ゆっくり寝てていいんだよ？」
「うん。そうなんだけどなんか目が覚めちゃったんだよな」
多分、布団の中に入っても寝れる気がしない。
「じゃあ、朝の散歩にでも行っちゃう？」
「そうだね。行こうか」
「うん♪」
俺と巴は、散歩に出かける事にした。
散歩と言っても、瑠李のようなペット散歩ではない。

♡　♡　♡

「う～～～～ん……！　朝の空気は美味しいね～！」
「そうだね～」
伸びをする巴。俺は返事をしているが、実際は巴の巨乳で頭がいっぱいだった。
「ひゃ♡」
俺は後ろから巴に抱きつき、巨乳を揉みしだく。
「ごめん。我慢できなくなった」
「んふふ♡　いいんだよ♡　零ちゃんは我慢なんかしないで、いつでもどこでも好きな時に好きなだけ、私の体触って♡　ううん。触ってくださいにゃん♡」

「巴、おっぱい出していい？」
「うん♡」
俺は巴のTシャツを捲り、おっぱいを露わにする。
そして、おっぱいを直接揉みしだいていく。
朝の公園で、見晴らしのいい所で揉むおっぱいは、格別だ。
「んっ……♡　ふぅ……♡」
「巴、乳首勃ってる」
「だってぇ～♡　気持ちいいにゃもん♡」
「じゃあ、もっとしてあげる」
「んっ♡♡♡」
俺は、巴の乳首をつねったり、つまんだり、弾いたり、引っ張ったりする。
その度に、巴はエロい声を出して感じてくれる。
「んんっ……♡　零ちゃん、おちんちん、大っきくなってる……♡
お尻に当たってるよ♡」
「もう無理。挿(い)れていい？」
「うん♡　巴のオマンコ、零ちゃんのおちんちんでズボズボして、沢山犯して♡（壊してにゃん♡♡♡）」
「っ！」
「にゃぁぁぁぁぁ♡♡♡」
巴は俺の方に顔をやって、耳元でエロく囁く。
もうその囁きで俺は我慢できなくなり、巴のマンコに思い切りぶち込んだ。
「んっ♡　んんっ♡　んにゃあああ♡♡♡　んにゃはぁぁぁぁぁ♡♡♡」
俺が腰を動かす度に、結合部からバチュバチュというエロい音が鳴り、巴の口からは淫らな、到底外で出してはいけない声が漏れ出る。
「れ、零、ちゃん♡　と、巴の膣(なか)、き、気持ちいい？♡　ちゃ、ちゃんと零ちゃんのお、おちんちん、気持ち良く、で、できてる？♡」

「あぁ！　めちゃくちゃ気持ちいいよ！　油断するとすぐに出しちゃいそうだ！」
「う、嬉しいにゃぁぁぁ♡♡♡　れ、零ちゃん♡　我慢なんてしないで♡　な、何回でも何発でもいいから♡　あっ♡♡　と、巴の膣(なか)に、んぁ♡　いっぱい注いでくらさい♡♡♡　と、巴のな、膣(なか)にぃ♡　零ちゃんの濃ゆーい精液、出してほしいにゃぁぁん♡♡♡」
「そんなに懇願されたら、出さない訳にはいかないよな！　じゃあ出すからな！　子宮で全部受け止めろよ！　一滴たりともこぼすなよ！」
「にゃ、にゃいいいぃぃ♡♡♡」
俺は腰の動きをめちゃくちゃ激しくする。
そして――、
「うっ……！　出る！」
ビュビューーーー！　ビュル！　ビュル！　ビューーーー！！
「んにゃあああああああ♡♡♡　で、出てるにゃぁぁぁぁぁ♡♡♡　巴の膣(にゃか)に、零ちゃんのだいしゅき精液が、溢れてるにゃぁぁぁぁ♡♡♡　幸せ過ぎて、イッきゅ♡♡♡♡」
巴は全身を震わせて、イッた。
繋がったままの巴のケツが、ビクンビクンと痙攣して上がったり下がったりして、めちゃくちゃエロい。
しかも、動く度に膣(なか)が締まってきて、さらに動くのでチンコが刺激されてめちゃくちゃ気持ちいい。
こんなの、また勃ってしまう。
「はぁはぁ……零ちゃん、まだ大っきい……♡」
「巴が締めてきて、動きまくるから」
「ご、ごめんにゃさい……♡　お詫びに、いっぱい犯していいよ♡」
「いいよ？」
「あ、ううん♡　犯してください♡」
「よく言えまし、た！」
「んにゃあああああああ♡♡♡」

俺達は、公園に人が来るまでセックスしまくった。
中出し数、１０発。

♡　♡　♡

「まさか、迎えに行ったらセックスしてるとは思わなかったわ」
「ごめんな、黒乃。迎えに来てもらうのに、先にシちゃってて」
「れ、零は謝らなくていいんだぞ！？　それに、私は怒ってる訳じゃないんだ！　ただ、ずるいなぁと思っただけで……」
俺と巴は今、黒乃の車の中にいた。
「んふふ～♡　零ちゃんの精液、オマンコからたっくさん溢れてくる♡」
「姉さん、私と零の会話が聞こえてないの？」
「ん？　聞こえてるよ～。聞こえてるからあえて言ってるの～」
「こんの性悪女め……！」
「なんか言った～？」
「別に！」
この二人は双子だからこういう喧嘩というか、ノリがしょっちゅうだ。俺はこの二人のこういうノリが大好きだった。
「そう言えばさ、巴はいつから自分の事を『巴』って言うようになったんだ？」
「っ！」
「へぇ～。姉さん、自分の事『巴』なんて言ってるんだ～」
「う、うるさいな！　普段は私だから！　え、えっとね……れ、零ちゃんとのエッチの時だけ『巴』って勝手に口から出ちゃうんだ……い、嫌かな……？　嫌なら止めるけど……」
「嫌な訳あるか！　俺は女の子が自分の事を名前で呼んでるのがめちゃくちゃ好きなんだ！」
「そ、そうなんだ……♡　よかった……♡」
（私も黒乃って言ってみようかな……）

俺達は、黒乃宅に向かった。

♡　♡　♡

「どうした？　そんなにもじもじして」
「い、今から動画を撮りながらするんだなと思うと……」
「ちょ、ちょっと恥ずかしいなぁって……」
「止める？」
「止めない止めない！　ちょっと恥ずかしいなぁって思っただけだから……！　止めたりはしないよ！」
「そうだぞ！　零のしたい事は全部やるんだからな！」
「ありがとう」
二人ならそう言ってくれると思って、わざと言ってみた。
「恥ずかしがってる二人も、めちゃくちゃ可愛いよ」
「「っ～～～～～～♡♡♡」」
俺がそう言うと、二人は顔を真っ赤にした。
「も、もう、零ちゃんったら♡」
「ふ、不意打ちは、ダメだ……♡」
二人して見をよじらせながら照れてる。ヤバい。無性に興奮してきた。
早く二人を犯したい。
「ハメ撮りってスマホで撮るの？」
巴が聞いてくる。
「うん。そのつもり。俺がスマホを持って、二人としている所を撮る感じかな」
俺は巴の問いに答えながら、スマホを取り出そうとすると――、
「零、ちょっと待った！」
黒乃が止めてきた。
「黒乃？」
俺と巴が首を傾げていると――、

「実は、用意しておいたんだ！」
ババーン！　と可愛らしい効果音を口で言いながら、黒乃は自分の部屋のドアを開ける。
すると、部屋には本格的なカメラが設置されていた。
しっかりと三脚もあり、そこのテッペンにカメラが設置されており、ベッドを完璧に映せるような画角になっていた。
「「おぉ～～！」」
俺と巴は、声を揃えて感激していた。
「すげぇ～！　これ、買ったの？　高かったでしょ？」
「もちろん買った！　そして高かった！　でも、大好きな零に喜んでもらえるためだったら、全然安い出費だ！　私は零の為だったらなんでもできるからな！」
「わ、私もだからね！　零ちゃんの為だったら、なんでもできるからね！」
黒乃に張り合おうとする巴。二人とも、健気で可愛いって最高だろ！
「二人とも、ありがとう！　俺は幸せだよ！　二人とも、大好きだ！」
俺は巴と黒乃を同時に抱きしめる。
「ふふ……♡　私も大好きだ、零♡」
「私も♡　大好きだよ、零ちゃん♡」
「「んっ♡」」
俺は右手で巴のケツを。左手で黒乃のケツを握った。
「私もう我慢できない♡　早くハメ撮りしよう♡」
「あぁ。しよう。三人で最高のハメ撮りを！」
俺達は全裸になり、ベッドへと向かった。

♡　♡　♡

「これ、ちゃんと映ってるのかな？」

俺はベッドで横になりながら、カメラの方を向きそう呟いた。
俺の左右には、全裸の巴と黒乃が女の子座りをしており、俺の乳首をずっとイジっている。
「何回も何回も角度は確認したから、大丈夫だと思うぞ？」
「確認？　どうやって？」
「オナニーするのを動画で……あっ……」
「へぇ～オナニーを録画してたんだ～」
「後でそれ、見せてな」
「うぅ……はい……♡」
恥ずかしがってるけど、嬉しそうなのが可愛い。
「だ、だから、ちゃんと映ってると思うぞ」
「うん。ありがとう。じゃあ、始めよう」
「「はい♡」」
二人は、俺の方にケツを向けながら四つん這いになる。そして、顔を股間に近づける。
「んちゅ……♡　れろ……♡」
「ちゅ……♡　ぴちゅ……♡」
二人が俺のいきり立ったチンコを、両方から舐めてくる。
黒乃が竿を。巴が亀頭やカリを舐めてくる。
「二人とも、もうビチョビチョだな」
「「んっ……♡」」
俺は、二人のマンコに指を挿れる。
二人のマンコはすでにビッチャビチャになっており、中指と薬指の二本がすんなりと挿入った。
左手は黒乃。右手は巴。
俺は膣を激しく弄っていく。
「んっ……♡　んんっ……♡　んぁ♡」
「きゅ……♡　んあ……♡　んはぁ……♡」
二人は気持ちいいのか、チンコから口を離して喘ぐ。
フェラを継続できないほど気持いいのか。自分の指で好きな女が

感じてくれるのはすごく嬉しいな。
「んっ……♡　れ、零ちゃん……♡　ま、待って……♡　き、気持ちよすぎて、んっ♡　おちんちん、舐められない、んっ♡　にゃんぅ……♡」
「あ、主ぃ……♡　い、イッちゃいそう……♡」
「いいぞ。二人とも、思い切りイケ！」
俺は、指の動きをさらに激しくする。
手首のスナップを使って、膣（なか）を刺激していく。
二人の愛液と本気汁はどんどん溢れ出し、俺の手首を伝い、肘にまで垂れてくる。
「「んあああああああああああ♡♡♡　イキュぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」」
ぷしゅ♡　ぷしゃ♡　ぷしゃあああ♡♡♡
二人は、大量に潮を吹いてイッた。
「「はぁはぁ……♡」」
「すご。シーツも俺の腕もビチョビチョ」
「ご、ごめんにゃさいぃ……♡　お潮、我慢できにゃかったれすぅぅ……♡」
「主の指……♡　気持ちよすぎですぅ……♡　我慢する暇がないままイッちゃいました……♡」
「二人とも、可愛かったよ」
「「っ～～～♡」」
ぷしゅ♡ぷしゃあああ♡
「二人とも、嬉しくて漏らすとか、犬かよ」
二人は、褒められただけで潮をまた吹いた。
「それじゃあ、ハメようか」
「「はい……♡♡♡」」
二人はケツを持ち上げて、俺に突き出してくる。
「ここからが、ハメ撮りの本番だ！」

第４９話　巨乳双子と、性癖爆発のハメ撮り♡♡♡♡（後書き）

タイトルで「ハメ撮り」と記載していましたが、色々あり、ハメ撮りを書く事ができませんでした……！

誠に申し訳ございません……！

次話の５０話で、しっかりとハメ撮りを書かせていただきますので、楽しみにしていてください……！

次回予告！

「零、ちゃん……♡」

「あ、主……♡」

ベッドの上でビクンビクンと体を痙攣させる二人。

マンコからは大量の精液が逆流している。

「最高だったよ、二人とも！」

「「あ、ありがとう、ございます……♡♡♡」」

気を失うように眠りに就く巴と黒乃♡

次回

『ハメ撮り本番！　連続中出し超絶絶頂３Ｐ♡♡♡♡』

お楽しみに！

第５０話　ハメ撮り本番！　連続中出し超絶絶頂３Ｐ♡♡♡♡（前書き）

今回の話数で【第四章】は完結となります！
次話から【第五章】がスタートいたします！

それでは、【第四章】ラスト、お楽しみください♪

（活動報告はなしにさせていただきます……！）

第５０話　ハメ撮り本番！　連続中出し超絶絶頂３Ｐ♡♡♡♡

「まずは巴からな」
「はい……♡♡♡♡」
俺は、四つん這いになっている巴の後ろに膝立ちをし、巴のビチョ濡れマンコに亀頭を擦り付ける。
「い、挿(い)れにゃいんですか……？」
「巴の愛液と潮を、亀頭に塗りたくってるんだよ。これは全部俺のものだってな」
「う、嬉しいですにゃん……♡♡♡　巴の膣(なか)も、お尻も体も全部、零ちゃんの濃厚精液で染めて欲しいにゃん♡♡♡」
「あぁ。これでもかってくらいに出しまくって、俺の精液がないと生きけていけないようにしてあげるよ」
「うん……♡」
「行くぞ！」
「んにゃあああああん♡♡♡！！！」
俺は、マンスジに擦り付けてるだけだったチンコを、一気に膣(なか)にぶち込んだ。
抵抗感とかそんなのは一切なく、子宮口(おく)まで一気に挿入(はい)った。
「か、かはっ……♡♡♡」
「巴の子宮口、俺のチンコで潰しちゃってるね？　どう？　苦しい？」
「く、苦しいけど、す、すごく幸せ、にゃん……♡」
「そうか。じゃあ、遠慮はいらないね」
「ふえ……？」
「オラ！」
「んみゃあああああああああああああ！！！！」
俺は、腰を激しく打ち付ける。

腰を打ち付ける度に、巴の子宮口に俺のチンコが届き、ぐしゃぐしゃと潰していく。
さらには子宮口が開いているのか、チンコがその中に入り、腰を引く時に子宮口が一緒に引っ張られる。
「がああああああああああ！！！！！」
それが痛いのか気持いいのか分からないけど、巴は全身を震わせながら絶叫している。
「す、すごい……これが、主の本気セックス……」
隣で俺達のセックスを見ている黒乃は、よだれと愛液を溢れさせながら見入っていた。
「巴！　気持ちいいか！」
「ぎ、ぎもぢいいでずぅぅぅ！！！　零ちゃんのおちんちんが子宮を犯して、強制的に感じさせられちゃうのぉぉぉぉ！！！」
「桃を産んだにしては、随分キツいな！」
「た、多分……んあ！　零ちゃんに気持ちよくなってもらう為に、あああ♡　キツいままに、んあああ♡♡　なってるんだと、にゃあああ♡　思う、にゃんぅぅぅ♡」
ぷしゅ♡　ぷしゃ♡
「イッたのか？」
「ご、ごめんなしゃい……き、気持ちよすぎてイクの我慢できなかったです……！」
「別に我慢する必要はないよ。イキたい時にイケばいい。でも、一回イッたからって容赦は、しない！」
「んあああああああああああああああ！！！！！　イキマンコピストンやばいいいいい！！！！！　イってるのに抉られて、落ち着く時間がないのぉぉぉ！」
「賢者タイムになんて入らせないからな。俺の気が済むまで犯して、巴のマンコも子宮も体も精神も全て壊してやる！」
「壊してぇぇぇぇぇぇ♡♡♡♡　巴の全部、零ちゃんのモノだって証明する為に全部壊してぇぇぇぇぇ♡♡♡♡」

俺は巴の腰をガッチリと掴み、腰を激しく打ち付ける。
「あああああああ

「す、すごい……」
「さぁ、次は黒乃だよ」
俺は黒乃の方を向く。
「あ、主は大丈夫なのか！？　あんなに出しているのに……」
「もちろん。いつもはこの倍出してるからね」
「あ、そうか。学校で……」
「そ。一日に何人もの女子を相手にする時があるからね。それに、俺は今、燐のせいでいくら出しても勃起と性欲と精力が衰えないんだ」
「燐……（ナイスだ！）それじゃあ、お願いしてもいいか……？」
「もちろん。黒乃とセックスするのは、初めてだからね」
「うん……その、私……」
「分かってるよ。最初なんだから優しくする」
そう。黒乃は処女だ。
２９歳にして処女とは、なんとレアな存在だろう。
胸のデカさでこれまで振られ続けたらしい。
俺はそれが許せない。黒乃は可愛いくて巨乳で最高の女だ。
だからこそ、俺は黒乃の処女をもらえるのがとても嬉しい。
「黒乃はどの体位で犯されたい？」
「体位……」
「うん。初めてだとどの体位でも多分痛いとは思うんだけど、黒乃がしたい体位で初めてを奪いたいなぁって」
「じゃ、じゃあ……姉さんと同じ後ろから……」
「大丈夫？　俺の顔は見えないし、バックだと突く時結構キツイかもだけど」
「だ、大丈夫だ……。姉さんが後ろから犯されてるのを見て、私もして欲しいって思ったんだ……駄目、か……？」
いじらしく上目遣いで聞いてくる黒乃。
ったく、こういう所ずるいんだよな。
「駄目な訳ないだろ。いいよ。黒乃の処女、後ろから犯して散らし

てあげる」
「っ♡　お、お願いします♡　主♡」
黒乃は、うつ伏せになっている巴の隣に四つん這いになる。
そして、お尻をフリフリと横に振り、俺を誘ってくる。
「あ、主のチンポ、わ、私の未使用マンコにぶっ刺してください……♡　主専用のチンポケースに初収納してくださいぃ♡」
俺は亀頭を、黒乃のマンコに擦り付け、上下に擦る。
「んっ……♡　んんっ……♡　あ、主ぃ……♡　は、早く――んんあああああああ！！！！！」
俺は黒乃の言葉を待たずに、挿入した。
そこはやっぱり、処女だけあってキツイ。
引っかかりがあり、全然膣に挿入っていかない。
力強く最初は腰を打ち付けたが、挿入ったのはカリ首まで。
「こ、こりぇ、ぜ、全部挿入ったの……？」
「いや、まだカリまでしか挿入ってない」
「ご、ごめんなさい……私のマンコじゃ、主を気持ち良く……」
「黒乃」
「は、はい……」
「今は俺の事を考えるな」
「え……？」
黒乃は顔をこちらに向けてくる。やっぱり痛かったんだろう。目元には涙が浮かんでいる。
「女の子の初めては痛いんだ。そして苦しい。瑠李達はなんでか痛がらなかったけど、本来は痛いものだ。だから、今は俺の事じゃなくて、自分の事を考えろ」
「あ、主ぃ……♡　や、優しすぎますよぉ……♡」
黒乃は本格的に泣き出してしまった。
「ゆっくり挿れていくけど、痛かったりキツかったりしたら、すぐに言ってな」
「うん……♡」

俺は、ゆっくりと挿入していく。
「んっ……！　んん……！！」
痛いのか苦痛の声を漏らす黒乃。しかし、俺に心配をかけまいとしているのか、歯を食いしばり、それに耐えている。
「黒乃、駄目よ。零ちゃんにちゃんと報告しないと」
「巴」
いつの間にか復活していた巴が、女の子座りをしながら黒乃の背中を優しく撫でている。
「ね、姉さん……！」
「零ちゃんなら、怒ったりしないから、ちゃんと正直になって」
「あ、主……」
「ん？」
「お、おっぱいを、触ってください……」
「ん？」
「き、気を紛らわせたい、です……」
「あ、そうか。なるほどね。分かった」
俺は黒乃に挿(い)れたまま、黒乃の背中に覆いかぶさり、背後からGカップの巨乳を揉みしだく。
「んっ……♡」
「お。膣(なか)がちょっとうねったね。このままおっぱい揉んで慣らしていこう」
「は、はい……♡　ごめんなさい……」
「謝んなくていい」
俺は黒乃が落ち着くまで、おっぱいとクリを弄り続けた。

♡　♡　♡

一時間が経過した。
「主」
「ん？」

「動いて、ください……」
「でも、まだ痛いんじゃない？」
「も、もう一時間経ってます……お、オマンコがウズウズして仕方がないんです……」
俺はあえてずっと動かずに、おっぱいとクリだけを優しく弄っていた。
黒乃が動いてと言っても、まだ痛いだろ？　と言って、ずっと止まったまま。
膣がキュンキュンしてるのは分かっていた。ちょっとした意地悪だ。
「本当に動いていいの？」
「は、はい……！　動いて……オマンコ犯してください……♡」
「動いたら俺、遠慮できないと思うよ？」
「い、いいんです……♡　わ、私の疼いたオマンコを、めちゃくちゃに犯しまくってください……♡♡♡」
「分かった。じゃあ、行くよ！」
「んひゃあああああああ！！！　来たぁ！！！　指じゃ届かない所まで一気に太いの来たぁ♡！♡！」
俺は、カリ首までで止まっていたチンコを、一気に根本までぶっ刺した。
ずっと挿れたまま焦らしていたからか、黒乃の膣はグチュグチュに濡れており、すんなりチンコを飲み込んだ。
「巴と同じで、俺のチンコで子宮、潰されてるよ？　どう？」
「ぎ、ぎもぢいいですぅぅ……♡♡♡」
「初めてなのに子宮を潰されて感じるとか、黒乃はド変態だな」
「っ～～～～♡♡♡　ド変態で、ごめんなさいぃぃ♡」
「そんなド変態には、お仕置きが必要、だね！」
「んひゃあああああああああ！！！」
俺は腰を激しく打ち付ける。
巴と同じ速度だ。

「あああああ！　あああああああ！　あああああんあああああああっっっ！！！」
黒乃は、今ままで聞いた事がない声で喘ぐ。
マンコからは愛液がドバドバと溢れ出し、潮が断続的に漏れ出している。
「どうだ！　黒乃！　気持ちいいか！」
「は、はいいいいい♡♡♡　ものすごく気持ちいいですぅぅぅ♡♡♡　主のチンポぉぉぉ♡♡♡　気持ちいいですぅぅぅ♡♡♡　もうずっと、ずっと膣（なか）に挿（い）れてて欲しいですぅぅぅ♡♡♡　あああああああああああ♡♡♡　も、もう、イッちゃいますぅぅぅ♡♡♡」
「いいぞ！　イケ！　イケ！　イキまくれ！」
「あああああああああ！　イグぅぅぅ♡♡♡♡♡」
黒乃は背中をのけ反らせながらイッた。
全身を、そしてケツを痙攣させる黒乃。
膣（なか）の締めつけと、ケツの痙攣でチンコが刺激され――、
「俺も、出る！」
ブビュビューーーー！！！　ビュルルルルルル！！！！！
「んあああああああああああああああ♡♡♡　ザーメン来たぁぁぁぁ♡♡♡　子宮に主のザーメン、注がれてるぅぅぅぅぅ♡♡♡」
黒乃はまたイッたのか、さっきよりも激しく体を痙攣させる。
「っ……♡　んっ……♡　はぁはぁ……♡」
黒乃は力なく突っ伏した。その際、マンコからチンコが抜けた。
マンコからは大量の精液が逆流している。
「黒乃、初めてなのにめちゃくちゃイッてた。すごい」
巴が、黒乃のマンコを拡げながら呟く。
そんな巴の腕を力強く引っ張り、ベッドに仰向けで押し倒す。
「れ、零ちゃん……？　んあああああ♡♡♡」
俺は、押し倒した巴のマンコに無理矢理挿入した。
「ハメ撮りはまだまだ、ここからだからな」
「は、はいぃぃ♡♡♡」

♡　♡　♡

「「……っ♡」」

「ちょっと、やりすぎたか？」

顔、体に大量の精液を浴びていて、マンコから大量の精液を逆流させている巴と黒乃の二人が、ベッドの上で意識を失っていた。

意識を失っていても快感は続いているようで、小刻みに痙攣している。

「俺、何回出したんだろう？」

総射精回数がどのくらいなのか、全く分からない。

「あ、そうだ。動画を確認してみるか」

俺はベッドを降り、カメラを確認する。

動画を再生する。

『あああああああああああ♡♡♡　零ちゃぁぁぁぁん♡♡♡

巴をもっと犯してぇぇぇぇ♡♡♡』

『あ、主のチンポ♡♡♡　美味しい……♡♡♡』

『『んきゅぅぅぅぅ♡♡♡　お潮吹いて、おしっこ漏らしながらイッちゃうぅぅぅぅ♡♡♡♡♡』』

「うん。ちゃんと撮れてるな」

バッチリ撮れていた。ハメ撮り成功だ。

「いいオカズを手に入れたぞ」

ギュ♡

「ん？」

俺が喜んでいると、後ろから抱きつかれた。

「巴、黒乃。どうしたんだ？」

「それ見ながら、オナニーするの……？」

「え？　うん。そのつもりだけど……」

「主……それを見てもいいから、オナニーではなく、私達にご奉仕させてください……」

「え……？」
「零ちゃんの精液、ティッシュなんかに取られたくないの……」
「全部、私達女に放出してください……！」
二人が潤んだ目で見上げてきて、懇願してくる。
「ふっ。分かったよ。オナニーはしない。俺の精液は全部女に出すよ」
「「っ～～～～～♡♡♡　ありがとうございます♡♡」
「とりあえず、一旦寝よう。俺も眠い」
「「はい……♡」」
俺達は、精液や愛液や潮やおしっこで汚れたシーツを取り替えた後、三人で一緒に眠りに就いた。

第５０話　ハメ撮り本番！　連続中出し超絶絶頂３Ｐ♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……！？

ハメ撮り、楽しんでいただけて、興奮していただけましたらとても嬉しいです……！

皆様に満足していただける仕上がりになっているか、かなり不安ではあるのですが、満足していただけていましたら幸いです……！

本来であれば次回予告を書くのですが、今回は次回予告はなしにさせていただきます……！

次話がどんな内容になるのか、楽しみに待っていてください！

巴と黒乃の事、好きになっていただけますと嬉しいです♡♡♡

第５１話　愛莉先輩とのデート♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

【第五章】は、これまでと違い、一人一人の女子との関係を描きます。

一対一で、ラブラブエッチを書いていきますので、これまであまり出番がなかった、これまでがっつりラブエッチがなかったと思っていたあの女子達が、ようやく活躍いたします！

少しでも興奮して、少しでも楽しんでいただけますと幸いです！

第５１話　愛莉先輩とのデート♡♡♡♡♡

「準備できました～？」
「は、はい！」
俺がリビングから二階に声をかけると、二階から愛莉先輩の返事が返ってくる。
その声は少し裏返っており、照れているのが声だけで分かる。
「お、お待たせしました……」
「おぉ～」
愛莉先輩の格好は、水色のワンピースだった。
ワンピースの裾部分にはレースがあしらわれており、それがヒラヒラと揺れると、まるでお姫様のような印象を得る。
ブラジャーはこの世界にはないので、乳首が透けていて、愛莉先輩の薄い桜色の乳首と薄めの大きい乳輪が丸見えになっている。
「下は？」
「は、穿いて、ない、です……♡」
そう言って愛莉先輩は、ワンピースの下半身部分を体に密着させる。
すると、そこには本来あるべきパンツがなかった。その変わりにエロい鼠径部が丸見えになっていた。
愛莉先輩はパイパンなので、肌が丸見えになっている。
ていうか、このワンピースめちゃくちゃ透けてんな。
「めちゃくちゃ似合ってますよ」
「あ、ありがとうございます……♡　そ、それより、なぜ敬語を……？」
「今日は、主従の関係じゃなくて、ただ単の先輩後輩ド変態カップルとしてデートしましょう。嫌、ですか？」
「い、いえ……！　分かりました、今日は先輩後輩で♡　零様♡」

「じゃあ、行きましょう」
「はい♡」
俺達は、二人っきりのデートに出かけた。

♡　♡　♡

俺達は今、電車に乗っている。
「んっ……♡　はっ……♡　あっ……♡」
電車の中で愛莉先輩は、ノーパンマンコを丸出しにしながら、立ちながら感じていた。
俺が後ろから抱きつき、マンコを弄っているからだ。
周りの女性達は、愛莉先輩を羨ましそうに見つめている。
「愛莉先輩、気持ちいいですか？」
「は、はい……♡　気持ちいいです……♡」
「そうですよね。オマンココんなにグチャグチャになってますし」
俺がマンスジを触ると、卑猥なグッチョグッチョと言うエロい音が鳴り響く。
「んっ……♡　んんぅ♡」
「まだスジを触ってるだけなのに、イッちゃいそうなんですか？」
「だ、だってぇ……♡　零様に触っていただくの、久しぶりなんですもん……♡」
そういやそうだったか。
「じゃあ、ここでイッちゃいましょうか」
「んひゃあああ♡♡♡」
俺は指を膣（なか）に挿（い）れる。そして、思い切りかき混ぜる。
膣（なか）から愛液と本気汁が溢れ出て俺の指と手を濡らしていく。
「あっ♡　あっ♡　あっ♡　ああああああああ♡♡♡　だ、駄目ですぅぅ♡♡♡　イッちゃいますぅぅ♡♡♡」
「いいですよ。イッちゃってください」
「んあああああああああああ♡♡♡　イクぅぅぅ♡♡♡♡♡」

ぷしゅ♡　ぷしゃあああああ♡♡♡
「あああああああああああ……♡♡♡」
愛莉先輩は、潮を吹きながらイッた。
「はぁはぁ……」
「気持ちよかった？」
「は、はい……♡　すみません、私だけイッてしまって……」
「いいよ。デートはまだまだ始まったばかりだから」
「んっ♡」
俺は愛莉先輩の右耳にキスをする。と――、
ぷしゅ♡　ぷしゃ♡
「耳にキスしただけで潮を吹くとか、エロすぎだろ」
「しゅ、しゅみましぇん……♡」
電車が目的の駅に着くまで、俺は愛莉先輩をイカせ続けた。

♥　♥　♥

「はぁはぁ……」
私は今、トイレにいる。
「最近、零様のへの想いが抑えられない……！　好きすぎて犯したくなってしまう……！　零様を犯すなんてしてはいけないのに……！」
最近の悩みは、零様にレイプをしてしまいそうになること。
朝勃ちを見てしまった日には、自分の気持ちを抑えるのが大変。
舐めたい、イカせまくりたい、大量にぶっかけられたい、大量に中出しされたい、最近の私はそればっかり考えてしまう。
「でも、今日は二人っきりでデート……♡　もう、我慢しなくて、いいのかな……？」
零様は、こんな私を受け入れてくれるのかな……？

第５１話　愛莉先輩とのデート♡♡♡♡♡（後書き）

【第五章】では、一人一人の物語を数話分に分けて投稿したいと思っております！
分割することで、より濃厚なエッチと関係性を描けると考えているので、楽しみにしていてください♪
最初は『水瀬　愛莉』からとなります。
皆様の推しのヒロインのメイン回を、楽しみにお待ち下さい♪

次回
『私の想い、全て零様に……♡♡♡♡♡』
お楽しみに♪

第52話　私の想い、全て零様に……♡♡♡♡♡

「うわぁ～……！」
「ふふ。愛莉先輩って水族館好きなんですか？」
「は、はい……！　特にジンベエザメが大好きで♡　子供の頃から水族館に何度も通ってたんです♡」
「愛莉先輩ってクールな印象だったから、結構意外だなぁ～」
「が、がっかり、しましたか……？」
「まさか。むしろギャップ萌えでもっと好きになりました」
「っ～～～～～～～♡♡♡」
そ、そんな事言われたら、嬉しすぎて子宮が疼いちゃう……♡♡♡
あ……愛液が溢れて……♡♡♡
「んっ♡」
零様がお尻を揉み込んでくる。
「すご。ビチャビチャじゃん」
「ご、ごめんなさい……♡　こ、興奮しちゃって……♡」
「いいよ。それより、もっと触っていい？」
「も、もちろんです♡　あん♡」
零様の指が、お尻の穴に……♡
「あれ？　先輩ってアナル開発してましたっけ？　やけにすんなり挿入(はい)るんですけど？」
「じ、実は……いつ零様に求められてもいいように、一人で開発をしていたんです……♡」
「そうか。愛莉先輩は最高の女だな」
「っ♡」
れ、零様が褒めてくれただけでなく、頬にキスまでしてくれた♡
こんな幸せがあっていいのだろうか？
「なぁ、愛莉」

「は、はい……？」
呼び捨て……。って事は主従関係？
「いつも我慢してるだろ？」
「え……？　な、なんの、事、でしょうか……？」
どうしよう……。鼓動が速くなってきた……。
「瑠李やリサ達に気を使って、俺としたいの我慢してるだろ？」
「そ、それは……」
気づかれてたんだ……。零様って本当にいつもみんなの事見てくれてるなぁ……♡
「そういう周りを見れる愛莉の事は好きだよ。でもさ、俺は愛莉とももっとエッチがしたい。愛莉のしたいこと沢山してあげたい。愛莉に沢山奉仕させたい。だからさ、今日は愛莉がこれまで我慢してきた事、全部しよう。本当の愛莉をさらけ出して」
零様は、欲しい言葉を欲しい時にくださる……♡
こういう所が、本当にズルい……♡
「い、いいんですか……？　一度さらけ出してしまったら……戻れないですし、止まれないですよ……？」
「いいに決まってるだろ。俺を誰だと思ってんだ？　愛莉の彼氏でご主人様だぞ？　そう簡単にどうにかなってしまうほど、やわじゃないよ」
「あ、ありがとうございます……！　大好きです！　零様♡」
私は零様に抱きつく。
薄暗いとは言え、ここは室内。人がいる。
公衆の面前で抱きつくなんて、本当は恥ずかしい。
でも、零様は本当の私をさらけ出していいと言ってくれた。だから、そのお言葉に甘えて、全てをさらけ出す。
「おぉ！」
私は抱きつくのを止め、零様のズボンとパンツを脱がす。
突然の事に、さすがの零様もびっくりしたみたい。でも、びっくりしてる零様も素敵♡　可愛い♡

「もう、こんなに……♡　はんむ……♡」
「おっ……！」
私は、すでにギンギンに勃起している零様のおちんちんを咥える。
零様のおちんちんはとっても美味しい……♡
汗と、おしっこの臭いと味がして、そこに我慢汁とチンカスが混じり、最高の味わいになっている♡
「じゅろっ♡　じゅぼっ♡　じゅぞっ♡」
頭を前後に動かし、激しくフェラをする。
頭を動かす度に私の口からエッチな音が鳴って、その音が私の興奮を高めてくる。
ん♡　味が変わってきた……♡　精子が少し混じった我慢汁が尿道から溢れてきてる♡
この味が最高すぎて、本当は毎日舐めたいと思ってる。でも、それだと零様に負担をかけてしまうから……。
でも、今日は遠慮しない。だって、零様が全部受け止めてくれるから。
「じゅぼっ♡　ぎゅぽっ♡　じゅぶっ♡　じゅぞっ♡　ぢゅるるるるるるるるるるるるるる♡♡♡」
頭を激しく前後させながら、舌で亀頭を舐めまわす。
零様は気持ちよくなってくれてるようで、上に視線を送ると、目を瞑って快感に浸っていた。
んふふ♡　嬉しい♡
「あ、愛莉……！　も、もう……！」
「ぎゅぽっ♡　じゅぼっ♡　じゅぶっ♡」
返事できなくてごめんなさい……！　でも、お口が止められないんです……♡
頭が勝手に動いて、零様の精子欲しいって言ってるんです♡
お口に、喉に、口マンコに、喉奥子宮に零様の特濃精子、たっぷり中出しして欲しいんですぅぅぅ♡♡♡
「出るっ！」

ブビュビュビューーー！　ビューーーー！！
「んぶっ！？」
来たぁ～♡♡♡　零様の特濃精子～♡♡♡
喉奥子宮にビシャビシャかかってるぅ～♡♡♡
幸せすぎてイッちゃいそう……♡
喉に絡みついてきて、飲みづらいけどそれがしゃいこう～……♡♡♡
「んぐぐ……♡　んぐんぐ……♡」
「あ～、最高。朝から溜めてたから全然止まんないし、量も濃さも半端ないな。愛莉先輩、溺れないように気をつけてくださいね……って、もう遅かった。鼻と口の端から精液溢れてきてる」
零様の言った通り、精液の量が多すぎて飲みきれず、鼻と口の端から大事な精液が溢れてしまっている。
鼻から溢れたら普通なら痛いのに、零様の精液だと全然平気。むしろ、もっと鼻にも入れたいくらい♡
長い射精が終わり、零様がおちんちんを口から出そうとする。
でも、駄目です……！
「ん？」
私は、口におちんちんを咥えたまま、零様を見上げて首を横に振る。
「何それ、可愛すぎんだけど」
か、可愛い……！？　ちょっと潮吹いちゃったかも♡
「もしかして、おしっこ飲みたいの？」
「んっんっ♡」
私は首を縦に振って首肯する。
「じゃあ、ちゃんとこぼさず飲んでな？　流石に床を汚すのは申し訳ないからさ」
「んっんっ♡」
ごめんなさい……♡　私、すでに愛液とお潮で汚しちゃってます……♡

「じゃあ、出すぞ」
零様が腰を少し前に突き出す。それにより、亀頭がのどちんこに当たる。
少しえづきそうになるけど、なんとか耐える。大好きな零様のおちんちんを奥まで入れてもらえてるのに、えづくなんて、したくない。
もしえづいて嫌われたくない、失望されたくない。
「ふっ……！」
じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ！　ぶしゃあああああああ！
「んっ♡　んくんくんく……♡」
零様のおしっこが来たぁ♡　やっぱり零様のおしっこ、ものすごく美味しい……♡
零様の彼女兼性奴隷になった、あの温泉旅行の日に、零様におしっこを飲ませてもらった。
あの日から飲めずにいたから、すっごく嬉しい♡
毎日、ずっと、一生、毎分ごとに飲みたい……♡
こんな我儘言っても、許してくれるのかな……？
ちょっと怖いけど、後で言ってみよう。
今は、このおしっこをちゃんと味わわなきゃ♡
「ごめん、ちょっと量が多いかも。こぼしちゃってもいいからな」
そんな事、絶対にしないです……！
絶対に、全部、全部飲み込みます！
零様のおしっこは全然落ち着く気配がない。
ずっと我慢してたのかな……？　だとしたら、彼女失格だ。
大好きで大切な彼に、我慢をさせるなんて。
射精にしても、ムラムラにしても、尿意にしてもなんにしても『我慢』をさせるなんて、絶対にしちゃいけない事だ。
これからは絶対に我慢をさせないよう、頑張らなきゃ！
「ごくごくごく……♡♡♡」
「おぉ～すご。全部飲めたんだ」

「ごきゅん♡　ふぁい♡　零様のおしっこ、全部飲めました～♡」
「偉いな。ありがとう」
「っ～～～～～♡♡♡」
零様が頭を撫でてくれる。それだけでイッちゃいますよ～～♡♡♡
「零様、私、まだしたいことといっぱいあるんです……」
「うん。いいよ。全部やろう。なんでも言って」
「れ、零様をレイプしたいんです……！　騎乗位で沢山犯したいんです……！　何度も何度も膣(なか)で精子を出してもらって、キスをしながら中出しレイプしたいんです……！」
「いいよ」
「やっぱり駄目――えっ！？　い、いいんですか……！？」
「うん。俺、女の子からレイプされるの、意外と好きなんだよね」
「ほ、本当、ですか……？」
「あぁ。なんなら、あそこでこっちを羨ましそうに見てきてる女子グループの所行って、犯されてこようか？」
「だ、駄目です……！　それは、駄目、です……！」
私は零様の袖を掴み、歩くのを阻止する。
瑠李さんや桃さん達ならともかく、見知らぬ女となんて、嫌だ……！
まだ、まだ今は零様の素晴らしさを知ってるのは私達だけでいたい。
「い、今ここで犯してもいいですか……？」
「もちろん。ていうか、レイプするのに許可や同意を求めちゃ駄目じゃない？」
「そ、そうですね……！」
私達は見つめ合って――、
「「ぷっ！　あはははははははは！」」
吹き出してしまった。零様とこうやって笑い合えるの、すごく幸せ……♡
「乱暴に扱ってもいいから、愛莉のしたいようにしな。押し倒され

ても、何されても怪我しないし、怒ったりしないから。安心して」
零様が頭を優しく撫でてきてくれる。
嬉しい♡　嬉しい♡　幸せ♡　幸せ♡
大好き♡　大好き♡　大好き♡
ここまで愛が重たい女だとは、思ってなかったなぁ……。
「そ、そこまで言うなら……えい！」
私は、零様を押し倒した。
マットなどの柔らかいクッションが何もない硬い床に。本来であれば絶対にしてはいけない事。
彼氏に、ましてやご主人様にしていい事じゃない。
でも、零様は――、
「ふふ」
優しく微笑んでくれる。
あ～。もう私、この人なしじゃ生きていけないや。
私は零様のおちんちんの上に跨り、ワンピースのスカートを持ち上げる。
「今から、犯します♡」
零様のおちんちんを、私の発情しきったオマンコの膣（なか）に……♡

第５２話　私の想い、全て零様に……♡♡♡♡♡（後書き）

次回予告！

零をレイプしたいと言う夢が叶った愛莉！

公衆の面前で、零を犯しまくる！

「あっ♡　あっ♡　あっ♡　零様ぁぁぁぁぁ♡♡♡」

レイプで抜かずの連続中出しで、絶頂しまくる愛莉。

次は零のターン。

「こ、こんな所でするんです、か……♡」

「はい。みんなに見てもらいましょう。愛莉先輩の（可愛い所）」

「っ～～～～～～～～～♡♡♡」

イルカショーの最前列で、女性客、女性キャスト達に見られながら手マン、クリ責め、クンニでイキまくる愛莉！

水族館が、二人のヤリ場と化す！

次回

『ヤリまくり水族館♡♡♡♡♡　そして……』

お楽しみに！

第５３話　ヤりまくり水族館♡♡♡♡♡　そして……（前書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！

零と愛莉のエッチ、沢山楽しんでいただけますと幸いです！

（活動報告はなしにさせていただきます……！）

第53話　ヤりまくり水族館♡♡♡♡♡　そして……

「ん……あぁぁんっ♡」
ヤバイヤバイヤバイ♡　わ、私！　大好きな零様を犯してる♡
レイプしてるよぉ～♡♡♡
「どうした、先輩。腰が止まってるよ？　レイプなら構わずに動かし続けなきゃ。こんな風にさっ！」
「んおっ！！！」
零様の下からの容赦ない突き上げで、亀頭が子宮口の中に侵入してきた。
子宮口の中に亀頭が入ったことで、私は変な声を出してしまった……！
ひ、引かれてないといいんだけど……。
「ご、ごめんな、さい……！　へ、変な、こ、声、出ちゃい、ました……」
「謝らなくていいよ。可愛い声だったよ？　もっと聞きたいなぁ。だから早く、犯して、よっ！！」
「んぉおおおおおお！♡！♡！♡」
零様がさらに腰を突き上げてくる。
亀頭が子宮口の中を抉ってくる……♡
こ、これ、ヤバい……♡　レイプどころじゃなくなっちゃう……♡♡♡
「れ、零、様……♡　わ、私が、犯し、ますから……あん♡　れ、零様は、動かないで、ひゃん♡　ください……♡」
「じゃあ、早く動いて？　動いてくんないとこのままレイプ返しが始まっちゃうよ？」
そ、それも嬉しいぃぃ♡♡♡
で、でも、今は私がレイプするんだ！

「んんぅ〜〜〜♡♡♡」
私は腰を持ち上げ、思い切り下に打ち付ける。
「んあああああああああああ♡♡♡」
零様の、ち、ちんちんがぁぁ♡♡♡
お、子宮(おく)まできて、や、ヤバいぃぃ♡♡♡
「顔蕩けてる。そんなに気持ちいい？」
「は、はいぃぃ……♡♡♡　き、気持ちよすぎてトんじゃいそうですぅぅ……♡」
「いいよ。トんで。トんだら好き勝手に犯して、中出ししまくるから」
「しょ、しょれしゃいこうれすぅ〜〜〜♡♡♡　れ、れ〜も♡　今はわらしの、ターンれす♡」
「うお！」
私は、零様のお胸に手を置き、足をM字に開いた状態で腰を上下に動かす。
私の愛液の音と、肌と肌がぶつかる音が館内に響き渡る。
私達を見てる人達は、足を止めてオナニーを始めてる。
「んあああああああ♡♡♡　あああああ♡♡♡　れ、零しゃまをおがじでるぅぅぅ♡♡♡　こ、こんなのしゃいこうしゅぎるのぉぉぉ♡♡♡　あああああ♡♡♡」
「ちょ、ちょっと愛莉先輩……！？　もうちょっとスピード緩めて……！　こんなんじゃすぐイッちゃう……！」
「らひて♡　らひて♡　らひて♡零しゃまの精液、私の子宮(こどもべや)にらひてぇぇぇぇ♡♡♡」
「くっ……！　出るっ！」
ドビュン！　ドビュルルルルルルル！！
「んあああああああああああああああああ♡♡♡　れてる♡　いっぱいれてるのぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡　赤ちゃん孕んじゃうお精子(くすり)、直接子宮(こどもべや)にお射精(ちゅうしゃ)されてるのぉぉぉ♡♡♡　あああああ♡♡♡　イックうううううう♡♡♡」

ぷしゅ♡　ぷしょぉぉぉ♡♡
「はぁはぁ……」
私は力が抜け、零様の上体にのしかかってしまう。
「す、すみません……力が抜けてしまって……」
「いいよ。そのまま休んでて。後は俺が、動くからっ！」
「へっ！？　んあああああああああ♡♡♡」
零様が下から犯してくる。
「イッたばかりだから、らめぇぇぇぇぇぇ♡♡♡」
私はこの後、零様に3発中出ししてもらった。

♡　♡　♡

『大変長らくお待たせいたしました～！　今からシャチのショーを開始いたします～！』
シャチのショーがやると言うので、俺と愛莉先輩はそれを見に来ていた。
観客席の一番前に座る俺達。そんな俺達に女性キャストが声をかけてくる。
「あの～。最前列だとお召し物が濡れてしまいますので、こちらをどうぞ」
俺達を気遣ってポンチョを渡してくれる。
だが――、
「お心遣い、ありがとうございます。でも、俺達は大丈夫です」
「あ、そうですか？　失礼いたしました。最後まで、お楽しみください♪」
俺はポンチョを断った。女性キャストは変に粘ったりせず、すぐに引き下がり、仕事に戻っていった。
もし機会があったらたっぷり犯してあげるからね♪
そして、ショーが始まる。
「お～。すげぇな～」

「あんなに高く跳べるんですね～」
シャチが大ジャンプを決めた。そして、水の中に着水すると、バシャァァァンと大きな音を立てて、大量の水が俺達二人にかかった。
「わぷ……！？」
作戦大成功。
「愛莉先輩、自分の格好みてごらん」
「ん？　っ～～～～～～～♡♡♡」
愛莉先輩は自分の格好を見て顔を真っ赤にする。
愛莉先輩の今の格好は、スッケスケの全身丸見え状態。
愛莉先輩の薄い桜色の乳首、薄い色で大きめの乳輪、パイパンの下半身が丸見えになっており、濡れて肌に服が張り付いているのも相まってエロさが格別だ。
元々透けていた服が、水により透けの最終形態へと変貌した。
「ひゃん……♡」
俺は、愛莉先輩の乳首を抓む。
「こ、こんな所でするんです、か……♡」
「はい。みんなに見てもらいましょう。愛莉先輩の（可愛い所）」
「っ～～～～～～～～～♡♡♡」
俺が耳元でそう囁くと、愛莉先輩は顔をさらに真っ赤にして俯いた。
俺は愛莉先輩の下半身に手を伸ばし、すでに勃起しているクリを弄る。
「んぁぁ♡　んんっ……♡　んあ……♡　はっ♡　あっ♡」
クリを撫でたり、抓んだり、弾いたりする度にいい反応をしてくれる。
俺はイカせたくなり、クリを抓み、激しく揺する。
「んあああああああああ♡♡♡　らめらめらめぇ♡　す、すぐイッちゃうぅぅぅ♡♡♡」
「（イケ。みんなが見てる中でクリイキしちゃえ）」
「っ♡　あああああああああああああ♡♡♡」

ぷじょおおおおおおおお♡♡♡
愛莉先輩は、イッたと同時に潮ではなく、おしっこを漏らした。
漏らしてる間もクリを激しく弄っていると、今度は――、
「んひゃあああああああああああ♡♡♡」
ぷしゅ♡　ぷしゃ♡　ぷしょおおお♡♡
潮を大量に吹いた。
「めちゃくちゃ漏らすじゃん」
「すみません……♡」
めっちゃ嬉しそうな顔してる。じゃあ、次は……。
「んちゅ」
「ひゃわっ！？　れ、零様！？　そんな所汚いから駄目ですよ……！？」
「いいからいいから。遠慮なく、イキまくれ」
「んひゃあああああああああ♡♡♡　く、クンニらめれすぅぅぅぅ♡♡♡　き、気持ちよすぎてすぐにイッちゃうぅぅぅ♡♡♡」
愛莉先輩は瞬く間にイク。だが、そこで止める俺じゃない！
「んひゅ！？」
俺は立ち上がり、愛莉先輩にキスをしながらスカートをたくし上げ、膣（なか）を中指と薬指の二本で激しく手マンする。
「んんーーーーーーーーーーーーー♡♡♡」
俺にキスをされているので、嬌声を上げれない愛莉先輩は、俺の口の中で可愛すぎる嬌声を上げる。
ヤバい。この嬌声だけで射精しそう。
「んんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
ぷしゅ♡　ぷしゃ♡♡　ぷしょお♡♡♡　ぷじょおおおおおおおお♡♡♡♡♡
愛莉先輩は、まるでおしっこかってくらいの量の潮を吹いた。
潮を吹いてる最中も手マンを続けるので、勢いは衰えるどころか増している。
さらに、量も増えていて、シャチの大ジャンプで床にできた水溜

りと同じくらいの量の水溜りが一箇所に出来始めている。
俺が口を離すと、二人の唇の間に唾液の橋がかかった。
「はぁはぁ……♡　は、激しすぎます……♡」
「おっと。大丈夫？」
「は、はい……♡」
足が震え、座り込みそうになる愛莉先輩を俺は支える。
「あの……」
「ん？」
「もうそろそろ、彼氏彼女じゃなくて、いつも通りに戻りませんか……？」
「いつも通り？」
本当は分かってる。そろそろ言ってくるだろうとは思っていた。
「はい……♡　彼氏彼女としてじゃなく、ご主人様と性奴隷の関係に……♡」
「いいけど……それだと俺、敬語使わないし、愛莉先輩を乱暴に扱うよ？　それでもいいの？」
「はい……♡　それで、いえ。それがいいんです……♡　零様の性欲を処理するだけの奴隷に私をさせてください……♡　零様の精液タンクにさせてください♡」
「分かった。じゃあ、ラブホ行こう」
「はい……♡♡♡」
そうして俺達は、水族館を後にしてラブホへと向かった。

ちなみに、愛莉の潮や尿で汚してしまった床は、水族館のスタッフ達が綺麗にしてくれた。

第53話　ヤりまくり水族館♡♡♡♡♡　そして……（後書き）

次回予告！

「んあああああああああああ♡♡♡　イグぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」

ラブホで何度も何度もイカされる愛莉！
中出し、アナルセックス、フェラ、イラマ、パイズリ、時間が許す限りヤりまくる！
いや、時間がなくなってもヤり続ける！

次回、愛莉編ラスト！

『ラブホで主従の射精（だし）まくりセックス♡♡♡♡♡』

お楽しみに！

（次回から、零がいつものドSに戻ります♡）

第５４話　ラブホで主従の射精まくりセックス♡♡♡♡♡（前書き）

愛莉編ラストです！

どうぞ、お楽しみください♡

第５４話　ラブホで主従の射精まくりセックス♡♡♡♡♡

ラブホにやって来た俺達。
足がガクガクしている愛莉の手を引き、エレベーターに乗る。
「はぁはぁ……♡」
「めちゃくちゃ興奮してんじゃん。愛液、もうここまで垂れてるよ」
「んぅ……♡」
愛莉の愛液は、膝下まで垂れてきていた。
俺がそこを優しくなぞると、愛莉は軽く喘いだ。
「ほら、行くぞ」
「ふぁい……♡」
エレベーターが目的の階に着いたので、エレベーターを降り、部屋へと向かっていく。
そして、部屋に着き、中に入り玄関を鍵を愛莉に閉めさせた瞬間――、
「んおぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡」
俺は背後からいきなりチンコをマンコにぶっ刺した。
「れ、零様、まだここ玄関ぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
顔をこっちに向けて何か言ってくるが、そんなのお構い無しに俺はバックで愛莉を犯していく。
愛莉の事など考えない、自分本位のセックス。
腰を激しく打ち付け、ただ自分が気持ちよく射精する事しか考えない。しかし、そんなセックスでも――、
「んあああああああああ♡♡♡　無理矢理セックス気持ちいいいいぃ♡♡♡　オマンコ好き勝手抉られて、子宮（おく）までぶっ刺されて、気持ちよすぎて狂っちゃうのぉぉぉ♡♡♡♡♡」
このように感じてくれる。
俺の女どもは、全員がドＭで、乱暴に扱われるのが大好きだ。だ

から、こんなセックスでも勝手に幸福感が満たされて感じてイキまくる。
「そろそろ出すぞ！　子宮でしっかりと受け止めろ！」
「はいいいいぃ♡♡♡　ちゃ、ちゃんと子宮（こどもべや）で零様の精子（こども）受け止めますぅぅぅぅ♡♡♡」
「くっ！　出る！」
ドビュル！　ビュル！！　ビュルッビュルッーーーーーーーーー！！！
「んあああああああああああああ♡♡♡　中出しされてイッちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
ぷしゅ♡　ぷしゃあああああああ♡♡♡
潮吹きに大失禁。
玄関で中出しを決め込んだ俺は、繋がったまま靴を脱ぎ、室内に入った。
「んっ♡　あっ……♡」
歩く度に膣（なか）が刺激されて、感じる愛莉。
「ほら、感じてばっかりいないでちゃんと歩け！」
パチィィィィンッッッ！
「んあああああああああああ♡♡♡　ご、ごめんなさいぃぃぃぃ♡♡♡」
俺は愛莉のケツを、思い切り引っ叩く。
醍醐にスパンキングしまくったおかげで、だいぶ上手くなった気がする。
ジョロロロロロロロロ……♡
「ん？　おいおい、何漏らしてんだよ」
「ご、ごめんなさいぃ……♡　お尻叩かれたのが気持ちよすぎて、おしっこ漏れちゃいました……♡」
愛莉はスパンキングを受けて、失禁していた。
他の奴らもスパンキングで漏らすのか、今度やってやろう。
「あ～もう我慢できねぇ。おら！」

「んひゃいいいぃ♡♡♡」
俺はベッドへと移動する最中、我慢ができなくなり、愛莉がどこにも手をつけない状態の中でいきなり犯し始める。
「ま、待っへ……♡　べ、ベッドぉぉ♡♡♡　も、もう少しだからぁぁぁぁ♡♡♡」
「奴隷の分際で、主人に命令してんなっ！」
「んおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡　ご、ごめんらしゃいいいいいぃ♡♡♡　躾のなってないクソ奴隷に、キツイお仕置き、してくらさいいいいいいぃ♡♡♡♡♡」
「言われなくって、してやるよ！」
俺は愛莉の腰を両手でガッチリ掴み、腰を激しく打ち付ける。
「あっ♡　あああっ♡　あああっ♡　あああああっ♡♡♡」
「くっ……！　出るっ！」
ビュビューーーーーーー！！！　ビュルッーーーーーー！！！
「んひゃあああああああああ♡♡♡　強制種付け来たぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡　子宮に精液溜まってぇ♡　イックぅぅぅぅぅ♡♡♡」
愛莉は、ガクガクだった足をさらに震わせながらイッた。
「はぁはぁ……♡」
前に倒れ込みそうになる愛莉を羽交い締めで支え、そのまま上下に動かす。
「んぇあ♡　れ、零様ぁ♡　こ、これ駄目れすぅぅ♡♡　お、おちんちん、ふ、深く入りすぎて、お、お腹、苦しいぃ……♡」
「でも、それが気持ちいいんだろ？」
「ふぁ、ふぁいぃ……♡♡♡　それが、それが気持ちよくてイッちゃうド淫乱なんですぅぅ♡♡♡　もっと、もっと苦しくしてくださいいぃぃ♡♡♡」
「お望み通り、にっ！」
「んあああああああああああああああああ♡♡♡♡」
愛莉を下に降ろすのと同時に、腰を突き上げると愛莉の奥の奥に

チンコが深く刺さり、ゴリュ♡　と言う音が鳴る。
その音が鳴るのと同時に、愛莉が喘ぐ。
おそらく、そこが最高の性感帯なのだろう。
「この一番奥の所に、濃厚精液出してやるからな！」
「は、はいぃぃぃ♡♡♡　お、お願いしますぅぅ♡♡♡　私の奥に、一番弱い所に、零様の特濃精液いっぱい出して、私を溺れさせてくださいぃぃ♡♡♡　奥を精液の海にして私を溺死させてぇぇぇ♡♡♡」
「死んでもらっちゃ困るんだよ！」
「んあああああああああああ♡♡♡　零様の精液で溺れたいぃぃぃ♡♡♡　あああああああああああ♡♡♡」
「じゃあ、溺れろ！」
「んあああああああああああああああああ♡♡♡♡♡」
ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
ビュビュ！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
「んごぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡」
俺は、今までで一番の量の精液を奥に流し込んだ。
尿道から出た感じで分かるが、それは液体ではない。ゼリーのような固形が大量に出て、それを愛莉の子宮へビシャビシャと浴びせている。
「お、重いぃぃ……♡　お、お腹が、お、重いぃ……♡」
水族館で4発、ここに来て2発。しかも2発目はドロッドロの固形精液だ。
お腹に溜まったらそりゃ重いだろう。
「そんじゃ、もっと重くしてやる」
「ふぇ……？」
俺は羽交い締めで抱きかかえたままの愛莉を、風呂場に連れて行く。
ベッドに寝かせてもらえると思っていた愛莉は、戸惑いながら俺

の方を見てくる。
移動中もチンコが膣(なか)を刺激するので、愛莉は小刻みに震え、喘ぎを漏らす。
風呂場に着き、中に入る。お互いに服は脱がない。だって、もうすでに濡れてるから。
俺はシャワーからお湯を出す。そして、それを愛莉のチンコと繋がったままのマンコに当てる。
「んひゃあああああああああああ！？　れ、零様！？　な、何を……！？」
流石に驚いたみたいで、慌てだす愛莉。
だが、俺はマンコにシャワーを当て続ける。
「シャワーでクリを刺激しながらセックスしたら、もっと気持ちいいかなって思ってさ。これならアナルも多少なりとも刺激してくれるだろ？」
「こ、こりぇ、だ、駄目れすぅぅぅ♡♡♡♡♡」
駄目と言いつつ、俺がシャワーを持っていられるように、俺の首に両手を回し、俺が片手を離しても落ちないようにしてくる。
右手で愛莉の右足を持ち上げて、左足は愛莉が自分で上げている。おそらくキツイだろうけど、そのキツさが最高のスパイスになってる。
「このまま、犯してやる！」
「んあああああああああああ♡♡♡　奥ズボズボされて、クリとマンコの周りシャワーで犯されて、気持ちよすぎておかしくなっちゃうぅぅぅ♡♡♡」
「締まりヤバい……！　こんなの、すぐに出ちまう……！」
「出して♡　出してくださいぃぃぃ♡♡♡」
「出すぞ！」
「んがあああああああああああああああ♡♡♡」
ビューーーーーーーーーーーーー！！！！！　ビュビュッ！！！！！
ビューーーーーーーーーーーーー！！！！！

「あああああああああああああああああ♡♡♡　ドロッドロ精液中出しされて、イクぅぅぅぅぅ♡♡♡　中イキとクリイキ、ヤバいいいいいぃ♡♡♡」
チンコで膣を。シャワーでクリを弄られ両方でイッてしまった愛莉は、全身を激しくビクビクさせた。
呼吸もものすごく荒く、呼吸する度にFカップの巨乳がプルプル揺れている。
それについ見とれていると――、
「れ、零様……？　どうされました……？」
急に黙り込んだ俺を心配したのか、不安そうな顔をしながら尋ねてくる愛莉。
「いや。なんでもないよ。今日はこのまま、一回も抜かずに中出しセックスしまくるからな。覚悟しとけよ」
「はい……♡　零様のおちんちんをずっとオマンコで感じさせていただきます……♡　精液もずっと出し続けてください♡　全部子宮で受け止めます♡」
「子供ができるかもしれないぞ？」
「構いません♡　零様の子供だったら、いくらでも孕みたいです……♡　私を孕ませてくださいますか……零様♡」
「あぁ。もちろんだ！　めちゃくちゃにして孕ませてやる！」

俺達はこの後、ずっと中出しセックスをした。
２０発の中出し。計２６発。その２６発が全て愛莉の子宮に注がれた。
中出しって、最高だよな。女を自分の色に染めてる感じがして、堪らない。
結局、俺達は次の日の昼が来るまでヤり続けた。
愛莉は途中で気を失ってたけど。

第５４話　ラブホで主従の射精まくりセックス♡♡♡♡♡（後書き）

愛莉編、いかがだったでしょうか？
少しでも楽しんでいただけて、喜んでいただけて、満足していただけておりましたら、この上なく嬉しいです！
この回はフェラやイラマなどの描写がなく、申し訳ないです……！
ですが、大量に中出しするセックスにこだわりましたので、沢山興奮していただけると幸いです！

次回が誰になるのか、楽しみに待っていてください♪

第５５話　鈴音との初デート♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

「んっ♡　んん……♡　んふぅ……♡　ふふぁ……♡」

「ほら、まだ一時間しか経ってないぞ？　約束の五時間までまだまだだぞ～」

「ふぁ、ふぁいぃ……♡」

俺と鈴音は多目的トイレにいる。

そして、全裸で便座の上に立たせ、ローターをクリと両乳首、バイブをマンコに装着し、五時間イキ地獄＋おしっこ我慢を行っていた。

それぞれのスイッチを入れて十分もしないで鈴音は絶頂した。

その後も、五分刻みにイキまくる。

おかげで、始めてたったの一時間で３０以上の絶頂をして、尿意がすでに溜まりに溜まっていた。

「ほら、おしっこ漏らしたらチンコお預けで今日のデート強制終了だぞ～。それでもいいのか～？」

「い、嫌、れす……！」

「じゃあ、あと四時間頑張れ～」

俺は、スマホでエロアニメを見ながら適当にエールを送った。

どうして俺達がこんな事をしているかと言うと、事の始まりは三十分前に遡る。

第55話　鈴音との初デート♡♡♡♡♡

三十分前。

「はぁはぁ……♡」

「お待たせ……って、何いきなり発情してんの？」

俺が部屋から出て、リビングに行くと、そこには立ったまま発情している鈴音がいた。

鈴音の格好は白の長Tに超がつくほどのミニスカート。

白の長Tはスケスケで、薄いピンク色の乳首と乳輪が丸見えになっていた。

ミニスカはほとんどパンツを隠しておらず、黄色のTバックが丸見えになっていた。

「ってか、座ってて良かったのに」

「い、いえ……！　ご主人様をお待ちするのに、座るなんて奴隷としてしてはいけませんから」

鈴音は最初、俺に対してちょっと舐めたような態度があった。

逆レイプしてきた時には驚いたけど、その後にリサと喧嘩を繰り広げるんだもんなぁ～。

しかも、俺に対しての気持ちや忠誠心が足りなくてちょっと苛ついてた。

だけど、今では俺に対して完全服従していて、俺の事を『ご主人様』と呼んで、俺へのご奉仕が至福となるまで堕ちた。

リサとも仲良くなって、今では爆乳姉妹のドエロご奉仕！　と勝手に呼んで俺は楽しんでいる。

姉妹ではないけど、仲がいいし、二人とも爆乳だからいいかなと思ってそう言ってる。

「んで、なんでそんなに発情してるの？　今日のデートが楽しみなのは分かるけどさ」

「そ、それは……」
なんだ？　急にモジモジしだして。
「さっさと言え。時間の無駄だ」
「ひゃ、ひゃい……！　きょ、今日のデートで沢山イキたいなと思ったので、あのくじ引きの日から今日までずっとオナ禁をしていたんです……」
「へぇ～。オナニー狂の鈴音がオナ禁ね～。しかも一ヶ月間も」

くじ引きとはなんぞや？　と思われた方。
その全貌は今度投稿される【逆転世界・元女子校。初の短編『ドキドキ？　ハラハラ？　零とのデートくじ引き！～中出し回数で順番が決定♡～』】で明らかになりますので、楽しみに待っていてください。
そちらが投稿されたら、それと合わせてこの本編を楽しんでください！

と、まぁ告知はこの辺にして。本編に戻ろう。
「じゃあ、今少しでも触ったらすぐにイッちゃいそう？」
「は、はい……♡」
「そっか。じゃあ、ゲームしよう」
「げ、ゲーム、ですか……？」
ポカンとした可愛いよ。
「そ。ゲーム。今から公園の多目的トイレに行って、鈴音の乳首とクリ、マンコに玩具を仕込む。そんで決めた制限時間の間におしっこを漏らさなかったら、デートをする。もし漏らしちゃったらデートはしない。どう？」
「そ、それはイクのは大丈夫なんですか……？」
「うん。イクのは何回でもいいよ。何十回でも何百回でも何千回でも好きなだけイッて。ただし、おしっこは駄目。どうする？　やる？　やらない？」

「……や、やります……！」
「よし。よく言った。じゃあ、部屋から玩具持って来て。公園行くよ」
「は、はい……！」
こうして俺達は、公園へと向かった。

♡　♡　♡

そして、今に至る。
「んおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡」
トイレの便座の上で、全裸でガニ股になり下品な喘ぎ声を上げて感じまくる女子。
エロすぎるだろ。
「ご、ご主人様ぁぁぁ……♡♡♡　お、お時間、ま、まだでずがぁぁぁぁ♡♡♡」
「まだまだ～。あと二時間あるよ～」
ちなみに、この『五時間』を決めたのは鈴音だ。
俺は正直、一時間くらいを考えていたんだけど、鈴音から「ご、五時間がいいです！」と言われた。
なんで五時間なのかは、正直分からない。
まぁ、俺からしたら尿意を我慢しながらイキまくる女を長時間見れてラッキーなんだけど。
「ほれほれ～。頑張れ～！」
「んおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡　バイブグリグリはヤバいぃぃぃぃぃぃぃ♡♡♡」
俺は鈴音に近づき、マンコにぶっ刺さってるバイブを上下左右に動かす。
「あ～。ちょっとおしっこしたいから、出すな」
俺はズボンをパンツを脱ぎ、目の前の鈴音に向かって放尿を始めた。

「んあああああああああああああああ♡♡♡　ご主人様のおしっこあちゅいいいいいいいいぃ♡♡♡　おしっこの臭い嗅ぐの駄目ぇぇぇ♡♡♡　が、我慢してるおしっこ勝手に出ちゃうぅぅぅぅぅ♡♡♡」
「出すなよ～？　出したらデートはなしだ」
「は、はいいいいいぃ♡♡♡」
俺は鈴音におしっこをぶっかけながら、鈴音がおしっこするのを禁ずる。
「ほれ」
「んあああああああああああああああああああああ♡♡♡♡」
俺は乳首のローターを押し込む。
すると、イキまくって敏感になってるからか、それだけの刺激でも感じまくり、イキまくった。
「お。あと一時間半だ。頑張れ～」
「ひゃ、ひゃいいぃ……♡♡♡」
放尿を終えた俺は、手を洗い再びエロアニメを見始める。
「ご、ご主人様のおちんちん、ピクピクしてる……♡」
エロアニメを見てさらに勃起し始める俺のチンコを見て、さらに興奮しまくる鈴音。
こいつ、本当にあと一時間半耐えられるのか？

第５５話　鈴音との初デート♡♡♡♡♡（後書き）

伊藤　鈴音のデート回です！
ですが……零とデートするには、五時間おしっこを耐えなければならず……。
果たして、鈴音は五時間の尿意に耐え、無事に零とデートできるのか？
次回をお楽しみに！

本編の中でも触れましたが、【逆転世界・元女子校】初となる、短編を投稿したいと思っております！
その第一弾として、零とのデートの順番を巡るくじ引きを行う様子をお届けしたいと思います！
投稿は『７／１』を予定しております！
状況次第で、投稿が遅くなってしまうことがあるかもしれません……！
どうか、ご承知おきいただいて、楽しみにしていただけますと幸いです……！
それでは、短編、本編合わせてお楽しみに！

第５６話　鈴音へお仕置きイラマ♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ
「ぐんむぅぅぅ♡♡♡♡　ぐぼぼぼぉぉ♡♡♡」
公園のトイレで、全裸でイラマをされる女子――伊藤　鈴音。
鈴音の口を犯しているのは、俺のチンコ。
「オラ！　もっと飲み込め！」
「ぐぼぉぉぉぉぉ♡♡♡」
俺は、鈴音の頭を掴み無遠慮に腰を打ち付ける。
俺のチンコは、鈴音の喉奥のさらに奥に入り込む。
相当苦しいのか、鈴音はえずき始める。
唾液と胃液が溢れ、口の端から泡と混ざりながら漏れ始めている。
しかし、俺は一切容赦をしない。
「オラァ！」
「んぐぅ！？」
腰を突き出すのと同時に、鈴音の頭を引き寄せる。
それにより、さらに深く突き刺さることに。
「んんぅーーーーーーーー！？」
息ができなくなってきて最高に苦しくなったのか、鈴音は涙を流した。
どうしてこんな事をしているのか。
「自業自得だよな！」
それは、ほんの少し前に遡る。

第５６話　鈴音へお仕置きイラマ♡♡♡♡♡

「んひぃぃぃぃぃ……！？」
「あと三十分だぞ～！　頑張れ～！」
鈴音はずっと尿意を我慢していた。
何度も何度もイッてはしまうのだが、おしっこだけは漏らさない。
「最後に～」
俺は鈴音に近づき、乳首のローターとクリのローターを押し込む。
すると、それが引き金だったらしく――、
「ら、らめぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」
ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡
「あああああああああああ！？　お、おじっごどまらないぃぃぃぃ！！！！！」
鈴音はド派手に漏らした。
あっという間に床に水溜りを作っていく。
「あ～あ。漏らしちゃった～」
「ら、らっでぇぇぇ！　ご、ご主人様がぁぁぁ！」
「何？　俺のせいなの？」
「ぞ、ぞれは……」
俺は失禁中の鈴音の背後に回る（便座の上に立っているので、後ろに並び立つ）。
「オラ」
「んひぃぃぃぃ！？♡♡」
背後からローターごと巻き込んで乳首を握りつぶす。
そうする事で、ローターの振動が乳首により伝わり、さらに痛みも合わさり刺激が強くなる。
「お～、勢いがさらに増したな」
「んあああああああああああああ♡！♡！♡！」

乳首の刺激を受け、鈴音のおしっこの勢いと量はさらに増す。
ぶじょじょじょじょじょぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡
「あっ、あっ、あああああああああああ！！」
がに股で失禁する女子、最高にエロい！
「ほらほら、もう漏らしちまったんだから、我慢しないで全部出しちまえよ～」
「んあああああああああああああ♡♡♡♡♡　ぜ、全部出ちゃいますうううう♡♡♡♡」
この後、鈴音の失禁は二十分以上続いた。

♡　♡　♡

「じゃあ、お仕置きだな」
「お、お仕置き……ですか……？」
失禁を終えた鈴音は、便器の上に力なく座っている。
「あぁ。我慢ができなかったんだ。お仕置きをするのは当然だろ？」
「は、はい……」
「あ、ちなみにデートはなしだからな」
「え！？　そ、そんな――んごぉ！？」
俺は鈴音の言葉を遮り、チンコを口の中にぶち込んだ。
「んぐっ……！　ぐぶっ……！」
「今から、二時間のイラマタイムだ」
「ぐ、ぐぶっ……♡」
こうして、冒頭の時間に戻る。
ちなみに、冒頭のイラマは一時間が経過した頃だ。

♡　♡　♡

【冒頭の続き】。
「ほらほらほら！　後一時間だぞ！　その間に鈴音はどれだけ俺の

精液を飲むのかな！」
「ぐぶぶ……！　ぐもぉぉ……！！」
俺はすでに5発射精している。
その全てを鈴音の喉奥に打ち付け、強制的に飲み込ませている。
えずきながらも全て飲み干していく鈴音。
それが、めちゃくちゃいい！
「んんぅーーーーーーー！　んぶぅぅ！！　ぐぶぶぅぅ！！！」
俺はどんどん腰の動きを激しくしていく。
これ、俺が持たないかも……！
あとどのくらいだ……？　一時間か……？
「ぐっ……！　出るっ！」
ドビュル！！！　ビュルルゥゥゥゥ！！！！
「んぶぶぶーーーーーーー！！！　んぐんぐっ！？」
「はぁはぁ……！　まだ、まだぁあああ！！！」
「んぐぅぅぅ！！！！」
この後、俺はさらに6発射精した。
イラマをされ続けた鈴音は、便座の上で意識を失ってしまった。

第５６話　鈴音へお仕置きイラマ♡♡♡♡♡（後書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！
今回は諸事情があり、短めになってしまいました……！
不完全燃焼感があるかもしれません……ですが、少しでも楽しんでいただけましたら、幸いです……！
おしっこ我慢、失禁、イラマ。鈴音のデートはどうなってしまうのか？
次話をお楽しみにしていてください！

第57話　私のご主人様への想い♡♡♡♡♡（前書き）

サプライズ？　投稿となりました～！
皆様に喜んでいただけたら、とても嬉しいです！

あまり長くはないのですが、鈴音目線での回となっているので、鈴音の変態さや想いを楽しんでいただけたら幸いです！

それでは、本編をどうぞ！

第57話　私のご主人様への想い♡♡♡♡♡

『鈴音、なんでこんな事もできないんだ？』
ご、ごめんなさい……！　ちゃ、ちゃんとしますから……！
『こんの！』
あああああああああ！！
ご主人様が私のおっぱいをビンタしてださる。
『ったく、おっぱい叩かれて喜びやがって、このくそったれマゾがよ！　これは仕置だぞ！』
ご主人様がおっぱいだけでなく、頬にもビンタをしてくださる。
何度も何度も頬とおっぱいにビンタをしてくれる。
あああああああ……イッグぅ……♡
『ビンタされただけでイクとか、どんだけ変態なんだよテメェは。そんなにビンタが気持ちいいなら、今後はビンタだけにしてやろうか？』
う、嬉しいけど……オマンコも穿（ほじく）ってもらいたい……♡
『な～に俺に口答えしてんだ？　性奴隷の分際で、ご主人様に言い返すなんていい度胸じゃねぇか！』
あああああ♡♡♡　ご主人様がオマンコを踏んづけてくれる♡♡
あああああああああ♡♡♡　ご主人様の電気あんま気持ちよすぎるぅぅぅ♡♡♡
『こいつ、仕置で感じてやがる……テメェへの一番の仕置は「何もしないこと」だな！』
そ、それだけは勘弁してください……！？　わ、私……ご主人様にいじめてもらえないと、生きていけないんですぅ……！？
『だったら、もっとドMらしくみっともなく喘げ！　鳴け！　喚け！　テメェは人間じゃなく喘ぐ事しかできなぇただの性の塊だぁ！』

は、はいぃぃぃ♡♡♡
あああああああああああああああああああああああああ♡♡♡

「はっ！？」
「起きたか？」
「ご、ご主人様……？　あれ……？　電気あんまは……？」
「ん？　電気あんま？　何言ってんだ？　大丈夫か、鈴音」
あれ、夢だったんだ……なんて最高な夢……♡♡♡
「そういや、どんなエロい夢見てたんだ？　潮吹きっぱなしだったぞ？」
「え！？　ご、ごめんなさい……！　お見苦しいものを……！」
「いや。潮を吹きながら眠る女。最高にエロかったぜ！　写真にも動画にも収められたから俺は満足してる」
「ご、ご主人様が喜んでくれたなら、良かったです……♡」
軽蔑されなくてよかった～……。でも、夢の内容を言ったら絶対に引かれるよね……。
「で？　どんな夢見てたんだ？」
「え……！？　い、いや……それは……」
「言えないのか？」
「その……おそらく引かれてしまうので……」
私がそう言うと、ご主人様は私の頭を優しく撫でてくれた。あ、気持ちいい……♡
「俺は鈴音がどんな夢を見ていようと、絶対に引いたりしないよ。俺は、鈴音の事が大好きだからな」
「っ♡♡♡　ず、ズルいです～♡」
ぷしょ♡　ぷじょじょ♡♡
「嬉ションって、鈴音は犬みたいだな。瑠李に続いて、俺のペットになるか？　瑠李はブタだから鈴音はイヌ。どうだ？」
「っ♡♡♡　なります！　なりたいです！　私、ご主人様のペットに！　イヌになりたいです！　ならせてください！」

「本当にいいのか？　家の中だと二足歩行は禁止だし、おしっこもトイレは使っちゃいけなくなる。外での散歩も全裸で四つん這いだぞ？　それでも――」
「お願いしますっ！　それでも、いいえ！　それがいいんですっ！　わ、私を……私をご主人様のオナペットにしてください……！」
涙が溢れてきちゃう……。あまり気にしないようにしてたけど、やっぱり私、瑠李さんが羨ましかったんだ……。
ご主人様のペットとして生きていける事が、とんでもなく羨ましかった……。だから、ご主人様からの提案はとても嬉しかった。
だからこんなにもみっともなく懇願してしまっている。
私がご主人様の腰に抱きつきながら、号泣しながら懇願していると、再び頭を撫でてくれる。
「泣くな。そんなに泣かなくても、俺のペットにしてやる。鈴音は今日から俺のペットだ。俺のイヌだ」
「ご、ご主人様……♡」
あ～♡　やっぱり大好きだなぁ……♡
もう一生、この人に飼われて、いじめられて生きていきたい♡
「んで？　どんな夢を見てたんだ？」
「えっと……」
私は夢の内容を、包み隠さずご主人様にお話した。

♥　♥　♥

ご主人様に夢の内容を話したら、引くどころかそんな願望があったなら早く言ってくれと受け入れてくれた。
どうやらご主人様は、あの高飛車女以外にはあまり乱暴をしたくないらしい。
でも、本人にされたい願望があるならしてあげたいと思ってくれているらしい。
なので私は思い切って言ってみる事にした。

「私の事をもっと乱暴に扱ってください……！　暴力をいっぱい振るって、私が壊れるくらい乱暴にしてください……！」
「分かった。じゃあこれからはめちゃくちゃ乱暴に行くからな。それに『お前』とも言う」
「はい……♡」
ご主人様は、基本的に『お前』と言わないようにしているらしい。ちゃんと名前を呼びたいからって。
だからこそ、『お前』と言ってもらえるのがすごく嬉しい♡
ご主人様に支配されてる実感が得られるから……♡
「それじゃあ、行くか」
「えっと……どこに……？」
「デートにだよ」
「え！？　で、デートはなしなんじゃ……」
ご主人様にゲームで負けて、デートはなしになったはず……。
「まぁ、鈴音も頑張ってたからな。ご褒美だご褒美。それに、ペットになったんだから首輪とリードを買いに行かないと。鈴音専用のペット用品、沢山集めないとな」
「っ～～～～～～♡♡♡　あ、ありがとうございます……！」
何これ……！　幸せ過ぎて死んじゃうよぉ……！
「それじゃあ行くぞ。俺のイヌ」
「わ、ワンッ♡」
鳴くのって、こんなに興奮するんだ……♡
私達はトイレを出て、買い物に向かった。
ご主人様とのデート♡　楽しみすぎる♡
ちなみに、私の格好は全裸だ。もう服なんていらない。だって私はイヌだから♡

第５７話　私のご主人様への想い♡♡♡♡♡（後書き）

各キャラごと４話ずつを予定しております！
そして、その４話の中で１話は必ずヒロイン目線で書きたいと思っております♪
なので鈴音回はあと１話あります！　残りの１話で二人のデートがどうなるのか、楽しんでいただけたら幸いです！

この続きは６／１３（金）に投稿させていただきます！
エロエロに書けるように頑張りますので、楽しみに待っていてください♪

第５８話　全裸デートの後は気を失うまで……♡♡♡♡♡

公園のトイレで鈴音をいじめまくり、俺のペットとなることが決定した後。
俺達はようやくデートを開始した。
俺は普通に服を着ているが、鈴音は全裸だった。
鈴音が言うには「イヌに服は必要ありませんから♡」だそうだ。
隣で全裸で楽しそうに歩く鈴音。正直ムラムラしてしょうがない。
でも、お楽しみは後に取っておくとして、ここはしっかりとデートを楽しもう！
俺達がやって来たのはペット用品を沢山扱うお店。
ここで、鈴音の首輪やリード、お散歩用のバックなどを買おうと思う。
「いらっしゃいませ――っ！」
店に入ると、丁寧にお辞儀をして迎えてくれた女性店員がいた。
その人は、頭を上げた時、鈴音の格好に驚き目を見開いた。
しかし、別に何か言うわけでもなく、ただ頬を赤らめ、羨望の眼差しを鈴音に向けるだけだった。
「あの」
「は、はいっ！」
俺がその店員に声をかけると、裏返った声で返事をし、慌てて穿いているスカートの裾を押さえた。
チラッとそこを見てみると、太ももに液体が垂れてきていた。
興奮してんのか。エッロ。
「こいつに合うリードや首輪、散歩用のカバンを探してるんですけど、なんかいいのありませんか？」
「そ、そうですね……この子だと……この辺りとかお似合いになりそうですね」

興奮していても、仕事はきちんとこなすようで、しっかりと案内をしてくれた。
案内してくれた所には色んな種類の首輪とリードが置いてあった。
「あ……」
その内の一つ、黄色の首輪とリードを見て鈴音が声を漏らす。
「どうした？　これが気になるのか？」
「は、はい……可愛いなと思って」
「よし。これって試着とかできるんですか？」
「はい、可能ですよ」
「じゃあ……これとこれ。着けて」
「はい……♡」
鈴音は、俺が手渡した黄色の首輪とリードを嬉しそうに首に着けていく。
「ど、どうでしょうか……？」
「うん。よく似合ってる。可愛いしエロいよ、イヌ」
「っ～～～～～～♡♡♡　あ、ありがとうございますぅ♡♡♡　ちょ、ちょっとお手洗いに行ってもよろしいでしょうか……？」
「あぁ。いいよ。ここはお店だからさすがに汚すわけにはいかないからな」
「ありがとうございます」
鈴音は首輪とリードを外し、小走りでトイレへと向かった。その度におっぱいがブルンブルン揺れるのが堪らなかった。
「さて、お姉さん」
「っ！　ひゃ、ひゃい！」
「興奮してますよね？」
「い、いや……その、あの……それは……」
「隠さなくていいです。もう太もも愛液でびちゃびちゃですよ」
「っ！？　すみません！　すみません！　男性がこのお店にいらっしゃるのが初めてで、そもそも男性を生で見たのが初めてで、会うのも初めてで……！」

女性店員は、必死に頭を下げ謝ってくる。
「そんなに謝んなくていいですよ。発情する女、俺大好きですから」
「っ！　ほ、本当ですか……？」
「えぇ。今日はチンコをあげる事はできないんですけど、今ここで俺のチンコを見ながらのオナニーなら許してあげますよ。どうですか？」
「い、いいんですか！」
「えぇ。でもいいんですか？　こんな場所でオナニーなんて、恥ずかしくないんですか？」
「は、恥ずかしいですけど、恥ずかしさよりムラムラが我慢できなくて……！」
「じゃあ、はい」
「っ～～～～～～～♡♡♡　こ、これが男性のおちんちん……♡♡♡」
女性店員は、その場でしゃがみ込み、俺のチンコの前に顔を近づけてオナニーを始めた。
タイトなスカートなので、しゃがみ込むことで簡単にめくれてしまう。
お～ノーパンか。
「いつもノーパンなの？」
「は、はい……♡　んっ……♡　私、基本的に服が嫌いなので、んあ♡　家では全裸で、外ではノーパンで過ごしてます♡　んっ♡　本当は外でも全裸でいたいんですけど……♡　んあ♡」
「んじゃあ、いればいいじゃんか。鈴音みたいにさ」
「で、ですが……」
「俺のもう一人のペットは常に全裸だぞ？　それに他の彼女達だって全裸で過ごす事が増えてる」
「ほ、本当ですか……？　じゃあ、私も……！」
そう言って女性店員は服を脱ぎ、全裸になった。
と、そのタイミングで鈴音が帰ってきた。

「ご、ご主人様！？　陥落させたんですね！」
「怒んないのか？　デート中に他の女となんて」
「怒るなんてとんでもない！　ご主人様はいつでもどこでも世の中の女を陥落させて、奴隷にしていいんですよ♡」
ことごとく俺に都合のいい世界だな。
「でも安心してな。精液は出さないから。後でホテル行った時にお前にたっぷり出してやるから」
「っ～～～♡♡♡　ありがとうございます♡♡♡　わ、私もオナニーをしてもいいでしょうか……？」
「あぁ。いいぞ」
そうして、店内で二人のオナニーショーが始まり、俺はムラムラを溜め込んだ。
ホテルで鈴音をめちゃくちゃに犯すために！

♡　♡　♡

俺達は移動をし、ラブホにやって来た。
部屋を選び、エレベーターに乗る。
エレベーターが目的の階に着くまでずっと手は繋いだまま。
そして、目的の階に。選んだ部屋に到着し入室する。
鈴音が先に入り、俺が後から入る。鍵を閉めた俺は、靴を脱ごうとしている鈴音に後ろから抱きつく。もちろん、おっぱいを揉みながら。
「んっ……♡　ご、ご主人様……？」
「なぁ、さっき、本当はどう思ったんだ？」
「え……？　さ、さっきとは……？」
「俺が他の女にうつつを抜かしてる時だ」
「っ！　と、特には……」
「嘘をつくな。正直に言え。本当はどう思った？」
俺はギンギンに勃起した乳首を、力強く抓る。

「お　お　ぉ　♡♡♡　ご、ご主人様ぁ♡」
「ほら、言え。言わないとコレ、止めるぞ？　と言うか、今からエッチもせずに帰る」
「っ！？　そ、それは嫌、です……！」
「だったら言え。さっきは本当はどう思った？」
「……す、少しだけ、本当に少しだけ嫌でした」
俺は何も言わず、鈴音の言葉に耳を傾ける。
「ご主人様はこの世界の女を全て隷属させて屈服させるお方なのは分かってます。分かっているんです。他の女性（ひと）とシているのだって当然だって思ってます。でも……今日はデートなのにとか、デート中なんだから私だけを見て欲しいとか、今は私にだけ興奮して欲しいとか、訳の分からない感情が渦巻いて……！」
鈴音は泣いていた。
おそらく、初めて抱く感情なのだろう。
前世の世界では、こんな感情を抱くのは女として当然だし、もっと面倒くさい感情を抱く女だっていた。
でも、この世界は全てが逆転している。
つまり、女に【嫉妬】や【支配欲】と言った感情がそもそも備わってないんだ。
鈴音の気持ちを聞くまでは全然気づけなかった。
大事な女の事を察してやれないなんて、主として失格だな。もっと知っていくべきだな。
俺は鈴音を少しだけ強く抱きしめる。
「ご、ご主人様……？」
今までとは違う抱擁に驚いたのだろう。涙で濡らした顔をこちらに向け、可愛く首を傾げている。
「鈴音。その感情はな、女の子が抱かなきゃいけない感情なんだ」
「そ、そうなんですか……？　この感情を抱いて、私、ご主人様に嫌われたりとか……」
「それは絶対にない。むしろ嬉しくなってもっと好きになる」

「っ♡」
俺は答えながら鈴音の耳を軽く甘噛みする。
「さっき、鈴音の中で渦巻いた感情を俺にぶつけろ」
「え……？」
「俺に対して怒りを抱いてもいい。犯したいと思っていい。その全てを俺にぶつけてこい。今から鈴音の感情を発散させる時間だ」
「い、いいんですか……？」
「あぁ。これは、俺の主としてのけじめだ」
俺は鈴音の向きを変え、向き合う状態にする。
「さぁ、今の鈴音の感情、全部ぶつけてこい！」
「っ！　わ、分かりました……！　では、ぶつけます……！」

♥　♥　♥

「じゅぼぉ♡　ぎゅぽぉ♡　ぎゅぼぉ♡」
私は今、玄関でご主人様にフェラをしている。
もうすでに3発出してもらっている。けど、フェラは止めない。
ご主人様は私の感情を全部ぶつけていいって言ってくれた。
この感情がなんなのかよく分かんないけど、私は感情のままにご主人様に思いをぶつける事にした。
そしたら、フェラを止める事ができなくなってしまった。
「ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　じゅるるるるるるるるるる♡♡♡」
「くっ……！」
感じてるご主人様、最高に素敵♡
ご主人様が射精(だ)しても私は一切動きを弱めず、むしろ激しくしてご主人様の精液を搾り取る。
こんなの、リサが見たら怒るかもしれない。
「大事なご主人様になんて事をしてるの！　ご主人様の体力やペースを考えなさい！」って。

でも、もう今の私は私を止められない。自分で自分を制御できない。
もっと射精(だ)してほしい♡
もっと感じてほしい♡
もっとイカせたい♡
それだけが頭を支配して、私を動かしていく。
「出るっ！」
ドビュルッ！！！　ドビュッ！！！　ドビュッビューーーーーー！！！！！
「んっぷ……♡♡♡」
ご主人様の精液、喉奥に来たぁ♡♡♡
４発目とは思えないほどの威力と量と濃さ♡♡♡
ドロッドロで液体と言うよりゼリーに近いかもしれない♡♡♡
喉に絡みついて飲み込めないけど、それがまた堪らない……♡♡♡
「ぎゅっぽん♡　次はベッドに……」
「あぁ。分かった」
私は生意気ながらもご主人様に、ベッドに行きたいと伝えた。
ご主人様はそれを快く受け入れてくださった。
それより、口からおちんちんがなくなるとものすっごく寂しい……。
「まるで、あるべきものがなくなったみたい……」
私はご主人様に聞こえないように小さく呟いた。
ご主人様はすでにベッドにおり、仰向けで横になっていた。
おちんちんは４発も出したとは思えないほど、いきり立っており、亀頭が天井目掛けて反り立っていた。
ご主人様は仮性包茎で普段は可愛いけど、勃起して剥き剥きするとものすごくかっこよくなる♡
「失礼します♡」
私はベッドに上がり、ご主人様の足の間に入る。
「じゅろぉぉぉお♡♡♡♡♡」

そして、いきなり喉奥までギンギンおちんちんを咥え込む。
「ごめん、出るっ！！！」
ビュルッ！！！！　ビュッビューーーーー！！！！
「んんっ！！！」
咥え込んだだけで喉奥に中出ししてもらえた♡♡♡
え……♡　幸せ過ぎない……？♡
女にとって「少し手コキしただけ」「咥えただけ」「挿(い)れただけ」で射精してくれるのは最大の幸せ。少なくとも私はそう思ってる。
自分のテクを磨いていつか、ご主人様にそうなってもらいたいなと思っていた。
その夢が叶うなんて……♡
「悪い……気持ちよすぎて咥えられただけでイッちまった……」
恥ずかしそうに、申し訳なさそうにシュンとなるご主人様……可愛すぎる♡♡♡♡♡
その表情だけで子宮妊娠しちゃうよぉぉ♡♡♡♡
「ごくん……♡　ぷばぁ♡　気にしないでください♡　すぐに出してくれるくらい気持ちよくさせれてるんだって嬉しくなるのでご主人様は、何も気にせずたっくさん出してください♡♡♡　今日はこの玉玉の中身、全部もらいますから♡♡♡」
「あぁ。全部鈴音にやるよ」
よぉ～し！　頑張るぞ～～～！！！

♥　♥　♥

「どうしよう！？　頑張りすぎちゃった！？」
私の目の前には、よだれを垂らしながら気を失っているご主人様がいた。
「ご主人様ぁぁぁぁ！？　申し訳ございませんーーー！！！！」
私はあの後、エンドレスてフェラを続けた。
もう何発射精(だ)してもらったか分からない。でも、分からなくなっ

てきて少ししたら、ご主人様が動かなくなってしまった。
「どうしよう……！？　どうしよう……！？　あ！」
私はある事を思い出した。
それは、私が白下家でお世話になることになった日。
『もし、エッチ中にお兄ちゃんに何かあったらすぐに電話して。なんとかするから』
と、燐さんに言われていた。
「燐さん……燐さん……！　お願い出てください……！」
私はスマホで燐さんに電話をかける。
コールがいつもより長く感じる。
『はいは～い？　どったの～？』
出た！
「燐さん！　助けてください！　ご主人様が気絶してしまったんです！！！」
『お兄ちゃんが気絶！？　何があったの！？』
私はありのままを話す。
『ふへぇ～……私の作ったドリンクのせいで性欲が収まらないお兄ちゃんを、射精地獄で気絶させるなんて、すずすずもやるな～』
「わ、私はどうすれば……」
半泣きで尋ねると――、
『はいはい、泣かない泣かない。そのまま寝かせておいてあげて』
「え……？」
『最近お兄ちゃん忙しそうだったし、こんなタイミングでもないとゆっくり寝れないでしょ。それに、お兄ちゃんの眠りを妨げるなんて、絶対にしちゃいけないよ』
「っ！？　は、はい……！」
最後の言葉が低い声だったので、私は背筋を凍らせながら返事をした。
『すずすずもゆっくり寝て、明日二人で帰ってきな』
「は、はい！　ありがとうございます！」

通話を切る。
「このままか……私、ご主人様と一緒に寝られるの……？」
念願だった、同じベッドでの睡眠。
「ぐへ……♡　ぐへへ～♡」
私はご主人様の横に寝っ転がる。
「ご主人様、寝顔可愛すぎるでしょ……♡♡♡」
この寝顔、マジで天使……♡♡♡
「天使って言ったら、怒られるかな……？」
私はそんな事を考えながら、そのまま眠りに就いた。

第５８話　全裸デートの後は気を失うまで……♡♡♡♡♡（後書き）

鈴音編ラスト、いかがだったでしょうか？
今回はこれまであえて触れてこなかった「女の嫉妬・支配欲」について触れさせていただきました！
過去のエピソードで、嫉妬する女子がいたりはしたかもですが、しっかりと話題に出すのは初だと思います（確か……）。
なので、そこも含めて楽しんでいただけたら幸いです！
貞操観念が逆転してるので、男心が女心に。女心が男心になっております！　そこを上手く表現できるように、これからも精進してまいります！

次話から別のヒロインとなります♡
誰になるのか、楽しみにしていてください♪

夜に、活動報告にて大切なお知らせをさせていただきます。時間は少し遅くなってしまうと思うのですが、チェックしていただけますと幸いです。

第59話　恋とのデートは、開始直後から……♡♡♡♡♡

「じゃあ、行ってきま～す」
『いってらっしゃい！』
俺が玄関から家の中に声をかけると、中から俺の愛しの女達の返事が返ってきた。
俺は玄関を開け、外に出る。
今日はデート。いや、今日　”も”　デートだ。
今日デートするのは、先輩であり、学校の生徒会副会長であり、俺専用便器女その2だ。
俺は待ち合わせ場所の駅に向かうと。
「お。いた」
そこには、今日のデート相手がいた。
「れ～ん」
「っ♡　れ、零様♡　おはようございます♡」
「あぁ。おはよう」
俺は、後ろからデート相手――香川　恋に抱きつく。もちろん、おっぱいを揉みながらだ。
「今日の格好、エロくていいね」
「あ、ありがとうございますぅ♡　零様に興奮していただきたくて頑張ってみましたぁ♡　喜んでいただけてよかったですぅ♡」
恋の格好は本当にエロい。
スッケスケのワンピースで、まるで透明な服でも着てるのかってくらいに恋の体が丸見えになっていた。
乳首も乳輪も丸見えで、パンツはTバックを穿いているのが丸分かりだ。
「こんな服、どこに売ってんだよ」
「し、知り合いが洋服を作るのが得意なので、特別に作ってもらっ

たんです♡」
「あ〜最高。なぁ、ここでシていいか？」
「も、もちろんです♡　お好きな時にお好きなだけなさってください♡」
「サンキュー！」
「んお〝ぉ〝♡♡♡」
俺は、恋のワンピースを捲り上げ、Tバックを横にずらしチンコを挿入する。
こんな公衆の面前でセックスなんて、マジで興奮する！
「んお〝お〝お〝♡♡♡　んお〝ぉ〝ぉ〝ぉ〝♡♡♡　お〝お〝お〝お〝♡♡♡」
俺は腰を容赦なく振り続ける。
その度に恋はとてつもなくエロい声を漏らす。
「お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝♡♡♡　れ、零様ぁ〝ぁ〝ぁ〝♡♡♡」
「すんげぇ声。見ろよ。みんなこっち見てんぞ」
駅を行き交う女達が、こっちをチラチラ羨ましそうに見てくる。
中には足を止め、オナニーをしている者もいる。
「もっと見せてやるか」
「んお〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝♡♡♡♡♡」
恋のワンピースを破り、裸にさせる。
そして、Hカップのおっぱいを力強く鷲掴みにしながらバックで激しく突きまくる。
「んお〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝♡♡♡♡♡　あああああああああああああ♡♡♡♡♡　イグッ！　イッぢゃいまずぅぅぅ♡♡♡♡♡」
「いいぞイケ！　他人が見てる中でたっぷり膣（なか）に注いでやる！！！」
「はぃぃぃぃ♡♡♡♡♡　注いでくださいぃ♡♡♡　私の子宮は、零様専用の精液タンクですぅぅ♡♡♡　入り切らないくらい注いでくださいぃぃぃ♡♡♡」

「くっ……！　出すぞ！」
「あああああああああああああああああ♡♡♡♡♡　イグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡♡♡」
ドビュッ！！　ドビュルルルルルルルッ！！！
ぷしゃあああああああああああああああ♡♡♡
俺の射精と、恋の失禁のタイミングが全くの同時だった。
「はぁはぁ……♡　れ、零様のおちんちん、気持ちよすぎますぅ……♡」
「今日はノーパンのままデートするぞ」
「はい……♡」
「じゃあ、ほら。まずは綺麗にしろ」
「はい♡」
チンコを抜いた後、恋は俺の前に跪き、お掃除フェラを始める。
それを、周りの女達は指を咥えながら羨ましそうに眺めていた。
本当、何度も思うけどこの世界すごすぎだろ。
「じゅる……♡　れろぉ……♡　ぢゅるるるるるるるるる♡♡♡　きゅぽ……♡　ご馳走様です♡」
「よし。じゃあ、行くか」
「はい♡」
恋はスッケスケのワンピース（ノーパン）で、マンコから逆流してきてる精液を垂れ流しながら、電車に乗り込んだ。

♡　♡　♡

「んっ……♡　んんぅ……♡　っあああ♡♡♡」
俺は今、電車の中で恋を犯していた。
立ちバックで恋のマンコを容赦なく犯していく。
恋が突かれる度、掴まってる吊り革に体重をかけるので、ギシギシと鳴る吊り革の音が、俺の興奮を際立たせてくる。
「んあぁ♡　あああ♡♡　あっはぁ……♡　ああん♡♡♡　あああ

ああ♡♡♡」
電車の中だと言うのに、恋は全く声を我慢したりせず、ワンピースを捲りあげられ、裸にされた状態で感じまくっている。
まるで、外でのセックスが当然かのように。
「あああああああああ♡♡♡♡♡　零様♡　零様♡　零様ぁ♡　も、もうイッちゃいますぅぅ♡♡♡」
その言葉を聞き、俺はラストスパートをかける。
「ああああああああああああああああああああ♡♡♡　イッグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡♡」
ビュルルルルルルルル！！！
ぶしゃあああああああああああああ♡♡♡
また、射精と失禁が同時だった。
「はぁはぁ……♡　お、お掃除いたしますね……♡」
恋はチンコを抜くとすぐに跪き、お掃除フェラを始めた。
「間髪入れずに、んちゅ♡　犯していただけるなんて♡　れるぅ……♡　幸せです……♡　ぢゅる……♡　大量の中出し、ありがとうございます♡　残り汁、全部吸い取らせていただきますね♡　ぢゅるるるるるるるるるる♡♡♡♡♡」
お掃除フェラを終えた恋は、俺の隣に立ち、幸せそうに腕を組んできた。
電車内は、オナニーで狂う女達で埋め尽くされていた。

第５９話　恋とのデートは、開始直後から……♡♡♡♡♡（後書き）

場所を変えただけで、おんなじじゃねぇか！！！
と、思われたかと思います。僕自身、書いていて思ってしまいました。
ですが、駅前で。電車内で。当たり前のようにセックスをする。興奮しませんか？
少しでも興奮していただけましたら、とっても嬉しいです♪
恋とのデートは、これまで以上にエッチしまくる事になるので、楽しみにしていてください♪

この続きは明日の１８：００に投稿されますので、お楽しみに！

第６０話　映画館でのセックスショー♡♡♡♡♡（開演準備）

電車を降り、俺達は映画館へと向かった。
「何見るんだ？」
「特には決めてないのですが……何か見たいものはありますか？」
「そうだな～……」
ちょっといいこと思いついたから、提案してみるか。
「なぁ、スクリーン前でセックスしてみないか？」
「そ、それはさすがに映画を見に来ている方々のお邪魔になってしまうと……」
「それは問題ない」
「ん……？」
俺は映画館のスタッフに声をかけ、提案をしてみた。
するとあっさり許可がもらえた。
スタッフ一同集まり、鑑賞してもいいかと聞かれたのでもちろんオッケーを出した。
そして、俺達はセックスショーをするスクリーンへと向かった。
放送で告知が入り、俺達のスクリーンには大勢の人が集まっていた。
「見ろよ。今からこんな大勢の人達に俺達のセックスが見られるんだぞ？」
「こ、これはさすがに恥ずかしいですね……」
「止めるか？」
「いえ！　そんな事は絶対にしません！　零様とのセックス、皆さんに見てもらいたいです！」
「だ、そうだ！　しっかりと見ろよ！」
『はい！』
俺はワンピースを脱がせ、恋を全裸にする。

その足にはとんでもない量の精液が垂れていた。
「おいおい、どんだけ溢れさせてんだよ。ちゃんと締めとけよ」
「す、すみません……！　こぼれないようにと膣を締めると、逆に押し出されてしまって……」
「まぁ、いいや。外に出た分、いや、それ以上にまた膣に注いでやる。精液が溜まって腹をぽっこりさせてやるからな」
「は、はい……♡　お願いします……♡」
「じゃあ、始めるぞ！」
「はい……♡　んおおおおおおおおおおお♡♡♡」
俺は、恋の膣に思いっきりチンコをぶち込んだ。
ここから、抜かず止めずのセックスショー開演だ！

第６０話　映画館でのセックスショー♡♡♡♡♡（開演準備）（後書き）

映画館のスクリーン前でセックスをする。それをみんなに見てもらう。

これ実は、高校一年生の時に妄想してた内容なんです♡

僕が通ってた高校は、バス→電車→バスと言った感じで、乗り継ぎをして通学をしていたんですけど、電車に乗る所の駅の近くに映画館がありまして、それを見ながら歩いていた時に突然思いつたんです。

思いついたとしてもその当時はオナネタとして妄想するだけで、特に何も役に立たなかったのですが、まさかこうして、役立てる日がくるなんて思ってもみませんでした。

基本的に、僕が書くエロ作品は学生時代の妄想が元となっております。

そこに、大人となった僕の妄想、偏見、構成、展開、微量の知識を加えて作品を作っております。

なので、皆様の癖（へき）にしっかりと刺さるのか未だに怖く、不安は拭えておりませんが、少しでも、本当に少しでも興奮して楽しんでいただけておりましたら幸いです……！

どうでもいい話をすみませんでした……！

（そして、本編が短すぎてすみません……！　次話はもう少し長めなので、お許しを……！）

次話は恋目線での回になります！

恋は何を思って、どう感じているのか？　少しでも恋の心の機微を描けるよう頑張ります！

この続きは明日の１８：００に投稿予定ですので、お楽しみに！

第61話　零様に、もっとめちゃくちゃに……♡♡♡♡♡

「んっ♡　あっ♡　あああ♡♡♡」
私は今、映画館で多くの人達に見られながら零様に激しく犯していただいている♡
「んっ♡　んっ♡　んんぅ〜〜〜〜♡♡♡」
私はもう、何度も何度もイッていた。
膣(なか)を零様のおちんちんが、何度も何度も抉ってくる♡
子宮の奥に簡単に挿入(はい)ってきて、オマンコだけでなく子宮も犯してくださる♡
「れ、零様ぁぁ♡♡♡」
「ん？　どうした？」
私の腰を力強く掴みながら、激しく腰を打ち付けてくれる零様が、額に汗を浮かばながら微笑みかけてくれる。
「っ♡」
「うおっ！　急に締まってきた……！」
ドビュルルルルルルル！！！　ビュビューーー！！！
「んおおおおおおおおおおおお♡♡♡」
な、中出し来たぁぁぁぁ♡♡♡
子宮にバシャバシャ当たってぇ〜♡
ううん♡　当たると言うより、流し込まれてるぅ♡
も、もう私はこれがないと生きていけない体になってしまった♡
私は会長と一緒に零様を拉致して、無理矢理セックスをしてしまった。
それがバレ、私達は罰を受けた。そして、お許しいただく際に、零様の専用便器になる事になった。
とても嬉しかった♡　大好きな方の排泄物を自分の口やオマンコで受け止める事ができる♡

そんなの、私にとって幸せでしかなかった♡
その日以来、私の頭と心の中は零様だけになった。
毎日毎日零様の事を考え、毎日零様の事を想いオナニーをした。
零様零様零様

いい♡♡♡」
「了解！　ここからはお仕置きセックスに変更だ！」
「はいいいいぃ♡♡♡」
零様のお仕置き、嬉しいいぃ♡♡♡

第６１話　零様に、もっとめちゃくちゃに……♡♡♡♡♡（後書き）

恋の心の機微、書けてましたかね……？
ほとんどエロい事しか考えてなかった気が……。

さて、次話はついに恋回最後となります！
映画館でのお仕置きセックスショーが繰り広げられますので、楽しみにしていてください！
１８：００に投稿されますのでお楽しみに！

第62話　ヤりまくりお仕置きセックスショー♡♡♡♡♡（開演中）

「んおおおおおおおおおおおお♡♡♡　中出し来たぁぁぁぁ♡♡♡」
俺は、恋の膣（なか）に何回目か分からない中出しをした。
すでに一時間以上が経っており、俺達はずっとセックスしまくっていた。
お仕置きを求められたので、お仕置きセックスを開始した。
俺のお仕置きが気に入ったらしく、ずっとお仕置きしてほしいと懇願してきた。
なので俺は、恋の手首を掴み後ろに回しながら腰を激しく打ち付けている。
「あああああああああああ♡♡♡　中出ししてるのに止まらない打ち付け、最高すぎるぅぅぅぅ♡♡♡」
中出ししながら腰を打ち付け続ける。
「こっち向け」
「んひゃぁ♡」
俺は射精中のチンコをマンコから抜き、恋をしゃがみ込ませ顔にぶちまける。
恋の顔に大量に精液がかかっていく。全然止まる気配がしない。
「咥えろ！」
「んぶぉ♡♡♡」
射精中のチンコを口にぶち込み、喉奥に精液を流し込んでやる。
「んくんく……♡♡♡」
恋の頭を押さえ、前後に動かす。
射精が止まってないのに、この刺激によりさらに射精してしまう。
とんでもない量の精液が、恋の口の中に注がれていく。
「ごくごくごく……♡♡♡」
（あぁ～……♡♡♡　零様の射精長～い♡♡♡　最高すぎるぅぅぅ

ぅ♡♡♡♡　もっと♡　もっと飲ませてぇぇ♡♡♡）
「そら！」
「ぎゅぽん♡　んあああああああああああ♡♡♡」
（く、口からいきなり引き抜かれてマンコぶっ込み来たぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　射精ずっと続いてるぅぅ♡♡♡）
やべぇ……！　これずっと射精しっぱなしなんじゃないか……？
本当に全然止まらないんだけど！
「んあああああああああああああ♡♡♡　もっとぉ♡♡♡　もっとお仕置きしてくださいぃぃぃ♡♡♡」
「あぁ！　このまま中出ししながら犯しまくってやる！」
「ありがとうございますぅぅぅ♡♡♡♡♡」
大勢の女達に見られながら、俺達は五時間もの間、セックスをし続けた。

♡　♡　♡

「はぁはぁ……」
俺達は今、スクリーンの床に座っている。
恋のマンコからは、ありえないくらいの精液が逆流してきていて、床にあっという間に水溜りを作っていた。
「れ、零様……」
「ん？　どうした？」
「あ、ありがとうございました……♡　最高の一日になりました……♡　このデート、一生の思い出です♡」
「何言ってんだ？」
「え……？」
「まだデートは終わってねぇよ」
「ふぇ……？」
「この後、ラブホに行って、朝までヤりまくるんだよ。嫌か？」
「い、いえ……！　とてつもなく嬉しいです！！！」

「よし。じゃあ行くか」
「あ……その……」
「ん？」
俺が立ち上がると、横座りをしている恋が申し訳無さそうな表情を浮かべ、モジモジしていた。
「どうしたんだ？」
「あの……その……あ、足に力が入らなくて、その……た、立てなくて……」
「あ～なるほど」
ずっと立ったまま犯されてたから、腰が抜けたんだな。可愛い奴め。
「ほら」
「え……」
俺は恋の前で背中を向けてしゃがみ込む。
「おぶってやる。さっさと乗れ」
「で、ですが……！　零様にそんな事をさせるわけには……！？」
そうだった。この世界だと男に重労働とか、こういうのはさせちゃいけないんだった。
ま、俺には通じないんだけど。
「いいから。乗れ。恋の中ではこういうのは女がやるものなんだろうけど、俺からしたら女にこういう事をしてやりたいんだ。だから、俺の気持ちを無駄にさせないでくれ」
「は、はい……！　で、ではお言葉に甘えて……」
恋が背中に乗ってくる。
恋は全裸だから、おっぱいの感触、足の感触、お尻の感触がダイレクトに伝わってくる。
やば……これ今度みんなにやろうかな。
「そら、行くぞ」
「す、少し恥ずかしいですね……男性にこうやっておぶってもらえる日がくるなんて、考えた事もないので」

「そこ？　オマンコ丸見えになるのが恥ずかしいのかと思った」
「それは全く。むしろ、大量に中出ししていただいたマンコを見てもらいたいです♡」
「あはは。本当にド変態だな。まぁ、そんな恋が大好きだよ、俺は」
そう言って俺は歩き出そうと、したんだけど――。
「馬鹿……」
「え？」
「そういうところが、ズルいんですよ……♡」
そう言って恋が少しだけ頬を膨らませながら俺の肩に顔を乗せて、そのまま眠ってしまった。
「俺、この世界に来て『馬鹿』って初めて言われた気がする……。照れながらの『馬鹿』は破壊力ありすぎるよな」
俺は自分でも分かるくらい顔を真っ赤にしながら、映画館を後にした。
もちろん、スタッフのみんなにはお礼をしっかりと言った。

第６２話　ヤりまくりお仕置きセックスショー♡♡♡♡♡（開演中）（後書き）

恋回ラスト、いかがだったでしょうか？
二人のラブ感、恋の可愛さが少しでも伝わっていれば幸いです！
最後に「俺、この世界に来て『馬鹿』って初めて言われた気がする……。」と書かせていただいたのですが、もしかしたら過去のエピソードで言われている可能性があります……。
僕自身が忘れてるだけで言われてるかもしれません。なので、お読みいただいている皆さん、過去のエピソードで言っていたら「言ってたよ～！」「初めてじゃないよ～」など、ご報告いただけますととてもありがたいです……！
至らない所が多い作者で、大変申し訳ございません……！

それでは、次話からまた新たなヒロインとなります！
誰になるのか、楽しみに待っていてください！
それでは、明日の１８：００に♪

第63話　澪との初デートは、便器スタート♡♡♡♡♡

「んぽぁぁぁぁ♡♡♡♡♡」
俺は今、とある家のリビングでおしっこをしている。
「れいしゃま〜〜〜♡♡♡　しゃいこうですぅぅ♡♡♡」
その家とは、生徒会長――星野　澪の家だ。
いや、より正確に言うなら、澪が　”買った”　家だ。
どうやら、俺の為に家を購入したらしい。
漫画やアニメでよく見るような豪邸で、部屋数も百を超えているらしい。
ここに、将来俺と一緒に住みたいんだそうだ。もちろん、他の女達も一緒に。
俺はこの家を初めて見た時に思った。夢で見た豪邸と似てるなって。あれはやっぱり予知夢だったのかもしれない。
「んぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ……♡♡♡」
俺のおしっこを美味しそうに、嬉しそうに飲んでいく澪。
口を大きく開けて、目を開けながら俺のおしっこを受け止めている。
飛び跳ねて目に入ってる気がするが、澪はそんな事一切気にせず、ただ俺のおしっこを味わえる喜びを噛み締めていた。
「ふぅ〜」
放尿が終わると、口の中に残っているおしっこを飲み干し、少し寂しそうな表情で俺を見上げてきた。
ちなみに、澪は今、全裸で俺の前に跪いている。
「おしっこ、ご馳走様でした♡　とっても美味しかったです♡　ですが、やはり終わってしまうと悲しいですね……」
「そう落ち込むな。今日はまだ長いんだから、沢山飲ませてやる」
「っ〜〜〜♡♡♡　ありがとうございます♡♡♡」

澪は体に飛び跳ねたおしっこを、指で掬い取りながら全て舐めていった。
「それじゃあ、そろそろ行くか」
「はい♡」
俺達は今日の本来の目的であるデートをする為、家を出ようとした。
「……その格好で行くのか？」
「もちろんです♡　零様にいつでもどこでも使ってもらえるように準備は欠かせません♡　それに、便器に服なんて必要ないんですよ♡」
澪は全裸のまま、外に出た。
「そうか。じゃあ、今日は便器としてしっかり役に立ってくれよ？　せっかくのデートなんだからな」
「はい♡　お任せください！」
俺達はデートへと向かった。

♡　♡　♡

「やべぇ……」
「ど、どうされました……？」
「さっき、店でがぶ飲みしすぎた……トイレに行きたい……」
俺達は今、バスに乗っている。
最初に向かったのは喫茶店だったんだが、そこで俺は調子に乗ってアイスを食べまくり、ジュースをめちゃくちゃ飲んでしまった。
その時は大丈夫だったんだが、次の目的地に向かっている最中、つまりバスに乗っている今、急激に尿意を催してしまった……！
「っ！　そ、それは気づけずに申し訳ございません……！　では、どうぞ……♡」
澪は一番後ろの席に座っている俺の前に跪き、口を大きく開けた。
「こ、ここでするのか！？」

「ふぁい……♡　れいはまは、いふれもろほれも、おひっほひへいいんれふお♡♡♡　わらひはへんひれふはら、たふはん、ふはっへふらはい♡♡♡」
　口を開けながら喋ってるから、何言ってるのかよく分かんなかったけど、もう尿意が限界だ……！
「じゃあ、出すぞ！」
「ふぁい♡」
「くっ！」
　じょぼぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！　じょぼぼぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！
「んっ！　んぼぉ♡　ごくごくごくごく……♡♡♡」
　周りに人がいるのに、俺は女子の口におしっこを出している。
　しかも、開けている口に向かって放尿しているので、チンコからおしっこが出ている所をバッチリ見られている。
　な、何気に恥ずかしいな……。
「す、素敵……♡」「おしっこを飲ませてくれるご主人様がいるなんて、なんて幸せなの……♡」
「あんな素敵な男性がこの世にいるだなんて……♡」
「羨ましいぃ～♡」「あの人は神様よ～♡」
　など、俺を見て周りの女達は歓声を上げる。
「やばい。この感じ全く止まらないかも。ごめん、多分めちゃくちゃ長くなると思う」
「がばば♡　がばばばば♡♡　がば♡　がばばばばば♡♡♡」
「うん、なんて言ってるか分かんねぇわ。まぁでも、気にしないでくださいって言ってるんだろうな。だから遠慮なく、全部出させてもらうぜ！」
「がばぁい♡♡♡」
　俺はこの後、バスが目的地に着くまで、ずっと澪の口に放尿を続けていた。
　このくらいの量があれば、俺の女達全員に飲ませる事可能かも？

と、俺は考えていた。

第６３話　澪との初デートは、便器スタート♡♡♡♡♡（後書き）

澪のデート回が始まりました！
いきなり飲尿からスタートでしたが、いかがだったでしょうか？
沢山興奮していただけましたら、幸いです！
さて、今回豪邸が出てきましたが、皆さんは覚えていらっしゃいますでしょうか？
過去のエピソードでその豪邸を零が夢に見ていて、澪が恋と共に物件を探していた事。
その二つが今、ここで繋がりました！
もし「そんなシーンあったけ？」と思われた方がいらっしゃいましたら、過去のエピソードを読み返していただけますと、幸いです♪
二人の目的地はどこなのか？　零はどこで澪を犯すのか？　次話をお楽しみに！
明日の１８：００に投稿されます♡

第６４話　動物園でハメハメ♡♡♡♡♡

目的地に到着した俺達。
「動物園か」
「はい♡」
俺は目的地を知らされてなかった。着いてからのお楽しみだと。
動物園って、しばらく来てないな。今ってどんな感じなんだろうな。
「零様零様♡　早く行きましょう♡」
「お、おう！」
澪はよっぽど楽しみなのか、俺の手を引っ張り走り出す。Ｇカップのおっぱいをブルンブルン揺らしながら。
「ちょ、チケット買わなくていいのか？」
澪はチケット売り場でチケットを買いもせずに、中に入ろうとした。
「あ、大丈夫です♡　私、この動物園の年パスを持ってるので♡」
「すげ……年パス持ってる人初めて見たわ」
澪は年パスを受け付けの女性に見せた。するとすんなり入れる。
俺の方を見た受け付けの女性は、一瞬頬を赤らめ、軽く会釈をしてきた。
会釈を返すと、嬉しそうに座りながら足踏みをしていた。可愛い！
「おぉ～。久々に来るとちょっとテンションん上がるな」
「良かったです♡　こちらの方も、上がっちゃってますね♡」
「ん？　あぁ」
俺はなぜか勃起してしまっていた。
ズボンの上から澪が股間を触ってくる。
「ふふ♡　硬くて太くて、最高ですぅ～♡　ご奉仕してもいいですか……？」

「いいけど、見て回んなくていいのか？」
「今日はここでご奉仕したくて来たので♡」
すんげぇ理由だな、おい。
「じゃあ、頼むわ」
「はい♡　失礼いたします♡」
澪は俺の前に跪き、ズボンを下ろした。
「ん～～～♡♡♡　パンツの上からでも分かるこの大きさと太さ♡♡♡　堪らないですぅぅ♡♡♡　はぁはぁ♡　も、もう脱がしちゃいますね♡」
そう言って、澪は俺のパンツを脱がす。
勃起したチンコがブルン！　と勢いよく飛び出し、澪の鼻に当たった。
「れ、零様、痛くなかったですか……！？」
「あぁ。大丈夫。それより早くしてくれ」
「は、はい♡」
澪はチンコを優しく握り、扱いてくる。
「あ、我慢汁が……♡　こぼれちゃう……♡　ぢゅる……♡」
扱かれる事で溢れる我慢汁を、吸い取ってくる。
「ぢゅる……♡　ぢゅるる♡　ぢゅるるるるるるるるるる♡♡♡
ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼぼぼぼぼぼ♡♡♡」
我慢汁を吸い取りながら、流れるようにフェラに移行する澪。
「じゅぼぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡　ぎゅぼぼぼぼぼぼ

「はぁはぁ……ごめん、おしっこ出るわ」
「ぶぁい♡」
俺は精液が喉奥に残っている状態で、口内に放尿した。
「んぶぅ♡　ごっきゅん♡　ごっきゅん♡」
喉をめちゃくちゃ鳴らしながら、精液とおしっこを飲み込んでいく。
「ぷはぁ……♡　ご馳走様でした……♡　精液とおしっことっても美味しかったです♡　精液、ゼリーみたいで、とっても美味しかったです♡」
「よかった。じゃあ立って」
「はい♡」
俺の狙いが分かったのか、澪は立ち上がり、後ろを向く。そしてケツを突き出してくる。
そして俺は、澪のケツを撫で回す。
「んっ……♡　ふぅん……♡」
数回ケツを撫で回した後、腰を両手でガッチリ掴み、マンコにチンコをぶち込んだ。
「んひゃあああああああああ♡♡♡　れ、零しゃまのおちんちん、来たぁぁぁぁぁぁ♡♡♡　子宮に当たってるぅぅぅぅ♡♡♡」
「動物達、女達に見られながら犯されてよがれまくれ！」
「は、はいいいいいいいいいいいい♡♡♡」
俺は、動物園の真ん中で、全裸の澪を犯しまくる。
「あああああああ♡♡　んあああああああ♡♡　れ、零しゃまのおちんちん、気持ちよすぎますぅぅぅ♡♡♡　こ、こんなのしゅぐイッちゃいましゅぅぅ♡♡♡」
「我慢せずにイケ！　俺ももう射精す！」
「はい♡　はい♡　はい♡　いっぱい出して、子宮に注いでくださいいいぃ♡♡♡」
「出るっ！」
ビュルッ！！！　ビュルルルルルルルルル！！！！

「んあああああああああああああああああ♡♡♡　中出し来たぁぁぁぁぁ♡♡♡　子宮パンパンで、イッちゃうぅぅぅ♡♡♡　中出しイキするぅぅぅ♡♡♡」

イッた澪は、息を激しく切らしながら前に倒れそうになる。

が、俺が澪の手首を掴み、それを阻止する。そして――、

「もっと犯すからな！」

「あああああああああああああああああああああああ♡♡♡」

俺はイッている澪を、そのまま犯し続けた。

第６４話　動物園でハメハメ♡♡♡♡♡（後書き）

次回は澪目線の回となっております！
澪は何を思い、何を感じているのか？
そして、澪には何か秘めた願いがあるようで……？

この続きは明日の１８：００に投稿されますので、お楽しみに！

第65話　便器としてだけじゃなく……♡♡♡♡♡

私は今、大好きな零様に沢山犯してもらっている♡
大好きな動物園で、大好きな人に犯してもらえるとか本当に最高♡
「また、出るっ！」
「んきゅぅぅぅあああああああああああ♡♡♡」
しかも零様は、何度も何度も私の子宮に精液を流し込んでくれる♡
私の口は零様の便器。そして、子宮も零様専用の便器♡　そんな便器の私には、二つ悩みがあった。
まず、一つ目は……。
「ん？　どうした？」
「あ、い、いえ……！」
後ろで腰を振って私を犯してくれてる零様の方を向き、顔を眺めていたら見ているのがバレてしまった。
「んっ……♡　あ、あの……♡　んんっ♡」
「なんだ……？」
「す、鈴音さんも、んあ♡　れ、零様のぉ♡♡　ぺ、ペットになったって、んあああ♡♡　ほ、本当、ですか？　んあああ♡♡♡」
「あぁ。本当だぞ。鈴音は俺のイヌだ」
ほ、本当だったんだ……。
そう、私の一つ目の悩みは、便器としてだけでなく、零様にペットとして扱われたいということ。
でも、すでに瑠李さんがいたから言い出せずにいた。そしたら、この間『零様の女会』と言うメッセージグループで、鈴音さんから零様のペットになったと報告が入った。
それを聞いた瞬間、私はいいなぁ～と羨ましくなった。
もし、零様がペットを沢山増やしてもいいと考えているのなら、私もさせていただけないかなと思っている……。

でも、嫌われたくなくて中々言い出せない……。
そして、もう一つの悩み。それは……。
「これ、母乳か？」
零様が私の乳首を強く抓む。と、先っちょから白い液体が吹き出てくる。
私はここ最近、母乳が出るようになってしまった。
「はい……急に出るようになってしまって……病院に行って確認したら、体質的なものだと言われました」
「妊娠はしてないんだな？」
「はい。一瞬、妊娠できたのかと舞い上がったんですけど……。れ、零様は……ぼ、母乳が出る女は、お、お嫌い、ですか……？」
私は恐る恐る訊いてみる事にした。一人で悩んでたって、答えは見つからない。だったら、直接訊いた方が早い。
正直、答えを聞くのはとても怖い。でも、知りたい。
「嫌いな訳ないだろ」
「ほ、本当、ですか……？」
「あぁ。おっぱい揉む度に母乳を撒き散らす女とか、エロすぎて最高だろ。俺の精液と澪の母乳で澪の全身びしょびしょにさせてやりたいな」
あぁ～……そう。そうだ。零様はこういうお方だ。私は心のどこかでこう答えていただけると分かっていたんだと思う。
「じゃ、じゃあ……」
もう、言おう。零様ならきっと、受け入れてくれる。軽蔑したり、馬鹿にしたりなんてきっとしない。
引いたりなんかも、絶対にしない。
だから、言おう！
「わ、私も……私もペットにしてくださいませんか……！」
い、言っちゃった……。
零様がどんな表情をしているのか、怖くて後ろが見れない。
零様は動きを止め、私の話を聞いてくれてる。

繋がったまま私達は、ただ立っているだけ。
この沈黙が、私にとってはものすごく長く感じた。
「ペットね～」
「っ！」
零様が声を出す。な、なんて言うんだろう……？　怖いけど聞きたい……。
「じゃあ、澪はウシだな」
「え……？」
「瑠李はブタ。鈴音はイヌ。そんで澪はウシだ。母乳も出るから、ちょうどいいだろう。どうだ？」
「う、嬉しいです……！　私、零様のペットに……ウシにさせていただけるんですね……！　とっても、嬉しいです……！」
「お、おい……！？　なんで泣くんだよ……！？」
私は嬉しすぎて、涙を流してしまっていた。
全くの無意識だった。人って嬉しいと、勝手に涙が溢れるんだ……。
「す、すみません……！　鳴くならモォ～ですよね……！」
「いや、別にそこを気にしてる訳じゃないんだけど。俺、なんか嫌な事言っちゃったか？」
「いいえ。むしろ逆です」
「逆？」
「はい……♡」
私はマンコから零様のおちんちんを抜き、零様と向き合う。そして――、
「ちゅ♡」
キスをした。
「とっても嬉しい事を言ってくださったので、感激のあまり泣いてしまったんです♡　ご心配をかけてしまい、すみません……」
「い、いや……それならいいんだけどさ……」
顔を赤くしながらそっぽを向く零様。め、めちゃくちゃ可愛い♡

♡♡
「んっ！？」
「ぢゅる♡　ちゅむ……♡　える……♡　んっ……♡　れる……♡」
私はそっぽを向く零様の顔を両手で挟み、正面へと持ってくる。
そして、零様の唇を貪る。
「れいはま……♡　れいはま……♡　れいはまぁぁ♡♡♡」
キスをしながら零様のお名前を呼ぶ。
これは、結構やばいかもしれない……。キスしながら名前を呼ぶと、脳が痺れてイキまくってしまう♡
私はなんとか口を離し、零様と目を合わせる。そして――、
「今日から、私は零様専用の便器でペットです。排泄物処理、性慾処理、なんでもお任せください♡　大好きです♡　零様♡」
私がそう言うと、零様は強く抱きしめてくださった。
そして、激しいキスをくださり、そのまま激しいセックスをしてくださいました♡♡♡

第６５話　便器としてだけじゃなく……♡♡♡♡♡（後書き）

澪の想いや気持ち、伝わりましたでしょうか？
少しでも伝わっていたら、嬉しいです！

母乳が出るキャラを初めて出したのですが、いかがだったでしょうか？
もし、そういう描写が苦手だった場合、変更させていただきますので気軽にお教えください♪

次話で澪回ラストです！
ペットとなった澪とのセックス、どんな激しいものになるのか、楽しみに待っていてください！

次話は明日の１８：００に投稿されます！

第６６話　ウシになった澪の、母乳撒き散らしセックス♡♡♡♡♡（前書き）

事前注意！

「♥」が沢山出てきます！　もし苦手な方がいらっしゃいましたら、注意しながらご拝読くださいますよう、お願い申し上げます！

第６６話　ウシになった澪の、母乳撒き散らしセックス♡♡♡♡♡

「オラァ！　もっとぶちまけろぉ！」
「んぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡」
おっぱいを強く揉まれ、母乳を撒き散らしながらバックで犯され続ける澪。
もうここでどのくらいの時間シているのか分からない。
澪の顔は、ヨダレやら涙やら俺の精液やらでぐちゃぐちゃになっている。
マンコも、愛液や本気汁、中出しした精液でグッチョグチョになっている。
「もっともっと犯してやるからな！」
「は、はぃ〜〜〜

母乳射(だ)しながら犯されて、何度も何度もイッでる〝の〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝♡♡♡
い、イギずぎでお、お〝がじぐな〝る〝う〝う〝う〝う〝♡♡♡
あああああああああああああ♡♡♡

総射精回数３５発。
口内射精：５。中出し：３０。

♡　♡　♡

「よし、飲め」
「ふぁい♡♡♡」
ぶじょおおおおおおおお！！！！
俺は今、閉園した動物園の前で、澪におしっこを飲ませている。
大きく口を開けて俺のおしっこを飲んでいく澪。Ｍ字開脚の状態で飲んでいるが、イキまくったからだろうか、膝はガクガク震えており、今にでも座り込んでしまいそうだ。
だが、澪は決して座ったりせず、俺にマンコを見せびらかすように足を開き、グチョグチョのマンコをさらけ出している。
「ふぅ……」
「ごくん♡　ぷはぁ♡　ご馳走様でした、零様♡　とっても美味しかったです♡」
「あぁ。よし、この後はどうする？」
「そうですね……あの家に戻ってまたエッチしまくりますか？　それともホテルとかで……」
「よし、澪の家に行こう」
「ふぇ！？　わ、私の家ですか！？」
「あぁ。駄目か？」
「い、いえ！　決して駄目なんかではございません！　す、少し散らかっているのですが……それでもよろしいですか……？」
「あぁ。問題ない。澪の家ではセックスはしないからな」
「え……」
「澪の口を壊れるくらいに犯したいんだ」
「っ♡　は、はい♡　お願いします♡」
「よし、じゃあ行くぞ」

「はい♡」
そうして俺は、澪の家にお邪魔することになった。
そして宣言通り、澪の口を犯しまくり、精液もおしっこも出しまくった。
そしてもちろん、そのまま泊まった。

総口内射精回数：１５。
口内放尿回数：２０。

第６６話　ウシになった澪の、母乳撒き散らしセックス♡♡♡♡♡（後書き）

澪回、いかがだったでしょうか？
こうして一人一人書いていると、乱交が書きたくなってきますね……。
乱交やハーレムを書くのはもうちょっと先になってしまいますが、その時が来るのを楽しみにしていただけますと幸いです！
今は各ヒロイン達のお話を、お楽しみくださいませ♪

次話から別のヒロインのお話となります！
誰になるのか、楽しみに待っていてください♪
明日の１８：００に投稿です！

第67話　奈央とのデートは、オナニーから始まる♡♡♡♡♡

「んっ♡　んんぅ♡♡　んあああ♡♡♡」
俺は今、公園の女子トイレで奈央と相互オナニーをしている。
便座に奈央が座っており、マンコを激しく弄っている。
左手で乳首を弄り、右手の中指、人差し指で膣（なか）を激しく弄くり回している。
俺はそんな奈央を見ながら、目の前で立ってチンコを扱いている。
オナニーなんてめっちゃ久々だから、扱き方を少し忘れていた。
「奈央は本当、オナニーが大好きだな」
「は、はいぃぃぃ♡♡♡　わ、私はオナニーが大好きですぅぅぅ♡♡♡　れ、零様とセックスしてから、オナニーする頻度が増えて、もっと大好きになっちゃいましたぁぁ♡♡♡」
「オナニー狂か。まぁ、悪くないか。じゃあ、一人でするのと俺と一緒にするの、どっちのオナニーの方が気持ちいい？」
「れ、零様と見せ合うオナニーの方が気持ちいいですぅぅ♡♡♡目の前で大好きな人のちんちんシコシコする姿見れるの、最高過ぎてぇ♡♡♡　いつもより感じてぇ♡♡♡　い、イッちゃいますぅぅぅ♡♡♡♡♡」
ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡
「潮吹く姿、エロすぎ……！　お、俺ももう出そうだ……！　俺の精液、どこに出す？　ペーパーでいいのか？」
「い、嫌ですぅぅぅぅ！！！　ペーパーなんかじゃなくて、私の顔やお口、おっぱい、お尻、お腹、好きな所にいっぱい出してください♡♡♡　私の体は零様専用のティッシュですからぁぁぁ♡♡♡」
「じゃあ、奈央に出すぞ……！」
「はいぃぃ♡♡♡　お、オマンコに挿（い）れて中出しでもいいですから

ぁぁぁ♡♡♡　私に出してくださいいいいぃ♡♡♡」
　そんな事言われたら、出すところなんて一つだろ！
「んきゃあああああああああああ♡♡♡　挿れられてすぐに射精来たぁぁぁぁ♡♡♡　零様の精液、子宮にビシャビシャ当たってるのぉぉ♡♡♡　中出しでイクぅぅぅぅ♡♡♡」
　俺はイキそうになったチンコを、ヒクヒクなイキマンコにぶっ込み、その膣で射精した。
　なんかこれ、精液を受け止めるためだけにあるような感じがして、支配感とかそういうのがヤバいな……。
　本当に奈央をティッシュにしたみたいで。奈央にはこれから本当にティッシュになってもらおうかな？
「ふぅ～。さぁ、ここから本番だな」
「ふぇ……♡？」
「せっかく挿れたんだ。このままセックスしなきゃ損だろ？」
「そ、そんなぁ～♡　オナニーしてすぐにセックスできるだなんて、幸せすぎて死んじゃいますよぉぉ♡♡♡」
「じゃあ、止めるか？」
「いやぁ～♡！　嫌ですぅ～♡！　このまま突いて♡　このままオマンコ壊れるくらい犯してくださいぃぃ♡♡♡」
「了解！　行くぞ！」
「んあああああああああああああ♡♡♡」
　この後、一時間くらい奈央を犯しまくった。
　デートも始めていないのに、俺は奈央の膣に１０発、中出しした。
　時折トイレに女子が入ってきて、隣の個室からオナニーしている声が聞こえてきた（俺達のセックスの音に興奮したんだと思う）。
　それがさらに俺の興奮を掻き立てたのは、奈央には内緒だ。

第６７話　奈央とのデートは、オナニーから始まる♡♡♡♡♡（後書き）

女子をティッシュのように扱う。
変態さんなら、一度は妄想した事があるのではないでしょうか？
僕はあります！　精液をティッシュではなく、女子の体にかけるなんて最高じゃないですか♡
しかも、射精する時だけですから、気持ちよくさせる必要もないし、都合よく使っていいんですよ♡
そんなの、最高ですよね♡
奈央は今後、零の射精を受け止めるだけのティッシュ女にしていく予定ですので、そういう願望がある方は、奈央に期待していてくださると嬉しいです♪

次話は少し長めになると思います！
明日の１８：００をお楽しみに！

第68話　ショッピングでフェラご奉仕♡♡♡♡♡

奈央との相互オナニー（結局セックスをしたが）を終えた俺達は、奈央が行きたいと言うショッピングモールに向かう事にした。
そのショッピングモールは、「ら」から始まって「と」で終わる名前の場所だ。
色んなお店があるので、デートには持って来いだ。
「んちゅ♡　れる……♡」
俺達は今、バスに乗っている。
そのバスの車内で、立っている俺に椅子に座ってる奈央がフェラをしている。
「こんな堂々と……。恥ずかしくないの？」
「ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡」
フェラに夢中で聞いてないか。まぁ、嬉しいけど。
この周りの女子達が羨ましがってるのがマジでいいんだよな。
「じゅぶぅ♡　ぎゅぶぅ♡　えう……♡　じゅるぶぅ♡　ぎゅぶっ♡　っあ♡　じゅぼぉ♡」
き、気持ちよすぎる……！　奈央ってこんなにフェラ上手かったのか……！
「れる……♡　じゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡」
口で竿を扱きながら、舌で亀頭を舐め回してくる……！
亀頭とカリと裏スジをグルングルン舌で舐め回してきて、めちゃくちゃ気持ちいい……！
「っ？　んふ～♡　ぢゅぶっ♡　ぢゅぶぶぶぶ♡♡♡」
尿道から溢れ出てきた我慢汁を、嬉しそうな顔を浮かべて吸い出していく奈央。
「くっ……！　も、もう出そうだ……！」
俺がそう言うと――、

「ぢゅぶぶぶぶぶぶぶぶ♡♡♡」
亀頭を先程よりも激しく吸い始めた。
こんなの、もう我慢できない……！
「出るっ！」
ドビュッ！　ドビュルルルルルル！！
「んぶっ！　んんっ♡　んんぅ～♡♡♡　ごくごく……♡」
俺は奈央の喉奥に精液を叩きつけた。
その精液を奈央は、嬉しそうな顔で飲み込んでいく。
「ごきゅっ♡　ぷはぁ♡　ご馳走様でした♡　零様の精液、美味しすぎますよぉ♡」
「全く。ほら、お掃除しろ」
「はい♡　んちゅ♡」
奈央は、目的地に着くまでの間、ずっとチンコを咥え続けた。
４発も出してしまった。その間、奈央はずっとマンコを弄っていた。

♡　♡　♡

目的地であるショッピングモールに到着した俺達。
今、エレベーターに乗っているのだが……。
「んぶっ♡　じゅっぶっ♡　ぎゅっぶっ♡」
「くっ……！」
ドビュッ！！　ビュルッ！！　ビュルビュルッ！！！
「んぶっ♡　んん～～～♡♡　ごくごく♡♡♡」
みんな、勘違いをしないでほしいのは、俺がシてくれと言った訳ではない。
奈央が自らシてきたんだ。
エレベーターに乗った瞬間に跪き、俺のズボンとパンツを脱がし、チンコを咥えてきた。
もちろん、エレベーターの中は俺達だけじゃないので、周りの人

達（女子のみ）は驚いていた。
だが、次第にエロ空間に変わり、周りの人達（女子のみ）は全員、オナニーをシ始めた。
「はぁはぁ……ほら、もうすぐ着くぞ」
「んん～♡」
奈央は全くチンコを離そうとしない。
どうしたんだ？　いつもなら言う事を聞くのに。
「奈央？」
「ん～♡」
もしかして、奈央って結構甘えん坊、なのか？
普段、雫達の前だとしっかり者として振る舞ってるけど、もしかしたら本当の奈央は甘えん坊の子供なのかもしれない。
ちょっと試してみるか。
「奈央～♪　おちんちんおしゃぶりできて偉いね～♪」
と、赤ちゃんを褒めるように頭を撫でながら、言ってみた。
と――、
「んへへぇ～♡♡♡　じゅる♡　じゅじゅるぅ～♡♡♡」
何を言ってるのかは分からなかったが、チンコを咥えたまま、褒められて喜ぶ子供のように満面の笑みを浮かべた。
その際に、チンコを吸うのはちょっと刺激が強すぎるので止めてほしい。
でも、これで分かった。奈央は本当は甘えん坊なんだと。
だったら、これでもかってくらいに甘やかして蕩けさせてやる！
「よし、じゃあ、咥えたままエレベーター降りようか。できるかな～？」
「ぢぇぢぃぢゅ～！」
うん。今のはなんて言ったか分かった。そして可愛いなぁ！
「よし。じゃあ降りるぞ」
エレベーターが目的の階に着き、扉が開く。周りの人達（女子のみ）が、協力して道を開けてくれるし、扉も閉まらないようにして

くれてる。
「いいよ～。そのままゆっくり後ろに下がってごらん」
チンコを咥え、後ずさりながらエレベーターを降りていく奈央。
エレベーター前でエレベーターが来るのを待っていた人達（女子のみ）は、一瞬驚いていたが、すぐに状況を察し、道を開けて、奈央が危なくならないようにサポートまでしてくれている。
「お～降りれたね～。偉いね～♪　お利口さんにはご褒美をあげようね～」
ビュルッ！！！　ビュビュッ！！！
「んぶっ♡　んん～～～♡♡♡」
俺は、奈央の口の中で大量に射精した。
俺からのご褒美が嬉しかったらしく、奈央はドロッドロの精液を美味しそうに飲み干していった。
「どうする？　一回離れるか、それとも――」
「んーん！」
離さずに行くか？　と聞く前に、奈央が首を横に振って言葉を遮ってきた。
「このまま咥えた状態で、デートするか？」
「んっ♡」
チンコを咥えたまま頷く奈央。ヤバい……可愛すぎる……！
「よし。それじゃあ行こう」
「ん～ん♡」
右手だけを上げて、「お～」のポーズを取る奈央。
幼児化した奈央の破壊力、やばすぎなんですけど！？

♡　♡　♡

ずっと後退での移動じゃ辛いので、ローラースケートを買って奈央に履かせた。これで、しゃがんだ状態で移動ができる。
デート開始から一時間。奈央は本当にずっとチンコを咥えっぱな

しだった。
「ぢゅる……♡　える……♡」
「くっ……！　出るっ……！」
ビュビューーーー！！！　ビュルッ！！！　ビュッ！！！
「んぶぶっ♡♡♡　んん～～♡♡♡　んふふ～～♡♡♡」
奈央はもう何度も精液を飲んでいる。
俺は一体、奈央の口に何発射精したのだろうか？
バスの中での事を合わせると、ざっと２０近くはあると思う。
「奈央？　本当にずっと咥えたままでいいのか？　そろそろお昼だからご飯食べたいんだけど」
「ぢゅる♡　ぢゅぢゅっぢゅ♡　ぢゅる♡　ぢゅるるるるるるるるるる♡♡♡」
何か言ってるんだろうけど、全く分からん！　というか、気持ちよすぎる！
「わ、分かった分かった！　奈央はずっと咥えてていい。俺だけ食事するわ。だから、どっか店寄るけどいいか？」
「ぶぁい♡」
そんなこんなで俺は、ハンバーグ屋に入った。

♡　♡　♡

「ん～！　このハンバーグ美味っ！」
俺はハンバーグを食べていた。二人用の席で。
本来向かいの席にいるはずの奈央は、そこにはいなかった。
どこにいるのか。それは――、
「じゅる♡　ぢゅるる♡　ぢゅるるるるるるるるるる♡♡♡」
テーブルの下で、俺のチンコを咥え続けていた。
食事中も、俺はすでに３発出していた。
「ふぃ～。ご馳走様でした。……出るっ！」
ドビュンッ！！！！　ドビュルッ！！！！　ドビューーーーー

ーーーー！！！！
「んぶぶっ♡♡♡♡　んん～～～～～～♡♡♡　ごくごくごくごく……♡♡♡♡」
何回も出してるから、精液は液体ではなく、重くてドロッドロとしたゼリー状になっている。
その為、飲みづらいはずだ。なのに、奈央はそんな事まるで気にせずに美味しそうに飲み込んでいっている。
「よし。会計するぞ」
レジに向かうと――、
「ぢゅぢゅぢゅ（これで）」
そう言って奈央が、一万円札を店員さんに渡した。
「な、奈央！？　何してんだ！？　俺が払うぞ！？」
「失礼ですが主さん。こういう場では女が支払いを済ませるのが常識なんです。女は奢って貢いでなんぼなんです。だから主さんは、何も気にせず奢られてあげてください」
そ、そうか……！　ここは逆転してるから、女が奢るのが当然なんだ……！
俺が元いた世界では、男が払うのが当然だったからな。あの風習には俺、納得してないけど。
「で、でもな……」
「ん！」
「うぉ！？」
ビュルッ！！！！　ビュビュッーーーーー！！！！
突然の亀頭舐めディープスロートで、俺は暴発してしまった。
「ど、どうしたんだよ、奈央」
「奴隷さんも『私に払わせて～！』と怒ってらっしゃるようですよ？　だからいきなりフェラを激しくしてしまった」
「な、なるほど……」
何？　この世界の人は普通にフェラとか言っちゃうんだ。相変わらずすげぇな。

後、普通なら『彼氏彼女』って言うところを『主奴隷』って言っちゃうの本当にすごい。
「分かったよ。じゃあ、ご馳走になっていいか？」
「っ♡　ぶぁい♡」
俺は大人しく奈央に奢ってもらう事にした。
この世界の常識、もっと勉強しなきゃ駄目だなと、改めて思った。

♡　♡　♡

ゲームセンター、服屋など色んな店を時間をかけて沢山回った。
その間もずっと奈央はチンコをしゃぶっており、俺はめちゃくちゃ射精をした。
そして、ショッピングモールでのデートを終えようとした時、奈央が数時間ぶりにチンコから口を離した。
「れ、零様……！　た、大切なお話がございます……！」
緊張した表情で俺にそう言ってくる奈央。
な、なんだ……？　そんな顔されると、こっちまで緊張してくるんだが……。
奈央の大切な話。それは――――――

第６８話　ショッピングでフェラご奉仕♡♡♡♡♡（後書き）

奈央がフェラをしまくるお話、いかがだったでしょうか？
たっくさん興奮していただけて、沢山喜んでいただけておりましたら幸いです！
奈央は実は甘えん坊で、二人っきりの時は赤ちゃんっぽくなってしまうその可愛さ、伝わっておりましたらとっても嬉しいです！

奈央の大事な話とは一体なんなのか……？
奈央が零に言っていない事と言えば……？
この続きは明日の１８：００に投稿されますので、お楽しみに！

（何気に、奈央のちゃんとしたメイン回って初めてな気が……？）

第69話　ド緊張の告白、そのままラブホへ……♡♡♡♡♡

こ、ここまで子供みたいに甘えてしまった……。

私は自分が本当は子供っぽいということを自覚していた。だから、そんな素を絶対に零様には見せたくなかった。だって、失望されると思ったから。

でも、零様のちんちんをずっとしゃぶっていたい衝動に駆られて、気がつけば素を出して甘えてしまっていた。

嫌われると思った。でも、零様はそんな私ですら受け入れてくれた。

前にテレビで、付き合った彼女が急に幼児化して、甘えてくるのが気持ち悪いと言っている人がいた。

それを見てから一生懸命自分を変えようとした。

大人っぽくなって、クールになって、しっかり者になって……。

でも、どんなに頑張っても根本は全く変わらなかった。ううん、変えられなかった。

人に甘えたい。言葉も子供っぽくするのが楽。

そう思った時、私はもう諦めようと思った。

外ではなんとか仮面を着けてしっかり者を装うけど、家とかでは本当の自分でいようって。

だから、いとこの栞は私の素を知っている。

本当は零様にバレたくなかった。でも、バレても零様は何も変わらなかった。

だから、言おう……。頑張って、言おう！

「れ、零様……！」

「ん？　どうした？」

し、心臓がものすごくバクバクしてる……。ヤバい……めちゃくちゃ緊張してる……。

でも、零様なら大丈夫……！
「わ、私と、正式に付き合ってくださいませんか……！　こ、こんな変態で、赤ちゃんみたいになってしまう私ですが、零様への愛は重力より重い自信があります……！　なので、性奴隷としてだけでなく、私を、彼女として、零様のお側にいさせてくださいませんか……！」
い、言った……！
私は、頭を下げ、手を零様に向かって伸ばす。
手が震える……。ううん。手だけじゃない。足だって、全身が緊張と恐怖で震えてる。
零様の顔が、見れない……！
「よろしく」
「っ！」
零様が手を握ってきてくれる。
私は嬉しくなって顔を上げた。すると、そこには満面の笑みを浮かべる零様がいた。
「奈央の事、俺も大好きだ。ずっと側にいて、ずっと甘えていてほしい。それに、俺は奈央のオナニーを見るのが大好きだからな」
「あ、ありがとうございます……！　いつでもどこでもオナニー、お見せいたします……！　で、でも……私、素が赤ちゃんみたいになるんですけど……」
「あぁ、それね。めちゃくちゃ可愛かったから、全然大丈夫だよ」
「っ！　ほ、本当ですか！？」
「うん。普段のしっかり者な奈央とのギャップがあって余計にグッときたんだよね。それと同時に、あ～普段はもしかしたら無理してたのかな～？　って思って、俺の前では無理してほしくないなぁって」
や、優しすぎる……！　なんでこの人は、ここまで優しいのだろう……。
「あ、ありがとうございます……！　じゃ、じゃあ、無理をしない

で、甘えてもいいですか……？」
「ん？　うん、いいよ」
私はその場で、着ていた服を全部脱ぎ、パンツも脱いで全裸になった。
「な、奈央！？」
そして私は手を広げた。
「だ、抱っこ！」
私は子供がお父さんに甘えるみたいに言った。
こ、これはさすがに気持ち悪すぎたかな……さすがに引かれるかな……？
やった側からもう後悔し始めてきた……！
で、でももう、後戻りはできない……。
と、私が後悔をしていると、零様がゆっくりと近づいてきて――、
「全く。困った甘えん坊さんだな、奈央ちゃんは。ほら、おいで」
そう言って、私を真正面から抱っこしてくれた。
な、何これ……！　幸せすぎるんですけどぉぉ！！
「んっ♡」
「俺が抱っこすると、ずっとお尻触ったり揉んだり、マンコ、アナルを弄る事になるけど、それでもいい？」
「い、いいです～♡　いっぱい触って、いっぱい弄ってくださいぃ～♡」
零様はお尻を揉んだり、左右に広げたり、指をマンコに挿(い)れてきたりしてくれる。
それが最高に嬉しい♡
「（じゃあ、パパって呼んでみて）」
「っ！　ぱ、パパぁ～～♡」
「は～い。パパですよ～。奈央ちゃん、ちゃんと言えて偉いですね～♪」
「んへへぇ～♡♡♡」
あ、これ駄目だ。完全に蕩けてしまう。もう、何も考えられなく

なる。

私は、零様の性奴隷で彼女で、娘だ。

「パパ、だいちゅき♡♡♡」

第６９話　ド緊張の告白、そのままラブホへ……♡♡♡♡♡（後書き）

零の性奴隷、彼女だけでなく、娘になった奈央。
いかがだったでしょうか？
僕は個人的に、甘えてきてくれる女子が大好きなので、今回その好みを詰め込んでみました♪
奈央に「パパ」と呼んでもらうか「お父さん」「お父様」「父～」「父上」と呼んでもらうか、かなり悩みました。
でも、エロい作品だったらやっぱり「パパ」かな～。ということで「パパ」になりました♡
皆様にも喜んでいただけたら、とても嬉しいです！

次話は奈央回ラストです！
主従、恋人、そして親子になった二人のセックスがどうなるのか、楽しみにしていてください♪
次話は明日の１８：００に投稿されます！
お楽しみに～♪

第70話　ラブホで朝までノンストップセックス♡♡♡♡♡

「この部屋で」
「畏まりました。お嬢さん、よかったね～」
「うん♪」
俺と奈央はラブホにやって来ていた。
全裸の奈央をおぶりながら、受け付けをしていると、受け付けの人がすぐに察したらしく、奈央に対して子供と接するような接客になった。
この人すげぇなって思った。
「ありがとうございます」
鍵を受け取り、エレベーターに向かおとしたら、受け付けの人に呼び止められた。
「すみません」
「はい？」
「こちら、もしよろしければどうぞ」
「ん？　ど、どうも」
手渡されたのは紙袋だった。何が入ってるんだ？
「（その方にお使いください♡）」
「は、はい」
耳元で囁かれた。この人、めちゃくちゃエロい雰囲気あるな……
やべ、勃ってきた……。
「パパ～？」
「あ、ごめんごめん。行こうな～」
「ごゆっくり、お楽しみくださいませ」
俺と奈央は、部屋に向かった。
♡　♡　♡

エレベーターを降り、部屋に入った俺達。
背中から奈央を降ろした俺は、玄関の所にしゃがみ込んだ奈央の口にチンコをぶち込んだ。
ちなみに、俺も下半身だけ裸なので、チンコは丸出しだった。よって、スムーズにチンコをぶち込めた。
「んぶっ！」
急に口に挿れられ、一瞬驚いた奈央だが、すぐにチンコを嬉しそうに舐め始めた。
「んふふ～♡　ぢゅるるるるるるるるるる♡♡♡　ぶじゅるるるるるるる♡♡♡」
奈央のフェラはめちゃくちゃ気持ちよくて、舌が亀頭とカリ、裏スジを這い回ってくる。
他の子のフェラも気持ちいいが、奈央のフェラは別格かもしれない。
あと、ショッピングモールでの数時間でめちゃくちゃ上達している。
「いいぞ～奈央。めちゃくちゃ気持ちいいぞ～。亀頭を中心に舐めてみてくれるか」
「ふぁ～い♡　れるれるれるれるれるれる……♡♡♡」
「くっ……！」
頼んだのはいいけど、これヤバいな……！
ドバドバ我慢汁が溢れ出てくるのが分かる……！
出る度に奈央が舌で奪っていく。しかも、唾液と我慢汁が混ざって亀頭がさらにヌルヌルで気持ちよすぎる……！
こ、こんなの、もう――！
「出るっ！」
ドビュンッ！！！　ドビュビュビューーー！！！
「んんっ！！　んぶっ！　んくんく……♡♡♡　ごくごく……♡♡♡」

俺は奈央の頭を力強く押さえながら、喉奥へ射精していく。
気持ちよすぎて腰が抜けそうになるけど、なんとか耐える。だって、このあと奈央を犯しまくるんだ。こんなとこでへばってらんない。
「よく飲めたな〜。偉いぞ〜。それじゃあ、お風呂行こうか」
「は〜い♡」
奈央はまさかのハイハイで移動を始めた。
これは……！　ペットとは違うエロさと良さがある！
奈央には今後、ハイハイを沢山してもらおう！

♡　♡　♡

風呂に移動した俺達。
泡風呂がある部屋にしてもらっていたので、俺達は今、泡風呂の中に浸かっている。
もちろん、普通に浸かっている訳ではない。
「んっ♡　はっ♡　あっ♡　んんぅ♡　ああっ♡」
マンコにチンコを挿れながら、泡の手で奈央のしずく型Gカップおっぱいを揉み込んでいた。
「奈央のおっぱいは斜めで下に下がってるから、揉むのが楽しいな」
「ぱ、パパに喜んでもらえて嬉しいです♡」
「パパに対して敬語は必要ないぞ？」
「で、でも……」
「いらない」
「わ、分かり――分かった♡」
「よろしい。それじゃあ、動いて」
「は〜い♡　んっ♡　んっ♡　はっ♡　はっ♡」
奈央が、腰を上下に動かす。
背面騎乗位の形で、奈央が動いてくれる。が、湯船の中なので動くのはそこまで大変ではない。

奈央が動く度、お湯がバシャバシャと跳ねて床へとこぼれていく。
「ど、どお、パパ～♡　気持ちいい～♡？」
「あぁ、気持ちいいぞ。すぐに出ちゃいそうだ」
「んふふ～♡　嬉しい～～♡♡♡　いつでもいいからね♡　いつでもいっぱい私のオマンコの膣（なか）に出して～♡♡♡　パパの子供、孕ませて～♡♡♡」
「あぁ。だったらお望み通りにパパの子供、孕ませやるよ！　子供と一緒にパパって呼ばせてやる！」
「あああああああああ♡♡♡　急に下から突くの駄目ぇぇぇ♡♡♡　うんうん♡♡♡　呼ぶ～～♡♡♡　子供と一緒にパパをパパって呼ぶ～～～～♡♡♡　子供と一緒にパパのちんちんにご奉仕するの～～～～♡♡♡」
俺は下から突き上げ、どんどん激しくしていく。
先程よりお湯が跳ね、うるさいくらいだ。
「あああああああああああああ♡♡♡　イッちゃうのぉぉぉ♡♡♡　パパより先にイッちゃうのぉぉ♡♡♡」
「いいぞ！　イケ！　パパももうイクから！　一緒に行くぞ！」
「うんぅぅ♡♡♡　パパと一緒にぃぃ♡♡♡　一緒にイクのぉぉぉぉ♡♡♡　あああああああ♡♡♡　イッきゅうぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
「出るっ！！！」
ドビュルルッ！！！　ドビュビュビューーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！
「パパの精子ぃぃぃ♡♡♡♡♡　子宮に注がれてるぅぅぅ♡♡♡♡♡　しゃいこうなのぉぉぉぉ♡♡♡♡♡♡♡」
俺は大量に、奈央に中出しをした。ゴボボと音が鳴りそうなほどに。
出した精液が、逆流してきてるのが分かる。
「はぁはぁ……♡」
「奈央、大丈夫か？」

「大丈夫～♡♡♡　パパのちんちん、だ～い好き♡♡♡」
「チンコだけか？」
「ぶ～！　パパも大好きっ！　分かってるでしょ～♡」
なんだ、これ。可愛すぎるだろ！
瑠李とか紗夜とかタメ口な子はいるけど、奈央のタメ口って他の子とは違う感じでめちゃくちゃ興奮する！
「このまま、もう少し浸かるか～」
「うん♡　浸かる～♡♡♡」
俺達は、しばし繋がったままの入浴を楽しんだ。

♡　♡　♡

「あんっ♡　ああっ♡　ああああんっ♡♡♡　んあああああああ♡♡♡」
風呂から上がった俺達は、ずっとセックスをしていた。
脱衣所で、キッチンで、トイレで、ベッドで。至る所でヤりまくっていた。
もうすでに１０発以上中出ししている。
「パパぁ♡　パパぁ♡♡　パパぁ♡♡♡」
今はトイレにいて、バックで犯している。
奈央の右足を持ち上げて、放尿をさせている。
突く度に放尿の勢いが増して、それがめちゃくちゃエロい！
全くもって便器の中には入っていないが、まぁ関係ない。
「お、おしっこ止まらないぃぃぃ♡♡♡　イクのも止まらないぃぃぃ♡♡♡」
何度も何度もシているので、奈央の感度はバク上がりしており、一突きするだけでイッてしまう。
その度に膣（なか）がギュうううううっと締まってきて、射精を促してくる。
「奈央、出すぞ！」

「出してぇぇぇ♡♡♡　子宮にい～～～っぱい、注いでぇぇぇぇ♡♡♡」
「出る！」
ドビューーーーーーーー！！！！！　ドビュッ！！！！！　ドビュドビューーーーーーーーー！！！！！！
「んあああああああああああああああ♡♡♡♡♡♡」
ぶしゃあああああああああああああああああああ♡♡♡♡♡♡♡
中出しから少し遅れて、奈央の放尿は最後だと言わんばかりに勢いよく噴射された。
「はぁはぁ……♡」
「ほら、奈央。トイレ終わったからベッド行くぞ。朝まで寝かさないからな」
「うん……♡　朝までずっと犯してぇ♡♡♡」
この後、俺達は朝までずっとセックスをし続けた。
射精は何回したか覚えてないが、中出しと口内発射を含めると合計で４０発は超えると思う。

♡　♡　♡

朝。
隣では精液と汗まみれの奈央が眠っている。
「そういやコレ、結局なんなんだ？」
俺は、昨日受け付けの人に渡された紙袋の中身を確認してみる事にした。
中身を取り出す。入っていたのは――、
「オムツ……？しかも、女子が使う生理用のやつじゃなくて、赤ちゃんが使うオムツだ……」
これは……本格的な赤ちゃんプレイをして楽しめって事だな。
「ん～……？　パパぁ～……？」
「お、奈央。おはよう」

「おふぁよう〜……♡　ん？　な〜に、それ〜」
「これな、オムツだ。どうだ、奈央。してみないか？」
「する〜！」
即答かよ。
「じゃあ、着けるぞ」
「うん……♡」
俺は奈央にオムツを穿かせる。
「どう？　パパ」
「あぁ。よく似合ってる。可愛いよ」
「ありがとっ♡」
オムツ姿の奈央、最高に可愛すぎる！
「奈央」
「ん〜？」
「これから、よろしくな」
「っ！　は、はい！　よ、よろしくお願いします……！」
「敬語に戻ってるぞ？」
「あ、ご、ごめんなさ――ごめん……！　よ、よろしく、です……ぱ、パパ……♡」
「あぁ」
俺達はそっと口づけを交わした。

第７０話　ラブホで朝までノンストップセックス♡♡♡♡♡（後書き）

奈央回ラスト、いかがだったでしょうか？
奈央の赤ちゃんとしての可愛さ、エロさを楽しんでいただければ幸いです！
オムツは個人的に出すかどうか迷ったんですが、赤ちゃんと言えばこれだよな……と言う感じで出したので、もしあまり好きではない、止めて欲しいと言うご意見がございましたら、お教えいただけますと幸いです……！

次話から別のヒロインのお話となります！
誰になるのか、楽しみにしていてください♪
次話は明日の１８：００に投稿です♪

第71話　雫とのデートはエロさ200％♡♡♡♡♡

「じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　この度は♡　んぼっ♡　ご足労いただき♡　じゅぼっ♡　誠に♡　ぎゅぶっ♡　ありがとう♡　じゅぶっ♡　ございます♡　じゅぼぉぉぉぉ♡♡♡」

俺は今、雫の家にやって来ていた。

雫は、俺が家に着くなり部屋に俺を連れ込み、どちゃくそエロいフェラを開始してきた。

「今日という日を♡　じゅぼぉぉ♡　ぎゅぼぉぉ♡　心より♡　ぎゅぶぅ♡　楽しみに♡　じゅぞぉ♡　しておりましたぁ♡　ぢゅるるるぅぅ♡♡♡」

「そ、そうか……それは良かった……！　ってか、も、もう……！」

「どうぞ♡　いつれも♡　ぢゅるるるる♡♡　口マンコに♡　ぢゅるるるる♡♡　お射精(だ)しください♡　ぢゅるるるるるるるるる♡♡♡」

「出るっ！！！！」

ビュルッ！！　ブビューーーーー！！　ブビュルーーーーーー！！！！

「んぶぅ♡！　んんっ♡！　んっ……♡　ごくごくごく……♡♡♡」

「くっ……！　うぉ……！」

射精中の亀頭を舌で舐め回してきて、さらに尿道の中に舌を入れるかのごとく、舌先で尿道を突いてくる。

「それ、ヤバっ……！　出る……！」

ビュビューーー！！！！　ビュッビューーー！！！！

俺は射精中にも関わらず、さらに射精をした。

しかし、その間も雫は責めを止めない。

むしろ、激しさを増していて、亀頭と尿道を中心的に責めてさらに射精をさせようとしてきている。

そのテクに俺は――、
「ま、またぁ……！」
ビュビューーーーーーーーーー！！！！　ブビューーーーーーーーーーーーー！！！！！
「んぶぅぅぅ♡♡♡　んぎゅぅぅぅ♡♡♡　ごくごくごく……♡♡♡」
三回の射精をしたにも関わらず、雫は責め続けてくる。
さらに射精をさせようと。
「し、雫……！」
「もっふぉ～～～～～♡♡♡」
俺はこの後、さらに三回射精した。

♡　♡　♡

「で、デート開始前に、も、申し訳ございませんでした……！！！」
ベッドに座る俺の前で、床で土下座をしている雫は、額をピッタリ床にくっつけて謝罪をしてきた。
「そこまで謝らんでも」
「い、いえ……！　謝らせてください……！　デートまで我慢しようと思っていたのに、零様と会ったらムラムラが抑えられなくなってしまって……挙句の果てに零様の事を考えずに射精をさせてしまいました……！　謝っても謝りきれないです……！」
「ほらほら、あんま頭床にガンガンしない。痛くなるぞ」
「はい……すみません……」
雫は反省がすごすぎて、床に額を何度も打ち付けていた。
このままだと出血しかねないので、俺は急いで止めた。
「俺はむしろ嬉しかったぞ」
「え……？」
「出会った当初はこんな感じだったな～って思って、嬉しくなった。最近、遠慮してるだろ？」

「そ、それは……」
「今日は二人っきりだ。我慢なんかしないで、本当の雫を俺に見せてくれ」
「き、嫌いになったり、しませんか……？」
「当たり前だろ。エロい雫を嫌いになるなら、初めて会ったあの日に嫌いになってる。あの潮吹きさせられた日も含めな」
「っ～～♡　れ、零様……！　だ、大好きです……！」
「知ってる」
「今日はもう、我慢しません……！　ありのままの私を出して、零様にエッチな事をしまくります！」
「あぁ。そうしてくれ。それに、今日だけじゃなくてこれから先ずっとな」
「っ♡　は、はい……♡　これからずっと、エッチな私を出し続けます～～♡♡♡」
「よし。それじゃあ、出かけるか」
「はい♡　行き先は本当に私が決めてもよろしいのですか？」
「あぁ。雫の行きたい所に行きたいからな」
「ありがとうございます♡」
俺達は、デートを始めた。

第７１話　雫とのデートはエロさ２００％♡♡♡♡♡（後書き）

雫回がスタートです！
いきなりのフェラスタート、いかがだったでしょうか？
沢山興奮していただけましたら、幸いです！

雫の行きたいところはどこなのか、気になる続きは明日の１８：００に♪

第72話　膣コキからのパイズリで、大量発射♡♡♡♡♡

「あっ♡　はっ♡　んんっ♡　あああっ♡」
俺は今、ラブホのベッドの上で雫に騎乗位で犯されていた。
「本当に行き先がここでよかったのか？」
「は、はい♡　んっ♡　ここで♡　んあっ♡　いいんですぅ♡　ああっ♡」
雫が提案した行き先。それは、ラブホだった。
どこか遊園地だったり映画館に行くものだと思ってた俺は、かなり驚いた。
雫曰く『どこかに出かけたりとかではなく、零様と一秒でも多くエッチしていたいのでラブホがいいんです♡』との事だった。
まさかデートの行き先がラブホとは思わず、さすがの俺も驚きが隠せなかった。
まぁ、別に引いたりはしない。だって、俺ももっとエッチしたいからな！
「んんっ♡　ああああ♡♡♡　んあああ♡♡　気持ちいい♡　気持ちいいぃ♡♡♡」
騎乗位って、結構いいよな……。乱れる女子、揺れるおっぱい。最高だ！
「れ、零様はぁ♡　き、気持ちいいですかぁ♡？」
「あぁ。めちゃくちゃ気持ちいいぞ。もうそろそろ出そうだ！」
「出してぇ♡　出してくださいぃぃ♡♡♡　私の膣にいっぱいぃぃ♡♡♡　あああああ♡♡♡」
「出るっ！」
ビュビューーー！！！　ビュッ！　ビュッ！　ブビューーーーーー！！！！
「んおおおおおおおお♡♡♡　にゃからし来たぁぁぁぁぁ♡♡

♡　子宮にビシャビシャ当たってるぅぅ♡♡♡　気持ちいいいいぃ♡♡♡」
　雫は中出しでイッたのか、膣を思い切り締め付けてくる。
「はぁはぁ……れ、零様……」
「ん……？」
「一つやってみたい事があるのですが、シてもよろしいでしょうか……？」
「あぁ。いいよ」
「ありがとうございます♡　それでは……んあっ♡」
　雫は再び、騎乗位で犯してきた。
　ん？　さっきとやってる事変わんない？
「あああああああああ♡♡♡　き、気持ちいいぃぃのぉぉぉ♡♡♡
　零様のチンポ様奥まで当たってぇ♡♡♡　強制的にイカされちゃうのぉぉぉ♡♡♡」
「くっ……！　膣が締められて……！　も、もう出ちまう……！」
　俺がもう少しで出そうと言う時、雫は急にチンコを引き抜いた。
「っ！？」
　驚いた俺は、雫を見る。と、申し訳なさそうな表情を浮かべながら抜いたチンコをおっぱいに挟んできた。
「し、雫……？」
「我慢させて、すみません……！　オマンコで沢山扱いた後、おっぱいで大量射精していただくが夢でして……♡」
　すんげぇ夢だな！
「別に構わない……ちゃんと射精をさせてくれるなら！」
「ありがとうございます！　もちろんです！　沢山、大量に出してください♡！　私のおっぱいが零様の精液で溺れてしまうほど、大量に出してくださいぃ♡♡♡」
　乳圧を強くする雫。その状態で扱かれたら、もう、無理！
「出るっ！！！」
　ドビュルッ！！！！　ブビュッ！！！　ブビュッ！！！　ブビュ

ーーーーーーーーーーーーー！！！！！
「ひゃわぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　すごい♡♡♡♡♡　零様の精液がまるでシャワーのように吹き出てますぅ♡♡♡　顔やおっぱいにかかってきて……♡　最高ですぅ……♡♡♡　幸せ過ぎますぅぅ♡♡♡」
「くはっ！　ま、まだ出るっ！！！」
射精中のチンコをさらに扱いてくるので、射精の勢いは止まらず、俺はさらに追い打ちで射精をしてしまう。
ブビューーーーーーーーーー！！！！　ビュビュッ！！！！
ビュビュッーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！
「零様零様零様零様零様零様零様零様♡♡♡♡　もっともっと出してくださいぃぃぃぃ♡♡♡♡♡」
俺は射精が全然止まらず、雫の顔とおっぱいが精液まみれになり、ベッドの上がビチャビチャになるまで続いた。
なんで雫とのエッチは、連続追撃射精が多いんだ！
気持ちいいからいいけど！

第７２話　膣コキからのパイズリで、大量発射♡♡♡♡♡（後書き）

デートの行き先がまさかのラブホ！
こんな彼女がいたら、皆さんはどうですか？
僕は嬉しいですね♡

次話は雫目線の回です！
雫の気持ちをしっかりと書けるように頑張ります！
この続きは明日の１８：００投稿です！

第73話　零様の為なら、なんでもシます♡♡♡♡♡

「はわぁ～……♡　やっぱり零様の精液は最高だなぁ～♡」
私は今、ベッドの上で座りながら体に付いた精液を指ですくって、楽しんでいた。
零様は今お風呂に入っている。
本当は一緒に入りたかったけど、この体に付いた精液を流したくなくて泣く泣く断念した。
「零様って、なんであんなに素敵なんだろう……？」
私はずっと思ってた。
零様は他の男性に比べて、エッチに積極的だし、女の子好きだし、エッチな格好が大好きだし、精液いっぱい出してくれるし、沢山愛してくれる。
「もしかして、別の世界から来た異世界人、とか？」
その世界では、男性がエッチに積極的で、女が消極的。ナンパやレイプ、痴漢なども男性が行うものだったり？
「まぁ、そんな世界があったら素敵だけど、まさかね。妄想もここまでくると困ったものね」
例え零様が異世界人であったとしても、人間じゃなかったとしても、私は零様が大好き！
私の身も心も全て、零様のモノ。
私は全てを零様に捧げている！
「でも、あまり私を使ってくれないんだよね……」
私は悩んでいた。
零様は私を性奴隷としてあんまり使ってくれない。
「私とすると、一回に何発も射精することになるから、あんまりしたくない、のかな……？」
私は零様のチンポ様、精液が大好きだ。

だからつい欲張ってしまう。でも、もしかしたらそれが原因で零様に使ってもらえないのかもしれない。
「だったら、私の欲望なんかどうでもいいから、零様に使ってもらえるように頑張ろう！」
そうだ！　そうしよう！　零様に求めてもらえて、沢山使ってもらえて、自然と沢山の精液をあげたいと思えるような変態女になろう！
「そうと決まれば！」
私は、お風呂から上がった零様に興奮してもらえるような準備を始めた。
大大大大だ～～～～～～～～～～～～～～～～～い好きですからね！
零様♡♡♡♡♡♡
私に対して、なんでもしてください♡♡♡♡♡

第７３話　零様の為なら、なんでもします♡♡♡♡♡（後書き）

零は意外と、勘がいいかもしれませんね。
その内、自分で零が転生者であると言う事を突き止めてしまうかもしれません（焦っ）。

さて、零は一体何をしようとしているのか。
この続きは明日の１８：００に投稿されますので、お楽しみに！

第７４話　射精、潮吹き、失禁しまくりのビチョ濡れエッチ♡♡♡

「ふぅ～」
俺は風呂から上がった。
本当は雫と入りたかったんだけど、体に付いた精液を流すのがもったいないとの事なので、少し寂しいが一人で入ることにした。
この世界で一人で風呂に入るの、何気に久しぶりだな。
「ごめんな、待たせて～って、な、何！？」
部屋に戻った俺は、目の前に広がる光景に目を疑った。
「あ、零様ぁ～～♡♡♡　おかえりなさいぃ～♡♡♡」
「し、雫！？　何してんだ！？」
雫のしている事。それは、足を畳んで足首と太ももを紐で縛り、仰向けになってマンコを見せびらかすと言う、変態しかしない格好をしている事だった。
両足を縛っているので、マンコが強調されてめちゃくちゃエロい！
「あっ♡　零様のチンポ様、ギンギンですね♡　ピクピク小刻みに跳ねて、我慢汁が先っちょからぷくぅ～って出てます♡」
「そ、そりゃそんな格好を見せられたらこうなるだろ……」
「すみません……チンポ様イライラさせてしまってすみません……！　どうぞ、我慢なさらずお使いください……♡　零様のチンポ様をイライラさせたこのドスケベド淫乱クソッタレ駄目マンコに、イライラチンポ様をぶち込んで思う存分ストレス発散してくださいぃ♡♡♡　奥の奥まで突いて突いて突きまくって、一番深い子宮口（ところ）でチンポ様ブチギレさせてくださいぃ♡♡♡」
「……そんな事言われたら、俺もう、我慢できないぞ……？」
「はい……♡」
「雫のマンコ、壊れるくらい……いや、壊れてガバガバになっても

止まらないし止めないぞ？」
「はい……♡♡」
「中で出して出して出して出しまくって、おしっこだって潮だって全部膣(なか)や体にぶっかけるぞ？」
「はい……♡♡♡　零様のお好きなように……♡　使いたいように使ってください……♡♡　私は、零様の性奴隷で肉オナホです……♡♡♡」
「っ！　零！！！！」
俺はついに我慢ができなくなり、零に襲いかかった。

♡　♡　♡

「んおおお

「っくあああああああああああああああ♡♡♡　2回目の潮吹きぎだぁあああああああああああああああ♡♡♡　子宮に注がれてるぅぅ♡♡♡」
なんとなくだけど、潮の吹き方が分かってきたので、俺は射精して潮を中出しするのにハマった。
「雫」
「ふへぇ……？　ひゃわぁぁぁぁぁ♡♡♡」
ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！
俺は、立て続けに膣（なか）で放尿をした。
「零しゃまのおじっごぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡　子宮で感じれるなんてぇぇぇぇぇ♡♡♡　ひゃぅんっ❤❤❤」
雫は全身を跳ねさせ、深くイッた。
イッた雫の体は、まるで打ち上げられた魚のようにビクビクと跳ねていた。
「雫、まだまだだからな？」
「ひゃ、ひゃいぃ……❤❤❤」
後ろから抱きつき、声をかけると、雫は俺の方に顔を向けてくれた。
目を見たら、蕩けきっていて、目にハートマークが浮かんでるんじゃないかってくらいにドロドロに溶けていた。

♡　♡　♡

「んごぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ❤❤❤❤❤」
俺は雫の腰を力いっぱいガッチリ掴み、腰を打ち付け犯しまくる（バックで）。
「あああ

「がああああああ

俺は、激しい手マン（指四本）を開始した。
手を動かす度に、グッチョグチョと言うドエロい音が鳴り、愛液、本気汁、精液、潮（俺の）、おしっこ（俺の）がどんどん溢れてくる。
そして、雫自身の潮や尿もドバドバ溢れてくる。
イッているみたいだけど、俺はお構いなしに手マンを続ける。
「じ、じぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♥♥♥

「あ、あ゛り゛がどうございま゛ず……！」
雫の声は、とんでもなく枯れていた。少し可哀想に思えてしまうほど。
アフターケアはしっかり俺がしないとな！　それが彼氏としての役割だ！
……ん？　彼氏？
「なぁ、雫」
「ば、ばい゛……？」
「俺達って、付き合ってるんだよな？」
「っ！　わ゛、私ば゛、れ゛、零様どお゛付ぎ合い゛じでも゛、い゛い゛ん゛でずが！？」
「ん？　当たり前だろ？　ていうか、性奴隷で肉オナホなんだから、付き合ってない方がおかしいだろ」
「ぞ、ぞれ゛ばぞうがも゛じれ゛ま゛ぜん゛が……ぼ、ぼん゛どうに゛よ゛ろ゛じい゛の゛でずが……？」
「あぁ。むしろ彼女になってくれた方が俺としても嬉しい」
「あ゛、あ゛り゛がどうございま゛ずぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛……！！！」
雫が全裸のまま俺に抱きついていた。
「なぁ、雫」
「ばい゛」
「声が枯れてる中悪いんだけど、もっと枯らす事になってもいい？」
「も゛ぢろ゛ん゛でず♡　私の゛全でを゛、壊じでぐだざい゛♡」
俺達はこの後、チェックアウトの時間までセックスし続けた。
朝の数時間の間で、１５発射精した。
口内発射：５発。
パイズリ発射：２発。
中出し：８発。

第７４話　射精、潮吹き、失禁しまくりのビチョ濡れエッチ♡♡♡♡（後書き）

雫回、いかがだったでしょうか？
初っ端からエロエロだった雫回。最後もエロエロで終えれたのではないかと思っております！
晴れて彼女となった雫。それと同時に肉オナホにもなった雫。
今後の二人の関係性にも注目していてくださると嬉しいです♪

次話から別のヒロインとなります！　誰になるのか、明日の１８：００をお楽しみに！

第75話　真耶子はおしっこがしたい♡♡♡♡♡

今日は真耶子とデートをする日だ。
ここ最近、真耶子を調教するのにハマっている。
俺の指示がないとおしっこもしちゃいけなくて、オナニーなんかでイクのも駄目。
全てを俺が管理する。それが最高過ぎて、最近は真耶子にどんな調教するかを考えている。
昨日の夜に、デートの待ち合わせ場所で会うまでおしっこ禁止令を出しておいた。
人間なら、誰しも朝起きたらトイレに行きたくなる。だが、それを真耶子には禁止させた。
さてさて、どんな風になっているのか。楽しみだ！
待ち合わせ場所である、駅前に行くと真耶子が立っていた。
「にしても、デートにスーツって逆にエロいな」
真耶子は、前に学校で着ていたスーツを身に纏っていた。
今は全裸で学校で過ごしているので、逆に新鮮でそそられる。
「ん？　なんか足ガクガクしてる？」
少しだけ近づくと、真耶子は俺が来るのを待ちながら、足を擦り合わせて何かに耐えているようだった。
まぁ、尿意である事はすぐに分かるんだけど。
「よぉ、真耶子」
「あ、れ、零様……！　おはようございます……！」
両足をガクガクさせながら、俺の方を向き挨拶をしてくる真耶子。
「我慢の限界、って感じか？」
「は、はい……昨日の夜頂いた命令通り、寝る前にお水を沢山飲んだので、朝起きたら尿意がとてつもなくて……それに加え、朝のご命令で一リットルのお水を飲んできたので、もう……」

「膀胱が限界か」
「は、はい……」
「じゃあ……」
俺がおしっこしていいと言うのを期待しているのだろう。縋るように俺を見てくる。しかし、俺はその期待を裏切ってやる。
「こうだな」
「んぎぃ！？」
俺は真耶子に近づき、スーツのスカートをまくり上げ、ノーパンの真耶子のマンコをほじくる。
「ほらほら。もうぐちゃぐちゃじゃねぇか」
「れ、れれれれ

「いいよもう。全部出しちゃいな」
「は、はいぃ……」
ぶじょおおおおおおおおお♡♡♡♡♡
ぶじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡
ぶしゅうううううう♡♡♡♡♡
「さて、これからどうするかね～」
「っ！？　あ、あの！　その、あの……！」
おしっこを漏らしながら、慌てふためく真耶子。エロいし可愛いな。
「デートはしてやる。ただ、普通のデートはしない」
「ほっ……」
デートができると分かっただけでホッとする真耶子。ホッとしたせいなのか、おしっこの勢いと量は増した。
「真耶子をイカせまくるデートにするから、覚悟しろよ？」
「は、はいぃぃぃ♡♡♡♡♡　私をめちゃくちゃにしてくださいぃぃ♡♡♡♡♡」

第７５話　真耶子はおしっこがしたい♡♡♡♡♡（後書き）

おしっこから始まった、真耶子回！
零の命令を守れなかった真耶子とのデートは、一体どうなるのか？　どんなエッチなデートになるのか？
次話をお楽しみに！
明日の１８：００に投稿できるよう、頑張ります！

第76話　クリローター装着デートでイキまくり♡♡♡♡♡

おしっこを我慢できず、漏らしてしまった真耶子は、シュンとしながら俺の後ろを着いてきている。
「ほら、しっかり歩け」
「は、はい……」
スーツのスカートを捲られ、下半身を丸出しの状態で歩いている。
「よし、着いたぞ」
「あ、ここ……」
俺達がやってきたのは、おもちゃ屋さんだ。
「本当に普通に売ってんのな……」
俺がこの世界にやって来て驚いたのは、大人の玩具が、普通に子供のおもちゃが売っている場所に売っていると言うこと。
特撮やアニメなどのおもちゃが売っているコーナーの隣に、ローターやバイブ、電マやディルドなどの大人の玩具が普通に売っている。
値段は中々するが。
「ここで、今日一日、真耶子が装着する玩具を買う」
「は、はい！」
俺達は店内に入る。
と、まさかの出会いがあった。
「いらっしゃいませ～って、あれ？　零様？」
「え？　あっ、玲奈さん！？」
そこにいたのは、沙耶香の双子の姉である、一之瀬玲奈さんだった。
「お、お知り合いですか……？」
「ん？　この顔見覚えないか？」
「え、えっと……あれ？　前田さんに似てる……というか瓜二つ？」

「そ。この人は沙耶香の双子のお姉さんなんだよ」
「なるほど！　だからこんなに似てるんですね！」
「いやいや、似てないですよ。左耳のここ、あの子にはホクロがないですから」
それ、沙耶香も言ってたけど、本当に小さな差だから分かんないんだよなぁ……！
「女をお連れになったという事は、大人の方の、ですよね？」
「はい。とびっきり強力で、イキすぎるものを」
「畏まりました。では、こちらにお越しください」
俺達は、玲奈さんに案内され、店の奥の奥へと向かった。
「当店では、店員が認めた方のみ、玩具の試着をする事ができます。ですので零様。零様が満足の行く玩具を見つけてください」
そう言って、玲奈さんはいろんな玩具を並べ始めた。
見るからにエグそうな玩具ばかりが並んでいる。
ディルドもバイブも電マもローターも吸うやつも、全部がエグそうだ……。
「どれがいいか……」
「れ、零様……？　目が怖いです……」
俺は気づかないうちに、目がギンギンになってしまっていたらしい。
だって、俺が好きな玩具を選んで、それを女に装着させられるんだぞ？　最高じゃねぇか！
「じゃあ、これを」
「はい。それでは女様、こちらにお座りください」
「は、はい……」
玲奈に案内され、真耶子は豪華な椅子に座った。
「あ、お召し物はお脱ぎになっていただいてもよろしいでしょうか？」
「あ、はい」
真耶子は椅子から立ち上がり、全裸になる。と、玲奈さんは服を

脱いでいる真耶子の背後に回り――、
「んひゃ！？」
俺が選んだローターを、突然クリに着けた。
「油断大敵、ですよ？」
そう言って玲奈さんは、ローターのスイッチを入れた。
「んあああああああああああああああ！！！　い、いきなりは駄目ぇぇぇぇぇぇ！！！！」
真耶子はいきなり来た刺激に驚き、椅子に座ってしまった。
座った真耶子の手足を拘束して、身動きを取れなくする玲奈さん。
「さて、零様、このローターがどのくらい気持ちよくなれるか、ご覧ください」
そう言って玲奈さんは、ローターの強さをどんどん上げていく。
「んおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡　ダメダメダメダメぇぇぇぇ！！！！！　刺激強すぎぃぃぃぃぃ！！！！！　こんなのすぐイッちゃうぅぅぅぅ！！！！！」
言葉通り、真耶子はあっという間にイッてしまった。潮を撒き散らしながら。
「これはまだ『弱』でございます。お次は『中』を」
「ま、まら『弱』……？　んおおおおおおおおおおおおおおお

「す、すげぇな……」
「ちなみにこのローター、強さが五段階ありまして、『弱』『中』『強』『強強』『超強』があります」
「この上にさらに二つあんの！？」
「む、無理ぃ……」
さすがにここでやるのは可哀想か。
「よし、これ買います」
「ありがとうございます。ですが、今回は私からプレゼントさせてください」
「え……でも、これ結構いい値段しますよね？」
「いいんです。こうしてお会いできたのがとても嬉しくて、何かお礼をしたいのです。なので、プレゼントさせてください♡」
「分かった。ありがたくもらっておくわ」
「はい♡」
「真耶子、いつまでへばってんだ、行くぞ」
「ひゃ、ひゃい……」
真耶子は服を持ち、俺の後を着いてくる。
「ありがとうございました♡」
「じゃあ、また」
「はい♡」
俺達は店を出て、デートを始めた。

♡　♡　♡

「んっ……♡　んんっ……♡　んぁぁ♡♡♡　んおぉぉ♡♡♡」
スーツを着た真耶子は、喘ぎ声を漏らしながら、太ももを擦り合わせながら俺の後ろを歩いている。
時折、ガニ股になったりするのでめちゃくちゃエロい。
「そろそろ……」
「んあああああああああああああああ♡♡♡」

俺は先程もらったローターの強さを『弱』から『強』にした。
「まっで！？　まっで！？　これ駄目ぇ！？　これ駄目ぇ！？」
「何してんだ、さっさと歩け～」
「あ、あああああああああああああ歩けないいいい

第７６話　クリローター装着デートでイキまくり♡♡♡♡♡（後書き）

またラブホかよ！　と思われたかもしれません……ですがご安心ください！　ラブホに行こうと言ってはいますが、実際は……？
と言う感じなので、飽きずに楽しめるかと思われます！
楽しみにしていてください！
『管理中女』ってよくないですか？
自分が管理する女。最高にエロいと僕は思います！
もし他にいいネーミングがございましたら、教えてくださると嬉しいです！

次話は真耶子目線の回となっております！
イカされまくった真耶子は、何を思い、どう行動するのか！
真耶子の心情を少しでも表現できるよう、頑張りますのでぜひ、ご注目ください！

次話は明日の１８：００に投稿します！

第77話　私の全てを零様に♡♡♡♡♡

どうしよう……。零様にこんな事させてしまうなんて……。
私は今、零様におぶっていただいている。
イキまくり、失禁しまくり腰が抜け歩けなくなってしまった私を、零様は優しくおぶってくださった。
本来は男性はおぶる側ではなく、おぶられる側なのに……。
あぁ……なんという失態……！
こんなんじゃ、零様に愛想つかされちゃう……！
「れ、零様……」
「ん？　どうした？」
「お、重くない、ですか……？」
「全然平気だ。ちゃんとご飯食べてるのか？　軽すぎて心配になるぞ」
「い、一応59．4kgあるんです……」
「軽くね？」
「い、いえ……！　重たいですよ……！　同じIカップの友人に聞いたら、55kgって言ってましたから……それに、最近、太ってきていて……お腹にお肉がついてきているんです……」
「全然分かんないけど……でも俺、今の真耶子好きだぞ？」
「ふぇ！？」
れ、零様が私を、す、好きって！？
げ、幻聴じゃないよね……！？
「れ、零様はデブ専、ですか……？」
「う～ん……別に専がある訳じゃないかな。好きになった人が細かろうが太かろうが関係ないって感じ。俺は好きな人がどんな風になろうとも愛し続けられる自信がある！」

「っ♡♡♡」
どうしよう……今の言葉だけで軽イキしちゃった……♡
子宮がキュンキュン疼いて、今すぐおちんちん欲しくなっちゃう……♡♡♡
「あ、ありがとうございます……♡　で、ですが、これからは私の食事、飲み物、排泄時間、性欲、睡眠など全てを零様に管理していただきたいです……」
「もちろん。そのつもりだ。これから一生管理してやるからな」
「あ、ありがとうございます……♡」
私は人生全てを零様に捧げたい。
私の人生は零様の人生。零様の思うままに、したいままに管理していただきたい。
零様のためなら、命だって惜しくはない。
重たすぎると言われるかもしれない。でも、私はそれだけ零様の事が大好きで、愛している。
私の全てを、私、山田真耶子と言う存在そのものを管理して使ってほしい。
だから、言おう。
「れ、零様……！」
「ん？　どうした？」
「私の全てを管理してください……！」
「うん。そのつもりだよ？」
そうじゃない。緊張してないで言うんだ！
「わ、私を、零様のお家に住まわせてください……！」
言っちゃったぁ……。ついに言ってしまった……。
私のワガママを……。多分、断られる。だって、いくら管理する為とは言え、一緒に住むなんて……。
「いいよ」
「そうですよね、やっぱり駄目ですよね――ってえぇ！？　い、いいんですか！？」

零様の返答は、予想外のものだった！
まさかの、オッケー！？
「俺もそろそろ提案しようかなぁ～って思ってたから、ちょうど良かった。真耶子、管理する為に一緒に住むぞ」
「は、はい……！　ふ、ふつつか者ですが、よろしくお願い致します……！」
「嫁入りかよ。まぁ、それも悪くないな。うん、よろしく」
あぁ～……♡　最高に幸せ～～～♡♡♡
大好きな零様と一緒に住めて、管理してもらえるなんて～～～♡♡♡
「れ、零様」
「ん？」
「ら、ラブホではなく、私の家に行きませんか……？」
「いいけど……どうして？」
「あの家で零様とエッチするのも大好きなので、少しでも多く思い出を残したくて……」
は、恥ずかしい奴って思われたかな……。
「なるほどな……確かにそうだな。真耶子は可愛いな。よし、それじゃあ真耶子の家に行こう～！」
か、可愛いって言われたぁぁぁ♡♡♡
もうそれだけで、二回はイッちゃいますよぉぉ♡♡♡

零様は本当にお優しい。
こんな馬鹿で変態な私の思いや願いを、引かずに受け入れてくれて、肯定してくれる。
私はもう、零様なしでは生きていけない体になった。
零様。こんな私ですが、零様に満足していただけるようなエロい女でいますので、これから一生、よろしくお願い致します♡♡♡

第７７話　私の全てを零様に♡♡♡♡♡（後書き）

今回はエッチなシーンがなしとなってしまいました……申し訳ございません……！

ですが、真耶子の思いをきちんと書けたかなと思っておりますので、そこをお楽しみいただけましたら幸いです……！

次話はきちんとエッチシーンを書きますので、楽しみにしていてください！

盛り盛りで書きたいと思っております！

次話で真耶子回ラストです！

二人の管理セックスがどうなるのか、楽しみにしていてください♪

次話は明日の１８：００に投稿予定です！

（状況により、夜の２１：００以降になる場合がございます。ご了承ください……！）

第７８話　真のドＭ性奴隷として♡♡♡♡♡

真耶子の家に到着した。
俺は玄関を開けて中に入ると、靴を脱ごうとして前かがみになっている真耶子に、なんの告知もなくチンコをぶっ込んだ。
ちなみに、真耶子はスカートを穿いてはいるが、捲り上がっているので、簡単に挿れる事ができた。
「んおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡！？」
急に挿れられた事で、真耶子はとんでもない声で鳴いた。
「悪い。我慢できなくなった」
「は、はいぃ♡♡♡　だ、大丈夫ですぅ～♡　零様がシたくなったらいつでもどこでもお好きな時にぃ♡　私のオマンコぉ♡　お使いぃ♡　くださいぃ♡　むしろ、我慢をさせてしまい、申し訳ございませんぅぅ♡♡♡」
真耶子が喋ってる間も、俺は後ろからマンコを突き続ける。
そうか。いつでもどこでも好きなだけ使っていいのか。
真耶子は俺の性奴隷で、管理対象だから、好きにしていい。うん、確かにその通りだ。
「これからは、真耶子のマンコの全ても俺が管理するからな？」
「は、はいぃぃ♡♡♡♡♡　シてくらはいぃぃぃ♡♡♡　私の全てぇぇぇ♡♡♡♡♡」
俺はガンガン腰を打ち付け、真耶子をバックで犯す。
「んおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡　おちんちんパンパンしゅごいのぉぉぉぉ♡♡♡　こ、こんなのしゅぐイッちゃうぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡　あーーーー♡♡♡　イグ♡　イグイグ♡　ッグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
「うっ……！　急に締まって……！　これは、駄目だ！　出るっ！！」

ドビュ！！　ドビュビューーーー！！！
「んおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡♡　にゃかだし、来たぁぁぁぁ♡♡♡　零様の精液が子宮に当たって、また、イグぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡」
真耶子は、一度イッた後、中出しをされたイッた。
どんだけエロいんだこの女は。
「そら、このまま部屋行くぞ」
「ひゃ、ひゃいぃ……♡」
俺達は繋がったまま、真耶子の部屋へと向かった。

♡　♡　♡

「ほら、漏らせ」
「んあああああああああああああああ♡♡♡」
俺は、ベッドの端で立ちバックで真耶子を犯しながら、クリを握る。
そして、失禁しろと命じた。すると、その命令通り――、
ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡
「おぉ～出た出た～」
真耶子はおしっこを漏らした。
「こうやって、俺が『漏らせ』って言わない限り、おしっこは禁止だからな？」
「ひゃ、ひゃいぃぃ……♡」
「『漏らせ』」
「んんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
じょぼぼぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡
「もっと『漏らせ』」
「っ～～～

「あああああああああああああああああああああ♡♡♡」
ジョボォォォォォォォォォォォォォォォォ♡♡♡♡♡♡
「あっ……♡　ああっ……♡」
真耶子は、俺の『漏らせ』と言う言葉を聞くと漏らす体になった。
この調子で色々仕込んでいこう。

♥　♥　♥

「っ……♡　っ……♡」
も、もう何回イッたんだろう……。
零様に『俺が触れた所全部がクリになるから、イキまくれ』と言われた私は、目隠しをさせられ、全身を触られた。
すると、本当に全身がクリになったかのように敏感になり、零様に触れられる所全部が気持ちよくて、触れられる度にイッてしまっていた。
「（これは管理と言う名の暗示……つまり催眠だ。一生解けないように体と脳に刷り込むから、覚悟しろよ）」
「はいぃぃぃ……♡♡♡」
イキすぎて馬鹿になってる私は、ベッドの上で力なく横になって全身をビクビク震わせる事しかできなかった。
零様からの囁きにも、しっかりとした返事ができなかった。
「『漏らせ』」
この言葉を聞くと、無理ぃ♡
ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡
もう勝手におしっこが漏れちゃう……♡
さらにこれだけじゃなくて――、
「『撒(ま)け』」
「んおおおおおおおおおおおお♡♡♡」
ぷしゃあああああああああああ♡♡♡
『撒(ま)け』。その言葉は私に潮吹きを命じる言葉。

私はこの『撒(ま)け』の言葉を聞くだけで、マンコを弄られてなくても潮吹きをしてしまうようになった。
逆に――、
「『出すな』『撒(ま)くな』」
と言われると、どんなにおしっこをしたくても出せないし、どんなに激しく手マンされても潮吹きができないようになった。
たったの数時間で、私は完全に零様に支配されてしまった♡
完全な、管理ドM性奴隷になれたかは分からないけど、今、とっても幸せぇ……♡
「惚けてる時間はないぞ。ここからは第二ラウンド。俺のチンコの臭いを嗅ぐだけでイッたり、舐めるだけでイッたりするようにしてやる」
う、嬉しいぃぃ……♡♡♡　これでもっと、零様の真のドM性奴隷に近づけるぅぅ♡♡♡

♡　♡　♡

夜。
「すぅ～……すぅ～……」
俺の隣では、真耶子が気持ちよさそうに眠っている。
あれから真耶子は、俺のチンコを見るだけで、臭いを嗅ぐだけで、舐めるだけで、我慢汁を舐めたり飲んだりするだけで、精液を飲むだけでイク体になった。
我ながら簡単にイカせすぎだなとも思った。
だけど、これには一つ理由があった。
それは――、
「『絶対にイクな』って命令して、簡単にイケるのにイケない地獄を味わわせたい」
我ながら鬼畜だとは思うが、これが管理をするものの楽しみである。

「さて、使うか」
「おごぉ……♡♡♡」
俺は、熟睡する真耶子のマンコにチンコを挿れ、セックスオナニーを開始した。
もちろん、中出しだ。一回で止めるつもりが、気持ちよくてつい、5発も出してしまった。

第７８話　真のドＭ性奴隷として♡♡♡♡♡（後書き）

真耶子回ラスト、いかがだったでしょうか？
前話ではエッチシーンが全くなかったので、初っ端から入れてみたのですが、楽しんでいただけましたでしょうか？
本当はもうちょっと長く書きたかったのですが、諸事情があり、少し短めとなってしまいまいました……申し訳ございません……！
真耶子の『管理』『調教』はこの後もどんどん続いていきます！
その様子もしっかりと書いていきたいと思っているので、楽しみにしていてください！
（本編では触れなかったのですが、ローターは玄関に入った時点で外しております）。
今後は、真耶子のお話も増やしていきたいなと思っておりますので、真耶子好きの方、期待していてくださいね♪

次話からは別のヒロインのお話となります！
一体誰になるのか？　明日の１８：００をお楽しみに！

第79話　天城ユイとの初デート？　初エッチ♡♡♡♡♡

「ほ、本当によろしいのですか……？」
「あぁ。天城にはいつもよくしてもらってるからな。醍醐(だいご)抜きで、二人で楽しみたい」
「み、身に余るお言葉……！」
「で？　どこにデートしに行きたい？」
「そ、そのデートは、その……エッチは含まれているんでしょうか……？」
「あぁ。当然そのつもりだ」
「で、では……一つお願いしたい事が……」
「なんでも言ってくれ」
「それでは……」
天城が伝えてきた事に、俺は即勃起してしまった。

♡　♡　♡

『夏休み真っ只中の日に集まってくれて感謝する。今日集まってもらったのは、零様のお付きである者の願いを叶える為だ。女の願いを叶えるのは癪だが、零様たってのお願いなので叶えさせていただく事にした。皆は零様のお姿を楽しみながら、オナニーをするように！』
『はい！』
学校の理事長である黒乃が、体育館のステージ脇でマイクを通して告げる。
そして、それに対し、体育館に集まった女子達が元気よく返事をした。
なぜ体育館にいるのかと言うと――、

「まさか、天城の願いが『大勢の人の前で犯されたい』だとはな」
「す、すみません……変態すぎましたよね……」
「いや。俺はめちゃくちゃ嬉しかったぜ。そもそも天城ともいつかセックスしたいと思ってたし」
「う、嬉しいです……♡」
「じゃあ、行くぞ」
「はい……♡」
俺達は、体育館のステージの真ん中に立つ。
「じゃあ、始めるぞ？」
「は、はい……♡」
俺は天城の背後に立ち、爆乳を後ろから揉む。
「天城のこのおっぱい、ずっと揉んでみたかったんだよ。何カップあんだ？」
「え、Mカップです……♡」
「M！？　マジかよ……やっば！　最高じゃん！」
「お、大きいおっぱいはお好き……ですか……？」
「当たり前じゃねぇか！　おっぱいはデカいに限る！　俺は巨乳、爆乳が大好きだ！　だから、揉みまくるぞ」
「は、はい♡　んっ……♡」
俺は、天城のMカップ爆乳を激しく揉みまくる。
「直接揉むぞ」
「はい……♡　んあ……♡」
俺は、天城が着ている服を脱がせパンイチにさせる。
「お～陥没か～」
「す、すみません……」
「謝る事なんてない。陥没乳首は最高にエロくて大好物……違った。大好きだ！」
「んふふ♡　良かったです♡　あっ♡」
「この陥没を、勃起させるのが楽しいんだよな～」
「あっ……♡　ああっ……♡　んあああ♡」

「おっ。勃ってきた勃ってきた」
天城の陥没乳首は、ビンビンに勃ち、さらにエロくなった。
「ほら、じゃあ乳首勃たせたまま、次はこっちだ」
「あっ……♡♡」
俺は、左手で乳首を弄りながら、右手を下半身に持っていく。
すると、天城のパンツはビチョビチョに濡れていた。
パンツのクロッチ部分を軽く触っただけで、指とパンツの間に糸が引いた。
「めちゃくちゃ濡れてんじゃん。おっぱい揉まれただけで、どんだけ感じてんだよ」
「す、すみません……♡　大好きな零様に触っていただけるのが嬉しすぎて……♡♡♡」
「じゃあ、このまま……」
「んぁ♡」
俺は、パンツの上からクリを弄る。
「あああああ♡♡♡　わ、私のクリを、クリを♡♡♡　んあ♡♡大好きで憧れの零様がぁ♡　弄ってくれてるぅぅ♡♡♡　し、幸せすぎて、イッちゃうぅぅぅ♡♡♡」
ぷしゅ♡　ぷしゅぷしゅっ♡♡♡
「お～。天城は潮を吹きやすい体質なんだな。クリ弄りだけで潮吹くなんてな」
「はぁはぁ……♡　はい……♡　私、潮やおしっこを漏らしやすくて……オナニーをすると必ず漏らしてしまうんです……♡」
「最高にいい女だな」
「ありがとうございます……♡　んぁぁぁ♡♡♡」
俺は、パンツの中に手を入れて、直接クリを弄る。
「ほら、もっとイケ」
「あああああああああああ♡♡♡　く、クリそんなに擦ったらぁ♡♡♡　イグぅぅぅぅぅ♡♡♡」
ぷしゅ♡　ぷしゃ♡　ぷちゅぅ♡

「はぁはぁ……♡」
俺はびちょびちょになったパンツを脱がせ、右足首に着けたままにする。
脱がして取らずに、足に着けておくのってめちゃくちゃエロいよな！
「じゃあ、次は直接」
俺は、天城のマンコの中に指を挿(い)れる。
一本じゃなく、中指と薬指の二本だ。
「んあああああああああああ♡♡♡♡♡　こ、これ気持ちよすぎますぅぅぅ♡♡♡　自分の加減じゃない激しさ、しゃいこう過ぎますぅぅぅぅ♡♡♡♡♡　加減ができないから、すぐにイッちゃうぅぅぅ♡♡♡」
ぷしゃあああああああああああああ♡♡♡
「まだまだぁ！」
「あああああああああああああああああ♡♡♡　今イッたばっかりなのにいいいぃ♡♡♡　イグぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
ぶじょおおおおおおおお♡♡♡
「ほらほら、もっとイッてもっと漏らせぇ！」
「んあああああああああああああ♡♡♡♡♡」
俺は、しゃがみ込み、左手でクリを、右手で手マンをして天城をイかせる。
「もっと！　もっとだぁ！」
「あああああああああ♡♡♡　おかしくなるぅぅ♡♡♡」
俺はこの後、天城をイカせにイカせまくった。
潮を吹きすぎて、途中から「ぐちゅ♡　ぷちゅ♡」と言う空気のような音がでるだけになった。
まぁ、すぐにとんでもない量の潮が吹き出てきたんだけど。

第79話　天城ユイとの初デート？　初エッチ♡♡♡♡♡（後書き）

天城ユイ回！　いかがだったでしょうか？
醍醐歩美の使用人として、零の家に住んでいる天城とようやくエッチいたしました！
このデート回は、天城とのエッチを書きたくて始めたと言っても過言じゃないかもしれません！
ここから天城の回が3話続きます！
残りの3話は、天城目線となります！
いつもと違ったデート回を沢山、楽しんでください♪
次話は明日の18：00に投稿予定です！
（今日みたいに時間が変わってしまうかもしれません。先にご了承していただけますと幸いです……！）

今回の潮吹き手マンは、僕の大好きなAVを参考にさせていただきました！
もう何度も見ている大好きな作品なので、皆様にお伝えさせていただきますね♡
よろしければぜひ、見てみてください♡

←作品名
『満員電車で痴漢師に潮が出なくなるまで何度もイカされ膝をガクガク震わせながら絶頂する女3』

第８０話　憧れのフェラご奉仕♡♡♡♡♡

「はぁはぁ……♡」
零様に連続でイカされ、沢山潮を吹いてしまった私は、零様に背中を預けながら呼吸を整えていた。
零様に支えさせるなんて、本来はしてはいけないこと……だから早くどかないと！
「れ、零様……お次は、私がさせていただいてもよろしいでしょうか？」
「あぁ、いいぞ」
「ありがとうございます」
私はフラフラする体をなんとか立たせ、零様と向き合う。
そして許可をいただけたので、私は零様の前に跪き、零様のズボンとパンツを脱がす。
すると、すでに勃起していた零様のオチンポ様が、ビンッ！！！と、私の目の前に勢いよく飛び出してきた♡
「れ、零様のオチンポ様を、こんなに近くで見られる日がくるなんて……♡♡♡」
「見てるだけじゃなく、してくれ」
「は、はい♡　では、失礼いたします♡　れる……♡」
私は下品に舌を伸ばし、オチンポ様の裏スジを舐める。
舌が裏スジに触れた瞬間、私は全身が震えた。
こ、こんなに美味しいものがこの世の中にあったのかと♡
これまで口にしてきた何よりも美味しくて、もちろん、オチンポ様は食べ物じゃないと言うのは分かっています。
ですが、それを前提にしても、これまで口にしてきたものの中で一番美味しく、ずっと口に含んでいたいと思うほど♡
まだ一舐（ひとな）めしただけなのに、もう私の口、舌、味覚、脳、喉、子

宮はオチンポ様の虜になっていて、私は無意識の内に舌全体を裏スジにくっつけていた。
「れる……♡　える……♡　ぴちゃ……♡」
裏スジだけじゃ我慢できず、舌を回しカリ首も舐める。
し、舌に触れる感触、そしてカリ首にある不思議な食感のチンカス……♡
このチンカスは、おそらく昨日の山田真耶子様とのデートで生じたもの。
本来であれば山田真耶子様が舐め取るのが礼儀ですが……ここは、僭越ながら私が味わわせていただきます♡
「れるれる……♡　れろれろれろ……♡」
カリ首を中心的に舐め回しながら亀頭も舐めていく。鈴口からは我慢汁が大量に溢れ出ていて、亀頭を舐める度にしょっぱい味が口全体に広がる。
が、我慢汁ってこんなに美味しいんですかぁ♡♡♡
我慢汁とチンカスがこんなに美味しいと言う事は、ザーメンはどれほどのお味なのか……これ以上に美味しいとなると、私、気を失ってしまうかもしれません……♡
それと、桃様やリサ様、紗夜様達がよくお飲みになっている零様のおしっこ。私もできれば飲んでみたいですね……。
ですがまずは、ザーメンをお出しいただかなければ♡
「いたらきまふ♡　はんむ♡」
私は、舌を突き出し、亀頭を舐めながら大口を開けてオチンポ様を咥える。
口全体に広がる、汗と精子の臭い……♡
どんどん溢れ出てくる我慢汁の味……♡
こ、こんなの堪らない……♡♡♡
「ぎゅぶっ♡　ぎゅっぼっ♡　ぎゅっぼっ♡　ぎゅっぼっ♡　ぎゅっぼっ♡」
私は我を忘れ、一心不乱にフェラをしていく。

M字開脚をして、零様にオマンコを見せつけるようにしながら、頭を前後に振って、オチンポ様にご奉仕をする。
唾液と我慢汁が混ざり、私の口から卑猥な音が鳴る。
頭を前後に動かしシコシコするのに合わせて、舌で亀頭や裏スジ、カリを刺激するのももちろん忘れない。
「くっ……！」
上から零様の可愛らしいお声が漏れたので、視線を上に向けると、零様が目を瞑り上を向き感じてくださっていた。
感じてるお顔も猛烈に可愛い♡♡♡
しかも、感じさせてるのは私のフェラ。こんなに嬉しい事はない♡
零様、もっと激しくしますから、もっともっと沢山感じてください♡
そして、たっくさん私の口マンコに濃ゆ～いザーメンを中出ししてください♡♡♡♡♡
「そ、それヤバ……！」
私は零様の腰に両手を回し、お尻をガッチリ掴む。零様が腰を全く後ろに引けないように。
そして、深く深くオチンポ様を咥え、激しく頭を前後に振る。
頭を前に出す時、舌をわざと口から出し、裏スジをしっかりと刺激する。
多分、見ている人からするととんでもなく卑猥に見えるはず。だって舌を出しているから。
でも、私は零様の為ならどんな下品で卑猥で淫乱でドスケベな痴女にもなれる♡♡♡
「も、もう……！」
イキそうなんですね♡♡♡
オチンポ様がお口の中で膨らんで、パンパンになって硬くなってる♡♡♡
イク寸前のオチンポ様って、こんな風になるんだ……♡♡♡
こんなの愛おしすぎます……♡♡♡

我慢なんてしないでいいんです♡
沢山、たっくさん私の口マンコに中出ししてください♡♡♡
ぎゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡♡♡　ぎゅぶっ♡♡♡　ぎゅぶっ♡♡♡」
「くっ……！　出るっ！！！」
ドビューーーーーーーーー！！！　ビュビューーーーーーーーーーーーー！！！！　ビュルンッ！！！！　ビュビューーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！
「んっ！？　んんぅ♡！♡！♡！　んん～～～～♡♡♡」
ざ、ザーメン来ましたぁ♡♡♡
射精ってこんな感じなんですね……♡♡♡
本当にオチンポ様が爆発したかのようで、鈴口から大量のドロっとしたザーメンが発射されて、舌を通り越して喉奥に直接当たってる♡♡♡
のどちんこにビシャビシャ当たって、その後喉に届く……♡♡♡
濃すぎて飲み込むのが結構大変だけど、それがまたいい……♡♡♡
そして、味はものすごく美味しい♡♡♡♡♡
今まで口にしてきたものが、どれも全部不味く思えるくらい、ザーメンが美味しい♡♡♡
ずっとこれを口にしていたい……♡
これがかかったサラダとかあったら最高ですね……♡
あぁ～……♡♡♡　ずっとザーメンを飲んで食していたいです……♡♡♡
「出してる時に、そんなにされたら、またっ！」
ビュッ！！！　ビュビューーーーーーー！！！！！
私は、射精中のオチンポ様に対して無意識に、バキュームと亀頭舐めをしてしまっていたらしい。
それで零様が追加で射精をしてくださった♡♡♡
お口の中がザーメンで支配されていく……♡♡♡
ザーメンの臭いで口の中と鼻が支配されていく……♡♡♡　最高

すぎる……♡♡♡
　もう一生、この臭いが取れないでほしい……♡♡♡
「ごくごくごくごく……♡♡♡」
　あぁ～……射精の威力が落ち着いてきちゃいました……もっと飲みたいのですが……。
「ごく……♡　ギュポン♡　零様、ご馳走様でした♡」
「天城、フェラ上手すぎだろ……」
「お褒めに預かり光栄です♡　零様にする日の為に、ずっと自主練をしておりました♡　一日も欠かした事はございません♡」
「なるほどな……」
　ん？　零様の視線が口からおっぱいに……？
　あ、もしかして……。
「零様、お次はパイズリはいかがでしょうか？」
「いいのか？」
「もちろんでございます♡　私のおっぱいマンコにたっくさん中出ししてください♡」
「じゃあ、頼む」
「はい♡」
　次はパイズリ。頑張るぞ！

第８０話　憧れのフェラご奉仕♡♡♡♡♡（後書き）

天城のフェラ、いかがだったでしょうか？
沢山興奮していただけましたら、幸いです♡

次話はパイズリです！　パイズリ大好きな皆様、楽しみにしていてくださいね♡
次話は１８：００に投稿予定です！
お楽しみに♪

第８１話　憧れのパイズリご奉仕♡♡♡♡♡

「それでは、失礼いたします♡」
私は、膝立ちになり、おっぱいの谷間に零様のオチンポ様を埋める。
そして、おっぱいを手で中央に寄せてオチンポ様を圧迫する。
おっぱいを上下に動かして、オチンポ様を刺激する。
「んっ……♡　んっ……♡　んっ……♡」
零様のザーメンと我慢汁、私の唾液でヌルヌルになったオチンポ様が、谷間から顔を出したり隠れたりするのがすごく可愛い♡
滑りは問題ないけど、もう少し足しましょうか。
「んん……♡　んれぇ……♡」
私は、亀頭に唾液を垂らす。
すると、零様が気持ちよさそうな顔をしてくださった。
これでもっと滑りがよくなったので、もっとも〜〜〜〜〜っと気持ちよくなってくださいね♡♡♡
「んっ♡　んっ♡　はっ♡　はっ♡」
パイズリって、こんなにも幸福感があるんだ……♡
自分のおっぱいに、大好きな人のオチンポ様が挟まってて、包みこんでシコシコすると感じてくれて♡
こんなに嬉しい事はない♡♡♡
「こんなのは、どうでしょうか♡」
「おぉ〜……」
私は、亀頭を乳首に擦り付ける。
これ、私が気持ちよくなっちゃいます……♡
オチンポ様の鈴口が乳首を刺激してきて……♡
「んあ……♡　あっ……♡」
こ、これ……イッちゃいます……♡

「も、もう……！」
「はい……♡　このまま出してください……♡　わ、私も乳首であっ……♡　イッちゃうぅぅぅ♡♡♡」
「出るっ！」
ビュルッ！！！　ビュッビュ！！　ビュッ！！！
「んんぅ♡♡♡　乳首にザーメン当たってるぅ♡♡♡」
なんか、乳首に中出しされてるみたいで、気持ちいい♡♡♡
「零様、まだですよ♡」
私は射精中のオチンポ様をすぐさま谷間に挟み、激しく上下に動かしシコシコする。
「ちょ、ちょっとぉ！？」
「もっと♡　もっと♡　もっと出してくださぃぃ♡♡♡」
「出るぅ！！！」
ビュルッ！！！！　ビュビューーーー！！！！！
すごい……♡　噴水みたい♡♡♡
こんなにザーメン浴びたら私……もう我慢できない……♡♡♡
「れ、零様……♡　わ、私をめちゃくちゃに犯してください……♡
零様のザーメン、膣（なか）に沢山注いでください……♡♡♡」
「あ、あぁ……分かった！　めちゃくちゃになるまで犯しまくってやる！」

第８１話　憧れのパイズリご奉仕♡♡♡♡♡（後書き）

パイズリ描写って、結構難しいですね……。
もっと上手く書きたかったのですが、もっと勉強が必要だと感じました……。

次話ではやっとセックスを開始します！
犯され淫らに乱れる天城を、お楽しみに！
明日の１８：００投稿予定です！

第８２話　足腰ガクガクのイキまくりセックス♡♡♡♡♡

「挿(い)れるぞ」
「は、はい……♡　来てください……♡　零様のオチンポ様、オマンコの奥の奥まで突っ込んで、壊してください……♡」
「ふんっ！」
「んあああああああああああ♡♡♡♡♡　き、来たぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡♡」
れ、零様のオチンポ様……♡♡♡
す、すごすぎるぅ……♡♡♡
挿(い)れられただけでイッちゃったぁ……♡♡♡
オマンコも子宮も震えが止まらない……♡♡♡　子宮の入り口に、オチンポ様の亀頭が触れてるのが分かる……♡♡♡
こ、これヤバイかも……♡♡♡
「やけにすんなり挿(はい)入ったな……！　処女なんだよな？」
「申し訳ございません……！　あんっ♡　しょ、処女は、ああんっ♡　でぃ、ディルドオナニーをしている時に、んあああっ♡　そ、喪失してしまいまして……んあんっ♡」
「オナニーで処女喪失とか、どんだけ淫乱なんだよ。じゃあ、なんの気兼ねなく、犯しまくっていいって事だな！」
「は、はいぃぃ♡♡♡　零様のお好きなように犯しまくってくださいぃぃ♡♡♡♡」
「と言うか、締りがやばすぎて、もう、出るっ！」
ドビュンッ！！！　ドビュッ！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
「んあああああああああああああああああ♡♡♡♡♡　にゃかだし来たぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　子宮にザーメン注がれてるぅぅ♡♡♡♡♡♡」

な、中出しってこんなに気持ちいいんだ……♡♡♡
お、お腹が幸せで包まれていく……♡♡♡
あぁ～……♡　零様の子を孕みたい……♡♡♡
「出したばっかだが、まだまだ行くからな！！！」
「は、はいぃ♡♡♡　沢山犯してくださいぃぃ♡♡♡　沢山ザーメンをぉ♡♡♡　子種ザーをくださいぃぃ♡♡♡」

♡　♡　♡

「あっ♡　あっ♡　あああ♡　ああんっ♡　んあああ♡♡♡　んんぅぅあああああああ♡♡♡♡♡♡」
天城が淫らに喘いでいる。
こいつ、こんなにエロかったんだな……もっと早く犯しておけばよかったな……。
まぁ、でも、こうやって今日犯せたんだ。これから沢山可愛がってやろう。
「んあああああああああ♡♡♡　イッギュぅぅぅ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
くっ……！　締まりがヤバイ……！
「出るっ！」
ビュビューーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！　ビュルッ！！！！！！　ビュッビューーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！
「くぉ……！」
し、搾り取られる……！　このマンコ、他の女子達より、俺の精液を搾り取る為にあるかのような感じだ……！
子宮が亀頭を全く離してくんない……！
「うっ……♡　あっ……♡　うぅ……♡」
天城は、イキすぎているのか、足をガクガク震わせて、今にもへたり込んでしまいそうだ。

でも、俺がそれを許さない。
羽交い締めにして、天城を座らせない。
「はぁはぁ……んお♡♡♡」
俺はアへ顔に近づいてきている天城を、力強く羽交い締めで後ろにのけ反らせ、腰を打ち付ける。
「んがあああああああああああああ♡♡♡♡　んおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡♡♡」
喘ぎ声が段々と下品なものに変わっていく。
気持ちよすぎて壊れてきているのだろう。だけど、俺は犯すのをやめない。
もっと、もっともっともっともっと犯しまくってぶっ壊してやるんだ！

♥　♥　♥

「んおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

る……❤❤❤
な、何これ……最高すぎてイクの――、
「止まらないいいい

本当、お優しいですね♡
「何も気にせず、犯していてよかったのですよ？」
「いやいや、流石にそこまでしないわ。ユイとするのは初めてなんだから、初っ端からあまり無理はしたくない」
「い、今、な、名前を……」
「ん？　あぁ～。いつまでも苗字呼びじゃあ、なんかなぁと思って。嫌だったか？」
「い、いえ……！　と、とっても嬉しいです……！　私なんかの名前を呼んでいただけるなんて、夢にも思っていなかったので……！」
「名前くらいで大袈裟だなぁ～。名前くらい、いつだって呼んでやるよ。ユイ」
「は、はい……！」
「好きだ。俺の女になれ」
「っ♡♡♡　わ、私なんかでよろしいのですか……？」
「あぁ。ユイがいい」
「あ、ありがとうございます……！！！　私、零様の女にならせていただきますぅぅ♡♡♡」
私は、零様のお世話係兼、性奴隷兼、彼女となった。
私、明日死ぬのかな？
そのくらい、幸せ♡♡♡
ちなみに、零様は私の子宮（おなか）に、３５発のザーメンを注いでくれたらしい♡♡♡
嬉しすぎてそれを聞いただけで軽イキしてしまった♡♡♡

第８２話　足腰ガクガクのイキまくりセックス♡♡♡♡♡（後書き）

天城ユイ回、いかがだったでしょうか？
最終的には結ばれた二人。
ドＳだけど優しい零と、ドＭで壊されたい願望があるけど零を一途に思っているユイ。
二人の今後を、楽しみにしていていただけると、とっても嬉しいです♪
この二人は今後もエロエロな関係になっていきますので♡♡♡

次話から別のヒロインの話となります！
誰となるのか？　楽しみにしていてください！
次話は明日の１８：００に投稿予定です！

第８３話　黒乃とのラブラブ？　デート♡♡♡♡♡

「お、早いね」
「零を待たせるなんて、絶対にしたくないからな」
家の玄関を出ると、そこには助手席の前に立つ黒乃がいた。
「それじゃあ、どうぞ」
「ありがとう」
黒乃が助手席のドアを開けてくれたので、俺は助手席に乗り込む。
「それじゃあ、行きましょう」
「うん」
俺達はドライブデートを開始した。

♡　♡　♡

「そう言えば、こうやって二人でゆっくりドライブするの初めてだね」
「そうですね。毎回必ず誰かしら乗ってますからね。私は幸せです。零と二人っきりでドライブできるなんて♡」
可愛い事を言ってくれるな～。
「んで？　どこに行くの？」
「ちょっと遠くまで行こうかなと。旅館を予約してあるので、そこで一泊したいなぁと。駄目でしょうか……？」
「ううん、全然。一緒に泊まろう。そしていっぱいエッチしよう」
「っ♡　は、はい……♡　今日の為にオナ禁をずっとして来たので、超絶敏感マンコを提供できますよ♡」
「黒乃のマンコ好きだから、嬉しいな」
「あ、ありがとうございます……♡♡♡」
そんな会話をしながら、俺達は途中、パーキングエリアへと寄っ

た。
「ここでトイレ休憩と、昼食を取りましょう」
「了解。じゃあ、まずはトイレに～」
「あ、零。零はこっちに」
「ん？」
俺は黒乃に手を引かれとある場所に連れて行かれた。
「え……ここは……」
黒乃に連れてこられたのは、女子トイレだった。
「流石にマズイんじゃない？　ここは他の人もいるし」
「いえ。何も気にしないで大丈夫です。他の女には手出しさせないから」
「いや、心配してるのはそこじゃないんだけど……」
俺は黒乃に手を引かれ、女子トイレの中に入る。
そうするともちろん、女性達から注目される。
でも、その注目は軽蔑のものではなく――、
「だ、男性が女子トイレに……！」
「最高すぎませんか……！」
「声、かけてみようかな……？」
「おしっこ飲ませていただけないかな～♡」
など、俺に対して好意的な視線を向けてきていた。しかし、その全てを黒乃が遮り、一番奥の個室へと入った。
「全く。これだから性に飢えたケダモノは。男を見ればすぐにああやって欲情する。零は最上級の方なんだぞ。そう簡単に接していい相手じゃない」
「お～い、黒乃～？　顔怖いよ～？」
「はっ！　す、すみません……！　つい怒りが……」
「まぁ、怒った顔も可愛いからいいんだけど。とりあえずおしっこしていい？」
「あ、はい！　すみません……！　それでは、どうぞ♡」
「え～っと……？」

黒乃は、便器の上にパンツを脱いで座り、俺に向かって大きく口を開けてきた。
「零のおしっこをずっと飲んでみたかったんだ。お願いします……！　飲ませてください♡」
「分かった。じゃあ、味わって飲んでね」
「ふぁい♡」
「出る」
ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！
「んっ♡　ごくごくごく……♡♡♡」
俺が出すおしっこを、黒乃は嬉しそうに美味しそうに飲み込んでいく。
「黒乃も出せよ」
「ぶぁい♡」
うがいで返事をした黒乃は、便器の中におしっこを勢いよく噴射した。
ぶじゃあああああああああああああああ♡♡♡
二人で一緒におしっこをするって、いいな。
「ごくごくごく……♡」
お互いにおしっこが終わった。すると、黒乃は寂しそうな顔をしながら――、
「おしっこもっと欲しかった……では、綺麗しますね♡」
チンコを咥えてきた。そして、そのままお掃除フェラを開始した。
「んちゅ♡　れる♡　ぢゅる♡　ぢゅるるるるるる♡♡♡」
おしっこ後のチンコを掃除されるの、マジでいいな。
「ちゅぱ♡　ご馳走様でした♡　零のおしっことっても美味しかった♡　皆が飲みたくなるのも分かる。このデートの間、零のおしっこは全部飲ませてくれ♡」
「もちろん。黒乃に飲んでもらえるなんて嬉しいからね」
「ありがとうございます♡　それでは、昼食に行きましょう」
黒乃はトイレットペーパーで尿道を丁寧に拭き、それを流した。

な、なんだろう……女の超プライベートを見てる感じがしてめちゃくちゃ興奮する……！

トイレから出ると、相変わらず女性達が見てくるけど、その全てを黒乃が遮っていく。

そして、俺達はフードコートへと向かった。

食事代とかお土産代とかは全て、黒乃が払ってくれた。さらに、黒乃は俺のおしっこの臭いと食事がマッチする♡　と言って、今度食事におしっこをかけてほしいって言ってきた。

もちろん、即オッケーを出した。

年末に、おしっこザーメン汁で蕎麦をリサ達に食べさせたのを思い出した。

第８３話　黒乃とのラブラブ？　デート♡♡♡♡♡（後書き）

黒乃とのデート回がスタートです！
二人のラブラブで、エロエロなデートをお楽しみください♡

次話の投稿は明日になるのですが、投稿時間が遅くなってしまうかもしれません……！
ですが、必ず投稿はいたしますので、何卒ご理解くださると幸いです……！

第８４話　旅館の混浴で、フェラご奉仕（飲尿付き）♡♡♡♡♡

俺達は目的の旅館へと到着した。
ここに着くまでの間、黒乃には五回もおしっこを飲んでもらった。
別に無理に飲ませたりした訳じゃない。
黒乃がやたらと飲み物を勧めて来て、それを全部飲んでたら尿意がとんでもないことになり、五回もおしっこを飲んでもらう事になった。
信号待ちで飲んでもらったり、途中の道で停めて飲んでもらったり。
もうひたすら飲んでもらった。
「予約していた神宮寺です」
「神宮寺様。お待ちしておりました。こちらへどうぞ」
旅館の女将さんに案内されながら、俺は黒乃に尋ねる。
「（ねぇねぇ、ここって巴が経営してる場所？）」
「いや、違うよ。今回は姉さんの息がかかってないところで零と過ごしたいと思って普通の旅館だよ。もしかして、嫌だったか？」
「ううん！　全然！　ただ一応確認しておきたかっただけ」
「そうか。ほら、部屋に着いたぞ」
「どうぞ、ごくつろぎくださいませ」
俺達は部屋の中に入る。と、女将さんは礼儀正しくお辞儀をした後、去っていった。
「うわぁ～広いね～」
部屋はものすごく広く、二人で泊まるにはもったいないくらいの広さだった。
「まぁ、一応ここは集団用の部屋だからな」
「しゅ、集団用！？　そんな所を二人でいいの！？」
「もちろん。零は何に置いても優先されるべき人だからな」

「そ、そっか……じゃあ、いいのかな？」
「あぁ♡　零は何も気にせず楽しんでくれ」
「うん！」
俺は部屋の中を見て回った。
本当に広い……お。露天風呂があるんだな。
「後で一緒に入ろうな、零」
「うん。黒乃の体、隅々まで洗ってあげたい」
「す、隅々までと言うのはその……具体的には……」
「オマンコの膣（なか）とか、クリとかアナルとかおっぱいとか？」
「か、考えただけで子宮が……♡」
「俺、お腹空いたな……」
「あ、ご、ごめん！　気が付かなくて！？　夕飯には少し早いから、売店行って何か買おう」
「うん！」
俺達は、売店でお菓子やら何やらを買って、楽しく食べた。

♡　♡　♡

「それじゃあ、零。風呂に行こう」
「ん？　うん、分かった」
俺は立ち上がり、部屋に備え付けられている露天風呂に向かおうとした。が、黒乃に手を捕まれた。
「黒乃？」
「風呂は風呂でもそっちじゃないですよ？　混浴に行くんです」
「こ、混浴に！？　そこに行かなくてもここでよくない！？」
「いえ。ここはここの良さが。混浴には混浴の良さがある！」
「さ、さいですか……」
俺は鼻息荒く興奮している黒乃に連れられ、混浴へと向かった。

♡　♡　♡

「じゃあ脱がせますね～」
「ちょ、ちょっと！？　自分で脱げるよ！？」
「いいや。脱がせてくれ！　主の服を脱がせるのも、女の役目だ！」
「う、うん……分かった」
ちょっと恥ずかしいんだよな……。周り、女性しかいないし……。
「ふんふふ～ん♪」
黒乃が俺の服をどんどん脱がせていく。そしてパンイチになった段階で――、
「パンツの上からでも分かるほどにギンギン……♡　ぬ、脱がします……♡」
パンツを脱がしてくる。
「ふわぁ……♡　おちんちんがビュンッって……♡　ビンッて……♡　これでビンタされたいぃ……♡　あんむ♡」
「うお……！」
黒乃は、パンツを脱がすのも途中のまま、いきなりチンコを咥えてきた。
「れる……♡　ぢゅる……♡　える……♡　ぢゅむ……♡　ぢゅるるるるるるるる♡♡♡」
フェラをしながら、パンツをゆっくりと脱がしてくる。
な、なんかその行為がめちゃくちゃエロくていつもより興奮する……！
「ぷはぁ♡　んふふ♡　やっぱり零のおちんちんは最高に美味しいな♡」
手コキをしながら満面の笑みで言ってくる黒乃。唾液と我慢汁で濡れているので、扱かれる度にチュコチュコと言うエロい音が鳴る。
「あはぁ……♡　チンカスがいっぱいぃ♡　これ、頂戴♡　えるぅぢゅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」
「くぅ……！」
皮を剥いて、カリ首に舌を絡ませながらチンカスを舐め取ってく

る。いや、吸い取ってくる。
「く、黒乃……お風呂入らなくていいの……？」
「ぢゅる♡　ぢゅる♡　お風呂より……♡　はむ……♡　おちんちんれふ♡　ぢゅぞぉ♡　いっふぁいらひへほひいれふ♡♡♡」
「くっ……！　もう、出る……！」
ドビューーーーーーー！！　ビュビューーーー！！！
「んぶぅ♡　んくんくんく……♡♡♡」
ヤバイ……！　射精中に尿道を舐めてくるから射精が収まらない……！
「あああああ！」
ビュビューーーーーーーー！！！
「んぶぅ♡♡♡（精液いっぱい♡　幸せー♡♡♡）」

♡　♡　♡

「ひっろ！」
フェラで抜かれた後、俺と黒乃は風呂に入ることになった。
のはいいんだけど――、
「なんで手を繋いでんの？」
黒乃はなぜか俺と手を繋いでいた。
「滑っては困るからな。手を繋いでおかないと」
「俺、ちっちゃな子供じゃないんだけど……」
「それは分かってるよ。だって、おちんちんは大人だからな」
俺のチンコはフェラで抜かれたにも関わらず、ギンギンに勃っていた。
それを隠さずにもろ出しにしていると、周りの女性達は、俺のチンコに釘付けになっていた。
「それじゃあ、体を洗おう」
「うん」
俺達は体を洗う為、洗い場に向かった。

「じゃあ、洗うぞ」
黒乃は、自分の体にボディソープをつけて、俺の体を洗い始める。
背中に大きなおっぱいが……！
「んふふ♡　気持ちよさそうですね♡」
「うぉ……！」
黒乃が後ろから手を伸ばしてきて、チンコを両手で包みこんでくる。
そして、そのまま両手で扱きだす。
「前にネットで見たのですが、こうすると、疑似マンコになると♡」
「くお……！」
黒乃は、チンコを握ったまま両手を合わせ、空気を抜いていき、真空状態にしていく。
そして、そのまま上下に激しく扱いてくる。
これは疑似マンコ……！　ヤバイ……！
「で、出ちゃう……！」
「いいですよ♡　沢山出してください♡」
「くっ……！　出る！」
ドビュッ！！！　ドビュビューーーーーーー！！！！！
「あぁ～♡　おちんちんドクドクしてて……♡　素敵♡」
「ちょ、ちょっとストップ……あああ！」
ビュビュー！！！　ビューーーー！！！！
射精しているにも関わらず、黒乃の疑似マンココキは止まらず、俺は大量に射精してしまった。
黒乃の手は、精液でドロドロになった。
「それでは、流しましょう♡」
黒乃は嬉しそうに手を眺めた後、シャワーでお互いの体を流していく。
「それでは、仕上げを♡」
「仕上げ？　おっ！」
黒乃は俺を立たせ、前に回って来てチンコを咥えてきた。

「ぢゅる♡　ぎゅむっ♡　じゅぶっ♡　ぎゅぼっ♡」
黒乃は、最初から激しくフェラをしてくる。
喉奥まで咥えてくるので、途中途中でえずくが、そんなのお構い無しにフェラを続けてくる。
「く、黒乃……俺、もう……！」
「いっふぁいらひへぇぇぇ♡♡♡」
「出るっ！」
ドピュンッ！！！！　ドビュゥ！！！　ドビュビュビューーーーーーーー！！！！！！
「んぶぅ♡　んん～♡♡♡　ごくごくごく……♡♡♡」
「ごめん、そのままおしっこ出そう」
精液を飲みながらコクコクと頷く黒乃。
「出すよ！」
ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！
「んん～～～～～～～♡♡♡　ごくごくごく……♡」
（精液とおしっこの両方を一気に飲めるなんてぇ♡♡♡　幸せぇぇ♡♡♡）
「はぁはぁ……気持ちよかった……！」
「ごきゅん……♡　ご馳走様でした♡　気持ちよくなっていただけて良かったです♡」
この後、俺達はゆっくり湯船に浸かり、部屋に戻った。

第８４話　旅館の混浴で、フェラご奉仕（飲尿付き）♡♡♡♡♡
（後書き）

なんとか１８：００に間に合いました！
黒乃とのデート、沢山楽しんでくださいね！

残りの２話は黒乃目線となるので、お楽しみに！
次話は明日の１８：００に投稿予定です！

第85話　ローションで手コキご奉仕（潮吹き付き）♡♡♡♡♡

零と一緒に混浴に行った後、私達は部屋へと戻ってきた。
「零は先に入っててくれ。私はちょっと受付に行ってくる」
「ん？　あぁ、分かった」
私は受付に行き、とあるものを注文した。
そして、それを持って部屋へと向かった。これで零に沢山ご奉仕するんだ♡

♥　♥　♥

「どうだ、零？　冷たかったり、熱かったりしないか？」
「う、うん。大丈夫」
緊張した声音で答えてくれる零。
零は今、全裸で布団の上でうつ伏せになっている。
そんな零の背中に、私はローションを垂らしている。
「じゃあ、乗っかるけど、重かったり、苦しかったりしたら言ってくださいね」
「うん」
私は、自分の身体にローションを塗りたくっていく。
もちろん、私も全裸だ。
「それじゃあ、失礼します♡」
私は、ヌルヌルになった状態で、零の背中の上に覆いかぶさる。
「んっしょ♡　んっしょ♡　どうでしょうか？　気持ちいいですか？」
「う、うん……めちゃくちゃ気持ちいいよ……ヌルヌルのおっぱいが背中を這ってきて……最高すぎる……」
「よかった、です♡　私も、クリが零の体に擦れて……気持ちいい

……♡」
私は、零の背中に体を押し付け、上下に動きこすりつけている。
ローションのおかげでスムーズに動けるので、ものすごく気持ちいい♡
「く、黒乃……」
「どうしました？」
「そ、その……勃ってきてうつ伏せが結構キツイんだけど……」
「あ！　ご、ごめんなさい！　気が付かなくて！　仰向けになってください！」
私はなんて事を……！　零の変化に気付けないなんて……！
「わぁ……♡　これは確かにうつ伏せはキツイ……♡」
仰向けになった零。零のおちんちんはギンギンに勃起しており、お腹にくっついてしまうのではないかと思うほど反り返っていた。
「失礼します♡」
「うお……！」
私は。ギンギン勃起おちんちんに手を伸ばし、ゆっくりと扱く。
ローションを纏っているので、おちんちんを扱く度にチュコチュコと言う音が鳴る。
「どうでしょうか♡」
「めっちゃ気持ちいい……！」
よかった～♡　ちゃんと気持ちよくできてる……♡
今は姉さんも他の奴らもいない。だから、私だけを見て、私だけを感じてもらいたい♡
「ここも……♡　ふわぁ～♡　ずっしり……♡」
私は金玉も揉み込んでいく。
零の金玉は、ずっしりしていて、大きい。
射精する時はギュッとなって小さくなったように見えるのに、普段はこんななんだ……♡
金玉って不思議……♡
「く、黒乃……そこ……！」

「大丈夫です♡　ここは零の大事な所だと分かっています♡　優しく丁寧に愛撫していきますので、安心して快感に身を任せてください♡」
「う、うん……！」
ちょっと扱くスピードを速くしてみようかな♡
「おぉ……！」
零が喘いだ……♡　なら、もっと速くしよう♡
「く、黒乃……！　待って……！　そんなにされたらすぐ、イッちゃう……！」
「いいですよ♡　我慢なんかしないで、たっくさん出してください♡　濃い精液、ビュービュー出してください♡♡♡」
「くっ……！　出るっ！！！」
ビュビュッ！！！　ビュルーーーー！！！！　ビューーーーーーーー！！！！！
「すごい……♡　こんなに沢山♡　もっと出してください♡♡♡」
零の射精はいつ見てもすごい……♡
噴水みたいに吹き出て、量も多い♡♡♡
「はぁはぁ……」
射精が終わっちゃった……でも、ヌルヌルなこの状態なら、アレができるかもしれない……！
男性にとってかなりの負荷がかかるのは知っている。だから零につらい思いをさせてしまうかもしれないが、させてもらいたい！
私は、射精を終えたおちんちんの竿をがっちり掴み、手のひらで亀頭を激しく擦っていく。
「く、黒乃ぉ……！　まっ……！　くあ……！」
ごめん……！　零……！　ちょっとだけ頑張ってくれ……！　私は、私は零の……零の潮吹きが見たいんだ！
「あっ……！　あっ……！　あああああああ！　出るっ！！！！」
ぶじょ！　じょぼっ！　ぶじゃあああああああああああ！！！！！
「これが……♡　零の潮吹き……♡　もっと♡　もっとぉ♡」

「あああああああああ！」
零の潮は、私の手、体、全てを濡らしていく。
「はぁはぁ……」
潮吹きが終わった。私の手は零の精液と潮でびちゃびちゃになった♡
こんなに幸せな事あっていいのかな……♡
「零、次は……」
「……」
「れ、零ぃ！？」
零は意識を手放してしまっていた。
や、やりすぎた！？
「……でも、寝顔も可愛い♡」
こんな事を思うのは本当はいけないんだろうけど、零の寝顔、めちゃくちゃ可愛い♡
ずっと見ていたい。
「よいしょ」
私は、零の隣に横になる。
「お休み、零♡」
一緒に眠りに就いた。

第８５話　ローションで手コキご奉仕（潮吹き付き）♡♡♡♡♡
（後書き）

次話は明日投稿いたします！
時間は少し、遅くなってしまうかと思います……！
ご了承いただけますと、幸いです……！

第８６話　二人っきりでのんびりデート♡♡♡♡♡

「ふわぁ～……」
あ、零が起きた。
「おはよう、零」
「うん、おはよう……俺、どんぐらい寝てた？」
「夕飯前だから……約三時間くらいかな？」
「せっかくのデートなのに、寝ちゃってごめん」
「ううん。零の可愛い寝顔が見れて楽しかった♡」
「ていうか、ずっとその格好でいたの？」
「ん？　そうだが？」
私は窓の付近にある椅子に、全裸のまま座っている。
足を組んでいるので、前にいる零からはオマンコが丸見えだと思う。
「零、おいで♡」
「うん」
私は、足を広げ、オマンコを見せつける。そして、手を広げて零に来てもらう準備をする。
私が呼ぶと、零は嬉しそうにこっちに来てくれた。おちんちんをギンギンにさせながら。
「んんぅ♡　あああ♡♡♡」
抱きついてくる零は、おちんちんをオマンコに挿れてきてくれる。
「動いていい？」
「もちろん♡　好きなだけ動いて、沢山中に出して♡　零の精液、子宮に溺れるほど注いでくれ♡」
「分かった。出しまくるからな」
「うん♡」
この後、零は６発も中出ししてくれた。

♥　♥　♥

「ふぅ……」
「はぁ～極楽～」
私の隣で、蕩け顔で湯船に浸かる零。
今は、部屋に備え付けの露天風呂に入っていた。
零とエッチしたい気持ちが溢れてくるけど、今日はずっとしっぽなしだから、この時間くらいはゆっくりしようと思う。
あまり零に負担をかけたくないからな。
「零、こっちにおいで」
「うん。あ～いいクッション」
「んふふ♡　私のおっぱいが零を支えられるなんて、嬉しいな♡」
「重くない？」
「あぁ♡　大丈夫だぞ♡　もっと体重かけてきてもいいんだぞ♡
私を潰すくらいに♡」
「いやいや、それは流石にしないけど。じゃあ、もうちょっとだけ～」
んふふ♡　零がこうやって甘えてきてくれるのすごく嬉しいな♡
「零、大好きだからな♡」
「うん。俺も大好きだよ」
零を後ろから抱きしめる。いつまでもこうしていたいな♡

♥　♥　♥

夜になり、夕飯を食べ終えた私達は、浴衣姿のまま外に出ていた。
「ん～～～！　はぁ～。夜風って結構気持ちいいもんだな～」
「ふふ♡　そうだな。お腹見えてるぞ？」
「ちょ、くすぐったい」
「んふふ♡」

伸びをしている零。その際、可愛いおへそがチラ見えしたので、軽くくすぐってみた。
お腹を抱え、頬を膨らませる零。可愛すぎるだろ♡
「こんな時間なのにやってる店あるんだな」
「そうだな。何か買うか？」
「う～ん……いや、今はいいや。今は黒乃と一緒に歩いていたい」
「っ♡」
そ、そういうことを不意に言ってくるから零はずるいんだよな……♡
「な、なぁ、零……？」
「ん？」
「わ、私を犯してくれないか？」
「え……？」
「今日はずっとしっぽなしだったから、我慢しようと思ったんだけど……気持ちがもう抑えられないんだ……ここで、私を、犯してくれ……♡　壊れるくらいに……♡」
「分かった。じゃあ、あっち行こう」
「うん……♡」
零が私の手を取り、木陰に連れて行ってくれる。
「じゃあ、犯すぞ？」
「はい……♡　来てください……♡」
私は木に手をつき、浴衣をはだけさせたお尻を零に向かって突き出す。
「んあああああ♡♡♡♡」
私の腰をがっちり掴んで、オマンコにおちんちんを挿れてきてくれる♡
「最初から、フルスロットルだからな！」
「はいぃぃ♡♡♡　私を壊してくださいぃぃ♡♡♡」
零は、私を沢山犯してくれた。
オマンコに15発も中出ししてくれた♡

オマンコからは、ありえない量の精液が溢れ出てきた♡♡♡

♥　♥　♥

「零、デートどうだった？」
「めちゃくちゃ楽しかったよ。旅館セックスはやっぱりいいもんだな」
翌日の昼。
私達は帰る為、車に乗っている。
「なぁ、零」
「ん～？」
「私は……零にとってどんな存在かな……？」
「え……？　どうしたの突然……」
「いや……私は零の義理叔母だ。でも、それだけ……零にとって、私はどんな存在なんだろうなぁと気になって……他の子らの方が若いしな……」
「何言ってんの！」
「え……」
「黒乃は俺の義理叔母で、モノで、大事な女だ！　年齢なんて関係ない！　黒乃は俺の、俺の大事で大切な女なんだ！」
「っ……♡　あ、ありがとう……！　ありがとう……！　私はこれからもずっと、零のモノでいてもいいのかな……？」
「当たり前だ。黒乃は、俺のモノで……彼女だ」
「っ！　ありがとう、零♡　大好きだ♡」
私と零は、信号待ちの時に、キスをした。
軽いものじゃない。ディープなやつだ。

第８６話　二人っきりでのんびりデート♡♡♡♡♡（後書き）

黒乃のデート回、いかがだったでしょうか？
楽しんでいただけましたら、幸いです！

次話から別のヒロイン回となります！
誰になるのかお楽しみにしていてください！

次話の投稿は、すみません……！　諸事情により来週の金曜日、７／１８になります……！
毎日投稿を約束していたのに、次話はできなくなってしまい、大変申し訳ございません……！
それでは、来週の金曜日を楽しみにしていてください！

第87話　巴とのデートは、なりきりから始まる♡♡♡♡♡

「よし。さてさて～……あ、巴もう準備できてたんだ。待たせちゃった？」
「ううん。大丈夫だよ♡　楽しみすぎて待ちきれなくなっちゃった♡」
「可愛いな。じゃあ、行こう」
「うん♡」
俺は、巴とデートに出かけることに。
どこに行くのか、どういうデートをするのかは巴に任せているので、俺は何も知らない。
何気に楽しみだ♪

♡　♡　♡

外に出て、コンビニで飲み物を買った俺達。
今はただ道を歩いてるんだけど……。
「こ、これってどこか向かってるんだよね？」
「うん♡　今日のデートの目的地に」
ん～……た～だ歩いてるだけなんだよ～……。
もしかしてこの歩くのがデートとか……？　でも目的地に向かってるって言ってるんだけど……。
「着いたよ～♡」
「着いた？　ってここ……」
「うん♡　ラ・ブ・ホ♡」
巴が嬉しそうにラブホって言ってくる。
なんでそれだけなのに、こんなにめちゃくちゃエロいんだよ！

ラブホ内に入った俺達。
巴が嬉々として受付に向かっていく。
「予約していた白下です」
「白下様、お待ちしておりました。お部屋はこちらでございます。ごゆっくり、お楽しみください」
「ありがとうございますっ♡　零ちゃん、行こっ♡」
「う、うん」
ラブホの予約ってできたんだ……。

部屋に入った俺達。
部屋に入って俺は驚いた。
「へ、部屋に電車がある！？」
「ふふ♡　零ちゃん可愛い♡　電車はないよ♡　電車の車内を再現したお部屋なんだよ♡」
「こ、こういうのもあるんだね……性癖が増えそう……」
「いいじゃん♡　もっと増やして行こう♡」
「デートがラブホ一泊でよかったの？」
「うん♡　もちろんだよ♡　零ちゃんとならどこでだって楽しいんだから♡　それに、零ちゃんとラブホ宿泊してみたかったから♡」
「巴……大好きだ！」
「キャッ♡　れ、零ちゃ～ん……♡」
俺の突然のハグに顔を蕩けさせる巴。
「んっ♡」
「お尻、柔らかい」
「お尻、好き？」
「うん」
「良かった♡　もっといっぱい触って♡」
「いいの？　こんな来たばっかで」
「もちろん♡　零ちゃんが触りたい時に、シたい時に、弄りたい時に私になんでもして♡　それに、ここに来たのはそれが目的なんだ

から、何も気にしないでいっぱいエッチな事して♡」
俺はそう言われたので、遠慮なく巴のお尻を揉みしだいた。
お尻だけで数十分経過していた。
俺、お尻も好きだな。

♡　♡　♡

「零ちゃん、もうちょっと待ってね……」
「大丈夫だよ～。ゆっくり～」
お尻を沢山揉みしだいた後、巴がちょっと準備があるから待ってほしいと言われた。
その後、巴は風呂場に向かった。
そこまで時間は経ってないけど、何をしてるのか分からないので、期待と不安が高まっている。
と、その時脱衣所のドアが開いた。
「お、お待たせ～……」
「うん～。準備って何、を、し、て……」
「え、えへへ……♡」
俺は巴の姿を見て言葉を失った。
巴が、あの巴が、俺の義理母である巴が、四人の親である巴が、三十路に入ろうかと言うあの巴が！
せ、セーラー服を着てんだよぉぉ！！！
「ごく……」
やべ……久しぶりに生唾飲んだわ……。
セーラー服の丈が合ってないのか、お腹が丸見えで、スカートも超が付くほど短いのでパンツが見えている。
しかも、パンツは紐でTバックと言うエロさ。
「おっぱいが、服押し上げて下乳が見えちゃうね……♡」
「ふぅ～ふぅ～……！」
やべぇ……鼻息めっちゃ荒くなってるわ……。

と、巴がエロ過ぎんだよ……！
「そ、それで……？　何をするんだ……？」
「あ、うん。あの～……その、ね……ち、痴漢をさせて、ほしいんだ……」
「ち、痴漢を、させて……って俺がされるって事！？」
「う、うん……駄目……かな……？」
そっか……。この世界だと痴漢をするのは女の方なんだよな。
でも、巴がそんな事言うなんて。
「じ、実は学生時代に、痴漢したい欲があったんだけど、それをしちゃうと犯罪になっちゃうでしょ……？　だから我慢してたんだけど、もう我慢できなくて、零ちゃんなら許してくれるかなって思って……やっぱ、嫌……かな……？」
巴からの逆痴漢……そんなの、嫌な訳――、
「ないだろ！　もちろんいいよ！　俺にいっぱい痴漢して！　巴の満足がいくまで俺を自由にして！　巴の欲望、全部さらけ出して！」
「っ！　あ、ありがとう……！　ありがとう……！　じゃあ、零ちゃん、これに着替えて？」
「お、おう……」
巴から渡されたのは制服だった。でも……。
「す、スカート……？」
「うん。これね、私が学生時代の制服なんだ。男子はズボンとスカートの選択制だったの。だから、零ちゃんが穿いても問題ないよ♡
ちなみに（それ、私のお古、だよ♡）」
な、なんだってぇぇぇぇ！！！！
巴の着用済みスカート、だと！　最高じゃねぇか！
「ねね♡　穿いて♡」
「分かった分かった」
巴が目をキラキラさせて言ってくる。
ちょっと恥ずかしいけど、俺はパンイチになり、ワイシャツとスカートを着用した。

「きゃーーーーー♡♡♡♡♡♡　零ちゃん可愛い～～～～～～♡♡♡♡　ものすっごく似合ってる♡♡♡♡　ねぇねぇ！　写真撮っていい？　写真！」
「聞きながら撮ってたら意味ないけどな……ほら、痴漢プレイするんだろ？」
「う、うん！　じゃあ、零ちゃんは私の元彼って設定ね」
「いいけど……元彼でいいの？　恋人同士とかじゃなくて？」
「うん。私、自分をフッた相手をイカせまくるって妄想してオナニーしてたから♡」
　巴って結構Sっ気あるんだよな……。
「や、やっぱり、駄目……かな……？」
「ううん。巴の好きなこと、していいよ。巴の妄想、俺に教えて？　巴の青春時代に、俺を入れてください」
「うんっ♡　それじゃあ、いっぱいスるね♡」
　俺と巴は、電車の車内を再現した場所へと向かった。

第８７話　巴とのデートは、なりきりから始まる♡♡♡♡♡（後書き）

投稿が遅くなり、大変申し訳ございません……！
毎日投稿すると言ったくせに、結局できず、大変申し訳ないです……！
次話は明日の１８：００に投稿したいと思ってはいるのですが、状況次第でどうなるかまだ分かっておりません……。
お待たせしてしまうかもしれませんが、楽しみに待っていていただけますと、幸いです……！

今回から巴回が始まりました！
エッチシーンはありませんでしたが、次話からはエッチシーン盛り盛りでお届けいたしますので、期待していてください！

そして、５０万ＰＶ、ユニーク数１２万人突破、誠にありがとうございます……！！！
しかもどちらも、もう少しで５１万と１３万に到達すると言う……本当に嬉しいです！！！
皆様に沢山読んでいただけて、感謝しかありません！
これからも沢山更新していきますので、沢山楽しんでください！
（５０万突破記念を考えておりますので、何が始まるのか、そちらも楽しみにしていてくださいね♪）

第８８話　手コキ痴漢で大量射精＆潮吹き♡♡♡♡♡（前書き）

※この話数に出てくるのは『ドＳ巴』と『巴の元彼』です。
この話数はフィクションであり、実在する人物ではございませんのでご注意ください。

尚、この話数に限り視点を第三者、つまりナレーションベースで書かせていただきます。
三人称となっておりますので、ご拝読の際はご注意ください。

第８８話　手コキ痴漢で大量射精＆潮吹き♡♡♡♡♡

ガタンゴトンガタンゴトン。
夕方の時間。学生は学校を終え、下校する時間。
一人の少年は、いつも通り電車に乗り、帰路についていた。
ものすごく混んでいるという訳ではないが、それなりに人はいるので、座る事ができず、少年は立っていた。
そんな少年に近づく、一人の人影がいた。
「っ！？」
少年の尻が突如撫でられた。少年は驚き、後ろを見る。すると、そこにいたのは――、
「と、巴……！？」
「んふふ～♡　こんな所で会うなんて偶然だね～。いや、運命かな～」
「お、お前……何してんだよ……！」
「何って、お尻触ってるんだよ～」
「痴漢だぞ……犯罪だぞ……？」
「そんなの知ってるよ～。でもさ～、こんくらいしないと気が晴れないじゃん」
「え……？」
「一方的に私をフッていなくなるなんて。絶対に許せないよね」
少年の尻を撫でる女子――巴は、低く冷淡な声で呟き、少年に力強く抱きつく。
「くっ……や、やめろ……！」
「どう？　私の大きなおっぱい。柔らかくて気持ちいいでしょ～？」
「べ、別に……！　気持ち悪いから離れろ……！」
「え～そんな事言って、こっちは正直だよ？」
「そ、そこはっ！？」

巴の右手が、少年の股間を掴む。
そこは、スカートを押し上げるほど隆起しており、少年が興奮し、発情している事を示していた。
「口ではなんだかんだ言っても、体は正直だよね～」
「や、止めてくれ……！　こ、これは違うんだ……！　興奮なんか僕は別に……！」
「はいはい。そうやって無意味な抵抗してなさい。どうせ、すぐに認めることになるから」
巴は少年のパンツを脱がし、スカートの上からチンコを扱きだす。
「あっ……！」
亀頭やカリ、鈴口にスカートの生地が擦れ、快感を強制的に生み出してくる。
そこに巴の手コキが加わり、少年は感じざるを得なくなっていた。
「んふふ～♡　もうこんなにパンパン♡　先っちょからエッチな汁が溢れてきてるよ～♡」
巴は、尿道から溢れる我慢汁を人差し指で亀頭に塗りたくっていく。
その我慢汁が潤滑油となり、スカートの擦れがスムーズになっていく。
それにより、少年へ与えられる快感も倍増する事となり、少年は息を切らし始めた。
「んふふ♡　余裕なくなってきたね～♡　いいんだよ～？　我慢なんてしないでいっぱい感じて♡　いっぱい気持ちよくなってビュビューって白いおしっこ、出しちゃお？」
「くっ……あっ……！　も、もう……！」
「出しちゃえ♡」
「あああ！」
ビューーーーー！！！ビュビューーーーー！！！！
「あはぁ♡　出た～～～～♡♡♡　手の中でおちんちんビクビクして白いおしっこ吐き出してる～～～♡♡♡　もっと、もっと出しち

ゃえ〜〜〜〜♡♡♡　前に座る人にいっぱいかけちゃえ〜〜〜〜♡♡♡」
「あああああああああ……！」
巴は、射精中のチンコへの刺激を継続する。
それにより、少年の射精は終わる事なく、ずっと出し続ける事になった。
巴の手、目の前の席は少年の精液でドロドロになっていく。
五回目の射精でようやく手コキをやめた巴。
しかし、巴の責めはこれだけでは終わらなかった。
「はぁはぁ……」
「もしかして、これで終わりだと思ってる？」
「え……？」
「私の心は深く傷ついたんだよ？　すっごく悲しかったんだよ？　すっごく苛ついたんだよ？　ブチギレたんだよ？　だから、その気持ちを全て、君にぶつけるまで、終わらないから」
巴は、少年のチンコを左手でガッチリ掴み、右手に唾液を大量に垂らし、その右手を亀頭に持っていく。
「な、何を……」
「男の子の、潮吹きだよ♡」
「ま、待って――」
「待たない」
「んあああああああああああ！」
巴は、少年の亀頭を激しく擦っていく。
一切の容赦なく、亀頭をひたすら擦っていく。
少年の腰や足はガクガク震え、今にも座り込んでしまいそうなほど。
しかし、それを巴が許さない。
少年の脇の下に手を通しチンコを弄っているので、少年が座り込みそうになると、少年の脇を腕で支えて、強制的に立たせる。
「あああああああああああああああ！」
「出せ♡　出せ♡　出しちゃえーーーー♡♡♡」

「っく！」
ぶしゃあああああああああああ！！！！
「あはぁ♡♡♡」
少年の尿道から、透明な液体が大量に放出される。
それはおしっこでも精液でもなく、潮だった。
巴の手で覆われているので、前後左右に潮が吹き出していく。
巴は、潮を吹いている最中も亀頭への刺激は止めず、ずっと擦り続けていく。
「はぁはぁ……」
「いっぱい出たね～♡　で～も、まだまだだよ？　本番はこれから♡」
「え……」
巴の痴漢はこの後、数時間に渡って続いた。
少年は１５発射精し、５回潮を吹いた。

第８８話　手コキ痴漢で大量射精＆潮吹き♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？
今回はあえて、三人称で書いてみました。
物語の中で物語を書くって、中々に変な感じですが、沢山興奮して楽しんでいただけましたら、幸いです！
次話からは元に戻り、ドＳの零とドＭの巴になりますのでご安心ください♡

明日の１８：００に投稿できるように、頑張ります！

第８９話　大好きな零と、にゃんにゃんプレイ♡♡♡♡♡

「れ、零ちゃん……だ、大丈夫……？」
「う、うん……大丈夫だよ……ちょっと疲れただけだから」
「ご、ごめんね……調子乗っちゃって……」
私は、念願の痴漢プレイをする事ができた。
それが嬉しすぎて私は、零ちゃんを沢山イカせすぎてしまった。
潮吹きもさせてしまったので、零ちゃんの疲労はとんでもないものだ。
でも、零ちゃんにしすぎてしまったこの状況。ドＭな私にとって使わない手はない……！
「れ、零、様……♡」
「ん？」
「ご主人様に無理をさせたダメダメな性奴隷に、キツーいお仕置きを、してくださいませんか……？」
「キツーいお仕置き？　例えば、どんな？」
「て、手をキツく縛って目隠しをした状態で、バックで犯してお尻を沢山叩いてほしいです……♡」
「巴ってそんなに変態だったっけ？　まぁ、いいや。いいよ。してあげる。だからこっち来い」
「はい……♡」
私は、ベッドで横になる零ちゃんの元に向かう。
すると――、
「キャッ！」
零ちゃんは私の手を引っ張り、ベッドに横にさせる。
「今からお仕置きで、ぶち犯すから覚悟しろよ？」
「ひゃ、ひゃいぃ……♡」
目がギラついてる……♡　私、どうされちゃうんだろう……♡

♥　♥　♥

「んぎゅぅ……♥♥♥　んんっ♥♥♥」

今、私は、制服を着たまま、腕を後ろで縛られていて、目隠しをされ、猿轡をされ、お尻にアナルビーズを挿(い)れられ、バックで思い切り犯されている。

お尻をバシバシ叩かれていて、痛みを通り過ぎて感覚がなくなってきていた。

零ちゃん……ううん。ご主人様のお尻を叩く強さは、叩く度に強くなっていて、私を屈服させようとしているのが伝わってくる。

「どうした？　鳴き声が足りないんじゃないか？」

「んっ、んんぅぅ♥♥♥♥♥」

私は語尾に「にゃん」と付けなきゃいけないんだけど、猿轡をしてるから、うめき声しか出せない……。

「ほら！　ほら！　ほら！」

「んんんぅぅぅ♥♥♥♥♥」

ご主人様は、私が鳴かない事に腹を立てているのか、お尻を何度も何度も叩いてくる。

一発一発が重くて子宮に衝撃が届いてくる。

叩かれるだけでイッてしまう体になってしまった♥

叩かれるだけでイッているのに、膣(なか)をオチンポ様で犯されているので、ダブルでイカされている。

亀頭が子宮の入り口を何度も叩いてきて、お尻を叩かれて衝撃が子宮に届いてきて、もう気持ちよすぎてどうにかなってしまいそうだった。

猿轡の穴からは、私の涎が絶え間なくこぼれ、ベッドのシーツを汚している。

「そろそろ出そうだ……！」

出して♥　出して♥　出してくださいぃ♥♥♥

大好きなご主人様の精液、たっぷりと一滴も残さずに出なくなるまで私の子宮に注いでくださいぃ♥♥♥
ご主人様の子を♥　ご主人様との子供を孕まさせてくださいぃぃ♥♥♥
「出るっ！」
「んんんんぅぅぅ

第８９話　大好きな零と、にゃんにゃんプレイ♡♡♡♡♡（後書き）

昨日、投稿できず申し訳ございませんでした……！
今後は、しっかりと投稿していきますので、ご安心ください……！

次話で巴回はラストとなります！
二人のデートはどうなるのか、楽しみにしていてください！

第９０話　チェックアウトまでヤりまくり♡♡♡♡♡

逆痴漢プレイを終え、二時間に及ぶ犯しプレイを終えた後、数時間の休憩（睡眠＋食事）を挟んだ俺達。

今は、巴がトイレに行くって言うのでついて行って――、

「あっ♡　あんっ♡　あっ♡　あっ♡　ああっ♡あああんっ♡　ご主人様ぁ♡　流石にこれ、んっ♡　はぁぁ♡　恥ずかしい、んんっ♡　ですぅぅ♡♡♡」

ぶしゅぅぅぅ♡♡♡　ぶじょぉぉ♡♡♡　ぶしゃぁぁ♡♡♡

俺は今、トイレで巴を犯している。

右足を上げさせた立ちバックで犯し、おしっこを漏らさせている。

相当溜まっていたのか、俺が突く度におしっこは漏れ、床はあっという間にビチャビチャになった。

「そろそろ出すぞ……！」

「は、はいぃぃぃ♡♡♡　出して♡　出して♡　いっぱい出してください♡♡♡」

「出るっ！」

ビュッビュッ！！！！　ビューーーー！！！！　ビュビューーーーーーーーーー！！！！！

「あああああああああああああ♡♡♡♡♡　イッくぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

ぶじゃあああああああああああああ♡♡♡♡♡

俺の射精と同時に、巴は大量に失禁をした。

♡　♡　♡

「んぶっ♡　んびゅっ♡　んちゅっ♡　ぎゅぼっ♡」

「くっ……！」

今は風呂場。
互いに体を洗った後、巴がフェラをしたいと言うのでしてもらっている。
「れるぅ♡　ぢゅる♡　じゅる♡　ぢゅるるるる♡♡♡」
「巴、それヤバい……！」
「ぢゅるるるるるるるるるるるるるる♡♡♡♡♡」
「くあ！　出るっ！」
ドビュッ！！！！！　ビュルッ！！！！　ビュルルルルルルーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！
「んぶっ！？　んんぅ……♡♡♡　んく♡　ごくごくごくごく……♡♡♡」
巴の口の中に射精するの、マジで気持ちよすぎる……。
「ごくっ……♡　ぷはぁ♡　今綺麗にしますね♡」
そう言って巴は、お掃除フェラを始めた。
まぁ、お掃除だけで済むわけがなく、この後3発射精した。

♡　♡　♡

「んっ♡　あっ♡　ああっ♡　ご、ご主人様ぁっ♡　ご、ご飯がつ、作れ、あんんっ♡　ない、んあっ♡　ですぅ♡」
「ご飯よりも、巴のマンコだよ！」
「う、嬉しいですけどぉ♡　あああ♡♡♡」
巴がキッチンで夕飯の準備をしてくれている。
そんな巴を、後ろから思い切り犯しまくる。
「ま、またイッちゃいますにゃ～～～～ん♡♡♡♡」
ぶしゅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡
巴は潮を吹いた。
「出るっ！」
ドビュルッ！！！！！　ビュビューーーー！！！！！
「んにゃあああああああ♡♡♡　あちゅいのきたぁぁぁぁ♡♡♡」

巴が潮を吹くのと同時に、俺は中出しをした。
「はぁはぁ……」
キッチン台に手をついて、へたり込む巴。
「は、激しすぎですにゃ～……♡」
「巴がエロくて、気持ちよすぎるのが悪い」
「よ、喜んでいただけて嬉しい、にゃん……♡」
「食事の準備、俺も手伝うよ」
「そ、そんな事させる訳には……」
「いいの。俺がやりたいんだから」
「で、ではお言葉に甘えて」
俺達二人は、夕飯の準備を一緒に始めた。
もちろん、途中途中で何度も犯しまくったけどね。

♡　♡　♡

「あんっ♡　あああんっ♡　あああああ♡　あああああああ♡」
俺はベッドの上で巴を犯している。
夕飯を終えた俺達は、すぐにベッドに移動しセックスを始めた。
すでに開始してから数時間が経っている。
中出しを5発、尻射を3発、顔写を2発、パイ射を2発、口内射精を4発している。
「巴！」
「にゃ、にゃいぃ♡」
「このまま、チェックアウトの時間が来るまでセックスし続けるからな！　覚悟しろよ！」
「にゃ、にゃいいぃ♡♡　私を壊してくださいいい

翌日のチェックアウトの時間。
チェックアウトをした俺達は、レストランで朝食兼昼食をとっていた。
「あ～気持ちよかった～！　最高だった～」
「よ、よかった～……♡　楽しんでくれて私も嬉しい♡」
「大丈夫？　手も足も震えてるけど」
「う、うん……大丈夫……。イキまくっちゃったから、体に力が入らなくなっちゃってるだけだから」
「そっか。無理させてごめんな？」
「ううん！　全然気にしないで！　零ちゃんにいっぱい犯してもらえて私、すっごく嬉しかった♡　壊されるってこんな感じなんだって実感できて、とても楽しかった♡　だから、零ちゃんは何も気にしないで。むしろ、ありがとう♡」
「犯しまくって壊した奴にお礼を言うとは、不思議だな」
「零ちゃんの元の世界では、こんな事ないの？」
「そうだね～。基本的に女を犯したり壊したりするのが犯罪になるからね。そもそも、性＝男って言う固定観念があって、全責任が男に降り掛かってくる。あと、ちょっとでも女に対して何か言ったりすると、社会的に死ぬ事になる」
「何それ……男の人窮屈過ぎない……？」
「そうだよ～。電車やバスだって痴漢と間違われないようにつり革に掴まったりして両手を塞いだり、視姦してると思われないように、極力女の方を見ないようにしたり、下着が透けてたり見えてたりしたら、見ないように気をつけたり、暴言吐かないようにしたり、そもそも『女』って言い方すら駄目だからね」
「なんか、零ちゃんが元いた世界の女って、自己中でワガママなんだね……男の人の苦労が半端じゃないね……可哀想になってくる……」
「うん、だから俺、この世界に来れて良かったよ」
「うん……♡　今まで苦労した分、これからは我慢とか何もしない

で、自由気ままに生きてね♡」
「うん」
巴が隣の席に座ってきて、優しく抱きしめてくる。
「ありがとう、母さん」
「っ♡　大好きだよ、零ちゃん♡」
「俺も大好きだよ」
レストランで食事を終えた後、俺達は公園のトイレで再びヤりまくった。

第９０話　チェックアウトまでヤりまくり♡♡♡♡♡（後書き）

巴回ラスト、いかがだったでしょうか？
最後は僕自身の思っている、日常に対する怒りが入ってしまったのですが、共感して楽しんでいただけました幸いです！

次話から別のヒロインのお話となります！
誰になるのか？　零の童貞を奪ったあの……？
このヒントで分かる人、いますでしょうか……？
次話をお楽しみに！

第９１話　最愛の幼馴染みとの、初デート♡♡♡♡♡

「そろそろ行くか～」
「は～い！」
俺が二階に呼びかけると、部屋から瑠李が出てきた。
首輪で全裸の瑠李が……ってあれ？
「服、着てる……？」
「ご、ごめんね……！？　せっかくのデートだから、エッチな服を着てみようかなって思ったんだけど……がっかりさせちゃった……？　零君が嫌ならすぐに裸になるよ……？」
「いや、大丈夫！　瑠李が服を着てるの超久々に見たからさ、なんか違和感があっただけで、めっちゃ似合ってるから。そのままで行こう！」
「本当？　無理してない……？」
「あぁ！　むしろ、瑠李のスカートを覗いてパンツを見るのが夢だったのに、してなかったなって今思い出した」
「そのくらい、いつでもさせてあげるのに……♡　あ、でも……今日はその夢叶させてあげられないかも……」
「ん？　なんで？」
「ちょっと、覗いてみて♡」
「ん？　うん」
俺は言われた通り、瑠李の前でしゃがみ、ワンピースタイプのスカートの中を覗く。
と、目の前に広がっていたのは――、
「マンコ！」
「うん♡　ノーパンなんだぁ♡　零君、喜んでくれるかなって思って……♡」
「最高だよ！　やっぱ瑠李はエロくて最高だな！」

「えへへ……♡　ありがとう……♡」
「そんじゃあ、行くか。ノーパンドエロ女」
「っ♡♡　う、うん……♡」
俺達は、家を出て、デートに向かった。

♡　♡　♡

「そういや、どこに行くんだ？」
今、俺達はバスに乗っている。
「うん。私が零君のペットになったきっかけって覚えてる？」
「あぁ。もちろん。水中で俺にイラマされて、精液をしっかり飲めなくて、俺が怒って、そんで許してもらうために俺のペットになって、俺のブタになったんだ」
「うん……♡　今日はね、零君に怒られた日のリベンジがしたいなって思って……」
「って事は、行き先はプールか？」
「うん……♡　学校とか区民プールとかじゃなくて、普通に家族連れがいる市民プールだけどね♡」
「その方がむしろ興奮するわ……」
「そこでね、零君にいっぱいエッチな事してほしいんだ♡　もちろん、私も零君にたっくさんご奉仕するからね♡」
「あぁ。分かった。じゃあ、俺達が今から行くのは市民プールじゃなくて、セックスプールだな」
「ふふ♡　そうだね♡」
こうして、俺達はプールへとヤリに向かった。
この世界に来てから初の夏だな。
どんな感じなのか、楽しみだぜ！

第９１話　最愛の幼馴染みとの、初デート♡♡♡♡♡（後書き）

零の幼馴染み、瑠李のメイン回が始まりました！
前回のヒントで当てられた人、いらっしゃいましたでしょうか？
もしいらっしゃいましたら、お教えいただけると、とても嬉しいです♪
今回は、エッチシーンはなかったのですが、次話から盛りだくさんでお届けいたしますので、楽しみにしていてください♪

なんと！　瑠李のメイン回は全部で６話あります！
話数が増える分、より濃い内容をお届けできると思いますので、沢山楽しんでください！
それでは、次話をお楽しみに～♪

第９２話　プールでザーメンオイルを塗りたくり♡♡♡♡♡

市民プール……零君曰くセックスプールに到着した私達。
水着に着替える為に一旦お別れをした。
寂しい。この少しの時間すら寂しく感じる。
零君も一緒に女子更衣室で着替えればいいのに。
そう思って駄目だと思った。
他の獣達に零君のチンポを渡すわけにはいかないから！
「よし！」
着替えを終えた私は、更衣室を出てプールに向かう。
すると、そこにはすでに零君がいた。
ま、待たせちゃった……！？
と言うか零君、乳首隠してない！？
「れ、零君！」
「おう瑠李……ってなんだぁ！？」
私は零君に真正面から抱きつく。
「なんで乳首隠してないの！？　私、渡したよね？」
「あ～邪魔だったから置いてきた」
「駄目だよ～……ただでさえ零君は魅力的なんだから、乳首をさらけ出してたら、襲われちゃうよ……」
「そ、そうか……？」
ちょっと照れてる零君、可愛い♡
じゃなくて今は！
「これして……よし」
バンドエイドを乳首に貼った。
「乳首痒くなるよ～」
「我慢して！　零君の乳首もチンポも全部、今日は私が独占するの！」

「分かったよぉ～……」
ごめんね……本当は我慢なんてさせたくないんだけどこうでもしないと本当に襲われちゃうから……。
ううん。それは建前だ。私の心が零君の乳首を誰にも見てほしくないって言ってるんだ。
プールが終わったら、取るから、それまでは我慢してて……ごめんなさい……！
こんなの、他のみんなに見られたら激怒されるよね……零君に我慢を強いるなんて何様だって……。
「なぁ瑠李」
「んっ！？　な、何！？」
「その水着、めっちゃ可愛いな！」
「え！　ほ、本当！」
「あぁ。水色で泡がデザインされててめちゃくちゃ可愛い。それに、ピッタリ張り付いてるからクリとかスジとかが丸見えでめちゃくちゃエロい！」
「よかった～……！　喜んでもらえて……！　あんまりこういう可愛いデザインの水着って着ないから、正直怖かったの」
「怖がる必要ないだろう。瑠李は美少女でスタイル抜群でエロい女なんだから、どんな服だって似合う。自信もって平気だ」
「っ～～～～～～～～♡♡♡　あ、ありがとう……♡」
こういう事をサラッと言うのが、零君のずるいところだ……♡
でも、本当、喜んでもらえて良かった……♡
「女は本当に胸を隠さないんだな」
「ん？　当然だよ。胸を隠すのは男の子だけなんだから。女は隠す必要性がないからね」
「（そこが面白いんだよな……）」
「ん？　なんか言った？」
「ううん！　なんでもない。そら、行こうぜ！」
「うん！」

時々感じる。
零君は何かを隠していて、抱えていると。
それがなんなのか分からない。とても気になる。
でも、言ってこないって事は私には言えない事で、言っちゃいけない事なんだと思う。
だから、深く追求はしない。
私は、零君の事を信じているから。

♥　♥　♥

「零君、日焼け止め塗ってもいい？」
「ん？　おういいぞ。俺が塗ってやろうか？」
「手つきがエッチだね～♡　でもね、持ってきてる訳じゃないの」
「ん？　それじゃあ塗れないぞ？」
「うん。だからね、零君の日焼け止めをもらってもいいかな？」
「俺の？　俺何も持ってきてないけど……」
「ここに、あるやつ……♡」
零君の股間を触ると、零君が嬉しそうな顔を浮かべた。う～～～～もう♡♡♡♡　可愛すぎるよぉ♡♡♡
「駄目……かな……？」
「駄目な訳ないだろ！　俺の日焼け止めでよかったら、好きなだけ使ってくれ！」
「ふふ♡　ありがとう♡」
お許しもらえた♡　やた♡
「じゃあ、脱がすね♡」
水着を脱がせると、零君のチンポはすでにギンギンになっていて、ビュンッ！　っと目の前に出てきた。
「手でいっぱいシコシコして、ビュッビュしてもらってもいい？」
「もちろん！　沢山してくれ！」
「ありがとう♡　じゃあ、失礼します♡」

私は、ギンギンのチンポを優しく右手で握り、上下に擦っていく。
零君は我慢汁が多いので、すぐに濡れてきて扱きやすくなる。
「くっ……！」
「どう？　気持ちいい……？」
「あ、あぁ……！　めちゃくちゃ気持ちいい……！」
「よかった♡　イキたくなったら我慢しないでいつでもイッてね♡
いっぱいビュッビュッして♡」
私は上下運動を激しくしていく。
我慢汁がチンポの中で泡立つほど激しくシコシコする。
「る、瑠李……俺、もう……！」
「うん♡　いっぱい出して♡」「
「出るっ！」
ビュルッ！！！　ビュビューーー！！！　ビューーー！！！
「ひゃっ♡　出たぁ～♡　もっともっといっぱい出してぇぇ～♡♡
♡」
私は、左手で亀頭に蓋をして、精液を受け止めていく。
大量の精液が手にかかっていくのを感じながら、私は密かに軽イキをしてしまっていた。
「はぁはぁ……」
「いっぱい出してくれてありがとう♡　これを、こうして……♡」
私は、手についた零君の精液……ザーメンを腕、おっぱい、お腹、肩、足、マンコ、顔に塗りたくっていく。
「うわぁ～エッロ！！」
「んふふ♡」
零君がそんな私の姿を見て、興奮してくれている♡
もっと見て♡　零君のザーメンを体に塗りたくるど変態な幼馴染みペットを沢山視姦してぇぇ♡♡♡♡
「ん～～～♡♡♡　この臭い、この感触、堪らな～～～～～い♡♡
♡♡♡♡」
零君に休憩をとってもらっている間、私はずっとザーメンを体に

塗りつけていた。
それだけでイッてしまったのは内緒だ。

第９２話　プールでザーメンオイルを塗りたくり♡♡♡♡♡（後書き）

精液を体に喜々として塗りたくる女。エロすぎませんか！
さて、瑠李の物語はまだまだ続きます！
どうなっていくのか、楽しみにしていてください！
そして、沢山楽しんでくださいね！

第93話　プールと言えば？　窒息プレイです♡♡♡♡♡

零君のザーメンを体中に塗りたくった後、私達はプールに入る事に。

プールでやりたいことがある私は、零君にお願いをした。

「零君、実はね、お願いがあるんだ」

「ん？　なんだ？　瑠李の頼みならなんでも聞くぞ？」

「ほ、本当……？」

「うん。なんでもいいぞ」

「ありがとう♡　バスでも言ったんだけど、ここでリベンジしたいんだ♡　水中で、私にイラマしてほしいんだ♡」

「い、いいのか？　相当苦しいんだろ？」

「うん♡　それがいいの♡　前に水中イラマでしっかりできなかったから、今度はちゃんとして、全ザーメンを飲み干したいなって♡」

零君が少し驚いたような表情を浮かべてる。

そんな顔も可愛い♡

「お願い、してもいいかな……？」

「もちろんだ。そんなんでいいなら、いくらでもしてあげるよ」

「ありがとう♡」

私は、零君の水着を脱がす。

「まず、この水着食べてもいい？」

「た、食べるの！？」

「うん♡　特にここ♡　チンポが密着してた部分♡」

そう言って私は、水着の股間部分に吸い付く。

「ん～～♡♡♡」

水の味が最初にしたけど、その後に零君のチンポの味がした♡

裏返しにしたから、間接フェラだ♡

どうしよう……♡　これだけでイッちゃいそう……♡

「ちゅぱ……♡　ちゅぱ……♡」
「あの～瑠李さん？　いつまで食べるんだ？」
「ん？　っぱぁ♡　ごめんごめん♡　つい夢中になっちゃった♡
じゃあ、次は直接、チンポ食べていい……？」
「あぁ。いいぞ」
「ありがとう♡　じゃあ、潜るから、遠慮なくお口を犯してね♡」
「あぁ。任せろ」
私は水中に潜る。と、零君の勃起したチンポが見えた。
あぁ～♡　このチンポ見てるだけでイキまくっちゃう……♡
と、私がチンポを見て興奮していると、零君が私の頭を掴んでき
て、口の中にチンポをぶっ込んできた。
「んぶぶぅぅぅ！？♡♡♡♡♡」
く、苦しい……！
息を止めてる所を、喉奥を犯されてとっても苦しい……！
しかも、ズボズボ突かれて水が口の端から少しずつ入ってくる…
…！
水を飲み込みそうになるのに、チンポを喉奥まで突かれるので水
を吐き出す。けど、さらに水が入ってきて……。
それが繰り返されて、ものすごく苦しい……！
バシャ！　バシャ！　ビシャ！　ビシャ！
零君が腰を動かす度、水がはねてバシャバシャ音が鳴る。
「ぐぶぅぅぅ！？　ぐぐぅ……！？」
あ、やばい……これ本当にヤバイかも……。
意識が遠のいてきた……。鼻や耳に水が入ってきて、もう全部が
水に侵されてるみたい……。
ううん。実際は口マンコをチンポで犯されてるんだけど♡
あぁ……♡　このまま射精されて窒息死できたらどんなに幸せな
んだろう……♡
死因が最愛の人のザーメンによる窒息なんて、最高過ぎる……♡
零君♡　零君♡　零君♡　いっぱいお口に出してぇ♡

喉奥にいっぱい中出ししてぇ♡
私を、殺してぇぇぇ♡♡♡
「――――！！！」
「んぐぅ！？」
ドビュッ！！！　ドビューーーー！！！！！　ビュビューーーーーーーーーーーー！！！！！
零君の射精、来たぁぁぁぁぁ♡♡♡
ドロッドロで粘っねばのザーメンが、喉に絡みついてきて、チンポで犯された喉を今度はザーメンで犯されてるぅぅぅ♡♡♡
あぁ～～～～♡♡♡　これ、しゃいこうぉぉぉぉぉ♡♡♡♡
ごめんね、零君……。また全部飲み干せないかも……。その罪、死んで詫びるね……♡
零君のザーメンで窒息死、幸せだ～……♡♡♡

♥　♥　♥

「――！」
ん……？　なんか聞こえる……？
「―李！」
零君の、声……？
「瑠李！」
「っ！？　ぐはっ！？　ゴホゴホ……！？」
「よかった……！　目覚めた……！」
あ、あれ……？　私、零君のザーメンで窒息死したはずじゃ……？
「なんで私、生きて……」
「馬鹿野郎！！！！」
「っ！？」
零君が怒ってる……？
「なんでこんな無理してんだ！！！　本当に死んじまったかと思っただろうがぁ！！！」

「ご、ごめんなさい……でも、ザーメン全部飲み干せない愚女は、死んだほうが……」
「ふざけんな！」
バチンッ！
零君にビンタされた。
「確かに、俺は精液を全部飲んでくれって言った！　それが原因で瑠李を突き放したりもした！　でも！　だからって死んで償えとか、そんな事思った事ねぇ！」
「零君……」
「死んだら全部終わりなんだよ！　もう俺の精液を飲むことも食べることも、チンコを舐める事も扱く事もできなくなる！　それでいいのかぁ！」
「い、嫌だ……」
「そうだろう！　俺だって嫌だよ！　瑠李のおっぱいやお尻、マンコを触れなくなってセックスできなくなるんて！　俺は、俺は……お前と一生一緒にいたいんだぁ！！！！！」
「っ！」
零君が、私を「お前」って……♡
それに、一生一緒に……♡
「わ、私もぉ……！　零君と一生、一緒にいたいよぉぉぉ！！！！」
「じゃあ、死ぬな！　俺はもう、二度とお前を失いたくないんだ……！」
零君が泣いてる……。
私が泣かせたんだ……私が、大好きな人を悲しませて苦しませて、泣かせてしまったんだ……！
ごめんね、零君……。
「ごめんなさい、零君……！　私、もう死なない……！　ずっと零君と一緒にいる……！」
「あぁ！　ずっと一緒だ！　瑠李！」
「うん！！！」

私達はプールサイドで抱き合う。
こういう時でも、お尻を揉んでくる零君、大好き♡

この時、私は零君の大事な言葉を聞き逃していた。
『俺はもう、二度とお前を失いたくないんだ』。
この言葉を。

第93話　プールと言えば？　窒息プレイです♡♡♡♡♡（後書き）

窒息プレイ、いかがだったでしょうか？
少しでも興奮して、楽しんでいただけましたら、幸いです！

次話もまだまだ瑠李とのデートが続きます！
変態二人のデートがどうなって行くのか、楽しみにしていてください♡

第９４話　シャワー室で……♡♡♡♡♡

全く……。瑠李には驚かされた。
まさか精液を飲み干せないからって、死んで償おうとするなんてな。
その忠誠心はめちゃくちゃ嬉しいんだけど、俺としてはかなり困る。
前世で瑠李は俺と一緒に階段から落ちて死んだ。
俺は転生できたけど、瑠李がどうなったか知らない。
血を流しながら倒れてる瑠李の姿、今でもハッキリ脳裏に焼き付いてる。
俺は、瑠李を失いたくない。死なせたくない。もう二度と、離れたくない。
「零君……？」
と、俺がそんな事を考えていると、目の前にいる瑠李が顔を覗き込んできた。
「大丈夫……？　やっぱりまだ、怒ってる……？」
「ううん。怒ってないよ。ちょっと考えことをしてただけだ。それより」
「ひゃんっ♡」
俺は目の前にいる瑠李のケツを優しく撫でる。
「シても、いいか？」
「もちろん♡　零君がシたい時に、好きなだけシて♡　私の体は、零君のモノだから♡」
「ありがとう。じゃあ、挿れるぞ」
「うん……♡　来て……♡　んっ♡　んん……あああ♡」
俺は背後から、瑠李のマンコにチンコをぶち込んだ。
何気に瑠李のマンコ、久々な気がするな。

順番決めの後、シてなかったからな。
「ど、どう……？　私のオマンコ、ちゃん零君のチンポ、き、気持ちよくできてるかな……？」
「あぁ。めちゃくちゃ気持ちいいぞ」
「よ、よかったぁ……んんぅ♡」
「だから、もう我慢できない！　動くからな！」
「うん♡　うん♡　動いてぇ♡♡♡　いっぱい腰パンパンして、私のオマンコ壊れるくらい犯してぇ♡」
ちなみに、俺達がいるここはシャワー室。
女性用のシャワー室に入り、俺達はセックスをしている。
瑠李は俺の好みを把握しており、こうやって隠れながらするのが好きな俺の為に、あえてカーテンで姿を隠してくれている。
多分、普段の瑠李だったら、俺とのセックスを公開するはずだ。
こういう気遣いができる所、大好きなんだよな。
「あんっ♡　ああんっ♡　あっ♡　あっ♡　あっ♡」
まぁ、こんだけ声を出してたら隠れてる意味ないんだけど。
なんか、両隣から瑠李以外の女の喘ぎ声が聞こえてきてるな……。
オナニーしてんのか？
「れ、零君……♡」
「ん？」
「今は、他の女の事、忘れてほしいな……んっ♡　今だけは、私のことだけを見て……♡」
そうだな。俺が今デートしてセックスしてんのは瑠李だ。瑠李以外の女の事なんて、考える必要はない。
「分かったよ瑠李。今はお前だけを考えて見る。ごめんな、そんな事も気付けないなんて」
「ううん♡　んあっ♡　大丈夫♡　零君に見てもらえて、考えてもらえるだけで私、幸せだから♡　んあっ♡」
可愛い事言ってくれるじゃねぇか。
こんなん言われたら、我慢できるわけないよな。

「ああ♡　んあああ♡　ああああああ♡　　ああああああ♡」
俺はさっきよりも激しく腰を打ち付ける。
パンパン♡　バチュバチュ♡
と言う、腰を打ち付ける音と、瑠李の愛液の音がシャワー室に響き渡る。
「んあああああああ♡　ああああああああああああ♡　れ、零君は、激しいいぃ♡　んあああああ♡　こ、こんなのすぐに、すぐにイッちゃうよぉぉ♡♡♡」
「イッていいぞ！」
「駄目駄目ぇ！　零君より先にイクなんて、そんなの駄目なのぉぉぉ♡♡♡　駄目なのに勝手に体が、イク準備始めてるのぉぉ♡♡♡」
「気にしないてイッちゃえ！　おらおらおらおら！」
「ああああああああああああ♡♡♡　駄目♡　駄目♡　駄目ぇぇぇぇぇ♡♡♡　オマンコ、勝手にイッちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
ぷしゃあああああああああああああ♡♡♡
ビクビクビクッ……♡
瑠李は、潮を吹きながらイッた。
体もケツもビクビク震わせて、壁に手をついて余韻に浸っている。
アナルもヒクヒクしてて、マンコもチンコをめちゃくちゃきつく締め付けてくる。
「フンッ！」
「んひゃあああああああああああ！？♡♡♡　れ、零君ま、待って……あああああ♡　今イッたばっかりだからぁぁぁぁ♡♡♡　気持ちよすぎておかしくなっちゃうからぁぁぁ♡♡♡」
「おかしくなっちまえ！　乱れに乱れて、俺好みのど淫乱ドスケベ痴女になれぇぇぇぇ！」
「にゃるぅぅぅぅぅ♡♡♡　にゃるぅぅぅぅぅ♡♡♡　零君好みの女に、にゃりたいいいいぃ♡♡♡」
「くっ……！　もう出すぞ！」

「出ひてぇぇぇぇぇ♡♡♡　零君のザーメン、私のオマンコ……子宮にたっぷり注いでぇぇぇぇ♡♡♡　子宮を溺死させてぇぇぇぇぇ♡♡♡」
「お望み通り、子宮にぶちまけてやる！　精液の重さで苦しくなるくらい、出してやるからな！」
「お、お願いしましゅうううううう♡♡♡♡♡　あああああああああああああああ♡♡♡」
「出るっ！」
ドビューーーーーーーーーーーーー！！！！！　ビュビューーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！　ビュルビューーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！
「んおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡　子宮に大量のザーメン来たぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　射精の威力全然落ちないぃぃ♡♡♡　射精長いぃ♡♡♡♡　子宮にずっとザーメン注がれてぇ♡
私また、イッちゃうううううううう♡♡♡♡」
瑠李は中出しされて再びイッた。
「はぁはぁ……」
「あ～めっちゃ出たな」
俺は、射精を終えたのでチンコを抜こうとした。が、それを――、
「ま、まっへ……」
「ん？　どうした？」
「ま、まだにゅかないれ、くらはい……チンポ……まだオマンコにいれへはい、れふ……いっふぁい中にらひへいいはら、まだにゅかないれ……」
呂律が回らなくなってるな。
要約すると、どれだけ中に出してもいいから、まだチンコを抜かずにマンコに挿れといてくれって事だな。
「いいぞ。瑠李の気が済むまで挿れといてやる」
「あ、ありはとう……♡」
この後、俺は瑠李に6発中出しをした。

そろそろ着替える為にチンコをマンコから抜いたら、瑠李がとっても悲しそうな顔をした。
その顔が可愛すぎて、つい写真を撮ってしまった（スマホは防水ケースに入れて持ち歩いている）。
ちなみに、瑠李のマンコからはありえないくらいの精液が、逆流してきた。
ドロっと垂れてくるんじゃなくて、ところてんが押し出されるみたいにどゅるるるるる♡　っと出てきた。

第９４話　シャワー室で……♡♡♡♡♡（後書き）

女の子にチンコ抜かないで、ずっと挿(い)れてて……♡　なんて言われたら、嬉しすぎますよね♡

しかも、どれだけ中出ししてもいいなんて最高ですよね♡

沢山、興奮していただけましたら幸いです！

第９５話　二人の関係は……♡♡♡♡♡

シャワー室でセックスをした俺達は、着替えを済ませ、バスに乗っていた。
「んっ♡　んぶっ♡　ぎゅぶっ♡」
バスに乗って、一番後ろの席に座る事ができた俺達。
窓側に俺が座り、通路側の方に瑠李が座っている。
席に着いたと同時に、瑠李が俺のズボンのチャックを開けて、チンコをしゃぶってきた。
いきなりどうしたのかと聞くと――、
「一秒でも多く零君のチンポを咥えていたいの♡」
と言う、可愛くてエロくて最高な答えが返ってきた。
「じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡」
左手で竿を扱きながら、口を窄め頭を前後に動かして刺激を与えてくる。
頭を上げる際、舌で裏スジをなぞるので、俺はすぐに限界が来てしまった。
「も、もう……出るっ！」
ドビュッ！！　ビュビュッ！！！　ビュルビューーーーーーーー！！！！！
「んぶっ！？　んんっ……♡　んんぅ……♡♡♡」
俺が出した精液を、蕩けきった表情で飲み込んでいく瑠李。
ごくごくと喉が鳴るのが、めちゃくちゃエロい。
「ごくっ♡　綺麗にするね♡　んちゅぅ……♡」
瑠李は、精液を飲み終えた後、一度口を離したが、すぐさま咥え直し、チンコをまんべんなく舐めていく。
これはお掃除フェラだ。でも、瑠李がしているのはお掃除ではなく――、

「お前、イカせにきてるだろ……！　くあ！　出るっ！」
ドビュッ！！！　ビュルルルルル！！！　ビュルビューーーーーー！！！！！！
「んんっ♡♡♡　んん〜〜〜♡♡♡　ごくごく……♡」
「はぁはぁ……」
バスに乗ってる俺達以外の乗客（女のみ）は、顔を赤らめ密かにオナニーを始めていた。
目の前に座ってる人なんて、俺の顔をジッと見つめてきてる。
「瑠李、もう……」
「もうちょっとだけ、ちょうだい♡」
「くっ……！」
この後、俺は目的のバス停に着くまで瑠李にフェラされ続けた。
トータルで8発、口内射精をした。

♥　♥　♥

「あ、これなんかいいんじゃないか？」
「確かに♡　可愛いね♡」
バスでフェラをした後、目的のバス停に着いた私達は、ショッピングモールに来ていた。
何をしに来ているのかと言うと、雌ブタである私の首輪やリード、おトイレなどを買いに来たのだ。
零君が今選んでくれたのは首輪。
水色を基調としていて、緩くもキツくもできる物だった。
「これで、ギュッとキツく首を絞められて、その状態でイラマとか考えただけで……♡　んんぅ……♡」
妄想しただけで、軽イキしてしまった。
「瑠李、お前今イッただろ？」
「う、うん……♡　ごめんね……勝手に……」
「いやいいんだけどな。その姿エロくて最高だったから。んで？

これにするか？」
「うん！　零君が選んでくれた物にする！」
「オッケー。じゃあ、これ買ってくるから瑠李は先にトイレの所に行っててくれ」
「うん！　じゃあ、はいこれ」
「ん？」
「お金」
「いやいや、このくらい俺が……」
「だーめ！　零君は一銭も出さなくていいの！」
「で、でもな……」
「零君はいつも精液やおしっこを出してくれてるんだから、お金とかは私達女に出させて♡」
「わ、分かった。じゃあ、行ってくる」
「うん♡」
零君がレジに向かっていく。
零君は油断をするとすぐに自分でお金を出そうとしてしまう。
零君はお金の事なんて何も考える必要はない人だ。
女を抱いてくれて、性奴隷やペット、モノにさせてくれる神様みたいな、ううん。神様である零君は、性欲の事以外、何も考えなくていいんだ。
私達が外で稼いで、零君を養う。そして、零君の望むままに抱いてもらう。
それが、女の幸せだ。
それをまだ、零君は分かってないみたいなんだよね。
「おこがましいかもしれないけど、これから零君に色々教えていかないとかな」
私はトイレコーナーにやって来た。
「種類が色々あるんだ」
「いらっしゃいませ～。何かお探しですか～？」
「はい。ペットの」

「ペットの種類はなんでしょうか〜？」
「それは……」
「瑠李、お待たせ。なんかいいのあった？」
零君がやって来た。そんな零君を見て――、
「だ、男性！？」
店員さんが、顔を真っ赤にして後ずさった。
むむ。零君を前にして後ずさるなんて、何様？
「あ、ごめん。聞いてる所だった？」
「ううん。大丈夫だよ。零君が伝えた方がわかりやすいと思うから」
「そうか？　じゃあ、あのすんません」
「ひゃ、ひゃい！？」
また後ずさった。
腹立つな。ちょっと喝を入れるか。
「んっ！？」
「どうしたんですか？」
「い、いえ……」
私は店員さんの隣に立ち、スカートの中に指を入れマンコに触れる。
零君からは見えない位置なので、喝を入れやすい。
「（ほら、早く接客してくださいよ。私の大切な零君に失礼な態度とったら、タダじゃおかないんで）」
「（は、はい……）そ、それではあの……んっ♡　ペ、ペットの種類を、んんぅ♡　教えていただいてもいいですか？　んんぅ♡」
「（いいですかじゃない。よろしいですか。だ）」
「（ひゃ、ひゃい……）教えていただいても、よろしいでしょうか……♡」
「あ、はい。ペットの種類はブタ。可愛らしい雌ブタです」
「ブタさんですか……でしたら、んっ♡　こちらのコーナーです、んっ♡」
「零君、先に行ってて」

「あいよ～」
零君だけ先に行かせて、私は店員さんと向き合う。
「全く。なんですかあの接客態度は！　神様である零君に対して、無礼極まりないです！」
「ご、ごめんなさいぃ……！？」
「許しません。なので、今から寸止めをして、あなたには強制発情した状態で接客をしてもらいます。接客中にオナったり、勝手にイッたりしたら、許しませんから」
「も、もしイッてしまったら……」
「強制わいせつ罪で警察に通報します」
「っ！？　そ、それだけは……！」
「じゃあ、我慢してください」
「は、はい……」
私は店員に、２０回の寸止めをした。
ていうか、イキそうになるの早すぎない？

♥　♥　♥

零君の元に向かい、何事もなかったかのように隣に立つ。
「瑠李、これなんてどうだ？」
「あ、これ肌触りすごくいいかも！　これならお尻降ろしても痛くないかも」
「そうか。じゃあこれにするか」
「うん！」
「お、お決まりに、なりましたでしょうか～♡」
「あ、はい。これをお願いします」
「か、畏まりました～♡」
商品を持ってレジに向かう店員。
そんな店員を見て零君が――、
「なんかあの人、様子おかしくないか？」

「そう？　零君と接して発情しちゃったんじゃない？」
「そうか？　まぁ、ならいいんだけど」
私達もレジに向かう。
あの店員、お仕置きが必要だな。
「あ、ありがとうございました～♡」
お会計を済ませた私達。
「零君、ちょっとここで待っててくれる？」
「ん？　あぁ、分かった」
休憩スペースで、零君には待っててもらう事に。
私は、さっきのお店に戻る。
「いた。おい」
「ひゃ、ひゃい……！？」
「なんださっきの対応は。ふざけてんの？」
「い、いえ……決してそんな事は……」
「連絡先よこせ。今度あんたに仕置してやる」
「は、はい……！」
私は店員と連絡先を交換した。
これでこの女を調教できる。零君好みの女に！
「じゃ」
「は、はい……」
急がないと。零君を待たせる訳にはいかない！

零君の元に戻ると、案の定ナンパをされていた。
「今一人ですか～？　私達と遊びません？」
「ご飯奢りますよ～？」
ムカ。何あの女達。
対してエロくもなく、おっぱいもＤカップくらい？
お尻も小さくて、色気もない。そんな程度の分際で零君をナンパするとか、何考えてんの？
零君の事舐めてんの？

「お待たせ～零君」
私が駆け寄ると、あからさまに女達は嫌な顔をした。
「んだよ、彼女連れかよ……」
「しかも無駄にデケェ……」
「ごめんね、待たせちゃって」
「いや、大丈夫だ」
「ごめんね～彼、私とデート中なの～。だからクソ虫はどっかに行ってもらっていい？」
「はぁ！？　誰がクソ虫だ！」
「あんた彼女ってだけで調子乗ってんなよ！」
ふっ。馬鹿な奴ら。
「私、彼とは恋人同士じゃないよ？」
「「はぁ？」」
「彼とは、飼い主とペットの関係なの♡」
「「……！？」」
ふふん。さぞ羨ましかろう。
「「ぐっ……」」
「う、羨ましすぎる……」
「女をペットにさせてくれる男性がいるなんて……」
「分かったらほら、さっさと帰ってパパの精液でも吸ってな！」
「「く、クソ～！」」
馬鹿女達は走り去っていった。
ふふん。あんた達みたいな女には、一生ご主人様なんてできないよ～だ！
と、私が零君に抱きつきながら去っていく女達を見ていると、零君が――、
「お、俺達って、恋人同士じゃなかったの……？」
と、悲しそうな声音、表情で言ってきた。
「え！？　い、いやあの、その……だ、だって私告白してないし……ペットとしてしか存在意義を証明してないから、そうかなって…

…」
「そ、そっか……俺もう、付き合ってる気でいたわ……」
ど、どどどどどどどどどどどどどどどどどうしよう！？
私のくだらない対抗心のせいで、零君を傷つけちゃった！？
零君、私の事彼女として見てくれてたの！？　嬉しすぎるんだけど！
って、今はそうじゃなくて！
「ご、ごめんね、零君！？　わ、私、勝手にそういう思い込みしちゃ駄目だって自制してて……！　今日のデートで告白しようと思ってて……！」
あ～今日の計画が崩れてく……でも、零君を傷つけてしまったんだから、今はそんな事言ってられない！
「ほ、本当にごめんなさい……！　私、私……！」
「瑠李」
「っ！」
零君が抱きしめてくれる。
ど、どういう状況ですか、これは～～～！　零君の温もりがぁぁぁ♡♡♡
「俺は瑠李をペットとしてだけじゃなく、彼女だと思ってる。でも、確かに告白して正式に付き合った訳じゃなかった。俺の方こそ、勝手に暴走してごめん」
「う、ううん……零君は悪くないよ……私がもっと早く行動してればよかったんだから……」
「告白、俺からしてもいいか？」
「え……し、してくれるの……？」
「あぁ。でも、流石にここじゃ雰囲気がないから、別のところに行こう」
「うん！」
「どこがいい？」
「じゃあ……」

私は、あの場所を選択した。

第９５話　二人の関係は……♡♡♡♡♡（後書き）

零と瑠李の物語もいよいよ佳境です！
次話はついに瑠李回ラスト！
これまでは飼い主とペットだった二人の関係。
それが、大きく変わります！
いや、もしかしたらそこまで変わらないかも……？
次話をお楽しみに！

第９６話　最高に愛し合う二人♡♡♡♡♡

「本当にここでよかったのか？」
「うん！　だってここ、私達が初めてエッチな事した場所でしょ？」
私が選んだ場所。それは、学校。
そして、水泳部が使う更衣室だ。
私と零君は、この更衣室で初めてエッチな事をした。
零君を想ってのオナニーを見られて、そのまま相互オナニーして、フェラに手コキにパイズリ。そしてそのまま私の家に行ってセックス……。
私にとって、この場所は一番思い出深い場所。告白するならここと決めていた。
「じゃあ……っ、瑠李？」
私は更衣室に先に入っていた零君に、後ろから抱きつく。
「零君、私、零君が大好き。ペットとしてもそうだけど、できれば彼女としても側にいさせてほしい」
「俺が告白しようと想ってたんだけど……先を越されたか……」
ごめんね……さっきの感じだと告白してくれようとしてたんだよね。
それはとても嬉しい。でも……。
「やっぱり、告白は私がしたかったの」
「そっか。うん。ありがとう。俺も瑠李が大好きだよ。子供の頃からずっと。幼馴染みとしてじゃなくて、一人の異性、女の子として。瑠李さえよかったら、俺の彼女になってくれ」
「っ～～～～～♡♡♡　ありがとう……！　わ、私なんかでよければ、零君の彼女にさせてください！」
「うん。瑠李」
「ん？」

「キスしよう」
「キス？」
「あぁ。思えば俺達、あんまキスってしたことなかっただろ？」
「そ、そそそそそそうだね……」
「ん？　なんか様子がおかしいな。何か俺に隠してるのか？」
「ま、まっさか～！　零君に隠し事なんかあるわけないじゃん……！」
「本当か～？」
「うぐっ……」
「吐け」
「はい……実は、零君が寝てる間、勝手にキスしてました……」
「全く。んな事だろうとは思ってたよ」
「お、怒らないの……？」
そう聞くと、零君はニカッと笑って――、
「怒る訳ないだろ？　大好きな瑠李がキスをしてきてくれてんだ。嬉しいに決まってる！」
と、言ってくれた。
「ありがとう……！零君、だ～～～～～い好き！！！」
「あぁ！　俺もだ～～～～～い好きだ！」
「んふふ～♡」
私達は正面から抱き合う。
私は零君と目を合わせ――、
「零君、エッチしよう！」
と、誘った。

♡　♡　♡

「んっ♡　んっ♡　んあああ♡　んふぁあああああ♡」
無事？　付き合う事になった俺達は、更衣室で全裸になり、セックスをしていた。

瑠李をロッカーに押し付け、後ろから思い切り犯しまくる。
これが最高すぎて、もう一時間はそうしている。
「あああああ♡　んふぅぅぅ♡♡　らあああああ♡♡♡」
「くっ……！　瑠李、また出すぞ！」
「らひへぇぇぇぇぇぇ♡♡♡」
ドビュルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！　ビュビューーーーーーーーーーーーーー！！！！！
「んあああああああああああああ♡♡♡　中出し来たぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　ザーメン注がれて、オマンコイッちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」

「あああああああ♡　んんぅぅぅぅ♡♡　んおおおおおおおお♡♡♡」
長椅子に横にさせた瑠李を、俺は正常位で犯す。
「んおおおおおおおお♡♡♡　イキマンコ抉られて、おかしくなってるぅぅぅ♡♡♡♡　ずっとイッてて体が壊れるのぉぉぉ♡♡♡」
「瑠李、出すぞ！」
「出してぇぇぇぇ♡♡♡」
俺はチンコを引き抜き、瑠李のお腹目掛けて――、
ドビュンッ！！！！！　ドビュルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！
「んひゃんっ♡　あはぁ～♡　お腹にあちゅいの来たぁぁぁぁ♡♡♡　でもなんで～♡　膣（なか）に出すの飽きちゃった……？」
「いや。中出しに飽きる訳ないだろ。こうやってお腹に出した後に、間髪入れずに！」
「んごぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♥♥♥♥♥♥　クリなぞった後にイキマンコにチンポぎだぁぁぁぁぁ♥♥♥♥♥」
「こうやってマンコでシコって、瑠李のお腹に出すのしてみたかったんだ！」
「マンコがオナホでお腹がティッシュになっちゃたぁぁぁぁ♥♥♥

❤❤❤　幸せ過ぎて無理ぃぃぃ❤❤❤❤❤❤❤　こんなの幸せ死ぬぅぅぅぅ❤❤❤❤❤❤」

「死なれちゃ困るけどな！　くっ……！　また出すぞ！　どこに出してほしい！」

「お腹ぁ❤❤❤❤　私のティッシュお腹に出してぇぇ❤❤❤❤❤ぷりっぷりのザーメン、ドビュドビュしてぇぇぇ❤❤❤❤」

「出る！」

俺はまたチンコを引き抜き、瑠李のお腹に――、

ドビュビューーーーーーー！！！！！！　ビュビュビューーーーーーーーーー！！！！！！

チンコを抜こうとしたら、逆に腰を掴まれ動けなくなってしまった。
この後3発、喉奥射精をした。

♥　♥　♥

「ひゃわぁぁぁぁぁ♥♥♥♥♥♥♥」
今、私は零君のおしっこを浴びている。
何気に零君のおしっこを浴びたり飲んだりするのって、初めてな気がする。
零君の全てをまだ知らないなんて、絶対に駄目。
零君の全部を私は、知りたい！
「がばばばばばばばばばばばばばば♥♥♥♥♥」
「飲みながら喋るな。何言ってるか分かんねぇ」
ごめんねぇぇ♥♥♥♥　美味しすぎてつい喋っちゃった♥♥♥♥
零君のおしっこでうがいとか、最高過ぎるよぉぉ♥♥♥♥

♡　♡　♡

夜の更衣室でヤりまくった俺達は、全裸のまま長椅子に座っていた。
瑠李は俺に寄りかかってきている。そういや、あの日もこんな感じだったな。
「瑠李」
「ん～？」
「改めて、これからペットとしてだけじゃなく、恋人としてよろしくな」
「う、うん！　ふつつか者ですが、よろしくお願いします！」
「ふふ。なぁ、シャワー浴びたらどっか飯食いにいかねぇ？　めっちゃ腹減ってきた」

「ふふ♡　そうだね♡　そういえば、朝ごはん食べてから何も食べてないもんね♡　何食べる？」
「そうだな～。ハンバーグとか？」
「いいね！　零君のザーメン入ハンバーグ……♡」
「おいおい」
「あれ？　ザーメン乗せハンバーグの方がよかった？」
「いやいや、外か中か問題じゃないわ」
「さっきの私みたい♡　中と外に出されて、幸せだったぁぁ♡♡♡ねね、ハンバーグ屋さんに行ったら、ザーメンもらってもいい？」
「うん、いいぞ」
「やった～♡　ザーメン乗せご飯とザーメン乗せハンバーグを食べるんだ～♡♡♡♡」
「お前、本当に精液好きだよな」
「うん♡♡♡♡♡　零君のザーメン、だ～～～～～～い好き❤❤❤❤❤❤❤❤」
「ありがとう」
「うん！　ふふ♡」
俺達は、立ち上がる。そして、向き合い見つめ合う。
すぐにシャワー室に行けばいいんだけど、どうしても瑠李と向き合いたかった。
そして、数十秒見つめ合った後、俺達は――、
「んちゅ……♡」
そっとキスを交わした。

（零君、大好きだよ♡　愛してる♡）
（瑠李、大好きだ。愛してる。一生、一緒にいような）

第９６話　最高に愛し合う二人♡♡♡♡♡（後書き）

瑠李回、いかがだったでしょうか……？
二人はやっと正式に付き合う事になり、これまで以上に愛を育む事になります！
二人の関係をこれからも、温かく見守っていただけますと幸いです！
少しでも興奮して、楽しんでいただけておりましたらとっても嬉しいです！

【第五章】はこれで終了となります！
次話からは【第六章】がスタートいたします！
どんな内容になるのか、楽しみにしていてください♪

桃達と零のデートは、もちろんあります！
ただ、それは連載ではなく、短編で……？
と考えておりますので、いつになるかはわかりません（年内を予定しています）が投稿された際には、ご拝読いただけますと幸いです！

そして、毎日投稿をしておりましたが、一旦、ここで終了させていただきたいと思います……！
次話からは【毎週土曜日投稿】にさせていただきたいと思います……！
色々と変わってしまって大変申し訳ございません……！　ですが、その分、最高の作品をお届けいたしますのでこれからも変わらず、この作品を愛し続けてください！
ＰＶ３０万、４０万、５０万突破記念を色々と考えている最中です

ので、そちらも楽しみに待っていてください♪

第97話　みんなでお泊りへ　①

「おめでとうございま～す！　宿泊宿『ヤり屋』への3泊4日の旅行券が当たりました～！」
俺は今、リサ、燐、愛莉の三人と買い物をしていた。
ガラガラの福引を回したら、なんと1等を当ててしまった。
「お兄ちゃん、すごいです！」
「さすがは先輩です♡」
「零様、さすがです♡」
「こちら、どうぞ！」
お姉さんから宿泊券をもらった。
「こちら、人数制限などはございませんので、お好きな人数でお楽しみくださ～い！」

俺達は家に向かっていた。
宿泊券を見ながら思う。
そっか。人数制限ないのか……。じゃあ、全員で行けるか？
えっと……俺と巴、華に燐、桃。リサに鈴音に愛莉。瑠李にユイに醍醐の同居組。
そこに加えて、黒乃、紗夜、沙耶香、真耶子、雫、奈央、澪、恋の八人……。
合計で……19人！？
流石に大所帯すぎるか……？
「零様……？」「お兄ちゃん……？」「先輩……？」
「ん？　あ……」
いつの間にか立ち止まっていたらしく、前を歩いていた燐達が心配そうにこっちを見てきていた。
「悪い悪い。いや、これさ。人数制限が無いって言ってたけど、1

9人で行ったらさすがに迷惑かな？」
俺は三人の元に駆け寄り、そう相談してみた。
「わ、私達全員、連れて行ってくださるんですか！？」
「ん？　当たり前だろ？　誰か一人を仲間外れにしたりなんか、するわけないじゃん」
「「「っ～～～～～♡♡♡」」」
ん？　なんだ？　三人が股を擦り合わせてもじもじしてる。トイレか？
「先輩、全員ってあの女もですか？」
「醍醐の事か？　あぁ、もちろん連れてくぞ」
「そう、ですか……」
「そんな顔すんな。もちろん、あいつには楽しむ余裕はほとんど与えないよ。俺の椅子だったりサンドバッグだったり、道具になってもらうから」
「それなら、良かったです。あの女に楽しむ資格はありませんから」
ん～……なんか、リサは人一倍醍醐に当たりが強い気がするな……。
鈴音に聞いてみたら『ご主人様に舐めた口を効いて、激怒させた事が気に食わなくて、未だに許せないらしいです』と言われた。
まぁ、俺を思って怒ってくれてるのは嬉しいんだけど、もうちょっと優しくしてもいいんじゃないかと、時々思ったりする。
あ、もちろん、俺もあいつを許したりはしていない。
「人数多くても平気なのかな？」
「大丈夫……みたいですよ」
愛莉が答えてくれる。
「今、そこに記されてる宿を調べてみたんですけど、その券があれば、何人でも大丈夫だそうです。最低が二人で、最高は設定されてないみたいですね」
「なるほど。じゃあ、大丈夫だな。よし、全員で旅行に行くぞ～！」
「「「お～～！」」」

♡　♡　♡

買い物から戻った俺達は、家にいる者達に説明をした。
すると、全員目をキラキラさせテンション高く行くと言ってくれた。
そこからのみんなの動きは早かった。
買い物に出かける者、荷物を詰めだす者、それぞれがそれぞれの準備をし始めた。
「さてと」
俺は自室に戻り、スマホを取り出す。
「でも、こう見ると俺のスマホに女子の連絡先が入ってるの不思議だよな。しかもこんなに沢山」
スマホには、女子の連絡先がめちゃくちゃ入っている。
時々、みんなから送られてくるエロ写真はしっかりと保存してある。それを見ながら瑠李達に抜かれるのが最高だったりする。
「まずは……」
俺は電話をかける。
ワンコール鳴る前に――、
『もしもし、零？』
「こんな時間にごめんね、黒乃」
俺は黒乃に電話をした。要件はもちろん――、
『旅行！　私も行っていいのか！？』
「もちろん。黒乃は俺のモノで彼女なんだから」
『ありがとう……！　いつ行くんだ？』
「来週行こうかなって」
『夏休みラスト二週の内の一週間を使うのか』
「うん。最後の週はやっぱゆっくりしたいからさ。どう？　予定組めそう？」
『もちろんだ！　零との予定以上に大事な事なんてないからな！

すぐに組み込めるぞ！』
「そ、そっか。よかった。じゃあ、来週の月曜日、うちに来て」
『了解！』
通話を切る。
す、すげぇな。理事長を務めてるから色々と忙しいだろうに、俺との予定を優先させてくれるなんて。嬉しい限りだ。
「さて、お次は……」
『もっし～れいれ～い♡』
「おう、紗夜」
紗夜もワンコール前に出た。
『れいれいから電話なんて珍しいね！　どったの？』
「あぁ、実はな……」
『え～～～～！　旅行！　行く行く～～～～！　あ、エッチのイクじゃないよ？』
「分かってるわ」
『イク～♡　は、れいれいとがいいからね♡　来週の月曜日にれいれいの家に行けばいいんだよね？』
「あぁ」
『りょう～かい！　色々準備して、れいれいを激興奮させるから、楽しみにしててね♡』
「あぁ、楽しみにしてる」
『あ、れいれい、通話切らないでこのままでいてくれる？』
「ん？　あぁ、いいけど、どうした？」
『ちょっと待ってね～』
なんだろう？
足音が聞こえるから、歩いてるんだろうけど。
『開けるよ～？』
『何？　どうしたの？』
『れいれいから電話が来てさ。多分沙耶香にも用あるだろうから』
『れー君から！　変わって変わって！』

『ちょっと待って～。れいれい、変わっていい？』
「あ、あぁ」
この声、沙耶香だよな？　なんで一緒にいんだ？
つーか、夏休みまで一緒にいるって仲良すぎだろ。
『あ、れー君♡？』
「あぁ、零だ。沙耶香、紗夜と一緒にいたのか？」
『うん！　お泊りしてるの♡　夏休み始まった時からずっと』
「ずっと！？」
『家だと、手伝いとかあるし、妹うるさいから』
「あぁ～なるほどな」
『そ、それで、私に用って……？』
「あぁ、それはな……」
『行く行く！　絶対行く！　れー君と旅行なんて、最高すぎる！』
「うん。じゃあ紗夜と一緒に来週の月曜日にうちに来てくれ」
『うん♡』
「それとさ、一つ聞いていいか？」
『うん、な～に？♡』
「今、どこにいる？」
『おトイレ♡』
だよなぁ！　さっきらジョロロロロロって音すんなぁって思ったんだよ！
トイレに普通に入る紗夜もだし、入れる沙耶香もすげぇな！
『れー君、私のおしっこの音で興奮してくれた？』
「あぁ。もうギンギンだよ」
『嬉し～～♡♡　あ～今すぐしゃぶりたいけど、無理だから、近くにいる奴隷にしゃぶらせてスッキリしてね♡』
「あぁ。じゃあ、また来週な」
『うん♡　楽しみにしてる♡』
『私も～♡』
そして通話を切る。

ふぅ～。
「瑠李！」
「な～に？」
部屋で準備をしている瑠李に、声をかける。
「しゃぶれ」
「は～い♡」
ベッドまで上がってきて、ノーハンドでしゃぶってくる。
「俺がもういいって言うまで、しゃぶって射精させてくれな」
「分かった♡」
俺は、瑠李にフェラさせながら、電話を続けた。
この電話の間に俺は、５発射精した。

第９７話　みんなでお泊りへ　①（後書き）

投稿が遅くなり、申し訳ございません……！

今回から【第六章】の予定だったのですが、予定を変更して【間章】をお届けさせていただきます！

なぜ【間章】にしたのかなどは、この後の活動報告で詳しく伝えさせていただきます！

この【間章】では、零を含めた１９人とお泊りに行く様子をお届けしたいと思っております！

１８人の女子に囲まれたお泊り、どうなるのか期待で胸と股間を膨らませながら待っていてください♪

第９８話　みんなでお泊りへ　②

「着いた～！」
俺達は、電車とバスを乗り継いで三時間をかけて旅館にやってきた。
ドスケベな女が１８人もいるから、移動中にエッチな事をされるかと思ったけど、みんな朝早く起きてるので睡魔が勝ち、巴と黒乃、真耶子以外全員寝ていた。
三人は寝なくてよかったのかと聞くと、朝早いのは慣れてるからと言われた。
社会人、やっぱすげぇ……働く社会人の皆さん、いつもご苦労様です！
「ってか、めちゃくちゃデカイな」
俺達がやって来た旅館は、ショッピングモールですか？　ってくらい大きくて、値段は絶対に高いだろうなと分かる。
福引きで当てたこの券がなかったら、絶対縁なかっただろうな。
「さぁ、入るわよ」
『は～い』
巴に声をかけられ、俺達は旅館の中へと入った。
ちなみに、俺の右側には雫、左側には奈央が腕に抱きついてきている。

中に入ると、巴と黒乃が代表して受付をしてくれた。
受付をしている間、俺達は近くにあるリラックスルーム的な場所に向かった。
「うわぁ～広～い！」
「鈴音、他のお客さんもいるかもしれないんだからあんまりはしゃがないの」

「でもさ、リサ～！　こんな広さの場所中々来れないじゃ～ん！」
「それはそうだけどさ～」
リサと鈴音が同級生らしく、楽しそうに話している。
「この広さ……購入した家が負けてる……零様に飽きられたらどうしよう……」
「会長、おそらくそれは大丈夫です。零様はそういうのを気にしたりする方ではないですから」
「そ、そうね……でも、今後の住宅選びの参考にしましょう」
「えぇ」
澪と恋が中を見ながら話している。あの豪邸も、十分広くて、気に入ってるよ、俺は。
そんな感じでみんな、自由にしていると、両側にくっついている雫と奈央が――、
「「ちゅっ♡」」
突然、頬にキスをしてきた。
「ど、どうした？　突然」
「零様のお顔を見てたら、我慢できなくなってしまって♡」
「零様のお顔、久しぶりに間近で見たので興奮しちゃって……♡」
「そ、そうか。でも、そういうのは部屋に行ってからな。流石にここだと、他の人の迷惑になるから」
「そんなの気にする必要あります？」
「雫、ここはリラックスルームだぞ？　何も考えずに休憩する所だ。いくらなんでもここでは駄目だ」
「ブ～。零様のいけず～」
「そういう気遣いができる零様、素敵です♡」
と、俺達がそんな会話をしていると受付を終えた巴と黒乃の二人が戻ってきた。
と、巴から驚きの驚きの言葉が飛び出してきた。
「みんな、聞いて聞いて～！」
『ん？』

「この3泊4日の間、この旅館貸し切りだって！」
『え～～～～～～～！』
おいおい、マジかよ……（↑期待に満ちている）。

♡　♡　♡

「「んぢゅ♡　ぢゅる♡」」
貸し切りだと分かってからの女子達の行動は、とても早かった。
リラックスルームで俺のズボンとパンツを脱がせ、勃起したチンコを雫と奈央が舐めてくる。
脱いだパンツは、リサと鈴音が取り合うように舐め回している。
他の女子達は全裸になり、オナニーを始めている。
なんだこのエロ空間！
「んふふ♡　零様、どうですか～♡？　気持ちいいですか～♡？」
「あぁ、気持ちいいよ」
「良かったです♡　もっとしますね～♡」
雫と奈央は、見事なコンビネーションでフェラをしてくる。
「れるれるれる……♡　じゅるるるる♡♡♡」
「じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡」
奈央が竿を舐め回し、雫が亀頭を咥えて舌で舐め回しながら顔を上下させて刺激してくる。
「くっ……二人とも、も、もう……！」
「いふれもらひへふらはい♡」
「じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぐぼっ♡」
奈央が舌をはしたなく出し、竿を舐めながら答えてくれる。
雫は、亀頭責めを激しくする事で返事をした。
「出るっ！」
ビュルッ！　ビュビュッ！！　ビュビューーー！！
「んぶっ！　んく♡　んくんく……♡」
「んふふ～♡　精液垂れて来てる～♡」

雫は精液を嬉しそうに飲み込んでいく。
奈央は、雫の口から溢れた精液を嬉しそうに舐め取っていく。
「はぁはぁ……雫、一旦離せ」
「んぱっ♡　は～い♡」
「雫は放っとくとずっと舐めてくるからな。ここで潮を吹いたらさすがに体力が保たん」
どうやら、オナニーをしていた女子達もイッたらしく、俺の元に集まってきた。
大きなおっぱいを揺らしながら。
「あ、れいれいのおちんちんギンギンになってるぅ♡」
「れー君、素敵♡」
「みんな、一旦荷物を部屋に置いて、出かけましょう」
巴がそう言ったので、みんなが不思議そうな顔をする。
「どこに出かけるんだ？」
「んふふ～♡　夏と言えば、海！　でしょ？」
『海！』
みんな嬉しそう。俺、どちらかと言うとプールの方がいいんだけどなぁ～……。

俺達は全裸のまま、部屋に荷物を持っていった。
その間に、従業員の方々（全員女）に会ったけど軽く会釈をするだけで、何も言ってこなかった。
しかも、外で出会った他の人達とは違い、何も反応せず仕事をしていた。
さすがはプロだ。素直に感心する。
「それじゃあ、海に向かいましょう。ここから近い海水浴場を教えてもらったから♡」
『は～い！』
なんか、巴がみんなのお母さんみたいになってる。
巴も楽しそうだからいいけど。

巴、黒乃、真耶子の三人が保護者として引っ張って行ってくれるのがめちゃくちゃ安心するな。
「三人とも、ありがとう」
「「「っ！」」」
「ど、どうしたの、零ちゃん？」
「零、突然どうした……？」
「れ、零様……？」
海に向かう為に外を歩いている俺達。
楽しそうに前を歩くみんなを見ながら、俺は巴達がいる後ろに下がり、そう感謝を口にした。
え、そんなに驚く？　俺、普段からお礼言ってる気がするんだけど……気がするだけ……？
「いやさ、三人とも大人だからしっかりしてみんなをまとめてくれてるでしょ？　本当は三人だって楽しみたいはずなのに。そういう事をしてくれるの、俺達からしたらすっごく助かってるからさ、しっかりお礼を伝えたいなって。だから、ありがとうね」
「れ、零ちゃん……♡」
「零……♡」
「零様……♡」
三人が抱きついてくる。
暑いんだけど……まぁ、いいか。
「海についたら、三人とも俺と一緒に来てくれ。四人でエッチしよう」
「「「いいの（んですか）？」」」
「うん。三人にご褒美をあげたいなって。嫌？」
「「「嫌な訳ない（です）！」」」
「良かった。じゃあ、みんなには俺から言っとくね」
「「「ありがとう♡」」」
「ありがとうございます♡」
俺は、みんなの元に向かい事情を説明した。

すると、みんな案外すんなりと受け入れてくれた。
うん。やっぱりみんなおんなじ事考えてたんだな。
「夜はあの三人をはぶけるからね～」
うん、全く違った。俺の関心を返してくれぇぇぇ！！！！

第９８話　みんなでお泊りへ　②（後書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！！
その分、楽しんでいただけると思いますので、お楽しみください！

海やプールは次話で描きますので、楽しみにしていてください！
次話では、初っ端からエロエロに行きたいと思っておりますので、期待していてください！
１８人とのエッチ、どうなるのか全て次話に！

第９９話　みんなでお泊りへ　③（前書き）

※本編が長くなってしまいました……！　すみません……！
少しばかり長く感じてしまうかもしれませんが、最後までお楽しみいただけますと幸いです……！

第９９話　みんなでお泊りへ　③

海に到着した俺達。
海には沢山の海水浴客がいた。その全員が女で下半身しか隠していない。
こう見ると、本当に貞操観念が逆なんだなぁと実感する。
ってか、みんなおっぱいデカイな。この世界ってマジで巨乳しかいないのかな？
「じゃあ、華。俺は」
「うん。こっちは任せておいて。三人を沢山可愛がってあげて♡」
「あぁ。じゃあ行ってくる」
「うん」
俺は、巴、黒乃、真耶子の三人を近くにあった小屋で待たせている。
そこでセックスをするのだ。
みんなの事はこの華が見てくれるらしいので、安心して三人の所に向かう。
後で華にもご褒美あげるからな。

小屋の中に入ると、すでに三人は服を脱いでいて、全裸になっていた。
ちなみに、旅館を出る前にしっかりと服は着ている。
なぜか俺だけはパンイチだけど。
「三人とも、エロくて最高だよ」
「「「えへへ……♡」」」
照れてはにかむ三人……可愛すぎかよっ！
あ～もう駄目だ。こんなの抑えられない！
「巴！　黒乃！　真耶子！」

「「「キャッ！」」」
俺は三人を四つん這いにさせ、巴の膣にチンコを。右手の中指と薬指を真耶子。左手の中指と薬指を黒乃の膣に挿れた。
「「「んんぅ〜〜〜♡♡♡♡」」」
巴のマンコはすでにグッショグショになっており、すんなりチンコを受け入れた。
締まりが凄まじく、チンコ全体をギュウギュウと締め付けてきてすぐにでも出してしまいそうだ。
黒乃のマンコもグッチョグチョで、いとも簡単に指が二本挿入った。
これなら三本挿入るんじゃ？　と思うほど。
真耶子は二人よりもグッチョグチョのグッチャングチャンで、余裕と言うより、あるべきものがそこに戻ったみたいな感じで、指を受け入れた。
真耶子は、俺の許可なしにオナニーやおしっこをしちゃいけないので、ここ最近エロい事をしてないのだろう。
「真耶子、『漏らせ』」
「んあああああああ♡♡♡」
ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡
「「ふぇ！？」」
俺の言葉を受けて、簡単に漏らした真耶子に対し、巴と黒乃が感じながらも目を見開いている。
「もっと、もっと『漏らせ』」
「んひゃあああああああああああ♡♡♡♡♡」
じょぼぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ

てる。
「「羨ましすぎる！」」
へ？　羨ましい？
「わ、私にもおんなじ事してほしいにゃん！」
「わ、私も！　零に全てを管理されたい！」
「そ、そうは言われてもな……」
俺がどうしようか迷っていると、いまだお漏らし中の真耶子が――、
「だ、駄目です……！　これは、私だけの特権……！　ようやく得た、私だけの存在証明なんですから……！」
と、涙声で言った。
ちょっと放っとき過ぎたか？　切羽詰まってる感じがしてなんかちょっと申し訳ない。
「まぁ、そうね。んっ♡　私は零ちゃんのママで性奴隷だから、それはなくてもいいかも♡　んっ♡」
「そ、そうだな。んあっ♡　姉さんの言う、んっ♡　通りだ。あっ♡　私は零のモノで彼女だから、その存在があればそれでいい♡ああ♡」
「お二人とも……んあっ♡　寛大なご理解、感謝します……！　あああんっ♡」
うんうん。なんか分かりあえたみたいで良かった。
ほんじゃ、本格的に行くぜ！
「「「ああああああああ♡♡♡」」」
俺は、腰を激しく打ち付け、手マンをものすごく速くした。
三人のマンコから、グチャグチャ♡　ピチャピチャ♡　バチュバチュ♡　と言うエロい音が鳴って、小屋の中に響いている。
「「「ああああああ♡♡♡　も、もう、イッちゃうぅぅ♡♡♡」」」
「いいぞ！　イケ！　俺も出すからな！」
「「「ああああああああああああああ♡♡♡」」」
腰と手にラストスパートをかける。

そして――、
「「「「イックぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」」」」
「出るっ！」
ビュルッ！！　ビュビューーーーーー！！！　ビューーーーーーー！！！！
三人はイッた。俺も巴に中出しをした。
「ふぅ……」
「「「「っ……♡　っ……♡」」」」
チンコを抜いた後、三人はその場にへたり込み、ビクビクと体を震わせた。
「おい、真耶子」
「ふぇ……？　んっ♡　イック……♡♡♡」
「「すっご……」」
俺は、真耶子の顔の前にチンコを持っていく。
すると、チンコを見た真耶子はそれだけでイッてしまった。更に、鼻に近づけて臭いを嗅がせるとまたイッた。
「舐めろ」
「っっっ……♡♡♡　ひゃ、ひゃい……♡　れる♡　イック♡」
精液まみれとなったチンコを舐めさせると、一舐めしただけで真耶子はイッた。
それでも俺の命令にしたがってチンコを舐め続ける。その度に真耶子はイキまくる。
見るだけでイッて、臭いを嗅ぐだけでイッて、舐めるだけでイク。
この三連コンボで、真耶子は休むことなくイキ続けている。
さらには――、
「出すぞ！　全部飲め！」
「ぶぁい……♡（あ、イック♡）」
ビュルルルルルルルルル！！！！
「んぶぅ！　ごくごくごく……♡♡♡（イック……♡　イック……♡）」

真耶子は、精液を口に出されるだけでイク。飲み込むだけでイク。
つまり、何をしてもイクのだ。
「こ、これ、イキ過ぎて死んじゃうんじゃ……」
「うん……だが、零にイカされまくって死ねるのは、幸せだな」
う～ん……俺もさ、イカせ過ぎかなとは思ったんだよ？　でも、真耶子もそれを望んでくれたし、何よりエロいし楽しいし。
だから、いっかなって。
「ほら、精液飲みながら『漏らせ』」
「んん～～～～～♡♡♡」
ぶじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡
「「本当にすごい……♡」」
「そら、次は二人をイカせまくるからな」
「「は、はい……♡♡♡」」
「よ、よろしくお願いします、にゃん♡」
「主、お願いします♡」
「あぁ」
この後、俺は数時間に渡って三人をイカせまくった。
巴に１１発の中出し。黒乃に１０発の中出し。真耶子に１０発の中出しをした。
もちろん、体にもぶっかけたから、三人とも全身精液まみれになった。
「「「しゃいこうのご褒美れひた～～～～♡♡♡」」」

♡　♡　♡

動けなくなった三人を小屋に置いたまま、俺はみんなの元に向かう事にした。
小屋を出て、歩き出した瞬間――、
「うぉ！？」
突如、小屋の影から誰かに腕を引っ張られた。

「な、何！？　って、華！」
「えへへ♡」
そこにいたのは華だった。Hカップのおっぱいを揺らしながら華は足をもじもじさせている。
「どうした？」
「あ、あの、ね……みんなの所に戻る前に、わ、私を犯してほしいなぁって……だ、駄目かな……？」
上目遣いで願ってくる華。こんなの、反則だろ……！
「華……！」
「キャッ！　んっ♡」
俺は華を壁に押し付けてキスをする。
「んっ♡　んむ♡　ちゅる♡　ちゅむ♡　んらっ♡」
俺はキスをしながら、華のマンコを触る。
水着の中に手を突っ込み、クリを擦りながらマンコを弄る。
「んんっ♡　んむぅ♡　んんぅ♡」
すでにマンコはグチョグチョで、ちょっと擦るだけでグチャグチャ♡　ヌチャヌチャ♡　という、いやらしい音が鳴る。
「んんぅ♡　んんっ♡　んんぅぅ♡♡♡」
キスをしながらのクリマン擦りで、華はイッたらしく荒い鼻息が俺の鼻に当たってくる。
「んんっ♡　んんぅ……♡」
一旦口を離すと、二人の間に唾液の糸がかかった。
「はぁはぁ……♡　れ、零ちゃぁ～ん♡　気持ちよすぎるよぉ～♡♡♡」
「手だけで満足か？　犯さなくていいの？」
「ううん！　やっ！　零ちゃんの凶暴おちんちんで、私のオマンコ穿ってパンパンめちゃくちゃに犯してほしいのぉ！　私を壊してほしいのぉ！」
「分かった分かった。してやるから壁に手ついて、ケツこっち向けて」

「うんっ♡」
華は嬉しそうに壁に手をついて、ケツをこっちに向けてくる。そして、水着のクロッチ部分をずらしてマンコを見せてくる。
「挿(い)れて♡　挿(い)れて♡」
右手を壁について、左手でクロッチをずらしながらケツをフリフリして誘ってくる。
こんなの我慢できねぇ！
「華！」
「あぁああんっ♡♡♡」
俺は、華のマンコの奥まで一気にチンコをぶち込んだ。
「んきゅぅぅぅぅ♡♡♡　一気に子宮口まで届いて、もうイックぅぅ♡♡♡♡♡」
華は挿(い)れただけでイッたらしく、全身をビクビク震わせた。
それにより、膣(なか)の締まりもキツくなり、チンコをギュウギュウ締め付けてくる。
「くっ、キツ……出るっ！」
ビュルッ！！！　ビュルルルルルル！！！！
「んあああああああ♡♡♡　射精来たぁぁぁぁ♡♡♡　子宮にビシャビシャかかってるぅぅ♡♡♡」
「ごめん……気持ちよすぎて我慢できなかった……」
「いいのぉ♡　いいんだよぉ♡　私の事いっぱい犯しながら好きなだけ中出ししてぇぇ♡♡♡　私の子宮を零ちゃんの精液で満タンにしてぇぇ♡♡♡」
「分かった！　大量に注いで、お腹重くて動けないくらいにしてやる！」
「うんっ♡　してぇぇ♡♡♡」
俺はこの後、華を犯しに犯しまくり、中出しを１０発した。
華のお腹は少しだけぽっこりとした。
♡　♡　♡

華を犯した後、海で遊んでいるみんなの元に戻ると、そこにはオナニーをしているみんながいた。
「なに？　この状況」
「あ～♡　お兄ちゃんおかえりにゃしゃ～い♡」
「お、おう。なんでみんなでオナってんだ？　おっ！」
燐に聞いてみると、後ろから誰かに抱きつかれた。
後ろを見てみると、そこには桃がいた。
「兄様がぁ♡　全然戻って来ないからぁ♡　みんなでオナニーをしてたんですぅ♡」
「桃、お前なんかキャラおかしくないか？」
「しょんなころないれふよ～♡」
「桃、何回イッた？」
「ん～？　十回以上～？」
なるほど。みんなイキ過ぎておかしくなってるって訳ね。
「じゃあ、オナニーで満足できるなら俺のチンコはいらないか～」
俺がそう言うと――、
『それは駄目ぇぇぇぇ！！！！！！』
「うぉ！？　びっくりしたぁ」
１４人が声を揃えて叫んできた。
ほらぁ、声大っきいから周りの人達ビックリしちゃってるじゃん。
すんません。お騒がせしております。
「駄目って、何が？　ユイ、言ってみろ」
「れ、零様のおちんちん様は、いらなくない、んです……♡」
ユイもすっかり蕩けきってるな。
「よし。よく言えたな。じゃあ、みんな！　俺のチンコが欲しいならどうすればいいのか分かるよな？」
『はい♡』
俺がそう言うと、１４人全員が水着を脱いで全裸になった。
そして、俺を囲むように円形に四つん這いになり並んで、ケツを

持ち上げる。
『お好きな膣を、お使いください♡♡♡』
と、俺を誘惑してきた。
１４のマンコ……！　どこを見てもマンコマンコマンコ！
こんなの、最高過ぎるだろぉ！
「行くぞ！　オラァ！」
「んひゃいぃ♡♡♡」
俺はまず、雫に挿れた。その左にいる奈央と右にいる澪の二人に手マンをする。
「「んあああああ♡♡♡」」
三人のマンコは、オナニーをしていた事もあり、グッチョグチョで膣がキッツキツだった。
それもあり、雫に向かって腰を振る度、射精しそうになってしまう。
「雫ごめん！　もう出るっ！」
「はいぃ♡　出してくださいぃぃ♡♡♡」
「出るっ！」
ビュビュッ！！！　ビュルルルルルル！！！！！
「んあああああああ♡♡♡　零様の精液来たぁぁ♡♡♡」
「このまま間髪入れずに！」
「んらあああああああああああ♡♡♡」
左隣にいる奈央に射精中のチンコをぶち込む。
射精中に引き抜いたので、二人の足やケツに精液がかかっていく。が、そんな事は気にしない。
「んあああああ♡♡♡　中出しされながら犯されてるぅぅぅ♡♡♡♡♡　これヤバイぃぃぃ♡♡♡♡」
「奈央、俺は奈央のなんだ？」
「ぱ、パパですぅぅぅぅぅ♡♡♡」
あれ？　みんなもっと驚くと思ったのに、対して驚いてなさそう。もしかして、情報共有してるのかな？

だとしたら、その方がありがたい。
「奈央！　パパにどうして欲しい！」
「にゃかにぃぃ♡♡♡　にゃかに出してほしいのぉぉ♡♡♡　パパぁぁぁぁぁぁ♡♡♡」
「お望み通りに出してやる！」
ドビュルルルルルルルルル！！！！
「んひゃあああああああ♡♡♡　パパの精子来たぁぁぁぁぁぁ♡♡♡　嬉しいぃぃぃぃぃ♡♡♡」
さらに俺は間髪入れずに！
「んんっ、あああああああああ♡♡♡」
奈央の隣にいる瑠李に、射精中のチンコをぶち込んだ。
「れ、零くぅぅぅんっ♡♡♡♡♡」
「ほらブタぁ！　もっとマンコ締めろぉ！　精液膣にほしいんだろう！」
「は、はいぃ♡♡♡」
「何人語喋ってんだ！　お前はブタだろぉ！」
「ぶ、ブヒィィィ♡♡♡　ブヒブヒ、ブヒィィィ♡♡♡」
瑠李は、ブタの鳴き声で鳴いた。
そして、それと同時に膣がキツく締まってくる。
「そらご褒美だ！　大量に中出ししてやるぅ！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
「ブヒィィィィィィィィィィ♡♡♡♡♡」
瑠李に中出しした俺は、射精中のチンコを引き抜き精液を瑠李の体に撒き散らしながら――、
「おおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡」
瑠李の隣にいた醍醐の膣にぶち込んだ。
「れ、零様のチンポ様久々過ぎてヤバイぃぃぃ♡♡♡♡♡　膣でチンポ様ビクビクして精液吐き出してるのぉ♡♡♡」
醍醐の膣で俺は射精しながら、腰を振り続ける。
その間も、俺は醍醐の隣にいる瑠李、そしてユイに手マンをする。

イッたばかりの瑠李は、地面に上半身を突っ伏しながらケツを高く突き上げてイキまくっている。
「そら、醍醐！　性奴隷ペットのお前に中出ししてやるからな！」
「あ〝り〝がどうござい〝ま〝ずぅ〝ぅ〝ぅ〝ぅ〝♡♡♡♡」
「出るっ！」
ビュルッ！！！　ビュビューーーーーーー！！！！！
「ん〝あ〝♡♡♡♡♡　零しゃまの精液がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡♡♡　来たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡♡♡」
醍醐に中出ししたまま俺はチンコを引き抜き、隣のユイにチンコをぶち込む。
「んんぅぅぅぅ♡♡♡　れ、零様のおちんちん様ぁぁ♡♡♡」
俺はユイを犯しながら、醍醐とリサに手マンする。
「ユイ！　もっと自分で腰振ってみろ！」
「は、はいぃぃぃ♡♡♡　振らせていただきますぅぅ♡♡♡♡」
俺は腰を振るのを一旦やめ、ユイに腰を振らせる。
ユイは、腰を前後させていく。
その度、バッチュン♡　バッチュン♡　といういやらしい音が鳴り響く。
あ〜これ気持ちよすぎるわ。これマジで俺が動かなくても出せるかも！
「ユイ、もっと激しくしろ！」
「は、はいぃぃぃぃぃ♡♡♡」
ユイは激しく腰を動かす。
すっご。これマジでやばいわ。
「出るっ！」
ドビュルルルルルルルルル！！！！！！！
「んあああああああ

ユイの膣(なか)に大量に射精した。
そしてそのまま、隣のリサにぶち込んだ。
「んんぅぅぅあああああああ♡♡♡♡♡」
「リサ！　どうして欲しい？」
「先輩のおちんちんでオマンコめちゃくちゃにして、大量に子宮に射精してほしいですぅぅ♡♡♡♡♡♡」
「了解！　じゃあめちゃくちゃに犯してやる！」
俺はリサを犯しながら、ユイと愛莉に手マンをする。
「んおおおおおおお♡♡♡♡　あああああああああ♡♡♡♡」
「そろそろ出すぞ！」
「はいぃぃぃ♡♡♡」
「出るっ！」
ビュルッ！！！！！　ビュビュッビューーーーーー！！！！！！
「中出し来たぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　大好きな先輩の精液がぁぁ♡♡♡　子宮にビシャビシャかかってるぅぅ♡♡♡♡」
リサに中出しをした俺は、射精をしたまま隣の愛莉にぶち込む。
「零様ぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡♡」
「愛莉！　ぶち犯すからな！」
「はいぃぃぃぃ♡♡♡　いっぱい犯してくださいぃぃぃぃぃぃ♡♡♡♡♡」
俺は愛莉を犯しながら、リサと鈴音に手マンをする。
「くっ……！　もう出すぞ！」
「ひゃいぃぃぃぃぃ♡♡♡♡　らひへくらはいぃぃぃぃぃ♡♡♡♡♡」
「出るっ！」
ビュビュビューーーーーーーーーーーー！！！！！！！
「んひゃあああああああああああああ♡♡♡♡♡　零様の精液来たぁぁぁぁぁ♡♡♡♡」
「そらっ！」
「んあああああああああああああああああああ♡♡♡♡」

俺は射精中のチンコを引き抜き、隣の鈴音にぶち込んだ。
そして、愛莉と紗夜に手マンをする。
「おらイヌ！　鳴け！　鳴け！　鳴いて精液を搾り取れ！」
「ワァァァァンッ♡♡♡　ワンッ♡　ワン♡　ワァァァァンッ♡♡♡♡♡♡」
「よし、出すぞ！」
「ワンッ♡」
「出るっ！」
ドビュルルルルルルルルル！！！！！！！！
「ワァァァァァァァァァァンッッッ♡♡♡♡」
「はぁはぁ……まだまだぁ！」
「れいれいのおちんちん来たぁぁぁぁ♡♡♡♡　ずっと待ってたぁぁぁぁ♡♡♡♡♡」
「待たせて悪かったな！　その分大量に注いでやるからな！」
「嬉しいいいいい♡♡♡♡　たっぷり注いでぇぇぇぇ♡♡♡♡♡」
俺は紗夜を犯しながら、鈴音と沙耶香に手マンをする。
「あああああああああああ♡♡♡♡　れいれいいぃ♡♡♡♡精液頂戴ぃぃぃぃぃぃぃぃ♡♡♡♡♡」
「出るっ！」
ビュビュッ！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！
「れいれいの精液ぃぃぃぃ♡♡♡♡♡　子宮にビシャビシャかかって最高ぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡」
俺は紗夜に中出ししながら、隣にいる沙耶香のマンコにぶち込む。
「あはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　れー君のおちんちん来たぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　気持ちいいいいいいいぃ♡♡♡♡♡」
「待たせて悪かったな！　犯しまくって大量に注いでやるからな！」
「うん♡　うん♡　うん♡　お願いいいいぃ♡♡♡♡　いっぱい注いでぇぇぇぇ♡♡♡♡♡」
沙耶香を犯しながら、紗夜と燐に手マンする。

「出るっ！」
ビュビュビューーーーーーーーー！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！
「んらあああああああああああああ♡♡♡♡　中出ししゃいこうおおおおおおお♡♡♡♡♡♡」
そして俺は……言わずもがな燐（りん）にぶち込んだ。
「んひゃあああああああ♡♡♡♡　お兄ちゃんのおちんちん来たぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　待ってたのぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡♡」
俺は燐を犯しながら、沙耶香と桃に手マンする。
「燐、どのくらいの激しさがいい？」
「オマンコ壊れるくらいがいいですぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
「分かった！　ぶっ壊れるくらい犯してやるからな！」
「お願いしますぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」
「出すぞ！」
「はいいいぃ♡♡♡♡」
「出るっ！」
ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！

「出すぞ！」
「出してくらはいいい

「モオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ♡♡♡

「なぁ、みんな。ちょっと聞いてほしい事があるんだけど」
『ん？』
俺がそう言うと、みんながリビングに集結した。
それぞれが思い思いに座っていく。
みんなが座った後、俺はソファに座り口を開いた。
「実はさ、少しの間家を留守にしようかと思って」
俺がそう言った後、しばらくして――、
『え！』
と、見事に綺麗に揃った声が上がった。
「る、るるるるるるるるるる留守にするってどうしたの！？」
「兄さん！？　一体何が！？」
「零ちゃん！？　何か嫌な事でもあったの！？」
「先輩！？　ストレスが溜まっているならこの女を使っていいんですよ！？」
「落ち着け落ち着け。別に何かあったわけじゃない」
『じゃあ、どうして……』
めちゃくちゃ落ち込んでる。悪いな。もう決めたことなんだ。
「俺、もっと性奴隷を増やしたいんだ。もちろん、みんなの事は大事だし大好きだよ。でも、もっと外の女を見てみてもいいかなって思ったんだ。自分勝手な事を言ってるのは分かってる。でも、どうしてもやってみたいんだ。だから、しばらく家を留守にする事を、許してください……！」
俺は頭を下げる。
『……』
あ～この沈黙が辛い……。
やっぱみんなからしたら嫌だよな……ただでさえ多いのに、もっと性奴隷を増やしたいなんて……。
『な～んだ！』
「え……？」
なんでみんな笑顔で、ホッとしてんだ？

「性奴隷を増やしたかっただけか～！」
「良かったよ～！」
「私達、嫌われたかと思ったじゃないですか～！」
「お、怒ってないの……？」
「な～んで怒る必要があるの？」
「華……だって、みんながいるのに、さらに性奴隷を増やしたいなんて……それも外の女達を……」
「そんなの全然大丈夫だよ～！　零君は、この世の女を性奴隷にするべき人なんだから」
「そうですよ、零様」
「愛莉……」
「私達は運よく同じ学校だったので、こうして出会えて性奴隷にしていただけました。ですが、他の女達が零様に出会う機会さえない」
「その機会を、先輩が直々に作ってくれるんですから、女達は狂喜乱舞ですよ」
「皆様、零様がいずれ言い出すだろうと考えていたようで、前々から色々と準備されていたらしいですよ」
「そうなのか？」
「はい。その証拠にまず、奈央様」
「うん！　パパ、これ！」
「これは……」
「私のいとこの連絡先と住所。あの子、パパに会いたいって前に言ってたから。もしよかったら、一番最初はこの子にしてくれる？」
「みんな……本当にいいのか……？」
『うん！（もちろん！　当然！　はい！）』
「みんな……！」
なんでだろう……勝手に涙が出てくる……！
「さて、じゃあそうと決まったら色々と準備しなきゃね！」
巴がそう言うと、みんなが色々と準備してくれた。
リュックに、媚薬だったり媚薬だったり媚薬だったり玩具だった

りＳＭプレイようの道具だったり……媚薬多くね？
「みんな、ありがとう。明日出発するから、今日はみんなで大乱交しよう！」
『は～～～い♡♡♡♡♡』
俺は、性奴隷増量の旅出発前夜、１８人とセックスしまくった。
総射精数：５０発。

♡　♡　♡

出発の日の朝。
昨日、ヤりまくったせいでみんな爆睡。
俺はシャワーを浴びた後、こっそり玄関に向かった。
と――、
「何も言わずに行くのは寂しいなぁ」
「っ、巴、黒乃」
巴と黒乃が、全裸のまま見送りに来てくれた。
「起こしちゃった？」
「ううん。零ちゃんの気配を感じたの。ていうか、こっそり行かないで起こしてよぉ」
頬を膨らませる巴。うん、可愛い。
「零」
「ん？」
「この世界は、零が元いた世界じゃない。零の思うまま、したいまま、やりたいまま、本能のままに行動していい。何にも気を遣ったり気にしたりする必要はないからな」
「そそ。我慢なんて一切せずに、いいなと思った女、片っ端から犯しまくっちゃえ♪」
俺の事情を知ってる二人だからこそ、言える事だよな。
「うん。分かった。本能のままにやってくるよ」
「「うん」」

「二人とも」
「「ん？」」
「ハグして、いい？」
「「いいよ♡」」
「ありがとう」
俺は二人とハグをする。
ヤバイ……泣きそうだわ……。
思えば、この世界に来てからみんなと離れて、知らない人の中に向かうのって初めてだよな……。
今までは瑠李がいて、華や燐、桃がいて……。
巴や黒乃は俺の過去を知って、リサや鈴音って言う健気な後輩もできて、ユイと言う超優秀なメイドができて、愛莉や紗夜、沙耶香のような素敵な彼女、真耶子のような弄りがいのある担任がいて、澪や恋っていう専用の便器もできた。醍醐のようなサンドバックだってできた。
本来はそれだけで満足するべきなんだ。
なのに、俺はさらに欲を出した。それを、一切怒ったりせず、むしろ後押ししてくれた。
なんて嬉しいんだ。
「俺、この世界に転生できて、良かったよ……！」
「「転生して来てくれて、ありがとう。零」」
二人とキスをする。
旅が終わるまでできないから、一応これが二人と最後のキス。
「じゃあ、行ってきます」
「「行ってらっしゃい！」」
二人の瞳には涙が浮かんでるように見えた。
でも、ここで振り返ってたら進めない。
だから俺は、玄関を開けて外に出た。
ガチャンと玄関のドアが閉まる音がする。
「よし！　行くぞ！」

ここから、俺の性奴隷を増やす日々が始まる。

『これで、　”第二段階”　終了。んふふ♪　順調順調♪』

第９９話　みんなでお泊りへ　③（後書き）

皆様！　ご安心ください！　この作品はまだ終わりません！
次話から【第六章】がスタートします！
次話から、新ヒロイン達が続々登場いたします！
どんなエッチな女の子達が登場するのか、楽しみにしていてください！

第１００話　新たな出会い♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

『零様、私達に貴方様の貴重なるお情けをくださいませんでしょうか♡』

この感じ……これ、夢だな……。

久しぶりだな、夢を見るの……。

ていうか、この人達誰だ？　学校の女子じゃない……。

しかも、全員が全裸で三つ指をついて性奴隷にさせてくださいって頼んできてる……。

てか、ここどこだ……？　俺の家……じゃないし……。

あれだ、澪が買ったっていう豪邸だ。

内装を見せてもらった時にあった、来客用の部屋だ。

その部屋に……何人だ？　結構な数いるよな……十人以上はいる。

全員巨乳か爆乳で、巨尻。めちゃくちゃエロい女ばっかりだ。

『零様のお精子、私達の全部にください♡♡♡♡♡』

全員が俺の射精を受け止めてくれる。

顔で、口で、体で、おっぱいで、オマンコで、本当に全身で。

これって、予知夢だよな……。こんなに沢山の女とエッチできるのか……最高だな！

それはそうと、これ、目が覚めたらヤバイやつだな。

俺はゆっくりと、意識を覚醒させていった。

第１００話　新たな出会い♡♡♡♡♡♡

「ん……？　ここは……」
目を覚ますと、そこは知らない天井だった。
体を起こし辺りを見回す。そこで思い出した。
「そうだった。俺、ホテルにいるんだ」
俺は今、ビジネスホテルにいた。
家を出て、奈央のいとこに会いに行く為に行動を開始したんだけど……。
「まさか大阪にいるとは……」
神奈川から大阪って結構遠いのな。
バスで移動したけど、大阪着いたの夜だからな。
そこからホテル探して、とりあえず泊まったんだ。
「んで、俺は性奴隷を増やす為にみんなの所を離れたんだよな。だから、あの夢は本当に予知夢なんだな。ん？　夢……？　はっ！？」
俺は、なんで家を出たのか、なんでいとこに会いに行くのかを考えていたが、予知夢を見た事を思い出し、布団を剥ぎズボンとパンツを持ち上げ股間を見た。
「あぁ～やっぱりな～……」
俺は夢精をしていた。
「とりあえず、洗うか」
俺はベッドから降り、洗面所へ向かった。
夢精したパンツを洗うために。

パンツを洗いながら俺は思い出していた。
「そういや、燐に夢精パンツ洗ってもらった事あったなぁ～。なんかそれも懐かしく感じるわ」

俺はパンツを洗い終え、シャワーを浴びて身支度を整え、ホテルを出た。
「さて、行きますか！」
そして、奈央のいとこの所に向かった。

♡　♡　♡

「ここ、だよな？」
昼間。俺は奈央にもらった住所の場所にやってきた。
事前連絡はしてあるので、インターホンを鳴らせばいいんだけど……。
「人ん家のチャイムを鳴らすのって緊張する……これって俺だけ……？」
家の前でいつまでもぐだぐだしてたって駄目だ。
よし！

ピンポーン！

俺はインターホンを鳴らした。
すると、家の中からドタドタと音がして、その後すぐに玄関が開いた。
「零様ですか！」
「は、はい……そうです……」
出てきたのは、上半身裸でパンイチの女子。
奈央のいとこである『小鳥遊（たかなし）　栞（しおり）』だった。
小鳥遊　栞のおっぱいは、奈央に聞いた話だとGカップで、半球形。乳首が立ちやすいらしくかなりの感度を誇っているらしい。
「初めてまして！　奈央のいとこの小鳥遊　栞です！　Gカップです！　オナニーは毎日しています！　乳首とアナルが性感帯です！　よろしくお願いします！」

と、元気よく挨拶をしてくれる小鳥遊さん。
お辞儀をした際、大きなおっぱいがプルンプルン揺れてめちゃくちゃエロい。
やべ……丸一日セックスしてないから、めっちゃムラムラしてきた……夢精したから余計に性欲がヤバイ……。
「あ、すみません！　どうぞ、中に入ってください！」
「あ、あぁ……ありがとう」
俺は家に入った。
前を歩く小鳥遊さん。あ～ケツエロいな～……。
犯してぇ……！
「飲み物はお茶で大丈夫ですか？」
「え？　あ、あぁ」
小鳥遊さんは、キッチンの方に向かいお茶を入れ始めた。
ヤバイ……フル勃起しちまった……。
「お待たせしました～っとととうわぁ！？」
小鳥遊さんは、トレイにコップを乗せて運んできたけど、椅子の足に引っかかり、ド派手に転んでしまっった。
当然の事ながらコップに入ったお茶はこぼれた。
そう。俺のフル勃起中の股間に。
「わぁ～～～～～！？　ご、ごごごごごごめんなさいぃぃぃ！？　い、今拭きますから……あ……♡」
俺の股間を間近で見た小鳥遊さんは、俺がフル勃起している事に気がついた。
「すっごく、大きくなってますね……♡　ズボンを突き破っちゃいそうなくらい……♡」
どうする……？　俺はどうすればいい……？
そこで、俺は巴と黒乃の言葉を思い出した。
そうだ。俺は我慢しなくていいんだ。好き勝手にやっていいんだ。
だから、この目の前で勃起チンコをガン見してる女を犯しまくってもいいんだ！

「おい」
「は、はい……？」
俺はズボンとパンツを脱ぐ。
「ふわぁ……♡」
生の勃起チンコを見たのが初めてなのだろう。小鳥遊さんは鼻息を荒くしながら、勃起チンコを見つめていた。
「口、開けろ」
「え……？　んぶぉぉ！？」
俺は、小さく開いた小鳥遊さんの口にチンコをぶち込んだ。
フェラをするのも初めてだろうが、俺は一切容赦はしない。今日はフェラじゃなくてイラマの気分だからだ！
「んぶぅ！？　ぐぶぅ！？　ぎゅぶぅ！？　ぶぶぅ！？」
俺は、小鳥遊さんの頭を掴み、前後に激しく揺らしていく。
俺は今腰を動かせないので、小鳥遊さんを動かしている。
これ、フェラ用のオナホみたい。めっちゃ気持ちいい！
「ぐぶぅ！？　じゅぶぅ！？　ぶぶぅ！？　がっ……！？」
俺は、一旦頭を揺らすのを止めた。
しかし、俺が止めた位置は小鳥遊さんにとって最も苦しい所。
喉奥にチンコを押し込んだ状態で動きを止めた。
「えぐっ……！？　ぐぶっ！？　ぶっ！？」
喉奥に突っ込まれているので、さっきからずっとえづいている。
よく、ＡＶとかだとここで一旦チンコを離させ、ネバネバの唾液を垂らさせるんだけど、俺はそんな優しい事はしない！（初対面なのにごめんね！）
「えぐぅ！？　ぶぶぅ！？　ぶごぉ！？」
俺は数十秒止めていた頭を、再び激しく前後に揺らし始める。
流石に苦しいのか、小鳥遊さんは俺の股関節部分を何度もパチパチと叩いてきている。
しかし、その行動が俺の性欲をかきたてる！
苦しそうにする女子、最高！

「ぎゅぶぅ！？　ぶごぉ！？　ぐごぉ！？」
俺はそろそろイきそうになってきたので、ラストスパートをかけた。
今まで以上に激しく頭を揺らし、喉奥を犯しまくる。
小鳥遊さんの口からは大量の唾液が溢れている。なんなら泡立っている。
そんなマンコみたいにぐちょぐちょになった口に――、
「出るっ！」
ドビュルッ！　ドビュッ！　ビュビューーーーーー！！
「んぶぅぅぅ！？」
中出しをした。
射精する時に、再び頭の動きを止め喉奥にチンコを当てて直接精液を送り込んだ。
単に口に出されるのとは訳が違う、この中出し。
亀頭が喉奥にピッタリ当たっている状態で、精液が喉に直接注がれる。
そんな事をすれば当然の――、
「ぐぶっ！？　ぶぐっ！？　ぐふっ！？」
むせてえづいて、鼻や口端から精液が溢れ出てくる。
しかし、俺は射精を続ける。小鳥遊さんの喉奥に精液を注ぎ込んでやる。
全部注いでやろうかと思ったけど、この子の顔を見てたら顔射をしたくなったので、射精中のチンコを引き抜いた。
「ぶはっ！？　がはっ！？　はぁはぁ……！？」
呼吸を乱す小鳥遊さんの顔面に、俺は大量に射精をする。
口を開けて呼吸しているので、口からは精液が溢れている。さらには鼻からも溢れているので、床は精液まみれ。
さらに、俺が顔射をしているので、その精液が口や鼻に入り、小鳥遊さんは思うように呼吸を整えられない。
「ふぅ～」

射精を終えた俺は、ソファの背もたれに寄りかかる。
前にいる小鳥遊さんを見ると、蕩けきった顔をしながら、顔についた精液を顔全体に塗り込んでいる。
さらには、鼻から出た精液をすする事で飲み込んでいる。
「すんげぇ光景」
これまでみんなと色んなプレイをしてきたけど、ここまでのは久々だった。
だから、めちゃくちゃ興奮する。
「俺の精液、どうだった？」
「しゃ、しゃいこうれふ～……♡♡♡♡」
そう言いながら近づいてきて、精液でベトベトのチンコに頬ずりをしてきた。
「これが……♡　これがオチンポ様……♡♡♡　素敵♡　最高……♡　神……♡　もっと、もっとわらひにオチンポ様とザーメンをくださいぃ～……♡♡♡」
この女、エロすぎる！
「俺のチンコと精液、どこに欲しい？」
「お、オマンコに欲しいですっ♡　オマンコの中にオチンポ様ぶち込んで、子宮の奥の奥にザーメン注いで欲しいですぅ♡　孕ませて欲しいですぅ♡」
「よし。分かった。じゃあ、今からお前をぶち犯してやるからパンツを脱いでケツをこっちに向けろ」
「は、はい……♡♡♡」
小鳥遊さんは、俺に言われた通りにパンツを脱いで、四つん這いになりケツをこっちに向けてくる。
そして、そのケツをフリフリ振って誘惑してくる。
「零様のオチンポ様で、私のオマンコをぶっ壊してください……♡♡」
「あぁ。望み通りにしてやる！」

第１００話　新たな出会い♡♡♡♡♡♡（後書き）

新章がスタートいたしました！
この新章から、新たな女子達が沢山登場いたします！
一人目の女子のお名前をご覧になって気が付かれたかと思いますが、過去に皆様からいただいたお名前を付けさせていただいております！
これから登場する女子達のお名前は、皆様からいただいた素敵なお名前を付けさせていただいておりますので、その辺も含めてお楽しみいただけますと幸いです！

第１０１話　親公認の性奴隷♡♡♡♡♡♡

「零様ぁ♡」
「そんじゃ、行くぞ！」
「はいぃ♡♡♡」
俺は、四つん這いになった小鳥遊さんのケツを掴み、思い切り拡げる。
そして、丸見えになったマンコにチンコをぶち込んだ。
「んんぅあああああああああああ♡♡♡♡♡♡」
小鳥遊さんの膣（なか）は、とんでもなくキツくて、チンコ全体を折れるんじゃないかってくらい圧迫してくる。
少し腰を動かすと、高速手コキしてるかのような刺激が襲ってきて、少し腰を動かしただけなのにすぐにイッてしまいそうだった。
「マンコキツ過ぎだろ……！」
「す、すみませんぅぅぅ♡♡♡　玩具でオナニーしてる時、玩具が壊れた事があるくらい、私のオマンコ、キツキツなんですぅぅ♡♡♡」
マジかよ！？　え、じゃあ俺のチンコ壊れるの？
え？　困るんだけど……。
『大丈夫よ。人の性器はそんな簡単に壊れないし、それにあなたのおちんちんは、何があっても壊れないようにしてあるから』
またこの声だ。一体誰なんだろうな……？
でもまぁいいや。壊れないって言うんなら、安心して目の前の女を犯せる！
「んおおお

ーメン、私の子宮にたっぷり注いでくださいいぃぃ♡♡♡　私を孕ませてぇぇぇ♡♡♡」
「じゃあ、お望み通り、にっ！！！」
「んおおおおおおおおあああああああああ♡♡♡♡♡♡♡」
俺は腰振りをめちゃくちゃ激しくする。
小鳥遊さんのケツと俺の股関節が当たってパンパンと乾いた音が鳴り、さらにそこに小鳥遊さんの愛液の音が混じり、とんでもなく興奮する音が部屋中に鳴り響く。
「出すぞ！」
「はいぃぃぃぃ♡♡♡　零様の子供、私にくださいぃぃぃぃ♡♡♡♡♡」
「出るっ！」
ドビューーーーーーーーーーー！！！　ビュビューーーーーーー！！！　ビュルッ！！！　ビュビュ！！！
「んおおおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡　熱いのがオマンコに注がれてるぅぅぅ♡♡♡♡　子宮に濃いの入ってくるのが分かるぅぅぅ♡♡♡♡♡♡　こ、こんなの、注がれただけでイックぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡♡♡」
小鳥遊さんは、中出しされてイッた。
床に上半身を突っ伏して、全身をビクビクさせている。
マジでエグいわ、このマンコ……チンコ抜けるかと思った……。
でも、まだシ足りない！
「ほら、何休んでんだ！　まだまだセックスは始まったばっかりだぞ！」
「ひゃ、ひゃいぃぃぃぃ……♡♡♡」
俺は力が入らなくなってる小鳥遊さんを、犯しまくる。

♡　♡　♡

二時間が経過した。

「うっ♡　うっ♡　うっ♡　うっ♡　うっ♡」
俺はずっと小鳥遊さんを犯しまくっていた。
二時間もの間、ずっと。
中出しはすでに数え切れないくらいしていて、マンコの中は愛液と本気汁と精液でグッチョグチョになっていた。
小鳥遊さんは、もうすでに言葉が出せないほどになっており、さっきから「うっ♡」としか喘がなくなった。
今は立ちバックで犯している。
と、そんな時、玄関から音が聞こえてきた。
「え？」
動きを止める俺。すると――、
「ただいま～。栞～？」
と、女性の声が聞こえてきた。
え……！？　こ、これどうすんの！？
「た、小鳥遊さん！　誰か来たんだけど！？」
「うっ♡　う～～……♡」
駄目だ！　放心状態だから反応がない！
と、俺が焦っていると、声の正体が姿を現した。
「あ、栞ここにいたの。あら」
「あ、ど、ども……」
やべぇ……この人って絶対小鳥遊さんの家族だよな……こんな所見られたら、流石にやべぇよな……。
「もしかして、あなたが零様、ですか？」
「ふぇ！？　は、はい、そうです……！」
「あ～！　こんな遠い所まで足を運んでくださって本当にありがとうございます！　本来であれば栞が向かわなければならないのに」
「い、いえ……全然。僕も旅感覚で楽しめたので……」
「まぁ、本当にお優しいんですね♪　あ、私は栞の母です。どうぞよろしくね」

「お、お母様！？　てっきりお姉さんかと……」
「まぁ♡　嬉しい事を言ってくださいますね♡　さすがは奈央ちゃんが惚れた男性ですね♪」
「あ、あの……」
「あ！　すみません！　お楽しみの途中でしたよね！　私の事は気にせず、栞の事、犯しちゃってください♪」
「え、えっと……」
「あ、もちろん、壊してしまっても平気ですからね♪　その時は叩き起こしてでも復活させますから♪」
「は、はぁ……」
「それじゃ、私は色々な支度がありますのでこれで」
「は、はい……」
そう言って小鳥遊さんのお母さんは、キッチンに向かって行った。
ていうか、キッチンは目の前にあるから、小鳥遊さんを犯す所、お母さんにバッチリ見られちゃうんだよな……。
い、いいのかな……？
まぁ、お母さんもいいって言ってるし、俺ももう我慢できないから、いっか！
「うっ♡　うっ♡　うっ♡　うっ♡　うっ♡」
俺は腰振りを再開した。
お母さんがキッチンで、買ってきた物を整理してるのを見ながら、娘を犯す。
なんだこれ……非日常感があってめちゃくちゃ興奮するんだけど！
「くっ！　出るっ！」
ドビュッ！！！　ドビュルルルルルルル！！！
「うっ♡　うぅ～～～～～♡♡♡♡♡」
俺的にもこれが最後で、中出しした後、掴んでいた小鳥遊さんの手をつい離してしまった。
すると、力が入らなくなっていた小鳥遊さんは、そのまま前に倒れてしまった。

「あ！？　やべぇ！？」
結構な音を立てて倒れた小鳥遊さん。その音を聞いてお母さんがこっちを見た。
「あらあら。零様、大丈夫ですか？　お怪我とかは？」
「あ、い、いえ……僕は大丈夫です……。それより……」
俺は倒れている小鳥遊さんの方を見る。顔面を床に打ち付けたので、もしかしたら鼻血が出てしまっているかもしれない。
そうなってたら流石に申し訳ない。
「あ～大丈夫ですよ。この子は頑丈なので。それに、零様の手で怪我を負わされたなら、この子は本望でしょうから」
そ、それは流石にないんじゃ……？
「ほら、栞！　いつまでそうしてるの！　零様が困ってるわよ！　零様を困らせるなんて、女がしていい事じゃないでしょう！　シャキッとしなさい、シャキッと！」
そう言ってお母さんは、小鳥遊さんの背中を思い切り叩く。
小鳥遊さんの背中は真っ赤になった。
「うっ……うぅ……あれ？　ママぁ……？　帰ってたのぉ……？」
「えぇ。ついさっきね。そんな事より、いつまでもそんな態度でいてもいいの？」
「え……？　っ～～～～！？　す、すみませんっ！？」
ゆっくりと顔をこちらに向けた小鳥遊さん。
俺の顔を見た瞬間、顔から血の気が引き、一瞬で体勢を変えて土下座をしてきた。
「れ、零様がいらっしゃいながら放心状態になり、挙句の果てには零様を放ってママ……お母さんとお話するなんて……！　本当に申し訳ございません……！！！」
「べ、別にそこまで謝んなくても……二時間ぶっ通しで犯されてたら、誰だって放心状態になるでしょ。俺は気にしてないから」
「そういう訳にはいきませんよ、零様」

「え……？」
「栞は零様を放ってしまった。それは女にとっては重罪です。なので、罰を与えてください。そうしなければ、栞は生きている資格を得られませんから」
そ、そこまで重大ですか！？
「わ、分かりました……じゃあ、少し罰を考える時間をください」
「はい♪　一日は長いですから、ごゆっくり考えてください♪
あ、そうだ。何か苦手な食べ物とかってありますか？」
「え？　い、いや……特にはないですけど……なぜですか？」
「なぜって……お夕飯、食べて行かれますよね？　それに、今日はお泊りなされるのでしょう？」
「え……？」
「「え？」」
どうやら二人は、俺がここに泊まると思っていたらしい。

♡　♡　♡

結局、二人のご厚意に甘えて泊まる事にした。
風呂に（二人で）入り、食事をした。
食事は俺が作った。
流石に泊まらせてもらうのに、何もしないなんて事はできない。
だから、全力で止めてくる二人をなんとか説得し料理をした。
すると、二人は美味しいと言って俺の料理を食べてくれた。
「零様の料理は、世界一ですね♡」
「本当。今度レシピ教えてくださる？」
など、俺の料理をべた褒めしてくれた。
なんか、めちゃくちゃ嬉しいな。

「それでは、おやすみなさい」
「「お休み（なさい）」」

食事を終えた俺達は、お母さんに挨拶を交わして栞の部屋へと向かった。
ちなみに、小鳥遊さんと呼んだ所――、
『小鳥遊さんだと、私も含まれてしまいますよ？』
とお母さんに言われたので、栞と呼ぶことにした。
「零様……キャッ！？」
俺は部屋に入った瞬間、栞をベッドに突き飛ばした。
ベッドの上で仰向けになる、全裸の栞。
「お前への罰が決まった」
「は、はい……♡」
「お前への罰は、オマンコセックス禁止の、イラマセックスだ！」
「……？」
俺の言った事にイマイチピンと来てない栞は、可愛らしい困り顔を浮かべた。

第１０２話　栞の部屋で朝までイラマセックス♡♡♡♡♡♡

「い、イラマセックスですか……？　　それは一体……？」
栞のポカン顔、めちゃくちゃ可愛いな。
「そのまんまの意味だ。栞の口でセックスをする。喉奥を子宮に見立ててするから、イラマセックスだ。どうだ？」
「す、素敵です！　　私、零様にお口を使ってもらえるだけでなく、犯してもらえるなんて、嬉しすぎて泣きそうです……！」
今から口を無遠慮に犯されるってのに、喜びに打ち震えるなんて、どんだけド変態なんだよ。
「じゃあ、今から犯して犯して犯しまくるから、口開けな」
「はい……♡　　おねはいひまふ……♡」
栞は、言われた通りに口を開いた。
両手の人差し指を使って口を横に引っ張り、口腔内が見やすいようにしてくれる。
その仕草がまるで、本当にマンコを拡げているかのような感じがして、めちゃくちゃ興奮してくる！
「よし。じゃあ、行くぞ！」
「ふぁい♡　　いふれも――んぼおぉ！？」
いつでもどうぞ、と言う言葉を遮り俺は、栞の口マンコにチンコをぶち込んだ。
遠慮や容赦など一切ない、力任せの挿入。
歯が当たらないようにしてくれてる栞は、マジで偉いと思う。
口マンコに挿(い)れると、すぐに舌が竿にまとわりついてくる。
おそらく、早くチンコが欲しくてたまらなかったのだろう。
まだ腰振りをしていないのに、竿を舐められているだけで射精してしまいそうだ。
いっその事、このまま一回イクか。

「もっと、もっと舐めろ！」
「れる……♡　れじゅぅ……♡　えるぅ……♡」
舌が竿を舐め回してくる。
カリに触れると、そこを探してたと言わんばかりにカリを中心的に責めてくる。
「出すぞ！」
「ぶぁい♡」
「出るっ！」
ドビュッ！！！　ドビュルルルルルル！！！
「んぶぅ♡♡♡　んん～～～♡♡♡　んくんく♡♡♡」
俺は大量の精液を栞に中出しした。
栞は、出された精液を嬉しそうに、美味しそうに飲み込んでいく。
普段だったら、射精が落ち着くまでゆっくり飲ませて、射精が終わったら口からチンコを引き抜くんだが、今回はイラマセックスだ。
ここでは終わらない。
「おら！」
「んんぶぅ！？」
俺は、射精中だが腰を前に突き出した。
精飲中だった栞は、突然喉奥を突かれたので驚き、軽くえづいた。
「ほらちゃんと飲めよ？　飲んでる間も俺は口を犯すからな」
「ぶぁい♡　がっ……♡　ぐっ……♡」
俺は腰振りを始める。
じゅごっ♡　ばじゅっ♡　じゅぼっ♡　と言う、エロい音が腰を動かす度に鳴る。
「ぎゅ……♡　ぐぎゅっ♡　ぎゅぶっ♡」
射精中の亀頭を、舌で舐めて来たり、口を窄めてチンコを圧迫してきたりするのでめちゃくちゃ気持ちいい！
このまま二回目の射精だ～！
「出るっ！」
ビュルビューーーーーーー！！！！　ビュビュビューーーー

ーーーーー！！！！
「んぼぉぉ♡♡♡♡　んぐぅ……♡　ぎゅぅぅ……♡♡♡」
口に収まりきらない量の精液を放つ。
「ぶぶっ♡　ぶぎゅっ♡」
量が多すぎた為、栞はむせてしまう。と、栞の口や鼻から精液が逆流してきた。
美少女の鼻から精液が溢れてくるの、エロすぎん？
「ぶごっ♡　ぶぐぅ……♡」
むせながらも精液を飲み込んでいく栞。
ほとんど飲めてはいないだろうが、その気持ちが嬉しかった。なので、もっと犯す事にした！
「まだまだ行くぞ！」
「がっ……♡！」
俺は栞の頭を押さえ、腰を振り始める。
栞はされるがままで、ベッドの上に力なく仰向けで横たわっている。
俺は上から栞の口を犯し続ける。
「また出すぞ！」
ドビュルルルルルル！！！！　ビュルルルルルルルルルル！！！！
「んぼぉぉぉぉ♡♡♡」
三回目の中出しをしたら、栞は失禁をした。

♡　♡　♡

数時間が経過した。
「ぶごぉ……♡♡♡」
俺はまだ栞の口を犯し続けていた。
栞の顔はドロッドロになっており、鼻から逆流した精液や、俺が顔射した精液でいっぱいだった。

口の中には飲みきれなかった精液が滞留しており、そこにさらに新しく射精をするので、どんどん溜まっていっている。
ベッドのシーツは、栞のおしっこや潮でビショビショになっている。
どうやら、口を犯されて何度もイッたみたいだ。
「とりあえず、一旦これでラストだ！」
ビュビュッ！！！！　ビュルルルルルル！！！！
「んぶっ……♡　んんっぐっ……♡」
栞は、精液を出されるだけでイッてしまうようになったらしく、俺が射精する度に潮や尿を漏らしている。
さらに、イキ過ぎてるようで焦点が定まらず、ずっと体を小刻みに震わせている。
「ふぅ……一旦休憩～」
俺は何度目になるか分からない射精を終えた後、床に座る。
「ぐぷっ……♡　うっ……♡」
ベッドを見ると、口内にある精液を飲み込もうとしている栞が目に映る。
飲み込もうとするのだが、多すぎて飲めず、えづいては飲んでを繰り返している。
そして、その度に潮や尿を垂れ流す。
「こんな姿、奈央が見たらどう思うんだろうな」
奈央の事を考えたら勃起してしまった。
「よし。第三ラウンドだ」
俺はベッドに上がり、栞の頭を押さえる。
「ぶぎゅ……♡？」
「朝までノンストップイラマセックス、するからな」
俺のその言葉に、目を輝かせる栞。
こんなになってもなお、俺のチンコを求めるとか、最高の女過ぎるだろ！
「そんじゃあ、行くぞ！」

「ぶごぉぉぉぉ♡♡♡♡♡」
俺は栞の口マンコにチンコをぶち込み、再び犯し始めた。

結局、朝の６時まで犯し続けた。
栞は途中から意識を失っていた。
総射精回数：３０発（多分）。

第１０２話　栞の部屋で朝までイラマセックス♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？
栞ちゃんの事、気に入って頂けるととっても嬉しいです！

次話は栞の元を離れ、新ヒロインを堕としに向かいますので楽しみにしていてください！

※ここ最近仕事が忙しく、中々集中して作品を書けない状況が続いております……。
「なろう様」の方でも活動しており、そちらと並行しているのですが「なろう様」では内容を分割して執筆しているので大幅に遅れたり、投稿できなかったりなどはないのですが、「ノクターン様」では分割はせずに1話1話の内容を濃く執筆しております。
なので今後、「ノクターン様」での投稿頻度が減ってしまう可能性がございます……。
もちろん、仕事が落ち着いてきたり連休などがある場合は「ノクターン様」優先で執筆を行い、沢山投稿したいと思っております！
ですが、状況次第でこれまで通りの投稿ができなくなってしまうかもしれません……。
大変申し訳なく、心苦しいのですが、そうなってしまった際にはお許しいただけますと幸いです……。
できるだけ毎週土曜日投稿は守りたいと思っております！
ですので、これからも変わらずの応援、何卒よろしくお願い致します……！
誠に身勝手でワガママな事を言ってしまい、大変申し訳ございません……！

第１０３話　久しぶりの再会からの即フェラ♡♡♡♡♡♡（前書き）

遅くなってしまい大変、申し訳ございません……！

今回から改行有りとなっております！
少しでも読みやすく、楽しみやすくなっていたら幸いです！

第１０３話　久しぶりの再会からの即フェラ♡♡♡♡♡♡

「それじゃあ、お世話になりました」
「えぇ。気をつけてね。いつでも遊びに来てね♪」
「はい。ありがとうございます。栞は……」
「あの子の事は心配しないで。そのうち嬉しそうに起きてくるでしょうから」
「はい。では、また」
「えぇ」

俺は、栞のお母さんに別れの挨拶をして、小鳥遊家を後にした。

「さて、次はどうするか……」

俺は、とりあえずバス停に向かった。
そして、スマホを取り出し次にどこへ向かうかを考えていた。
と、そこに――、

「せ、先輩……！？」
「ん？　おぉ！」

声をかけてきた女子がいた。
俺が顔を上げると、そこにいたのは一年生の清楚系女子だった。

「久しぶりだなぁ～」
「は、はい……！」
「ん？　どうした？」
「い、いえ……！　久しぶりなので緊張、してしまって……」

「ふふ。可愛いな。ん？　ってかなんで大阪にいるんだ？」
「か、家族で旅行に来てまして……」
「あ～なるほどな。夏休みだもんな」
「はい……」

なんか、めちゃくちゃ緊張してんな。
前、ここまでじゃなかったんだけどな。

「なぁ」
「は、はい……！」
「この後って時間あるか？」
「ありますあります！　ものすごくあります！」
「じゃあ、ちょっと付き合ってくれ」
「はい！」

俺は清楚系女子と一緒に、ラブホへと向かった。

♥　♥　♥

（ど、ど、どどどどどどどどどどどうしよう！）

家族との旅行先で、まさかの先輩と遭遇！
前に一度エッチさせてもらってから、ほとんど会ったり話したりできなかったから、ものすごく緊張しちゃう……！
それに今日の服、全然エッチじゃない普通のやつだから恥ずかしいよ～！
先輩と会えるなら、ものすごくエッチなやつ着てきたのに～！

（はわぁ～……♡　先輩本当、カッコイイ……！　隣に立ってるだけなのにカッコ良すぎて倒れそう……♡　って、私今、先輩

と一緒にラブホに来てるんだよね……♡　めちゃくちゃに犯してもらえたりするのかな……？）

「ほら、部屋着いたぞ」

「あ、は、はい……！」

私は、人と接する時だけ言葉が途切れ途切れになってしまう。

これをどうにかしたいと思っているけど、今日は絶対に無理だ。

だって、久々の先輩なんだもぉぉん！

♡　♡　♡

ラブホの部屋に到着した俺達。

「そう言えば、君、名前なんだっけ？」

俺今、めっちゃ最低な事言ってるな。

前、自己紹介してもらってなかったよな？　確か（焦）。

「あ、そう言えばじ、自己紹介、して、なかったです……！　ごめんなさい！　私は遠藤（えんどう）光（ひかり）と言います……！」

「光ちゃんか～。可愛い名前だね」

「っ～～～～♡♡♡　あ、ありがとうございます……！」

「ちなみに、おっぱいは何カップなの？」

「あ、Ｉカップです……」

マジか～。真耶子と一緒じゃん！

「俺、そのおっぱい好きだわ」

「あ、ありがとうございます……！　沢山ご奉仕できるように、

が、頑張ります！」
「うん。早速エッチしたいんだけど……なんかしたい事ある？
俺多分、始めたら止まらなくなると思うから、先に聞いとこうかと」
「そ、それじゃ……」

光は俺の前で跪き、俺の股間に触れて――、

「お、お口でジュボジュボ、しても、いいですか……？」
「あぁ。好きなだけしてくれ」
「あ、ありがとうございます……♡」

光は俺のズボンを脱がす。

「先輩、もうギンギンですね……♡」
「あぁ。光とエッチできると思ったら、興奮してね」
「う、嬉しいです……♡」

光は、パンツの上からチンコを撫でたりキスしたりしてくる。
これだけでめっちゃ気持ちいいな。

♥　♥　♥

あ～～～～～♡♡♡
先輩の勃起おちんちん最高～～～～～♡♡♡
パンツの上からでも分かるほど勃起してて、形がくっきり浮かび上がってて、先っぽは我慢汁で染みができてる……♡
エッチすぎるよぉ～～～♡♡♡

（パンツが汚れるのに、パンツの上から舐めても怒られない……感じてくれてるのかな……？）

ピチャピチャ♡　クチャクチャ♡

（パンツが私の唾液でビチョビチョになっちゃった……ちょっと透けておちんちんが……♡　あ～もう、我慢できない！）

ブルンッ！

「ふわぁ～～～♡♡♡」

パンツを脱がすと、おちんちんが勢いよく飛び出してきた。
苦しい思いさせて、ごめんなさい……！
今、気持ちよくしますから♡

「はんむ♡」
「うっ……！」

私はおちんちんを口いっぱいに咥え込む。
ん～～～♡♡♡
この味、この臭い、この舌触り♡
やっぱり最高だよ～～♡♡♡

「じゅる♡　れる♡　じゅるっ♡　ぎゅるっ♡　ぢゅるるるるるる♡♡♡」

私は、舌で亀頭を舐めながら口を窄めておちんちんを吸い上げていく。
カリ首に残ってるチンカスや、溢れてくる我慢汁が喉奥に入ってくる。
この味、堪んない……♡

もう、ずっと舐めてたい。ずっと口に含んでいたい♡

「ぎゅぶっ♡　じゅぶっ♡　ぢゅろろろろろろ♡♡♡」

「くっ……！　光、俺、もう！」

（出そうなんですね……♡　出して♡　出して♡　出してください♡♡♡　私の口に濃い精液、たっぷり注いでくださいぃぃ♡♡♡♡♡）

「出るっ！」

ドビュッ！　ドビュルルルルルル！　ビュビューーーーー！！

「んぶっ！？」

先輩の精液、来たぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡

プリップリの特濃で、舌や喉に絡みついてくる♡

「ごくごく……♡」

先輩の精液、濃くて飲みづらい……♡

でも、それがいい……♡

この絡みついてくる感じが至高すぎる♡

「ごめん……！　まだ出るっ！」

ドビュンッ！！

「んぶっ！？」

全部飲み込めてないのに、追い打ち射精が来たぁぁ♡♡♡
え……？　これってそれだけ私のお口で感じてくれてるって事だよね……？
う、嬉しすぎるよぉぉ♡♡♡♡♡

「ごきゅごきゅ……きゅぅ～……♡」

精液の量と濃さが凄くて、全然飲み込めない……♡
舌も口も喉も、全部先輩の精液で支配されてる♡
幸せすぎる……♡

「ふぅ……」

んふふ♡　チラッと先輩の方を見ると、気持ちよさそうな顔をして目を瞑っていた。
先輩、気持ちよくなってくれたんだ……♡

「ごくごく……♡　ぷはぁ♡　見てください……♡　全部飲めました……♡」
「よく飲めました。じゃあ、次はおしっこ飲んでくれるか？」
「はい！　喜んで！」

なんとか精液を全部飲み込んだ私は、口を大きく開けて先輩に見せる。
と、先輩はすごく嬉しそうにしてくれた♡
そしたら、今度はおしっこも飲ませてくれるらしい！　嬉しすぎる！

「じゃあ、出すぞ」

「ふぁい……♡」

ぷしゃあああああ！

「んぷ♡　んくんくんく……♡」

先輩のおしっこが、お口に入ってくる……♡
おしっこが飛び散って顔にかかるけど、それすら幸せと感じる♡
毎日精液パックとおしっこパックをしたいなぁ……♡

「ごめん、めっちゃ出るかも」

大丈夫ですよぉ～♡♡♡　私が溺れるくらい出してくださいぃぃ♡♡♡

「ごぼごぼごぼ……♡♡♡　ごくごく……♡♡♡」

この後、先輩は大量のおしっこを私のお口に注いでくれた♡

第１０４話　ソープ手コキからのソープパイズリで射精&潮吹き♡♡♡♡♡（前書き）

今日はいつもより早い時間に投稿することができました～（よかった～……！）

いつもこのくらいの時間に投稿できればいいんですけどね……すみません……！

光ちゃんのエッチな姿を沢山、楽しんでください♪

第１０４話　ソープ手コキからのソープパイズリで射精&潮吹き♡♡♡♡♡

フェラで抜かれ、おしっこを飲ませた後、光はしばらく恍惚とした表情で余韻に浸っていた。
俺はその顔を見ながら、また勃起していた。
と、急に我に返った光が――、

「あ、あの……！」
「ん？　どした？」
「あ、あの……その……えっと……」

膝をこすり合わせて、その間に手を入れてもじもじしてる。
めっちゃ可愛いな。でもどうしたんだ、突然。

あ。そう言えば。

「光、お風呂行こうか。確か、お風呂でヌルヌルになった状態でエッチするのが好きなんだよね？」
「っ～♡　は、はいっ♡　覚えててくれたんですね♡」
「当たり前だろ。さ、風呂に行くぞ」
「はいっ♡」

光は恥ずかしく言い出せなかったらしい。可愛い奴め。

「ふふん♡」

光は上機嫌で風呂場に向かった。

♥♥♥

覚えててくれた！　覚えててくれた！
大好きな先輩が、私の性癖を覚えててくれた！
ヤバい！　どうしよう！　こんなに嬉しい事ないよ！

「先輩！」
「ん？」
「チュッ♡」

私は我慢できず、脱衣所に立つ先輩にキスをした。

「れる♡　ちゅむ♡」

先輩の口の中に舌を入れて、先輩の舌と絡ませる。
溢れてくる先輩の唾液を飲み込んでいく。
ん～～～♡　先輩の唾液美味しい～～♡♡♡

「ぷはっ♡　す、すみません……我慢できなくてつい……」
「全然。いいよ。ほら、入ろう」
「は、はいっ♡」

先輩が手を取ってくれた♡　嬉しっ♡
私と先輩は、一緒に浴室に入った。

プシュプシュ♡　チュッチュッ♡

「おぉ～」
「ど、どうしたんですか……？」

私が、ボディーソープを体中にかけていると、先輩が嬉しそうな声を漏らした。

「いや、エロい体にソープが垂れていくのめっちゃエロくてさ。最高だなって思って」

「っ～～～～♡♡♡」

う、嬉しい～～～～♡♡♡

ボディーソープを体にかけるだけで喜んでくれるなんて、幸せすぎるぅぅ♡♡♡

「じゃ、じゃあこ、これはど、どうですか……？」

「おぉ～！」

私は、体中にかけたソープを全身に塗り拡げていく。

ヌルヌルになって、泡立っていく。

クチュクチュ♡　と言う音が立って、いやらしさを醸し出す♡

「んっ……♡　んんっ……♡　んんぅ……♡」

これ、乳首とかクリが敏感になって気持ちいい……♡

「じゃ、じゃあ先輩、ご、ご奉仕します、ね……♡」

「あぁ、頼む」

「よいしょ……♡」

私は、ヌルヌルになった両手で先輩の勃起おちんちんを握る。

クチュクチュ♡　クチャクチャ♡

先輩のおちんちんをシコシコする度、ソープが泡立ってエッチな音が鳴る。
シコシコしていると、ソープの感触が変わってくる。
先輩、我慢汁溢れてきてるんだ……♡
ソープの中に先輩の我慢汁が混ざって、泡立ちがよくなってくる。
「せ、先輩……ど、どうですか……？」
「あぁ、めっちゃ気持ちいいよ……もっとして」
「は、はいっ♡」
よかった！　気持ちよくなってくれてた！
よ～し！　もっと気持ちよくなってもらうために、頑張るぞ！
「よいしょ……♡」
「おぉ～」
私は、ソープでヌルヌルになったおっぱいでおちんちんを挟み込む。
これ、滑っちゃって中々安定しない……どうしよう……。
「あ、あの、せ、先輩……」
「ん？」
「一つだけ、お願いしても、いい、ですか……？」
「ん？　うん。光の頼みなら一つと言わず、いくらでも聞くぞ？」
う、嬉しい～！
「あ、足で私の事、ホールドして、く、くれませんか……？」

「いいけど……それだと、光が苦しくなっちゃわないか？」
「だ、大丈夫です……苦しい方が嬉しいので……♡」
「そっか。分かった。痛かったりしたらすぐに言えよ？」
「はい……♡」

先輩が両足を広げて、私の肩周りをホールドしてくれる。
女子が先輩にする「だいしゅきホールド」の逆版って感じ。

と言うか、これ……ものすごく気持ちいい！
足で押さえつけられて少し痛いけど、その痛さがすごく気持ちいい……♡♡♡

「んっ……♡　ふっ……♡　んんぅ……♡」

ヌルヌルおっぱいでパイズリしてると、私まで感じて来ちゃう……♡
先輩のおちんちんの熱や鼓動が谷間に伝わってきて、それだけでイッちゃいそうになる……♡

「ひ、光……俺、もう……！」

イキそうなんですね……♡　おちんちんパンパンになってドクドクしてる……♡　精液が上って来てるんですね♡

「はい……♡　いつでも好きな時に、イッてください……♡
いっぱい出してください♡　私の、お、おっぱいマンコにいっぱい中出ししてください……♡」
「くっ……出るっ！」

ドビュルッ！！　ドビューーー！！　ビュビューーーーー

ーーーー！！！

「んんっ♡　　んん～～～～♡♡♡」

ヤバい……先輩が射精してくれておっぱいに精液が当たっただけでイッちゃった……♡

ちょっとだけお潮出ちゃった……。

谷間の中でおちんちんがビクビクして、精液を出してるのが分かる……♡

谷間だけじゃなく、顎やおっぱい全体が先輩の熱い精液で染まっていく……♡♡♡

あ……射精が収まってきた……。

「はぁはぁ……」

先輩……ごめんなさい……もっと、もっと気持ちよくなってください……！

「ちょぉぉぉ！？　　光、何やってんの！？」

私は、射精したばっかの敏感おちんちんをおっぱいで激しく扱いていく。

「ちょ、ちょっと待って……！　　今、イッたばっかで敏感にぃぃぃ！　　なってるからぁぁぁ！」

ごめんなさいごめんなさい……！　　ネットやお友達から聞いた話しだと、敏感になったおちんちんに刺激を与えると、先輩はかなり苦しいって……。

でも、でも……私、大好きな先輩にもっと気持ちよくなってほしいんです……♡
だから、怒られるの覚悟でします！
「ぐあああああああ！　駄目だ、出るっ！」
ぶしょおおおおおおおおおおお！！
ぶしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
「んっ！　んん〜〜〜♡♡♡」
先輩の潮吹き、来たぁぁぁぁ♡♡♡
顎にものすごい勢いで当たってる♡♡♡
でも、もったいない！
「んぶっ……♡♡♡」
私は顔を下に向けて、先輩の潮を顔面で受ける。
先輩の精液やおしっこだけじゃなく、お潮までお顔で受け止められるなんて、幸せすぎるぅぅ♡♡♡
「あっあっあああああああああああ！」
私はお顔でお潮を受け止めつつも、おっぱいを動かすのをやめない。
だから、先輩はずっと潮吹きし続けている。
先輩って、こんなにお潮出るんだぁ……♡♡♡
もっと、もっといっぱい出してくださいぃ♡♡♡
私を、先輩のお潮で溺れさせてぇぇ♡♡♡

♥♥♥

「す、すいませんでした……！？」

お風呂から上がった私達。
私は今、床で土下座をしていた。
ベッドで横になる先輩に向かって。

「大丈夫大丈夫。全然気にしないで。俺も気持ちよかったから」
「で、でも……」

私は先輩のお潮を浴びれた嬉しさで、ずっと潮吹きをさせ続けてしまった。
その結果、先輩は倒れてしまった。

「俺は光がしたいことをしてくれたのが、すごく嬉しいんだ。だから、謝んなくていい」
「せ、先輩……」

先輩は本当に優しい……普通なら「やりすぎだ馬鹿！」って怒るところなのに、先輩は優しく受け入れてくれる……。
こういう所が好きだ……でも、その優しさに甘えてばかりはいられない！

「せ、先輩……！」
「ん？」
「た、体力が回復してからで、だ、大丈夫なので、わ、私にお仕置きをしてください……！」
「お、お仕置き……？」

「はい……！」

私は立ち上がり――、

「好き勝手した調子乗り女に、キツーい罰を与えてほしんです……！　今度は、せ、先輩のしたい事を、全部私に、し、してください……！」

私がそう言うと、先輩の目つきが鋭くなった。

「本当にいいのか？　お仕置きとなると、本当にキツイものになるぞ？　それに、俺のしたい事全部だと、めちゃくちゃ時間使うぞ？」

「は、はい……！　大丈夫です……！　どれだけ時間を使っても大丈夫です……！　どれだけキツくても構いません……！　なので私に、お願いします……！」

私は再び土下座をする。

「分かった。じゃあしてやる」

「ほ、本当ですか！」

「あぁ。でもとりあえず、一時間くらい休ませてくれ」

「は、はい！」

よかったぁ～……！　お仕置きしてもらえる……！

何してもらえるのか考えるだけで、今から興奮してきちゃう……♡

ちなみにこの後先輩から、ローターをマンコに入れた状態で、一時間イカずに耐えろと命令があった。

私は命令に従い、ローターをマンコに入れた。

一時間、イカずに頑張って耐えなきゃ！

ルームサービスを頼んだりして、先輩にはゆっくり休んでいただいた。

ルームサービスが届いた時、ローターを装着したまま全裸で出たら、持ってきてくれた従業員（女性）さんは、羨ましそうにしてた。

えへへ。いいでしょう～♡

第１０５話　お仕置き中出しセックス♡♡♡♡♡♡（前書き）

普段のお礼として、昨日に引き続き投稿させていただきました！

少しでも、ほんの少しでも喜んでいただけたら嬉しいです！

光へのお仕置きセックス、お楽しみください♪

第１０５話　お仕置き中出しセックス♡♡♡♡♡♡♡

光に潮吹きさせられた俺は、一時間ベッドで休憩をした。
光がルームサービスを使って食事とかを用意してくれたので、ベッドから一歩も動かずにゆっくり休憩する事ができた。
さてさて。

「おぉ～だいぶできあがってんなぁ～」
「せ、先……♡　　輩ぃ～……♡」

椅子の上に体育座りしている光。
その顔は蕩けきっていた。
どうしてそうなっているのか。それは、マンコにローターを装着し、イカずに一時間耐えているからだ。

「ちゃんとイカなかったか？」
「は、はいぃ……♡　　軽イキしそうになったら、ビンタしたりつねったり、自分を痛めつけてなんとか耐えましたぁ～……♡」

よく見ると、光の顔や体は赤くなっていた。

「偉いな。じゃあ、これからお仕置きを始める。まずは……」

俺はベッドから降り、光の前にしゃがみ込む。

「せ、先輩……？　　んひゃぁぁぁぁ♡♡♡」

俺は、光へのお仕置きを開始した。

♥♥♥

「んっ……♡　んんぅぅぅ♡♡♡　あああああ♡♡♡」

今、先輩は椅子に座る私の前でしゃがみ込んでいる。何をしているのかと言うと――、

「クリにローター当てながら、手マンクンニらめぇぇぇぇ♡♡♡」

そう。先輩は、マンコに入れていたローターを抜いて、それをクリに押し当てながら、右手の人差し指と中指で手マンをしながらクンニしてくれているのだ。

この三つのうち、どれか一つだけでも気持ちよすぎておかしくなりそうなのに、三つ同時なんてどうにかなってしまいそうになる……♡

「らめぇらめぇ♡！♡！　私、イッちゃうぅぅ♡！」

私がもう、イク体勢に入った瞬間――、

「ふぇぇ……！？」

先輩は、全ての動きを止めてしまった。

「な、なんれ……？」

「これはお仕置きだぞ？　簡単にイッたら駄目だろ」

「そ、そんなぁ……」

もしかして、寸止め地獄が待っているのかな……。だとしたら、

私、本当に壊れちゃうよぉ……♡

「それじゃ、まだまだするからな。イクなよ？」

「ふぇぇぇぇ……」

先輩は、ローターを机の上に置いて、手マンを始めた。

「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡　あああああああ♡♡♡」

先輩の手マン、本当に気持ちよすぎるぅぅぅぅ♡♡♡

オナニーの時、自分で激しく手マンするけど、力があまりないからそこまで気持ちよくなれない。

でも、先輩は力が強いから、激しく手マンされるとすっごく気持ちいい♡♡♡

「あああああああああ♡♡♡　あっ♡　あっ♡　あっ♡

も、もうイッちゃうぅぅ♡♡♡」

「はい、駄目～」

「っっっ♡♡♡　っ♡！」

イキそうな所で指を抜かれ、私は全身をビクビクさせた。

自分の意思ではなく、勝手に体が震える。

「おぉ～マンコめちゃくちゃヒクついてる」

イキそうでヒクヒクしてるオマンコを、先輩が凝視してくる……。

は、恥ずかしすぎる……！

でも、先輩が喜んでくれるなら、すっごく嬉しいぃ……♡♡♡

「そら、次だ」

「んぅううう♡♡♡」

先輩の手マンが再び開始される。

二度の寸止めで、敏感になってるオマンコはすぐにイキそうになる。

「イクッ！　イクッぅぅ！」

「だ～め」

「っく！　っっっ！！！」

またイキそうな所で指を抜かれる。

「すげぇ。指抜いたと時、愛液がドロって溢れて来たぞ」

私のオマンコは自分でも信じられないくらいグチョグチュになっていて、先輩の手を見ると、白いドロっとした液体が手から肘にかけて垂れていた。

「ハァハァ……」

「んじゃ次ね～」

「んひゃぁんっぅぅぅ♡♡♡

先輩の手マンが来たぁぁ♡♡♡

手マンの激しさが増してるのは気の所為じゃないよねぇぇぇぇ♡♡♡

「あああああああああ♡♡♡　イッグぅぅ♡♡♡」

「駄目だって」

「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」

今の本当に危なかった……ギリギリ過ぎた……♡

「なんか漏れてないか？」

「ふ、ふぇ……？」

私は、本当に少しずつおしっこを漏らしてしまっていた。

「ご、ごめんなさい……！？　私……！　イッてはないんです……！」

「分かってるよ。男も寸止めをし続けると精液がドロっと溢れたりするから。そんなようなもんだろ。だから気にしないでいい。ただ、イクなよ？」

「あい……！　あい……！」

先輩が許してくれた……！　嬉し――、

「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」

またまた手マン来たぁぁぁぁ♡♡♡

これ、イカせに来てるよぉぉぉ♡♡♡♡

グチャグチャ♡　グチョグチョ♡　グチャグチャ♡

「んあああああああああああ♡♡♡♡♡」

こんな激しい手マンで我慢とか、無理ぃぃぃ♡♡♡

「おっと危ねぇ」

「んきゅぅぅぅぅあああああああっ♡♡♡」

あ〜……頭ボォーっとしてきた……♡
もう、イクことしか考えられない……♡

イキたい♡　イキたい♡　イキたい♡　イキたい♡
イキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたい♡♡♡

「せ、せんぱいいいい……♡♡♡」
「もう限界って感じだな。じゃあ、イカせてやるよ」
「んんぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」

先輩の手マンが今までより一番激しくなってるぅぅ♡♡♡

「（もう我慢しなくていいぞ。思いっきりイケ）」
「っっっっっっっ♡♡♡♡♡♡」

耳元でそう囁かれた瞬間、私の中の全てが弾けた。

「あああああああああああああああああ♡♡♡♡♡　イグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ❤❤❤❤❤❤❤❤」

ぶしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ❤❤❤❤❤❤❤❤

ぶじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ❤❤❤❤❤❤
ぶじょおおおおおおおおおおおおおお❤❤❤❤❤
じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ❤❤❤❤❤❤❤

「んきゃあああああああああああああああ❤❤❤❤❤❤❤」

お部屋に潮の水たまりができ、そこにさらに潮が注がれるので音がどんどん変化していく。

「あああああああああああああああ❤❤❤❤❤❤❤

「ふん！」
「んあああああああああああ♡♡♡♡♡」
先輩のおちんちんが、オマンコの膣(なか)に挿(はい)入って来たぁぁぁ♡♡♡♡♡
太くて硬いおちんちんが、オマンコの膣(なか)を進んで、子宮を突いてるぅぅ♡♡♡♡♡
「あれ？　光、処女だよな？」
「しょ、処女はでぃ、ディルドで捨てちゃいましたぁぁぁ……♡♡♡」
「なるほどな。じゃあ、なんの問題もなくぶち犯せるな！」
「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
先輩が腰を激しく振ってくる。
先輩が腰を動かす度に、おちんちんが膣(なか)と子宮を刺激してヤバいぃぃ♡♡♡
特に、先輩が腰を前に突き出した瞬間、子宮が押し潰されて飛びそうになる♡♡♡♡♡
「んんぅ♡　んんぅ♡　んんぅ♡　んあああああああ♡♡♡」
椅子に座った状態で、のしかかられてるから先輩の体重がもろに体にくる……♡
圧迫感の中で犯されるの、最高過ぎるぅぅ♡♡♡
「も、もうらめぇぇぇ♡♡♡　イッちゃいますぅ……♡」
「いいぞ。好きなだけイケ。俺ももう出すからな。子宮に入り切ら

ないくらい注いでやる！」

お願いしますぅぅ♡♡♡♡♡

私の子宮に沢山注いで、私を先輩の子種タンクにさせてくださいいいぃ♡♡♡♡

「あああああああああ♡♡♡♡♡　イックぅぅぅぅ♡♡♡」

「出るっ！」

ドビューーーーーーーーーー！！！！！　ビュビューーーーーーーーーーーーー！！！！

ぷしゃあああああああああああああああ♡♡♡♡

私の潮吹きと、先輩の射精が同時だったぁぁ♡♡♡

嬉しすぎて、それだけでまたイッちゃうよぉぉ♡♡♡♡

「んあああああああああああああ♡♡♡♡」

「まだまだ行くぞ！」

この後、先輩は私を朝が来るまで犯し続けてくれた。

何発か詳しくは覚えてないけど、３０は超えてると思う。その全部を私の子宮に注いでくれた。

♥　♥　♥

「っ……！　っ……！」

パチンッ！　パチンッ！　パチンッ！

私は今、ベッドの上でお尻を高く突き上げた状態で四つん這いに

なっている。
そして、その高く上げたお尻を、先輩に叩かれている。
「お仕置きだったのに、途中からできてなかったからな。チェックアウトの時間までずっと叩き続けるからな」
「ひゃ、ひゃいぃ……♡」

私はもう喋る事ができなくなっていた。
連続中出しセックスで何度もイカされまくり、意識が飛びそうになっても、ううん、飛んでても先輩は私を犯し続けてくれた。
快楽で呂律が回らないのもそうだし、ずっと水分を取っていないので、全く喋る事ができなくなっていた。

バチンッ！　バチンッ！！　バチンッ！！！　バチーーーン！！！！

「うっ……♡　うううぅ……♡　うぅ～……♡」

私はただ、枕を抱き、噛み締めて気持ちよさと痛みを受け続けるしかなかった。

このスパンキングはこの後、四時間続いた♡

第１０６話　遊園地のお姉さんを、お呼び出し♡♡♡♡♡♡

「それじゃあ光、またな」
「はい♡　また♡」

俺は光と、ホテルの前で別れた。
光はお尻を庇いながらゆっくりと歩いていく。

まぁ、ずっとスパンキングしてたから、相当痛むんだろうな。
それでも、嬉しそうにしてくれてたから本当いい女だよ。
俺は光を見届けた後、どうするかを考えた。

「さてと……次はどうすか……」

スマホを見ていると、連絡先にとある人物の番号があるのに気がついた。

「あ、そう言えば交換してからほとんど連絡してなかったな。次はこいつにするか」

俺はとある人に連絡をした。

♡　♡　♡

「ふわぁ～……流石に眠いな……」

俺は喫茶店で、呼び出した人物を待っていた。
その間、流石に朝までエッチしてたのもあり、睡魔が襲ってきた。

「呼び出しといて悪いけど、合流したら一回寝かせてもらおう」
俺は頼んだコーヒーを飲みながら、睡魔をなんとか誤魔化す。
しばらくして、呼び出した人物がやってきた。
「はぁはぁ……お、お待たせいたしました……！」
「急に呼び出してごめんな」
「い、いえ……！　お呼びいただけてとても光栄です！」
俺が呼び出したのは、華達とのデートで利用した遊園地の係員さん。
連絡先を交換して以降、ほとんど連絡をとっていなかったので、ちょうどいい機会だと思い連絡した。
にしても、呼び出したのは俺だけど、神奈川から大阪まで来るなんてすげぇな。
しかも、俺は電話で『今から大阪に来い。犯す』と言っただけ。
それを聞いたこの人は、嬉しそうに『すぐに向かいます！』と言ってこうしてやってきた。
「そういや、お姉さん名前は？」
「あ、自己紹介してなかったですね、すみません。私は大村（おおむら）　美結（みゆ）と申します」
「美結か。いい名前だな」
「あ、ありがとうございます……♡」
「来てもらっといてあれなんだけど、俺、さっきまでエッチしててさ。ほとんど寝てないんだよね。だから一旦寝てもいい？」
「あ、はい！　もちろんです！　では、ホテルに行きますか？」
「あ～……いや。ネカフェに行こう」

「分かりました」

そうして俺達は、ネカフェに向かった。

♥　♥　♥

私は大村　美結。

普段は遊園地で係員として働いている。

ある日、零様が女性三人を連れ、私が働く遊園地に訪れてくださった。

そして、そこで色んなプレイをしていて、私は目も心も全て零様に惹かれた。

零様が連絡先を交換しようと言ってくださった時は、心臓が止まるかと思った。

そのくらい嬉しかった。

そこからあまり連絡がなく、少し寂しかったけど――、

「ふわぁ～……」

「ふふ♡」

ネカフェに向かって歩いている私達。

隣で大きく口を開けてあくびをしている零様を見ると、寂しかった気持ちなんて吹き飛ぶ。

「零様、着きましたよ」

「ん～」

よほど眠いのか、零様の反応がどんどん薄くなっていく。

ネカフェに入り、カップルシートに入った私達。

「さ、零様。ゆっくりおやすみください」

「うん。ありがとう」

そう言って、零様はソファに倒れるように横になり、すぐに気持ちよさそうな寝息を立てて眠られた。

「おやすみなさい、零様♡」

私は、零様の靴を脱がせ、ゆっくり寝られるように足を伸ばさせる。

エアコンが効いているのでお風邪を引かないように、タオルケットをかける。

「零様の寝顔……可愛すぎる……♡」

零様の寝顔を床に座りながら見つめる。

「んっ……♡」

私の右手は、無意識にオマンコに伸びてしまう。

まさか、零様の寝顔をオカズにオナニーができる日が来るなんて夢にも思ってなかった。

「んんぅ……♡　はぁ……♡」

私は左手で口を押さえる。

気持ちよさそうに眠ってる零様を、私なんかの喘ぎ声で起こすわけにはいかない。

でも、指止まんない……！

「うぅ～……♡　んんぅ～～～～♡♡♡」

無音な空間に、私のこもった喘ぎ声とクチャクチャと言う私のエッチなオマンコの音が響く。

（も、もうイック……♡）

私は激しく手マンをして、イッてしまった。

「っっっ♡♡♡　あぁ～……♡　はぁはぁ……♡」

息がかからないように口を押さえながら、私は零様の寝顔に顔を近づける。

（零様ぁ～……♡　もっと、もっとオカズにしてもいいですか？
ごめんなさい……許可なくオカズにしちゃいますぅ♡♡♡）

私はこの後、零様が起きるまでオナニーを続けた。

第１０７話　美結のご奉仕フェラで、顔と口に大量射精♡♡♡♡♡

どれくらいオナニーをしていただろう。
私はイキ過ぎて、マラソンでもしましたか？　ってほどに息を切らしていた。
壁に寄りかかり、乱れた呼吸を整えていると、零様が目を覚ました。

「ん……んん……」

零様って、起きる時こんな感じなんだ……♡
めっちゃ可愛い……♡

「ん……？　おはよう……」
「お、おはようございます……！」

寝起き零様、マジで天使！
普段は大人っぽいけど、こうして見ると子供っぽいところもちゃんとあるんだなぁって思う。
私にいっぱい甘えてほしい！

「ごめん……寝すぎたか……？」
「い、いえ……！　全然大丈夫ですよ！　最高のオカズだったので――」
「え？」
「え……？　あ、いや！　なんでもないです！　そ、それより……よく眠れましたか？」
「うん。おかげさまで。結構スッキリしたわ」

「よかったです。喉乾きましたよね？　お飲み物は何がいいですか？」
「あ～じゃあ、メロンソーダがあればそれがいいな」
「分かりました。では行ってきますね」
「うん。ありがとう」

私は零様にお飲み物を提供する為、ドリンクバーへと向かった。
ドリンクバーでメロンソーダをコップに入れ、私は部屋へと戻る。

「お待たせいたしました」
「ありがとう」

私が零様に飲み物を渡すと、零様は不思議そうな顔を浮かべた。
どうしたんだろう？

「美結の分は？」

あ、なるほど。私の分がない事が気になったのか。
本当にお優しいなぁ……♡

「私はいらないので大丈夫ですよ」
「そう？　なんなら俺の飲んでいいからな？」
「い、いえ！　零様のをいただくわけにはいきません！　ですが、お心遣い、ありがとうございます♡　お腹空きませんか？」
「そうだな。空いたかも」
「では、頼みましょう」

零様のリクエストを聞いて、私は注文をする。
そして、注文した料理を待っている間に零様が――、

「ごめん、ちょっとトイレ行ってくる」
と、仰ったので私は――、
「あ、ま、待ってください！」
慌てて零様の手を握り、引き止める。
勝手に手を握るご無礼、お許しください……！
「ど、どした？」
「も、もしよろしかったら……その……」
言うんだ……！　あの日、鏡の部屋で見てずっと憧れてた事、叶える為に言うんだ！
「零様さえよろしかったら、零様のおしっこ！　の、飲ませてはいただけませんでしょうか……！」
い、言ったぁぁぁぁ……！
緊張で心臓が張り裂けそうだよ……！
零様の手を握る手が震える……多分、零様にも伝わってると思う……。
零様の返答を待つ時間が、長く感じる……なんて言われるかな……。
「もちろん。美結がいいなら俺は全然いいよ。ていうかありがたい」
「っ！　ほ、本当ですか……！」
「あぁ」
よ、よかったぁぁぁ……！

勇気出して良かったよぉぉ……！
念願だった零様のおしっこが、飲める！
「で、では零様、こ、こちらに」
「うん」
零様の手を引き、ソファに座っていただく。
そして、ズボンを脱がす。
「失礼いたしますね」
あ……零様のパンツ、可愛い……♡
男性の下着って種類が豊富だけど、その中でもボクサーパンツは一番種類が多い。
私はボクサーパンツが大好きで、密かに買ってオナニーの時に使ったりしてる。
そんな大好きなボクサーパンツと、大好きな零様が合わさったらもう最強だ♡
「で、では、こ、こちらも脱がしますね……♡」
ボクサーパンツを脱がすと、中からおちんちんが出てきた♡
勃起してない、小さいおちんちん♡
ん？　勃起……してないよね……？
普通の状態のおちんちんを見たことがないからわかんないけど、これが平常時だとすると、かなり大きいと思う。
私がそんな事を考えていると――、
「今、完全には勃起してないんだけど、妹のせいで勃起してなくて

も大きいままなんだ」
「っ！　そ、そうなんですね……♡」
考えている事がバレたのか、零様が教えてくれた。
そっか……そういうことなのか……妹さん、ありがとう！
「では、お口に含ませていただきますので、いつでも出してくださいね♡」
「あぁ」
私はボクサーパンツを畳み、テーブルの上に置く。
そして、手を使っておちんちんを持ち上げ、亀頭の部分をお口に含む。
もう、正直これだけで幸せだった♡
大好きな零様のおちんちんを、お口に含める日がくるなんて、思ってもみなかった……♡
口に含んだ瞬間、零様の汗やおしっこ、精液の香りが口全体に広がって鼻呼吸をする度に、軽くだけどその香りが鼻を抜けていく。
それが、何よりも幸せだった♡
これまで嗅いだどの香りよりも、一番いい香りだった♡
ずっと嗅いでいたい♡　ずっと口に含んでいたい♡
そう思うくらい、零様のおちんちんは最高だった♡
と、私がおちんちんを口に含んでトリップしていると――、
「んっ……」
零様は少し、下半身に力を入れたのが分かった。

おしっこ、出すんですね♡　私の零様専用口小便器にいっぱい出してください♡

ぶじょおおおおおおおおお！！！

「んぼぉ♡！」

ものすごい勢いでおしっこが口の中に放たれる♡
喉奥に注がれて、飲み込んでいくけど、飲み込むのが間に合わないくらい量が多く、どんどん口の中に溜まっていく。
さっきまではほんのり香るだけだったおしっこの香りが、今度はちゃんとダイレクトに口や鼻に広がっていく。
飲み込む事に集中してるから、香りを楽しむ余裕はないけど、味を楽しむ事はできる。

零様のおしっこ、美味しすぎませんか！

これまで飲んできた飲み物が、全部不味く感じるほど、零様のおしっこが美味しい♡
これまでこの味を知らずに生きてきていたなんて、人生の大損だ……。

こうして零様のおしっこを飲める事がどんなに幸せか……♡
この幸せを噛み締めながら、今は全力で零様のおしっこを飲ませていただく！

「ごくごくごく……♡」
「ごめん、まだめっちゃ出そう」

いいんですよぉ♡　いっぱい♡　いっぱい出してくださいぃ♡

零様がスッキリするまで、おしっこがなくなるまで全部出してください♡
私のお口は、零様だけの小便器ですから♡
と、私が零様のおしっこをいただいている時、部屋のドアがノックされた。
驚いた零様。私が小さく頷くと、零様が返事をして入室を許可する。
「お待たせいたしました～ご注文の――っ！？」
入ってきた女性店員さんは、私達を見た途端、顔を真っ赤にして棒立ちになった。
「す、すんません。料理、そこに置いといてもらえますか？」
「あ、は、はい！　わ、分かりました！　ご、ごゆっくりどうぞーー！」
女性店員は料理をテーブルの上に起き、そそくさと去って行った。
あの態度、零様に失礼過ぎない？
でも、あの人が来た瞬間、おしっこの量と勢いが増した。
興奮したんですね♡　もっと出してください♡
「うぅ……ふぅ……」
零様のおしっこが終わってしまった……もっと飲んでいたかった……。
私は、おちんちんを口に含みながらおしっこを飲み干す。

「ありがとう」
「ひえ♡　ほのままほろうひ、はへへいはらひまふね♡」
「え？」

私は、おちんちんを咥えたまま舌を亀頭に這わせる。
零様は仮性包茎なので、舌で皮を剥き剥きする事ができた♡

皮を剥き、カリ首に舌を這わすとなんと、チンカスがあった♡
仮性包茎だとチンカスが溜まりやすいってネットに書いてあるのを見た時から、ずっと憧れていたチンカス舐め♡
その夢が叶う日がくるなんて……♡

零様のチンカス、美味しすぎる♡
このチンカスを、サラダとかに乗っけたい♡
粉チーズをかけるかのように、精液をドレッシングにして、その上にチンカスを乗っけたいなぁ♡

「じゅるぅ♡　じゅるるるるる♡」

カリ首のチンカスを舐め取りながら、私は亀頭を思い切り吸う。
そうすると、尿道からおしっこの残りと我慢汁が溢れてくる。
口の中がチンカスとおしっこ、我慢汁で満たされて私はどんどん興奮してくる♡

ぬちゃぁ♡

ちょっと足を動かしただけで、オマンコからエッチな音が鳴る。
興奮しすぎてオマンコが大洪水になっていて、パンツがビチョビチョになっていた。

「美結……それ、気持ちいい……」

嬉しい……♡　もっと、もっと気持ちよくなってください……♡

「じゅろろろろろろろろろろろろ♡♡♡　じゅるるるるる♡♡♡」

我慢汁の量が増えてきた♡

お口の中がしょっぱいので満たされていく……♡

どうしよう……精液欲しくなってきちゃう……♡

「ジュボッ♡　ジュボッ♡　ぎゅぼっ♡　ジュボッ♡」

私は、右手をパンツの中に入れてマンコを弄る。

左手でおちんちんの根本を扱きながら、激しく頭を前後に振っていく。

「美結……も、もう……！」

出してください！　出してください！

零様の精液、私の零様専用精液吸引器にいっぱい出してください♡♡♡

「いっふぁい、らひへふらはい……♡」

「出るっ！」

ドピュンッ！　ドビューーーーーーーー！！　ビュビューーーーーーーーー！！　ビューーーーーーーーー！！

「んぶぅ！？　んぐっ……♡　ごくごく……♡」

零様のお射精、来たぁぁぁぁ♡♡♡
零様のプリップリの濃い精液が、大量に入ってくる♡
のどちんこにビシャビシャ当たってるのが分かる♡
飲み込んでる最中にも精液が出てくるので、飲み干す事ができない♡

お射精中の亀頭を舐めると、さらに精液が溢れ出してきて、お口の中がどんどん精液で満たされていく♡
頬をふくまらせないと、精液がこぼれてしまう。

精液が濃いので、喉にへばりついて中々上手く飲み込めない……
だから、どんどん口の中に溜まっていって――、

「ぶっ……ぶぶっ！」

鼻から精液が出てきてしまった。
でも、これ……鼻まで零様の精液で支配されてるみたいで、最高……♡

「ぎゅ……♡　ごく……♡　がっ……♡　ずずーー♡　ごきゅっ……♡」

零様のお射精の威力がどんどん弱まっていく。
その隙に私は、お口の中の精液をどんどん飲み込んでいく。
このまま窒息してもいいや……♡　だって零様の精液なんだもん♡
私は、少し苦しくなりながらも濃い精液を飲み干す。
そして、全部飲み終えた頃に、零様のおちんちんを口から解放する。

「ごめん！　また出るっ！」

ドビュッ！！　ビュビューーーーーーー！！

「ふぇ……♡」

口から出す時に、唇がカリ首をなぞったようで、その刺激で零様が再びお射精してくださった♡

口から出しているので、飲む事ができない。

そのかわり零様の精液は私の、零様専用精液受け皿に注がれた。

「んん～～～～～～♡♡♡」

「もっと扱いて……！」

私は顔で零様の精液を受け止めながら、左手で零様のおちんちんを激しくシコシコしていく♡

シコシコする度に、顔にかかる精液の量が増えていって、私の顔はどんどん重たく、熱くなっていく♡

口元に精液が垂れてきたら舐め取り、鼻元に垂れてきたらすする。

そうすると、お顔だけじゃなく、鼻とお口も零様の精液で満たされて最高に幸せになる♡

「美結、ラスト出るっ！」

ドビューーーーーーー！！　ビュビュッ！！

零様の言葉通り、最後の最後に大量の精液が顔にかかった。

見えないのでわからないけど、多分ゼリー状だと思う。

目元がとっても重い……♡

あれ……でも、これ……目を開けないって零様に失礼だよね……？

つい目を閉じてしまったけど、これじゃあ零様のお射精の瞬間も見れないし、精液だって見れない。

それじゃ駄目だ。多分、他の性奴隷の人達はおしっこも精液も目を開けて受け止めてるはず！

「んっ……♡」

目を開けると、目の中に大量の精液が入ってくる。

正直、めちゃくちゃしみる……でも、この痛みが零様に尽くせてる実感があって、とっても心地良い……♡

これ、精液目薬だ……♡

「ふぅ……」

零様の方を見ると、ソファの背もたれに寄りかかって目を瞑っている。

「零様……もう一度お眠りになられても大丈夫ですからね♡」

「うん。ありがとう。そうさせてもらおうかな」

零様は、大量にお射精して疲れたようで、そのまま眠りに就かれた。

私は、零様の寝息を聞きながら、精液目薬を楽しみ、さらに顔にかかった精液を塗り拡げたり口に含んだり鼻ですすったりして、零様の精液を存分に味わい尽くしていた。

第１０７話　美結のご奉仕フェラで、顔と口に大量射精♡♡♡♡♡♡（後書き）

美結の物語はもう少し続きます！

次話では、約束通り美結の事を犯しますので、お楽しみに！

第１０８話　美結への中出しレイプ♡♡♡♡♡♡

「ふわぁ～……」

また眠ってしまっていたようで、俺は大きなあくびをしながら目を覚ました。

「ん？」

床を見ると、そこには壁に寄りかかって眠る美結の姿があった。

「そんなとこじゃ体痛いだろうに……。ってか、無防備だなぁ～」

美結の姿は、服を着崩しておっぱい丸出し、パンツを完全に脱いでスカートを捲ったマンコ丸出し状態だった。

そんな格好で寝てるもんだから、俺は寝起きなのもあってめちゃくちゃ興奮した。

「よいしょ」

俺はソファから降り、美結の前にしゃがみ込む。

「こうして見ると、美結のおっぱいでかいよな～」

俺は両手で美結のおっぱいを揉んでいく。

この大きさ、雫とかと同じくらいなんじゃねぇか？

「ってか、寝てる女子のおっぱい揉むのって背徳感半端ないな」

これって寝込みを襲ってるって事になるんだよな。
何気に初めてな気がするな。

「こっちも……おいおい、こいつどんだけ興奮してんだよ。愛液でビチョビチョじゃねぇか」

右手でおっぱいを揉みつつ、左手をマンコに持っていくと、そこは大洪水状態だった。
俺が眠ってる間にオナニーしていて、俺へのフェラでさらにオナニーをしていたようなので、濡れに濡れまくったのだろう。

「これ、何回イッたんだ？」

マンコを触ると、ありえないくらいの愛液が溢れてくる。
しかも、少し触れただけなのにヒクヒクして穴が開いたり閉じたりしている。

「これ、眠ったままイカせられるか？」

俺は大洪水マンコの膣（なか）に指を挿（い）れる（人差し指と中指）。
そして、そのまま激しく手マンを開始する。

「んんっ……♡」
「寝てても喘ぐんだ」

手マンをしだすと、美結は小さく喘ぎだす。
もしかしたら起きているのかもしれないが、俺はもうそんな事どうだってよかった。
とにかく今は、目の前の変態女をメッチャクチャにしたい。

「どんどん溢れてくるな」

手マンをしていると、マンコからはまるで中出しでもしたかってくらいの、白濁液が溢れてくる。

さらに、手を動かす度に「クチュクチュ♡　グチャグチャ♡ビチャビチャ♡」と言う、エッチな音が部屋中に鳴り響く。

「んんっ……♡　んぅ……♡」

ぷしゅぅぅぅぅ♡

美結はイッたのか、潮を吹いた。

「もう我慢できんわ」

俺は丸出しだった勃起チンコを、美結の大洪水マンコに挿れていく。

「同意なくやってるから完全なるレイプだけど……気にする必要はないだろ」

俺は何も気にせず、美結のマンコにチンコをぶち込む。

「ぐっ……♡」

チンコを挿れられただけでイッたのか、美結の腰は、チンコを挿れた瞬間ビクンッと跳ねた。

「これが美結のマンコか……！　めちゃくちゃ締め付けが激しい

……！　こんなの気持ちよすぎてもう出るっ！」

ドビュッ！！　ドビュビュビューーー！！！

俺も挿(い)れただけでイッてしまい、大量の精液を美結の膣(なか)に注いでしまった。

寝込みを襲ってレイプして勝手に中出しとか、罪悪感と背徳感がすごすぎて――、

「興奮が収まらない……！」

俺は出しても一向に萎えないチンコを、美結の子宮(おく)目掛けて思い切り打ち込む。

「んんぅぅぅ♡♡♡」

あ、これ完璧に起きたな。

「ふぇ……？　れ、零様……？」

「ごめんな。美結のマンコ、勝手に使わせてもらってる」

「マンコを……？　ふわぁ～♡　嬉しいですぅ♡　私なんかのオマンコを、零様が使ってくださるなんてぇ♡　中出しってしてくださいました？」

「さっき、一回中に出した」

正直に言うと――、

「嬉しいぃ～～～～♡♡♡　私のオマンコで気持ちよくなってくれただけじゃなく、中出しまでしてくださるなんてぇ♡♡♡　今

初めて、女で生まれてきて良かったって思えてますぅ♡♡♡」
「そんなに嬉しいのか？」
「はい♡　私が女で生まれた意味。オマンコを持ったのは、零様に出会い、零様に犯してもらい、零様の精液を受け入れる為だったんだと、今実感して最高に幸せです♡」

美結は俺の首に手を回し、軽くキスをしてから――、

「私の子宮は、零様の精液タンスです♡」
「タンス？　タンクじゃなくて？」
「はい♡　私の子宮はいつでもどこでも精液を収納できる精液タンスなんです♡」
「取り出したりはできないだろ？」
「そう、ですね……それはできないのですが……その……精液タンクは他にもいるかと思って……何か、私だけのオリジナリティがほしいなと思いまして……」

なるほどな。
無自覚に嫉妬して、他の女子と差別化を図りたかった訳か。

「よし。今日から美結は俺専用の精液タンスだ。これから沢山収納してやるからな」
「は、はいっ♡　お好きな時にお好きなだけ収納してくださいっ♡」

♥♥♥

「イッグ……♡♡♡」

私は今、零様に犯していただいている。

目を開けた時、私は幸せでどうにかなってしまうかと思った。
だって、零様に犯してもらえてるんだから♡
逆レイプされて、中出しもなんて、世の女子全員が一度は妄想した事だ♡
男の人に逆レイプされて、大量の精液を中に出されてめちゃくちゃになるまで犯される♡
そんな妄想を、女子なら一度は必ずしている。
私ももちろんそんな妄想をしており、それをオカズに毎日オナニーしている♡
その妄想が今日、全て叶った♡
「美結、ソファ行くぞ」
「ひゃい……♡」
ソファに座る零様の上にまたがり、おちんちんをオマンコに挿れさせていただく。
「んんぅ……♡　あぁぁ♡」
対面座位の体勢で、零様は私を犯してくださる♡
「んんぐぅ♡　んんぁ♡　あああ♡」
零様が私の腰を両手でがっちり掴んで、上下に揺らしながらおちんちんを突き上げてくる。
それが気持ちよすぎて、私はもう何回も勝手に軽イキしてしまっていた♡

断りもなく勝手にイッてしまうのは、本当はイケナイ事だけど、零様のおちんちんが気持ちよすぎて我慢なんかできない♡

「美結、出すぞ……！」

「は、はいぃ～♡　出して♡　出してくださいぃ♡　零様専用の精液タンスにぃ♡♡♡」

「出るっ！」

ビュビューーーーーー！！！　ビュビューーーーーー！！！

「んあああああああああ♡♡♡♡♡」

零様の精液、来たぁぁぁぁ♡♡♡♡

子宮にビシャビシャ精液がかかってる……♡

口の中に出していただいた時と同じ……ううん、それ以上の威力と量で子宮が満たされていく……♡

あっという間に子宮は精液でいっぱいになり、お腹が重たくなっていく♡

「ふぅあああああああ♡♡♡♡♡」

零様が激しくおちんちんを突き上げてきた。

イッてる最中だったので、気持ちよすぎて変な声を出してしまった。

「れ、零様……♡」

「まだまだ犯すからな」

「は、はいぃ♡　お願いしますぅぅ♡♡♡」

零様が乳首に吸い付きながら、おちんちんを突き上げてくださる♡

あ～♡　乳首もオマンコも気持ちいい♡

幸せ過ぎるぅぅ♡♡♡

「零様零様零様

「今日どうするかな～。もう日も暮れるしな～」
「ちゅぱっ♡　それでしたら、ホテルを予約してありますので、今日はそちらでお休みしましょう」
「マジか。サンキューな。じゃあそのホテルでご褒美セックスしてやるよ」
「ほ、本当ですか！　ありがとうございます！」

やった♡　やった♡
ホテル予約しといて良かったぁぁ♡♡♡

「じゃあ、この後の予定も決まった事だし、そろそろイカせてくれ」
「あ、はい♡」

私はフェラを続行し、零様に沢山射精していただいた。
口内射精回数、５発。

精液が美味しすぎて、全部飲み干しちゃった♡

第１０９話　再会からの手コキ搾精♡♡♡♡♡♡

「んあああああああああああ♡♡♡♡♡　イッグぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡」

ドビュルルルルルルルルルル！！！！！

「はぁはぁ……♡」

ネカフェでヤりまくった後、俺と美結はラブホに来ていた。

食事も取らずに俺達はひたすらヤりまくった。

玄関で廊下でキッチンでリビングでトイレで風呂でベッドで。

その全てを中出ししたので、トータルで２０発は超えている。

今は朝の５：００。

「美結、最高だったよ」

「あ、ありがとうございます……♡♡♡　零様のおちんちんも、本当に最高でした……♡♡♡　私は零様専用の精液タンスなのでいつでもどこでもお好きな時に呼び出してお使いくださいね♡」

「あぁ。サンキュー」

俺達は一旦眠る事にした。

起きたのは午前１１：００だった。

♡　♡　♡

「それでは♡」
「あぁ。またな」
「はい♡」

ホテルを出た後、美結は仕事があるので神奈川に帰って行った。

「さて、これからどうするかね」

俺はスマホを開く。

連絡先には、瑠李、桃、華、燐、巴、黒乃、紗夜、沙耶香、雫、奈央、リサ、鈴音、真耶子、澪、恋、ユイ、愛莉、栞、光、美結の名前が載っている。

こうして見ると、本当不思議だよな。
前世ではほとんど女子と関わる事なんてなかったのに。

「う～ん……」

俺がスマホを見ながらどうするか考えていると、後ろから声をかけられた。

「あれ？　零様？」
「ん？」

後ろを振り返ると、そこにいたのは――、

「おっ！　沙耶香の双子の姉の一之瀬　玲奈さん？」

「覚えていてくださり、光栄です♡　改めまして、沙耶香の双子の姉の一之瀬　玲奈です。よろしくお願いします♡」
「よろしく。でもなんでこんな所に？」
「今、大阪に住んでいるんです」
「あ、そうなんだ」

初めて会った時に、父の方について行ってると言っていたからその関係で、大阪に住んでいるんだろう。
でも、これは思いがけないタイミング！

「ねぇ、一之瀬さん」
「玲奈って呼んでください」
「玲奈、もしよかったらさ、今からここ入らない？」

俺がラブホを指さして言う。

「う～ん……ラブホで零様にご奉仕するのも素敵なのですが……あ、そうだ！　ついてきてもらってもいいですか？」
「ん？」

俺は玲奈に手を引かれ、どこかに連れて行かれた。

♥　♥　♥

まさか零様と会えるなんて！
生理でテンション下がってたけど、そんなのどうでもよくなるくらい、テンションが上った♡

ラブホ前に立っていたから、おそらく誰かを犯していたんだろう。
その人がとても羨ましい。

沙耶香はすでに零様のお気に入りの性奴隷になっていて、いつも電話越しに自慢してくる、

それが羨ましくもあり、悔しくもあった。
なんで私は零様の性奴隷になれていないのか。
なんでご奉仕できないのか。なんで使ってもらえないのか。

私は毎日零様の事を考えながらオナニーをしている。
零様にこんなシチュで、こんなプレイでめちゃくちゃに犯される、ご奉仕させていただく事をいつも考えている。
最近では授業中もその事ばっか考えていて、休み時間の度にトイレに行ってオナっている。

そのくらい零様の事を想い、慕っている。
零様にいつかまた会えたら、絶対に沢山ご奉仕する。そう決めていた。

その夢が、こんな所で叶うなんて嬉しすぎる！

「着きました♡」
「カラオケか」
「はい♡」

私は零様と一緒にカラオケにやってきた。
ラブホでもよかったんだけど、カラオケで大好きな人にご奉仕するのが夢だったので、つい連れてきてしまった。

部屋に入った私達。

先に零様に入室してもらい、私が後から入る。

そして、ドアを閉めると、私は零様に抱きつき股間を撫でる。
「っ！？　　い、いきなり！？」
いきなりで驚いたのか、零様は驚きの声を上げた。
んふふ♡　　ものすごく可愛い♡

私の今日の格好は、肩出し谷間強調ニットで、パンツがモロ見える激ミニスカ。
これは私に取って普通の格好だけど、エロいって思ってもらえるかな？

「零様……私、ずっと夢見ていたんです。もし次、零様に会えたら、沢山ご奉仕したいと。だから、今日は沢山ご奉仕させてください……♡」
「もちろんだ。逆にお願いしたいくらいだ」
「ありがとうございます……♡　　嬉しいです……♡　　あ、あの……」
「ん？」
「この格好……エロいって思ってもらえますか？」
「当たり前だろ。エロすぎて正直、さっきから興奮しっぱなしだ」
「う、嬉しいです……♡♡♡　　これから沢山ご奉仕するので、沢山気持ちよくなって、いっぱいザーメン私に出してくださいね♡」

私は背後から抱きついたまま、零様のズボンとパンツを脱がす。
うわぁ～……♡♡♡　　これが零様のチンポ……♡♡♡
太くて固くて、大っきい……♡♡♡
これって仮性包茎ってやつだよね？　　女が一番好きなチンポだ……♡♡♡

まさか大好きな人が、憧れの仮性包茎だなんて、最高すぎる……♡♡♡

私は零様のチンポを、ゆっくりと扱いていく。
は、初めてだからちゃんとできてるか不安……。

「れ、零様……や、やり方は合ってますかね……？」
「うん。合ってるよ。大丈夫」

よかった～……！
皮を剥くと、中から高いカリ首と真っ赤な亀頭が出てくる♡
カリ首を触ると、零様はビクッと腰を震わせる。
亀頭からはヌルヌルした液体が溢れてきて、カリ首には白い粘膜が張られている。

これが我慢汁で、カリ首にあるのがチンカスってやつかな？

一旦手をチンポから離し、人差し指につけたチンカス？　を舐めるとすっごく美味しかった♡
脳に電気が走ったかと思うくらい、衝撃を受けた。

な、何これ……ずっと、一生舐めてたい……♡

「失礼します」

人差し指で我慢汁を掬い、口に含む。

こ、これも美味しい～～～～～～♡♡♡♡♡

ちょっとしょっぱいけど、そのしょっぱさがちょうどよくて癖になる♡
チンカスとの相性が抜群で、これを交互に味わえば無限ループの出来上がりだ♡
我慢汁とチンカスでこんなに美味しいんだ。ザーメンの味はどんななんだろう……♡
沙耶香や紗夜ちゃんは、とても美味しそうにしてた。
き、気になる……。
「零様、前、失礼しますね」
私は零様の前に回り、チンポの前でしゃがみ込む。
「いっぱい手コキご奉仕させていただくので、いつでもお好きな時に出してくださいね♡」
「あぁ」
私は手コキを再開する。
皮を剥いたり、戻したり♡
ゆっくりと上下に皮を動かしていく。
それがとても気持ちいいのか、零様は気持ちよさそうな顔をしてくれている♡
皮を戻す時に、ぷくぅ♡　っと我慢汁が溢れてきてくれるのがとても嬉しい♡
それを左手の手のひらで亀頭に塗り拡げる。
すると、零様は腰をビクつかせて感じてくれる♡

右手でシコシコ♡　左手でぬりぬり♡
それを繰り返すと、零様が――、

「ごめんっ！　もう出るっ！」
「はい♡　出してください♡」
「くっ！」

ビュルっ！！！！！　ビュビュ！！！！！　ビュビューーー！！！！！！

私は口を大きく開け、零様のザーメンを受け止める。
右手で手コキしながら、ザーメンは口で。

一度やってみたかった事だ♡

零様の射精を見ながら、ザーメンを飲む事ができるなんて幸せ過ぎる♡

そして何より、ザーメンが美味しいぃぃ♡♡♡♡♡

我慢汁もチンカスもものすごく美味しかったけど、それと比にならないくらい、ザーメンが美味しい♡
沙耶香や紗夜ちゃんが、あんな蕩けた顔をしながらザーメンを口にする気持ちが分かる♡

こんな美味しいの、蕩けるに決まってる♡

ブビュッ！！！！！　ビュビュ！！！！！

「んっ♡　ごくごく♡」

射精中も手コキを続けると、尿道からとめどなくザーメンが出続ける♡
出続けるザーメンを、私は一滴も残らず口に含んでいく♡
でも、口に入り切らなかったザーメンがおっぱいに垂れていく。
「うわ、エロ……！」
ザーメンが谷間を沿って垂れていくのを見た零様は、チンポをビクッとさせて、さらにザーメンを吐き出してくれる♡
私なんかの体を見て興奮してくれるなんて……♡
「もっふぉいっふぁいらひへふらはい♡♡♡♡」
「くっ……！　まだ出るっ！」
ブビュッ！！！！！　ビュビュッ！！！！！　ビュビューーーーーーー！！！！！！！
「んっ♡　ごくごく……♡♡♡」
零様はいっぱいザーメンを出してくれる♡
口の中も、手も、おっぱいも零様のザーメンで染められていく……♡♡♡♡
こ、こんなの幸せ過ぎるぅぅぅ♡♡♡♡♡
この後、零様の射精が収まるまで手コキをし続けた。
無限に出るのでは？　と思うくらいザーメンが出続けた♡

私のニットの胸元が、ザーメンを吸って変色した♡
このニット、洗わずに取っておこう♡

第１０９話　再会からの手コキ搾精♡♡♡♡♡♡（後書き）

次話は、玲奈の口マンコを犯しまくります！

フェラにイラマをしまくり出しまくるので、お楽しみに！

第１１０話　玲奈の口マンコに、大量中出し♡♡♡♡♡♡

「なぁ、玲奈」
「はい？」
「次は口でしてもらってもいいか？」
「もちろん、喜んでさせていただきますが……あれだけ出してくださったのに大、丈、夫、です、か……？」

聞くまでもなかった。
零様のチンポはすでにギンギンに勃起していて、私の目の前でピクピク脈打っていた。

その度に先っぽから、さっき出したザーメンの残りと我慢汁がどぷぅ～♡　っと溢れ出てくる。

「この通りだ。してくれるか？」
「はい♡　もちろんです♡　では……失礼致します♡」

私はガニ股のＭ字開脚をしながら、零様のチンポを握る。

さっきあれだけ出したのにまだこんなに硬くて、熱くて元気だなんて……♡　素敵♡♡♡
少し扱くと、ぬちゃ♡　くちゃ♡　と言うエッチな音が鳴って、私はもう我慢ができなくなる。

「それでは、いただきます♡　はんむ♡」
「くっ……！」

私はチンポの亀頭を口に入れる♡

口の中に入れた瞬間、私は軽イキしてしまった♡

（何これ♡　指でじゃなくて、直（じか）で我慢汁とチンカスを味わうのやばすぎる♡　脳が痺れてるような感じがして、オマンコ軽イキするの止まらない♡　我慢汁の中にザーメンが混じってるのが美味しさを際立たせてるぅ♡）

私は腰をくねらせながら、零様の腰を両手でしっかり掴みながら、ノーハンドでフェラご奉仕を開始する。

「じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　じゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡　ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぶっ♡　じゅるるるるるるる♡♡♡」

頭を前後に振りながらチンポを扱き、その最中に舌で亀頭を舐め回し、溢れ出てきた我慢汁を吸う。

それを繰り返す。

「じゅるるるるるるる♡　ぎゅぶっ♡　じゅぼっ♡　れるれるれる♡　じゅるるるるるるる♡　ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぶっ♡　じゅるるるるるるる♡」

チンポからはどんどん我慢汁が溢れてきて、途中からザーメンが少しだけ漏れ出たりもしている。

「れ、玲奈……！　も、もう……！」

「じゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡　はまんひらいへっ♡　ぎゅぶっ

♡　じゅぶっ♡　いっふぁいっ♡　れるれるれる♡　ぎゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡　はーめんらひへふらはいっ♡♡♡　じゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡　じゅぶぶぶぶっ♡」

「出るっ！」

ドビュッ！！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！　ビュビューーーー！！！！！

「んぶっ！？　んん～♡　ん～～～～～♡♡♡　ごくごくごくごく……♡♡♡」

チンポが口の中で大きく跳ねて、鈴口から勢いよく熱々のザーメンが放たれた♡

舌の上にザーメンが触れたと思った次の瞬間には、口全体にザーメンが広がり、すぐに口いっぱいにザーメンが満たされていく♡

すぐに飲み込んでいかないと、量が凄まじいので口から溢れそうになってしまう。

私はこぼしたりしないように、ザーメンを飲み込んでいく。

でも、飲み込んだら飲み込んだだけ、チンポからザーメンが溢れ出てくる。

ザーメンを飲み込みながらも、亀頭を舌で刺激していると、舌がザーメンでコーティングされていくのが分かった♡

どんどん口の中がザーメンで満たされていき、私はまた勝手に軽イキをしてしまう。

「玲奈っ！」
「んぶっ！？」
零様が突然、私の頭を掴み、チンポの根本まで引き寄せてきた♡
こ、これってイラマだぁ♡♡♡
「悪い……！　我慢できない……！」
（いいんですよっ♡　いいんですよっ♡　私のお口は零様専用の口マンコですから♡　好きなように使いたいようにお使いください♡　いっぱいザーメンを口マンコに中出しして、口マンコ壊してください♡）
「んぶっ♡　ぐっぶっ♡　じゅっぶっ♡　ぎゅぼっ♡　ぐぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡」
零様が私の頭を押さえながら、腰を激しく振ってチンポを出し入れする♡
あ～♡　本当に口がマンコになったみたい♡
幸せ過ぎるよぉ～♡
沙耶香もしてもらったりしてるのかな～？
今度双子揃って零様にご奉仕したいなぁ～♡
「じゅぞっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぐぼっ♡　じゅぼっ♡」
「出るっ！」
ドビュルルルルルルルルル！！！！！　ビュルルルル

ルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！　ビュビューーーーーー！！！！！！！

「んぶぅっ！？」

イラマザーメン来たぁぁぁ♡♡♡

フェラの時と違って、ザーメンが喉奥に直接注がれるから強制的に飲み込む事となる♡

自分のタイミングとかで飲めないからかなり苦しい……♡

けど、その苦しさが気持ちいい♡

零様は私の頭をぎゅっと押さえつけ、亀頭を喉奥にぴったりとくっつけたままザーメンを吐き出し続けてくれる♡

その為、私は喉奥にザーメンを受け続け、何度もえずいてしまっている。

ご、ごめんなさい……！　えずいちゃってごめんなさい……！

でもその分、しっかりとザーメンを飲ませていただきますので、なんとかお許しください……！

「玲奈……！　まだ出るからな！」

いっぱい出してくださいぃ♡♡♡

零様はこの後、数分間ザーメンを出してくださった。

射精が止まった時には、私の口の中はザーメンで溢れていた♡
大量に出されたので、口の中でザーメンが泡立っていて、少し息をすると「がぼがぼ♡」と、うがいする時のような音が鳴った♡

私は口いっぱいのザーメンを残さないように、ゆっくりと時間をかけて飲み込んでいった♡

零様は出し疲れたのか、椅子に座り、背もたれに寄りかかっていた。

ごゆっくりなさっていてください♡　零様が復活するまでにこのザーメン、飲み干しますので♡

第１１１話　玲奈の尻穴ご奉仕♡♡♡♡♡♡

「ごくっ……♡　ごくっ……♡」

玲奈が、Ｍ字開脚をしたまま口の中の精液を飲み込んでいる。

出しすぎたからな～。飲み込むのも大変だろう。

ってか、パンツがエロすぎる……。

紫のＴバックとか、エロすぎるだろ……！

マンコに食い込んでるから、マンコもアナルも丸見えだ……！

ヤバい……また勃ってきた……！

「んっ！　ほ、ほめんなはい……！？　まらのみひれへなふへ……！？」

玲奈は口の中にある精液をこぼさないようにしながら、俺の勃起を見て謝罪してきた。

「いや、別に気にしなくていいぞ？　ゆっくり飲んでくれ」

「ひ、ひへ！？　れいはまほ、おまはへふるわへにはいひまへん！？　なのれ……！」

「なので？」

玲奈は口を閉じ、立ち上がる。

そして、スカートを脱ぎＴバックも脱いでいく。

そして、テーブルの上に上がり、四つん這いになり俺に向かってケツを突き出してくる。

マンコもアナルも丸見え……どっちもがヒクヒクしてる……！
アナルなんてめちゃくちゃパクパクしてる。

「っ♡」

玲奈は口の中にある精液をこぼしたくないようで、無言のままアナルを拡げてくる。

「もしかして、アナルを使えって事？」

俺がそう尋ねると、玲奈は首を縦に振り肯定してきた。
アナルセックスか。真耶子として以来あんまりしてなかったな、そういえば。

「挿れる前にほぐした方がいいよな？」

俺がそう聞くと、玲奈は首を横に振った。

首を横に振ったって事は、ほぐさなくていいって事だよな？
って事はすでにアナルは開発済みで、いつでも使用可能って事か？

「もうこのまま挿れていいって事？」

玲奈がコクコクと頷く。

「了解。じゃあ、遠慮なく挿れさせてもらう、ぞっ！」

「んんーーーーーーーーーー♡♡♡♡♡」

俺は玲奈のアナルに、チンコを遠慮なくぶち込んだ。

口を開けそうになってしまったのか、玲奈は慌てて口を手で押さえた。

そんなに俺の精液を大事にしてくれるなんて、めちゃくちゃ嬉しいな。

♥♥♥

「んんーーーーーーーーーー♡♡♡♡♡」

零様のチンポが、アナルに挿入(はい)って来たぁぁぁぁ♡♡♡♡♡

今までずっとディルドで開発してきててよかったぁ♡♡♡♡♡

零様のチンポをしっかり受け入れる事が出来たよぉぉ♡♡♡♡♡

「んんっ♡　んん〜〜〜〜♡♡♡　んんーーー♡♡♡♡」

口の中にはまだ、ザーメンが残っている。

あともう少しで飲み干せるのだが、その少しが中々難しい。

本当はオマンコを使ってほしかったんだけど、沙耶香から零様は生理中に無理してセックスしたりするのは好きじゃない、と聞いていたのでアナルを使っていただいた。

それを聞いてからアナル開発を始めたので、ちゃんと零様に使ってもらえてよかったと安心している。

「んっ♡　んんっ♡　んん〜♡　んーーー♡」

口の中のザーメンを飲み込みたいけど、アナルを突かれると中々飲み込めない。
でも、少しずつだけどザーメンをのみ込めっていってる……。
もう少し……！

「ごくっ♡　んはあああああああ♡♡♡」

最後の一口を飲み込めた私は、口の中からザーメンがなくなった瞬間、嬌声を上げた。

だって、だってぇ♡　アナルが気持ちよすぎるんだもん♡♡♡

「れ、零様ぁぁ♡♡♡　ザーメン飲み干すのが遅くなってしまい申し訳ございませんぅ♡」
「いや、気にするな。それより、飲み干せたなら尻穴奉仕に集中しろ！」
「はいぃぃぃぃ♡♡♡♡♡　零様に満足していただけるよう、尻穴奉仕をさせていただきますぅぅ♡♡♡」

私はアナルをキツく締め、穴内（なか）のチンポを締め付ける。

「おぉ……！　めちゃくちゃ締まってきて気持ちいい！」
「よかったですぅ♡♡♡　もっともっと気持ちよくなって、たっくさんザーメン出してくださいぃぃ♡♡♡」

零様は、私の腰を力強く掴み、腰を打ち付けてきてくださる♡
その度に、アナルの奥深くにチンポが当たり、私は軽イキを何度も繰り返してしまう♡

自分でアナルを開発してる時は、アナルじゃイケなかったはずなのに、零様に犯されたら簡単にイッちゃったぁぁ♡♡♡

やっぱり零様素敵ぃぃ♡♡♡

「玲奈、もう出すぞ！」

「ひゃいぃぃ♡♡♡　出して♡　出して♡　出してください♡♡♡」

「出るっ！」

ドビュッーーーーー！！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！

くださいいぃ♡♡♡」
「サンキュー。じゃあ、次行くぞ！」
「あああああああああああ♡♡♡　尻穴えぐられるぅぅ♡♡♡♡♡」

零様は私のアナルを、この後数時間犯し続けてくださった。

♥　♥　♥

「がっ……♡　うっ……♡　ふっ……♡」

私はテーブルの上で、お尻を高く突き上げた状態で上体をテーブルに突っ伏し、全身をビクビク震わせていた。

零様にアナルをめちゃくちゃに犯されて、私はイキまくったのだ。
潮もおしっこも大量に漏らしてしまった。
おかげで床はびちゃびちゃだ。

「アナルからの逆流精液も、中々にいいもんだな」

ぶぴゅ♡　ぶひゅ♡

零様は椅子に座り、私のアナルからザーメンが逆流するのを嬉しそうに眺めてくださっている。

少しお尻に力を入れると、ザーメンがどんどん溢れてしまう。
ザーメンが溢れてるのが自分でも分かるので、少しだけ恥ずかしい。

でも、零様が喜んでくださるのでえて逆流させてみる。

「れ、零様ぁ……♡」
「ん？」
「今日は本当にありがとう、ございましたぁ……♡　手コキにフェラ、イラマ、アナルセックス……零様とエッチできてとても幸せでしたぁ……♡」
「よかったよ。俺も玲奈とエッチできてよかった」

う、嬉しすぎるぅ～～～♡♡♡

「でもさすがに疲れたな。ここで休んでいくか」
「はい……♡　ここでゆっくりしていきましょう……♡」

私と零様は、延長しながらカラオケでゆっくりと時間を過ごして行った。

第１１１話　玲奈の尻穴ご奉仕♡♡♡♡♡♡（後書き）

今回は、ご感想でいただいた「尻穴奉仕」を取り入れさせていただきました！

いかがだったでしょうか……？　楽しんでいただけて、興奮していただけて、喜んでいただけておりましたら幸いです！

来週の金曜日はハロウィン！

去年と同様に、ハロウィン特別編を投稿予定です！

今回は【第六章】の前半で出会った女子達と、コスプレエッチをしていきたいと思っております！

栞、光、美結、玲奈。この四人が登場予定ですので、ハロウィン特別編を楽しみにしていてくださると嬉しいです！

（ハロウィン特別編となってはおりますが、投稿は翌日の１１／１になってしまうと思います……先にご了承いただけますと幸いです……）。

ハロウィン特別編！　ハッピーハロウィ～ン！ザーメンくれなきゃイタズラしちゃうぞ♡　ドエロ性奴隷達にザーメン連射パーティー♥♥♥（前書き）

※この特別編は、本編とは繋がりがありません。
本編では夏休み中となっているので、時系列がおかしいと思われるかと思いますが、特段気にせずにお読みいただけますと幸いです。

今回の登場ヒロインは、栞、光、美結、玲奈の四人となっております！
エッチな仮装をして、零にエッチな事をしてくる女の子達を思う存分お楽しみください♡

ハロウィン特別編！　ハッピーハロウィ～ン！ザーメンくれなきゃイタズラしちゃうぞ♡　ドエロ性奴隷達にザーメン連射パーティー♥♥♥

「到着しました」

俺、栞、光、玲奈の四人が美結に連れられやって来たのは、学校だった。

「なぜに学校？」

校門から中に入りながら、前を歩く美結に尋ねる。

「今日はハロウィンパーティーをするじゃないですか。だから会場が必要だなと思いまして。それで、どこがいいかなって考えていて、導き出した答えが――」

スリッパに履き替え歩き続けながら説明する美結。そして、とある場所のドアの前で立ち止まり、ドアを開けながら言った。

「学校の体育館です！」

その場所は体育館だった。

「この学校、実は私の母校でして、事情を校長先生に説明したら快く了承してくださいまして。なので、今日は私達しか入れないようにしてあるので、思う存分楽しめますよ♡」

「なるほどな」

俺達は体育館に入る。
美結がドアを閉め、先に入った俺達を追いかけてくる。
ステージの場所まで行くと、四人が持ってきていた荷物をステージ上に置く。
「それでは、早速ですが着替えさせていただきますね♡」
「あぁ。俺、トイレ行ってきてもいいか？」
「おしっこでしたら、ここでしていただいても構わないのですが……」
美結が寂しそうに言ってくる。
「いや、まぁそうなんだけど、どんなコスプレをするのか、着替え終わってから見たいなぁって思って。おしっこが出したいわけじゃないし」
「なるほど！　そうでしたか！　そこまで考えがいたらず申し訳ございません……！　それでしたら私達がトイレに行って着替えてきます！　わざわざ零様を歩かせるわけにはいきませんから。それでもよろしいでしょうか？」
「あぁ。俺は構わないよ」
「ありがとうございます。それではみんな、行こう」
「「「はい」」」
四人はトイレへと向かって行った。
「四人が着替えが終わるまで暇だな。何をするか……」
俺はスマホを取り出した。
すると、瑠李から連絡が入っていた。

「お、向こうもハロウィンパーティーしてるのか」
瑠李達もハロウィンパーティーをしているようで、みんなの仮装した写真が送られてきた。
揃いも揃って全員がエロコスプレで、見てるだけで勃起してくる。
「ん？　動画？」
メールには動画が添付されていた。
それを開くと、オナニーパーティーなるものが開催されているようで、俺を想ってのオナニーを皆がしていた。
「みんなに会いたくなってくるな」
俺はみんなのオナニー動画を、四人が戻って来るまで見続けた。
「「「「お待たせしました！」」」」
しばらくして四人が戻ってきた。
俺はスマホを鞄にしまい、四人を見る。
すると、すぐにフル勃起してしまった。
「おぉ～……みんなエロいな～……！」
美結はミニスカポリスのコスプレだった。
穿いている意味があるのかどうか分からない丈の短さのスカートで、下半身が丸見えになってしまっている。
ノーパンになっているので、陰毛やクリがはっきり見えている。
胸元も大胆に開けており、谷間が完全に見えており、少し動けば

乳輪が見えてしまう。
左太ももには、バンドのようなもので何かを装着していた。
栞はバニーガールのコスプレだった。
胸を大胆に露出させ、Gカップのおっぱいを丸出しにしている。
乳首はすでにビンビンになっている為、興奮しているのが丸わかりだった。
こちらもノーパンなので、ハイレグが股間に食い込み、マンスジやクリがはっきり浮き出てしまっている。
栞も左太ももにバンドで何かを装着していた。

玲奈はナースのコスプレだった。
真っ白なワンピースタイプのナース服で、胸元が大胆に開いている。
谷間が丸見えになっているので、そこに挟みたいと想ってしまう。
真っ白なので、乳首や乳輪が透けて見えており、乳首がビンビンに勃っているのが丸わかりだ。
玲奈もノーパンなようで、短いスカートからエロいマンコが見え隠れしている。
玲奈も左太ももにバンドで何かを装着していた。

光はチャイナ服のコスプレだった。
胸を全く隠さないチャイナ服で、Iカップのおっぱいが惜しげもなく持ち上げられ強調されている。
丸出しになっているので、陥没乳首が丸見えになっている。
光はお尻も大きい為、チャイナ服のお尻部分を持ち上げていた。
それにより、下半身の部分がぴったりと体にくっついており、クリの位置が丸わかりになっていた。
光もノーパンなようで、スリットの間から肌が直接見えていた。
左太ももにはバンドで何かを装着している。

「みんなエロくて可愛くて、最高だな！」
「「「ありがとうございます♡」」」
「せ、先輩……私、本当に似合ってますか……？」
「ん？　どうした光」

光が恥ずかしそうにスカート部分の裾を掴み、聞いてきた。

「わ、私デブだから……こういう可愛い衣装が似合わないと思うんです……」

デブ……？　全然太ってるようには見えないけど……。
あぁ、なるほど。胸もお尻も大きいからそれを気にしてるのか。

「光。光は別に太ってないし、ちゃんと似合ってるよ」
「ほ、本当、ですか……？」
「あぁ。それに、俺は光の大きなおっぱい、好きって言ったろ？
それに、その大きなお尻だって、叩きがいがあって最高なんだ。
俺の好きな体をしてるんだから、自信持て。な？」
「はい……！　ありがとうございます……！」

嬉しそうにする光に、栞と玲奈が抱きつく。
相当不安だったんだろう。光は涙を流していた。

「改めて言っておくぞ。お前達は俺が選んだ女だ。俺がしたくてした性奴隷達だ。俺の事を信じられない奴以外は、自分の体に自信を持て。いいな！」
「「「「はい！」」」」

四人の返事が、体育館に響いた。

「それでさ、その足に付けてるのって何？」
「あ、これはですね～」
美結がピンク色のリモコンを手渡してくる。
これは……そういう事か。
俺がリモコンのスイッチを押すと――、
「「「「んんっ♡」」」」
ブーーーーと言う機械音が鳴り始め、四人が感じ始めた。
マンコにローターが入ってるのね。
「いつでもお好きな時にそれをお使いください♡」
「分かった」
俺は一旦スイッチを切り、Tシャツの胸ポケットにしまった。
ちなみに、俺はズボンとパンツを脱いでおりチンコ丸出しだった。
「それでは零様♡　早速パーティーを始めようかと思うんですけど、よろしいでしょうか？」
「うん。でも何するんだ？」
「それはですね～」
美結は鞄から箱を取り出してくる。
「ここに入ってる紙に書かれたゲームをしたいと思います！」
美結の説明によると、箱の中に沢山の紙が入っており、そこにはゲーム内容が書かれているらしい。

引いた紙に書かれたゲーム内容を、やっていくらしい。
「あ、ゲームを始める前に。みんないくよ？」
「「「はい」」」
「せ～の」
「「「「トリック・オア・トリート♡　ザーメンくれなきゃイタズラしちゃうぞ♡」」」」
破壊力抜群の言葉を言ってきた。
これはヤバイな、チンコにめちゃくちゃ響く。
「それでは、零様、早速引いてください」
「あぁ。えっと……これだ」
「はい、確認しますね」
俺は、引いた紙を美結に渡す。
紙を広げ、中を確認する美結。
「最初のゲームは、狙え！　当てろ！　ぶっかけろ！　ザーメン射的ゲーム！」
美結が紙に書かれたゲーム内容を読み上げる。
「どういうゲームなんだ？」
「このゲームはですね、零様のおちんちんを零様が指定した人がシコシコして、ザーメンを残った三人にぶっかけます。誰が多くぶっかけてもらえるのかを競うゲームです」
「勝敗があるのか？」
「そうですね。ぶっかけられた回数が少ない人が敗者で、体育館を

二周してもらいます」

それ、絶対今考えただろ……。

「俺には罰ゲームとかないの？」

「れ、零様に罰ゲームなんてそんな！？　そんな無礼極まりない事いたしませんよ！　零様は沢山気持ちよくなって、好きな人に好きなだけザーメンをぶっかけてください♡」

「お、おう……分かった」

俺得だな～相変わらず。

「「それじゃあ零様、誰にシコシコしてもらうか決めていただいでもよろしいですか？」

「あぁ、分かった」

四人とも、自分を選んでくれと言わんばかりにこっちを見つめてくる。

「じゃあ……玲奈、頼む」

「は、はい！　ありがとうございます！」

俺と玲奈はステージ上に上がる。

そして、玲奈は俺の背後に立ち、チンコを握ってきた。

「チンポ♡　チンポ♡　零様のチンポ♡」

玲奈は嬉しそうにチンコを扱いてくる。

すでに我慢汁が溢れていたため、玲奈はそれを手のひらで亀頭に塗り拡げてきた。

「それじゃあ、私達は一列に並びましょう」

残った三人は、ステージの下で一列に並びだした。

「玲奈」

「はい？」

俺は玲奈に耳打ちをする。

誰に少なくかけるかの相談だ。

「分かりました」

「頼むな」

「はい」

玲奈はチンコを扱き始める。

我慢汁が溢れまくっているので、ぐちゃぐちゃと音が鳴りまくる。

「ヤバイ、もう出そう……！」

「零様、沢山ザーメン出してください♡」

「出るっ！」

ドビュッ！！！　ドビュビュビュっ！！！　ビュビューーーーーー！！！！

「んん～～～～♡♡♡　零様のザーメン来たぁぁ♡♡♡」

俺の最初の射精は、栞にぶっかかった。

ステージ上からかけたので、まず栞の顔にかかった。

顔にかかっただけでもかなりのエロさなのに、体にもかかっていくので、エロさがとてつもない。

「それじゃあ、次行くぞ」
「「「「はい♡」」」」

俺はこの後、玲奈の手コキで大量に射精をした。

♡　♡　♡

ステージ下には、精液まみれの女が三人。
栞に5発。光に5発。美結に3発。
俺はそれぞれに、この数出した。
つまり、敗者となって罰ゲームを受けるのは――、

「美結、お前だな」
「く、悔しいです……！」

言い出しっぺの美結を敗者にしたいと、俺は玲奈に耳打ちをした。
俺の言った通りに玲奈がしてくれた為、狙い通り美結を敗者にする事ができた。

「じゃあ、罰ゲームとして二周、走ってもらおうか」
「は、はい……」

美結は全身精液まみれのまま、走り始める。

「んひゃっ！？」
「「「んんっ♡」」」

俺はローターのスイッチを押す。
すると、走ってる美結を始め、全員が喘ぎ声を漏らした。

「れ、零様ぁ……い、今は駄目ですぅ……」
「いつでもいいんだよな？」
「そ、それはそう、ですが……あぁ……♡　は、走れなくなってしまいますぅ……♡」
「完走しないと、セックスはなしだからな」
「そ、そんなぁ……！？」

俺はローターの強さを「中」にする。

「「「んぁ♡」」」
「んん～～～～～♡♡♡」

「栞、舐めろ」
「ひゃい♡」

俺は感じている栞の前に、チンコを突き出す。
そして、フェラをさせる。

「オチンポ様♡　オチンポ様♡　おひんほはま♡」

嬉しそうに舐めてくる栞。
やっぱ栞と言えば！

「おら！」
「んぶぉぉぉっ！」

フェラじゃなくて、イラマだよな！

「玲奈、栞の頭を押さえつけろ」
「はい」
「んごぼぉぉぉぉぉ♡♡♡」

玲奈は栞の頭をぐぐぐっと押さえつける。
それにより、チンコがより深く口の中に入っていく。
亀頭が喉奥に当たるのが分かる。

「一旦出すぞ！」

ビュビューーーーーー！！！　ビュビュビューーーーーーーー！！！！！

「んぼぉ！？　んごぉ……！　ごきゅごきゅ……♡」

喉奥に俺は直接射精をした。
射精をしてもなお、玲奈は栞の頭を押さえつけている。

「光、こっちに来い」
「はい……♡」

俺は、そんな様子を見つめていた光を呼び寄せる。

バチンッ！

「んひぃぃぃ♡♡♡」

俺は腕に抱きつかせた光のケツを、思い切り叩く。
何度も何度も何度も何度も叩き続ける。

「せ、先輩のスパンキングしゃいこうれしゅ～♡」

スパンキングをされるだけでイッているのか、光はどんどん呂律が回らなくなっていく。

さらには、潮を吹いたり失禁したりしているので、床にどんどん水溜まりができていく。

「玲奈、アナルを舐めろ」

「はい♡」

俺は栞の頭を押さえつけさせるのをやめさせ、アナルを舐めるように指示する。

玲奈は嬉しそうに頷き、俺の背後に回りアナルを舐め始める。

「ぢゅるるるるるるるる♡♡♡　れろ♡　れろ♡　ぢゅるるるるるるる♡♡♡」

栞にはイラマをし、光にはスパンキング。玲奈にはアナルを舐めさせ、美結にはローターで感じさせながら走らせる。

なんか、最高な気分だな！

美結は走り切るのに一時間以上かけていた。

だから、セックスはなしにした。

フェラや手コキもさせずに、ローターでイカせまくり気を失わせてやった。

この日、結局セックスはせず、栞にイラマをしまくり射精を６発。

玲奈にはアナルだけを舐めさせ、精液はやらなかった。

光はスパンキングイキの虜になり、気を失うまでスパンキングをし続けてやった。

あれ？　ザーメンやらなきゃイタズラしてくるんじゃなかったの？

まぁ、一応全員にザーメンかけてやったからいいんだけど（玲奈は手に着いたザーメンを舐め取っていた）。

そんなこんなで、ハロウィンパーティーは終了した。

ハロウィン特別編！　ハッピーハロウィ～ン！ザーメンくれなきゃイタズラしちゃうぞ♡　ドエロ性奴隷達にザーメン連射パーティー♥♥♥（後書き）

「と、言う夢を見たんだが」
『いいですね！　ぜひ実現しましょう！』
電話越しに、美結が興奮した様子で言った。
『ハロウィンまで二ヶ月ありますので、色々と準備させていただきますね！』
「あぁ。頼むよ。俺は今カラオケでお楽しみ中だから、そろそろ切るわ」
『はい！　その場にいる性奴隷を、存分にお楽しみくださいね♡
失礼致します！』
通話が切れる。
「さて、延長もした事だし、もう一度寝ますかね」
俺は、椅子の上で眠る玲奈を見ながら、自分も眠りに就いた。

今回のハロウィン特別編、いかがだったでしょうか？
エッチシーンが少なくなってしまったのが、大変申し訳ないです……！
少しでも楽しめていただけていたら、幸いです……！

前書きの方で、本編とは繋がりがありませんと書かせていただいたのですが、繋げさせていただきました！
無理のない繋がりにしたつもりなのですが、いかがだったでしょうか……？
これで次話を楽しみにしていただけておりましたら、とっても嬉しいです！

来年のハロウィン特別編は、もっとエロく、もっと抜けるように書きたいなと思っております！
来年のハロウィン特別編を、今から楽しみにしていてください♡

それでは、次話をお楽しみに！
次話では、カラオケの店員さんが……？

第１１２話　カラオケ店員による……♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

「これがどういう事か、分かってます？」

「はい……すみません……」

私――椎名玲奈は、カラオケ店内にある女子トイレの個室で、正座をしていた。

便座には、右手にスマホを持ち、全裸で足を組んで座っている女子様が。

先程から女子様が動いたり喋ったりする度に、ぶびゅ♡　ぶびゅ♡　と言う、エッチな音が鳴る。

おそらく、お尻の穴からザーメンが逆流してきているのだろう。

……羨ましい……。

「あなたがした事、それが意味する事ってなんでしょうかね？」

「せ、性犯罪です……」

「そうですよね？　寝ている男性のチンポを勝手に触り、あげくの果てにフェラをして射精させるなんて」

「はい……」

そう。私はつい、魔が差してしまい、性犯罪を犯してしまった。

それを、目の前にいる女子様に写真と動画に撮られ、今この状況に至っている。

「あなた、お名前は？」

「し、椎名玲奈です……」
「玲奈って……まさかの私と同じ名前……性犯罪者と同じ名前とか、最悪過ぎるんですけど」
「す、すみません……」
「それで椎名さん、今何歳ですか？」
「に、２７です……」
「私からしたら、おばさんですね。ねぇ、おばさん？」
「は、はい……」

頭に足を置かれる。
なんだろう……この屈辱なのに胸の底から溢れてくる、ドキドキと興奮は……。

「店長さんっていらっしゃいます？　少しお話をしなきゃいけないかもしれないので」
「あ……その……あの……」
「え……？　もしかして、おばさんが店長さんなんですか？」
「あ……は、はい……」
「うわぁ～……店長さんが性犯罪を犯すんですか～しかもお店で。うわぁ～……」
「っ……」

私は俯くしかなかった……。
女子様の言う事は正しいから……。

「はぁ……この動画と写真、警察に提出したら一発でお縄ですよ？」
「そ、それだけは勘弁してください……！？　お願いします……！
な、なんでも言う事聞きますから……！　なんでもしますから……！」

私は額を床にピッタリとくっつけ、懇願する。
このままじゃ、逮捕されてしまう……。
男性経験がないまま、人生が終了してしまう……。
それだけは絶対に嫌だ……！
せめて、この身を男性にもてあそばれてから人生を終了したい……！

だから私は、全身全霊で懇願し続ける。

「お願いします……！　お願いします……！　お願いします……！」
「ふ～ん……なんでもするんですか？」
「は、はい……！　なんでも……！　本当になんでもします……！
いえ、させていただきます……！」
「だったら、私の言う事聞いてもらいますよ」
「はい……！」

頭から足をどけてくださった女子様は、便座から降り、仁王立ちをする。
お尻の穴からは、ザーメンがドバドバ溢れ出ている。
「ふふ。ちょうどもう一人ほしいと思ってたんです」
「ほ、ほしいとは……？」
「尻穴オナホが♡」
「っ……」
私は、何をさせられるのでしょうか……。

第１１２話　カラオケ店員による……♡♡♡♡♡♡

「あれ？　ここのお部屋のお客様、延長されてからかなり時間が経ってるような……？」

私――椎名玲奈は、カラオケ屋の店長を務めている。

昼から来店している二人のお客様が、退店のお時間間近になっても部屋から出てこないし、連絡もない。

このお店には防犯カメラがないので、お部屋の様子を伺う事ができない。

「一旦見に行きますか」

私はお客様のお部屋へと向かった。

コンコン。

「お客様～？　失礼いたします」

ノックをして、ドアを開けて中に入ると――、

「おわぁ……すごい臭い……♡」

中に入ると、エッチな臭いが充満していた。

「ごくっ……」

臭いに興奮して、トリップしかけた私が何気なく右側を見ると、そこには下半身裸の男性が座ったまま眠っていた。

男性自体、生で見るのが初めてなのに目の前にいる男性は――、

「お、おちんちん、丸出し……」

勃起しているのか、大きなおちんちんを丸出しにしながら男性が気持ちよさそうに眠っている。

「ごくっ……こ、これが、お、おちんちん……」

私は男性のおちんちんから、全く目が離せなかった。
一度見てしまえば、もう二度と目を離せない。
目を逸らすなと言われてるかのように、私の視線はおちんちんに釘付けだった。

この空間の臭いと、雰囲気、そしておちんちんの魔力で、私はつい魔が差してしまった。

「……はんむっ♡」

私は四つん這いになり、男性に向かってゆっくりと進んでいく。
そして、おちんちんの目の前までくると、私はそのおちんちんを咥えてしまった。

（こ、これがおちんちんっ♡　口に入れた瞬間、汗とおしっこの臭いと、嗅いだ事のない独特な臭い……多分ザーメンの臭いだ。その全てが口の中に広がって、鼻に通り抜ける♡）

「ひゃ、ひゃいほう〜♡」

私は、おちんちんを咥えたまま息を吸ったり吐いたりしておちんちんの臭いを楽しむ。

「はむ♡　ぢゅる♡　ちゅぶっ♡　れる♡　じゅるるる♡」

我慢ができなくなった私は、頭をゆっくり前後に振っていく。

舌で先っぽを刺激しながら、頭を前後に動かしていく。

「れる♡　ぢゅる♡　じゅぶっ♡　じゅぶっ♡　じゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡　ぢゅるるるる♡」

なんか、先っぽからお汁が溢れてきた……。もしかしてこれが我慢汁？

「れる……♡　ぢゅるるるるる♡」

我慢汁、美味しすぎるっ♡

舌で先っぽを舐めながら、思い切り吸うと我慢汁が大量に溢れてきた。

それを舌で味わい、喉で味わう。

今まで口に含んできたものより、数百倍美味しくて、私はこの我慢汁をずっと舐めていたいと思ってしまった。

我慢汁飴とかあったら最高かも♡

（待って……我慢汁でこんなに美味しいなら、ザーメンはどんななんだろう……）

「じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぢゅるるるるる♡♡♡」

私は、ザーメン欲しさにフェラを激しくした。

激しくすると、先っぽから我慢汁がドバドバ溢れてきて、口の中が幸せになっていく♡

「じゅぶっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡」

時折、頭上で喘ぎ声が聞こえてくる。

起きてしまったかと思い、見上げるが目を覚ましている様子はない。

だからだろう。私は誰も見てないと思い込み、フェラを続行してしまった。

「じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡」

（おちんちん、さっきより膨らんできた？　硬さも増してきてる感じが……すごく熱くて今にも破裂しそう）

と、思っていたら――、

ドビュッ！！！！　ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！

「んっ！？」

おちんちんが本当に爆発した。

先っぽから勢いよく、熱いのが飛び出してくる。
舌に触れる熱い液体。いや、ゼリーのような固形と言った方がいいかも。
それが舌に触れた次の瞬間には、喉に到達しており、すぐに喉奥に入り胃に入ってくる。
（こ、これがザーメン……♡　ザーメンの味ぃ……♡）
射精をしたんだと理解すると、私は頭をゆっくりと前後に動かす。
すると、おちんちんの先っぽからどんどんとザーメンが出てくる。
（こ、これ、どれだけ出るんだろう……♡）
無限に出るのでは？　と思ってしまうほどザーメンはどんどん溢れてくる。
口の中にどんどん溜まっていくので、それを飲み込んでいく。
固形でネバネバしているので、喉にへばりついてきてかなり飲みづらい。
でも――、
（今まで口にしてきた何よりも美味しい～～～♡♡♡）
私は今27歳。
社会の付き合いなどで、それなりに食事やら飲み物やらを味わってきた。

でも、そのどれよりもザーメンは美味しい！
どんな高級なものよりも、母親が作ってくれる大好きな料理よりも、ザーメンが美味しい！
ずっとこのザーメンを味わっていたい！
なんなら、食事や飲み物にザーメンを入れたり混ぜたりしたい！
ザーメンを主食にしたい！
そう思うほどに、このザーメンは美味しい♡
「ごくごくごく……♡」
段々と射精が収まっていき、やがて終わった。
終わってしまうと、ものすごく寂しくなる。
「ごきゅ……♡　ぢゅぱぁ♡」
おちんちんから口を離すと、白濁した糸が私の口とおちんちんの間にできた。
「これが、おちんちん……これがザーメン……凄すぎて……何も触ってないのに――」
「イッちゃいそう、ですか？」
「っ！？」

イキそう……と言いかけた所で、左側から声が聞こえてきた。
突然聞こえてきた声に、私の心臓は飛び跳ねた。
バクバクとどんどん鼓動が早くなっていく。
そうだった……このお部屋にはもう一人いたんだった……。すっかり失念してしまっていた……。
ゆっくりと、声がした方を向くと、そこにはスマホをひらひらと左右に揺らした女の人が座っていた。
椅子の上で体育座りをしている為、オマンコもアナルも丸見えだった。
アナルからはザーメンが溢れていた。
も、もしかして、アナルセックスと言うやつをしていたのだろうか……？
う、羨ましい……♡
はっ！？　じゃなかった！　この状況どうしよう！？
「店員さ～ん、人が寝てる間にな～にしてるんですか～？」
「あの、その……延長されてからかなりの時間が経っていたので様子を見に……」
「笑えるくらい早口になってるし。それでぇ？　様子を見に来るのとフェラをするのと、どう関係があるんですか～？　しかもちゃっかり射精までさせてザーメン飲んでるし」
「そ、それは……」
私は正座をした。でも、恐怖で目の前にいる女子様の顔を見るこ

とはできない。

「お説教が必要なんですけど、ここだと零様が起きてしまわれるので、トイレに向かいましょう」

「は、はい……」

女子様が立ち上がりながらそう言ってくる。

私は素直に従うしかなく、力なく立ち上がる。

女子様がドア付近に行く時、ちらっと男性――零様の方を見たような気がするけど、気のせいだろう。

「ほら、行きますよ」

「はい……」

女子様は、全裸のまま部屋を出た。

私は、その後をただただ項垂れながらついていく。

あぁ……人生終了だ……。

私はそう思いながら、女子様と一緒にトイレに向かった。

第１１２話　カラオケ店員による……♡♡♡♡♡♡（後書き）

そしてお話は冒頭に戻る！

いかがだったでしょうか……？

カラオケ店員……いや、店長さんが眠る零にフェラをして、そこを玲奈に写真や動画に撮られ脅されてしまう。

そして、まさかの同じ名前！

お名前募集で、「玲奈」が二つあった時から、同じ名前同士で何かしようとは決めていたので、ようやく実現できました～！

玲奈（一之瀬）は、玲奈（椎名）に一体何をしようと言うのか？

勘がいい方はもしかしたら、もうお気づきかもしれませんね！

それが合っているのか、それは次の次に投稿されるエピソードでご確認くださいませ！

次話じゃないの？　　と思われた方、申し訳ございません……！

次話は別の性奴隷を登場させていただきます……！

どのような性奴隷が登場するのか、楽しみになさっていてくださると幸いです！

１１／３０に、活動報告でちょっとしたお知らせがございますので、チェックしていただけますと幸いです！

それでは、次話をお楽しみに！

第113話　久しぶりの再会、ペット化を希望♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

ピコンッ♪

「お、玲奈からだ」

俺は部屋にいた。

店員さんが入ってきたと思ったら、いきなりフェラしてきて、ぎこちない割に激しくしてくるから、つい射精をしてしまった。

店員さんは俺が寝てると思ってるらしいので、起きていないようにするのが大変だった。

玲奈は俺が起きているのに気がついていて、部屋を出る前にアイコンタクトを送ってきた。

「何々……」

スマホのメッセージアプリを開き、玲奈からのメッセージを読む。

『零様。数時間ばかりお時間をいただけませんでしょうか？　零様のチンポを勝手にしゃぶった性犯罪者を零様好みの性奴隷に調教したいと思っております。

長時間お待たせしてしまう事になるので心苦しいのですが、お許しいただけると嬉しいです。

必ず、この性犯罪者を零様に喜んでいただける最高の性奴隷に仕

上げてみせますので、ご許可、お願い致します。』

と、書かれていた。

「すんげぇ丁寧。ここまで丁寧じゃなくてもいいんだけどな。えっと……」

『全然いいぞ〜。性犯罪者には遠慮も何もしないでいいからな。玲奈が思う俺好みの性奴隷に仕上げてくれ。

何時間でも待てるから、ゆっくり調教してくれ。』

「よし」

俺は返信した。すると、送った瞬間に既読が付き、その数十秒後に返信が来た。

「早っ」

内容を見ると――、

『ありがとうございます♡　必ず零様好みの性奴隷に仕上げてみせますので、楽しみにしていてください♡

チンポが苦しくなったら、オナニーではなく、カラオケ内にいる女共を好き放題犯してくださいね♡』

と、書かれていた。

「まぁ、この世界でならそれが許されるんだよな」

俺は『りょう〜かい』と返信をし、スマホを閉じた。

「とりあえず一旦飲み物取ってくるか。えっと、ズボンとパンツは……」

あれ？　俺のズボンとパンツがなくなってるんだけど、なぜに？

玲奈の服はあるけど、俺の服がない。

いや、本当になんで？

「まぁ、いいか。この世界でならチンコ丸出しで歩いててもなんも問題ないだろうし」

『うん。何も問題ないよ～。むしろ、君には常に全裸でいてもらいたいものだよ』

またこの声だ。

一体誰で何者なんだろうか？

「ま、確認も取れた事だし、行くか」

俺はコップを持って、部屋を出た。

第113話　久しぶりの再会、ペット化を希望♡♡♡♡♡♡

部屋を出て、ドリンクバーコーナーに行く間に数人の女子とすれ違った。

その全員がチンコに釘付けになっており、すれ違いざまに聞こえてくる声は――、

『え……マジで！？』『ちんちん丸出しで歩いている男性様なんて、この世に存在するの！？』

『ってか、男性様を生で見るの初めてなんだけど！』

『おちんちんってあんななんだ……やばい、舐めたい……♡』

『おっぱいで挟んで精液浴びたいんだけど♡』

『マンコぶっ壊してほしい～～～～♡』

などが聞こえてきた。

まぁ、機会があったらやってあげるよ。

俺は心でそう思いながら、ドリンクバーコーナーに向かった。

ドリンクバーでコップに飲み物を入れていると、後ろから人の気配を感じた。

邪魔にならないように退こうとしたら、声をかけられた。

「あ、あの～れ、零様、ですよね……？」

「え？　え、えっと～……」

声をかけて来た女性は、体にピッタリ張り付いた白いニットワンピースを着ていて、乳首と乳輪、クリトリスと陰毛が浮き出ていた。
首にはペット用の首輪をしており、長いリードを左腕に巻き付けていた。

「ごめんなさい。どこかで会った事ありましたっけ？」
「あっ！　ごめんなさい！　急に声をかけてしまって……！
私、小田あすかと言います。前にペットとなった女性といらしたペットショップの店員です」
「ペットとなった女性……ペットショップの店員……」

俺は思考を巡らせる。
そして、思い出した。

「あっ！　鈴音と行った時の！　俺のチンコ見ながら全裸オナニーをした人だ！」
「はい♡」

鈴音とのデートで、首輪やリードを買いにペットショップに行った時に、接客してくれた人だ。
初めて接する男に興奮していて、外では常にノーパン、本当は全裸で家でも外でも過ごしたいって言ってたド変態女だ。

「ごめん。俺、すっかり忘れてて……」
「い、いえ……！　謝らないでください！　思い出していただけただけで嬉しいですから！　こんな変態な女を覚えていてくださり、ありがとうございます♡」

ペットショップの店員――あすかは深々とお辞儀をした。
前屈みになるので、お尻が強調されてめちゃくちゃエロい！

「あ……♡」
「あすかの体がエロいから勃起しちまった」
「嬉しいです♡　私なんかの体で勃起していただけるなんて♡
おちんちんを出していらっしゃるのはとっても素敵なのですが、お召し物は？」
「あぁ～それがな、いつの間にかなくなってたんだ」
「え！？」
「性奴隷と来てるんだけど、その子の服はあるのに俺のだけなくなってたんだよ。だから、丸出しって訳。別に丸出しでもいいかな～って思ってさ」
「そ、それは私達女からしたら目の保養……最高のオカズなのでありがたいのですが……零様、寒かったりしませんか？」
「幸い、今は夏だからな。全然寒くない」
「それならよかったです♡」
「それよりさ」
「はい？」

バシャン。

「きゃっ♡」

俺はコップに入れていたメロンソーダを、あすかにぶっかけける。
ただでさえ透けて丸見えになっていた体が、濡れた事により服を着ていないんじゃないかと錯覚するほど透け、あすかの体が丸見えになった。

「今、一緒に来てる性奴隷がさ、他の女を俺好みの性奴隷にする為に席を外してるんだよ。だから、さ」

俺は喋りながらあすかに近づいていく。
と、あすかも俺に近づいてきて、チンコを握ってくる。
「お連れ様の調教が終わるまで、私に零様の性欲を発散させてください♡」
「いいのか？」
「はい♡　むしろ、零様の性欲を発散させていただける機会をもらえるなんて、幸せ過ぎます♡　これが夢だったとしてもいいくらい幸せです♡」
「夢じゃないぞ？」
「んきゅっ♡　はぁはぁ……♡　嬉しいです♡　夢ではなく、本当に零様の性欲のはけ口になれるだなんて……♡　光栄すぎて私、涙が溢れてしまいそうです……♡」

夢ではないと示す為に、乳首を軽くつまんでやると、あすかは目元に涙を浮かべ歓喜した。

「こっちからも涙が溢れてそうだな」
「はい♡　もう大洪水です♡　零様に壊してほしくて今、ずっとウズウズしてます……♡」
「じゃあ、あすかのマンコ、俺がぶっ壊してやるよ」
「っ～～～～～～～～♡♡♡　ありがとうございますぅぅ♡♡♡　すみません……今の言葉だけで軽イキしてしまいました……♡」
「堪え性のないメスだな～。どっちの部屋に行く？」
「申し訳ございません……♡　私のお部屋でもよろしいでしょうか？　こちらに来ていただければ、性欲のはけ口がもう一人いますので」
「友達と来てるのか」
「はい♡　その子も変態なので、零様の性欲のはけ口になると言う名誉を、与えてあげてはいただけないでしょうか？」

「俺は別に構わないぞ」
「ありがとうございます♡　では、参りましょう」
そう言って、全身ビチョビチョスケスケのあすかは部屋に向かっていく。
俺は後ろについていく。
後ろ姿もエロ過ぎだろ。
ケツが大きいので、歩く度にプリンッ♡　プリンッ♡　と上下左右に揺れている。
あのデカ尻を鷲掴みにして、思い切り腰を打ち付けたい。
そう思いながら、俺はあすかの部屋に入った。
♡　♡　♡
「おかえり～って、だ、だだだだだだだだ男性様っ！？　え！？　なんで！？　しかもおちんちん丸出しだし！？　こ、ここここここここの子が何か無礼で失礼な事をしてしまいましたでしょうか……！？」
部屋の中に入ると、もう一人の女性がいた。
その人は俺を見るやいなや、床に正座し、土下座をしてきた。
あ～そうか。あすかが俺に無礼を働いて俺が怒りに来たと思ってるのか。
ってか、この人もエロ。
背中が丸出しになった服を着ており、前世だとそれブラはどうな

ってるの？　と言いたくなる服（この世界だとブラはない）で、下は短パン。
しかも、その短パンが小さいのかパンツがはみ出ている。
土下座をしているので、お尻が突き出され、大きさが強調される。
この二人って、ケツがデカイんだな。
（零様）
俺が、土下座をする女性の体を舐め回すように見ていると、あすかが耳打ちしてきた。
（彼女の名前は大浦（おおうら）　乃々花（ののか）。生粋のマゾ女です。なので、この状況を利用しませんか？）
俺は声を出さずに、首を傾げる事でどういう事をかを尋ねる。
（私が零様に無礼を働いた事にして、私と乃々花を犯すんです。警察に突き出されたくなかったら俺の性欲のはけ口になれ、性奴隷になれと。特に乃々花には厳しくしてみてください。よだれを垂らしながら歓喜します。あ、もちろん私にも何をしても平気ですからね♡）
なるほどな。それはいい案かもしれない。
俺はあすかの提案を受け入れ、小さく頷く。
そして、その頷きを見たあすかは、満面の笑みから一瞬にして悲しげな表情に変えた。
君、役者向いてるんじゃない？

「ごめんね、乃々ちゃん……私、この人にエッチな事しちゃったの……」
「っ！？　あ、あんた何してんのよっ！？　犯罪だよっ！？
あれだけ約束したじゃん！　絶対に犯罪だけは犯さないようにしようねって！」
「ごめん……！　ごめん……！」

あすかは涙を流し始めた。
いや、本当、演技上手くね？

さてさて。ただ見てるだけはつまらないからな。
演技はできないけど、こいつらを調教すると思って接すれば自然に高圧的になるだろう。

「ねぇ、大浦　乃々花さん？」
「っ！？　は、はいっ！？　な、なんで私の名前を……」
「そこの小田あすかのスマホの中身、チェックしたんだよ。だって、犯罪の被害に遭ったからね。なんか俺、間違ってる？」
「い、いえ……！？　何も間違っておりません……！」

うん。よしよし。いい感じ。
この感じ……醍醐を調教する時となんか似てるな。

「さて、俺は小田あすかに性被害に遭った訳だけど。どうする？」
「こ、この子の罪は私の罪でもあります……！　なんでも言う事聞きます……！　なんでもします……！　なので、警察に行ったりなどはお許しください……！」

涙を浮かべながら土下座をする乃々花。

なんでだろう。最近、土下座してくる女を見ると、ムラムラしてくる。
俺、鬼畜になってしまったのか？
『いいんだよ。もっと鬼畜になりなよ。読者は受け入れてくれるよ』
読者？　何を言ってるのか分からんが、まぁ鬼畜になっても問題がないと言うのであれば遠慮はいらないな。
「なんでも言う事聞くのか？」
「はい……！」
「なんでもするのか？」
「はい……！」
「そうか。だったら服を脱いで全裸になれ」
「っ！？　こ、ここで……ですか……？」
あれ？　この世界の女は基本エロに積極的で、命令されたりしたら喜んで脱ぐはずじゃ？
「あぁ。小田あすかを見てみろよ。服を着てるのに全裸みたいなもんだろ」
乃々花があすかの方を見る。
そこには、服を着ているのにスケスケでほぼ全裸のようなあすかの姿が。
「っ……！」

「ほら、早く脱げよ。それとも、小田あすかだけにこんな格好させるのか？　こいつの罪は自分の罪だって言ってたお友達思いのお前が？」
「っ……は、はい……」
乃々花は立ち上がり、服を脱いでいく。
手と足が震えている。
あれ……？　なんかこの人今までの人と違くない……？
これ、結構ヤバイ感じ……？
（な、なぁ……これ大丈夫か……？　マジで嫌がってたらマズイんじゃ……）
めちゃくちゃ心配になり、乃々花にバレないようにあすかに耳打ちをする。
（大丈夫ですよ♡　警察に連絡されるかもって言う恐怖心が興奮を上回ってるだけなので♡　心の底はめちゃくちゃ興奮してると思いますよ。いえ、めちゃくちゃ興奮してるはずです♡　だから、零様は何も心配せずに命令しちゃってください♡）
と、あすかは言ってくれる。
でも、本当に大丈夫なのだろうか……？
『大丈夫よ～。この世界であなたに不利になる事、困る事は何一つ起きないから。そして、この世界の女はあなたに犯されたくて、支配されたくて、壊されたくて仕方ない奴らしかいないから。何も心配しないで～』

うん。この謎の声が言うなら平気だな。

「おい、服脱ぐのにどんだけ時間かかってんだよ。服ぐらいさっさと脱げよ。警察に連絡してやろうか？」

「っ！？　す、すみません……！？　て、手が震えて上手く脱げなくて……！？」

「はぁ～……おい、脱がしてやれ」

「は、はい……」

乃々花はまだ服を脱ぎ終わってなかった。

短パンは脱ぎ終わっていて、パンツを丸出しにしているのだが、上の服を脱ぐのに手間取っていた。

なので、あすかに服を脱がせるように命じる。

命令されたあすかは、暗めな表情を浮かべながら乃々花に近づいていく。

やっぱ役者向いてますよあなた。

「あ、あーちゃん……」

「乃々ちゃん……ごめんね……」

あすかが乃々花の服を脱がしていく。

おわん型のおっぱいで、薄い色の乳輪と乳首が顔を見せた。

この大きさ……沙耶香と同じか？　あすかも同じ大きさだな。

二人は胸よりもケツだな。後でたっぷり堪能させてもらおう。

「まだか？」

「た、只今っ！？」

あすかに上を脱がせてもらった後、乃々花は慌ててパンツを脱いだ。

「……」

「あ、あの……」

俺は無言で乃々花の裸を眺める。

小さすぎず大きすぎないおっぱい。薄めの乳首と乳輪。そしてパイパン。

パイパンなので、クリが少し見えて……。

ん？　クリが結構大きくないか？

もしかして……。

「お前、クリオナ中毒者か？」

「っ！？　な、なんで……」

「何もしてないのに、そこまでクリが見えてたらな。そりゃあ分かるわな」

「っ……」

乃々花は顔を真っ赤にして、俯いた。

さて、次の命令と行くか。

「じゃあ、オナニーしろ」

「えっ……」

「なんだ？　言うことが、聞けないのか？」

俺はあすかから奪った（設定）スマホをひらひらと振りながら、乃々花に圧をかける。

「い、いえ……！？　します！　させていただきますっ！」

そう言って乃々花は座ろうとする。

「おい、何座ろうとしてんだ？」

「え……」

「立ったまま、そのままオナるんだよ」

「は、はい……」

乃々花は立ったまま、左手でクリを触りやすいように周りを拡げ、右手でクリを触り始める。

「ちゃんとイクまでやれよ？　と言うか、俺がいいって言うまで止めるな。分かったな」

「は、はい……んっ♡」

クリを弄りだして数秒で、くちゃくちゃ♡　と言うエロい音が鳴り始める。

そして、乃々花の口から喘ぎ声が漏れ始め、クリを弄る手がどんどん激しくなっていく。

「んっ……♡　んんっ♡　んあっ……♡」

おぉ〜指の腹でクリを激しく擦ってる。

ビチャビチャ♡　とめちゃくちゃエロい音が鳴って興奮してくる。

「んんぅ♡　ああんっ♡」

「乃々ちゃん、イッちゃいそう……？　イキそうならちゃんと言わないと、警察に通報されちゃうよ……？」
「わ、分かったぁ♡　んんあ♡　も、もうイッちゃいますぅぅ♡♡♡」
「いいぞ。潮撒き散らしながらイケ」
「はいぃぃ♡♡♡　あああああ♡♡♡　イックっっ♡♡♡」

ぷじゃあああああああああ♡♡♡

乃々花は、潮を撒き散らしながらイッた。
両足をガクガクさせながら、座らないように耐えている。
が、クリを擦る手は止まらない。
クリを擦り続けているので、潮は出続けている。

「あああああああ♡♡♡　お潮止まんないぃぃ♡♡♡」

乃々花は大量の潮を出しまくった後、壁に寄りかかった。

「はぁはぁはぁ……♡」
「あ～あ、床が潮でビチャビチャだ。どうすんだこれ」
「す、すみません……」
「そんじゃあ次は、おしっこ出せ」
「お、おしっこですか……？」
「あぁ。どうした？　出せないのか？」
「そ、その……お、お潮を吹いてしまったせいで、その……」
「ほう～、出せないと」

俺は壁に寄りかかる乃々花に、顔と顔が付くんじゃないかと言うくらいまで近づく。
そして、顔の前でスマホを揺らす。

「いいのかな～？　主導権は俺にあるんだけど」
「っ！？　す、すみません……！　が、頑張って出すので通報だけは待ってください……！」
「じゃあ、さっさと出せよ」
「は、はい……！」

俺は離れて、ドアに寄りかかる。

「おい、まだか？」
「す、すみません……」
「あ。乃々ちゃん、お水いっぱい飲めば出せるんじゃない……？」
「そ、そう、だね……」
「飲ませてあげる」
「ありが――がぼっ！」

あすかは、乃々花の顎を持ち上げ、コップに入っている飲み物を無理矢理口に入れる。

「がぶっ！　ぐふっ！」
「ほら、乃々ちゃん！　ちゃんと飲まないと！」

乃々花は、ほとんど飲み物を飲み込めず、外にこぼしてしまっている。

「がはっ……！　はぁはぁ……あーちゃんっ！？　いきなり何すんの！？」
「だってぇ……おしっこ出さないと通報されちゃうんだよ……」
「わ、分かってるよ……だから今必死に出そうとしてるんじゃ……っ！　お、おしっこ出そう……！　出るっ！」

じょばあああああああああああああ♡♡♡

「お～出てるな～」

「乃々ちゃんのおしっこ……♡」

乃々花の真横でしゃがむあすかは、乃々花の放尿をうっとりとした目で見ている。

「あっ……♡　ああっ……♡」

じょろ♡　じょっ♡　じょじょ♡

「潮とおしっこの水溜りができてんじゃん」

テーブルの横には、潮とおしっこでできた水溜りが。

「はぁはぁ……お、おしっこ、できました……」

「よし。じゃあ、次はテーブルの上に乗って四つん這いになれ」

「っ！　は、はい……♡」

目が蕩けたような気がした。それは、俺の気のせいではないだろう。

「こ、こう、ですか……？」

「もっとケツを突き出せ」

「は、はい……」

テーブルの上で四つん這いになる乃々花。

俺が命令すると、デカ尻を高く突き上げて、マンコとアナルを強

調してくる。

「よし。よくできたな。これは、ご褒美だ！」

バチィィンッッッ！！！

「んっ！？　いいいい

蕩けた表情で、いつの間にか全裸になり愛液をダラダラ垂れ流しながら、見入っていた。

「なぁ？　性犯罪者のお友達さんよぉ」

「ひゃ、ひゃいぃ……」

「本当ならすぐに警察に通報する事もできたんだぞ？　すぐにブタ箱にお前らを突き出す事もできたんだぞ？　それでも俺はそれをしなかった。なぜだか分かるか？」

「わ、わかりましぇん……」

「俺は優しいからだ。そうだよな？　俺は優しいよな？　お前達に猶予を与えて、こうしてチャンスを与えてやってるんだから」

「ひゃ、ひゃいぃ……」

「さっきから腑抜けた返事しやがって、舐めてんのかテメェはぁ！」

バチィィンッッッ！！！

「しょ、処女ですが……ディルドで……膜は……破りましたぁ……♡」
「こんのド変態がぁ！」
「んおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡」
ゆっくり挿(い)れてやろうかと思ったが、この変態ぶり、ドMぶりなら平気だろうと思い（俺が単純に我慢できなかったのもある）、チンコを一気に奥まで突き入れた。
「がっ……♡　あっ……♡　おおお……♡」
乃々花は、挿(い)れただけでイッたのか、全身をビクビクと震わせている。
「今からこのマンコ、犯しまくるからな。俺が満足できたら警察には通報しないでやるよ」
「は、はいぃぃぃ……♡♡♡」
俺は乃々花の腰を力強く掴み、腰を激しく打ち付ける。
「んおおおおおおおお♡♡♡　チンポッ♡　チンポッ♡　チンポがぁぁぁぁ♡♡♡　膣(なか)抉ってぇぇ♡♡♡　あああああ♡♡♡　ぎもぢいぃぃぃ♡♡♡」
腰を打ち付ける度に、乃々花はみっともない声を上げる。
その声と言葉は、脅されてるとは到底思えないものだった。
まるで恋人とセックスでもしてるかのよう。
俺はあすかにアイコンタクトをする。と、俺の考えを察したのか、あすかは乃々花の顔の前にしゃがみ込む。

「乃々ちゃん……自分だけ気持ちよくなってちゃ駄目だよ……？
オマンコ締めて、おちんちん気持ちよくしないと、通報されちゃうよ……」
「わ、分かってるけどぉぉぉ♡♡♡　チンポ気持ちよすぎてぇぇ♡♡♡　何も考えられないし、何もできないのぉぉぉ♡♡♡」

俺はあすかを手招きする。

（このままこいつを犯しまくって、気絶寸前までする。その後、こいつの前でお前を犯すわ）
（っ♡　あ、ありがとうございます♡　ついに私も零様のおちんちんを挿れてもらえるんですね♡）

俺はあすかにそう耳打ちした後、乃々花のケツを引っ叩きながら犯しまくる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡　スパンキングセックス、ヤバイいいいぃ♡♡♡　イグぅぅぅぅぅ♡♡♡」

ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡

乃々花は、潮を撒き散らしながら何度も絶頂を迎えた。

でも、俺は乃々花が何度イこうが、お構い無しに腰を振り続けた。
イキマンは締まりやうねりが半端じゃなく、俺もすぐにイッてしまう。

「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！

「ひゃあああああああああああああ♡♡♡　中出し来たぁぁぁぁぁ♡♡♡♡　熱いの注がれてイキマンコさらにイッちゃうぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

じょばあああああああああああああああああ♡♡♡♡

中出しされてイッた乃々花は、潮なのかおしっこなのか分からないが、大量に漏らした。

この後、気絶する寸前までノンストップで犯しまくった。

中出しは5回してやった。

♡　♡　♡

「はぁはぁ……♡」

テーブルの上で、ケツを高く上げながら上半身をテーブルに突っ伏し、全身をビクビク震わせる乃々花。

オマンコからは、大量の精液が垂れ落ちていた。

俺はあすかを抱き寄せ、乃々花の正面に行く。

「俺はまだ満足してないからな、今度はこいつを犯しまくってやる」

「乃々ちゃん……私、今から女になるよ♡」

「あ、あーちゃん……♡」

あすかに正面から抱きつき、デカイケツを鷲掴みにする。

「んぁ♡」

そして、掴んだケツを左右に大きく拡げ、アナルが丸見えになるようにする。

「ほら、友達のアナルだ。しっかり見ろ」

「あーちゃんの、アナル……♡」

「今からこいつをぶっ壊すからな。お前が不甲斐ないせいで、友達が壊れる様子を、しっかり見とけよ」

俺はあすかを壁に押し付ける。

あすかは壁に手をつき、乃々花にバレないようにケツを持ち上げる。

俺が挿入しやすいようにしてくれたようだ。

「おら！」

「おおおおお♡♡♡♡♡　ぶっ太いおちんちん、ぎだぁぁぁぁぁ♡♡♡」

俺はあすかの腰を掴み、力いっぱい激しく腰を打ち付けていく。

パンッ♡　パンッ♡　パンッ♡　パンッ♡

と言う、肌と肌がぶつかり合う音が、部屋の中に響き渡る。

腰を打ち付ける度に、あすかのデカ尻が、プルンッ♡　プルンッ♡　と揺れていく。

視覚的にエロすぎて、俺はあっという間に果ててしまった。

「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！
ビュビューーーーーー！！！！！

「おおおお

「っ！？」

俺がそう言うと、乃々花はイッた余波ではなく、別の意味で肩をビクつかせた。

「わ、私はまだ、できます……！　オマンコがあなた様のオチンポの形になるまで犯しまくってください……！　オマンコだけでなく、この体はあなた様のモノです……！　壊していただいて構わないので、お好きなだけお使いください……！」

テーブルの上で体勢を変え、土下座をする乃々花。

「じゃあ、好きなようにさせてもらうからな」

「はい……！」

俺は土下座をしている乃々花の背後に回り、丸見えとなっているマンコにチンコをぶち込んだ。

「あああああああああああああああああああ♡♡♡♡　オチンポ来たぁぁぁぁぁ♡♡♡」

「お前の事、ぶっ壊してやるからな！」

「は、はいぃぃぃぃ♡♡♡♡　お願いしますぅぅぅ♡♡♡♡♡」

この後、二時間程度、俺はあすかと乃々花の二人を犯しまくった。全部中出しで、二人合わせてトータルで２０発近いだろう。

♡　♡　♡

流石に俺も疲れたので、椅子に座ってだらしなく倒れる二人を眺めていると、俺のスマホが鳴った。

「玲奈からだ」

玲奈からメッセージが来たので、俺は中を確認する。

『零様。大変長らくお待たせいたしました。
性犯罪者の調教が完了いたしましたので、部屋に戻りたいと思います。
零様好みの性奴隷になっていると思いますので、チンポを苛つかせながら待っていてくださいませ。』

調教が終わったか。俺はすぐに返信をする。

『ご苦労さん。待ってる間暇だったから、二人の女を犯しまくって壊してた。一旦休憩挟んでからになるけど、それでもいいか？』

すぐに既読が付き、返信が返ってくる。

『もちろんです！　長い事お待たせしてしまって、本当にすみません……！　もし、零様がその二人のメスを気に入ってるのであれば、お部屋に持ってきても大丈夫ですよ。枕にでもしましょう。』

そうだな。せっかくだしそうするか。

俺は『そうする～』と玲奈に返信をして、床にだらしなく倒れる二人に声をかける。

「さて二人とも。俺はまだ満足してない」

嘘だけどな。結構満足した。

「は、はの……ほうふれは、ほゆるひひははへまふは……？」
乃々花はなんとか力を振り絞り、正座をする。
そして、呂律が全く回ってない状態で尋ねてくる。
「そうだな～……二人が俺のペットになれば許してやるよ」
「「っっ♡♡」」
横たわっていたあすかも正座をし、二人は嬉しそうな表情を浮かべた。
「ぺ、ぺっほにはへへいはらへるんれふは……？」
「あぁ。だが、ペットになったらもう普通には戻れないからな？
常に全裸で首輪をして、四つん這い。おしっこもトイレに行くのは禁止だ。俺の許可がない限りは人語は禁止で、食事や水分補給も四つん這いでしてもらう。外に散歩に行くときでさえ全裸だ。それでもいいのか？」
「「はひっ♡」」
即答かよ。
「あと、仕事も辞めてもらうからな？　ペットに人権も金も何もかも必要ないからな」
「「はひっ♡♡」」
これも即答かよ。
あすかの言う通りだったな。

部屋に入る前、俺はあすかにこう言われていた。

『私達二人を犯しまくった後、ペットになれと言ってもらってもいいですか？』

『それは構わないけど……あすかはいいのか？』

『はい♡　ペットショップにいらっしゃった時から、私は零様のペットになりたいと思っていたので♡』

『そうなんだ』

『それに、中にいる子も、動物園で働いているんですけど、いつか男性に飼われたいと言っていたので、安心してペットにしてください♡』

まさか、本当に飼われる事を願っていたとは。

「じゃあ、お前らは今日から俺のペットだ。いいな？」

「「はひっ♡」」

「人語を喋るなぁ！」

「「わ、ワンぅぅ♡♡♡」」

こうして、二人は俺のペットとなった。

ブタの瑠李。イヌの鈴音。牛の澪。そして、二匹のイヌになったあすかと乃々花。

最高のペットハーレムのできあがりだな。

♥♥♥

私は大浦　乃々花。ううん。零様のイヌだ。

私達は今、零様の後ろをついて行っている。
零様のお部屋に向かうのだ。

ペットとなった私達は、服もスマホも財布も没収された。
全裸のまま、廊下を歩いている。もちろん四つん這いでだ。

警察に通報される心配はとりあえずなくなったから、ホッとした。
ホッとしたのと同時に、私は興奮に襲われた。
さっきまでは気づかなかったけど、これって――、

私の長年の夢が叶っている！

男性に飼われ、躾けられたい。そう小学生の頃から思っていた。
お母さんが持っているＡＶを見たりして、妄想を膨らませていた。
それが今、現実となっている。
嬉しすぎて、おしっこを漏らしてしまいそうになる。
でも、必死に堪える。

前を歩く零様を見つめる。

引き締まったお尻。ちょっとだけ生えたお尻の毛。
たまにしゃがみ込むのは、金玉の位置を直したりしてるからなのかな？
金玉が見えると、私のオマンコはキュン♡　となる。

じーっと零様を見つめていると、ふととある事に気がつく。

（あれ……？　零様って、前に動物園に来てた人だよね……？）

そう。前に私が働く動物園に、年パスを持った人と来園してきた

男性がいた。
チラッとしか顔を見てなかったから気づくのに遅れたけど、このお方はあの日のお方だ！
まさか、あの日以来オナネタにしてた方のペットになれるなんて……♡♡♡♡♡
こんな幸せがあっていいのだろうか……♡♡♡♡♡
あの日にシフト入れといて良かったぁぁ♡♡♡♡♡
今まで妄想してきたご奉仕や、服従態度などを存分に発揮して、零様に可愛がってもらおう！
絶対に嫌われないように、捨てられないように気をつけなくちゃ！

第１１３話　久しぶりの再会、ペット化を希望♡♡♡♡♡♡（後書き）

一万文字を超えてしまったぁぁぁ……！？

すみません……！　書きたいことを盛り込んだら一万文字を超えてしまいました……！

ですが、その分、エッチで楽しんでいただけるかと思います！

沢山楽しんでくださいね♡

ちなみに、乃々花へのネタバラシはなしです。

これから一生、乃々花はあすかが性犯罪を犯したと思い続けて行きます。

度々、零に通報されてしまうのではないかと言う恐怖が襲いかかってくる事になるのですが、そこも含めて楽しんでいただければ幸いです！

あすかと乃々花の二人。ペットショップと動物園。

そんな回あったっけ……？　と思われた方は

「小田あすか（５８話）」

「大浦乃々花（６４話）」

を、ご参照いただけますと幸いです♡

乃々花に関しては、本当に一瞬なので気づきにくいかと思いますので、ご注意ください。

それでは、次話はいよいよ玲奈（椎名）の登場です！

玲奈（一之瀬）の手によって、どのように調教されているのか？
どんな性奴隷になっているのか？

それが明らかになりますので、次話の投稿を胸と股間を膨らませながら待っていてください♡

第１１４話　尻穴オナホの極上尻穴ご奉仕♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

「玲奈、入るぞ」
「はい♡」

部屋の前に到着し、中に声をかけると嬉しそうな玲奈の返事が返ってきた。

それを受け、俺とペットの二匹は部屋に入る。

「おっと。玲奈？」

部屋に入ると、玲奈が急に抱きついてきた。
しかも、Ｔシャツを握る手が少しだけ震えていていつも以上に力が入っている。
ちなみに、俺は下半身は丸出しだが上は着ている。

「どうした？」

優しい声音で尋ねると、玲奈は俺の胸に顔を埋めて甘えたような声で答えた。

「たった数時間、零様と離れていただけで、死にそうなくらい寂しかったんです……零様の側にいたい、零様の匂いを気配を呼吸を感じたい。零様を常に視界に入れていたい……自分から調教の為、零様の元を離れたのに、それを後悔してしまうほど、心が寂しくなり

ました……零様のお側を離れたくないと……」

俺はそっと玲奈を抱きしめる。

「なら、これからはずっと俺の側にいろよ」

「いいんですか……？」

「当たり前だ。そろそろ引っ越す予定でさ。引っ越し先がかなりデカイ家だから玲奈、お前も一緒に住め」

「っっっ～～～♡♡♡　はい♡　はい♡　私、もう二度と零様の元を離れません♡　どこに行くにもついていきます♡　一生、零様のもとで生き続けます……♡」

こうして、玲奈が家に引っ越してくる事が決定した。

沙耶香と喧嘩にならなければいいけど。

しばらく、玲奈の頭とお尻を撫でた後、玲奈は俺の右腕の方に移動した（右腕にぎゅ～っと抱きついてきている）。

「おぉ～かなり仕上がってんなぁ～」

「はい♡　零様に気に入ってもらえるよう、しっかりと調教しました♡」

部屋の中央にあるテーブルの上に、四つん這いになった女性がいた。

ケツを高く持ち上げていて、両足首はロープでテーブルの足に繋がれている。

両手首もロープでテーブルの足に繋がれていて、身動きが取れない状態だ。

全裸なので、オマンコもアナルも丸見え。

しかし、俺が驚いたのはそこじゃない。
俺が驚いたのは、女性のアナルだった。

「あれって、閉じれないってことか？」
「はい♡　自分の意思で開いたり閉じたりできないようにしました♡　ああやって開いていれば、いつでもどこでもどのような体勢でも犯す事ができますから♡」

そう。女性のアナルは俺のチンコがすんなり挿入(はい)りそうな程に拡がっていた。
ヒクヒクと動いてはいるが、閉じる気配は全くない。
それどころか、女性が息を吸うと少し収縮し、息を吐くと思いっきり拡がる。

オマンコからは大量の愛液が溢れていて、テーブルの上は白濁した水溜りのようなものができていた。

「さぁ、尻穴奴隷。あなたを使ってくださる心優しいご主人様が来てくださいましたよ？　どうするんでしたっけ？」
「ご、ご主人様ぁ❤❤❤　この変態でドスケベでド淫乱で馬鹿な性犯罪者のパックリ尻穴に、ご主人様のぶっ太ぉぉいオチンポ様をぶっ刺してくださいぃ❤❤❤　尻穴が壊れてもう戻れなくなるまで犯して尻穴奴隷をぶっ壊してくださいぃぃぃ❤❤❤」

女性はそう言いながら、高く上げたケツをフリフリと左右に振ったり、上下に動かしたりする。
その度に愛液がテーブルに垂れ落ち、テーブルとマンコを白濁した糸が繋いだ。

さらには、アナルも先ほどより大きく拡がり、俺のチンコが挿入(はい)ってくるのを待ってるかのようだった。

「ごくっ……」

俺は思わず、唾を飲み込んでしまった。

この光景……エロすぎる……！

「さぁ、零様♡　あの尻穴奴隷を零様の好きなように犯しまくってください♡　乱暴に扱っても壊れはしませんので、ぶっ壊れるまで使いまくってください♡♡♡」

「分かった。そう言う事なら、使い潰してやる！」

「零様、素敵ですぅ♡♡♡」

俺がそう叫んだ瞬間、チンコがビクンッと大きく跳ね勃起がフル勃起に変化した。

それを見た玲奈が、腕に抱きつく力を強めエロい声を上げた。

俺はテーブルの上に四つん這いになっている女性に近づき、真後ろに立つ。

「この人、名前はなんて言うんだ？」

「尻穴奴隷に名前なんて必要ありませんよ。『テメェ』とか『おい』とか『貴様』とか『クソ女』とか『尻穴女』とか、好きな呼び方をしてください♡　その方がこの尻穴奴隷も喜ぶので♡」

「？　まぁ、そう言う事なら」

名前を聞けなかったのは残念だが、俺もそっちの方が興奮するので、玲奈の提案に乗ることにした。

「じゃあ、尻穴女！　今から使いまくってやるから、簡単に潰れんなよ？」
「はいいいいぃ❤❤❤❤❤」
俺は、尻穴女のデカケツを鷲掴みにし、チンコを尻穴にぶち込んだ。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおお❤❤❤❤❤❤❤❤」

第１１４話　尻穴オナホの極上尻穴ご奉仕♡♡♡♡♡♡

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお❤❤❤❤❤❤❤」

とんでもない声を出して、全身をビクつかせた尻穴奴隷。

顔は見えないけど、おそらく人には見せられない超絶だらしない顔をしてるに違いない。

アヘ顔とかしてたりしてな。

まぁ、それよりも……！

「な、なんだこいつのアナル……！　めちゃくちゃ気持ちいいんだけど！」

まるで、マンコに挿れてるかのような気持ちよさ。

真耶子や玲奈のアナルももちろん気持ちいいが、こいつのアナルは別格と言っていい。

マンコのようにニュルニュルしていて、チンコを気持ちよくしようとうねってきて、締め付けてくる。

まるで中出しをせがんでいるかのよう。

「ってかマジ無理！　出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！

ビュビューーーーーー！！！！！

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお❤❤❤❤❤❤❤

にゃかりゃし、ひひゃぁぁぁぁ❤❤❤❤❤❤❤❤」

俺は、尻穴奴隷のアナルに大量に中出しをした。

と言うか、暴発してしまった。

「ぼ、暴発しちまうなんて……」

「零様の暴発、素敵ですよ♡　私も暴発射精ザーメンでドロドロになりたいですぅ♡」

腕に抱きついている玲奈が、未だ射精中の結合部を見ながら、甘〜い声で耳元で囁いてくる。

できれば暴発はしたくないんだけどな。

「このアナル、マンコより気持ちいい可能性があるな」

「では、それを確かめる為にもっと犯しちゃいましょう♡」

「あぁ！　ぶっ壊れるまで犯しまくってやる！」

「ごおおお

零様ぁ♡　もっともっと気持ちよくなってくださいぃ♡」
「玲奈、何してんだ！？」
「零はまのぉ♡　おひりのはなほぉ♡　なめなめひへるんれふぅ♡　ぢゅるるるるるるるる♡♡♡」

くっ……！　ただでさえ、尻穴が気持ちよすぎるのに、こんなに丹念にアナルを舐められたらヤバすぎる……！

「また出るっ！！！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！
ビュルルルルルルルルルル！！！！！！　ビュビューーーーーーーーーーー！！！！！！！

「んごおおお

でも、これでようやく分かった。
確かに、尻穴の調教が完璧で、チンコを気持ちよくする為に穴が大きく拡がってたり、収縮したりして気持ちいいのはある。
だが、いくらなんでも暴発し過ぎだし、二発目の方が量も多くて濃さも増しているのはおかしすぎる。
でも、それが大量の媚薬によるものだと分かれば納得がいく。

媚薬によってチンコが超絶敏感になり、耐えられないほどの快感を与えられ暴発。
さらに、媚薬のせいで出す度に量が増え濃さが増す。
俺が今まで経験してきた媚薬がそうだったからな。
特に澪と恋に拉致られた時とか。

ん？　俺が経験してきた？　まさか……。

「玲奈、俺の鞄に入ってた媚薬使ったか？」
「はい♡　零様が眠ってらっしゃる時に、鞄を倒してしまって……そしたら大量の媚薬が出てきたので、申し訳ないとは思いつつも使わせていただきました」
「へぇ～。俺の物を勝手に使ったのか」
「っ！？　も、申し訳ございません……！？　一言ご許可をいただくべきでした……！？　その時はこの媚薬でどう零様に喜んでいただくかしか頭になくて……本当に申し訳ございません……！！！」

玲奈は、アナルを舐めるのをやめ、その場で土下座をする。
こいつにもお仕置きが必要か。

「許してはやる。だが、自分がした事についてしっかりと反省はしてもらうぞ」

「は、はい……！」
「お前には罰を与える」
「ば、罰……？」
「あぁ。そこにいる二匹のペットにイカされまくると言う罰をな」
「っ！？」「「っ♡♡」」

俺の言葉を聞いた玲奈は、二匹のペットを見て少し怪訝そうな顔を浮かべた。
そして、それとは対照的に、二匹のペットは嬉しそうな顔を浮かべた。
自分達も参加できるのが嬉しいのだろう。

「こ、このイヌ達にイカされまくるのですか……？」
「あぁ。悪い子には最高のお仕置きだろ？」
「そ、そう、ですが……（できれば零様にされたかった……）」

小声で呟いているが、その呟きはばっちり聞こえていた。

「じゃあイヌ共、この悪い子にお仕置きをしてやれ」
「「ワンッ♡♡♡」」
「ちょ、ちょっと待って――きゃあ！？」

俺が二匹に指示をすると、二匹は待ってましたと言わんばかりに玲奈に飛びかかり、少し離れた場所まで連れていく。

椅子に寄りかからせた玲奈の体を、二匹のイヌは舌を使って執拗に舐め回していく。
手を使わないのは、ちゃんと自分達はイヌだと言う自覚を持っているからだろう。

「ちょ、ちょっと待って……やんっ♡　止めて……んんっ♡」

よしよし。あっちは二匹に任せておいて、俺は目の前の尻穴奴隷に集中だ！

「はぁはぁ……❤❤❤❤」

「にしても、本当いいケツしてんなぁ～」

バチィィンッッッ！！！

「おおおおおおおおおおおおおおおお❤❤❤❤❤❤❤❤❤❤」

じょばあああああああああああああああ♡♡♡

尻穴奴隷のデカ尻を撫で回し、思い切り叩いてやると、汚い声で喘いだ後、大量に失禁した。

この尻穴奴隷、真耶子と並べてどっちが多く漏らせるか競わせてみたいな。

「叩かれただけで漏らすなんて、とんだド変態だな、あんた」

「しゅ、しゅみみゃしぇんぅぅぅぅぅ……❤❤❤❤❤」

「そんなに叩かれるのが気持ちいいなら、このデカ尻を引っ叩きながら犯しまくってやるよ！」

バチィィンッッッ！！！！

「おおおおおおおおおおおおおおおおお❤❤❤❤❤❤❤❤❤❤　あ、ありがとうごじゃいましゅぅぅぅぅぅ❤❤❤❤❤　ド変態クソザコクソ馬鹿尻穴奴隷にお仕置きパンパンしながら、尻穴バコバコしてくださぃぃぃぃ❤❤❤❤❤　尻穴が完全に壊れるまで犯してください

いいい❤❤❤❤❤」
「あ？　それだとお前だけが気持ちよくなるような言い方じゃねぇか？　あ？」

バチィィンッッッ！！！！！　バチィィンッッッ！！！！！！

「あああああああああああああああ❤❤❤❤❤

まりきらなかった尿だか潮だかが、床にバチャバチャと垂れている。
床にもテーブルと同じく水溜りができている。
「おっ❤　おおっ❤❤　おおおっ❤❤❤　おおっっ❤❤❤❤」
尻穴からチンコを抜くと、尻穴から大量の精液が逆流してきた。
しかも、溢れ出る度に尻穴奴隷が全身をビクつかせている。
お腹を見ると、少しボコッとしてるのが分かった。
「マジでヤバイわ、こいつのアナル。どうやったらここまで最高なアナルに調教できんだよ」
俺は別に玲奈に問いかけた訳ではなく、独り言を呟いただけだったんだが、玲奈にお仕置きをしている二匹が、俺が聞いていると勘違いしたようで――、
「ワンッ！　ワンワンッ！！　ワンッ！！！」
「アンっ！　アンっ！！　アンアンッ！！！」
と、玲奈に対して吠え始めた。
ご主人様が聞いている。さっさと答えろとでも言ってるのかもしれない。
それはそうと乃々花。お前の鳴き方、字面だけで見たらただ単に喘いでるだけにしか見えないから気をつけろよ？
「ど、どのようにして、ちょ、調教したか、はぁ……♡♡♡　私のぉ……♡♡♡　スマホをぉ……♡♡♡　あああああ♡♡♡　見てくらさいいいいい♡♡♡♡♡」

二匹に全身を舐め回され、玲奈は相当感じているようだった。
喘ぎながらも答えてくれたので、俺は玲奈のスマホを手に取り、フォトを開く。

「なるほど、動画を撮ってた訳ね。って、撮影時間二時間越えって……どんだけ長回ししてんだよ」
「最初から……♡♡♡　最後までぇ……♡♡♡　全てを映してありますぅぅぅ♡♡♡♡　イックぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

ぶじょぉぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡

「これは後でゆっくり見るか〜」

俺は玲奈のスマホを椅子に置き、テーブルの上でいまだビクついている尻穴奴隷を見る。

「なぁ、お前は俺の尻穴奴隷になった訳だけど、今どんな気持ちなんだ？」
「しゃ、しゃいこうのぉぉぉ❤❤❤　しゃいこうの気分なんですぅぅぅぅ❤❤❤　れ、零しゃまのぉぉぉぉ❤❤❤　零しゃまのぉ尻穴奴隷にぃ❤❤❤　尻穴奴隷になれてぇぇぇ❤❤❤　幸せすぎて死んじゃうんですぅぅ❤❤❤❤」

後ろから抱きつき、尻穴奴隷の背中に体重をかけながら耳元で尋ねると、尻穴奴隷はそう答えてきた。

「死なれちゃ困るんだけどな。じゃあ、これから俺に尻穴だけを使われる尻穴専用奴隷として、一緒に住むか？」
「よ、よろしいんですか……❤❤❤　こんな、こんな性犯罪者が……❤❤❤　い、一緒になんてぇぇ……❤❤❤」

「あぁ。もちろんだ。（その方がお前を脅して凌辱しやすい）」
「っっっっっっっ❤❤❤❤❤❤❤❤」

ぶじょおおおおおおおおぉ♡♡♡♡
じょばあああああああああああああああ♡♡♡♡♡

こいつ、俺の言葉だけで嬉しイキして嬉ションしやがった。

「なぁ、玲奈。お前もそれでいいよな……って、今は無理か」
「っ♡　っ♡　っ♡　っ♡」

玲奈の方を見ると、そこには口から涎をみっともなく垂らし、床に大の字で寝っ転がる玲奈の姿があった。
意識が飛んでいるらしく、玲奈は全身をビクつかせるだけで会話などはできなかった。

「わ、ワン……」「アン……」

二匹は、やりすぎてしまったのではないかと思っているようで、正座をして項垂れていた。
そんな二匹に近づき、俺はしゃがみ込む。

「そんな顔するな。お前達はよくやった。偉いぞ。ご褒美として、あそこの尻穴奴隷の中に出した精液、吸いまくっていいぞ」
「ワフッ♡　ワフ～～～～ン♡♡♡」
「アフッ♡　アフ～～～～ン♡♡♡」

俺に頭を撫でられた二匹は、めちゃくちゃ嬉しそうな顔を浮かべた。
そして、ご褒美を言い渡すと、二匹は嬉々として尻穴奴隷に近づ

いて行き、尻穴奴隷のアナルに吸い付き出した。
「おおおお

「いいですね♡　零様の歌、聞いてみたいです♡♡♡」
「ワンッ♡」「アンっ♡」
「では、私はドリンクやお食事など、用意してきますね❤❤❤」
「あぁ、頼む」

俺がそう言うと、尻穴奴隷は全裸のまま外に出て行った。
玲奈と二匹のイヌは、カラオケをする事を嬉しそうに賛成してくれた。

「あんまり歌に自信はないから、下手でも笑うなよ？」
「笑ったりなんてしませんよ！　零様の歌声を聞けるなんて、本来であれば一生巡り会えない奇跡なんですから！」

そ、そこまで言わんでも……。

「じゃあ、曲入れるぞ～」
「はい♡　零様は普段どんなのを歌われるんですか？」
「そうだな～。大体はアニソンかな～。昔は特撮ソングしか分かんなかったからそればっかりだったけど、今はアニソンがメインになってる」
「特撮ソングはもう歌われないんですか？」
「たま～に歌うけど、昔ほどではないな。玲奈は？」
「私は……すみません……。歌が苦手でして……歌を聞いたりするのは好きなんですけど……」
「そっか。別に謝る事じゃないだろ。得手不得手は誰にだってある。ちなみに、どんな歌手が好きなんだ？」
「え～っと……」

玲奈はスマホをいじり、好きな歌手を教えてくれる。

「この『乳ちち』って言うアイドルグループに今はハマってますね。特に『ＲＩＵ』ちゃんが一番の推しなんです」
「ま、マジで……？」
「は、はい……えっと、あの……何かお気に触ってしまったでしょうか……？」
「あ、いや！　そうじゃない！　実は俺も『乳ちち』が好きなんだよ！　『ＲＩＵ』も好きで特にソロの『ファンファーレ』って曲が大好きなんだ！」
「れ、零様もお好きだったんですか！　嬉しいです！　大好きな人と同じものが好きだなんて！　分かります！　あの曲いいですよね！　私は『エール』が好きです！」
「あ～その曲もいいよな～！　『ファンファーレ』は誰かに向けての応援歌って感じで、『エール』は自分に対しての応援歌って感じがしてさ！」
「はい！　はい！　その考え、ものすごく分かります！」

俺と玲奈は、お互いに好きなアイドルグループ『乳ちち』とその中のメンバーである『ＲＩＵ』について熱く語り合った。

流石にそのアイドルグループの歌は、歌えないので、他のアニソンなんかを歌った。
玲奈達は、楽しそうに聞いてくれていた。
よかった。音痴だと嫌われたらどうしようかと思ってた。

ちなみに、零と玲奈がアイドルグループについて熱く語り合ってる時、あすかと乃々花の二人は――。

（『乳ちち』か……勉強しよう！）←あすか
（ＲＩＵ……零様を虜にする程の女。勉強しなきゃ！）←乃々花。

と、心の中で思っていた。

第１１４話　尻穴オナホの極上尻穴ご奉仕♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

引っ張りに引っ張った玲奈（椎名）の回、皆様のご期待に応えられる出来になっていましたでしょうか……？

ご期待に応えられていましたら、幸いです……！

アイドルグループ『乳ちち』？　『ＲＩＵ』？　そんなのあったっけ？　と思われた方は、去年の大晦日に投稿させていただきました『大晦日特別編』をチェックしてみてください♡

今年も大晦日特別編と新年特別編を投稿する予定ではありますので、そちらもお楽しみに♡

玲奈（一之瀬）が玲奈（椎名）に行った調教ですが、かなり過激な内容になっております。尻穴なので色々と……（察していただけると嬉しいです……）。

なので、この作品本編では描くことができないと思っております。

ですが、構想自体はあるのでもし、見たいと言う方がいらっしゃいましたら教えていただけると嬉しいです……！

この作品内、もしくは別の所で投稿したいと思っております！

皆様、よろしくお願い致します！

（筆者のプライベートコメント）

「作中にカラオケのシーンがあったかと思います。あそこ実は、僕自身の実話なんです。

子供の頃は特撮ソングばっかりだったのですが、大人になったらアニソンばっかりになりました（笑）

そして、最近はアニソンでもなくなりミセスさんばっかりを歌うようになりました。
皆さんはお好きな歌やアーティストさんはいらっしゃいますか？
作品内に出てくるオリジナルのアイドルグループやソロ活動しているＲＩＵちゃんの歌など、いつか作詞できたらいいなぁと思ったりしてます♪（エロいのが主なので中々実現できないのですが……）。
ちょくちょく、こういった僕のプライベートな事を載せてみようかなと思っています。不評であればすぐに止めますので遠慮なく仰ってください。
それでは、次話をお楽しみに～♡」

第１１５話　再会した女からの、鬼畜過ぎる懇願♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

カラオケを楽しんだ俺達は、この後どうするかを決める事にした。

「性奴隷は、今どのくらい増やせたんですか？」

玲奈が、右腕に抱きつきながら聞いてくる。

俺は、左手で玲奈のおっぱいを揉み、右手で足を触りながら答える。

「そうだな……栞、光、美結、玲奈、あすか、乃々花、尻穴奴隷。この七人だな」

「なるほど……もっと増やしたいですよね？」

「まぁ、できればな」

俺と玲奈が話していると、イヌのお座り状態で床に座っていたあすかが鳴いた。

「いいぞ。人語喋れ」

俺が許可を出してやると、あすかは一礼してから喋り出した。

「あの、私と乃々ちゃんの友人にド変態な子がいるんですけど、その子なんていかがですか？」

「性奴隷になる事に、抵抗なんかはない感じか？」

「はい♡　むしろ、その……それ以上を望んでいると言うか……

それ以下と言うか……」

なんか歯切れが悪いな。

まぁ、なんでもいい。性奴隷を増やせるのであればそれでいい。

「よし。じゃあ今からそいつを性奴隷にする。ここに呼び出すか、別の所に行くか。どうする？」

「れ、零様……！　どうか……！　どうかここにいてください……！　調教などをするのでしたら、このお部屋をお使いください……！」

俺がこの部屋から帰るような言い方をすると、床に正座をしていた尻穴奴隷が、慌てたようにそう言ってくる。

「まぁ、そうだな。ここから移動するのも面倒だからな。あすか、その女をここに呼び出せるか？」

「はい♡　もちろんです♡　多分、零様が呼んでると言えば飛んでやってきますよ♡」

あすかはそう言って、俺から手渡されたスマホで友人に電話をかけた。

尻穴奴隷は、ここに俺が滞在すると聞くと、ホッとした表情を浮かべた。

「じゃあ、待ってるからね～。今すぐ来るそうです」

「早っ。まぁ、いいや。そいつが来るまでもうちっと歌うか」

「「「「わぁ～！」」」」

二人と二匹が拍手をする。

そして、あすかと乃々花の友達が来るまで俺は再び歌を歌った。
まぁ、まさか三十分でやってくるとは思ってなかったんだけど。

「お、お待たせしました……！」

部屋をノックしてきたので、入室を許可すると息を激しく切らした女性が入ってきた。

「あれ……あなた……」
「はぁはぁ……。ふぅ～。お久しぶりでございます。零様」

やってきたのはなんと、奈央とのデートで行ったラブホテルの受付の人だった。

第115話　再会した女からの、鬼畜過ぎる懇願♡♡♡♡♡♡

「お久しぶりでございます。零様」

ラブホテルの受付をしていた女性は、恭しく頭を下げ挨拶をしてくる。

「あれ……？　かなちゃん、零様と面識あったの？」
「うん。前に一度、私が勤めてるラブホに女様と一緒に来てくださったの。その時に少しね。零様、あの後女様は見事に赤ちゃんになられましたか？」
「あぁ。見事になったよ。俺の事をパパって呼んでめちゃくちゃ甘えてきてくれるよ」
「それはよかったです。おしめなどを用意していた甲斐がございました」

俺と受付の女性が話していると、あすかと乃々花の二人は目を点にして驚いていた。
隣にいた玲奈は、赤ちゃんとはなんの事なのか分からず首を傾げている。
尻穴奴隷はなんとなく分かっているのか、腰をくねくねと動かしている。今の会話だけで興奮してんのか？

「そういえば、名前はなんて言うんだ？」
「あ、自己紹介が遅れ申し訳ございません。私は細川かなえ。二十六歳のJカップです♡　性感帯は全身ですので、どこを触られても気持ちよくなってしまうド変態です♡　よろしくお願い致します♡」

Ｊカップと来たか。リサと同じだ。
しかも、全身性感帯って。どんだけだよ。
今からこいつをどう弄るのか、考えただけで興奮が収まらないぜ。
『あっ……♡』

そんな事を考えていたら、俺はフル勃起した。
そのフル勃起を見た三人と二匹は、妖艶な声を揃えて漏らした。

「かなえって言ったか？」
「はい♡」
「今からお前を性奴隷にする訳だけど、その前に。そこにいるあすかと乃々花は俺のペットになった。そして、そこに全裸でいる女は尻穴奴隷だ。お前はどうされたい？」
「まぁ……♡　あすちゃんと乃々ちゃんはそんな素敵な扱いをされてるの？　羨ましい……♡　尻穴奴隷と言うのも素敵です……♡」

俺から話を聞いたかなえは、恍惚とした表情を浮かべ体をくねらせる。

「零様は、私がどのような扱いをされたいのか、発言権を与えてくださるのですか……？」
「あぁ。奴隷の意思を汲むのも、主の務めだからな」
「ご寛大なお心遣い、誠に感謝いたします♡　それでは、僭越ながらお願いさせていただいてもいいですか……？」
「あぁ。なんでも言ってみろ」
「ありがとうございます♡」

かなえの願い。一体なんだろうなと考える。

しかし、かなえからその願いを聞いた俺は、開いた口が塞がらないほどに驚愕する事となった。

「私を、零様のゴミクズ奴隷にしてくださいませんでしょうか……♡」

♥♥♥

私は細川かなえ。生粋のドM変態女だ。

小学生の頃に、河原に捨ててあったエロ本を見つけ、興味本位で読んでから私は性に目覚めた。

母親の部屋に忍び込んでAVを盗み見たり、集めたお小遣いでエロ本を買ったり（ネットショッピング）。

スマホのネットは、母親に管理されていたのでエロ動画が見れなかった。

オナニーは小3の時に覚え、そこから毎日オナるド変態になった。

小6にもなると、周りの友達もオナニーをし始める。

お互いにオナる時のオカズを話し合ったり、オナニーの見せ合い、自分のオナニーの仕方なども見せ合ったりした。

ちなみにその時の友人が、あすちゃんと乃々ちゃんだ。

二人とは、性癖が近く、話が合ったのですぐに仲良くなった。

常に三人で行動を共にするようになり、中学、高校、大学と、全部同じ所に通った。

潮吹きや失禁、イキ狂う所なんかを見せ合っているので、私達の間に恥ずかしい事や隠し事なんて一切なかった。

あすちゃんと乃々ちゃんは男性様にペットとして飼われたい。人間ではなく、ペットとして扱ってほしい。

そんな変態的な夢を抱いていた。

それを聞いた時、私はそれ以上に変態だと自覚した。

もしかしたら引かれるかもしれないと最初は思っていたけど、二人は優しく受け入れてくれた。

私の、夢を。性癖を。変態な本性を。

「私を、零様のゴミクズ奴隷にしてくださいませんでしょうか……♡」

私は二人には話した事を、初めて男性様に告げた。

しかも、あの日、性奴隷と一緒にラブホに来てくださった素敵な零様に。

正直、どんな性癖でも受け入れてくれる零様であっても、私の性癖は受け入れてもらえないと思っている。

だから、言うのはすごく怖い。心臓はバクバクで膝はガクガク震えている。

でも、このチャンスを逃したら、一生夢は夢のまま。叶える事なく人生を終えてしまう。

そんなのは絶対に嫌だ。

言わないで後悔するより、言って後悔した方がいい。

だから、私は勇気を振り絞って零様に告げた。

私の性癖を。

「……」

零様は、驚きすぎたのか口を開けたままフリーズしていた。
隣にいる性奴隷さんも、尻穴奴隷さんも口を開けて固まっている。

「や、やっぱり駄目……ですよね……」

うん。これでいい。
言わないで終わるより、言ってから終わった方が何倍も清々しい。
よし。零様に自分の性癖を告げる事はできたから、零様にこれ以上嫌われないように、さっさとこの場を去ってどこかに行こう。
……どこに、行こうかな……。

駄目だ……涙が溢れそう……。やっぱり、言わなければよかったかな……。

「すみませんでした。ありがとうございました」

私は零様達に背を向けて、ドアノブに手をかける。

チラッとあすちゃんと乃々ちゃんに視線を向けると、二人は零様の方を涙を浮かべた笑顔で見ていた。
な、なんで笑ってるんだろう……。
まぁ、そんな事考えても意味ないか。
さっさと帰ろう。

私がドアを開けた瞬間、私はドアノブを手放していた。
なぜか。それは、後ろから抱き寄せられたからだ。

「れ、零様……！？」
「待てよ。どこに行くつもりだ？」
耳元で零様の声がする……。な、何これ……♡
耳が幸せ過ぎるんだけど……♡
ていうか、なんで私零様に抱きしめられてるの……！？
「わ、私の性癖は気持ちが悪すぎます……零様に迷惑はかけられません……！　だから、この場を去ろうかと……！」
涙を堪えるのに必死だった。
ちょっとでも油断をすれば、大量の涙が溢れてしまいそうだから。
でも、その我慢を零様がいとも容易く崩してきた。
「気持ち悪くなんてねぇよ。確かに、ちょっと驚いたけど、気持ち悪いなんて思わない。むしろ、最高だと思った。ゴミクズ奴隷って事は、ペットとかよりも下って事だろ？　どんな雑な扱いをしてやるか、考えただけで興奮するわ。ほら」
「っ！」
私のお尻に、硬くて熱いのが当たってくる。
こ、これって零様のち、チンポ……！
「それによ。奴隷の分際で、勝手に帰ろうとしてんなよ。お前は今から俺の所有物だ。意思を持つ事も、考える事も禁止だ。俺の言うことだけに従え」
「っ！　は、はい……！　はい……！」
私はついに堪えきれず、大号泣してしまった。

「かなちゃん……！　よかった……！」
「やっと、叶ったな……！」
あすちゃんと乃々ちゃんも、私と同じくらい大号泣している。
ありがとう……！　二人共……！

「今は泣け。それが俺からの最初の命令だ」
「はい……！」
私は、零様の勃起チンポをお尻に感じながら、零様の腕を強く握りしめ泣き続けた。

♥♥♥

「スッキリしたか？」
「ばぁい……」
私は結構な時間泣き続けていた。
それを、零様はずっと受け入れてくれていた。
本当に優しい人だ……。普通に惚れてしまう♡

「それで？　ゴミクズ奴隷って具体的にはどんなもんなんだ？
初めて聞く言葉だから教えてくれ」
「はい……♡　このゴミクズ奴隷と言う言葉は、私が勝手に決めたものなのですが、扱いは至って簡単です。人権を剥奪し、ペットよりも下の位(くらい)で、まるでゴミを扱うかのように乱雑に乱暴に粗末に扱っていただきたいんです♡　より簡単に言えば、家具などの道具のように、座ったり足を乗せたり、踏み台にしたり♡　そんな扱いをしてほしいんです♡」

私がそう告げると、零様は性奴隷さんと目を合わせる。

「これは中々……」

「はい……想像以上のド変態でした……」

「や、やっぱり、駄目……ですか……？」

「想像以上で驚いただけだから、いちいちそんな顔すんな」

「はい……♡」

よかった……受け入れてもらえた……♡

「ちなみに、醍醐歩美って言うペット以下の存在が俺ん家にいて、足置きとかにしてるんだけど、そういう感じでいいのか？」

「はいっ♡　もっとひどくても大丈夫です♡」

「そうか……じゃあ、とりあえず服脱げ」

「はい♡」

私は即答し、すぐに服を脱ぎ始める。

あっという間に全裸になった私。

「これは回収。玲奈」

「はい。後で処分しておきます」

私が脱いだ肩出しトップスとミニスカ、紺色のTバックは回収され、捨てられる事になった。

さらに――、

「現金、スマホ、身分証、鞄、靴、全部テーブルの上に置け。全部処分するから」

「はい♡」

私は、鞄の中から財布、スマホ、キーケース、カードケース、ポーチなどを出し、テーブルの上に鞄と一緒に置いていく。
そして、靴も脱ぎ、靴はテーブルの下に置く。

「よし。これでもうお前は何もない。だが、まだ人間だ。これから人間でもなくしていくから、覚悟しろよ？　あ、ちなみに仕事は辞めてもらうからな」
「はい♡　仕事はもうすでに辞めてあるので心配はいりません♡」

そう。あすちゃんに連絡をもらった後、すぐに勤め先に電話をして、退職した。
そう。だからもう後戻りはできないのだ。
だから断られてたら、どうしようか本気で悩んでいた。
でも、受け入れてもらえたから何も問題はないっ♡

「まず、そうだな……四つん這いになれ」
「はい♡」

私は四つん這いになる。
膝と手のひらに伝わる床のひんやり感。
それが、お前はこれから人間じゃなくなると言われてるようで、興奮してくる♡

「よし。じゃあ、よいしょ」
「んっ♡」

零様が、私の背中に座ってくださる♡
背中と手、膝に伝わる零様の体重。
重力に従って、私の体は下に負荷がかかる。

あぁ～～～

零様は、私の髪の毛を手綱のように掴み、右手を上に上げてそう叫んだ。
私は言われた通り、おしっこを漏らしながら室内を徘徊する。
「零様、子供みたいで、可愛い……♡」
玲奈さん、私もそう思います、はい……♡
背中の上にいる零様は、まるで子供が遊んでいるかのようにはしゃいでいる。
「はっ！？　　と、止まれ」
「はい♡」
どうしたんだろう……？
「ごほん。みっともないところを見せた。次だ」
全然みっともなくなんてなかったのに……。
むしろ、もっと見ていたかった……。
「床にうつ伏せで横になれ」
「はい♡」
私は、椅子の前に行き、うつ伏せで横になる。
胸、お腹、クリ、足に床のひんやり感が伝わってくる。
普通に生きていれば絶対に味わう事のない感覚。
それだけで、もう興奮が収まらない……♡

「よいしょ」
「んあっ♡」
零様は椅子に座り、足を私の背中に置いてくださる♡
なるほど♡　私は足置きだ……♡
「これ結構いいな。醍醐よりいいんじゃないか？」
やった♡
「胸があいつより小さいのか？　あいつってなんカップだったっけ？　まぁいいや。踏み心地もいいな。お前、足置きの才能あんじゃね？」
「うれひいれふ……♡　いっふぁいふはっへふらはい……♡」
私は床に顔をくっつけているので、声がこもってしまう。
しかし、ちゃんと言いたい事は伝わったはずだ。
「なぁ、お前は俺とセックスしたい？　したくない？」
「ひ、ひはいれふ！」
「そうか。じゃあ、いずれな」
「っ！　はい♡」
いつかしてもらえるんだ！
セックスはしてもらえない覚悟だったから、可能性があるだけで嬉しすぎる！
「あと、これからお前はゴミクズ奴隷になるんだから、俺が許可した時以外言葉を話すの禁止ね。首を縦に振ったり横に振ったりして返事しろ。いいな？」

「っ♡　っ♡」

私は首を縦に動かし、返事をする。

「よぉし！　これからこいつの調教をしつつ、奴隷達とセックスを楽しみますか！」

『おぉ～～～～～～～♡♡♡』

あぁ……♡

お母さん、私、夢叶えられたよ……♡

素敵なご主人様に巡り会えたよ……♡

これから、私は幸せになるから、見守っててね♡

私は心の中で、天国にいる私の夢を一番応援してくれていた母親にそう告げた。

私はこの後、カラオケから帰る事になるまでずっと、零様の足置きになっていた♡

幸せ過ぎて途中で、何度もイッてしまったのは零様には内緒だ（多分バレていると思うけど）。

第１１５話　再会した女からの、鬼畜過ぎる懇願♡♡♡♡♡♡（後書き）

エッチなシーンがなく、申し訳ございません……！！！

かなえの事を書くとなると、どうしてもエッチシーンが書けませんでした……。ですが、逆にかなえがいつ零とセックスできるのか。それを楽しみにしていただければなと思います！

奈央と行ったラブホの受付？　と思われた方は『第７０話』をご参照くださると幸いです♡

次話で【第六章　性奴隷増量編】は完結となります！

どんな終わり方をするのか、どんな内容になるのか、楽しみにしていてください♡

（筆者のプライベートコメント）

「この作品を初期からお読みいただけている方はお気づきかと思うのですが、零がどんどん鬼畜になって行ってしまっております。

これ、実は筆者の人格、性格が関係してしまっております……。

日に日に、筆者自身が鬼畜な性格（エロに対して）になって行っており、その全てが零に反映されてしまっております……。

書き始めた頃は、そこまででもなかったのですが、本当に、一日毎と言っても過言ではないくらい、どんどん鬼畜になっていく自分がおります……。

なので、この作品は日に日に零の性格が変わって行ってしまうかと思います。初期の頃の零が好きで応援してくださってる読者の皆様には、大変申し訳ない気持ちでいっぱいです……。

これから、どんどん鬼畜なプレイが増えて行ってしまうかもしれません。ですが、ハード過ぎるプレイは書かないように気をつけた

いと思っております！
なのでもし、これからも応援してやってもいいな。読んでやってもいいな。と思ってくださいましたら、変わらずご愛読いただけますと、幸いです……！
自分の性格などを反映させてしまう筆者ですが、これからも皆様に喜んでいただけるような作品を書いていけるよう精進いたしますので、何卒、よろしくお願い致します！
それでは、【第六章】ラストとなる次話をお楽しみに～♡」
（万が一も無いとは思いますが、この作品を学生時代の女友達が見てない事を願いたいです……）。

第１１６話　あっという間の数カ月間／帰宅後、調教済み性奴隷とご対面♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

栞、光、美結、玲奈、あすか、乃々花、尻穴奴隷、かなえの八人を性奴隷にした俺。

当初の目的であった性奴隷の増量は、思った以上に上手く行き、あっという間に八人もの女を性奴隷にする事ができた。

八人中三人が人間以下とは、思いもよらなかったが。

本当であれば、夏休み中に性奴隷を何人か増やし家に帰る予定だったんだが、この八人とのプレイが楽しすぎて帰るのをすっかり忘れてしまっていた。

八人を性奴隷にした時はまだ八月上旬だった。

しかし、今はと言うと――、

「もう九月に入っちまったな～」

「んちゅ……♡　はい♡　九月の中旬ですね♡　時間が過ぎるのは早いです♡」

玲奈にフェラをさせながら、俺はカラオケの部屋の天井を眺める。

そう。もう九月を回ってしまったのだ。

しかも中旬。学校はすでに始まっている。

それに気がついた俺は、慌てて黒乃に連絡をした。そしたら――、

『何も気にする必要はないぞ？　零は女を性奴隷にすると言う重要な事をしてるんだ。他の事、ましてや学校の事なんて気にしなくていいし、考えなくていい。零は存在してくれるだけで進級ができる。と言うか、進級できないはずがないからな。戻ってきたら問題なく四年生になれてるから安心してくれ』

と、言われた。

うちの高校は今年から三年制ではなく四年制となった。それにより、華も俺と一緒の高校に通う事ができた。

ってことは、来年は華、澪、恋、愛莉が卒業するんだな。卒業式で何かしてやろうかな？

「零様、エッチな顔になってますね♡」

「あぁ。来年、俺の性奴隷達が卒業だからな、式で何かしてやろうかと」

「それは素敵です♡　私も混ぜていただけますと嬉しいです♡」

「そういや、玲奈と栞は転校してくるんだったよな？　その辺の話ってどうなってんの？」

「零様の叔母様が理事長と言う事もあって、話は怖いくらいにすんなり通りました♡　零様の性奴隷なら零様の側にいなければならないと言ってくださり、私も栞もいつでも零様の学校に通えます♡

勉強などは……頑張らなきゃですけど……」

「二人は学業免除とかにならないの？」

「はい。私達女……特に零様の性奴隷となった者達は、安定した職業につき、零様を養うお役目がございます。なので、勉強や内申点などはしっかりと維持をしていないと、将来は暗闇のどん底となってしまうんです」

「そうなんだ……。ってか、俺も卒業したら働くけど？」

「それは駄目ですっ！」

すんごい勢いで言ってきたから、びっくりしたわ。

「零様は働く必要はないんです！　女が外で働いてお金を稼ぎ、男性様が家で家事をする。それが昔からの常識なんです。なので、私達女が外で働き、零様は家で性奴隷を犯しまくっていてください♡」

「家事は？」

「零様がやりたいと仰ったら止めはしませんが……基本は私達性奴隷がさせていただきます♡　零様は性欲を発散、性奴隷への躾、それらを考えてくださっていれば大丈夫です♡」

本当、俺に都合よすぎだな。

その内、この世界の女全員が俺に貢いできたりしてな。

「でも玲奈は働かないだろ？」

「え？」

「だって、俺の側から離れないって言ったんだから」

「っっっ♡　はいっ♡　はいっ♡　零様が許していただけるのであれば、私は一生零様のお側を離れませんっ♡」

「許可するから、隣にいろよ？」

「はいっ♡」

玲奈は、この後フェラで5発搾り取ってくれた。

第１１６話　あっという間の数カ月間／帰宅後、調教済み性奴隷とご対面♡♡♡♡♡

玲奈にフェラで抜かれた後、かなえの背中の柔らかさを足で感じながら椅子の背もたれに寄りかかり休んでいると、スマホに着信が入った。

画面を見ると『瑠李』と表示されている。

「もしもし？　どうした？」

『あ、もしもし、零君？　急に電話しちゃってごめんね』

「いや。大丈夫だ、気にするな」

瑠李の声久々だなぁ～。

声聞くだけで勃起しちまう。

俺の勃起を見た玲奈が、俺の目を見てくる。

俺が小さく頷くと、玲奈は二匹のイヌを呼び寄せ、トリプルフェラをし始めた。

「おぉ……」

『エッチしてる所だったよね、ごめんね、水挿しちゃったよね……？』

「いや。ちょうど休憩してたんだけど、瑠李の声を聞いたらフル勃起したから今トリプルフェラさせてんだ」

『もう、零君ったら♡　そんな事言われたら私軽イキしちゃうよ♡』

おそらくもう軽イキしてるだろう。

「そんで？　なんか用があってかけてきたんだよな？」
『あ、そうだった。あのね、実は零君が留守の間に引っ越しを済ませたの』
「引っ越しって、あの豪邸にだよな？」
『うん』
「男手なくて大丈夫だったのか？　重たい物とかあっただろうし。それに、俺、自分の部屋何も片付けてないぞ？」
『大丈夫だよ。そもそも男の子に重たい物は持たしちゃいけないからね』

この世界だとそういう価値観だったな。

『それと、零君の部屋に関してなんだけど、ごめん。勝手に荷物運び出しちゃった……ごめんね……』
「いや、それは全然構わないんだけど。むしろ謝るのは俺だよ。何もしなくてごめんな？」
『ううん！　零君は謝らないでいいんだよ！　私達が勝手にやった事だし、それに、零君がいたとしても私達にやらせてってお願いしてたから』
「そうか？　なら、互いに謝るのは無しだ」
『うん♡』
「そんじゃあ、あれか。帰るとなったら豪邸の方に行くって感じだな」
『うん。場所って覚えてる？』
「覚えてはいる……つもりだけど、正直曖昧だな」
『じゃあ、帰って来る日が決まったら連絡もらってもいいかな？　お迎えに行くから』
「了解」
『それとね、帰ってきたらお楽しみがあるから、チンポ大きくして

楽しみにしてて♡』
「お楽しみ？」
『うん♡　何かはまだ言えないんだけど、零君に喜んでもらえるモノだから♡』
「分かった。楽しみにしてるわ」
『うん♡　あ、零君、ちょっと電話代わってもいい？』
「ん？　いいぞ」

誰だろうか？

『お、お兄ちゃん……？』
「おぉ、燐か。どうした？」
『あの……その……性奴隷の分際でこんな事言うのはいけない事だって言うのは分かってるんですけど……』
「なんだ？」
『で、できるだけ早く帰ってきてほしい……』
「っ！」

やべぇ……燐の弱々しい声と寂しそうなお願いに、ドキッとしたわ。
チンコもめっちゃ跳ね……ってか射精しとった。
玲奈達の顔に大量にかけてたわ。

『お兄ちゃん……ワガママな性奴隷妹でごめんなさい……』
「いいや。気にするな。むしろ、俺こそごめんな？　もっと早く帰る予定だったんだが、予想以上に時間かけちまった。寂しい思いさせて悪い。帰ったら寂しい思いをさせた分、たっぷり可愛がってやるからな」
『うん♡　新しいお家で待ってますね♡　お兄ちゃん、だ～い好き♡♡♡』

燐はそう言い残し、瑠李に電話を代わった。

『燐ちゃんね、零君に会いたい～って、毎日泣きまくってたんだ』
「そうなのか。悪い事したな」
『ううん。気にしないで。今の燐ちゃんを見た感じ、零君、いっぱい可愛がるって言ったでしょ？』
「流石は瑠李。その通りだ」
『んふふ～♡　幼馴染みですから♡　でも～可愛がるのは燐ちゃんだけじゃなくて～』
「あぁ。瑠李も、燐も、全員可愛がるよ」
『っっ♡♡　ありがとう♡　もう今の言葉だけで私軽イキしちゃった♡』
「帰ったらチンコ挿れてイカせまくってやるからな」
『うんっ♡　待ってるね♡　あまり長電話してると巴さん達にズルいって怒られちゃうからそろそろ切るね』
「あぁ。早めに帰るから待っててな」
『うん♡　じゃあね。愛してるよ♡』
「あぁ、じゃあな。俺も愛してる」

通話を終えた俺。
顔面精液まみれで、チンコを舐めしゃぶってる一人と二匹は、羨ましそうにこっちを見ていた。

「愛してるって言ってほしいのか？」

俺が聞くと、一人と二匹はチンコを舐めながら頷く。

「じゃあ、もっとご奉仕を頑張ってもらわないとな」

そう言うと、一人と二匹はより丹念に丁寧にエロくフェラを始めた。

ってか、瑠李って巴の事『巴さん』ってこれまで呼んでたっけ？
確か今までは『おばさん』だったはず……まぁ、一緒に暮らすようになったから呼び方を変えたんだろうな。
俺がいない間に変化した部分も沢山あるだろうから、そういうのも含めて帰るのが楽しみだ。

♡　♡　♡

なんて言ってたのに、今は十月。

そう。本当は帰るつもりだったんだが……。

「あああんっ♡　んんぅっ♡♡♡　先輩っ♡　先輩っ♡　先輩ぃぃぃ♡♡♡」

カラオケの部屋に、光を呼び出し、スパンキングセックスをしたり……。

「んぼっ♡　ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぐぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡」

栞を呼び出し、ひたすらイラマセックスをしたり……。

「あああああ♡♡♡　零様ぁぁぁぁ♡♡♡　もっともっといっぱい犯してくださいぃぃぃ♡♡♡　あああああ♡♡♡」

仕事があるので神奈川に戻った美結を再び呼び出し、マンコから

の精液逆流が止まらないほどの中出しセックスをしたり……。
そんなこんなしてたら、あっという間に十月になってしまっていた。
今、カラオケの部屋には、玲奈、あすか、乃々花、栞、光、美結がいる。……あ、後かなえも。
『はぁはぁはぁ……♡♡♡』
部屋の中では、マンコやアナルから精液を逆流させたり、口や鼻から精液を垂らした状態で床や椅子に横たわる女子達。
かなえだけは足置きになっているので、何もない。
「そういや、光」
「ひゃ、ひゃい……♡」
「ずっとこっちにいるけど、家族と旅行に来てたんだったよな？」
「ひゃい♡　そうです……♡」
「家族は帰ったのか？」
「ひゃい……♡　性奴隷になった事をママに伝えたら『性奴隷たるもの、常にご主人様の事を考え、お呼び出しがあったらすぐに向かわなければならない。だからあなたはここに残っていつ呼び出されてもいいように待機してなさい』って言われたので、私だけ残ったんです♡」
「そうだったんだ」
本当、この世界すげぇよな。
普通に親に性奴隷になったって報告しちまうんだから。

「光ちゃん。光ちゃんも神奈川に帰ったら勉強頑張らないと、留年しちゃうからね？」
「そ、そうでした……！　将来、先輩を養わせていただく為に、ちゃんと勉強して就職できるようにしないと」

俺はマジで幸せ者だよなぁ。
こんな可愛い子達が、俺の性奴隷になって好き勝手させてくれて、挙句、養ってくれちゃうんだから。
その分、俺は射精とおしっこで恩返しするかな。

俺達はこの後、ひたすらエッチをしまくった。

♡　♡　♡

俺が夢で見たハロウィンパーティーを開催した後、あっという間に十一月になった。

「では、帰りますか。神奈川に」
「「「おぉ～！」」」「ワンッ！」「アンッ！」

俺のその言葉に、玲奈、栞、光が返事をし、あすか、乃々花の二匹は全裸で四つん這いの状態で鳴く。
二匹の首には、あすかが黒、乃々花が茶色の首輪がしてあり、リードで繋がれている。そして、アナルにはイヌの尻尾を挿れてある。
かなえは全裸のまま恍惚とした表情を浮かべたまま、俺の隣に立っている（玲奈は俺の腕に抱きついている）。
かなえには、『私はゴミクズ奴隷です。ご主人様に使ってもらう事で価値を発揮する道具です。ご使用いただきありがとうございます♡』と書かれたプラカードを首から下げさせている。
ちなみに、これは俺が言った訳ではなく、本人と他の奴らが言い

出したことだ。
「おぉ～！」
俺の言葉にもう一人、返事をする奴がいた。
「なんでいんの！？　店は！？」
尻穴奴隷だった。
しれっと並んで立っている。
ちなみに、玲奈と尻穴奴隷の二人は服を着ている。が、ノーパンでスカートの丈が短いのでマンコがほぼ丸見えだった（栞と光も同様な服を着ている。そしてノーパン）。
「お店なら大丈夫ですよ♡　副店長に任せてきましたから♡
それに、神奈川にもお店があって、そこの店長と知り合いなので、代わってもらう事にしました♡　あと、このミニスカどうですか……？」
「あんた……意外と顔が広いんだな……。似合ってるよ。お前のデカイケツがよく見えて最高だ」
「んへへ～♡」
「（チッ。この性犯罪者が……）」
「っ！？」
俺の隣で小さく呟いた玲奈。その言葉は尻穴奴隷に届くことはなかったが、下にいる乃々花には聞こえたようで、体をビクッとさせていた。
「まぁ、お前も俺の性奴隷だからな。俺の側にいてもらわなきゃ困

る。そんじゃあ、行くぞ」

俺達は新幹線に乗ることに。

ちなみに、美結は仕事があるので先に神奈川に帰っている。

俺がこっちに来る時は夜行バスだったけど、今回は新幹線だ。

しかも、めっちゃいいやつを取ってくれたらしい。

「おぉ～。すげぇな。俺、新幹線なんてそもそも初めて乗るからな」

新幹線の車内に入り、指定された席へと向かう。

「かなえ、私語を許可する。足置きか椅子、どっちになりたい？」

「ご許可ありがとうございます。　できれば椅子になりたいです♡」

「分かった」

俺はかなえを先に席に座らせ、その上に座った。

「んんっ……♡♡♡」

俺の体重がかかっただけで、かなえは喘ぎ声を漏らした。

「イヌ二匹はそこでな」

二匹のイヌは、通路側に座らせた。他のお客様の邪魔にならないようにしっかりと配慮しながら。

俺の隣の席には玲奈が座り、椅子を回転させて前の席に栞と光が座った。

尻穴奴隷はイヌ達の隣で正座をしている。

「栞は奈央のいとこだったよな？」

「はい♡」

「会うのは結構久々なのか？」

「そうですね。電話やメールなどでは話したりしているんですけど、直接会うとなると結構久しぶりだと思います。最後に会ったのは確か……二年くらい前だったと思うので」

「そんなに空くのか～。まぁ、でもそうだよな。神奈川と大阪だし、いとこなんてそう頻繁に会うもんでもないしな」

「零様はいとことお会いしたりするんですか？」

「う～ん……」

いとこか～……。前世ではあんまり接点なかったんだよな。

いとこが女子ばっかりで、居心地が悪くて途中から顔を出さなくなったからな。

俺より年下が五人いて、年上が五人。計十人のいとこがいる。その全員が女子だ。

そこに、華や燐、桃、巴、黒乃が加わるから前世の俺はできるだけ一緒にいたくなかった。

だからそういう集まりがある日はよく、瑠李を誘って遊びに行ってったっけか。

この世界のいとこはどうなってんだろうか。

全員ド変態だったりしてな。

「零様？」

「あ、ごめんごめん。俺もあんまり会わないかな。時間とか合わせるのも大変だしな」

「確かにそうですね。中々難しいですもんね」

「あぁ。後、一つ言っておきたい事がある」
「はい……？　なんでしょうか？」
「奈央についてなんだが、あいつは俺の娘になってる。赤ちゃん言葉を使ったり、俺の事をパパって呼んだりする。だけど、引かないでやってくれな」
「？　はい。もちろん引いたりしませんよ？」
「え？」

栞が不思議そうな顔をしてる。
いや、その顔をしたいのは俺だよ。

「零様の娘になれるなんて、奈央は幸せ者ですね♡　可愛らしい子供なった奈央を見るのが、今から楽しみです♡」

そうか。この世界だと、エロに直結する事全てが素晴らしい事になるのか。

性奴隷も、肉オナホも、肉便器も、ペットも、道具も、娘も、全てがこの世界の女子にとっては最高なんだな。

「んふふ♡　零様、エッチなお顔になられてますね♡」
「そうか？」
「はい♡　素敵な事を考えているんですね♡」

隣にいる玲奈が、俺の腕に顔を擦り付けながら言ってくる。
ちなみに、俺はしっかりと服を着ている。
流石にこの時期に外で裸はキツイ。
……え？　ペットやかなえには服を着せてないだろうって？　当たり前だ。こいつらは人間じゃないからな。

「ふわぁ～……」
「零様、神奈川に着くまでまだ時間がかかります。お休みになっていてください♡」
「あぁ。そうするわ。悪いな」
「いえ♡　ふわぁ～♡　零様の頭が私の肩に……♡」

俺は玲奈の言葉に甘えて、眠る事にした。
玲奈の右肩に頭を乗せてやると、玲奈は俺の眠りの妨げにならない程度に体を震わせ歓喜した。

寝た事で、かなえにかかる体重が増す。しかし、かなえはそれすら喜んでいた。

♡　♡　♡

「……ま。……様。零様」
「ん……？」
「気持ちよくお眠りの所すみません。神奈川に到着しました」

玲奈に起こされ、目を開ける俺。
どうやら、神奈川に到着したらしい。

「ふわぁ～……！　ありがとうな。肩、大丈夫か？」
「はい♡　至福の時間でした♡」

見ると、右肩は赤くなっており（肩出しトップスなので分かる）、玲奈の服には俺の涎が垂れていた。
しかし、玲奈はそれを気にせず、むしろ喜んでいた。

「零様の寝顔や寝息をこんな間近で堪能できる日がくるだなんて、

夢のようで最高でした♡　ありがとうございます♡」
「いや。こんなんで喜んでくれるならいつだってしてやるよ」
「本当ですか♡」
「あぁ」

そんな会話をしながら、俺達は新幹線を降りた。
新幹線を降りた途端、可愛い声が俺を呼んできた。

「お兄ちゃ～～～～～～～ん！！！！」
「うおっ！」

燐が俺を呼びながら、突進してきた。
なんとか抱きとめる事に成功した俺。
玲奈はすぐに隣からどいてくれた。気が遣えるいい子だねぇ。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん……！」
「よしよし」

俺の胸に顔を埋め、スリスリしてくる燐。
そんな燐の頭を撫でてやる。
と、落ち着いたのか、ゆっくりと顔を上げて俺と顔を合わせてくる。

「おかえりなさいっ♡　お兄ちゃんっ♡」
「あぁ。ただいま」

俺達が挨拶を交わすと、燐の後ろから人が二人やってきた。

「全く……燐。急に突進したら危ないだろう。零が受け止めてくれ

たからいいものの」
「えへへ～……ごめんごめん」
「おかえり、零」
「うん。ただいま、黒乃」
　燐に注意の言葉を告げる黒乃。
「お気持ちはわかります。ですが、零様もお疲れの身。暴走はお控えください」
「は～い」
「おかえりなさいませ、零様」
「あぁ。ただいま、ユイ」
　少しスポーティーなメイド服を着て、おっぱいを丸出しにしている左目を隠したユイが、礼儀正しくお辞儀をしてくる。
「瑠李が言ってたお迎え係って、三人か」
「うん！」「あぁ」「はい」
　黒乃がいるって事は、車だな。
　巴は免許持ってないから、まぁ黒乃が来るのは予想通りだった。
「それにしても、素敵な奴隷がいっぱいだね～」
「ん？　　だろ？」
　燐が玲奈達を見て、そう言ってくる。
「初めまして、燐様。私は一之瀬玲奈と申します。名字は違いますが、前田沙耶香の双子の姉です。零様の性奴隷となれた事、心より嬉しく思っております。これから、零様に誠心誠意ご奉仕させてい

ただきます。ふつつか者ですが、本日よりよろしくお願い致します」

わ～お。玲奈がめちゃくちゃ礼儀正しい。

「あ、通りで見た事があると思った！　そうだ、さやさやに似てるんだ！　お兄ちゃんすごいね～！　双子揃って堕としちゃうなんてっ♡」

「まぁな」

と、そんな会話をしていると、燐が光の方を見て驚く。

「あれ？　ひかひか？」

「ひ、久しぶり……！」

「やっぱひかひかだ～！　え！　ひかひかもお兄ちゃんの性奴隷になったの！」

「う、うん……大阪で偶然会って……ありがたいことに性奴隷にしていただけたの……ごめんね、黙ってて……」

「ううん！　全然！　むしろものすごく嬉しいよ！　これで、私、リサリサ、すずすず、ひかひかの仲良し五人グループの内、四人揃ったねっ♡」

「うんっ♡」

五人って事は、あと一人いるのか。

それは誰だ？　その内出会うだろうから、その時は絶対に性奴隷にしてやる。

「は、初めましてっ！　小鳥遊　栞と申します！　な、奈央のいとこです！　よろしくお願いします！」

栞が緊張した様子で挨拶をした。

「お兄ちゃんの実妹、燐です♡　よろしく～♡」
「零の義理叔母で学校の理事長をしている、黒乃だ。よろしくな」
「零様の専属メイド、天城ユイです。よろしくお願い致します」

それぞれが自己紹介をする。

この全員が俺の性奴隷なんだもんな～。
最高すぎだろ。

と、燐が俺から離れ――、

「よしよ～し♡　可愛いワンちゃんだね～♡」

下で四つん這いになっているイヌ二匹を、可愛がっていた。

「ワンッ♡」「アンッ♡」
「お兄ちゃん、この二匹可愛いね♡」
「あぁ。たっぷり可愛がってあげてくれ」
「うんっ♡　私、お世話する～！」

この二匹のお世話をしてくれるのか。ありがたい。

「零、さっきから気になっているんだが、この二人は？」
「あぁ。こっちの人は……尻穴奴隷。尻穴専属の性奴隷だ。そしてこっちは細川かなえ。ゴミクズ奴隷だ。俺にモノのように扱われて、ひどい扱いを受けるのが好きらしい」
「なるほど。だから一言も喋らず、プラカードをぶら下げてる訳か。そんで尻穴奴隷とは、またすごい奴隷を手に入れたな」
「うん。こいつの尻穴は最高なんだよ。まるでマンコに挿れてるみ

たいな感覚でさ～……」

俺は、黒乃と話しながら歩き出す。
玲奈は尻穴奴隷の面倒を見てくれてるようで、隣には来ていない。
燐はあすかと乃々花のリードを持って、面倒を見てくれてる。
かなえ、栞、光も後をついてくる。

駅の改札を抜け、黒乃の車に乗り込む俺達。

「それじゃあ、帰るぞ。豪邸にな」
『おぉ～！』

俺達は、豪邸へと向かった。

♡　♡　♡

『うわぁ～……！』

栞、光、あすか、乃々花、かなえ、尻穴奴隷、玲奈は初めて見る豪邸に声を漏らしていた。
あすか、乃々花、かなえは、思わず声を漏らしてしまい、慌てて口を噤んでいた。

「ほら、入るぞ」

俺達は中に入る。

高さのある門を抜け、豪華な石の通路を抜け、玄関を開ける。
すると、そこには絶景が広がっていた。

『おかえりなさいませ♡　ご主人様♡』

目の前に広がっていたのは、全裸で整列する女子達の姿だった。

「……ただいま」

俺は少しの間、皆の全裸に見惚れていたが、すぐに帰ってきた挨拶をした。

帰宅した後、俺は自室に案内された。

「ここが零君のお部屋だよ♡」

「やっぱここになったのか。一番広い部屋だよな？」

「うんっ♡　零君はご主人様なんだから、一番広い部屋を使うのは当然♡　レイアウトとか勝手にしちゃったから、もし何かあったら言って？　すぐに直すから」

「あぁ」

俺は部屋の中に入り、部屋の中を見渡す。

棚とかが設置されていて、そこにフィギュアなどが綺麗に飾ってある。

そして、ＡＶも。

「る、瑠李！　こ、これ……」

「ど、どうかした！？」

「こ、これは……」

「あぁ♡　巴さんと黒乃さんに聞いたら、零君の大事なコレクションだって言ってたから、一番目立つところに置いといたよ♡

もしかして、見ちゃ駄目だった……？」

「い、いや……別にそういう訳じゃないんだが……これを見ても何も思わないのか……？」
「ん？　このＤＶＤに映ってる女の人が羨ましいなぁ～って思うかな。私もこんな風に零君にいっぱいエッチな事されたいな～って♡」
「そ、そうか……」

よかった。あやうく前世の事がバレたかと思った。

「今度、これ一緒に見るか？」
「見てもいいの？」
「あぁ。これ見ながらセックスしよう」
「うんっ♡」

俺はＡＶを元に戻し、クローゼットの中を見てみる事にした。

「よいしょ。おぉ～。綺麗だな～。ってか、何気に服が増えてる気、が、す、る……ん？」

クローゼットの下に目をやると、俺は言葉を失った。

「んふぅ～……♡　んふぅ～……♡」

そこには、口にボールギャグを付け、涎を垂らしながら荒い息を漏らし、全裸で両手首をロープで縛られ吊るされてる（座っている状態なので、手だけ上に上げて吊るされている）女がいた。

「だ、誰っ！？」

思わずそう叫ぶと、後ろから瑠李が抱きついてきた。

「言ったでしょ？　帰ってきたらお楽しみがあるって♡」
「これが……？」
「うん♡　零君に喜んでもらいたくて用意したの♡」
俺の耳元で、吐息混じりに言ってきた。
「（調教済み性奴隷の、プ・レ・ゼ・ン・ト♡♡♡）」

第１１６話　あっという間の数カ月間／帰宅後、調教済み性奴隷とご対面♡♡♡♡♡♡（後書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！
言い訳にしかならないのですが、月曜日から急に仕事が忙しくなり、残業続きで帰宅してから執筆する時間が全く取れなくて、完成が遅くなってしまいました……！
仕事が始まるまでの十数分の間に、少しずつ書いてはいたのですが、それだけだと全然時間が足りませんでした……。
おそらく、来週も忙しくなってしまうと思うので、もしかしたら、投稿する時間が今日と同じか、今日より遅くなってしまうかもしれません……。
そうならないようにしたいとは思っているのですが、先にご了承いただけますと幸いです……！

今回で【第六章】は完結となります！
【第六章】、楽しんでいただけましたでしょうか？
沢山興奮して、沢山楽しんでいただけておりましたら幸いです！
【第七章】からも、エロくてエロくてエチエチで、興奮しまくって楽しめるお話を書いていきますので、楽しみにしていてください♡
そして、引き続き応援していただけますと幸いです！

（筆者のプライベートコメント）
「本編に新幹線のシーンが出てきたかと思います。
実は僕、新幹線に一度も乗った事がないんです。
なので、変なところが多々あるかと思われます。色々と調べながら書いたので、ものすごく変な箇所はないとは思うのですが、もしありましたら大変申し訳ないです……！
中学の時の修学旅行で、新幹線に乗るチャンスはあったのですが、

あまり行きたくなくて。
その気持ちを汲んでくれた母が、修学旅行のお金は行かなければ戻ってくるから、戻ってきたお金でベルト買ってあげようか？と言ってくれました。
そのお金で、仮面ライダーのベルトと武器を買ってもらいました（笑）
皆さんは修学旅行や新幹線の思い出はありますか？
修学旅行と言うと覗きが、アニメとかだと定番ですが、実際にする人はいるんでしょうかね……？
長々とすみません！
次話から新章が始まりますので、楽しみにしていてください！
それでは♡」

第117話　新たな奴隷は拘束奴隷！？　瑠李にヤンデレ属性爆誕♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

「言ったでしょ？　帰ってきたらお楽しみがあるって♡」
「これが……？」
「うん♡　零君に喜んでもらいたくて用意したの♡」

俺の耳元で、吐息混じりに言ってきた。

「（調教済み性奴隷の、プ・レ・ゼ・ン・ト♡♡♡）」

調教済みの、性奴隷……。
全裸で手を吊るされ、ボールギャグで口を閉じられずに涎を垂らす女……。

「んふふ♡　チンポ、大きくなってきたね♡」

ズボンの上から、瑠李が股間を触ってくる。

「まずここで手コキ射精しちゃお♡　目の前の奴隷にたっぷりかけちゃおうよ♡」
「あ、あぁ……」

瑠李は俺のズボンとパンツを手際よく脱がしていく。
そして、ギンギンに勃起したチンコを最初から激しく扱いてくる。

「ちょ……瑠李、激し……」

「いっぱいっ♡　いっぱいっ♡　いっぱい出しちゃおっ♡」
「くっ……！」
我慢汁を亀頭やカリに塗りたくりながら、激しく手コキしてくる……！
瑠李の手コキ、こんなに気持ちよかったか……？
「も、もう……！」
「うん♡」
「出るっ！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
ビュルルルルルルルルルル！！！！！
「んふ～～～～～～～～っ♡♡♡」
「いっぱい出てる～～～♡♡♡　もっと♡　もっといっぱい出してぇぇ♡♡♡」
「くっ……！」
射精中にも関わらず、瑠李は激しい手コキをやめない。
それどころか、より激しくしてきて、射精中の精液は目の前にいる女の顔や体にバシャバシャかかっていく。
瑠李の手は、どんどん精液でドロドロになっていく。
「はぁはぁ……！」
大量の射精を終えた俺は、腰が抜けてしまう。
「椅子、来い」

座り込みそうになった瞬間、瑠李がどこかに声をかける。
すると、俺の下に醍醐がやってくる。

「さっ♡　零君、座って♡」
「あ、あぁ……」

俺はゆっくりではなく、ドスンと醍醐の背中に座った。すると――、

「んぐっ～～～～～～～♡♡♡」

醍醐はイッたらしく、全身を震わせた。
しかし、口には猿轡をしている為、喋れない。

醍醐が着けている猿轡は、目の前にいる女のとは違った。
ボール部分に穴が空いていない。

「こいつのはね～突起を口に含むタイプの猿轡なんだ～♡　呼吸はできるから、安心してね♡」
「そ、そうか……」

瑠李……お前はいつから俺の心が読めるようになったんだ……。

「零君、上向いて？」
「ん？　んっ！」
「んちゅ♡　ちゅむ♡　れる♡　ぢゅるるるるるるる♡♡♡♡　ちゅる♡」

上を向いた瞬間、瑠李がキスをしてきた。

なんか、全体的に激しくなったか？

「ちゅぱっ♡　んふふ♡　久しぶりの零君の味♡　美味しい♡」

「瑠李……お前、なんか――」

『瑠李ちゃ～ん！　ちょっと手伝って～！』

「は～い！　ごめんね、零君。この二人で遊んでちょっと待ってて　すぐに済ませて戻ってくるから♡」

「あ、あぁ……」

「ありがとっ♡」

そう言って、瑠李は部屋を出ていった。

「なんか、変わった、か……？」

第１１７話　新たな奴隷は拘束奴隷！？　瑠李にヤンデレ属性爆誕♡♡♡♡♡♡♡

巴に呼ばれ部屋を出ていった瑠李。
よって、部屋には俺と醍醐。そして、拘束された女が残った。

「と、とりあえず……」

俺は醍醐から降り、女に近づいていく。
そして、ボールギャグを外そうとしたら――、

「ただいま～！」
「早っ！？」

今さっき出て行ったよな！？

「大した用事じゃなかったからね♡　そんな事より零君。何してるのかな？」
「え？　な、何って、とりあえずこの人の名前とか聞こうかと……」
「だからってなんで猿轡外そうとしてるの？」
「いや……外さないと聞けないだろ……？」

な、なんか瑠李の雰囲気がガラッと変わったんですけど……！
顔は笑ってるのに目が笑ってない。
めちゃくちゃ怖いぞ！

「朝倉早希（あさくら さき）。二十四歳。Ｈカップ。性感帯は乳輪とクリ。出身は埼玉。体重は５０ｋｇ。身長は１５５ｃｍ。母と妹の三人家族で、一

人で神奈川に引っ越してきた。オナニーは毎日していて、乳輪を弄りながらのクリオナが好きなド変態女。こんなんでいい？」
「お、おおう……」
めちゃくちゃ詳しく言ってきたな……ってか、詳しすぎないか？
「なんでそんなに詳しいんだ？」
「え？　調教する女の情報を全部把握するのは当然の事でしょ？　何もかも全部を把握して、調教相手を掌握する。当然でしょ？」
ま、まぁそうなんだけどさ……。
俺も、増やした性奴隷達の情報は全部把握してるけども。
「当然だよね？　ねっ？　ねっ？　ねぇ……！」
ジリジリとすり寄ってくる瑠李。
な、ななななんなんだ！？　今の瑠李、めちゃくちゃ怖いんだけど！？
「その通りだ！　瑠李の言う通りだ！　だから一旦落ち着け！」
「ん？　ふふ♡　よかった♡　分かってもらえて♡　それじゃあ、その奴隷を使っていっぱいエッチしよ？」
「あ、あぁ……」
♡　♡　♡
「そんで？　この人……朝倉早希、だったっけ？　どんな奴隷に調教してんだ？」
「んふふ～♡　それはね～♡　拘束奴隷～♡」
「拘束、奴隷……？」

なんじゃそりゃ。初めて聞くぞ。

「この奴隷は、常に手か足を拘束されてて、その状態で零君にご奉仕するの♡　まぁ要は、ＳＭプレイをずっと続けてるって感じかな♡　拘束されてる女、零君好きでしょ？」

「え？　い、いやまぁ、それは……」

「え？」

俺が少し恥ずかしくなり、言葉を濁すと、瑠李は満面の笑みから一気に感情を消した顔になった。

「好きだよね？　零君、拘束されてる女、大好きだよね？　ねぇ……ねぇ……大好きだよね……？　大好きって言ってよ！！！」

「っ！？　す、好きだ！　拘束されてる女、大好きだ！　だから落ち着け！」

「えへへ♡　よかった♡　零君の為に用意したのに、嫌いって言われたらどうしようかと思った」

「あはは……悪い悪い……」

なんか……この瑠李の感じ、前世で読んだエロ本にあったぞ……？

それが何か全く思い出せないんだが……！

「この女にはね、零君に何をされても気持ちよくて仕方がないって言う風に洗脳してあるから、零君が好きなように使って♡」

「マジか……じゃあ、試しに……」

とりあえず、一旦瑠李の様子については置いといて、目の前にいる朝倉早希と言うエロい女を堪能する事にした。

俺は、性感帯だと言っていた乳輪を軽くなぞってみる。
すると――、
「んんっ♡♡♡♡♡」
そこまで震えるか？　とビックリするほど、朝倉早希は全身をビクつかせた。
たった一回。しかも軽くしか乳輪をなぞってないのに、朝倉早希は息を激しく乱し、涎も先程より多く垂らし、全身を小刻みに震わせている。
しかも、手が吊るされているのでしっかりと座り込めてなくて手の震えがロープに伝わっている。
今度は、両手の人差し指で両方の乳輪を、形をなぞるように優しく触る。
すると――、
「んんっ♡♡♡♡　んふぅ～～～♡♡♡」
まるでクリを激しく擦られているかのように、全身を震わせ、涎を大量垂らし感じ始める。
「こいつ……すげぇな……」
「でしょ♡」
後ろから瑠李が抱きついてくる。
瑠李の両手は俺のチンコを握っている。

「元々乳輪が弱いド変態女だったんだけど、調教でもっともっと弱くしたんだ♡　あと、洗脳したおかげかな♡」
「その洗脳って、どうやったんだ？　瑠李、そんな事できなかったよな？」
「洗脳って、案外誰でもできるんだよ？　寸止めを繰り返しながら何度も同じ事を言って、頭に刷り込ませるの。お前は何をされても感じるド変態女だって。寸止めされてるから、イキたくてしょうがないでしょ？　だから、体と脳が勝手にイク為に繰り返された言葉を受け入れて、どんどん洗脳されていくの♡」
「なるほど……」

俺も真耶子に似たような事してたわ。

「その女、イクの早すぎてさ、寸止めするの大変だったんだよ。それと、このグズも」
「んぶっ！？」

瑠李が突然、俺の横にいた醍醐を蹴り飛ばす。

「零君がいない間に、完璧なモノに調教しようと思って、みんなと協力しながら調教してたんだけど、こいつ、モノの癖に口答えするわ勝手にイクわで、大変だったんだから」
「そ、そうなのか……」
「でも、安心して♡　今ではもうすっかり、調教済みの完璧なモノになったから♡」
「あ、あぁ……」
「ごめん、話が長くなっちゃったね。さっ、その女でいっぱい楽しもっ♡」

楽しみたいのは山々だが……この瑠李の様子がとうしても気にな

る。

「なぁ、瑠李」

「ん～？」

両手で手コキをしてくる瑠李に、俺は聞いてみることにした。

「俺が留守の間、何かあったのか？」

「っ……」

手コキを止める瑠李。

「な、なんで……？　べ、別に何もないよ……？」

「幼馴染みだからな。瑠李の様子がおかしい事くらいすぐに分かる。何があったんだ？」

背中から離れる瑠李。

俺は瑠李の方を向く。すると、瑠李の表情は焦ったものになっていた。

「べ、別に何もないってば……。ただ、私は零君の為に性奴隷を用意しただけだし、そこの女も調教しただけ！　別に変わったことなんて何もない！」

「そんな訳ないだろ？　瑠李、俺に何を隠してる？」

「べ、別に隠してる事なんて何もないよっ！　何もないんだってばっ！」

どんどん後退していく瑠李は、ベッドに背中が当たり、後退を止める。

後退を止めた瑠李は、俺の方を見ずに、そっぽを向いている。

こいつ……マジで仕置きが必要だな……。
そもそも、瑠李は俺のペットだ。メスブタだ。
ペットの分際で主に逆らったりしていいはずがない。

「おい瑠李」
「だから何もないって――っ！？」

俺は瑠李をベッドに押し倒す。
瑠李の両手を上にあげさせ、左手で押さえつける。

「れ、零君……？」
「お前……ご主人様である俺に隠し事なんて、いい度胸してんじゃん」
「っ！？　ち、違うのっ！　こ、これはっ――」
「あ～うっさい。醍醐、俺のパンツ取れ」

俺に指示された醍醐は、床に落ちている俺のパンツを拾い、渡してくる。
そして、受け取ったそのパンツを――、

「んごっ！？」

瑠李の口の中にねじ込んでやる。

「ちょっと黙ってろ。メスブタの分際で主に逆らう躾のなってないペットに、今からキツ～いお仕置きをしてやるから」
「んん～～～～！　んっ！　んん～～～～！」

涙目になり何かを訴えかけてくる瑠李。

しかし、もう遅い。

俺はこの瑠李の様子がなんなのか、もう理解していた。

おそらくヤンデレって言うやつだろう。

前世でエロ漫画やエロラノベとかによく出てきていた。

大好きな男の為に、何かしたい、喜ばせたい、褒めて欲しい、など、男を想っての感情が暴走してしまう現象。

こんなのフィクションだろうと思っていたが、まさか目の前に本当に現れるとは。

しかも、実際にヤンデレと接してみて分かった。ヤンデレ、めちゃくちゃ怖い。

まぁ、怖いだけなので、このままにしていてもいいんだけど、メスブタの分際で俺に逆らったり上からだったり隠し事したりするのが気に入らない。

だから躾ける。仕置きをする。

「瑠李。いや、メスブタ。覚悟しろよ？　俺に逆らったらどうなるのか、今からこの体に叩き込んでやるから。お前の全てが壊れるまでな」

「っ……！？」

そうして、俺は瑠李への躾と仕置きを開始した。

第１１７話　新たな奴隷は拘束奴隷！？　瑠李にヤンデレ属性爆誕♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

新たな性奴隷の出番が少なくなってしまい申し訳ございません……！

新たな性奴隷の出番は、もうちょっと先になってしまうのですが、ちゃんとメイン回はございますので安心してください♡

瑠李には元々、ヤンデレの素質があったんですよね。

赤城家の瑠李の自室には、零の写真が大量に貼られてあったり、零の為を思って色々と行動を起こしたり。

ヤンデレ化をさせるかどうか迷っていたのですが、思い切ってさせてみました！

ヤンデレと言うのを初めて書くので、合っているかは分からないのですが、ヤンデレ化してしまった瑠李を気に入っていただけますと幸いです♡

（もし、ヤンデレについて詳しい方がいらっしゃいましたら、こうした方がいいよなど、助言をいただけますと幸いです……！）

第118話　躾のなってないメスブタに、超絶キツいお仕置きを♡♡♡♡♡♡♡

俺は醍醐に、早希の拘束を解かせ、二人をベッドに上がらせる。ベッドはキングサイズなので、四人が上がってもなんの問題もない。

醍醐と早希に瑠李の手を押さえさせ、俺は両手が使えるようにした。

「ん～～～～！　んん～～～～～！！　んん～～～～～！！！」

自分の手を押さえつけてくる醍醐と早希に、瑠李が唸りを上げる。口にはボクサーパンツが突っ込まれているので、喋ることができない。

だから、鋭く二人を睨みつけ、威嚇するように唸っている。

「黙れメスブタぁ！！！」

バチィィィンッッッッ！！！！！！

「んうううううううううう！？」

俺はさっきから唸ってうるさい瑠李の、Gカップおっぱいを力強く引っ叩いた。

「さっきからう～う～う～う～う～唸りやがって。うるせぇんだよ。メスブタはメスブタらしく、ブヒブヒ鳴いてろや！」

バチィィィンッッッ！！！！！　バチィィィンッッッ！！！！！　バチィィィンッッッ！！！！！

「んん～～～～♡♡♡♡　んん～～～～♡♡♡♡　ん～～～～♡♡♡♡」

俺は連続でおっぱいを引っ叩く。

おっぱいを叩かれて感じているのか、瑠李は蕩けた表情を浮かべ喘ぎ唸っている。

「おいおい、何感じてんだよ。これは仕置きだぞ？　お前を気持ちよくさせる時間じゃない」

俺はそう言っておっぱいへのビンタをやめる。

そして、瑠李の上に覆い被さり、耳元で醍醐と早希に聞こえないように囁く。

「（去年のようになりたくなかったら、俺に何されてもイカずに耐えろよ？）」

「っ！？」

去年、瑠李は俺の精液をしっかりと飲み干せずしばらくの間俺とのエッチが禁止になった。

ちょうどこのくらいの時期だった。

だから、大晦日や新年の初詣にもいなかった。

「（今からお前のおっぱい、乳首、クリ、マンコ、全てを弄り倒す。俺が許可を出すまでイカなければ、許してやる。だが、イッたらそ

の時点でお前は用済みだ）」
「っ！？」
耳元でそう囁かれた瑠李は、大量の涙をこぼし始めた。
『用済み』。この言葉はこの世界の女にとって、一番言われたくない言葉……だと、玲奈から聞いた。
「そんじゃ、始めるぞ。いいか？　俺が『いい』と言うまで絶対にイクなよ？」
俺は、瑠李へのキツいお仕置きを開始した。
♥♥♥
どうしようどうしよう！？
また零君を怒らせてしまった！？
去年もこのくらいの時期に零君を怒らせて、エッチがお預けになった。
その事をママに話したら、こっぴどく叱られたのに、私はまた同じ過ちを犯してしまっている……。
私ってば、気がついたら朝倉早希を拘束して、醍醐と一緒に調教をしてた……。
二人を調教し始めた時の記憶がほとんどない……。
調教中の記憶はあるんだけど、それに至った経緯が分からない。
それに、零君が朝倉の拘束を解こうとしていたり、引いたりするような素振りを見たりすると、心の底から今まで感じた事のない感情が湧き上がってきてしまう。

そのせいで、零君に取ってはいけない態度、してはいけない口調、言葉遣い、さらには隠し事までしてしまった……。

今、私は零君のボクサーパンツを口に入れられ、醍醐と朝倉に手を押さつけられている。

なんでか分かんないけど、この二人に拘束されるのは死ぬほど嫌で、睨みつけ、唸ってしまう。

でも、それもうるさいと怒られ、私は零君の許可がなければイッてはいけないと言う、キツすぎるお仕置きを受けることとなった。

「んん～～～♡♡♡　　ん～～～～♡♡♡」

零君が右手で左乳首を力強く抓(つね)り、引っ張ってくる。

左手では右のおっぱいを力いっぱい揉みしだいている。

それが気持ちよすぎて、私は喘ぎ声を上げる。

「お前、いつの間にこんなに乳首感じるようになったんだ？　　乳首弄ってるだけでマンコグチャグチャじゃねぇか」

「んん～～～♡♡♡」

零君が左手を下に伸ばし、オマンコを触ってくる。

触られた瞬間、オマンコからグチョ♡　　と言う音が鳴った。

零君は左手のひらで、オマンコを激しく擦ってくる。

クリも一緒に擦れるので、快感が倍になる。

「んぐ～～～！！！　　んぐ～～～！！！」

イキそうになり、声を上げると――、
「おいおい、誰がイッていいって言った？」
「っ！」
零君が乳首から、オマンコから手を離してしまった。
それにより、寸止め状態になり、私は腰から上体に向かってビクンッと体が跳ねた。
「すごい……瑠李様の体、ビクンッて……」
醍醐……！　あんた後で覚えときなさいよ……！
「んむっ！？」
私が頭上の醍醐を睨んでいると、頬を力強く掴まれ、顔の位置を戻される。
戻されると、零君と目が合った。
しかし、その零君の目は鋭く怖いもので、目が合っただけで背筋が凍ってしまいそうだった。
「睨んでる暇があるだなんて、余裕そうだな～。これなら、もっと激しくしても平気だな」
「っ！？」
れ、零君……こ、これ以上に激しくって、な、何するの……！？
「あ、リサ？　持ってきてほしいものがあるんだけど」

わ、私が目の前にいるのに、他の女に電話……。

なんで……。

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで！！

っ！？　ま、まただ……最近、この感情にすぐ襲われる……。

今まではこんな事なかったのに……。

やっぱり、“あの日の事”が原因なのかな……。

私がそんな事を考えていると、部屋をノックする音が聞こえ、零君が入室を許可する。

そして、中に入って来たのはリサちゃん、桃ちゃん、巴さん、黒乃さんだった。

「先輩、言われた物、持ってきました。これで足りますか？」

リサちゃんは大きめの段ボールを持っていた。

何が入っているのかは、私からは見えなかった。

「あぁ。十分だ。サンキューな」

「はい♡　それにしても、瑠李さんを調教なんて珍しいですね」

「あぁ。こいつが俺に逆らったからな」

「「「「っ！？」」」」

零君がそう言うと、四人は目を見開き驚いた。

「る、瑠李ちゃん……！？　兄さんに逆らったってどういう事…

…！？」
「る、瑠李さんが……そんな大罪を……！？」
「まさか、瑠李ちゃんほどの子が、ねぇ～」
「まぁ、最近、零関連の話になると様子がおかしかったからな。何かあるだろうとは思っていたが……まさか逆らってしまうとは」

うるさい！！！

「うぅぅぅ

視界に入ったのは、ローターだった。
二個のローターを、左右の乳首に装着してくる。
「んんぅ♡♡♡」
そして、スイッチを入れられる。
最初から強さはＭＡＸ。
「まだまだ～」
まだあるの！？　と思い、下を見ると、バイブを持った零君が見えた。
そして、そのバイブを――、
「んん～～～♡♡♡♡♡」
オマンコの中に挿(い)れてきた。
強さはこちらもＭＡＸ。
クリの部分に当たる突起もあるので、気持ちよさが半端じゃない。
「まだあるからな～」
「っ！？」
下を見ると、零君がローターとアナルビーズを持っていた。
正直、アナルビーズは分かるけど、ローターはどこに着けるのか分からず、私はビクビクしていた。
「そら」
「んん～～～～～～～～～♡♡♡♡♡」

零君がアナルビーズを、何の遠慮も躊躇もなくアナルに突っ込んできた。
か、開発しといてよかったけど、まだ開発途中だからちょっとだけ痛い……♡
「やっぱ尻穴奴隷のように、すんなりって訳にはいかねぇか」
ま、また他の女の……おぉ♡　駄目……どんどん気持ちよくなる事しか考えられなくなっていく……♡
「そんで、これを」
「んんぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」
バイブの突起が当たって、ただでさえ気持ちいいクリに、零君はローターを装着してくる♡
しかも、強さはＭＡＸ――、
「んんぅぅぅぅぅ！？」
こ、このアナルビーズ、振動式だっ！
激しく振動しながら、ズンズン突き上げてくる♡♡
「す、凄い……♡」
「リサも、このくらい激しくされたい？」
「さ、されたいですけど、お、お尻の穴、まだ開発初期段階なので……」
「大丈夫。兄さんは初めての人には優しくしてくれるよ」

「は、はい……♡」

リサちゃんと桃ちゃんが話している。

会話の内容が気になるけど、もう、何も考えられなくなってきた……。

「みんな、手伝ってくれ。瑠李がイキそうになったらスイッチを切ってくれ。無限寸止めだ」

『了解！』

リサちゃんがアナルビーズ。

桃ちゃんがバイブとクリのローター。

巴さんが右乳首のローター。

黒乃さんが左乳首のローター。

あれ？　れ、零君は……？

「早希、来い」

「は、はい……♡」

零君が朝倉を連れて、ベッドを降りて行く。

待って……待って……待って！

どこに行くの！？　二人でどこに！？

「んんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

も、もう駄目ぇぇぇぇ♡♡♡

零君達が気になるのに、気持ちよくておかしくなるぅぅぅ♡♡♡♡

「んぐ〜〜〜！！！」
『駄目！』
「んんぅぅぅぅぅ！？」
イキそうになった瞬間、全ての玩具の振動が一斉に止まる。
「っ！　っ！　っ！」
私は、全身を激しくビクつかせてしまう。
ベッドがギシギシ鳴っている。
「んっ……♡　んんぅ……♡」
チラッと周りを見ると、そこには零君と朝倉の姿はなかった。
れ、零くぅぅん……せめて零君の手で、お仕置きしてぇぇ……。
「んんぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」
全身のビクつきが収まらない状態にも関わらず、乳首、クリ、オマンコ、アナルの玩具がＭＡＸの強さで振動を再開する。
あああああああ♡♡♡♡
私、どうなっちゃうんだろう……♡
寸止めはこの後、五時間続いた。
零君は一度も戻ってこなかった。

第118話　躾のなってないメスブタに、超絶キツいお仕置きを♡♡♡♡♡♡（後書き）

申し訳ございません……！　諸事情により、瑠李へのお仕置きは3話分とさせていただきます……！

残りの1話については、来週となってしまいます……大変申し訳ございません……！

来週に投稿する話数で、瑠李がなぜヤンデレになってしまったのか、なぜこれまで経験した事のない感情が湧き上がってきたのか。

その全てが明らかになりますので、楽しみにしていてください♡

（ヒントは、零の持っているＡＶです）

来週まで、長いこと待たせてしまう事になってしまうのですが、その分、興奮して喜んでいただける内容、仕上がりにいたしますので、期待に胸と股間を膨らませて待っていてください♡

（筆者のプライベートコメント）

「ここ最近、ＡＶは抜く目的ではなく、執筆する時のＢＧＭ的な役割で再生する事が増えてきました。

もちろん、執筆しない時にオカズとして見る事もありますが、再生しながらの執筆が多くなってしまいました（笑）

なので、最近はアダルトアニメを見てオナニーをする事が増えました。

まぁ、オナニーしながら見ていても、このシチュ使えるかも……このセリフいいな……こういうパターンも有りか……。みたいな感じで、作品に反映できないか考えたりしちゃうんですけどね（笑）

皆さんは、ＡＶかアダルトアニメ、どっちで抜く事が多いですか？

もし、おすすめのＡＶやアダルトアニメがありましたら、教えて

くださると嬉しいです♡
（ちなみに、僕の好きなＡＶのジャンルは女の子が語りかけながらオナニーするやつが好きです♡）
皆様のご期待を裏切らないように頑張りますので、来週の投稿をお楽しみに！
それでは、また来週！」

第１１９話　５時間の寸止め後、終わらないイキ地獄♡♡♡♡♡♡（前書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！

瑠李への再教育、ラストとなります……！

沢山、楽しんでいただけますと幸いです……！

第１１９話　５時間の寸止め後、終わらないイキ地獄♡♡♡♡♡♡

「おぉ～だいぶ出来上がってんな～」
「あ、先輩、おかえりなさい♡」

早希を連れ出して、トイレで楽しみまくっていたらいつの間にかかなりの時間が経ってしまっていた。

「どんくらい経った？」
「五時間くらいですかね」
「兄さん、新しい奴隷の子、どうだった？」
「最高だったぜ。今は失神してるからトイレに放置してある。悪いけど、回収を頼めるか？」
「うん♡　任せて♡　じゃあ、リサ。行くよ」
「はい」

桃とリサは、部屋を出ていく。
トイレで気を失っている早希の回収に向かってくれた。

「巴と黒乃は、この後の躾を手伝ってくれ」
「は～い♡」「任せてくれ」

ベッドの上には、全身を小刻みにビクつかせながら苦悶の表情を浮かべ横になる瑠李がいる。
醍醐は、瑠李が動けないように手を押さえつけている。

「これ、ずっとイカせずにしてたんだよな？」
「うん♡　どんどんイキそうになる間隔が短くなってきて、コン

トロールが大変だったんだけど、なんとか一回もイカせずにできたんだ♡」
「ちなみに、軽イキも許してない」
すげぇ……。軽イキなんて男にはよく分かんねぇけど、それも寸止めできるんだ……。
「だったら今の瑠李はもう、イキたくてイキたくてしょうがないよな。ここからは、ノンストップでイカせて、狂わせてやる。二人も手伝いよろしく」
「は～い♡」「了解」
俺はベッドに上がり、瑠李の足元に座る。
瑠李は足を大きく広げているので、マンコが丸見えだった。
「巴と黒乃は、乳首のローターを頼む。俺は、クリとマンコを責めて、狂わせるから」
「まっかせて～♡」「任せてくれ」
巴と黒乃は、瑠李の乳首に繋がったローターのリモコンを手に取り、瑠李の両脇に座る。
「さぁ、瑠李。辛かっただろう。今からちゃんとイカせてやるからな。もう我慢なんかせず、いっぱいイケ」
そう言って、俺は瑠李への躾を開始した。
♥♥♥
れ、零君が帰ってきてくれた……♡

五時間以上、寸止めをされ私は、もうおかしくなっていた。
イク事だけしか考えられず、他の事なんてどうでもよくなっている。
軽イキすら許されていないので、頭がボーッとしてもう何がなんだか分からなくなっている。

巴さん、黒乃さん、リサちゃん、桃ちゃんが、寸止めをする度に『零君への逆らいは重罪』と、耳元で囁いてくる。
さらに『お前はメスブタ。主に逆らっちゃイケナイ。本来であれば捨てられる所を、優しい主が再躾で許してくれる。感謝しろ』と、五時間の間ずっと囁かれ続けた。

それを受け私は、自分が零君のペットで、メスブタであると言う事を忘れてしまっていたんだと、気付かされた。
そして反省した。
自覚が足りなかったんだ。自分が、零君のメスブタであると言うことに。

零君と愛してると言い合える関係、そして、幼馴染みと言う関係に甘え、調子に乗ってしまった。

この五時間、私は反省をし続けた。
そして、どうすればメスブタとして存在を認めてもらえるかを考えていた。

だけど、寸止めされすぎて途中から何も考えられなくなった。

そんなタイミングで、零君が戻ってきた。

涎や汗、涙でぐちゃぐちゃな私の顔を見られてしまった……。
恥ずかしい……。愛液グチョグチョのオマンコを見られるのは平気だけど、ぐちゃぐちゃな顔を見られるのは恥ずかしい……。

なんて思っていると、零君が私の足の間に座ってきた。
巴さんが右側に。黒乃さんが左側に座ってくる。
二人共、乳首に繋がったローターのリモコンを手に取る。

また寸止め地獄かな……と思っていると、オマンコに挿入(はい)っているバイブに手をかけた零君が、優しい声で言ってくる。

「さぁ、瑠李。辛かっただろう。今からちゃんとイカせてやるからな。もう我慢なんかせず、いっぱいイケ」

あぁ……イッていいんだ……♡
もう我慢しなくていいんだ……♡

私はホッとした。この苦しさからやっと解放されると思ったから。

でも、それは私の思い違いだった。
本当の地獄は、ここからだった。

♡　♡　♡

瑠李への躾開始から、一時間。

「んぎぃぃぃぃぃ❤❤❤

ボクサーパンツを口に入れられている為、喋ることができない瑠李。だから、先程から目で訴えてくる。
『もうやめてくれ』と。
瑠李はすでに軽イキを含め、３０回以上イッている。
瑠李に装着させている玩具の強さは、全てＭＡＸに。
そして、巴と黒乃には、乳首にローターを強く押し当てさせている。
そして、俺はクリのローターを強く押し当て、マンコのバイブも奥の奥に当たるように押し当てている。
アナルビーズも、膝を使って奥に押し当てている。

それにより、瑠李は快感から逃げることができなくなって。
イカされてもイカされても、永遠とイカされ続ける。
それがすでに一時間以上続いている。
イキ過ぎて苦しくなってきているのか、瑠李はさっきから訴えかけてくる。
だが、やめはしない。
これは躾のなってないメスブタへの、仕置きと再教育なのだから。
「瑠李。お前、まだそんな態度が取れるのか。困ったメスブタだ。主に逆らっちゃイケナイとちゃんと理解するまで、体に叩き込まないとな」
俺がそう言うと、瑠李は首を横に振った。
『これ以上は無理』って事だろう。
しかし、今の俺に――、
「メスブタの都合なんざ、知ったことか！」

「んうううううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

バイブとアナルビーズをさらに奥まで押し込み、ローターを押し当てる力も強めた。

瑠李はもう、唸り体を震わせる事しかできなくなった。

♥　♥　♥

イカされ続けて、どのくらい経ったんだろう……。

もう、イキ過ぎて体がおかしくなってる。

「んっぐっっっっっっっっ♥♥♥♥♥♥♥♥」

イク間隔がどんどん短くなり、今ではもう一秒の間隔もないと思う。

「んぐぅぅぅう♥♥♥♥♥♥♥」

こうやって少しでも声を出さないと、どうにかなっちゃいそうで、ものすごく怖い。

本当はもう、声を出すのも苦しい……。

「そろそろいいか」

零君のそんな声が聞こえてくる。

もしかして、もう終わりにしてくれるのかな……？

そんな私の期待は、一瞬にして崩された。

「んじゃ、最後の仕上げだ」

そう言って零君は、私に目隠しをつけてくる。

ま、まだ、あるの……？

目隠しをされた瞬間、今までやめてもらえなかった責めが、一斉に止まった。

え……？　な、何……？　どういう事……？

もう終わりなの……？

と、思っていたら――、

「んぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！？」

突然、乳首、アナル、クリ、オマンコの責めが再開した。

しかも、それだけでなく、下腹部に電マを押し当ててきた。

これ、ヤバイ……！

電マが当たってる所、ものすごく気持ちいい……！

気持ちいいんだけど、気持ちよすぎて痛い……！

「ここって確か、ポルチオって言うんだよね？」

「そそ。今度巴と黒乃にもしてやるよ」

「うん♡」「楽しみだ♡」

ぽ、ポルチオ……。

エッチな漫画で見たことがある。

Gスポットのさらに奥にある、子宮膣部……だったっけ。

クリやGスポとは違う、女子特有の性感帯。

わ、私……今、そこを責められてるんだ……♡

イカされまくった後に、新たな性感帯の刺激なんて、もう……♡

「んりいいい

目隠しを取り、口の中からボクサーパンツを取り出す（巴が取り出してくれた）。

「ひゅ～……ひゅ～……」

数時間ぶりに解放された口。

乱れた呼吸も相まって、空気が漏れたかのような音が鳴っている。

「瑠李。お前は俺のなんだ？」

「め、めふふはれふ……♥♥♥　ほひゅひんはまの、へっほれ、めふふはれふ……♥♥♥♥」

「俺に逆らっていいのか？」

「よふないれふ……」

「じゃあ、これからはしっかりとペットらしく、メスブタらしくしろよ？」

「はひ……♥♥♥　ふみまへんれひは……！」

巴と黒乃に支えられ座った瑠李は、なんとか土下座をした。

「よし。もういいぞ。だが、一つ聞かなきゃなんねぇ。お前、俺に何を隠してる？」

「っ！？」

俺にそう聞かれた瑠李は、肩をビクつかせた。

そして、上体を上げ、巴と黒乃に支えられながら俺を見る。

「お前が俺の為を思って暴走した事と、俺に隠してる事はなんか関係があるんだろ？」

何かがあったから、瑠李はヤンデレ化した。

俺はそう思っている。

巴から水分を補給された瑠李は、口内が潤い、喋れるようになった。

瑠李からの言葉を待っていると、瑠李は突然泣き出してしまった。

「ど、どうした……！？」

流石にいきなり泣かれるとビビる。

「うぅ～……ぐす……わ、私、この事実を受け入れたくないの……だって受け入れたら、悲しくなっちゃうから……」

「何があったんだ？」

瑠李は泣きながらも、なんとか言葉を紡いだ。

「ひっく……零君……ひっく……転生者、なんだよね……？」

「「「っ！？」」」

俺、巴、黒乃の三人は、瑠李のその言葉に驚きを隠せなかった。

「る、瑠李……なんでそれを……？」

「零君のＡＶを見た時にね……スマホで調べたの……。そしたら、製造も販売もされてなくて、そもそもメーカーとかも存在してなくて……。どういう事なんだろうって考えてたら、前に読んだエロ漫画を思い出したの……」

瑠李は鼻をかんだ後、水分を取り、続きを話し出す。

「そこにはね、男の子がエッチに興味がある世界から、貞操観念が逆転した世界に転生して、エッチな女の子達とセックスしまくるって言う、ファンタジーな内容が書かれてたの」

今の俺の状況と同じ、か。

「それを思い出した途端、全身に恐怖が襲ったの。もし、零君がその漫画通りなんだとしたら、前世があって、そこで一度死んでいて、こっちの世界で目を覚ましたんだって……零君が死んでしまったんだと考えただけで、背筋が凍ったの……」

震える瑠李を、巴と黒乃が左右から抱きしめる。

「大好きな零君が死んじゃうなんて、考えただけで怖くて……でも、一番怖い思いをしたのは零君で……一人で色々考えた後、怖い気持ちを誤魔化したいのと、転生してきた零君を楽しませてあげたいと思ったのが混ざって、結果、醍醐と朝倉を調教する事になったの……」

巴と黒乃の抱擁を一度解き、勢いよく土下座をしてくる。

「本当にごめんなさい……！！！　私、結局自分の事しか考えてなかった……！　零君の為とか言っておきながら、結局は自分の恐怖心を誤魔化したいだけだった……！　本当にごめんなさい……！！！」

瑠李の気持ちは痛いほど分かる。

立場が逆だったら、俺はその恐怖心に耐えられないかもしれない。

そんな状態で、瑠李は俺の為を思って行動することで恐怖心を誤魔化し、乗り切ろうとしていた。

それが、無意識にヤンデレと言う属性を生み出していたんだろう。

「瑠李」

俺は、瑠李の肩を優しく掴み、上体を上げる。

「零君……」

「お前の気持ちは分かった。だから、もう謝るな。むしろ、謝るなら俺の方だ」

「零君……？」

「瑠李の言う通り、俺には前世があって、こっちの世界に転生してきた」

「っ！？」

俺の言葉に、瑠李は苦しげな表情を浮かべる。

「前世の世界では、男が性に積極的で、女子が消極的。こっちの世界とは真逆だった。というか、全然違う。胸を隠すのだって男じゃなくて女子の方だからな」

俺の言葉を、瑠李は真剣な表情で聞いてくれる。

巴と黒乃も、真剣な表情で耳を傾けている。

「ブラジャーって言ってな、女子が胸を隠す下着なんだ。前世の世界の男達は、透けブラやブラの形が浮かんでいるのを見て、興奮してたもんだよ。それと、こっちの世界だと、女子が働いて、男を養うよな？」

「うん……」

「前世の世界だと、基本的には男が働いて、女子を養う。最近は割り勘が当然って感じになってきたけど、前まではデートなんかの支

払いは全部男がするものって言うのが当たり前だったんだ」
「「「「っ！？」」」」
ここまで詳しくは巴と黒乃にも言ってなかったから、二人も瑠李と一緒に驚いていた。
「だから俺は、こっちの世界に来て驚いた。男が全然いないわ、女子は胸をさらけ出してるわ、パンツ丸見えだわ、エッチに積極的だわ、男を養ってくれるわ、性奴隷やペットなんかが許されてるわで、最初の内はめちゃくちゃ戸惑った」
でも……と俺は続け――、
「瑠李や巴、黒乃。それに、他のみんなと過ごしていく内に、前世の世界とは何もかも違うんだから、この状況を受け入れて楽しんでもいいんじゃないか？　って思ったんだ。そう思ったら、すごく楽しくなってさ。俺、元々性欲が強いから、こうやってなんの遠慮もなくセックスできるの、最高なんだ」
俺は三人に近づき、まとめてハグをする。
「だから、いつもありがとうな」
俺がそう言うと、三人は泣き出してしまった。
「零ちゃん……！　私、私も零ちゃんとエッチできて幸せだよ……！　零ちゃん以外の人としてしまった過ちを受け入れてくれて、その上、桃と一緒に愛してくれて……！　私、とっても幸せ……！」
「私だって幸せだ……！　誰にも受け入れてもらえなかった私を、

零はエロくて最高と言って受け入れてくれて、私の処女をもらってくれた……！　それに、沢山愛してくれる……！　それが何より、零との時間が何より幸せなんだ……！」
「私だってぇぇ～……！　大好きな零君とエッチできて、最高に幸せなの……！　零君の怒りを買っちゃった事もあったけど、それがキッカケで零君のメスブタにもなれて……！　こうして一緒に住めて、私、とっても幸せなのぉぉ……！」

三人が抱きしめ返してくれる。

「「「私達こそ、いつもありがとう……！」」」
「瑠李、巴、黒乃……大好きだ」
「「「私達も、だ～い好き♡♡♡」」」

俺は決めた。
俺の性奴隷になってくれた女達は、しっかりと幸せにすると。

何人になろうと、この先どんなに増えようと関係ない。
全員、俺が幸せにしてやる。

俺はそう決め、三人と共にベッドで眠りに就いた。

（ちなみに、醍醐は床で眠らせた）。

第１１９話　５時間の寸止め後、終わらないイキ地獄♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

瑠李への再教育、楽しんでいただけましたら幸いです……！

そしてついに！　瑠李が零が転生者であることを知ってしまいました！

巴と黒乃に加え、三人目です！　この三人は零にとって今後どんな存在になっていくのか、零の前世を知っている三人は今度どんな行動を起こすのか。

その辺も含めて、今後の展開を楽しみにしていただけますと嬉しいです♡

（醍醐は零の前世の話を聞いても、一切動揺しませんでした。それは四人の空間を邪魔しないようにしたのか、それとも……？）

次話では、ついに新性奴隷となる朝倉早希のメイン回となっております！

瑠李を放置して、早希と共に部屋を出ていった零。

その時、何をしていたのか。それが明らかになりますので、楽しみにしていてください♡

（筆者のプライベートコメント）

「皆さんは、おっぱい派ですか？　お尻派ですか？

僕は、実はお尻派なんです。

巨乳や爆乳などの作品を書いておりますが、実はおっぱいよりもお尻が大好きなんです♡

（もちろん、おっぱいも大好きです♡）

でも、文章でお尻の事を書くのってすごく難しくて。なので、大好きなお尻の作品は書かずに、おっぱいを中心的に書いています。

いずれは、お尻を前面に出した作品を書いてみたいなぁと思っているので、もしお尻の作品が出ましたら、チェックしていただけると、嬉しいです♡

（スカートがめくれてパンツが見えるよりも、ズボンの上から浮き出るパンティーラインが大好きです……♡）

どうしようもないド変態で、本当に申し訳ございません……！

こんなド変態な僕ですが、これからも変わらずに応援していただけますと幸いです……！

それでは、次話をお楽しみに～！」

第１２０話　朝倉早希との初エッチ♡♡♡♡♡♡♡

俺は瑠李への寸止めを、巴、黒乃、桃、リサの四人に任せ、朝倉早希を連れてトイレに向かった。

猿轡は外してあるので、喋る事はできる。手を縛っていたロープも外してある。

「えっと……ここか？」

初めての家なので、いまいち場所がまだ把握できてない。

トイレと思わしき場所のドアを開ける。

そこはトイレだった。トイレだったんだが……。

「ひっろ！！！」

思わずそう叫んでしまった。

「ここ、トイレ……だよな？」

「え……？　　あ、は、はい。そう、だと思います……」

俺は隣にいる朝倉早希に聞いてしまっていた。

トイレは、一般的なトイレよりはるかに広く、小便器が入って左の壁側に三つ。洋式便座が最奥に五つ。和式便座が右の壁側の方に三つ設置してあった。

なぜに小便器？　男は俺しかいないのに。設置するにしても一つでいいのでは？
しかも、今どき和式便座って！　久しぶりに見たわ！
でも……和式便座にまたがる女を後ろから犯すのもあり、だよな……。

ってか、洋式便座のところにも、和式便座のところにも仕切りも何もないのはなぜ？
思いっきり丸見えじゃん。

「る、瑠李様達の会話が少し聞こえたのですが……このおトイレだけで二十畳あるそうです……」
「にっ！？」

おいおい……二十畳って……。
一般的なトイレの広さが、えっと……（スマホで調べる）。
一般的に大体一畳あればいい……。

「一般的から大きくかけ離れすぎだろ！」
「っ！」

俺が驚きのあまり大声を出すと、隣の朝倉早希が肩をビクッと震わせた。

「あ、ごめんごめん。もう広さとかどうでもいいから奥に行こう」
「は、はい……」

俺は朝倉早希を最奥にある洋式便座に連れていく。
そして、座らせる。

「あ、あの……」
「ん？」
「あっ……す、すみません……ごめんなさい……」

なんか、すごく弱々しいな。
今までの性奴隷とは、若干様子が違う。
と、言うか、この人どっかで見たような……？

「俺達って、前にどこかで会った事ある？」
「あ、えと、その……零様と瑠李様が、ショッピングモールのペットショップにいらした時に……」

ショッピングモール……ペットショップ……。

「あぁ！　瑠李の首輪やトイレを買いに行った時の！」
「は、はい……」
「通りで見た事があると思った……もしかして、そん時から瑠李に目をつけられてた？」
「は、はい……」
「そっか」

瑠李はあの時から、この人を調教しようとしてたんだな。

さっきから小刻みに震えてる。
いつも虐めてばっかだから、たまには優しくするのも悪くはないかな？

「えっと、早希って呼んでいいか？」
「あ、は、はい……」

「じゃあ、早希。今からエッチするけど、いいよな？」
「はい……♡　お願いします……♡　あ、でも……」
「ん？」
「その……あの……」
「言いたいことがあれば、なんでも言ってくれ」
「はい……その……手を、拘束して欲しいです……」
「こ、拘束って……いいのか？」
「はい……私、拘束されてる方が感じるので……♡」

なるほど。瑠李の調教のたまものって訳か。
にしても、便座に座りながら潤んだ瞳で、上目遣いに拘束を懇願してくるって、マジでエロいな。

「分かった。って言っても拘束するものなんて……」

辺りを見回すと、壁に沢山の引き出しが設置されてる事に気がつく。
そして、その引き出しに入ってる物の名前が記載されている。

「えっと、何々……」

電マ。ローター。バイブ。ディルド。アナルビーズ。鞭。猿轡。ロウソク。首輪。目隠し。ロープ。縄。

「全部違う引き出しに入ってるって、ヤバいな」

しかも、ロープと縄って、何か違うのか？　よく分からん。

「んじゃまぁ、これを適当に……」

引き出しの取っ手に手をかけた瞬間――、
『指紋認証を開始します』
「うわぁ！？　なんだ！？」
突然、引き出しから機械の声が聞こえてきた。
『指紋認証中……指紋認証完了。白下家当主、零様であると確認。ロックを解除します』
俺、いつから当主になったの……？
機械音声がロックを解除と言った瞬間、引き出しから『ガチャ』と言う音が聞こえた。
「これで中身を取り出せるって事か？」
普通に引くことができたので、中からロープを取り出す。
そして、引き出しを元に戻すと――、
『使用続行しますか？【ＹＥＳ】【ＮＯ】』
と、言うのが引き出しに映し出された。
本当、どうなってんのこれ。
「えっと……」
俺は【ＮＯ】を押す。すると――、
『使用終了を確認。キーをロックします』

と言う機械音声が鳴り、『ピー、ガチャン』と音が鳴った。
おそらく、鍵がかかったんだろう。
「これ、後で澪に聞こう……この家買ったのあいつだから」
俺はロープを持ち、早希の元に戻る。
「お待たせ。突然の事にビックリしてさ」
「い、いえ……。私も、おトイレにＡＩが使われてるなんて驚きました」
早希がびっくりしたような顔をしている。
なんか可愛いな。
こいつ、拘束はするけど、あんまり乱暴にしなくてもいいかもな。
「どう拘束されたい？」
「手首を縛って、欲しいです……」
「分かった」
俺は、早希の両手首をくっつけ、ロープで縛る。
「これでいいか？」
「は、はい……♡」
分かりやすく興奮してる。
「そんじゃあ、始めるか」
「はい……♡」

俺は、早希の前で膝立ちになる。
そして、両手でおっぱいを揉む。

「んっ……♡」
「Hカップあるんだったっけ？」
「は、はい……んっ♡」
「Hカップだと、華、雫、恋と一緒だな」
「まだ、皆様とお会いできていないので、すみません……誰が誰だか……」

マジか……瑠李の奴、誰にも会わせず調教してたんか……。

「後で会わせてやるからな」
「はい……♡　んあっ♡」
「本当に乳輪が弱いんだな」

俺は、おっぱいを揉むのをやめ、乳輪を人差し指でなぞっていく。
すると、面白いくらいに体をビクつかせ感じ始める。

「ここ、気持ちいい？」
「んっ♡　あっ♡　き、気持ちっ♡　いいっ♡　んあっ♡」
「もしかして、乳輪だけでイッちゃう？」
「分かんっ、なっ♡　あああ♡♡♡」

すげぇ。こいつ、乳輪を激しく擦ってるだけで腰がヘコヘコ動き始めてる。
しかも、愛液がドバドバ溢れてきてて、便器の水に滴り落ちてさっきから、ぴちゃんぴちゃん鳴ってる。

「これってさ、こうしたらどう？」

「んひゃああんっ♡♡♡」

俺は、右乳輪を激しく擦りながら、左乳輪を舐め回す。

「ぢゅる！　ぢゅるるるる！　れるれる！　れろれろ！」

「んあああああ♡♡♡　れ、零様ぁ♡♡♡　そ、それ駄目ですぅぅ♡♡♡」

絶頂が近いか？　じゃあ、仕上げだ！

「カリッ！」

「っっっ♡♡♡♡　んきゃんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡♡」

ビクビクッ♡♡♡♡

乳輪を噛むと、早希は絶頂を迎えた。

全身をビクつかせ、熱い吐息を漏らしている。

愛液は、まるで潮でも吹いたのかというくらい溢れていて、便器の水にドバドバ落ちている。

「あっ……♡　はっ……♡　はぁはぁ……♡」

「気持ちよかったか？」

「ひゃ、ひゃいぃ……♡　気持ち、よかったですぅ……♡」

「そりゃよかった。瑠李は舐めてくれなかったのか？」

「れ、零様以外の乳首を、な、舐める趣味はないと……」

「なるほど。じゃあ、早希の乳首や乳輪は俺がこれから舐めてやるよ」

「よ、よろしい、んですか……？」

「あぁ。その代わり、早希にも俺のチンコ、舐めてもらうからな？」
「は、はい……♡　もちろん、しっかりとご奉仕させていただきます……♡」
「あぁ。まぁ、フェラはまた今度にして、早速だが、セックスするか」
「い、いいんですか……？」
「あぁ。早希、処女だよな？」
「はい……」
「膜は？」
「まだあります……」
「じゃあ……」

俺は早希に覆いかぶさる。

「優しくするから、痛かったら言えよ？」
「は、はい……♡」

俺はチンコを早希のマンコにあてがう。
グチョグチョになってるから、すぐに奥まで挿入(はい)ってしまいそう。
だが、早希はまだ処女膜がある。黒乃の時と一緒で、優しくしてやんなきゃいけない。

「行くぞ」
「はい……♡」

俺は、早希の膣(なか)に侵入していく。

「んっ……！　んんあああぁぁ……」
「大丈夫か？」
「ちょ、ちょっとだけ痛い、です……」

「まだ半分も挿入(はい)ってないけど、一旦抜くか？」
「い、いえ……そ、そのまま最後まで……最後までお願い、します……」
「分かった。ゆっくり行くからな」
「はい……♡」

俺は、ゆっくりかつ、着実に早希の奥に進んでいく。
そして、膜を完全に破ったのが分かった瞬間――、

「っくはっ……！？」
「大丈夫か？」
「は、はいぃ……」
「無理するな。痛かったら痛いって言え」
「い、痛いです……」
「じゃあ、しばらく動かずにいよう」
「い、いいんですか……？」
「あぁ。その間、俺はこっちで楽しむ」
「んっ♡」

俺は繋がったまま動かず、早希の乳輪を舐め始めた。

「れ、零様」
「ん？」
「ちょっと失礼な事、言ってもよろしいですか……？」
「なんだ？」
「今の零様、赤ちゃんみたいで、すごく可愛いです」
「ふっ。今だけ、お前の赤ん坊になってやるよ。でも、すぐにお前を犯すオオカミになるからな」
「はい……♡」

俺は、早希の乳輪や乳首を舐めたり吸ったり噛んだりしながら、早希の痛みが落ち着くのを待った。

♡　♡　♡

乳輪や乳首を舐めたり吸ったりして、どれくらい時間が経っただろうか。

繋がったまま動かずにいたが、早希はおっぱいへの責めで何度も絶頂を迎えていた。

そのおかげか、マンコの痛みはどんどん引いていき、ようやく動いても大丈夫になった。

「本当に動いていいんだな？」

「は、はい……♡　も、もう痛くないので……♡　ありがとうございました♡　それに、私だけ気持ちよくなって、零様に申し訳ないので……」

「それは別に気にしなくていいけど……一回動いたら、止まらなくなるぞ？」

「はい……♡　いっぱい動いて、沢山気持ちよくなってください……♡　私のオマンコは、零様専用のオナホールなので……♡」

「分かった。じゃあ、遠慮なく、行くぞ！」

「はい♡　んあっ♡」

俺は、おっぱいへの責めをやめ、腰を激しく打ち付け始める。

「んあああああ♡♡♡♡♡　おちんちん♡♡♡　おちんちん♡♡♡　気持ちいいぃ♡♡♡」

腰を打ち付ける度、早希は気持ちよさそうな喘ぎを上げる。

やっぱり、この世界の女は全員ド変態なんだな。
処女を失ったばっかりなのに、こんなに感じまくって、喘ぎまくってる。

「おっぱいでイキまくったから、マンコグチョグチョだぞ！　膣もキュンキュン締め付けてきて、チンコが潰れそうだ！」
「ごめんっ、なさいぃぃ……♡♡♡♡　おっぱいもおちんちんも気持ちよすぎて、オマンコ、勝手に締まっちゃうのぉぉぉ♡♡♡♡」
「こんなに締め付けられたら、我慢なんてできない！　膣で出すぞ！」
「はいっ♡　はいっ♡　膣で♡　膣でっ♡　私の一番深い所で射精してくださいぃぃぃ♡♡♡♡　零様の子種、いっぱい私にくださいぃぃぃ♡♡っ♡♡」
「あぁ！　お望み通りに一番奥で射精してやる！　出すぞ！」
「出してくださいぃぃぃ♡♡♡♡　あああああああああ♡♡♡♡♡」
「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルル！！！！！！

「んあああああああああ♡♡♡♡　中出し来たぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡　熱々の精液が、子宮に注がれてるぅぅぅぅ♡♡♡♡♡
子宮が満たされて、イックぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡♡」

早希は、腰を浮かせながらイッた。
繋がったままなので、腰が跳ねる度にチンコが奥を刺激し、早希はさらにイキまくる。

「んあああああ♡♡♡♡♡」

「くっ……！　また出るっ！」

ビュルルルルルルルル！！！！！！！　ビュビューーーー！！！！！！！！

「あああああああああああ♡♡♡♡♡　精液おかわり最高なのぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡」

「まだまだするからな！」

「あいいいいいいいいいぃ♡♡♡♡♡」

俺はこの後、早希に１０発中出しした。

♥♥♥

「└└」

何か、話し声が聞こえる……。

私、何してたんだっけ……。

あ、そうだ。零様にトイレに連れてこられて、そのままセックスしたんだった……。

零様、優しかった……♡　厳しくされるかと思ったら、すごく優しくて、元々零様の事好きだったのに、もっと好きになっちゃった……♡

でも、ドＳ零様にいじめられたい願望もある……。

今度、言ってみようかな……。

「んっ……んん……」

私は目を開けた。

「ここは……？」

「あ、起きた？」

「も、桃様……？」

目を開けると、目の前には桃様がいた。隣にはリサ様もいる。

ってか、ここ、トイレじゃない……？

「ここはリビング。トイレで気絶してるあなたを、ここまで運んできたの」

「先輩が、気を失ってるから運んでやってくれって」

「そ、そうでしたか……ご迷惑をおかけしてしまい、すみません……」

私、零様とのセックスが気持ちよすぎて気を失っちゃったんだ……。

後で零様にも謝らないと……。

「別に、迷惑なんかじゃない。兄さんとのエッチで気を失うなんて、当然だから。その時に助け合うのが性奴隷の暗黙の了解。だから、気にしないで」

「は、はい……」

桃様は淡々と告げて、キッチンの方へと向かっていった。

お、怒らせちゃったかな……？

「気にしないでください。師匠は先輩以外の前では、あまり感情を

表に出さないので。口調も淡々としていますが、別に怒ったりイライラしてる訳ではありませんので」
「は、はい……」

リサ様がそう言ってくださる。
リサ様って、零様の事を先輩って呼ぶんだ……。

ていうか、桃様も瑠李様もそうだけど、リサ様も可愛いなぁ……。
おっぱいも大きくて可愛い。アイドルとかやったら爆発的に人気出るだろうな……。

「ん？　私の顔に何か付いてます？」
「あ、い、いえ……！　リサ様は可愛いなぁと思って……」
「ふふ♡　ありがとうございます♡　早希さんも、可愛いですよ♡」
「い、いえ……！　私なんて……！　二十四歳で可愛さなんて失ってますし……」
「二十四歳って事は～」
「うわっ！？」

突然、ソファの背後から頭に犬耳を着けた女の子が顔を出してきた。

「え、えっと……」
「鈴音、急に出てきたら早希さんがビックリするでしょう」
「えへへ～♡　ごめんなさ～い♡」
「全くもう」

犬耳を着けた女の子は、鈴音様と言うらしい。
もしかして、この方が零様のメスイヌなのかな？

「早希さんって、あすののかなと同年代くらいだよね～」
「人の名前を略して合体させないの……。あ、でもあの人達は人間ではないから、別にいいのかな？」

なんの話をしているんだろう……？
と、思っていると、廊下の方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あれ！？　さっち！？」
「え……？　えぇ！？」

声がした方を向くと、そこには犬耳を着け四つん這いになっている二人と、プラカードを首から下げた女子が一人立っていた。

「あすちゃんに、のーちゃん、かなちゃん！？」
「やっぱりさっちだー！　嘘ー！　久しぶりじゃん！　まさか、零様の元で再会できるなんてー！」

あすちゃんが四つん這いのまま、私の元に寄ってくる。のーちゃんとかなちゃんもやってくる。

「四人、知り合いなんですか？　かなえさん、喋っていいですよ」

リサ様にそう言われたかなちゃんは、口を開く。

「はい。私達、小学校の時からの友人で。大学まで一緒だったんですけど、就職してからは会う機会が中々なくて」
「へぇ～幼馴染み四人が、ご主人様の性奴隷となって集結なんて、すごいね～♡」

鈴音様の言う通りだ。
数年会ってなかった三人と、まさか零様の性奴隷になって再会するなんて、奇跡すぎる。

「私と乃々ちゃんは、零様のペットで～♡」
「私は零様の道具になったの♡　足置きや椅子として使ってもらえてるんだ……♡」
「三人共、夢を叶えたんだね……♡」
「「「うん……♡」」」

子供の頃から、私達は夢を語り合っていた。
その夢を叶える事ができているなんて、すごく嬉しい。

「さっちも、夢、零様に伝えた？」
「い、いや、私は……」
「早希。零様なら大丈夫よ。私のゴミクズ奴隷になりたいって願いだって受け入れてくださったんだから」
「う、うん……でも、私の願いは今度でいい、かな」
「そう？」
「うん。今は、零様の愛をいただけるだけで、とっても幸せだから♡」

私がそう言うと――、

『分かる～！』

と、桃様、リサ様、鈴音様、あすちゃん、のーちゃん、かなちゃんが声を揃えて言った。

この後、桃様が作ってくださったお料理を食べて、私達は就寝した。

私はリサ様の部屋をお借りして、眠りに就いた。

私の夢は、いつか。いつか零様に伝えよう。

受け入れてもらえるかは分からないけど、零様なら、きっと……。

第１２０話　朝倉早希との初エッチ♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

今回は珍しく？　甘々な優しいセックスを描いてみました！
たまにはこういうのも有り、ですかね？
でも、早希もその内酷い目に合わせるので、楽しみにしていてください♡（結局普通の奴隷はいない……）。

ショッピングモールの店員なんていたっけ……？　と、思われた方は『第９５話』をご参照ください♡

土曜日じゃないのに投稿した理由は、この後明らかになりますので、楽しみに待っていていただけますと幸いです♡

クリスマス特別編！　性なる夜にエッチな時間を♡　プレゼントは零のザーメン♥♥♥（前書き）

プロローグ

今日は１２／２４。クリスマスイブだ。

豪邸に引っ越し、瑠李を再調教した後、クリスマスパーティーを計画していると聞いた。

もちろん、俺もこのメンツでするパーティーは好きなので賛成した。

そして、クリスマスパーティーをする当日。

俺達は、沙耶香の実家が営む旅館へやってきていた。

「ママ～？　　来たよ～」

旅館に到着し、沙耶香が玄関から中に声をかけると――、

「お越しいただき、誠にありがとうございます。零様。零様が滞在の間、当旅館は貸し切りとなっておりますので、ごゆっくり、お過ごしくださいませ。何かお困りごとなどがあれば、お申し付けいただければすぐに駆けつけますので、なんなりとお申し付けください」

沙耶香のお母さんと、もう一人……もしかして妹とかかな？

が、和服を着て正座をし、恭しく頭を下げてくれる。

すげぇ～……プロだ～。

「それじゃあ、れー君、みんな、行こう」
「あぁ」『は～い』
俺達は、沙耶香先導の元、部屋へと向かった。
その際、沙耶香の妹らしき女の子と目が合った。
彼女の目は、発情した女の目になっていた。

クリスマス特別編！　性なる夜にエッチな時間を♡　プレゼントは零のザーメン♥♥♥

部屋に到着した俺達は、それぞれ荷解きを開始する。

醍醐、あすか、乃々花、かなえは、荷物などないので、特にする事はない。

声は発していないが、醍醐とかなえが睨み合っている。

リサに聞いた話だと、どちらが俺の椅子になるか競い合っているらしい。

あすかと乃々花は、燐がお世話をしてくれている。

「ちょっと姉さん、一旦れー君から離れなよ」

「嫌よ。私は零様の隣にずっといると決めたんだから」

「だからって、時と場合ってもんがあるでしょ。今は荷解きしなきゃいけないの。姉さんの荷物、誰がやるのよ」

「はぁ～。分かったわよ。零様、ごめんなさい。一旦離れますね」

「あぁ」

そう言って玲奈は、俺から離れ荷解きを始める。

沙耶香は呆れたため息を一つついた後、自分の荷解きを開始した。

「玲奈が離れた瞬間に来るとは、狙ってたな？」

玲奈が離れた瞬間、右腕に愛莉が。左腕に奈央が抱きついてきた。

「だってぇ～。パパに甘えたかったんだもん♡」

「久しぶりの零様の腕……落ち着きます……♡」

まぁ、帰ってきてからほとんほ相手できてなかったからな。
「愛莉は来年卒業だな」
「はい……零様と学校に通えなくなるのがとても寂しいです……」
まぁ、それに関しては俺も全くの同意見だ。
せっかくできた性奴隷と、一緒に学校に行ってセックスできないのは、ちと寂しい。
「でもまぁ、一緒に住んでるんだから、いつでもできるだろ？」
「はい……♡」
「卒業後の進路ってもう決まってんのか？」
「はい。私、こう見えて力仕事が得意なので、有名企業の倉庫に務める事になりました」
「倉庫か～。結構大変そうなイメージあるな～」
「見学をしに行ってきたのですが、それなりに大変そうでしたね。でも、私には零様がいます♡　零様の顔を見れば、疲れなんて一瞬で吹き飛びますから♡」
「嬉しいこと言ってくれるじゃん。じゃあ、俺も疲れて帰ってくる愛莉を癒せるように常に元気でいないとな」
「はい♡」
「パパ～、奈央は～？」
「奈央もだ。一緒に学校に通って、いつでも元気にエッチしまくろう」
「うんっ♡」
そんなこんなしていると、沙耶香のお母さんが声をかけてきた。
「皆様。大浴場の準備が整いました。お好きな時にお入りいただけ

ますので、お気軽にご利用くださいませ」

そう言って、お母さんは去っていった。

「そんじゃあ、まずはひとっ風呂行くか？」

『はい！』

そうして、俺含め２４人と２匹と物２つは、大浴場へと向かった。

♡　♡　♡

大浴場を楽しんだ俺達は、大宴会場にいた。

女将さん（沙耶香のお母さん）が、色々と準備をしてくれて、ステージ袖には、こちらから見えないように仕切りが設置されていたり、様々な玩具やカメラまでもが用意されている。

至れり尽くせりだな。

「さて。みんなは準備があるって言ってたから、俺は先に夕飯をいただきますかね～」

女子達は、準備があるらしくステージ袖の方に集まっている。

袖の方と言っても、この大宴会場の隣に客室があり、そこで着替えなどを行っているのだが。

「零様。長旅ご苦労様でございました。こちら、零様がお好きだと沙耶香から聞きまして。レモンスカッシュでございます」

「あ、ありがとうございます……！　すんません！」

「あ、お食事中に申し訳ございません……！　急がせてしまい…

…」
「い、いえ……！　ちょうど喉が渇いていたので助かります」
「それでは、注がせていただきます」
「ありがとうございます」

女将さんは、ワイングラスにレスカを注いでくれる。
なんだろう……。ワイングラスにレスカが入っただけで高級感が……。それに、美人に注がれるのって、こんなに嬉しいんだ……。
前世で、おじさん達が女の人に注いでもらいたい気持ちが少し分かるかも。

「いただきます」
「はい♡　召し上がれ♡」
「ごくごくごく……んっ！　美味っ！　何このレスカ！　美味すぎる！」
「んふふ♡　お気に召していただけたなら良かったです♡　まだ沢山ありますので、沢山お飲みくださいね♡」
「はい。ありがとうございます！」
「では、私はこれで失礼致します」
「はい。ありがとうございました」

女将さんは、部屋から出ていく。

「にしても、本当に美味いな」

超絶美味いレスカを飲みながら、俺はこれまた超絶美味い料理を食べ進める。
しばらくすると、ステージ袖の方からお待たせしました～！
という、元気な声が聞こえてきた。

そんな声が聞こえたので、俺は食べるのをやめ、ステージの方を向く。

と、クリスマスらしい曲がかかり、ステージ上がライトアップされる。

俺は手拍子を始める。

こういう時、人間って洗脳でもされてるのかってくらい自然に手拍子するよね。

手拍子を開始して少ししたら、三人がステージ上に上がってきた。

「おぉ～」

ステージ上に上がってきたのは華、恋、愛莉の三人。

「ミニスカサンタ♡　メリークリスマス♡」

トップスの裾、スカートの丈がかなり短いサンタ衣装の華。

Hカップのおっぱいがトップスを持ち上げている為、下乳が丸見えだった。

「おっぱい丸出し、エロパンツサンタ♡　メリークリスマス♡」

Hカップのおっぱいを丸出しにして、赤の穴開きパンツを穿いただけの格好の恋。

一応、頭にはサンタの帽子を被っていて、パンツも赤でクリスマスカラーだ。

「ろ、ロングスカートサンタ♡　でも中は……♡　メリークリ

スマス♡」

長袖のトップスにロングスカートのサンタ衣装の愛莉。
少しサイズが小さめなのか、トップスが体に張り付き、Fカップおっぱいが浮きだっている。
ロングスカートの中は……と言ってスカートを捲った愛莉。
そこから見えたのは、愛莉の肌だった。
つまり、ノーパンだ。

「これから、私達淫乱サンタが、零ちゃんにいっぱいご奉仕するから、プレゼントをいっぱいちょうだい♡」
「プレゼント？」

三人がステージから降り、俺の所にやってくる。
そして、愛莉が耳元で囁いてくる。

「（零様のザーメン、です♡）」
「あぁ。なるほどね。いいよ。どんな事するんだ？」
「んとね～、恋ちゃん！」
「はい！　零様は何もしなくて大丈夫です♡　私達が零様へご奉仕をさせていただくので、零様はいっぱい気持ちよくなって、たっくさんザーメン出してください♡」
「分かった。じゃあ、頼むよ」
「「「はい♡」」」

愛莉が俺の服（旅館の浴衣）を脱がしてくる。

「はんむ♡」

脱がされ、パンイチになった瞬間、恋がボクサーパンツの上から

チンコをしゃぶってきた。

「零ちゃんのおちんちん、ビクビクしながら勃起してる……♡」

恋が勃起前のチンコにしゃぶりついてきたので、勃起する瞬間を三人に見られている。

なんだこれ、結構恥ずかしいな。

「パンツ脱がしますね♡」

恋がしゃぶりつきながら、器用にパンツを脱がしてくる。

「「「わぁ……♡♡♡」」」

パンツを脱がされると、完全に勃起したチンコが三人の目の前に出現する。

それを見た三人は、目にハートマークを浮かばせた。

「「「それでは、ご奉仕させていただきます♡♡♡」」」

華が俺の背後に回り、体重をかけてと言ってくる。

なので、体重をかけると、Hカップのおっぱいがクッションになってとっても気持ちいい。

横に顔を向けると、華がキスをしてくる。

「んちゅ♡　ちゅむ♡　れる♡」

愛莉は俺の右側にいて、無防備になった俺の胸や腹にキスをしてきて、その後、乳首を舐めてくる。

片方を舐めている時は、片方を抓って弄ってくる。

「ぢゅる……♡　ぢゅるるるるる♡♡♡」

恋は、俺の足の間に入っており、上半身を床に突っ伏し、ケツを高く上げた体勢でチンコにしゃぶりついている。

「ぢゅるるるるるる♡♡♡　れるれるれるれる♡♡♡　じゅぼぼぼぼぼぼ♡♡♡」

三人に責められてると、気持ちよすぎてあっという間に限界を迎えてしまう。

ビュルルルルルルルルル！！！！　ビュビューーーー！！！！

「んぶぅ！　んふぅ～♡♡♡　ごくごく……♡♡♡」

暴発にも関わらず、恋は嬉しそうに精液を飲み込んでいく。

「次は私に……♡」

そう言って、乳首を弄っていた愛莉が足元に移動する。だからと言って恋は退いたりしない。

ダブルフェラの始まりだ。

「れるれるれるれる……♡」

恋が竿や玉を舐めてくる。

「じゅぶっ♡　ぐぶっ♡　ぢゅるるるる♡♡♡」

愛莉は、亀頭を口に含み、そこを中心に責めてくる。
今出したばっかの精液の残り汁を、愛莉は激しいバキュームで吸い上げていく。

イッたばっかの亀頭に、そんな激しいバキュームをされたら、もう無理。

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！
ビュルルルルルルルルルルル！！！！　ビューーーーー！！！！

「んぶっ！　んくんくんく……♡♡♡」

二発目の精液を、愛莉が頬を膨らませながら飲み込んでいく。
口からこぼれ、チンコを伝って垂れていく精液を、恋が舌で舐め取っていく。

「じゃあ、最後は私ね♡」

そう言って華が、俺を優しくクッションの上に寝かせ、足の間に移動する。

恋が左側、愛莉が右側になり、華が真ん中になる。
トリプルフェラだ。

「あんむっ♡　ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぐぼっ♡　じゅぼっ♡」

華は、いきなりチンコを根本まで咥え、頭を上下に激しく動かし始めた。

それを見た愛莉と恋は、アイコンタクトをした後、華の頭を掴み、激しく上下に振り始めた。

「ぐぼぉっ♡♡♡　じゅぼぉっ♡♡♡　ぎゅぼぉっ♡♡♡」

それにより、チンコは華の喉奥のさらに奥に入っていく。

それを、華は嬉しそうな表情を浮かべ受け入れていく。

「ぎゅぼぉっ♡♡♡♡　じゅぼぉっ♡♡♡♡　ぐぼぉっ♡♡♡♡♡」

「くっ……！　出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！

ビュビューーーーー！！！！！　ビューーーーーー！！！！！

「んぶっ♡　ぐぷっ……♡　ごくごくごく……♡♡♡♡」

むせながらも、華は一滴残らず精液を飲み込んでいく。

「ごきゅんっ♡　零ちゃん、もう一回だけ出してもらってもいい？」

「あぁ。いくらでもいいぞ？」

「最後にね、私達三人に顔射してほしいの♡」

「分かった」

俺は立ち上がり、三人の顔の前にチンコを持っていく。

「んちゅ……♡　れる……♡　える……♡」

「んちゅ……♡　むちゅ……♡　ちゅぷ……♡」

「れる……♡　ちゅっ……♡　ちゅむ……♡」

亀頭を華。竿の右側を愛莉。左側を恋。
三人が三方向からチンコを責めてくる。
もうすでに三回出しているが、もう耐えられなかった。

「出るぞ！　顔を寄せろ！」

俺の合図で、三人は頬がくっつくくらい顔を寄せる。
そして、俺は自分で手コキを始める。そして――、

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
ビュルルルルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！　ビューーーーー！！！！！

「「「んんぅ～～～～～～～♡♡♡♡♡♡」」」

大量の精液を、三人の顔にぶっかけた。
チンコを左右に振って、三人の顔にまんべんなく精液をかけていく。

「「「幸せ～～～～～～～♡♡♡♡♡♡」」」

射精を終えると、俺はその場に座り込む。

「「「ご馳走様でした♡」」」
「零ちゃん、どうだった？」
「めちゃくちゃ気持ちよかったよ」
「良かった～♡　次の子達も沢山楽しんでね♡　それじゃあ」

「「「サンタ、チームワン、でした♡♡」」」

そう言って、三人は部屋を出ていった。

♡　♡　♡

三人が部屋を出ていった後、再びクリスマスらしい曲がかかる。
そして、すぐにステージ袖から人が出てくる。
今度は四人だった。

「「「「メリークリスマ～～～ス♡♡♡♡」」」」

チャイナ服のようなサンタ衣装を身にまとった燐、リサ、鈴音、光の四人が元気よくステージ上で言ってくる。

この四人って確か、仲良し五人グループだったよな？
もう一人とは会った事がないからな。いつか会えるといいんだが。

「お兄ちゃん！　どうですか？　このサンタコス♡　エッチでよくないですか～♡」

そう言いながら、両側のスリットを強調したり、大事な所を隠している所をヒラヒラさせてくる。

「あぁ。めちゃくちゃエロいよ。さっき出したばっかなのに、もう勃起しちまった」
「「「「わぁ～♡」」」」

俺の勃起を見た四人は、ステージから降りてくる。

「お兄ちゃん♡」「先輩♡」「ご主人様♡」「せ、先輩♡」

「「「「勃起オチンポで、私達をいっぱいイジメてください♡♡♡♡」」」」
「あぁ。任せろ」

俺はまず、鈴音を押し倒す。

「きゃぅんっ♡」
「イヌらしくなってきたじゃねぇか」
「わ、わふんっ♡」
「前戯なんていらねぇよな？　挿れるぞ？」
「わんっ♡」

鈴音のスカートを、リサと光が捲ってくれていたので、俺はすぐに鈴音のマンコに挿れる事ができた。

「わんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

挿れただけでイッたのか、鈴音は顔を仰け反らせ、全身をビクつかせた。

「俺が射精するまではやめねぇからな！」
「わお～～～んっ♡♡♡♡♡」

俺は腰を打ち付け始める。

「お兄ちゃん♡」
「ん？」
「んちゅ♡」

呼ばれたので顔を上げると、目の前に燐の顔があった。そして、

顔を上げた瞬間に燐にキスされた。

さらには――、

「「れる……♡♡♡」」

後ろにいるリサと光が、俺の尻を舐めてきた。

鈴音に覆いかぶさって犯しているので、俺は尻が無防備になっている。

そこを二人は狙って舐めてきた。

キスをされながら尻を舐められ、その状態で女を犯す。ヤバいな。

こんなの……！

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！

ビュルルルルルルルルルルル！！！！！

「わんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

俺は大量の精液を、鈴音に中出しした。

「先輩のアナル、ヒクヒクしてる……♡」

「可愛いね、リサちゃん♡」

「うん♡」

なんか後ろで恥ずかしい話してやがんな……。だったら！

「きゃっ！」

俺は鈴音からチンコを引き抜き、後ろにいたリサを押し倒す。そ

して、すぐにリサに挿入する。

「あああああ♡♡♡　久しぶりの先輩のおちんちん気持ちいいぃぃ♡♡♡♡♡」

そういや、リサを犯すのっていつ以来だ？　まぁ、いいや。

「燐」

「は～い♡」

「キスしろ」

「は～い♡　んちゅ♡」

燐が俺の前まで来て、キスをしてくる。

光はリサとキスをしている。

「んんぅぅぅ♡♡♡　んんぅぅぅ♡♡♡」

俺に犯されながら光にキスをされるリサ。めちゃくちゃエロい。

このJカップのおっぱいだって、ブルンブルン揺れてめちゃくちゃエロい。

「ぷはぁ♡　お兄ちゃん、もう出そう？」

「あぁ。リサにたっぷり注いでやるからな！」

「んん～～～～～♡♡♡♡」

「出るっ！」

ビュビューーーーーーーー！！！！！　ビュルルルルルルルルルルル！！！！！　ビューーーー！！！！！

「んはぁ♡　あああああああ♡♡♡♡　中出ししゃいこおおお

おお♡♡♡♡♡」
「次は！」
「きゃんっ♡」

俺は射精中にも関わらず、リサからチンコを引き抜き光を押し倒した。
すると、俺の行動を読んでいた燐が、射精中のチンコを光の膣(なか)に挿(い)れてくれた。

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！
「んあああああああああ♡♡♡♡　おちんちん挿(はい)入って来ただけなのに精液注がれてるぅぅぅぅ♡♡♡♡」
「もっと突いて、もっと注いでやるからな！」
「はいいいいいいいい♡♡♡♡♡」

俺は光を犯しながら、燐とキスをする。
そして――、

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！
ビュビューーーーー！！！！！！
「あああああああ♡♡♡♡♡　先輩の精液、いっぱい来たぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡」

さらなる精液を、光の膣(なか)に注いだ。

「さぁ、最後はお前だ。燐」
「うん♡　いっぱい犯していっぱい注いでください♡」

俺は光からチンコを引き抜き、燐を押し倒し挿入する。

「あああああああ♡♡♡♡♡　お兄ちゃんのおちんちん来たぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　やっぱこれ、大好きぃぃぃ♡♡♡♡♡」

「燐、寂しい思いさせて、ごめんな」

「ううん♡　大丈夫♡　お兄ちゃんが私の事考えてくれるだけで、私幸せだから♡」

「可愛い奴め。いっぱい犯してやるから、いっぱい気持ちよくなれよ！」

「うんっ♡　お兄ちゃんもいっぱい気持ちよくなってくださいぃぃ♡♡♡」

俺は激しく燐を犯していく。

「やべぇ……！」

「ど、どう、んあああ♡　したの……？　ああんっ♡♡♡♡」

「もう出そう……」

「んふふ♡　いいんだよ♡　いっぱい私の膣(なか)で出して♡」

「あぁ。サンキュー！」

「あああああああああ♡♡♡♡♡　お兄ちゃんの腰パンパン気持ちよすぎですぅぅぅぅ♡♡♡♡」

「出るっ！」

ビュルルルルルルルルルルル！！！！！　ビュルルルルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーー！！！！！

「んはあああああああ♡♡♡♡♡　大好きなお兄ちゃんの精液、子宮に注がれてるぅぅぅぅ♡♡♡♡♡　しゃいこおおおお♡♡♡♡」

大量に中出しした後、困ったことになった。

「り、燐……」

「ん……？　ど、どうしたの……♡」

「おしっこ出そう……」

「んへへ～♡　いいよ～♡　私の膣(なか)にいっぱいおしっこ出してぇ～♡」

「ありがとう！」

ぶじょおおおおおおおおおおおおおお！！！！！

「んあああああああああああああああ♡♡♡♡♡　精液でいっぱいの子宮におしっこ注がれてるぅぅぅぅ♡♡♡♡♡　幸せ過ぎてトブぅぅぅぅ♡♡♡♡」

俺は大量のおしっこを燐の膣(なか)に注いだ。

燐は相当気持ちよかったみたいで、気を失ってしまった。

「はぁはぁ……燐を頼むわ」

「「「はい♡」」」

燐を支えた三人が、俺の方を向く。

「「「以上、サンタ、チームツーでした♡」」」

そう言って、気を失った燐を引きずりながら部屋を出ていった。

♡　♡　♡

四人が部屋から出ていくと、再びクリスマスらしい曲がかかる。

そして、ステージ上に今度は三人出てくる。

「乳首穴開きサンタ♡　メリークリスマス♡」

華と同じようなサンタ衣装だが、乳首の部分に穴が開いた衣装を着た雫。

「赤ちゃんサンタ♡　メリークリスマス♡　バブ～♡」

クリスマスカラーのよだれかけを全裸の上に着けた奈央。

「オマンコ丸見えサンタ♡　メリークリスマス♡」

華と同じサンタ衣装のトップスだけは着ているが、下半身は丸出しで、大事な部分が丸見えな栞。

「これまた、面白い組み合わせだな」

「零様♡　パーティーはまだまだ始まったばかり♡　体力は大丈夫ですか？」

「あぁ。全然大丈夫だぞ」

「流石はパパです♡　奈央達の事も、いっぱい犯して欲しいです♡」

「零様ぁ♡　私達にも零様のザーメン、いっぱいください♡♡」

「あぁ。じゃあ、ブチ犯してやるよ」

そう言ってやると、三人が降りてくる。

「まずは雫だ」

「ありがとうございます♡」

「これって、自分で穴開けたのか？」
「はい……♡　零様に喜んでいただきたくて♡」
「最高だ」
「んあああああああああああああ♡♡♡♡」
俺は、零のスカートをまくり、マンコに挿入した。
ノーパンだったので、すんなり挿入できた。
「零様のチンポぉぉぉ♡♡♡♡　しゃいこおおおお♡♡♡♡♡」
零の膣（なか）、久しぶりに挿（い）れたけど、やっぱり気持ちいいな……！
こんなの耐えられん！
「顔に出すからな！」
「はいいいいいいい♡♡♡　零様のお好きな所に出してください
いい♡♡♡♡♡」
「出るっ！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！

しゃぶってきた。
「奈央！？」
「んふふ～♡　　パパのおひんひん、おいひぃ～♡♡♡」
精液がべっとりついたチンコを、奈央は幸せそうな顔でしゃぶっていく。
「全く。ほら、四つん這いになれ。犯してやる」
「ふぁい♡」
奈央はチンコから口を離し、四つん這いになる。
グッショグショに濡れたマンコを、見せびらかしてくる。
「パパぁ～♡♡♡　　パパのおちんちん、奈央の変態オマンコに頂戴♡♡♡♡」
「あぁ。言われなくても！」
「んにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡」
奈央がマンコを自分で拡げていてくれたので、簡単に奥まで挿入する事ができた。
「ぱ、パパのおちんちん……♡♡♡　　やっぱいい……♡♡♡
でぃ、ディルドじゃ満足できないのぉぉ……♡♡♡♡」
「お前、赤ちゃんのくせにオナニーしてたのか」
「うんっ♡　　うんっ♡　　パパのいないところで勝手にオナニーしちゃう悪い娘に、お仕置き射精してぇぇ♡♡♡♡」
「お望み通りに！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！

！　　ビュルルルルルルルル！！！！！！

「あああああああああああああ♡♡♡♡♡♡　お仕置き中出し来たぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡♡　パパの子種が奈央の子宮にいいいい♡♡♡♡♡　気持ちいい♡♡♡♡♡」

奈央はケツを高く上げ、ビクビク震わせながら床に突っ伏した。奈央もイッたのだろう。

チンコを引き抜き、後方で待機している栞の方を見る。

「栞、マンコか口、どっちを犯されたい？」

「く、口でお願いします……♡」

「分かった。じゃあ口を大きく拡げろ」

「ふぁい……♡」

栞は両手の人差し指を使って口を拡げる。

「それじゃあ、行くぞ！」

「ふぁい――んぶぶぶぶぶ♡♡♡♡」

栞の返事を待たずに、俺は栞の口にチンコを挿入する。初めて会った時のように、イラマセックスをするのだ。

「くっ……！　やっぱお前の口、マンコよりも気持ちいいぞ……！」

「よはっは、ぶぶっ♡♡♡　れふ……ぐぶっ♡　がぶっ♡　ぐぶっ♡　じゅぶっ♡　ぐぼっ♡」

俺は、栞の頭を掴んで腰を打ち付ける。

「そろそろ出すぞ！」
「ぶぁい……♡♡♡」
俺がそう言うと、栞は口をすぼめてくる。
「出るっ！」
ビュルルルルルルルル！！！！！！　ビュビューーーー！！！！！！！　ビューーーーー！！！！！！！
「んぶぅ！？　ぐぶぅ！？　ぐふ……！　ぐぶ……♡♡♡
ごくごくごく……♡♡♡」
口マンコに中出しを終えた俺は、チンコを引き抜き、雫の頬で精液を拭う。
栞は精液を飲みきれておらず、口をずっともごもごさせている。
その為、雫と奈央が代表して言ってくる。
「「以上、サンタ、チームスリーでした♡」」
そう言って、三人は部屋を出ていった。
♡　♡　♡
三人が部屋を出ていったあと……もういいか。おんなじ流れだからな。
ステージ袖から出てきたのは――、

「「「「「メリークリスマス♡♡♡♡」」」」」

あすか、乃々花、かなえ、早希だった。

「ん？　それ……ボディペイント、か？」

「はい♡　サンタコスを書いてみました♡　遠くで見るとあまり違和感はないんですけど、近くで見ると～……」

そう言って一人、二匹、物が降りてくる。

「おぉ～。裸だって丸わかりだな」

「そうなんです♡　乳首とか乳輪、クリとかは隠しきれないですから♡」

「ってか、この組み合わせはどういう組み合わせなんだ？」

「じ、実は、私とこの三人、小学校からのお友達で……」

早希が答えてくれる。

マジか……すんげぇ偶然だな。

「そうか。じゃあ、早希も嬉しいだろ？」

「はい……♡　久しぶりに会ったので♡」

うん。早希の笑顔、可愛いな。

「そんじゃあ、お前らは精液ぶっかけてそのボディペイント落としてやるわ」

「「「「はい……♡♡♡♡」」」」

俺がそう言って立ち上がると、四人がチンコの前に集合してくる。

「俺のオナニーを特別に見せてやる。ありがたく思えよ？」
「「「「は、はい！」」」」
俺は超絶久しぶりのオナニーをする。
でも、刺激が足りない……。
「おい、亀頭を舐めろ」
「あんっ♡」
乃々花に命令すると、嬉しそうに舌を出して、亀頭をチロチロ舐めてくる。
「いいぞ。そろそろ出そうだ。体にかけるから、横になれ」
「「「「はい……♡♡♡♡」」」」
あすか、乃々花、かなえ、早希は一列に横になる。
「出るっ！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！

「どうだ？」

それぞれが体に精液を塗りたくると、ボディペイントがみるみる内に取れていく。

「おぉ～見事に取れたな」

「「「「「ありがとうございました♡♡♡♡」」」」」

「あぁ」

「「「「以上、サンタ、チームフォーでした♡」」」」

そう言って、一人、二匹、物は部屋を出ていった。

♡　♡　♡

さてさて、お次は誰かね～。

ステージ上に三人姿を現す。

「背中隠して前隠さず♡　メリークリスマス♡」

サンタの衣装だが、背中だけを隠しておっぱいや下半身を全く隠さない衣装の真耶子。

「普通の服に見えて～乳首とクリが丸見え♡　メリークリスマス♡」

シンプルなサンタ衣装かと思いきや、乳首とクリの部分に穴が開いた衣装を着た美結。

「おかしな所はない……いいえ。アナルが丸見えです♡　メリー

クリスマス♡」

一見、何もおかしなところがないサンタ衣装だが、ケツを突き出すと、アナルが丸見えな衣装を着た尻穴奴隷。

「面白い組み合わせだな」

三人が降りてくる。

「零様♡　私達にもザーメンのプレゼントをいただけますか？」
「あぁ。真耶子、お前はそこで『イッてろ』」
「ひゃいいいいぃ♡♡♡♡」

真耶子は、俺から少し離れた所で連続絶頂をし始めた。

「ほ、本当にすごいですね……あの、私達は……」
「尻穴奴隷に挿入して、美結はキスしながらの手マンだ」
「「はい……♡♡」」

尻穴奴隷のアナルに挿入する。

「んんぅぅぅぅ♡♡♡」
「本当、マンコよりも気持ちいいって、おかしいぞこのアナル……！　ほら、美結来い」
「はい……♡」

俺は、尻穴奴隷を犯しながら美結とキスをしながら手マンをする。

「んんぅ♡　んふぅ……♡　んんぅ♡」

ちらっと真耶子の方を見る。
と、そこには口から涎を垂れ流しながら何度もイキまくる真耶子がいた。

「そろそろ出すぞ！」
「はいぃぃぃ♡♡♡♡　いっぱい出してくださいぃぃぃ♡♡♡♡」
「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルル！！！！！！！！！

「んあああああ♡♡♡　零様のザーメン、入ってくるぅぅぅ♡♡♡♡」
「そんでもってこれを！」

俺は射精中のチンコを引き抜き、美結に向ける。

「イックぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

手マンを激しくしながら、精液をぶっかけると、美結は潮を吹きながら絶頂した。
少し離れた所では、真耶子がもう無理ぃと言った目でこっちを見ていた。

「真耶子、『イクな』」
「っ……♡　はぁはぁ……」

フラフラになりながら美結と尻穴奴隷に合流する真耶子。

「沢山出してくださり、ありがとうございました♡♡」

「「「以上、サンタ、チームファイブでした♡」」」

三人は部屋を出ていった。

♡　♡　♡

次にやってきたのは――、

「メイド服風サンタ衣装です♡　メリークリスマス♡」

いつものメイド服と色合いが違う、クリスマスカラーのメイド服を着たユイ。

「こっちはスケスケのサンタ衣装です♡」

ユイが説明してくれる。

着ている意味がないだろうと言うくらい、スケスケなサンタ衣装を着た醍醐。

「牛柄のサンタ衣装です♡　メリークリスマス♡」

クリスマスカラーの中に、牛柄が混じった衣装を着た澪。

「ユイちゃんと同じ♡　メリークリスマス♡」

ユイと同じ服を着た桃。

これまた面白い組み合わせだな。

四人が降りてくる。

「醍醐と澪には挿入なしな。お前らは互いに弄り合ってろ」
「はい……♡」
澪は俺にそう言われた途端、醍醐を押し倒し、マンコを激しく弄り始めた。
「そんじゃあ、ユイ。まずはお前からだ」
「はい……♡」
ユイは俺の上に跨り、騎乗位を始める。
「あっ♡　あああっ♡　ああああんっ♡　零様のオチンポ、気持ちいいぃぃ♡♡♡」
「ごめん、もう出そう……！」
「はいぃぃ♡♡♡♡　出してくださいぃぃ♡♡♡　私の子宮にたっぷり注いでくださいぃぃ♡♡♡」
「出るっ！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！

「あぁ」
「んっ……♡　んんぅ……♡♡♡」
桃が跨り、騎乗位をしてくる。
「んんあああああ♡♡♡　やっぱ兄様のオチンポ気持ちいい♡♡♡♡♡」
「も、桃……！　お前、激しすぎ……！　こんなのすぐに出ちまうよ……！」
「いいよぉぉ♡♡♡♡♡　いっぱい出してぇぇぇ♡♡♡　私の子宮に、兄様の子種沢山注いでぇぇぇ♡♡♡」
「出るっ！」
ビュルルルルルルルルル！！！！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！！！！！！
「んあああああ♡♡♡♡♡　兄様の精液来たぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡　しゃいこおおおお♡♡♡♡」
中出しされてイッたようで、桃は力なく俺の胸に項垂れてくる。
「んひゃあああああ♡♡♡」
澪が醍醐をイカせたようで、醍醐の絶叫が聞こえてきた。
それと同時に、澪が醍醐を引きずりこっちにやってきた。
桃も俺の上から降りて、一列に並ぶ。
「「「以上、サンタ、チームシックスでした♡」」」

桃達は部屋を出ていった。

♡　♡　♡

あと何人残ってんだ……？　全然把握できてない。
と、思っているとステージ上に三人姿を現した。

「「「王道のサンタコスです♡　で～も、お口は専用便器です♡」」」

シンプルなサンタ衣装を着た紗夜、沙耶香、玲奈がいた。しかし、口元には『専用便器』と書かれていた。
三人が降りてくる。が、沙耶香は玲奈を睨んでいる。

「沙耶香。どうした？」
「え？　ううん。別に……」
「おい、言えよ。逆らう気か？」

沙耶香の口に指をねじ込み、舌を引っ張ってやる。

「ほ、ほめんなはいっ！？　ひ、ひはうんれふ！？　ねんはんといっほにほほうひふるのは、ふほひひはへ……」
「なるほどな。でも、玲奈も俺の性奴隷だ。分かるだろ？」
「ふぁい……♡　ひっはりほ、ふはりれほほうひひまふ……♡」
「よし。三人は何をしてくれるんだ？」
「れいれい、おしっこ出したくない？」
「あ～確かに出したいかも。燐の膣(なか)に出して以来、出してないからな」
「だよね♡　だから、ほのへんほうへんひに、いっはいらひへ♡」

三人は俺の目の前に跪き、口を両手の人差し指を使って大きく拡げる。

「じゃあ、ありがたく使わせてもらうわ」

俺は三人の前でチンコを持ち、放尿を開始する。

ぶしゃあああああああああああああああああ！！！

「「「んんぅ……♡♡♡」」」

何気に玲奈におしっこぶっかけるの、初じゃね？

「玲奈、大丈夫か？」

「ぶぁい……♡　ばいじょうぶでぶ……♡」

おしっこを飲みながら、嬉しそうに言ってくる。

三人にまんべんなく放尿し終えた後、三人はおしっこを美味しそうに飲み干していく。

「「「ごくごく……♡♡♡　ぷはぁ～♡♡♡　ご馳走様でした♡♡♡」」」

「お粗末様でした」

三人はそれぞれの体についたおしっこを舐め取った後、一列に並び――、

「「「以上、サンタ、チームセブンでした♡」」」

そう言って部屋を出ていった。

♡　♡　♡

「ふわぁ～……流石に疲れてきたな……あと残ってるのは……」

と、眠気と戦いながら残り人数を考えていると、曲が流れステージ上に三人姿を現した。

「「「メリークリスマ～～～ス♡♡♡」」」

乳首にニップレスを着け、Ｔバックを穿いただけの瑠李、巴、黒乃の三人だった。

「やべぇ、眠気一気に覺めたわ」

三人がビデオカメラを手に持ち降りてくる。

「長い時間、ごめんね。疲れたよね？　私達で最後だから♡」

「零ちゃん、最後にもうちょっとだけ頑張ってくれる？」

「零、すまないな」

「ううん。大丈夫。それで？　何をするの？」

俺が聞くと、黒乃はビデオカメラの録画を開始した。

「零君の前世を知ってる三人で、零君専用のＡＶを作るの♡　このニップレスも零君の前世だと当たり前のものでしょ？」

「なるほどね。それはありがたい。あぁ。よくグラドルとかが撮影時に使ってるらしいよ」

「良かった♡　じゃあ、早速、シよ♡」

三脚にカメラを設置し、黒乃が背中側、瑠李が右側、巴が左側に来る。

「「「沢山ご奉仕させていただきます♡」」」

そう言って、黒乃は背中を、瑠李は右乳首を、巴が左乳首を舐め始める。

これ、映像に撮られてるんだよな……めちゃくちゃ興奮すんな……！

「瑠李！」

「きゃっ！」

俺は我慢ができなくなり、瑠李を押し倒し、挿入した。

「んんぅぅぅぅぅ♡♡♡♡　零君のオチンポ来たぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡　パンパンいっぱい突かれて、私、零君にいっぱい犯されてるぅぅぅ♡♡♡♡♡」

「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！！！！！！

「んあああああああ♡♡♡♡♡　零君の中出し来たぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡　ザーメンが子宮にビシャビシャ当たってイックぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

瑠李は大量に潮を吹きながら絶頂した。

「瑠李ちゃん、気持ちよさそう……♡」
「はぁはぁ……っ！」

俺は瑠李からチンコを抜き、巴を押し倒した。

「にゃんっ♡」
「巴えええええええええ！！！」
「あああああああ♡♡♡　零ちゃんのオチンポぉぉ♡♡♡　最高なのぉぉぉぉぉ♡♡♡　もっと♡　もっといっぱいパンパンしてえええ♡♡♡　私のオマンコ、子宮が壊れるくらい、いっぱいパンパンしてえええ♡♡♡」
「巴えええええええ！！！」
「あああああああああああああ♡♡♡　零ちゃぁぁぁぁん♡♡♡♡」
「出る！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！

「黒乃！　黒乃！」
「ど、どうした……♡」
「もう、出るっ……！」
「いいぞ♡　いっぱい♡　いっぱい♡　私の一番奥に注いでくれぇぇぇ♡♡♡♡」
「出るっ！！！！！」

ドプッ！！！！！！！！！　ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！

目を覚ますと、深夜二時を回っていた。
俺は大宴会場ではなく、部屋の布団で目を覚ました。
回りを見ると、みんなが雑魚寝している。みんなで協力して俺を運んでくれたのだろう。
ありがとう。
「ん〜〜〜〜〜っあ〜〜〜〜」
俺は布団の上で伸びをする。
「風呂にでも入るか」
俺はみんなを起こさないように、下着やタオルなどを持って部屋を出た。
大浴場に到着。
服を脱ぎ、中に入る。
「やっぱ貸し切りっていいよな〜」
と、声に出したあと、まずは体を洗おうとシャワーの方に向かうと――、
「「え……？」」
「え……？」
そこには先客がいた。

クリスマス特別編！　性なる夜にエッチな時間を♡　プレゼントは零のザーメン♥♥♥（後書き）

いかがだったでしょうか……？

このクリスマス特別編を投稿したかったので、今日、朝倉早希のエピソードを投稿させていただきました！

書きたいこと全部詰め込んだら、かなりの文字数になってしまいました……すみません……！

読みづらいかもしれないのですが、沢山興奮して楽しんでいただけますと幸いです……！

最後、気になる終わり方になったと思います！

この気になる続きは１２／２７に投稿予定ですので、楽しみに待っていてください♡

特別編が本編にしっかりと繋がるので、沢山楽しんでいただけると、とっても嬉しいです！

（筆者のプライベートコメント）

「沙耶香のお母さんに、レスカを注いでもらうシーンがあったかと思います。

あそこで、美人に注いでもらうと嬉しいの、なんか分かるかもと言うのを書かせていただきましたが、実は僕自身、男女関係なく、誰かに飲み物を注いでもらったり、食べ物を分けられるのが苦手なんです……。

潔癖症……と言う訳ではないのですが、申し訳なさが一番先に来て、その次に人が触ったもの……とか色々考えてしまいます。

そもそも、家族以外と外食に出かけたりする事が一切ないので、そもそも無縁な話なんですけどね（笑）

こんなどうでもいい話を、今後もこのプライベートコメントに書いていこうかなと思っているので、もし、何かご質問などありましたらお気軽にお教えください。こちらの方でお答えさせていただきます♪

それでは、１２／２７をお楽しみに～！」

第１２１話　前田家の二人を性奴隷へ～女将さん～♡♡♡♡♡♡（前書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！

前回のクリスマス特別編と繋がるお話でございます！

お風呂にいた二人と、どうなるのか、どうぞお楽しみください♡

第１２１話　前田家の二人を性奴隷へ～女将さん～♡♡♡♡♡♡

「風呂にでも入るか」

俺はみんなを起こさないように、下着やタオルなどを持って部屋を出た。

大浴場に到着。

服を脱ぎ、中に入る。

「やっぱ貸し切りっていいよな～」

と、声に出したあと、まずは体を洗おうとシャワーの方に向かうと――、

「「え……？」」

「え……？」

そこには先客がいた。

「あ、す、すんません！？　誰もいないと思って……！？」

俺は股間を隠しながら後ずさる。

「い、いえ……！？　こ、こちらこそ申し訳ございません……！　自宅のお風呂が壊れてしまい、この時間なら誰も利用しないだろうと思い入ってしまいました……！　大変申し訳ございません……！」

「すみません……！」

先客。それは、沙耶香のお母さんと妹ちゃんだった。

女将さん（お母さん）も妹ちゃんも、もちろん裸で、今、体を流し終えたのか、テカテカ光っている。

妹ちゃんは沙耶香と同じFカップくらいの大きさで、おわん型。乳輪の色素が薄いため、乳首が目立っている。かと言って色が濃いわけではなく、乳輪より少し濃いピンク色だった。

女将さんの方は、沙耶香や玲奈よりもはるかに大きいおっぱいで、おそらくIカップくらいあると思う。真耶子と同じくらいだ。乳首は陥没していて、乳輪も大きめなので大きさの割に胸の先は引っ込み思案なのかもしれない。しずく型なので、少し下に垂れているが、それがまたいい。

「す、すみません、俺出ますね」

「い、いえ！　そんな気を遣わないでください……！　本来であればこの浴場はお客様専用。私達が入ってはいけないところですから。出ていくのは本来であれば私達です」

「出ていかれるのも、なんか後味が悪いと言うか、なんというか……」

「もし、零様さえよろしければ、お体流させていただいてもよろしいでしょうか……？」

「別に構わないですけど……逆にいいんですか？」

「はい♡　ご迷惑をおかけしてしまいましたし、それに、日頃より、娘が二人お世話になっているので」

ボン・キュッ・ボンで若々しいから忘れがちだけど、この人、三

人の子供を産んでるんだよな……。
なんだろう……無性にこの人を手に入れたい、性奴隷に堕とした
い欲が湧いてくる……。

「わ、私もお手伝いしますっ！」
「えぇ。それでは零様、こちらにおかけになっていただけますか？」
「はい」

俺は女将さんが座っていたバスチェアに腰掛ける。
その際、女将さんが立ち上がる。

パイパン……やべぇ……無性に興奮してきたんだけど……。

「それでは、まず、頭から洗わせていただいてもよろしいでしょう
か？」
「お願いします」
「畏まりました♡」

そう言って女将さんは、シャンプーを手につけ、俺の髪の毛を洗
い始める。

あ～……これ最高～……。

ふにょん♡　ふにゅん♡　むにゃん♡　ぷにゅん♡

うん。背中に当たる感触も最高～。

「シャワーで洗い流しますね」
「あい～」

妹ちゃんがシャワーを出し、頭にシャワーを当て始める。
女将さんは、それに合わせ髪の毛の泡を落とし始める。

流石は親子、連携がすごい。

「はい。綺麗になりました。それでは、お次はお背中、洗わせていただきますね♡」
「はい」
「わ、私はこっちを！」

後ろで女将さんがボディーソープを手に取り、手で広げていくのが分かった。
それに合わせ、目の前にいる妹ちゃんも手にボディーソープを取り、手で広げていく。

ってか、妹ちゃん、君は毛が生えてるのね。
生え始めなのか、それほど濃くはない。
今後、この濃さがどうなっていくのか、気になるな。

「それでは、洗っていきますね♡」
「はい」
「あ、洗わせていただきますっ！」

女将さんが背中を手で優しく擦り始める。
それに合わせ、妹ちゃんも俺の腕を取り、手で優しく洗い始める。
美女と美少女に挟まれ、体を洗われる……最高すぎるんだが……。
それに、さっきから狙ってるんじゃないかってくらいに女将さんのおっぱいが俺の背中に当たっている。

それに、妹ちゃんのおっぱいも無意識なのか、手や腕に当たっている。

こんな事をされてしまうと、当然――、

「あっ……」

妹ちゃんに真っ先に気づかれた。

「ん？　どうした、の……あっ……」

妹ちゃんの動きが止まったのを不思議に思った女将さんは、後ろから前を覗き込む。

そして、当然の事ながら女将さんにも気づかれた。

そう、勃起に。

「すんません……」

「い、いえ……！　謝らないでください……！　当然の現象ですから……！　目の前に可愛くて若い女の子がいれば、そうなってしまいますよね」

「いや、まぁ、確かに手や腕に当たる胸の感触に興奮しちゃいますけど、俺はどちらかと言うと、背中に当たる女将さんの胸の感触の方が興奮すると言うか……」

「ふ、ふぇ！？」

俺がそう言うと、女将さんは素っ頓狂な声を上げて後ろに倒れた。

「お、女将さん！？」

心配になり、後ろを振り向くと、そこには、大胆にも膝を立て、左右に開いて大事な所を丸見えにさせた体勢の女将さんがいた。

「ママ、すごくエッチな格好……♡」

後ろで、妹ちゃんのそんな声が聞こえる。

ね。本当エッチだよね。

「女将さん、誘ってます？」

「あっ！　い、いえ……！　そ、その……こ、これは驚いて……」

俺がそう言うと、女将さんは顔を真っ赤にして体育座りをしてマンコを手で覆って隠してしまった。

え……何、この可愛い生き物は……。

「あの……その……こ、こんなおばさんの体じゃ、こ、興奮なんてしないですよね……」

「おばさんって、女将さん今？」

「さ、三十です……」

「別におばさんじゃないじゃないですか」

「え……？」

「俺の性奴隷の中に、女将さんと同い年の人二人いますし、三十に近い人も数人います。それに、あんまり俺、年気にしないんですよね」

「れ、零様……♡」

「だから、俺、女将さんに興奮してこんなに勃起してるんです」

俺は、勃起したチンコを女将さんの目の前に出す。

勃起チンコを見上げる女将さん、エロすぎる！

「お、オチンポ……♡　こんなにおっきいの見たことない……♡
あぁ……駄目……♡　久しぶりにオチンポ見るから、オマンコ疼いて……♡　私の、女としての本能が……♡」

何か一人でブツブツ言ってる。
が、マンコを覆う手は、ただ覆うのではなく、マンコを弄り始めている。

「キャッ！」

俺は女将さんを押し倒す。

「はぁはぁ……♡」

もう発情しきってんじゃん。

「女将さん、いい？」
「で、でも……」
「俺、女将さんとセックスしたい。女将さんのマンコの膣（なか）に、チンコ挿（い）れたい。駄目？」
「そ、その目は、ズルいです～……♡」

俺は、亀頭をマンコの入口にあてがう。

「女将さんが“いい”　って言ってくれたら、オマンコに当たってる“これ”、奥まで挿（い）れるんですけど」

「う、うぅ……ひ、一つだけ確認しても、い、いいですか……？」
「何個でも」
「わ、私は零様以外の人と関係を持ち、三人の娘を産んでしまいました……これは、零様に対しての反逆行為です……そんな罪深い私のオマンコでも、使ってくださいますか……？　こんな私でも、許してくださいますか……？」
「当たり前だ。むしろ、女将さんが子供を産んでくれてなかったら、俺が沙耶香や玲奈と出会う事はなかった。あの二人を性奴隷にする事もなかった。あんな最高な女を手にできないなんて、考えただけでゾッとする」

だから……と続け――、

「子供を産んだ事を悔やんだり、卑下したりするな。むしろ誇ってくれ。俺は、三人を産んでくれて感謝してる。それに、俺の義理の母さんだって、娘を一人産んでいるけど、今では俺専用の立派な性奴隷だ」
「す、素敵……♡」
「だから、気にするな」
「はい……♡」
「あ、でも。俺の性奴隷になるのであれば、もう二度と俺以外と関係を持つ事は許さないからな？」
「それに関してはご心配にはおよびません……♡　夫とはもうすでに離婚しておりますし、零様をひと目見た時から、他の人には興味がなくなったので♡」
「そうか。じゃあ、どうする？」
「っ……♡」

女将さんは、顔を真っ赤にした後、両手を広げて、大きなおっぱいを見せつけてくる。そして――、

「零様、来てください♡　こんな私の体でよければ、沢山使ってください♡　私を、零様の性奴隷にしてください♡　“いい”です……♡」
「ふんっ！」
「んあああああああああああああ♡♡♡♡♡」

俺は、女将さんの返事を聞いた瞬間に、チンコを膣にぶっこんだ。

子供を三人産んだとは思えないくらいの締りで、締り具合は沙耶香や玲奈と対して変わらない気がする。

「女将さん、俺のどう？」
「き、気持ちいい、です……♡　零様のオチンポ、大きすぎて、まるで、処女に戻ったみたい……♡」
「嬉しいこと言ってくれるね。じゃあ、処女に戻ったマンコ、沢山犯してあげるよ！」
「あああああああ♡♡♡　オチンポっ♡　オチンポっ♡　オチンポぉぉぉぉ♡♡♡　引く度に膣を抉ってきて、突く度に子宮を押しつぶしてくるぅぅぅ♡♡♡」
「締まりヤバ……！　こんなの持たない……！　どこに出してほしい！」
「な、膣にぃぃ♡♡♡　膣に出してほしいですぅぅ♡♡♡　私の子宮にいっぱい子種ビュービューして、零様の子供孕ませてください♡♡♡　私、零様の子供産みたいぃぃ♡♡♡」
「分かった！　一番奥の奥に射精して、確実に孕ませてやる！」
「はいいいいぃ♡♡♡　子供っ♡　子供っ♡　零様との子供おぉぉぉ♡♡♡」
「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
ビュビューーーーー！！！！！

「んあああああああああああ♡♡♡　出てるぅぅ♡♡♡♡
膣（なか）でオチンポ脈打って、子種沢山子宮に流し込んでるぅぅぅ♡♡♡
量も濃さもすごくて、一発で孕むかもぉぉぉぉぉ♡♡♡」
「くっ……！　まだ出る！」

ビュルルルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！

「あああああああああああああ♡♡♡♡　大量中出しぃぃぃ♡♡♡
気持ちよすぎて、イックぅぅぅぅ♡♡♡」

女将さんは、中出しをされてイキまくる。
全身をビクビクと震わせ、腰を浮かせてくる。

「女将さん、まだするからな！」
「は、はいぃぃぃ♡♡♡」

俺は、女将さんを起こし床に座る。
対面騎乗というやつだ。

「んっ♡　んっ♡　んっ♡　んん～～～～～♡♡♡♡」

俺は女将さんとキスをする。
その間も、下から突き上げてオマンコを刺激する。

「ぷはぁ♡　あああああ♡♡♡　娘が見てるのに、気持ちよくなっちゃうぅぅ♡♡♡」

「恥ずかしいか？」
「は、恥ずかしいですぅぅぅ♡♡♡」
「そうか。でもな、別にセックスやエッチは恥ずかしいことじゃない。当然の行為なんだ。だから、娘の前だろうと、人前だろうと、関係なく気持ちよくなれ！」
「はいぃぃぃぃ♡♡♡♡　あああああああ♡♡♡　またイックぅぅぅぅ♡♡♡」

女将さんはまたイッたようで、背中を仰け反らせる。

「女将さん、俺ももう出すぞ！」
「はいぃぃぃぃ♡♡♡♡」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
ビュルルルルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！　ビューーーー！！！！！

「おおおおおおおおおおお♡♡♡♡　にゃかりゃし来たぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡　子宮が重たくなって幸せすぎてイグぅぅぅ♡♡♡♡」

強く抱き合って俺は中出しをした。
すると、女将さんも絶頂し、全身を震わせた。

「はぁはぁ……♡」

ゆっくりと女将さんを床に横たわらせ、チンコを引き抜くと、マンコからは大量の精液が逆流してきた。

ごぽ……♡　ごぽぽ……♡

「すんげぇ出たな……。ってうお！？」
マンコから大量の精液を逆流させる女将さんを眺めていたら、突然、横からチンコを咥えられた。
「い、妹ちゃん！？」
「ふみまへん……！　も、もうはまんれひないんれふ……！」
咥えてきたのはもちろん、妹ちゃん。
その表情は蕩けきっていて、母親のエッチを見て興奮しまくっているのが丸わかりだった。
四つん這いで咥えてきているので、少し大きめのお尻が丸見えになっている。
そのお尻を左右に振りながら、妹ちゃんはオマンコを左手で弄っている。
右手は床に着き、自身の体を支えている。
フェラはノーハンドだ。
「ほめんなはい……ほめんなはい……！　れも、もうはまんれひないんれふ……！　じゅぶっ♡」
「こっちこそごめんな。ずっと我慢させちゃって。朝からずっと発情してたもんな」
「っ！　ひ、ひふいへはんれふは……！？」
「あぁ。目を見れば分かるよ。女の目になってたから」
「ほめんなはい……」
「謝らなくていい。むしろ、姉二人が性奴隷になっててよく我慢できてるなって思ってたよ。正直、君の事も性奴隷にしたいって思っ

てたし」
「ほ、ほんろうれふは！」
「うん。だから今からエッチ、しようか。お母さんはあそこでアへってるから、次は君の番。ね？」
「はひ♡　よろひふおねはいひまふ♡」

一度もチンコから口を離さずに、妹ちゃんは受け答えをした。
正直、咥えられたまま喋られると、気持ちよくて射精してしまいそうになるのだが、なんとか堪えた。
後でいっぱい出したいからな。

「じゃあ、エッチしようか」
「はひ……♡♡♡」

第二ラウンド、スタートだ！

第１２１話　前田家の二人を性奴隷へ～女将さん～♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

沙耶香と玲奈のお母さんと関係を持った零。
巴と少し境遇が似ているので、零は放っておけなかったのかもしれませんね。

妹ちゃんとのエッチは次話となります！
お待たせしてしまい申し訳ないのですが、妹ちゃんとのエッチもエロエロに書かせていただきますので楽しみにしていてください！

二人の名前は、次話明らかになりますので、そちらも合わせて楽しみにしていてくださると幸いです！

第122話　前田家の二人を性奴隷へ～妹ちゃん～♡♡♡♡♡♡

「じゃあ、エッチしようか」
「はひ……♡♡♡」

俺のチンコから口を離さずに、可愛く返事をする妹ちゃん。

女将さんのようにいきなり犯してもいいけど……ここはこの状態を利用して。

「頭押さえつけるから、苦しくなったら言ってね？」
「は、はひ……♡」

俺は妹ちゃんの頭を掴み、ぐぐぐっと下まで引きつける。

イラマのような感じだ。

「ぐっ……♡　ぶっ……♡　かひゅ……♡　ぐぶっ……♡」

喉奥に亀頭が当たるのが分かる。

相当奥まで当たっているのに、妹ちゃんは頭を押さえつける手を振り払ったり、頭を離そうとしたりしない。

むしろ、舌で竿の根本部分を支え、のどちんこに亀頭を押し付けている。

「がひゅ……♡　ぐひゅ……♡　ごっ……♡」

それでも、苦しいのには変わりなく、だんだんとむせこんできた。

「がっ……♡　ぐっ……♡」

むせこむ度に、唾液と胃液が混じった泡が口から飛び出してくる。

「ぐっ……♡　ぱっ……！　はぁはぁ……♡」

頭を離し、口からチンコを引き抜いてやると、ネバネバした白濁液が、妹ちゃんの口と亀頭に糸の架け橋を作った。

そして、それがだらんと垂れた後、妹ちゃんは白濁液の糸を口からだらしなく垂らしながら、熱い吐息を漏らす。

舌は、まだチンコを求めているのか、口の外に出て左右にチロチロと動いている。

「苦しくなかった？」

「く、くるひはっはんれふへほ……ほれいほうに、ひもひよふへ……♡　はいふひなひほに、ひはいはれへふっへ……♡　ふはわれへるっへおもっへ……♡」

この子、男に支配されて自分を使って欲しい願望があるんだな。

とんだド変態だ。

母親がそもそもド変態だから、その血を引き継いでるんだな。

「そっか。じゃあ、もっと君を支配して、使ってあげようかな」

「っ♡」

俺がそう言うと、妹ちゃんは腰をクネクネ動かし始めた。

「そこに四つん這いになって。上半身は床に突っ伏して、お尻高く上げて。オマンコを自分で開くんだ」

「は、はひ……♡」

舌が口の中に収まらないのか、妹ちゃんはずっと舌をチロチロさせながら返事をする。

そして、仰向けで横たわり、アヘッている女将さんの隣に行き、俺の命令通りの格好になる。

自分でマンコを拡げさせるのは、やっぱりいいな。

桁違いに興奮する。

「うん。それじゃあ、そのままおしっこしてごらん」

「お、おひっほれふは！？」

「うん。どうしたの？　もしかしてできないの？」

「ひ、ひへ！？　れ、れひまふ！」

「じゃあ、早くして？　おしっこ、出せ」

「は、はひ……♡　んんっ……♡」

じょ……♡　じょろ……♡　じょろろろ……♡♡♡

妹ちゃんは、自分でマンコを拡げながら放尿を開始する。

真下におしっこが出てるので、自身の足や腕を汚していく。

さらには、床に落ちたおしっこが、隣の女将さんの足元にまで向かい、女将さんの足を濡らしていく。

「君のおしっこ、お母さんの足にもかかってるね」

「ほ、ほめんね、ままぁ……♡　わらひのおひっほれ、ままのあひ、よほひひゃっは……♡」

興奮してきたのか、妹ちゃんのおしっこの量はどんどん増えていく。

「あ～君のおしっこ見てたら俺までしたくなってきちゃった」
そう言って俺は、放尿中の妹ちゃんに向かって放尿を開始する。
ぶじょおおお

「は、はい……♡」

まだアへってはいるが、だからと言って休ませたりはしない。
俺は、女将さんに命令を出し、妹ちゃんの全身についた俺のおしっこを舐め取らせる。

「ぢゅる……♡　れる……♡　れろ……♡　ぢゅるるる……♡」
「んあ……♡　ままぁ……♡　らめらよ～……♡♡♡」
「ぢゅる……♡　れる……♡　ちゅる……♡　零様のおしっこをぉ♡　残すなんてぇ♡　駄目なのよぉ♡」

女将さんは、妹ちゃんに覆いかぶさり、全身を舐めていく。
四つん這いになってる妹ちゃんに覆いかぶさる。それはつまり、ガニ股になり、こちらにケツを向けると言う事。
今、妹ちゃんのマンコの上に、女将さんのマンコが乗っている。

そんな女将さんのマンコに――、

「んあああああああああ♡♡♡　い、今は駄目ぇぇ♡♡♡
おしっこ、舐めれなくなっちゃうぅぅ♡♡♡」

俺は後ろからチンコをぶっ込んだ。

「まま、うるいぃ～～～！　わらひもおひんひんほひいのにぃぃぃ♡♡♡」
「んあああああああ♡♡♡　ま、ママに言われても、決めるのは零様、だからぁぁあああ♡♡♡」

俺は、女将さんの腰を掴み、激しく腰を打ち付けていく。
「おひりに、ままはおははれへるひんほうは、ふはわっへふる……♡　ほのひんほうらへれ、イッはう……♡♡♡」
妹ちゃんは、自身のお尻に伝わる女将さんが犯される振動で、イッてしまったらしい。
その程度でイッてしまうほど、興奮が限界に達しているということだ。
「ほら、女将さん。ちゃんと舐め取ってあげてください。あなたがおしっこ全部綺麗に舐め取らないと、ずっと娘はお預け状態ですよ？」
「んんぅぅぅ♡♡♡　そ、それは親として、してはいけない、んぁああ♡♡♡　ですね……♡　ちゃ、ちゃんと舐め取りますから、この子にも零様のオチンポをぉぉぉ♡♡♡」
「じゃあ、ちゃんと舐め取ってください」
「はいぃぃぃ♡♡♡」
女将さんは、俺に犯されながら、妹ちゃんの背中や首、頭にかかったおしっこを舐め取っていく。
ガニ股で娘に覆いかぶさり、後ろから犯され娘の体を舐め回す女将さん。
エロすぎる……！
「あ～そろそろ出そうだ～。本来ならこの射精は娘の膣（なか）で出すはずなんだけどな～」
「れ、零様……！　も、もう少しだけ待ってください……！
んあ♡　も、もう少しで全部舐め終わりますから……あああ♡♡♡」

「待ちません～～」
「ままぁ～～はやふ～～～～！」
「ぢゅる……♡　れる……♡　れろれろ……♡　ぢゅるるる♡♡♡　ちゅぱっ♡　お、終わりましたぁ♡」
「ご苦労、様！」
「んっ♡」
「あああああああああああああああああ♡♡♡」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルル！！！！！！！

「挿(ひ)れられはひゅんはん、あふいのひはぁぁぁぁぁ♡♡♡♡♡♡」

俺は、女将さんの奥を一回強く突いた後、すぐにチンコを引き抜き、下にあった妹ちゃんの膣(なか)へ一気に挿入した。
射精ギリギリだった事もあり、妹ちゃんの膣(なか)に挿(い)れた瞬間に、俺は射精をした。

ビュルルルルルルルルルル！！！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！！！

「おおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡」

大量の精液を、子宮に注ぎ込んでやる。
長い射精に、妹ちゃんは舌を強く外に突き出しながら、幸せそうな顔を浮かべている。

「女将さん、その体勢のまま娘の舌を犯してください」
「は、はい……♡　はむ♡」
「んん～～～～～♡♡♡」

俺は、妹ちゃんを犯しながら、女将さんに命令する。
その命令を受け、女将さんは妹ちゃんの突き出した舌にしゃぶりつき、そのままドエロいキスを始める。

「ぢゅるるるるるるるる♡♡♡♡」
「ん〜〜〜

「お前も、イケ！！！」

バチィィィィィィィンッッッッ！！！！！

「んぱっ♡　あああああああああああああああああ♡♡♡♡♡」

俺は、目の前にある巨尻を思い切り引っ叩いた。
すると、あまりの気持ちよさに妹ちゃんの舌から口を離し、とんでもなくエロい声を上げ、女将さんは絶頂した。

叩かれてイクとは……いいことを知った。

「「はぁはぁ……♡♡♡」」

妹ちゃんからチンコを引き抜く。
膣（なか）からは、大量の精液が逆流してくる。

女将さんは、妹ちゃんの隣に仰向けで倒れ込み、妹ちゃんは、上半身を突っ伏しケツを高く上げた体勢のまま、両手を力なく床に着けながら、全身をビクつかせている。

「いい光景だな〜」

と、俺が二人の姿を眺めていると――、

「前田家、陥落、ですね♡」

と、後ろから声が聞こえてきた。
後ろを振り返ると、そこには沙耶香と玲奈がいた。

「もうっ♡　起きたら姿が見えなかったので、心配しましたよっ」
「ごめんごめん」
玲奈が俺の腕に抱きつきながら、頬を膨らませ言ってくる。
「れー君の事だから、二人を堕としに行ってると思ってた♡」
「いやまぁ、そもそも予定はなかったんだけど、風呂に来たら二人がたまたまいてさ。成り行きで」
「それでもいい♡　これで私達家族全員、れー君のモノ♡」
そう言われると、悪い気はしないな。
一家をまとめて性奴隷になんて、最高すぎる。
「それにしても、親のアヘ顔って、見るのちょっと恥ずかしいね」
沙耶香が、女将さんを見ながら言った。
「まぁ、そうだろうな。今の女将さんは『親』ではなく『女』だからな」
「ん？　あれ？　名前で呼ばないの？」
腕に抱きつく玲奈が聞いてくる。
「そう言えば、名前聞いてなかったな」
「「っ！」」
俺がそう言った瞬間、沙耶香と玲奈の目つきが鋭くなった。

「おい。なんで名前伝えてねぇんだよ」
「二人とも、さっさと起きて」
玲奈の口調が荒々しくなり、沙耶香はいつもよりトーンが低くなった。
しかし、女将さんも妹ちゃんも絶頂の余韻が抜けず、二人の言葉に従えない。
「ごめん、れー君。この馬鹿二人の変わりに伝えるね。こっちの馬鹿親が『前田亜沙実(あさみ)』。それでそっちの馬鹿妹が『前田美奈貴(みなき)』」
へぇ〜。いい名前じゃん。
「ありがとう。正直、名前を知りたかったから助かるよ。ほんで玲奈。母親と妹を踏みつけるのはやめなさい」
玲奈は、相当キレているのか、あろうことか二人を踏みつけていた。
優しく踏みつけてはいるが、全く痛くない……訳ではないだろう。
「今回は零様の優しさに免じて許してあげるけど、今度からはしっかりとしなさい。そうじゃなきゃ、零様の性奴隷とは認めない」
「「ひゃい……」」
玲奈って、キレるとめちゃくちゃ怖いかも。
「んふふ♡」
ほら、さっきまでキレてたのに、俺の腕に戻ってくると満面の笑

みなんだもん。
怒らせないようにしよう。
「この二人の事は任せて、れー君お風呂に浸かって？　お風呂に入りに来たんでしょ？」
「あぁ。じゃあ、そうさせてもらおうかな。玲奈は？」
「私はもちろん……この馬鹿達の世話をします……」
俺と一緒に入ると言おうとしたようだが、沙耶香に睨まれ、玲奈は元気なくそう答えた。
前田家のパワーバランスはどうなってるんだろうか？
誰が一番力を持っているのか、めちゃくちゃ気になるな。今度聞いてみようか？
そうして、俺はお湯に浸かった。
玲奈が女将さん――亜沙実を。沙耶香が妹ちゃん――美奈貴を脱衣所まで運び始める。
全裸の女子二人が、全裸の女子を運び出すって、いい眺めだなぁ～。
そんな事を考えながら、俺は大浴場の湯を楽しんだ。
♡　♡　♡
朝になった。
あの後、四人で話すことがあると、沙耶香、玲奈、亜沙実、美奈

貴の四人は自宅に戻っていった。
俺は浴衣に着替え、部屋に戻り、そのまま眠った。

そして、鳥のさえずりが聞こえ目を覚ました。

「ちゅ……♡　れる……♡　ちゅぱ……♡」
「れる……♡　ぢゅる……♡　ぢゅぷ……♡」

そう。紗夜と桃からのダブルフェラ音と言う、最高のさえずりを聞きながら、気分よく目を覚ました。

「あ、おはよう、れいれい♡」
「兄様、おはようございます♡」
「あぁ。おはよう」

二人は、俺の足の間に入り、仲良く左右から竿を舐めていた。
紗夜が俺から見て右。桃が左にいる。

周りを見てみると、すでに全員起きていて、帰り支度をしていた。

「あれ？　俺、寝すぎた？」
「全然大丈夫だよ〜！　むしろ、疲れてるのに騒がしくしちゃってごめんなさい！」

俺の問いかけに、帰り支度をしている燐が答えてくる。

「いやいや、それは大丈夫なんだけど、支度するなら起こしてくれれば……」
「駄目ですよ。零様が何かする必要はないんですから」

俺の言葉を遮り、顔を上に向けてきたのは愛莉だった。
さっきから枕とは違う柔らかい感触が頭にあるなぁとは思ってたが、なんと愛莉の膝の上だった。

「愛莉、おはよう」
「はい♡　おはようございます♡　零様♡」
「愛莉、ちょっとおっぱい大きくなった？」
「本当ですか？　自分ではあまり分からないのですが……」
「下から見上げた時の景色が、前とちょっと違う」
「零様が仰るなら、大きくなったんだと思います♡　もし、大きくなっていたとしたら、私とっても嬉しいです♡　零様へのご奉仕の幅が広がりますから♡」
「今度計測に行くか」
「はい♡」

愛莉のバストサイズの話をしていると、紗夜と桃がラストスパートをかけてきた。
俺がイキそうなのを察したのだろう。

「ぢゅる♡　れる♡　じゅる♡　ぢゅるるる♡♡♡」
「ぢゅむ♡　れる♡　ぢゅる♡　じゅるるる♡♡♡」
「っ！」

ドビュッ！！！！！　ドビュルルル

「何回見ても、零様の射精、素敵です……♡」

頭上では、射精を穴が開くんじゃないかってくらいに真剣に見つめる愛莉。

そこまで真剣に見られると、流石に恥ずかしい。

「紗夜、桃。ごめん、おしっこ」

「うん♡　出して♡」「出してください、兄様♡」

俺がそう言うと、二人は射精が終わった亀頭へと顔を近づける。

そして、俺は下腹部に力を入れ、放尿を開始する。

ぶしゃあああああああああ！！！！

「「んんぅ♡♡♡♡」」

俺のおしっこを、二人は顔面で受け止めていく。

口を大きく開けているので、垂れてくるおしっこは飲んでいる。

「零様のおしっこ……♡　素敵……♡」

だから、そんなマジマジと見つめられたら恥ずかしいってば。

「「綺麗にするね（しますね）♡」」

放尿を終えた後、二人はお掃除フェラをしてくれる。

お掃除を終えた後、二人は『ご馳走様でした♡』と言って、身支度に戻っていった。

身支度を終えた後、俺達は旅館の玄関へと向かった。

♡　♡　♡

玄関では、亜沙実と他の従業員の方々（女のみ）が待っていてくれた。

「あれ？　　美奈貴は？」

と、俺が亜沙実に聞くと――、

「零様！」

玄関の外から、美奈貴の声が聞こえてきた。

大きなスーツケースを持参して。

「一生のお願いがございます……！　　私を……私を、零様の性奴隷として、零様のご自宅に置いてはいただけませんでしょうか……！」

「うん、いいよ～」

「っ！　　い、いいんですか……？」

俺の返事が早すぎたのか、美奈貴は目を点にして驚いている。

「うん。ってか、昨日美奈貴を犯した時点で、一緒に住むと思ってたし。それに、性奴隷は一緒にいてくんないと」

「っ～～～～♡♡♡　　ありがとうございます……！」

「だから言ったでしょ。れー君なら大丈夫だって」

「うん……♡」

と、なると亜沙実は……。

「申し訳ございません、零様。私も零様の性奴隷として、お側にいたいのですが、この旅館を取り仕切る責任者でありますので、この場を離れる訳には……」

うん。だよね。知ってた。

それに、もし亜沙実がこの旅館を捨てて一緒に住むって言ってきたら、反対するつもりだった。

亜沙実にはこの旅館にいてもらって、ちょくちょく泊まりにきて、前田家を犯しまくりたい。

それに、単純に俺、この旅館気に入ってるし。

「俺、この旅館好きだからさ。亜沙実がこの旅館を守ってくれてると嬉しい」

「はい♡　一生涯守らせていただきます♡」

「ちょくちょく泊まりに来るし、休みの日とか、時間合わせて会おう。犯しまくってあげるから」

「はい……♡　時間は零様に全て捧げますので、私が休みの日は、気にせず呼び出してください♡」

「分かった。じゃあ、亜沙実。またな」

「はい……♡　また♡」

俺は亜沙実を抱き寄せ、みんなの前でキスをする。

従業員達は、顔を真っ赤にして、羨ましそうに見ている。

「んちゅ……♡　ヤダ……娘達が見てます……」

「別に構わないだろ。昨日アヘ顔見られてるんだから」

「きゃんっ♡　んちゅ……♡　ぷはぁ♡　もう、零様ったら♡」
「じゃあ、そろそろ行くよ」
「はい♡　またのお越しを、お待ちしております」
俺達は、旅館を出て帰路についた。

１２／３１の大晦日特別編へ、続く！

第１２２話　前田家の二人を性奴隷へ～妹ちゃん～♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

エロエロに書けたかな……と思っているので、沢山楽しんで、沢山興奮していただけておりましたら幸いです……！

二人の名前も明らかになりましたね。
二人の事も、これから沢山愛していただけますと嬉しいです！

大晦日特別編に繋がりますので、１２／３１を楽しみにしていてください♡
そして、１／１の新年特別編もエロエロに書きたいと思っておりますので、そちらも合わせて楽しみにしていてください♡

大晦日特別編！　今年の大晦日は豪邸でゆっくりと……そしてみんなで大乱交だ～♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

１２／３１。
今日は大晦日だ。

引っ越してきたばっかりなので、大掃除の必要はなく、俺達はゆっくりしていた。
そんな時、巴が声を上げた。

「今日の年越しそばなんだけど、お家で作ろうと思うの。せっかく引っ越してきたんだから、今年はここでゆっくりしたいじゃない？」

その提案に、俺達は全員賛成する。

「それでね、今から買い出しに行こうと思うんだけど、一人じゃ大変だから、誰か一緒に来てほしいの」
「私とリサは行く。我が家の料理担当だから」
「はい！　精一杯頑張ります！」
「そうね。じゃあ、後は行きたい人、いる？」

巴がみんなを見渡す。

「俺、行ってもいいか？」
「いいけど……お外、寒いよ？」
「大丈夫。それに、瑠李や鈴音、ペット達の散歩もしなきゃだしさ」
「あ、そうだね。じゃあ、メンバーは私と桃、リサちゃん。零ちゃ

んとペット達。これでいいかな？」
「すみません、巴さん。私も同行していいですか？」
俺の隣に座っている玲奈が挙手する。
「えぇ。もちろん」
「ありがとうございます」
「それじゃあ、私も行く～！　あすかと乃々花の散歩、私がするよ～♪」
「本当か？　助かるわ。んじゃあ、恋」
「はい」
「お前も来てくれ。澪の面倒を頼みたい」
「はい♡　任せてください♡」
「それじゃあ、あんまり人数多くなっても大変だから、このメンバーで買い出しに出かけましょう。残った人達は……」
「部屋の片付けや、新年の飾り付けなどやっておくよ」
「ありがとう、黒乃」
黒乃が代表して言ってくれる。
うん。やっぱり頼りになるな。
「それじゃあ、出かけましょう♪」
『おぉ～～！』
俺達は買い出しへと向かった。
♡　♡　♡
全裸の瑠李、鈴音、澪、あすか、乃々花。

俺が瑠李と鈴音を。燐があすかと乃々花を。恋が澪を。
それぞれがリードを持って、散歩をさせている。
五匹はしっかりと四つん這いで歩いている。

「そういえばさ、ここ最近、エッチの度に精液をペットボトルに溜めてるけどあれ、どうすんの？」

巴とリサ、桃の三人は前を歩いている。
俺と恋、燐は散歩をさせているので並んで歩いている。玲奈は俺の腕に抱きつきながら歩いている。

「あれはですね～……まだ秘密なんです♡」

燐が答えてくれる。

「そっか。まぁ、使うにしても燐達が喜ぶ事だろうから、何に使うのか、楽しみにしてるよ」
「はい♡」

と、そんな会話をしながら歩いていると――、

「あ、あれって散歩してるの！？」
「え！？　マジで！？」
「いいなぁ～！　私も散歩された～い！」

三人組の女子とすれ違った。
三人組は、瑠李達を見て羨望の眼差しを送っていた。

「やっぱ、すげぇな。これを羨ましがるなんて」
「誰だって男性様に隷属したい気持ちがありますから、この状況は、

相当羨ましいものだと思いますよ♡」

玲奈が言ってくる。

「じゃあ、みんなは幸せ者って事だな」

『はい♡』

俺達は、目的のスーパーへと到着した。

♡　♡　♡

「巴〜。これ、必要なんじゃない？」

「ん？　あ、本当だ！　やだ、メモにも書き忘れてる……ありがとう、零ちゃん！　ちゅ♡」

巴が頬にキスをしてくる。

「巴さん、これとこれ、どっちがいいですかね？」

「う〜ん……こっちかな。あ、あとリサちゃん。これとこれ持ってきてもらっていい？」

「はい！」

俺達が買い物をしている間、ペット組は。

「みんな何してるの？」

「ワン♡　ワンワン♡」（鈴音）

「ブヒ♡　ブヒブヒ〜♡」（瑠李）

「モ〜♡　モ〜モ〜♡」（澪）

「わんっ♡　わんわんっ♡」（あすか）

「あんっ♡　あんあんっ♡」（乃々花）

「お留守番してるの？　偉いね～！」

小さな女の子が、瑠李達の頭を撫でる。
まるで、本物の動物を褒めるかのように。

この少女以外にも、道を行き交う人達は皆、偉いわね～。しっかりとお留守番して。ご主人様がきっと素敵な人なのね。
など、瑠李達を褒めたり、羨望の眼差しを向ける人達ばっかりだった。

そして、瑠李達は買い物を終えた零達と一緒に、自宅へと帰った。

大晦日特別編！　今年の大晦日は豪邸でゆっくりと……そしてみんなで大乱交だ～♡♡♡♡♡♡♡

「ひゃぁ～……こたつあったけぇ～……」

俺は今、こたつに入っていた。

買い物を終えたあと、料理を手伝おうかと思ったら、巴達にゆっくりしててと言われたのだ。

十分ゆっくりしてるんだけどな～。まぁ、このあとどうせ射精しまくる事になるんだから、体力は温存しときますか。

流石に、２９人分の料理を三人で作るのは大変なので、巴、桃、リサに加え、愛莉、ユイ、美結が加わった。

なんでも、愛莉とユイは最近料理を頑張ってるらしい。美結は元々自炊をしていたので料理は得意らしい。

ここで一旦、性奴隷達を整理しよう。

華、燐、桃、瑠李、巴、黒乃、紗夜、沙耶香、雫、奈央、リサ、鈴音、真耶子、澪、恋、醍醐、ユイ、愛莉、玲奈、栞、光、美結、あすか、乃々花、かなえ、尻穴奴隷、早希、亜沙実、美奈貴。

「全員で２９人か……。ここに亜沙実はいないからこの家には２８人の性奴隷がいるわけね」

こうして改めて整理してみると、やっぱすごいよな～。

２９人もの女達が、俺の性奴隷になってご奉仕してくれるんだから。

「それはそっちで」
「これは？」
「じゃあ、ここをこうして……」

俺以外のみんなは、家の中の掃除をしていた。
どうやら、飾り付けなどをしていたら、多少の汚れも気になってしまったらしく、しないと言っていた大掃除が始まってしまったらしい。

「ちょっと様子でも見に行くか」

俺はみんなの様子を見に行くことにした。

♡　♡　♡

二階の客室。

「ん？　　あ、零様。どうなされましたか？」
「いや、ちょっと様子を見に行ってみようかなって思って」
「そうですか。あ、ご奉仕担当が今誰もいませんよね？　　抜いてかれますか？」
「いいのか？　　掃除の邪魔にならないか？」
「いえ♡　　何に置いても零様へのご奉仕が最優先ですので♡
どこがよろしいでしょうか？　　お口？　　オマンコ？」
「ん～……じゃあ口で」
「はい♡　　畏まりました♡　　それでは失礼いたします♡」

二階の客室にいたのは雫だった。
雫は、俺の前に跪き、ズボンとパンツを脱がせる。
そして、まだ勃起していないチンコにしゃぶりつく。
「はんむ♡　ぢゅる……♡　れる……♡」
小さい状態で舐められると、結構気持ちいいな。
「んっ♡　大きくなりました♡　いっぱい気持ちよくなってくださいね♡　じゅぶっ♡　じゅぼっ♡　じゅぶっ♡」
雫は俺の腰に手を添えて、激しく頭を前後に振り始める。
「じゅぶっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡」
雫のフェラは、どんどん上手くなっている。
この世界に来て、初めてフェラをしてきたのが雫だ。
その時よりも格段に上手くなってる。
「雫、俺、もう……」
「じゅぶっ♡　じゅぼっ♡」
出していいと訴えるように、雫は頭を激しく動かす。
「出るっ！」
ビュルルルルルルルルル！！！！　ビュビューーーーー！！！！
「んぶっ♡　んんぅ……♡　んふぅ……♡　ごくごく……♡」

雫は舌で亀頭を刺激しながら、精液を飲み込んでいく。
「ぷはぁ♡　ご馳走様でした♡　とっても美味しかったです♡　お綺麗にします？」
「いや。このまま別の性奴隷の所行くからいいや」
「畏まりました♡　私はしばらくこの部屋を掃除しておりますので、いつでもいらしてください♡」
「あぁ。サンキューな。掃除、無理すんなよ～」
「はい♡」

俺は客室を後にした。

♡　♡　♡

この家は本当に広い。
一階にも二階にも風呂がある。

「お。ここは栞と奈央がやってるのか」
「あっ♡　パパぁ♡」

俺が風呂場に顔を出すと、栞と奈央がいた。
俺を見るやいなや、奈央は嬉しそうな顔で飛びついてきた。

「零様。どうなさいましたか？」
「ん？　いや、特に用はあるわけではないんだけど、みんなの様子をちょっとね。ただ座ってるのも暇だし」
「パパ、ちんちん丸出しだね♡　エッチな汁、溢れてるよ？」

奈央の言う通り、チンコからは先程出した精液の残り汁が、ドバ

ドバ溢れ出していた。

「さっき雫にフェラしてもらったからな。奈央、オナニー見せてくれ」

「あ〜い♡」

そう言って奈央は、俺の腕に抱きついたままオナニーを開始する。

「んっ……♡　ふっ……♡　はぁ……♡」

耳元で奈央の喘ぎを聞くと、勃起していたチンコがより勃ってしまう。

「栞、咥えろ」

「はい♡」

栞は、俺の前に跪き、チンコを咥えてくる。

「じゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡　じゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡」

「んっ♡　はっ♡　あっ♡　んんぅ♡」

フェラ音と喘ぎ。最高のＡＳＭＲだ。

「んっ♡♡♡　んんぅぅ♡♡♡　ぱ、パパぁ♡♡♡　な、奈央、もうイッちゃいそうだよぉぉ♡♡♡」

「いいぞ。我慢なんかしないでいっぱいイケ」

「うん♡　奈央、イクよぉぉぉ♡♡♡　んはぁぁぁぁぁ♡♡♡」

ぶしゃあああああああああ♡♡♡♡♡

奈央は潮を吹きながらイッた。
その潮は、フェラをする栞にかかっている。
しかし、栞はそんな事気にしたりせず、チンコをしゃぶっている。

「栞、出すぞ！」
「ぶぁい♡」
「出るっ！」

ドビュッ！！！！　ビュルルルルルルルルル！！！！

「んぶっ♡　んくんく……♡」
「あああああ♡♡♡　またイクのぉぉぉ♡♡♡」

ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡

精液を飲む栞に、またもや潮をかける奈央。
これ、わざとやってんのか？

「ぷはぁ♡　零様、ご馳走様でした♡」
「奈央の潮かかってるけど、なんも気にしないの？」
「はい♡　性奴隷同士、特に気にしたりはしないですね。それに、奈央はいとこなので」

なるほどね。

「それでは、綺麗に……」
「あ、いいや。この後別んとこ行くから」
「畏まりました♡」
「そんじゃあ、二人も無理しないようにな～」
「はい♡」「は～い♡」

俺は風呂を後にして、一階のキッチンに向かった。

♡　♡　♡

「お～美味そう～」
「あ、零ちゃん」

キッチンに行くと、正月用のおせちや煮物、雑煮の汁などがあった。

「すげぇ。この短時間でここまで準備したのか」
「愛莉ちゃん、ユイちゃん、美結ちゃんが手伝ってくれたおかげよ。三人だけだったら、ここまで早く用意はできてないかな」
「そっか。いや、にしてもすげぇよ」

と言いながら、俺は重箱におせちを詰めている愛莉の後ろに立つ。そして、マンコにチンコをぶっ込む。

「んんぅぅぅ♡♡♡　れ、零様♡♡♡　今は駄目、ですよ……♡　おせちが詰められません……♡」
「じゃあ詰めなきゃいい。今は、愛莉が詰められる時間だっ！」
「んん～～～～～～♡♡♡」

俺はバックで愛莉を犯す。
後ろでは、巴が食材を切ったり、リサがフライパンで調理していたり、桃や美結が色々準備していたり、ユイが目の前でおせちを詰めていたり。

「んっ♡　んっ♡　あああ♡　あああんっ♡」

こうやって愛莉を犯しているのに、みんな普通に過ごしている。
この日常の中で女を犯すの、めちゃくちゃ興奮するんだよな。

「先輩、ちょっと味見してもらってもいいですか？」
「あぁ、もちろん。あむ。うんうん……」
「どう、ですか……？」
「めっちゃ美味い！　百点満点だ！」
「はぁ～♡　良かったです！　じゃあ、これで完成ということで～」

愛莉を犯しながら、俺は皆の料理風景を見回す。
料理をしてる時のみんなの真剣な顔、いいな。

「れ、零様、私、もう……♡」
「いいぞ。俺ももう出そうだから、一緒にイクぞ」
「はいぃぃ♡♡♡」
「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
ビュルルルルルルルルルルル！！！！　ビュビューーーーー！！！！

「んん～～～～～～♡♡♡♡♡　中出し来たぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡　子宮（こどもべや）に零様の子種がバシャバシャかかって、幸せ過ぎてイクぅぅぅぅ♡♡♡」

愛莉は、腰をビクンッビクンッと震わせイッた。
そのせいで、机が揺れるが、ユイは怒ったりしない。むしろ、愛莉の手をよしよしと撫でたりしている。

「ふぅ～」
「零ちゃん、スッキリした？」
「うん。巴、キスしていい？」
「もちろん♡　んちゅ♡」

俺は愛莉と繋がったまま、顔を後ろの巴の方に向け、キスをする。

「ちゅぱ♡　もうちょっとでお夕飯の準備ができるから、座って待ってて？」
「了解。みんな呼んどくわ」
「ごめんね、ありがとう♡」
「ん」

俺は愛莉からチンコを引き抜く。
すると、愛莉は倒れそうになる。それをすかさずユイが支えた。

「美結、舐めてくれ」
「はい♡」

俺は美結にお掃除フェラをさせた後、リビングに戻った。
そして、階段したから大声で叫ぶ。

「もう少しで夕飯だってよ～～～～～！！！」

すると――、

『は～～～い♡♡♡』

と、二階からまるでステレオかってくらい、返事が反響して返っ

てきた。

♡　♡　♡

夕飯の蕎麦ができた。

俺達が今いるのはリビングではない。

この家に一つだけある、大食堂だ。

ここは、最大で１１０人座る事ができる。

めちゃくちゃ長い机が五つ置いてあり、一つの机に２２人並んで座る事ができる。

今、この場には俺を含め２９人いる。

でも、瑠李、鈴音、澪、醍醐、あすか、乃々花、かなえの６人は椅子には座らず床で四つん這いで食事を取るので、丁度２２人になる。

俺の隣には玲奈が座り、後は各々が決めた席順で座る。

「おぉ～！　めっちゃ本格的じゃん！」

運ばれてきた蕎麦は、まるでお店で出てくるかのようなものだった。

ザルに乗せられ、蕎麦の汁も店で見るような容器で、薬味もあり、俺はテンションが上っていた。

しかし、みんなの容器には汁が入っていない。

なぜ？

「零ちゃん、ここで一つお願いがあるんだ」
「ん？」
「みんなの容器にね、零ちゃんのおしっこを入れてほしいの」
「お、おしっこを！？」
「うん。リサちゃんや桃が去年、その食べ方をしたって聞いて、私達全員、零ちゃんのおしっこ汁で食べたいってずっと思ってて。駄目……かな？」
「駄目……ではないぞ。じゃあ、容器を持って並んでくれ」
「零ちゃん……♡　ありがとう♡　じゃあ、みんな、容器を持って零ちゃんの所に並んで」
『は～い♡』

巴がそう言うと、皆は一旦席から立ち、容器を持って並び始める。

「一番は早希か」
「は、はい……♡」
「初めてなんだから、あんまり無理はすんなよ？」
「は、はい……♡　ありがとうございます♡」

俺はおしっこを出す。
俺が苦労しないように、いい感じに溜まったらすぐに交代して、俺は止めたり出したりを繰り返したりせず、流れるように全員の容器におしっこを入れる事ができた。
もちろん、瑠李達の容器にも入れてやった。

「ふぅ～」

ちなみに、かなえは俺の椅子兼背もたれになっており、普通の椅子の上にかなえが座り、その上に俺が座っている。

「かなえ、チンコを拭け」
俺がそう命令すると、温かいタオルで優しくチンコを拭き始める。
かなえにも食事は用意してあるが、今は俺の椅子に徹しているので食べはしない。
後でご褒美に好きなものを用意してやるか。

「これで完成？」
「ううん。実はまだなんだ」
「お兄ちゃん。ここでこれの出番なんですよ♡」
「あ、なるほどな」

燐が取り出したのは、精液入りのペットボトル。

沙耶香ん家の旅館から帰ってきてから、エッチの度に数回の射精はペットボトルにしていた。
みんなが懇願してきたからだ。
別に断る理由はないので溜めていたが、何に使うのか俺は知らなかった。
だが、ようやく分かった。去年のリサと桃の話を聞いたのなら、確かにおしっこ汁だけでは足りない。

「それじゃあ、みんなの容器に入れていくね～」

そう言って、燐はみんなのおしっこが入った容器に精液を入れていく。

「全員行き渡った？」
『はい♡』

「それじゃあ、零ちゃん」
「ん？」
「挨拶、お願いしていい？」
「あ、挨拶！？」
「うん」

そ、そうだな……挨拶か……。

俺は立ち上がる。

「ううん！　　え～……性奴隷の皆さん。こんな俺の事を好きになって、性奴隷になってくれて本当にありがとう。去年もそうだったけど、俺はみんなと過ごす時間が本当に大好きです。今年は大阪に行って、八人も性奴隷を増やす事ができた。それに、早希や亜沙実、美奈貴も。今年も新たな性奴隷達と出会えてとても幸せでした。来年もみんなと楽しく、そしてエロく過ごしていきたいと思ってる。こんな俺だけど、来年もよろしく！　　乾杯！」
『かんぱ～い！！！』

スパークリングマスカットのジュースで乾杯した後、俺達は蕎麦を食べ始める。
が、俺はみんなの反応が気になっていた。
リサと桃は去年食べているので、気に入ってるというのは知っている。が、他のみんなはどうだろうか。

『……』
「ごく……」

『んま～～～～～～～～～～～い♡♡♡♡♡』

全員が一斉にそう叫んだ。
なんか、ホッとしたわ。

「なにこれ！　お兄ちゃんのおしっこ汁めっちゃ美味しいんだけど！」（燐）
「えぇ！　そこにこの精液がよく絡んで味のコクを引き立たせてる♡」（華）
「おしっこと精液の相性は抜群だと思ってはいましたけど……♡」（愛莉）
「まさかここまでなんて♡」（恋）
「お蕎麦との相性も抜群で♡」（雫）
「どんどん食べちゃう♡」（奈央）
「ここにネギを入れると、精液の苦さが少し際立って♡」（栞）
「さらに美味しさがアップします♡」（光）
「こんなに美味しいものが、２７歳にして食べられるなんて……♡」（椎名玲奈）
「幸せです♡」（美結）
「どお？　れー君のおしっこ、美味しいでしょ♡」（沙耶香）
「うん……♡　前にさや姉の水筒で飲んだ時より、美味しい♡」（美奈貴）
「あはは♡　やっぱれいれいのおしっこは最高だね～♡」（紗夜）
「零様のおしっこ……本当に美味しい……♡」（ユイ）
「沙耶香はこんな美味しいものを、ずっと独り占めしてたんだ……♡」（一之瀬玲奈）
「零様のおしっこ、これからももっと飲みたくなる……♡」（真耶子）
「良かった♡　私達だけもらってて罪悪感があったから」（桃）
「これでみんな、おしっこ汁の美味しさを味わえましたね♡」（リサ）
「これ、商品化してもいいんじゃないか？」（黒乃）

「そうね～。ちょっと会社に掛け合ってみようかしら」（巴）

など、それぞれが色んな感想を述べる。

床にいる瑠李達も、喋りはしないものの、恍惚とした表情で、幸せそうに蕎麦を食べている。

しかし、俺が心配になったのは早希だ。

先ほどから一言も喋ってない。

「さ、早希？　大丈夫か？　無理そうなら我慢するなよ？正直に言っていいんだからな？」

心配になり、早希に声をかけると、早希は泣いていた。

「えっ！？　俺、泣かせちゃった！？」

「い、いえ……！　違うんです……！　私、ずっと夢で……！

隷属した人の、おしっこや精液を主食にするのが……！」

へ……？

「か、かなえ……私語を許可する。どういう事か教えてくれ……」

「はい。零様。あまり詳しい事は本人が伝えるまでお待ちいただきたいのですが、実は早希は、おしっこや精液を飲んだり食したりするのがずっと夢だったんです。いつか、隷属できた時の為に、私達のおしっこを飲んで練習を重ねていました。それが、今、ようやく男性様――零様のおしっこを飲むことができて、さらには精液まで食す事ができて、幸せを感じているんです」

な、なるほど……？

つまり、早紀もかなえ達に負けず劣らずのド変態って事ね？

だって、かなえ達のおしっこ飲んで練習するなんて、相当じゃん。
「早希が望むなら、これからは沢山飲ませてあげるよ」
「ほ、本当ですか！」
「あぁ。もし、精液とおしっこだけを口にして行きたいって言うなら、その夢、叶えさせてあげるから」
「あ、ありがとうございます……！」

これは後日談だが、早希はこの日からおしっこと精液以外口にしなくなった。
食事は精液。飲料はおしっこ。仕事場に持っていくのも精液入りペットボトルとおしっこ入り水筒となり、本当にそれ以外を口にしなくなった。
この女が一番やべぇかもしれんな。

「んじゃまぁ、楽しく食べますか！」
『はい♡』

俺達は、楽しく喋りながら食事を楽しんだ。

♡　♡　♡

食事を終えた俺達は、毎年大晦日に放送される歌番組『紅桃（こうとう）歌合戦』を見ながら、大乱交をしていた。

「んはあああああああ♡♡♡♡」（桃）
「零しゃまぁぁぁぁ♡♡♡♡」（愛莉）
「んん～～～～～～♡♡♡」（栞）
「モ～～～～～～～～♡♡♡」（澪）

２６人を犯しまくる。
かなえと醍醐は犯さず、放置している。
皆を犯しまくっていると、紅桃歌合戦が終わり、別の音楽番組が始まる（かなえがチャンネルを替えてくれた）。
そして、カウントダウンが始まる。
「かなえ、醍醐も来い。全員に精液ぶっかけてやる！」
そう言うと、かなえと醍醐が寄ってくる。
尻穴奴隷に腰を激しく打ち付ける。
「んひぃぃぃぃぃぃぃ♡♡♡♡♡」
そろそろ出そうだ。
テレビでは『１０秒前！』
と言っている。
『５！　４！　３！　２！　１！』
俺は尻穴奴隷のアナルからチンコを引き抜く。
そして――、
『０！』
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
ビュルルルルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！　ビューーーー！！！！！

『零様〜〜〜♡♡♡　ハッピーニューイヤー♡♡♡』

テレビの音声が聞こえなくなるほど、大きな声でみんながそう言った。

俺の大量の精液を全身に浴びながら。

大晦日特別編！　今年の大晦日は豪邸でゆっくりと……そしてみんなで大乱交だ～♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

この後の新年特別編に繋がりますので、そちらもチェックしていただけますと幸いです！

新年特別編はこの後１／１、０：００に投稿されます！　ぜひ、お楽しみください♡

性奴隷の数が増えたので、今後、全員が集まったり、乱交したりする場合はセリフの後に名前を表示させていただきます！

少しでも、読みやすくしたいと思っておりますので、何かご提案などございましたら、ご遠慮なくお伝えください！

それでは、皆様、よいお年を～♡

新年特別編！　沢山の性奴隷達と初詣へ♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

『零様～～～♡♡♡　ハッピーニューイヤー♡♡♡』

みんなは全身に、大量の精液を浴びながらそう言ってくれた。

そしてこの後、俺は二時間に渡ってみんなを犯し続けた。

新年特別編！　沢山の性奴隷達と初詣へ♡♡♡♡♡♡♡

深夜３時。

俺は、庭に来ていた。

来ていると言っても、外に出ている訳ではなく、廊下のドアを開けると、目の前が庭なので廊下に座りながら、夜空を眺めている。

みんなは気を失って、全身精液、おしっこまみれのままリビングで眠っている。

「はぁ～……亜沙実、今頃どうしてるかな～」

年末年始が一番忙しいと、亜沙実は言っていた。

さっきメッセージを送ったが、既読が付かない。

「まぁ、美奈貴を引っ張ってきちゃったからな」

美奈貴もあの旅館では戦力だった。

そんな戦力を俺は、引っ張って連れて帰ってきてしまった。

その分、忙しくなるのは目に見えている。

「お詫びの品でも、持っていくか～」

なんて、考えていると――、

「ん？」

スマホに着信が。
画面を見ると『りー』と表示されている。

「もしもし」
『あ、もしもしれっくん？　　あけましておめでとう！』
「あぁ、あけましておめでとう。珍しいな。こんな時間に電話してくるなんて」
『うん。お仕事が終わったからさ。たまには新年の挨拶を、しっかりと元日にしたいなって思って』
「そうか。今日、見てたぞ。紅桃歌合戦」
『本当！　　嬉しいなぁ～♡　　今日披露した曲は私がセンターの曲じゃなかったからさ、正直見てもらえるか不安だったんだ』
「何言ってんだ。お前が出てる歌番組は全部見てるよ」
『ありがとう♡　　れっくん、なんか変わった？』
「そうか？」
『前は女の子に対して、お前って言わなかったような……？』
「あっ！？　　ご、ごめん……！」
『あ、いや、別に怒ってるとか嫌だったとかそういう訳じゃないんだよ？　　ただ……（――――――）』
「ん？　　なんだ？　　ごめん、よく聞き取れなかった」
『あ、ううん。気にしないで』
「そうか？」
『うん。用件は新年の挨拶がしたかっただけだから、切るね。こんな遅い時間にごめんね？』
「いや。気にしなくていい。俺もりーと新年の挨拶ができて嬉しかったから」
『っっ♡♡♡　　あはは！　　ありがとう♡　　それじゃあ、またね。おやすみ』
「あぁ。また。おやすみ」

通話を終える。
仕事終わりで疲れてるだろうに、ありがとうな。
スマホを床に置き、再び夜空を眺めていると――、

「「零様」」
「ん？」

真耶子と早希がやってきた。
二人の全裸、美しい！

「どうした？」
「目を覚ましたら、零様のお姿がなかったので……」（真耶子）
「心配になって、探しに来ちゃいました」（早希）
「そっか。ありがとう。座りな」

俺がそう言うと、二人は俺の隣に腰掛ける。
真耶子が右で早希が左。

「大丈夫ですか？」
「ん？　何が？」
「夜空を見つめる零様がその……何か思い詰めてるように見えたので……」

真耶子が心配そうに言ってくる。
そっか、そんな風に見えちゃったか。

「心配かけてごめんな。俺は全然大丈夫だよ。真耶子達がいるんだ。思い詰める事なんてないよ」
「「零様……♡」」

「ふわぁ～……ごめん。あくびしちゃった」
「いえ♡　あの後、お眠りになられましたか？」
「ううん。寝てない。なんか眠れなくてさ」
「で、でしたら零様……！　わ、私のひ、膝の上で寝ませんか……？」

早希が勇気を出して言ってくる。

「いいのか？　足、疲れるぞ？」
「だ、大丈夫です……！　零様の頭、支えさせてください……！」
「分かった。じゃあ、お言葉に甘えようかな」
「は、はい……！」
「真耶子、足乗っけてもいい？」
「はい♡　もちろんです♡」

俺は、早希の膝に頭を乗せ、真耶子の膝に足を乗せた。
すると、真耶子が足をマッサージしてきてくれる。

「真耶子？」
「足の血流をよくすると、眠りやすいんですよ♡」

そう言って、真耶子は足を優しくマッサージしてくれる。
早希は、俺の頭を優しく撫でてくれる。

「これ、ヤバいな……幸せすぎて……ね、る……すぅ……すぅ……」

「零様の寝顔、可愛い……♡」
「今だけは、私達で独占しちゃいましょう♡」
「はい♡」

♡　♡　♡

「んっ……んん……」

目を覚ますと、俺は自室にいた。
おそらく、真耶子と早希が運んでくれたのだろう。

そして、当然の事ながら股間が気持ちいい。
去年は確か巴だったが、今年は誰だ？

「おぉ。ユイと愛莉か」
「ぢゅぱ♡　零様、おはようございます♡」（愛莉）
「ぢゅる……♡　おはようございます、零様♡」（ユイ）
「あぁ。おはよう。今年は二人なんだな」
「「はい♡」」

どうやら、くじ引きで俺を起こしに行く人を決めたらしい。
それで、この二人になり、起こしに来たら朝勃ちを見て、我慢ができなくなったと。

「にしても、やっぱ全裸っていいよな～」
「ん？　興奮しますか？」（愛莉）
「あぁ。朝から美少女の全裸なんて、最高すぎる。しかも二人一気に見れるなんてさ」
「私達の全裸に価値があるとは思ってもみなかったので、零様にそう言っていただけて、本当に嬉しいです♡」（ユイ）

本当、この世界に転生できてよかったって思うわ。

「ほら二人とも、しっかりと奉仕しろ。射精させてくんないと俺、

起きらんないよ」
「「はい♡　しっかりとご奉仕させていただきます♡」」
そう言って二人は、金玉を優しく揉みながら舐め始める。
「ぢゅる……♡　れる……♡　ぢゅぱ♡　える……♡」（愛莉）
「じゅる……♡　ぢゅるるる♡　れろれろ♡♡♡　じゅぱ♡」（ユイ）
竿、カリ、裏筋、尿道、亀頭を抜群のコンビネーションで責めてくる。
こんな責めをされたら耐えられる訳がない。
「出るっ！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！
ビュルルルルルルルルルルルル！！！！　ビュビューーーーー！！！！
「「んんっ♡♡♡」」
二人は、顔をチンコに近づけて、尿道から溢れ出る精液を顔面で受け止めていく。
「「素敵……♡♡♡」」
二人は射精を終えたチンコに軽くキスをした後、ユイが竿、愛莉が亀頭を掃除し始める。

「じゅぶっ♡　ぎゅぶっ♡　れるれる……♡」（愛莉）
「ぢゅ～る……♡　れ～る……♡　ぢゅる♡　ぢゅる♡」（ユイ）

そして、お掃除フェラが終わる。

「「ぷはぁ♡　ご馳走様でした♡　零様♡」」
「あぁ」

お掃除フェラが終了し、二人は部屋から出ていくのかと思いきや――、

「んっ♡　れる……♡　ぢゅる♡」（ユイ）
「れる……♡　ぢゅる♡　ぢゅる♡」（愛莉）

なんと、互いの顔に付いた精液を、舐め合い始めた。

「レズプレイ。よろしい」

俺はそんな二人を横目に、部屋を出ていく。

「ふわぁ～……！」

一階に降りると、全員集合していた。

「みんな、あけましておめでとう」

去年は皆に先に言われ、しかもみんなの振袖姿に驚いてちゃんと挨拶できなかったからな。
今年はちゃんと言ったぞ！

『零様！　あけましておめでとうございます！　今年も、よろしくお願い致します！』

全員が姿勢を正し、礼儀正しくお辞儀をしてくる。

もちろん、全裸で。

「うん。よろしく。今日ってこの後初詣行くの？」

「うん♡　今日は全員揃ってるからね♡」

巴が答えてくれる。

去年はみんながアルコール入りの甘酒を飲んで、酔っ払って大変だった。

「今年は何事もなければいいな」

『っ！？』

俺がそう言うと、去年参加した人達が肩をビクつかせた。

それ以外のみんなはキョトンとしている。

「それじゃあ、早速行きましょうか」

巴がそう言う。

「あれ？　今年は振り袖とか着ないの？」

「今年は初詣に来ている人達に、私達が零ちゃんの性奴隷だって自慢しようかと思って♡　それには全裸が手っ取り早いから♡」

「なるほどね」

そうして、俺は全裸女子達と初詣に出かけた。

♡　♡　♡

「おぉ～。やっぱ人多いな～」

近くの神社に来たが、そこはすでに多くの人で溢れていた。

その多くの人達は、俺達を見て……正確には俺以外の女子達を見て、羨望の眼差しを向けていた。

「やっぱり、全裸で来たのは正解だったね」（巴）
「だな。周りの女どもが羨ましそうにこっちを見てる」（黒乃）
「でも、ちょっと恥ずかしいですね……」（早希）
「その恥ずかしさも、興奮のスパイスなんですよ、早紀さん♡」（リサ）

など、性奴隷達は誇らしげな表情を浮かべていた。

「ほら、さっさとお参りするぞ～。寒い寒い……」

しっかりと着込んでいる俺でも寒いのに、この性奴隷達は寒くないんだろうか……？

『は～い♡』

♥　♥　♥

【お参り・華の場合】
（去年は沢山、零ちゃんに可愛がってもらえました。なので、今年

は零ちゃんに恩返しがしたいです。零ちゃんの望む事が全て叶いますように……）

【お参り・燐の場合】
（去年はワガママを言い過ぎてしまいました……それでお兄ちゃんに迷惑をかけてしまいました……なので、今年はワガママをあまり言わず、お兄ちゃんに沢山ご奉仕できますように……！　でも適度には甘えたい……！）

【お参り・桃の場合】
（兄様の胃袋をもっと掴みたい……その為に、兄様の好きな料理を沢山作れるようになりますように……！　それと、兄様のおしっこと精液の美味しさが、世界中に広まりますように……）

【お参り・巴の場合】
（こんな私を受け入れてくれた零ちゃんに、もっと沢山の恩返しができますように……零ちゃんがこっちの世界に来て心の底から良かったと思えるくらい、幸せになりますように……！　あと、免許が取れますように……）

【お参り・黒乃の場合】
（零がこっちの世界で、誰よりも、何よりも幸せになりますように……！　世界一、いや、宇宙一幸せになりますように……！
あと、零がずっと笑顔でいられますように……！）

【お参り・瑠李の場合】
（零君が転生者で、一回死んでしまった事を知り、取り乱しおかしくなってしまいましたが、それすらも受け入れてくれた零君が、絶対に幸せになりますように……！　零君が悲し涙を流したり、苦しんだりする事が絶対にありませんように……！　私が零君を幸

せにします……！）

【お参り・紗夜の場合】
（今年は、去年以上にれいれいのおしっこが飲めますように……！
学年が上がって、最上級生になるので、沢山、後輩達にれいれいの素晴らしさを広められますように……！）

【お参り・沙耶香の場合】
（前田家が全員れー君の性奴隷になりました。ありがとうございました。今年は、家族一同で、沢山れー君にご奉仕できますように……！　あの日家族で願った夢が、叶いますように……！　そして、れー君がずっと私を好きでいてくれますように……！）

【お参り・雫の場合】
（零様のお嫁さん！　零様のお嫁さん！
零様のお嫁さん！　零様のお嫁さん！
零様の……）

【お参り・奈央の場合】
（パパの娘として、もっと沢山ご奉仕ができますように……！
もっとパパに喜んでもらえますように……！　パパが、ず～～っと笑顔でいられますように……！）

【お参り・リサの場合】
（私の願いは本当、ただ一つです。先輩が、いつまでも元気で笑顔で幸せに毎日を過ごせますように……！）

【お参り・鈴音の場合】
（ご主人様のイヌとして、もっともっと成長できますように……！
ご主人様にたっくさん可愛がってもらえますように……！）

【お参り・真耶子の場合】
（去年は沢山愛していただけました。まずはありがとうございます。私の全てを管理してくださっているので、今年はもっともっと管理されて、全てを支配されますように……！　零様と学校で過ごせる貴重な最後の1年を、より楽しめますように……！）

【お参り・澪の場合】
（零様のウシになれた去年。今年は、もっと母乳を出して、零様にたっくさんイジメてもらえますように……！　できれば母乳を飲んでいただけますように……！）

【お参り・恋の場合】
（零様の健康第一で、零様が幸せで、零様が何不自由なく生きていけますように……！　零様が望む下着を作ったりできますように……！）

【お参り・歩美の場合】
（かなえと言う、最大のライバルができてしまいました。零様はかなえを使うのが好きなようです……なので、今年はかなえに負けないよう、沢山零様に酷い事をされますように……！　沢山使ってもらえますように……！）

【お参り・ユイの場合】
（学校でも家でも、零様専用のメイドして、しっかりと努めを果たせますように……醍醐歩美という女が、零様に無礼を働きませんように……）

【お参り・愛莉の場合】
（零様の幸せが、ずっと続きますように……！　零様が私を見て、エッチな気持ちになって沢山心が満たされますように……！）

【お参り・一之瀬玲奈の場合】
（零様からお側にいる許可をいただけたので、これからもずっとお側にいられますように……！　沙耶香ともうちょっと仲良くなれますように……！）

【お参り・栞の場合】
（零様のおちんちんを、お口でもっともっと気持ちよくさせられますように……！　イラマの時に、もうちょっと上手にご奉仕できますように……！）

【お参り・光の場合】
（大好きな先輩の性奴隷になれたので、今年は他の方々に負けないように、追いつけるようにご奉仕が沢山できますように……！
残るもう一人のお友達も零様の性奴隷になれますように……！）

【お参り・美結の場合】
（零様がもっともっと幸せになりますように……！　私達性奴隷を使って、ありえないくらい幸せになりますように……！）

【お参り・あすかの場合】
（乃々ちゃんに嘘をついたままなのをまずお許しください……！
乃々ちゃんとかなちゃんとさっちと、零様に沢山ご奉仕できますように……！）

【お参り・乃々花の場合】
（零様のペットとして、もっと成長できますように……！　鈴音様や澪様、瑠李様のように立派なペットとなれますように……！
け、警察に通報されませんように……！）

【お参り・かなえの場合】
（零様に今まで以上に沢山使っていただけますように……！　椅子として、足置きとして、台として、沢山使っていただけますように……！　もっともっと酷い扱いをされますように……！）

【お参り・椎名玲奈の場合】
（玲奈様に調教されたアナルで、もっともっと零様を喜ばせられますように……！　零様が、これからも沢山、私のアナルを使ってくれますように……！）

【お参り・早希の場合】
（零様のおしっこや精液がもっと飲めますように……！　零様が、私にもキツい態度を取ってくれますように……！　そしていつか、私の夢を打ち明けられますように……！）

【お参り・美奈貴の場合】
（私はついこの間、零様の性奴隷になったばっかりの新参者です。それでも、零様にさや姉や玲奈姉と同じくらい、愛して可愛がってもらえますように……！　ママと誓ったあの約束を、果たせますように……！）

♡　♡　♡

【お参り・零の場合】
（今年も一年、みんなが健康で元気でありますように。いっぱいエッチな事をしてくれますように。それと、俺の前世を知った巴、黒乃、瑠李の三人が、ちゃんと幸せになりますように）

♡　♡　♡

お参りを済ませた俺達は、甘酒を飲むことに。

「こ、今年は大丈夫なんだろうな……？」

『いただきま～す♡』

俺の心配をよそに、みんなは甘酒を飲み始める。

『う～～ん♡　美味しい～～♡♡♡』

「みんな、変になったりしてないか？」

『大丈夫です♡』

良かった。今年はなんともないみたいだ。

去年は飲めなかったからな。今年こそは。

「んくんく……うん、美味いな」

俺達はこの後、出ている店を見て回り、色々と食べてまくった。

いい新年の幕開けだった。

♥　♥　♥

前田家。旅館ではなく、自宅の方で。

「はぁ～……疲れた……」

１／１。最後のお客様を見送り、色々な後片付けをし、明日から１／１２まで休業の看板を出し、従業員達を見送ってから、亜沙実はようやく自宅に帰ってこれた。

現在の時刻は夜の２３：００。あと一時間で元日は終了してしま

う。

「あ……零様からメッセージが来てる……」

亜沙実は、約1日半ぶりにスマホを開いた。

大晦日の夕方くらいから急激に忙しくなり、亜沙実はほとんど寝てなかった。

「どうしよう……返信したいけど、このメッセージの着信音で起こしてしまったら悪いし……」

２３：００だと、すでに眠っている可能性もある。

性奴隷達とお楽しみ中と言う事も考えられるので、どちらにしろ、メッセージを送るのは憚(はばか)られる

「はぁ……」

と、亜沙実がテーブルに突っ伏していると――、

～～～～～♪

「っ！？」

スマホに着信が。画面を見ると『零様』と表示されている。

「は、はい！　もしもし！」

『亜沙実？　今、大丈夫か？』

「は、はい！　大丈夫です！　すみません！　メッセージにご返信できず……」

『いや、大丈夫だ。気にするな。仕事が忙しかったんだろう？

既読がついたから電話してみようと思って。仕事は？　落ち着いたのか？』
「はい。先程営業を終え、今は自宅にいます。明日から１２日まで、お休みです」
『そうか。じゃあ、明後日迎えに行くよ』
「え……？」
『やっぱりさ、亜沙実がいないの寂しいんだ。だから、会いたい』
「っ！」

大好きな人からの『会いたい』。
その一言がこんなにも嬉しいとは。
亜沙実は目元に涙を浮かべていた。

「はい……！　はい……！　私も、零様に会いたいです……！　沢山、ご奉仕させていただきたいです……！」
『ご奉仕もいいけど、俺はどっちかって言うと、亜沙実をイカせまくりたいな』
「っ♡　嬉しいです……♡　いっぱい、可愛がってください……♡」
『あぁ。あ、それと、直接会ってからも言うんだけど。やっぱ元日が終わる前に』
「？」

『あけましておめでとう、亜沙実』
「っ！　あ、あけましておめでとうございます。零様……♡」

『じゃあ、夜も遅いからそろそろ切るね。仕事で疲れてるんだから、しっかりと食べて寝て、ゆっくり休んでな？』
「はい……♡　ありがとうございます……♡」
『じゃあ、また明後日に。お休み』

「はい……♡　また明後日に。お休みなさい……♡」

通話が切れる。

「はぁ～～～～……♡　こんな幸せな事があっていいのかな……♡」

亜沙実はスマホをテーブルの上に置き、自室へと向かう。
そして、クローゼットを開け、中にある引き出しを開ける。
そして、心の中でお参りをする。

【お参り・亜沙実の場合】
（何よりも、零様が幸せでありますように……！　こんな私を受け入れてくださった零様が、沢山幸せで沢山エッチができますように……！　それと……）

亜沙実は目を開き――、

「いつか、本当の私達を受け入れてくれますように……」

亜沙実の手には、引き出しから取り出したとある物が握られていた。

亜沙実の手に握られていた物。それは――、

黒のブラジャー。

とある部屋で。

「んんぅ♡　んん〜〜♡　れっくん♡　れっくん♡　れっくぅぅぅん♡♡♡」

サファイア色とエメラルド色の髪をした、ショートカットの少女が、部屋のベッドの上で全裸になりながらディルドオナニーをしていた。

壁一面には零の写真が貼られており、天井には特大ポスターの零が三枚貼られている。

「れっくんが♡　れっくんがぁぁ♡　れっくんが『お前』って言ったよぉぉ♡♡♡　嬉しすぎてもう駄目ぇぇぇぇぇぇ♡♡♡　イッグぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

少女は、ベッドの上で全身を大きくビクつかせながら絶頂を迎えた。

「はぁはぁ……♡　新年一発目に挨拶できたのは、嬉しかったなぁ〜♡」

この少女は、零に電話をした少女だった。

『あ、いや、別に怒ってるとか嫌だったとかそういう訳じゃないんだよ？　ただ……（れっくんが私の望む通りの変わり方をしてるのが嬉しくて……♡）』

零が聞き逃した言葉。この少女はこう言っていた。

この少女が望む通りの変わり方とは一体、どういう事なのか。

「あの家、買わせて正解だった。盗聴器をつけてあるからいつでもれっくんの声が聞ける……♡　ふふ♡」

と、ベッドの上で妖しく笑っていると、スマホに着信が。画面には『マネージャー』と書かれている。

「はい、吏慰(りい)です」

『あ、ごめんね、休んでる所』

「いえ。どうしましたか？」

『明日のロケなんだけど、延期になって来週になったのよ。だから明日はバラシ。お仕事は無しだから、ゆっくり休んで』

「一日オフってことですか？」

『うん。そう。最近、休み取れてなかったでしょ？　アイドルグループ『乳ちち』として活動しながら、ソロアーティストとしても活動して。だから、たまにはゆっくり休んで？　いつも話してくれてる幼馴染みの所に行ってもいいんじゃない？』

「そう、ですね……」

『じゃあそういう事だから、来週、忘れないようにね。お休み』

「お休みなさい」

通話を切る少女。

「明日、一日オフ……」

少女はベッドから降りて、ガラスの棚に入ったウィッグを見つめる。

そのウィッグは赤と白のロングヘアだった。

「これって、神様がれっくんに会いに行けって言ってるって事……？」

少女は、スキップしながらベッドに戻り、スマホを持つ。

「明日の新幹線、まだ空きあるかな？」

少女は嬉々とした表情を浮かべながら、スマホで新幹線の状況を調べる。

「ん～～～～～♡♡♡　楽しみだな～～～～♡♡♡　れっくんに会うの！　小学校の時以来だからね♡」

と言いながら、天井の零の写真を眺め――、

「違ったね。れっくんが転生して以来、だったね♡」

少女――青成（あおなり）　吏慰（りい）は一体、何者なのだろうか。

新年特別編！　沢山の性奴隷達と初詣へ♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

新年明けまして、おめでとうございます！
今年もよろしくお願い致します！

さて、いかがだったでしょうか……？

エッチなシーンが少なくなってしまったのが、本当に申し訳ないです……！

性奴隷達のお参りを見て、推し変や推し増し、好きな女の子達を見つけてくださるととっても嬉しいです！

僕はこの作品で、大体特別編の時に伏線を張ることが多いのですが、今回も色々張らせていただきました！
分かりやすい伏線から、よ～く見ないと分からない伏線まで、色々ありますので、何度も読み返して、どこが何が伏線なのか、沢山考えていただけると、嬉しいです！

最後に現れた謎の少女、吏慰なのですが、零の元に行こうとしているのですが、色々な事情が重なり、結局行けません。
なので、本編登場はまだ先になってしまいます。
この吏慰と言う少女が何者なのか、その辺も楽しみに今後のお話をお読みいただけますと幸いです！
（過去の特別編を読み返していただくと、吏慰が登場しているかも……？）

次話では、亜沙実を迎えに行き、亜沙実とエッチしまくります！

一人寂しい思いをした亜沙実を、零が沢山可愛がり、沢山愛します！

次話の投稿は、すみません……！

１／３ではなく、１／１０の土曜日となります……！

長らくお待たせしてしまう事になるのですが、お待たせしてしまう分、とびっきりエロく書かせていただきますので、楽しみに待っていてください！

それでは、２０２６年もエロい作品を沢山お届けできるよう頑張りますので、龍　岳（旧：小鳥遊綾瀬）の応援、何卒、よろしくお願い致します！

（追記：いただいた『朝倉早希』と言う、とても素敵で大切なお名前の表記を間違えると言う重大なミスを犯してしまいました……たまたまサイトを開き、誤字報告をしてくださり気がつく事ができました……。一番してはいけないミスをしてしまい、大変申し訳ございません……！　今後は、このようなミスを犯さないよう、十分に気をつけます……！　本当に申し訳ございませんでした……！）

第１２３話　前田亜沙実と移動カーセックス♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

今日は１／３。零様が来てくださる日。

「こ、こんな感じ……かな？」

私は今、自宅の自室で鏡とにらめっこをしていた。

「う～ん……お化粧なんて久しぶりだから、正解を忘れちゃったよ……」

化粧道具を何回も持ち替えては、鏡に映る自分の顔を見つめる。

この世界では、女は化粧をしない。するのは男性となっている。

その為、私は化粧をしばらくしていなかった。

「零様、お化粧する女とかどう思うかな……でもあれだよね、濃すぎるとキスとかする時に大変だから、薄めにして、口紅もピンクの薄いやつで……」

零様にどう思われるか。怖くて仕方ないけど、大好きな人に会うんだから可愛くいたい。

アラサーが何言ってんだって感じだけど、私は、零様の前ではただの女。

年齢なんて関係ない。女なんだ。

「零様に可愛いと、美しいと思ってもらえるようにしないとね！」

沙耶香や玲奈、美奈貴に負けないように頑張らないと！

第１２３話　前田亜沙実と移動カーセックス♡♡♡♡♡♡♡

ピンポーン♪

「あ、零様だ♡」

インターホンが鳴り、私は急いで玄関まで向かう。

「おはようございます！　零様♡」

「あぁ、おはよう……って、なぜに下着姿？」

「あっ……ごめんなさいっ！？　実は準備がまだ終わってなくて……！　何を着ていこうかなと悩んでしまって……すみません！　すぐに準備します！」

私は、おっぱい丸出しのパンイチで玄関を開けてしまった。

それにより、準備が整ってないと零様にバレてしまった。

うぅ……こんな失礼な事、本当はしちゃいけないのに……。

「いや、焦んなくていい」

踵を返して、急いで着替えに行こうとしたら、手を掴まれた。

「時間はいっぱいあるんだ。ゆっくりでいい」

「零様……ありがとうございます……！　着る服は決めれて、後は着替えるだけなので、ササッと着替えてきちゃいますね」

「いや、ちょっと待ってくれ」

「はい？」

「その服持って、車に乗ってくれ」

「は、はい……？」

私は零様の指示通り、体にピッタリ張り付くニットと体にピッタリ張り付くジーンズを持って車へと乗り込んだ。

「あら、美奈貴」
「やほ～。家の場所、零様に案内したんだ」
「ありがとう。黒乃さんも、ありがとうございます」
「いえ。このくらいならいつでもやりますので、遠慮なく仰ってください」
「ありがとうございます。それで零様、私はこの後どうすれば？」
「移動しながら亜沙実を犯したい。だから、服にはまだ着替えないでくれ」
「な、なるほど……カーセックス移動と言う事、ですね？」
「うん。いい？」
「もちろんです♡　零様がしたいことに、駄目な事は一切ありませんから♡」
「ありがとう。じゃあ黒乃」
「あぁ。出発するぞ」

黒乃さんが、車を発進させた瞬間――、

「んっ♡」

零様が、乳首に吸い付いてきた。
私の乳首は陥没しているので、中をほじくることができる。
それを分かってる零様は、舌を乳首の中に入れてくる。

「ぢゅる……亜沙実の乳首は恥ずかしがり屋か？　全然出てこないな」
「す、すみません……昔から乳首が中々外に出ず……」

「まぁでも、その引っ込み思案な乳首を外に出すのが楽しいからいいんだけどな」
「んんぅ♡♡」
零様は、私から見て左の乳首に吸い付き、右の乳首の中に指を入れてくる♡
「んぅ……♡　んんぅ……♡」
乳首を中でほじくり回されてる……♡
こんな気持ちいいの、知らない……♡　今まで味わった事ない……♡
「おっ」
ピクピク♡　ぐぐぅ〜♡　ビンッ♡
「亜沙実の乳首、出てきたな。それだけ興奮して感じてるって事か」
「は、はい……♡　今まで感じた事がない気持ちよさで……ぼ、勃起しちゃいました……♡」
「顔赤いぞ？」
「っ……♡　は、恥ずかしくて……♡」
「恥ずかしがる亜沙実も（可愛いぞ）」
「っ〜〜〜〜〜♡」
零様は、『可愛いぞ』の部分だけ耳元で囁いてくる。
ビンビンに勃起した乳首を弄りながら。
な、なんだろうこれ……♡
幸せすぎてどうにかなっちゃいそう……♡

「んっ……♡　んんぅ……♡　ああ……♡」

乳首を吸われ、乳首を抓られ、私は腰をクネクネと動かしてしまう。

その動きに気がついた零様が、私を窓に押し付けてくる。

「腰、動いてるな。我慢できないか？」

「は、はい……♡」

「じゃあ、窓におっぱい押し付けてケツをこっちに向けろ。犯してやる」

「はい……♡　ありがとうございます……♡」

私は零様の命令通り、窓におっぱいを押し付けて零様にお尻を向ける。

「れ、零様の大っきなオチンポで、私のドスケベマンコ、犯してください……♡　いっぱいパコパコしてください……♡」

「あぁ。お望み通りに！」

「んんぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

零様は私の腰を力強く掴み、パンツのクロッチを横にずらし、一気にオチンポをオマンコに挿入してくださる♡

一気に太いオチンポが子宮（おく）まで来たので、私は嬌声を上げてしまった。

「あっ♡　あっ♡　あっ♡　んんっ♡　ああっ♡　ああっ♡」

パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！

車内に、肌と肌がぶつかる乾いた音が響く。
そこに、私のオマンコのクチュ音と、私の喘ぎ声が混ざる。
「黒乃、窓開けてくれ」
「あぁ」
零様がそう言った後、黒乃さんが私がおっぱいを押し付けている窓を開けてくる。
「ま、待って――んひゃあん♡♡♡」
窓が下に下り、おっぱいが下に引っ張られる。
それだけで私は感じてしまった。
乳首が引っ張られるこの感じ、堪らない……♡
窓が全開になると――、
「ほら、顔出せ」
「んひゃあん♡」
零様が後ろから押してくるので、私は顔を外に出してしまう。
「れ、零様……！　こ、これ、んあっ♡　こ、声がそ、外に……あんっ♡　き、聞こえてしまいます……あっ♡」
「それでいいんだよ。外にいる奴らに、今自分が犯されて感じていると、気持ちよくなってると知らせてやれ」
「は、はいぃぃぃぃ♡♡♡♡」
私は、窓の外に向かって大きく喘ぐ。

すると、外を歩いていた人達（女のみ）が、こちらを見てくる。
「え……あれってカーセックス……？」
「マジで！？　羨ましすぎるんだけど……」
「助手席に座ってる女の子も、オナってたような……」
「ってか、こんな事してくれる男性様、この世に存在するん？」
「チラッと男性様が見えたけど、激しく腰打ち付けてた……今日のオカズこれで決定だわ……」

など、外から色んな声が聞こえてくる。

それを聞くと、私は優越感に浸ってしまう。

この世界には存在しない、エッチな事に興味がある変態な男性様。
そんな男性様である零様と出会い、こうして可愛がっていただけている。

普通であれば出会う事などできない。
この奇跡に私は、感謝をしつつ他の女達に対して優越感を抱いていた。

「もっと見てぇぇぇぇ♡♡♡♡　あなた達では一生味わえない、セックスをする私をぉぉぉ♡♡♡♡　あなた達が恋い焦がれるオチンポに、パンパン犯される私をぉぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡♡」

私は外にそう叫びながら、零様に犯していただく。

「あああああああ♡♡♡♡♡　ん〜〜〜〜〜〜♡♡♡♡　イッグぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡」

私は、零様が射精をする前にイッてしまった。

「れ、零様ごめんなさいいいい……！　勝手にイッてしまいましたぁ……」

「気にするな。好きなだけイケ。でもその変わり、俺がイクまでやめないからな」

「はいいいい♡♡♡♡♡　プリップリの精液射精するまで、いっぱいパンパンしてくださいいいい♡♡♡♡♡」

零様に腰を掴まれながら、激しく犯される様子を外を歩く人達に見られている。

中にはスマホで撮影してくる人達もいる。

もっと♡　もっと♡　もっといっぱい見て♡♡♡

私を、ド変態でドスケベな私を♡

零様と言う、最高で素敵な男性様に犯され、淫らに喘ぎ感じる淫乱な私をぉぉぉ♡♡♡♡♡

「そろそろ出そうだ！　どこに出してほしい？」

「膣（なか）ぁぁぁ♡♡♡♡　膣（なか）に出してほしいですぅぅぅ♡♡♡　私の零様専用孕み袋に、いっぱい子種注いでくださいいいい♡♡♡♡

零様の子供、授けてほしいですぅぅぅ♡♡♡♡」

「分かった！　美奈貴達の新しい妹、作ってやるよ！」

「ありがとうございますぅぅぅ♡♡♡♡　あああああああ♡♡♡♡」

「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！

ビュルルルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーー

ー！！！！！　ビューーー！！！！！

「んおおお

精液を逆流させる、ド淫乱マンコを。

「動画や写真撮影してる人が多いな。亜沙実、ネット上で有名人になるかもな」

「は、恥ずかしいですぅ……♡」

「いいじゃんか、旅館、繁盛するぞ？」

「そ、それは嬉しいです……♡」

そうこうしていると、信号が青になり、車は発進した。

「さぁ、まだまだ犯すからな！」

「はいぃぃぃ♡♡♡　んあああああああああああああ♡♡♡♡」

この後、私は目的地に着くまで犯されまくった。

中出し数：１０発。

♥　♥　♥

目的地に到着する前。

コンビニの駐車場で。

「零」

「ん？」

「財布だ。好きなもの買っておいで」

「ありがとう！　アニメくじやってもいい？」

「あぁ。もちろん。金額は気にせず、好きなだけ使ってくれ」

「ありがとう！」

零様が、コンビニに寄りたいと仰ったので、私達は今コンビニにいる。

どうやら、零様がハマってるアニメのアニメくじが発売しているらしく、それをやりたかったらしい。
プレゼント候補にしよう……。アニメくじ喜んでくれるかな……？
「私一緒に行ってきます。他の女（ひと）に襲われたら大変なので」
「あぁ。頼む。零を守ってやってくれ」
「は、はい！」

そう言って、助手席に座っていた美奈貴が零様の後を追い、コンビニに入っていく。

私はと言うと、イキまくり過ぎて動けなくなっていた。
後部座席で、力なく横になっている。

「す、すみません、黒乃さん……こんな格好で……」
「気にしなくていいですよ。零に犯されたら、誰だってそうなってしまうから」
「ありがとうございます。……あの」
「はい？」
「一つ、聞いてもいいですか……？」
「なんでしょう？」
「さっき、零様がコンビニを見た時に『この世界に来てコンビニ行ってなかったわ』と仰っていたんですけど、あれってどういう意味なんでしょう……」
「っ」

私がそう尋ねると、黒乃さんはミラー越しに合わせていてくれた目を逸らした。
「それを私の口から語るのは、零に対して失礼に当たります。それ

に、反逆行為ともなる。だから、申し訳ないですけど、私からは何も言えません」
「そ、そうですよね……！　す、すみません、突然こんな事聞いて……」
「でも、亜沙実さんが本当にそれを知りたいのであれば、零に聞いてみるといいですよ。零の全てを受け入れる覚悟があるのであれば、零も教えてくれると思います。ですが、吹聴する話ではないので、他言無用にはなりますけど」
「は、はい……！」

これ……聞いちゃいけない事だったかな……。
でも、気になる……。私は零様の全てを受け入れる気持ちがある。覚悟がある。
だから、後で聞いてみよう。

と、そんな風に思っていると、大荷物を抱え、満面の笑みを浮かべた零様が戻ってきた。

「ただいま～！」
「「おかえり（なさい）」」
「黒乃、ありがとう！　おかげでラストワン賞までゲットできた！」
「良かった。零のその笑顔を見れて、私も嬉しい♡　私や姉さんが稼ぐのは、全て零の為だから。だから気にせずに自由に使ってくれ♡」
「うん！　えへへ～♪」

子供っぽくなってる零様……可愛すぎる！
どうしよう……母性本能が刺激されちゃう……！

「ん？　どうした？」
「あ、い、いえ……！　す、すみません……！」
やってしまったぁぁぁぁぁぁ……！
無意識に零様の頭を撫でてしまった……！
「ママ、不敬過ぎ」
助手席に戻ってきた美奈貴に、冷たく睨まれながらそう言われてしまった……。
はい。全く持ってその通りです……はい……。
と、私が落ち込んでいると――、
「亜沙実かあさん、もっと頭撫でて～」
「っ！」
零様が、頭をおっぱいにこすりつけてきてくれた。
こ、こんな事があっていいんですか！？
「し、失礼します……」
私は恐る恐る零様の頭を撫でさせていただく。
すると、零様は幸せそうに笑顔を浮かべてくださる。
「可愛い……」
助手席から美奈貴のそんな声が聞こえてくる。
分かるよ美奈貴。その気持ち大いに分かる。

こんな、幸せな事、あっていいんでしょうか！
私は明日から、どうなってしまうのでしょうか！
幸福の反動で、不幸が訪れないか心配になる……。
でも……。

「ふふ♪」

幸せそうな零様を見ていると、それでもいいと思えてくる。
ううん。それでいい。

今、この幸せを味わえるなら、もうなんでもいい。

「零様、私、アニメくじに詳しくないので色々教えていただいてもよろしいでしょうか？」
「もちろん！　えっとね～……」

私は零様の頭を撫でながら、そして、犯されながら零様から色々と教わった。

第123話　前田亜沙実と移動カーセックス♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！

いかがだったでしょうか……？

亜沙実とのカーセックス、楽しんでいただけておりましたら幸いです……！

前田家に到着するまでの間、車内で零、黒乃、美奈貴の三人がどんな会話をしていたのか、少し気になりませんか？　書いていて僕は気になりました（笑）

そういったシーンも、想像していただけるとより楽しめると思いますので、ご自由に想像して沢山楽しんでください♪

亜沙実のエピソードはまだ続きます！

次話では、目的地であるとある場所でセックスしまくります！

目的地がどこなのか、楽しみにしていてください♪

（筆者のプライベートコメント）

「本編の中であった『アニメくじ』ですが、ご理解いただけてるかなぁとは思うのですが、コンビニなどでやっている某くじの事でございます。

名前をそのまま記載するのはどうかなと思い、念のため変えさせていただきました。

僕は普段からくじ運がなく、大体H賞だったりG賞だったり下の賞しか出ません……。

そんな中、この間ライダーのくじがあり、G賞のクリアポスター狙いで引きました。

そしたらなんと、F賞、H賞、G賞、C賞と言う結果になりまし

た。
……こういう時に限って、上の賞が出るのって、なんでなんですかね……（；´д｀）トホホ…
最近は、ガチャガチャにハマっており、仕事帰りにほとんど毎日寄ってしまっています。
まぁ、運がないので推しはほとんど出ないのですが（T_T）
皆様も普段、ガチャガチャやくじはやったりしますでしょうか？
僕は、アニメやライダーのガチャガチャやくじをこれからも沢山やっていきたいと思っています♪
お好きな方がいらっしゃいましたら、これからも共に楽しくやっていきましょう♪
それでは、次話をお楽しみに～！」

第１２４話　キャンプ場で野外セックス♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

投稿が遅くなってしまい、大変申し訳ございません……！

フルスロットルでエロく仕上げましたので、沢山興奮して楽しんでいただけましたら幸いです……！

第１２４話　キャンプ場で野外セックス♡♡♡♡♡♡♡

「じゃあ、また連絡するね」
「あぁ。沢山楽しんでな」
「うん。ありがとね、黒乃」
「んっ……♡　じゃあな」

俺は黒乃にキスをした後、車を見送った。
美奈貴は、オナニーでイキ過ぎて助手席で眠っていた。

「さて。じゃあ行きますか」
「はい♡」

俺は亜沙実と手を繋いで、歩き始める。

俺達がやって来たのはキャンプ場。
まぁ、キャンプ場って言っても、手ぶらで来られる場所だからグランピング？　に近いかもしれないが。

「予約してた白下です」
「お待ちしておりました」

俺達は受付で色んな説明を受けた後、テントへと向かった。

「わぁ～……すごい……♡」

俺達が向かったテントは、中に大きいベッドが設置されており、テーブルやふかふかの絨毯なども置いてある。

さらに、テントの外にはバーベキューができる物があったり、大きいテーブルが置いてあったりする。

しかし、そのテーブルの上には本来、グランピングには相応しくない物が置いてある。

「こんなにいっぱい……♡」

「一週間、これで弄りまくってやるからな」

「はい……♡」

テーブルの上には、ローター、バイブ、電マ、アナルビーズなど、色んな大人の玩具が置いてある。

これを使って、亜沙実とエッチしまくる。

「まずは」

「はい。何から始めま――んぁぁんっ♡♡♡」

テントの中を、四つん這いになりながら覗いていた亜沙実のズボンを脱がし、紫色のパンツのクロッチを横にずらして、チンコを奥まで一気にぶち込む。

ズボンを脱がされただけでは、何をされるのか分かってなかったらしく、突然奥まで挿れられ、亜沙実は外だと言うのに大声で喘いだ。

「れ、零様……そんないきなり……♡」

「でもマンコはもうぐしょ濡れだったぞ？　これっていつでも挿れていいって事だよな？」

「は、はい……♡　実はずっと濡れてて……♡　早く零様のオチンポズボズボしてほしくて堪らなかったんです……♡」

「この変態マゾが。子供が三人いる母親とは思えねぇな」
「うぅ……♡　ご、ごめんなさい……♡　こんな変態マゾな母親でごめんなさい……♡　でも、もう零様と出会って、零様のオチンポを味わったら、ただの母親ではいられないのぉ……♡　母親じゃなくて、女になっちゃうんですぅ……♡」
「まぁいいさ。俺にとってお前は、ただの性奴隷だからな」

我ながら酷い事を言っているとは思う。けど、それすらも、この女は――、

「ありがとうございますぅぅぅ♡♡♡　私は零様専用の性奴隷ですぅぅぅ♡♡♡　いつでもどこでも好きな時に好きなだけ中出しぶっかけ孕ませ可能なマンコ、いっぱい使ってくださいぃぃぃ♡♡♡」

こうやって、エロい声で媚びながら喜んでくる。
声がデカすぎて、周りの客（女のみ）達にバレ始める。
寄っては来ないが、皆、興味津々なのか、チラチラとこっちを見てくる。

「亜沙実。お前の声がデカイから、周りに俺達がセックスしてることバレてるぞ」
「っ！？　ご、ごめんなさいぃぃぃ……！　はしたない声で媚び媚びしちゃってごめんなさいぃぃ……！」

亜沙実は、テントの中に上半身を突っ込み、バックで犯されているので周りの様子を見ることができない。
その為、今がどんな状況なのかが分かっていなかった。

しかし、俺は犯すのをやめない。

むしろ、より激しく腰を打ち付け、さらに大きく張りのあるケツを引っ叩く。

バチィィィィィンッッッ！！！

「んひぃぃぃぃぃぃぃぃ♡♡♡♡♡♡♡」

じょばぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡

「おいおい、ケツ叩かれてお漏らしとかどんだけだよ」

亜沙実はケツを叩いた瞬間、あられもない声を出し、失禁した。

「そんなにケツを叩かれるのがいいのか？　だったら叩きまくってやるよ！」

バチィィィィィンッッッ！！！　バチィィィィィンッッッ！！！！！　バチィィィィィンッッッ！！！！！

「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡　あああああああ♡♡♡　おおおおおおおおお♡♡♡♡♡♡♡」

「三人娘の母ともあろう奴が、マンコ突かれながらケツ叩かれて、汚え声出しながら感じるなんて、どんだけ変態なんだよ」

「ごめんなさいぃぃぃ♡♡♡♡♡　おおおおおおおおお♡♡♡　気持ちよすぎて、勝手に感じ、あああああ♡♡♡　ちゃいますぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

バチィィィィィンッッッ！！！　バチィィィィィンッッッ！！！！！　バチィィィィィンッッッ！！！！！

パンッ！　パンッ！！　パンッ！！！　パンッ！！！！

ケツを叩きながら、激しく腰を打ち付ける。

それにより、ケツを叩く乾いた音と、肌と肌がぶつかる音が鳴り響く。

ここは外なので、亜沙実のケツは相当冷えてるはずだ。

だから、叩かれたら本来はかなり痛いはずなのに、当の本人は――、

「んひぃぃぃぃぃぃぃ♡♡♡♡　ぎもぢいいいぃぃ♡♡♡

気持ちよすぎておかしくなるぅぅぅ♡♡♡」

と、このように感じまくっていた。

膣の締まりがキツくなってきたので、そろそろイきそうなのだろう。

「亜沙実、イきそうなのか？」

「は、はいぃ……♡♡♡　も、もうイきそうですぅ……♡」

「いいぞ。俺もそろそろ出そうだからイケ。膣に出してやるからな」

「はいぃぃぃ♡♡♡　お願いしますぅぅぅ♡♡♡」

俺は腰を動かす速度を上げる。

パンパンッ！！！　ぱちゅぱちゅ♡♡♡

「んあああああああ♡♡♡　も、もう駄目ぇぇぇぇぇぇぇ♡♡♡　イッグぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

「出るっ！」

ドビュルルル

「二発目、出すからな！」
「はいいいいぃ♡♡♡　いっぱい出してくださいいぃ♡♡♡♡
子宮に零様の子種、直接ビュービュー注いで私を孕ませてくださいいいぃ♡♡♡♡」
「出るっ！」

ビュルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！　ビューーーーー！！！！！

「おおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡」
膣（なか）の締まり具合で分かるが、亜沙実はおそらくイッてはいない。
だが、そんな事は俺には関係ない。
「ふぅ。じゃあ、色々準備するか」
「はい……♡♡♡」

俺はチンコを引き抜いた後、お掃除フェラをさせてからパンツとズボンを穿き、下半身裸の亜沙実と準備を始めた。

♥　♥　♥

「ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぐぼっ♡」
私は今、零様にフェラをしている。
しかし、二人っきりではない。
「見てあれ。フェラなんてAVの世界だけだと思ってた……」
「ね～♡　あの人、めっちゃ羨ましい～♡」
「おちんちんってあんななんだ……モザイクなしとか、初めて見た

……♡」
「美味しそう……♡　私も舐めたいなぁ……♡」
「精液ってどんな味なんだろう……♡」
私達がいるのは、共用の大浴場だった。
今は脱衣所で、零様の服を脱がさせていただいているところだった。
零様に「舐めろ」とご命令いただけたので、私はありがたくフェラをさせていただいている♡
「ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡」
零様の腰を掴み、激しく頭を前後に動かす。
その時に、舌を亀頭や竿に絡ませて刺激をプラスする。
亀頭からは大量の我慢汁が溢れてきていて、それを飲むだけで私はイッてしまいそうになる。
でも、それは絶対にしてはいけない。だって、零様より先に気持ちよくなってイッてしまうなんて、性奴隷として一番してはいけない行為だから。
私も零様もすでに全裸になっている。
脱衣所で全裸でフェラ。
その非日常感に、私は興奮していた♡
「じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぶっ♡　じゅぶっ♡」
「亜沙実、もう……」
「ぶぁい……♡」

口の中でオチンポがどんどん膨らんできた♡
それは、射精をすると言う合図。
このパンパンに膨らんだオチンポが私は大好きだった♡

「出すぞ！」

出して♡　出して出して出して出して♡♡♡
いっぱい私のお口に零様の精液、ビュビューって注いでぇぇぇぇ♡♡♡♡

「出る！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルル！！！！！！！　ビューーーー！！！！！！

「んぶっ！？　んんっ！！　ん～～～……♡♡♡　ごくごくごくごく……♡♡♡」

お口の中でオチンポが爆発し、先っぽから熱い精液が解き放たれた♡
一瞬で口全体を染め上げる精液。
精液の味と臭いが広がった次の瞬間にはもう、喉奥に精液が注がれており、喉に濃い精液がべっとり張り付いてくる♡♡♡
濃すぎて飲み込みづらいけど、それがまた心地良い……♡♡♡

「ごきゅっ……♡　ごきゅっ……♡」

私が零様の精液を飲み込む姿を見て、周りの女達は――、

「あ、あれがごっくん……♡」
「う、羨ましい……♡」
「私も飲みたい……♡」

など、羨望の眼差しを向けてくる。
まぁ、機会があれば飲めるかもね。
そんな機会が訪れるか、分かんないけど。

私は、ここに来るまでの間に感じた優越感に再び浸りながら、精液を飲み込んでいく。

「れる……♡　じゅる……♡　ちゅぱ♡　ちゅむ……♡
れる……♡　ぢゅるるるる♡♡♡　ぷはぁ♡　ご馳走様でした♡」
「あぁ」

私は、オチンポから一切口を離さずに精液を飲み干し、そのままお掃除フェラをした。

「それじゃあ、入るか」
「はい♡」

私達はお風呂へと向かった。
お風呂にはゆっくり入りたいと零様が仰ったので、お風呂でのエッチはなかった。
ちょっと寂しかったが、周りの女達が零様を見て興奮しているのを、零様の隣に座りながら見るのは楽しかったので、それはそれでよかった。

♡　♡　♡

「おおおお

亜沙実は、よく分からない所で興奮し、イッた。

「急に締め付けやがって……また出すからな！」

「出してくださいいい

♡　♡　♡

「ん……？　　あれ、俺いつの間に眠って……」

俺はいつの間にか眠ってしまっていたようだった。

しかも、亜沙実と繋がったまま。

「さすがにチンコ小さくなってるから、挿入(はい)ってるって感覚はないな」

俺は亜沙実の上から降りる。

仰向けになった亜沙実に、俺は覆いかぶさり眠ってしまっていた。

「重かったろうに。すまんな。起きたらご褒美やるからな」

俺は、穏やかな寝息を立てて眠る亜沙実の頬に軽くキスをした後、テントを出た。

「トイレトイレ～」

トイレに行く為だ。

男子トイレに向かうと――。

「あれ？　　あの三人……」

男子トイレの前に、見覚えのある三人がいた。

中を覗いたり、入ろうとしてはやめたり、を繰り返している怪しい三人組。

俺はそんな不審者達に声をかける。

「おい」
「「「っ！？」」」
果たして、そこにいたのは――。
「「れ、零様！？」」「ご主人様！？」
「お前らこんな所で何やってんだ？　完璧に不審者だぞ」
「「「す、すみません……！」」」
俺にそう言われ、頭を下げ謝罪をしてくる俺の性奴隷である三人。
王子様系のボーイッシュ高身長女子である、中村　麗。
褐色日焼け肌ギャルの、日高メリー。
ヤンキー女子特攻隊服で胸にサラシを巻いた、高尾　櫂。
この三人は、俺のキープ性奴隷。
亜沙実達がメインの性奴隷だとすると、こいつらはサブ性奴隷……と言った方がいいだろう。
こいつら以外にもサブ性奴隷はいるのだが、それはまた追々な。
別の所で作者が書くだろう。
「んで？　お前らここで何やってんだ？」
「あ、いえ、その……」
麗がオドオドしている。
そんな麗にかわり、メリーが答える。
「た、たまたまここで二人と会ったんです！　三人とも初めましてだったんですけど、一目見た瞬間に、全員ご主人様の性奴隷だ！　って分かりまして！」

「え……マジで……？」
「「「はい！」」」
「うわ、キモ……引くわ～……」
「「「っ～～～♡♡♡」」」

俺がそう言うと、三人はなぜか腰をビクつかせた。

「おいおい……まさか今の言葉でイッたんじゃないだろうな……？」
「「「そ、そのまさか、ですぅ……」」」
「はぁ～……甲斐性なしのお前らには、お仕置きが必要だな。中に入れ」
「「「は、はい……！」」」

俺は三人を男子トイレに入らせる。

「お、丁度小便器三つあるじゃん。お前ら、小便器に座れ」
「す、座るってどうやってだ……？」
「簡単だよ。ここに、お尻を乗せればいいだけだ」

小便器の窪みの部分を指差し、そこに座るように促す。

「どうした？　まさかできないとか言わねぇよな？」
「「「っ！？」」」

俺は、鋭く三人を睨みつける。
すると、三人は肩をビクつかせた後、すぐさま小便器に座り始める。

「ったく。さっさとしろよ、このノロマどもが」

俺の暴言にも、三人は興奮しているらしく、さっきから蕩けきった表情を浮かべている。

「あ、あの……」

「ん？」

麗が手を上げる。

「ふ、服は脱がなくてよかったんでしょうか……？」

「あ、確かに。このまま座っちゃいましたけど、大丈夫でしたか……？」

「脱ぐなら脱ぐが……？」

「いや。そのままでいい。俺の臭いを服にも染み込ませてやるからな」

「「「？」」」

これから俺に何をされるのか分かってないのか、三人は可愛らしく首を傾げてくる。

ちなみに、櫂はエッチしている時以外は口調は荒々しいままだ。俺がそれでいいと言ったからだ。

「お前らさ、小便器がなんの為にあるのか知らない？」

「だ、男性がおしっこをする為のものです……♡」

「立ってするんですよね♡　チンポを持って、狙いを定めてじゃーーーって♡」

「そ、そう考えるとエロいな……♡」

なんだよ、分かってんじゃないか。

「そう。じゃあ、そこに座ってるって事は、何をされるか分かるな

？」
「「「っ♡」」」
察したのか、三人は顔を真っ赤にした。
「も、もしかして……♡」
「わ、私達に……♡」
「お、おしっこをかけてくれるのか……♡」
「あぁ。そのまさか、さ」
「「「っ～～～～～♡♡♡」」」
俺はズボンとパンツを脱ぐ。
「「「はぁはぁ……♡♡♡」」」
俺のチンコを見て息を荒くする三人。
お前らは犬か。
「全員にまんべんなくかけてやるけど、最初にぶっかけられるのは誰がいい？」
俺がそう聞くと――、
「「「はい！」」」
三人が勢いよく手を上げた。
「ちょっと二人とも！　ここは私だと思うんですけど！」
「なんでだよ！　ここはアタシだろ！」
「わ、私だよ……！」

おしっこをかけられるのを巡って喧嘩する女子って、最高すぎんか？

「「零様ぁ……」」「ご主人様ぁ……」

悲しそうな顔でこっちを見てくる三人。

はいはい。分かりましたよ。

「じゃあ、俺が決めるからな。俺が決めたことには異論はないだろ？」

「「「はい！」」」

俺は、真ん中の小便器に座る麗の前に立つ。

「じゃあ、行くぞ」

「はい……♡」

じょば……！

「んっ……♡」

俺は、麗の顔に最初のおしっこをかける。

そして、そこから――、

「そら、全員にかけるぞ！」

「「「はい！」」」

じょばあああああああああああ！！！！

「「「んん～～～～～～～～～～♡♡♡」」」

俺はチンコを固定し、腰を左右に振る。
そして、三人の体にまんべんなくおしっこをぶっかけていく。

「最後は顔にかけるぞ！」

俺がそう言うと、三人は一斉に口を開ける。
そして、顔におしっこをかけると――、

「「「んぶっ……♡♡♡」」」

大きく開けた口の中に、おしっこがどんどん入っていく。
それを、美味しそうに、幸せそうに飲み込んでいく三人。

「ふぅ……」

おしっこが止まると、三人は口の中のおしっこを飲み干し、俺を見つめてきた。

「「「おしっこ、ありがとうございました♡♡♡」」」

まるで、人間便器になったかのように三人が口を揃えて言ってきた。

「あぁ。また使ってやるよ」
「「「はい……♡♡♡」」」
「そのおしっこが染み付いた服のまま、電車に乗ったりバスに乗ったりしろよ？　家に帰るまでは風呂に入る事も禁止だ。いいな？」
「「「はい……♡♡♡」」」

俺はそう言って、パンツとズボンを穿こうとする。

「あ、あの、お掃除は……？」

櫂が乙女モードの口調で聞いてきた。

「いや、いい。テントにいる性奴隷に舐めさせるから」

「分かりました♡　ではまた、お使いください……♡」

「あぁ。三人もまたな」

「「「はい♡♡♡　また♡♡♡」」」

俺は三人を小便器に置き去りにしたまま、亜沙実がいるテントへと戻った。

第１２４話　キャンプ場で野外セックス♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

亜沙実とのキャンプ。そして、人々に見られながらのセックス。女子風呂での見られながらのフェラ。そして、沢山の女子がいる風呂に入浴。

沢山楽しんでいただけておりましたら、とても嬉しいです！

最後には、特別版に登場したヒロイン達がまさかの登場！

ちょっとしたサプライズ、喜んでいただけましたら幸いです……！

特別版？　なにそれ？　と思われた方は

『逆転世界・元女子校【特別版！】～読者の皆様の妄想を詰め込みました！～』

を、チェックしていただけますと幸いです！

次話では亜沙実が豪邸を訪れます。

そして、そこで三人の娘と一緒に……？

と、言う展開になっておりますので、楽しみにしていてください♡

来週は、もう少し早く投稿できるように頑張ります！

それでは、次話をお楽しみに！

また来週～♪

第１２５話　豪邸で前田家四人を、ハメ潰し♡♡♡♡♡♡♡

麗、メリー、櫂の三人におしっこをぶっかけ飲ませた後、テントに戻ると亜沙実が目を覚ましていた。

「起きてたんだ」

「はい♡　先ほど♡　くんくん……おしっこしてきたんですか？」

「あぁ。たまたま性奴隷に会ったからぶっかけて飲ませてきた」

「そう、ですか……」

暗い表情を浮かべる亜沙実。

まぁ、亜沙実も俺のおしっこ好きだもんな。

「でも、掃除はさせてないから、舐めて綺麗にしてくれ」

「っ～～～～♡♡♡　はい♡　お任せください！」

俺がそう言うと、亜沙実は満面の笑みを浮かべてベッドから降りてくる。

そして、俺の前で跪き、両手でチンコを包み込みながら竿を扱いてくる。

そうすると、皮が上下に動き、奥に残っていたおしっこが出てくる。

「あんむ♡　ちゅ～～～～～～～～～♡♡♡」

尿道からおしっこが出始めると、亀頭（尿道の部分だけ）を口に含み、勢いよく吸い出した。

まるで、ストローを吸ってるかのように。

「おぉ～……これいいな」

思わずそう呟いてしまうほど、このバキュームは気持ちよかった。

「ちゅ～～～

「また出る……！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！

ビュビューーーーーー！！！！！！

バキューム搾精が気に入ったのか、亜沙実はこの後3発、搾り取ってきた。

♥♥♥

昨夜は零様のオチンポに、いっぱい可愛がっていただけた♡

しかも、おしっこ後をわざわざ舐めさせてくれて、さらに尿道を吸い続けると射精までしてくださった。

それが嬉しくてつい、暴走していっぱい射精させてしまったけど、零様は怒るどころか気持ちよかったと褒めてくださった♡

零様はお優しい♡

そして、一週間、沢山犯していただき、玩具で弄っていただき、イカされまくった私。

時間が経つのは早く、あっという間に帰る日。

「おっ♡　おっ♡　おおおっ♡」

私は今、犯されていた。

帰りの準備が済み、受付の場所まで向かおうとしたら急に後ろからオチンポが挿入(はい)ってきた。

「つ、着きまし、んおっ♡　ったぁぁ♡♡♡」

受付の場所に到着し、私達は中に入る。
すると、受付の人はこっちを見て顔を真っ赤にした。

「帰ります。ありがとうございました」
「あ、い、いえ……！　こちらこそこの度はご利用いただき、誠にありがとうございましたっ！　それに、最後にこんな素敵な光景まで……」
「え？」
「あ、い、いえ……！？　な、なんでもございません……！？　お気をつけてお帰りくださいませ……！」
「はい。また来ます」
「は、はい……♡♡♡」

受付の人は、目が蕩けきっていた。
発情したメスの顔になっていたので、おそらくオマンコがぐちょぐちょだと思う。

「んっ♡　おっ♡　あああ♡♡♡」

駐車場に向かう間も、ずっとバックで犯されている。
あまり動きながらだと気持ちよくないのか、零様はまだ一度も射精していない。
これじゃあ、私ばっかり気持ちよくなっちゃう……。

「れ、零様ぁ……♡」
「ん？」
「こ、これ……んあっ♡　わ、私だけが気持ちよく、んっ♡　なってしまっていませんか……？　あっ♡」
「そんな事ないぞ？　俺もちゃんと気持ちいい」
「で、ですが……おっ♡　まだ一度も、んおっ♡　しゃ、射精

を……あっ♡　されて、あああっ♡　ない、んんぅぅぅ♡♡♡」
「余計な事考えなくていいから、お前はみっともない喘ぎを上げながら進め」
「は、はいぃぃぃ……♡♡♡」

腰をガッチリ掴まれながら、私達は歩き続ける。
そして、駐車場に着くと、黒乃さんが運転する車があった。

「お待たせ。遅くなってごめんな」
「全然。むしろ、時間前だから、早いくらいだ。犯しながらでこの時間だから、相当早く出たんじゃないか？」
「うん。移動速度がどうなるか分からなかったから、早めに出たんだよ。今日は巴がいるんだ」
「おはよう、零ちゃん♡　一刻も早く零ちゃんに会いたくて、来ちゃった♡」
「嬉しい事言ってくれるな。俺も巴に会いたかったよ」
「っ♡　やだぁ……♡　オマンコ濡れちゃったぁ……♡」
「じゃあ、責任もって犯しまくってやらなきゃな」
「うん♡　楽しみに待ってるね♡」
「あぁ。帰る前にごめん、一回イカせて」
「「もちろん♡♡」」

零様は、黒乃さん、巴さんとの会話を終えると、隣に停まっていた車のボンネットに私を押し付ける。

「んきゅぅぅぅ♡♡♡」

私はボンネットに手を付く。
そして、激しく後ろからパンパン犯される。
ふと、視線を前にやると、なんと車には人が乗っていた。

運転席に母親らしき人、助手席に高校生くらいの女子、後部座席に中学生くらいの女子と、小学生くらいの女子。
計四人の人が乗っていた。

四人は私の姿を見て、顔を真っ赤にしながら口を開けて呆けている。

「えへへ♡」
「「「「っ！！！！」」」」

そんな四人に私は、涎を垂らしながらエッチな微笑みを浮かべると、四人はさらに顔を真っ赤にした。
助手席の高校生女子は、我慢ができなくなったのかパンツの中に手を入れてオナニーを始めてしまった。
後部座席の二人もし始める。
運転席の母親は、スマホで動画撮影を始めた。

「ほら、ピースしてやれよ。せっかく撮ってくれてんだ」
「は、はい……♡　ぴ、ピース……♡」

零様に耳元でそう囁かれ、私はスマホに向かってピースをする。

「おっ♡　おっ♡　おおおおっ……♡♡♡　れ、零様ぁ♡♡♡　私、もう……♡　イッちゃいそうですぅぅ♡♡♡」
「あぁ。いいぞ。俺もそろそろイキそうだ」
「一緒に♡　一緒に♡　一緒にイキたいですぅぅ♡♡♡」
「あぁ。イクぞ……！」
「はいいいい♡♡♡」
「おら！　家族連れの前で、動画撮られながら情けなく無様にイ

ケ！」
「んおおお

「零ちゃん」
「巴」
「亜沙実さんは私と黒乃に任せて♪」
「助かる」

私は、巴さんと黒乃さんに支えられて車に連れて行かれた。
零様は何やら、私がもたれかかってしまった車の人と話している。

「うちの性奴隷がすみません」
「い、いえ……！」
「これ、ご迷惑をおかけしてしまったお詫びです」
「「「「っ！」」」」

俺は、窓を開けてくれた運転席の女性にチンコを突き出す。

「さっき中出しした精液の残り汁がどんどん溢れてくるんですよ。舐めてもらえませんか？」
「よ、よろしんですか……？」
「えぇ。もちろんです。他のお三方も、よろしければどうぞ」
「「「「ありがとうございます！！！」」」」

そうして、まずは運転席の母親、次に助手席の高校生女子、次に中学生女子、次に小学生女子、そして最後は母親と、俺のチンコを舐めてもらった。

「それでは、失礼いたします」
「「「「あ、ありがとうございましたっ！！！！」」」」

チンコを舐めさせただけでお礼を言われるなんて、本当この世界は最高だな！

ってか、小学生にチンコ舐めさせるって背徳感ヤバくて射精しそうだったわ。
俺、ロリの趣味なかったはずなんだけどなぁ……。
まぁ、いっか。
車に戻って亜沙実犯そう～。

後部座席で力なく横になっていると、零様が帰ってきた。

「おかえり～」
「お待たせ。さ、帰ろう」
「じゃあ、出発するぞ」

私の足を自分の膝の上に乗せ、座席に座った零様。
零様の合図で、車は動き出す。

「ほら、亜沙実」
「ふぇ……？」
「足でしろ」
「っ♡　は、はい……♡」

足を持たれ、何かされているので零様の方を見ると、勃起したオチンポに私の足を擦り付けていた。
これは、足コキをしてもいいと言う事！
念願だった足コキ！

「し、失礼いたします……♡」

私は、おそるおそる足の裏を使ってオチンポを包み込み、上下に扱いていく。

足の裏に感じるヌルヌルした感触……♡
零様の我慢汁が、私の足についてる……♡

「し、しっかりできてますでしょうか……？」
「あぁ。気持ちいいぞ」
「よ、よかった……♡」

ちゃんとできてるんだ……♡
零様は激しいのが好きみたいだから、なるたけ激しく……♡

「くっ……そろそろ出そうだ……黒乃、座席精液で汚れるかもだけどいいか？」
「もちろん♡　好きなだけ染めてくれ♡」
「ありがとう……出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！
ビュルルルルルルルルルルル！！！！！！

「すごい……♡」

私の足に包まれたオチンポが、ビクンビクンして射精してる……♡
私の足マンコで気持ちよくなってくれたんだ……♡　嬉しい……♡

「足についた精液、拭き取るなよ？　この後する事に使うからな」
「はい……♡♡♡」

私は、精液コーティングされて足を見つめながらオマンコを濡らしていた。

♥♥♥

「ただいま〜」

零様のお宅に到着した。

「わぁ〜……」

すっごく大きなお家……旅館以上の大きさな気がする。

「亜沙実？　早く来い」

「あ、はい！　すみません……！」

零様と一緒に中に入る。

と、玄関に人が横たわっていた。

「よいしょ」

「え！？」

零様は、仰向けで横たわる女性になんの躊躇もなく乗った。

さらに、そこに別の女性が四つん這いでやって来て、零様の足を舐め始めた。

「初めてだとビビるよな」

「え、あ、あの……その……すみません……」

「いや、いい。マットになってるのは細川かなえ。ゴミクズ奴隷になりたいと懇願してきたどうしようもない変態だ。んで、今、俺の足を舐めてるのが醍醐歩美。こいつもモノ以下の奴隷で、俺の性奴隷達を馬鹿にしたり生意気だったりと躾がなってなかったから、モ

ノ以下の奴隷になるよう調教してやったんだ」
「な、なるほど……」
ど、通りで二人とも幸せそうな顔をしてるはずだ。
「亜沙実にはこんな事しないから、安心してくれ」
「ふぇ！？　あ、は、はい……！」
「ん？　なんだ、してほしいのか？」
「あ、いや、その……おっぱいやポルチオを踏んでほしいなぁと……あ、やっぱりなんでもありません……！　すみません……！」
私ってば、何言ってるんだろう……！
こんなワガママ、言っちゃいけないのに……！
「まあ、亜沙実がやってほしいならやるぞ？」
「よ、よろしいんですか……！？」
「あぁ。沙耶香には、かなり厳し目に接してるしな」
「あ、ありがとうございます……！」
「おい、もういい。それじゃあ、部屋に行こう」
「は、はい……！」
私はかなえさんをまたいで、零様と共に二階へ向かった。
「どうぞ」
「お、お邪魔します……」
零様のお部屋にお邪魔する。
当然の事ながら、零様のお部屋がこの家で一番広い。
何十部屋もある中で、零様の部屋だけ百人以上は入れるであろう広さを誇っている。

壁にはアニメの女の子達のポスターが貼ってある。全部が下着姿だったり、水着姿だったり、裸だったりする。
棚が沢山あり、そこにはフィギュアが沢山綺麗に並べられていた。
ベッドも大きくて、キングサイズ……よりも大きい気がする。

「ほら、服脱いでベッドに上がって」
「あ、は、はい！」

部屋の中を見回していたら、全裸になった零様に声をかけられた。
ま、待たせてしまったかもしれない……！
こんなの、性奴隷として失格だ……！
この償いは、ご奉仕で返さないと……！

私は服を脱ぎ、全裸になりベッドに上がった。

「んっ……♡」

ベッドに上がるとすぐ、零様が私にキスをしてきてくれる。
そして、そのまま押し倒される。

「んっ……♡　ちゅ……♡　ふぅ……♡　んんっ……♡」

キスをされながら、おっぱいを揉まれる♡
零様におっぱいを揉まれると幸せになる♡

「んんっ♡♡♡」

右手でおっぱいを揉まれ、左手でオマンコを触られる。

もうぐしょぐしょのオマンコを、左手で激しく責め立てられる。
「んんっ♡♡♡　んんっ♡♡♡　ん～～～～～♡♡♡」
ぷしゃあああああああああ♡♡♡♡♡
私は、キスをしながら零様の激しい手マンでイッた♡
しかも、大量に潮を吹きながら。
「ぷはぁ♡　ご、ごめんなさい、零様……私、潮を……」
「大丈夫だ。気にするな。汚れたら洗えばいい。それだけの話だからな。だから、気にせず気持ちよくなっていっぱい『漏らせ』」
「っ～～～～～♡♡♡♡♡　はいぃぃぃぃ♡♡♡　いっぱい漏らしますぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」
ぷしゃあああああああああ♡♡♡♡♡
私は、潮をまた大量に吹いてしまった。
さ、触られてないのに潮を吹くなんて……♡♡♡
「三十路の漏らす発言、エロ過ぎだろ」
零様にそう言われて、私は恥ずかしさで顔を真っ赤にした。
「んじゃあ、そろそろ……」
零様がオマンコに亀頭を押し当てた瞬間――、
「「零様！」」「れー君！」
「うおっ！？」

突然、部屋のドアが開き、沙耶香、玲奈、美奈貴の三人が入ってきた。

そして、一目散にベッドに上がり零様に抱きつく。

三人はすでに全裸だ。

「どうした、三人共」

乱入してきたにも関わらず、零様は三人に対して怒ったりせず、優しく声をかける。

玲奈は零様の背中に抱きつき、沙耶香は零様の左腕に。美奈貴は零様の右腕に抱きついている。

「ごめんね、れー君……お母さんとのエッチ邪魔しちゃいけないって分かってたんだけど……」

「が、我慢できなくなってしまって……」

「お母さんのエッチな声を聞いてしまったら、余計に我慢できなくなって、沙耶香と美奈貴の二人と突入してしまいました……すみません……」

ごめんね、三人共……ママが占領しちゃって……。

「そうだったのか。いや、俺の方こそ悪い。相手してやれなくて。みんなさえよければ、このまま5Pしないか？」

零様がそう提案してくださる。

その提案は、私達親子にとってはとても嬉しいもの。

なので、三人の返事はもちろん――、

「「「お願いしますっ！！！」」」

ベッドの上で並んで土下座をして、懇願した。

♥♥♥

「んっ♡　んっ♡　んっ♡」（美奈貴）

今、私の上では美奈貴が零様に犯されていた。
仰向けに横たわる私の上に、美奈貴が四つん這いの状態で乗っていて、そこを零様に後ろから犯されている。

「んん～～～～～～♡♡♡」（玲奈）
「あああああああ♡♡♡」（沙耶香）

玲奈と沙耶香は、零様の両隣に膝立ちになっていて、激しく手マンされていた。
玲奈が右側で沙耶香が左側。

「美奈貴！　俺のチンコの感想を母親に伝えてやれ！」
「は、はいいいいいぃ♡♡♡　と、とっても太くて硬くて、んああああんっ♡♡♡　一突き一突き、んん～～～～～～♡♡♡　気持ちよくてぇぇ♡♡♡　その度にいいいぃ♡♡♡　イッちゃうのぉぉぉ♡♡♡♡♡　お、おちんちんしゃいこうなのぉぉぉぉぉぉ♡♡♡♡」

私の目の前で、涎を垂らしながら蕩けきった顔でそう叫ぶ娘。
激しくバックで犯され、Fカップのおっぱいがいやらしく揺れている。

娘の口から、普段聞かない淫らな喘ぎが聞こえ、私はさらに興奮してしまう……♡♡♡

「美奈貴……♡　報告ありがとう♡　零様の前では、零様のオチンポの前では、私達はただの女同士。零様のオチンポを受け入れるただの穴でしかない♡　だから、みんな、今はただ、性奴隷同士として淫らに乱れまくりましょう♡♡♡」

「「「は～～～い♡♡♡　んんぅぅぅ♡♡♡　イッくぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」」」

「俺も出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！
ビュルルルルルルルルルル！！！！！

「あああああああああああああああああ♡♡♡♡♡　零様の精液来たぁぁぁ♡♡♡　子宮に零様の子種がビシャビシャってぇぇぇぇぇ♡♡♡♡」

じょばあああああああああああああ♡♡♡♡♡

「あああああああああ♡♡♡♡　おしっこ漏れちゃったよぉぉぉ♡♡♡♡」

美奈貴は中出しされて失禁してしまったらしく、私の下半身に熱いのがかかってきている。

「ママぁぁぁ♡♡♡♡　ごめんねぇぇぇぇ♡♡♡　おしっこかけちゃってぇぇぇぇ♡♡♡♡」

「いいのよぉ♡　いっぱいかけて♡　美奈貴が零様に犯されて気持ちよくなった証拠、ママに全部教えて♡♡♡」

「あああああああああああ♡♡♡」

じょばあああああああああああああ♡♡♡♡

美奈貴はさらにおしっこを漏らし、私の下半身にかけてくる。

イッて横たわる娘達を見る。

「素敵よ、みんな♡　あなた達を産んでよかったわ♡」

心の底からそう思った♡

♡　♡　♡

「ぎゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡」（玲奈）

「ぢゅる……♡　れる♡　れるれる♡　ぢゅるるる♡♡♡」（美奈貴）

「んんぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」（沙耶香）

「ちゅ……♡　ぢゅる♡」

俺は今、玲奈に真正面からフェラをされ、美奈貴にアナルを舐められ、亜沙実とキスをしている。

沙耶香は、俺の前に立っていて、乳首を激しくいじられている。

沙耶香は俺のチンコにまたいでいる。いわゆる素股の形だ。

俺のお腹にピッタリ背中をくっつけているので、俺のチンコは沙耶香の下半身から飛び出ている。

そこを、玲奈が咥えたり舐めたりしている。

美奈貴は、沙耶香と同じ趣味があるらしく、アナルを舐めたいと

懇願してきた。
アナルを舐め始めると、よっぽど気に入ったのか夢中で舐めたり吸ったり舌を穴の中に入れたりしてくる。
そんな娘達のエロい姿を見て興奮しまくっている亜沙実は、キスだけでさっきから何回もイッている。
「れ、れー君そ、それ駄目ぇぇぇぇぇぇぇ♡♡♡」
「何が駄目なんだ？　気持ちいいだろ？」
「き、気持ちよすぎておかしくなっちゃうのぉぉぉ♡♡♡♡」
「いいじゃんか。おかしくなれ。乳首軽く触られるだけでイクくらい、おかしくなれ！」
「あああああああああああああ♡♡♡♡　イッちゃうぅぅ♡♡♡」
乳首をビーンと強く引っ張られ、沙耶香は絶頂した。
「はぁはぁ……♡」
正直、俺もそろそろイキそうだ。
だが、あえて申告したりはしない。
「んっ！」
ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！
ビュルルルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーーーーー！！！！！！
「んぶっ！？　んん……♡♡♡　んふ～……♡♡♡」
突然の射精に驚いた玲奈だったが、すぐに恍惚とした表情を浮か

べ、口を膨らませながら射精を受け止めていく。
そんな玲奈を見た沙耶香が――、
「れ、玲奈……！　全部飲んじゃ駄目だからね……！　私にもちょうだい……！」
と、俺に乳首を弄られながらも訴えた。
「っ。っ」
コクコクと頷く玲奈。元から分けるつもりだったらしい。だから、飲み込まずに頬を膨らませていたのだろう。
（零様のアナル、ギュギュってして可愛い……♡♡♡　射精する時ってこんな感じになるんだ……♡）
「ぷはぁ♡　零様、気持ちよかったですか……？」
「あぁ。最高だ。でも、まだまだするからな」
「はい♡　零様が満足するまで、前田奴隷一家をお好きなだけ使い潰してください♡」
♡　♡　♡
「「「「はぁはぁ……♡♡♡♡」」」」
今、俺の目の前では、ベッドの上で全身精液だらけでマンコから大量に精液を逆流させた状態で、沙耶香達が横になっていた。
「この光景エロいな……写真撮っとくか」

俺は、エロい姿を晒している前田奴隷一家の写真を撮る。

すると――、

「「「「「はぁはぁ……♡♡♡♡」」」」

突然動きだし、体勢を変え始めた。

どんな体勢になったのかと言うと――、

「おぉ～。やっぱりこの光景は堪んないな」

四つん這いになり、ケツをこっちに向け、高く上げた状態で自分で精液逆流マンコを拡げている。

そして、四人揃ってこう言ってきた。

「「「「「お次はどの膣(あな)をお使いになりますか……♡♡♡♡」」」」

と。

この後、俺は数時間に渡って前田奴隷一家を犯しまくった。

ちなみに、この数時間の間で、沙耶香は舌を、玲奈と亜沙実は乳首を、美奈貴はアナルを調教した。

第125話　豪邸で前田家四人を、ハメ潰し♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

前田奴隷一家とのエッチ、沢山興奮して、沢山楽しんでいただけておりましたら幸いです♡

今度から、四人それぞれ調教した所を責めたりする描写が入ると思います。

調教しているシーンを書いてないので、今後、あれ？　と思われるかと思いますが、最後の所で零が言ってたなぁと思い出していただけますと幸いです！

亜沙実の足にコーティングされた精液ですが、沙耶香達に舐めさせております。

書くことができずに申し訳ございません……！

沙耶香達が舐めたんだと言うのを妄想しながら、楽しんでいただけますと嬉しいです……！

（筆者のプライベートコメント）

「今日は本当に一言だけ。

もっと文章が上手くなりたい……！！！

それでは、次話をお楽しみに～！

また来週～♪」

第１２６話　勉強中の光にレイプ♡♡♡♡♡♡♡

「暇だ」

今日は１／１２。

亜沙実とグランピング施設でヤりまくり、家に招いて前田家を犯しまくった後、亜沙実を家まで送り帰ってきた。

俺は今、自室の椅子に座りアニメくじで当てたフィギュア達を開封していた。

が、開封も終わってしまい、暇になった。

「かなえ、醍醐、暇すぎるんだが何かいい案あるか？」

「そうですね……自室でお勉強なされている、光様のお部屋に行くのはどうでしょう？」（かなえ）

「そのままレイプするのもありだと思います」（醍醐）

「なるほどな～」

かなえは俺の足元に仰向けで、醍醐は俺の椅子になっている。

「んじゃあ、そうするかな。あ、かなえは風呂掃除、醍醐はトイレ掃除だったか？」

「「はい♡♡」」

「んじゃあ、頼んだぞ～。俺は光を犯してくるわ～」

「「いってらっしゃいませ♡♡」」

そうして俺は、光の部屋へと向かった。

♡　♡　♡

俺は物音を立てないように、光の部屋へと入る。

（おぉ～全裸で勉強してるとか、エロすぎんだろ）

部屋の中に入ると、光は椅子に座って机に向かっていた。

今年から三年になる光。

俺は勉学は免除されるらしいが、女子はそうではないらしいので、こうして勉強をしなければならない。

偉いぞ光。そんな偉い光には、今からレイプで犯しまくってやるからな。

俺はそっと光に近づき――、

「きゃんっ！？」

後ろからＩカップの円錐型爆乳を鷲掴みにする。

そして、遠慮なく揉みしだく。

「せ、先輩……♡」

「よっと」

「んんぅぅぅ♡♡♡♡」

回転ができる椅子なので、俺は椅子を回転させ光と向き合う。そして、すでに濡れまくっていたマンコになんの許可も得ずにチンコをぶち込んだ。

「あっ♡　んっ♡　あっ♡　んんぅぅ♡♡♡」

いきなり犯されてるにも関わらず、光は感じまくっている。

椅子に座った光に覆いかぶさり、腰を打ち付けて犯していく。

「あんっ♡　あああ♡　あああっ♡　あああんっ♡♡♡」

俺はあえて何も言わず、ただひたすらに腰を振り続ける。

膣（なか）の締まりがキツくなって来たので、俺はあっという間に限界を迎えた。

「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルル！！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！！　ビューーーー！！！！！！

「んあああああああああああああ♡♡♡♡♡　中出しぃぃぃぃぃ♡♡♡♡♡」

一回目の中出し。しかし、これだけでは俺のレイプは終わらない。

「んきゃぁぁんっ♡♡♡」

光と繋がったまま、光を持ち上げる。

対面駅弁の状態になり、俺はそのまま光を犯し始める。

「んあああああ♡♡♡　あああああああああ♡♡♡　これ、奥まで入るのぉぉぉ♡♡♡♡♡　あああああああ♡♡♡♡♡　気持ちいい

いいい♡♡♡♡」

光の膝の裏に手を入れ、俺が腰を動かすのではなく、光を上下に動かす事で膣を犯す。

光の部屋には、肌と肌がぶつかる音と、光の膣のいやらしい音が鳴り響いていた。

パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！

パチュン♡　パチュン♡　パチュン♡　パチュン♡

「んっ♡　んっ♡　んっ♡　んちゅ♡」

俺は光にキスをする。

キスをしながらも光を上下に動かし、膣を刺激し続ける。

膣の締まりがキツくなってきた所で、俺は二回目の限界を迎えた。

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！

俺は、対面駅弁のまま光の背中を壁に押し付け、今度は自分が腰を動かす。

身動きが取れなくなった光は、ただ奥まで突かれるのを受け入れ、感じる事しかできなくなる。

「んっ♡♡♡　　んっ♡♡♡　　んんぅぅぅ♡♡♡♡♡」

キスをしながら、俺は激しく腰を打ち付ける。

そして、あっという間に限界が。

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！
　ビュルルルルルルルルルルルル！！！！！

「んんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

三回目の中出しに、光は嬉しそうに膣（なか）を締め付けてくる。

一滴も残さず注いでくれと訴えてきているようで、俺はそれに応えるように精液を注ぎ込む。

「ぷはぁ……♡♡♡　　はぁはぁ……♡　　せ、先輩……♡」

「まだまだ、ブチ犯すからな」

「はい……♡　　いっぱい犯しまくってください……♡♡♡」

俺は光をベッドに寝かせ、対面のまま覆いかぶさり犯し始めた。

♥　♥　♥

「あああああああああああ♡♡♡♡　　イグぅぅぅ♡♡♡♡♡」

「出る！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！
ビュルルルルルルルルルルル！！！！！　ビュビューーーーーー！！！！！

「んあああああああああああ♡♡♡♡♡　中出し来たぁぁぁ♡♡♡♡♡　先輩の精液、子宮に注がれてまたイクぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

私は何回目になるか分からない絶頂を迎えた。
そして、何発目になるか分からない中出しをいただいた。

勉強をしていたら、突然先輩が後ろからおっぱいを揉んできて、そのまま犯していただけた。
それだけでも嬉しかったのに、あの後から数時間ずっと犯していただけている♡

沢山の性奴隷がいると、やっぱり使っていただける頻度は少なくなり、一人一回、多くても数回、一時間くらいになってしまう。

もちろん、それに文句があったりする訳ではない。
でも、やっぱり少し寂しい。

私のオマンコ、おっぱい、クリ、アナル、口、乳首、体の全部は先輩に使ってもらう為にある。
使っていただけないと、なんの価値もない。

そして、使っていただけない時は、どうしてもムラムラしてしまう。
この家では、先輩の前以外でのオナニーは禁止になっている。

ムラムラしても、先輩の前でオナニーをするか犯してもらわないと性欲は発散してはいけない。

このルールを決めたのは、巴さん、黒乃さん、瑠李さん。

ムラムラした状態だと、先輩も興奮してくれるし、犯された時に感じる幸福感や快感が倍増するからだと言っていた。

なので、最近みんなムラムラしている。

オナニーをしてしまわないように、ムラムラを誤魔化す方法は人それぞれ。

外に散歩しに行く人や、料理を作る人。掃除をする人や、テレビや動画を見る人。

そして、私のように勉強をする人。

実際、私達は勉強をしなければならないので、この時間を使ってするのはちょうどよかった。

まぁ、ムラムラが収まる訳じゃないから、集中力が切れると大変なんですけど。

そして、この家でのルールはまだある。

他の人が犯されている場合は乱入したりせず、ムラムラに耐える。

そして、先輩の許可が降りない限りエッチに参加してはいけない。

その他にも、色々なルールがあるけど、ほとんど暗黙のルールでみんな分かっているので、今更確認したりはしない。

それはともかく――、

「んんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡　あああああああああああああ♡♡♡♡♡」

私は今、ベッドの上で立ちバックで犯されている。

「んんぅ♡♡♡♡　んんぅぅぅぅ♡♡♡♡　んんぅぅぅぅ♡♡♡♡♡」

私は気持ちよくなりすぎて、もう唸る事しかできなくなってしまっていた。

「光、また出すからな！」

「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡」

しっかりと返事できなくてごめんなさい……！

出してください♡　私の膣(なか)に、一番奥に沢山先輩の精液、注いでください♡♡♡♡♡

「出る！」

ビュルルルルルルルルル！！！！！！　ビュビューーーーー！！！！！！！　ビュルルルルルルルルル！！！！！！！

「んんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡♡　あああああああああああああああ♡♡♡♡♡」

私は、もはや悲鳴に近い嬌声を上げて、先輩の中出しでイッた。

先輩に腰を掴まれているので、座る事が許されない。
なので、足がずっとガクガクしてしまっている。
「はぁはぁ……♡♡♡♡♡」
私のベッドはもうびちゃびちゃになっている。
私の潮、おしっこ、先輩の精液。
色んな液体でびちゃびちゃになっていた。
「しぇ、しぇんぱい……♡」
「ん？　どうした？」
「もっとぉぉ～……♡　もっと犯してぇぇ……♡♡♡」
「言われなくても、もっとめちゃくちゃに犯してやるよ！」
「あああああああああああああ♡♡♡♡♡　ありがとうございますぅぅぅ♡♡♡♡♡♡」
先輩は、再び私を犯し始めてくれた。

♥　♥　♥

「ひかひか、すごい乱れっぷり～♡」（燐）
「ねぇ、これってルールに反する行為なんじゃ……」（鈴音）
「覗いてる分には、反する事にはならないと思うよ」（リサ）
光の部屋の外で、燐、リサ、鈴音の三人が部屋の中を覗いていた。
三人とも四つん這いの状態で中を覗いており、マンコからは大量の愛液が溢れ出ていた。
その愛液は床に垂れ、床とマンコに白濁した糸の架け橋ができていた。

ちなみに、零以外の部屋には扉が設置されていない。
つまり、常に中が丸見え状態なのだ。
零の部屋にはプライバシー確保の為、扉や防音壁が設置されているが、女子達の部屋にはそれが全く無い。
よって、零は誰にも気づかれずに、部屋の中に侵入する事ができる。
「はぁはぁ……♡　お兄ちゃんとエッチしたいよぉぉ……♡」（燐）
「うん……♡　ご主人様に躾けてもらいたい……♡」（鈴音）
「こんな事、願っちゃいけないって分かっているけど、先輩のおちんちんがほしい……♡」（リサ）
三人はオナニーしそうになるのを耐えながら、二人の営みを見続ける。
すると、突然零がこちらを見た。
「「「っ！？」」」
覗いている事がバレてしまった。
怒られる。そう思った三人。
一瞬、恐怖に心が支配されたが――、
（（（お説教で痛いことされたりするかも……♡♡♡））））
基本、ドMなので、お説教すらもご褒美になる三人。

そんな三人に零が近づいてくる。光は床に放置されている。

「何してんだ？」

「ひ、ひかひかのエッチな声が聞こえて、我慢できなくなって覗きに来ちゃいました……」（燐）

「ご、ごめんなさい……！　つい……！」（鈴音）

「すぐに戻るつもりだったんです……！　でも、見始めたら我慢できなくて……！」（リサ）

ちなみに先程、光が言っていたルールの事を零は知らない。

零には何も知らず、何も考えず、ただエッチを楽しんでほしいと言う、女子全員の思いだった。

「お前らも入れ。光と一緒に犯してやる。仲良しグループさん」

「「「っ♡♡♡」」」

零にそう言われ、マンコから愛液をドバドバ溢れ出させる三人。

そして、上目遣いのまま三人、声を揃えて――、

「「「犯し潰してください♡♡♡　ご主人様♡♡♡」」」

第１２６話　勉強中の光にレイプ♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

性奴隷が２９人もいるので、誰とのエッチを書いていいのか散々悩み、投稿が遅くなってしまいました……。すみません……！

悩みに悩み抜いた結果、光ちゃんが選出されました！

久しぶりに近いですかね？

どんな設定で書いてたかを振り返りながら書いたので、おかしな点はないと思うのですが、もし、「ここうじゃなかった？」と言うのがありましたら、遠慮なくお教えくださいますと、幸いです……！

それと、もしこの子とのエッチが見たい！　と言うリクエストがありましたら、お伝えくださると嬉しいです……！

僕だけだと、偏りが出てしまう気がするので……。

次話では仲良しグループの四人を犯しまくります！

よりエッチに仕上げますので、楽しみにしていてください！

ここで一つお知らせを。

この作品から派生している

『逆転世界・元女子校【特別版！】～読者の皆様の妄想を詰め込みました！～』

ですが、現在、大変長らくお待たせしてしまっている状態にあります。

大変申し訳ございません……！

ですが、次の投稿日がなんとか決定いたしました！

『２／１４、２／２８』

に、投稿させていただきます！

何話分投稿されるのかは、詳しくお知らせできませんが、お待たせしてしまった分、沢山喜んで沢山楽しんでいただける数投稿できるかなと思っております！

なので、今から楽しみにしていただけますと幸いです！

現在、【ＡＧ】様のアイデアを中心的に執筆しております。

ですが【ＢＫ】様のアイデアもしっかりと執筆して投稿させていただきますので、ご安心ください……！

もしかしたら、来月の投稿に【ＢＫ】様のアイデアは投稿できないかもしれないのですが、その次には必ず投稿させていただきますので、お待たせしてしまい申し訳ないのですが、楽しみに待っていていただけますと幸いです……！

『逆転世界・元女子校』『逆転世界・元女子校【特別版！】』両方合わせて、楽しんでいただけますと幸いです！

第127話　仲良し4人組を、犯しまくり♡♡♡♡♡♡♡

「ひかひかすごい……♡　　オマンコから精液だらだら……♡」（燐）

「顔も蕩けきってて、すっごくエッチ……♡」（リサ）

「私達も今から、ご主人様に……♡♡♡」（鈴音）

光の部屋に、全裸の女子三人が集まっている。

三人とも四つん這いになっており、ベッドでだらしなく涎を垂らしながら横たわる光を見ながらケツをフリフリと振っている。

これは犯してくれと言ってるって事でいいんだよな？

そう解釈した俺は、なんの前戯もなしに――、

「んひゃぁぁんんっっっっ♡♡♡♡♡♡」

「「っ！？」」

リサの膣（なか）にいきなり挿入した。

突然挿入されたリサは、驚いたのかベッドの縁へと寄りかかった。

だが、そうする事で犯しやすくなる。なので俺はリサの腰を力強く掴みながら――、

パンッ！　　パンッ！　　パンッ！　　パンッ！

「あっ♡　　あっ♡　　あっ♡　　あああっ♡♡♡」

激しく腰を振り、リサを犯していく。

「んっ♡　んっ♡　んんっ♡　あああ♡♡♡」
「すごい……♡　リサリサの尿道からチョロチョロおしっこが漏れ出てる……♡」（燐）
「お漏らしセックス……♡　素敵です……♡」（鈴音）

俺が腰を打ち付ける度に、リサは少しずつ失禁してるらしく、床には黄色い水溜りが徐々にでき始めていた。

「うっ♡　うっ♡　うううっ♡　んんぅぅぅぅぅ♡♡♡」

ぶじょおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡♡

リサは、今までは少しずつだった失禁が、限界を迎えたのか一気に大量のおしっこを放出させた。

「あ〜あ。光の部屋におしっこしちゃって、どうすんの？」
「ごめんなさい……ごめんなさい……」

涙目になりながら、謝罪するリサ。

「謝るのは俺じゃなくて、光にだろ？」
「んんぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

リサの手を取り、後ろに引っ張る。
そうすると、リサの上半身は強制的に起こされる事となる。

「あ……」

すると、いつの間にか復活していた光がベッドに座っていて、リ

サと目が合う。
「光ちゃん、ごめんなさい……おしっこ漏らしちゃった……」
「べ、別に怒ったりはしないけど……汚した罰はう、受けてね……？」
「罰……？」
「うん……今から私達三人で、リサちゃんの体、責めるから♡」
「え……？」

光はそう言うと、電マを持った燐、ローターを持った鈴音と共にリサに近づいてくる。
光はバイブを持っている。

「な、何を――んひゃぁぁぁんっっっ♡♡♡♡」

電マを持った燐は、その電マを強さＭＡＸでリサのクリに押し当てる。
ローターを二個持った鈴音は、そのローターを強さＭＡＸでリサの両方の乳首に押し当てる。
バイブを持った光は、そのバイブの強さをＭＡＸでリサのアナルにねじ込む。
俺とリサはバックで繋がっている状態なので、光は俺の横に来て、リサのアナルに挿（い）れている。

「おぉ～。すげぇ締まってきた。そんなに気持ちいいか？」
「おおおおおおおおおおおお……♡♡♡♡♡♡♡」

リサは汚い喘ぎを上げてしまうほど、感じているらしい。

「燐、鈴音、光、もっと責めてやれ」

「「「はい♡♡♡」」」

俺がそう言うと、燐と鈴音は押し当てるだけでなくグリグリと玩具を動かし、さらにクリと乳首を刺激する。

そして、光はバイブを出したり挿(い)れたり、尻穴(なか)をほじくったりして、アナルを刺激する。

「らめぇぇぇぇぇ……♡♡♡　らめぇぇぇぇぇ……♡♡♡
らめぇぇぇぇぇ……♡♡♡　おかしくなるぅぅぅぅぅぅぅ……♡♡♡」

三人に責められている間も、俺は激しく腰を打ち付けているので、リサは感じるとこ全てを隙間なく責められている。

そりゃ、こんな声も出して泣き出すよな。

「そら！　そろそろ出そうだ！　ラストスパート行くぞ！」
「「「はい！」」」

俺はさっきまでとは比べ物にならないくらい激しく腰を動かす。

三人も、より激しく責め立てる。

「おおおお

「んおおお

「ぁ゛♡　ぁ゛♡　ぁ゛♡　ぁ゛♡」

全身を舐められているリサは、気持ちよすぎてトンでしまっているのか、先ほどから同じ声しか上げれなくなっていた。

俺は、リサの体を舐めている鈴音の背後に回り――、

「んんうううううううううう♡♡♡♡♡」

チンコをぶち込んだ。

「燐も、しっかりと舐め取れたら犯してやるからな」

「ふぁい♡　おにいはんにおはひれもらへるほう、ひっはりなめほりまふ！」

俺に犯してもらいたいから友達のおしっこを舐め取る。

最高にエロいじゃないか。

「んじゃあ鈴音、容赦なく犯すから勝手にイクなよ？」

「ふぇ……？」

「ふん！」

「んひゃぁぁぁんっっっ♡♡♡♡　ご、ご主人様ぁぁぁぁ♡♡♡♡　あああああああああああああああ♡♡♡♡♡　激しいっ♡　激しいですぅぅぅ♡♡♡　こんなのイッちゃうっ♡　イッちゃうっ♡　すぐイッちゃいますぅぅぅ♡♡♡」

「俺がイクより先にイク事は許さない。しっかりと我慢しろ」

「んひぃぃぃぃぃ♡♡♡　無理ぃぃ♡♡♡　無理ぃぃ♡♡♡　無理ぃぃ♡♡♡　こんな激しくされたら我慢なんて無理ぃぃぃぃぃ♡♡♡♡　イグぅ♡　イグぅ♡　イグぅ♡　イッ

ちゃうううううううう♡♡♡♡♡」

鈴音は、俺がイクより先にイッてしまった。

膣(なか)の締まりがとんでもなくキツくなり、チンコが押しつぶされそうなくらいだ。

「俺より先にイクなと、言っただろうが！」

バチィィィィィィィィィィンッッッッ！！！！！！

「あああああああ

持ちよすぎて気を抜くと腰が抜けてすぐにイッてしまいそうになる。
元々俺は早漏なので、イク感覚が短い。
だから、これは俺にとっても酷で、あっという間に限界が――、
「出るっ！！！」
ドビュルルル

と、光が小さく呟いた。

「ちゅぱ♡　ひかひかはまだ駄目だよ？　次は私の番なんだから！」

「うん♡　分かってる♡」

リサの体についたおしっこを舐めながら、燐と光はそんな会話をしていた。

「ごっ……♡　ごっ……♡　ごっ……♡　ごっ……♡」

上半身を床に突っ伏し、ケツを高く上げた状態で全身をビクつかせる鈴音。

まだ繋がったままなので、正直このビクつきだけでも気持ちがいい。

「よいしょ」

ゆっくり膣（なか）からチンコを引き抜くと――、

ドリュルルルルル♡♡♡♡

ドロォ♡♡♡　ボタボタ♡♡♡

鈴音のマンコから、大量の精液が逆流し、床に垂れた。

もはや垂れたと言う表現が相応しくないほど、逆流精液はドバドバ溢れ出している。

「燐、ちゃんと舐めれたか？」

「はい！　ちゃんとリサリサの体、綺麗にしました！」

「よし。じゃあ挿（い）れてやるよ」

「ありがとうございます！　お願いします……♡　発情濡れ濡れド変態ドスケベマンコに、お兄ちゃんのおちんちん、ハメハメしてください……♡♡♡　お兄ちゃん専用のシコシココキ捨て穴、いっぱい使ってください……♡♡♡」

燐はそう言いながら、ケツをこっちに向け、マンコを自分で拡げてくる。

俺が喜びそうな言葉を並べてくるとは……。さすがは我が実妹！

「おらぁ！」

「んんぅぅぅ

けていく。

パンッッ！　パンッッ！！　パンッッ！！！　パンッッ！
！！！　パンッッ！！！！！！

「おっ♡　おお♡♡　おおおっ♡♡♡　おおおおっ♡♡♡♡♡
おごぉぉぉっ♡♡♡♡♡」

突く度にイッているらしく、燐の膣(なか)はとんでもなくキツくなっている。
イッてもイッても終わらない腰振りに、燐はすでに意識を飛ばしていた。

床に突っ伏し、ケツだけを高く上げている。
俺が腰を掴んでいるのでこの体勢を維持できているが、手を離したら力なく崩れる。

「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！
ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！
ビューーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！

「ごっ……♡　ぐっ……♡　ぐぐっ……♡♡♡」

口から泡を吹きながら、燐は中出しをされさらにイッた。

意識を失いながらもイク燐。エロすぎる。

ごぽぉ……♡　ゴポポ……♡　ドロォ……♡♡♡

チンコを引き抜くと、燐は精液を逆流させながらケツを下げていった。

まぁ、このケツ下げも自分の意思ではないんだけどな。それがまたエロい。

「先輩……」

「ん？」

いつの間にか俺の背後に回っていた光。

精液と愛液まみれのチンコを、背後から優しく握り扱いてくる。

「どうした？」

「まだ、出し足りなくないですか……？」

「あぁ。まだまだ出し足りないな」

「でしたら、遠慮なく私を使ってください……♡　先輩専用のヌキ穴ですから、思う存分、先輩が満足するまで私を犯してください……♡」

そう言いながら、手コキの速度を上げてくる光。

さらに、そこに――、

「リサ？」

「れる……♡　れろ……♡　ぢゅるるるるる♡♡♡」

復活したリサが、這いつくばった状態のまま、頭だけを上げて亀頭に吸い付いていた。

尿道を丁寧に舌先で舐めた後、溢れ出てくる残り汁と我慢汁を、一気に吸い上げてくる。

「これ、やば……！　出そう……！」

「出してください……♡♡♡　このままいっぱい、濃いの出して……♡」（光）

「くっ……！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！　ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！！

「んぶっ！　んんっ……♡　んん……♡　ごくごくこく……♡♡♡」

「リサちゃん……！　全部飲まないでね……！　私も先輩のザーメン飲みたいから……！」

「ひやら……♡　ごくごくこく……♡♡♡」

「リサちゃん……！」

リサは、光のお願いを断り、口の中に注がれる精液をどんどん飲み込んでいく。

光は、口では文句を言いながらも、一滴残らず射精させようとずっと手コキをし続けている。

「ごきゅごきゅ……♡♡♡」

「先輩♡　全部出ました？」

「あぁ。スッキリだ」

「んふふ♡　よかったです♡」

「ぢゅる♡　れる……♡　ぢゅるるるるる♡♡♡」

射精は終わったが、リサはずっと亀頭を舐めたり吸ったりしている。

「あ～！　リサちゃん！　先輩はもう全部出たって言ってるよ！　もうお口から離しなさい！」
「ん～ん！　まらひゃふるの！」
「駄目！　次は私が舐めるの！」
「ん～ん！」

チンコを咥えたままのリサと言い争う光。
そんな二人の元に――、

「次は私です～！」
「ふふね！」「鈴音ちゃん！」

鈴音がやって来た。

「次は私が、ご主人様のおちんちんを舐め舐めする番だよ～！」（鈴音）
「何言ってるの！　鈴音ちゃんはさっきいっぱい犯してもらったでしょ！　先輩のおちんちんをジュボジュボするのは私！」（光）
「わらひなの！　わはひはほのままおふひれふるの！
（私なの！　私がこのままお口でするの！）」（リサ）

俺のチンコを巡って三人が言い争っている。
このくらいの争いなら、見ていて嬉しいし微笑ましいので平気だった。

「じゃあ、仲良く三人で舐めろ。燐が目を覚ますまでに沢山俺をイカせる事ができた人に、口にチンコを含む権利を与える」

「ぷはぁ♡」（リサ）

リサが一旦チンコを口から離し――、

「「「はい！」」」

三人、声をそろえて返事をした。

この後、亀頭やカリ首、裏筋などを舌だけを使って責められ続けた。三人同時に。

咥えたりは一切しないが、舌だけでも俺は何回も射精してしまった。

光：５回。リサ：３回。鈴音：４回。

結果、燐が目を覚ますまでに俺を多くイカせる事ができたのは光だった。

なので、光が最初にチンコを咥えてきた。

そしてその間、他の二人は竿や金玉を。なんとか復活した燐は、俺のアナルを舐めていた。

そして、この後、代わる代わるフェラをされ、久しぶりのフェラ祭りとなった。

第127話　仲良し4人組を、犯しまくり♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

皆様！　ご心配をおかけしてしまい、大変申し訳ございませんでした……！

風邪を引き、副鼻腔の炎症と戦っていた先週。

投稿をお休みしてしまい、本当にすみませんでした……！

僕の作品を楽しみにしてくださっていた読者の皆様には、謝っても謝りきれません……！

ですが！　小鳥遊綾瀬、完全復活いたしました！！！

風邪も治り、副鼻腔の炎症も治り、今では元通り執筆ができています！

いえ！　先週はほとんど執筆ができなかった事もあり、創作意欲が湧きに湧いているので今の僕は、元通り以上かもしれません（笑）

大して何も変わっていないかもしれませんが、先週投稿ができなかった分、今回のエピソードはよりエッチに書かせていただきました！

「エロい！」「興奮する！」と思っていただけて、沢山楽しんでいただけておりましたら幸いです！

これからは投稿をお休みする事がないよう、体調管理などをしっかりしていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い致します！

第１２８話　大浴場で尻穴奴隷と混浴　①　♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

「ん……んん……」

俺は、自室のベッドで目を覚ました。

「ふわぁ～……ん？」

何かがいつもと違う。

いつも当然のように行われていた、何かが欠けている。

俺は、窓から空を見上げ考える。

そして、気がついた。

「あ。朝フェラがないんだ」

そう。俺の朝は、毎回誰かしらがやって来て朝勃ちしたチンコをフェラされる所から始まる。

それがもはや当然。日常になっていた。

しかし、今日はそれがない。

時間を確認すると、午前１１時。

いつもはフェラされる事で、早く起きる事ができていたが、それがなかったので遅めに起きてしまった。

にしても、誰一人として俺の部屋に来ないと言うのは――、

「珍しいな」

俺は、ベッドから降りて、部屋を出て洗面所へと向かった。

第１２８話　大浴場で尻穴奴隷と混浴　①　♡♡♡♡♡♡♡

「ふぅ～」

洗面所で顔を洗った俺。

歯も磨き、完全にスッキリした。

「それにしても、やけに静かだな」

部屋から洗面所までの距離は近いが、何人かの部屋の前を通る。

しかし、その部屋の中からは物音もしなければ人の気配すらない。

ちなみに、洗面所は一階と二階の両方にある。

「とりあえず、飯でも食いますか」

俺は、ボクサーパンツ一枚だけの格好で一階に降り、キッチンへと向かった。

すると、そこには朝食が置かれており、メッセージも添えられていた。

『零ちゃん、おはよう♡

朝ご飯、レンジでチンしなくても大丈夫なものだから、そのままゆっくり食べてね♡

巴』

「ありがとう、巴」

俺は、巴が用意してくれた朝食をありがたくいただいた。

♡　♡　♡

朝食を終えた俺は、トイレへ向かった。
二階のトイレに向かい、中に入ると――、

「あ。零様♡　おはようございます♡」
「おぉ……おはよう……」

尻穴奴隷が洋式の便座に座り、おしっこをしていた。
俺はそれを横目に見ながら、左側に設置されている小便器へと向かう。
三つ設置されている小便器の、尻穴奴隷に一番近い方の小便器の前に立つ。
そして、ボクサーパンツを前側だけ下に下ろし、小便器に向かって放尿を開始する。

本当はここにみんなを座らせて、ぶっかけたり飲ませたりしたいんだけどなぁ。

「零様はそうしておしっこをされるのですね……♡　興味深いです……♡」
「立ちション見るの初めてか？」
「はい……♡　男性が立ってするのは知っていたんですけど、どうやってするのかまでは分からなかったので、今、立ちションが見れて幸せです……♡」

立ちションを見れて幸せなんて、本当とんでもないな。

「おしっこ終わりました？」
「あぁ」
「でしたら、お口ウォシュレットはいかがですか……♡」
「じゃあ、してもらおうかな」
「はい♡♡♡」

尻穴奴隷は、四つん這いで俺の隣までやって来る。
そして、俺が尻穴奴隷の方を向くと、すぐに尻穴奴隷は俺のチンコを咥えてきた。

「あむ……♡　じゅる……♡　じゅるる……♡♡♡」

放尿後のチンコなので、おしっこの味しかしないだろう。
それでも、尻穴奴隷は幸せそうに、美味しそうに舐めていく。

「れる……♡　じゅる……♡　しゅぶ……♡　ぢゅる……♡」

丁寧に丹念に舐められている為、俺はフル勃起してしまった。
口の中で勃起したので、尻穴奴隷は嬉しそうにしながら――、

「ほのまま、ほほうひはへへいはらひまふね♡♡♡」

そう言って、尻穴奴隷は四つん這いからM字開脚の体勢になり、フェラを開始した。
俺の腰を掴み、激しく頭を前後に振る尻穴奴隷。

「えぐっ……♡　じゅぶっ……♡　ぎゅぶっ……♡　じゅぶっ……♡　ぐぶっ……♡　じゅぶ♡　じゅぶ♡　じゅぶ♡　じゅぶ♡　ぎゅぶっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡」

口からは、大量の唾液が溢れ、床に垂れている。
しかし、尻穴奴隷は全く気にせず、むしろ唾液を増やそうとするかのように頭の振りを激しくする。

「じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　ぎゅぼっ♡　ぎゅぶっ♡」
「くっ……も、もう……！」

俺の限界が近いのを察したのか、尻穴奴隷は上目遣いでコクコクと頷く。
それを合図に俺は、射精をした。

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！
ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！！
ビューーーーーーーーーーーー！！！！！！

「んぐっ！　んぶっ……♡　んっ……♡　ごくごくごく……♡♡♡」

尻穴奴隷は、口の中に大量に出される精液を、一滴もこぼしたくないと言わんばかりにチンコに吸い付き嚥下していく。

「はぁはぁ……」
「ごくごくごく……♡　ぷはぁ♡　ご馳走様でした♡　やはり、零様のザーメンは最高のお味ですね♡」
「そうか？」
「はい♡　ずっと飲んでいたいです♡」
「そりゃありがたい。ところで、家の中がやけに静かだけど、みんなどこ行ったんだ？」

俺は、洋式便座に座り尻穴奴隷に尋ねる。
尻穴奴隷は、床で正座をしている。

「歩美さんとかなえさんは、あすかさんと乃々花さんのお散歩に。巴さんと美結さん、早希さんはお仕事に。その他の皆さんは学校へ行っています。卒業式の準備やら何やらが忙しいみたいです」
「そっか。もう来月卒業式だもんな～。すっかり忘れてたわ。ってか、俺は手伝わなくてよかったのか？」
「はい♡　零様は何も気にせず、お家でゆっくり、私達性奴隷で楽しんでいただけてれば大丈夫です♡　雑務や仕事などは全て女に任せればいいんです♡」
「そ、そうか……。それで？　お前は仕事は？」
「全員いなくなってしまうと、零様にご奉仕する人が不在になってしまうので、話し合いをして残る人を決めたんです。今日は私が担当です♡　わ、私じゃ嫌、だったでしょうか……？」
「そんな事ない。お前も俺の立派な性奴隷だからな。まぁ、性犯罪者だけど」
「っっっ♡♡♡」

『性犯罪者』と言う言葉に、尻穴奴隷は反応し、全身をビクつかせた。

「まさか、イッたのか？」
「す、すみません……ここ最近、玲奈様に再び調教されておりまして、その……せ、性犯罪者と言うぅぅぅ♡♡♡　はぁはぁ……言葉を聞いたり言ったりすると、イッてしまうようになってしまって……」
「あいつもすげぇ調教してんな。まぁ、その方がイジメ甲斐があるからいいや。なぁ？　『性犯罪者』」
「っっく♡♡♡」

面白いくらい簡単にイクな。
真耶子とどっちがイキやすいか比べてみても面白いかもな。

「この後どうするかな～。みんないないんじゃ暇だな」
「あ、でしたら、大浴場に行かれませんか？」
「大浴場？　外に出るのか？」
「いえ。この家に大浴場がございます」
「そんなのあったっけ？」
「澪さん、恋さんが業者さんに頼んで、昨日完成したらしいです。そして、その大浴場の一番風呂は、零様にと」
「そっか。じゃあ、入ろうかな。お前も行くぞ」
「よろしいのですか……？」
「あぁ」
「ありがとうございます……！　零様と混浴なんて、女の夢……！　その光栄なる権利を与えていただけるなんて……♡　アナルが疼いてしまいます……♡」
「そこは普通マンコだろ。まぁいいや。案内してくれ」
「はい♡」

そうして俺達は、大浴場へと向かった。

♡　♡　♡

「おぉ～。脱衣所も広いのな。ってか、三階があるのに使われないなと思ってたら、三階丸ごと大浴場にするとは……あいつらの考える事が恐ろしい……」
「まぁ、性奴隷も多いですし、このくらい広いほうがヤりやすくはありますよね？」
「そうだな。脱衣所も、１００人くらいは入れそうだし。いや、も

っとか？」
「定員は聞いておりませんが……数百人くらいであれば余裕だと言っていましたね」
「マジか……」
「それより、零様♡」
「ん？」
「そ、その……ぱ、パンツの上からご奉仕させていただいてもよろしいでしょうか……？」
「パンツの上から？　別にいいけど、なんでまた」
「形がくっきり浮き出たオチンポ様を、舐めたりシコシコしたりするのが憧れでして……♡」
「他のみんなも、何気にパンツの上からしたがるんだよな。まぁ、俺も気持ちいいからいいんだけど。じゃあほら、ご奉仕しろ」
「はい♡　ありがとうございます……♡」

尻穴奴隷は、俺の前に跪き、パンツ越しでも丸分かりなギンギン勃起チンコに頬をくっつけた。
俺の腰に手を回して、まるで下半身にハグするかのように。
「すぅ～……♡　はぁ～……♡　すぅ～……♡　はぁ～……♡」

尻穴奴隷は、鼻をピッタリと股間にくっつけ、深呼吸を繰り返している。
ただ臭いを嗅がれているだけなのに、なぜか心地よくてチンコの先からはとめどなく我慢汁があふれ出す。
「先端が滲んで……♡　我慢汁が溢れてるんですね……♡　素敵です……♡　我慢をさせてしまいすみません……すぐにご奉仕しますね……♡」

尻穴奴隷はそう言って、パンツの上からチンコにしゃぶりついてきた。

「ぢゅる……♡　ぢゅる……♡　れる……♡　れるれるれる……♡　はむ♡　ぢゅるるるるるる♡♡♡」

竿の部分にしゃぶりつき、舌で舐めた後、今度は亀頭部分にしゃぶりつき一気に吸い上げてくる。

「ぢゅるるるるるる♡♡♡　ぱぁ～……♡　はぁはぁ……♡　零様のオチンポ、パンツ越しでも最高です……♡　我慢汁がパンツを通過して口の中に入ってきました♡　とって美味しいです♡　もっとしますね……♡」

尻穴奴隷は、パンツ越しのフェラを開始する。

「じゅぶ……♡　ぢゅる……♡　れる……♡　ぢゅる……♡」

なんだ、これ……！

直接されるのもめちゃくちゃ気持ちいいけど、パンツ越しにねっとり舐められるのもめちゃくちゃ気持ちいい……！

「も、もう、出る！」

ドビュルルル

尻穴奴隷は、竿に唇を押し当てたままパンツの中に射精をするチンコを見つめてくる。
パンツの中は、大量の精液でぐしゃぐしゃになってしまった。

「おいおい……どうすんだよこれ……」
「不快な思いをさせてしまい、大変申し訳ございません……！
ですが、しっかりと責任は取らせていただきます……！」
「責任？」

何をしてくるのかと思ったら――、

ねとぉ～♡　むわぁ～♡

「しゅごい……♡　パンツからオチンポ様解放しただけで、ザーメン臭が広がって……♡　パンツも零様の股関節もザーメンでいっぱい……♡　ぢゅるるるるるるるるる♡♡♡♡♡♡」

尻穴奴隷は、パンツを引っ張りチンコを露出させる。
そして、中にこもってた臭いを嗅いだ後、パンツを引っ張ったまま股関節に顔を密着させ、べっとりと付着した精液を吸い取り始めた。

俺は陰毛が濃くはないが、ツルツルでもない。
それなりに生えている。なので、股関節に吸い付くと言う事は陰毛も口に含むということ。

しかし、尻穴奴隷はそんな事全く気にせず、陰毛に付着した精液も、股関節に付着した精液も、垂れて金玉付近に付着した精液も、全てを吸い取り、舐め取っていった。

「ごきゅ……♡　ぷはぁ～♡　ご馳走様でした……♡　不快感はなくなりましたか……？」
「あ、あぁ……。それよりお前、陰毛とか大丈夫？　結構口に入ってたけど」
「はい♡　全く問題ありません♡　零様のでしたらむしろ口に含めて幸せでした♡　ザーメンと陰毛を同時に味わえるなんて、至福の時間でした♡」
「あ～そう。ならまぁ、いいわ」
「はい♡　それで、あの……」
「ん？」
「一つだけ、お願いがあるのですが……」
「何？」
「こ、このザーメンまみれのパンツ、い、いただけないでしょうか……！」

とんでもねぇ事言ってきたな、おい。

「別にいいけど……もらってどうすんの？」
「そ、その……零様と会えない時やご奉仕できない時に臭いを嗅いだり、ハムハムしたり、甜め舐めしたり……す、すみません……！」
「まぁ、いいよ。やるよ。でも、みんなには内緒な？　バレたら絶対に欲しがる」
「はい♡　分かりました！　ありがとうございます！」
「んじゃあ、風呂入ろうぜ～」
「はい♡」

尻穴奴隷は、精液まみれのパンツを丁寧にたたみ、脱衣籠に大事そうに入れた。
そんなに大事にされると、結構嬉しいかも。

♡　♡　♡

「おぉ～！　すげぇなぁ！　めちゃくちゃ広いじゃんか！！！」

脱衣所から浴室に入ると、俺は思わずテンションが爆上がりしてしまい、そう叫んでしまった。

テンションが爆上がりし、叫んでしまうほど浴室はだだっ広かった。

「これ、脱衣所の倍……いや、数倍以上あるよな？」

そんじょそこらの旅館や温泉施設だって、ここまでの広さはないだろう。

一つの浴槽しかないのだが、その広さが桁違い。

数百人以上同時に入っても全く問題がなく、それどころか余裕すらあるだろう。

「零様、まずはお体を洗いましょう♡」

「ん？　そうだな」

体を洗う場所にいる尻穴奴隷に声をかけられ、俺はそっちに向かう。

体を洗うところだけで一階のリビングと同じくらいの広さって、本当どうなってんだよ。

「ここでいいの？」

「はい♡　そちらに腰をおかけください♡」
俺はバスチェアに座る。
座った状態でも、お尻の穴を見たり弄ったりできるような、いわゆるスケベ椅子と言われるものだ。
「それでは、体、洗わせていただきますね♡」
尻穴奴隷は、自分の体を泡まみれにし、前から抱きついてきた。
「んっ♡　んっ♡　んっ♡」
おっぱいを俺の胸に押し当て、上下に動く尻穴奴隷。
乳首が擦れて気持ちいいのか、尻穴奴隷はさっきから喘ぎを上げている。
何回か、その往復を繰り返した後、尻穴奴隷は膝立ちから女の子座りになり、おっぱいをチンコに押し当ててきた。
「それでは、パイズリをさせていただきますね♡」
爆乳の深い谷間に埋まっていく俺のチンコ。
「そういや、お前は何カップあんだ？」
「Nカップあります♡　しずく型なので、少し下に垂れているのですが……」
「何言ってんだ。しずく型のおっぱいはそれがいいんじゃねぇか。真耶子もお前と同じしずく型だぜ？　あのおっぱい、俺は大好きなんだ」
「零様……♡　では、私のおっぱいも好きになってくださる可能性が……？」

「そうだな。このパイズリ奉仕次第、かな？」
「は、はい！　全力で頑張らせていただきます！」

そう言って、尻穴奴隷は両手でおっぱいを寄せ、谷間に埋めたチンコを圧迫してくる。

乳圧が凄まじく、柔らかい中に包まれているはずなのに窮屈で、それでいて心地よくて。
尻穴奴隷がおっぱいを上下に動かせば、カリや裏筋が柔らかい肌の感触に擦れ、言葉にできない気持ちよさが襲ってくる。

尻穴奴隷のおっぱいにはボディーソープがかかっているので、ヌルヌルと動き、おっぱいがあっちこっち動き、チンコの居場所が定まらない。
でも、それすら気持ちよくて、尻穴奴隷がおっぱいを固定しようとすると圧迫感とヌルヌルの中に入っている快感で、腰が砕けそうになる。

尻穴奴隷は、おっぱいを押さえつけながら指の腹で亀頭を刺激してくる。

「んっ♡　んっ♡　零様、どうでしょうか……？
ちゃ、ちゃんとできてますでしょうか……？」
「あぁ、できてるぞ……と言うより、もうイキそう……！」
「出してください♡　出してください♡　いっぱい♡　いっぱい♡　零様の特濃ザーメン、ビュビューっていっぱい出してください♡　おっぱいに中出ししてください♡」

尻穴奴隷は、ラストスパートをかけるかのように激しくおっぱいを上下に揺らしていく。

指の腹が亀頭を擦り、とんでもない気持ちよさに、俺は限界を迎えた。

「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！

出して俺の体を流してくれた。
チンコは優しく、丁寧に流してくれた。
「零様♡」
「ん？　おぉ～エロいな」
尻穴奴隷は、俺の体を流した後、自分のおっぱいを左右に開いて、谷間に付着したドロッドロの精液を見せてくれた。
「零様の濃厚ザーメンで、おっぱいまで孕んでしまいそうです……♡」
「おっぱいが孕むってなんだよ」
「母乳が出る……とかですかね？」
「それはいいな。そら、そろそろ湯船浸かろうぜ。俺が流してやろうか？」
「う、嬉しいですが、そんな事を零様にさせたとバレたら殺されてしまうので、だ、大丈夫です……お心遣い、ありがとうございます♡」
「そっか。じゃあ、先に入ってるぞ～」
俺は、後ろで体を流す音を聞きながら、広すぎる湯船へと入って行った。

第１２８話　大浴場で尻穴奴隷と混浴　①　♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

今回は、書きたい事が多すぎたので２話分にさせていただきます！
来週のエピソードへ続きますので、続きが気になる！　尻穴奴隷と次はどんな事するのかな？　と、楽しみにしていてくださると幸いです！

零が引っ越した豪邸ですが、とにかくだだっ広いと思ってください……！
これ、設定どうなってんだよ……と思われるところが多々あるかと思います……。
何畳とか、そういうのを書くのが苦手なので省いてしまっているので、もうとにかく広い家なんだと思っていただけると嬉しいです……！
この豪邸は宇宙だと思っていただければ（笑）

できるだけ過去に書いた設定と、ズレがあったりおかしなところがあったりなど、しないように注意はしておりますが、もし、あった場合はあまり気にせずにいていただけると嬉しいです……！
（お名前とかのミスの場合は、叱責してください……！）

お名前に関して、一つ謝罪しなければならない事がございます……！

尻穴奴隷こと、椎名玲奈ですが、『玲奈（れいな）』ではなく、正しくは『玲奈（れな）』でした。
お名前を送ってくださった河内長門守様、大変申し訳ございません……！

そして、一之瀬玲奈の方は『玲奈(れいな)』です。
一之瀬玲奈の名前を送ってくださった春人様、大変申し訳ございません……！

作品内で、一之瀬玲奈が椎名玲奈に、犯罪者と同じ名前とか最悪と言うシーンがございます。
このシーンを書く時にもっと確認するべきでした……本当に申し訳ございません……！
後日、改稿を行い、修正をしたいと思っておりますので、修正された際は、再読していただけますと幸いです……！

せっかく送ってくださった貴重なお名前を間違え、不快な思いをさせてしまった事、それを今まで気づかずに放置し、話を進めてしまっていた事、本当に申し訳ございませんでした……！
今後、このような事がないように尽力してまいりますので、これからも変わらずこの作品を愛してお読みいただけますと幸いです……！

それでは、また次話をお楽しみに♪

第１２９話　大浴場で尻穴奴隷と混浴　②　♡♡♡♡♡♡♡

「はぁ～……」

俺は、湯船に入り、一番奥の壁際に背中を預ける。

「気持ちいい～……」

俺は元々お風呂が好きだ。

なので、自宅でこんなに広い風呂に入れるのは幸せ過ぎる。

「失礼します」

俺がお湯の温かさに浸っていると、尻穴奴隷が隣にやって来た。

「なぁ」

「はい」

「そろそろ名前教えてくんね？」

「すみません……私の勝手でお教えする事は……玲奈様に叱られますので……」

「まぁ、そうだよなぁ～。でもさ、いちいち尻穴奴隷とか呼ぶのめんどいんだよね」

「すみません……」

「ん～……あ。しーって呼んでいいか？」

「っ！　そ、そのような素敵な呼び方をしてくださんですか！」

「あぁ。お前が嫌じゃなければ」

「嫌だなんてそんな！　すごく嬉しいです……！　ありがとうございます……！　これからしーと、お呼びください……♡」

「あぁ」

こうして、俺は尻穴奴隷の事を「しー」と呼ぶ事になった。
ちなみに、尻だからしー。単純かもしれないけど単純だからこそいいと俺は思う。

「零様♡」
「ん？」
「ご奉仕させていただいてもよろしいでしょうか……？」
「あぁ。いいぞ。じゃあ一旦上がるか」
「いえ」

腰を浮かせると、しーがその腰に触れ、ゆっくりと下げてくる。

「ここでご奉仕させてください♡」
「それは構わないけど……射精しそうになったらどうするんだ？」
「このまま湯船の中でしていただいて大丈夫です♡」
「いいのか？　後で掃除とか色々大変そうになると思うけど……」
「大丈夫です♡　零様のザーメンなら何があっても苦になったりなどいたしませんので♡」
「そうか。じゃあ頼むわ」
「はい♡　誠心誠意、ご奉仕させていただきます♡」

そう言って、しーは勃起したチンコを握ってきた。

♥♥♥

「はぁはぁ……♡」

私は今、零様のチンポ様をシコシコしている♡

湯船の中でシコシコしているので、お湯がバシャバシャと跳ねている。

しかし、その音も今の私には全てエロく感じてしまう♡

「どうでしょうか……♡　零様……♡　気持ちいいですか……♡」

「あぁ。めちゃくちゃ気持ちいいよ」

「よかった……♡」

零様が、私のシコシコで気持ちよくなってくれてる……♡

それが嬉しすぎて、私はさっきからずっと子宮が疼いている。

触れられてないし弄られてないのに、私はシコシコしているだけで感じてしまい、密かにイキそうになっている。

でも、絶対にイッたりしない。だって、今は零様にご奉仕しているんだから。

あ♡　チンポ様の先っぽからヌルヌルしたのが出てきた♡

お湯の中だから、すぐに分からなくなるけど、我慢汁が出てきてる♡

チンポ様がどんどん膨らんで、硬くなって血管が浮き出て脈打ちが速くなってる……♡

そろそろイキそう……なのかな？

「零様♡　イキそうでしたら我慢なさらずに、ザーメン吐き出してください♡」

「あぁ。もう出る……！」

ドビュルルル

「はあ～……♡♡♡　　素敵……♡♡♡」

手に伝わるチンポ様の脈打ち♡
チンポ様の先から放たれるお湯よりも熱いザーメン♡
添えた左手に伝わる零様の腰の震え♡
気持ちよさそうに天を仰ぎ息を乱す零様のお顔♡
お湯に浮かんでいく沢山の白濁した固形♡

その全てが愛おしい♡♡♡

射精しきるまでシコシコした後、私はもう我慢ができなくなってしまった。

「零様！」
「うおっ！？」

私は零様に覆いかぶさり、チンポ様をアナルにあてがう。

「すみません……もう、我慢ができないんです……この素敵なチンポ様で、私のド変態アナルをイジメてください……♡」

私は腰を落とし、チンポ様を穴内（なか）に挿（い）れていく。

「さっさと挿（い）れてくんねぇかな？　　俺ももう我慢できないんだわ。性犯罪者さん」
「んんっぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡♡♡」

パチュンッッッ♡♡♡♡♡

腰をゆっくり落としていると、零様が大声で性犯罪者と言ってきたので、私はその言葉に反応してしまい、イッてしまった。
それにより、力が抜け、腰が一気に落ちてしまう。
そして、零様の極太チンポ様が穴内(なか)の一番奥に突き刺さってきた。

「かっ……♡♡♡　　ううっ……♡♡♡」

一気に奥まで挿入(はい)ってきたので、私はあまりの気持ちよさに体を小刻みに震わせて動けなくなってしまった。
そんな私に――、

「何休んでんだよ！」
「んんぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

零様が、下から思い切り腰を突き上げてくる。

それにより、チンポ様が奥のさらに奥へと挿入(はい)り、私はさらに深くイッてしまう。

「れ、零様……ちょ、ちょっとだけ待って――」
「待つわけねぇだろ！」
「んんぅぅぅぅぅ♡♡♡♡　　あああああ♡♡♡♡」

零様は、私の腰を強く掴み、腰を激しく突き上げてくる。
その度に穴内(なか)の奥の奥を刺激され、私はずっとイキっぱなしになっている。

「れ、零様ぁぁぁぁぁぁ♡♡♡♡」
「そろそろ出すぞ！」
「はいぃぃぃ♡♡♡　　私のケツマンコにいっぱい中出ししてくだ

さいいい

「んあああああああああああああ♡♡♡♡♡」

再び私の腰を掴み、激しく腰を突き上げ始める。

「このまま抜かずに、中出ししまくってやる！」

「あ、ありがとうございますぅぅぅぅぅ♡♡♡♡　私のケツマンコ、いっぱい使ってくださいぃぃぃ♡♡♡♡　壊れるまでいっぱい使って中出ししてくださいぃぃぃ♡♡♡　ケツマンで妊娠するくらい、いっぱい注いでぇぇぇ♡♡♡♡」

この後、零様には3発中出ししていただけた♡

最初のを含めて4発ものザーメンがアナルに注がれた♡　幸せ過ぎる♡

♡　♡　♡

「ふぅ～」

「だ、大丈夫、ですか……？　すみません……零様にだけ動かせてしまって……」

「いや。俺がしたくてしたことだ。気にするな」

「零様……♡」

しーとのアナルセックスの後、俺達はゆっくり湯船に浸かっていた。

「はぁ～……喉が乾いてきたな」

「では、お茶をお持ちしますね」

「あ、いや。母乳が飲みたいなと思ってな」

「母乳、ですか……すみません、母乳が出ない体質でして……」

「いや、それは分かってるよ」

「自分の体質が恨めしいです……母乳が出る体質であれば、もっと零様にご奉仕できたのに……！」
「そこを悔やんでもしょうがないだろ。お前はお前なりの体質があるんだ。そこを責めたり、悔やんだりするな。俺は今のお前が好きだ」
「れ、零様……♡　そ、そんなお優しい言葉をかけてくださるなんて……♡　ありがとうございます……！　幸せ過ぎてどうにかなってしまいそうです……♡」

しーは、腰をクネクネと動かし始めた。顔を真っ赤にしながら。

「そ、それはさておき。母乳と言いますと、澪さんですよね？連絡して呼び出しますか？」
「あ～……いや、澪は卒業生だから主役だろ？　今はそっちに集中させたい」
「で、では……」
「サブ性奴隷の母乳体質を呼ぶか。ちょうど酸味が欲しい気分だし」
「サブ性奴隷……？」
「あぁ、まだみんなには言ってないんだけど、しー達のような一緒に住んでたりするのがメインの性奴隷。んで、ちょっとちょっかいかけてて、目をつけてたり手を出してキープしてるのがサブ性奴隷」
「な、なるほど……流石は零様ですね♡　サブ性奴隷までご用意があるなんて♡」
「まぁな。少しずつだけど、着実に増えてきてはいる」
「それでは、その中に母乳が出る子が？」
「あぁ。一人いるんだよ。海外からの留学生でな」
「お呼びになられますか？」
「ん～……」

あいつもきっと学校だろうしな……呼べば速攻で来るだろうけど

……。

「いや、いいや。あいつの母乳はまた今度にするわ。母乳は澪が帰ってきてからにする」

「分かりました。では、そろそろ上がりましょう。喉の渇きは脱水症とのぼせの前兆ですから」

「そうだな」

俺達は風呂から上がり、水分補給と、少し早い夕食を取った。

この後、帰ってきたみんなが大浴場に入り、浮いている精液に狂喜乱舞したのは、言わずもがな。

第１２９話　大浴場で尻穴奴隷と混浴　②　♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

次話は【卒業式ＳＰ！】

卒業生達に向けて、零がエッチな贈り物をします！

おしっこに精液、フェラやイラマ、スパンキングなど！

少し長めの内容になるかとは思いますが、楽しんでいただけますと幸いです！

そして！　その次の話からは、【飲尿ＳＰ！】を開始いたします！

豪邸に住む女子達が、様々な方法で零のおしっこを飲みます！

飲むと言っても、口だけとは限りません。

膣やアナルなどもありますからね♡

ヒロイン一人一人、しっかりと書いていきたいと思っております！

トップバッターは……初めて零のおしっこを飲んだあの子！

誰の事か分かりましたかね？

その予想が合っているのかどうかも含めて、【飲尿ＳＰ！】を、お楽しみに！

第１３０話　【卒業式ＳＰ！】零から卒業生へエッチな贈り物♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

「おぉ～……流石卒業式ってだけあって、人多いな～」

俺は、玲奈と共に学校にやって来た。

今日は卒業式。

華、澪、恋、愛莉の四人が卒業する日だ。

「零様、痴漢されないようお気をつけください」

「あぁ」

玲奈が、俺の腕を引っ張りながら下駄箱に向かおうとする。

そんな時、保護者集団から数人がこっちに向かって来た。

「もしかして、白下　零様、でしょうか？」

「は、はい……そうですけど……」

玲奈、人を睨むのはやめなさい。

「あぁ！　やっぱり！　いつも娘がお世話になっております！

愛莉の母です」

「愛莉のお母さん！？」

マジか！　めちゃくちゃ綺麗だからお姉さんかと思ったわ！

「いつも娘から、零様に沢山可愛がっていただいていると連絡をもらっていて。愛莉はしっかりと性奴隷としてお役に立てていますでしょうか……？」
「はい。彼女は最高の性奴隷ですよ。マンコの締まりだったりフェラだったり、彼女は俺が望む性奴隷に成長してくれてます」
「よかった……！　よかった……！　零様、本当にありがとうございます……！」

涙ながらにお辞儀されちゃったよ……。

「私達もご挨拶させていただいてもよろしいでしょうか？」

愛莉の母親の後ろから、二人の女性が前に出てきた。

「はい」

玲奈が許可を出す。なぜにお前が？

「初めまして。澪の母でございます」
「恋の母です」

おぉう。それぞれの母親か。何気に親に会うのって緊張するよな……。

「は、初めまして。白下　零と申します。娘さん達を預けてくださり、ありがとうございます」
「「「っ！？」」」

俺が、礼儀正しくそう告げながらお辞儀をすると、三人は慌てた表情を浮かべた。

「れ、零様！？　頭をお上げください……！？」（愛莉ママ）
「私達なんかに頭を下げる必要はないんですよ！？」（恋ママ）
「そ、そうですよ……！？　男性様は存在してくださるだけでありがたく貴重なんですから、私達女に礼儀正しくなんてする必要ないですし、頭を下げる必要もないんです……！？」（澪ママ）
「それに、こんなところ、娘に見られたら何を言われるか……」（愛莉ママ）

俺は言われた通り、頭を上げる。すると、三人の後ろにとある三人が並んでいた。

「あ」
「「「ん？」」」

俺が声を出した瞬間、後ろに並んでいる三人が心底冷え切った低い声を発した。

「お母さん、何をしているんです？」（愛莉）
「お母様？　今、零様が頭を下げていたように見えたのですが、私の気のせいでしょうか？」（澪）
「母さん、今、何をなさってたんですか？」（恋）
「「「っ！？」」」

後ろに並んでいたのは、三人の娘である愛莉、澪、恋の三人だった。
娘の声を聞いた瞬間、三人は肩をビクつかせ、冷や汗を浮かべた。
そんなに娘にビビる？

「あ、愛莉……な、何ってあなたのご主人様である零様にご挨拶をしていたのよ……」（愛莉ママ）
「「そ、そうよ……」」（澪ママ＆恋ママ）
「だとしたら、なぜ零様が頭を下げていたのですか？　私達のご主人様である、零様がなぜ、お母様達のような古くなった女に頭を下げているのですか？」（澪）

むむ。それは聞き捨てならんな。

「澪」
「零様……？」（澪）
「それは自分を産んでくれた親に対して言い過ぎだぞ。一回孕んで子を産んだからって、古くなったり価値がなくなったりするわけじゃない。逆にな、女は子を産んだ後こそエロくなるんだ。巴や亜沙実がそうだろ？」
「は、はい……」（澪）
「それに、頭を下げたのは俺がしたくてしたことだ。大事な娘を預かってるんだ。人として当たり前の事を。主として筋を通しただけだ。だから、お前らを産んで育ててくれた親を悪く言ったり、文句を言うのはやめろ」
「「「はい……すみませんでした……」」」

俺は三人に説教をする。
うざいとか思う時があったとしても、親は親だ。
自分を産んで育ててくれた。
仕事をしながら、家事をやりながら、自分の時間を犠牲にして子供を育ててくれる。
人を育てるって、本当に大変ですごい事だと俺は思う。
親として、自分の時間がなくなるのは当然だけど、それでも尊敬の念は絶えない。

だから、親を大事にしなかったり、文句を言ったりする奴は俺は大嫌いだった。
俺は、実の親でない巴が大好きだからな！

「お母さん達も。子供に気を遣ってちゃ駄目ですよ。よく子供に合わせるって言うけど、そんな事する必要はない。子供に全部合わせて子供優先で甘やかしまくってたら、ワガママで自分の思いが全部正しくて、なんでもかんでも自分のしたい事がまかり通ってしまうと思う、最低最悪なクズ人間に育ってしまう。だから、子供にはそんなに気を遣っちゃ駄目です」
「「「はい……ありがとうございます」」」（ママ達）

うん。なんとかまとまったかな？
隣で玲奈が涙ぐんでいるのはなぜなのだろうか。

「零様は、いいパパになりそうですね……♡」（玲奈）

そうなりゃいいけどな。

「そろそろ時間じゃねぇか？」

俺がそう言うと――、

「そうでした！　私達はここで失礼します！　零様はムラムラしたら女を犯しつつ、卒業式を楽しんでくださいね♡」（愛莉）
「あぁ」
「「「それでは～！」」」

愛莉達は体育館に戻っていく。

「俺達も行くか」
「はい♡」（玲奈）
「お母さん達も、娘達の晴れ姿、しっかり見届けてやってくださいね」
「「「はい！　ありがとうございます……！！！」」」

そうして、俺達も体育館へと向かった。

なぜか俺は一番前の席だった。

第１３０話　【卒業式ＳＰ！】零から卒業生へエッチな贈り物♡♡♡♡♡♡

体育館へと入り、玲奈に席に案内される。

後輩達が俺の事を見てくるのは、気のせいじゃないだろう。

光やリサ、鈴音、燐、醍醐やユイなんかもこっちを嬉しそうに見てくる。

一番前の卒業生達の席が並んでる後ろに、俺の席があり、手を伸ばせば触れられる近さだった。

卒業生達はまだおらず、外で待機している。

ちなみに、この学校の卒業生達はこれまでで一番少ないらしく１３人しかいない。

「お隣失礼します♡」

「おぉ、瑠李」

「えへへ♡」

椅子に座り、玲奈が右隣に座ると、左隣に瑠李がやって来た。

全裸に首輪をしている。ちなみに、瑠李以外の全校生徒、そして教師陣も全裸に首輪と言う変態的な格好をしている。

なのでさっきから、興奮が収まらない。

ただみんなが全裸首輪なのであれば、興奮はもちろんするけどとんでもなくと言う訳ではない。

しかし、今は卒業生達の保護者が来ている。

保護者達は当然ながら服を着ている。
なので、後ろの保護者席には服を着た女性達が、その他の女達は全裸首輪。
この非日常感と言うか、絶対にあり得ない光景に、俺は無性に興奮してしまっている。
この気持ち、分かってくれるかな……？

「零君？　どうしたの……？」（瑠李）
「いやなんでもない。ただ、服を着てる人と着てない人が混在してるのが興奮するなぁって思っただけだ」
「零君って本当に神様だよね♡　色んな事で興奮してくれて♡」（瑠李）
「はい♡　私達凡人では分からない点で興奮して、私達を犯してくれる♡　最高の神様です♡」（玲奈）

な、なんかベタ褒めされたんですけど……。

そんな他愛もない会話をしていると、全裸首輪の黒乃が、ステージ袖にある階段下近くのマイク台の前に立った。
マイクテストを始めているので、そろそろ始まるのだろう。

『え～、それでは、そろそろ始めさせていただきたいと思います。スマホや携帯電話などのご使用は可能ではございますが、着信音などがなってしまいますと、周りの方の迷惑になってしまいますので、マナーモードに設定いただき、音が鳴らないようお願い申し上げます。カメラなどのシャッター音もオフにしておいていただけますと幸いです。それでは始めさせていただきたいと思います』

卒業式らしいＢＧＭが流れ始め、いよいよ卒業式が始まった。

『それでは第２５回、孕雌乱（はめらん）高校卒業式を開始します。卒業生、入場』

黒乃がそう言うと、体育館後方の出入り口から、全裸首輪の４年生１３人が入場してきた。

何気に、先輩達を見るのも久しぶりだな。

澪と恋に拉致された後、先輩達と旅行に行ったきり、愛莉以外の先輩は性奴隷にしてなかったからな。

にしても、この全裸首輪は本当にヤバいな。エロさが半端ない。

自分達の娘が全裸首輪で入場してきているのを、親達は嬉しそうに拍手しながら見守ってるって、ヤバすぎだろ。

中にはもう泣いている人もいるし。

ってか、この学校ってそんな変態的な名前だったんだ。

『卒業生、着席』

ステージ前に用意された椅子の前に全員が立ったのを確認した後、黒乃がそう号令をかける。

それを受け、１３人は椅子に座る。

『んん～～～～～～～♡♡♡♡』

椅子に座ると同時に、１３人は卑猥な声を上げた。

「そりゃな、極太ディルドを呑み込んだらそうなるだろ」

そう。13人の椅子には、極太のディルドが設置してあった。
なんでも、この学校の伝統らしく、卒業生の椅子にはディルドを設置して、卒業式中にイキまくるらしい。

『それでは、続いて、卒業証書授与式を行います』

黒乃はそう言った後、マイク前から離れる。そして、別の女性教師と入れ替わった。

『卒業証書、授与』

担任教師がマイクに向かって声を発する。
そして、4年生達の名前を呼び始める。

『大斑（おおぶち）　茶由（さゆ）』

「んんっ♡　はい！」

名前を呼ばれた生徒が立ち上がる。
その際、マンコからディルドが抜け、その女子生徒は軽く喘ぎを上げた。

最初に呼ばれたのは、前に先輩達と旅行前に愛莉達とエッチした時に、尻コキしてきた爆尻先輩だった。
（第35話参照）

ステージに向かうために歩く度、大斑先輩の爆尻が右に左に上下にブルンブルンと揺れていく。
エロい……！

『香川　恋』
「んんっ♡　はい！」

恋が呼ばれ、ステージ袖の階段に向かう。

『櫻野（さくらの）　光季（みつき）』
「んんっ♡　はい！」

ツインテールが可愛らしい先輩、櫻野先輩が立ち上がり歩き出す。

『瀬戸（せとみ）光　佐菜（さな）』
「んはっ♡　はい！」

俺の命令で、全裸首輪に網タイツを穿いた先輩、瀬戸光先輩が立ち上がり歩き出す。

『髙澤（たかさわ）　佳央（かお）』
「んんっ♡　おう！」
『おう、ではなく、はいです』
「すんません……はい！」

笑いが起きる。
爆笑をかっさらったのは、愛莉や大斑先輩とエッチした時、俺が初めておしっこを中出ししたがさつ先輩。（第３５話参照）
立ち上がり歩き出すが、ケツが痒いのかポリポリとかきながら歩いている。

『中嶋（なかしま）　美々菜（みみな）』
「んっ♡　はい！」

紫色の髪色が特徴的なミディアムヘアの先輩、中嶋先輩が立ち上がり歩き出す。

『七宮(ななみや)　璃音(りお)』

「あっ♡　はい！」

ショートボブが可愛い先輩、七宮先輩が立ち上がり歩き出す。

『橋本(はしもと)　椿(つばき)』

「んっ♡　はい！」

マンコとアナルの部分に穴の開いたスパッツを穿いた先輩、橋本先輩が立ち上がり歩き出す。

『白下　華様』

「んあっ♡　はい！」

ん？　今『様』って言った？

まぁ、俺の実姉だからか。

『星野　澪』

「んんっ♡　はい！」

澪が立ち上がり歩き出す。

『松崎(まつさき)　未那(みな)』

「んっきゅ♡　はい！」

茶髪ロングが特徴的で、愛莉達との旅行の時に愛莉と共にお掃除フェラをさせた先輩、松崎先輩が立ち上がり歩き出す。

（第３６話参照）

『水瀬　愛莉』

「んっ♡　はい！」

愛莉が立ち上がり歩き出す。

今までの人の中で一番、礼儀正しく姿勢正しく歩いている。相変わらず模範解答的な性格してるよな～。

『山河（やまかわ）ひより』

「んんぁ♡　はい♡」

おっとりとしたようなほんわか先輩、山河先輩が立ち上がり歩き出す。

『以上、１３名。欠席なし。卒業証書授与、終了です』

全員が卒業証書を受け取り、席に戻る。

そして喘ぎを上げながら座る。

『４年担任、春村（はるむら）　遥陽（はるひ）。あなた達の担任になれて幸せでした』

春村先生がそう言って、体育館脇に戻った瞬間――、

『うわあああああああ！！！！』

先輩達から歓声が上がった。

「はるはる～！　最高～！」

「私達もはるはるが担任でよかった～！」

など、歓声が上がっている。

『続いて、卒業生の言葉。卒業生代表、水瀬　愛莉』

「んっ♡　はい！」

愛莉が立ち上がり、ステージ上へ。

そして、愛莉の気持ちがこもったスピーチが始まった。

♡　♡　♡

愛莉のスピーチ、校歌斉唱、校長の言葉、などなど卒業式のプログラムが進んでいきそろそろ終わりかなと思った時、黒乃がマイクに声を通す。

『続いて、零。ステージ上に来てくれ』

「ん？」

なぜ呼ばれたのかは分からないが、俺はとりあえずステージ上へ向かう。

卒業生達の前を通る時、華や愛莉達からウインクされた。

「わざわざすまないな、零」

「いや、別にいいんだけど、なんで呼ばれたん？」

「あぁ。それはな、零から卒業生達に卒業祝いをあげて欲しいんだ」

「卒業祝い？　でも、俺何も持ってないよ？」

「そこはほら、な♡」

「あ～なるほどね」

何を渡せばいいのか察した俺は、ズボンとパンツを脱ぐ。

『わぁ……♡』

先輩達、同級生達、後輩達、保護者達から色っぽい声が漏れる。

「それでは、卒業生達、前に！」

『はい！』

黒乃がステージ上から言うと、１３人が立ち上がり、ステージ下に集まってくる。

「それじゃあ、零、失礼するな♡」

「うん」

黒乃が勃起したチンコを握ってくる。

「すごいな♡　もう我慢汁が溢れてる♡　ヌルヌルだぞ♡」

「ずっとエロい姿見せつけられてたからな。興奮しっぱなしだよ」

「我慢させてすまなかった……でも、もう我慢する必要はないからな♡　いっぱい下にいる性奴隷達にぶっかけてやってくれ♡」

「あぁ」

黒乃は、手コキのスピードを上げていく。

尿道から溢れてくる我慢汁を、人差し指で塗り拡げ、カリ首にそれをつけて扱いてくるので、くちゅくちゅとエロい音が体育館に鳴り響く。

ってか、手コキされてるのを保護者達に見られてるんだよな。
何気に恥ずかしいな。

「黒乃、そろそろ……」
「出してくれ♡　いっぱいいっぱい、濃ゆい精液出して、下の奴らにぶっかけて♡」
「出るっ！」

ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！
ビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！
ドビュッ！！！！！　ドビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！！

『んん～～～～～～～～～～♡♡♡♡♡♡♡』

大量の精液が、ステージ下にいる13人に遠慮なくぶっかかっていく。

顔や胸、体全てにかかっていき、どんどん精液に染まっていく。

「はぁはぁ……」
「沢山出してくれてありがとうな、零♡　醍醐！　来い！」

醍醐を呼ぶ意味は？

「零の椅子になれ」

なるほど。そういう事ね。

「零様♡　　どうぞ♡」
「あぁ」
俺は、下半身丸出しのまま四つん這いになった醍醐の背中に座る。
「零、卒業生達にメッセージを頼めるか？」
「もちろん」
黒乃からマイクを受け取る。黒乃はステージ下に戻っていく。
『え～……まず、卒業おめでとうございます。この学校が４年制になってくれたおかげで、華とも一緒の学生生活を送る事ができました。短い期間ではあったけど、すっごく楽しかったです。ありがとう。そして、愛莉、澪、恋、華の四人は俺の性奴隷です。ですが、俺はもっと性奴隷を増やしたいと思ってます。なので……』
俺は立ち上がり――、
『お前ら全員、俺の性奴隷になれ！！！』
と、叫んだ。
すると――、
『ありがとうございます！！！！　私達全員、零様の性奴隷になります！！！！　これからよろしくお願いします！！！！』
と、返事が返ってきた。
マイクを通してないのに、すんげぇ響く。
『素敵なメッセージ、ありがとう。零。それでは本日のメインプロ

グラム。零』
「ん？」
黒乃と春村先生、真耶子が紙コップを持って俺に近づいてくる。
他の先生達も紙コップを持ってくる。
１３個……卒業生達と同じ数？
「この紙コップに、おしっこを入れてくれないか？」
「ん？　別にいいけど」
俺は先生達が持つ紙コップに向けて、おしっこを出す。
１３個にまんべんなく行き渡るように、途切れ途切れにしながら出していく。
「す、すごい……♡　これが零様のおしっこ……♡　臭いが良すぎる……♡」
春村先生が、俺のおしっこの臭いに興奮しているようで、呼吸が荒くなっている。
「ふぅ～……もう出ない」
「零、ありがとう♡　醍醐、綺麗に」
「はい♡」
醍醐が、俺のチンコを舐めてくる。
「ん？　卒業生以外にもおしっこ出すの？　もう出ないんだけど」
「あ、大丈夫だぞ。在校生や保護者達には保存してあった零のおしっこを出すから」

「そうなんだ」

保存って……。いつも思うがどこに保存してあるのだろうか……？

保護者達、在校生達に紙コップが配られる。

おそらく、俺のおしっこが入っているのだろう。

なんか恥ずいな。

『皆に行き渡ったかな？』

『はい！』

黒乃がステージ下の皆を見回す。

そして、全員に行き渡ったのを確認した後、紙コップを持った手を高く掲げ、マイクを通して――、

『零の神尿（しんすい）に、乾杯！！！』

『乾杯！！！！』

黒乃の合図で、卒業生、在校生、保護者達が一斉におしっこを飲んでいく。

大勢が俺のおしっこを飲んでるとか、エロすぎだろ……。たまらねぇな……。

「こ、これがおしっこの味……♡」

「どの飲み物よりも美味しい……♡」

「これ、発売とかしたら、絶対に買うんですけど……♡」

など、保護者達の席から色んな声が聞こえてくる。

発売って、どうやってやるんだよ……。
まぁ、保存方法があるくらいだからできるんだろうけど。
巴とかが何かやりそうで怖いな。

「零、ご馳走様♡　　席に戻って大丈夫だぞ♡」
「うん」

おしっこを飲み終えた黒乃が、そう言ってくる。
なので俺は、自分の席に戻る。

「零君のおしっこ、本当に美味しいね♡」（瑠李）
「零様のおしっこは、本当に神の水ですね♡」（玲奈）

席に戻ると、両脇からおしっこに喜ぶ声が飛んでくる。

『零の神尿飲みを終えたので、これにて第２５回、孕雌乱高校卒業式を終了します。卒業生、退場』

そうして、卒業生達は体育館から退場し、卒業式は終了した。

♡　♡　♡

「え、えっと……」

俺は今、保護者達に囲まれていた。
１２人の先輩の保護者達や、在校生達の保護者達に囲まれ、挨拶を受けていた。

「こうなると思った……」（瑠李）
「あまりにも無礼……！　　懲らしめてやろうかしら……！」（玲

奈）
「ま、まぁまぁ、玲奈ちゃん。あればっかりはしょうがない事だから、大目に見ようよ」（紗夜）
「れー君への挨拶、親として大事」（沙耶香）
いや、誰か助けんかい！！！！
この後、卒業生達の記念撮影が始まるまで、保護者達に囲まれていた。
♡　♡　♡
「え……マジでその格好で写真撮るの？」
「はい♡　零様への忠誠心、そして隷属の気持ちを表すのに、一番相応しい格好ですので♡」（愛莉）
「まぁ、みんながよければいいんだけど……」
俺達は今、学校の校門前に集まっていた。
卒業生達はみんな、全裸首輪の状態で、地面に正座をしている。
「準備できた？　そろそろ撮るよ～」
『は～い♡』
春村先生がカメラを構える。
俺達在校生達は、カメラに映らないようにその場を退く。
「それでは、撮りますよ～。はい、ポーズ♪」
そう春村先生が言った瞬間、１３人は正座から三つ指をついた格

好になり――、

『零様♡　ふつつか者ですが、これから、よろしくお願いします♡♡♡　誠心誠意、一生をかけて、ご奉仕させていただきます♡♡♡』

そう言いながら頭を下げた。

カシャ。

「記念撮影がとんでもない絵面になっとるがな……」

俺が驚いていたのは、これが理由だった。

まぁ、何はともあれ、卒業式が終わってよかった。

「零」

「ごめん……ありがとう……」

俺は、誰にもバレないように密かに涙を流していた。

それを察した黒乃が、前から優しく抱きしめてくれた。

それにより、誰にも見られず泣くことができた。

第１３０話　【卒業式ＳＰ！】零から卒業生へエッチな贈り物♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

エッチなシーンが少なかったのが申し訳ないのですが、それでも楽しんでいただけておりましたら幸いです……！

２９人も性奴隷がいるのに、さらに９人増えてしまいました……！

しかも、その９人も同居する事となります……！

この９人が今後どうエッチするのか、楽しみにしていただけますと幸いです！

次話から【飲尿ＳＰ】となっております！

飲尿して飲尿して飲尿して！　飲尿しまくるお話が続きますので、飲尿好きの皆様、沢山楽しんでください♡

（筆者のプライベートコメント）

「皆様は、卒業式で泣いたりしますでしょうか……？

僕自身、小学生の頃から卒業式とかの雰囲気に弱く、すぐに泣いてしまいます……。

なので、全く関わりがない人しかいない卒業式でも、雰囲気、空気、曲で泣いてしまいます……。

それでよく、友達から馬鹿じゃないのとか、変なのとか、からかわれてました……。

自分の卒業式だと、とんでもなく号泣してしまいます……。

そんななんで、今でも、テレビで卒業式特集だったりしていると、勝手に涙が溢れてきてしまいます……。

お恥ずかしい限りですが……（笑）

卒業式シーズンは、好きだけど辛い……！
ちなみに、本編で卒業式の回数を『２５回』にしていたのですが、特に大した理由はなく、僕が今年で２５歳になるのでそれを反映いたしました。
これまでの卒業式がどんなだったのか、色々妄想していただけると嬉しいです♡

次話からもどんどんエッチに書いていきますので、楽しみに待っていてください！
それでは、次話をお楽しみに～♪」

第１３１話　【飲尿ＳＰ！】紗夜を小便器化♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

この話数から【飲尿ＳＰ！】を始めさせていただきます！

零の性奴隷達全員の飲尿回を、しっかりと書かせていただきますので、飲尿好きの皆様、ぜひ沢山楽しんでください！

飲尿ＳＰなので、射精などの描写は少なくなると思います。というより、ほとんどないと思ってください……。

飲尿ＳＰでは、本当におしっこに焦点を当てて書いていきますので、セックスや中出しなどを楽しみにしてくださっている方には申し訳ないのですが、ご了承いただけますと幸いです……！

飲尿と言えど、様々なプレイがありますので、そちらで楽しんでいただけると嬉しいです……！

そして、飲尿ＳＰでは女子目線で書かせていただきます。

なので、女子がどう思っているのか、どういう気持ちなのか。

その辺もしっかりと描いてお届けできればなと思っております！

ここから始まる【飲尿ＳＰ！】をどうぞお楽しみください！

一人目は、この子だっ！

第１３１話　【飲尿ＳＰ！】紗夜を小便器化♡♡♡♡♡♡♡

「ふぅ～……」

私は今、トイレに入っている。

二階にある、小便器が三つ並んでいて、奥に洋式が五つ、右側に和式が三つ並んでいるトイレの、洋式の小便器側に座っている。

「あそこでれいれいは、立っておしっこするんだよね……」

公園とかに設置してあるので、存在自体は知っていたけど、こうしてマジマジしっかりと見る機会は中々ない。

興味はあるけど、男子トイレに入ったら犯罪になってしまうので、もちろん入る事ができず、どういう形で、どうやってするのかが分からなかった。

ぶしゃぁぁ♡♡♡

「あっ♡　れいれいがおしっこしてる姿想像したら、おしっこ吹き出して来ちゃった……♡」

そろそろ放尿が終わるかなと思っていたのに、れいれいが立ちションをしている姿を想像して、大量におしっこを噴射してしまった♡

「おしっこに染まったあの窪みに座ったら、オマンコとアナル、お尻にれいれいのおしっこをまんべんなく付着させられるんだよね…

…♡　それに、あそこに座った状態でれいれいにおしっこをかけれらたら……♡」

ぶじょ♡　ぶじゃ♡　ぶしゃあああああ♡♡♡

「あはは……おしっこ全然止まらないや」

私は、永遠続くのでは？　と思うほど出続けるおしっこに苦笑しながら、れいれいのエッチな姿を妄想した。

そんな時――、

ガチャ。

「っ！？」

妄想していた本人、れいれいが入ってきた。

「お、紗夜。いたんだ」

「う、うん……先にしてま～す……」

ど、どどどどどどどうしよう……！？

妄想してる最中だったから、本人の顔が見れない……！

散々エッチな事してるのに、なんでこんなに恥ずかしいの……！？

おしっこしてる所は見られても、恥ずかしさより嬉しさが勝つのに、なんで……！？

「紗夜？　どうした？」

「え！？　な、何が……！？」

「いや、なんか俯いてるからさ、具合でも悪いのかと思って」

心配かけちゃった……。

「ご、ごめんね……！？　　と、特に具合が悪いとかじゃないの……ただ、れいれいがおしっこしてる姿を妄想してたら、本人が入ってきて恥ずかしくて顔が見れないだけで……」

「な～んだ、そんな事か」

「ごめんね……」

「謝る必要はないだろ。俺だって、紗夜とかでエロい妄想してる時に本人を目の前にしたら恥ずいからな。紗夜の気持ちは分かる」

「れ、れいれい……ありがとう……♡」

「じゃあ、その妄想、現実にしてやるよ」

「え？」

「今から立ちションするから、よく見とけ」

「っっっ～～～♡♡♡　　うん！」

れいれいは、ボクサーパンツを一枚穿いただけの格好だった。なので、れいれいはボクサーパンツを脱ぎ、小便器の上に置く。

「いつも全部脱ぐの？」

「いや。いつもは少し下に下げて、押さえながらしてるよ。でも、今は紗夜に見せるから、見やすいように全部脱いだ」

「わざわざ脱いでくれるなんて……ありがとう♡」

「あぁ。ほら、しっかり見てろよ」

「うん♡」

ぶしゃあああああ！！！！

「あっ……♡」

れいれいが小便器に向かって放尿を開始する。

「すご……♡　れいれいのおしっこ……♡」

あ～……♡　小便器が羨ましい……♡

あんな風に無遠慮におしっこをぶっかけられたい……♡

顔や体、私の全部にれいれいのおしっこをぶっかけてほしい……♡

「あっ……♡」

じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ♡♡♡♡♡

れいれいのおしっこを見ながら、さらにおしっこを出してしまうなんて、私、最近おしっこのコントロールができなくなってきてる……。

れいれいの全てを感じると、勝手に尿道からおしっこが溢れてきてしまう……。

「ふぅ～」

あ……れいれいのおしっこが終わってしまった……。

もっと……もっと……もっとれいれいのおしっこを感じたい……味わいたい……浴びたい……！

「れ、れいれい！」

「ん？」

パンツを穿こうとしているれいれいに、私は声をかける。

「れ、れいれいに、ひ、一つお願いがあるの……！」
「なんだ？　なんでも言ってみ」
「う、うん……ありがとう……。あ、あのね……」
私は意を決して、れいれいにお願いを告げた。

♥♥♥

れいれいと同居を初めて、れいれいが性奴隷を増やすために旅に出ている時。

私はお母さんに電話をしていた。

「お母さん、元気？」
『えぇ、元気よ。紗夜は？』
「元気だよ。れいれいにもいっぱいエッチな事してもらえて、おしっこも飲ませてもらえてる」
『よかったじゃない』
「うん……」
『……どうしたの？　何か悩み事？』
「うん……よく分かったね」
『親を舐めちゃいけないわよ。声の少しの変化でも違和感に気がつくんだから。それで？　どうしたの？』

私は、自分の夢を初めてお母さんに告げる事にした。

「あのね……その……も、もし、さ……私が、人権を破棄したいって言ったら、どう思う……？」
『人権を、破棄……？』

沈黙が流れる。

生みの親に対して、人権を破棄したいだなんて、絶対に言ってはいけない事だ。

だから、ずっと言い出せなかった。

中学生の頃からの夢を。

長い沈黙が流れた後、お母さんが落ち着いた声音で言ってくれる。

『いいんじゃない？』

と。

「ふぇ……？」

お母さんが言った言葉が信じられず、私は素っ頓狂な声を上げてしまった。

「い、いいの……？」

『当たり前じゃない。女なんて、働くかニートになるかしかないのよ？　そこに、人権の破棄と言う素敵な選択肢が入るなんて、素敵じゃない。相手様がいいなら、さっさと破棄しちゃいなさい。連絡とか、そういう事は一切気にしなくていいから、相手様に沢山使われなさい。そして、使い潰されなさい』

お母さん……。

「ありがとう……！　ありがとう……！」

私は涙を流してしまった。

「お母さん、私、人権を破棄して夢を叶えるね！」

『えぇ。しっかりなさいね』

「うん！　私、立派な――――――――――――――――――――――――」

♥　♥　♥

「私を、れいれい専用の小便器にしてください……！」

「いいよ」

「ふぇ！？　い、いいの……！？」

「うん。俺は別に。むしろ嬉しいし」

「あ、ありがとう……！」

「んで？　どういう感じの小便器になりたいの？」

「あ、あのね……まず、私の部屋を没収してほしいの」

「部屋を？」

「うん。それで、荷物も何もかも没収して、私の人権も没収してほしいの」

「人権も……別に構わないけど……紗夜はどこに？」

「わ、私は……こ、この小便器のところで過ごしたい……」

「なるほど……」

そう。私はこのおトイレの、小便器の上で一生を過ごしたい。

そして、れいれいにいっぱいおしっこをかけてもらいたい。

飲み物はおしっこで、時々精液を食べさせていただければ……。

私はもうそれがしたくてしたくてたまらない……！

「水分も食事も何もいらないから、れいれいのおしっこを私に沢山ください……！」

私は、立ち上がって頭を下げる。
すると、その頭に優しく手が乗っかってくる。
「れ、れいれい……？」
「そんなにビクビクするな。俺はお前達のしたい事、できる限り叶えてやりたいんだ。だから、したい事があったらなんでも言ってくれ。それに、大体みんながしたい事って、俺にとってはご褒美でしかないからな」
「れいれい……」
私は頭を上げ、れいれいの目を見る。
「じゃあ、紗夜。俺専用の小便器になれ」
「うん……！　ありがとう……！　ありがとう……！　私、れいれい専用の小便器になる……！」
私はれいれいに抱きついた。
「れいれい、大好き！」
❤❤❤
「すごい……♡　小便器ってこんな感じなんだ……♡」
私は今、小便器の窪みの部分に座っている。
「これ……このまま私がおしっこしたらどうなるんだろう……」
試しに少しおしっこをしてみると、少し溜まった後、すぐに排水

されていった。
水も流れてないのに、すごい……。
「ねね、れいれい！　私、ここ好きかも！」
「それはよかった。んじゃあ、早速使わせてもらっていいか？
俺専用の小便器さん」
「はぁ～～～♡♡♡♡　うん！　ぜひ、使ってください♡♡♡」
れいれいがパンツを下に下ろして、おちんちんを出す。
そして、それを両手で支え、私に標準を定める。
じょろ……じょろ……じょろろろろろろろろ！
「んっ……♡♡♡」
れいれいのおしっこがお腹にかかってくる♡
おしっこがどんどん威力を増して行って、お腹から胸、首、そして――、
「んぶっ……♡♡♡」
顔に来たぁぁぁぁ♡♡♡
れいれいのおしっこが顔にかかってる……♡
最高♡♡　はぁはぁ……♡♡　幸せぇぇぇ♡♡♡
「あっ♡　ごくごくごく……♡♡♡」

私は口を開けて、れいれいのおしっこを飲んでいく♡

「ごくごくごくごく……♡♡♡　ごぼごぼごぼ……♡♡♡」

れいれいのおしっこが、どんどん威力を増して、量が増えていくので、どんどん口の中におしっこが溜まって飲み込めなくなっていく♡

でも、それがまた心地よくて気持ちよくて至福♡♡♡

「すげぇな。小便器の上でおしっこを浴びる女。エロすぎるわ」

「がぼがぼがぼがぼ……♡♡♡」

れいれいが喜んでくれてる……♡♡♡

おしっこを浴びたり、飲んだりなんて、私が幸せな事なのに、それに対してれいれいが喜んでくれるなんて……♡♡♡

嬉しい♡♡♡

「ふぅ〜……」

終わっちゃった……。

「ごくごくごく……♡♡♡　ぷはぁ〜♡　ご馳走様でした♡とっても美味しかったです♡♡♡」

「この小便器には、洗浄機能はついてるのか？」

「はい♡　もちろんです♡　では、綺麗にさせていただきますね♡」

私は、れいれいのおちんちんを咥える。

「あむ……♡　ぢゅる♡　れる……♡　ぢゅる♡　れる
れる……♡♡　ぢゅるるるるるる♡♡♡♡♡」

れいれいのおちんちん、おしっこの味がしてとっても美味しい……♡♡♡♡♡

亀頭を舐めても、尿道を吸っても、カリを舐めても何をしてもおしっこの味がする……♡♡♡♡♡

堪らない……♡　堪らない……♡♡♡　堪らないいいぃ♡♡♡♡♡

じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ♡♡♡♡♡

「嬉ションか？」
「ぶぁい……♡　ふみまへん……」
「謝らなくていい。好きなだけ漏らせ」
「ありはほうほはいまふ♡♡♡」

私はれいれいのおちんちんを舐めながら、沢山おしっこを漏らし続けた。

♥　♥　♥

「じゃあ、部屋の荷物、全部撤去しとくから」
「すみません。本当は私がやらなきゃいけないのに……」
「気にするな。お前はもう人じゃなくてモノなんだから、何もせず、俺のおしっこだけ受け止めとけ」
「はい……♡♡♡　ありがとうございます♡♡♡」

「んじゃな」
「はい……♡♡♡」

れいれいがトイレから出ていく。
そして、電気を消される。

真っ暗な空間に、たった一人。
しかも、私が座っているは小便器。

すごい……どうしよう……。

「めちゃくちゃ興奮する……♡♡♡」

私は、真っ暗な空間でのオナニーにハマる事となった。

第１３１話　【飲尿ＳＰ！】紗夜を小便器化♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

【飲尿ＳＰ！】の始まりとなる回、沢山興奮して、沢山楽しんでいただけておりましたら幸いです……！

紗夜の夢、皆さんも応援してあげてください♡

人権を破棄し、小便器となった紗夜をこれからも愛してくださると嬉しいです！

次話は、紗夜の親友であるあの子……です！

誰の事か分かりましたでしょうか？

その子がどんな飲尿をするのか、次話をお楽しみに！

（筆者のプライベートコメント）

「最近、アニメグッズなどを扱っている『あみあみ』さんに会員登録をして、フィギュアなどを予約したりしているのですが、エッチなフィギュアもあるんですよね！

それを見るのが楽しくて、ついつい時間を忘れて見てしまっているのですが、それを見る度、いつか瑠李達もこういうフィギュアになったりするのかな～とか、勝手に妄想してしまっています。

まだ作家デビューもしていないのに（笑）

でも、夢を抱いたり、語ったりするのは自由ですからね！

いつか、この作品が沢山広がっていって、フィギュアが出たりなど、妄想が現実になれるよう、これから頑張っていきたいと思います！

なので、これからも小鳥遊綾瀬を何卒、よろしくお願い致します！
エッチなフィギュアって、すごくいいですよね……♡　まだ買えてませんが、必ず買います（笑）
それでは、次話をお楽しみに！」

第１３２話　【飲尿ＳＰ！】沙耶香はおしっこサーバーが欲しい♡♡♡♡♡♡♡

「ふぅ……」

私は今、自室で勉強をしていた。んだけど、集中力が切れてしまった。

「一旦休憩しよう」

私は椅子の上で伸びをした。

「ん〜〜〜……ふぅ〜。はぁ……れー君のおしっこ飲みたい……」

私は、れー君のおしっこが大好きだ。
どの飲み物よりも美味しいれー君のおしっこ。
コンビニとかで販売されたら、買い占める自信があるほど大好き。

だから、最近は水やお茶が不味く感じてしまう。

「れー君のおしっこ以上に美味しいのなんて、この世に存在しないよね」

私は、巴さんにお願いしてウォーターサーバーを買ってもらった。
しかし、タンクの部分にはお水は入っていない。
あえて空にしてもらうように頼んだ。

私は立ち上がり、ウォーターサーバーのタンクを撫でる。

「ここにれー君のおしっこ、入れて欲しいなぁ……」

タンクにおしっこがあれば、いつでもれー君のおしっこを味わえる。

でも、それはれー君にとって負担でしかない。

タンクいっぱいにおしっこを入れるなんて、普通はできない。

「だから、中々頼めずにいるんだけど……」

ため息をついた私。と――、

「んっ♡♡♡」

突然、後ろから両乳首を引っ張られた。

「れ、れー君♡」

後ろに立っていたのは、私の愛しのれー君だった。

「ど、どうしたの……♡　お部屋に来るなんて珍しいね……♡」

「あぁ。沙耶香の乳首を弄りたくなってな」

「えへへ……♡　嬉しいなぁ～……♡　いつでも弄ってね♡」

「あぁ」

れー君は、私が嬉しくなる言葉を常に言ってくれる。

だから、どんどんれー君の事が好きになって、れー君以外何もいらなくなってくる。

「ずっと気になってたんだけどさ」

「ん？」
「なんでこのウォーターサーバー、タンクが空なの？　届いた時からずっと空だよな？」

ついに聞かれてしまった……。

「あ、えと……それは、その……あの……」
「その動揺の仕方、何かあるんだな？」
「う、うん……」
「俺に言えない事か？」
「そ、それは……れー君にしか頼めないんだけど、それだとれー君に負担をかけてしまうと言うか……」
「ん？　俺にできることならなんでもするぞ？　沙耶香達の頼みを負担とか大変だとかは一切思わない」

あ～もう……れー君はサラッとこういう事を言うからズルい……。
こんな事を言われたら、もう我慢なんかできなくなってしまう。

「じゃ、じゃあお願い……してもいい？」
「あぁ。なんでもど～んと来いだ」
「じゃあ、あのね……」

私は、れー君にお願いをした。

♥♥♥

お願いをしてから1週間後。

「うん。しっかりと貯まったな」
「わぁ～～～～～～～♡♡♡♡♡♡♡」

空だったウォーターサーバーのタンクが、黄色い液体で満タンになった。

「れー君！　ありがとうっ！」
「うおっ！　そんなに嬉しいのか？」
「うん！　うん！　うん！　すっごく嬉しい！　れー君のおしっこを、いっぱい飲めると思うとテンション上がっちゃう♡」

私は嬉しさのあまり、れー君に抱きついてしまった。

タンクの中に入っている液体。
それは、れー君のおしっこだ。

れー君に、タンクにれー君のおしっこを入れて欲しいとお願いした所、即答で「いいよ」と言われた。
あまりにも早すぎて、私は最初何が起こったのか分からなかった。
でも、れー君が優しく頭を撫でてくれたので、私は自分の願いがれー君に受け入れてもらえたのだとしっかりと理解できた。

そして、お願いした日から、れー君はトイレでおしっこをするのではなく、タンクの中にしてくれた。

私の部屋に来てタンクにおしっこをしてくれるので、私は常にれー君のおしっこ姿を眺める事ができた。
オナニーは禁止なので、かなりツラかったけど、れー君がおしっこ終わりにおちんちんを舐めさせてくれるので、それでなんとか落ち着けていた。

そして、タンクにおしっこを貯め始めて1週間後。

ついにタンクは満タンになった。

これで、好きな時にれー君のおしっこを飲むことができる♡

考えただけでもう、オマンコが勝手に疼いてしまう♡

「早速、飲んでみてもいい、かな？」

「もちろん。これは沙耶香のモノなんだから、沙耶香の好きな時に飲みな」

「うん♡　ありがとう♡　じゃあ……♡」

私は、ウォーターサーバーの側面についている紙コップを補充できるやつのボタンを押し、紙コップを一つ出す。

そして、紙コップを注水口の下に持っていき、注水レバーを上に上げる。

すると、注水口から黄色い液体が出てきて、紙コップに注がれていく♡

ホットの方から出しているので、いつでも熱々のおしっこを味わえる♡

紙コップに注いでいる間も、れー君のおしっこの臭いが広がってきて、私は視覚だけじゃなくて嗅覚でも幸せを感じている♡

レバーを下げて、注水を終了する。

「じゃあれー君、いただきますね♡」

「あぁ。召し上がれ」

「んっ……♡　ごくごくごくごく……♡♡♡」

はぁ〜〜〜

口いっぱいに広がるれー君のおしっこの味♡
鼻腔に広がるれー君のおしっこの臭い♡
喉に広がるれー君のおしっこの滑らかさ♡
お腹に広がるれー君のおしっこの温かさ♡

大好きな、私の大好きなれー君のおしっこが、私の全てを満たしていく♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「ごくごくごく……♡♡♡　ぷはぁ～♡♡♡♡♡　れー君、すっごく美味しいよ♡♡♡♡♡♡♡」
「そうか。それはよかったよ」
「んっ♡」

れー君が頭を撫でてくれる♡

「最近、れー君頭撫でてくれるよね♡」
「嫌か？」
「ううん♡　好き♡　れー君の頭ナデナデ、大好き♡　頭撫でられると、子宮がキュンってなってものすごく幸せな気持ちになるの♡」
「そうか」
「うん♡♡♡」

他の子にもやってる事だと言うのは分かってる。
でも、今だけは私が独占してもいい、よね？

「ねぇ……」
「ん？」
「もっと……もっと撫でて欲しい……」

「あぁ、いいぞ。沙耶香が満足するまで、ずっと撫でてやる」
「んふふ……♡　ありがとう♡」

この後、ベッドの上で頭をずっと撫でてもらった。
長時間に渡るので、私はれー君のおちんちんをずっと咥え、おしっこと精液を飲ませていただいた♡

♥　♥　♥

おしっこサーバーをいただき、頭ナデナデをしてもらった後、私は二階のトイレに向かった。

「紗夜ちゃん？」
「ん？　あ、沙耶香。どうしたの？」

紗夜ちゃんに用事があったからだ。
紗夜ちゃんはれー君専用の小便器になったらしく、トイレから一切出てこなくなった。

食事もしなくなり、れー君の精液とおしっこだけで生活をしている。
正直、羨ましいと思った。
でも、私は将来、就職してれー君を養うと言う夢があるので、苦渋の決断で小便器になる事を諦めた。

「紗夜ちゃんに報告したい事があってさ」
「何々〜？」
「あのね♡　れー君が、ウォーターサーバーのタンクにおしっこを貯めてくれたの♡」
「え！　よかったじゃん！　ずっとお願いしたいって言ってた

もんね！」
「うん！　れー君にとっては負担でしかないから、ずっと言えずにいたんだけど、れー君が私達のお願いに対して、負担とか大変とか一切思わないって言ってくれてさ……それで、お願いしたら即答でいいよって言ってくれたんだ♡」
「本当、れいれいってズルいよね♡　そういう事をサラッと言っちゃうからさ」
「そうなんだよね～」
「私も、れいれい専用の小便器になりたいって、人権を破棄したいって言ったら、速攻でいいよって言ってくれてさ♡　すっごく嬉しかった♡」
「小便器に座る紗夜ちゃん、めちゃくちゃ可愛いよ♡」
「えへへ～♡　ありがとう♡」
「今、幸せ？」

聞きたかった事、それを聞いてみた。

「うん！　ものすっごく幸せ♡　れいれいの事を養えなくなっちゃったのが申し訳ないけど、でも、れいれい専用の小便器になれて、人権を破棄してモノにしてもらえて、今、最高に幸せだよ♡」
「よかった。ごめんね？　ここ1週間、れー君のおしっこ独占しちゃって……」
「ううん。全然気にしないで。れいれいがトイレに来ないから、他の子が飲んでるんだろうなって思ってたから。それに、れいれいは『おしっこは無理だけど、精液ならな』って言って、ずっと大量の精液をくれてたから♡」
「そっか。ならよかった」
「ねぇねぇ、今、外ってどんな感じ？」
「んとね～」

私はこの後、数時間、紗夜ちゃんとお話をした。

私は洋式に座って、紗夜ちゃんといっぱいお話をした。

全裸なので、おしっこをしたくなったらいつでもできるので、ついつい時間を忘れてしまった。

♥　♥　♥

『もしもし』

「もしもし、ママ？　今大丈夫？」

『えぇ。大丈夫よ。ちょうど一段落ついたところだから』

「よかった」

『どうしたの？　声が弾んでるから、いいことがあったのかしら？』

「うん♡　れー君がね、私のお願いを聞いてくれて、おしっこサーバーを作ってくれたの♡」

『そうなの♡　よかったわね♡　零様のおしっこ、とっても美味しいものね♡』

「うん♡　それをさ、いつでも好きな時に飲めるって、最高だよ♡」

『沙耶香のそんな楽しそうな声、中々聞けないから新鮮だわ。　“この世界に来てから”　初めてじゃないかしら』

「そう、だね……。れー君に出会うまでは私、ずっと暗かったからね……。全部れー君のおかげだよ。れー君の為なら私、なんでもできる」

『なら、しっかりご奉仕して、零様を満足させないと駄目よ？側にいるんだから、零様が求めたら股を開いて。求められてなくても股を開かなきゃ駄目だからね？』

「うん。分かってる。それに、れー君は私の体をどんどん調教したいって言ってたから、股じゃなくて、口とかを開いた方が喜んでも

らえるかも♡」
『それもそうね。でも、沙耶香が幸せそうでよかったわ』
「うん♡　幸せだよ。……ママ」
『ん？』
「私を産んでくれて、ありがとうね」
『っ……』
「そ、それじゃあね！　お仕事、無理せず頑張ってね！　バイバイ！」
『えぇ』

私は通話を切る。

「何言ってんだろ、私……恥ずかしい……。れー君のおしっこ飲んで落ち着こう」

私はれー君のおしっこを飲み、気分を落ち着かせ、勉強を始めた。れー君のおしっこを飲んでから勉強をすると、ものすごく勉強が捗った。

れー君のおしっこ、すごいなぁ♡♡♡

第１３２話　【飲尿ＳＰ！】沙耶香はおしっこサーバーが欲しい♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

まさかの、零のおしっこをウォーターサーバーのタンクに貯めると言う、驚きの行動。

沙耶香は零のおしっこを水筒に入れたりと、常に飲んでいたいと言う子だったので、今回このようなお話にさせていただきました！

超ド変態な沙耶香ですが、好きになっていただいて、愛していただけますと幸いです……！

紗夜と沙耶香のトイレでの会話。何気にエロいですよね♡

小便器に座る紗夜と、洋式に座る沙耶香。

お互いにいつでもおしっこし放題で、おしっこしながら会話をする。

しかも、その最中にも他の女子達が入ってきておしっこをしていく。

考えただけで興奮しませんか……？

沢山妄想して、沢山興奮していただけますと嬉しいです♡

次話は、沙耶香の妹の……？

次話も沢山興奮していただけるようなお話にいたしますので、楽しみに待っていてください♪

第１３３話　【飲尿ＳＰ！】美奈貴はお尻におしっこをぶっかけられたい♡♡♡♡♡♡♡

「んっ♡　はっ♡　あっ♡　イクッ♡　イクッ♡　イッぐ♡♡♡」

ぷしゅ♡　ぷしゃ♡

「はぁはぁ……♡」

ムラムラが我慢の限界を迎え、私は部屋でオナニーをしてしまっていた。

「はぁはぁ……まだ、足りない……も、もう一回イきたい……」

イキ足りない為、もう一度オナニーをする為にクリへと右手を伸ばした。

その時――、

「美奈貴？」

「ひっ！？」

さや姉の声が聞こえてきた。

しかも、低い声。これは、さや姉が本気で怒ってる時の声……。

私は恐る恐る部屋の入口の方へ顔を向ける。

私は仰向けでオナニーをしていたので、顔を下に向けると入口が見える。

入口の方を見ると、そこには感情が一切ない冷え切った目をしたさや姉が立っていた。

「美奈貴、今、何してたの？」

「え！？　い、いや、な、何もしてないよ！？」

「へぇ～……」

さや姉が部屋の中に入ってくる。

そして、ベッドの上の、潮で濡れたシーツを触る。

「何もしてないのにここがこんなに濡れるの？　もしかしておねしょしたとか～？　だとしたられー君に報告しないとね～」

「お、おねしょなんてしてないっ！　そ、それにしてたとしても零様には言わないでっ！」

零様におねしょ報告なんて……恥ずかしくて死ぬ……！

「じゃあなんでこんなに濡れてるの？」

「そ、それは……」

「ハッキリ言わないと、れー君に美奈貴がおねしょしたって報告するよ？」

「っ……し、潮を吹いたからですっ……！」

「潮？　なんで？　普通に生活してたら潮なんて吹かないよね？　ねぇ、なんで？」

さや姉が詰め寄ってくる……。もう、逃げられない……。

「お、オナニーを……し、してたから、です……」

「はぁ～……美奈貴。この家のルール、知ってるよね？」

「う、うん……」

「れー君の前でしかオナニーはしちゃいけないし、オナニーは基本的に禁止。れー君に襲ってもらえるまではムラムラを我慢しなきゃいけない。それがこの家のルール。分かってるならなんでしたの？」
「が、我慢、できなくて……」
「はぁ～……あのね、みんな我慢できない中でなんとか我慢してるの。それなのに一人だけルールを破るとか最低だよ？　巴さん達が知ったらどうなるかな？」
「っ！？　そ、それだけは……！？」

桃さん達に聞いた限りだと、巴さん、黒乃さんは怒るとすごく怖いらしい……。
だから、怒らせちゃいけないって……。私も怒られたくない……。

「報告はとりあえず保留にしといてあげる」
「あ、ありがとう……」
「ただし、ルールを破った罰は受けてもらうから」
「う、うん……」
「キツ～いお仕置きになるから、覚悟してね？」
「っ……は、はい……」

わ、私……何をされるんだろう……。

♥　♥　♥

「ふぅ……♡　ふぅ……♡」

私は今、ボールギャグを口に嵌められて喋れなくなっている。
穴開きなのでヨダレが沢山溢れてしまう……。

ベッドの上で、上半身をベッドに突っ伏し、お尻を上に高く上げ

た体勢で、手首と足首を繋がれ拘束されている。

そんな恥ずかしい体勢を、今、零様に見られている。

「沙耶香からお仕置きをしてくれって頼まれたけど、何か悪い事したのか？」

「はふ……はふはふ……」

零様の質問に答えたいのに、ボールギャグのせいで喋れず返事ができない……。

「まぁ、俺としては女に仕置きするの好きだからやらせてくれるって言うならなんでもいいんだけどな」

零様のお姿がチラッと見えた。

ボクサーパンツ越しでも分かるくらい、零様のおちんちんはギンギンに勃起してる……♡♡♡

「仕置き内容は俺に任せるって言ってたから……うっし、早速始めるか～」

れ、零様が真後ろに移動してくる。

い、今から何されるんだろう……♡

き、期待と興奮で愛液が……♡♡♡

「そんじゃあ、まずは……」

パチィィィンッッ！！！！！

「んっ！？」

零様が右のお尻を、思いっきり叩いてきた。
乾いた音が、部屋の中に響き渡った。

「まずはスパンキングの刑だな」

そう言って、零様は私のお尻を連続で叩き始める。

パチィィィィンッッ！　パチィィィィンッッ！！　パチィィィィンッッ！！！

「んっ！？　んんっ！？　んんっっっ！？」

スパンキングって、憧れのプレイの一つだったけど、実際にされるとこんなに……こんなに……。

「んん～～～～～～～～♡♡♡♡♡♡」

気持ちいいんだぁ～～～～～♡♡♡♡♡

私、今、お尻叩かれて感じちゃってるよぉ～♡
気持ちよすぎて愛液溢れさせちゃってるよぉ～♡♡
軽くお潮を吹いてるのもバレてるよね……♡♡♡

どうしようどうしよう……♡♡♡
これはお仕置きなのに、私……体が勝手に気持ちよくなっちゃって、イク準備しちゃってるぅぅ♡♡♡

スパンキングだけでイッてしまいそうになった時、零様がお尻を叩く手を止めた。

「んぇ……？」

「なんだ？　イキそうだったのか？　イカせる訳ないだろ？　これは仕置きだぞ？　気持ちよくさせる行為じゃない」

そうだった……これはお仕置きだった……。

気持ちよすぎて忘れてしまっていた……。

イキそうだった所を止められたので、私の体はウズウズして無意識にお尻を振ってしまっていた。

「んふっ！？」

そんな私に対し、零様が指を二本、マンコに挿(い)れてきた。

「そら、次の仕置き行くぞ～」

な、何をされるのか大体の予測はつくけど……。

「んん～～～～～～～♡♡♡♡♡♡」

やっぱり来たぁぁぁぁ♡♡♡♡♡

グチュグチュ♡　グチャグチャ♡　グチュグチュ♡　グチャグチャ♡

零様が激しく手マンをし始める。

指の腹が、ちょうどGスポットを刺激してきて、しかもそこばっかりを中心的に激しく責め立てられるからイキそうだった体には、刺激があまりにも強すぎる……！？

「んん～～～～～～～♡♡♡♡」

「感じてもいいけど、勝手にイクなよ～？」

そ、そんな事言われても……寸止めされた体に、こんな激しい手マンされたら……もう……！

「っぐ～～～～～～～♡♡♡♡」

「はいストップ～」

「っ！？」

零様が、イク直前で指を引き抜いてしまった。

「っ♡　っ♡　っ♡　っ♡」

私は全身をビクンッビクンッと震わせてしまっている。

体がイキたくてイキたくて仕方がないと訴えているんだ……。

「勝手にイッちゃ駄目って言っただろう？　全く。美奈貴は困った奴だな～」

零様はそう言いながら、パンツを脱ぎ、勃起おちんちんを解放する。

そして、私の膣口に亀頭を押し当てて……。

「お～。これ、結構いいかも」

「っ♡　っ♡　ふ～～～～♡♡♡」

挿れるのではなく、亀頭を膣口に擦るだけ。
ただそれだけなのに……。
なんでこんなに気持ちいいのぉぉぉぉぉ♡♡♡♡
割れ目に沿って上下に亀頭を擦り付けてくれたり、まるで挿れようとしてるかのように左右に擦り付けてくれたり……。
擦り付けるだけでも色んなバリエーションがあって、私は気持ちいいのにずっと焦らされて、マンコをさらに濡らしてしまう……♡♡♡
ヌチャヌチャ♡♡♡　グチャグチャ♡♡♡　グチュグチュ♡♡♡
「すんげぇ濡れてる。亀頭が愛液でヌルヌルだわ」
ご、ごめんなさいぃぃぃぃ♡♡♡♡♡
「ってか、そろそろイキそう。一回出すわ」
出して♡　出して♡　いっぱい出してくださいぃぃぃ♡♡♡
寸止めを味わうのは女だけでいいのぉぉ♡♡♡♡
「出るっ！」
「んぉ♡♡♡　おおおおおおおおおおお♡♡♡♡」
零様が、射精の瞬間、膣におちんちんを挿れてくださり、中出しをしてくださった♡♡♡

膣(なか)にドビュドビュ熱いの入って来て……♡♡♡
最高過ぎる……♡♡♡♡♡

「ふぅ〜……。次はおしっこぶっかけるからな〜」

そう言って零様は、おちんちんを引き抜き、お尻で亀頭を軽く擦り精液を拭った後、お尻に向かって放尿をしてくれた♡♡♡

「ん〜〜〜

ボールギャグをしているせいで、上手く飲み込めないけど、喉を鳴らせば……。

「ごきゅ……ごきゅ……ごきゅ……♡♡♡」

の、飲めたぁぁぁ♡♡♡♡

美味しい～～～～～♡♡♡♡♡

やっぱり零様のおしっこは最高だよ～～♡♡♡♡♡

なんで、零様のおしっこはこんなに美味しいの……♡♡♡

ずっと飲んでいたい……未来永劫私の飲み物は零様のおしっこがいい……。

さや姉はおしっこサーバーをもらってた……わ、私も頼んだらくださったりする……のかな……？

でも、たまに飲ませていただけるのも、特別感があっていいかも……♡♡♡

「まだ出るからな～」

「ぶぁい……♡♡♡」

いっぱい出してください、零様……♡♡♡

この後、零様はいっぱいおしっこをぶっかけてくださった♡♡♡

ボールギャグの中に入ってくるおしっこを飲むと言う、新しい性癖に目覚めてしまったのは、みんなには内緒だ。

零様と私だけの、ヒ・ミ・ツ♡♡♡

第１３３話　【飲尿ＳＰ！】美奈貴はお尻におしっこをぶっかけられたい♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

膣口とアナルへのおしっこぶっかけ、背中にかけたおしっこが顔に流れてボールギャグに入り、飲尿。

中々にエッチではないかと、僕的には思ったので今回書かせていただきました……！

これをお読みくださった皆様にも、これはエッチだ！　と思っていただけておりました幸いです……！

次話は沙耶香の双子の姉であるあの子と……？

と、なっております！

一週間に一度の投稿しかできていないのに、いつも楽しみにしてくださり、そしてお読みくださり、誠にありがとうございます！！！

毎週の投稿は欠かさず行っていきますので、これからも楽しみにしていてください……！

それでは、次話をお楽しみに♪

（筆者のプライベートコメント）

「この度、Ｘを始めました！

始めたと言っても、推しの声優さんの投稿を見るのが基本的な目的なので、個人的な投稿などはほとんどしないのですが……。

それでも、予約した荷物が届いたりなどしたら、その時の気分で投稿してみようかな～なんて思ったりしているので、もしよろしかったらＸでチェックしてみていただけると嬉しいです……！

『龍（りゅう）　岳（たける）』で検索をしていただけると出てくると思いますので、

気が向いた方は検索してみてください♪
前回のおしっこサーバーを書いてから、ウォーターサーバーを見ると、自分が書いたお話が頭に浮かぶようになってしまいました……。
皆様の頭にも、何かの拍子に僕の作品が浮かんでくださっていたら、とっても嬉しいです……！
それでは、また来週〜♪」

第１３４話　【飲尿ＳＰ！】玲奈は手コキ放尿で溺れたい♡♡♡♡♡♡

「ふっ……ふぅ……ふっ……ふぅ……」
「玲奈？　何やってんだ？」
「あ、零様♡　おはようございます♡」
「あぁ。おはよう」
「今ですね、お尻をもっとエッチにする為に鍛えておりました♡
中々難しいのですが、頑張った分、零様に喜んでいただけると考えるとやり甲斐が生まれるんです♡」
「そっか。やってる所、見ててもいいか？」
「もちろんです♡　ベッドへどうぞ♡」
「あぁ」

私は朝、自室でヨガマットを敷き、その上で上半身を床に突っ伏し、お尻を高く上げて、お尻を上下に動かすと言う運動をしていた。
これをする事で、零様とセックスする際の騎乗位のテクニック向上やお尻の柔軟性が鍛えられる。
と、私は勝手に思っている。

零様は、ベッドの上に座り、お尻を高く突き上げた私の真後ろにいた。

オマンコもアナルも全部見られて……♡♡♡
どうしよう……運動しなきゃいけないのに、興奮してきちゃう……♡♡♡

「そ、そう言えば、沙耶香から聞きました。おしっこサーバーをプレゼントされたとか♡」

「あぁ。欲しいって頼まれたからな。なんなら、玲奈もいるか？」
「う～ん……喉から手が出るほどに欲しいのですが……他の方ならともかく、私がそれをいただくと、沙耶香から真似するなと説教されそうなので」
「まぁ、それもそっか。玲奈も欲しいものやして欲しい事があったら、遠慮なく言えよ？」
「して欲しい、事……」

どうしよう……そんな事を零様から言われてしまったら、抑えていた気持ちが溢れてしまう……。

「れ、零様……」
「ん？」
「ほ、本当に、遠慮しなくても、いいんですか……？」
「あぁ。なんでもいいぞ。俺にできる事ならな」
「で、では……わ、私のド変態なお願い、聞いてくださりますか……？」
「ん？　あぁ、もちろんだ」

私は、ド変態なお願いをさせていただいた。

♥♥♥

「体に違和感とか、ないですか？」
「あぁ、特には。まぁ、めちゃくちゃ尿意が来てるけどな」
「薬を飲んで数分……即効性があるとは言ってましたけど、まさかここまでとは」
「ってか、こんな薬作れる知り合いって、どんなだよ」

零様は、ベッドの上でボクサーパンツ一枚になって座っている。

私は零様の前で、正座をして床に座っている。

「前にいた学校で、化学と生物を担当していた女性教師なんですけど、薬の生成や研究が趣味で、よくオリジナルの薬を作っては科学室を爆発させてました……」

「おいおい……」

「年は二十代前半と若くて、授業とかも分かりやすくて優秀なんですけど、薬などの話になったりなどすると性格が激変して……中々に困った人なんですよね……」

「マッドサイエンティスト、ってやつか？」

「そうですね。よくみんなから超優秀マッドサイエンティストって呼ばれてました」

「褒めてんのか貶してんのか、分かんねぇな」

「あはは……ですね」

「うぅ～。それよりさ、そろそろめちゃくちゃおしっこしたくなってきたんだけど……」

「あっ！？　す、すみません……！　我慢させてしまって……！？　では、失礼しますね……♡」

「あぁ」

私は零様のパンツを脱がせ、チンポを解放する。

「わぁ……♡　おしっこを我慢していても勃起するんですね……♡」

「あぁ。朝勃ちは大体がおしっこが溜まってるからなんだぞ？」

「そ、そうなんですね……では、私達女は、それをしっかりと鎮められるようにご奉仕させていただきますね！」

「あぁ、頼む。でも、まずは」

「はい♡　今すぐ、させていただきますね♡」

私は零様のチンポを優しく握り、前後に手を動かしシコシコする。
「くっ……やば……変な感じする……！」
「い、痛かったりしますか……！？」
「いや……痛いとかそういうのじゃなくて、気持ちいいんだけど、いつもとは違う気持ちよさと言うか……！」
気持ちよくなってくれてるんだよね……？
その証拠に、先っぽから我慢汁が溢れてる……♡
「ちろ……♡　でも、いつもと味が違う……？」
我慢汁を少し舐めると、もちろん美味しかった。
でも、いつもの味とちょっと違った。
いつもはしょっぱい感じの味なんだけど、今日のはしょっぱさの中に苦みと甘みが入ってるような……。
あれ？　この味って確か……。
「おしっこの味……？」
我慢汁の中におしっこの味が含まれてる……って事は薬の効果が出てきてるって事だ……！
「零様、このまま……」
「あぁ……できそうな気がする……！」
私は手コキをどんどん激しくしていく。
私が零様にお願いした変態的な望み。

それは、おしっこを顔面にぶっかけて溺れさせて欲しいと言うもの。

そして、手コキをしながらおしっこをぶっかけて欲しいと。

でも、零様が言うには、勃起したり手コキしながらの放尿はできないらしい。

絶対にできないと言う訳ではないらしいのだが、中々に難しいらしい。

それを聞いた私は、先程話していた女性教師が作ったお薬を零様に飲んでいただいた。

零様に飲んでいただいた薬は『超絶利尿剤Ωα＋（オメガルプラス）』と言う利尿剤。

とんでもない名前なので、どんな効果があるのか恐る恐る聞いてみたら――、

『あん？　んなもん決まってんだろ。おしっこが止まらなくなんだよっ♪　一度出したらもう止まらねぇ。一時間は出っぱなしだ。一度止まったとしても、数秒後にはすぐに出したくなる。その日はおしっこの事しか考えられなくなるんだ』

と、言っていた。

その女性教師も、男性を見たことも会った事もないので、男性に使った際の効果がどんなかは分からないと言っていた。

だから、正直怖かった。

零様に、よく分からない薬を飲ませてしまうなんて。

だから、できるだけいい効果が現れるのを願っていた。

その結果――、

「ごめん！　出るっ！」

じょばばばばばばばばばばばばばばばばばばばば！！！！

「んぶっ♡　んぷっ♡」

零様が射精……ではなく、おしっこを放出してくれた♡

手コキをしながら、おしっこを出してくれるなんて♡

「これやば……！　射精感があるのに、出てるのはおしっことか……！　初感覚過ぎてヤバい……！」

そう。薬の結果はよいもので、勃起しながらでも、手コキしながらでも、放尿ができている。

この薬は、男性に使うと、精液のかわりにおしっこが出るらしい。

「れいふぁま……♡　もっふぉいっふぁい、らひへふらはい……♡（零様……♡　もっといっぱい、出してください……♡）」

「あぁ……！　ってか、こんなの我慢なんてできねぇよ……！

我慢しようとしても、おしっこが止まらねぇよ……！」

私はチンポの手コキを続けながら、おしっこを顔面に浴びる♡

目を閉じているから、放尿している所は見れてないけど、顔全体におしっこがドバドバ当たっている♡♡♡

ザーメンとは違う感触……♡

ドロっとしたザーメンと違って、水が当たってるような感じで、でもとても温かくて……ううん♡
とっても熱くて……♡　臭いも最高で……♡

ザーメンを顔面に浴びるのも大好きだけど、おしっこを顔面に浴びるのも最高……♡♡♡

口を開けると、大量のおしっこが口の中に入って来て、それを飲み込むと喉奥にまでおしっこが広がって……♡♡♡

もう、最高すぎる……♡♡♡

普通に飲尿するのも好きだけど、こうして顔面におしっこをいっぱい浴びながら飲むのも最高すぎる……♡♡♡

「ごくごくごく……♡♡♡」

それに、これ本当にすごい……♡
いつもご奉仕させていただくみたいに手コキしてるのに、出てくるのはおしっこで……♡♡♡

「ごくごくごく……♡♡♡」

もっと、もっといっぱい浴びたい飲みたい♡♡♡

私は、手コキをより激しくした。
すると、おしっこの勢いが増し、私の顔を埋め尽くしてきた♡♡♡

これ、息できない……♡♡♡

でも、それがいい……♡♡♡

零様のおしっこで、溺れて死にたい……♡♡♡

「ごぼごぼ……♡♡♡♡♡」

この後、零様の放尿は数時間続いた♡♡♡

第１３４話　【飲尿ＳＰ！】玲奈は手コキ放尿で溺れたい♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

ただ飲尿するのではなく、大量のおしっこを顔面に浴びながらの飲尿。

映像を頭に浮かべながらお読みいただけると、より興奮していただけるかと思いますので、お好きなようにお楽しみください……♡

玲奈の知り合いである『超優秀マッドサイエンティスト女性教師』ですが、読者の方にいただいたアイデアでございます！

まだ【特別版！】で書けておらず、投稿もできていないのですが、本編の方に先んじて登場させていただきました！

これを読んで、どういうキャラになるのか、どう零と関わってくるのか、楽しみにしていただけますと幸いです……！

次話は、スパンキングが大好きな後輩女子であるあの子……です！

誰だか分かりましたかね？

まだまだ続く【飲尿ＳＰ！】を、沢山楽しんでください！

第135話　【飲尿SP！】光はスパンキングをされながら、おしっこをいただきたい♡♡♡♡♡♡♡

「あ、あの～……先輩……わ、私はこれからどうなるんでしょうか……？」

「どうなるのかは、光、お前自身が決めろ」

「え……」

私は今、先輩のお部屋にいた。

先輩のお部屋の床で正座をし、ベッドの上に座る先輩にお伺いをたてた。

でも、ハッキリとした答えが返ってこず、私は少し、戸惑っていた。

なぜ、私が先輩のお部屋にいるのかと言うと、それはほんの数分前に遡る。

「はぁはぁ……♡」

私は、トイレに行こうと廊下を歩いていた。

玲奈さんの部屋の前を通ろうとしたら、中から先輩の声が聞こえてきたので中を覗いてしまった。

すると、そこには玲奈さんに手コキされて気持ちよさそうに射精……ではなく、おしっこをしている先輩がいた。

玲奈さんは手コキを続けながら、永遠と出続けるおしっこを幸せそうに顔面で受け止めていて、口を開けて美味しそうに飲んでいた。
先輩は、膝を震わせながらも気持ちよさそうにそれを受け入れていた。

（すご……♡　　な、何あれ……♡）

私は、すっかりその光景に夢中になり、トイレに行くことなど忘れ見入ってしまっていた。

興奮し過ぎて愛液は、膝にまで垂れていた。

そんな光景に見入っていると、先輩と目が合った。

「っ！？」

目が合った瞬間、先輩は妖しい笑みを浮かべた。
私は見てしまった罪悪感から、その場から逃げ出してしまった。

それから数分後、部屋に先輩からの呼び出し音が鳴り、私は慌てて先輩の部屋へと向かった。

そして、今に至る。

「さっき、見てたよな？」
「あ、ぁぃ……」
「なんで逃げた？」
「お、怒られると思って……」

「別に怒りはしないだろ」
「でも……先輩、怖い笑顔をしてたから……」
「あぁ～。あれな。あれはお前も巻き込んでやろうかなって思ってたんだよ」
「っ！　ほ、本当ですか！？　怒ってたんじゃなくて……！？」
「あぁ。だから、今からお前にもしていく」
「は、はい……！　お願いします……！　私に、逃げたお仕置きをしてください……！」

先輩からのお仕置き、嬉しい……♡

♥♥♥

「まず、俺は飲んだ薬のせいでおしっこがしたくてしたくて堪らない。だから、今から光にはおしっこを飲んでもらう。いいな？」
「はい♡♡♡　先輩のおしっこならいくらでも飲めます♡♡♡
沢山私に出してください♡♡♡」
「なら、次はどうやって飲ますかだけど……シックスナインの体勢で、お前のケツを叩きながら喉奥に放尿しようと思う」
「わぁ～♡♡♡　すっごく嬉しいです♡♡♡　お尻を叩きながら飲ませていただけるなんて……♡♡♡」
「喜ぶのは違うだろ？　これはお前へのお仕置きだ。喜んでいい状況じゃない」
「あっ……！？　す、すみません……つ、つい嬉しくて……」
「まぁいい。ほら、上に乗れ」
「は、はい……」

私はベッドの上で仰向けになる先輩の上に覆いかぶさる。
四つん這いになり、先輩の顔の方にオマンコを向け、先輩のおちんちんの方に顔を向ける。

目の前に先輩のおちんちんがぁ〜♡♡♡
最高過ぎる……♡♡♡

今から、お尻を叩かれながらここからおしっこを出していただけるんだ……♡♡♡

「先輩……く、咥えてもいい、ですか……？」
「あぁ、いいぞ。今は薬の影響で勃起しててもおしっこを出せるから、好きなだけ咥えて舐めろ」
「っ♡♡♡　ありがとうございます♡　いただきまふ……♡♡♡」

ん〜〜〜〜〜♡♡♡♡
先輩のおちんちん、やっぱり最高〜〜〜♡♡♡♡♡

口に含んだだけなのに、私、軽イキしちゃった……♡
先輩にバレていませんように……。

「光。お前今、軽イキしただろ？」

バレてた〜〜〜！？

「ふぁ、ふぁい……ふみまへん……」
「まぁいい。今からケツを叩きまくりながら放尿するから、しっかりと飲めよ？　一滴でもこぼしたら許さない」
「ふぁい……！」

ついに始まるんだ……♡♡♡

パチンッ！！！

「んん～～～～～♡♡♡♡♡」

来たぁぁぁぁ♡♡♡

先輩のスパンキングぅぅぅ♡♡♡♡♡

「んぷっ♡」

お尻を叩かれた瞬間、口の中でおちんちんがビクンと跳ねて、おしっこが飛び出して来た♡♡♡

まるで射精する時のように、ビュクと熱い液体が口の中……ううん、喉奥に直接注がれた♡♡♡

「おいひいいいいい♡♡♡♡　んん～～～～～♡♡♡♡」

バチィィンッッ！！！　バチィィンッッ！！！！

おしっこを味わっていると、先輩が連続してお尻を叩いてきてくださる♡♡♡

私は嬌声を上げながら、口の中に出され続けるおしっこを味わっていく♡♡♡

喉奥に直接注がれるので、口の中に溜めることができず、一気に飲み込んでしまう。

でも、それが気持ちよくて、心地よくて、もっともっと注いでほしいと思ってしまう♡♡♡

一気に放出されるのではなく、小刻みにおしっこが喉奥に注がれ

るので、次は次はと期待してしまって、注がれる度に、オマンコを濡らしてしまう♡♡♡

「んっく♡　んっく♡　んっく♡」

バチィィンッッ！！！　バチィィンッッ！！！！　バチィィンッッ！！！！！

「んん～～～～♡♡♡♡　ん～～～～～♡♡♡♡　ふ～～～～～♡♡♡♡　んふ～～～～～♡♡♡♡」

お尻を叩く力が、どんどん強くなっていく♡♡♡♡

「こんなの序の口だからな？　もっと強くしてくから、覚悟しろよ？」

「ふぁ、ふぁい……♡♡♡」

これよりももっと強くなるの……♡♡♡

私、どうなっちゃうんだろう……♡♡♡

♥　♥　♥

「っ……♡　っ……♡　っ……♡　っ……♡」

「あ～あ、全部飲めなかったか～」

私は今、ベッドの上で四つん這いの状態で、おしっこまみれの全身をビクつかせながらアヘ顔をしてしまっていた。

「あっ……♡　あっ……♡」

先輩のスパンキングは、どんどん強くなっていき、途中からおちんちんを咥えている事ができなくなってしまっていた。

そうなると、おしっこを飲むことができなくなり、顔におしっこがいっぱいかかってきて、どんどん息ができなくなっていった。

そして、先輩が立ち上がり、私が四つん這いになった体勢の後ろに立つと、両手を使って数時間スパンキングをし続けてくださった……♡

その間もおしっこは出続けているため、私のお尻だけでなく、全身におしっこがかかってくる……♡♡♡

私はもう途中から意識を失っており、どれだけの間スパンキングをされていたか分からなかった。

気がついたらスパンキングが終わっており、先輩の放尿も終わってしまっていた。

「なぁ光」

「っ……♡　っ……♡」

私はヒューヒューと空気を漏らしながら、先輩の言葉に耳を傾ける。

「俺の命令通りおしっこを全部飲めなかったから、罰ゲームを与えなきゃな」

罰ゲーム……？

「これから数日間、おしっこ禁止な」
「っ！？」

そ、それって先輩が許可しない限り、おしっこできないって事……！？

「ほ、ほれは……」
「なんだ？　口答えか？」
「ひ、ひえ……」
「今日はまだしてもいいから、今日中に出し切っとけよ？　明日から放尿禁止だ。いいな？」
「ふぁ、ふぁい……」

この罰ゲーム……。

最高かも～～～♡♡♡♡♡

私はこの後、一週間は放尿を許してもらえなかった。

キツかったけど、最高の罰ゲームだった……♡♡♡

第１３５話　【飲尿ＳＰ！】光はスパンキングをされながら、おしっこをいただきたい♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

飲尿ＳＰと謳っておきながら、飲尿シーンが少なく申し訳ございません……！

ですが、スパンキングの方などで妄想を膨らませながら楽しんでいただけますと幸いです……！

光への罰ゲーム、いずれどこかで書けたらなぁと思っておりますので、もし見たいと思われた方がいらっしゃいましたら、お教えいただけますと幸いです……！

次話は遊園地で働く、あの……？　となっております！

誰だか分かりましたかね？

次話がどんな飲尿回になるのか、来週をお楽しみに～♪

第１３６話　【飲尿ＳＰ！】美結はおしっこ漬けを味わいたい♡♡♡♡♡♡

「ふわぁ～……ぁ？　　あれ、美結？　　早いな」
「あ、零様。おはようございます♪」
「おはよう。どうしたんだ？　　キッチンに立ってるなんて珍しいじゃん。しかもこんな朝早くから」
「今日はちょっと朝から仕事が入ってまして……軽めにお弁当を作ろうかと」
「なるほどな。だったら言ってくれたら俺作ったのに」
「い、いえ！？　　私なんかの為に、零様の時間を奪い、お手を煩わせる訳にはいきません……！？」

そんな事をしては、他のみんなに何を言われるか……。

「全く。お前達は自己肯定感低すぎだろ。私なんかとか言うな。俺にとって、お前達は大切な人なんだからな？」
「れ、零様……♡」
「そら、俺が作ってやる！　　何が食べたい？」
「で、ではお言葉に甘えて……」
「おう！　　どんと来い！」

ちょっと、ワガママになってもいいかな……？

「あの、零様……」
「ん？」
「一つ、お願いしてもいいでしょうか……？」
「ん？　　あぁ、一つと言わず、何個でもいいぞ！」
「で、では……あの……」

私は、とある事をお願いした。

♥♥♥

「ふぅ～……。こんなもんかな？」

私の朝からの仕事。それは、遊園地の園内の掃除だった。
ローテーションで担当が決まっており、今日は私だった。
実際は、私と先輩の二人で行っている。

「大村、終わった？」
「はい。ちょうど今、終わりました」
「よし。じゃあ休憩にしよう」
「はい」

私と、先輩の榛名（はるな）都（みやこ）さんは、朝の仕事を終え、休憩の為にスタッフルームへと向かった。

「よいしょ～！　あ～疲れたね～」
「はい。やっぱりこの朝の仕事は、一番疲れますね」
「ね～。広い園内を二人で掃除しなきゃいけないなんて、ブラックよブラック」
「あはは。確かに」

私と先輩は、向かい合うようにして机を挟んで椅子に座る。

「さてと、カップラーメンでも作りますかね～」

そう言って榛名先輩は、持参したカップラーメン（しょうゆ味）

にお湯を注ぎ始める。
「じゃあ、私も……」
私は、零様が用意してくれたランチバックからおにぎりを取り出す。
「あれ？　自炊始めたん？」
お湯を注ぎ、ペットボトルのお茶を一緒に持って戻ってきた先輩が、椅子に座りながら尋ねてきた。
「自炊……ではないんですよね」
「え！？　も、もしかして、か、彼氏！？」
「彼氏……と言うより、ご主人様ですね♡」
「その顔……完全に発情したメスの顔じゃん……え、マジで？　隷属してるってこと？」
「はい♡　私は性奴隷になって、ご主人様にご奉仕させていただいてます♡　ご主人様のおちんちん、最高なんですよ～♡　私、ご主人様専用の精液タンスになっちゃいました♡」
私が顔を綻ばせながら言うと、先輩は項垂れながら――、
「あ～マジか～……！　後輩に先越されるとかキッツ……私もご主人様欲しい～～～！　もしかして、そのおにぎりって……」
「はい♡　ご主人様が作ってくださったんです♡」
「か～！　羨ましい！」
「んふふ♪　いただきます♡」
私はおにぎりを包んでいるラップを外し、おにぎりを一口食べる。

「ん～～～♡♡♡　美味しい～～～♡♡♡」
「ん？　ラップで包まれている時はよく分かんなかったけど、なんか、白くね？　まぁ、白米だから白いのは当然なんだけど、普通の白米よりも白いって言うか……それに、なんか臭いが……？」
「気づきました？　これ、味付けが精液なんです♡」
「なっ！？　ま、マジか！？」
「はい♡　ご主人様にお願いをしたら、快く引き受けてくれて♡」

ちなみに、このお願いは本来のお願いではない。

「マジかよ……いいなぁ～……羨ましすぎる……」
「二つあるんで、一つ食べます？」
「い、いいのか！？」
「はい♡　ご主人様の精液の味の良さを広めるのも、性奴隷の努めですから♡　どうぞ♡」
「あ、ありがとう……ごくっ……じゃ、じゃあ、いただきます……」

先輩が精液おにぎりを一口食べる。

「んっ！？　な、なんだこれ！？」
「どう、ですか？」
「めっちゃ美味い！！！　今まで食べてきたおにぎりの中でダントツ！　こんな美味いおにぎり食ったら、他のおにぎりにはもう戻れないぞ……あむあむ……！」

先輩は、よっぽど精液おにぎりが気に入ったのか、カップラーメンの存在をすっかり忘れ、精液おにぎりに夢中になっていた。
持ってきたお茶すら飲まず、ひたすら精液おにぎりを頬張る。

「私も食べよっ♡」

先輩が食べている姿を見たら、自分ももっと食べたくなってきた。なので、私も飲み物を飲んだりもせずに精液おにぎりを頬張った。

二人共、精液おにぎりを食べ終えるまで無言だった。

♥　♥　♥

「大村、お昼休憩行こう」

「あ、はい！」

精液おにぎりを食べてから、私達は仕事に取り掛かった。

そして、あっという間に時間は過ぎ、時刻はお昼。

いや、実際にはお昼はとっくに過ぎている。

スタッフの休憩はバラバラなので、その時の状況次第で取れるタイミングが変わる。

私と榛名先輩は、お昼過ぎにようやく休憩を取ることができた。

ちなみに、あの精液おにぎりを食べてから、私と榛名先輩の距離はグッと近づいた。

これまでももちろん仲は良かったのだが、二人だけの秘密ができたので、共犯者意識が働いて、気づけば今までよりも仲が深まっていた。

「お昼ももしかして……」

「はい♡　ご主人様が作ってくださいました♡」

「かぁ～！　いいなぁ～！」

「少し食べます？」

「いいのか！？」
「はい♡　あ、でも、精液入りではなく、別のなんですけど」
「別の？」
「はい♡」

私はお弁当箱を出し、蓋を開ける。
すると、独特の臭いが一気に広がった。

「そ、それって……」
「はい♡　おしっこ漬けです♡」
「っっっ♡♡♡♡♡」

そう。私が零様にしたお願い。それは――、
おしっこ漬けしたお弁当が食べたい。

だった。

ご飯、おかず、デザート。
その全てにおしっこをかけ、ひたひたに浸し、おしっこ漬けにする。

零様のおしっこが大好きな私からすると、ご褒美でご馳走でしかない♡

「先輩は、おしっこの方は大丈夫ですか？　もし無理そうだったら……」
「大丈夫！　男性様のおしっこも精液も全部飲みたいって思ってたから！」
「ふふ♡　そうですか♡　それじゃあ……どうぞ♡」

「あ、ありがとう……」

私は、蓋の上にご飯とおかずを置き、先輩にあげる。

「い、いただきます……」

先輩が恐る恐る、おしっこ漬けのご飯を口に含む。

「どうですか……？」

「う、う、う……」

「う……？」

先輩が下を向いてプルプル震えている。ど、どうしたんだろう……。

「うま～～～～～～～～～～～～～～～～い♡！♡！♡！」

「っ！？」

突然、先輩がそう叫んだ。

「なんだこれ！　美味すぎる！　ご飯の甘さにおしっこのほんのりとした苦みや酸味なんかが混じって、咀嚼する度に美味さが口に広がって、鼻腔も口腔も幸せになる♡♡♡」

どうやら気に入ったようだ♡

「ふふ♡　よかったです♡　私も食べよう♡　いただきます♡」

私も早く食べたい♡

私は、おしっこ漬けのご飯を口に含む。

「んっ♡♡♡♡」

口に含んだ瞬間分かった。

あ、これ美味しい♡♡♡

咀嚼する前から美味しいのが確定してるのなんて、中々ない。

「もぐもぐ……♡」

あ、本当だ〜♡♡♡

先輩の言う通り、咀嚼する度におしっこの味が口いっぱいに広がって、息をする度に鼻の方にもおしっこの臭いが行き渡って……♡♡♡

「美味しすぎる……♡♡♡♡」

ご飯だけじゃなく、おかずもとっても美味しくて、私達はまた、無言でおしっこ漬けお弁当を食べ進めた。

帰ったら零様にお礼を伝えて、性奴隷候補がいることも伝えて、お金（1万）を払って、沢山ご奉仕させていただかなきゃ♡♡♡

最高のお弁当をありがとうございます♡

大好きな零様♡♡♡♡

第１３６話　【飲尿ＳＰ！】美結はおしっこ漬けを味わいたい♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

飲尿と言っていたのに、実際は飲まずに食べる。
これでは飲尿ではなく食尿（しょくにょう）ですね♡

新たなジャンル？（僕の知識不足なだけで、すでに存在していたら、すみません……）として、楽しんでいただけましたら幸いです♪

榛名　都と言うお名前は、以前読者の方からいただいていたお名前でございます！
今回、美結の職場の先輩の名前として、使わせていただきました！

しっかりと名前があるキャラと言うことは……？
今後、このキャラがどう関わってくるのか。
その辺りも楽しみにしていてくださると嬉しいです♪

次話は、母乳を吹き出すあの子……となっております！
母乳と言ったらもう、あの子しかいないですよね♡

次話がどんな飲尿回となるのか、お楽しみに♪
それでは、また来週〜♪

第137話　【飲尿SP！】澪とのエッチな飲み合いっこ♡♡♡♡♡

「零様、お待たせいたしました」

私は零様に呼ばれ、零様のお部屋を訪れていた。

零様は椅子に座り、机に向かって何かをなされていた。

ものすごい集中力で、私がノックをしても、お声をかけても全く反応なされない。

「何をされてるんだろう……？」

零様が何をしているのか気になった私は、零様に近づき、背後から手元を覗き込む。

「ん？」

零様は、おっぱいに取り付けて乳首を弄ったりするような玩具に、何かをしていた。

正直、何をしているのか、私には分からなかった。

「ん？　　お、澪。来てたのか」

「はい。すみません、勝手に入室してしまって……。ノックをしても応答がなく、お声がけしても反応がなかったので……」

「いや。俺こそごめん。呼んでおいて作業に集中するなんて」

「い、いえ……！　　零様が謝れる事は何もございません……！

零様は何も気にせず、お好きな事をお好きな時にしていてください♡」

「ありがとう」
「それで、それは何をなさっているのか、お聞きしても……？」
「うん。これは、乳首弄りをする玩具なんだ」
「乳首弄り……あまり使った事はないのですが……」
「まぁ、滅多に売ってないからね。アダルトショップにもアダルトサイトにも全然なかったから、見つけるのに苦労したよ」
「それを今日はお使いに？」
「うん。でも、ただ使うだけじゃない」
「ん？」

零様は椅子から立ち上がり、私と向き合う。

「これ、着けるな」
「は、はい」

そう言って零様は、見たこともない玩具を私のおっぱいに装着し始める。

「どう？」
「へ、変な感じです……まるで、おっぱいに衣類を着けているような……でも、乳首に玩具の突起がぴったり密着していて、なんだかこれだけで気持ちよくなっちゃいます……♡」
「流石は変態。でも、それだけで気持ちよくなってたら、これからすることに耐えらんねぇぞ？」
「ふぇ？」

零様は、おっぱいを覆うカップのような先端に付いたチューブを持ち、先っぽに吸い付く。

「っ！　　あああああああああああ♡♡♡♡」

零様がチューブの先端を吸った瞬間、乳首から母乳が放出された。
それが、いつも母乳を搾られる時よりも気持ちよくて、私は思わず嬌声をあげてしまった。

「ん～。やっぱり澪の母乳は美味いな。甘くてなめらかで、ずっと飲んでいたい」
「はぁはぁ……♡　あ、ありがとうございます……♡　零様に、んっ♡　そう言っていただけて、んっ♡　よかったです……♡」

私は、吸われていないのにずっと母乳が出っぱなしになってしまっていた。
その為、母乳が乳首から出る度に、喘ぎ声を漏らしてしまっていた。

「うん。改造は上手くいったな」
「も、もしかしてこれ、零様が？」
「あぁ。市販のやつを買って、チューブを取り付ける改造をちょっとな。これでやりたい事があって」
「やりたい事？」

零様のやりたい事。それは、とっても素敵なものでした♡♡♡

♥♥♥

「ぢゅる……♡　れる……♡　んっ……♡」

私は今、シックスナインの体勢で零様のおちんちんを舐めさせていただいている♡

でも、私が零様を責めている一方、零様も私を責めている。
クンニ……ではなく、おっぱいに繋がったチューブの先端を口に含み、激しく吸っている。
しかも、二本同時に吸ってくださっているので、気持ちよさが半端じゃない。

「ぷはぁ♡　れ、零様ぁ……♡　そ、それ、気持ちよすぎてご奉仕に集中がぁ……♡」
「ちゅーちゅーちゅー……！　ぷは。駄目だろ。ほら、しっかりと咥えろ」
「ふぁい……♡」

私はおちんちんで頬を突かれ、怒られてしまった。
零様に怒られると、さらに快感が増してしまう……♡

「じゅる……♡　れる……♡　んっ……♡　んんっ……♡」

フェラに集中したい。しっかりとご奉仕したい。
でも、乳首を吸われるのが気持ちよすぎて、全く集中できない。
しかも、乳首の先端が勝手にグワングワン動くので、母乳がひねり出されてしまう。

「ぷはぁ♡　らめぇぇぇ♡♡♡　イックぅぅ♡♡♡」

私は、零様よりも先に気持ちよくなってイッてしまった。
それでも零様は、乳首を吸うのを止めない。
むしろ、吸い付きが強くなった。

「れ、零様ぁぁぁぁぁぁ♡♡♡」

「俺ももう我慢できねぇわ。出すぞ」
「ふぇ……？」
じょばばばばばばばばばばばばばばばば！！！！！
「んひゃぁ♡♡♡」
零様のおちんちんに顔を向けた瞬間、おちんちんから精液ではなく、おしっこが出てきた。
あれ？　勃起してるとおしっこってできないんじゃなかったっけ……？
でも、今出てるのは紛れもなくおしっこだし……。
「玲奈に飲ませてもらった薬の影響で、俺は今、勃起してても射精の時でも、おしっこできるようになってるんだ。だから、おしっこを味わえ。俺はお前の母乳を味わうから」
「はい♡　ありがたく味わわせていただきます♡♡♡　あんむ♡」
私は、放尿中のおちんちんを咥え込む。
そうすると、口の中に大量のおしっこが入ってくる♡♡♡
喉奥にどんどんおしっこが入っていって、一気に口が幸せになっていく♡♡♡
母乳を飲まれながらおしっこを飲める日が来るなんて……♡♡♡
最高過ぎる……♡♡♡

「多分、めちゃくちゃ出ると思うから、口を離すなよ？　　んで、全部飲み干せよ」
「ふぁい♡♡♡」

畏まりました！　　私、絶対に零様のおしっこをこぼしたりしません！
一滴残らず、飲ませていただきます！

この後、零様の放尿は一時間以上続いた。
その間、私も母乳を吸われ続けた♡♡♡

おしっこだけでお腹いっぱいになっちゃった♡♡♡

幸せすぎ♡♡♡　　最高♡♡♡

第137話　【飲尿SP！】澪とのエッチな飲み合いっこ♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

中々に短い内容になってしまったのですが、少しでも楽しんでいただけておりましたら幸いです……！

ちなみに、澪が胸に装着した玩具ですが、ブラ型の乳首弄り玩具です。

ブラを着けるように胸に取り付け、先端に付いているもので乳首を刺激する。

調べたら、実際にそういう玩具があるみたいです。

使う相手はいませんが、こういった風に作品に反映できるので、資料調達として手元に置いてみてもいいかもですね♡

（いつか、大人の玩具をコレクションしてみようかな……）。

次話はメイド服を着た片目隠しのあの子……です！

誰だか分かりましたでしょうか？

次はどんな飲尿になるのか。楽しみにしていてくださると嬉しいです！

それでは、次話をお楽しみに～♪

第138話　【飲尿SP！】ユイはオマンコにおしっこが欲しい♡♡♡♡♡♡♡

「ふわぁ～……あぁ……」

澪の母乳を飲みまくり、澪に放尿しまくった後、澪が気を失ったのでベッドの上で寝かせたまま、俺は腹が減ったのでリビングに向かった。

「ん？」

リビングに向かうと、キッチンの方から物音が聞こえてきた。誰かいるのか。そう思ってキッチンに行くと、そこには料理をしているユイがいた。

全裸にエプロン。裸エプロンと言う男の夢とロマンが詰まった最高にエロい格好で料理をしている。

背後からだとユイのデカいケツが丸見えで、最高にエロい。Mカップのおっぱいは、横乳の主張も半端じゃなく、後ろからでも横乳が見えてしまっている。

「エロいな……」

俺は、ユイに気づかれないくらいのボリュームで小さく呟いた。

そして、もう我慢ができなくなったのでユイを犯す事にした。今の俺は、射精時に精液でなくおしっこが出るので、中出しをする時はおしっこになる。

果たして、おしっこを中出しされたらユイはどんな反応を示すのだろうか。

気になった俺は、それを試してみることにした。

「ユ〜イ」

「きゃんっ♡　　れ、零様……♡　　どうされましたか？」

「うん。さっきまで澪とヤッててさ。あいつが気絶して、丁度腹も減ったから飯食いに来た」

「そうでしたか。丁度お食事を作ってお届けしようと思っていたんです♡」

「お。グッドタイミングってやつか」

「はい♡　　そ、それより……その……」

「ん？」

「お、お尻に当たってるのって……♡」

「なんだと思う？」

後ろからユイを抱きしめながら、意地悪をするように尋ねる。

「お、オチンポ様……ですか……♡♡♡」

「正解。どうしてほしい？」

「そ、その……で、できれば、い、挿(い)れて欲しいです……♡♡♡

準備はいつでも万端なので、お好きなタイミングで挿(い)れられます……♡」

「そうか。じゃあ、お言葉に甘えて！」

「んっ♡　　んんぅぅぅぅぅ♡♡♡」

俺は、一切の遠慮なく、チンコをマンコの膣(なか)にぶち込んだ。

「ふぅん……♡♡♡　　ああ……♡♡♡」

「どうした？　めっちゃ感じてんな」
「ひ、久しぶりだったので……♡♡♡　零様のオチンポ様が、いつも以上に気持ちよくて……♡♡♡」
「そっか。そう言えばユイとは全然してなかったな。悪いな」
「いえ……♡♡♡　私は零様のお側にいれる事が何よりも幸せなので、何もお気になさらないでください♡♡♡　零様は、犯したいなと思った時に、私を犯してください♡♡♡　それが、何よりの幸せですので♡♡♡」
「そっか。ありがとうな。じゃあ、今はめちゃくちゃに犯しまくってやるよ！」
「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡♡　オチンポ様が♡♡♡　オチンポ様が奥まで届いてぇ♡♡♡」
「気持ちいいか？」
「は、はいぃぃ♡♡♡　気持ちいい♡♡♡　ものすごく気持ちいいですぅぅ♡♡♡♡」

ぶしゅ❤❤❤　ぷしゅ❤❤❤　ぷしゃぁ❤❤❤

「ん？　潮吹いてんのか？」
「は、はいぃ……♡♡♡　零様のオチンポ様が気持ちよすぎて、突かれる度に勝手にお潮が吹き出してしまってます……♡♡♡」

ユイは、俺が子宮（おく）を突く度に潮を吹いていた。
大量に吹き出す潮は、シンク下にある棚にかかり、あっという間に棚はビチャビチャになっていた。

「あ〜あ、棚がユイの潮でビチャビチャだ」
「す、すみません……あ、後でお掃除しますのでぇぇぇ♡♡♡」

俺はユイが喋ってる間も、後ろから激しく腰を打ち付ける。

ユイはその度に潮を吹き出し、あっという間に床に水溜りを作った。

「そろそろ俺も出そうだ」

「はい♡　はい♡　はいいぃ♡♡♡　いっぱい♡　いっぱい出してくださいぃぃぃ♡♡♡」

「あぁ。出すぞ、中に！」

おしっこをな。

「はいぃぃぃぃ♡♡♡」

「出るっ！」

俺は、ユイの膣（なか）へと放尿を開始した。

じょばあああああああああああ！！！！！！！

「んぇ！？　な、何！？　精液じゃないのがな、膣（なか）にぃぃぃ♡♡♡♡　んあああぁ♡♡♡♡　あちゅいの子宮に入って来て、イッちゃうぅぅぅ♡♡♡♡」

ぶしゃあああああああああああ❤❤❤❤❤

じょばばばばばばばばばばばばばば❤❤❤

「あああああああああ♡♡♡♡」

ユイは、おしっこを中出しされながらイッたらしく、今までよりも大量の潮を吹き出した。

ビチャビチャなシンクに潮が当たり、そこからすでに溜まっていた水溜りに潮が注がれ、とんでもなくエロい音が鳴っている。

その音に、より興奮した俺は、さらに大量のおしっこをユイの膣(なか)に注ぐ。

「あああああ♡♡♡♡♡　あちゅいのいっぱい、気持ちいいいいいいい♡♡♡♡♡♡♡」

おしっこの中出しがよほど気持ちいいらしく、ユイは足をガクガク震わせ、潮を吹きまくりながら何度も絶頂を迎えていた。

俺の中出しも長い間続き、しばらくの間繋がったままだった。

♥　♥　♥

「はぁはぁ……♡♡♡」

すごかった……♡

零様とのエッチはいつも気持ちいい。中出ししてくだると頭がパチパチするほど気持ちよくなる。

でも、今日のはいつもとは違った。

精液ではない何かが膣(なか)に入ってきて、それがすごく気持ちよくて……♡

子宮に注がれれば注がれるほど、気持ちよさが倍増して、イクのが止まらなかった♡♡♡

それに、お潮も元々止まらなかったのに、量も勢いも増して、全然止まってくれなかった。

あれは一体、なんだったんだろう……？

「れ、零様……中に出していただいたのは一体……？」

「自分の膣から出てくるもの、舐めてみれば？」
「はい。んちゅ……」

私は、両膝を立て、壁に寄りかかった状態で座っている。零様はもちろん椅子に座っていただいている。
零様に尋ねるとそうおっしゃっていただけたので、私はオマンコから逆流してくる液体を指につけ、それを口に含む。

口に含んだ瞬間、その答えはすぐに分かった。

「れ、零様のおしっこ！」
「正解」
「わぁ～♡♡♡　零様、私の膣におしっこを中出ししてくださったんですか♡♡♡　嬉しいですぅぅぅ♡♡♡　ずっと夢見ていた事だったので、していただけて本当に嬉しいです……！　ありがとうございます……！」

私は、正座して零様に頭を下げる。
この感謝の気持ちはしっかりと伝えないと。

「別にそこまでしなくても」
「いえ……！　本当に嬉しかったのと、貴重なおしっこを中出ししてくださったので、そのお礼はしっかりとお伝えしないと。これでも伝えきれないくらいです」
「そ、そうか……？　まぁ、喜んでくれたならよかったよ。出したら余計腹減って来たな」
「あ、お、お食事にいたしましょう！　すぐに準備できますので！」
「そうだな。頼む」

私は急いでお食事の準備を始めた。
零様をお待たせするわけにはいかないから。
十分かかっちゃった。反省しないと……。

「「ご馳走様でした」」

食事を終えた私達。
食器を片付けている時、零様が尋ねてきてくださる。

「なぁ、次は誰におしっこかければいいと思う？」
「そうですね……リサ様の所へは行かれました？」
「いんや、まだ行ってない」
「でしたら、リサ様の所がよいかと。リサ様は零様のおしっこが大好きですから♡」
「そうだな。よし。そうするわ。んじゃあ、ちょっくら行ってくるな」
「はい♡　行ってらっしゃいませ♡」

零様は、オチンポ様を丸出しのまま二階へと向かわれた。

後ろ姿も素敵……♡♡♡
あ、駄目……♡　オマンコから零様のおしっこが……♡♡♡
「床に垂れたらもったいないですからね。お部屋に急いで戻って、零様のおしっこを保管しなければ」

私は急いで後片付けを済ませ、部屋に戻り、吸水性抜群の吸水シートで零様のおしっこを吸い取った。

オナニーをしないように拭き取るのが中々に苦戦しましたが、なんとか全て吸い取る事ができました。

これで、いつでも零様のおしっこの臭いを嗅いだり、零様のおしっこを舐めたりできます♡♡♡

「えへへへ♡」

宝物、いただいちゃいました♡♡♡

第138話　【飲尿SP！】ユイはオマンコにおしっこが欲しい♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

おしっこをここまで喜んでくれるなんて、嬉しいですよね♪
ユイは、元々仕えていた歩美より、零への忠誠心の方が大きいです。
なので、歩美に対してはとても冷たく接するようになりました。
そんな様子も、今後書けたらいいなぁと思っているので、楽しみにしていてくださると嬉しいです♪

次話は……って、もう本編内でバラしてしまっていましたね♪
次話はリサちゃんです！
どんな飲尿回となるのか、次話をお楽しみに♡

第１３９話　【飲尿ＳＰ！】リサへのオナニー鑑賞&おしっこぶっかけプレイ♡♡♡♡♡♡♡

「ん？　　あ、先輩！」
「よ。何してたんだ？」
「今、先輩が好きだって言ってたアイドルグループさんの歌を聴いてたんです」
「おぉ、そうか」
「はい♪」

先輩が来てくれた♡　先輩が来てくれた♡

しかも、おちんちん丸出しって事は、今からエッチな事をしてくれるって事……だよね……？
これは期待しちゃってもいいんですか……！

ドロォ……♡

「ん？　　おいおい何興奮してんだよ。愛液漏れてんぞ」
「あっ……す、すみません……！　　せ、先輩のおちんちん見たら、勝手に溢れちゃって……エッチな事してくれるのかなって、勝手に期待しちゃってごめんなさい……」
「いやまぁ、エッチな事をする為に来たんだから期待はしてくれていいんだけどさ」
「え！」

してくれるんだぁ……♡♡♡

嬉しいいいいいぃ♡♡♡♡♡♡

ドロォ……♡

「あ……♡」

「どんだけだよ」

また愛液が溢れちゃった……。

体育座りで壁に寄りかかってるから、溢れてるのが丸わかりで、ちょっと恥ずかしいかも……♡

「んじゃあ、早速するか」

「はいっ！」

♥♥♥

「はぁはぁ……♡♡♡　せ、先輩……？　いますか……？」

「あぁ。いるよ。目の前でチンコ勃起させてる」

「はぁ……♡♡♡　素敵……♡♡♡」

私は今、ベッドの上で壁に背中をくっつけ、両手を上に上げた状態で座っている。

でも、ただ座っているのではなく、両手は、壁に繋がれて拘束されている。

そして、目隠しをされ、何も見えない状態になっている。

足はM字開脚をしてロープで縛られているので足を伸ばしたりなどはできない。

すごい……ものすごく興奮する……♡♡♡

それに、オナニーも久しぶりだからすぐにイッちゃうかも……♡♡

今、私のクリにはローターが二個装着されており、オマンコにはクリに刺激可能な突起が着いたタイプのバイブが挿入されている（なのでクリへは三つの刺激がある）。
アナルには振動式ディルドが入っている。
乳首にもローターが装着されていて、片方に二個。計四つ着いている。

そして、その全てのスイッチを持っているのが先輩。
先輩の好きな時にこの全ての玩具を起動する事ができる。
い、いつ来るのか分かんなくて、ドキドキが止まらない……♡♡♡

「最近の玩具はすごいよな～。スマホと連動させて使えるんだもんな～」
「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」

右乳首のローターが動き出した。

「あああああ♡♡♡♡」

なんでだろう……見えてないだけなのに、ものすごく興奮して、いつも以上に感じちゃう……♡♡♡

「んんぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」

なんて思っていたら、アナルのディルドが動き出した。
突き上げてくるピストンタイプで、奥まで突き上げてくる。

「あああああ♡♡♡♡」

み、右乳首とアナル……どこを責められるか分からないからドキドキして……。

「気持ちいい♡♡♡♡」

「そらよかった。そんじゃあ、本格的なオナニー、開始だ」

「んあああああああああ♡♡♡♡♡」

残りの左乳首、クリ、オマンコの玩具も動き出した。

「あああああああ♡♡♡♡　こ、これ駄目ですぅぅぅぅ♡♡♡♡気持ちよくておかしくなっちゃうぅぅぅぅ♡♡♡♡」

あれ？　先輩の声が聞こえない……。

先輩……？　ど、どこに行っちゃったの……？

「んぼぉ！？」

私が不安になっていると、突然口の中に太くて硬いものが入ってきた。

それが先輩のおちんちんであるという事は、すぐに分かった。

なので、私は舌で亀頭を舐め回し、一気に亀頭を吸い上げる。

「ぢゅるるるるるるるるるる♡♡♡♡♡」

我慢汁が溢れてきて、あっという間に口の中が我慢汁で満たされていく……♡♡♡

美味しい……♡♡♡

やっぱり先輩の我慢汁、美味しい……♡♡♡

早く、精液飲みたい……♡　おしっこ飲みたい……♡

そう思っていたら、突然、口からおちんちんが抜かれてしまった。
「え……！？」
おちんちんを求めて、私の口は開きっぱ。
そして、舌もおちんちんを求めて外に飛び出してしまう。
「お前は今、オナニー中だ。フェラとかはしちゃいけない」
「ほ、ほんな～……」
「口に入れたのは、ローション代わりに唾液が欲しかったからだ」
って事は、先輩は今、オナニーをしてるって事！？
み、見たい……！　先輩のオナニー見たいよぉ……！
「んんぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」
私の邪な気持ちがバレたのか、玩具達の強さが『強』に変わった。
「あああああああ♡♡♡♡　駄目♡　ダメダメダメぇぇぇ♡♡♡♡　イッちゃう♡♡♡♡　イッちゃいますぅぅぅ♡♡♡♡」
「いいぞ。イケ。俺もイクからな」
「はいぃぃ♡♡♡　先輩の精液、私にぶっかけてくださいぃぃぃ♡♡♡♡」
「出るっ！」
ぶしゃあああああああああ！！！
「んっ！？」

先輩の声が聞こえ、私は精液が来るのを待った。
でも、顔にかかってきたのは精液ではなくて、これは……。
「お、おひっほ！？」
な、なんで！？
おしっこって、勃起してたらできないんじゃ！？
それに、オナニーしてたらおしっこは最初にはでないんじゃ……！？
「あ～説明すんのめんどいから、とにかくおしっこ飲め。いいな？」
「ふぁ、ふぁい……♡♡♡」
そうだよね……♡♡♡
私なんかが考える必要なんてないんだ……♡♡♡
私はただ、先輩の精液やおしっこをいただいたら、それを一滴残らず飲み干す。それが性奴隷としての役目♡♡♡
「ひっはりとのまへへいはらひまふ（しっかりと飲ませていただきます）……♡♡♡」
私は口を開けて、顔にかかってくるおしっこを飲んでいく。
おしっこを飲みながらイッているが、玩具の振動は止まらないので、ずっとイキ続ける事になる。
なので、私は先輩のおしっこを飲むことに集中する。
「ごくごくごく……♡♡♡」

目隠しで何も見えないので、おしっこがどうやってかけられているのか分からない。
なので、どこにどうおしっこが跳ねているのかが分からないんだけど、おしっこがおっぱいや足に垂れているのは分かる。
もったいないとは思いつつも、私は口に入ってくるおしっこを飲み続ける。

「口にもやるよ」
「ごぼぼぼぼぼぼ♡♡♡♡」

さっきまでは顔にかかっているおしっこを飲んでいたけど、今度は口におしっこを注いでくれている。
なので、しっかりとおしっこを味わう事ができた。
やっぱり、先輩のおしっこは最高〜〜〜〜♡♡♡♡
ずっと飲んでいたいもん……♡♡♡
先輩のおしっこ、もっと、もっといっぱい飲みたい……♡♡♡

「まだまだ出るから、イキながらちゃんと全部飲めよ！」
「ぶぁい……♡♡♡」

この後、一時間くらいイキ続けながらおしっこをいただけた♡♡♡

♥♥♥

「じゅる……♡　れる……♡　ぢゅる……♡」

拘束を解除された私は、目隠しはしたままベッドに飛び散ったお

しっこや、自分の足やおっぱいについたおしっこを舐め取っていた。

「エロ……そんなにおしっこ欲しかった？」

「はい……♡♡♡　先輩のおしっこは何にも代えがたい最高峰なものなので……♡♡♡」

「そうか。じゃあ、もうちょっと飲むか？」

「い、いいんですか……？」

「あぁ。今日はリサで最後にしようと思ってたからな」

「嬉しいです……！　ありがとうございます……！」

私は再び拘束され、玩具責めも再開した。

さっきと違うのは、おちんちんを口の中にいただけて、直接喉奥におしっこをいただけた事♡♡♡

先輩のおしっこ、本当に最高でした♡♡♡

ちなみに、この後数時間はずっとイキ続けて、おしっこをいただいた♡♡♡♡♡

第１３９話　【飲尿ＳＰ！】リサへのオナニー鑑賞&おしっこぶっかけプレイ♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

零のおしっこが大好きなリサちゃん。

そんな彼女への飲尿プレイ。沢山興奮して、沢山楽しんでいただけておりましたら幸いです……！

次話は、零を甘やかしたい姉弟の……？　となっております！

誰だか分かりましたでしょうか？

誰の飲尿回になるのか、次話をお楽しみに～♪

第１４０話　【飲尿ＳＰ！】華は零を甘やかしておしっこをいただきたい♡♡♡♡♡♡♡

リサに放尿(だし)まくった後、俺は自室に戻って眠りに就いた。
澪はすでにいなくなっており、シーツも何もかもが綺麗になっていた。

なので俺は、部屋に着くなりすぐに眠りに就く事ができた。

「ん……？」

今が何時かは分からない。
でも、まだ夜中な気がする。

俺は、右隣に何かがいるのを察し、意識が少しずつ覚醒し始めていた。

腕に伝わる柔らかい感触、鼻をくすぐる柔らかく甘い香り、隣にいるだけで無条件で落ち着く心地よさ。
そして、股間に感じる気持ちよさ。

「姉ちゃん……？」
「ふふ♡　起こしちゃった？」

俺がゆっくり目を開けると、そこには全裸の華がいた。

俺の右隣に横になり、大きなＨカップのおっぱいを腕に押し当て、右手で俺の勃起したチンコを扱いている。

「ごめんね、起こしちゃって」
「ううん。大丈夫。それより、どうしたの？　まだ夜中だよね……？」
「うん。零ちゃんと一緒に寝たくて忍び込んじゃったんだけど、そしたら、おちんちんがとんでもなく大きくなってたから我慢できなくてシコシコしちゃったの……♡」
「そっか……もしかして、俺すでに何回かイってる？」
「うん♡　二回ね♡　ビックリしたよ。出てきたのが精液じゃなくておしっこだったから」
「あ～ごめん。しばらくは精液じゃなくておしっこが出るんだ」
「燐ちゃんの仕業？」
「ううん。玲奈がね。手コキしながらおしっこを顔面に浴びたいって言うからさ。その願いを叶えるためにおしっこできる薬をね」
「そっか。苦しくない？」
「うん。大丈夫。むしろ、みんなに沢山おしっこをあげる事ができて嬉しいよ」
「やっぱり零ちゃんは優しいね♡　じゃ、じゃあさ……お、お姉ちゃんにもおしっこ、く、くれないかな……？」
「もちろん。ってか、二回も出したのに飲んでないのか？」
「勝手に飲むのは違う気がして……」
「変な所で律儀だな。姉ちゃん、俺のおしっこ飲んでくれ」
「はい♡　喜んで♡♡♡」

そうして、姉ちゃんの甘やかし飲尿が始まった。

♥　♥　♥

「んふふ♡　おっぱいに顔を埋める零ちゃん、可愛い♡」
「ぷはぁ。可愛いか？」
「うんっ♡　零ちゃんは全部が可愛いんだけど、特に私のおっぱ

いに顔を埋めてぱふぱふしたり、乳首ちゅーちゅー吸ってる姿が何より可愛い♡」
「そんなに言ってくれるなら、これからいっぱい甘えようかな」
「うんっ♡　いっぱい甘えて♡♡♡　零ちゃんが満足するまで、好きなだけお姉ちゃんのおっぱいに甘えて♡」
「じゃあ、これから毎朝このおっぱいで起こしに来てくれよ」
「い、いいの……？　朝から零ちゃんにぱふぱふしたりして……朝から鬱陶しくない……？」
「全然。むしろ幸せすぎるくらいだ」
「っっ～～～♡♡♡　分かった！　これから毎朝、おっぱいで起こさせてもらうね♡」
「あぁ、頼む。っていうか、俺、そろそろ……」
「うん♡　いっぱいだひへ……♡♡♡」

私は零ちゃんにおっぱいを吸われながら、おちんちんをシコシコしていた。
先っちょから溢れる我慢汁を亀頭に塗りたくり、優しく、それでいて激しくシコシコしていると、零ちゃんが限界を迎えた。
なので、私は喋りながらおちんちんを口に含む。
すると、口に含んだ瞬間におちんちんがビクンッと跳ねて、お口の中に大量の熱い液体が放たれた。

いつもであればそれはプリップリの精液なんだけど、今は違う。

（本当におしっこが出るんだ……♡♡♡）

そう。私の口の中に放たれている液体。
それは、零ちゃんの神聖なるおしっこだった。

私達女にとって、それは『聖水』である。

それを無料で、しかも沢山飲ませてくれる零ちゃんは神様だ。
昔、ネットで見た情報だと、聖水がスポイト一滴分十万で売られていた。

さすがに高すぎだろうと思ったけど、需要があるのか買い手が引く手あまただった。

私はその情報を見てから、ずっと聖水を飲んでみたいと思っていた。
でも、機会はないだろうなぁとずっと諦めていた。
そんな時、私の最愛の弟がおしっこを飲ませてくれた♡

初めて飲んだ時は幸せすぎておかしくなるかと思った。
それから、私は零ちゃんの精液だけでなく、おしっこの虜になった。

「ごくごくごく……♡♡♡」

やっぱり、零ちゃんのおしっこすっごく美味しい……♡♡♡

紗夜ちゃんが小便器になりたいのも分かる。
だって、このおしっこを顔に、体に浴びて、口いっぱいに入れてくれる……♡♡♡

そんな最高で、幸せな事はない……♡♡♡

小便器はあと二つ。
私もさっきまでは小便器に立候補しようと思ってた。
でも、それをしてしまうと零ちゃんを起こしに行けなくなってし

まう。
それは駄目。零ちゃんが求めてくれてるんだもん。
私は私の。零ちゃんの姉として生きていかなきゃ♡
「ぷはぁ♡　零ちゃん、ご馳走様でした♡　おしっこ、美味しかった♡♡♡」
「そう？　ならよかった。もう終わり？」
「れ、零ちゃんさえよかったら、もっと続けたいし、もっと飲みたいんだけど……いい？」
「もちろん。俺ももっと……ん……ほうやっへぽふぽふひはいはらな」
「零ちゃん……可愛すぎる……♡♡♡　うん♡　いっぱいぽふぽふして……♡　零ちゃんが飽きるまでぽふぽふして♡♡♡」
「じゃあ、姉ちゃんも飽きるまで、俺のおしっこ飲んでくれ」
「うん……♡♡♡」
零ちゃんはこの後、二時間以上、ぽふぽふしてくれた♡
そして、私も二時間以上、おしっこを飲み続けた♡
零ちゃんのおしっこでお腹がいっぱいになるって、とっても幸せ……♡♡♡♡♡♡♡
♥　♥　♥
「ねぇ、零ちゃん」
「ん～？」
私と零ちゃんは、ベッドの上で並んで横になっている。
零ちゃんが腕枕をしてくれていて、腕が痛くなっちゃうから……

と言ったら、そんなの気にするな。俺がしたいからするだけ。と言ってくれた。

もう、零ちゃんはどれだけ私を惚れさせれば気が済むのだろうか。

だからこそ、これだけは聞いておかなきゃいけないと思う。

だから聞く。

「零ちゃんって、転生者だったりする？」

「……え？」

私の突然の問いに、零ちゃんは鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情を浮かべている。

頭に伝わってくる。

零ちゃんの腕が震えている。

そう。これは多分、本当は聞いちゃいけない事なんだ。

零ちゃんにとって、とても重大で大事な事。

土足で踏み込んでいい話題じゃない。

それは分かってる。でも、どうしても知りたい。

大好きな零ちゃんの事。愛しい零ちゃんの事。愛している零ちゃんの事。

その全てを私は――、

「私は零ちゃんの全てを、知りたい」

「姉ちゃん……」

私達は座る。

零ちゃんが後ろから抱きしめてきてくれる。

え……な、何……。大事な話なのは分かってるんだけど、この体勢だと、ど、ドキドキしてヤバい……！

「姉ちゃん、転生者って言葉、どこで知ったの……？」

「え、えっとね……ま、前に燐ちゃんにオススメされた漫画を借りて……そこに転生者って言うのが出てきたの。その世界とは別の世界からやって来た人が転生者だって」

「そっか。……でも、なんで俺が転生者だって思ったの……？」

「う～ん……ずっと不思議には思ってたの。零ちゃんだけ他の男の人と違うなって。性格とか、趣味とか、好みとか、持ってる物とかね。そんな時にふと、転生者って言葉を思い出して。そしたらね、自分の中で色々と腑に落ちたんだ」

零ちゃんの、私を抱きしめる腕が震え、力が入る。

「零ちゃんは違う世界からの転生者で、私達がいるこの世界とは常識も何もかもが違うんじゃないかって」

「……はは、すごいな。まさかたった一人で正解にたどり着くなんて」

「じゃ、じゃあ……」

「うん。姉ちゃんの言う通り、俺は転生者。この世界とは、貞操観念が異なった世界からやって来たんだ」

「そう、だったんだ……」

聞いたのは私だけど、やっぱり知りたくなかったかも……。

だって、転生者って事は、零ちゃんは一回死んでるって事、だよね……。

うぅ……考えただけで涙が……。

「俺は、男が性に積極的で、女が性に消極的な世界で生きていたんだ。でも、ある日死んだ。そしたら、どういう訳か、この世界で目を覚ましてた」

「そっか……だから、あのＡＶを持ってたんだね」

「うん。……あぁ、そっか。俺が姉ちゃんと関係を持った時、ＡＶを姉ちゃんに見られてたっけ」

「うん。思えばあの時からかな。私が知ってるＡＶとは全く違ったから、なんだろうこれって」

「詰めが甘いな～……こんなんだから瑠李にもバレるんだよな」

「瑠李ちゃんも知ってるの？」

「あぁ。姉ちゃんと同じ、ＡＶがキッカケでね」

零ちゃんが色々と教えてくれる。

瑠李ちゃんはＡＶの製造元なんかを調べて、存在自体が無いと知って、そこから転生者だと言うことに辿り着いた事。

それがキッカケでヤンデレ化してしまったこと。

でも、今ではそれをヤンデレメスブタとして受け入れていると言う事。

「え！？　お母さんや黒乃さんも知ってるの！？」

まさか、お母さんと黒乃さんまで知っているとは思わなかった。

零ちゃんの話では、最初に知ったのは黒乃さん。

で、その次がお母さんらしい。

ハメ撮りの話をしている時に打ち明けたと。

「俺が転生者でも、嫌じゃない……？」

「え……なんで……？」

「だって、異世界人だぜ？　しかも、この世界の記憶じゃなくて、別世界の記憶がある。普通なら気持ち悪いだろ――っ！？」

私は零ちゃんの方を向き、力強く抱きしめる。

「バカッ！！！　そんな事、思うわけないじゃない……！　例え零ちゃんが異世界人だろうと、宇宙人だろうと、私は零ちゃんの姉なの！　彼女なの！　大好きな人の事を、気持ち悪いとか嫌だとか思ったりするわけないでしょ……！！！」

私は、気づかない内に大号泣してしまっていた。

「そっか……そう、だよな……ごめんな……俺、この話になると、どうしても弱気になっちまうんだ……受け入れてもらえるのかどうかが怖くて……」

「うん……うん……！　大丈夫……！　分かってる……！　分かってるから……！　私は、零ちゃんの全てを受け入れるから……！」

「姉ちゃん……ありがとう……！」

零ちゃんは、抱きしめ返してくれた後、私の肩で大号泣してくれた。

この後、数時間に渡って二人して泣き続けた。

そして、二人して眠りに就いた。

覗き見をしている人が、この会話を聞いているとは知らずに。

第１４０話　【飲尿ＳＰ！】華は零を甘やかしておしっこをいただきたい♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

「飲尿シーン少ねぇじゃねぇか！」「全然エッチじゃねぇじゃねぇか！」「もっとエロをよこせ！」

と、思われた方が多いかと思います……。その通りです、大変申し訳ございません……！

今回、この華の回で、零が転生者である事を知る展開を書こうと決めていたので、どうしてもエッチなシーンが少なくなってしまいました……。

転生者である事を知る展開を書くと、どうしてもそっちがメインになってしまい、エッチシーンが少なくなってしまいます……。

ただでさえ、エッチシーンが少ない飲尿ＳＰなのに、さらに少なくしてしまって大変申し訳ないです……！

ですが……！　この展開が今後の展開に色々と関わってきますので、初期投資だと思ってお読みいただけますと幸いです……！

もう、これからの華の物語はエロエロでございます！

どんな風にエロエロになっていくのか、そこも含めて楽しみにしていただけますと嬉しいです……！

そして、次話ですが、もう今回は言っちゃいます！

次話のヒロインは『燐ちゃん』です！

零と華の会話を覗き見してしまった燐。
そんな燐は零とどう接するのか。どうエッチしていくのか。どうおしっこを飲むのか。

次話も転生者の話がメインになってしまうかもしれないのですが、楽しみにしていてくださると嬉しいです……！

第１４１話　【飲尿ＳＰ！】燐はパンツにおしっこが欲しい♡♡♡♡♡♡（前書き）

プロローグ

「ん……？　　んん……？」

何か、股間が気持ちいいような気がする……。

って事は、もう朝か……。

「おはよう、姉ちゃん」

「あ、おはよう、零ちゃん♡」

目を開け、下を見ると、華がＨカップのおっぱいの谷間に俺にチンコを挟んでいた。

さらに、ただ挟んでいるだけではなく、左右から手で圧迫して、上下に動かしチンコを扱いている。

「我慢汁、いっぱい出てきてるよ♡　　イキたくなったら、我慢しないでいつでもイッてね♡　　零ちゃんのおしっこ、いっぱいちょうだい♡」

「あぁ」

昨夜、毎朝おっぱいで起こしてもらう約束をしたので早速してくれているんだろう。

なんて贅沢な朝だ。

こんなの、全男子の夢だな。

「姉ちゃん、俺、もう……！」
「うん♡　出して♡　いっぱいおしっこ出して♡」
「出るっ！」

じょおおおおおおお！！！
じょばぁぁぁぁぁぁぁ！！！

「んっ♡　んふふ♡　すご～い♡　いっぱい出てる♡♡♡」

俺は射精……ではなく、放尿をした。
尿道から勢いよく飛び出すおしっこは、噴水のように噴き上がり、華の顔や頭、体を汚していく。
おっぱいにも大量におしっこがかかっていき、どんどん俺のおしっこまみれになっていく。

「んふふ♡　全部出たかな？」
「あぁ。スッキリだ」
「良かった♡　後片付けはしておくから、零ちゃんは顔を洗ってきちゃって♡」
「あぁ。ありがとうな」
「ううん♡　むしろ、私こそありがとうだよ♡　朝からこんなにおしっこ出してくれて♡」

おしっこ出して喜ばれるって、本当にすごいよな。

「前世だとこんな事はありえない？」
「うん。絶対にない」
「そっか……じゃあ、前世じゃありえないこと、いっぱいしちゃおっ♡」
「あぁ、沢山しよう。変態ブラコン姉ちゃん」

「っ♡　い、今の言葉だけでイッちゃいそうだった……♡♡♡」
「あはは。じゃあ、顔洗ってくるな」
「うん♡　行ってらっしゃい♡♡♡」
俺は、部屋の後片付けを華に任せ、洗面所へと向かった。

第１４１話　【飲尿ＳＰ！】燐はパンツにおしっこが欲しい♡♡♡♡♡

「ふわぁ～あ……」

部屋で朝から華に尿ぶっかけをした後、俺は顔を洗うために洗面所へと向かった。

洗面所のすぐ隣に風呂があり、こういう豪邸でも一軒家と同じ造りなんだなぁと思い、俺はなんか安心感を感じていた。

「ふぅ～」

顔を洗いさっぱりした俺は、洗面所を出ようとした。

と、その瞬間――、

「うおぉ！？」

風呂場の方から腕を引っ張られ、浴室に連れ込まれた。

「ビックリした～……って、燐？」

そこにいたのは、俺の実妹である燐。

俺の腕を弱々しく掴みながら俯いている。

「ど、どうした燐？　何かあったのか？」

「あの……あの……あのね……」

「うん」

燐の言葉をゆっくりと待つ。
そして、覚悟を決めたように燐が口を開いた。
「お兄ちゃんが転生者って話、聞いちゃったの……！」
おおう。マジですか。
♡　♡　♡
「ごめんなさい……！　ごめんなさい……！」
そうか。盗み聞きしてしまったから、俺に怒られると思ってこんなにビクビクしてるのか。
「そんなに謝らなくていい。そんな事で怒ったりはしない。でも、どうやって聞いたんだ？　俺の部屋って確か完全防音だったはずだけど」
「え、えっと……お姉ちゃんがお兄ちゃんの部屋に入っていくのが見えたから、こっそりついて行って外でドアを少し開けて中を見てたの……」
「そうだったのか」
「うん……」
沈黙が流れる。
ここは、俺が黙ってちゃいけないよな。
「燐」
「……」
「今まで、黙っててごめんな」

「ぐっ……お兄ちゃん、本当に一回死んじゃったの……？」
「……あぁ、一回死んだ。学校の階段で、後ろから誰かに背中を押されてな」
「は、犯人は……？」
「さぁ、顔を見てないから――うっ！？」

その話をした瞬間、前世での最期の記憶――瑠李のおっぱいに手を伸ばした所――ではなく、他の記憶が一瞬フラッシュバックした。

『あの巨乳……揉みたかった……』

そう言った俺は、そこで意識を手放した、はずだった。
そう思ってただけで、実際はそうじゃなかった。
俺は、瑠李に手を伸ばした後、犯人の顔を確認してやろうとして階段の方を向いたんだ。
そしたら、そこには一人の女子が立っていて――、

『ふっ……ふふ……ふふふ……ふふふふ……♡♡♡』

不敵に微笑む声が聞こえていたんだ。
その正体は――、

『も、桃……』

「はっ！？」
「お、お兄ちゃん……？　だ、大丈夫……？」
「あ、あぁ……だ、大丈夫だ……」

そ、そうだ……なんで今まで忘れてたんだ……。
俺と瑠李を突き飛ばした犯人。それは、桃だ。

でも、なんで桃が俺と瑠李を……。
前世での桃は、俺の事をとにかく嫌っていた。
だから動機があるのは分かる。だが、通っていた学校は違うはず。
普通は校舎の中に入る事はできないはずだ。
それなのに、なぜ……？

それに、差し込む夕日の光りのせいでよく見えなかったけど、桃の隣に誰かいたような……。
スカートだったから女子なのは間違いないはずだけど……。

「お、お兄ちゃん……？」
「あっ……あぁ、ごめん。ちょっと考え事をな。心配かけてごめんな」
「ううん……ねぇ、お兄ちゃん」
「ん？」
「一つ、聞いてもいいですか……？」
「あぁ」
「前世での私は、どんなでした……？」
「……本当に聞きたいか？」
「え……は、はい」
「そうか。じゃあ教える。前世での燐はな……」

俺は前世での燐を思い出した。

『はぁ？　なんであんたがいんの？　この時間が私の幸福時間なんですけどぉ！　もお～最悪！　あんたがいたんじゃ落ち着けないじゃん！　幸福時間が不幸時間だわ！』
『ねぇ、さっさと部屋行ってくんない？　ここにあんたの居場所ないんだけど？』

『ねぇ、風呂は外で済まして来いって言ったよね？　なんで家の風呂入ってんの？　あんたが入った後のお湯とか浸かりたくないんですけど！　というか、あんたが入った後の空間に行くことすら嫌だ！』
『さっさと失せろよ、このキモ童貞夢精クソったれ野郎！』
「……うん。今思い出しても中々だなぁ……。心が抉られる……」
俺が前世を思い出し、ダメージを受けていると、目の前の燐が震え始める。
「燐？　どうした？」
「わ、わ、わ……」
「わ？」
「わ、私……前世の私って、そんなに最低な女だったんですかぁ！？　確かに昔、夢精の事を馬鹿にしてしまった事はありましたけど、それは精液がいかに素敵なものか分かってなかったからであって……」
燐は前世の世界での自分の態度や性格に、酷くショックを受けていた。
「お、お兄ちゃん！　ほ、本当にごめんなさい……！！！」
燐はその場で土下座をし始めた。
「ちょ、ちょっと燐！？」
「いくら前世の世界とこの世界の私が違うとは言え、私は私です……！　失礼極まりない言動の数々、そしてお兄ちゃんを酷く傷つ

けた凶器のような言葉の数々……今更遅すぎるし、意味ないかもしれないですけど、謝らせてください……！　本当にごめんなさい……！！！」
「燐……」

ここまで謝られるとは、正直思ってなかった。
だって、今、思い出すまで忘れてたし、前世は前世だ。今の燐とはなんも関係ない。
それに――。

「そんなに謝らないでくれ。俺なら大丈夫だから。燐に酷く言われた日は、脳内で燐をめちゃくちゃに犯してぶっ壊す妄想して発散してたから、何も問題はないんだ」
「……さい」
「え……？」
「じゃあ、その妄想！　今、私に全部してくださいっ！」
「え！？」
「少しでも、罰を与えてほしいんです……！　お兄ちゃんは優しいから、前世の私と今の私。全然関係ないからって許してくれようとするはずです」

ぐっ……正解です。

「でも、それじゃあ駄目なんです……！　それだと、私が私を許せない……！　大好きなお兄ちゃんを傷つけた私が許せない……！　だから、お兄ちゃんを傷つけた極悪非道な私に、キツい罰を与えてください……！　お兄ちゃんの妄想、全部私にしてください……！」
「燐……」

大事な妹にここまでさせちゃいけないよな。

「分かった」

「ほ、本当ですか！？」

「あぁ。でも、俺の妄想、ほんとにヤバいからな？　俺の事嫌いになるくらいキツイぞ？　それでもいいのか？」

「はいっ！　お兄ちゃんの事を嫌いになる事なんて天地がひっくり返ってもありえないので大丈夫ですっ！　お兄ちゃんのキツイお仕置き、お願いしますっ！」

「分かった。じゃあ、してやる」

こうして、燐へのお仕置きが始まった。

（お仕置きはまた別の機会に♡♡♡）

「ふぅ～……温けぇなぁ～……」

「ですね～……♡」

「大丈夫か？　本当にめちゃくちゃにしたから、体キツくないか？」

「大丈夫ですよ♡　足腰がここまで震えるの初めてでビックリはしてますけど、でも、これがお兄ちゃんの本当の妄想なんだと知ったら、嬉しくて♡　今、私は幸せいっぱいです♡♡♡」

「そっか。ならよかった」

俺と燐は、お仕置きプレイを終えたあと、湯船に浸かっていた。

俺が浴槽の壁に背を預け、燐が俺の足の間に入り俺の胸に背中を預けている。

「あの、お兄ちゃん……」
「ん？　どした？」
「さっき、いっぱいおしっこを出していただいたじゃないですか……」
「うん。燐の顔にも体にも膣にも沢山出したな」
「はい……♡　それで、もし、まだおしっこが出るようでしたら一つお願いがありまして……」
「なんだ？　言ってみ」
「はい……あの……わ、私のパンツにおしっこを出してくれませんか……？」
「ぱ、パンツに……？」
「はい……。お兄ちゃんのおしっこが染み込んで重たくなったパンツを穿きたいんです……だ、駄目でしょうか……？」
「駄目じゃないけど……本当にいいのか？」
「はい……♡　三枚ほどにおしっこを出してもらいたいんです」
「三枚？」
「はい……♡　一枚は穿く用。一枚は被る用。一枚は保存用にしたくて」

保存て……。

「分かった。いいよ。じゃあ、お風呂上がったらしようか」
「っ～～～♡♡♡　はいっ！　ありがとうございます！」

燐のパンツにおしっこを出す事にした俺は、燐とお風呂を楽しんだ。

♥♥♥

「おしっこ♡　おしっこ♡　おしっこ♡　お兄ちゃんのおし

っこ♡　パンツに沢山染み染みおしっこパンティー♡♡♡」
「とんでもねぇ鼻歌だな、おい」
「えへへ～♡♡♡」

お兄ちゃんのおしっこが楽しみすぎて、お兄ちゃんに鼻歌を呆れられてしまった♡

「燐ちゃんはテンションが上がると、とんでもない鼻歌を歌うのよね」
「お姉ちゃんだってよく訳の分からない動きするじゃん！」

私とお兄ちゃんは、お姉ちゃんの部屋にいる。
お兄ちゃんにパンツにおしっこをかけてもらおうとしたら、お姉ちゃんが洗面所にやって来た。
そして、これから何をするのかを話すと、自分の部屋でやって欲しいと言われた。
なので、私達はお姉ちゃんの部屋にいる。

「それにしても、なんでお姉ちゃんの部屋で？　あのままお風呂場での方がよかったと思うんだけど」
「それは俺も思ったわ。ここでやったら華の部屋がビチャビチャになっちまうぞ？」
「それがいいんじゃない！」
「「っ！？」」

突然のお姉ちゃんの大声に、私とお兄ちゃんは驚く。

「零ちゃんのおしっこが飛び散ったベッドシーツ、カーペット、椅子、机、床……♡　はぁ……♡♡♡　想像しただけで子宮が疼いて……♡♡♡」

「お姉ちゃんって、そんなに変態だったっけ？」
「えぇ。燐ちゃんが知らないだけで、私は超がつくほどのド変態ですよ♡」
「ふぅ～ん……まっ、私もお姉ちゃんに負けず劣らずのド変態ですけどねぇ～！　ド変態だから、前世では絶対にありえなかったどんな変態的なプレイでもできちゃうもんねぇ～だっ！」
「え……り、燐ちゃん、な、なんでそれを……れ、零ちゃん……？」
「燐はもう知ってるんだ。俺から話した」

お兄ちゃん……私が覗き見してた事、黙っててくれるんだ……。

「そ、そうなんだ……。り、燐ちゃん、大丈夫……？　突然の事で、パニックになったりしてない……？」
「知った時は流石にパニックになったけど、今は大丈夫。お兄ちゃんにいっぱいお仕置きしていただいたから♡　ねっ♡　お兄ちゃん♡♡♡」
「あぁ」

お兄ちゃんが微笑みかけてくる。

好き！！！

「う～ん……どうしようかな～」
「え～！？　　な、なんで～！？」
「いや、華の場合、お仕置きをしないって言うのが一番のお仕置きになりそうだから」
「うぐっ……そ、それはそうかもだけど……」

いや、そうなんかい！
まぁ、お姉ちゃんって放置プレイが大好きなドMだからな～。
まぁ、私もドMだけど♡♡♡

「ふぅ～。三枚に放尿完了」
「わぁ～～～～♡♡♡　お兄ちゃんありがとうございますっ！！！　とっても嬉しいです！！！」
「それならよかった。……」
「ん？　お兄ちゃん？」

お兄ちゃんからプラスチック容器を受け取る。

その中には、私のパンツが入っており、お兄ちゃんにはそこにおしっこを出していただいた♡

すごい……♡♡♡
私のパンツが、お兄ちゃんのおしっこに浸かってる……♡♡♡
これで、私のパンツはお兄ちゃんのおしっこで染み染みに……♡♡♡

なんて考えていたら、お兄ちゃんが一つの容器をジッと見つめていた。

もしかして、出し足りないのかな？

「零ちゃん？　どうしたの？」
「いや、それ見てたらちょっとやってみたい事が浮かんでさ。でも、かなり変態的だから、どうしようかと思って――」
「「やりましょう！！！」」
「お、おおう……俺まだ、内容言ってないんだけど……」
「内容はなんでもいいんです！　お兄ちゃんが『やりたい』って思った事が大事なんです！」
「そうよ！　零ちゃんが『やりたい』って思った事は、なんでも叶えたいの！　その為に私達がいるんだから！」

私達は「だから」と続け――、

「「変態プレイ、しよう！」」

と、お兄ちゃんに言った。
それを受け、お兄ちゃんは乗り気になってくれたのか一つの容器をお姉ちゃんに渡す。

「中に入ってるパンツを手に取ってくれ」
「はいっ！」

お姉ちゃんは容器の蓋を開け、蓋をベッドの上に置いて中のパンツを取り出す。

「すごい……♡　いっぱい吸ってる……♡♡♡」

お姉ちゃんがパンツを持ち上げると、パンツはお兄ちゃんのおしっこをいっぱい吸っており、ぼたぼたとおしっこの水滴を垂らしていた。

「そしたら、燐。M字開脚で俺の目の前に跪いて、口を開けて顔を上げて」
「はい……♡　　ほう、れふか……？」
「うん」

私は、お兄ちゃんの命令通り、立っているお兄ちゃんの目の前にM字開脚で跪く。
そして、口を開けて顔を上に上げる。

わぁ……♡　　これすごい……♡　　お兄ちゃんのおちんちんが目の前に……♡♡♡
今すぐ咥えて舐めしゃぶりたい……♡♡♡

「んじゃあ、華。そのパンツを燐の顔の上に持っていって、力いっぱい絞って」
「はいっ！」
「んぶっ！！！」

お姉ちゃんがお兄ちゃんの命令通り、私の顔の上におしっこ染み染みパンツを持ってくる。
ぼたぼたとおしっこが垂れてきて、それだけでも幸せなのに、なんとそのパンツを絞ってくる。

それにより、大量のおしっこが顔中にかかり、口、鼻、目を侵食してきた♡♡♡

「おぉ〜。いい眺め」

お兄ちゃんが喜んでくれてる……♡♡♡

嬉しい……♡♡♡

それに、これは私にとってもかなりのご褒美だ……♡♡♡

顔中にお兄ちゃんのおしっこを浴びる事ができるなんて……♡♡♡

「目、大丈夫か？　開けてたから入ったろ？」

「だ、大丈夫です……♡♡♡　むしろ閉じちゃってごめんなさい……ビックリしちゃって……。知ってたら目を開けたままおしっこを目でも感じていたのですが……」

「いやいや。流石にそれは危なくないか？」

「いえっ！　お兄ちゃんのおしっこは神聖なもの。感じれる場所があるなら、その全てを使って感じなければ！　だから、目でも感じたいんです♡♡♡　ちょっと入ったおしっこ、最高ですよ……♡♡♡」

「そっか。じゃあ、そこまで言うなら、華、容器に入ってるおしっこ、燐の顔にぶっかけてやれ。燐、目と鼻と口を開けろ。閉じることは許さない」

「「はい♡♡♡」」

私は、お兄ちゃんの命令通りに目と鼻と口を大きく開く。

さっき少し入ってきたおしっこが、目に染みてきてるのが分かる。

不快感？　そんなものはない。

痛み？　それはあるけど、その痛みすらご褒美だ。

だから、もっと、もっと、もっと大量におしっこが欲しい……♡♡

「それじゃあ、燐ちゃんいくよ～」

「うん♡」

来たぁぁぁぁぁ♡♡♡

お兄ちゃんのおしっこが、私の顔面にぃぃぃ♡♡♡

「ぐっ……！　ぶふっ……！」

容器が大きいので、大量のおしっこが顔にかかってきてシャワーを顔に当ててるかのような感じで息が全くできない。

ものすごい勢いで目の中におしっこが入ってくる……♡♡♡

目、鼻、口でお兄ちゃんのおしっこを感じて堪能できるなんて……♡♡♡

私、今幸せ過ぎる……♡♡♡

「じゃあ、追加な～」

「んぶっ！」

そう言って、お兄ちゃんは直接おちんちんからおしっこをぶっかけてきてくださる……♡♡♡

お兄ちゃんの放尿シーン、おしっこを浴びながら見れるなんて、最高過ぎるよぉ……♡♡♡

あぁ……♡♡♡　このまま死んでもいい……♡♡♡

そう思いながら、私は意識を手放していった。

第１４１話　【飲尿ＳＰ！】燐はパンツにおしっこが欲しい♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

零が転生者である事を知った燐ちゃん。

零が一度死んだ事に対して動揺してしまいましたが、それでも、すぐに落ち着き、零と話をしました。

前世での燐はとにかく、零を嫌っておりました。

その様子を少しだけ書かせていただいたのですが、正直嫌ですね。

僕自身、こういう言動をする女子が大嫌いなので、書いていて胸がムカムカしてしまいました。

だったら、それを読者の皆様にお届けするのはどうかと思うのですが、前世の世界での燐と、今の世界での燐とのギャップを感じて、より燐の事を愛していただけたらなと思い、今回お届けさせていただきました……！

毎週楽しみにしてくださっている読者の皆様に、ご不快な思いをさせてしまい、大変申し訳ございません……！

この後からは、嫌な燐は出てこない予定ですので、ご安心ください……！

そして、燐へのお仕置きプレイですが、もし見たいと思っていただける方が多ければ書きたいなと思っておりますので、もし見たいなと思っていただけましたら、お伝えくださいますと幸いです……！

さらに今回、衝撃的な新事実が発覚いたしました！

なんと、零と瑠李を階段から突き落としたのは桃でした！

なんで桃がそんな事を？　隣にいたのは？　この世界での桃と前世の世界での桃とは何か繋がりが？

基本はエッチ重視なこの作品ですが、時折そういった物語的な感じの展開もございますので、その辺もご注目いただけましたら嬉しいです……！

さて、次話は一体誰になるのか……。

ヒントは、零に初めてフェラをした眼鏡のあの子……です！

誰だか分かりましたかね？

次は一体どの性奴隷（ヒロイン）なのか、次話をお楽しみに！

それでは、また来週～♪

第１４２話　【飲尿ＳＰ！】零はフェラ飲尿がしたい♡♡♡♡♡♡

じょろ♡　じょろろろろろろろろ♡

「はぁ……」

「零？　どうしたん？　そんな深い溜息ついて。おしっこの量半端ないなぁ～って？」

「いや、別に量に関しては何も思ってないわよ。ただ、最近零様にお会いできてないなと思って……。同じ家にいるのにこうも会えないなんて、寂しさでマンコが張り裂けそう……」

「まぁもともと開いてるけどね～。でもそうだね～。れいれいに相手にされないと価値がなくなったみたいに思えてきて、悲しくなってくるからね。私もこうやって便器になれたけど使われないと価値がないから」

「うん……。ってか、紗夜はいつから一人称が『私』になったの？　前は『ウチ』だったよね？」

「え？　あ～言われてみれば確かに。みんなのが移ったのかもね」

「まぁ、これだけ沢山の女がいればね。ふぅ」

「ねぇねぇ、零」

「ん？」

私はトイレットペーパーを取り、尿道を拭きながら紗夜を見る。

「零はさ、れいれいのおしっこ、どういう風に飲みたい？」

「そうね～。私は――」

立ち上がり、流した後、私は口の前で指で輪っかを作って答える。

「フェラしながら飲みたいな♡」

♥　♥　♥

おトイレを終え、部屋に戻る為に廊下を歩いていると前から零様が歩いてきた。

はわぁ〜〜〜〜〜♡♡♡♡♡

零様、今日も格好いい〜〜〜〜♡♡♡♡

素敵♡♡♡　ただ歩いているだけなのになんて絵になるんだろう♡♡♡

一つ一つの所作が素敵♡♡♡

顔が素敵♡♡♡　体も素敵♡♡♡　エッチなのも素敵〜〜〜〜♡♡♡

「零？　どうした？　こんな道の真ん中で腰をくねらせて」

「はっ！？」

零様の素敵なところを妄想していたら、いつの間にか目の前に零様がいて、少し蔑んだような目で見てくださっていた。

はぁ〜〜〜〜♡♡♡　もっと……♡♡♡

もっとその目で私を見てください……♡♡♡

もっと蔑んでください……♡♡♡

「す、すみません……零様の妄想をしてたらつい……」

「俺の？　どんな妄想？」

「えぇっ！？」

ど、どどどどうしよう……！？
素敵な所を妄想してましたなんて、恥ずかしくて言えない……ここはどうにかして誤魔化さなければ！
「そ、その……れ、零様のおちんちんをフェラしながらおしっこ飲みたいなぁ～な、なんて……」
さ、さっき紗夜とその話してたから勝手に口から出ちゃった……。
いくら今、零様が射精じゃなくておしっこが出るとは言え、そんな突然言われてもさせてくれるはずない。
だって、昨日だって燐さんや華さんとしてたんだから……。
「ん？　そんなんでよければさせてあげるけど？」
ふぇ？
「い、いいんですか！？　昨日もいっぱいしていたのに……！？」
「あぁ。俺は性奴隷の数だけできるからな。お前の分もしっかりとある」
「っっっ～～～～♡♡♡　あ、ありがとうございます……！」
「んじゃあ、早速するか？」
「は、はい……！　では、私の部屋に……」
「いや、ここでいいだろう」
「こ、ここで、ですか……？」
「なんだ、嫌か？」
「い、いえ！　決してそのような事は！　で、ではその……失礼します……♡」
「あぁ」
私は、廊下の真ん中で零様の前に跪く。

M字開脚をして、零様に少しでも興奮していただいておちんちんをパンパンにしてもらいたい♡

私はクイッと眼鏡を手の甲で上げ、零様のおちんちんをノーハンドでしゃぶる。

「れる……♡　じゅる……♡　れる……♡　れるれるれるれる……♡」

まずは舌で亀頭を丹念に舐め、ゆっくり刺激していく。

竿を上から下、下から上に沿って唾液を塗り込むように動かし舐めていく。

その際、口からおちんちんを出したりはせず、口の中に含んだまま行う。

おちんちんが頬を突き刺してくるが、それがまた気持ちいい……♡♡♡

左右の竿を満遍なく舐めた後、今度はおちんちんを根本まで咥え込む。

「ぎゅぼぼぼぼぼぼぼぼ……♡　ぐぅぉ……♡♡♡」

喉奥に亀頭が入ってくるので、少しえずいてしまうが、私にとってそれは幸福♡

苦痛や苦しみなど全く無い。むしろ、喉奥を圧迫される苦しさこそ、私が求める最大級の至福だ。

「がぅ♡　ぐぅ♡　ぐぅ♡　ぅぅ♡　ぎゅぅぅぅぅ♡♡」

おちんちんを根本まで咥えた状態で、舌を高速回転させ、竿を舐

めまくる。
そして、それと同時にバキュームを加える事で、おちんちんに一度に沢山の刺激を与える。
「くっ……！」
零様の声が聞こえてくる。
感じてくれてるんだ……♡♡♡
大好きな人の喘ぎ声が聞けるなんて、これ以上のＡＳＭＲはない。
零様の喘ぎ声、いくら出せば買えるかな……？
「ぎゅうううう♡♡♡♡　っっっぱっ♡♡♡♡」
私は激しくバキュームをした後、一旦口からおちんちんを解放する。
ビクンッ！　ビクッ！　ビクッビクッ！　ビクッビクッビクッ！！！
「わぁ……♡♡♡　すごい……♡♡♡」
おちんちんが目の前でギンギンにそそり勃ち、我慢汁を飛ばしながら下から上へと跳ねている。
我慢汁は私の顔に跳ね、眼鏡や顔に付着していく……♡♡♡
「すごい……♡　我慢汁だけで溺れられそう……♡♡♡」
我慢汁だけのペットボトルとかないのかな……？

いくらでも出せるから、作ってほしい……♡♡♡

「雫……」

「はい……♡　すぐに、気持ちよくさせていただきます♡」

私はギンギンおちんちんを再びノーハンドで口に含み、一気に吸い上げる。

「じゅぼぼぼ

でも、それはプリップリの濃ゆいザーメンではなく、熱々の濃ゆ～いおしっこだった♡♡♡

ザーメンはドロっとしているので、飲むのに時間がかかってしまうが、おしっこは普通の液体なので、なんの抵抗もなく飲めてしまう。

その為、喉奥に出されるおしっこは、どんどん私のお腹に溜まっていく。

「ごくごくごくごく……♡♡♡♡」

私は、大量の愛液を床に垂らしながら零様のおしっこを飲んでいく。

「あ、雫もれー君のおしっこ飲んでる？」

「っ、っ」

沙耶香がやって来たので、質問に首を縦に動かし答える。

沙耶香の手には紙コップが握られていた。

紗夜に聞いた話だと、沙耶香はおしっこサーバーをもらったらしい。

毎日零様のおしっこを飲めるなんて、すごく羨ましい……！

「ねぇれー君、私もおしっこ飲むから、見てて……♡♡♡」

沙耶香は零様の横に立ち、見せつけるように、わざと喉を鳴らして紙コップの中のおしっこを飲んでいく。

紗夜は一人称が変わってたけど、沙耶香はおどおどとした雰囲気

がなくなってる。
みんな、零様のおかげで色々と変化してるんだね。
私は何も変わらない。目指すは零様との結婚！！！
「ごくごくごくごく……♡♡♡」
私と沙耶香は、零様のおしっこを喉を鳴らし飲んでいく。
そして、沙耶香はコップの中身を飲み干した。
「んふふ♡　やっぱりれー君のおしっこは最高……♡♡♡　いつもありがとう♡♡♡　大好き♡♡♡♡」
そう言って沙耶香は、背後から零様に抱きついた後、どこかに行った。
「ごくごくごく……♡♡♡　ぷはぁ……♡♡♡　零様、ご馳走様でした……♡♡♡　すごく美味しかったです♡♡♡」
「お粗末様でした。満足できたか？」
「はい……♡♡♡　大満足です……♡♡♡　もう、お腹いっぱいです……♡♡♡」
「そうか。それにしてもお前、フェラテク上がったな」
「あ、ありがとうございます……！　実は、もっと零様に喜んでいただきたくて、もっと気持ちよくなっていただきたくて毎日練習してたんです……♡♡♡」
「そっか。じゃあ、これから極上のフェラを味わいたくなったら雫に頼むかな」
「は、はい！　ぜひ！　誠心誠意、精一杯ご奉仕させていただきます！」
「あぁ。じゃあ、綺麗にしてくれ」

「はい……♡♡♡」

私はお掃除フェラをさせていただいた後、もう一回おしっこを飲ませていただけた♡♡♡

お腹がいっぱいになりすぎて、お夕飯が食べれなかったのは幸せすぎてヤバかった♡♡♡♡

第１４２話　【飲尿ＳＰ！】零はフェラ飲尿がしたい♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

零のフェラ飲尿、沢山興奮して、沢山楽しんでいただけておりましたら嬉しいです……！

フェラ描写や手コキ、パイズリやセックスなど、もっともっと上達したいなと思っておりますので、もしこうした方がエロい！こういう感じだといいかも！　などございましたら、お気軽にコメントいただけますと幸いです……！

さて、次話は一体誰になるのか……。

ヒントは、ペット以下の扱いになっているかつて零を怒らせたあの子……です！

誰だか分かりましたかね？

次は一体どの性奴隷（ヒロイン）なのか、次話をお楽しみに！

それでは、また来週～♪

※Ｘを本格始動（自分の好きな物を自由気ままに発信。基本的に購入した物の画像をアップしたりなど）させました！

僕の好きが詰まった内容になっておりますので、もしお時間がありましたらチェックしていただけますと幸いです……！

『龍（りゅう）　岳（たける）』と検索していただければ出ると思います！

アニメや声優さん、仮面ライダーなどの投稿が主ですが、僕の幸せが少しでも皆様に届いて少しでも幸せのお裾分けをできたら嬉しいです♪

（見てくださる方が増えたら、作品の更新情報などをXで発信していくかもしれません）。

第１４３話　【飲尿ＳＰ！】歩美への逆流飲尿♡♡♡♡♡♡♡（前書き）

※『♥』や『おっ』などのオホ声が多めとなっておりますので、苦手な方はご注意をお願い致します……！

第１４３話　【飲尿ＳＰ！】歩美への逆流飲尿♡♡♡♡♡♡♡

「はぁはぁ……♡」

ど、どうしよう……！

たまたま階段の所に向かったら、零様と雫様がエッチしてた……♡

しかも、フェラで飲尿……♡

おしっこでお腹いっぱいになったのか、雫様はお夕飯をあまり食べてなかった。

う、羨ましい……♡♡♡

わ、私も零様のおしっこ欲しい……♡♡♡

なんて、夜中の廊下で思っていると――、

「おい」

「ひっ！？」

後ろから声が聞こえてきた。

ちなみに、私とかなえには部屋はなく、それぞれが廊下などの色んな所で過ごしている。

私は今日は一階の階段下の廊下にいた。

おそるおそる後ろを振り返ると、そこには――、

「れ、零様！？」

ボクサーパンツ一枚を穿いた零様が立っていた。

「れ、零様……？　　ど、どうされましたか……？」

「醍醐……」

「キャッ！？」

突然、零様に肩を蹴られ、私は座っていた姿勢から真後ろに倒れてしまった。

そんな私の腰を掴んで、零様はグイッと引き寄せる。

私は四つん這いの姿勢になった。

「れ、零様……？　　ど、どうされたんですか……？」

急にどうしたのだろう……。

こんな事、今まで一度もなかった。

「お前、今日、俺と雫のプレイ見てただろ」

「っ！？　　も、申し訳ございません……！　　の、覗き見るつもりはなかったのですが……！？」

「言い訳はいい。勝手に見てたこと、雫が知ったらどう思うかな？」

「そ、それは……！？」

「今からお前に罰を与える。しっかりと反省しろ」

「は、はい……！　　んんぅぅぅぅぅ♡♡♡♡」

そう言って零様は、膣（なか）にチンポ様を力強く挿入してきた。

「んっく……♡♡♡　　あっ……♡」

私は、チンポ様を挿(い)れられただけでイッてしまった。

「何勝手にイッてんだ……これはお仕置きだぞ……」

「す、すみません……！　でも、気持ちよすぎて、我慢が……！」

「口答えすんな……！」

「おおおおおおおおおお❤❤❤❤❤」

零様が激しく腰を打ち付けてくる。

一突きされただけで、子宮が圧迫されて強制的にイかされてしまう……。

パンッ！　パンッ！！　パンッ！！！　パンッ！！！！

「おっ❤❤❤　おおっ❤❤❤　おおおっ❤❤❤　おおおおっ❤❤❤❤❤」

零様の腰振り、激しすぎる……❤❤❤

一突き一突きが、子宮を圧迫してきて……さっきからずっとイキっぱなしになってる……❤❤❤❤❤

「そろそろ出すぞ……」

「おっ❤❤❤❤　おおおおおお❤❤❤❤」

出すって、精液じゃなくておしっこをだよね……❤❤❤

今、子宮におしっこを出されたら私、とんでもない事になっちゃ

いそう……❤❤❤❤❤

「出るっ……！」

じょばぁぁぁぁぁぁ！！！！！

「んおおお

これから何をされるのかが分からなくて、私はドキドキしていた。
「今からお前には、おしっこを飲んでもらう……」
「は、はい……♡♡♡」
飲尿は嬉しい……♡♡♡
零様、また出してくれるのかな……？
なんて思っていたら――、
「んひゃっ！？
零様が私の足を思い切り上に持ち上げてきた。
まんぐり返しというやつだ。
それにより、チンポ様は膣（なか）から抜けてしまう。
そして、抜かれたと同時にマングリ返しされたので、膣（なか）に出されたおしっこが逆流してきて――、
「んっ……♡♡♡」
口の中に逆流おしっこが入ってきた……♡♡♡
「ごくごくごくごく……♡♡♡♡」
すごい……♡♡♡
こんな飲尿の仕方があるなんて……♡♡♡♡
零様のお考えは本当にすごい……♡♡♡

「ごくごくごく……♡♡♡」
「そのまま全部飲み干せよ……」
「ば、ばぁい……♡♡♡」

私は、マンコから溢れてくる大量のおしっこを一滴残らず飲み干していった。

♥♥♥

「はっ！？」

あれ……？　おしっこは……？　飲尿は……？

「もしかして、全部、夢……？」

私は階段に体を預け眠っていたらしい。
まだ夜中なので、もしかしたら全部夢だったのかもしれない。

「んっ……♡　ううん。夢じゃなかった……♡　あれは、現実だ……♡」

床は私の潮で濡れており、マンコからはほんの少しのおしっこが垂れてきている。
それになにより――、

「この鼻腔に残る臭(かお)り……口に微かに残る後味……♡♡♡　これは紛れもない零様のおしっこだ……♡♡♡」

もしかしたら、逆流おしっこを飲んだ後、気を失ってしまったの

かもしれない。
だとしたら、零様に申し訳ないことをしてしまった。
「でも、零様……こんな夜中に罰をお与えくださり、誠にありがとうございました……♡♡♡　零様のおしっこを飲むことができて幸せです……♡♡♡」
私は、零様のおしっこの残り香と後味を感じながら眠りに就いた。

第１４３話　【飲尿ＳＰ！】歩美への逆流飲尿♡♡♡♡♡♡♡（後書き）

いかがだったでしょうか……？

冒頭でお伝えした通り、『♥』やオホ声が多かったかと思います……読みづらいなぁと感じさせてしまっておりましたら大変申し訳ございません……！

歩美への飲尿は、マンコから逆流してくるおしっこを飲ませる、と言うプレイでした。

中々ないプレイではありますが、沢山楽しんで沢山興奮していただけておりましたら幸いです……！

さて、次話は誰になるのか……。

ヒントは、銀髪ロングの先輩のあの子……です！

誰だか分かりましたかね？

次は一体どの性奴隷（ヒロイン）になるのか、次話をお楽しみに！

それでは、また来週～♪

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n4921jr/

貞操観念が逆転した世界で、元女子校に転校した俺は性欲モンスター女子達とエッチしまくり！〜学内いつでもどこでもシ放題！〜

2026年6月6日02時27分発行